黒と白の物語

闇夜の黒鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒と白の物語

【Ｎコード】
Ｎ１５５３Ｍ

【作者名】
闇夜の黒鳥

【あらすじ】
世界は数えきれないほどある。
それは人々が知っている物語。
だがまだ誰にも知られてない物語がある。
これはまだ誰にも知られてない世界の少年少女達の物語。

プロローグ（前書き）

始めまして漆黒の不死鳥です。
この小説は自分にとって初小説なのでおかしな所もありますが、読んで頂ければ嬉しい限りです。
それでは早速物語のプロローグへどうぞ！

プロローグ

この世界には色々な種族や能力が存在する。人間、妖怪、悪魔、死神や、炎や水を操る能力。だがその存在を知る者は多くはない。
そんな世界で、ある運命を背負った二人の少年少女が居た。
少年は過去に大きな罪を犯し、その悲しく辛い過去を背負い生き続け、少女は幼い頃から誰にも見てもらえず、自分が何者かも分からず、何十年もたった一人で、孤独に生きて来た。
そして二人は出会う。少年は少女に足らない何かを持ち、少女は少年に足らない何かを持っていた。
そんな二人が出会う時、物語が始まる。

プロローグ（後書き）

漆黒
「ついに始まりました！黒と白の物語！！イヤッホーイ！！」
「やけにテンション高いな」
「まぁ他の作者さん達の小説読んでから、自分の小説書いて見たいって言ってたもんね」
漆黒
「来たか！俺の妄想によって生まれた者達よ！」
「そんな生まれ方、何かやだ！？」
「そんな事より、何で俺達の台詞の前に名前が無くて作者にはあるんだ？」
（そんな事よりって）
漆黒
「それはまだ二人の名前が本編で出ていないからです！！」
少年
「威張って言うな」
少女
「名前まだ決まってないなんて事ないよね」
［区別するために名前の代わりに少年少女とします］
漆黒
「名前は大丈夫、次の話で出すんで。」

少女
「よかった～こんな作者だから、どーせ決めてないんじゃないかと思ってたよ」
少年
「馬鹿だからな」
漆黒

「二人して酷い（涙）」
少年
「ところで、大丈夫なのか？もう少しでテストなんだろ」
漆黒
「大丈夫だよ。点数悪くても死なないし」
少女
「大丈夫じゃないよね？！」
漆黒
「大丈夫だって、この小説、不定期更新だしさ」
少年
「作者の自己満足小説出しな」
漆黒
「取りあえず、後書きに文章使い過ぎだし、そろそろ終わろうか」
少女
「作者の力不足だね」
漆黒
「それは言わないで（涙）」

少年
「とにかく、この小説を読んでくれた読者方へ、この小説は不定期更新で、作者の自己満足で成り立っている駄文だ」
少女
「こんな小説でも感想を書いてくれたら嬉しいです！」
漆黒
「精一杯頑張りますので、どうかよろしくお願いします！では！」
少年少女
「また漆黒「全てを破壊し全てを繋げ！」
少年
「お前はディ○イドか！」
漆黒

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

少女
（先につっこまれた！）

少年
「さて、嫌じゃなければ、次の話も読んでくれ。」

少女
「お願いします！」

漆黒
「どうぞよろしくお願い致します！」

少女
「復活早っ！」

少年
「殺り足らなかったか」

少女
「恐っ！」

次回
第1話　出会い
少年・少女
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第1話　出会い

地平線が続く荒野、空は灰色の雲で太陽の光さえ差さない。
そこには二人の誰かが居た。
一人は黒い刀を持ち黒い翼で空を駆け、もう一人は白い刀を持ち白い翼で空を舞う。
二人は戦っていた。
片方が斬りつければ片方が斬り返す。それの繰り返し、辺りは二人の血で染まっていた。
どれだけの間戦ったかも分からず、二人は戦い続けた。
そして黒い翼を持つ者は黒い刀に黒き力を纏い、白い翼を持つ者は白い刀に白き力纏った。
その力を纏った刀を強く握り、二人は空駆けぶつかり合った。
ぶつかり合った二人から、黒い閃光と白い閃光が灰色の空に光った。

第1話　出会い

ジリリリリリリ！！！！！
バン！
？？？

「ふぁ～良く寝た」
？？？
「それにしても変な夢見たな～あんまし覚えてないけど」
？？？
「ってやば！もうこんな時間！遅刻する～！」

今起きた少女の名は
『神道美優』
寝起きに壊した目覚まし時計は数知れず。そして、ついたあだ名が
『目覚ましクラッシャー』

美優
「勝手に変なあだ名つけないでよ！？」

ナレーションにツッコミ入れないで下さい！それより学校は？

美優
「あぁ～！早く準備しなくちゃ！」

１０分後

美優
「準備完了！これなら間に合うかな？それじゃあ・・・・・行って来ます！」

一瞬寂しそうな顔をしたが、すぐに明るい顔に戻り学校へ向かった。
民家の屋根から、『何か』が見ているとも知らずに…

［学校］
美優
「何とか間に合った～」
急いで走った為、ギリギリ遅刻にならずに済んだ。途中で転ける等、色々あったが
美優
「作者うるさい」
だからナレーションにつっこむなって
女子
「美優ちゃん、誰と話してるの？」
ほら、女子が話して来ましたよ
美優
（逃げたな）
美優
「ううん何でも無いよ薫」
今美優に話しかけて来た女子は
『椿薫』という容姿端麗、才色兼備で誰にでも優しく頼りになる、美優の保護者的なポジションで、数少ない友達である。
美優
（私の時と説明違い過ぎてない？それと数少ないは余計。）

本当の事じゃないですか。

美優
（反論出来ない）

薫
「あの、美優ちゃん？」

美優
「あっごめんごめん、それでどうしたの？」

薫
「うん、最近この辺りで人が襲われる事件がよく起きてるみたいで、美優ちゃんは大丈夫かなって心配になって」

美優
「大丈夫だよ～こう見えても頑丈だから」

薫
「それでも心配しちゃうよ」

美優
「薫は心配性だなぁ。所で事件ってどんな事件？」

薫
「あのね、最近人が襲われてるって言ったよね？その襲われた人達、全員鋭い刃物で深く斬られてるの」

美優
「それで、襲われた人達は？」

薫
「傷が深くて、全員死んじゃったの」

美優
「酷い！そんなことする人絶対許せない！」薫
「私もそう思うけど、犯人を捕まえるなんて事、しちゃ駄目だよ。美優ちゃんは只でさえ危なっかしいんだから」

美優

「流石にそんな事しないよ～で危なっかしいってどういう意味？」

薫
「えっ！あの～その～」

そのままの意味ですよ

美優
「だから作者うるさい！」

薫
「みっ美優ちゃん？」

美優
「あ～何でも無いよ。あははは」

薫
「とにかく、帰る時は気を付けてね？知らない人に着いていっちゃ駄目だよ」

美優
「薫は私のお母さん？」

薫
「とにかく！気を付けてね？」

美優
「分かってるよ～」

薫
「なら良いけど」

放課後

薫
「美優ちゃん帰ろ」

美優
「私スーパー寄るから先帰ってて」薫
「私も行こうか？」
美優
「大丈夫だよそれに一緒に来たら家遠くなるし」
薫
「でも」
美優
「平気だよ、遅くはならないから」
薫
「それなら良いけど、遅くまで居ないですぐ帰るんだよ？鍵もちゃんと閉めてね？」
美優
「大丈夫だって、じゃあ暗くなる前に行くね。また明日ね～」
薫
「うん、また明日」

美優
（ちょっと遅くなっちゃったな早く帰らないと）

結局スーパーに長く居すぎた為、帰るのが遅くなってしまった。

美優
（明日薫に怒られちゃうな）

辺りは暗く、美優以外に人は居ない。
そう、『人』は居ない・・・

？？？
「やっと来やがったか、待ちくたびれたぜ」
暗く人も居ない美優の後ろから『何か』が美優に話しかけて来た。
美優
「？」
美優は声が聞こえた方へ振り向いた。
美優
「ひっ！！！」
そこには男が居た。だが人ではなかった。
背丈は３ｍ以上有り、肌の色は肌色ではなく紫。そして右腕は剣で出来ていた。
？？？
「人を襲ったは良いが、中々当たりが来なくてイライラしてたんだよ」
『何か』がそう言った所で、美優は薫が言っていたことを思い出した
美優
「最近起きてた事件の犯人ってまさか」
美優は『何か』に怯えながらそう言った。
？？？
「よく知ってんな。そうだよ、俺がやったんだよ」

美優
「何でこんな事するの？」
？？？
「教える意味があんのか？どうせお前も、死ぬんだからな！！」
美優
「きゃあ！？」

急に『何か』が腕の剣で襲いかかって来た。美優は急の事に驚きながら、何とか避けた。剣は美優の後ろの電柱を斬った。電柱は簡単に斬れ倒れた。
『何か』はゆっくり美優に近づいて来る。美優は恐怖のあまり声も出ず、体も動かなかった。

美優
（あぁ私死ぬんだ。案外呆気無かったな。…死ぬ？一人で、たった一人で？死ぬ時も一人なの？嫌だ…嫌だ！！最後まで一人なんて！誰か…誰か助けて！！一人は嫌！！）

『何か』は美優の目の前まで来て居た。

？？？
「安心しな楽に殺してやるから・・・・よ！」

そう言い腕の剣を降り下ろした

美優
「嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ガギィン！！

美優の耳に聞こえて来たのは、自分の体が引き裂かれ音では無く、金属音だった。
いつまでも来ない衝撃と金属音が気になり、恐る恐る美優は閉じていた目を開いた。
そこには自分と同じくらいの歳で黒いロングコートを着た少年が、刀身が黒い日本刀で『何か』の剣を受け止めていた。
ここに、運命を背負った二人の少年少女が出逢った

第1話　出会い（後書き）

漆黒
「ついに一話出来ました！」
美優
「おめでとう！」
少年
「ちょっと待て」
美優
「どうしたの？」
少年
「俺が出てないぞ」
漆黒
「出てるじゃん」
少年
「最後の5行だけだろ！名前すら出てないぞ！前の後書きで次の話で出すって言ってただろ！」
美優
「まぁまぁ、落ち着いて」
少年
「お前は黙ってろ」
美優
「酷い（涙）」
漆黒
「まぁまぁ（笑）次の話では活躍するし、名前も出すって」
少年
「本当だろうな」
漆黒
「だいじょ～ぶ」

少年
「それなら良いが、次の話は戦闘シーンだろ、本当に大丈夫か？」
漆黒
「大丈夫！・・・・・・・・・・・・多分」
美優
「大丈夫じゃないよね！？」
漆黒
「頑張ります」
美優
「一気にテンション落ちたね」
少年
「この話書くのに結構時間かかったからな」

漆黒
「取りあえず、ここまで読んで下さった皆様、ありがとうございます！」
少年
「作者も精一杯小説を書くので、是非次も読んでくれ」
美優
「これからも［黒と白の物語］をよろしくお願いします！」

次回
第２話　始まり
美優
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第2話　始まり

美優の目の前に突然現れた『何か』
そして美優を守る様に現れた黒衣の少年
この出来事から美優と黒い少年の物語が始まる

第2話　始まり

美優は自分の目を疑った。自分と対して歳が変わらなければ、背丈も対して変わらない少年が、背丈が3m以上はある『何か』の剣を刀一本で、しかも女の自分と対して変わらない腕の細さで受け止めていたからである。

???

「なぁんだ?てめえ」

少年

「・・・・・」

『何か』がいきなり現れ、自分の一撃を止めた少年に驚きつつも、少年に話しかけた。
だが、少年からの返事が無い。

???

「おい！誰だって聞いてんだよ！」
少年
「・・・・・」
？？？
「上等だ！てめえから殺す！」
黙り続ける少年についにキレ、『何か』は剣を降り下ろした
ズガァァァン！！！！
降り下ろした剣の威力に、辺りは砂ぼこりで包まれた。
？？？
「ぎゃはははは！！！」
それを見て『何か』は大きな笑い声を上げた。
？？？
「ざまぁみやがれ！跡形も無く吹き飛んだか！！俺に楯突いたのが間違いだったなぁ！」
『何か』は笑いながらそう言った。
少年
「誰が跡形も無く吹き飛んだんだ？」
『何か』の後ろから誰かの声がした。
『何か』が声をした方へ振り向いた。
？？？

「なっ！！！」

そこに居たのは、自分が跡形も無く吹き飛ばしたはずの少年と少女が居た。

『何か』は慌てて砂ぼこりが晴れた場所を見た。

そこには、中身が散乱した美優が持っていたスーパーの袋と、大きなクレーターしかなかった。

美優

（あれ？！私いつの間に移動してたの？）

美優は自分自身が動いた訳ではないのに、いつの間にか移動したのか分からず、あたふたしていた。

『何か』が攻撃して来た瞬間、少年が美優を抱えて『何か』の攻撃を高速で避け、後ろに移動していた。

速すぎて美優は、自分が抱えられた事さえ気付かなかった。

？？？

「てめえいつの間に！」

『何か』がそう言い、再び少年の方へ振り向いた。

だが少年は『何か』の剣を黒い刀で抑え込み、『何か』の腹に蹴りを叩き込んだ。

？？？

「がはっ！！」

美優

「！？」

『何か』は腹に蹴りをくらい、数メートル吹き飛んだ。

３mはある巨体が少年の蹴りで吹き飛んだ事に、美優は驚きながらも少年から目が離せなかった。

美優
（凄い・・・）

少年は歩きながら『何か』に近づいて行った。

???
「てめえ・・・」

『何か』は蹴られた腹を抑えながら立ち上がったが、蹴られたダメージで体が少しふらついていた。

少年
「強そうなのは見た目だけだな」
少年は『何か』を睨み付けながらそう言った。

???
「調子に乗ってんじゃねぇ!!!」

『何か』は右手の剣を再び少年に降り下ろした。

美優
「あっ危ない!!」

美優はその光景を見て、少年に向かって叫んだ。
その速さは、普通の人間では受け止めるどころか、避ける事さえ出来ないほどの速さだった。
そう『普通』では・・・

ガギィン！！！！

？？？

「なっ！？」

美優

「え！」

少年は一歩も動かず、『何か』の剣を正面から黒い刀で弾き返した。

ズバァン！！！！

そして少年は、剣で出来た『何か』の右腕を斬り落とした。

？？？

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

『何か』は肩から下を斬り落とされて悲鳴を挙げた。

辺りは肩から吹き出た『何か』の真っ赤な血で染め上げられた。

美優

「ひっ！！」

美優はそれを見て気絶しかけた。人間ではないとはいえ、これ程の血を見れば普通はこういった反応になる。

だが少年は、辺りが染め上げられる程の血を見ても声一つ挙げず、肩を押さえている『何か』を見据えていた。

？？？

「おっ俺の腕が！？」

『何か』は恐怖した。
今まで多くの人間を殺してきた自分の、全力で降り下ろした一撃が、
女の様に細い体をした少年に、たった一本の細い刀で弾き返され、
しかも右腕まで斬り落とした少年に恐怖したのだ。

???

「何なんだ・・・何なんだてめえは!!」

少年に恐怖しながらも、『何か』は再び少年に何者か聞いた。
だが少年は

少年
「お前に教える必要は無い。そろそろ終わらせるぞ」

そう答えた。
それは、『何か』にとって絶望的な答えだった。
すると、少年の刀から炎が上がった。
炎を纏った刀を持ち、少年は『何か』に近づいて行った。

???

「まっ待て!見逃してくれ!!」

それを見て『何か』は少年に命乞いをした。
少年はそれを聞いて、近づくのをやめた。

???

「もう誰も襲わねぇ!だから頼む!!」

『何か』は近づいてきた少年が止まった事で、見逃して貰えると思

った。

少年
「今までお前が殺してきた人達はお前に何て言った？」

だが少年は『何か』を見逃す程甘くはなかった。

？？？
「え？」

少年
「今のお前の様に命乞いをしてきたんじゃないのか」

そう、『何か』が殺してきた人達は全員命乞いをした。
だか、『何か』はその言葉に聞く耳を持たず、さっき少年が斬り落とした剣で斬り殺してきた。

？？？
「そんな事関係無いだろ！！頼むから見逃してくれ！」

『何か』はそれでも少年に命乞いを続けた。
だが少年は刀の炎を燃え上がらせた。

少年
「お前が殺してきた人達の、命の重さを思い知れ」
？？？
「ひぃぃぃ！！！」

それを見て、『何か』は死にたく一心で走った。
少年の刀が届かない場所へ、少年の炎が見えない場所へ、少年が居ない場所へ。

だが、自分より速く動ける少年が、自分の命に届く刃を持っている少年が、自分を許さない少年が、自分を逃がすはずもなかった。

ダン！！！！

少年は地面を蹴った。

『何か』を逃がさない為に、炎を纏った刀を持ち地を駆ける。

？？？

「来るな！来るな！！来るなぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

『何か』は叫んだが、少年は止まらない。

少年は『何か』に向かって、炎を纏った刀を振り抜いた。

少年「“鳳凰激”」

すると刀の炎が燃え上がり、『何か』を包み込んだ。

？？？

「がっ」

その威力に、『何か』は悲鳴一つ挙げられなかった。

少年はそれを静かに見据え、炎の中の『何か』に向かって言った。

少年

「煉獄の炎に呑まれて消えろ」

少年がそう言うと、炎が消えた。

炎に呑まれた『何か』は、全身が黒焦げになると、ズゥゥゥンと、

音をたてて倒れた。
美優は『何か』を簡単に倒した少年に聞いた。

美優
「貴方は誰なの？」

少年は美優の質問を聞き、美優の方へ振り向いた。

美優
「あっ」

美優は初めて少年の顔を見た。
少年の顔は、女と言っても納得してしまうくらいの女顔で美優は驚いた。
そんな少年が、人ではない殺人鬼を倒してしまったからである。
だが、美優は少年の顔より少年の瞳から目が離せなくなった。
少年の瞳は紅くルビーの様に美しかった。

美優
「綺麗」

美優はつい口に出してしまい、慌てて口を閉じ顔を背けた。
少年はそんな美優を不思議に思いながら、美優の質問に答えた。
どうやら少年には美優が言った一言は聞こえていなかったようだ。

少年
「俺が誰かだったな。俺は」

少年が話し初め、美優は再び少年の方へ顔を向けた。

少年
「火渡。火渡優也だ」

少年が自分の名前を告げた瞬間、風が吹き黒い灰が空に舞い上がった。

この二人の出会いで、この世界の歯車が動き出し、そしてこの世界の物語が始まる

第2話　始まり（後書き）

漆黒
「第二話完成！！」
美優
「優也もやっと名前出たしね」
優也
「登場といい、名前といい、また小説の最後だけどな。で、どうだった？」
漆黒
「何が？」
優也
「初戦闘シーン」
漆黒
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
優也
「何か喋れよ」
漆黒
「正直自身ありません。てか、これ戦ってるのかって思いました」
優也
「まぁ確かに、自分で言うのもあれだが、一方的だったからな」
漆黒
「お前が強すぎるんだよ～！！」
優也
「お前が書いたんだろ」
美優
「別に良いじゃん、優也はいっぱい出番あったから」
優也
「お前もあっただろ」

美優
「私殆ど喋ってないじゃん！！」
優也
「作者に言え」
美優
「さ～く～しゃ～」
漆黒
「首！首しまってる！！目覚ましクラッシャー！！」
美優
「だから変なあだ名で呼ぶな～！！」
優也
「作者があんな状況だし、そろそろ終わるか」
優也
「こんな小説を読んでくれた方、作者に代わって俺がお礼する、ありがとう。これからもよろしく頼む。」
優也
「それじゃあ次回でまたな」

次回
第3話　説明
優也
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

漆黒
「優也～！！助けて～！！」
美優
「さ～く～しゃ～」

優也

「まだやってたのか」

第3話　説明

この世界で少女は少年に出逢った。そして、少年から告げられた世界の秘密。

第３話　説明

美優は顔を赤くして、自分の家のソファーの上でテンパっていた。
その様子を優也は向かい合わせに置かれたソファーに座り、黙って見ていた。
何故こんな状況になっているかは、今から３０分前・・・

３０分前

美優はあっさりと『何か』を倒してしまった少年、火渡優也に色々聞きたい事があり質問しようとした時、遠くからパトカーのサイレンが聞こえた。

優也
「色々聞きたい事があるだろうが、今はここから離れる方が先だな。話はそれからだ。警察に見つかると面倒だしな」

優也はサイレンを聞き美優にそう言った。

美優
「それなら私の家がここから近いよ！」
美優もこんな状況で警察に見つかるのは嫌なので、ゆっくり話が出来る自分の家に逃げる用に提案した。
優也
「とりあえずそうした方が良いな。行くぞ」
優也は美優の家へ行こうとしたが、美優の家が分からず、後ろに着いて来ている筈の美優に振り向きながら言った。
優也
「そういえばお前の家は何処だ？」
だが、美優は着いて来ている筈が、最初の場所で座り込んでいた。
優也
「何してる。早く行くぞ」
優也は動かない美優にそう言った。
美優
「腰ぬけちゃって動けない」
美優は動けない自分に少し情けなくなりながら言った。
優也
（少し考えたら分かることだったな）

優也は少し罪悪感が生まれた。
美優は一般人だ。
今までこんな血生臭い光景等、見た事は無かっただろう。
さっきの反応を見れば誰でも分かる。
優也はもう少し戦い方を考えた方が良かったなと、今更ながら思い、
美優の方へ走って行った。

優也
「立てるか？」

優也は少し心配しながら、美優に話しかけた。

美優
「駄目、立てる気がしない」

こうしている間にもパトカーが近づいて来る。
優也
「仕方ないか」
美優
「えっ何が？っきゃあ！？」

優也はそう言うと、美優を抱え上げた。
美優はいきなりの事に驚き、小さく悲鳴を上げた。

優也
「行くぞ、捕まってろ」
美優
「あっあの」
優也

「どうした？」
美優
「恥ずかしいんだけど／／／」

優也は美優をお姫様抱っこしていた。
女顔とはいえ、男にお姫様抱っこされたら、誰でも恥ずかしいだろう。
男とはあまり話した事が無い美優は、尚更恥ずかしかった。
優也
「何がだ？」
美優
（鈍感？！）

我等が主人公は超がつく程の鈍感少年だった。

優也
「とりあえずここを離れる。しっかり捕まってろ」

美優
「えっ？きゃぁぁぁぁ！！！！」

優也は美優を抱えたまま屋根まで飛んだ。そして屋根から屋根に飛び越えて行った。

美優
「ちょっ！？ちょっと待って！？待って！！スト～ップ！！」
優也
「暴れるな！落ちるぞ！」
美優
「だったら一回止まって～！！」

さっきまで赤かった顔が一気に青くなった。
飛んでいる高さがかなり高く、そして速い、美優は怖くなってお姫様抱っこされている事も忘れ、優也に止まる様に頼んだが

優也
「止まってる暇何て無い」

優也はそう言ってまた飛んだ。

美優
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？」

美優の悲鳴が再び夜空に響いた。

その頃さっきまで居た場所では、『何か』の剣で出来た右腕が灰になって消えていった。
美優は優也に抱えられ、無事に家に辿り着いた。

美優
（やっと着いた）

安心してそう思ったその時、今の自分の状況を思い出した。

さっき会ったばかりの少年にお姫様抱っこ

ボン！

美優の顔が再び赤くなり、優也の腕の中で暴れ初めた。

美優
「¢☆＃$＝&¥＊£？！！」
優也
「おっおい！どうした！落ち着け！」

美優が暴れている理由が分からず優也は慌てだす。
自分のせいなのに・・・

優也
「黙れ作者」

優也までナレーションにつっこむな！？
すると、暴れている美優のポケットから家の鍵が落ちた。

優也
（とりあえず上がらせてもらうか）

優也は暴れる美優を抱えながら、鍵を取り家の鍵を開け入って行った。
ていうか不法侵にゅ

優也
「黙れ斬るぞ」

すいまっせんでした！！
作者が土下座しそして今にあたる。

美優

「お見苦しい所をお見せして申し訳ございません」
優也
「いや・・・別に」

美優はさっきよりは落ち着いたが、まだ少しテンパっている様で喋り方がおかしくなっている。
優也はそんな美優を見て少しひいた。

優也
「そういえば、俺に聞きたい事が有るんじゃないのか？」

話が進まないと思い、優也は本題を切り出した。

美優
「・・・・・・・」
優也
「おい」

何も言わない美優に優也は話しかけた。
すると美優はいきなり立ち上がり言った。

美優
「忘れてた！！」
優也
「忘れるなよ」

優也は呆れ、静かにツッコンだ。

美優
「さっきの大男は何！何で刀から炎が出るの！貴方は一体何者！」

美優は優也に聞きたい事を、一気に聞いた。

優也
「とりあえず一つずつ説明していくか」

優也は一つずつ説明していった。

優也
「まずお前を襲ったアイツだが」

美優
「うん」

美優はソファーに座り話を聞いた。

優也
「アイツは妖怪だ」

美優
「よっ妖怪!?」

優也
「そうだ」

美優はいきなり空想上の生き物だと言われ驚いた。

美優
「けっけど妖怪なんているわけ」

優也
「お前が見たのは人間に見えたか」

優也は美優の言葉を遮り、そう言った。

美優
「それは・・・」
優也
「信じられないのは分かるが、本当の事だ」

優也は静かに言った。
美優は自分自身の目で見たので、はっきりそんな者は居ないとは言えなかった。

優也
「この世界には色々な種族がいる」

優也はこの世界の事について話出し、美優は静かに聞いた。

優也
「まずは人間、これは当たり前だな」
美優
「まぁそうだよね」
優也
「次に妖怪だ。妖怪の見た目は人間とは違うのが多い」

その言葉に美優は疑問が湧いた。

美優
「多いって、妖怪の中にも人間みたいなのもいるの？」
優也
「あまり多くは居ないけどな。人間と外形が対して変わらない妖怪はかなり強い。さっきの妖怪は雑魚だ」

美優はさっきの妖怪が雑魚だと言う事に驚いた。

美優
「あんなのより強いのが人間の中にいるの？」
美優は自分達の中に人の形をした妖怪が居る事に、不安が湧いてきた。

優也
「ああそうだ。けど妖怪の全てが人間を襲うわけじゃない。静かに過ごす奴や、人間と一緒に過ごす平和主義の妖怪もいる」
美優は少しだけ安心した。
妖怪が全員人間を襲うわけじゃないと知ったからだ。

優也
「他には悪魔や死神がいる」
美優
「そんなのも居るんだ・・・」
悪魔や死神がいると言われ驚いたが、少し慣れてきた。

優也
「俺も会った事が無いからよく知らないけどな」
美優
「へぇ～そうなんだ」
優也
「種族の説明はこんな所か。他に聞きたい事はあるか」
優也がそう言うと美優は反応した。

美優
「そうだよ！貴方が何者か一番聞きたかったの！」
優也
「俺の事か・・・分かった」
優也は少し渋りながらも真剣に話し始めた。
優也
「今この世界の種族の事について説明しただろ」
美優
「うん」
優也
「俺はそのどれでもない。四聖獣の朱雀だ」
美優
「へぇ～」
優也
「・・・思ったより驚かないんだな」
美優の反応に、もっと驚くと思っていた優也は、真剣に話した自分が少し馬鹿らしく思った。
美優
「だって今更人間でも妖怪でもなくて四聖獣の朱雀って言われても流石に驚かないって、えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？」
優也
「？！」
美優は再び立ち上がり絶叫した。
優也はいきなり絶叫された事にかなり驚いた。

優也
「驚くの遅いだろ！てかうるさい！近所迷惑だ！」

優也はとりあえず美優を落ち着かせようとするが、美優は止まらない。

美優
「だっだって！それじゃあ、それじゃあ！」
優也
「・・・・・・」
美優
「さっきの説明意味ないじゃん！！」
優也
「ツッコム所違うだろ！？」

美優のずれたツッコミに、優也は声を上げ立ち上がりツッコミ返した。

優也
「今はシリアスな感じで進んでるのに勝手にギャグに変えるな！！話が進まないし単細胞の作者が困るだろ！！」

単細胞ってどういう意味！？

美優
「作者なんてどうでも良い！！」

こっちも酷い（涙）

近所の人

「てめえら！夜中にうるせぇぞ！！」

二人の声に近所の人がドスの聞いた声で玄関から注意してきた。

優也・美優
「すっすいませんでした～」

二人は謝った。
ざまぁみろ。

優也・美優
（作者後でボコる（怒））

優也
「とりあえず話を戻すぞ。今度は大声を出さない様に」
美優
「了解しました」

二人は落ち着き、話を戻した。
さっきの人が恐いらしく話す声は小さい。

美優
「所で、四聖獣の朱雀って何？」

美優の質問に優也は呆れた。

優也
「知らないのにあんなに騒いだのか。」

美優
「てへ♪」
優也
「てへじゃない。まったく、簡単に説明していくからちゃんと聞けよ」
美優
「了解！」

美優は何処からともなくメモ帳を取り出した。

優也
「何処から出したそれ。て言うか要るのか？」
美優
「ノリだよ！」
優也
「まぁ良いか、とにかく説明するぞ」

優也は四聖獣の事について説明し始めた。

優也
「四聖獣っていうのは聖獣っていう特別な力を身に宿し、人間の誰かに力を貸す生き物で、その中でも更に特別な四体の事だ。ここまでは分かったな？」
美優
「いっ一応」
優也
「その四体を一体ずつ、簡単に説明していくぞ」

東を守護する『青龍』

南を守護する『朱雀』
西を守護する『白虎』
北を守護する『玄武』

優也
「この世界は東西南北でこの四聖獣に守護されている。この世界の外側、つまり妖怪や悪魔、死神が住んでる場所からこの世界に入って来ない様に、四体の力で、強い力の奴だけ入って来ない様に結界を張ってこの世界を守ってるんだ。
その代わりに、力が弱い奴は結界をすり抜けるんだがな」
美優
「だからあの妖怪は入って来れたんだ」

美優はあの妖怪がこの世界にいる理由が分かった。

優也
「朱雀は炎を操る聖獣だから俺は炎が使えるんだ」

美優
「成る程」

優也の説明に何とか着いて行き、美優は納得した。

美優
「にしても世界を守護って凄いんだね」

美優は純粋に優也が凄いと思い、優也にそう言った。

優也

「別に俺が凄いんじゃない」
美優
「え～そうかな～」

美優は少し不満に思いながら、優也を見た。

美優
（それにしても綺麗だなぁ）

美優は優也の紅い瞳を見てそう思った。
そして、優也の顔をじっと見た。
相変わらずの女顔だが、何処と無くかっこ良く見える。
そんな優也の顔を見ていると、美優の顔が段々赤くなってきた。

優也
「おい顔が赤いぞ。大丈夫か？」

美優の赤い顔を見て、優也が心配そうに見てきた。

美優
「えっ！だっ大丈夫だよ！／／／」
優也
「本当か？」

優也はそんな美優に疑問に思いながら聞いた。

美優
「そっそうだ！あの妖怪が言ってたんだけど、当たりって何の事？」

美優は恥ずかしくなり、話題を変えた。

優也
「あぁ、一番大事な事を忘れてた」
美優
「一番大事な事忘れてたの！（汗）」
美優は優也が少し抜けているという事を知った。
優也
「お前は妖怪に狙われている」
優也は一番大事な事をさらりと言った。
美優
「それを早く言おうよ！？て言うか何で？！」
美優は何故自分が狙われるのか分からず、テンパった。
優也
「今から理由を話す、だから落ち着け」
美優
「うっうん」
優也にそう言われ、美優は少し落ち着いた。
優也
「人間は聖獣と契約して力を得るって言っただろ。けど契約していない人間でも力を持つ者がたまにいる。それがお前だ」
美優
「うっ嘘！」

美優は自分に優也みたいな力が有ると言われ驚いた。

優也
「妖怪は力を持つ者を狙う。そして力が有る人間を食べる事により更に力を得る」

美優
「たっ食べるって」

美優はもしかしたら、自分が食べられていたかもと思い青ざめた。

優也
「お前は力が特に強い。だから余計に狙われるんだろうな」

美優
「私って凄いんだ」

美優は思ったより力が強いと言う事に驚いた。

美優
「私の力ってどんなのなの？」

美優は自分も炎を出したり等出来るんじゃないのかと少し期待した。

優也
「そこまでは分からない」

美優
「そっかぁ～。まぁ私が分からないのに、分かるわけないよね」

美優は残念そうに呟いた。

美優
「それより私これから妖怪に襲われるかもしれないんだよね。これからどうしよ」

美優はこれからどうするか考えていると、優也が言った。

優也
「目の前に狙われている奴が居るのに、放って置くわけには行かないだろ」

美優はそう言っている優也を見た。

優也
「安心しろ。何が来ようと、俺がお前を守ってやる」

優也は少し微笑み美優に言った。

美優
「／／／」

美優は今日だけで４回も赤くなった。
美優は恥ずかしくなり、顔を反らした。

美優
（何であんな恥ずかしい台詞を普通に言えるの！しかも笑うと可愛い！／／／）

美優は心の中で呟いた。

優也

「とりあえず、今日はもう行くとするか。また明日ここに来る。じゃあな」

優也はそう言うと、家を出て行こうとした。

美優
「まっ待って！」

出て行こうとしたが、美優に引き止められた。

優也
「何だ？」

止まった優也を見て美優は聞いた。

美優
「何処に住んでるの？」

優也
「・・・・・・」

美優は何処に住んでるか聞いたが、優也からの返事が無い。まさかと思い、美優は聞いた。

美優
「住む所無いの」

優也
「それは・・・」

美優
（図星か）

美優は辺りを見渡した。
そこには自分と優也しか居ない家。
美優は閃いた。

美優
「じゃあここに住む？」

美優はそう提案した。

優也
「お前が良くても、家族に迷惑じゃないか？」

見ず知らずの自分に家に住むかと言う美優に驚き、同時に、今まで野宿だった優也にとって、住む宛が出来て嬉しかったが、美優の家族に迷惑がかかるんじゃないかと思い聞いた。

美優
「・・・私家族居ないんだ」

優也はしまった、と頭を抱えた。
この家に来てから美優以外の人間を見ていない。
それどころか、美優以外の靴も無ければ、一人で住むくらいの数の食器しか無い。
考えれば分かる事だったと、優也は再び思った。

優也
「悪い」
美優
「ううん。いいよ別に、気にしてないから」

優也は美優に謝るが、美優は笑顔で、怒っている様子では無かった。

美優
「物心着いた時から両親が居なくて顔も知らないんだ」

美優は笑顔で話したが、その笑顔は寂しげに見えた。

優也
「寂しいか？」
美優
「もう慣れたよ」

美優はそう言うが、優也には強がりにしか見えなかった。

美優
「急にこの家に住んだらなんて、迷惑だよね」

美優は優也が自分と一緒に過ごすのは嫌なのかと思い、顔をうつ向きながら言った。

優也
「お前を守るなら近くに居た方が良い」

美優は顔を上げた。

優也
「お前が良いなら、ここに住ませて貰えるか？」

優也のその言葉に、美優は顔を明るくした。

美優
「うん！これからよろしく！」

余程嬉しかったのか、満面の笑みで答えた。

こうして、二人の同居生活が始まった。

第3話　説明（後書き）

漆黒
「今回は優也の正体と優也が戦った敵の正体、そして、美優の家庭状況でした」
優也
「にしても四聖獣の説明本当か？」
漆黒
「実は作者のオリジナルです」
美優
「それはそうと作者、覚悟してね（笑）」
漆黒
「あの、美優さん、そんな素敵な笑顔で何ですか（汗）」
優也
「覚えてないのか、お前が俺達に言った言葉」
漆黒
「ざっざまぁみやがれ？」
優也・美優
「何がざまぁみやがれだ～！！」
漆黒
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」
薫
「誰も話す人が居ないので、ここで終わります。次回もよろしくお願いします」

次回
第４話　買い物
薫
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

漆黒・優也・美優
「台詞取られた！？」
優也
「て言うか誰？」

二人は出逢い、そして物語が動き始めた。
これから二人に何が待っているのだろうか。

第４話　買い物

二人が同居を初めて次の日の朝、台所から食事を作る音がする。
そこには紅い瞳に髪は黒く、肩に届きそうなくらいの長さで、身長は１６０ｃｍ有るか無いか位の女みたいな少年が料理をしていた。

優也
「女みたいはよけいだ！（怒）」

この少年こそ、この物語の主人公、『火渡優也』である。
何故優也が料理を作っているかと言うと。
昨日の夜に買い物を美優が落としてしまい、晩飯が無く食べる事が出来なくどうしようか考えていた時、優也が冷蔵庫の中を探り始め、そして余り物で料理を作り始めた。
それがプロ顔負けの絶品だった。

優也
「泊めて貰っているから、良かったらこれから俺が料理を作ろうか？」

美優は二つ返事で答えた。
そして今に当たる。

すると階段を降りて来る音が聞こえる。

美優
「おはよ～、て言うかまだ8時だよ。土曜日なんだからゆっくりしたら良いのに」

そう言いリビングに入って来た、蒼い瞳に背中まであるストレートの黒い髪で、優也より少し身長が小さな少女。
この少女は、この物語の一応ヒロインの『神道美優』

美優
「一応って何!?」

ほら、優也が料理を持ってきましたよ。

美優
「こら!逃げるな!」

優也
「何してる。飯が冷めるぞ」

そう言われた美優は、仕方なく椅子に座った。

美優
「いただきま～す」

優也
「いただきます」

二人はそう言い朝食を食べ始めた。

美優

「美味しい！やっぱり優也って料理上手だね」
優也
「まぁ自分で作ってたからある程度はな」

美優は昨日の夜に食べた時、あまりの美味しさに、仮〇ライダー〇ブトの〇道〇司なみの美味しさと語っている。
天〇総〇の料理を食べた事は無いが

美優
「本当に美味しいよ。優也料理上手いし、女顔だから女って言っても誰も疑わな・・・ひっ！？」

美優がそこまで言った時、優也から殺気を感じた。

優也
「誰が女顔だから女って言っても誰も疑わないだって？（黒笑）」

優也は笑顔だが目が全く笑っていなかった。

美優
「いっいや、あの」

美優は恐怖で顔が真っ青だった。
ちなみに、作者は巻き込まれる前に退散した。

優也
「一番気にしてる事をさらっと言うなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
美優
「嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

優也
「ごちそうさま」
美優
「ごっごちそうさまでした」

優也はいつもどうりだが、美優は声が震え顔が真っ青だった。
あれから色々あり、美優は優也に女顔関係の話はしないと心に誓った。
何があったかは、皆様のご想像にお任せします。

優也
「昼には出れる様に準備しろよ」

優也は食器を片付けながら言った。

美優
「何で？」
優也
「何でって、お前が昨日色々買いに行くって言ったんだろ」
美優
「そう言えばそうだった」

居候が増え、生活用品が必要になった為、美優は明日一緒に買い物に行こうと、昨日の夜に言っていた事を美優は思い出した。
そこまで思い出し、美優はある事に気付いた。

美優
「優也。これから一緒に過ごすんだから、お前じゃなくて美優って

呼んでって言ったでしょ」

お気付きの方もいたでしょう。
美優が優也と呼んでいた事を。
美優はこれから同居するという事で、お互いを名前で呼ぶようにしようと言い、優也と呼ぶようにした。
だが、優也は中々自分の名前を呼ばない。

優也
「その内呼ぶ」
美優
「昨日からそう言ってるじゃん」

美優は悲しそうに言った。

優也
「早く準備しろ。晩飯お前の好物作ってやるから」

優也は少し気まずくなり話を変えた。

美優
「私ハンバーグ!!多めで!」

美優は一瞬で悲しそうな顔をやめ、自分の好物を言った。
優也は呆れ

優也
「昨日も多めで食べただろ。そんなに食べてたら太るぞ」
美優
「大丈夫!私太らない体質だから」

優也
「普通あれだけ食えば太るぞ・・・」

優也はあり得ないと言いたげな顔で言った。
昨日の夜、美優は料理が美味しかったので何度もおかわりをした。
その量が異常で、力士が食べる量を超えていた。
しかもその後にアイスも食べた。
そのせいで、冷蔵庫の中身がほとんど空になったのは言うまでもない。

優也
「とにかく、ハンバーグ作ってやるから準備しろよ。昼飯は外で食うからな」
美優
「了解！」

優也は食器を片付け、美優は準備しに部屋に戻った。

優也
「忘れ物は無いな？」
美優
「うん！無いから早く行こうよ！」

美優は誰かと買い物に行けるのが楽しく、優也を急かした。
ちなみに優也は服が、黒いロングコートや黒い服とズボンしか無く、コ〇ンに出てくる黒〇くめの男みたいな格好で町に行くわけにはいかないので、美優に服を借りた。
出来るだけ男っぽい服を借りたが、やっぱり女の子の服なので、優

也が着ると女の子にしか見えない。

優也
「スカートじゃないのは良いが、もう少し男っぽい服無かったのか？」

美優
「だから今から買い物しに行くんじゃん。それに似合っおかしくないよ」

美優は服が似合っていると言おうとしたが、またあんな目に逢いたくないので、言い変えた。

美優
「とっとにかく、早く行こうよ！」

美優は優也の手を引き走り出した。

優也
「分かったから少し落ち着け」

手を引っ張られながら、美優の速度に合わせ走った。

二人はデパートで服を選んでいた。

美優
「これなんかどう？」

優也
「却下」

美優
「じゃあこれは」
優也
「駄目だ」
美優
「これなら文句ない！」
優也
「嫌だ！」

美優は優也の服を選んで優也に見せたが、優也は全部拒否した。

美優
「何で全部駄目なの！」
優也
「こんな派手な服着れるか」

服を選んでくれるのは良いが、美優が持ってくる服はかなり派手で、着る気には慣れなかった。

美優
「だって優也が選ぶ服、黒くて地味な服ばっかりなんだもん」

始めは優也が服を選んでいたが、選ぶ服が地味な服ばかりで、美優は見ていられなくなり、代わりに服を選んだのだが、逆に派手過ぎて優也が嫌だった。
何時までも服を選んでいる訳にはいかず、二人は地味過ぎず派手過ぎない服を選んで、デパートを後にした。

美優
「あの服可愛かったのにな～」
優也
「ならお前が着れば良かっただろ」

二人はデパートを出て、近くのファーストフードで昼食を食べていた。

美優
「優也の服買いに来たのに私の服買ったら意味無いでしょ？あっすいませんステーキお願いします」
優也
「良く食べるのは分かったけど、金は大丈夫なのか」

デパートで優也の服を買い、昼食を食べそしてスーパーで一週間分の食料を買うとなるとかなりのお金になる。
ちなみに美優はまだ１２歳、バイトも出来ず親も居ないのでお金を貰う事も出来ない。

美優
「あぁ大丈夫だよ。何でか知らないけど、私の口座にお金振り込まれてるから」
優也
「親戚でもいるのか？」
美優
「居ないよ」

誰かが美優の生活を援助している事に疑問が湧いた。

優也

（親が居ないなら普通、親戚がどうにかするがこいつには親戚が居ない。
なら誰が・・・）
美優
「私、家族とか居なくてね・・・」
優也が考えていると、美優が話を始めた。
美優
「だから小さい時からずっと一人で、その事でからかわれた事もあってね。それで、何で私には家族が居ないんだろうって、今までずっと一人で寂しかった。あっでも友達もちゃんといるんだよ」
優也
「・・・・・」
優也は美優の話を真剣に聞いた。
美優
「だからね」
すると美優は続けて言った。
美優
「優也が一緒に住んでくれるって言ってくれた時、家族が出来たんだって、凄く嬉しかったんだ。だから優也には凄い感謝してるよ。ありがとう」
美優は笑顔で言った。
優也は感謝されるのが慣れてないのか、恥ずかしそうに顔を反らし

た。

美優
「どうしたの？」

美優はそんな優也に聞くと、優也はちらっと美優の方を見た。
自分を家族と思ってくれている美優を、何時までもお前呼ばわりは良くないと優也は思いながら美優に言った。

優也
「みっ」
美優
「み？」

だが、さっきまでお前呼ばわりしていた為、急に名前で呼ぶのは恥ずかしかった。

美優
「どうしたの？」

優也は決心して言った。

優也
「みっ美「美優ちゃん？」

誰かに遮られた。
優也は決心して言おうとしたのに、誰かに遮られた事がショックだった。
哀れ・・・

優也
（何とでも言えば良い）

反論も出来ないくらいショックだったらしい
そんな優也を無視して、美優は呼ばれた方を見た。

美優
「あっ！薫！」

薫
「こんにちは」

美優に話しかけてきたのは、美優のクラスメートで“唯一”の友達の『椿薫』だった。

美優
（あれ？この前より酷くなってる！しかも唯一強調された！？）

薫
「美優ちゃん？」

美優
「え～と、薫は何してるの？」

薫
「買い物のついでに昼食を少し。所でこの人は」

薫は優也の事を尋ねた。

美優
「この人は火渡優也。私の家族だよ！」

薫
「えっ！？けど美優ちゃん家族居ないって！それに苗字も違う」

薫は少しパニックになった。
そんな薫を見て優也が言った。

優也
「ただの居候だ」

それを聞いて薫は落ち着いた。

薫
「びっくりした。美優ちゃんもちゃんと説明してよ」
美優
「あはは、ごめんね」
薫
「あっ自己紹介が遅れました。美優ちゃんの友達の椿薫です」

薫は丁寧にお辞儀しながら言った。

優也
「火渡優也だ。色々あってこいつの家に居候させてもらっている」

優也は美優を指差しながら言った。

薫
「色々って？」

薫は居候させてもらっている理由が曖昧な事に気になった。

美優
「えっえ～と」

色々の理由が、自分が妖怪に狙われているから優也に守ってもらっている、なんて言える筈がなかった。
美優が理由を考えている時、優也が言った。

優也
「俺の親が仕事で海外に行く事になったんだが、俺がどうしても日本に残りたいって頼んだから、遠い親戚のこいつの家に住ませてもらったんだ」

優也は適当な理由を薫に言った。

薫
「そうなの？」

薫は美優に聞いた。

美優
「え～と」

美優は話の展開に着いて行けずに混乱した。

優也
（話を合わせろ）

優也は小声で言った。

美優
「そっそうだよ！優也と遠い親戚って事は最近知ったんだ。ごめんね、教えられなくて」

美優は何とか話を合わせた。

薫
「そんな事で怒らないよ」

薫は笑顔で言うと

美優
「やっぱり薫は優しい！」

美優が薫に抱きついた。

薫
「みっ美優ちゃん！？」

薫は突然の事に驚いた。
優也はそれを、料理を食べながら見ていた。

美優
「薫優しいし可愛いから、癒しになる」

薫は恥ずかしかったが、満更でもなかった。

優也
「ちょっと良いか？」

美優
「どうしたの？」

優也
「皆見てるぞ」

美優と薫は周りを見渡した。
そこには、他の客が美優と薫を見ていた。
二人は恥ずかしくなりそっと離れた。

三人は店から出て、一緒に歩いていた。

薫
「私は帰るけど、二人はどうするの？」
薫は帰る前に二人に聞いた。

美優
「これからスーパーで買い物だよ」
美優はこれからの目的を答えた。

薫
「火渡君がいるからって、遅くなっちゃ駄目だよ」
ここで薫のお母さんスキルが発動した。

優也
「お前はこいつのお母さんか？」
優也は美優と同じツッコミをした。

薫
「火渡君、少しお話が」

薫は優也にＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩをしたいと言った。

美優
（お話違いだよ）

美優
「私は入らない方が良い？」

薫
「うん・・・ごめんね」

薫は申し訳なさそうに言った。

美優
「怒らないよ、そんな事で。薫もさっき怒らなかったでしょ？」

美優はさっきの薫の様に、笑顔で言った。

薫
「ごめんね、すぐ終わるから、ここで待ってて！」

そう言うと、薫は優也を連れ、美優に聞こえない場所まで離れた。

優也
「話って何だ？」

優也は薫に尋ねた。

薫
「単刀直入に聞きます。貴方は美優ちゃんの親戚では無いですね」

薫は、美優と話している時とは口調を変え、疑いも無く優也に言い放った。

優也
「良く分かったな」

優也は大して驚きもせず、平然と言った。

薫
「美優ちゃんは嘘をつくのが下手なんです」

優也
「成る程な」

優也が納得していると、薫が言った。

薫
「貴方が何か企んでいて、美優ちゃんに何かするようなら、容赦しません」

薫は優也を睨み付けながら言った。

優也
「安心しろ。あいつに何かしたりはしない」

薫
「本当ですか」

優也
「ああ」

優也は薫の目を見て言った。

薫
「分かりました。貴方に美優ちゃんを任せます。ですが、美優ちゃんが危険な目にあったら、その時は」
薫は美優を本当に大切にしていると、優也は思った。
優也
「ああ、分かってる」
優也は短く返事した。
美優
「あっお帰り」
優也は美優の所に戻って来た。
薫は先に帰った。
美優
「何話してたの?まさか!愛の告白!」
美優は優也に少しふざけながら言った。
優也
「そんなわけあるか。さっさと行くぞ」
優也はそう言うと、スーパーへ歩いて行った。

美優
「待ってよ～」

優也は、後ろから追いかけて来る美優を見て呟いた。

優也
「良い友達が出来たな」

美優
「えっ何て？」

美優には聞こえなかったようだ。

優也
「何でもない」

優也は少し微笑み、歩いて行った。

帰り道、優也と美優は、買い物袋を持って歩いていた。
一週間分の買い物をしたので、綺麗に袋にいれても、結構量がある。
ちなみに、美優の持っている袋は、優也より二つも多かった。
その横では優也が落ち込んでいた。
初めは、優也が荷物を多く持っていたが、自分よりも、二倍も大きい相手を倒したとは思えない程の非力で、見ていられなくなった美優は、優也から荷物を二つ奪った。
美優は二つも荷物が多くなっても、平然としていた。
それを見て優也は、男なのに女より非力な事に落ち込んだ。

美優

「そんなに落ち込まなくても」
優也
「別に落ち込んでない」

美優は優也が子供っぽいという事を、新たに発見した。

美優
「優也って、案外子供っぽいよね」
優也
「お前に言われたくない」

二人がそんな会話をしながら歩いている時、優也が突然誰かに話しかけた。

優也
「そろそろ出て来たらどうだ？」

優也がそう言うと、『何か』が現れた。

美優
「よっ妖怪！」

そこには、昨日の妖怪とは違って、右腕はちゃんとあるが、顔が骸骨だった。

骸骨男
「よく気付いたな」
優也
「あんな下手くそな隠れ方で、ばれないとでも思ったか」

そして続けて言った。

優也
「昨日の夜、俺が戦っている時にもいたな」

美優
「！」

美優は驚いた。
昨日の戦いを見られていた事にもだが、そこまで気付いていた優也にもだ。

骸骨男
「そこまで気付いてるんなら分かるよな。今のお前じゃ、俺には勝てない。何たって、刀が無いんだからな！」

美優はそこまで言われて気付いた。
今日はただ買い物に来ただけだから、優也は刀を持って来ていない。

骸骨男
「安心しな。二人共一緒に喰ってやるから！」

美優
「優也！」

骸骨男は優也に襲いかかった。

ドォォン！！！！

骸骨男

「なっ」
美優
「えっ」

吹き飛ばされたのは、骸骨男の方だった。
骸骨男は数m蹴り飛ばされていた。

優也
「お前、昨日の戦いを見たって言ったな」

優也は荷物を置き、骸骨男に近づいて行った。

優也
「なら、俺が奴を蹴り飛ばしたのは、見なかったのか？」
骸骨男
「！」

骸骨男は思い出した。
優也の剣技と、炎が印象に残り過ぎて、優也の蹴りの事を忘れていたのだ。
すると、歩いてくる優也の右足首から、炎の翼が生えた。

骸骨男
「まっ待て！」

優也に止まる様に言ったが

優也
「“鳳凰爪牙”」

優也は、回し蹴りを放った。
その威力は、さっきの蹴りの、何倍もの威力があった。
骸骨男は蹴り飛ばされた。
蹴られた場所を押さえながら、立ち上がろうとするが、動く事が出来ない。

優也
「少しだけ手加減した。もしお前に仲間がいるのなら、その仲間の事を教えてもらうぞ」

優也は骸骨男に近づいて行った。

???
「“氷華”」

声が響いた瞬間、骸骨男の周りに冷気が漂った。
そして、骸骨男の体が凍りついた。
氷は花の様になり、そして・・・

???
「“椿”」

砕け散った。

優也・美優
「！」

二人は急の事に、優也も驚いた。

優也

「誰だ」

優也は氷を使う相手に注意しながら、美優を守る様に前に出た。
そして、出て来た人物は、二人のよく知る人物だった。

美優
「かっ薫？」

その人物は、美優の友達の『椿薫』だった。

第4話　買い物（後書き）

優也
「今回も簡単な戦闘だったな。」
漆黒
「すいません。何時か、必ずちゃんと書きます。」
美優
「所で、今回の優也の技ってまさか」
漆黒
「そのまさかです。元ネタは仮〇ライダーカ〇トのライダー〇ックです」
優也
「パクリだな」
漆黒
「仮〇ライダーが好き過ぎてパクっちゃいました」
美優
「じゃあ今回の敵」
漆黒
「そうです、ぬらり〇ょんの孫に一話だけ出て来た、骸輪車暴走団がイメージです」
美優
「やっぱり」
漆黒
「他にも原作の技等をパクってしまうかもしれませんが、どうかご了承下さい」
優也
「それじゃあまた次回」

次回

第５話　約束

美優

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第5話　約束

優也と美優の目の前で妖怪を倒した薫。
一体彼女は何者なのか

第５話　約束

美優は自分の目を疑った。
今まで、普通の友達だと思っていた薫が、目の前で異形の者を倒したからだ。
しかも凍り付けにして。
薫は二人に近づいて来た。
正確には優也に、だが

薫
「火渡君、貴方に言いましたよね」

薫は優也に話しかけた。

薫
「美優ちゃんが危険な目にあった時は・・・」
優也
「俺を許さない・・・・・か？」

薫の言葉を遮り、優也は言った。

薫
「はい。初めはそれだけの筈でした。だけど」
優也の言葉を聞き、薫は頷いた。
そして続けた。

薫
「さっきの妖怪と貴方の話を聞いて、一つ疑問が湧きました」
美優
「疑問って？」
美優は薫に聞き返した。

薫
「美優ちゃんに大きな力があるのは知ってたの。だから美優ちゃんが、何時か妖怪に襲われるかも知れないって」
薫が自分の力の事を知っている事に美優は驚いた。

薫
「そして美優ちゃんは襲われた。貴方が現れてから」
美優
「あっ」
薫に言われ美優は気付いた。
今まで妖怪に襲われる事無く、暮らして居た。
それが優也と出逢って、たった二日で二回も襲われた。
薫

「貴方が現れてから、妖怪が美優ちゃんを狙う様になった。今までそんな事は無かった。つまり貴方が妖怪を呼び寄せたんじゃ無いんですか？」

薫は優也を睨み付けながら言った。

美優
「だけど！優也は私を助けてくれたよ！」

美優は優也を庇う様に言った。

薫
「美優ちゃんを信用させる為かも知れないよ」

美優
「そっそれは」

薫に言われ美優は悩んだ。

美優
「でっでも」

薫
「だから、貴方を倒します」

それでも美優が庇おうとした時、薫が優也に襲いかかった。
薫の想像以上の速さに、優也は驚いたが、すぐに待ち構えた。

薫
「はぁぁ！！」

薫が手刀の様に腕を振り抜いた。

優也
（速い。だが、受け止められない速さじゃない）
優也は手刀を受け止め、押さえ込もうとしたが、
優也
「！」
優也は受け止めずに、上体を反らし薫の手刀を避けた。
だが完全には避けきれなかった様で、髪が少し切れた。
薫
「良く避けましたね」
そう言う薫の手には扇子が握られていた。
優也
「鉄扇か」
薫
「これは少しばかり鋭利に作られています。」
薫は自分の武器の説明をしながら、もう一つ鉄扇を取り出した。
薫
「下手な刃物より良く斬れます！」
再び薫は優也に襲いかかった。
美優

「待って！薫！」

美優は薫を止めようと叫んだが、薫は止まらない。

薫

「はぁぁ！！！」

薫は優也に鉄扇を降り下ろす。

その動きは洗練された動きだった。

だが優也は少し体を横にし、鉄扇を避ける。

薫

「甘い！」

薫は降り下ろした鉄扇を、そのままの速さで横に薙ぎ払った。

だが優也は後ろに飛び、鉄扇をかわす。

薫

（速い！私じゃあ追い付けない、けど）

薫は優也の足元目掛けて、鉄扇を薙ぎ払った。

優也は少し高く飛び避けた。

優也

（足を攻撃して機動力を落とす気か）

薫の狙いが、自分の動きを遅くする事だと思いながら着地した。

ピシィィィ！！！

優也
「何！？」

優也が着地した瞬間、優也の足元が凍り付いていた。

薫
「どんなに速くても動けなければ意味が無い」

優也の足を凍らしたのは薫だった。

優也
（こいつ、強い。一瞬でここまで凍らせるとはな）

優也は薫がかなりの実力者だと思った。
そう考えている間に、優也の腰の辺りまで凍っていた。

薫
「終わりです。“氷華”」

美優
「っ！」

薫の言葉に美優は思い出した。
“氷華”この言葉でさっきの妖怪は体が凍り付き、次の言葉“椿”で体が砕け散った。

美優
「薫！」

美優は薫を止めようと走ったが、薫との間に少し距離があり美優の足では間に合わなかった。
氷は優也の胸まで届いていた。

薫
「“つば」
優也
「惜しかったな」

ゴォォォォ！！！

薫が止めを刺そうとした時、優也の体から炎が燃え上がり、氷を溶かしていった。

薫
「！」
優也
「氷は炎に弱い。当たり前の事だ」

目の前の少年が炎を使い、それが自分の弱点だという事は分かっていた。
そして自分が少年の身体能力に敵わない事も。
だからこそ、炎を使われる前に一瞬で倒そうとしていた薫は、自分の攻撃が通用しないに負けを悟った。
それでも薫は攻撃を仕掛けた。

薫

「はぁぁぁぁ！！！」

薫は鉄扇で、優也に向かって攻撃した。
だがさっきと違って、がむしゃらに鉄扇を振っている様にしか見えなく、さっきの様な洗練された動きでは無かった。
優也は簡単に鉄扇を避ける。
だが避けるだけで一度も攻撃しなかった。

薫
「何で、何で戦わないんですか！」

薫は攻撃しない優也に、少し苛立ちながら言った。
優也の実力なら、さっきまでの冷静な薫でも、一撃で倒せていたと、薫自身でも思っていたからである。
それなのに攻撃をしてこない事に、自分が舐められていると、薫は思っていた。

優也
「お前があいつの友達だからだ」

薫
「え」

優也の答えは薫の考えていた事とは違い、薫は動きを止めた。

美優
「薫！」

その時、二人の間に美優が割って入った。
突然名前を呼ばれ、薫は驚き美優を見た。
そこには今にも泣き出しそうな、大切な友達がいた。

薫
「みっ美優ちゃん」
美優
「もう止めて、二人が戦う所なんて見たくないよ」
薫は鉄扇を仕舞った。

薫
「ごめんなさい」
薫は美優に謝った。

美優
「私じゃなくて、優也に謝って！」
薫
「えっ！」

さっきまで戦っていた相手に、謝るのは流石の薫も気まずかった。

美優
「優也も謝るから、それで良いよね」
中々謝らない薫に、優也も謝るから薫も謝る様に、美優が提案した。

優也
「ちょっと待て。何で俺が謝らないといけないんだ」
だが優也が納得しなかった。
自分は襲われただけで、薫には指一本触れていない。

それなのに急に謝れと言われたら、誰でも嫌だ。

美優
「喧嘩したら謝る！常識でしょ」

優也
「あんな危ない喧嘩があったら、世界中怪我人だらけだぞ」

優也は呆れながら言って美優を見た。
美優は真剣な目で優也を見た。

優也
「はぁ」

優也は溜め息をつき、薫を見た。

優也
「椿だったな」

薫
「あっはい」

いきなり名前を呼ばれ、薫は驚いた。

優也
「悪かった」

薫
「えっあの」

美優があまりにも真剣だったため、優也は折れた。

美優

「ほら薫も」
薫
「・・・すみませんでした」
いきなり謝られ戸惑っていたが、美優に言われて謝った。
美優
「これで許してくれる？」
美優は優也を見た。
優也
「・・・許すも何も、初めから怒ってないぞ」
美優
「本当？」
優也
「ああ」
優也の言葉を聞き美優は安心した。
優也
「とりあえず家に戻るぞ。椿お前も来い、聞きたい事がある」
優也は置いておいた、スーパーの袋を持って言った。
美優
「薫」
薫
「はい。分かりました」

薫は渋ること無く言うと、三人は美優の家に向かった。

優也
「さてお前が何者か、教えてもらうぞ」

三人はソファーに座り話していた。

薫
「椿、この名前を知っていますか？」

薫は逆に、優也に聞いた。

美優
「薫の苗字じゃないの？」

薫
「うん。それが重要なの」

美優
「？」

美優はよく分かっていない様だった。

優也
「椿・・・あの椿一族か」

優也は何かに気付いた。

薫
「はい」

美優
「椿一族って？」

話しに着いていけない美優は、二人に聞いた。

優也
「お前みたいに、聖獣と契約しないで力を持っている人間がいる事、昨日話したな」
美優
「うん」

昨日の話を思い出しながら、答えた。

薫
「椿一族はその聖獣と契約しないで、力を持っている一族の事だよ」
美優
「それじゃあ、薫はその一族の」
薫
「末裔だよ、ってどうしたの？」

美優は薫を、尊敬の眼差しで見ていた。

美優
「だって一族の末裔って、何だか格好良いじゃん！」
薫
「そっそうかな？／／／」

今まで一族の事で、褒められた事が無い薫は、恥ずかしそうに照れた。

優也
「そう言えば、能力だけじゃなく、武術にも長けた一族だったな」
美優
「だから体育の時間とか、あんなに凄いんだ」

薫は中学の全校生徒の中でも、運動部等を差し置いて、ベスト3に入る程の、運動神経の持ち主だった。
勉強も上位に入り、容姿端麗、そんな彼女にはファンクラブが、あるとか無いとか。
ちなみに、薫の運動神経は、中学で3位、薫より運動神経が良い二人がいるらしいが、誰かは薫も美優も、生徒の誰一人知らない。

薫
「けど、椿一族は6年前に・・・」

薫は顔をうつ向かせた。

美優
「薫?」

美優は心配になり、薫に近づくと、優也が薫の代わりに言った。

優也
「・・・椿一族は6年前に、滅びた」
美優
「えっ」

滅びた、その言葉を聞き、美優は薫を見た。

薫

「良く知ってますね」
優也
「・・・噂で聞いただけだ。嫌な事を思い出させて、悪かったな」
薫
「いいえ、私から話した事ですから・・・」

薫は顔をうつ向かせたまま、言った。
だから、薫は優也の表情が、一瞬悲しそうになった事に、気が付かなかった。

美優
（きっ気まずい）

二人が暗くなり、周りの空気も暗くなった事に、美優は堪えられなくなり、話を変えた。

美優
「そっそうだ！今日はもう遅いし、薫泊まっていったら？」

美優は何とか、話を変える事に成功した。

薫
「でも、迷惑じゃ」
美優
「ないよ。それに薫って一人暮らしでしょ？」
薫
「そうだけど、火渡君は」
優也
「別に良いぞ」

優也により逃げ道が無くなった。

薫

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

薫を泊めるミッションに、成功した！

美優

（ミッションって何！？）

さぁ？

とある公園、そこに二人の子供が居た。

『私達何が有っても友達だよね！』

『うん、だから絶対また会えるよ』

『本当？』

『嘘じゃないよ。だから約束して、ずっと笑顔でいるって』

『うん！約束する！だから絶対会いに来てね！約束だよ！』

『約束するよ。絶対会いに行くから。だからずっと笑顔でいてね、“美優ちゃん”は笑顔が似合うから』

『ずっと笑ってるから、だから約束だよ！“薫ちゃん”』

そこで薫は目が覚めた。

薫は今、美優の部屋で、美優と一緒に寝ていた。

薫は美優を起こさない様に、部屋から出て、静かに階段を降り、リ

ビングに来た。
そこでは優也がソファーで寝ていた。
他の部屋が物置になっていて、片付けるまでソファーで寝ると優也が言った。
美優は最後まで、一緒に寝ようと言っていたが、優也が、料理を作らなくて良いなら良いぞ、と言うと美優は即座に頭を下げ、謝った。

優也
「こんな時間にどうした」

薫
「・・・少し眠れなくて」

眠っていると、思っていた優也が起きている事に、驚いたがすぐに返事を返した。

優也
「何か悩みか」

優也は起き上がりながら聞いた。

優也
「俺で良いなら聞いてやるぞ」

薫はソファーに座り、話し始めた。

薫
「美優ちゃんは覚えていませんが、小さい頃に一度会ってるんです」

薫は懐かしげに話した。

薫
「私がまだ小さい頃、偶然通った公園で、女の子が虐められていたんです」
優也
「その子をお前が助けたのか」
薫
「はい。そしてその子が美優ちゃんでした」
優也
「・・・」

美優が虐められていた。
今の美優を見れば、そんな事があったとは思えなかった。

薫
「それから私と美優ちゃんは良く二人で遊ぶようになりました。だけど私は遠くに引っ越す事になったんです・・・」

一度そこで言葉を止めたが、すぐに話を進めた。

薫
「引っ越す前に美優ちゃんと、ある約束をしました。美優ちゃんはその約束を今まで守ってくれていました。けど私のせいでその約束も破られました」
優也
「・・・」

優也は何も言わず、薫の話を聞き続けた。

薫
「今までずっと自分の事を秘密にして、美優ちゃんが守り続けて来

た約束を破らせた私が・・・美優ちゃんの友達で良い筈が」
優也
「無い・・・か？」

ここで優也が言った。

薫
「はい」
優也
「お前は本当そう思ってるのか」
薫
「え」

優也の突然の言葉に薫は驚いた。

優也
「どんな約束をしたのか俺は分からないが、お前がその約束をどれだけ大事にしていたかは俺にも分かる」
薫
「・・・」
優也
「あいつがただ隠し事をされたぐらいで、お前を嫌いになると思うか？あいつはお前と同じでお前の事を、大事にしている。それはお前が大切な友達だからだ。そんな奴だから、お前はあいつを守りたいと思ったんだろ」
薫
「！」
優也
「お前はどうしたい」

優也の言葉に、悩んでいた事の答えが出た。

薫

「初めは一人のあの子を、守らないといけないと思っていました。けどずっと一緒に居てあの子の笑顔を見ている内に、この笑顔を守りたいと思う様になりました。それと同時にずっと友達でいたい、そう思いました。それは今でも変わりません」

薫は悩みが無くなり、すっきりとした表情になった。

薫

「貴方に言われなければ、ずっと悩み続けて居たかも知れません。ありがとうございます」

優也

「別に礼を言われる様な事はしてない。とにかくあいつとちゃんと話をしろよ」

薫

「ふふ」

優也

「どうした？」

薫

「いえ、何も」

そんな話をしていたら、美優がリビングに来た。

美優

「二人ともこんな時間に何してるの？」

美優は眠そうにしていた。

薫
「ごめん、起こしちゃった？」

薫は申し訳無さそうに言った。

美優
「ううん。ちょっと眠れなくて。そう言えば懐かしい夢見たよ」

優也
「懐かしい夢？」

美優
「うん。薫と初めて会った時の夢」

薫
「えっ」

美優
「懐かしいな～、薫急に引っ越しって言うからびっくりしたけど、
薫ちゃんと約束守ってくれたもんね」

薫は嬉しかった。
覚えていないと思っていた約束を、ちゃんと覚えていてくれた事に。

薫
「わっ私先寝るね」

薫は泣きそうになり、部屋に戻った。
その顔は泣きそうだが、嬉しそうだった。

美優
「薫どうしたんだろ？」

優也
「さぁな。お前も早く寝ろ」

美優
「あっうん。でも何してたの？」
優也
「秘密だ」
美優
「え～何で！」
優也
「何でもだ。とにかく早く寝ろ」
美優は不満気にリビングを出ようとした。
優也
「美優あいつの事大切にしろよ」
美優は優也の言葉に、驚いたがそれ以前に自分の名前を呼ばれた事に反応した。
美優
「優也！今私の名前呼んだよね！！」
優也
「気のせいだろ。ほら早く寝ろ」
優也は恥ずかしくなり、話を反らした。
美優
「もう一回呼んだら寝るよ！」
優也
「うるさい！俺はもう寝るぞ！」
美優
「ねぇもう一回、もう一回だけで良いから！」

優也
「あ～もう！美優！これで良いだろ」
美優
「もう一回！」
優也
「もう寝させてくれ！」

こうして三人の夜は更けていった。

ちなみに優也は美優に、何度も名前を呼ばされ、眠気が覚め、薫は嬉しすぎて寝る事が出来なかった。

第5話　約束（後書き）

漆黒
「やっと更新！」
美優
「お疲れ」
優也
「テストも終わったしな」
漆黒
「さて今回は薫が主役と言う事で、椿薫に来てもらいました！」
薫
「初めまして椿薫です。この度はこの小説を読んで頂きありがとうございました」
漆黒
「いや～薫はどっかの二人と違って礼儀正しいね」
優也
「お前がそう言う風に書いたんだろ」
美優
「私と全く扱い違うし」
漆黒
「美優はそう言うキャラだから」
美優
「薫～作者が虐める～」
薫
「よしよし」
優也
「よく抱きつくな。それでこれからはどうするんだ」
漆黒
「これからは普通の日常を書いて行って、その中でメインキャラを

出して行きたいと思っています。これから段々キャラが増えて行きますので、どうか次回も読んで下さい！」

美優
「作者殺す」

薫
「落ち着いて美優ちゃん！」

優也
「泣きながら恐い事言ってるな」

漆黒
「（逃亡）」

薫
「あっ逃げた」

美優
「待て！！！」

優也
「作者が逃げたからまた次回」

第６話　宿題

優也
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

漆黒
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

薫
「あの～大丈夫何ですか？」

優也
「ほっとけ」

漆黒

「あああああああああ！！」

薫

「・・・（汗）」

第6話　宿題

薫との誤解も解けた翌日。
美優が周りを巻き込んだ、ちょっとした、本当にちょっとした事件。

第6話　宿題

薫が泊まった翌朝、三人は朝食を食べていた。
優也の料理は、相変わらず絶品で、薫はずっと泊まろうかなと、思っていた。

美優
「ごちそうさま！相変わらず優也の料理は美味しいね」
優也
「お前も相変わらずだな。その食べる量」

優也は美優の体の何処に、あれだけの量が入るのか、疑問に思っていた。

薫
「美優ちゃん、口汚れてるよ」

薫は美優の口を、布巾で拭いた。

美優

「自分で出来るよ～」
優也
（本当にお母さんだな）
美優
「そうだ！今日、皆で遊びに行かない？」
薫に口を拭かれながら、美優は今日の予定を言った。
薫
「けど、美優ちゃん宿題終わったの？」
美優の口を吹き終わり、薫が言うと、美優の顔が真っ青になった。
美優
「終わってない」
薫は、やっぱりと思った。
優也
「宿題？」
薫
「夏休みの宿題です。美優ちゃんまだ終わってなくて、先生にも怒られたばかりで、明日までには、持ってくる様に言われてたんです」
薫が説明していると、美優が泣きついてきた。
美優
「薫！手伝って！」
美優は薫に助けを、頼んだ

薫
「自分でやらなきゃ駄目だよ」
優也
（お母さんはお母さんでも、しっかりしたお母さんだな）
優也の中の薫は、完全にお母さんキャラになっていた。

美優
「じゃあ！教えてくれるだけでも！」
薫
「それなら良いけど」
美優
「それじゃあ、早速教えて！」

こうして三人は、美優の部屋に上がって行った。

優也は美優の宿題を見て呆れた。
宿題はほとんど白紙で、答えを見たらほとんど間違えていた。
美優は全く勉強が出来なかった。
これだからゆとりは・・・

美優
（何今の・・・すごい腹立つ！）
優也
「美優、作者はほっといて早く宿題しろ」

優也はベットに座り、ジャンプを読んでくつろいでいた。

美優
「いやっ！何くつろいでるの！？優也も手伝ってよ！」
優也
「椿が入れば大丈夫だろ、頭良さそうだし・・・ハンター×〇ンターまた休みか」
薫
「そんな事ないですよ（照）」

薫は優也の言葉に少し照れた。

美優
「ハンター〇ンターはどうでも良いよ！いやっ私も気になるけど・・・あっそうか～優也は頭悪いから教えられないんだ～」

美優は優也を、煽ってやる気を出させ様とした。
だが優也は冷静に言い返した。

優也
「俺にも色々理由があるんだよ、あっワン〇ースも休みか」
美優
「色々理由って何？て言うか、いい加減ジャンプ読むの止めようよ！」

優也は仕方なく、ジャンプを読むのを止めた。
これだから美優は・・・

美優
「えっ私が悪いの？」
優也

「俺が勉強を教えない理由は」
美優
「えっスルー？」
優也
「かくかくしかじかだからだ」
美優
「あ～成る程、かくかくしかじかか～って！そんな説明で分かるか！！」

優也の適当な説明に、美優がキレた。

優也
「これで分からないのか？」
美優
「分かる訳ないじゃん！ねぇ薫？」
薫
「中学どころか、小学校も行った事無いんですか」

どうやら薫には伝わっていた様だった。

美優
「えっ何？私がおかしいの？て言うか優也、学校行った事無いの！」
優也
「言って無かったか？」
美優
「言って無いよ！」
薫
「あの、宿題しないの？」
美優
「何で行って無かったの？」

薫
「無視？」

薫は美優に無視され、少し涙目になった。

優也
「かくかくしかじかだ」

美優
「だから！それじゃあ分からないって！」

薫
「あの・・・」

薫は話しかけるが、二人は聞かない。

優也
「今は関係無いだろ」

美優
「あるよ！」

薫
「二人とも？少し黙りましょうか（黒笑）」

薫は笑顔だが、目が笑っていなかった。

優也・美優
「すみませんでした！！！」

薫の迫力に二人は、光の速さで土下座した。

夕食を食べ終わって、美優の部屋には、美優と優也しか居ない。
薫は流石に、二日も家を空けておく訳にはいかず、家に帰った。

美優
「やっと半分終わった～！」

美優は一人で、宿題をしていた。

美優
「ちょっと休憩しようかな？」

そう言いながら、優也の方を見た。

美優
「優也？」

優也は美優のベットで眠っていた。
昨日の夜、美優のせいで全然眠っていなかった。
美優のせいで・・・

美優
「そこ強調しないでよ」

このままでは、優也の料理が食べる事が出来ないと、美優は考えた。

美優
「考えてないから！勝手に何言ってるの！？」

大きい声出すと、優也が起きますよ。

美優
「あっはい」

美優は黙り、少し考えた。

美優
（そう言えば、何で優也って学校行ってないんだろ。四聖獣の事と関係あるのかな？）

そんな事を考えながら、優也の頬をつついた。

優也
「うっんん」
美優
（ヤバい！楽しい！）

宿題そっちのけで、優也の頬をつつき続けた。
すると、優也が美優の腕を掴んだ。

優也
「何してる」

優也は黒いオーラを出していた。

美優
「えっその」
優也
「こんな事してる場合なら、さっさと宿題しろ。さもないと、明日の朝飯抜きだぞ（黒笑）」

優也はさっきの薫の様な笑顔だった。

美優
「はい！頑張ります！」

優也が恐く、朝食抜きとまで言われた美優は、物凄い速さで宿題を書いていった。

そして翌日。
何とか宿題を終わらせた美優は、薫と学校に登校していた。

薫
「美優ちゃん、火渡君は着いてきてないの？」

美優
「うん。優也は着いてくるって言ってたんだけど、流石にそれは悪いかなって」

薫
「そう言えば、火渡君って学校行ってないんだよね」

美優
「うん。結局理由教えてくれなかったんだけどね」

薫
「火渡君ならその内教えてくれるよ」

美優
「そうだよね」

そうして二人は、学校に向かった。

その頃、優也は家で学校の事で考えていた。

優也
（学校か・・・椿がいるとはいえ、俺もいた方が良いか。一度学校に行ってみたかったし、ちょうど良いな）

優也は携帯を取り出し、誰かに電話した。

優也
「もしもし、俺だけど。ちょっと頼みたい事があるんだ」

そして、その日の夕食。

美優
「展開早くない？」

優也
「作者の実力の無さだ」

言い返せません。

優也
「美優、明日早く出かけるから、戸締まり頼んだぞ」

美優
「何で？」

優也
「明日分かる」

そして次の日の学校。

美優
「だから早いって」

薫
「作者が実力不足だから」

美優
「昨日も聞いたよ。あっ先生来た」

先生が来たので、二人は自分の席に戻った。

先生
「突然ですが、実は今日転校生がこのクラスに来ます」

転校生が来ると聞き、クラスはざわついた。

先生
「それじゃあ、入って来て下さい」

すると、教室に転校生が入って来た。

美優・薫
「えっ！」

その転校生は、女顔で紅い瞳の、美優と薫が良く知る人物だった。

先生
「自己紹介を」

先生に言われ、転校生は自己紹介を始めた。

優也
「火渡優也だ。よろしく」

その転校生とは、火渡優也だった。

美優・薫
（えぇぇぇぇぇぇぇ！！！！）

二人の叫び声が響いた（心の中に）。

第6話　宿題（後書き）

漆黒
「更新遅くて申し訳ございません！」
優也
「全くだな。何してた」
漆黒
「ネタは思いついたけど、文章にするのが難しくて」
美優
「まぁ、お疲れさま。そう言えば、これから新キャラ出てくるって言ってたけど、出てないじゃん」
漆黒
「とりあえず、優也が学校に通う様にしようとして、だから次回こそは出そうと思います！」
優也
「さて、ここまで読んでくれた読者の方ありがとう」
美優
「更新が少し遅くなって来ましたが、これからも宜しくお願いします！」
漆黒
「頑張って更新します！また次回も読んで下さい！ご感想待ってます！」

次回
第7話　友達（前編）
優也
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第7話　友達（前編）

少しづつ、少年少女達の物語が動き出す。

第7話　友達（前編）

美優と薫のクラスに転校して来た優也は、質問攻めにあい、それを美優と薫に助けられた。

美優
「で？どうやって転校して来たの？」

薫
「校長でも脅したんですか？」

結局質問攻めだった。
優也は、俺に質問するなと、何処かの仮面〇イダーの台詞を言いたかった。

優也
「秘密だ。それと椿、俺は転校するために、校長を脅したりしないぞ」

薫
「でも、火渡君ならやりそうな気が・・・」

優也
「お前は俺を何だと思ってる」

美優
「それより、何で秘密なの？」
優也
「別に良いだろ」

そんな話をしていると、授業が始まり、席に戻った。

優也
（そう言えば、教科書が無いんだった）

美優と薫とは、席が離れていて、教科書を借りる事が出来ない。
とは言え周りの誰かに借りるのは、流石に、少し気まずい。

？？？
「先生、火渡が教科書を持って無いんで、机をくっ付けて良いですか？」

優也がどうしようか考えていたら、隣の席の、生徒が先生に言った。

先生
「良いぞ」

先生の了承を得ると、その生徒は机を寄せ、教科書を優也に見せた。

優也
「悪いな。えっと・・・」
進
「俺は水野進って言うんだ。進で良いぜ。よろしく」

それから昼休み、優也と進は屋上で、昼食を食べていた。

進
「そう言えばさっき、神道と椿と話してたけど、知り合いか？」

進の質問に、薫にした時と同じ説明をした。
薫の事は妖怪の事は隠して、街で偶然知り合ったと言った。

優也
「所で、お前はクラスの奴と一緒に食べないのか？」

進
「あ～、皆食堂行っちゃったし、それに特別仲の良い友達居ないしな」

進は全く気にしていない様で、弁当を食べ始めた。

進
「所で火渡、お前神道と椿、どっち狙ってんだ」

進はニヤニヤしながら、優也に聞いた。

優也
「はぁ？」

優也は進が何を言っているか分からなかった。

進
「だから！どっちが好みなんだよ！」

優也

「それを聞いてどうするんだ？」

進

「どうもしねぇよ。ただ気になるんだよ」

優也は少し考えた。

そして答えた。

優也

「分からない」

進

「はぁ？そこは普通好きか、嫌いかで答える所だろ」

進は呆れながら言った。

優也

「好きだとか、そういうのは、俺には分からない・・・じゃあな」

優也はそう言うと、屋上から出て行った。

進

「あっおい待てよ」

すると、昼休みの終わりのチャイムが響いた。

進

「やべっ！まだ食べ終わってないのに！」

進は大急ぎで、弁当を食べて、教室へ走って行った。

チャイムが鳴る少し前、美優と薫はクラスの女子に優也の事で、質問されていた。

女子１
「二人は火渡君と、どういう関係なの？」
美優
「関係って言われても、ただの遠い親戚だよ」
女子１
「じゃあ、椿さんは？」
薫
「この間、偶然知り合っただけですよ」
女子１
「そうなんだ」

その話を聞いていたクラスの男子は、小さくガッツポーズをした。
薫が、学校でファンクラブが出来る程の人気だと、前に書いたが、実は美優も、一部の男子に人気がある。
薫と一緒にいるから、少し目立たないが、美優を密かに狙っている生徒も多い。
だから二人が、優也と、付き合っていないと知り喜んだ。
優也は女顔だが、見方によっては、カッコイイ部類に入る。
だから男子はもし優也が、二人のどちらかと付き合っていたら勝ち目が無いと、思った。
すると、昼休みが終わるチャイムが鳴り、女子生徒は自分の席に戻った。

薫
「私も戻るね」

薫が席に戻ろうとした時、進が教室に帰って来た。
その後ろから、優也が入って来た。
何故か二人は汗だくだった。

薫
「あの・・・何があったんですか？」

薫は二人が、汗だくの理由が気になった。

優也
「こいつが後ろから走って来たから・・・ハァ・・・俺もつい・・・」

進
「ハァハァ・・・そしたら・・・何か・・・ハァハァ・・・競争に・・・ハァ・・・なってて・・・こんな汗だくに・・・」

今は夏休みが終わったばかりの９月、だからまだ気温も高い。
そんな日に、屋上から全力で走って来たから、進は息も絶え絶えだった。
優也も進程ではないが、疲れていた。

進
「とっ・・・とにかく・・・ハァ・・・俺の方が・・・ハァハァ・・・は・・・速かったから・・・俺の勝ちだな・・・ハァハァ」

何の勝負だと、薫が思っていると、優也が言い返した。

優也
「待て水野・・・誰が先に教室に着いたら・・・勝ちって言った。
これは・・・あれだ」

進
「な・・・何だよ」
優也
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・たっ体力勝負だ」
進
「今考えたろ！黙ってる時間長かったもんな！！ゲホッゲホ」
薫
「ちょっ！大丈夫ですか！」

薫は咳き込み始めた、進が心配になり、駆け寄った。

薫
「そんなに、無理しなくても」
進
「いや・・・無理してでも・・・ゲホ・・・ツッコミをしなくちゃ・・・いけない気がして・・・」

それは、進のツッコミとしての本能だった。

進
「何だよ！？本能って！」
先生
「お前ら早く席に戻れ！」

いつの間にか居た、先生に怒られ、三人は自分の席に戻った。

美優はそれを見て、少し笑っていた。

その日の放課後。
優也と進は二人で、帰っていた。
美優は先生に呼び出され、優也と薫に先に帰る様に言った。

優也
「何で一緒に帰ってるんだ？」
進
「そりゃ、俺の家がこっちだから」
優也
「そうか」

二人で帰っているが、殆ど会話が無い。話しても、今見たいに、すぐ会話が終わる。

進
（きっ気まずい（汗）なっ何か話した方が良いのか）
優也
「水野・・・一つ聞いて良いか」
進
「なっ何だよ」

急に優也から、聞きたい事があると言われ、進は驚いた。

優也
「お前は何で俺と一緒に居る」
進
「はぁ？何だよ急に」
優也
「良いから答えろ」

進は少し考えた。
すると進は話し始めた。

進
「まぁ仲の良い友達居ないし、何となく火渡と話してると、楽しいからかな」
優也
「話って・・・少ししか話してないぞ」
進
「いやっその少しの話で何となく、楽しく感じたんだよ」
優也
「それだけか？」
進
「それだけかな」

進が思った事を、真剣に言っている事は、優也も分かった。
だからこそ、今日会ったばかりの相手にも、気さくに話せる進が、何で一緒に居るのか、優也には分からなかった。

進
「後はそうだな」

優也が考えていると、進がまた話し出した。

進
「火渡が俺の友達だからかな」
優也
「！・・・何だよそれ、馬鹿らしい」
進
「何だよ、嫌だったか」

優也
「さぁな」

優也は進に顔が見えない様にした。

進
「あっ！忘れてた！」
優也
「どっどうした」
進
「宿題机の中に入れっぱなしだった」
優也
「そう言えば、あったな」
進
「悪い！火渡先行っててくれ！」

そう言うと進は、学校へ走って行った。
優也は進の後ろ姿を見ながら呟いた。

優也
「友達・・・か。初めてだな。あんな事言われたのは」

先生の話が終わり、美優は教室に荷物を取りに戻っていた。

美優
「はぁ～、宿題出すの遅いからって、話し長すぎだよあの先生」

美優は夏休みの宿題を出すのが遅いと、先生に怒れていた。

美優
「って！もうこんな時間。早く帰らないと優也に怒られる！」

美優が教室に着くと、そこには誰かが居た。

美優
「あれって」

すると、その誰かは美優に気づいた。

進
「あれ？神道？」
美優
「水野？」

進が美優を、家まで送って行くと言い、二人は一緒に帰って居た。

美優
「優也と一緒に帰ってたんじゃないの？」
進
「学校まで付き合わせるのは、悪いから先に帰っててもらった」
美優
「・・・水野って優也と仲良いよね」
進
「そう見える？」
美優
「うん」

進
「でもなぁ、俺が一方的に話してるだけで、火渡の奴全然喋らないしな」
美優
「多分優也、恥ずかしかったんじゃない？」
進
「恥ずかしい？あいつが？」

美優は進になら、優也の事を話しても良いと思った。

美優
「優也ね、今まで学校に行った事無いんだ」
進
「え」
美優
「だから、どう接したら良いか、分からないんだと思うよ・・・多分」
進
「多分かよ」

進はもっと頑張ろうと、考えていた時、一人の男とぶつかった。

進
「あっすいません・・・！」

進が謝り、その男の顔を見た。
その男の顔は、鼠の様な顔だった。
すると、美優と進の周りを、鼠の顔をした男達が、囲んだ。

進

「なっ何だ！お前ら！」

進は美優を庇うように前に出た。
すると、リーダーの様な男が話し始めた。

？？？

「最近一緒に居たガキが、いなくなる時を、待ってたぜ」

進

「だから何なんだよ！お前ら！」

突然人間じゃない、男達が現れ、進は焦っていた。

？？？

「そうだなぁ、どうせ死ぬ前にこの俺の名前を、覚えてからの方が良いよな」

死ぬと言う言葉に、進は鳥肌が立った。
そんな進に構わず、男は自分の名前を言った。

旧鼠

「旧鼠、これからは夜の帝王だ」

第7話　友達（前編）（後書き）

優也
「またぬらりひょんの孫のキャラか」
美優
「しかも旧鼠」
漆黒
「いや～、だって妖怪って言えば、ぬらりひょんの孫しか思い付かなくてさぁ～」
優也
「まぁどうでも良いけどな」
美優
「また次回も見て下さい！」
漆黒
「今回は優也！任せ・・・「ちょっと待て！！！」あっ進居たんだ」
進
「あっ居たんだ・・・じゃない！ずっと待ってたのに、何勝手に終わろうとしてんだよ！」
漆黒
「はい、水野進でした～」
進
「適当！？何、俺の事嫌い？」
優也
「水野、細かい事で一々うるさい。だからお前は進（しん）じゃなくて進（すすむ）なんだよ」
美優
「進って書いてたら、皆しんって思うのに、何で、すすむ？読者の皆さんの事も考えてよ！」
進（すすむ）

「お前ら！今すぐ全ての進（すすむ）さんに謝れ（怒）！て言うか何で名前の横に、すすむって書いてあるんだ？！」

漆黒

「はい！優也よろしく！」

進（すすむ）

「あっおい！」

次回

第８話　友達（後編）

優也

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

進（すすむ）

「そこは初登場の俺が言う所だろ！！」

第8話　友達（後編）

突然現れた旧鼠。
優也も薫も居ない状況で、美優と進はどうするのか。

第8話　友達（後編）

進は少しづつ冷静になり、この状況をどうするか考えた。

進
（落ち着け！こいつらが何なのかより、今はどうやって逃げるかが先だ。こいつが言ってた、神道と最近一緒に居たガキって、多分火渡の事だ。その話が今出るって事は・・・）

進はそこまで考えると、横目で美優を見た。

進
（狙われてるのは、神道か！何とかして守らないと・・・）

すると美優が前に出た。

美優
「狙いは私でしょ。だから水野には手を出さないで」

旧鼠
「ほぉ」

進
「神道!?お前何言って!」

急に美優が進だけを、見逃して欲しいと言う様な事を言った。
進は驚き、美優を止めようとした。

進
「こいつらに着いていったら、殺されるぞ!!」

美優
「だって・・・このままじゃ水野まで殺されるんだよ!」

美優は自分よりも、進の事だけを心配していた。

美優
「私に関わって・・・それで誰かが死ぬ所なんて見たくないの!大丈夫、私怖く無いから、だからお願い」

美優の言葉に、進は何も言えなくなった。

旧鼠
「坊主、お前は見逃してやる。このお嬢さんに感謝するんだな。ほら来な」

旧鼠がそう言うと、美優は旧鼠に近づいて行った。
進は美優が震えているのに気づいた。

進
(震えてる。本当は怖いのに、強がって・・・良いのか俺は!自分だけ助かって!それで神道が死ぬんだぞ!)

美優は旧鼠の前まで来た。
旧鼠の手が美優に伸びる。

美優
「！」

美優は恐怖で目をつぶった。
その時

進
「！・・・あっ！！火渡！」

進が旧鼠の後ろを指差し、叫んだ。

美優
「えっ！」
旧鼠
「何！？」

美優は驚き、目を開いた。
旧鼠とその部下は慌てて、進が指差した方を見た。
そこには誰も居なかった。

進
「今だ！！」
美優
「きゃっ！」

進は美優の手を掴み、走り出した。

部下1
「あのガキ！逃げやがった」
旧鼠
「何してやがる！早く追え！」

旧鼠が命令すると、部下の鼠達は二人を追い始めた。

美優
「水野？！何で！」
進
「うるさい！！黙って走れ！」
美優
「でも・・・あのままだったら水野は無事に済んだんだよ！」

進が何故、危険を犯してまで自分を助けるのか分からなかった。
進はただの一般人で、優也や薫の様な力も無いのに・・・

進
「俺にお前が殺されるのを、黙って見とけって言うのか！！」
美優
「！」

進の言葉に、今度は美優が何も言えなくなった。

進
「それにな！怖がってる女の子を見捨てるなんて事、出来るかよ！！」

進はそう言うと、美優の手を強く握り締めた。

その頃優也は、家で料理を作って、美優を待って居た。

優也
「遅い・・・こんな時にあいつ携帯忘れてるし」

優也は中々帰って来ない美優の携帯に、電話しようかと思ったが、美優は携帯をテーブルの上に、置きっぱなしにしており電話する事が出来なかった。

優也
「そうだ」

優也は携帯で誰かに電話をし始めた。

優也
「もしもし、椿か」

その相手は薫だった。
前に薫が家に泊まった時に、番号を教えて貰っていた。

薫
『火渡君?どうかしたんですか?』
優也
「美優がまだ帰って来て無いんだが、お前と一緒に居ないか?」
薫
『まだ帰って無いんですか!?』
優也
「・・・うるさい」

薫
『あっ！すみません』

電話越しに、薫が大声で叫び、優也は耳を押さえた。
すると、家の電話が鳴った。

優也
「悪い、少しこのままで待っててくれ」
薫
『あっはい』

優也は携帯を切らずに、家の電話に出た。

優也
「もしもし」
美優
『優也！』

電話の相手は、話の中心の美優だった。

優也
「美優？お前今何処に」
美優
『今、水野と一緒に居て！それで妖怪に追われてるの！！』
優也
「何！？」

美優と進が妖怪に、追われていると言う事に、優也は驚いた。

優也

「落ち着け！とにかく今は逃げろ」
美優
『うっうん』

優也は美優に指示すると、薫に今の状況を説明した。

優也
「椿、美優と水野が妖怪に追われている」
薫
『えっ！！そっそんな！』

美優が妖怪に追われていると聞き、薫は慌てた。

優也
「落ち着け。今外にいるか？」
薫
『はっはい』
優也
「今から二人の場所を聞き出す。外に居るなら、先に二人を見つけてくれ」
薫
『分かりました』

薫は冷静さを取り戻した。
薫が冷静さを取り戻した事を、確認し優也は携帯を受話器に近づけた。

優也
「美優、今何処に居る」

薫にも美優の声が聞こえる様にして、現在地を聞いた。

美優
『えっ！いっ今、がっこ『こっちだ！！』きゃ！』

優也
「美優！」

進の声が聞こえると、美優の小さな悲鳴と共に、電話が切れた。

薫
『美優ちゃんの居場所が分かりました』

優也
「ああ、学校だ」

最後までは聞こえなかったが、二人が学校にいると、分かった。

薫
『ここから学校まで、私なら直ぐに着きます』

優也
「俺も直ぐに行く。先行っててくれ」

薫
『分かってます』

薫はそう言うと、電話を切った。
優也は刀と黒いコートを持ち、家を出た。
優也は、進が言っていた事を思い出した。

優也
（友達か・・・）

優也は刀を強く握り締め、屋根を駆けていった。

部下1
「あいつら何処行った！」
部下2
「あのガキ！逃げ足速すぎる！」

周りは、旧鼠の部下達が二人を探し回っていた。
美優と進は木の影に隠れていた。

美優
「ごめん・・・携帯落としちゃった」
進
「良いって、俺も急に引っ張ったし」

美優は進の携帯を借り、電話をしていたが、逃げている途中で、急に曲がった為、携帯を落としてしまった。

進
「火渡、ここに来るんだな」
美優
「うん、多分薫も」
進
「そっか・・・あいつら、あんなのと戦ってたんだな」
美優
「ごめん、巻き込んで」
進
「巻き込まれたなんて思って無いって、勝手に首突っ込んだだけだ

から」

美優はさっき進に言った事で、考えていた。
『自分のせいで誰かが死ぬのは見たくない』
進を納得させる為にも言ったが、それは自分の本心だった。
だが、よく考えれば自分は優也と薫を巻き込み、何時死んでもおかしくない様な戦いをさせている。

美優
（私のせいで皆を・・・）
進
「神道？どうかしたか？」
美優
「あっ何でも無いよ！」

考え事をしていた美優は、進に話しかけられ、少し慌てた。

旧鼠
「見つけたぜ」

その時、旧鼠が二人を見つけた。

美優
「！」
進
「くそ！」

旧鼠から逃げようと、二人は走ったが、旧鼠の部下に周りを囲まれた。

旧鼠
「せっかく見逃してやるって言ったのによぉ」

後ろから、旧鼠が近づいて来た。

旧鼠
「調子に乗ってんじゃねえぞ！！」

進
「っ！！」

美優
「水野！」

進は旧鼠に顔を殴られ、倒れこんだ。

旧鼠
「呆気ねぇな。所詮は人間のガキ・・・！」

美優
「みっ水野」

進は立ち上がった。
人間よりも身体能力が高い妖怪に、殴られたら、普通の人間である進では、ひとたまりも無い。
それでも進は立ち上がった。
自分の為に命を投げ出そうとしている、少女の為に。

旧鼠
「このガキ、てめえら！殺れ！」

旧鼠が周りの部下に命令すると、部下達は進に襲い掛かった。

美優
「水野！逃げて！！」

だが進は逃げずに、美優の前に立ち続けた。

美優
「水野ぉ！！」

鼠達の爪が進に襲い掛かった。

部下１
「ぎゃぁぁぁ！？」
旧鼠
「何！？」

その爪が進に届く事は無かった。
誰かに腕が切り落とされていた。

美優
「薫！」

その人物は、薫だった。

薫
「遅くなりました」

薫は鉄扇を構え、臨戦態勢に入った。

旧鼠
「はっ、粋がんなよ。女一人でこの数を相手に出来るとでも・・・」

部下達
「ぐぎゃぁぁぁ！！！！」

すると、部下の数人が吹き飛んだ。

旧鼠
「なっ何だ?!」

部下達が、吹き飛んだ事に、旧鼠と部下達は慌てた。

優也
「一人で駄目なら、二人ならどうだ?」

そこには、紅い瞳に、黒い刀を持った少年、火渡優也が居た。

美優
「優也！」

進
「火渡」

二人は薫に続き、優也が来たことに安心した。
だが、旧鼠にとっては予想外の出来事だった。

旧鼠
「クソッタレ！！二人になったからって、勝てると思ってんのか！
殺れ！！」

部下達は、優也と薫に向かって行った。

美優

「優也！薫！」
薫
「大丈夫。二人は隠れてて」
美優
「でも！」
優也
「美優」

心配を隠せない美優に、優也は言った。

優也
「安心しろ、俺達は死なない」

その言葉に美優は、心配が安心に変わっていく様な感覚だった。

進
「神道」
美優
「うん」

進に呼ばれ、二人はそこから離れた場所に隠れ、優也と薫の戦いを見守った。
二人が隠れた事を、確認し、薫は鼠達に向かって行った。
優也もそれを見て、安心した。

部下2
「余所見してんじゃねぇぞ！」

鼠達が優也に向かって、鋭く尖った爪を降り下ろした。
だが、その場所から優也が消えた。

一瞬で優也は鼠達の、背後に回り込んでいた。

優也
「遅いな」

優也がそう言った瞬間、鼠達の体から血が吹き出た。
優也は攻撃を避け、目にも止まらぬ速さで、鼠達を数回斬っていた。
一方薫は、優也の様に、何人も一気に倒せないが、一人ずつ確実に倒していった。

薫
「くっ！」

だが、敵の数が多く、今まで多くの敵を一度に相手をした事が無い薫は苦戦していた。

薫
（多すぎる・・・あれを使うか。いや、あれは攻撃様じゃ無いし、使うまでに時間が掛かる。少しでも時間を稼げれば・・・）
部下４
「もらったぁ！！」

薫は打開策を、考えていた為、反応が少し遅れてしまった。

薫
（しまった！）
美優
「薫！」

鋭く尖った爪が、薫に・・・

優也
「“炎鳥”」

ドゴォォォォン！！！！！

届く事は無かった。

部下4
「ぐはぁぁぁぁぁ！！！！！」

薫
「！」

炎の鳥が直撃し、鼠を吹き飛ばした。

優也
「大丈夫か？」

薫
「はっはい」

刀に少し炎を灯しながら、優也が駆け寄って来た。
炎の鳥は優也が、放った様だ。

優也
「別に隠れてても良いんだぞ」

薫
「なっ！ふざけないで下さい！私も戦います！」

優也は薫を挑発し、薫はそれに乗った。

優也
「そうか、なら行くぞ」

薫
「はい！」

二人は鼠の群れに向かって行った。
二人は、背中合わせの様な形で戦っていた。
すると薫は、違和感を感じた。

薫
（何だろう？さっきよりずっと楽に感じる）

さっきまでは、どれだけ倒しても、絶え間無く襲い掛かって来た鼠達が、今は襲い掛かって来ない。薫は不思議に思い、優也の方を横目で見た。

薫
（火渡君の方に集まってる？）

周りを囲んで居た、鼠達は徐々に優也の方に集まって居た。

薫
（凄い・・・あれだけの相手を一人で・・・）

優也は薫より多い相手を、全く隙を見せずに、倒していた。

薫
（やっぱり、初めに戦った時も思ったけど、戦いなれてる）

すると、優也の刀が薫の顔の横を、横切った。
刀の先には、鼠が居た。

優也
「油断するな」
薫
「すっすみません」

薫は二度も助けられ、自分が足手まといの様で、少し悔しかった。

優也
「にしても、次から次へと、きりがないな」

優也が言うように、どれだけ倒しても、沸いて出てくる。

薫
（今なら出来るかも）

薫はさっき出来なかった事をしようとし、優也に聞いた。

薫
「・・・火渡君、一撃でこの数を倒せますか？」
優也
「・・・ああ」
薫
「そうですか・・・それじゃあ後は、任せます」

すると薫の周りに冷気が漂った。

旧鼠
「！あの女を殺せ！！」

旧鼠は薫が何かしようとしている事に気付き、命令した。
部下達は命令を聞き、薫に襲い掛かろうとしたが・・・

薫
「“氷華”」

遅かった。

薫
「“桜”」

薫が鉄扇を振ると、吹雪の様に鼠達に襲い掛かった。
すると、鼠達の下半身が凍り、身動きをとれなくした。

進
「さむっ！」
美優
「けど、後ろに居て良かった～。寒いけど」

優也と薫の後ろでは、美優と進が寒がっていた。

部下5
「何だこの氷！壊れねぇ！」

鼠達は氷を、砕こうとしたが、氷は砕けなかった。

薫

「無駄ですよ。桜は時期が来るまで、簡単に散りはしません」

すると、優也は刀に炎を灯した。

優也
「俺がお前の言う時期か？」

薫
「そうなりますね」

薫は少し笑いながら言った。

優也
「そうか。なら、さっさと散らすとするか」

優也は刀の炎を、更に燃え上がらせ、刀を振った。

優也
“ 鳳凰炎舞 ”」

炎は大きな渦になり、鼠達を呑み込んでいった。

部下達
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

鼠達は余りもの熱いの炎に、断末魔を上げる。
そして、鼠達は体中に火傷を負い、気を失った。

旧鼠
「ば・・・馬鹿な・・・」

自分の部下達が、一撃で倒された事に、旧鼠は呆然とした。

優也
「残りはお前だけだな」

呆然としている旧鼠に、優也は近付いて行った。

旧鼠
「なっ何で・・・何でこんな力があるのに、あんなガキ共を守ろうとするんだ!!」

旧鼠は、優也が美優達を守ろうとする理由が分からなかった。
美優達を守っても、優也には何も利益が無いのに・・・

優也
「そうだな、美優は守るって約束をしたしな。水野は・・・」

優也は一度、進を見た。
そしてもう一度、旧鼠を見た。

優也
「友達・・・だからな。」

進
「火渡!お前・・・」

優也がまさか自分を友達と言ってくれるとは、思っていなかった進は、目を見開き、驚いた。

優也
「あいつを助ける理由なんてそれだけで十分だ」

旧鼠
「ふっふざけんな!!そんな理由で・・・」

旧鼠は言い切らず、優也の黒い刀、黒い服、そして紅い瞳を見て、何処かで聞いた事がある格好だと思った。

旧鼠
（黒い刀に、黒い服、それに・・・紅い瞳・・・！）

旧鼠はそこまで考えると、何かを思い出した。

旧鼠
「ま・・・まさか・・・お前・・・」

すると旧鼠は、顔を青ざめ、冷や汗を欠き始めた。

優也
「・・・悪いが・・・お前の話に付き合うつもりは無い」

優也は再び刀に炎を、燃え上がらせた。

旧鼠
「ひぃぃぃぃ!!!!」

旧鼠はそれを見て、情けない悲鳴を上げた。

優也
「“鳳凰激”」

炎が旧鼠を包み込んだ。

優也が初めて美優と出会った時に、戦った妖怪と同じで、旧鼠は悲鳴すら上げる事が出来なかった。

優也
「俺がいる限り、こいつらには、指一本触れさせはしない」

優也は炎に呑まれる旧鼠に言い放った。

優也
「錬獄の炎に呑まれて消えろ」

炎が晴れると、そこに居たのは呻き声を上げる、全身黒焦げの旧鼠だった。

美優
「優也！薫！」

美優と進は戦いが終わった事を確認し、二人に駆け寄った。すると美優は、薫に抱き付いた。

薫
「みっ美優ちゃん！？」

突然の事に、薫は驚いた。

進
「神道？どうしたんだよ」

美優の行動が分からず、進が言った。

美優
「ごめんね・・・私のせいで皆巻き込んで・・・」
薫
「美優ちゃん?」
美優の声は、小さかったが、優也達には聞こえていた。
美優
「薫も水野も・・・殺されかけて・・・優也だって・・・何時死ぬか分からない様な戦いをさせて・・・」
美優はさっきまで溜め込んでいた事を、吐き出した。
薫
「美優ちゃん!私は自分の意志で美優ちゃんを守ろうとしたんだよ!」
進
「俺だって勝手に巻き込まれただけだって、さっき言っただろ!」
美優
「それでも!私のせいって事には代わりないでしょ!」
二人は自分が勝手に巻き込まれたと言ったが、美優の言葉に黙ってしまった。
薫は美優がそんな事を、溜め込んでいた事を思っていなく、気付いてあげれなかった自分を呪った。
優也
「美優こっち向け」
優也が美優に、自分の方に顔を向ける様に言った。

美優
「優也？・・・っ！」

美優が顔を向けた瞬間、額に激痛が走った。
優也がデコピンをしていた。
しかも、地味にかなり痛い。

美優
「～～～～！！！」
薫
「ちょっ！火渡君！？」

痛みで悶えている美優を抱き寄せ、薫は優也を睨んだ。

優也
「美優、お前は確かに俺達を巻き込んだかも知れない」

優也は薫の睨みを無視して話した。

優也
「だがな、それを自分のせいにするのは違うぞ」
美優
「えっ」

美優は額を押さえながら、優也を見た。

優也
「椿はお前の友達だろ。なら、あいつがお前を助けるのは当たり前・・・そうだろ？椿」

薫
「ふふふ、ええ、そうだよ、美優ちゃん」
優也の言葉に薫は、微笑みながら言った。
美優
「でも水野は」
優也
「水野も、もう友達みたいなものだろ。なあ水野」
進
「えっ！ああ～、・・・決まってんだろ！そんなの！」
急に話を振られ、焦ったが、勢いで言った。
優也
「二人は友達、それじゃあ俺は？」
美優
「・・・家族」
優也
「そうだろ」
美優の答えに、優也は微笑んだ。
優也
「お前は自分だけで、抱え込みすぎなんだよ。もう少し俺達を頼れ」
美優
「／／／」
美優は優也の微笑みを見て、顔が赤くなった。
それと、美優の抱えていた物が消えていく様な気がした。

薫
「美優ちゃん?どうしたの?」
美優
「ふぇ!?なっ何でも無いよ／／／!!そっそうだ薫!返り血凄いよ!早くお風呂に入った方が良いよ／／／」

顔が赤い事を隠す様に、話を反らした。
実際、美優が言う程ではないが、薫は鼠達の返り血が顔や服に付いていた。

薫
「あっそう言えば、火渡君は・・・大丈夫ですね」

薫は自分よりも敵を、斬っていた優也は自分よりも、返り血が付いていると、思って優也を見たが、全く付いていなかった。

優也
「とにかく、帰った方が良いな。周りはこんなだしな」
美優・薫・進
「周り?」

三人は周りを見渡した。
そこは、優也の炎がまだ少し残っていて、辺りはかなり焼けていた。

美優
「これは、誰か来る前に・・・」
進
「逃げた方が・・・」
薫

「良いですね」
優也
「そうだな」
美優・薫・進
「（優也）（火渡君）（お前）が（（やったんでしょ））（やったんだろ）！！」

三人が優也にツッコムと、走り出した。
それを見て、優也も走り出した。
その様子を見ていた、人影に気付かず・・・

？？？
「妖気を感じて、見に来てみれば、珍しい物を見れましたね」

その人物が手をかざすと、そこの空間に人一人分の裂け目が出来た。

？？？
「あの炎は朱雀の炎。面白くなりそうですね」

その人物はその裂け目に入って行き、入り終わるとその裂け目は閉じていった。

ちなみに、翌日、学校に警察が来ていて、優也達は、ばれない様に願っていた。

第8話　友達（後編）（後書き）

漆黒
「進との出会い編も終わったと言う事で、ここで進から自己紹介！」
進
「初めましては、ちょっと遅いけど、初めまして、水野進です！」
優也
「この話の中じゃあ、初めての一般人だな」
漆黒
「学校で優也の友達を出すなら、普通で地味の方が良いと思って」
進
「地味って言うな！！」
優也
「とにかく、前編に比べて、後編長くないか」
漆黒
「すみません。後編は進が一般人ながらに頑張るのを、書きたくて」
優也
「それは言いが、俺が美優に言った言葉は」
漆黒
「ホントすんません！あれが俺の精一杯なんです！」
優也
「まぁ良い。水野、今回は任せた」
進
「えっ良いのか？」
優也
「前は言えなかっただろ」
進
「よっしゃ！任せとけ！」

次回

第９話　拳と幻影（前編）

進

「黒と白が出会う時、物語がはじまりゅっ！」

優也

「こいつ噛んだぞ。最後の最後に駄目な奴だな」

漆黒

「出番減らすか」

進

「それだけは勘弁して下さい！！！」

第9話　拳と幻影（前編）

優也達が、旧鼠を倒した日の、とある路地裏。
そこには、茶髪のつんつん頭で、長身の青年が居た。
その青年の足下には、妖怪が倒れていた。
すると、空間に裂け目が現れ、一人の藍色の長髪の青年が出てきた。

???
「早速やってますね」

長髪の青年は、呆れながら言った。

???
「おめえは、たまにはまともに出てこれねぇのか？」

長身の青年は、うんざりした様に言った。

???
「誰かに後を、付けられるよりは良いでしょう。それで？どうでした？その妖怪」
???
「どうでしたか、じゃねぇよ。お前が見付けて来る奴等、全部話になりやしねぇ」

長身の青年はうんざりしたまま、言った。

???
「そうですか・・・ですが、今回はかなりの当たりですよ」
???

「ホントかよ。次、外れだったらおめえに、相手してもらうぜ」
長身の青年は、長髪の青年に指差しながら言った。
???
「大丈夫ですよ。何と言っても、あの四聖獣の朱雀ですからね」
???
「四聖獣？」
四聖獣と言う言葉に、長身の青年は反応した。
???
「それってよぉ、世界の結界を守ってる奴じゃねぇのか？何でそんな大物が、こんな所にいんだよ？」
???
「ここに居る理由は分かりません。ちなみに、何処に居るのかも分かりません」
はっきりと言われ、長身の青年は、オイオイと、声を漏らした。
???
「いくら強い奴を見っけてもよぉ、会えなけりゃ「会えますよ」はぁ？」
長髪の青年は、はっきり会えると言ってのけた。
???
「お忘れですか？僕は空間だけではなく、幻術も操る事が出来るんですよ。その能力を使えば、探し人くらい直ぐに見付けられます」
???

「そういやそうだったなぁ」

長髪の青年は、自信満々に言った。

???

「それじゃあ俺は、そいつが見つかるまで待つとするか」

???

「この妖怪は僕が始末しますから、先に帰っていて下さい」

???

「すまねぇな」

長身の青年は、路地裏から出て行った。

???

「四聖獣の朱雀・・・強ければ良いな」

長身の青年は、楽しそうに呟いた。

第9話　拳と幻影（前編）

旧鼠との戦いが終わり、数日が過ぎた。

旧鼠との事は、ばれてはいないようで、美優達は普通の学校生活を送っていた。

薫

「美優ちゃん、お昼食べよ」

美優
「うん！それじゃあ、優也達も・・・あれ？優也は？」

優也達と一緒に昼食を食べようとしたが、居るのは進だけで、優也は居なかった。

美優
「進～、優也は？」

進
「あ～、あいつなら何か、生徒会室に呼ばれてるとか言ってたな」

美優が進を、下の名前で呼んでいる事に、クラスの男子達が反応した。
旧鼠を倒した日、美優が、せっかく友達になったから、名前で呼ぼうと提案した。
進と薫は直ぐに、順応したが、優也は未だに、二人を名前で呼んでいない。
ちなみに、薫は美優以外には、まだ敬語で話している。
男子達は進に殺気を込めた視線を送った。

進
（さっ殺気が・・・）

薫
「どうかしましたか？進君？」

男子達
（“進君”だとぉぉぉぉぉぉぉぉぉ（怒）！？）

美優に続き、薫まで進の名前を呼んだ事により、男子達はさらに殺気を強めた。

進
「なっ何でも無い・・・（冷や汗）」

殺気が強まった事に気付いた進は、冷や汗を掻いた。

美優
「それにしても、何で生徒会室に呼ばれたんだろ？」

優也は入学してから、何も問題を起こしていない。
それなのに、何故か生徒会室に呼ばれていた。

進
「噂じゃあ、あの生徒会室って誰も居ないらしいぞ」

薫
「私も聞いた事があります。生徒会室は誰かが出入りした所を、誰も見たことが無くて、黒いカーテンで外から見えなくなってるんですよね」

美優
「余計、優也が呼ばれた理由が分からなくなって来た」

進
「優也が戻って来たら聞いたら良いだろ」

美優
「それもそうだね」

生徒会室の謎が、分からぬまま、三人は昼食を食べながら優也を待った。
進は周りの男子達の殺気を受けながら・・・

その頃、優也は生徒会室から教室に戻っていた。
何故か、少し疲れていた。

優也
「何で・・・あいつがこんな所に居るんだ・・・しかも生徒会長って・・・」

そんな事を呟き、ふらつきながら、曲がり角を曲がった。
すると、長髪の青年にぶつかり、ふらついていた優也は尻餅を付いた。

???
「すみません」

その長髪の青年は優也に手を差し伸べた。

優也
「あっすいません」

優也はお礼を言いながら、その手を掴み立ち上がった。

???
「いえ、こちらこそ」

長髪の青年はそう言うと、廊下を歩いて行った。
優也も教室に戻って行った。
長髪の青年は立ち止まり、優也の後ろ姿を見て、ニヤリと笑った。

その日の放課後。
美優達は帰りながら、優也に生徒会室の事を聞き出そうとしていた。
だが優也が何故か疲れているのと、どうしても話したくないと言う事で断念した。
すると、美優が優也の首に何か有るのに気付いた。

美優
「優也、首どうしたの？変な跡があるけど」

薫
「変な跡？優也君、ちょっと見せて下さい」

薫が優也の首の跡を見ようとしたが、優也が隠した。

優也
「蚊に咬まれただけだ」

美優
「そうかな～」

進
「どんな跡だったんだ？」

美優
「蚊に咬まれたって言うより「良いからさっさと帰るぞ」」

優也は美優の言葉を遮り、先々歩いて行った。

薫
「美優ちゃん、私家こっちだから」

進
「俺もこっちだ」

美優
「そっか、じゃあまた明日ね～。薫！後、進」

進
「俺はついでかよ！」
薫
「うん。また明日」

進は不満に思いながらも、薫と帰って行った。

優也
「美優、先行くぞ」
美優
「あっ！待ってよ！」

美優は優也を追いかけながら、優也の首の跡の事を思い出した。
その優也の首の跡は、“吸血鬼”に咬まれた様な跡だった。

その頃、進と薫は不良に絡まれていた。

不良1
「そんな冴えない彼氏と一緒に居ないで、俺達と一緒に遊ばない？」

と、在り来たりな不良、三人に絡まれていた。

薫
「貴方達と遊んでる暇は無いので、進君行きましょう」

薫は不良達の横を通り過ぎ様とした。
だが、薫の腕を不良が掴んだ。

薫
「っ！離してください！」
不良１
「優しくしてやったら、調子乗ってんじゃねぇぞ！」

不良は無理矢理、薫を連れていこうとした。

進
「おい！お前ら！」
不良１
「いでててててて！！！！」

進が不良を止めようとした時、茶髪のつんつん頭で、長身の青年が不良の腕を捻り上げた。

？？？
「男が寄って集って、恥ずかしくねぇのか」
不良１
「うっせぇ！！手ぇ離しやがれ！」

腕を掴まれていた不良は、もう片方の手で殴りかかった。

進
「危ない！」

不良のパンチは青年の顔面に直撃した。

薫
（“わざと”当たった？）

青年が不良のパンチを“わざと”避けなかった事に、薫は気付いた。

不良1
「いってぇぇぇぇぇ!!」

すると不良は、殴った手を押さえながら叫んだ。

不良2
「てってめえ!何しやがった!?」

仲間の不良は、仲間が手を押さえながら、叫んでいる事に、青年が何かしたと思った。

???
「別に何にもしてねぇよ。さっさと終わらせるぜ」

不良3
「ふっふざけんじゃねぇ!!」

不良は青年に向かって行った。

???
「パンチの打ち方を教えてやるよ」

青年は拳を握り締め、不良に放った。

不良3
「ぶっ!!」

その拳は不良の顔面に突き刺さり、不良は吹き飛んだ。

？？？
「やべっやり過ぎた」
吹き飛ばされた仲間を見て、不良達は冷や汗を欠いた。
？？？
「ほら、あんな目に合いたくねぇなら、さっさと行きな。これ以上やるってんなら、話は別だけどな」
その言葉を聞き、不良達がとった行動は・・・
不良1・2
「すいませんでした～～～～～～！！」
逃げる事だった。
不良達は気絶している仲間を担いで、走って行った。
？？？
「歯応えのねぇ奴等だぜ。大丈夫か？」
薫
「はっはい。ありがとうございます」
吹き飛んだ不良を見て、呆然としていた薫は、はっとし青年にお礼を言った。
？？？
「良いって事よ。また絡まれねぇ様に帰れよ」
そう言うと、青年は何処かに歩き始めた。

薫
「あっあの！私、椿薫と言います！貴方は？」

青年は立ち止まり、振り向きながら言った。

彪牙
「彪牙。鋼鎧寺彪牙（こうがいじひゅうが）だ。じゃあな」

彪牙は軽く手を降りながら、歩いて行った。

薫
（鋼鎧寺？何処かで聞いた気が・・・）

進
「おい、どうしたんだよ」

急に考え事をし始めた薫に、進は声を掛けた。

薫
「・・・何でもありません」

そう言う薫の目線の先には、彪牙が居た。

何処かのビルの屋上、そこには彪牙と一緒に居た、長髪の青年の青年が居た。
すると、彪牙が屋上に上がって来た。

彪牙
「こんな所に居やがったか。総司」

総司
「遅かったですね」

総司と呼ばれた青年は、振り向かずにビルの向こう側を見ていた。

彪牙
「しょうがねぇだろ。何処に居るか分からねぇんだからよぉ」

総司
「そうですか。それは申し訳ありません」

自分の方を向かない総司に、彪牙は少し腹が立った。

彪牙
「お前なぁ、人と話す時は目を見て話しやがれ」

総司
「そう言えば、何処に居るか分からないと言えば」

彪牙
「おい！無視してんじゃねぇ」

総司は彪牙を無視して話を続けた。

総司
「朱雀の彼、見付けましたよ」

彪牙
「マジかよ」

総司
「はい。場所も分かりました。いつ行きますか？」

総司の言葉に、彪牙はニヤリとしながら言った。

彪牙
「喧嘩は早い方が良いに決まってんだろ」

進
「美味い！こいつプロか！？」
美優
「そうでしょ～」
優也
「・・・一つ良いか？」
美優
「どうしたの？」
優也
「何で水野と椿が家に居るんだ」

今、美優の家には、進と薫が居た。

進
「優也！おかわり！」
優也
「自分で行け。それで何で居るんだ？」

二人が居る理由が分からず、目の前で数人分の料理を食べている美優に聞いた。

美優
「親睦会だよ。親睦会」
優也
「親睦会？」

美優
「だって優也が薫と進の事、まだ苗字で呼んでるでしょ？だから親睦会」

美優は、中々二人の事を名前で呼ばない優也を、どうにかしようと二人に相談した。
進と薫は二つ返事で答えた。

優也
「親睦会って事は判ったけど、どうしたんだ椿。ぼーっとして」
薫
「えっ！」

優也に呼ばれ、薫はビックリして優也を見た。

進
「鋼鎧寺彪牙って人に助けられてから、ずっとこうなんだよ」
優也
「鋼鎧寺？」
美優
「珍しい苗字だね」
進
「あっ！まさか惚れたのか！」
美優
「そうなの！？」
薫
「違うよ美優ちゃん。進君・・・つまらない事は言わないで下さい（黒笑）」
美優
「そっかぁ～」

進
「何で俺だけそんな言い方?!」

美優には優しい笑顔、自分には黒い笑顔と、全く違う扱いに進は泣きそうになった。

薫
「ただ鋼鎧寺と言う名前に聞き覚えがあって、考えていたんです」

美優
「何処で?」

薫
「そこが分からなくて・・・」

優也
「鋼鎧寺・・・それなら聞いた事があるぞ」

薫
「本当ですか!」

泣きそうになっている進を無視して、優也は話し始めた。

優也
「俺も人から聞いただけだから詳しくは知らないが、確か“気”を使って戦うらしいぞ」

美優
「ドラ○ンボール?」

優也
「違う。かめ○め派は撃たないぞ」

美優は優也がドラ○ンボールを知っている事に驚いた。

優也

「その“気”を使って身体を強化して戦い、“気”を纏った身体は、鎧を纏っている様に硬く、鋼の様だったって」

薫

「だから“鋼鎧寺”（こうがいじ）。思い出しました。あの鋼鎧寺ですか」

優也

「そうだろうな。俺はそこまでしか知らないぞ」

優也は皆の食器を片付けながら言った。

薫

「たしか鋼鎧寺は、百年近く前に滅びた筈です」

美優

「百年!?そんな昔からあるんだ」

百年と言う言葉を聞き、美優は驚きを隠せなかった。

優也

「当たり前だ。妖怪や四聖獣は何千年も前から存在してるんだ。百年前にそんな一族が居ても可笑しくない」

薫

「あの人は末裔なんですね」

進

「でもさぁ」

すると、泣き止んだ進が・・・

進

「泣いてねぇよ!!」

話に入って来た。

進
「無視?!また無視なの!?」

優也
「で何なんだ?」

進
「あっえ~と。その末裔が何でこんな所に居るんだよ?」

優也
「妖怪退治にでも来たんじゃないのか」

薫
「偶然かも・・・!」

薫はそこまで言うと、何かに気付いた。

薫
「優也君!」

美優
「薫?」

進
「どっどうしたんだよ?」

急に優也の名前を叫んだ薫に二人は驚いた。

優也
「ああ。分かってる」

すると、優也は刀とコートを持ち、玄関に歩いて行った。
薫も玄関へ歩いて行った。

進
「おい！待てよ！」
美優
「わっ私も！」

美優と進も二人の後を追った。

薫
「この感じ・・・妖怪では無いですね」
優也
「ああ」

優也は刀を腰に差し、コートを着ながら言った。

優也
「全く隠そうとしないばか正直な気配と、隠している様で隠していない気配」

優也が玄関を開けた。
そこには彪牙と総司が居た。

優也・薫
「（あいつは）（あの人は）」

声が重なり、二人は顔を見合わせた。

優也
「知り合いか？」
薫
「はい。あの背の高い人が鋼鎧寺さんです。優也君は？」

優也
「あの髪の長い方とちょっとな」

彪牙と総司のどっちを知っているか、確認している二人の後ろから美優と進が追い付いた。

美優
「二人ともどうしたの！」
進
「あっ！あいつ！」
彪牙
「よお、薫と、薫の彼氏じゃねぇか」
薫
「・・・進君は私の彼氏じゃありません」

進が薫の彼氏と言う彪牙に、薫は少し呆れながら言った。

彪牙
「そうか。悪いな」
薫
「それで、何か用ですか」

薫は少し警戒しながら、目的を聞いた。

彪牙
「そうだったな。火渡優也ってのは、そこのチビか？」
優也
「そうだ」

彪牙は成る程と、言ったように頷いた。

彪牙
「見た目がそんなんだから弱そうに見えたぜ」
優也
「人を見た目で判断しない事だな」
彪牙
「ああ、そうだな」
優也
「それで?俺に何の用だ」
優也の問いに彪牙は、少し笑いながら答えた。
彪牙
「喧嘩しに来ただけだよ」

第9話　拳と幻影（前編）（後書き）

漆黒
「鋼鎧寺は“こうがいじ”と読み、彪牙は“ひゅうが”と読みます。総司の苗字は次回出ます。天の道は逝きません」
進
「漢字が違う！？」
優也
「次回はまた戦闘か」
薫
「その次回ですけど、るろうに○心ネタがいっぱいあるとか・・・」
優也・進
「・・・おい作者」
漆黒
「実は彪牙はるろうに○心の左○助を、イメージして書いてるから、ついつい・・・」
優也・進
「ついついじゃ無いだろ！！」
漆黒
「オリジナル小説だから別に良いだろ！」
優也
「パクリ過ぎだ！」
漆黒
「うるさ～い！！」
進
「逆ギレ！？」
薫
「・・・次回もどうか見て下さい」

次回

第１０話　拳と幻影（後編）

薫

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

彪牙の言葉に優也は一体どうするのか。

第１０話　拳と幻影（後編）

彪牙
「近くでみたら良く分かる。今までの妖怪とは違って楽しい喧嘩になりそうだぜ」

彪牙は少し笑いながら言った。

優也
「喧嘩・・・か。せっかく親睦会を開いている時に、無粋な奴だな」
彪牙
「そりゃあ、すまねえな」
優也
「すまないと思ってるなら、さっさと帰れ。俺はお前と闘う理由は無い」
彪牙
「連れねえ事言うなよ。四聖獣の朱雀さんよお」

彪牙の言葉に、家の中に戻ろうとしていた優也の足が止まった。

彪牙

「あれだけ派手にやってんだ。気付かねえ筈がねえだろ」
総司
「気付いたのは僕ですけどね」
彪牙
「・・・うっせえな。まあ分かってるのは、炎と刀を使うって事くらいだけで、どんな技を使うか、何でこんな所に居るのかは、分からねえんだけどな」
優也
「俺も分からないな」
彪牙
「あ？」

優也の言葉に彪牙は、声を漏らした。

優也
「水野から聞いたが、椿を助けたんだろ。少なくとも性根は腐っていない筈だ。それが何故、喧嘩なんて下らない真似をする。一体何があった？」
彪牙
「それは・・・やめた」

彪牙は最後まで言わなかった。

彪牙
「まあこれだけは言っておく。俺は聖獣使いが大っ嫌いだ」

彪牙は優也を睨みながら言った。

彪牙
「自分自身の力で闘わねえ。力があるからって、普通の人間はゴミ

見たいに扱いやがる。それで肝心な時には闘わねえ」

最後の言葉を言った時、彪牙はギリッと歯軋りをした。

彪牙
「そんな奴等ばっかりだからこそ四聖獣のてめえを心底ブッ倒してえんだよ!!」

彪牙の気迫に、美優と進は愚か、薫でさえゾクッと怯えた。

優也
「・・・分かった。その喧嘩、受けてたつ」

美優
「優也!」

彪牙
「話が分かるねえ」

彪牙はさっきの気迫を解き、ニヤリとした顔にした。

優也
「場所を変えるぞ」

総司
「それなら僕に任せて貰いましょうか」

優也が場所を変えようと、歩こうとしたが、総司が止めた。

優也
「どういうことだ。え～と」

総司
「自己紹介が遅れました。霧藤総司です。僕は空間移動の能力があ

るんです。それを使って人が居ない場所へ移動します。少し時間が掛かるので待っていて下さい」

総司はそう言うと、準備を始めた。

薫
「優也君！何で喧嘩なんて受けたんですか！」

美優
「そうだよ！あんなの八つ当たりだよ！」

優也
「あそこまで言われたら、仕方無いだろ」

優也は壁にもたれ掛かりながら言った。

美優
「でっでも」

優也
「安心しろ。負けはしない」

優也は美優の頭に、手を置きながら言った。

美優
「／／／」

優也
「どうした？顔が赤いぞ」

美優
「なっ何でも無いよ・・・／／／」

美優は赤い顔を見られない様に、顔を逸らした。

進
（薫。優也って鈍感？）
薫
（そうみたいですね。美優ちゃんもですけど・・・）
進
（マジかよ・・・）

そのやり取りを見ながら、二人は小声で話した。
すると、薫は彪牙と出会った時の事を思い出した。

薫
「あの優也君。あの人、かなり強いですよ」
進
「そう言えば、顔面殴られてもビクともしなかったし。殴った方が痛がってたもんな」

進が言う様に、彪牙は不良に顔面を殴られてもビクともしなかった。

薫
「あの時、彼が能力を使っている気配は感じませんでした。あの頑丈さは天性の物です。それに“気”を纏ったらどうなるか・・・」

“気”を纏う事で鋼の様な身体を手に入れる“鋼鎧寺”。
それに彪牙の頑丈さが合わさったら、どうなるか想像も付かなかった。

優也
「それでも、どうにかするさ」
進
「・・・優也。一つ訊いて良いか？」

優也
「何だ・・・」

進が何を訊くか、優也は予想が付いた。

進
「あいつがさっき言ってた聖獣の事って・・・本当なのか」

優也はやっぱりかと言った表情だった。

優也
「聖獣との契約は元々、能力の無い人間が妖怪と闘う為の方法だ。それが今では金儲けの為に、妖怪退治をしている様な奴ばかりだ。そんな奴ばかりだから肝心な時には、闘え無いんだろ。まあ昔見たいに妖怪が表立って、行動して無いから仕方無いだろうけどな。だからあいつの言う事も一理ある」

優也は彪牙を見ながら言った。

美優
「だけど優也は違うよ！優也はお金の為に闘って無いのに・・・」

薫
「美優ちゃん・・・」

美優は必死に優也に言った。

優也
「俺一人がそうでも、周りから見たらそう見えるんだろうな」

美優
「優也・・・」

総司
「準備出来ましたよ」
優也
「ほら。この話は終わりだ」

優也は壁から背を離し、歩き出した。
すると、進が優也の横に並んだ。

進
「他の奴等が金目当てでも、お前がそんな奴じゃ無いって事くらい、俺達は分かってるからな」

それだけ言うと、進は先に歩いて行った。

優也
「あいつ着いてくるつもりか？」
美優
「私達もだよ」

優也の後ろでは美優と薫が、準備万端と言った様な表情で居た。

薫
「今更優也君一人で行かせはしません」
美優
「そう言う事」
優也
「ハァ・・・勝手にしろ」

優也はため息を吐きながら言った。
美優と薫は後ろで、ハイタッチをして喜んだ。

総司
「ここに立って下さい」

総司は優也達を、同じ場所に立たせた。

総司
「では、始めます」

すると、優也達の足下に陣が出来た。

進
「なっ何だ！」
優也
「落ち着け」
美優
「いや！落ち着いてられないよ！？」

美優と進は急な事に、驚きを隠せなかった。
それとは逆に、優也と薫、そして彪牙は落ち着いていた。

彪牙
「こいつぁ、総司が何人か一緒に空間移動する時の陣だ。別に危ねえもんじゃねえよ」
薫
「ちなみに、何処に行くんですか？」
彪牙
「知らねえ」
進

「知らねえのかよ！」
優也
「お前、誰にでもツッコムな」

今日会ったばかりの彪牙に、ツッコム進に優也は少し関心した。

総司
「それじゃあ行きますよ」

総司が両手をかざすと、陣が光った。
優也達は眩しさの余り目を閉じた。
光が消えると、そこには優也達は居なかった。

総司
「さて、僕も行きますか」

総司は空間に裂け目を作り、その中に入って行った。

優也達が次に目を開けた時に見えたのは、美優の家では無く広い河原だった。

美優
「ホントに移動しちゃった・・・」
進
「すげえ・・・」

美優と進は、本当に空間を移動した事に呆然とした。

彪牙
「すげえだろ、あいつ。まあ・・・普段はあんなだけどな・・・」

呆然としている美優に彪牙が、河原に歩きながら言った。
最後の言葉は誰にも聞こえていなかったが・・・

彪牙
「そーいや、自己紹介がまだだったな。俺は鋼鎧寺彪牙だ」

彪牙は立ち止まり、優也に向かって言った。
優也も河原に歩いて行き、彪牙の前で止まった。

優也
「俺は火渡優也だ」
彪牙
「これで喧嘩の準備は完了だ」
優也
「素手で良いのか？」
彪牙
「俺は武器なんて使わねえ主義でな。別にお前がその刀を使っても、卑怯なんざ言わねえよ」
優也
「そうか」

優也は刀を抜いた。

優也
「来い」
彪牙
「へっそれじゃあ、お言葉に甘えて・・・」

彪牙は足に力をいれ、地面を蹴った。

彪牙
「行くぜ！！」

彪牙は常人とは思えぬ速さで、間合いを詰めた。

進
「速い！」

薫
（確かに速い・・・だけど・・・）

彪牙
「らぁ！！」

彪牙は優也に向かって拳を降り下ろした。

ドゴォォォォン！！！！

だが、その拳は空を切り、地面に突き刺さった。
その拳の威力に砂煙が上がる。

優也
「直線的過ぎる」

一部砂煙が晴れると、そこには優也が居た。

ゴォッ！！

優也は彪牙の横腹に刀を叩き付けると、そのまま吹き飛ばした。

美優
「ちょっ！優也！？」

進
「あいつ斬ったんじゃ！！」

二人は優也が彪牙を斬った事に、動揺を隠せなかった。

薫
「大丈夫。峰打ちですよ」

優也が峰打ちで彪牙を吹き飛ばした事が、見えていた薫は、二人に言うと、二人は安心のため息を吐いた。

美優
「優也があの人を斬っちゃったと思ってびっくりした～」

進
「とっとにかく！これで優也の勝ちだな！」

進は優也が勝利したと確信した。

優也
「・・・」

進
「優也？」

だが、優也は浮かない顔をしていた。

薫
「どんなに速くても、直線的過ぎれば、優也君程の剣士なら簡単に避けられます。だけど・・・」
彪牙
「流石に強えな。“気”を纏ってなきゃやられてたぜ。けどよ」
すると、彪牙は何事も無かったかの様に起き上がった。

薫
「あの異常なまでの打たれ強さに“気”を纏ったら、優也君の一撃でも通用しない」
美優
「そんな！」

彪牙は立ち上がり、優也に言った。

彪牙
「喧嘩ってのはよお、最後まで立っていられた方が勝ちなんだよ！」
優也
「その台詞は、最後まで立っていられた時に言うんだな」

優也は刀を構えた。
それを見て彪牙は、ニッと笑った。
その様子を、美優は心配そうに見ていた。

美優
「だっ大丈夫だよね。優也なら・・・」
薫
「でも、優也君は相手を斬るつもりも無いし、能力を使うつもりも無い見たいだし・・・」

総司
「早速やってますね」
進
「うおぉぉ！！ビックリした！」

三人の後ろから、突然声がし後ろを振り返ると、そこには、裂け目から出て来た総司が居た。

進
「居ないと思ったら・・・」
総司
「この人数を一気に移動させるには、僕が外から能力を使わなくては行けなかったので」

総司は裂け目を閉じ、優也と彪牙が闘っている方を見た。

総司
「まったく。僕が来るまで、待っていられないんでしょうかね」

その瞬間、辺り一面の景色の色が藍色に変わった。

美優
「なっ何これ！？」
進
「どうなってんだ！？」
薫
「これは！・・・幻術？」
総司
「良く分かりましたね。この中に入って来ない限り、周りからは普通の景色に見える筈です」

総司はそう言うと、優也と彪牙の闘いを見た。

薫
（空間移動に幻術まで！この人は一体・・・）

薫は総司の能力に、驚きながら総司を見た。

彪牙
「総司も来た様だし、続きと行くぜ！！」

彪牙は再び、優也に向かって行った。
そして、拳を繰り出す。

彪牙
「！？」

だが、優也が視界から消え、その拳は空を切った。

優也
「お前の一撃は確かに大した威力だ。だが・・・」

突然、後ろから優也の声が聞こえ、彪牙は振り返った。

優也
「当たらなければ意味は無い！」

優也は彪牙の肩に、一撃を入れた。

彪牙

「グッ！うおおお！！」

その一撃に耐えながら、彪牙は裏拳を繰り出す。
優也はそれを体制を低くしてかわした。

優也
「一撃で倒れないなら、倒れるまで攻撃するだけだ」

その瞬間、彪牙は連撃を喰らった。

彪牙
（はっ速え！！五発？いや！それ以上！？何発打ち込まれたかさえ分からねえ！！）

彪牙はあの一瞬に何をされたか分からなかった。

彪牙
「グッ！！」

優也は隙を与えず、彪牙の横腹に一撃を入れた。

優也
「！」

彪牙
「捕まえたぜ」

彪牙は吹き飛ばされず、左手で優也の刀を掴んだ。

彪牙
「こうやって捕まえちまえば、避けらんねえだろ」

薫
「マズイ！力勝負じゃあ優也君に勝ち目が無い！」
美優
「優也！」
進
「逃げろ！」

彪牙は右手を握り締め、優也に殴りかかった。

彪牙
「終わり・・・ガハッ！！」

その拳は優也に届く事は無かった。

総司
「蹴り！？」

優也は拳が届く前に、彪牙のアゴを蹴り上げた。
彪牙はアゴを蹴り上げられ吹き飛んだ。

彪牙
「っ・・・くそ！」

彪牙は持ち前の打たれ強さで何とか耐え、立ち上がり優也を見た。
だが、そこには優也は居なかった。

彪牙
「どこ行った！？」

彪牙は周りを見渡すが、優也は何処にも居ない。

優也
「こっちだ」

上空から優也の声が聞こえ、彪牙は上を見た。
そこでは、優也が刀を振りかぶっていた。

彪牙
「しまった！」

気付いた時にはもう遅かった。
優也はそのまま、彪牙に向かって刀を降り下ろした。

ドゴォォォォ！！！！

彪牙
「ガッ！」

その一撃に耐えきれず、彪牙は倒れてしまった。

進
「すっすげえ・・・」
美優
「うっうん・・・」
薫
「心配する必要・・・ありませんでしたね・・・」

優也の強さに、美優達は呆然とした。

彪牙
（強すぎる。手も足も出ねえ）
優也
「これ以上はもう必要無いだろう。負けを認めろ」
彪牙
「負け・・・だと・・・」

彪牙の脳裏には、自分の過去が映った。
母親と幸せそうに暮らす自分。
だが、その幸せは続かなかった。
母親は妖怪に襲われ、何も出来ない自分。
そして、母親を助けようとしない、聖獣使い。
そして変わり果てた、自分の母親だった。

彪牙
「負けられねぇ・・・」

彪牙は立ち上がった。

美優
「た・・・立った」

美優達はあの体で立った彪牙に、言葉を失った。

彪牙
「お袋を見殺しにして、それでも金の為でしか闘わねえ様な奴等に・・・俺は負けられねえ・・・！」
優也
「・・・」

優也は何も言わず、彪牙を見据えた。

彪牙
「俺は負けねえ！負けるわけには行かねぇんだよ！！！」

彪牙の気迫は、さっきとは比べ物にならなかった。

彪牙
「・・・決着（ケリ）をつけようぜ。朱雀！！！」

優也
「鋼鎧寺彪牙・・・鋼鎧寺の末裔か・・・分かった。決着（ケリ）をつけよう」

優也は刀を鞘に収め、右足に炎の翼を生やした。

優也
「来い」

彪牙
「行くぜ！！」

彪牙は優也に向かって行った。

彪牙
（あれから6年。俺は強くなった。聖獣使いも倒せるくらいに！）

彪牙は総ての力を右手に込める。

彪牙
「この強さでこいつを倒す！！！！」

総ての力を込めた拳が優也に放たれた。

彪牙
「おおおおお！！！！！」

ゴォッ！！！！

美優
「えっ！」

その拳を優也は“避けず”、左頬に当たった。

総司
（避けなかった？）

優也は吹き飛ばされたが、倒れる事は無かった。

優也
「そんな軽い拳で俺は倒せない」

優也は一歩で彪牙との距離を詰めた。

彪牙
「！」

優也
「“鳳凰爪牙”」

優也は回し蹴りを放った。
その蹴りは彪牙を吹き飛ばしたが、優也と同じで倒れなかった。

優也
「・・・流石に頑丈だな。“鳳凰爪牙”を喰らって倒れなかったのは、お前が初めてだ。だが立っているのがやっとだな」

優也の言う通り、彪牙は足腰が震え、気力だけで立っているようだった。

薫
「勝負ありですね」

薫は優也の勝利を確信した。
美優と進も安堵の表情を浮かべていた。

総司
（あれが朱雀の炎？それにしては荒々し過ぎる。だが朱雀の炎には間違いない。彼は一体・・・）

総司は二人の勝敗より、優也の炎が気になっていた。

彪牙
「まだだ！まだ俺は倒れてねぇ！！負けてねぇ！！」

周りが優也の勝利を確信したが、彪牙はまだ負けを認めていなかった。

彪牙
「鋼鎧寺とお袋にかけて、死のうが聖獣使い（てめえ等）には負け

られねぇ！」

優也は彪牙に近付いて行く。

美優
「優也・・・」

美優は、優也が彪牙に止めを刺そうとしているのではないのかと、冷や汗を欠いた。

彪牙
「そうだ・・・来やがれ！」

バキッ！！

優也
「死のうが負けられない？ふざけるな」

優也は彪牙を殴った。
その拳には怒りが込められていた。

優也
「今お前が生きて居られてるのは、お前の母親が命を賭けて、お前を守ったからじゃないのか。お前の母親はお前に敵討ちをして欲しいとでも思っているのか」

彪牙
「うるせえ！！てめえに何がわかる！人を見下し、人を見殺しにする様な奴に何がわかる！！」

美優
「違う！！」

美優が突然声を上げた。

美優
「優也は人を見下さないし、見殺しにもしない！誰かの為に闘ってるのに、勝手な事言わないでよ！」

美優の言葉に、彪牙は目を見開いた。

進
「そうだ！これ以上変な言いがかりつけるなら、俺が・・・グヘッ！」

薫
「話がややこしくなるから、進君は黙ってて下さい」

彪牙に向かって行こうとする進の服の襟を、薫が掴み止めた。

優也
「鋼鎧寺。俺もお前の言う様な奴等を何度も見て来た。だからこそ、俺はこの能力を誰かの為に・・・せめて、この刀の届く範囲だけでも守りたい。お前は違うのか」

優也は彪牙に背を向け、美優達の元へ歩いて行った。

彪牙
（そういや、俺の親父も似たような事言ってたな・・・）

彪牙は呆然としながら思った。

彪牙
（“この拳の届く範囲にいる奴は全部俺が守る”それが親父の口癖だった）

彪牙の父親、彪牙も何処に居るか、生きているかも分からない父親の事を思い出した。

彪牙
（俺も親父や・・・こいつ見たいになりたかった。それがお袋が死んでから、絶望して、喧嘩をする事で忘れようとばかりしてた・・・）

彪牙は口元を上げ、笑った。

彪牙
（ごめん、お袋）

彪牙の体から力が抜けた。

彪牙
（俺はこの男に完全に負けちまったよ）

彪牙は倒れた。
その顔は、どこか清々しく見えた。

美優
「あの人。大丈夫かな・・・」

進
「あの長髪の・・・総司だっけ?あいつがあの後どうか、教えてくれるって言ってたのに、まだだからな」
薫
「昨日の今日ですし」

翌朝。
優也達は昨日の彪牙の事を話しながら、登校していた。
彪牙は誰が見ても、全身打撲、出血多量と言った状態だった。

優也
「鋼鎧寺は“気”を使って身体を強化して闘うだけじゃなくて、治癒能力も常人より高いから多少は大丈夫だ。・・・まあやり過ぎはしたけど(ボソッ」
美優
「心配?」

優也の呟いた言葉を、美優は聞き逃さなかった。

優也
「別に・・・」
美優
「素直じゃないな~」
優也
「うるさい」
総司
「賑やかですね」

すると、優也達の後ろから彪牙と総司が現れた。

進
「あんたはまともに出てこれないのか！？」
美優
「ビックリした！」
優也
「鋼鎧寺。もう動いて大丈夫なのか」

急に現れた二人に、美優と進は驚いた。
優也は彪牙の体中の包帯を見ながら言った。

彪牙
「打たれ強さが俺の売りだぜ。こんなの屁でもねえな」
優也・美優・薫・進
「・・・・・・」

優也達は軽く、彪牙を叩いた。

彪牙
「こ・・・こんなもん・・・屁でもねえな・・・」

明らかなやせ我慢だった。

優也
「それで、何か用があるんじゃ無いのか？」
彪牙
「ああ。一言、言う事があってな」
美優
「一言？」
彪牙
「前は見境無く、強そうな奴に喧嘩吹っ掛けてたが、それはもう止

めた」
進
「見境無く喧嘩してたのかよ・・・」
総司
「強そうな相手を僕に探させてたんですよ。これでゆっくりできます」
薫
「ご苦労様です」

総司の呟きに薫は、労いの言葉をかけた。

彪牙
「まあ。喧嘩はするけどな」
進
「喧嘩はするのかよ！」

進はまた彪牙にツッコンだ。
それを無視して、彪牙は続けた。

彪牙
「どうせ喧嘩するなら、お前が言う人の為に喧嘩しようと思ってな」
優也
「鋼鎧寺・・・」
彪牙
「まあ。そんなわけで、これからよろしくな。優也！」

彪牙はそれだけ言うと、総司と一緒に歩いて行った。

優也
「いきなり呼び捨てか。しかも一言じゃないし」

優也は呆れながらも、少し笑っていた。

進
「っておい！もうこんな時間だぞ！」

美優
「ホントだ！遅刻する！」

薫
「走りますか」

優也達は遅刻寸前だった為、走って行った。

優也
「そう言えばあいつ等の制服、俺達と同じだったな」

美優
「もしかして同じ中学！？て言うか中学生だったの！？」

第１０話　拳と幻影（後編）（後書き）

漆黒
「今回は彪牙と総司に来てもらいました！」
総司
「初めまして、霧藤総司です」
彪牙
「鋼鎧寺彪牙だ。つーか今回の話、ほとんど、るろうに○心ネタじゃねえか」
漆黒
「まあ気にしない気にしない。これからもっと漫画ネタ使うんだから」
彪牙
「もっと使うのかよ」
総司
「今更ですけどね」
漆黒
「さて！今日は彪牙にタイトルコールしてもらいましょうか！」
彪牙
「総司は良いのかよ」
総司
「構いませんよ。これから活躍するので」
漆黒
「多分ね」
総司
「えっ・・・多分？」
彪牙
「それじゃあ次回も見てくれよ」

次回

第１１話　プールと想い

彪牙

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

総司

「多分ってどういう事ですか！あっ！逃げるんじゃありませんよ！作者！」

漆黒

「さようなら～」

彪牙

「ったく・・・」

登場人物設定1（前書き）

登場人物の大まかな設定です。

登場人物設定1

火渡優也
（ひわたりゆうや）

性別　男

ＣＶ：朴口美（鋼の錬金術師：エドワード・エルリック）

年齢　１２歳

誕生日　３月２４日

身長　１５６ｃｍ

体重　４４ｋｇ

好き・得意な物（事）　甘い物　高い所　料理

嫌い・苦手な物（事）　苦い物　仲間に手を出す者　雨

能力　炎

武器　日本刀（刀身が黒い）

容姿
髪の色は黒く、肩に届きそうな長さ、瞳の色は美優曰く、ルビーの様な紅い瞳。
顔立ちは女顔で、誰が見ても女に見える。

解説

本作の主人公。
女顔の事を言われると怒り狂うが、料理が異常に上手い、甘いものに目がない等のせいで、余計に女っぽく見える。
若干ドジで抜けている。
かなりモテるが、それに気付かぬ天然、鈍感。
だが、他人の恋愛に対しては鋭い。
酒に弱く、一口でも飲むと、物凄く酔っ払う。
戦闘では敵に容赦無いが、殺したりはしない。
戦闘能力は薫や彪牙とは、比べ物にならない位高い。

神道美優
（しんどうみゆ）

性別　女

ＣＶ：田村ゆかり（魔法少女リリカルなのは：高町なのは）

身長　１５４ｃｍ

体重　４５ｋｇ

年齢　１２歳

誕生日　１２月２４日

好き・得意な物（事）　優也の料理　可愛い物　大食い

嫌い・苦手な物（事）　勉強　孤独

能力　不明

武器　無し

容姿

背中まである黒髪で、瞳の色は青色。
学校でもかなりの美少女に入るが、薫と一緒にいる事が多く、少し印象が薄い。
それでもかなりモテる。
女子曰く、胸が大きい。

解説

小さい頃に薫との約束でいつも笑っている。
誰かが傷つく事が嫌いで、誰かが傷つく位なら、自分が傷つく方を選ぶ。
優也程ではないが鈍感。
そして優也以上の天然。
女にしては怪力で、大抵の男には力で負けることはない。
どれだけ食べても太らない体質。
料理が破滅的に出来ない。
自分も知らない能力（ちから）があり、そのせいで妖怪に狙われている。

椿薫
（つばきかおる）

性別　女

ＣＶ：名塚佳織（ソウルイーター：中務椿）

年齢　１２歳

誕生日　１２月３０日

身長　１６３ｃｍ

体重　４６ｋｇ

好き・得意な物（事）　友達　花

嫌い・苦手な物（事）　友達を傷付ける者　花を傷付ける者

能力　氷

武器　鉄扇

容姿

髪の色は水色で、長さは腰まであり、ポニーテールにしている。

瞳の色は黒。

女子にしては、身長が高く容姿端麗でファンクラブが出来る程の人気。

解説

誰にでも優しく面倒見が良い。

美優と年下以外は歳に関係無く敬語で話す。

種族に関係無く困っている人を放っておけない。

争い事は嫌いだが、大切な人の為なら闘う。
椿一族は滅びたが、父親は健在。
怒らせると、とてつもなく恐い。

水野進
（みずのすすむ）

性別　男

ＣＶ：日野聡（灼眼のシャナ：坂井悠二）

年齢　１３歳

誕生日　８月２１日

身長　１６７ｃｍ

体重　５６ｋｇ

好き・得意な物（事）　ゲーム　ツッコミ　短距離走（逃げ足）

嫌い・得意な物（事）　友達を馬鹿にする奴

能力　無し

武器　無し

容姿
黒い髪に黒い瞳と、本作中では普通。
ブサイクではなく、まあまあのイケメンだが、パッとせず、あまりモテナイ。

解説
やる気が空回りする事がよくある。
だが、やるときはやる男で、旧鼠に襲われた時も、咄嗟の機転で窮地を脱した。
短距離走（逃げ足）なら優也よりも速い。
ちなみに左利き。

霧藤総司
（むとうそうじ）

性別　男

ＣＶ：遊佐浩二（仮面ライダー電王：ウラタロス）

年齢　１４歳

誕生日　６月１０日

身長　１７５ｃｍ

体重　６１ｋｇ

好き・得意な物（事）　空間の狭間の散歩　変態な行為

嫌い・苦手な物（事）　辛い食べ物

能力　空間移動　幻覚

武器　双刃剣

容姿

髪の色は藍色で、腰まである長さの髪を一つに纏めている。
かなりのイケメン。

解説

誰にでも敬語で、人には基本、笑顔で接して、紳士に思えるが、実際は変態。
その事を自覚しており、変態と言われても否定しないが、それ以外は否定する。
変態だが、やり過ぎはしなく、女性には優しい。
戦闘能力はあまり高くなく、幻覚や空間能力で援護する。
決して弱い訳ではない。

鋼鎧寺彪牙
（こうがいじひゅうが）

性別　男

ＣＶ：関俊彦（幻想魔伝最遊記：玄奘三蔵）

年齢　１４歳

誕生日　４月２日

身長　１８４ｃｍ

体重　７２ｋｇ

好き・得意な物（事）　喧嘩　努力する奴

嫌い・苦手な物（事）　聖獣使い　理不尽

能力　気の操作

武器　無し

容姿

茶髪のツンツン頭。

目はツリ目で不良に見える。

体つきはガッシリとしていて筋肉質。細マッチョ。

解説

喧嘩好きで強い相手を見付けては喧嘩していた。

それは過去に母親が妖怪に殺された事を忘れようとしての行動。

優也に負けてからは、誰かの為に喧嘩すると約束した。

不良に見えるが、良く気が利いて、友達を見捨てない事から、学校の男子からは信頼が厚い。

学校の成績はかなり高い。

能力を使わなくても、喧嘩は強く、打たれ強い。

普通の人間相手には能力を使わない。

学校で薫より運動神経の良い二人の内、一人が彪牙で二位。

酒にかなり強い。

登場人物設定1（後書き）

優也
「設定は良いが、1って何だ?2もあるのか?」
漆黒
「あります!」
美優
「まだ出るの?」
漆黒
「オリジナル小説なんだから、そりゃあ当たり前だろ~」
美優
「それもそうか」
漆黒
「その内強力なライバルも登場するかも・・・」
美優
「えっ?」
優也
「出来るだけ早く書かせるから、次回も読んでくれ」
美優
「ライバルって何!?どういう事!」
漆黒
「く・・・首・・・締まってる・・・」
優也
「またこんなオチか」

第11話　プールと想い（前書き）

タイトル変えて、すいません

第１１話　プールと想い

それは優也のある一言から始まった。

第１１話　プールと想い

「来週の体育は最後の水泳だから、忘れるなよ」

先生はそれだけ言うと、教室から出ていった。
そして帰り道、優也達はいつものメンバーで帰っていた。

「明日休みだし、皆で遊びに行こうか」
「それは良いですね」
「何処行こっか？」
「そりゃあ、プールとかじゃねえのか」
「それ良いね！」
「ちょっと良いか」
「どうかしましたか？」
「何か悩みでもあんのか」
「何であんた等が当たり前の様に、一緒にいるんだよ！」

いつものメンバーですよ。

「いやっ！一つ前の話で出たばっかだろ！」

「正確には登場人物設定を合わせて、四つ前です」
「なら俺は三つ前か」
「身も蓋もない話するなよ！？」
「始めたのは進君ですよ」

彪牙が優也に負けてから、この二人はいつも一緒にいる。
ちなみに、中学二年生。

「そう言えば優也、何で喋らないの？」

優也が全く話に入って来ない事に美優は気付いた。

「何かあったの？」
「何でもない」

優也はいつもの様に言い返す。

「そっかぁ。あっ、明日皆でプール行くって話してたんだけど、優也も行くよね」
「……」
「優也？」
「……」

返事が無い、ただの優也の様だ。

「結局優也じゃねえか！」

すると、総司は何かに気付いた。

「無視かよ！」

「ちょっと黙ってて下さい」
憐れ進。
（この野郎……！）
「もしかして、泳げないんですか？」
優也は少し反応した。
「そうなの？」
「そ……そんな筈ないだろ」
美優達は思った。
（（（（（（あっ、泳げ（ないんだ）（ないんですね）（ねえんだな））））））
「……そうだよ。泳げないんだよ。悪いか」
美優達の考えが読め、優也は観念した。
「そういやぁ、お前等のクラスの次の体育、水泳だったよな」
「だからずっと考え事をしてたんですね」
「笑いたければ笑え」
優也のテンションが段々下がっていった。
「だったら、明日泳ぎの練習しようよ。ねっ！」
「は？」
「良いねえ」
「どうせ行くし、ちょうど良いな」

「それじゃあ明日は市民プールに集合しましょう」
「そうですね」
「おい……」
「それじゃあ決まりね！」
「俺の意見は？」

翌日。

「早くね？」
「今更だろ」

優也、進、彪牙、総司は市民プールの男子更衣室で水着に着替えていた。

「お先に失礼します」
「おう……ちょっと待て。何しに行くんだ」

先に出ていこうとした総司を、彪牙が止めた。

「愚問ですね。ここはプールですよ。覗きに決まってるじゃないですか！」
「「……は？」」

突然の総司の宣言に、優也と進は一瞬、思考がフリーズした。
彪牙は、やっぱりかと呟き、困った様に額に手を置いた。

「おめえなぁ、そんな下らねえ「何が下らないですか！」……ああ？」

「女性の着替えですよ!!分からないんですか!?女性が生まれたての姿に戻るというのに、それを拝まない事は女性に失礼と言うもの!そして!覗かない男は男に有らず!!つまり!君達は男では無い!!」

息継ぎ無しのマシンガントークに優也達は唖然とした。
何処からか、拍手が聞こえた。

「いざ!楽園(パラダイス)へ!!」

総司は女子更衣室へ、走って行った。

「……あっ!ちょっと待て!!楽園(パラダイス)じゃないから!地獄(ヘル)だから!!薫がいるんだぞ!」

進は総司を止めるために、走って行った。

「あいつ、あんな性格だったのか?」
「いつもあんなだよ……。いつか警察(サツ)に捕まるな」

二人を見送りながら呟いた。

「先行こうぜ」
「そうだな」

優也と彪牙は、プールサイドで美優と薫、ついでに進と総司を待っていた。

「遅いな」
「女ってもんは、準備に時間が掛かるもんなんだよ」
「そうか。あっ、来た……ぞ……」
「ん？どうし……た……」

優也と彪牙の目線の先には、美優と薫がいた。
だが、二人は美優と薫の水着姿ではなく、美優と薫の引きずっている“者”に目がいった。

「総司……進」
「お、お前等……それ……」

白目を剥いている進と総司だった。

「あ、これ？」
「これが覗きをしようとしていたので、気絶してもらいました」

進と総司をこれ扱いする、美優と薫は笑顔だが、目が笑っていなかった。

「そ……そうか……」
「そ……そんじゃあ、練習すっか……」

あまり深く関わってはいけない。
そう思い、二人は進と総司の事は無視することにした。

「そうですね。元々はその為に来たんですし」
「それじゃあ早速入ろっか」

二人は進と総司を放り投げた。

「優也……」
「……何だ」
「女って怖えな」
「……そうだな」

美優と薫の怖さを、目の当たりにした、優也と彪牙だった。

「とりあえず、一度泳いでみましょうか」

優也達は浅い場所で練習することにした。
進と総司はその辺に置いておくと、邪魔なのでパラソルの下に置いてきた。

「それじゃあ優也、やろっか」
「ああ」

優也は勢い良く、水の中に入った。
勢い良く入った為、水しぶきが上がった。

「あれ？優也は？」

何処にも水しぶきが無く、優也の姿が無かった。

「ん？」

彪牙は何かに気付き、下を見た。
そこには、もがきもせず、浮きもしない優也が居た。

「優也君!?」
「何してるの!?」

あまりの泳げ無さに、美優はつい助ける事を忘れてツッコンだ。

「ツッコンでる場合か!早えこと引き上げるぞ!」
「はい!」
「う、うん!」

彪牙の言葉に美優と薫は、優也を引き上げた。

「優也。大丈夫?」
「な……なんとか……悪かったな……」
「いきなり溺れてるから、ビックリしましたよ」
「にしてもよぉ、何であんなに泳げねえんだ?」
「そう言えば、優也って学校行ったことないんだよね」
「マジかよ」

そう、優也は一度も学校に行ったことがない。
だから、水泳の授業をしたことがない。

「けどよぉ、一回くらいは海かプールか行ったことねえのかよ?」

彪牙の意見も、最もだった。
12年も生きていれば、海やプールの一つや二つ、一度は行く筈だ。
優也も一度は行ったことが、

「プールは今日、見るのが初めてだ。海は見たことあるけど」

無かった。

「マジでか」

「マジだ」

美優は、ふと思った。

「親と一緒に行ったりしなかったの？」

「……」

美優の言葉に優也は、黙ってしまった。

「優也君？」

（あ、あれ？不味いこと言っちゃった？）

自分が不味いことを言ったのでは、ないのかと思った。

「あ、あの！優也……」

「ほら！もう充分休んでんだろ！練習再開するぜ」

彪牙は美優の言葉を遮った。

「行くぜ。優也」

彪牙は優也を立たせ、連れていった。

「美優ちゃんも行こ」

「う、うん」

美優と薫は置いていかれないように、二人を追いかけた。

「悪いな」
「なぁに、気にするこたぁねえよ。お前が話せる時に、話せば良いんだからよ」
「ああ」

優也と彪牙は、後ろの二人に聞こえない様に話した。

（ふふ。彪牙さんも良いところがあるのね）

聞こえない様に話していたが、薫には聞こえていたようだった。

プールからの帰り道。

「えっ、練習風景は？」

書くのがめんどくさかったとか、そんなのじゃない。

「めんどくさかっただけでしょ！」
「もうほっとけ」
「うん……」

ふと、美優はプールでの自分の発言を思い出してしまった。

（ああっもう！せっかく彪牙があの話を終わらせてくれたのに、何で思い出しちゃったかな！）
「美優」

美優が何を考えているか、気付いた優也は美優に話しかけた。

「へっ！何！？」

突然呼ばれた事に、美優は驚いた。

「プールで言ってたこと、お前には話しておく」

「えっ……」

美優は、せっかく彪牙が終わらせた話を何故、自分に話すのか、分からなかった。

「お前も自分の家族の事を教えてくれたんだ。俺もずっと秘密にしておく訳にはいかないだろ」

確かに以前、自分の家族の事を優也に話した。

「けど……」

「いつまでも、気を使われるのは、俺が嫌なんだよ」

「……わかった」

美優も家族と思っている相手に気を使うことは、正直嫌だった。

「話すぞ……」

「うん」

美優の様子を見て、優也は話し始めた。

「俺も……お前と同じで……家族が居ない……」

「！」

優也にも自分と同じで、家族が居ないことに美優は驚いた。

「同じと言っても、ちゃんと居たんだ。顔もちゃんと覚えてる」

“居たんだ”“顔も覚えてる”。

優也の、その言葉に美優はあることに気付いた。

「もしかして……」

「そうだ。俺の両親は……もうこの世には居ない」

美優の予想は的中した。

自分の考えが間違えであって欲しい。

そんな美優の想いは裏切られた。

「父さんは俺も知らない所で、死んだって知り合いから訊いた。母さんは俺がまだ三つの頃……」

優也が母親の事を話そうとしたとき、少し黙ってしまったが、すぐに続けた。

「俺の目の前で……殺された」

あまりにも衝撃な事実に、美優は言葉が出なかった。

「その時の事は、はっきりと憶えてなくて、誰が母さんを殺したのかは、わからないんだ……」

「……」

その時の優也の表情は、あまりにも悲しそうだった。

美優はかける言葉が見つからなかった。

「こんな話して悪いな……」

「優也……」

優也は話し終えると、先に歩いて行った。

「ゆ……優也！」

美優は優也を呼び止める。

優也は名前を呼ばれ、足を止めた。

「お母さんを殺した犯人に……復讐したいって……思ってる？」

訊いてから美優は後悔した。

もし優也が復讐したいと思っていて、そこに犯人が現れれば、優也が人殺しになってしまうんじゃないかと考えしまう。

「……復讐したいとは……考えてない……」

長い沈黙の後、優也は小さく答える。

その答えに美優は安心した。

「だけど……もし犯人が俺の前に現れたら……どうするか分からない……」

「優也……」

優也は再び歩き出す。

その後ろを美優は追いかける。

「ねぇ、優也……。もう一つ質問良い？」
「……良いぞ」
美優は優也の後ろを着いていきながら、質問した。
「今の日常……楽しい？」
美優の質問を訊き、優也は立ち止まった。
「……今まで考えたことも無かったな……。考えたことも無かったけど、そう言われてみると良く分かった」
優也は振り返らずそのまま答えた。
「楽しいよ」
「……うん……私も」
優也の答えを訊き、美優は微笑みながら自分も同じだと答えた。
「ありがとう」
「え？」
優也は小さく呟いた。
美優には聞こえていなかった。
「……何でも無い。帰るぞ」
優也は先々歩いて行く。
「待ってよ！」

美優は優也を追いかける。

「優也！」

「……何だ？」

美優は優也の横に並び、優也の名前を呼ぶ。

「これからも宜しくね」

「……ああ」

優也は微笑みながら答えた。

「さっさと帰って飯作らないとな」

「今日も楽しみにしてるから！」

「程々にしろよ」

そうして、二人は帰って行った。

翌日。

水泳の授業で優也は、異常な成長を見せ、簡単に進を追い越した。

進は、

「俺が気絶してる間に何があったんだ！？」

と、簡単に追い抜かされた事に、落ち込んでいた。

その頃総司は。

「……あれ？」

市民プールに置き去りにされていた。

「オチ担当ですか！？」

第11話　プールと想い（後書き）

優也
「タイトルいきなり変えたな」
漆黒
「すみません！（土下座）」
総司
「そんな事より！まだ着替えを見てないんですけど！！」
進
「お前馬鹿だろ！あんな目にあったばっかだろ！」
総司
「馬鹿とは何ですか！！」
優也
「お前の存在だろ」
総司
「存在！？」
漆黒
「ツッコミ取られたね」
進
「うるさい！」
総司
「まあ良いですよ。次こそは必ず……」
優也
「やっぱり馬鹿だな」
漆黒
「ほら。タイトルコール」

次回
第１２話　生徒会室の吸血鬼
総司
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

総司
「それでは早速！」
美優
「行かせないよ」
優也
「美優？」
薫
「貴方に次はありません」
進
「薫？」
美優・薫
「さあ！お前の罪を数えろ！」
優也・進
「仮〇ライダーW！？」
総司
「まっ待って下さ……。あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
漆黒・優也・進
「……（冷や汗）」

第１２話　生徒会室の吸血鬼

「事件の臭いがする」
「「は（え）……？」」

第１２話　生徒会室の吸血鬼

「事件の臭いがする」
「二回も言わなくても分かってるから」
「何が事件なの？」

話が進まないと思い、薫は美優に聞き出した。

「よくぞ訊いてくれた！目暮〇部」
「名探偵〇ナン！？つーか伏せ字の意味ないだろ！」
「まあまあ、落ち着いて、剣持〇部」
「今度は〇田一！？いいから早くその事件の事を話せよ！」
「そうだった」

美優のいきなりのテンションに、進はかなり疲れた。

「美優って前からあんなだっけ？」

半年近く同じクラスだが、進はテンションの高い美優を見たことがなかった。

「時々はあったんですけど、学校じゃあ見たことがなかったですね」
前までは、美優は薫以外とも話しはするが、ただ話してるだけで、あまり楽しそうではなかった。
（優也君のおかげかな）
優也が来てから、美優は以前よりも明るくなった。
その事に薫は、心の中で優也に感謝した。
「今、優也居ないでしょ」
皆さんもお気付きの様に、優也はこの場に居ない。
「確か、生徒会室に呼ばれてるって……」
「そこが事件なのだよ！！」
「何だよ、そのキャラ」
いい加減、美優のテンションに着いていけない進だった。
「優也が転入してから二週間。その間に優也は四回も、生徒会室に呼び出された」
「確かに。いくら何でも多すぎる」
前にも言ったように、優也は学校で何も問題を起こしていない。
それなのに、四回も生徒会室に呼ばれるのはおかしい。
「そして、帰って来ると、決まって疲れている……」

生徒会室から帰って来ると、優也はいつも疲れた表情をしている。
だが、少ししたらすぐに調子が良くなる。

「誰も居ない噂の生徒会室。いつも呼び出される優也。そして、帰って来ると、疲れている優也……これを事件と言わないで、何て言うの！」
「知らねえよ」

美優はそこまで言うと、目を見開いて言った。

「ジッチャンの名にかけて、真実はいつも一つ！」
「ついに混ざった！！」
「あはは」

薫は笑顔で美優と進のやり取りを、見ていた。

「それじゃあ、生徒会室に行ってみよう！」
「うん。進君も行きましょう」
「お、おう」

こうして、三人は生徒会室へ向かった。

「ここが生徒会室……」
「何か……不気味だな」

美優達は生徒会室の前に居た。
そこは人通りがなく、生徒会室の扉も、何処と無く不気味な感じだった。

「とりあえず、中を覗いてみようか」

薫はそう言うと、扉を少し開けて中を覗き、すぐに閉じた。

「薫？どうしたの？」

「見てはいけない物を、見てしまった気がする……」

「見てはいけない物？」

美優も中を覗いた。

薫と同じ様に、すぐに扉を閉じた。

「……／／／」

何故か少し、頬を赤くしていた。

「何見たんだ！？」

進は美優の様子を見て、小声で言った。

「ゆ、優也が……／／／」

「中を見たら、分かりますよ」

薫に促され、進は扉を開けようとする。

「あれ？」

進が扉を開けようとした瞬間、扉が勝手に開いた。

「何してるのかしら」

中から、銀髪のロングヘアーで金色の瞳の美女が現れた。

「いやっその／／／」

（（綺麗な人……））

進は間近でその銀髪の女性を見たため、顔を赤くした。

美優と薫は、女の自分達でも、その女性が綺麗だと思った。

「もしかして貴方達、優也の友達？」

「えっ！あっはい！そうです」

突然優也の名前を出され、友達と訊かれ、慌てながら答えた。

「優也なら中に居るわ。どうぞ」

そう言い、美優達を中に入れようとすると

「何でお前等がここに居るんだ」

優也が中から現れた。

「優也！」

「着替えちゃったの。似合ってたのに……」

銀髪の女性は残念そうに呟いた。

「あんな服、似合ってたまるか」

優也はうんざりした表情だった。

「とにかく、中で話しましょう」

その女性は中に入って行った。
優也達も中に入って行った。

「さて、自己紹介の前に優也、紅茶を淹れてくれる？」
「何で俺が……」
「だって優也が淹れる方が、美味しいじゃない」
「ハァ……ったく」
「座って良いわよ」

優也はため息を吐くと、部屋の奥へ入って行った。
銀髪の女性はソファーに座り、美優達も座った。

「それじゃあ自己紹介といきましょうか」

銀髪の女性は美優達と向き合った。

「黒城流香よ。よろしくね」

流香は微笑みながら言った。

「し、神道美優です」
「椿薫です」
「み、水野進です」

美優と進は緊張していたが、薫はいつも通りだった。

「そう、貴方達が……フフ」
「どうかしました？」
急に笑いだした流香に、薫が訊ねた。
「貴方達の事、優也から訊いたわよ」
美優達は自分達の知らない所で、優也が自分達の事を話していた事に驚いた。
「大食い少女に、ツッコミしか取り柄のない地味な男の子」
「おぉぉぃ！？俺の説明おかしくないっスか！！！！」
「ホントにツッコムのね」
進のツッコミに感心しながら、流香は話を続ける。
「怒ると怖い女の子、喧嘩好きの男、そしてロン毛の変態」
「ロン毛の変態？！俺より説明ひでぇ！！」
「私も怒ると怖いしか説明されてないです」
「私なんか文字にしたら、たったの五文字だよ」
美優達は自分の知らない所で、適当な説明をされていることに、不満でいっぱいだった。
「優也はこんな言い方してるけど、貴方達と居るのが楽しいと思うわよ」
「そうっすか……？」
説明のされ方が雑なので、楽しそうにしているとは思えなかった。

「そうよ。だって、優也が他人の事を楽しそうに話すの、久しぶりに見たもの」

流香は嬉しそうに、話し出した。

「あの子、今まで友達なんていなかったから、貴方達と一緒にいるのが内心嬉しいのよ」

「……」

「進君？どうしたの？」

「あっ……何でもない」

進はつい嬉しく思った。

自分達の事をちゃんと、友達と思ってくれていることに。

「結構無理する子だけど、これからも宜しくね」

「「はい！」」

「敬語じゃなくても良いわよ」

「いやっでも……」

「良いわよ」

「う、うん」

「お、おう」

「よろしい」

「私は敬語の方が……」

「その方が話しやすいのなら、それで良いわ」

「ありがとうございます」

ここまでの会話で、美優は大事なことに気付いた。

「あ、あの……」

「どうしたの？」
「流香さんは、優也とはどういう関係なの？」
流香はやっぱりか、と言った感じだった。
「優也はね、私の弟「違うだろ」……みたいなものでしょ」
流香の言葉を遮り、人数分の紅茶を持った優也が戻って来た。
「あの頃は素直な子だったのに……」
「あの頃っていつだよ」
流香に軽くツッコミながら、優也は紅茶を配っていく。
「やっぱり優也が淹れる方が美味しいわ」
流香は紅茶を飲みながら呟いた。
（ホントだ）
（私が淹れるより美味しい……）
（こいつ……出来ないことないのか……）
改めて、優也の凄さが身に染みた。
「さて、他に質問はあるかしら？」
優也もソファーに座り、質問を待った。
「あの、さっきここで何をしていたんですか？」

薫の言葉に優也が反応した。

「それはね～」

「待った！！それは言うな！」

すると優也が立ち上がり、流香の声を遮った。

「別に良いじゃない」

「良くない！」

優也は珍しく焦っている様だった。

「なあ薫。さっき見たんじゃないのか？」

優也と流香が言い争っている（優也が一方的にだが）間に進が薫に、さっき中の様子を見たんじゃないのか確めた。

「はい。だけどちょっと信じられなくて……」

「美優は……って何で顔赤くなってんの？」

「えっ／／／！」

進が美優の方を向くと、何故か美優の顔が赤くなっていた。

「何見たんだよ……」

「え～と、あのね……／／／」

美優は顔を赤くしながら答えた。

「優也の女装姿……／／／」

「……は？」

進は信じられないと言った顔で薫を見た。
薫はその通りと言った様に、頷いた。

「美優！お前見たのか！？」

優也はその話を訊いていた様で、美優に詰め寄った。

「趣味は人それぞれだよ」
「……こうなったら……脳細胞を焼き付くして記憶を消す！！」

優也はキレ、美優に襲いかかろうとした。
進と薫はそれを見て、ヤバいと思い、優也を押さえにかかった。

「落ち着けぇぇぇ！？」
「謝るから！謝るから許して！！」
「ほら！美優ちゃんも謝ってますし、落ち着いて下さい！それに似合ってましたよ！」
「フォローになってない！！」
「小さい頃から無理矢理女装させてたから、無理矢理にでも、女装させたくなっちゃうのよ」
「説明する暇があるならこいつ止めるの手伝って！！」
「い・や♪」

流香は笑顔で言い、紅茶を飲む。

「あんたから始まったんだろうがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

生徒会室に進の叫びが響いた。

数分後

「悪かった……」

優也は落ち着き、皆ソファーでゆっくりしていた。
ちなみに流香が、優也の女装写真をばらまくと言って、優也を落ち着かせた。

「そろそろ遅いし、質問は次で最後にしてね」

流香が言うように、外は日が落ちてきていた。

「それじゃあ何でいつも黒いカーテン閉めてるんだ？」

進は黒いカーテンを指差しながら訊いた。

「……知りたい？」

流香は何処か面白げに言う。

「お、おう……」

「そう……なら、教えてあげる」

すると、流香が目の前から消えた。

「消え……！？」

突然目の前から消えた流香を探そうと、進が立ち上がろうとしたその時、後ろから首筋に手を添えられた。

「私は吸血鬼なの。だから日の光に弱いのよ」

後ろに居たのは流香だった。

「流香。血は吸うなよ」

「残念……」

流香は少し残念そうに、進から離れた。

「吸うつもりだったのかよ!?って吸血鬼!?」

「ホントに居たの!?」

「これが証拠よ」

流香は鋭く尖った歯を、美優と進に見せる。

「ホントだ……」

「椿は気付いてただろ」

「ただの人ではないと思ってましたけど、まさか吸血鬼だなんて……」

流石に薫も、自分が通っている学校に吸血鬼がいるとは思いもしなかった。

「つーか、もし血を吸われてたら、俺も吸血鬼なってたんじゃ!!」

進は自分がもし吸血鬼になっていたらと思い、寒気がした。

「大丈夫よ。優也がなってないでしょ」
流香はソファーに腰掛け、優也を指差し、言った。
「優也がなってないって、まさか……」
「そのまさか」
「あっ！」
以前、優也の首に、何かに噛まれたような跡があったことを、美優は思い出した。
「あの時のって……」
「そうだよ……」
優也は少しため息を吐きながら言った。
「ここに来る度、血を吸われて……」
「優也の血が美味しいから仕方ないわよ」
「仕方なくないだろ」
「……成る程」
すると、美優は手を口元に添え、言い放った。
「謎はすべて解けた！」
「まだやってのかよ！そのエセ名探偵！！」
「あいつどうした？」
「さあ……」
優也の問いに、薫は苦笑いを浮かべた。

「ところで優也君。そんなに血を吸われて大丈夫なんですか？」

薫の疑問も最もだった。

ふらつくほど血を吸われ、それをいつもしていたら、いつか死んでしまうのではないのか。

「それなら大丈夫だ。血は大して吸われてないからな」

「でも、いつもふらついて……」

「吸血鬼に血を吸われたら少しの間ふらつくのよ」

「そうなんですか？」

「干からびるまで飲み干したりしないわよ。だから安心して良いわよ」

血を吸っている時点で安心なんて出来ないと、薫は言いそうになったが、グッとこらえた。

「これで質問は終わりね。最近は暗くなるのが早いから、早く帰った方が良いわよ」

流香が言うように、外は少し暗くなっていた。

「それもそうだな。じゃあ今日は帰るとするか。行くぞ」

「うん。あ、流香さん、また明日」

「！……ええ、また明日」

流香は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに笑顔で答えた。

進と薫も流香に挨拶をして、外に出ていった。

「優也」

美優も外に出ていき、優也も外に出ようとしたが、流香に止められた。

「あの子達、大事にしなさいよ」
「分かってるよ」

優也は小さく答えて、扉を開けた。

「あ、次はこのメイド服を着て……」
「着るか！！！！」

優也は怒鳴り、勢い良く扉を閉めた。

「また今度着てもらお」

流香はメイド服を片付けながら美優の言葉を思い出した。

「また明日か。フフ」

流香の表情は嬉しそうだった。

それから数日。
優也宛に流香からメイド服と手紙が送られた。
手紙の内容は
『着たら見せてね♪』
だった。
それに優也はぶちギレたとか。

第１２話　生徒会室の吸血鬼（後書き）

漆黒
「今日は黒城流香に来てもらいました」
流香
「初めまして、黒城流香よ」
漆黒
「女装はやり過ぎたかな？」
流香
「私が楽しければそれで良いじゃない」
優也
「良くない！！」
漆黒
「あっ優也」
流香
「どうせいつかやるんだから、良いでしょ」
優也
「そう言う問題じゃない！」
漆黒
「はいはい。悪いけど、流香、後宜しく」
優也
「おいこら！離せ！」
流香
「次回も楽しみにしてね」

次回
第１３話　圧倒的な力

流香
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

優也
「離せ！！」

漆黒
「これ以上暴れたら薫呼ぶよ」

優也
「……」

第１３話　圧倒的な力

授業が終わり、放課後。

「……」

「彪牙？どうかしましたか？」

総司は動かない彪牙に疑問が浮かんだ。

いつもなら、授業が終わったら自分より早く動く筈が、動かず椅子に座ったままだからだ。

「総司。悪ぃけど先帰っててくれ」

「彪牙！」

彪牙は突然立ち上がり、そのまま出ていった。

第１３話　圧倒的な力

「それでいきなり、何処かに行ってしまったんですよ」

帰り道、総司は教室での出来事を優也達に話した。

「そう言えば、薫もどっか行っちゃったんだよね」

「薫さんも？」

「うん。帰るとき、薫の下駄箱に手紙があって、それを見たらすぐ

にどっか行っちゃったんだ」
「だから、ラブレターだって」

進の、ラブレターと言う言葉に総司が、いち早く反応した。

「ラブレター!?まさか……そのラブレターは彪牙が!!」
「違うと思うぞ」
「おのれ彪牙……僕より先に彼女を作りやがりますか!」
「人の話を訊けよ。て言うか椿と彪牙が付き合うこと前提か?」

総司の考えは、優也によって否定されたが、その声は総司には届いていなかった。

「こうなったら、幻術で彪牙を……」
「お前はもう黙れ」
「ガハッ!!」

ブツブツうるさい総司に腹が立ち、優也は総司を蹴飛ばした。

「ラブレターかどうかは、明日訊けば良いか」
「それもそうか」

薫と彪牙の事は、明日訊けば良いと思い、優也達は帰っていった。
これから起こる事も知らずに。

とある山、そこには薫と彪牙が居た。

「まさか、薫も同じ手紙を貰ってたとはな」

「こんな手紙、誰が出したんでしょうね」

二人の手には、手紙があった。
内容は、町外れの山に来いと言うものだった。

「名前は書いてねえしなぁ。イタズラかもしれねえな」
「イタズラじゃない」

何処からか声がした瞬間、誰かが薫と彪牙に襲いかかった。
薫と彪牙は突然の事に驚いたが、すぐにその場から離れ、攻撃を避けた。

「反応はまあまあだな」

突然現れた人物は、髪が亜麻色で、背丈は彪牙よりも大きく、右手に剣の形をしたブレスレットを付けた男だった。

「何だてめえは！！」
「俺を倒せたら教えてやるよ」

男は彪牙に向かって行き、拳を繰り出した。

「ハァ！！」

薫は鉄扇を取り出し、鉄扇を降った。
すると、男の目の前に氷が現れ、攻撃を止めた。

「へぇ」
「何処見てやがる！」

彪牙は男を殴り飛ばす。
男は吹き飛ばされ、倒れ込んだ。

「やった」
「おい薫。別に手伝わなくても良かったんだぜ」
「これは喧嘩じゃないんですよ」

二人は、倒れた男を見て、勝利を確信した。

「思ったよりはやるな」

だが、その男は何事も無かったように立ち上がった。

「なっ！」
「全く効いてない……」

彪牙の攻撃をまともに喰らって、何事も無かったように立ち上がった男に、二人は驚きを隠せなかった。

「だが所詮はその程度。その程度の力は、この世界では」

男は足に力を入れ、

「通用しない」

一気に駆け出した。

（速え！！）

男はさっきよりも速く、二人に向かっていく。

「クッ！」

薫は再び氷を作り出し、攻撃を防ごうとする。

「無駄だ」

男が氷に触れる。

すると、氷は簡単に砕け散った。

「えっ！」

薫は目を疑った。

自分の氷があっさりと砕かれたことにもだが、それは力で砕かれたと言うよりは、“強制的に消された様だった”。

「くそっ！」

彪牙は男に向かって拳を繰り出す。

「！」

「なっ！」

だが、彪牙の拳は指一本で止められてしまった。

「こんな事でぼーっとしてるようじゃ、もう終わりだな」

「ガハッ！！！」

男の拳が彪牙の腹に突き刺さる。

その威力に、彪牙は血を吐いた。

「彪牙さん！！ハァァァ！」

薫は鉄扇を振り、男を凍らせようとした。
だが、氷は男の足を一瞬凍らせただけで、すぐに砕けちってしまった。

「！また……」

氷が男に触れた瞬間に砕けてしまう事に、薫は困惑してしまった。

「寝てろ」

男は彪牙の頭を掴み、地面に叩き付けた。

「……ッ！」

叩き付けられた彪牙の頭からは、血が流れ、地面は彪牙の血で染まった。

「あっ……」

その光景に薫は言葉を失った。
戦った事はないが、恐らく自分より強い筈の彪牙が、アッサリと倒されてしまったことに。

「後はお前だけだな」

男は目線を彪牙から薫に変えた。

「……ッ！」

薫は鉄扇を構える。

「まだ戦おうとするのは、流石椿の生き残りと言うだけはあるな」

「えっ……」

この男は自分の事を知っている。

つまり、自分の情報だけでなく、彪牙の事も調べられていたかも知れない事に気付いた。

「考え事の途中に悪いが」

男は薫の目の前まで来ていた。

「そろそろ終わりに……」

「まだだ！！」

男が薫に攻撃しようとした瞬間、彪牙が立ち上がった。

彪牙の頭からは大量の血が流れ、立っているのも辛そうだった。

「良く立ったな。だがまあ、立たない方が正解だったぜ。常人だったら頭蓋骨が割れてるぞ」

「こんなもん大したことねえ！なんたって立ってられるんだからな！」

「彪牙さん……！」

彪牙は何とも無いように振る舞うが、息は絶え絶えで、強がりだとすぐに分かった。

「そうか、なら」

男が右手をかざすと、ブレスレットの剣の部分が消え、男の手に身の丈ほどの大剣が現れた。

「立っていられない一撃を入れるだけだ」

男は大剣を片手で軽々と持ち、肩に担いだ。

「来い」

彪牙と薫は一斉に男に向かって行った。

「“月牙”」

男が大剣を振り下ろす。

その瞬間、彪牙と薫は、意識を失った。

その頃、優也と美優は、リビングでくつろいでいた。

優也は何か考え事をしていた。

（何だこの胸騒ぎは。何か起きるのか？）

「どうかした？」

美優は難しそうな顔をしている優也に気付き、声をかけた。

「何でもない」

「いや。そんな顔されて何でもないなんて言われても、説得力無い

よ。あっ！分かった！薫のラブレターが気になるんだ！」
「それはない」
美優の言葉に、優也は冷めた目で否定した。
「そんな冷めた目で見ないでよ……」
優也の冷めた目に美優は落ち込んだ。
そんなやり取りをしていると、チャイムが鳴る。
「こんな時間に誰だろ？」
美優の言うとおり、今は夜の9時だった。
「とりあえず、出てみるか」
優也は玄関に向かった。
そして、優也が玄関を開けようとした時、何かに気が付いた。
（これは……血の臭い！）
優也は一気に扉を開けた。
「椿！彪牙！」
そこには、頭と右肩に怪我をし、横たわっている彪牙と、ボロボロの薫が居た。
「ひゅ、彪牙さんを……」

薫は糸が切れた様に、倒れた。

「椿！」

優也は薫が地面に倒れ込む前に、抱き抱えた。

「椿！いや……先に彪牙か！」

薫の容態も気になるが、それよりも彪牙が危なかった。
頭と右肩に大きな怪我をし、体中もボロボロだった。
頭と右肩には薄く凍らされていて、出血は止まっていた。

「美優！」

優也は美優を呼んだ。

「どうしたの……！薫！彪牙！」

玄関に来た美優が見た物は、怪我をした薫と彪牙だった。

「今すぐ運ぶ！手伝え！」
「う、うん！」

二人は薫と彪牙を、中に運んで行った。

翌日。
優也の部屋には、優也と美優、怪我をした彪牙と薫、そして連絡を受けた進と総司だった。

「大丈夫なのか……」
「椿は大した怪我は無いから安心だが、彪牙は怪我が酷い。椿が出血を止めていたから、命に別状はないと思うが……」
「いつ目を覚ますか分からないですね」
「ああ」

優也の言葉を総司が代弁し、話した。
実は二人の応急措置には、優也だけでは難しく総司にも手伝ってもらった。

「一体何が……」
「うっ……」
「薫！！」

すると、薫が目を覚ました。

「ここは……」
「私の家だよ」
「そうだ！彪牙さんは！っ！」

薫は彪牙の事を思い出し、起き上がろうとしたが、勢い良く起き上がろうとしたことに、体が傷んだ。

「駄目だよ薫！まだ寝てなきゃ！」
「彪牙なら大丈夫です。そこで寝てます」

総司が指を差した方を見ると、傷だらけの彪牙が眠っていた。

「良かった……」

薫はそれを見て安心した。

「椿。何があったんだ」

「……襲われたんです。手紙である所に呼び出されて……」

「手紙って、まさか！」

「はい」

薫は呼び出された場所で何があったのか、話した。

男の事や自分の能力が効かなかった事を

「彪牙さんは私を庇ったせいで……」

「薫……」

薫の悲しそうな顔に、声をかける事が出来なかった。

すると、優也が立ち上がった。

「今から、そこに行く。お前等はここで待ってろ」

「おい！まだそいつが居るかも知れないんだぞ！」

出ていこうとする優也を、進が止めた。

「居るなら好都合だ」

「待ってください。私も行きます」

「薫！」

薫は痛む体を、抑えながら立ち上がる。

「もしあの人が居るなら、訊きたい事があるんです」

薫の目は真剣で、優也の目を見て離さなかった。

「……俺よりも前に出ない事。その男が現れたら隠れるか逃げる事。それが守れるなら連れて行ってやる」

「！はい！」

「薫が行くなら私も！」

「俺も行く！」

美優と進も優也達と一緒に行く事を決めた。

「彪牙を一人にしておく訳にはいかないので、僕はここで待ちます」

「頼む。行くぞ」

彪牙を総司に頼み、優也達は薫が言っていた山に向かった。

（椿が言っていた事が本当なら、二人を襲ったのはあいつしかいない）

優也はそんな事を考えながら、山に向かった。

優也達は、彪牙と薫が襲われた場所に着いた。

「な、何だこれ……」

そこは、巨大なクレーターが出来ていた。

「そいつがやったのかよ……これ」

「はい。多分」

薫も目が覚めた時には、こうなっていて、正直よく分からなかった。

「こんな事になってるのに、何で誰も気付かないんだろ？」

「ここがそう言う所だからだよ」

美優が呟いた瞬間、声が聞こえた。

それは、薫にとって聞き覚えのある声だった。

「貴方は！」

「もう目が覚めたか。流石だな。だが、怪我人は連れて来るもんじゃないだろ。優也」

「えっ！」

その男は突然優也の名前を呼んだ。

「久しぶりだな。優也」

「やっぱりお前だったか。龍」

優也は振り返り、男の名前を呼んだ。

「知り合いなのか！？」

「まあな。龍、何で椿と彪牙を襲った」

進の問いに、短く答え、龍と呼ばれた男に訊いた。

「力試しだ」

「力試し？何でそんな事を！！」

薫はその言葉に我慢が出来なかった。

力試しと言う理由だけで、彪牙は死にかけたからだ。

「理由が知りたいか？なら」

龍は大剣を出現させ、優也に向けた。

「俺を倒してみろ」

「……」

優也は歩き、龍に近づいて行く。

「優也君！？そんな挑発に乗る事ありませんよ！」

「知り合いなんだろ！だったら尚更……」

「尚更、俺が倒さなきゃならないだろ」

「優也……」

美優は優也を心配そうな表情で見つめていた。

「安心しろ。俺は負けない」

優也はそれだけ言うと、龍に近づいて行った。

（何だろう……嫌な予感がする。優也に何か起こりそうな……）

美優は大きな不安に襲われた。

「龍、何を考えている。お前が何の考えもなくこんな事はしないだろ」

「さっきも言っただろ、知りたかったら俺を倒して見ろってな」

龍は大剣を片手で構え、いつでも闘えるようにした。

「そうだな。来い」

優也がそう言った瞬間、龍は優也に向かって大剣を振り下ろした。
優也は高く飛び、その一撃を避け、刀を抜き、炎を灯した。

「“鳳凰激”！いける！」

進は優也の勝ちを確信した。

「それで避けたつもりか？」

龍はすぐさま反応し、優也に向かって突きを放った。

（しまった！）
「優也！！」

大剣は優也を貫いた。

第１３話　圧倒的な力（後書き）

漆黒
「皆様の応援を受け、一気に書き上げてみました！」
優也
「本当にありがとう」
美優
「皆のおかげで頑張って行けそうです！」
漆黒
「神崎はやて様、幻想の守護者様、Ａｉｒ様、２４９様！コメント本当にありがとうございます！暖かいお言葉に、リアルで泣きそうになりました」
美優
「これからも応援、宜しくお願いします！」
優也
「次回も宜しく頼む」

次回
第１４話　心に潜む者
優也
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第１４話　心に潜む者

血塗られた黒き夜叉が目を醒ます。

第１４話　心に潜む者

「「優也！」」
「大丈夫！避けてる」

龍の大剣は優也の腹を貫かず、横腹を掠めた。

「腰をひねって串刺しは避けたか、思ったよりは良い反応だな。だが」
「！」
「甘い！！」

龍は優也ごと大剣を振り払い、優也を地面に叩き付けた。

「くっ……」
「どうした。もう終わりか」
「まだだ……“炎鳥”！」

優也は立ち上がり、“炎鳥”を放った。

「こんなちんけな鳥で、俺を倒せると思ったか」

“炎鳥”は片手で止められてしまった。

「思ってないさ。“鳳凰激”」

優也は龍が“炎鳥”を止めている瞬間に、龍の後ろに回り込み、“鳳凰激”を放った。

「やった！今度こそ！」

「いや……まだです！優也君！！」

すると、龍を包み込んでいた炎が消え、無傷の龍が現れた。

「ちっ！」

優也は反撃が来る前に、龍と距離を取った。

「何だよあいつ！何で優也の炎が効かないんだ！？」

「分かりません。ただ、私の氷も、あの人には効きませんでした……」

「無だ」

二人の疑問に優也が答えた。

「無……まさか！」

「あいつの能力は、能力の無効果だ」

「「！」」

能力の無効果。

つまりこの男には優也の炎が全く効かないということになる。

（無効果って言っても、所詮俺の能力の一部に過ぎないけどな）

龍はその会話を訊きながら、そんな事を考えていた。

「降参でもするか？」

「誰がするか」

優也は再び刀に炎を灯した。

「何度やっても無駄だ」

“鳳凰炎舞”！」

龍の言葉を無視し、優也は“鳳凰炎舞”を放つ。

刀から放たれた炎は渦を巻き、龍に襲いかかる。

「フンッ」

その炎は、龍が手を触れると、消えていってしまう。

「無駄だって言って……！」

龍が炎を消している間に、優也は龍の懐に入っていた。

「そうか！いくら能力を消せても、あの炎を消す間は動くことは出来ない」

「それなら！」

「今度こそいける！」

優也は刀を振り上げ、龍に斬りかかった。

「終わり……ぐっ！！」
「「「！！」」」
その刃は龍に届く事は無かった。
優也の刀が龍に届く前に、龍の大剣が優也の刀を叩き付けた。
「惜しかったな」
龍はそう言うと、優也に斬りかかった。
「っ！！」
優也は刀で止めようとするが、龍の力に押し負け、吹き飛ばされる。
「こいつ……強すぎる……」
「優也君がここまで……」
今まで誰よりも強かった優也が、手も足も出なかった。
「やっぱりな、随分と弱くなったな」
龍は優也を見据え、言い放つ。
「優也が……」
「弱い……？」
龍の言葉が理解できなかった。
優也の強さは、今まで何度か見てきた。
それは誰が見ても、疑いの無い強さだった。

「優也、お前、こいつ等に何も話してないのか」
美優達の反応を見た龍は、呆れた表情で優也を見た。
「良い機会だ。教えてやるよ。昔のこいつを」
「龍！お前……！」
美優達に訊かれたくないのか、優也は声を荒らげる。
だが、そんな優也を無視して、龍は衝撃的な言葉を言い放つ。
「こいつは過去に数えきれない程の人間を斬り殺している」
その頃、流香は生徒会室で暇をもて余していた。
「暇ね。今日に限って優也達は休みだし、サボりかしら」
流香が愚痴をこぼしていると、携帯に電話があった。
「あっちから電話してくるなんて、珍しいわね」
流香は少し驚きながら、電話に出た。
「あんたから電話して来るなんて、何かあったの？」
『ああ。実はお前に頼みがある』
「何よ。頼みって」
『龍が優也と闘っている』

流香はその言葉に、驚きを隠せなかった。

「馬鹿！何でその事を早く言わないのよ！今の優也じゃ、龍には勝てない」

流香は焦りながら、電話の相手に、怒鳴り散らした。

『正もそっちに向かってる。お前も向かってくれ』

「分かってるわよ」

流香は電話を切ろうとした。

『龍と闘っている時の優也には気をつけろ』

その言葉に、流香は一瞬手を止めたが、すぐに電話を切り、窓から外に飛び出した。

「優也君が……人殺し……？」

「お前……ふざけたこと言ってんじゃねえぞ！！」

進は龍の言葉に激怒した。

「なら、本人に訊いてみろ」

「優也……？」

「……」

優也は何も言わず、うつ向いていた。

「嘘だろ……」

「嘘じゃない。本当だ」

美優達には、とても信じられなかった。

いつも自分達を守ってくれていた優也が、過去に大勢の人を殺していた事に。

「人を殺したことに罪悪感を感じて、人を殺す事を禁じて、誰かを守るためにその能力を手に入れた。それがこのざまか」

優也は立ち上がらず、うつ向いていたままだった。

「所詮お前は人斬りでしかない。他の何かになれはしない。それが分からないのなら」

龍は優也から、美優達に目線を移した。

「あいつ等を、殺して分からせてやる」

「！」

龍の言葉に、薫は鉄扇を取り出した。

「進君！美優ちゃんを連れて逃げて下さい！」

「何言ってんだ！お前、体ボロボロなんだろ！」

進の言うとおり、薫は充分に闘える体ではなかった。

「戦うつもりなら相手してやるよ。まあ結果は見えてるけどな」

「くっ……！」

龍の言うとおりだった。

二人がかりで手も足も出ず、優也でも歯が立たない。

そんな相手に、ボロボロの自分が勝てる筈がなかった。

「何で黙ってる。こいつ等が殺されても良いのか」

再び目線を優也に向ける。

「？」

そこで見たものは、体がぶれた優也だった。

「！」

すると、龍の真下から顔に向かって、刀が襲いかかった。

優也はいつの間にか、龍の真下に潜り込んでいた。

「くっ！」

龍は刀が届く前に、優也を蹴り飛ばした。

優也は吹き飛ばされはしたが、すぐに立ち上がる。

（！動きが……変わった……）

さっきまでは、炎を使うことで龍の懐に入り込んでいたが、今のは能力は一切使っていなかった。

しかも、龍が初めて焦った表情をしていた。

（今のは、まさか……。試してみるか）

龍はニヤッと笑い、優也に向かって行った。

（！まさか……）

薫は、龍が何をしようとしているのか、気付いた。

「優也君！！逃げて！」

それは、彪牙に致命傷を負わせ、巨大なクレーターを作った技だった。

薫の叫びに応じず、優也は待ち構えた。

「“月牙”」

大剣を振り下ろした瞬間、轟音が鳴り響いた。

「きゃっ！」

「うっ！」

「っ！」

その一撃に辺りは砂ぼこりに包まれ、何も見えなくなった。

（避けられた！何処だ……）

龍の技は優也に当たる事は無かった。

その瞬間、龍の後ろから優也が襲いかかった。

（ワンパターンだな！）

龍は振り向き様に、大剣を振り上げた。

「……」

「！」

優也は大剣を、回転しながら避ける。

そして、その遠心力を利用し、龍の横腹を斬りつけた。

「がっ……！」

龍は吹き飛ばされ、木に叩き付けられる。

その威力に、木は薙ぎ倒され、砂ぼこりが舞った。

優也達を包んでいた、砂ぼこりが晴れる。

「優也……」

そこには、美優達に背を向けている優也がいた。

だが、そこには龍は居なく、美優達の近くには、砂ぼこりを上げ、薙ぎ倒された木があった。

「柄で防御しなかったら、真っ二つにされる所だった」

砂ぼこりから龍が現れる。

柄には少し、斬り口が入っており、右の横腹と額から、少し血が流れていた。

「やっとお目覚めか」

優也が振り返る。

「黒夜叉」

振り返った優也の目は、以前とは異なっていた。

「「「！」」」

眼球は黒くなっており、瞳は美優が言っていたルビーのようではなく、血のように染まった瞳だった。

「ゆ……優也？」

「龍。これ以上ふざけたことを言うのなら」

優也が龍を睨み付ける。

「お前を殺す」

優也がそう言い放つと、美優達は寒気がした。

「「「！！？」」」

その瞬間、美優と進は体を震わせて、座り込んでしまった。

薫は立っていたが、体が震えていた。

（怖い。怖い怖い怖い怖い怖い怖い！）

（体の震えが……止まらない！）

（動けない……一瞬も気を抜けない……これが……）

優也と龍は駆け出す。

（本当の優也君！）

二人はすれ違い様に、斬りつけた。
優也は肩を少し斬られ、龍は体中を斬られた。

（相変わらず速いな！）

龍は振り向き、優也に追撃しようとした瞬間、

「！」

龍の大剣の柄が、切り落とされていた。
さっき優也の斬撃を防御した際に出来た切り口から、すれ違い様に切り落とされていたのだ。

「っ！」

龍が大剣に気を取られている瞬間を狙って、優也が大剣を蹴り飛ばす。
大剣に気を取られていた龍は、反応が遅れ、大剣を手から落としてしまう。
優也は武器を失って、丸腰になった隙を逃さず、龍の肩を斬りつけた。
斬りつけられた、龍の肩から血が吹き出る。
すると、龍は口元を上げ、笑った。

（！刀が抜けない。筋肉で止めているのか……！）

優也は何かに気付き、刀を離し、空中で体を反らした。

「！！」

その瞬間、優也の居た場所を、龍の大剣が横切った。
完全には避けきれず、優也の胸からは血が吹き出る。

「ちっ！」

大剣は龍の手に戻った。

「くっ……」

優也は、龍の肩に刺さったままの刀を蹴り上げ、龍から距離をとる。
刀は空中を回転しながら、優也の手に戻った。

「な、何が……起こったんだ……」

その一瞬のやり取りは、美優達には分からなかった。

「そ……そんなことより……優也を、と……止めなくちゃ……」

美優は恐怖で震えながらも、何とか喋ることが出来た。

「無駄だぜ」

すると、彪牙が総司に肩を借りながら、総司の能力を使って現れた。

「彪牙さん……」
「僕達には止められません。彼等は完全に自分達の世界で闘っている」

優也達の世界。
それは恐らく、優也が人を殺していた世界の事だろう。

「この闘いを止められるのは、あいつ等と同じ世界で生きてきた奴等だけだ」

美優は優也の後ろ姿を見て思った。
これ以上闘えば、優也が消えてしまいそうだと。

「楽しくなってきたが、次で終わらせるか」
「そうだな」

優也は刀を鞘に収め、居合いの構えをとる。

「これで最後にするつもりだ」
「生か死か。それとも相討ちか」

美優は優也に手を伸ばす。
当たり前の様だが、その手は優也に届く事は無かった。
優也と龍は同時に駆け出す。
優也は居合いを放ち、龍は大剣を振り下ろす。

「優也！！」

金属音。
聞こえたのは、肉が斬れる音ではなかった。

「「「！！」」」
「あれは……」
「誰だ？」

優也と龍の一撃は、二本の刀を持った、白髪の男に止められた。

「お前……」

「正か」

二人は構えを解き、正と呼ばれた男を見る。

「あんた達!!武器を収めなさい!」

すると、流香が駆けつけ、闘いを止める様に叫ぶ。

「流香さん!?」

「流香か……」

「おい、龍」

すると、正は龍を呼ぶ。

「これ以上やるなら、俺が相手してやる」

二人は睨み会う。

だが、龍はすぐに大剣を元のブレスレットに戻した。

「ふん。止められた時点でやる気なんて無くなったよ」

龍は何処かへ、歩き始めた。

「龍!」

「吸血鬼が日光の下に居たら死ぬぞ」

「分かってるわよ」

流香はムッとすると、日影に隠れた。

「優也、これ以上甘い考えを捨てないなら、すぐに死ぬぞ」

優也は鋭い目で龍を睨む。

「せっかく俺が身を挺して教えてやったんだ。覚えておけよ」

そう言い残し、龍は何処かへ消えていった。

「あの、流香さん……」

「訊きたいことがいっぱいあるでしょうけど、まずはここから離れましょう。この山は妖怪の住処だから」

「はぁ!?妖怪の住処!?」

「そうよ。だからこの山には妖気が充満してて、そのせいでここで何が起きても、外から見たら、普通の人間には何も起こってない様に見えるのよ」

「だから、誰も気が付かなかったんですね」

総司はその理由に成る程と言ったように、頷いた。

「優也、とにかくあいつ等には説明はしないといけないだろうから」

「ああ、わかっ……」

「優也……？」

優也は突然、自分の額を殴りつけた。

『！！』

優也の額からは血が流れ落ちる。

「皆、これから俺の事を話す。訊いてくれるか……」

優也は美優達に振り向いた。
その目は、いつものルビーの瞳で、眼球は元の白色に戻っていた。

「あ……よかった！元に戻ったんだ優也！」
「！！」

優也が元に戻った事に、美優は嬉しさのあまり、優也に抱き着いた。
優也が怪我をしていることを忘れて。
優也は痛みで倒れてしまった。

「！！ああ！優也ぁ！」
「何やってんだぁ！？」
「早く止血しないと！！」

正はその光景を、呆然と見ていた。

「慌ただしいな」
「最近はあんな感じらしいわよ。とにかく、移動しましょうか」
「それなら僕に任せて下さい」

総司は空間移動の為の、準備を始めた。

「あいつ等、俺達の事話して大丈夫と思うか？」
「あの子達しだいよ。それに……いつかは話さないといけないんだし」

流香の声は、風の音に消されていった。

総司の能力で、美優の家に移動していた。

「まずは、自己紹介だな」

正は立ったまま、自己紹介をする。

「風魔正だ。お前等の事は一応訊いてるぜ」

「風魔？それってあの忍者の集団じゃあ……」

「俺は忍者じゃないけどな」

正は少し困った様に笑った。

「それも含めて説明するわ」

美優達は息を呑む。

龍が言っていた事や、今まで教えられなかった優也の過去が分かることに。

第１４話　心に潜む者（後書き）

美優
「黒夜叉？それってまさか」
漆黒
「最初に言っておく。パクリです！」
進
「はっきり言った！！」
漆黒
「白夜叉の異名が、かっこ良すぎてやっちゃった。てへっ♪」
美優
「てへっじゃないでしょ！」
薫
「詳しい事は次回に」

次回
第１５話　過去と疑心
美優
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第１５話　過去と疑心

山の中、龍は一人で歩いていた。

「お疲れさま」

気の影から、声がした。

「どうだった？」

「鋼鎧寺彪牙と椿薫は鍛え方しだい、霧藤総司とは、戦ってないですけど、能力の使い方しだいで使える様にはなると思います」

龍は立ち止まり、声の人物に答える。

「そっかぁ。それじゃあさ、優也君は……？」

「黒夜叉は不完全な目覚めでも充分に使えるが、火渡優也は駄目だな。今のままなら、弱くなり続けて、すぐに死にますよ」

龍は無表情で、キツく言い放つ。

「相変わらず、キツイ言い方だね」

声の人物は呆れた様に呟く。

「当たり前だろ。あいつのしてることはただの偽善ですよ」

「そう言えば君、彼女にも同じ事を言ったよね」

「……」

龍の無表情が少し崩れる。

「彼女のしていたことは確かに偽善かもしれない。でも彼女は……彼女達はそれでも世界を一時的にでも救った。それは君も知ってるよね」

「……」

龍は思い出すように、空を仰ぐ。

「それに優也君は……」

「優也はあいつとは違う。それに優也がまだあのままなのは、あいつがまだ優也を認めて無いからだろ」

龍は何処かへ歩き出す。

「それに、俺は俺の目的を果たせたらそれでいい」

そして、暗闇へ消えていった。

「まったく、世話のかかるガキ共だね」

その声の人物も消えていった。

第15話　過去と疑心

その頃、流香は自分達の事を話していた。

「龍から訊いたわね。優也の事」
「確か、過去に人を殺した、だったか……？」
流香の問いに、彪牙が答える。
彪牙と総司は、龍との闘いの事を、美優達から訊いていた。
「あれは優也だけじゃない。私も、正も、龍だって同じよ」
同じと言うことは、流香達も過去に人を殺していた事になる。
「何で……そんな事を……」
薫は声を震わせていた。
「それは……」
正は薫と目があった。
「／／／」
すると、正は顔を赤くして、目を逸らした。
「？」
急に目を逸らされた事に、薫は小首を傾げた。
（！／／／止めろ！そんな上目遣いで俺を見るな／／／！！）
正は手で顔を隠す。
ちなみに、身長差は約２０ｃｍ

（えっこいつ）
（まさかですよね……）
（惚れたな）
（惚れたわね）
（分かりやすっ！）
（見てるこっちが恥ずかしいくらい、顔が赤いなおい）

正の態度に、優也達は、正が薫に惚れた事にいち早く気付いた。

「えっ？何？何ですか？」

どうやら、薫は鈍感らしい。

「とにかく、話を戻すわよ」

話が進まないので、流香が無理矢理戻した。

「私達はある戦いに参加していたの」
「ある戦い？」
「８年前に人間や妖怪、色々な種族が戦争を始めたんだ」
「戦争……」
「優也達はそれに出てたの……？」
「ああ……」

優也は短く答える。

「何でそんな事してたんだよ。８年前っていやあ、お前４歳かそこらだろ？」
「正確に言えば、俺達が戦い始めたのは６年前だな。俺はその時、

7歳くらいだったっけ」

そこで、顔の赤さが抜けた正が、彪牙の問いに答える。

「それでも6歳……って！あんた俺と同い年か！！」

正が自分と同じ年齢だと言うことに、彪牙は驚きの声を上げる。

「そんなに驚く事じゃねぇよ」

「いやっ、背ぇ高ぇし、白髪だから歳上だと思ってよぉ」

「彪牙だって背、高いじゃん」

彪牙と正には、ほとんど身長差が無く、彪牙が言っても説得力が無かった。

「ちなみに、龍は俺の一つ下だぜ」

「嘘だろ！あれで同い年！？」

龍は、進とは３０ｃｍ近くの身長差があり、とても同い年には見えなかった。

「最近の中学生は随分と大きいですね」

「そうですね」

二人は優也を見る。

「どうせ俺は背が低い」

優也はそう言うが、大して気にした様子ではなかった。

「いいかしら」

また話を遮られた事に、流香は今にも噛みついて来そうだった。

「ごめんなさい……」

「続きをどうぞ」

噛みつかれそうな気配に気付き、真剣に話を訊く。

「私達が戦いに参加した時には、もう戦争は人間の勝利で終わってたわ。神様が人間に力を貸した事でね」

「神様？」

「ええ。人間に力を与えたの。そして勝利した。それで終わる筈だった……」

流香は一度、言葉を止める。

「筈だった？」

「力を持った人間達が集まって、世界を手に入れようとしたしたんだ。そしてそいつらは、それに反抗した人間達を殺し始めた」

戦争を止めた人間達が再び戦争を起こす。

その事実を知り、言葉が出なかった。

「私と正、龍と優也、それともう一人、私達はその組織に居たのよ」

「お前等は……何で人殺しの手伝いなんかしてたんだよ！」

彪牙は我慢が出来ずに、声を荒らげ立ち上がる。

「あの時の私達は、考える事を忘れていたのよ」

「だからって！」

彪牙は流香の胸ぐらに掴みかかろうとする。

「フンッ！」

「っ～～～～～～～～～～！！！！！」

総司は彪牙の右肩を叩いた。

そこは龍に斬られていた場所だった。

その痛み、打たれ強い彪牙も蹲った。

「てめえ……」

「落ち着きなさい」

彪牙は総司を睨み付けるが、総司は落ち着くように諭す。

「暴れるなら話を全部訊いてからにしてください」

「……わかったよ」

彪牙は大人しく引き下がった。

「悪いわね……」

「いえ、それで、何故考える事が出来なかったんですか？」

「……家族が居なかったからだ」

「！」

正の言葉に、美優は目を見開く。

それを知ってか知らずか、流香は話をする。

「私達の家族は、戦争で死んだわ。それで私達の居場所が無くなる

と同時に、組織に引き取られて、すぐに殺しをさせられた。ただ力があるだけの子供にね」

流香の悲しそうな表情を見て、誰も声が出せなかった。

「……あの人もそうなの？優也達が闘った、えっと」

「ああ、月臣龍だな。あいつの事はよく分からないな」

「何で知らないんだよ。一緒に居たんだろ」

「あいつは自分の事を、何も話さないんだよ。ただ分かってるのは、初めからあそこに居たって事だけだ」

進は優也と流香を見るが、二人共分からないと言った表情だった。

その頃の龍。

龍

「はっくしょん！！あ～、誰か噂でもしてるのか？」

「結局、組織は神様が潰したらしいけどな」

「神様が……それは人間に力を与えたから、自分で責任を取ったという事ですか？」

神様が人間に力を与えた事で戦争が終わったが、そのせいで、人間同士が争うことに、神様が黙っていられなくなったと薫は考えた。

「多分そうだと思うわ。私達も詳しくは知らないから」
「そうなんだ……」
「と、とにかく！これでこの話は終わりだよな」

若干、場の空気が悪くなって来ていたので、進はとりあえず話を終わらせようとする。

「いや、まだた」

だが、正がまだ話があると言う。
その表情は先程より真剣だった。

「6年前って訊いて、何か気付かなかった？」
「6年前？」
「あ……」

6年前と訊き、前に一度、優也と薫が言っていたことを思い出した。

「まさか……」
「そのまさかだ。6年前……椿一族を滅ぼしたのは……俺達だ」
「えっ……」

薫は自分の耳を疑った。
自分の友達が、自分で一族の仇だと言うことに。

「椿一族が、組織を潰すために動いている事に気付いた組織は、椿一族を滅ぼす為に動き出した」
「それに、俺と正、それとさっき言った、もう一人も参加したんだ」
（やめて）

優也達の声を、薫は拒絶する。
だが、その声は薫の耳に入ってくる。

「薫……？」

美優は薫の様子に気付き、声をかけるが、薫は顔を青ざめ耳を塞ぐ。

（やめて！）
「おい！薫！」

進も心配になり、薫に話しかける。

（やめて！！）

だが、今の薫にとっては心配の声も、自分の心を壊すものでしかなかった。

「やめてぇ！！！」

薫は叫び声を上げ、出ていってしまった。

「薫！？」
「待てよ！！」

美優と進は、薫を追いかけていった。

「優也……てめえ！！」

彪牙は優也を殴り飛ばす。

優也は抵抗もせず、壁に叩き付けられる。

「何で……何でてめえはぁ！！」

「彪牙！落ち着いて下さい！」

再び優也に殴りかかろうとする彪牙を総司が止めに入った。

「離せ！こいつはぁ！！」

「君が優也君と同じ立場だったかもしれないんですよ！！」

「っ！……くそっ！！」

総司の言葉に、彪牙は出ていった。

「彪牙！」

「総司……だったわね。貴方は彼を追いかけて」

「……分かりました」

総司は一度優也を見ると、彪牙を追いかけた。

「優也、大丈夫か」

「ああ……」

優也は壁にもたれ掛かったまま答える。

「分かってた……事だったんだけどな……」

そう言う優也の表情は、悲しそうな表情だった。

その頃、薫はかなりの距離を走ったため、息が上がり立ち止まっていた。

「ハァ……ハァ……私は……」

薫は呟く。

さっきの優也と正の言葉に、まだ頭が混乱していた。

「私は……どうしたらいいんだろう……」

心の何処かで、一族の仇をとりたいという気持ちが少しはあった。

だが、その仇が自分の友達だという事に、薫はどうしたら良いか分からなくなってしまった。

「私は……」

「お前が何をしたらいいかなんて、決まってるだろ」

すると、薫の後ろから水色の髪の男が、近づいて来た。

「誰！！……あっ！」

薫は突然の声に驚き、後ろを振り返った。

「修二……兄さん！」

「久しぶりだな。薫」

その人物は、薫の兄だった。

「生きてたんですか……」

「まあ何とかな。ところで薫」

修二は薫にある言葉を言い放つ。

「俺と一緒に黒夜叉達に復讐しないか」

それは今の薫にとって、悪魔の囁きだった。

「！」

「お前が黒夜叉と友達なのは分かってる。だが良いのか？椿一族を潰しておいて、のうのうと生きている奴等を許して」

修二は薫に手を差し出す。

「行こうか。薫」

薫は手を伸ばし、修二の手を掴んだ。

「薫。奴等に復讐をするぞ」

「……はい」

そして二人は、暗闇へ消えていった。

第１５話　過去と疑心（後書き）

「薫……最近来ないね」

消えた親友

「くそっ！！」

荒れる心

「お前っ！」

そして、

「火渡優也。貴方を倒します」

変わった友

「復讐させてもらおうか」

現れる復讐者

「お前とは目的が同じだけで、仲間じゃない」

そして妖怪達

「俺達は復讐される側だ」

殺しの罪

「こんな時に、俺は何も出来ないのかよ！」

無力を呪う者

「見せてやる。朱雀の力を！」

解き放つ炎

「随分と集まったな」

雷鳴と共に現れた銃士

「この時を、ずっと待っていた」

雷鳴に闘いを挑む幻影

「お前に何が分かる！！」

復讐者の叫び

「みんな……」

この物語の先にあるものは、

「さようなら」

醜く散る物語か

「薫ううううううう！！！！」

それとも

「舞い上がれ」

咲き誇れる物語か

次回

第16話　壊れた友情

薫

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第１６話　壊れた友情

薫を探しに行った美優と進だが、結局見つける事が出来ず、明日になれば学校で会えると思い、諦めた。
だが、薫は学校には来なかった。

第１６話　壊れた友情

あれから五日、薫は何の連絡もせず、学校を無断で休んでいた。

「薫……最近来ないね」

空いた薫の席を見て、美優が呟いた。

「あんな話を訊かされたからな」
「……」

優也は何も言わず、ぼうっと薫の席を眺めていた。

「優也……」

美優はそんな優也を見て、どう声をかけていいのか分からなかった。

「よし！今日は薫の家に行こう！」

すると、進が二人にそう提案した。

「水野……」

「確かに龍って奴と闘ってたお前は怖かったけど、あれは俺達を守ろうとしてた訳だろ」

進は周りには聞こえないように、小さい声で話す。

「お前も訊いただろ。俺が昔に何をしてたか……」

「お前が昔に人を殺したなんて事、言われてもピンと来ないんだよ。むしろ、お前があんなに強い理由がよく分かったって感じだよ」

進はいつもと変わらない様子で喋った。

「それにお前は火渡優也だろ」

「……」

優也は表情には出さなかったが、心の中では驚いていた。

「それじゃあ！今日の放課後、薫の家に行くことに決定！」

突然、今まで黙っていた美優が話に割って入る。

「おい……」

「薫はね、どうしたら良いか分からないだけだよ」

美優は進と同じ様に、小声で話し始めた。

「だから、ちゃんと話し合おうよ。ねっ！」

「……分かったよ」

そして、優也達は薫の家に向かうことになった。
それが、戦いの始まりだと知らずに。

その頃、彪牙は学校をサボって街中を、不機嫌そうに歩いていた。
周りの通行人は、そんな彪牙を怖がり、道を空ける。

「……」

彪牙はこの間の事を思い出し苛ついていた。

「くそッ！！」

その苛立った心を、何にぶつければいいのか、分からずにいた。

「随分と荒れてますね」

そこに、総司が現れる。
今回は能力は使わなかった。

「君の気持ちが分からないわけでは無いですけど、少し落ち着いたらどうですか？」
「うっせぇ。てめえだって苛ついてるくせに……」

彪牙の言葉に、総司は眉をひそめる。

「てめえの能力を使ってもお前の探してる奴が見付からなくて、顔

には出さねえけど、ずっと苛ついてたんじゃねえのか。そんな奴に一々言われたくねえよ」

彪牙はそのまま何処かへ歩いて行ってしまった。

「まったく、君にだって言われたくないですよ」

彪牙の後ろ姿を見て総司は呟いた。

チャイムの音が鳴り響く。　だが、誰も出てこない。

「……」

美優はもう一度押してみるが、出てくる気配はない。

「……」

だが、美優は諦めずに押し続ける。　何度も、何度も、何度も、何度も、

「うるせえよ！！」

チャイムの音を切り裂く進のツッコミが響いた。

「だって、薫出ないんだもん」

「だからってやりすぎだろ！今の２０回位押してただろ！」

「ブブー、違います！」

「２８回」

優也が答えると、チャイムが鳴る。

「優也正解！」

「一々チャイム鳴らすなよ！！つーか数えてたの！？」

「何となく。にしても椿……居ないみたいだな」

美優があれだけチャイムを鳴らしても、まったく反応が無かった。

「どうしたんだろ、薫」

「さあ……って何か寒くねえか」

「そう言えば……」

すると、辺りに冷気が漂い始めた。

「なっ！何これ！？」

「寒い！！」

「これは、まさか……！誰だ！」

優也が振り返り、叫んだ。

するとそこには、鉄扇を構えた薫が居た。

「か、薫？」

「お前……何して……」

「！下がれ！！」

優也が叫ぶと同時に、薫は突っ込んで来た。

「くっ！」

優也は避けずに、手に持っていた鞄を盾にして、鉄扇を受け止めた。

「お前っ……！」

優也が薫の鉄扇を受け止めていると、周りの冷気が強まっていた。

「火渡優也。貴方を倒します」

「！！」

鉄扇を受け止めていた鞄が真っ二つになり、中の教科書が飛び散る。

「……っ！」

優也は鞄を薫に投げつけた。
薫の視界は教科書の残骸で遮られる。

「ちっ！」

その残骸を、鉄扇で弾き、優也に攻撃を仕掛けようとする。

「！」

だが、そこには優也は居なかった。

「！？」

その瞬間、後ろから引っ張られた。
突然の事に、対応出来ず、倒れてしまう。
すると、倒れたまま優也に腕を押さえられた。

「くっ！」
「椿……お前、仇討ちのつもりか……！」
優也は薫を押さえたまま喋る。
その様子を、美優と進は心配そうに見守る。
「仇を討ちたいならいつでも来い！だけどな！美優の目の前でする事じゃないだろ！」
優也は声を荒らげた。
「……」
薫は横目で美優を見る。
そこには、自分達を心配そうに見つめる美優が移った。
「“氷華”」
だが、すぐに目を逸らし、抵抗を始める。
「薫！！」
美優が薫の名前を呼ぶが、薫は反応しない。
「椿……！」
薫が抵抗を始めると、周りの冷気が鋭い氷になり、優也に襲いかかった。
「“乱れ桜”」

「ちっ！」

優也は薫から離れ、氷を避ける。
だが、完全には避けきれず、体中に無数の切傷が出来た。

「……っ！」
「優也！」
「薫……どうして……」

薫が本気で優也を倒そうとしてる事に、美優は困惑してしまう。

「どうしてなんて、決まってるだろ」

すると、突然後ろから声がした。
優也達は後ろを振り向くと、一人の男が立っていた。

「誰だ……？」

優也はその男に問う。

「椿修二。薫の兄貴だ」
「薫の……お兄さん？」
「お前！薫に何かしたのか！」

美優は修二が突然現れた事に驚き、進は修二が薫に何かしたのかと思い、修二に叫ぶ。

「おいおい、勘違いするなよ。これは薫自身が決めた事だ」
「なっ！」
「嘘……嘘だよね！薫！」

修二の言葉を信じられない美優は、薫を見る。

「……」

だが、薫は顔を逸らす。

「！薫……？」

美優は薫を見て、何かに気付く。

「火渡優也……いや、黒夜叉」

修二は優也を睨み付ける。
すると、修二の周りを冷気が漂う。

「（！こいつも氷使い！）美優！水野！隠れてろ」

修二の能力を見て、優也は二人に隠れるように促す。

「復讐をさせてもらおうか」

第16話　壊れた友情（後書き）

漆黒
「初めての長編！」

正
「プロローグ見たいなもんだから、結構早く書けたな」

龍
「短いけどな。しかも前の話で黒夜叉の事を詳しく書くって、二つ前の後書きで言ってたのに書けてなかったな。ホント文才ねえな」

漆黒
「すみません……」

龍
「すみませんで済んだら俺はいらないんだよ」

正
「警察の間違えだろ！」

龍
「ほら、すみませんって思ってるならブーッて泣いてみろよ。この豚が！」

漆黒
「背に腹は変えられない。くそっ！」

正
「やらんでいいわ！さっさと次回予告しろ！」

龍
「仕方無いな。ヘタレのくせに（ボソッ」

正
「誰がヘタレだぁ！！」

次回

第17話　信じる心

龍

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

正

「無視するな！ぶっ潰すぞ！！」

龍

「やってみろよぉ」

正

「いくぜ！！」

漆黒

「ちょっ！こんな所で暴れ……ぎゃあああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！（流れ弾）」

第17話　信じる心

「いくぞ」

修二が両手をかざすと、冷気が集まり、チャクラムが現れた。

「！」

修二は一気に優也との距離を詰め、優也に斬りかかった。
優也は後ろに跳び、チャクラムを避ける。
その後ろから、薫が襲いかかって来た。

「椿……！」

優也は体を回転させ、鉄扇を避ける。

「よく避けたな。まあこれくらいは当然か」

修二のその言葉を他所に、優也は美優と進を見る。
周りが凍るほどの冷気が漂っていて、二人は寒そうに震えていた。
そうしている間にも、周りの温度はどんどん下がっていく。

（このままじゃ二人がもたない！）

優也は炎を出し、氷を溶かそうとする。

「これが朱雀の炎か。初めて見た。だが……」

修二がチャクラムを前に突き出す。

すると、チャクラムから強烈な吹雪が吹き出て、優也の炎と激突する。

「！」

優也の目が驚愕で見開かれた。
優也の炎が少しずつ凍らされていったからだ。

「なっ！」
「どうして！？」

美優と進は、炎が凍らされていくことに驚く。
炎は氷に強いことは誰にでも分かることだ。
美優は前に一度、優也と薫の闘いを見ているから、よく分かっていた。
それが今、まったく逆になっていたのだ。

「力の差……ですよ」

薫はそう呟くと、説明を続ける。

「例え能力の相性が悪くても、能力者自身の力量が勝っていれば、炎を凍らせることも可能です」

淡々と話す薫の横顔は、以前の面影は無かった。

「薫お前、ホントにこれで良いのかよ！！」

進は薫に掴みかかる。
薫は顔の色一つ変えず、進を見据える。

「くっ！」

その二人の横を、修二に吹き飛ばされた優也が、横切る。
優也は体勢を整え、凍った地面に何とか立つ。

「優也！」
「この程度か？」

美優が優也を心配そうに呼ぶと、修二が歩いてくる。

「こんなんじゃあ、簡単に殺しちまうぞ」

修二の、憎悪や復讐に取り付かれた目を見て、美優と進は寒気がした。

「……兄さん、全力ではない彼を倒しても、意味はありません」

薫は修二の横に立ち、そう告げる。

「確かに、復讐したいのは、全力を出せない黒夜叉じゃなく、全力の黒夜叉だしな」

薫の言葉に、修二は納得した表情をした。

「とりあえず、今日はこの辺で良いだろ」

修二がチャクラムを消すと、修二と薫の周りを冷気が漂う。

「黒夜叉。明日、妖怪共の山まで来い」

修二は優也に指を指し、告げる。

「そこでお前を殺す。その次は、他の二人だ」

冷気が二人を覆い隠す。

そして、冷気が晴れると、そこには二人は居なかった。

第17話　信じる心

修二と薫は、優也と龍が闘った、妖怪の山の中を歩いていた。

「よう、いきなりやり合って来たみたいだな」

その二人の前に、数匹の妖怪と、一人の赤毛の大男が現れた。

「誰ですか？」

薫は数匹の妖怪に警戒しながら、修二にその大男の名前を尋ねる。

「薫は始めてだったな。こいつの名前は、大江咲魔。この妖怪共のボスだ」

「……妖怪ですか」

妖怪達のボスと言うことは、咲魔は妖怪と言うことになる。

薫は鉄扇に手を伸ばし、いつ襲われても良いようにする。

「そんな怖え顔しなくても、喰ったりしねえよ」
「……」
薫は咲魔の態度を見て、鉄扇から手を離す。
「すみません……」
薫は軽く頭を下げ謝るが、警戒は解いてなかった。
「良いぜ、別に」
咲魔は、気にした様子も無く、軽く流す。
「ところで修二。お前にその黒夜叉って奴を譲った覚えはねえぞ」
咲魔は突然、修二に殺気を放った。
「お前とは目的が同じだけで、仲間じゃない」
咲魔はそう言うと、周りの妖怪と一緒に何処かへ歩いていった。
「兄さん、彼は……？」
咲魔の殺気に当てられて、薫は冷や汗を流した。
「あいつは、ちょっと変わった鬼だ」
「変わった……鬼？」
「ああ。あいつは妖怪のボスのくせに、人間を喰おうとしない。それどころか、人間を襲おうとすらしない」

薫のイメージでは、鬼は人間を襲って、そして喰らう。
だから、倒さなければならないと思っていた。

「しかも、仲間を見捨てない。ホント変わってるだろ」

薫は咲魔の後ろ姿を、眺める。

（仲間……）

その時、薫の脳内によぎったものは、薫にしか分からない。

「薫の奴！何考えてるんだ！」

その頃、優也達は一旦、美優の家で話し合っていた。

「復讐が一番の目的だろうな。あの修二って奴も、そう言ってたしな」

「……」

美優は何も言わず、何かを考えていた。

「行くのか……」

「ほっておく訳にはいかないだろ。狙われてるなら尚更だ」

優也はボロボロの制服を脱ぎ捨て答える。

「そんな所に居ないで、出てきたらどうだ」
「は？」
すると、扉が開き長身の男が入ってきた。
「お前は……！月臣龍！」
「良く覚えてたな。自己紹介した覚えはないけどな」
その男は、優也と死闘を演じた、月臣龍だった。
「何しに来やがった！」
龍の登場に進は立ち上がり、龍を睨み付ける。
「別に、ただ優也が椿共に殺されかけたって訊いてな」
「こいつっ！」
この言葉に進は龍に掴み掛かろうとする。
「落ち着け」
「ウッ！！」
龍に掴み掛かろうとする進の襟元を、優也が掴み、進を止める。
「優也、忘れてるようなら思い出させてやる」
龍は進を無視して優也に言い放った。
「俺達は復讐される側だ」

「……」

優也は何も言わない。

何も言わないというよりは、何も言えないと言う方が正しかった。

「椿薫も、お前への復讐に取り付かれている」

「このっ！」

「違う」

すると、今まで黙っていた美優が、その言葉を否定する。

「美優？」

「薫は復讐に取り付かれてないよ」

美優は龍の目を真っ直ぐ見つめる。

「本当に復讐に取り付かれてたら、あんな辛そうな顔しないよ」

薫が顔を逸らしたとき、一瞬辛そうな顔をしていたことを、美優は見逃さなかった。

「何で分かる？」

「友達だからかな」

美優は確信を持って答えた。

「お前がそう言うのなら、そうなんだろうな」

優也はフッと笑い、龍に向かい合う。

「まだあいつは復讐に取りつかれてない。だったら連れ戻す」
「勝手にしろ……。こういうところもあいつと同じだな……」

優也に聞こえないように、小さく呟きながら出ていった。

「何なんだよあいつ」
「昔から、あいつの考えてることはよく分からない」
「でも、悪い人じゃないと思うよ」
「はぁ!?」

美優の言葉に、進は驚きの声を上げた。

「頭大丈夫か!?あいつの何処がいい人なんだよ!」
「頭は大丈夫だよ?!大体、いい人までは言ってないよ!」

進の言いように、美優は思わずキレかけたが、グッと我慢した。

「上手くは言えないけど、あの人の目が悪い人に見えなかったの」
「そうか?」

龍が自分達を襲い、それで彪牙が死にかけた事は、美優も分かっている筈なのに、何故龍の事をそう言うふうに言えるのか、進にはまったく分からなかった。

「とにかく、明日は朝早く出るから、今日はもう寝るぞ」
「それじゃあ、進は泊まっていく?」
「明日早いなら、尚更そうさせてもらおっかな」

進はそう言うと、くつろぎ始めた。

「一応言うけど、お前は連れていかないぞ」
「はあ!?何でだよ!」
優也はやっぱりかと、ため息を吐く。
「当たり前だ。妖怪だらけの山で、椿もいるのに、俺一人でお前を守れると思うか?」
「分かってる……分かってるよ!けど!」
進は立ち上がり、声を荒らげる。
「こんな時に、俺は何も出来ないのかよ!」
優也達が闘っている時、見ているだけで、何も出来ない自分が、進は悔しかった。
「俺には能力は無いし、喧嘩だって強くない。それでも!何か力になりたいんだ!それが友達だろ!」
進は溜め込んでいた事を吐き出した。
「進」
「!ゆ……優也?」
今まで、苗字で呼ばれていた進は、突然名前で呼ばれた事に、驚いた。
「俺がお前を連れていかないのは、足手まといだからじゃない。友達だからこそ、危ない目にあって欲しくないんだ」

「そんなの、俺だって同じだよ！」

進は内心嬉しかった。

前にも友達と言われたが、今は前よりももっと友達として認められた様な感じだった。

「安心しろ。俺はそう簡単に死なない。だから信じて待ってろ」

「！お、おう！」

進は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに笑顔で答えた。

「よし！これで後は、薫を名前で呼べば完璧だね」

「何がだ？」

「今、進の名前を呼んだでしょ。だから後は薫だけ」

「あっ！そう言えば」

「……！」

優也はさっき、進を名前で呼んだことを思い出し、恥ずかしくて顔を逸らす。

「優也！もっかい……ゴハッ！？」

「寝る！」

優也は進に、頭突きを決め、自分の部屋に戻って行った。

「あっおやす……待って！まだご飯食べてない！！」

美優は、まだ夕食を食べてない事に気付き、優也を追いかけた。

「ちょっ！置いてくな！」

進も立ち上がり、二人を追いかけた。

「……」

「どうしたんだよ？」

その頃、彪牙と総司は近くのビルの屋上に居た。

そこで、突然黙り出した総司を、彪牙は不思議に思い、声をかける。

「薫さんと、薫さんのお兄さんが優也君に襲い掛かりました」

「はぁ！？」

彪牙は驚いた。

薫に兄が居たことにもだが、あの薫が優也に襲い掛かった事には、もっと驚いた。

「それで明日、優也君一人で、薫さんを連れ戻しに、敵の本拠地に行くつもりですよ」

「なっ！？あいつ馬鹿か！」

優也が、無謀な行動をしようとしている事に、彪牙は驚きを隠せずない。

「明日の朝早くに出発するようです。君はどうするんですか？」

「あ？」

総司の質問に、彪牙は短く声を漏らす。

「だから、君はどうしたいか訊いてるんですよ」

彪牙はそれに、すぐに答えた。

「そんなもん、決まってんだろ」

翌朝、優也は刀と黒いコートを持ち、玄関に居た。

「優也、もう怪我は大丈夫なの？」

美優は心配そうに優也に訊ねた。

昨日の薫の攻撃で、体中に無数の切傷が出来ていたからだ。

「ああ、大丈夫だ。ほら」

優也は美優に、腕を見せる。

「ホントだ」

優也の腕には、傷一つ無かった。

「それじゃあ、さっさと行ってくる」

「優也、薫の事……」

美優はまだ心配そうな顔をしていた。

「お前はあいつの事を信じて、ちゃんと約束を守ってろ」
「うん！」

優也の言葉に、美優は笑顔で答える。

「ちゃんと帰って来いよ」
「昨日も言っただろ。俺は簡単には死なないって。だから、信じて待ってろ」
「ああ」

二人は拳を突き出し、ぶつけ合った。

「行ってくる」

優也は扉を開け、妖怪の山へ向かおうとすると、家の前に、彪牙と総司が居た。

「お前等……」
「俺達も行くぜ」

そう言うと、彪牙は優也の目の前に立った。

「俺が気に食わないんじゃ無かったのか」
「そんな事、一回も言ってねぇだろ」

優也はその言葉に、フッと笑いながら歩き出す。

「着いてくるなら勝手にしろ」
「おう！」
「……」

『そんなもん、決まってんだろ。ダチに手ぇ出す奴は誰だろうと……』
『誰だろうと？』
『ぶっ潰す』

（随分と、彼を信頼してるみたいですね）

総司は、昨日の事を思い出していた。

（それは僕も同じですけど）

そんな事を考えながら、総司は二人を追いかける。

「優也！」

すると、美優が優也を呼んだ。

「行ってらっしゃい」

優也は振り返らず、手を振った。

「いくぞ」
「おう！」
「はい」

こうして、過去の事件をきっかけに、闘いが始まる。

第17話　信じる心（後書き）

漆黒
「やっとプロローグ的なものが終わったぁ！！」
優也
「次回から、戦闘ばっかりなんだろ。大丈夫か？」
正
「そして俺の出番は？」
漆黒
「戦闘は自信ないけど、正の出番はあるから、安心しろ」
正
「なら良いぜ！！」
優也
「それじゃあ、ここまで読んでくれてありがとう」
正
「感想も待ってるぜ！」
漆黒
「次回もよろしくお願いします！」

次回
第18話　妖怪の山
正
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

漆黒
「あっ、次回は正の出番無いかも」
正

「はぁぁぁぁぁ！？」

第１８話　妖怪の山

咲魔は森の中、一人で佇んでいた。
そこに、一匹の妖怪が駆け寄ってきた。

「咲魔、何者かが侵入したようだ。おそらく、椿修二が言っていた人間だろう」
「そうか」

その妖怪の報告を訊き、咲魔はニッと笑った。

第１８話　妖怪の山

その頃、妖怪の山に入った優也達は今、

「おい……」
「あん？」
「どうしました？」
「ここ、何処だ？」

迷っていた。

「はぁぁぁぁぁ！？」
「君が呼ばれたんでしょう！？何で迷うんですか！？」

まさかの発言に、彪牙と総司は大声を上げ、優也に詰め寄る。

「仕方無いだろ！この山に来いとしか言われてないんだぞ！それと総司、迷ってない」

優也は二人に反論した。

さりげなく、総司の迷った発言を否定する。

「迷子は迷子でしょう……」

「大丈夫かよ、おい……」

彪牙と総司は、これからの闘いが、不安になってきた。

「とにかくだ。適当に歩いてたら何かあるだろ」

そう言って、優也は森の中を、先々進んで行く。

「ん？」

すると、優也に背を向け、しゃがみこんだ女性が居た。

「（迷子か？）おい、どうした？」

優也は不審に思ったが、その女性は迷子だと考え、話しかけた。

自分も迷子なのに、

（黙れ。タンスに足の小指ぶつけて死ね）

地味な死の宣告！？

事実を言っただけなのに……。

「この山は危ないぞ」

無視かよ。

まあ良いけど。

優也の言葉を訊くと、女性は振り返った。

「早くこの山から……！」

優也が、振り返った女性の顔を見ると、その女性の顔には目も、鼻も、口も、顔にある筈の物が、何一つ無い、のっぺらぼうだった。

「……」

「！？」

優也は一瞬驚いたが、すぐに呆れた表情になり、そののっぺらぼうを蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされたのっぺらぼうは、何で怖がらないの！？と呟きながら、何処かへ走っていった。

「おい！先々行くなよ」

のっぺらぼうが走り去って行くと、優也の後ろから、彪牙と総司が追い付いた。

「ああ、悪いな……」

振り返った優也は、また呆れた表情になった。

その彪牙と総司は、見た目が狐と狸だったからだ。

「……」
「ブッ！！？」

優也は刀を鞘に収めたまま、二人の顔面を殴り付けた。
二人は吹き飛ばされると、ボンっと煙を上げた。
すると、煙の中から狐と狸が出ていき、森の中へと消えていった。

「ったく」

優也は刀を腰に差し、本物の彪牙達の元へ向かう。

「ん？」

だが、何処を探しても、二人は居なかった。

「……はぐれた？」

優也は二人とはぐれてしまっていた。

「チクショウ！！ここは何処だぁ！！」
「うるさいですよ」

二人は森の中を、何処に行けば良いかも分からず、さ迷っていた。

「優也もどっかいっちまうし！！変な妖怪は出るし！」
「簡単に追い払いましたけどね」

二人は優也を探している途中に、首の長い妖怪、ろくろ首に襲われた。
襲われたと言うより、驚かされたが、総司がろくろ首に幻覚を見せ、追い払った。
その時のろくろ首は、涙を流し、大慌てで逃げていった。
どんな幻覚を見せたのかは、総司とろくろ首にしか分からない。

「早く優也君を見付けましょう。さっきの妖怪はふざけた妖怪でしたが、ここは敵の本拠地、いつ強い妖怪が襲って来るか分かりません」

総司が言う通り、この山は妖怪の住処、しかも今は、修二と薫も何処かに居る。
いつ襲われても、おかしくない状況だった。

「それならそれで、別に良いじゃねえか」
「え……？」

彪牙の言葉に、またいつもの喧嘩癖かと総司は思った。

「妖怪共をぶっ倒しとけば、優也と薫の兄貴の邪魔は出来ねえだろ」

だが、彪牙の言葉は、総司が考えていた事とは違った。

「何故、優也君が薫さんのお兄さんと戦った方が良いと思ったんですか？彼は優也君に復讐をしようとしているんですよ」
「じゃあ逆に訊くけどよぉ、俺達が戦って、そいつの気が晴れると思うか？」

彪牙は立ち止まり、総司と向き合う。

「俺達がそいつと戦ったところで、復讐を続ける筈だ。それなら、優也がそいつを倒して、復讐を終わらせた方が良いだろ」

総司

「優也君が負けるかも知れませんよ。例え勝ったとしても、復讐が終わるとは限りません」

総司は静かに言い放つ。

まるで、知っているかのように。

「あいつは負けねえよ。それに、あいつならどうにかしそうな気がするんだよ」

彪牙はニッと笑う。

「そう言うものですかね」

「そう言うもんだよ」

彪牙の言葉に、総司もつられて笑う。

「そうですか。さて、彪牙……気付いてますね」

「ったりめぇだろ」

その瞬間、草影から一匹の妖怪が飛び出し、二人に襲い掛かってきた。

「らぁ！！」

彪牙はカウンターで、拳を妖怪の顔面に叩き込んで吹き飛ばした。

「早速お出ましですか」

総司は手に、自分の武器である、双刃剣を造り出した。
すると、次々と妖怪が現れ、二人を取り囲む。

「一体一体は大した力は無さそうですが」
「多いな」

二人を取り囲んでいる妖怪は、かなりの数だった。

「さて、優也君達の戦いの邪魔が出来ないように、頑張るとしますか」
「お前やれんのか？戦うの久し振りだろ」

彪牙が言う通り、総司が闘う事は、久し振りだった。
優也と出会うまでは、喧嘩相手を探して、そして彪牙が喧嘩をする。
そんな毎日だったので、近頃、総司自身が闘いはしていなかった。

「フッ、可笑しな事を訊きますね。これくらい、どうってことありませんよ」
「そうかよ！」

そう言葉を交わすと、二人は妖怪の群れに向かって行き、彪牙は妖怪を殴り飛ばし、総司は妖怪を斬りつけた。

「来いよ」
「久し振りに暴れるとしますか」

二人の言葉に、妖怪達は一斉に襲い掛かった。

二人が闘っている頃、優也は一人、森でさ迷っていた。

「何処に居るんだ、あいつ等」

二人と合流しようとするが、会うのは驚かそうとする妖怪ばかりで、彪牙と総司どころか、薫と修二にも会えなかった。

「まさか、この山じゃ無いなんて事は無いよな」

いつまで経っても、何も起きない事に、自分が場所を間違えたんじゃ無いかと思い始めた。

「帰ろっかな」

いい加減、一人で山の中を歩くのは、少し寂しく思い、帰ろうかと呟いた。

「おいおい。せっかく来たんだから、ゆっくりしてけよ」

すると、何処からか声が聞こえてきた。

「……隠れて無いで出てきたらどうだ」

優也は警戒しながら、声の人物に出てくるように言うと、草影から大男が出てきた。

「誰だ、お前」
「この山のボスをさせてもらってる、大江咲魔だ」
咲魔は律儀に挨拶をする。
「修二から話は訊いてるぜ。火渡優也」
「あいつは何処に居る」
咲魔の言葉に、薫達がこの山に居ることが分かり、修二の居場所を問いただす。
「この山に居ることはいるが、どの辺りに居るかはわかんねえな」
「そうか、なら勝手に探させてもらうぞ」
咲魔が嘘を言っている様には見えなかったので、優也は自力で修二を探そうとする。
「待てよ。お前が俺に用が無くても、俺はあるんだよ」
優也は歩き出そうとしたが、咲魔に呼び止められた。
「用……？」
「お前、人間を襲った妖怪と戦っただろ」
確かに優也は、美優を襲った妖怪を、倒してきた。
「そいつ等は俺の仲間だ。殺しはしねぇが、敵討ちはさせてもらうぜ」
咲魔は臨戦態勢に入る。

「……」

だが、優也は刀を抜かない。

「何のつもりだ。戦わねぇつもりか」

刀を抜こうとしない優也に、咲魔は少し不機嫌になる。

「お前、人間を襲った事無いだろ」

「ああ？」

咲魔は心の中で驚いた。

何故自分が人間を襲った事がないと、分かったのかと。

「お前からは、誰かを殺した感じがしない。まあ、結局のところ勘なんだけどな」

「そうだよ。俺はまだ誰も殺した事はねえ」

咲魔は優也を見て、言い逃れが出来ないと思った。

「だったら、何で敵討ちなんて言うんだ？」

隠すことではないと、咲魔は考え、優也に話した。

「俺は人間を襲うつもりはない。それは俺だけじゃない。ここの奴等の多くが、そんな奴ばっかで、力も強くない奴も多い」

優也は思い出した。

咲魔と会うまでに会った妖怪の事を。

「それでも、やっぱり居るんだよ。人間を襲うような奴等が……」

咲魔は空を仰ぐ。

「でもまあ、そんな奴等でも俺の仲間なんだよ」

咲魔は再び優也を見据える。

「もう一度言わせてもらうぜ。殺しはしねぇが……」

そして、再び臨戦態勢に入る。

「敵討ち……させてもらうぜ」

優也はそれを訊き、刀を抜いた。

「いくぜ！」

仲間の為に闘う二人が今、激突する。

第１８話　妖怪の山（後書き）

咲魔
「戦闘シーンがねえな」
漆黒
「……すみません」
咲魔
「まあ、次回こそはあるみたいだから、良いけどな」
修二
「良くねえよ」
漆黒
「居たのかよ！？」
修二
「俺の出番が無い！」
漆黒
「そんなポンポン出せるか！つーか勝手に出てくんなよ！？」
修二
「後書きくらい、好きにして良いだろ！」
漆黒
「良くなぁぁぁい！！！」
咲魔
「あ～、次回も楽しみにしててくれよ。じゃあな！」

次回
第１９話　朱雀と鬼
咲魔
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

修二
「こんな小説、楽しみにしてる奴が居んのかよ」
漆黒
「居るわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！………………多分」
咲魔
「多分かよ…………」

第１９話　朱雀と鬼

優也達が妖怪の山で闘っている頃、正と流香は、生徒会室に居た。

「で？あんたはこんな所で何をしてるのかしら」

「は？」

流香の突然の言葉に、正は疑問の声を漏らす。

「好きな女の子の所に行かないの？」

「はぁ／／／！？」

流香の言葉に、正は顔を赤くして、素っ頓狂な声を上げる。

「好きなんでしょ。薫の事が」

「そっ！そんなわけ無いだろ／／／！！」

正は物凄く慌てて、流香の言葉を否定する。

「否定しなくても、皆分かってるわよ」

前の正の態度で、正が薫に惚れていることは、皆すぐに分かった。

「言いたいことは分かるわ。あの子の一族を滅ぼした事を気にしてるのね」

「……」

正は少し落ち着きながら、流香の話を訊く。

「あの事を気にしてるなら、尚更行った方が良いわよ」
「分かってるよ……」
正は静かに目を閉じる。
そして、ゆっくりと目を開ける。
「優也が頑張ってんだ。俺達だけ休んでるわけにはいかねえよなぁ、仁」
正は扉に向かって誰かの名前を呟いた。
「！来てるの？」
「二人ともな」
流香は少し驚き、扉を見ると、扉が開いた。
「来んのが遅ぇよ。仁、優花」
扉が完全に開くと、そこには、金髪の少年と、黒髪が腰まであるロングヘアーの少女が居た。

第１９話　朱雀と鬼

「おらぁ！！」

咲魔は優也に殴り掛かる。
優也は持ち前のスピードで、咲魔の攻撃を躱す。

「ちっ！」
「はぁ！！」

優也は咲魔の死角に入り、一気に斬りかかる。

「フン！！」

咲魔は腕を盾にして、刀を受け止めた。

「！」

咲魔の腕を斬ることが出来ず、優也は一度距離を取った。

「速ぇな。しかも、俺の体に傷を付けるなんてな」

咲魔は腕に出来た小さな傷を舐めながら言った。

「それくらいで、誉められることじゃないだろ」
「そうだな」

優也は刀に炎を灯すと、咲魔に向かって、振り抜いた。

「“炎舞鳥”！」

すると、複数の炎の鳥が、咲魔に向かって襲い掛かった。

「上等！」

咲魔は息を大量に吸い込んだ。

「“音鬼砲”。ガァッ！！」

そして、大声で叫んだ。

すると、周りの木は薙ぎ倒され、炎の鳥はどんどん掻き消されていった。

（！何か来る！）

優也は何かに気付き、高く飛び上がる。

優也が飛び上がると、優也が居た場所は吹き飛ばされた。

（声に妖気を乗せて放ったのか。それにしても、なんて肺活量だ！）

咲魔の技を分析しながら、次の攻撃に移る。

「“斬炎弾”！」

優也の刀から、巨大な炎の斬撃が放たれ、咲魔に迫っていく。

「クゥッ！！」

避ける事は出来ないと判断し、妖気を放出させて防御力を高め、腕を交差させて斬撃を受け止める。

「っ！おおおおおおおおおおお！！！！！！！らぁッ！！！！」

咲魔は、交差した腕を一気に広げ、斬撃を掻き消す。
掻き消しは出来たが、腕は痺れ、血が流れていた。

（なんて威力だ！こりぁ何発も受け止められないな）
「戦闘中に考え事か？」

咲魔が考え事をしている一瞬に、優也は一気に距離を詰めた。

「“鳳凰激”」

刀から出た炎が、咲魔に襲い掛かる。

「“鬼拳”！！」

咲魔は拳に妖気を集中させ、炎を殴り付ける。

「クッ！」
「うおっ！」

技がぶつかり合った衝撃で、二人は吹き飛ばされる。
優也は空中でなんとか体勢を整え、咲魔もなんとか受け身をとった。

「くそ、“鳳凰激”を……」
「あいつ、技の一つ一つが強すぎるだろ……」

自分の得意技が効かなかったことに、二人は少なからずショックを受けた。

「やるじゃねえか」

「お前もな」

二人は互いの実力を認め合う。

「一つ訊くけどよぉ、何で必死に闘うんだ？」

「？」

咲魔の質問に、優也は疑問が涌いた。

「お前がここに来た理由は、修二に言われただけの筈だろ？それだけで闘う理由になるのか？」

咲魔にとって、闘う理由は仲間の為、それはさっきも話、優也も分かっている。

だが、咲魔は優也が闘う理由を訊いていなかった。

闘いを続ける前に、優也の闘う理由を知りたかった。

「闘う理由か……そんなの、仲間の為に決まってるだろ」

「！」

「理由なんてそれだけで充分だ」

優也の戦う理由が、自分と同じと言うことに、咲魔は驚いたが、すぐに口元を吊り上げた。

「お前が闘う理由はよく分かったよ。だからって、負けるわけにはいかないんだよ」

「俺もだ」

優也は刀を構えてる。

咲魔はそれを見て、決心した様な表情になった。

「俺も負けないために、本気を出すとするか」
「何……？」
「“鬼神覚醒”」
すると、咲魔の体から赤い妖気が吹き出る。
「これはあんまり使いたくなかった。メチャクチャ疲れるし、周りはボロボロになるし……」
咲魔の体が一回り大きくなり、肌の色が段々赤くなっていく。
「なにより……」
そして、額から一本の角が生えてきた。
「この外形が嫌いなんだ」
その姿はまさに、鬼その物だった。
「ッ！」
咲魔が放つ妖気で、辺りに風が巻き起こる。
「それが、お前の本気の姿か……」
「ああ……いくぞ！！」
咲魔が叫ぶと、強烈な音圧が優也を襲う。
「クッ！」

片手で顔に向かってくる音圧を何とか防ぎ、咲魔から目を離さないようにする。

「“音鬼砲”」

咲魔はさっきと同じ様に、声の大砲を放つ。
攻撃の方法は同じだったが、

「！！」

威力も速さもさっきとは比べ物にならなかった。
周りの木がとてつもない速さで薙ぎ倒され、地面はかなり抉れていたからだ。

「しまっ！」

声の大砲は、周りの木を薙ぎ倒しながら、優也に向かっていった。

「おらぁ！！」

彪牙は目の前の妖怪を殴り飛ばすと、後ろから襲い掛かってきた妖怪を裏拳で吹き飛ばす。

「はぁ！！」

総司は双刃剣を地面に突き刺す。
すると、地面が割れ、妖怪達が裂け目に落ちていく。
総司が剣を地面から引き抜くと、地面の裂け目が消え、落ちていった妖怪達が地面に倒れていた。

「おい！もうちょい周りを気にしやがれ！！マジで落ちるかと思ったじゃねえか！！」
「これぐらいの幻覚で何言ってるんですか」

地面に裂け目が現れたのは、総司が見せていた幻覚だった。
総司の幻覚に巻き込まれそうになった彪牙は、地面に座り込んでいた。

「これだけやっても、まだまだ居ますね」

総司の幻覚で、数十体の妖怪が倒れたが、周りにはまだ妖怪が沢山居た。
妖怪一体一体は、彪牙と総司の力には及ばないが、妖怪の数が多く、流石に二人は少し息が上がって来た。

「へっ、関係ねぇよ。どんどん……」

彪牙が気合いを入れ、敵に向かって行こうとした瞬間、遠くから大きな音が聞こえた。

「っ！何だ！？」
「まさか！」

突然の衝撃に、彪牙は驚き、総司は何かに気付く。

「咲魔と火渡優也が闘っているんだ」

すると、黒い羽を生やした鴉の様な男と、九本の尻尾を生やした、九尾の女が現れた。

「鴉天狗に九尾ですか」

「椿修二だったな。あいつやっぱ妖怪と手を組んで優也を倒そうとしやがったか」

「違う」

九尾の女は、彪牙の言葉を否定した。

「確かに咲魔様はあの男と手を組んだが、火渡優也と闘うことは咲魔様自身がお決めになったことだ」

「だから咲魔の邪魔を出来ないように、お前達にはここで少し眠ってもらおう」

鴉天狗は錫杖を取り出し、九尾も周りに小さな火の玉を造り出す。

「考えていることは、同じだったみたいですね」

「だな。でもよぉ」

彪牙は左手の平を、右拳でバシッと叩く。

「俺達だって負けるわけにはいかねぇんだよ！」

以前、優也と闘った時と同じ言葉だったが、前よりも言葉の重みが違うと、総司は感じた。

「なら、行きますよ」
「おう！」

周りの妖怪達は彪牙達に襲い掛かろうとする。

「待て」

それを、鴉天狗に止められる。

「私達だけで充分だ」

その言葉に彪牙が反応した。

「舐めやがって。後悔しても知らねえぞ！」

彪牙は一人で突っ込んでいった。

「まったく！」

彪牙が一人で突っ込んだ為、総司も敵に向かって行った。

「くっ……！」

砂ぼこりが立ち込める中、優也が砂ぼこりから飛び出す。

「逃がさねぇよ！！」

咲魔も砂ぼこりの中から飛び出し、優也との距離を詰める。

「“鳳凰激”！！」

強烈な炎が咲魔を襲う。

空中に居たため、避けることが出来ず、まともに当たった。

倒せはしなかったとしても、少しは効いていると、優也は考えたが

「効かねえな」

今の咲魔に効くほど、甘くはなかった。

炎の中から、無傷の咲魔が現れる。

「！！」

咲魔の右手に妖気が集まる。

「“鬼拳”！！」

妖気を纏った拳を優也に向かって降り下ろす。

「うっ！！」

優也は何とか刀で受け止めるが、空中では踏ん張ることが出来ず、

地面に叩きつけられてしまった。

「くっ……」

「お前も、本気になったらどうだ？」

咲魔は地面に降り立ち、優也に言い放つ。

「前にお前が戦った時に見せた黒夜叉の力、あれを出せよ」

「お前……見てたのか」

優也は咲魔を睨む。

「俺達の家なんだからな、あんだけ暴れてたらすぐに分かるさ。それでどうする。このまま負けても良いのか？」

「……」

咲魔の言葉に優也は考え始めた。

（黒夜叉の力か……。いつもならこれだけの闘いだったら、少しでも出てくるんだが……出てこないって事は、あいつが来てるのか。まあどっちにしろ……）

優也は立ち上がり、咲魔を見据える。

「俺は黒夜叉になるつもりはない」

優也は固い決意で言った。

「そうか……じゃあ、俺に負ける覚悟は出来てるんだな」

咲魔はゆっくり優也に近付いていく。

「誰が負けても良いなんて言った？」

「何？」

咲魔は動きを止める。

「お前が本気で戦ってるんだ。俺も本気で闘ってやる」

（！何だ？この感じ……）

咲魔は、優也から何かを感じ取る。

それは、恐怖とは違う何か。

「見せてやる。朱雀の力を！」

第１９話　朱雀と鬼（後書き）

漆黒
「今回は何か疲れた……」
美優
「え～と……お疲れ様」
優也
「更新、遅くなって悪いな。けど、その辺は分かってやってくれ」
美優
「今回も読んでくれた読者の方々、ありがとうございます」
漆黒
「ご感想待ってます。って言うかお願いします（土下座）！！」
美優
「図々し！！土下座しないでよ！」
優也
「感想はもし宜しければで良いから頼む。それじゃあまた次回」

次回
第２０話　朱雀の力
優也
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

登場人物設定2

椿修二
（つばきしゅうじ）

性別　男

ＣＶ：藤原啓治
（銀魂：服部全蔵）

年齢　１７歳

誕生日　２月２日

身長　１７９ｃｍ

体重　６４ｋｇ

好き・得意な物（事）　薫　様々な武器を使いこなせる（一番使い慣れているのはチャクラム）

嫌い・苦手な物（事）　薫に手を出す男　椿の花

能力　氷

武器　チャクラム（キングダムハーツ２のアクセルの武器の色違い。水色）

容姿

髪の長さは背中まであり、薫と同じ水色。
表情は基本穏やかだが、戦闘等になると、目付きがキツくなる。

解説
髪の色、能力など、薫の兄と言うだけあり、まったく同じ。
だが、性格は薫とは違い、敵には容赦無い。
椿一族が滅び、家族が父親と妹の薫だけになり、自分が薫を守らなければならないと考えているが、それが行き過ぎて、重度のシスコンになってしまった。

大江咲魔
（おおえさくま）

性別　男

CV：立木　文彦
（銀魂：長谷川泰三）

年齢　約８００歳

誕生日　４月９日

身長　２００ｃｍ　妖力解放時　２１０ｃｍ

体重　９４ｋｇ　妖力解放時　１０２ｋｇ

好きな物（事）　酒　仲間

嫌いな物（事）　仲間を傷付ける者

能力　無し

武器　無し

容姿

髪は赤い短髪。

体はかなり大きい。

年齢は８００歳だが、見た目は人間で言う、２０歳後半。

妖力を解放すると、肌の色が赤くなり、頭に角が一本生え、体も一回り大きくなる。

解説

妖怪の山に住んでいる鬼。

妖怪達のボスをしているが、妖怪らしい行動をしたことが無い。

能力は無く、妖力をコントロールして攻撃や防御の強化等、普通の妖怪でも出来る事しかできない。

だが、長い間妖力のコントロールだけに集中していた為、攻撃や防御等の強化が、他の妖怪よりも長けていて、これが能力と言っても間違いではない。

普段は妖力を抑えているが、解放すると姿が変わり、鬼の様になる。

妖怪の山に住んでいる妖怪は、力が弱い妖怪が多く、人間を襲わず静かに暮らしたい妖怪が多い。

その為、強く仲間想いな咲魔は、仲間から慕われている。

鴉天狗と九尾の妖狐とは昔からの仲間で、深い信頼関係がある。

登場人物設定2（後書き）

漆黒
「前から書いといて良かった・・・」
修二
「これにも1って書いてあるな」
漆黒
「やっぱオリジナル小説だから、敵もいっぱい考えないと」
咲魔
「成る程」
漆黒
「次回も宜しくお願いします」

第２０話　朱雀の力

「朱雀の力？」

咲魔は呟く。

「さっきまで本気じゃ無かったって事か？」

「さあな」

優也の体から炎が吹き出る。

「！何だ？」

突然、優也の体から炎が吹き出た事に、咲魔は驚いた。

そして、炎が弾けた。

炎が弾けた事で、砂ぼこりが舞う。

「クッ！」

咲魔は腕を顔の前で交差し、砂ぼこりから顔を守る。

「！」

砂ぼこりが晴れ、咲魔は腕を下ろし、優也を見た。

そこには、炎を体に纏い、炎の尻尾を生やし、そして、炎の翼を羽ばたかせた優也が居た。

「それがお前の本気か」

咲魔は拳を構える。

「来いよ」

「……」

「！！」

咲魔の言葉を訊いた瞬間、優也が咲魔の前から消えた。

（何処だ！？）

咲魔が優也を探そうとした瞬間、視界の下から炎の音がした。

そこには、刀に炎を灯した、優也が居た。

（！いつの間に！？）

咲魔は攻撃が来る前に距離を取ろうとするが、それよりも速く優也が炎を放った。

「“鳳凰激”」

朱雀と鬼の本当の闘いが始まった。

第２０話　朱雀の力

炎が咲魔に襲い掛かる。

「ぐっあああああああああああ！！！！！」

咲魔は咄嗟に妖力を高め、防御を固めるが、さっきとは比べ物にならない一撃に、悲鳴をあげる。

「うおおおおおお！！！！」

咲魔は妖力を全開する事で優也の炎に耐えきった。

だが、咲魔の体は至る所に火傷があり、血も流れていた。

（さっきとは比べ物にならねえ！？マズイ、流石にそう何度も耐えきれねえぞ！）

咲魔は体中の傷を見て、焦りを感じる。

「戦闘中に考え事か？」

「お前を倒すための考え事だよ！」

咲魔は優也に向かって一気に駆け出した。

（このまま防いでたら妖力が尽きるか、耐えきれなくなって倒れるかのどっちか……だったら！）

咲魔は両手に妖気を集中させる。

「やられる前にぶっ倒す！！！」

長期戦は不利だと考えた咲魔は、一気にケリを付けようとする。

「“烈鬼拳”！！」

妖気を集中させた拳を、連続で優也に向かって降り下ろす。

「！！」

その拳は優也に当たること無く、全て避けられていく。

「ちっ！“音鬼砲”！！」

これ以上は無意味だと考え、至近距離で声の大砲を放った。
優也が居た場所は、地面が抉られ、砂ぼこりが立ち込める。

「これぐらいでやられるわけ……ねぇよな！！」

咲魔は後ろに振り返る。
そこには、声の大砲を交わした優也が、向かって来ていた。

「！」
「喰らえ！！」

両手に込めた妖気を、優也に向かって突き出した。

「“双鬼拳”！！」
「……」

優也は瞬時に足に炎の翼を羽ばたかせ、左足を軸に、咲魔の技に蹴りを放った。

「“鳳凰爪牙”！」

二人の技がぶつかり合う。

「っ！」

「うおっ！！」

技がぶつかり合った衝撃で、二人は後ろに吹き飛ばされた。

二人は倒れることなく、地面に立つ。

「ハァハァ、やっぱやるな……久し振りに楽しいぜ」

「ハァ……別に俺は楽しくないぞ……」

技の応酬に、二人は息が上がり始めた。

「楽しい所悪いが……そろそろ終わりにするぞ。あまり時間がないんだ」

「時間……？」

咲魔には、優也の時間という言葉の意味が分からなかった。

「少し無理させてもらうぞ！」

優也は右足を引き、上体を低くする。

（何するか知らねぇが……）

優也が行動するより速く、咲魔は動いた。

（やられる前にやる！！）

右拳に妖気を集中させ、優也との距離を詰める。

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」
「……っ！」
その瞬間、咲魔に衝撃が走った。
「ガッア！！！！」
咲魔は後ろに吹き飛ばされ、地面に倒れ込んだ。
一体何が起きたのか、咲魔には理解できなかった。
「なっ何が……！？」
咲魔は周りを見渡した。
すると後ろに、自分と同じく、ボロボロの優也が居た。
（まさか！あの翼の推進力で加速したのか！）
炎の翼で加速して、優也は今まで以上の速さで咲魔に攻撃していた。
だが、その速さに優也の体が着いていかず、体中ボロボロになっていた。
（無理するって、この事だったのか！）
ボロボロになりながらも、咲魔は立ち上がった。
「……ッ！“炎帝・鳳凰激”！」
優也は攻撃の手を休めることなく、次の技を放った。

「まだこんな力が残ってやがるのか！」

優也が放ったこの“鳳凰激”は先程より大きく、どの技と比べても比べ物にならない程の威力だった。

「上等だ……！」

咲魔は左手に妖気を集め、炎を受け止める体勢に入った。

「“守式・羅生門”！！」

咲魔が左手をかざすと、鬼の紋様が彫られた巨大な門が出現し、炎を受け止めた。

「っう！」

炎を止めた門には亀裂が入り、咲魔の左手からは血が吹き出た。

（嘘だろ！？“羅生門”は俺の最強の防御だぞ！）

自分の最強の防御に亀裂を入れられ、咲魔は目を見開いた。

「ぬっおおおおおおおおおお！！！！」

痛みに顔を歪ませながら、咲魔は全力で炎の斬撃を受け止める。

「おおおおおおおおおお！！！！」

門の亀裂が広がり、そして砕け散った。

辺りに煙が立ち込める。

その中から、大きな人影が揺らめいた。
それは、鬼のような姿をした咲魔だった。
咲魔の最大の防御は打ち砕かれ、左腕は血が流れ使い物にはなりそうにもなかった。
それでも、咲魔は炎を止めたことで、優也がもう力が残っていないと考え、勝ちを確信した。

「ハァハァ……左腕は……使い物にならねぇが、こんだけ力を使ったんだ……あいつも戦えるわけ……！」

すると、上空に何かの気配を感じた咲魔は、左腕を抑えながら上を見る。

「マジかよ……」

そこには、炎の翼を羽ばたかせ宙に浮いている優也が居た。

「おい」

優也を見上げながら、咲魔は声を掛ける。

「名前教えてもらっても良いか？」

「……」

咲魔の言葉を訊いて、黙っていた優也は口を開いた。

「火渡優也だ」

「そうか、じゃあ優也……もう俺には避ける力も残ってねぇ。だからってよぉ」

足が震えながらも咲魔は笑っていた。

「最後の一撃……手加減するんじゃねぇぞ！！」

優也を見上げながら、咲魔は良い放った。

「ああ！」

上空から咲魔に向かって、一気に急降下する。
炎を纏った優也の体を、更に炎が燃え上がる。
その炎は優也を包み込み、その姿はまるで、炎の不死鳥だった。

「“鳳凰閃火”！」

「……」

咲魔は黙って優也の攻撃をモロに受けた。
抵抗することもなく、ただ吹き飛ばされ地面に倒れ込んだ。

「ハァハァ……」

地面に降り立った優也は、炎を消し元の状態に戻った。

「良い……一撃だったぜ」

優也の攻撃を受けながらも、咲魔は意識を失うことは無かった。

「呆れた頑丈さだな。彪牙といいレベルだ」

「鬼ナメんなよ」

人間の姿に戻りながら咲魔は言った。

「気は済んだか」

刀を鞘に収めながら、優也は咲魔に訊いた。

「元々……復讐なんてガラじゃねぇからな。ただ……」

咲魔は目を閉じながら答えた。

「正直……楽しかった」

「……」

優也は何も言わず、咲魔の近くに座り込む。

「ここ最近……全力で闘ってなかったからな。この辺りじゃ……俺と互角にやりあえる奴なんていねぇし」

目を開き、咲魔は空を見上げる。

「確かに戦いは好きじゃねぇけど……それでもやっぱ鬼の本性って言うのか……それがどうしようもなくてな。だから……お前と闘えて良かったよ」

そう言う咲魔の表情は、清々しそうだった。

「自分を負かせた相手に普通礼を言うか？」

「俺は礼を言いたいと思ったらすぐに言うけどな」

「そうか……」

会話が終わると優也は立ち上がった。

「行くのか」
「ああ……さっさとあいつを捜さないとな」
そう言うと、優也は森の中に入っていこうとした。
「その必要はねぇよ」
「「！！」」
それはある人物の声で止められた。
「お前！」
「修二……」
その声の人物は、優也が捜していた椿修二だった。
修二は森の中から歩いて来る。
その後ろからは、薫が着いてきていた。
「椿……」
薫の姿を見付けると、優也は小さく呟いた。
「さて、今度こそ復讐させてもらおうか」
修二はそう言うと、ニヤリと笑った。
その頃、彪牙と総司は鴉天狗と九尾に苦戦していた。

「もう諦めたらどうだ？」
「ああ？」

鴉天狗は二人に言い放った。

「お前達が万全の状態だったら、どっちが勝つか分からないが、今の疲労しきったお前達では私達には勝てない」
「……」

九尾の言う通り、二人は多くの妖怪と闘った事で、かなり疲労していた。

「うっせぇ！！まだまだこれからだ！」

彪牙は叫ぶが、額から汗を流し、肩で息をしていた。
総司も同じく、かなり疲労していた。

「諦めの悪い男達だ」
「当たり前ですよ」

九尾の言葉を訊き、黙っていた総司が口を開いた。

「男は諦めが悪いのが肝心なんですよ」
「そう言うこった！」

二人の言葉を訊き、九尾は呆れた表情で二人を見る。

「人間は馬鹿ばかりだな」
「まったくだ」

鴉天狗もため息を吐く。

「まあ嫌いじゃないけどな」

「それも終わりだ！」

鴉天狗と九尾は二人に突っ込んでいった。

彪牙と総司も、二人を待ち構える。

両者がぶつかり合うその瞬間、銃声が鳴り響き、鴉天狗と九尾の目の前に弾丸が着弾した。

「なっ……！」

「何だ！？」

いきなりの銃声に、周りの妖怪達も慌て出した。

すると、数体の妖怪が倒れ込んだ。

「誰だ！」

倒れ込んだ妖怪が居た場所には、二人の男が立っていた。

一人は白い髪に、二本の刀を差した男、彪牙と総司がつい最近知り合った風魔正が居た。

「随分と集まったな」

すると、もう一人の人物が口を開く。

髪は金髪で煙草を吸い、両手には銃が握られていた。

恐らく、この金髪の少年がさっきの銃弾を撃ったのだろう。

「だから言っただろ。ここにいっぱい集まってるって。仁」

「！」

正が金髪の少年の名前を呼ぶと、総司が目を見開き反応した。

（金髪に金色の瞳。そして、あの銃！まさか！）

「優也が居ないが……まあ良い」

総司が考え事をしていると、仁と正が近づいて来た。

「お前等……」

「後は俺達に任せとけ」

二人は彪牙達の前に立つ。

「さっさとやるぞ、正」

「おう」

そう言う二人の周りには、小さく電気と風が起きていた。

第２０話　朱雀の力（後書き）

彪牙
「おいこら。俺達の戦闘シーンは？」
漆黒
「……」
総司
「目を逸らさないで下さい！！」
進
「別に良いじゃねぇかよ」
彪牙
「進？」
美優
「私達なんて出番無しだよ……」
総司
「……すみません」
仁
「次回の俺の活躍を楽しみにしててくれ」

次回
第２１話　雷鳴の銃士と風の暗殺者
仁
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

進
「っておい！何で居んの！？」
正

「お前の活躍じゃねぇ！！！」

進

「って！あんたもか！」

第２１話　雷鳴の銃士と風の暗殺者

目の前の妖怪達を見据えながら、俺は銃弾の数を頭の中で確認する。
それはもう癖と言っても良いほどの物になっていた。
戦闘の最中に弾切れが起きることは、命取りになる。
俺達はそんな戦争の中で生きていたから当然の事だ。
そんな戦争の中を生きてきたからこそ、俺はもう戦う事しか出来ない。
だが、俺自身の誓いを護れるなら俺は戦い続ける。
そして銃口を敵に向け、引き金を引いた。

第２１話　雷鳴の銃士と風の暗殺者

妖怪の山に銃声が鳴り響く。
銃弾は鴉天狗、九尾のどちらにも当たること無く二人の足下に着弾する。

「「！」」

傍から見れば、狙いを外したように見えるが、仁にとっては狙い通りだった。
突然足下に弾が着弾したら、誰でも反応してしまう。
それが人間よりも身体能力の高い妖怪なら尚更だ。

鴉天狗と九尾は弾が着弾した瞬間、左右に跳び、二人の距離が離れた。
すると、仁の狙いを知っているかのように、鴉天狗に向かって正が走り出した。

「！」

正のいつ抜いたか分からない二本の刀が、鴉天狗に向かって降り下ろされる。

「クッ！」

金属音が鳴り響き、錫杖と二本の刀がぶつかり合う。

「フン！！」
「！？」

正の剣技は、優也と違って力任せだった。
例えるなら、優也が“柔の剣”で、正は差し詰め“剛の剣”だった。

「うあ！！」

だがその“剛の剣”は、地に足を着けていない鴉天狗を吹き飛ばすには充分だった。
宙に居た事で、踏ん張ることが出来ない鴉天狗は、森の中へ吹き飛ばされる。
鴉天狗は黒い翼を羽ばたかせ、勢いを止めようとする。
翼を羽ばたかせた事で、黒い羽が辺りに舞い散る。

「くそっ……かなり吹き飛ばされ……！」

鴉天狗は目を見開き、しまった！と言った表情で元の場所に戻ろうと瞬間、風が吹き、前方の撒き散らした黒い羽を吹き飛ばしていったかと思えば、そこには今にも斬りかかろうとしている正が居た。

「ッ！！」

正の躊躇も戸惑いもない行動と、自分を見詰めるあまりにも冷たい瞳に、鴉天狗は一瞬・・・ほんの一瞬反応が遅れてしまった。
その一瞬に、無情な刃が降り下ろされた。

九尾は鴉天狗を心配しているのが表情に出ていたが、何とか頭は回っていた。

「初めから……私達を引き離すのが狙いだったのか！」
「二人いればそれだけ攻撃の幅も広がる。だったら一対一で相手をした方が勝つ確率も上がる」

仁の狙いはこれだった。
敵が二人いると、攻撃方法が変わってくる。
しかも、妖怪は長い年月を生きてきている。
その分だけ、自分達よりも息の合った闘いをする可能性があったからだ。
それを考えれば、ニ対ニより、一対一で闘った方が良いと仁は考えた。
正がそこまで考えて動いたのか、ただ仁の狙いだけ分かって、後は本能で動いたかでは、恐らく後者である。

「ナメられたものだ」

ギリッと、九尾は奥歯を食いしばった。
自分達の十分の一も生きていない人間の、しかも子供にしてやられた事と、一対一なら自分達に勝てると思っていることに、腹立たしさを覚えた。

「後悔させてやろう。その考えがどれだけ甘い考えかを」

九本の尻尾の先に炎を灯す。
九尾には勝つ自信があった。
仁の武器は二丁拳銃、咲魔の様な防御力は無くとも、ただの弾丸など止める自信があったからだ。

「ただの弾丸なら止められるとでも言った顔だな」

「！」

九尾の考えはすぐに読まれた。
自分の考えを読まれた事に、九尾は何故か焦ってしまった。
読まれたからといって、どうにかなる問題でもないのに、冷や汗を流し、心の中で焦るな冷静になれと言い聞かせる。
だが、どれだけ言い聞かせても冷静になれなかった。
考えを読まれた事もだが、何よりも仁の存在が原因だった。
一片の感情も含まれていない鋭い瞳、そして、何を考えているかまったく分からない表情。
まるで機械と対峙しているかの様な状況が、九尾の冷静さを削いでいく。

「ナメているのはお前の方だ」

感情が含まれていない瞳が九尾を射抜く。
その視線に後退りそうになったが、咲魔の為に闘う想いが彼女を踏み止まらせた。

（一歩足りとも引くわけにはいかない！奴が何者だろうと、負けるわけにはいかないんだ！）

咲魔の為にも負けられない、負けるわけにはいかない、その想いが彼女を突き動かす。

「後悔するなよ」

仁は口に加えた煙草を地面に落とし、足で踏みつけながら、右手の銃を九尾に向ける。
バチバチっと音がしたかと思えば、仁の腕から銃に掛けて電気が走っていった。

「黄竜の一撃に耐えきれなかったとしてもな」

「！黄竜だと！！」

九尾が次の言葉を発する前に仁は引き金を引いた。
銃に蓄えられた電気は、一気に解放され、レーザーの様に九尾に向かっていった。

「ハァハァ……」

その頃、鴉天狗は命がけのかくれんぼをしていた。
かくれんぼと言っても、遊んでるわけでは無い。
先程の一撃で、肩から胸に掛けて刀傷を付けられ、動揺してしまった鴉天狗は一度身を隠し、態勢を整えようとした。
だが、何度隠れても、必ず鬼、つまり正が自分を見付けてしまうのだ。
この山は自分にとっての家と同じ。
だから自分には地の利がある。
正にはそれがない筈、なのに自分を簡単に見付けてしまう事が、更に動揺を強くする。

（落ち着け。奴が俺を見付けられるのは、恐らく何らかの能力を使ってるからの筈。なら隠れていても意味はない。さっきは不意を突かれたが、冷静に対処すれば人間に俺が負ける筈……）
「かくれんぼもそろそろ終わりにしようぜ」
声がした瞬間、風が吹き荒れ、周りの木を切り刻む。
「！ハァッ！！」
錫杖を振り回すと、自分を守るように風が鴉天狗の周りを風が吹き荒れ、辺りを切り刻む風から鴉天狗を守った。
「この風は……お前が？」
「ああ、それが何だ？」
「お前の能力は、敵の位置が分かる能力じゃ無かったのか！」
ああそっか、と呟きながら、正は歩いてきた。
「間違いじゃあねぇよ。ただ俺が使うのは風を操る力だ。お前が言

ってるのは、音が空気を振動させてるのを聞き取って、大体の位置が分かるんだよ。簡単に言えば耳が良いんだ」

正は簡単に言うが、鴉天狗にとって簡単な事では無かった。
鴉天狗も風を操れるが、空気の振動を聞き取ることは出来ない。
自分が出来ないことを、目の前の人間は当たり前の様に出来ていた。

「そんなことが……出来る筈……」
「確かに、耳がいいのは元々だけど、風を操るだけじゃ簡単にお前を見付けられない」
「なら何故？！」

同じ能力を持っていて、何故正だけがそんなことが出来るのか、中々話さない正に、つい声を荒らげてしまう。

「四体の聖獣の内、白い体毛をした虎、そこまで言えば分かるな」

まるで、クイズを出すかの様な口振りだった。
本人は、本気なのか、ふざけているのかは鴉天狗には分からなかったが、そのクイズの答えだけは分かった。

「四聖獣の……白虎……」
「正解。正解ついでに教えといてやるよ！」

正解の言葉と共に、正は風を起こしながら、鴉天狗に向かっていく。

「同じ手が通用すると思うなよ！」

鴉天狗は錫杖を構え、風の盾を形成し、風の刃を受け止めた。

「まず一つ」
「!?」

正面から突っ込んでくるとばかり思っていた正が、いつの間にか鴉天狗の背後に回り込んでいた。

「俺を能力だけの軟弱な聖獣使いと思わない事!!」
「グッ!!」

二本の刀を一緒に振り抜き、鴉天狗を斬りに掛かるが、そこらの妖怪とは比べ物にならない反射神経で、鴉天狗は錫杖で斬撃を受け止める。
受け止めたまでは良かったが、正の“剛の剣”により、後ろに吹き飛ばされてしまう。

「そして最後に一つ!」

正が腕を振るう。
その瞬間、鴉天狗の両隣を何かが通り過ぎる。

「ぐっあああああああああ!!!!」

激痛、そして木に叩き付けられ、背中に走る痛みが鴉天狗を襲った。

「な、何が……!」

木に背中を預け、座り込みながら、激痛の正体を確かめようと、おもむろに自分の黒い翼を見た。
そこには先程まで、何度も自分を斬り裂こうとしていた、敵の刀が両翼を貫いていた。

「ま、まさか……あの一瞬で……グアッ！！」

吹き飛ばされた時に、一瞬だけ正が腕を振るっていた事を思い出していると、再び激痛が走った。
今度は翼ではない、初めに付けられた肩の傷だ。

「俺は剣士じゃない。暗殺者だ」

鴉天狗の傷口を踏みつけながら、仁とはまた違った感情を含まない瞳で鴉天狗を見下す。
その瞳は本当に暗殺者の様で、鴉天狗は寒気を感じ、何も言葉を発することが出来なかった。

「そろそろ終わらせるぜ」

正は足を退け、手の平を鴉天狗の胸に添える。
何かが来る！速く避けなければ！そう頭では考えていても、体を動かすことが出来ない。
手を払い除けるどころか、指一本動かせない。
何も出来ない。ただ出来るのは、咲魔が勝つ事を信じるだけ、いや、信じることは何百年も昔からしていることだ。
俺に出来ることは、咲魔の邪魔をさせないように、このガキをここで少しでも足止めする事だ。
鴉天狗は咲魔を信じ、自分の役目を確認すると、覚悟を決めたかの様に、目蓋を閉じた。

「“風殺”」

鴉天狗の体に直接風が撃ち込まれる。

鴉天狗の体中から血が吹き出て、辺りを鮮血で染めた。

これで何度目になるだろう。
銃声が鳴り響くと電撃が襲い掛かる。
九本の尻尾を靡かせながら電撃を躱し、火の玉を金髪の子供に放つ。
金髪の子供は火の玉を避けながら、避けられない攻撃は銃で受け止める。
ただそれの繰り返し。
だが、致命傷どころか、かすり傷も付けることも出来ず、電撃を完全に避けることの出来ない自分は、ジワジワと傷を負っていく。

（奴の言う通りだ。ナメていたのは私だった）

九尾の狐は、妖怪の中でもトップクラスの力を持っている。
四聖獣の長である黄竜を身に宿しているとはいえ、子供に負ける筈が無い。
気圧されたのも気のせいだと、思ってしまっていた。

（戦闘をこなしてきた数は私には及ばない。だが、あの動きはそれを補うほどの戦いを切り抜けて来た動きだ）

仁を完全に敵と認めた事で、冷静な思考を取り戻した。
仁の動きには無駄が無い。
まるで機械のような精密さだった。

（奴が力尽きるまで、あの電撃の速さを躱し続ける事は出来ない。ならば！）

九本の尻尾が、九尾の目の前で巨大な火の玉を形成していく。
それはさっきまでの小さな火の玉とは違い、何十倍もの大きさで凄まじい熱を放っていた。

「（尻尾一本一本の炎の一撃は大したことはないが、九本全てを合わせれば威力は跳ね上がる！）喰らえ！！」

九尾は手をかざし、仁に向かって巨大な火の玉を放った。
炎の推進力か、さっきとは比べ物にならない速さで仁に向かっていく。

「……」

仁は避ける事は無かった。
その代わり、仁の体中を電気が走っていた。
爆風が起き、砂ぼこりが立ち込める。
火の玉は完全に仁に直撃していた。
その一撃を見ていた彪牙は言葉が出なかった。
九尾の一撃は、優也の“鳳凰激”と同等の一撃だと、見ただけで分かる程の威力だったからだ。
そんな一撃が直撃して、無事な筈がないと彪牙は思い、心配そうな表情になるが、隣に居た総司は、心配そうな表情ではなかった。

（彼がこの程度でやられる筈がない）

まるで、仁の事を知っているかの様な事を考えていた。
自分の技がまともに当たったことに、九尾は安堵のため息を吐く。
自分の最大の一撃が決まれば、誰でも安心してしまうだろう。
九尾も例外では無かった。

だから気付けなかった。
砂ぼこりの中の電気を。

（勝った。あれをまともに喰らって立っていられる筈……）

銃声が鳴り響く。
安心しきっていた九尾には反応する事が出来なかった。

「えっ……」

腹の辺りに衝撃が走る。
今の銃声は、九尾を狙って撃った銃声だった。
だが、弾が当たった筈の腹からは血が流れていなかった。

「通常状態で喰らっていたらやられていたな」

バチバチバチ、電気が起こる音が聞こえる。
九尾は慌てて、晴れつつある砂ぼこりを見た。
そこには仁が居た。
だが、さっきとは姿がまったく違っていた。
火の玉から守るように、黄色の翼が仁を包み込む。
翼が開かれると、竜の様な黄色の尻尾を生やし、腕には三本づつ棘の様な物が生え、頭には竜の顔をした仮面の様な物があった。

「！？」

突然九尾の体に眼に見える程の電流が流れ、九尾の体を拘束した。

「く、くそっ！！」

九尾は一瞬で理解した。
あの銃弾は自分を倒すための攻撃では無く、動きを封じるための物だと。
ただ動きを封じて放って置く筈が無い。
それが分かっていたため、九尾は拘束を外そうとするが、体が小刻みに震えるだけで、それ以外の動きは出来なかった。
仁は右手の銃を九尾に向ける。
すると、銃口の先に電気の輪が現れ、右腕の三本の棘の先から電気が発し、銃に蓄えられていく。

「“雷鳴弾”」

そして、引き金を引いた。
電撃が輪を通ると、輪は大きくなり、電撃は威力、大きさ共に強大なり、九尾を呑み込んでいった。

「うっあああああああああ！！！！」

勿論、動きを封じられているため、避けることも出来なければ、防御する事も出来なかった。
と言っても、拘束は関係無く、速く巨大で強大なあの一撃を避けるか受け止める事が出来るかと言われれば、ほとんどの答えはＮｏだろう。

「派手にやったな」

仁が竜の姿から元の姿に戻ると、鴉天狗を肩に担いだ無傷の正が歩いてきた。

「威力は抑えた。九尾なら死にはしないだろ」

仁の目線の先には、所々黒焦げの九尾が気絶していた。
それよりと、仁は正に担がれている鴉天狗に目線を移す。

「ああ、殺してねぇよ」

鴉天狗を降ろし、木にもたれ掛からせながら、正は答えた。

「お前だと殺しそうだからな」
「暗殺者だからってそんな簡単に殺すか！」

心外だ、と言う正と目の前で九尾を倒した仁を見ながら、彪牙は拳を握り締める。
彪牙は悔しかった。
龍の時といい、今といい、自分はまるで足手まといだったからだ。
彪牙は心の中で呟いた。
必ず龍や目の前の二人より強くなってみせると。
すると、総司がおもむろに口を開いた。

「そこの金髪の君。名前、もしかすれば雷道仁と言う名前じゃありませんか」

疑問では無い。
これは確証を持っての発言だった。

「ああ。そうだ」
「そうですか。良かった」

総司は双刃剣を強く握り締める。

「この時を、ずっと待っていた」

第２１話　雷鳴の銃士と風の暗殺者（後書き）

漆黒
「今回はちょっとクダクダだったかな」
正
「今回“も”の間違いだろ」
総司
「そうですよ」
漆黒
「ハッキリ言いやがった！！」
総司
「次回は僕が主役なので見てくださいね」

次回
第２２話　もう一つの復讐
総司
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

漆黒
「勝手に終わらせんじゃねぇ（怒）！！」
正
「後書きらしい後書きしてねぇな。つーかまたタイトルコール言えてねぇ」

第２２話　もう一つの復讐

この時をどれ程待っただろう。
確か６年でしたね。
思えば長かった。
色んな人間や妖怪と闘い、彪牙達と出会った。
そして目の前には探し続けた金髪の男。
この男を殺す為だけに今まで生きてきた……。
この男を殺したとしたら、彪牙達とはもう元の友達の関係には戻れないだろう。
それでも……彼等との関係が崩れたとしても……僕は……。

第２２話　もう一つの復讐

「まさか……あの金髪が……？」

彪牙は驚いた表情で、総司から仁に目線を移す。
総司が血眼で探していた男が、こんなにも簡単に見付かった事にもだが、仁の容姿がイメージと違っていた事にもあるだろう。

「霧藤総司か。６年前に一度合ったな」
「……」

総司は仁の言葉に平静を装いつつ、内心驚きを隠せなかった。
総司にとっては忘れられない事でも、仁にとっては、道端の小石の様に、どうでもいいことだと思っていたからだ。

「正、先に行け」
「ああ」

何処に？など訊きもせず、返事を返す。
そんなことを訊かなくても、行く所はもう分かっていた。

「おい！そこの妖怪共！倒れてる奴等連れてさっさとどっか行け！」

その言葉を訊き、周りに居た妖怪達は、鴉天狗、九尾の狐、それと気絶している仲間の妖怪を担ぎ上げ、覚えてろ！の言葉を残し、一目散に逃げていった。

「彪牙つったな。お前もさっさと行くぞ」

妖怪の次は彪牙と、正は、仁と総司を二人っきりにしようとしていた。

「大丈夫です。彼とは話し合いをするだけですから」
「……分かった」

彪牙はただ一言言うと、森の中へ走っていき、正もそれを追いかけた。

「話し合い……か。お前にとっては殺し合いだろ」
総司

「フッ……」

総司は双刃剣を構え、仁は銃弾を装弾し、二人はいつでも戦闘を出来るようにした。
沈黙が続き、二人の間を一陣の風が吹く。
初めに動いたのは総司だった。
ただ真っ直ぐに突っ込んでいくだけ。
仁はその行動を見て、呆れた。

「復讐相手を目の前に冷静さを失ったか」

銃口を総司に向け、電撃を放った。

「！！」

電撃は総司を貫き、総司は地面に倒れていき

「……成る程」

霧の様に消えてしまった。
透かさず電気を纏わぬ、通常の銃弾を左右に放った。

「幻覚か」

仁の両隣には、脳天を撃ち抜かれ、地面に伏した二人の総司。
その総司も霧の様に消えていく。

「俺が九尾と闘っている間に幻覚と入れ替わったと言うところか」

表情一つ変えずに、冷静に状況分析をする。

だが、無表情だった顔が、口元を上げるだけの笑みに変わった。

（な、何だ？この悪寒は……）

その笑みに、ゾクリとした。

仁からは自分の位置が分からず、いつ何処から攻撃されるかも分からない状況。それでも仁は笑みを浮かべた。

まるで楽しむかのように。

「いつでも掛かってこい」

「っ！！」

そう言い放つと仁は駆け出す。

それと同時に、仁が居た場所に火柱が現れた。

本当に幻覚なのかと、疑いたくなるほどのリアリティで、仁の服の端は少し焦げていた。

「大した幻覚だ」

「それはどうも！」

仁が率直な感想を言うと、目の前に恐らく幻覚であろう、双刃剣を振り下ろす総司が現れた。

（また幻覚か。躱わす必要も……！）

突然仁は体を半回転させ、攻撃を躱す。

躱わされた事で、刃は仁ではなく、地面を斬り付けた。

「よく気付きましたね。僕が幻覚ではないと」

幻覚だと見破っていれば、当たったとしてもダメージはない。
何度も幻覚を見せられたことで、仁にはもう幻覚は効かない。
それを逆手にとり、自分自身で攻撃を行なった。

「まだですよ」

幻覚の刃が現れ、仁に襲い掛かる。
幻覚と分かっていても、どうしても先程の総司の攻撃が頭を過る。
もし幻覚でなければ、と言う考えが少しでもあれば、それだけで幻覚は効果を発揮する。

「もう君は僕の術中に嵌まった。そしてこの距離で、銃士である君に勝ち目はない！」

遠くから狙い撃ってこそ銃の意味がある。
だが、至近距離だと狙いが付けづらい。
それを狙って、総司が仁に攻撃を仕掛ける。

「ちっ」

舌打ちをしながらその攻撃を躱わすが、地割れが起き、体勢を崩したところを、幻覚で生み出された総司の分身が襲い掛かる。

「本当に……」

割れ目に落ちないように、転がりながら幻覚の攻撃を躱わす。

「大した幻覚だ」
「誉め言葉として受け取っておきますよ」

仁が顔を上げた時には、総司が双刃剣を振り上げていた。
気付いた時にはもう遅い。
仁の眼前に刃が迫っていた。

「おい！ホントにこっちで良いのか！」
「ああ。間違いない！」

仁と総司と別れ、彪牙が先頭、正が後ろから追い掛ける形で、優也の元へ向かっていた。

「って、あんたが先に行った方が良いんじゃねぇのか！」
「俺が前を走ると何故か迷うんだよな」
「方向音痴かよ！？」

思いもよらぬ言葉に、彪牙は思わずずっこけそうになった。

「あいつが心配そうじゃ無さそうだな」
「ったりめぇだろ。あいつは強ぇぜ」

彪牙はそう言うが本当は心配だった。
九尾を倒した仁の実力は確かな物だったからだ。
すると、正は逆に質問された。

「あんたこそ心配じゃねぇのかよ。あの仁って奴の事が」
「心配？するわけ無いだろう」

するだけ無駄だぜ、そう言い、少し笑いながら、付け加えた。

「あいつは何たって、天才だからな」

「……」

「なっ……！」

ギリギリと金属が擦れ合う音が鳴る。

総司の剣を仁の銃が受け止めていたからだ。

「狙いは悪くない。だが、俺がいつ接近戦が出来ないだなんて言った？」

「くっ！」

総司は後ろに飛び退き、一度距離をとる。

いやっとってしまったと言う方が正しいだろう。

不用意に動けば、狙い撃ちは確実だからだ。

だが、仁は引き金を引かず、総司に向かって駆け出し、銃を鈍器の様に扱い、腹を殴り付けた。

「ガハッ！！」

「まだだ」

仁は攻撃の手を緩める事なく、攻撃を続ける。

左から右へ、右手で手刀の様になぎ払う。

攻撃の速度は、優也の剣や、彪牙の拳と比べて遅く、常人でも少し

運動神経が良ければ、躱わせそうな一撃。
勿論、常人よりも運動神経の良い総司にはそんな攻撃は通用する筈が無く、容易く躱わされる。

「（やはり、接近戦は得意じゃない。これなら……）っ！！」

油断しなければ大丈夫、そう思った矢先、右脇腹に衝撃が走る。
油断しなければと言う考えを持った時にはもう、総司は断していた。
だから視界の外の、仁の攻撃に気付けなかった。

「しまっ……」

気付いた時には、もう電撃を撃ち込まれていた。
総司は吹き飛ばされ倒れ込む。

「くっ……」

威力が弱かったのか、左手で脇腹を抑えながらも、総司は立ち上がる事が出来た。
だが、立ち上がったは良いが、足元はおぼつかず、立っているのも辛そうだった。

「ま、まだ……」
「いや、終わりだ」

後ろから声が聞こえた瞬間、首の後ろを捕まれ、そして電流を流し込まれた。

「～～～～～～～っ！！！！」

流された電気は微量だったが、体の自由を奪うには充分だった。
総司は声を挙げる事も出来ず、遂に倒れてしまった。

「それだけ疲労しているところに電流を流したんだ。少しの間、体は動かないだろう」

妖怪達と九尾との連戦、それだけでも充分疲労が溜まっているところを、幻覚を連続で使った仁との闘い。
普通の能力者なら、とっくに力尽きて倒れていただろう。
それでも、総司は闘い続けた。
闘う理由が自分への復讐とは言え、仁は感心した。

「何故、殺さないんですか……」
「お前を殺す必要が無いからな」

銃をしまい、代わりに煙草を取り出し、総司の隣に腰掛ける。

「くそっ、いつか殺してやりますからね」
「ああ、いつでも来い」
「……」

九尾を倒した仁の実力をみて、正直勝てるとは思っていなかった。
それでも、6年も探し続けた男が目の前に居て、黙っていられなかった。
そして闘いを挑んだ結果惨敗。
彪牙には心配を掛け、自分への復讐に向き合おうとしている優也の邪魔をした結果の惨敗。
負けた悔しさと、自分勝手な行動への後悔が、総司の心を支配する。

「悔しいか」

「！」

仁は煙草の煙を吐きながら呟く。

「後悔したか」

「……」

ギリッと音が鳴るくらい、歯ぎしりをする。

それを無視しながら、仁は話を続ける。

「なら強くなれ」

「！！」

総司が訊いた言葉は、意外な物だった。

「負けた事が悔しいなら強くなればいい、自分の行動に後悔があるなら後悔しない様に、精神を強くすればいい、簡単な事だ」

その言葉に、総司は眼を見開く。

あまりにも淡々と言われ、呆気にとられた。

「簡単に……言ってくれますね」

仁の言葉を指摘しながらも、心の中では、確かに簡単ですね、と反対の事を思っていた。

「僕が君より強くなったら……また戦いを挑みますよ」

「ああ、ただし、ベストの状態でだがな」

「分かりました……」

少し笑いながら総司はそう言うと、眼を閉じ、眠ってしまった。

「仕方がない奴だ」

溜め息を付きながらも、仁は全てが終わるまで、総司の眠りを妨げる事無く、隣に座り続けた。

総司のその眠りは、安らかな眠りだった。

第２２話　もう一つの復讐（後書き）

漆黒
「戦闘シーンのクオリティが落ちた気がする……」
修二
「安心しろ。元々低いから」
漆黒
「酷い！！」
修二
「ああ後、タイトルの『黒と白の物語』の白は、白虎で白髪だからって風魔正の事じゃないからな。それじゃあな」
漆黒
「次回も頑張ります。（それは俺が言おうとしたのに）」

次回
第２３話　届かない声
修二
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第２３話　届かない声

俺は椿の花が嫌いだ。
香りもなく、何も主張しない、そして散り様は醜い。
まるで俺達、椿一族の最期の様だ。
だから奴等は許せない。
まるで俺達は醜く散るだけの、椿の花と言われているようだったからだ。
俺は証明する。
俺は醜く散らず、咲き誇れる。
椿の花なんかじゃないんだ。

第２３話　届かない声

（まずいな……）

咲魔との死闘を演じたばかりの優也の前に、復讐者と化した椿一族の生き残り、椿修二と、生気を感じられない表情をした、同じく椿一族の生き残り、椿薫が現れた事は、完全にタイミングが悪かった。
致命傷を受けていないとはいえボロボロな体、連続での技の使用、そして力を解放したことでの疲労、これだけの悪条件で椿修二、説得が出来なかった場合は最悪、薫とも闘わなければならないからだ。
優也は、それだけは何としても避けたかった。
自分が不利になるとか、そんなことではない。
薫と闘いたくないと、自分の心が命じたからだ。

すると、後ろで倒れていた咲魔が口を開いた。

「優也、早く逃げろ……」
「嫌だ」
「はぁ!?」

まさかの即答での拒否に、思わず声を上げてしまう。
優也をボロボロにした自分が言うのも可笑しな話だが、折角心配しているのだから、拒否するにも即答は辞めて欲しい。

「状況分かってんのか!?そんなボロボロで勝てるわけ……」
「今逃げたら絶対に後悔する」
「お前……」

流石に何も言えなくなる。
自分も優也と同じ立場なら、逃げろと言われても逃げないだろう。
後悔はしたくないのだから。

「へぇ、てっきり逃げるかと思ったよ」

少し感心した様子で、修二は近付いてくる。
だが、口では感心している様に聞こえるが、表情は無表情。
優也を復讐の相手としか見ていない、初めに会った時と同じ、復讐に取り付かれた表情だった。

「まあ逃げたとしても、地獄の果てまで追い掛けて、殺してやるがな」
「勝手な事ばっか言ってんじゃねぇぞ!」
「!?」

突如、怒声が辺りに鳴り響く。
声の正体を知らない咲魔は、突然の怒声に驚くが、優也にとっては聞き慣れた声だった。

「彪牙！」
「やっと見付けたぜ……」

ガサガサと草木を掻き分けながら、彪牙は漸く優也の元に辿り着いた。
汗だくで、肩で息をしているのを見れば、長い距離を走ってきた事が良く分かった。

「……総司は？」

ふと、総司が居ないことに気付く。
優也は知らないが、彪牙は先程まで正と行動していた。
だが、彪牙が気付いた時には、何故か姿が見えなかった。

「あいつならちょっと用事だ。それより……好き勝手言いやがって！」

自分の事を言われた様に怒り、彪牙は修二を睨み付ける。

「好き勝手？何も知らないくせに、勝手な事を言ってるのはお前だろ」
「ああ、お前の事なんか何も知らねぇ。けどな！お前が薫を利用してるって事くらいは分かるぜ！！」
「何だと？」

ここに来て初めて、修二は顔をしかめた。

「お前は優也を殺して復讐をしようとしてる。それを薫にもさせようってのか!!誰かを殺した後に何が残るか、お前も分かってんだろ!!」

人を殺した後に残るもの、悲しみ、後悔、憎しみ、そして復讐。
例え復讐を終えたとしても、復讐の後には新たな復讐しか生まない。
もし薫が、修二と共に優也を殺したとしたら、恐らく仁や正、流香も黙っていないだろう。

「薫の兄貴なら、何で薫が幸せになることを一番に考えてやれねぇんだよ!!」
「お前に何が分かる!!」

突然、修二は先程の彪牙以上の怒声を、彪牙に浴びせる。
今まで、ほとんど表情を変えなかった修二が、彪牙の言葉に初めて心を乱した。

「どれだけ俺達が苦しんだかお前に分かるか!?仲間を、親友を、家族を失った苦しみが、お前に分かってたまるか!!」
「……」

修二の叫びは、彪牙でも、薫でもなく、優也の心を抉った。
戦争とはいえ、何の罪も無い人達の命を奪い、目の前の人間の人生を台無しにしてしまった事を、今一度痛感した。

（血に染まった俺の手じゃ……誰も救えないのか……）

自分がどれ程の過ちを犯したかを、再び思い知らされ、優也は弱気になってしまう。

どれだけ強くても、朱雀の力を持っていても、たった12歳の子供が背負うには大きすぎる罪だった。

「分からねぇよ……お前がどんだけ苦しんだなんて……。けどな苦しいのはお前だけじゃねぇ、優也も薫も……皆が苦しいんだよ!!」

「!!」

優也は驚き、彪牙に視線を移す。

今まで自分が苦しんでいると思ったことも、思われたことも無かった。

（美優といい進といい、どいつもこいつも馬鹿だな……）

何処か嬉しそうな笑みを浮かべ、彪牙から薫に視線を移す。

「っふざけるな!!」

「!?」

「ちっ!」

彪牙の言葉に激怒した修二は、チャクラムを投げ付ける。

チャクラムは優也達に向かっていくが、優也の刀に弾き返され、氷が砕けるように散っていった。

「誰がどう苦しんでいたとしても、俺はお前達に復讐出来ればそれで良い!!」

6年もの間、ただ復讐するだけの為に生きてきた修二は、妹を利用してたとしても退くわけにはいかなかった。

ここで退いてしまったら、今までの6年間、自分自身を否定してし

まうことになるからだ。

「このっ……」

彪牙は我慢の限界で、修二に殴り掛かろうとする。

「彪牙、もう良い」

「！優也……」

それを優也が手で制す。

「ありがとう。後は任せろ」

「……ああ」

感謝の言葉と共に、一歩踏み出す。

その言葉には、どんな意味があったのかは優也にしか分からない。

「薫！」

「「！！」」

「……」

突然薫の名前を叫ぶ。

今まで苗字で呼んでいた薫を名前で呼んだ。

それは進と同じで、完全に友達と認めた証拠だった。

「お前や進が、俺を友達だと言ってくれた時、正直嬉しかった」

薫に自分の心の内を明かしていく。

仁や正や流香、殺し合いをしたが龍が、優也の中では大切な人達になっていた。

それは美優達も同じだが、少し違う。
進達は初めての友達になってくれ、美優は家族と思ってくれている。
優也にとって、これ以上嬉しいことは無かったのだ。

「俺がお前達に何をしてやれるか分からない……それに、俺の声がお前に届いて無いかもしれない……それでも、また皆で遊びに行こう。友達として」
「……」

薫はその言葉を訊いても、表情を変えなかった。
本当にもう、優也の声は届いてないのか。
それとも、美優なら届くのだろうか。

「話は終わりか」
「……ああ」
「おい、あんた動けるか？」
「あ、ああ……」

優也と修二の会話を訊き、闘いが始まると分かった彪牙は、咲魔に肩を貸し、二人から離れる。

「いくぞ」

両手にチャクラムを握り締め、優也に向かっていく。
優也もそれに合わせ、刀を構えて駆け出す。

「おおおおおおおお！！！！」
「はあぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

刀とチャクラムが金属音を響かせ、ぶつかり合う。

「“氷結刃”」
「っ！」

修二の右手のチャクラムに冷気が集まっていき、突如チャクラムが巨大化した。
修二のチャクラムは能力によって作り出した物のため、大きさを変えるなど簡単な事だった。
優也は修二からの攻撃が来る前に、後ろに飛び退いた。
チャクラムの大きさは、優也を優に越えており、そんな刃で切り裂かれては一溜まりもない。

「遅い！！それで躱わしたつもりか！」
「！！」

だが、修二の攻撃は、優也の反応速度を超えており、優也は右肩から斜めに大きく斬り付けられた。

「ぐッ！！」
「！？」

彪牙は違和感を感じた。
例え攻撃の速度が速くとも、優也ならあそこまでの怪我を負う筈が無かった。

「まだだ！」
「くっ！」

修二の猛攻に優也は防戦一方だった。
おかしい、彪牙は再び違和感を感じる。

優也の闘い方は、素早い動きと剣術で敵を倒す。
だが今は、動きが鈍く息も荒い。
彪牙は鴉天狗の言葉を思い出す。

『咲魔と火渡優也が闘っているんだ』

「！」

彪牙は、隣で座り込んでいる男を見る。

「（こいつと闘ってたからあんな動きなのか！）くそっ！」

咲魔は妖怪の山のボス、そんな妖怪とまともに闘えば、体が正常に動かなくなるのは当たり前だ。
それに優也は、朱雀の力を解放したことにより、疲労もかなり溜まっていた。

「うっ！！」

修二のチャクラムが優也の腹を掠める。
修二の相手は優也がすべきだと思っていたが、友達が傷つけられていく様を見て、彪牙は我慢の限界だった。

「もう見てられねぇ！俺も……うお！」

今にも修二に殴り掛かろうとしたその時、彪牙の足が凍らされ、動きを封じられた。

「ここで見ていてください」

「薫！」

彪牙の足を凍らせたのは、他の誰でも無く、薫だった。

「お前良いのかよ！優也がこのまま殺されても！！」

「……」

薫は無表情のまま、何も話さなく、視線は優也と修二に向けていた。

「お前！！」

「後悔しないんだな」

すると、座り込んでいた咲魔が腹を抑えながら立ち上がり、薫へ言葉を掛けた。

「あいつは言ってた。後悔はしたくないってな、お前はどうなんだ？本当に後悔しないのか」

「……」

薫は表情を変えない。

そのまま闘いを見続けていた。

「ハァハァ……」

「もう終わりだな」

優也は体中に傷を負い、立っているのも辛そうだった。

それとは対照的に、修二は無傷で、優也に止めを刺そうとしていた。

「ボロボロの体でお前は良くやった。だからもう眠れ」

「くっ！」

修二は止めを刺そうと、足を踏み出した。

「!?」

それは、誰かの手によって止められた。

「かお……る?」

修二に後ろから抱き付き、歩みを止めている人物は修二の妹、椿薫だった。

「なっ!」

「薫……?」

「薫……何を……」

皆が驚いている中、薫は修二の背中に顔を埋めながら、言葉を発した。

「ごめんなさい。確かにあの話を訊いた時は、優也君が憎かった。けどそれ以上に……大切な友達を傷付けたく無かったんです」

「薫……!」

修二が気付いた時には、二人の周りを強い冷気が漂っていた。

「薫……お前!」

「まさか!」

優也と修二は、薫が次に何をするのか“分かってしまった”。

「優也君……彪牙さん……進君……総司さん……美優ちゃん」

薫はこの場に居ない者の名前を、一人一人、確めるように呟いていく。

「みんな……」
「やめろ……薫！！」
「薫！！」

二人が薫の名前を叫ぶが、薫はもう止まらなかった。

「さようなら」

その言葉と共に、薫と修二を中心に、巨大な氷が花の様に咲いていった。

「薫ううううううう！！！！」

優也の叫びも、氷の花の中の薫には、もう届かない。

第２３話　届かない声（後書き）

漆黒
「初めの修二の独白は、ソウル・イーターの台詞を引用させて頂きました」
優也
「この長編もいよいよ佳境」
美優
「修二の復讐は、薫の安否は、そして私の出番は！」
進
「真面目な時にそう言うの止めろ！？」
漆黒
「とにかく、次回もお楽しみに！」

次回
第２４話　届いた声
薫
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第２４話　届いた声

『約束だよ！』

……ごめん、美優ちゃん。
約束守れそうにないよ。
いつも約束破ってごめんなさい。

『……る！！』

誰？良く聞こえない。

『……か……る！！』

この声は……何処かで訊いた事がある。

『……か……おる！！』

何でだろう……。

『薫！！』

とても……懐かしく聞こえる。

氷の勢いは止まる所を知らず、辺りを凍り付かせていく。
その中を、黒い影が駆け抜けていく。

その黒い影の正体は、優也だった。
体中から血を滴らせながらも、巨大な氷の花に向かっていく。

「優也！？くそっ！！」

彪牙も向かおうとするが、足を凍らされ、動く事が出来ない。

「おおおおおおおおおおおおお！！！！」

優也の体が燃え上がる。
それは咲魔と闘った時と同じ、朱雀の姿だった。

「何だあれ！？」

勿論、その姿を見たことの無い彪牙は目を見開き、驚きの声を挙げる。
咲魔も別の意味で驚いた。
あれほどの力を使っておきながら、再び朱雀の力を解放することが出来たことにだ。

「“炎帝”！！」

優也の刀に、通常より巨大な炎が燃え上がる。
彪牙には無いが、咲魔には見覚えがあった。
それは自分の最強の防御を打ち破った、優也の最強の攻撃。

「“鳳凰激”！！」

朱雀の一撃が氷の花に襲い掛かる。

「ぐっ！！」

だが朱雀の一撃は、氷の花を打ち崩す事が出来ない。
例え力を解放しても、咲魔と闘った時と全く同じ力が使える訳ではないからだ。

「くそっくそっ！！何で壊れねぇんだよ！！」

彪牙は足の氷を殴り付けるが、壊れる気配はなく、ただ自分の拳を傷付けていく。

（俺が動けさえすれば……）

例え人間でも、咲魔は誰かが死ぬ所を見たくない。
だから修二に、変わった鬼と言われている。
だが動こうにも、傷がまだ治っておらず、立っているだけで精一杯だった。

「！風……？」

風が咲魔の短い髪を靡かせた瞬間、一陣の風が横切った。

「！！」

ゴオッ！！と音を立て、優也の炎は更に燃え上がる。
優也が力を振り絞った訳でも、彪牙や咲魔が力を貸した訳でも無い。
そもそも、彪牙の気を操る能力や、咲魔が妖力をコントロールしても、炎を強める効果はない。
つまり、優也の炎に作用したのは、

「正！？」

風を操る能力を持つ、風魔正だった。

「余所見するな！！こんな氷さっさと壊すぞ！！」

正はいつの間にか優也の隣で、力を使っていた。

炎に風、つまり酸素を送れば更に燃え上がる。

正は優也と昔から一緒に居たから、すぐにこの方法が思い付いたのだろう。

「ああ！！」

炎を受けている部分が、段々崩れていく。

そして優也は叫んだ。

「薫ぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！」

大切な友達の名前を。

また……聞こえる。

『薫！！』

そうだ……思い出した。

誰よりも強くて、本当は優しい。

「薫！！」

私の友達。

薫が意識を失う直前に見たものは、紅い瞳の漆黒の少年。

「「！？」」

ピシィ！と音が鳴り響いたかと思えば、突然氷の花が完全に崩れてしまった。

「優也！薫！！」

彪牙が二人の名前を叫ぶが、反応が無い。

「嘘だろ……」

彪牙は足の氷が溶けたことさえ気付かずに、立ち尽くす。

咲魔はそんな彪牙にどう声を掛けていいか分からずに、崩れた氷の山を見た。

「ん？」

すると、ガラッと氷の山が少し崩れた。

「「ブハッ！！ゲホッゲホッ！！！！」」

「「！！」」

その瞬間、優也と気絶した薫を抱えた正が、氷を掻き分け、氷の山から飛び出した。

「ちょっと水飲んだ……ゲホッ！」

「死ぬかと思った！！体中痛ぇ！！」

正と薫の体には、所々凍傷の痕があり、正はかなり痛がっていた。
優也は朱雀の炎を纏っていた事で、凍傷にはならなかったが、氷が溶けて、水を飲んでしまった様だ。
その証拠にまだ咳き込んでいる。

「優也！！かお……！」

優也達の無事を確認した彪牙は駆け寄ろうとするが、優也達の後ろの人物が視界に入り足を止めた。

「……正、薫を頼む」

「ハァ……ったく、死んだら殺してやる」

物騒な言葉を残し、薫を抱え彪牙達の元へ向かった。

「これが……お前の意志か……」

彪牙の視界に入った人物、それは椿修二だった。
修二も体中に凍傷の痕があり、ボロボロだったが、しっかりとした足取りで、ゆっくり歩いてきている。
優也はフラッと立ち上がり、修二と向き合う。

「薫の事なら、お前が一番分かってる筈だろ」

「……火渡優也」

修二は一度眼を閉じ、ゆっくりと開けながら優也の名前を呟いた。

「決着を付けよう」

「ああ……」

修二は両手のチャクラムに、総ての力を注いでいく。

優也は両手で刀を持ち、今までとは比べ物にならない炎を、刀に燃え上がらせた。

「「「！！」」」

「おいおい！」

これまで見たこともない巨大な炎に、彪牙達は驚き、正は少し慌てていた。

「逃げろ！！」

「おい！あいつ何するつもりだ！？」

「知るか！分かってるのはここに居たら巻き込まれるって事だけだ！！！」

「山消し飛ばしたりしないだろうな！！」

正は薫を抱えたまま、彪牙達と一緒にこの場から離れていく。

正の後ろを付いていきながら、彪牙は慌て、咲魔は勝敗より、優也の炎で山が無くならないか心配していた。

「舞い上がれ」

言葉を呟き、両手で刀を持ったまま、ゆっくりと刀を空高々と掲げ

る。

「真紅の翼！！」

そして、更に炎が燃え上がる。

「くっ！“氷結刃”！！」

チャクラムがさっき以上に巨大化する。
しかも、さっきは片手のチャクラムだけだったのが、今度は両手のチャクラムが巨大化していた。

「闇を切り裂く炎となれ！！」
「おおおおおおおおおおおお！！！！」

優也が技を放つ前に、修二が動いた。
どんな技でも、発動前に攻撃されれば意味はない。
巨大化したチャクラムなら、リーチの差で勝てる。
そう考えたからこそ修二は先に動いた。

「“炎帝”！！」

だが、チャクラムが届く前に優也が刀を降り下ろした。

「“鳳凰衝”！！」
「！！」

優也を中心に、巨大な火柱が上がる。
火柱は姿を朱雀の様に変え、翼を羽ばたかせる。

「うおっ！！」
「うっ！！」
「っ！！」

彪牙達は、吹き飛ばされない様にしゃがみこむ。
そして朱雀は翼を羽ばたかせ、空へと消えていった。

「……終わったか」
「……」

空へ消えていった朱雀の姿は、遠くに居た仁や、妖怪の山の外に居た龍にもしっかりと見えていた。
火柱が消えた。
そこには、横たわった修二と、刀を杖代わりにして立っている優也が居た。

第２４話　届いた声

とある病院のとある病室。
そこには、体中に包帯を巻いた優也、総司、二人ほどではないが、包帯を巻いた正、彪牙、一人だけ無傷の仁、お見舞いに来た進と流香、ベットにもたれ掛かって眠っている美優、腰まである黒い髪の、仁と一緒に居た少女、そして美優がもたれ掛かっているベットで眠っている薫が居た。

「優也と正が怪我してるのに、何であんたは無傷なのよ」
「さあな」
「こっぴどくやられてんな」
「……うるさいですよ」
「最後のは危なかったな。なぁ優也」
「だから謝ってるだろ」

皆、各々話をしている。
ちなみにこの病院は、優也達の昔の知り合いの病院らしく、その知り合いは今留守だが、勝手に使わさせてもらっている。

「そう言えば、誰？」

進は初めて会う仁と黒髪の少女を指差しながら言った。
怪我人が多くて、自己紹介すら出来ていなかったのだ。

「初めまして。天道優花です」
「……優也と双子じゃねぇのか？」
「えっ……」

彪牙がそう言うには理由がある。
優花の顔立ちは、元々女顔の優也を、更に女の子の様にした様な顔立ちで、双子の様だった。

「「違う（違いますよ）」」

二人は息ピッタリでそれを否定した。
それを見て、進と彪牙は思った。

（（いや、双子だろ））

二人の双子疑惑が、深まった瞬間だった。

「え～と、じゃああんたは？」

優花の自己紹介も終わったことで、進は優花から仁に目線を移す。

「雷道仁。好物はハンバーグだ」

「何で好物を言ったんですか？」

「出せってか、ハンバーグ出せってか？」

「つーか銀○ネタだろ！！」

何故か好物を言った仁に、仁を目の敵にしている総司もツッコミ、彪牙は少し殴り掛かりそうになり、進は久し振りにツッコンだ。

（久し振りにしたのはお前だろ！？）

何の事だか？

（このやろぉおおおおおおお！！！！）

「……」

妖怪の山。

そこで咲魔は一人黄昏ていた。

「はぁ……負けちまったな」

優也と闘っていた時は本当に楽しかった。
だが、今考えれば負けた事への悔しさが込み上げてきていた。

「鬼がこんな所で何してる？」
「！」

声に気付き、咲魔は振り向く。

「お前……龍か！？」
「久し振りだな」

そこに居たのは龍だった。
どうやら二人は知り合いの様だ。

「負けたんだな」
「……あいつ……強いぞ」

咲魔は木にもたれ掛かる。

「お前が弱かっただけだろ」
「相変わらずだな……」

龍は咲魔にキツイ言い返しをする。
流石にはっきりと言われ、咲魔は肩を落とす。

「いつまでもウジウジするなよ。ボスがそんなんじゃ、部下が反乱起こすぞ」
「……」

じゃあな、と軽く手を振り、龍は歩いていった。
咲魔は龍の後ろ姿を見ながら呟いた。

「天の邪鬼が……」

咲魔はよしっ！と気合いを入れ、歩いていった。

「んっ……」
「薫！？」

眠っていた薫が、小さく声を漏らす。
進はその声に気付き、薫の名前を呼ぶ。
薫はゆっくりと眼を開けた。

「ここは……」
「病院だ」
「四日も眠ってたのよ」
「四日も……！」

起き上がろうとしたが、体が動かしにくい感覚に気付く。

「まだちゃんと休まないと駄目よ。自分事凍らせようとしたんだから、まだ体の感覚が戻らないわ」
「……そうですか」

自分の命を懸けて力を使った事の後遺症が残っていたらしく、薫は

体の感覚がほとんどない。
流香の言い方では、当分休めば治るみたいだ。

「うんん……」
「！！」

薫は美優の声を訊き、ビクッと体を震わせる。

「ふぁぁぁぁ、良くね……薫？」
「……」

言葉が見付からない。
勝手に復讐しようとして、勝手に命を落とそうとして、勝手に無事で帰って来ている。
優也達は傷を負い、美優と進には心配を掛けさせた。
全部自分勝手な行動が招いた結果、自分はここに居ても良いのかと考え始めた矢先、胸に重みを感じた。

「美優……ちゃん？」
「良かった……」

薫が重みを感じたのは、美優が顔を薫の胸に埋めていたからだ。

「薫が戻って来て……ホントに良かったよ～～～」

美優は薫の胸に顔を埋めながら、涙を流した。
それは悲しみの涙ではなく、喜びと安堵の涙だった。

「薫」
「優也……君」

美優が泣いた事に慌てていると、優也が話し掛けてきた。
薫は、優也の体中に巻いた包帯を見て、申し訳無さそうな表情になった。

「ごめんなさい……私のせいで皆に……迷惑を掛けて……」
「……」
「薫……」

薫が話し始めた声を訊き、美優も指で涙を拭きながら顔を上げた。

「私はもう……一緒にはいられ……」
「お帰り」
「！！」

美優は突然、薫の言葉を遮った。
その一言に、薫は耳を疑った。

「薫が帰って来たら、真っ先に言おうと思ってたんだ。優也達より先に言えて良かった」

戸惑う薫を尻目に、美優は微笑みながら言った。

「お帰りじゃないよ！私はもう皆と一緒に居ちゃいけないんだよ！？」
「……友達なのに、何で一緒に居ちゃいけないの？」
「えっ……」

美優の真っ直ぐな瞳が、薫の瞳を見詰める。

「薫がしたことは、正しいとは思えないけど、皆迷惑なんて思ってないよ」

「……」

辛うじて動く首を回し、薫は皆を見ていく。

皆の表情は、美優と同じで、お帰りと言っていた。

「お前が言う言葉は、謝罪の言葉じゃない」

「……」

今まで黙っていた優也がベットの隣に立ち、薫と眼を合わせる。

「お帰りって言われたら、なんて言うんだ？」

「！！」

薫の瞳から、涙が流れていく。

「……いま」

涙を流しながら、小さく呟き、

「ただいま！」

最後にははっきりと、皆に届く声で発した。

「良かった……ちゃんと、届いたね」

「ええ」

仁以外は、その光景を見て微笑んでいた。

今は優也が薫の名前を呼んでいるとかで、盛り上がっている。

「そう言えば、椿修二はどうしたんだ?どっかの病室に居る筈だよな」
「あいつならもう退院した」
「へぇ～……はぁ!?」

今回の事件の張本人の男が、自分の知らない間に退院していた事に、正は驚いた。
またその内、優也や自分達を襲って来るんじゃないかと考えていると、仁が正に言った。

「妹の事、復讐の事、一人で考えたいらしい」
「……そうか」

正は少し安心した。
もしまた闘えば、自分が修二を殺してしまいそうだったからだ。

「あの……風魔さん」
「ん?」

物騒な考えをしていると、ベットの上から薫が話し掛けてきた。

「……風魔って呼ばれ方は、あんまし慣れてないから……正でいい」
「は、はい!」

薫と話すのは恥ずかしいのか、正は眼もあってないのに目線を横にする。

「ベットの上から失礼ですけど……助けてくれてありがとうござい

ました／／／」
「別に俺は何も…………／／／／／／／／／！？」
正は偶然にも、少し顔を赤くしながらお礼を言う薫の顔を見てしまい、これでもかと言うくらい顔を赤くした。
「あの、顔が赤いですけど、大丈夫ですか？正さん」
その言葉が止めだった。
「グハッ／／／／／／／！！」
頭から湯気を出し、倒れてしまった。
「正さん！？」
「おいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！どんだけ純情！！？」
「そう言えば、正って私と優花以外の女の子と話した事無かったわね」
「私もあんまり話した事無いけど…………」
「だからってこれは無いだろ！？」
「眼を覚まして！寝たら死んじゃうよ！！」
「ここは雪山か！！」
「誰か水か何か持って来てください！！」
仁はその光景を、無表情で見ていた。
「楽しそうだな」
「騒がしいだけだろ」
そんな会話をしながら、仁は煙草を取り出し、口に持っていこうと

する。

「病室で煙草は吸わない」

煙草は口に加える前に、流香に強奪された。

「それ以前に未成年が吸うものじゃないわよ」

「お前は俺のお母さんか？」

「なっ！私はそんな歳じゃないわよ！！」

言い争いを始める二人（流香が一方的）。

優也が小さく溜め息を吐くと、隣に居た優花に話し掛けた。

「お前が来ててくれて助かった。ありがとう」

「私は何もしてないよ。あの人達が無事なのも優也のおかげでしょ」

優花の目線の先には、まだ騒いでいる美優達が居る。

「いや……俺は……」

「お前は椿薫を復讐から救い出した。それは事実だ」

さっきまで流香と言い荒らそっていた仁が、優也の頭に手を乗せながら言った。

煙草を吸っていないことから、結局煙草は奪われたようだ。

「だが、一人で無理しすぎだ」

「……」

何も言い返せない。

体中に包帯を巻いていれば、無理をしていないとは流石に言えない。

「お前には仲間が居るんだ。だから無理はするな」
「……うん……ごめん」

素直に謝罪の言葉を発する。
優花はまた無茶するだろうな、と思いながらも微笑み、仁の煙草をどう処理しようか考えている流香に話し掛けた。

「流香の言った通り、楽しそうだね」
「あの子にも、やっと友達が出来たからね」

流香も美優達を見る。

「優也も仁も、皆普通の生活が出来れば良いな」
「優花もでしょ。自分より他人の事を先に考えるとこは、ホントに優也と一緒ね」

流香は溜め息を吐く。
流香の周りは、心配を掛ける人間しか居ない。

「……うん。そうだね」

優花は窓の外の青い空を見詰めながら、呟いた。

町外れの人が居ない道。
そこを椿修二が一人歩いていた。

「……」

すると、道端に咲く一輪の花を見付け。
椿の花だ。

「椿……香りの無い花……か」

花を見詰め、いやっと呟いた。

「いい香りだ」

修二は笑みを浮かべると、何もない道の先を一人歩いていった。

第２４話　届いた声（後書き）

漆黒
「やっと長編終わった～～～～！！戦闘シーンばっかで疲れた！！」
優花
「お疲れ様」
優也
「次回から久し振りの日常編。の前に後日談ってところか」
漆黒
「あっ来たな双子」
優也・優花
「双子じゃない（双子じゃないです）」
漆黒
「息ピッタシ。とにかく自己紹介。遅れてきたもう一人のヒロイン……天道優花です！！」
優花
「あのっ自己紹介勝手にされたんだけど……」
美優・進
「やっと私（俺）の出番だ！！」
優也
「居たのかよ」
漆黒
「今回は優花。任せた」
優花
「あっはい」

次回
第２５話　求める力

優花
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

漆黒
「あっ美優のこれと言った出番は無いかも」

美優
「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！」

第２５話　求める力

薫が眼を覚まして二日後。
薫は車椅子に座り、その車椅子を美優が押して、病院の廊下を歩いていた。

「ごめんね、美優ちゃん」
「も～謝らなくても良いって。好きでやってるんだから」

二日間ずっとベットの上で休んでいたことで、思ったより早く、上体を起こせるまで回復することが出来た。
とは言え、上体を起こせても、足と指先の感覚はまだ回復しておらず、優也と美優と進、二日前に知り合った天道優花が身の回りの世話をしてくれている。
車椅子を押してくれるのは良いが、美優に、あ～んと、言われながら食べさせられるのは流石に恥ずかしかった。

「そう言えば優也君と進君、優花ちゃんも居ないね」
「優也は用事があるって言ってどっか行っちゃったよ。二人は知らないけど」
「そう……」

この間の闘いの後、優也と進、会ったばかりだが優花とは、更に仲が良くなっていた。
だから三人が居ないことに、少し寂しさを感じていた。

「大丈夫。皆すぐに来るよ」
「うん！」

美優に励まされ、薫は笑顔になる。
それを確認すると、車椅子を押し、病室に戻って行く。

「そろそろお昼ご飯食べようか」
「うん……あの美優ちゃん、もしかして今日も……」

薫はあることに気付く。

「大丈夫。今日も食べさせてあげるから♪」
（や、やっぱり！）

先程も言った様に、薫はまだ指先の感覚が戻っていない。
だから美優に食べさせてもらっているのだが、それが恥ずかしくて仕方無い。
だからと言って、美優の厚意を無下には出来ない。
そうこう考えていると、病室の前に到着していた。

「それじゃあ行こうね、薫♪」

そして病室へ入って行く。

（誰でも良いから助けて下さい！！）

薫の心の叫びは、誰にも届くことは無かった。

第２５話　求める力

「あ、君は……」
「こんにちは」

その頃、進は道端で優花とバッタリと出会っていた。
優花とは殆ど話した事が無いので、何を話せば良いか分からずに居ると、先に優花が話してきた。

「水野進君だよね。天道優花です。二人きりで話すのは初めてだね」

全く緊張した素振りを見せず、礼儀正しくお辞儀をしながら、優花は進に挨拶をした。

「ど、どうも、天道……さん？」
「優花で良いよ」
「ゆ、優花……」

美優や薫といった、美少女と普通に話している進だが、何故か優花とは普通に話せない。
理由は簡単、雰囲気が何処と無く優也に似ているからだ。
性格は全く違うし、女の子で喋り方も違う、それても優也と話している様な感覚が進の中にはあった。

「進で良いね。進は何をしてるの？」
「えっ？あ～それは……優也には黙ってて欲しいんだけど……」
「？良いけど」

何故か優也の名前を出された事に、小首を傾げながら頷く。

「実は……風魔さんか雷道って人に闘い方を教えて貰おうと思って。けど、優也に話したら反対されそうな気がしたから……」
「進をこれ以上、巻き込みたくないんだと思う」
「分かってる……」
優也が妖怪の山に向かう前に、自分に言った言葉は覚えている。
だからこそ進は悔しかった。
何も出来なかった自分に。

「友達だから危ない目に遭って欲しくない、優也はそう言った。それは俺も同じなんだ。けど優也、美優や薫も、他の皆も絶対危ない目に遭う。だから、俺は強くなりたい。皆を守れるくらい」
「……」
初めは止めようとしていた優花だが、進の決意を訊いてそれを止めた。

「（私がとやかく言うことじゃない。この人の決意を信じよう）それじゃあ二人を探しに行こう。多分流香の所に居ると……」
「話は訊かせてもらった！！」
「うおっ！？」
優花の声を遮り、進の背後に正は突然現れた。
その後ろからは、歩き煙草をしている仁と日傘を差している流香、そして何故か彪牙が居た。

「よぉ進」
「彪牙！？何でその人達と一緒に居るんだよ！！」

仁、正、流香の組み合わせは分かる。
だがそこに彪牙が居ることには、驚くしかなかった。

「考えてることが一緒だって事だよ」
「えっ？」
「俺も今のままじゃ駄目だと思ってな。だからこいつ等に修行を付けてもらおうってよ」

彪牙はそう言うと、親指で仁を指差す。

「指を差すな。一応師匠って事になるんだぞ」
「別に良いじゃない。どうせ気にしてないでしょ」
「まあな」
「してねぇのかよ」

さて、と流香が呟く。

「早く行きましょ。いつまでも日の下に居るのは辛いわ」
「行くって、何処に？」

突然行くと言われても、何も話を訊いていない進には分からなかった。

「決まってるでしょ。妖怪の山よ」

「全く、見付けるのに苦労したぞ」
「！良く見つけましたね……どうしたんですか？」

進が優花や仁達と会っている頃、優也は総司と会っていた。
珍しい訪問者に驚きつつも平静を装う。

「少し話をしに来ただけだ。それにしても、お前はいつも幻術で姿を消してるのか？」

総司を探すのに苦労したのは、総司が幻術で姿を消していたからだ。
高度な幻術の為、優也が全神経を集中させても、見付けるのに一時間以上掛かってしまった。

「能力の特訓をしている所を、誰にも見られたくなかったんですよ」
「仁を殺すためのか……？」
「……誰から訊いたんですか？」

自分が仁に復讐しようとしていることを知っているのは、自分と彪牙と、復讐されそうになっている本人。
復讐の事は彪牙以外の誰にも言ってないし、仁が陰口の様なことをするとは思えない。
もしかしたら、正が知っているかも知れないがこの際省こう。
となると、優也に教えた人物は一人しか居ない。

「彪牙だ」
「はぁ……全く、お喋りですね」

総司は溜め息を吐き、一旦能力を解く。

「彪牙に言われてお前の復讐を止めに来た訳じゃない。それに、彪牙はお前の事を心配してるんだぞ。口には出さないけどな」
「彼に心配されるなんて、僕も堕ちたものですね」

そう言いつつも、少し嬉しそうな表情だった。

「……6年前、僕は雷道仁とは違う人間に復讐しようとしました」

「……」

6年前と言えば、優也達が戦争に参加していた頃だ。

それを訊いて、優也は少し顔を俯かせる。

「そいつはお金持ちでね、憎い相手でも、親を失った子供が戦争の中を生き抜くためには、どれだけ扱き使われようと、従うしかなかったんですよ」

「……」

総司にも親が居ない。

同情するつもりは無いのに、どうしても悲しい表情になってしまう。

「そして、やっとチャンスが訪れ、隠し持っていた短剣で刺そうとしたその時でした。二丁の拳銃を手にした彼が、雷道仁が現れたのは……」

「そして仁が、そいつを殺したのか……」

「はい」

その時の事を思い出したのか、何故か懐かしむ様な表情で空を仰ぐ。

「殺したかった相手を目の前で殺されて、ポッカリと心に穴が空きましたよ。こう言うのも可笑しいですが、そいつを殺すことが僕の生きる理由だったんです。生きる理由を失って呆然としている僕に、彼は言いました。『悔しいか？だったら強くなって俺を殺しに来い』

。それだけ言い残し、彼は去っていきました。だから僕は、僕の生きる理由を奪った彼を倒すために強くなりたいんです」

「つまり……」

総司が仁に復讐する理由を訊いて、一つ分かったことがあった。

「お前は仁に生かされてる。本当はそれを感謝してるんじゃないのか」

「それは……そうかも……知れませんね」

心の何処かに、その気持ちがあった。

だが認めたくなかった。

認めてしまえば、生きる理由を失ってしまいそうだからだ。

実際、認めたくない理由はそれだけではなく、仁が気に食わないだけなのだが。

「それでも僕は復讐を止めませんよ」

「止めに来たなんて言ってないぞ」

「それもそうですね」

総司は座って眼を瞑り、集中し始める。

（大丈夫そうだな）

そう思い、優也はこの場から去ろうとした。

「！！」

すると、急に総司が立ち上がった。

急に立ち上がった総司に驚き、優也は足を止めて総司を見る。

「見付けました……」
「何をだ？」
真剣な表情をしている総司を見て、何か大変な事が起こっているのかと考えたが、
「女性の着替え場面です！！」
「……」
呆れて言葉が出ない。
あれだけ真剣な話をしていた矢先に、能力を使って覗き、やっぱり総司は総司と言うことだ。
「移動も出来て覗きも出来る……やっぱりこの能力は便利ですね！！」
その瞬間、優也の何かがキレた。
「もうそれがお前の生きる理由だろうがぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
「ゴバァ！！！？」
怒りの“鳳凰爪牙”が顔面に炸裂した。
鬼状態の咲魔でさえ、一撃で倒せそうな蹴りを喰らった総司は地面に叩き付けられ、白眼を剥いて気絶した。
「心配して損した！！」
かなりご立腹の様子で、気絶している総司を放置し、優也はその場

から去っていった。
気絶しながらも総司は思った。
これからは少し自重しようと。

所変わって妖怪の山。
そこには仁、正、流香、優花、そしてその五人と向かい合っている進と彪牙が居た。
あの戦いのすぐ後と言うこともあり、妖怪の殆どが怪我をしていて、邪魔をされること無くすんなりと中に入れた。
仁と正が居るから誰も邪魔をしないだけかもしれない。

「貴様等、ここで何をしている！」

そんな妖怪も近付かない人間達（一人は吸血鬼）に果敢（無謀とも言う）にも怒鳴り付ける、包帯まみれの人間の男女が居た。

「？何か、どっかで見たような」
「まさかお前等」

初めて会った筈なのだが、彪牙には見覚えがあった。
正は誰なのか気付いたのか、二人に指を差す。

「九尾に鴉天狗か」
「そうそれだ」
「でも何で人間の姿なんだ？」

彪牙の言う通り、その二人は人間だった。

男は黒髪の二十歳位で翼も無くイケメンに入る顔をしており、女も金髪が肩までである十代後半位で九本の尻尾も耳も無い。
彪牙達が闘った時とは全く違っていた。

「何百年も生きているんだ。人間の姿があって当然だ」
「何百年生きてて俺達に負けたんだな」

仁がキツい一言を言い放つ。

「貴様、殺されたいのか」

その言葉が気に食わなかった鴉天狗は殺気を放ち、仁を睨み付ける。

「っ！」

その殺気に、進は足が竦む。
何百年も生き、いつ死ぬか分からない中で戦って来たのだ。
彪牙でさえ冷や汗を掻いているのに、戦った事すらない進が耐えきれる殺気では無かった。

「落ち着けって、今日は戦いに来たんじゃない」

その殺気に臆す事無く、正は鴉天狗の前に立つ。

「……本当はお前を殺したい所だ。白虎」
「やってみろよ」
「ちょっ！何挑発してんだよ！？」

まさに一色触発というその時。

「何してんだ、お前」

妖怪の山のボスである咲魔が現れた。

「さ、咲魔！！」

「何故ここに！？」

「何故って、ここは俺達の家だろうが」

二人は思った。

もう少しボスとしての自覚を持って欲しいと。

「すまん。黒烏と九妖が迷惑掛けたな」

「咲魔様！？顔を上げて下さい！」

「謝ること無いです。いきなり押し掛けた私達が悪いんですから」

九尾は慌てて咲魔の頭を上げさせようとし、優花も申し訳無さそうに謝り返す。

それを見ながら、流香は気になった事を鴉天狗に訊いた。

「黒烏と九妖って、貴方達の名前？」

「ああ、そうだ」

「カラスだからクロウか」

「まんまだな」

その言葉に再び黒烏が反応した。

「貴様こそ暗殺者のくせに正って何だ。全く正しくないだろ」

売り言葉に買い言葉、戦い合ったと言うこともあり、二人は言い争いを始めた。

「俺が正しいと思ったことをやり抜けって意味だ！自分自身を名前にしてる奴とは違うんだよ！」
「余程死にたいようだな……。来い、決着を付けてやる！」
「上等！」

何故決闘することのなり、二人は森の中へ歩いていった。

「っておい！？ちょっと待て！！俺達の修行は！？」

進は正を呼び止めるが、正は振り向きもせず歩いていってしまった。

「ホント悪いな」
「お互い様よ」

二人の短気さに呆れながら、流香と咲魔はお互いを労う。

「あいつが居なくても修行自体はどうにかなる。すまないが、少しこの辺りを使わせてもらう」
「貴様！何を勝手に！！」
「落ち着け九妖。メチャクチャにしないなら使ってくれて良いぞ」

勝手に自分達の家を修行場に使おうとする仁に食って掛かる九妖を、咲魔は宥めながら了承する。
勿論九妖は、咲魔の言葉に驚いた。

「咲魔様！？何故こんな人間達に！？」
「はぁ……良いか、九妖は女の子なんだ。お前は自覚をしっかりと持て」
「なっ！！わっ私は妖怪ですよ！女扱いしないでください／／／！

！」

あまり女の子として扱われていなかったのか、その言葉に九妖は頬を赤らめる。
すると咲魔が九妖の頭に手を乗せる。

「分かったな？」
「うっ……わ、わかりました……／／／」

九妖は渋々了承した。
顔は赤いままだが。

「罪作りな男ね」

そんな咲魔と九妖を見て、流香はそう呟き、優花も隣で頷いた。

「取りあえず、お言葉に甘えさせて貰おう。鋼凱寺、水野、始めるぞ」
「お、おう！」
「へっやっとか！」

仁の言葉に、進は少し緊張しながら、彪牙はやっとかと言う様に返事をした。
流香と優花は日陰に入り、咲魔と九妖もその修行を見学する事にした。

「始める前に言っておく。この修行は生半可な物じゃない。それでもやるか」

仁の鋭い視線が二人を射ぬく。

だがそれでも二人の決意が揺らぐことはなかった。

「やるぜ。初めっからそんな事百も承知だぜ」
「簡単に力が手に入るなら苦労はしないんだよ」
「そうか、なら……いくぞ！」

そして二人の修行が始まった。
その内容は、

「まずはこの亀の甲羅を背負ってもらいます」

進と彪牙に亀の甲羅を背負わせていく仁。
二人は何処かで見たことがあった。

「そしてこの“雷”と書かれた石を遠くへ投げる。これを見付けてくるのが今回の修行だ。因みにその辺の石に自分で書いても無駄だ。筆跡でわかるからな。文句は無いな。ならいくぞ」
「いくかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
「これメガヒット漫画の修行じゃねぇかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

二人の怒りの踵落としが仁の頭に落ちた。
仁がしようとしていた修行は、主人公が手からかめ○め波を放つ、メガヒット漫画の修行方法だった。

「何！？この修行をパクった奴等が居るのか！！」
「パクったのお前ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」
「やってられるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

頭を抑えながら、ふざけた事をほざく仁に再び踵落としが決まった。

流石に二度もまともに、二人分の踵落としを喰らえば、気絶するのは当たり前だった。

「あんたに頼んだ俺達が馬鹿だった！！」

「自分自身の手で強くなってやる！今に見てろよ！！」

キレた二人は走って何処かに行ってしまった。

「私はこんな奴に負けたのか……」

「次は勝てるさ……」

九妖は仁に負けた事に落ち込んでしまい、そんな九妖を咲魔が励ます。

「全く……優花、あの馬鹿達は私がどうにかするから先に行ってて」

「え、でも……」

「進がどんな人間か、確かめたいんでしょ」

「うん、ありがとう」

流香の言葉を訊き、優花は進を追い掛けた。

「ごめんなさいね。騒がしくしちゃって」

流香は咲魔と九妖に頭を下げる。

「吸血鬼も一応同族だしな。同族の仲間の頼みなら仕方ねぇよ」

「あら、気付いてたの」

咲魔の言葉に少し驚いた表情をする。

「まぁ、ずっと日陰に居るから多分そうじゃねぇかなって。それにしても、さっきのわざとだろ。最初っから修行してやるつもりなんて無かったんじゃねぇのか」
「まぁな」

咲魔が気絶している仁に話し掛けると、気絶していた筈の仁が起き上がった。
仁はポケットから煙草を取り出し、火を付け吸い始めた。

「気絶したフリまでして、修行くらい付けてやったら良いだろ。あいつ等の決意は本物だぜ」

仁は煙草を吸いながら答えた。

「決意は認める。だが、決意と覚悟は違う」
「……」
「じゃあな、そろそろ正を止めに行かないといけないんでな」

歩き出した仁を追い掛ける様に、流香が後ろを歩く。

「俺達も黒烏を迎えに行こう」
「は、はい！」

それに続き、咲魔達も歩き出した。

「あんなこと言ってるけど、九割くらい本気であの修行しようとしてたから、この馬鹿」
「マジでか……」
「こんな奴に私は……」

流香の言葉を訊き、咲魔は呆れ、九妖は再び落ち込んでしまった。

「進！」
「優花！」

妖怪の山を無事降りた進に、やっと優花が追い付いた。

「えっと、折角だから一緒に行こう」
「お、おう……」

優花は進の横に並び、一緒に歩く。

「ごめんね、仁が……」
「優花が謝ることじゃないだろ！」

優花が申し訳無さそうな表情で謝る。
それを慌てて進が止める。

「にしてもあの金髪、ふざけやがって……」
「あはは……」

優花は乾いた声で笑う。
あれで本気だったとは言えなかった。

「何で真面目にやってくれないんだよ……」
「あれは仁が正しい」
「！？」

突然何処からか声がした。
声がしたかと思えば、目の前に大柄な見覚えのある男が立っていた。
「龍……」
以前優也と死闘を演じた、月臣龍だった。
「何しに来たんだよ！」
龍を嫌っている進は、龍を睨み付ける。
「お前に一つ教えておく事があってな」
「だから何なんだよ！」
「進！落ち着いて！」
龍に掴み掛かろうとする進を優花が止める。
「お前に決意はあっても、覚悟は無いってことだ」
「なっ！ふざけんな！覚悟だってあるに決まってるだろ！！」
進が怒鳴ると、龍は溜め息を吐いた。
「分からないなら言ってやる。お前には誰かを傷付ける覚悟は出来ていない」
「えっ……」
進の動きが止まった。
「戦うと言うことは、人間だろうと妖怪だろうと傷付けなければな

らない。それがお前に出来るか？」
「それは……！」

進は言い返せなかった。
誰かが傷付けられるのも見たくなければ、傷付けたくなかったからだ。

「その覚悟さえ出来ていないなら力を求めるな。邪魔なだけだ」
「……」
「進……」

進は顔を俯かせてしまう。
そんな進に、優花は何も言えず、龍は何処かへ歩き始める。

「もし……」
「え……」

龍は立ち止まり呟くと、進は顔を上げ龍の背中を見る。

「それでも力が欲しいなら、俺に会いに来い。その時は少し考えてやる」
「！！」

それだけ言い残し、何処かへ歩いていってしまった。

「……美優が、あいつの事を悪い奴じゃ無いって言った意味が……分かったような気がする」
「……」

以前龍が美優の家に訪れた時、美優が龍の事を悪い人じゃないと言

っていたが、その時は何故そんなことを言ったのか分からなかった。
だが、今話してみて、少しだけ龍と言う男が少し分かったような気がした。

「よしっ！ちょっと遅いけど、今から薫の見舞いに行くか！行くぞ、優花！」
優花
「う、うん！」

進は突然病院に向かって走り出した。
それを慌てて優花が追い掛ける。

（私も……優也が君を認めた理由が良く分かったよ）

走りながら、心の中で優花は思った。
優花が今日一日、進と一緒に居たのは、進がどんな人間か確かめる為だった。
一般人の進が、強大な力を持った優也と友達になれた理由。
それは、進が誰かの為に必死になれるからだ。
そんな進だから、優也達と一緒に居れるのだろう。

「お～い！優花！置いてくぞぉ！！」
「あ、待って！」

どんどん距離を離していく進の後ろ姿を追い掛けながら、優花は微笑んでいた。
この日、月臣龍と話した事を切っ掛けに、水野進の運命が大きく動き出すのだが、それはまた、遠くない未来の物語に。

第２５話　求める力（後書き）

漆黒
「遅くなってすみません！！つ、疲れたぁ！！」
進
「結構時間掛かったな」
美優
「長編が終わったから気が抜けたんだね」
漆黒
「今回はいつもより長くなったし、いつも以上にグダグダだぁ！！それじゃあお休み！」
進
「寝た！？」
美優
「もう眠らせてあげよう。ここまで読んでくれてありがとうございます。次回も頑張って書かせますから、見てくださいね」
進
「感想も待ってます。それじゃあ！」

第２６話　久し振りの学校とテスト
美優
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第２６話　久し振りの学校とテスト

「学校に来るのも久し振り」
「そうだね。久し振りだよ」
「久し振りなのは薫だけだ」
「俺達はちゃんと来てただろ」

優也、美優、進、そしてやっと退院した薫は、自分達の教室で雑談をしていた。

「薫と来るのは久し振りでしょ？」
「そうだね」
「ホントに良かったね」
「うん！」
「……あれ？」

美優が嬉しそうに返事をしている横で、進が疑問の声を出す。

「教室に入った瞬間にクラスの奴等が集まって来たのは驚いたな」
「ホントにビックリしたね」
「それだけ心配されてるんだと思うよ」
「そうかな？」
「おい、ちょっと待て。何かおかしいぞ」

進は掌を前に出し、話を止める。

「おかしい？」
「何が？」
「別におかしくないよね」

「いや、気付けよ！原因は目の前だよ！？」
「落ち着いて進君！どうしたの？」

立ち上がり怒鳴る進を薫が落ち着かせる。

「どうしたのって、何で優花が学校に居るんだよ！？」
「転入してきたから」
「いつの間に！？」

進が言う通り、何故か優花が当たり前の様に教室に居たのだ。
ちゃんと制服を着て。

「何で優也達は優花が居ることに驚かないんだよ！」

進の言葉に優也達は一度顔を見合わせると、一人一人答え出した。

「仁と優花に訊いた」
「優花に訊いた」
「優花ちゃんがお見舞いに来てくれた時に訊いたよ」
「俺だけ訊いてない！？」
「ご、ごめん……」

自分だけ訊かされていなかった事に、進はかなりショックを受け、
この話の張本人である優花が進に謝る。

「そう言えば、どうやって転入してきたんだろう？」
「仁だ」
「えっ？」

優也は何故か仁の名前を出す。

「俺がここに居るのも、流香がここで生徒会長をしてるのも、優花が転入してきたのも、全部仁が校長を脅し……頼んだからだ」
「えぇぇぇぇ！！そうだったの！？あの人って凄いんだ！」
「……今、脅してって言いませんでした？」
「……気のせいだ。まさか脅すとは思わなかったし……」
（気のせいじゃないのね）

美優は違うところで驚いていたが、薫は衝撃の事実に驚いていた。

「まぁとにかく、あいつは普段は馬鹿だが……」
（（馬鹿って……））

優也の言い草に、二人は心の中で仁に同情した。

「実はあいつは……」
「おい、席に着け」

優也は何か言おうとしたが、先生が来たので仕方無く自分の席に戻った。

「皆も知ってるが明日からテストだ」
「「「……え？」」」
「テスト？」
「いきなり？」

先生の言葉に優也は疑問を浮かべ、優花は転入早々テストに驚き、美優、進、薫は聞き間違いだと思っていた。

「それじゃあ今日はテスト勉強頑張りなさい。それと結果が悪いと

土曜日に補習だからな」

聞き間違えでは無かった。
しかも補習と言う新たな情報と共に。

（（（（忘れてたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！））））

美優、進、薫の叫びが木霊した。
心の中で。

第２６話　久し振りの学校とテスト

「と言うわけで、今日は勉強会を開きたいと思います！」
「何がと言うわけ？」

テストの事を完全に記憶から抹消していた美優達は、美優の家で急遽勉強会を開くことにした。

「勉強なら任せろ、得意分野だからな。仁と流香が」
「あんたじゃないのかよ」

そこには何故か仁と正と流香が居た。
理由は先日と同じく、テスト勉強の話を、正が異常な聴覚で聞き取っていたからだ。

最早盗聴器の役割をしているのではないのかと思うくらいの聴覚だった。

「おいこら、人をストーカーみたいな言い方やめろ」
「誰に話してるのよ。時間が勿体無いからさっさと勉強を始めるわよ」

一人で話し始める正を放っておき、流香は勉強の準備を始める。

（てめぇ覚えてろよ）
「つーか、流香は勉強出来そうだけど、雷道さんは勉強出来るのか？」

正を無視し、進は一番不安な事を言った。
仁だ。
金髪で煙草を吸っていて、以前の修行の事もあり、仁が勉強を出来るようには見えなかった。

「仁で良い。まぁ勉強は多少は出来る」

流石にこう人数が多い所では煙草は吸わずに、腕組みをしながら無表情で答えた。
すると、仁の多少と言う言葉に正と流香が反応した。

「あんたが言うな……」
「こいつに言われると腹立つな」
「どうかしたんですか？」

何故か、少し表情をしかめる正と流香を不思議に思い、薫はその理由を流香に尋ねた。

「え～と、それは……訊けばわかるわ」
「仁、円周率を言ってみろ」
「一回しか言わないからな」
「「「？」」」
仁に円周率を言わせようとする事に疑問を浮かべながら、三人は仁に視線を移した。
「3．14159265358979323846264338327950288419716939937510582097494459230781640628620899862803482 5」
「「「！？」」」
いきなり数字をスラスラと言っていく仁に三人は驚きを隠せない。
実際に合っているのかはわからないが。
「3421170679821480865132823066647093844609550582231725359408128481117450284102701938521105559644622948954930381964428 8……」
「ああ！！もう良い！！わかった！あんたが凄いのは良くわかったから！！これ以上訊いたら頭がおかしくなりそう！！」
「ぷしゅ～」
「美優ちゃん！？」
このままではマズイと思って仁を止めたが、時既に遅し、美優が数字の訊きすぎでオーバーヒートしてしまった。

「この程度でくたばる様なら、この先はもう駄目だな」
「誰だってこうなるだろ!?つーか合ってんのかそれ!!」
「作者に訊け」

携帯で調べました。

「合ってたとして、何でスラスラと喋れるんですか?」

薫が質問する。
オーバーヒートした美優は何とか落ち着かせた様だ。

「完全記憶能力、知ってるか?」
「完全記憶能力?」
「えっと確か、見た・聞いたものを完全に記憶する能力……ですよね。まさか……」

質問を質問で返され、少し慌てて答えた時、薫は何かに気付いた。

「そのまさかだ」
「そうだったんですか……」
「あの～、良くわからないんだけど……」
「俺も……」

二人の会話が良くわからなかった進と、オーバーヒートから戻った美優が手を上げ質問すると、隣に居た優花が二人の代わりに答えた。

「完全記憶能力は、見た・聞いたものを完全に記憶する事が出来るの。ここまではわかる?」
「お、おう……」
「何とか……」

難しい話を訊くのが苦手なのか、既に微妙な顔をしていた。
そこまで難しい話では無いのだが。

「仁はその完全記憶能力者なの。仁は一度円周率を見た事があるから、さっきスラスラと話せたんだよ」

優花が出来るだけわかりやすく説明すると、二人はおお！と言う表情をした。

「な、成る程！」
「難しい話はわからないけど、とにかく記憶力が凄いんだね！」
「う、うん……。（難しかったかな？）」

二人の反応を見て、自分の説明が下手だったのかと、優花はつい考えてしまう。
ただ、二人の物覚えが悪いだけなのだが。

「こいつ、記憶力だけじゃ無くて、頭の回転も異常に早いんだよ」
「天才じゃねぇかよ」

それを訊いて、進は正直な感想を述べると、仁が今まで一番の反応を見せた。
見せたと言っても、どれだけ眼を凝らしてもわからないくらいだが。

「水野、一つ良いことを教えてやる。俺は天才って言われるのが一番嫌いだ」
「えっ……！」

突然の仁の言葉に驚いて、進は仁の顔を見ると、そこには口元だけ

笑い、眼が全く笑っていない仁が居た。
いつも無表情で、今も大して変わりは無いが、何故か怖かった。
それを感じ取った進は、瞬時に見事な土下座をした。

「すんまっせん!!すんまっせん!!マジすんまっせんでした!!」
「わかれば良し」

進の見事な土下座を見て、仁は進を許した。
命の危機は去った。
だが、優也達の中で進の評価が下がった。

「ったく、そんな虐めてやるなよ。お前の心は鉄で出来てるんだから気にならないだろ」
「馬鹿かお前、俺の心はガラス細工の様に繊細だ。お前みたいに図太くない」
「はぁ?金髪で煙草吸ってるお前の心が繊細なわけねぇだろ。それにな、俺は図太くない。俺の心は優しさで出来てんだよ」
「白髪で暗殺者のお前の心が優しさで出来てる筈がないだろ。それに大体なんだ、白虎だから耳が良いって、あれ嘘だろ、風の能力を使える奴なら練習すれば誰にだって出来る。嘘なんか吐くからお前は白髪なんだ」
「白髪関係無いだろ!?ああそうだよ!嘘だよ!それが何か!?けどな、あれで黒烏の奴に隙が出来たんだ、暗殺者なら少しでも相手に隙を作るのは基本なんだよ。そんな事ばっか気にしてるからお前は背が伸びないんだよ!」
「俺はまだまだ成長期だ、そう信じてる。そう言うお前こそ……」
「あんた等話逸れてるぞ!!」

段々ただの悪口になっていっている事に、土下座をしていた進が顔

を上げてツッコンだ。

「あんた達、今日は優也達に勉強を教えに来たのよ。子供みたいに悪口の言い合いをしに来たんじゃないわよ」

二人の言い合いを見かねた流香が止めに入るが、二人は退こうとしない。

「流香、これは男と男の戦いだ。邪魔をするな」

「ただの口喧嘩が？」

「どんな些細なことでも手を抜かないのがホントの男だ」

「馬鹿だろ、お前等馬鹿だろ」

子供だ、優也はそう思いながら軽くツッコンでいくと、流香から殺気を感じた。

「あんた達、干からびるまで血を吸われたいようね」

瞳は紅く、八重歯は鋭く尖り、今にも噛み付いて来そうだった。

「「すいませんでした」」

それを見てヤバイと思った二人は、先程の進と同じくらい見事な土下座をした。

（仁）

（何だ？）

二人は土下座しながら小声で話した。

（やっぱ女は怖いな）
（そうだな）
「何ブツブツ言ってんのよ。私は薫と進を教えるから、仁は残りの三人をお願い。それじゃあ始めるわよ」
「「はい」」

こうして、やっと勉強を始めることになった。
美優、進、薫の三人は流香を怒らせないようにしようと思ったのは言うまでもない。

その頃、彪牙と総司は。
「テスト忘れてましたぁ！！」
「ったく……」
似たような状況だった。

場所は戻って、美優の家。
何人かで別れて勉強をしていた。

「そこはこうするのよ」
「成る程！」
「教え方お上手ですね」
「そうかしら」

「……」

空き部屋では、流香が、進、薫に勉強を教えており、戦力にならない正は大人しく見守って居た。
えっ？元々一人暮らしなのに美優の家が広い？
それは置いておきましょう。

「ここはこうで……」
「……」
（つまんねぇぇぇぇぇ！！！！）

戦力にならない正は当然の事、かなり暇だった。
静かな部屋にペンの音だけが鳴り響く。
元々耳が良い正には、この音はかなり苦痛だった。

（ああくそ！とにかくなんかしねぇと落ち着かねぇ！そうだ、筋トレしておこう！）

やっと暇潰しを見付けた正は、勉強している二人の横で、片手腕立て伏せを逆立ちで始めた。

「1……2……3……」
「……」

普段の進なら、素直に凄いと言っていただろう。
だが今は勉強中、邪魔にしかならない。

「7……8……9……」
「じゅうぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！」
「あべし！？」

進のドロップキックが炸裂した。
逆立ちで、しかも片手と言う、バランスの悪い状態で喰らった事で、勢い良く顔から床にダイブしてしまった。

「はっ鼻が……！」
「何してんのあんた！？いやっ普通に凄いけど！？今することじゃ無いだろ！！お願いだから大人しくしてて！！金払うから！！」
「自業自得ね」

鼻を勢い良くぶつけて痛がっている正を、進は怒鳴り付け、流香は呆れた表情で正を見ていた。

「くそっ何だよ……」
「だ、大丈夫ですか？」

そんな正を見かねた薫が、心配そうに近付いていった。

「！だ……だい、大丈夫……だ／／／」

完全に薫に惚れてしまっているヘタレな正は、まともに喋る事も出来ず、ゆでダコの様に顔を赤くした。

「大丈夫じゃないですよ！少し冷たいですけど、我慢して下さいね」
「！！」

床に顔を叩き付けた事で顔が赤いと思った薫は、自分の能力で両手を少し冷やし、正の両頬に添えた。

「／／／／／／／／／／！！！！」

ヘタレの正が薫にそんな事されて、平静を保っていられる筈が無く、顔が異常に赤くなっていき。

「¢☆＃$＝&¥？£＊！！！！」

「キャア！！正さん！？」

解読不可能な言葉を喋って倒れてしまった。

「おい！？ホントに何しに来たの！？」

「ホントね」

倒れてしまった正を流香は慌てて看病し、進は正の来た意味の無さを叫び、流香はそれに同意した。

結局このメンバーはまともに勉強することが出来なかった。

所変わって、此方は美優の部屋。仁が優也、美優、優花の三人を一手に引き受けていた。

「神道、その公式は違う。使うのはこの公式だ」

「あっはい！」

「優也、計算が間違ってる」

「ああ」

この様に順調に勉強をしていた。

三人一気に見ているのに、仁は間違いを見落とす事無く、その間違いを指摘していく。

「そう言えば優花何も言われてないけど、間違って無いの？」
「えっ？」

ふと疑問に思った。
これだけ仁は間違いを指摘しているのに、優花にだけは一度指摘していなかった。

「間違いが無いのに何を言えば良い？」
「えっ！？」

何気なく言っただけが、本当にそうだった。

「優花はかなり頭が良いぞ」
「優花って凄いんだね！」
「あ、あの……その……」

尊敬の眼差しを送られ、戸惑ってしまう優花。
仁の言う通り、優花は間違いが無く、指摘する必要がなく、優也と美優の勉強に集中出来ていた。

「ねぇねぇ！何でそんなに勉強出来るの？」
「えっと、暇な時に本を読んでたからかな？」
「それじゃあ私も本読もっと。あっそれと優花……」

出来ていたのだが、美優が優花に質問攻めを始めたため、まともに勉強出来なくなっていた。

「言い出しっぺが初めに脱落するなよ」
「とりあえず勉強進めるか」

「そうだな」

結局美優は大して勉強出来ずに、テストに挑むことになった。

テスト翌日。

（（わからない！！！！））

当然まともに勉強せずに、簡単に問題が解けるほど世の中甘くはない。

（こんなことならもっと真面目に勉強しておくべきだったぁぁぁぁぁ！！）

（主人公の気持ちを簡潔に述べよ？知るかぁぁぁぁぁぁ！！そんなもん最初っから書いとけ！！）

（ここは昨日仁に教えてもらったな）

（ここはこうかな？）

（……）

仁に教えてもらっていた優也は意外とスラスラと書け、大して勉強出来なかった筈の薫と優花もスラスラと書けていた。

そして、美優と進は殆ど書けないまま、チャイムが鳴ってしまった。

「駄目だった……」

「終わった……」

こうして、テストが終わり、数日後に返却された。

その時の優也達の成績がこれである。

火渡優也
一年生２００人中３１位。

神道美優
一年生２００人中１８３位。

水野進
一年生２００人中１７２位。

椿薫
一年生２００人中５位。

天道優花
一年生２００人中１位。

鋼凱寺彪牙
二年生２３０人中２６位。

霧藤総司
二年生２３０人中１０１位。

黒城流香
二年生２３０人中１位。

彪牙が意外に頭が良く、総司が意外に普通と言う真実を知り、優花と流香が学年トップを取り、美優と進は残念な結果を残し、補習が決まったテストだった。

第２６話　久し振りの学校とテスト（後書き）

漆黒
「最近更新速度が落ちてきたなぁ……」
彪牙
「まぁ焦るもんじゃねぇよ」
漆黒
「ありがとう。意外に頭の良い男」
美優
「そうだよ！彪牙はどっちかと言えば私達側なのに」
進
「裏切り者！！」
彪牙
「好き勝手いってんじゃねぇぞ！！」
優也
「いきなり喧嘩始めるなよ」
漆黒
「ほっとこう。さて、こんなつまらない小説を読んで下さりありがとうございます。次の長編まではこんな感じで話を進めていきます」
優也
「もう考えてるのか？」
漆黒
「長編だけはね！！」
優也
「威張って言うな」
優花
「次回もお楽しみに」

第27話　密猟者

優也

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第２７話　密猟者

「はぁはぁ……」

妖怪の山、そこで頭に黒い猫のような耳を生やし、お尻からは黒い尻尾を生やした少女が息を荒くして、何者かから逃げていた。

「はぁ……はぁ……ここまで来れば」

少女は何者かから逃げ切れたと思い、息を整える。

その瞬間、銃声が鳴り響いた。

第２７話　密猟者

時は少し遡り、妖怪の山の中を数人の男女が歩いていた。

優也達だ。

仁を先頭に、優也、優花、彪牙と言う順番で歩いていた。

何故このメンバーかと言うと、時は更に遡る。

「依頼？」
「ああ」

先日、仁は優也達にある頼みをするために美優の家を訪れていた。

「最近妖怪の山の妖怪の数が少しづつだが減少している。明日、原因を確かめるために妖怪の山に調査をしに行く。お前達も手伝ってくれ」

そう言う仁の目の前には優也と美優、そして優花が居た。
何故優花が居るかと言うと、実は優花には寝床が無く、優也と美優が一緒に住むように言ったからだ。

「その依頼って、カイさんが？」
「ああ」
「カイ？」

聞き覚えの無い名前に、美優は誰かと優也に質問した。

「俺達が昔世話になった人だ」
「懐かしいなぁ」

優也と優花は懐かしそうに話す。
それを見て、美優も自然と微笑んでいた。

「あの人の頼みじゃ断るわけにはいかないな。その依頼引き受けるぞ」
「そうか。明日の朝には出るぞ」
「はい！」

優也が了承をすると、美優が元気良く返事をした。
すると、優花が美優に尋ねた。

「明日って美優、補習じゃなかったっけ？」
「あっ……」

今更思い出した。
以前のテストで悪い点を取ってしまった事で、土曜日に進と一緒に補習を受けることになってしまっていたのだ。

「いやっでも、補習くらいサボれば……」
「駄目だろ」
「じゃあ補習が終わった後に！」
「補習が終わるのはお昼過ぎだよ」
「弱いとは言え妖怪の住み家だ。一人じゃ死にに行くようなものだ」
「うっ、それは……」

どんどん追い詰められていく。
優也は美優の後ろに回り込んで言った。

「補習行ってこい」
「はい……」

そして今に至る。
彪牙は山に向かう途中で出会い、そのまま着いてきた。

「おい、いつまで歩くつもりだよ。結構歩いたぜ」

結構な距離を歩いたが、まだ目的地に着く気配が無く、彪牙は愚痴をこぼし始めた。

「別に帰っても良いぞ。お前は勝手に着いてきただけだからな」
「やだね、今帰っても暇なだけだ」
「勝手にしろ」

仁は諦め、彪牙の同行を許した。

「今日は何の用だ？」
「あ、九妖さん」

そんな優也達の目の前に、人間体の九尾の妖狐、九妖がまたかと言う表情で現れた。

「ここ最近、この山の妖怪の数が減っているらしいな」
「お前！何故その事を……！」
「咲魔はこの事を知ってるのか？」

驚く九妖に優也は訊いた。

「お前が火渡優也か……。咲魔様は密猟者が原因だと考えていらっしゃる」

九妖は優也の事は知っていたが、目の前で見ると、ホントに優也が咲魔を倒したのかと内心疑った。

「やはりそうか」
「密猟者？妖怪のか！？」

成る程とうなずく仁の横で、彪牙は妖怪の密猟者がいることに驚いた。

「時々いるの」

驚いている彪牙に、優花が説明を始めた。

「妖怪でもただの人間や動物と変わらない妖怪もいるの。そんな妖怪を捕まえて、裏ルートで売り捌いてお金を手に入れる人間が……」

そう言う優花の表情は、少し悲しそうな表情をしていた。

「ちっ、胸糞悪ぃ」

金儲けしか頭にない人間が嫌いな彪牙は、その話を訊き、心底頭に来たようだ。

「取りあえず、この辺を見て回った方が良いな」
「なら少し単独行動をさせてもらう」

優也の提案を訊き、仁は草木を掻き分け、一人で歩き始めた。

「おい！何処行くんだよ」
「調査だ」
「本音は？」

優也の言葉を訊き、仁は立ち止まり、振り向かずに答えた。

「ツチノコは男のロマン」
「やっぱりか！？」

また可笑しな事を言う仁に、優也がツッコンだ。
仁は答えると同時に、再び歩き出した。

「っておい！？戻って来い！！」
「依頼を受けたのはお前だろ！？」

そんな二人の声を無視して、仁はドンドン進み、そして見えなくなってしまった。

「……」

仁が見えなくなっても、九妖はまだ仁を見ていた。

「はぁ、仕方無い。俺達は勝手にその密猟者を探そう」
「おう……」

いつもなら元気良く返事をするのだが、仁の行動を見て彪牙は呆気に取られていた。

「……」
「九妖さん？」

優花は九妖がまだ、仁が向かった方向を見詰めている事に気付き、声を掛けるが反応が無かった。

「九妖さん！」
「！！」

優花は大きな声を出すと、九妖は体をビクッとさせた。
今度はちゃんと聞こえた様だ。

「どうかしました？」

心配そうに自分の顔を覗く優花が眼に入り、九妖は慌てて返事をする。

「な、何でもない！！そんな事より密猟者を探しに行くのだろう？私も手伝おう」
「良いのか？」

妖怪の山を知り尽くしている九妖が手伝ってくれれば、迷う事無く探索出来るだろうが、九妖には優也達を手伝う理由が無い。
だから優也達は驚いた。
優也達が妖怪の山を探索することに反対するか、九妖一人で密猟者を見付けようとするかと思っていたからだ。

「密猟者の事には私も手を焼いていた。そこにお前達が来たと言うわけだ。お前達には負けた悔しさはあっても、恨みは無いしな」

とどのつまり、九妖は優也達に密猟者を見付けさせようとしていた。

「そうか……だったら早く密猟者を探しに行くぞ」
「おっしゃ！！取りあえず見付けたら一発殴らせろ！」
「程々にね」

九妖の許可も取り、優也達は歩き出した。
九妖も優也達の後ろに付いて歩き出したが、一度立ち止まり、仁が

向かった方向に振り向いた。

「雷道仁……か」

その時の九妖の表情は、何処か疑いを含んでいる様に見えていた。

「見付からねぇ……」

「妖怪は見付かるのにな……」

仁と別れ、自分達だけで捜索を初めてかれこれ一時間は経っていた。
一時間も探し回って見付けたのは、以前優也達を驚かそうとしていた妖怪達ばかり、しかも九妖が居るのに、また驚かそうとしてきた。

「優花、大丈夫か？」

「えっ！だ、大丈夫だよ！」

優也に心配を掛けないようにと笑顔で答えるが、優花の表情には疲労の色が隠せなかった。
優花には、優也達の様な身体能力は無く、普通の人間で言えば下の中位の身体能力しかなかった。
それで優也達に合わせて一時間も山道を歩き続ければ、疲れが溜まって当然だろう。

「無理はするな。一度休んだ方が良い」

「そうだぜ。今ぶっ倒られちゃぁな」

「でも……」

心配してくれるのは嬉しいのだが、優花としては、早く密猟者を見付けてこの山の妖怪達を安心させたかった。

「……俺が疲れたから休む。だからお前も休め」

「じゃあ俺も」

優也はそう言うと、近くの岩に腰掛けた。

彪牙もそれに便乗して、休み始めた。

「あっあの……」

「優花だったな。君が私達のペースに合わせる必要はない。本来私達が君のペースに合わせるべきだった。なぁ」

九妖は優花に謝罪すると、休んでいる優也達に目線を移した。

その視線を感じた優也と彪牙は、何も言えず顔を逸らす。

「は、はい……」

申し訳なさそうにしながら、優花も休憩する事にした。

「にしてもよぉ、密猟者どころか俺達以外の人間すら見っからねぇじゃねぇか」

「確かに……」

彪牙の言葉に、九妖も頷く。

かれこれ小一時間探し回っているが、妖怪を見付けても肝心の人間が見付からないのだ。

「密猟者じゃなくて、他の何かが原因？」

「その可能性もあるかも……」

「捕まえたぞ」

優也と優花が別の可能性を考えていると、優也の声を遮り、仁が戻ってきた。

「仁！」
「密猟者を捕まえたのか！？」
「ふっ」

九妖の言葉を訊き、仁はフッと得意気に笑って言った。

「漢だ」
（何かでかい事をやり遂げた漢の顔だ！！！）

仁が捕まえたのは、密猟者ではなく、何とツチノコだった。

「ツチノコかいぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！」
「何処にいた！？私でも見たことが無いんだぞ！！」
「あはは…………」

全員が驚いている中、突然ツチノコが震えだした。
そして何かを吐き出した。

『！？』

ツチノコが吐き出した物、それは牛乳瓶だった。
牛乳瓶を吐き出すと、ツチノコはただの蛇になっていた。

「…………」

そして仁は両手を地面に付き、崩れ落ちた。

（（フォローできねぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！）））

あまりもの落ち込みようにフォローが出来ない男二人。

「で、でも、牛乳瓶を飲み込んだ蛇も珍しいよ！」

「そ、そうだ！私も見たことも無いぞ！」

そして何とかフォローをする女二人。

だがショックが大きすぎたのか、立ち直れずブツブツと何かを呟いていた。

「ああ、進の苦労がわかった……」

「右に同じく」

仁と居るときほど、進が居て欲しいと二人は思った。

「ホントにごめんなさい……」

「いや、良いんだ……。何で私はこんな奴に……」

仁の馬鹿な行動ばかりを見ていると、仁に負けた自分が恥ずかしくなってきた。

「密猟者も居ない様だし、今日はもう帰ってくれて良いぞ。あいつもあんな状態だしな」

「あの……」

優花が九妖に声を掛けようとしたその時、一発の銃声が鳴り響いた。

「銃声！？」
「近いぞ！！」

突然の銃声に、優也達は身構えると、草むらから小さな少女が飛び出し、優花に倒れ込んだ。

「サクラ！！」

サクラと呼ばれた少女は、頭から黒い耳を生やし、お尻からは黒い尻尾が生えていた。
恐らく猫の妖怪だろう。

「！この子、怪我してる！」

優花の手に赤い何かが付着していた。
血だ。
少女の肩から、血が流れていた。

「っ！誰がこんな事を！！」
「これは、撃たれた痕だな」
「って事はやっぱ！」
「ああ～？何だ、お前等？」

その少女を追い掛けるように、三人の男達が歩いてきた。
男達は猟銃を持っており、少女を撃ったのはこの男達だと、すぐにわかった。

「お前達が密猟者か」
「そう言うお前等は能力者か何かかぁ？俺等を捕まえにでも来たかぁ？」

優也の質問を無視して、何処か馬鹿にしたような様子で優也達を見渡す。

「ガキばっかじゃねぇかよ！！この山の妖怪共も雑魚ばっかだし、金儲けには打ってつけだなぁ！」

「何っ！！」

能力者と言っても女子供ばかりだと言うこともあり、密猟者達は完全に優也達をナメていた。

「この山の妖怪共全部捕まえて売り捌いてやる！」

「っの野郎！！」

好き勝手なことばかりを言う密猟者に、彪牙は殴り掛かろうとしたその瞬間、彪牙より先に仁が動いた。

「“竜神爆砕衝”（今適当に考えた名前）」

「ぐっがっぼがぁ！！！！！」

走った勢いを乗せてまずは右ストレート、そして密猟者がふらついた瞬間を狙って左上段蹴り、最後に振り上げた左足の遠心力で回転し、右肘鉄を喰らわせる怒涛の攻撃を繰り出した。

必殺技のような名前だが、今適当に考えた名前で、攻撃自体はただ単に殴る蹴るをするだけだった。

「ドラゴンスパーク！！」

「ヒ、ヒロちゃん！！？」

止めと言わんばかりに、ヒロちゃんと呼ばれた男の頭を両手で掴み、

また適当な技名を付け、アイアンクローを決める。

「貴様等も……ツチノコ狙いか？」

密猟者の頭を離し、残りの二人を睨み付ける。
後に密猟者達は、その表情が般若の様だったと語る。

「おおお俺はツチノコよりあの猫の妖怪の方が良い！！」
「カカカカッパ、カッパが、みみみ見たいです！！」

仁の迫力に二人は両手を繋ぎながら震え上がっていた。
一人ロリコンが居るが。

「ならよし」
「よしなのか」

二人の狙いがツチノコじゃないとわかった仁はアッサリと二人を許してしまった。

「じゃ、じゃあ俺は猫を見に行こうかな！」
「俺はカッパ探し！」
「俺はツチノコ」
『……』

仁は再び何処かに歩いていき、密猟者達は仁にボコられた男を連れ、そそくさと歩き出した。

「って！仁はともかく、待てお前等！！」
「お前等はそいつを頼んだぜ！！」

然り気無く密猟者が逃げようとする事に気付き、少女を優花と九妖に託し、優也と彪牙は密猟者達を追い掛ける。

「げっ！もう来やがった！！」
「逃げろ！！」
「逃がすか！」

密猟者達は必死に足を動かすが、超人的な身体能力を持っている優也と彪牙から、簡単に逃げる事は出来なかった。
優也は飛び上がり、密猟者の一人を踏み潰した。

「ぎゃっ！！」
「ケンちゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！」

仲間が取り押さえられた事に焦り、仲間の名前を大声で叫んだ。

「お、俺に任せて……先に行け！！」
「そ、そんな！！」
「お前等何処のバトル漫画だ？！」
「よそ見してんじゃねぇぞ！！」
「ぐはっ！！」

バトル漫画な展開を繰り広げているスキに、彪牙はもう一人の密猟者を殴り飛ばした。

「サクラ！大丈夫か！？」
「落ち着いて、傷は浅いから血を止めれば大丈夫です」

優花はもしもの時の為に持ってきた包帯を、少女の肩に巻き、応急処置を済ませた。

「すまない……」
「謝らないで下さい。悪いのは人間ですから……」
優花はさっき彪牙に密猟者の事を話した時と同じ悲しい表情になる。
「君は良い人間だな」
「……そんなこと……無いです」
優也達に捕まえられた密猟者達を見詰めながら、優花はそう呟いていた。
「妖怪だから怪我の治りが早いと思うけど、ちゃんと治るまで大人しくしてなくちゃ駄目だよ」
「はい！ありがとうございます！」
「本当にありがとう。感謝する」
感謝の言葉を述べる九妖の横で元気に返事をする少女、サクラはあの後、優花にすっかりなついてしまった。
優花自身もまんざらでも無い様子だった。
「優花、そろそろ行くぞ」
「うん」
密猟者を捕まえた事で、ここに来た目的を果たした優也達は、密猟者を連れて帰る所だった。

因みに仁はまだツチノコ探しをしている。

「もう帰っちゃうんですか……？」

優花が帰ってしまう事に、しょんぼりと尻尾を項垂れ落ち込んでしまう。

その様子を見て、九妖は驚きを隠せなかった。

今は優花と元気に話をしているが、実はサクラは人見知りなのだ。

それが今日あったばかりの人間に、こうもなついているのだ。

「落ち込まないで、サクラ。また会いに来るよ」

優花はしゃがみ、目線をサクラと同じにする。

「ホントですか？」

「うん。だから次会う時までには怪我を治しててね。約束だよ」

優花はそう言い、小指をサクラに向けて立てる。

「はい！！」

サクラも小指を立て、優花の小指と絡め指切りをした。

「またね」

「はい！！」

サクラは飛びっきりの笑顔で返事をし、優花も笑顔で返した。

（ん？あいつ何処行ったんだ？）

すると、優也は九妖が居ない事に気付いた。

（あいつが居ないと仁を見付けづらいんだがな）

仁に任せないと、密猟者達をどうにも出来ないから、仁を早く見付けたいのだが、妖怪の山は広く、九妖の案内無しに見付けるのは、至難の技だった。

（まぁ仁はなんやかんやで真面目だから、ほっといても大丈夫か）

結局、仁はほっとくくと言う結論に至った。

その頃仁は密猟者の事を思い出していた。

「しまった。ツチノコ探しに夢中になりすぎた」

どうやら仕事をサボったことに、少なからず反省、

「まぁ良いか。優也が居るし、後鋼鎧寺も」

していなかった。

しかも彪牙はついで。

「さて、そろそろ帰るか」

「待て」

帰ろうとする仁を、何処からともなく現れた九妖が呼び止めた。

「お前か。どうした」
「お前、雷帝だな」
無表情なのは変わらないが、九妖に少なからず反応した。
「その通り名を知っているのか。情報操作はした筈何だがな」
「情報は操作出来ても、記憶まで操作出来はしない」
今回は仁を出し抜けた気がして、九妖は少し勝ち誇った表情になる。
「訊きたかったのはそれだけか？」
「……今から話すことは、ただの私の推測だ。独り言だと聞き流してくれても構わない」
仁は煙草を吸い始め、九妖は静かに話し始めた。
「初めてお前と戦った時、お前には全く感情と言うものが感じ取れなかった。何百年も生きてきて、何も感情を感じ取れない人間等居なかった」
仁と戦った時、仁から全く感情を感じなかった。
人間なら、喜怒哀楽の感情が少なからずある。
所が、仁にはそう言った感情が、微量にも感じ取れなかった。
「お前の馬鹿みたいな行動もそうだ。あれは無理をして感情がある様に振る舞っているみたいだ」
仁の行動、進と彪牙の修行の時のふざけた行動や、今回のツチノコ探しの事、まるで自分にはちゃんと感情があると言っているように

しか、九妖には見えなかった。

「そして最後。お前からは人間の気配を感じない。妖怪の気配も、悪魔や死神の気配すら……」

九妖は一度言葉を止め、そして本題を切り出した。

「お前は……本当に人間なのか」

九妖の言葉と共に、二人の間に風が吹き、二人の金色の髪を靡かせる。

数分沈黙が続き、仁が口を開いた。

「さぁな。ただ一つ言えることは……」

仁は歩き出し、煙草の煙を吐きながら答えた。

「優也がいる限り、俺はまだ人間だ」

良く意味のわからない答えを残し、仁は帰っていった。

「火渡優也がいる限り……か」

妖怪の山にはいつもの静けさが戻っていた。

第２７話　密猟者（後書き）

漆黒
「いや～疲れたね」
九妖
「結局一週間で更新出来なかったな」
優花
「グダグダでも更新出来ただけでも凄いですよ」
漆黒
「優花……フォローになってない……」
優花
「ご、ごめんなさい！」
九妖
「こんな奴に謝る必要など無い」
漆黒
「あれ？目から水が……？と、とにかく！烈火竜さんのアドバイスで今回猫の妖怪、サクラを妖怪のマスコット的な感じで登場させましたが、どうでしょうか？えっ？何処かのシューティングゲームで見たことがある？気のせいです」
九妖
「おい、眼を逸らすな」
優花
「次回もお楽しみに」

次回
第２８話　ストーカー
優花

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

登場人物設定3

黒城流香
（こくじょうるか）

性別　女

ＣＶ：林原めぐみ
（シャーマンキング：恐山アンナ）

年齢　１４歳

誕生日　５月９日

身長　１６７ｃｍ

体重　４５ｋｇ

好き・得意な物（事）　優也の血　紅茶　日陰　優也を女装させること

嫌い・苦手な物（事）　日向　雨　ニンニク

能力　血液操作

武器　無し

容姿
１０人が１０人振り返る程の絶世の美女。

髪は腰まである銀色のストレート。
八重歯は普段は、人間と変わらないが、血を吸うときと、力を解放した時は鋭く尖る。
瞳の色は、普段は金だが、吸血鬼としての力を解放すれば、赤色になり背中に翼が生える。

解説
優也達が通う中学校で生徒会長をしている吸血鬼。
吸血鬼と言うだけあり、日の光、流水が弱点だが、日の光は日傘が無くても多少は平気で、流水も長時間浸かっていなければ大丈夫。
何故生徒会長をしているかと言うと、優也が心配で、様子を伺うのなら近くに居た方が良いと仁が提案した為、優也が中学校に通う事を予想した仁が、校長に頼んで（脅して）生徒会室を占領することが出来た。

月臣龍
（つくおみりゅう）

性別　男

ＣＶ：櫻井孝宏
（Ｄ．Ｇｒａｙ－ｍａｎ：神田ユウ）

年齢　１３歳

誕生日　１０月１０日

身長　１９１ｃｍ

体重　８６ｋｇ

好き・得意な物（事）ドＳな行為　傍観

嫌い・苦手な物（事）自分の秘密や過去を知ろうとする者

能力　無

武器　大剣

容姿

髪は亜麻色、瞳の色は黒。
身長はかなり高いが、彪牙と同じ細マッチョ。
顔も中々のイケメン。
右手首にはいつも大剣を模したブレスレットをしている。

解説

現在の登場人物の中でも最強レベルの男。
能力は相手の能力を無効化し、他にも使い道があり、身体能力は黒夜叉状態の優也と互角に渡りあい、彪牙のパンチを指一本で止める怪力を持っている等、反則ギリギリの能力を持っている。
だが本人は殆ど傍観に徹している。
しかも性格はドＳで、誰にでも容赦が無い。
優也達と出会うまでは何をしていたか、詳しいことは誰も知らない謎の多い人物。

風魔正
（ふうませい）

ＣＶ：岡本信彦
（とある魔術の禁書目録：一方通行）

年齢　１３歳

誕生日　９月２３日

身長　１８０ｃｍ

体重　７４ｋｇ

好き・得意な物（事）　筋トレ　薫

嫌い・苦手な物（事）　道案内

能力　風

武器　日本刀（二刀流）

容姿
髪は短髪で白髪。
眼の色は茶色でつり目。
実年齢より少し老けて見えるが、見た目は上の中。

解説
武器が刀だから剣士と思われがちだが、実は暗殺者で刀を投げつけ

て攻撃したりする。
幼い頃から暗殺者として育てられた為、気配を察知する事が優也より得意で、毒への耐性もある。
能力と相まって、数キロ先の音を聞き分ける事も出来る（本編で、白虎だから耳が良いのは嘘と言っているが、多少は関係している）。
性格は努力家で暇さえあれば特訓している。
女子と面と向かって話せないヘタレである。
薫に一目惚れした。
戦闘では非情だが、今は殺しはしていない。
だが時々制御が効かなくなり、暗殺者としての自分が目覚めてしまう。
何故か方向音痴。
優也と仁とは、流香達よりも長い付き合い。

雷道仁
（らいどうじん）

性別　男

ＣＶ：石田彰
（銀魂：桂小太郎）

年齢　１３歳

誕生日　１月１０日

身長　１６６ｃｍ

体重　５４ｋｇ

好き・得意な物（事）　完全記憶能力　速読　情報操作　射撃　ハンバーグ

嫌い・苦手な物（事）　暗闇（前が見えないから）

能力　雷

武器　二丁拳銃

容姿

髪は首に掛かるくらいの長さの金髪。
眼の色も金色。
顔立ちは上の上。
前髪は前が良く見える様に眉毛辺りにしている。

解説

優也、流香、優花を学校に転入させた張本人。
優也曰く、校長に頼んだ（脅した）らしい。
情報収集や情報操作が得意で、自分達の情報を消していた。
射撃の腕が凄く、１００ｍ先の、銃弾が一つしか通らない位の隙間にでも、寸分狂わず狙える。
戦闘時や、真剣な時はかなり冷静で全く動じない性格だが、普段は可笑しな行動が多いクールボケ。酒を何杯飲んでも全く酔わない。
彪牙が酒を飲める事を知り、最近は彪牙仲が良い。
いつも煙草を吸っているが、時と場所は考える。
どんな時でも無表情で、まるで機械だと言われている。
優也と正とは、流香達よりも長い付き合い。

天道優花
（てんどうゆうか）

性別　女

ＣＶ：水樹奈々
（魔法少女リリカルなのは：フェイト・テスタロッサ）

年齢　１２歳

誕生日　１２月２５日

身長　１５０ｃｍ

体重　４０ｋｇ

好き・得意な物（事）　読書　勉強　料理　歌

嫌い・苦手な物（事）　誰かが傷付く事

能力　不明

武器　無し

容姿
腰まである黒髪のロングヘアー。

瞳は優也と同じルビーの様な紅い色。
顔立ちは優也をベースに、完全に女顔にしたような感じ。
あまりにも似ているため、良く双子と言われる。
鳥の翼の様なネックレスをいつも身に付けている。
胸が小さい。

解説
遅れてきたもう一人のヒロイン。
本作中で、身体能力は一番低く、誰よりも心優しく、乱暴で大食いな美優よりヒロインっぽい。
フォローのつもりが、フォローにならない等、思った事を時々声に出してしまう。
酒を一口でも飲むと性格が一変する。
能力は無いのだが、何故か優也の黒夜叉としての本能を、抑える事が出来る。
胸が小さい事に悩んでいる。

登場人物設定3（後書き）

漆黒
「やっとメインキャラ全員の設定書けた」
正
「11人、多くねぇか？」
漆黒
「こんなもんでしょ」
流香
「今回は私達幼なじみ組ね」
優花
「そうだね」
仁
「まぁまたすぐに編集するだろうがな。だが安心してくれ」
龍
「編集する度に作者を十発殴ってやるから」
漆黒
「やめて！！」

第２８話　ストーカー

買い物帰りだろうか、買い物袋を持った少女二人が夜道を歩いていた。
二人は楽しげに話している。
そんな二人を、静かに付きまとう影が一つ。

第２８話　ストーカー

『ストーカー？』

学校の昼休み、優花が加わったいつものメンバーの男達の声が重なった。

「実は、昨日の買い物帰りに誰かに付けられてる気配がして……」
「気付いたら家の前まで着いて来てたの」

ストーカー被害にあったと言う美優と優花。

今まで家事が出来ない美優に代わって、優也が買い物も含め、全て受け持っていた。
それを見た優花が、優花だけにやらせるわけにはいかないと、家事は優也と優花の当番制、買い物は二人一組と言うことになったのだ。
そして昨日、美優と優花が買い物帰りに誰かに付けられたのだ。

「そんな事が……。大丈夫でしたか？優花さん」
「わ、私は大丈夫だったけど……」
「あれ？私は？」

ストーカーがいる事に、心配になった総司は、優花だけに安否を尋ねる。
何故か自分の事を無視する総司に、美優は疑問符を浮かべる。

「優花、これからはちゃんと誰かと一緒にいる方が良いぜ」
「いや、ストーカーが優花狙いっていつ決まったの？そこに私も居たんだけど……」

総司に続き彪牙まで、自分の心配をしないことに段々腹が立ってきた。
優花の事が心配じゃない訳ではないが、優花との扱いの違いに、腹立たしさが溢れ出してくる。

「そりゃぁまぁ、美優は襲われたとしても、ストーカーを逆に倒しそうだし……」
「フンッ！！」
「がはっ！！？」

美優の右ストレートが、進の鳩尾に決まり、進は崩れ落ちた。

「どうせそう言うことだと思ったけど……」

もう少し女の子としての扱いをしてくれても良いんじゃ無いかと、落ち込む美優だった。

「二人のどっちかを狙ってるのは確かだから、当分は一緒に居た方が良いな」

「だから私も！！ってあれ？普通の事言ってくれてる？」

また優花の心配かと思ったが、意外と普通の事を言っていた。

「許せない」

そんなやり取りをしていると、今まで黙っていた薫が、少し怖めの声で呟いた。

「か、薫さん？」

「ど、どうしたんだよ……急に……」

薫のただならぬ雰囲気に、美優以外は青ざめる。

「女の子を、しかも私の友達をストーカーするなんて……万死に値します」

「あの～薫？お前が言うとマジで怖いぞ……」

もし冗談だとしても、薫だと本当に実行に移しかねないのが怖かった。

「皆さん、今日中にストーカーを見付けましょう」

「そして、捕まえた後は……」

「後は……？」

いつの間にか、美優まで恐ろしいオーラを放ち、二人は言った。

「「捕まえて、ボコボコ（凍り付け）にしてやる（してあげます）！」」

「「マジで（本当に）やるなよ（しないで下さいよ）！？」」

三人のツッコミと共に、ストーカー捕縛作戦が開始した。

「来るなら来い……」

「……」

「頼むから普通にしてくれ……」

学校からの帰り道。

通り過ぎる人を一人一人にメンチを切る美優。

無言で威圧感を放つ薫。

一緒に居る優也達はそんな二人に、特に薫に恐怖を感じていた。

「（な、何とかしないと！！耐えきれねえ！！）なっなぁ！ちょっとそこの喫茶店に行かないか！」

昼休みの美優の攻撃から復活した進が、何とか場の空気を変えようとする。

「「何で？」」
「えっ！いや、それは……」

言い出したまでは良かったが、何で行くかの理由を考えていなかった。
だが他のメンバーも、この空気を何とか変えたいと思っており、進に助け船を出した。

「こ、こんな人通りの多い場所じゃ誰がストーカーかわからないだろ？！」
「喫茶店まで着いて来た奴がストーカーの可能性があるだろ！？」
「それに一度休息も取っておくべきですよ！！」

二人を説得しようと、全員で色々理由を言っていく。

「そうそう！！それにこの空気に耐えきれな……」

優花がその先の言葉を言う前に、優也と進が優花の口を塞いだ。

（優花ぁ！！それ以上言うな！！）
（今の二人は何するかわからないんだぞ！！）
（ご、ごめんなさい！！）

優也達は恐る恐る美優達を見る。
すると二人は、

「そう言う事なら、そうしましょうか」
「そうだね。お腹も空いてきちゃったし」
（（（よっしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！）））

進、彪牙、総司は心の中でガッツポーズをとり、優也と優花は安堵の溜め息を吐く。

（作戦成功だ。喫茶店で美優に何か食べさせれば機嫌が良くなる筈！機嫌が良くなった美優を見れば、薫もいつもの優しいお母さんに戻る筈だ！）

（美優限定のお母さんだけどな）

（雰囲気的に美優以外にもお母さんだから大丈夫！って、何で心の中で話してるんだ！？）

（さぁな）

何故か心の中で話をしながら、喫茶店に入っていった。

『……』

「「……」」

進の考えは甘かった。

料理を食べさせて、美優の機嫌を良くするどころか、ストーカーの手掛かり一つ無いことに、苛立ちを募らせていた。

それは薫も同じだった。

（悪化……してますね……）

（この作戦……逆効果だったね……）

（すみません……優花って結構言いたい事はっきり言うよな……）

（餌付け作戦は効果無し。こうなったら進が犠牲になるしか……）

（何で俺がストーカーの代わりにならなきゃならないんだよ!?つーか何でお前だけパフェ食ってんの!?）

小声で次の対策を考えている中、何故か優也だけパフェを食べていた。

（甘いのは大好物だ）

（それだ!）

（彪牙?）

優也の言葉に、彪牙は何かを閃いた。

（優也!そのパフェ、美優に食べさせてやれ!）

（……何でだ?）

（良いから!ちゃんとそのスプーンでな!!）

「（……一口だけだぞ）美優」

「何……?」

辺りを警戒していた美優が、不機嫌そうに優也に顔を向ける。

「ほら」

「……えっ?」

優也の行動に、ストーカーの事など完全に忘れた。

その優也の行動とは、俗に言うあ～ん、だった。

（（素でやりやがった（やがりますか）!!!!））

その行動に、進と総司の残念な二人が一番反応した。

（（誰が残念だ（ですか）！！））

目の前に出されたスプーンに、どうするか戸惑う美優。

（（無視！？））

「ゆっ優也／／／！？な、何これ！？」

「パフェ」

顔を赤くし、慌てる美優とは対象的に、優也は普段通りに冷静だった。

「そうじゃなくて／／／！？」

「良いから食べろ」

慌てる美優に、パフェを乗せたスプーンを美優に近付ける。

「う～わかったよ……／／／」

断る事が出来なかった美優は、ゆっくりパフェが乗ったスプーンに口を近付け、食べた。

「もうやらないからな」

「／／／／／／／」

顔を林檎の様に赤くしながら、美優は頷いた。

「……」

薫はいつの間にか、あの恐ろしいオーラを消し、二人を驚いた表情で見ており、優花は少し羨ましそうに二人、と言うより美優を見ていた。

（計画通り）

それを見て、彪牙は何処かの、ノートに犯罪者の名前を書く人物の様な表情をしていた。

数十分後、喫茶店を出た優也達はゲーセンで遊んでいた。

「よっしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「ま、負けた……」

今、優也と進の対戦が、進の勝利で終わった。

優也には何をしても勝てなかった進は、初めて優也にゲームで勝てたことに全力で喜んでいた。

因みに彪牙と総司も、進にゲームで完敗していた。

「はっはっは！！誰でも掛かってこいよ！！」

進は完全に調子に乗っていた。

「だったら、次はわた……」

「こんなこと認めませんよ！！」

進に挑もうと、美優が対戦相手に名乗り出ようとしたその時、総司が怒鳴り散らした。

「君は何をしても普通！！唯一の取り柄はツッコミだけの地味少年の筈！そうでしょう！そうと言いなさい！！」

「誰がツッコミだけの地味少年！？お前なんか変態じゃねぇか！！」

総司は負けた悔しさに、言いたいことを勢い良く言っていく。

地味と言われた進は立ち上がり、怒り任せに、総司に言い返すが。

「僕は君と違って変態だと自覚してますので、君も地味だと自覚したらどうですか？」

「……完全にキレたぜ」

二度も地味だと言われ、進は堪忍袋の緒が切れた。

椅子にドッシリと座り、ゲーム機にお金を入れる。

「十回対戦だ。お前が一度でも勝てたら、俺が地味だってことを認めて、今日のゲーム代はおごってやる。だがもし、お前が負けたら今日のゲーム代全部おごれ」

「はっ！後悔しても知りませんよ」

こうして、二人のプライドを賭けた激闘が始まった。

「……そう言えば、今日ってストーカーを探しに来たんだっけ……」

本来の目的を、今やっと思い出した。

自分と優花のどちらかをストーカーしていた人物を、捕まえようと

していたのに、いつの間にかゲーセンで進と総司の対戦を見るハメに。
気付けば皆、二人の対戦に見入っていた。

「……帰ろ」

今日は乗り気になれず、美優は一人で帰ってしまった。

「はぁ～……」

盛大に溜め息を吐きながら、美優は一人で帰って居た。

「一人で勝手に帰っちゃったら、皆怒るかな？」

今更ながら、一人で帰った事を後悔する。
今周りには人が全く居ない。
もし今、ストーカーに襲われなどしたら、正直進の言った通りに撃退する自信など無い。
普通の人より力強くはあるが、薫の様に戦った事もなく、強いかどうかは知らないが、流香の様な吸血鬼でも無い。
美優はただの女の子なのだ。
そんな事を考えていたら、誰もちゃんと女の子として扱ってくれない事に、悲しくなってきた。

「けど、大丈夫だよね！私より優花の方が全然可愛いし！ストーカ

ーも私より優花を狙ってるだろうし。優花には皆が居るし……。
うん！大丈夫！」
「何が大丈夫なんだ？」
「ひゃあ！！？」

無理矢理元気を出そうと、美優は大きな声を出すと、後ろから突然、何処からか現れた優也が声を掛けてきた。
自分一人だと思っていたので、突然声を掛けられた事に、驚きの声を上げる。

「ゆゆゆゆゆ優也！？何でここに！？」
「何でって、お前が勝手に帰るから。わかってるのか？お前が狙われてるかも知れないんだぞ」
「でも……」
「でもじゃない」

溜め息混じりで、美優を見る。

「暗くなって来たし、さっさと帰るぞ。皆心配してる」
「！……うん！」

皆自分の事は心配じゃないと、そんな考えをしていたが、杞憂に終わった様だった。

「ごめんね……」
「全くだ。お前が居なくなった時は薫が怖かったからな……」

優也はその時の事を思い出したのか、顔が少し青ざめていた。
もう太陽が落ちて暗くなった道を、いつもの雰囲気に戻りながら、二人は歩いていく。

「……何処まで着いてくるつもりだ。出てこい」
「えっ？」

突然優也は立ち止まり、後ろを振り向いた。
それに合わせ、美優も一緒に振り向くと、少しポッチャリ体型の男が、フラリと歩いてきた。

「！！」
「優花じゃなくて美優の方だったか。早めに追い付いて良かったな」

ブツブツと呟きながら近付いてくる男から、美優を隠すように、優也は前に出る。
すると、美優は優也の服を掴んだ。

「美優？お前は下がって……」
「優也……あの人……何？」
「えっ？」

優也が男の正体をしる筈がない。
それは美優にもわかっている筈。
だが、美優の質問は誰ではなく、何、だった。

「あの人の中……何か居るよ……」

美優は顔を青ざめ、震えながらも、男を見ていた。

「美優……！危ない！！」
「きゃ！！」

震える美優を落ち着かせようと、優也は美優に顔を向けた瞬間、男が手を突き出し、襲い掛かってきた。
優也は咄嗟に美優を突き飛ばし、腕を交差させ、男の攻撃を受け止めた。
攻撃と言うより、ただ突っ込んで来ただけ、それでも優也は吹き飛ばされた。

「うっ！！」
「優也！？」

（何だこいつ！本当に人間か！？）

吹き飛ばされた優也は、背中から地面に倒れた。
突っ込んで来た時の男のスピード、優也に攻撃した時のパワー、どちらも普通の人間が出せる様な物では無かった。

（こいつからは、霊力も妖力も、彪牙の様な気も感じない。それでこの力……まさか……）

「優也！上！！」
「！！」

美優の声に、優也は上を見た。
そこで優也が見たのは、禍々しい紅いオーラを放っている、骨で出来た様な片翼の翼を生やした男が、自分に向かって一気に襲い掛かろうとしている場面だった。

（悪魔の……翼……）

男は、優也に向かって拳を降り下ろした。

第２８話　ストーカー（後書き）

漆黒
「久々の戦闘。そして急展開！」
流香
「優也より先に美優が、男がただの人間じゃ無いって気付いたわね。それが美優の隠された能力かしら？」
漆黒
「その辺はまだ詳しくは触れません。けどいつか話にしたいと思います」
流香
「それにしても、初めの美優の扱い悪すぎるわよ」
漆黒
「いや～、あれくらいしないと、美優が落ち込まないかなって。それにこれからはちゃんとした扱いをしますよ」
流香
「なら良いわ。さて、今回私は出てないけど、次回は私が活躍よ。是非とも見なさい」
漆黒
「上から目線はやめなさい！！え～、そう言うわけで、次回は流香が遂に戦います。頑張って、出来るだけ面白く書けるように頑張ります！」
流香
「また次回ね」

次回
第２９話　悪魔の翼と吸血鬼の力

流香

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第２９話　悪魔の翼と吸血鬼の力

片翼の翼を生やした男の拳が、優也の顔面へと降り下ろされる。

「危ないっ！！」

「っ！！」

美優が叫ぶと同時に、優也は首を捻り、男の拳を避ける。

拳は優也に当たることは無く、コンクリートの地面に突き刺さり、地面を砕いた。

「！！」

男が地面を砕いた事に、二人は驚きを隠せない。

彪牙や咲魔の様に、拳に気や妖気を溜めれば砕く事は出来るだろう。

だがこの男は、ただ腕力だけで地面を砕いた。

「グウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ」

男はまるで獣の様な呻き声を出しながら、地面に突き刺さった拳を勢い良く引き抜く。

拳が完全に引き抜かれた瞬間、優也の頬に何か液体の様な物が落ちた。

（これは……血？）

優也は頬に付いた血を確認すると、引き抜かれた男の拳を見た。

地面を砕いた拳はボロボロになり、血だらけになっていた。

「ガァァァァァァァァ！！！！」

男は雄叫びを上げ、再び拳を降り下ろした。

「くっ！！」

当然、優也が簡単に攻撃を受ける筈がなかった。

寝転んだ状態から、男の腹に蹴りを放ち、男の体を空中に浮かせる。

そして、透かさず体を起こし。

「正当防衛だ。悪く思うな！」

空中に浮いた男を蹴り飛ばす。

男は塀にぶつかり、動かなくなった。

「ゆ、優也……。やり過ぎじゃ……」

ただの人間では無いことは、美優自身もわかっていたが、骨の様な翼を除けば、姿形はただの人間だ。

それを容赦無く蹴り飛ばしたりするものかと、そう思いつつ、美優は男の心配をする。

「こいつの体は人間だ。手加減はしたさ。この場合は足加減か？」

そう言うながら、優也は制服の誇りを払う。

「えっ？あの人……人間なの？」

美優は優也の言葉に疑問が湧いた。

男の体は人間、それは一体どういう意味なのかと。

「あいつは悪魔に取り付かれた人間だ」
「あっ悪魔！？」
「正確には悪魔の翼だけどな。それに悪魔の事は前に一度話したぞ」
「え？あ、そう言えば……」

美優は初めて優也と出会った日の事を思い出した。
あの時、優也は言っていた。
妖怪の他にも、悪魔や死神が存在すると。
とは言え、悪魔自体を見るのは初めてな為、当然驚きを隠せない。

「悪魔って、黒い全身タイツじゃないんだ」
「バイ○ンマンか？」

違う意味で驚いていた。

「さっきも言ったがあいつは人間だ。まぁ、俺も実際に悪魔の事は話で訊いただけで、わかってるのは、あの翼に取り付かれた人間は、異常な力を手にするらしい」

優也の言葉に、男が人間だと言うことと、自分が感じた物を、美優は知った。

「（私が感じたのは、あの人の中の悪魔の力だったんだ）優也、あの人……助かるの？」

悪魔と言えばエクソシストなのだが、実際に悪魔を祓えるのかわからないし、それ以前に、エクソシストどころか、この近くには教会すら存在しなかった。

「悪魔の翼に取り付かれた人間は、翼さえ破壊すれば元に戻るらしい」
「なら早く壊さないと！」
「わかってる。それに、このまま暴れさせたら、あいつの体が持たないしな」
優也は塀にもたれ掛かっている男を見る。
「今まで戦った事もない人間が、いきなりこんな力に耐えきれる筈がない。無理矢理なら尚更だ」
優也は男に近付き、先程地面を砕いた男の拳を見る。
皮は剥がれ落ち、コンクリートの破片が突き刺り、ボタボタと血が流れ落ちている。
この男の体は、悪魔の力に耐えきれていなかった。
自分の限界以上の力を出したからだ。
優也も、咲魔との戦いの時、自分の限界を超えた速度を出したため、体がボロボロになったから、良くわかっていた。
「とりあえず、さっさと潰すか」
男の目の前まで来た優也は、翼を破壊しようと、右足に炎を集中させた瞬間、気絶していると思い込んでいた男が、その足を掴んだ。
「っ！？」
男は顔を上げると、ニタァと笑い。
「ガァァァァァァァァァ！！！！」

先程同じ雄叫びを上げ、もう片方の手で、優也に殴り掛かった。

（しまった！）

男に足を掴まれている為、優也は躱わす事が出来ない。
防御しても、優也の力では、悪魔に取り付かれた男の力には勝てず、
ダメージを負うのが目に見えている。

「優也！！」

いつの間にか、満月が昇った夜に、美優の叫び声が木霊した。

「くそっ！」

ダメージを受ける事が目に見えていても、まともに喰らうよりはマシだと判断し、ダメージ覚悟で腕を交差させ、攻撃に備えた。

「！」
「あ……」

いつまで経っても、男の拳が優也に届くことはなかった。
男の拳が優也に届く前に、腰まである銀髪の少女が、男の手首を掴んでいた。

「グギャァァァァァァァァ！！！！」
「！？」

男は突然、優也の足を掴んでいた手を抑え、苦痛の声を上げた。
銀髪の少女が、男の腕を力一杯踏みつけていたのだ。

「うっ！」

男が優也の足を離した瞬間、銀髪の少女は優也を引っ張り、美優の元へと一歩で近付いた。

「私の目の前でこの子に手を出すなんて、随分と愚かね」

月明かりに照らされ、少女の銀髪が美しく煌めく。

二人は、特に優也は、その銀色の髪には見覚えがあった。

「お前……」

「今夜はこんなにも月が綺麗だから……」

髪を靡かせ、悪魔に取り付かれた男を睨み付ける。

そして、優也は少女の名前を言った。

「流香！」

「死んでも知らないわよ」

満月の夜に今、銀の吸血鬼が舞う。

第２９話　悪魔の翼と吸血鬼の力

「グルゥアアアアアアアアアア！！！！」

男は怒り狂い、流香へと突っ込んでいく。

「刀が無いなら下がってなさい。流石に素手はキツいでしょ」

流香は二人を下がらせ、突っ込んで来る男を迎え撃つ。

「わかってるよ。それより流香！あいつは悪魔に取り付かれているだけだ。殺すなよ！」

その優也の言葉を訊き、流香は溜め息を吐く。

「はぁ、あれは言葉のあやよ、殺しはしないわ。ただ……」

流香は一度優也に顔を向けて答える。

そして、

「それ以外は知らないわよ！！」

流香は男の攻撃をカウンターで合わせ、男の腹に強烈な蹴りを打ち込んだ。

「「っ！！」」

男が蹴り飛ばされたのを見て、優也と美優は驚いた表情をする。

「何鳩が豆鉄砲喰らった様な顔してるのよ」
その二人を見て、流香は呆れた表情になる。
「俺の話訊いてたのか！そいつは人間だって！」
「わかってるわよ。けど、悪魔相手に手加減出来ないわ」
真剣な表情で、流香は男、正確には悪魔の翼を見た。
「まぁ安心して、たまにはお姉様に任せなさい」
「誰がお姉様だ……」
優也はそう言うが、何処か流香を信じている様な表情だった。
美優はそんな二人を見て思った、優也と流香には、堅い絆があるのだと。
それは恐らく、仁と正も同じなのだろう。
それを美優は羨ましく思っていた。
「ガ……アァァァァァァ！！！！」
優也と流香がそんなやり取りをしていると、吹き飛ばされた男が、呻きながら立ち上がり、再び流香に突っ込んでいった。
「真っ直ぐ突っ込んでばかり、それじゃ勝てないわよ」
流香は爪を突き立て、掌を傷付けた。
それで出来た傷から血が流れ落ちる。
「流香さん！？何して……」
「落ち着け、あれで良い」

美優にはただ、自分の体を傷付けているようにしか見えない流香の行動を、優也はあれで良いと言った。
流香の事を良く知っている優也が言うのだから、それを信じるしかないと、そう思いながら流香の戦いを見守った。

「“血の短剣（ブラッディダガー）”」

地面に落ちる筈の血が、流香の周りに漂い、幾つもの短剣を形成していく。

「行きなさい」

流香の合図と共に、血の短剣は男に襲い掛かる。

「グギャアアアア！！！！」

ただ真っ直ぐ突っ込んで来ていただけの男は、避ける事が出来ず、手と足に血の短剣が突き刺さった。

「ホントに手加減しないな……」
「あの人の方が心配になってきちゃった……」

悪魔の翼を破壊した後は、すぐに病院に駆け込まなくては、と思う二人だった。

「グッウゥゥゥゥゥ」

男は傷付けた体で立ち上がろうとする。
普通ならもう気絶していてもおかしくないのだが、悪魔にはそんな

事は関係無い。
男の意思とは関係無く、立ち上がろうとしているところに、流香が立ちはだかった。
「頑張ってるところ悪いけど、そろそろその人の体を返してもらうわよ」
それと同時に、悪魔の翼に、血の短剣が突き刺さる。
「ギャア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛！！！！」
「ひっ！！」
今まで訊いたことも無い叫び声に、美優は思わず耳を塞ぐ。それでも男の、悪魔の叫び声は止まらない。
「ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ッツッグオ゛オ゛オ゛オ゛オ゛オ゛オ゛オ゛オ゛！！！！」
「っ…………」
それは、優也にとっても耳を塞ぎたくなるようなものだった。
流香は一度眼を閉じ、意を決した様に眼を開いた。
「“血の槍（ブラッディランス）”」
血が流香の手に集まっていく。
今度は短剣ではなく、２m以上もの細長い槍。
「辛いけど……少し我慢してね…………」
流香は血の槍を降り下ろし、悪魔の翼に突き刺した。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！！！」

この世の物とは思えない叫び声が、夜空に木霊する。
悪魔の翼は形状を維持できなくなり、段々と崩れ落ちていき、完全に消え去った。

「お……終わったの…………？」
「ああ、そうみたいだ」

悪魔の翼が消え去り、男は白眼を剥いて気絶していた。
いや、元々気絶していただろう。

「早く病院に連れていくぞ」
「うん！でも、何て説明するの？」

美優の言うことは最もだった。
病院に連れていって、医者にどんな状況でこんな怪我をしたのかと訊かれて、悪魔に取り付かれていた、何て答えれば精神科に連れていかれるだろう。

「前に優也達がお世話になった病院があったでしょう？そこなら大丈夫よ」
「あっ！」

美優はハッとする。
優也達が普通じゃない怪我をした時、何の事情も訊かずに入院させてくれた病院だった。

「彼処か、あの人ちゃんと居るのか？」

「居なくても私達だけでも手当てできるわよ」

前に病院に行った時は、病院には誰も居なかった。
それが優也は心配だったのだが、今はそんな事を言っている場合では無かった。

「なら早く行くぞ」
「ええ、でもその前に」
「ん？どうし……た！？」

突然流香が優也を押し倒した。
優也の視界には、満月に照らされた流香が映り込む。

「流香さん！？何してるの！！」

突然の流香の行動に慌てる美優。
それと同時に美優は、苛立ちを感じていた。

「フフ、大丈夫。すぐ終わるわ。ね、優也♪」

先程の雰囲気とは打って変わって、今は無邪気な少女の様な表情で、優也に問い掛ける。

「まさか……」
「そ・の・ま・さ・か♪」
「！！？」

優也は冷や汗を掻く。

「それは後で良いだろ！！早くしないとあいつが死ぬぞ！！」

「大丈夫よ。急所は外してるから死にはしないわ。それに喉が渇いて干からびそうなのよ」
「お前がそんな簡単に干からびるか！！」

優也はこの状況を打開しようと、必死になるが、流香にやんわりと断られた。
そんな優也の慌て様を見て、美優はこれから何が行われるか気付いた。
流香は吸血鬼。
喉が渇いた吸血鬼が喉を潤わす方法と言えばあれしかない。
気付けば、流香の八重歯はいつの間にか鋭く尖っており、美優の考えは決定的になった。

「頂きます」
「ちょっと待てぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

優也の言葉を無視し、流香は優也の首筋に鋭く尖った八重歯を近付けた。
そして優也は、流香に美味しく頂かれました。

優也が美味しく頂かれている時、近くの路地裏では長身の男が誰かと話していた。

「動き出しましたよ。悪魔の奴等」
「まぁ今日は様子見みたいだけどね」

長身の男は、優也達と激闘を繰り広げた、月臣龍だった。

もう一人居るようなのだが、影に隠れて見えない。

「それにしても、何であの小娘を狙ったんですか？悪魔と違って、知能が無くなる悪魔の翼でも、そこら辺の人間を見境無く襲うことは無い筈だ。それならタチの悪いストーカーの方がよっぽど理由になる」

龍は腕組みをして、騒がしい優也達の方へ視線を向ける。

「そう言えば君には話していなかったね。彼女の能力(ちから)を」

「あいつの能力(ちから)？確かに大きな何かは感じたが、悪魔に狙われる様な物何ですか？」

美優の事は、一応は知っていた。

確かに大きな力は感じていたが、妖怪に狙われている事から、霊気や妖気が大きいだけだと思っていた。

「悪魔と対をなす存在だよ」

「何！？」

龍にしては珍しく、驚きの表情をする。

「まだ覚醒どころか、力を使う事も出来ないし、悪魔の力を本能的に察知する位しか出来ないけど、このまま放って置くわけにはいかない。優也君達だけじゃ悪魔から彼女を守るのは辛いだろうしね。だから龍君、少し彼等を気に掛けておいてよ」

「わかってますよ。悪魔に好き勝手させるのは面白くない。まぁ気が向いた等だけどな」

「それでも良いよ。じゃあ先に行くね」

声の人物は姿も見せず、夜の暗闇に消えていった。
龍は少し歩き、離れた場所から、優也達が見える場所に出ると、未だに慌てている美優を見た。

「天使の力か」

そう呟くと、龍も夜の暗闇に消えていった。

第２９話　悪魔の翼と吸血鬼の力（後書き）

優也
「ひ……酷い目にあった……」
美優
「くっきり跡残ってるね」
流香
「別にあれくらい良いでしょ」
優也
「言い訳あるか！！」
漆黒
「まぁまぁ、落ち着け」
優也
「元はと言えばお前のせいだろ！！」
流香
「落ち着きなさいよ。私が良かったんだから良いでしょ」
優也
「俺が良くないんだよ！！」
漆黒
「え～ともかく、今回は少し急な展開を繰り広げてみました。後数話したら再び長編に入りたいと思います」
美優
「と言うわけで、次回よろしくお願いします！」

次回
第３０話　誕生日
美優

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

優也
「まだ話は終わって……」

流香
「噛むわよ。もしくは女装」

優也
「すいませんでした」

美優
「弱っ！！」

漆黒
「優也の弱点を良くわかってる……」

第３０話　誕生日

誕生日、それは人の生まれた日、あるいは毎年迎える誕生の記念日。
人間にも妖怪にも、平等に有るものだ。

第３０話　誕生日

たった数ヶ月で妖怪に襲われたり、優也が復讐されそうになったり、この間等は悪魔に襲われたり色々あったが、無事１２月、クリスマスを二日後に迎えた。
えっ？まだ１１月？この中ではもう１２月なんですよ。
優也達はクリスマスが近いと言うことで、クリスマスの予定について話していた。

「せっかくのクリスマスなんだし、皆でクリスマスパーティーしたいなぁ」
「良いねぇ。酒が飲めればもっと良い」
「未成年だろうが！」
「彼はお酒に強いんです。それはそうと、クリスマスパーティーをすると言っても費用はどうするんですか？僕は財布の中も寒いですよ」

総司は今現在金欠だった。

以前、進とのゲーム対決で全敗し、全額払わされていた。
しかも全員分。
まぁそんな事どうでも良いのだが。

「どうでも良く無いですよ！！」
「確かに、場所はともかく、この人数なら費用が結構掛かりますね」
「ちょっ！スルーで……」
「話は訊かせてもらった」
「何処から出てきた」

何処からともなく、総司の言葉を遮り、現れたのは仁だった。

「どうせ僕何か……」
「げ、元気出して！」

自分の言葉を遮られた事に、総司は落ち込んだが、優花以外は気にしていなかった。

「サンタ役は俺だ！」
「そんな話はしてない」

そんな話をしていると、正と流香が仁を追い掛ける形で歩いてきた。

「道端でクリスマスの話か？丸聞こえだぞ」
「それはあんただけよ」
「流香さんに正さんまで、どうしたんですか？」
「いや……それは……／／／／／」

小首を傾げながら、二人に問う薫。
例のごとく、そんな薫を直視できない正が居た。

「はぁ……」
「っ！？」

そんな正を見かねた流香が、薫から見えないように、正の横腹を強く捻った。

（いい加減馴れなさい）

薫どころか、誰にも聴こえないような小声で流香は喋るが、能力を使わなくとも、異常に耳の良い正には聞こえていた。

「～～～～～～！！」

吸血鬼の力で強く捻られ、声も出さずに横腹を抑えながら、正は頷いた。

「あの～……」
「ああ、ごめんなさい」

どうしたら良いかわからない薫に気付いた流香は、一言謝り、説明を始めた。

「優也と優花が美優にお世話になってるでしょう？そのお礼に費用とかは私達に任せなさい」
「えっ、でも……」
「大丈夫よ。その辺は御都合主義だから」
「身も蓋もない事言うなよ！」
「ホントの事だけどね」

全く持ってその通りです。

「そんな事より酒は飲めるのか？」

「いや、俺達未成年だぞ」

未成年のくせに酒を要求する仁。

進がそれにツッコンでいると、彪牙が仁の言葉に反応した。

「なぁ仁、酒飲めんなら、飲み比べでもしねぇか？」

「初めに言っておくが、俺は一度も酒で酔った事は無い」

その言葉に彪牙は嬉しそうな表情を浮かべた。

「よっしゃぁ！そう来なくっちゃな！！」

「後悔するな」

「だから未成年だろうが！！」

「もう諦めなさい。私も諦めたから」

皆、お酒は二十歳からだぞ！！

「それじゃあ、１２月２５日の１９時に私達の家に集合だよ！」

「飾り付けしなきゃね」

「頑張れよ。ん？２５日？」

正は励ましの言葉を掛けると共に、ある大切な日の事を思い出した。

「そう言えば、クリスマスって優花の誕生日だったな」

「っ！」

正の誕生日と言う言葉に、薫は複雑な表情になるが、誰も気付くこ

とはなかった。

「そう言えばそうだった」
「忘れてたのかよ」
「薫も１２月生まれだったよね」
「う、うん……そうだね……」

美優の問いに、薫は何処かぎこちない笑みを浮かべる。

「どうしたの？」
「何でもないよ」

そう言って薫はいつもの笑顔で答えた。

「そう言えばさ」

ふと、進が気になった事を言葉にする。

「俺等は誕生日過ぎてるけど、美優はいつなんだよ？」
「進君！！」

薫の声に、場の雰囲気が一変する。
皆の視線が薫に集中する中、美優が薫に話し掛けた。

「薫、落ち着いて。別に隠す様な事じゃないよ」
「でも……」
「大丈夫」

薫を見上げながら、美優は笑顔を向ける。
そんな美優を見て、薫は複雑そうにしながら押し黙った。

「美優、どうした？」
「私ね、誕生日無いの」

突然の美優の告白に、一同は驚いた。
薫はその事を知っていたからあんなに複雑な表情をしていたと、今更ながらに気付いた。

「ご、ごめん！」
「ううん、良いの。私こそごめん」

美優が気にしている事を言ってしまったと思い、進は謝るが、美優は気にしていないと笑顔で答えた。

「えっと、ごめん！私先帰るね！ほら、私早めに宿題とかしないと終わらないし！！」
「おい……」
「じゃあまた明日！」
「美優ちゃん！！」

薫の美優を止める声も訊かず、美優は走って先に帰ってしまった。

「……」
「あの、皆……」
「明日皆暇だな？」
「「えっ？」」

美優が去って行った方向を見たまま、優也は全員に問う。
すると、仁がフッと笑った。

「俺は基本暇だ」
「あ～、俺も最近やること無いぜ」

二人は優也が言った言葉の意味に気付いていた。
勿論正と流香と優花もだ。

「おい何だよ。俺達にも説明しろよ」

意味が理解出来ていない進と薫、そんな二人に優也はある頼みをする。

「明日、美優を連れて夕方まで出掛けててくれ」
「は？何で……」
「明日になればわかるよ」
「「？」」

結局意味はわからぬまま、優也の指示に従う事にした。

「（ブツブツ）」
「総司さんうるさいです」
「グスッ」

総司は更にうちひしがれていた。

「はぁ～、最近こんなのばっか……」

美優は先に家に帰り、部屋で一人休んでいた。
宿題があるから先に帰ると言ったが、そんなものはただの帰る為の口実で、実際はやるつもりなど全く無かった。

「そう言えば、何で無いって言っちゃったんだろう？」

美優は先程の会話を思い出す。
誕生日を“知らない”ではなく、“無い”と答えた理由が自分にもわからなかった。

「う～ん、まっいっか！」

考えてもわからなく、やることもないので、優也達が帰って来るまで寝ることにした。

「……一人で居るのも久し振りだな……。誕生日に祝ってもらうのって、どんな気持ちなんだろう……」

そして美優はゆっくりと眠りについた。

翌日、進と薫、そして優也は、美優と一緒に出掛けていた。

「急に出掛けようって、どうしたの？」
「それは……」

優也に秘密にしておく様に言われた為に、理由を話す事が出来なかった。
それ以前に、何でこうなったかの理由自体知らないのだから、答えられなかった。

「明日クリスマスだろ。だから俺達はその為に必要な物を買う係りだ」
「そっか」

美優は大して気にした様子もなかった。

「なぁ優也。今日何があるんだよ?そろそろ教えてくれても良いだろ」
「私も気になる」

二人は小声で優也に理由を問いただす。

「帰ったらわかる」
「「だから今教えろよ（て下さい）！！」」

いつまで経っても教えてくれない優也に、ついつい大声で怒鳴ってしまう。

「どうしたの?」

そんな声を訊いて、美優は不思議そうに優也達を見る。

「何でもない。ほら行くぞ」

そう言うと、優也は近くのデパートへ入って行った。

「待ってよ！」

美優もデパートに入って行き、進と薫も二人を追い掛けてデパートに入って行った。

クリスマスも近いと言うこともあり、店内はクリスマスムード一色だった。

「優也君、それ買うの？」

「ああ」

優也と薫は、美優と進とは別行動していた。
優也の手には綺麗にラッピングされた箱があった。

「何の為に……」

今日は、明日のクリスマスパーティーの為の買い物の筈だったが、優也が買った物は、クリスマスパーティーの準備とは関係有りそうで、無さそうな物だった。

「昨日の話を訊いてな」

「昨日……あっ！」

薫は昨日話した事を思い出す。

「もしかして、その為に今日は……」
「ほら、早く美優達の所に行くぞ」
「はい！」
薫はクスッと笑い、優也と共に美優達の元に向かっていった。

「ねぇねぇ！これなんか似合ってるかな？」
「何でサンタさん！？」
その頃、美優もクリスマスムードに感化され、試着でサンタの格好をしていた。
因みにミニスカで。

「雷道さんは、サンタ役は俺だ！って言ってたけど、それは違う。サンタ役は私よ！！」
「お前等に夢を届けて欲しくねぇよ！！」
高らかに宣言する美優に、進のキレのあるツッコミが、勢い良く炸裂する。
周りの人達は珍しそうに二人を見ていた。

「お前等うるさい……」
「あ、優也」
美優と進がぎゃあぎゃあと騒いでいると、優也は呆れた表情で、薫

は微笑みながら戻って来た。

「どう薫？似合ってる？」

美優は薫の前に立ち、その場でくるりとターンをする。

「うん、似合ってるよ」

その言葉に、美優は嬉しそうな表情を浮かべる。

「ホント！？」

「本当だよ。優也君も、似合ってると思うよね？」

「ん？」

「薫／／／！？」

薫は美優を前に押し出し、優也に見せる。

今の格好で、優也の目の前に立たされた事に、恥ずかしさで顔が赤くなる。

「あの……優也……似合ってる、かな／／／？」

「ああ、似合ってるよ」

即答だったが、微笑みで、ちゃんと心が籠った言葉だった。

「あ、ありがとう／／／」

目の前でしっかりと優也の微笑みを確認し、はっきりと似合ってると言われ、嬉しさと恥ずかしさで顔が更に赤くなっていた。

「……どっちも鈍感」

「しかも天然……」

二人は周りを見渡す。
そこには、優也の微笑みと、美優のもじもじとした仕種を見て顔を赤くしている人達が居た。
優也はかなり女顔の為、周りから見たら女の子にも見える。
その為、男女関係無く頬を赤くしていた。
美優もかなりの美少女である、それであんな仕種をされたら、男は勿論、女でも顔を赤くしてしまう。

「誰彼構わずに落としていく……」
「しかも無意識にだよ……」
「薫が美優の事心配になる理由がわかったよ。俺も何か……優也が心配になってきた」
「私達って意外に似た者同士だね」
「そうだな」

二人の横では、進と薫がそんな会話をしていた。

デパートでの買い物も終え、買い物袋を持って皆で美優の家に向かっていた。

「一杯買えたね！」
「結局サンタの服、三枚も買ってるし……」

袋からは赤い服がはみ出していた。
一枚は勿論美優、もう一枚は薫（美優に一緒に着ようと言われた為、勿論ミニスカート）、そしてもう一枚は仁、優也が一応仁の分を買っておいていた。

「明日が楽しみだな～」
「クスッ」

明日のクリスマスパーティーを楽しみにする美優の隣で、薫はクスッと笑っていた。

「ふぅ、やっと着いた」
「もうバテたのか？」

そうこうしている内に、家の目の前まで来ていた。

「美優、扉を開けてくれ」
「？うん」

普段は扉を開けるときは、何も訊かないのだが、少し疑問に思ったが気にしないことにし、美優は玄関の扉を開けた。
その瞬間、パァンっと言う音が連続で鳴った。

『おめでとう！！』
「……えっ？」

突然の事に呆然とする美優、そして何が何だかわからない進。
優也と薫は、呆然としている美優の背中を押し、家の中に入れる。

「これって……どういう……」

「良いから早く来い」
「ちょっ！」

優也は原状を理解出来ていない美優を引き連れ、リビングまで連れていく。
リビングまで連れてこられた美優は、椅子の上に座らされる。
目の前には、１３本の蝋燭が刺さったケーキが置かれ、その蝋燭に仁がライターで火を灯していく。

「美優、火を消して」
「あの、これ……」
「良いから消しなさい」

美優は訳がわからないまま、１３本の蝋燭を一気に吹き消した。

「１３歳の誕生日おめでとう」
「えっ……」

未だにわからない美優に、優也が説明をする。

「お前、誕生日が無いって言っただろ。無いなら作れば良い」

優也はポケットからデパートで買った、綺麗にラッピングされた箱を取り出した。

「１２月２４日、それがお前の誕生日だ。誕生日おめでとう」

そして、箱を美優に渡した。

「開けても……良い？」

「当たり前だろ」

美優はラッピングをゆっくり、丁寧に開いていき、そして箱を開けた。

「リボン？」

「安物だけどな」

箱の中身は、細長い白いリボンだった。

「いつも髪に何もしてないだろ。だから髪に何かした方が良いかと思ってな」

優也はそう言うと、恥ずかしそうに顔を背ける。

美優は無言でリボンを髪に結び付ける。

「どう？似合ってる？」

美優は立ち上がり、髪に結び付けたリボンを、優也に見せる。

鏡も無く、感覚だけでしたため、少し形は崩れているが、

「ああ、似合ってるよ」

優也はそう答えた。

「皆……ありがとう！！」

美優は飛びっきりの笑顔を皆に見せながら、これが誕生日なんだと、心の中で呟いていた。

「気にしなくても良いですよ」
「今日はお前が主役なんだぜ」
「こっちに来なさい。リボン、ちゃんとしてあげる」
流香の手招きに、美優は嬉しそうに近付いていった。
「っておい！こう言う事なら何で俺にも言ってくれなかったんだよ！？」
「進、いつの間に……」
「最初っから居たわ！！」
ようやく状況が理解出来た進は、優也に問いただす。
「お前に教えるとバレそうだったから」
「確かにバラしそう」
「バラさねぇよ！！てか薫は知ってたのかよ！」
「デパートに居たときに」
「知らなかったの俺だけかよ！！」
進は一人だけ知らなかった事にショックを受けていた。
「全く……」
「ねぇ優也、今言うのもあれだけど、明日……大丈夫？」
「……ああ」
優也は険しい表情で答える。
「そうか、もう明日か」
「ああ、明日は……」

優也は険しい表情から、悲しい表情に変わった。

「母さんの命日だ」

第３０話　誕生日（後書き）

漆黒
「遂にこの時が来た」
美優
「どうしたの？」
漆黒
「次の話は前から書きたかったんだよ」
美優
「ふ～ん、そうなんだ。それにしてもまだまだクリスマスじゃないんだけどね」
漆黒
「うっ、だってこの話も早く書きたかったから」
美優
「まぁ良いけどね♪今回は私が主役だったし」
漆黒
「その内進とか、優花とかが主役になるのが増えると思うけど」
美優
「えっ？そうなの？」
漆黒
「まぁいつになるかわからないよ。じゃあタイトルコールを」
美優
「あっうん」

次回
第３１話　心の傷
美優

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第３１話　心の傷

美優の誕生日になった１２月２４日、主役を差し置いて騒いでいる優也達の隅っこで、仁は美優に話し掛けていた。

「神道」
「雷道さん？どうしたの？」

「仁で良い」
「仁、で良いんだよね。じゃあ私も美優で良いよ」
「その内呼ぶ」

仁の言葉に、その内かよと、美優は心の中でツッコム。

「明日は暇か？」
「明日は……クリスマスパーティーするんじゃ……」
「そうか暇か。だったら……」
「私の話訊いてる？」

暇なんて一言も言ってないのに、仁は話を進めていく。

「明日一日中、ずっと優也と一緒に居てくれないか？」
「えっ、何で……」

優也と一番一緒に居る事が多い美優に、ずっと一緒に居るように言うのも、少し変な感じがだった。

「明日は優也の母親の命日だ」
「明日が……？」

美優は以前、優也が両親の事を話してくれた事を思い出す。
まさか、クリスマスが母親の命日だとは思ってもいなかった。

「優花も一緒に墓参りだが、お前も着いていってくれ」
「でも……お墓参りだけでそんなに心配する必要は無いんじゃ……
……それに優也なら尚更」

美優のその発言に、仁はやっぱりか、と呟いた。

「理由は……明日になればすぐにわかる」

その日の夜、美優と仁はこれ以上話す事は無かった。

第３１話　心の傷

「……ここは」

優也は何処にでもある民家の前で、一人佇んでいた。

「まさか……」

優也は玄関の扉を開き、ゆっくりと中に入っていく。
中も変わった所はなく、何処にでもある普通の造りだった。

“壁や床や天井に飛び散る血以外は。”
ドクンドクンと、心臓の音は大きさを増し、鼓動もどんどん早くなっていく。
呼吸も荒くなり、息をするのも辛そうだった。

「偉いわね」
「！！」

突然背後から女性の声がする。

「大切な仲間や友達を守って」

優也は恐る恐る声がする方へ振り向く。
そこには一人の女性が立っていた。
髪はロングヘアーなのは見えるが、顔は影が掛かって見ることが出来なかった。

「か、かあさ……」
「でも……」

突如、女性の全身が血まみれになっていく。

「私は守ってくれなかったのね」

女性の体から流れ落ちた血が、床を濡らした。

「はっ！！」

まだ日も昇っていない時間、優也は目を覚ました。

「はっ……はっ……はっ……」

優也は全身が汗だくになり、息もかなり荒くなっていた。

「はっ……はぁはぁはぁ……」

やっと呼吸も落ち着き、優也は起き上がる。

「はぁはぁはぁ……くそっ」

優也は膝に顔を埋め、小さく呟いた。

「二人ともおは……よ……う……？」

「おはよう」

１２月２５日のクリスマスパーティーを迎えた翌朝、目覚めた美優はリビングの扉を開け、先に起きていた二人の居候に挨拶をしたが、途中で言葉呑んだ。

その理由は。

「ああ、おはよう……」

優也だ。

目の下にはクマがあり、表情からも生気を感じられなかった。

「どうし……」

「美優」

いつもとは全く違う優也に、美優は理由を聞き出そうとしたが、優花に呼び止められた。

「ごめん、今はそっとしてあげて。今日は調子が悪いから……」

「うん……。でも、どうしたの？あんな優也……始めてみる……」

横目で優也を見ながら、美優は小さな声で話す。

いつもの優也なら、その視線に気付いただろうが、それにも気付かない程、疲れきっていた。

「もしかして……優也のお母さんの命日だから？」

「……知ってたのね」

「ごめん……仁から訊いたの」

美優は申し訳なさそうな表情を浮かべる。

「謝る事ないよ、仁が話したって事は、仁が美優の事を信用してるって事だろうし」

「それじゃあやっぱり……お母さんの事が？」

「うん……」

優花は昔を思い出すかの様な表情になる。

「毎年こ……の時期になると夢にうなされるの。今年は大丈夫そうに振る舞ってたけど、やっぱりあのトラウマはそう簡単には治らなかった……」

「あんな状態で……お墓参りなんて出来るの？」

「多分無理よ。今までだって、一度もお墓の前にも立った事も無いから……」

「一度も……」

優也が母親を失って、もうすぐで１０年になる。

それほどの年月が経とうと、まだ墓参りすら出来ない程、優也の心には深い傷が出来ていた事を、美優は気付かされた。

「お前等……何してる。早く食べないと……飯が冷めるぞ……」

「あ、うん」

「ごめんなさい」

二人は話すのを辞め、朝食を摂ることにした。

すると、美優が小声で優花に話し掛けた。

「私達までくよくよしてちゃ駄目だよ。こんな時こそ、私達がしっかりしなくちゃ！」

「……うん、そうだね」

美優は精一杯の笑顔で切なげな表情の優花を励ますが、正直辛かった。

美優自身も優也のあんな姿を見ると、胸が締め付けられそうだった。

美優はいつも通り、朝食を楽しみにしている表情を作り出すと、席に座った。

「何もしてないのに……何で優也なんだろうね……」
「……」
そんな優花の呟きを、美優は訊き逃さなかった。

「それじゃあ準備は任せたよ」
「あ……ああ」
「おう。任せとけ」

昼過ぎ、優也、美優、優花は墓参りの為に出掛け様としていた。
優也達が居ない間、進達が美優の家で優花の誕生日と、クリスマスパーティーの準備をする事になった。
優也の状態を見て、進、薫、総司は返事が少し曖昧になっていたが、彪牙だけはいつも通りの返事だった。

「……行ってくる」
「気を付けなさいよ」
「うん、夕方までには帰って来るよ」

優也はフラリと歩き出し、それを美優と優花が追い掛ける。
すると、美優は仁とふと目が合った。
仁は真っ直ぐ美優を見据える。
恐らく優也の事は頼んだと言っているのだろう。
美優はそれに笑顔で答え、早足で優也達を追い掛けた。

仁は煙草を吹かし、優也達の後ろ姿を見続けた。

「あんな優也君……始めて見た……」

「過去のトラウマなんて……すぐに克服する様な人だと思ってました」

「それは大きな間違いだ」

「……」

進、総司、薫が驚いた表情で仁を見る中、彪牙だけは表情を変えず静かに仁を見る。

「間違い？どういう意味ですか？」

「そのままの意味だ。お前達は優也を勘違いしてる」

「勘、違い？」

「お前等、優也はどういう風に見える？」

仁の言葉を代弁するかの様に正が問う。

今度はいつもの様に赤面せずにハッキリと話せていた。

「えっ……と……優也は強い……よな」

「優しくて、ちょっと大人びてるかな？」

「それに女顔です」

「それ訊いたら、優也怒るぞ」

三人は次々と、優也に対する感想を述べていく。

総司は最後に、言ってはいけない一言を言うが、ここに優也は居ないのでセーフだ。

「やっぱりそう思うわよね」

「えっ？何か、間違いがありました？」

「優也は本当は強くない……じゃねぇか？」
「えっ？」

今まで黙っていた彪牙が、その間違いを正した。

「どういう意味ですか？」
「つまりだ、あいつは嘘をつくのが上手い。極端だけど、そう言う事だろ？」
「ああ、極端に言えばそうだ」

仁は煙草の火を消し、家の中へと入っていく。
それに続き、進達も中へと入っていく。

「戦争、それはいつ殺されるかわからない状況だ。少しでも隙を見せれば殺される」
「だから優也は圧し殺したのよ。感情をね」
「っ……！」

それを訊いて、薫は以前に優也達と敵対した時の事を思い出す。
復讐とは言え、友達と戦う事が何より辛かった。
だが復讐をする為には、感情を圧し殺すしかなかった。
だから優也の気持ちは良くわかった。

「実際は嘘をつくのが上手いんじゃなくて、感情を隠すのが上手いのよ……。優也は仁や正と違ってただの子供だったから、それしか方法は無かったんだけどね」

最後の言葉は、小さく呟くだけだったので、誰にも聴こえる事はなかった。
仁はリビングに入り、進達に向き合う。

「あいつは自分より他人を大切にする。だから守ろうとする。どんなに自分が傷付こうともな。そこでお前達に訊いておきたい事がある」
「訊いておきたい事？」
「貴方達が優也を裏切らないかどうかよ」
「裏切る……？」

心外だと言うような表情をする総司を無視し、正が話す。

「俺達にとってはな、優也は大切な存在なんだよ。俺達は誰を敵に回そうが、世界を敵に回そうがあいつを守る。だからお前等が、もし優也を裏切る様なら……殺す」
『……っ！』

そう言った瞬間の正の殺気に、進達は気圧される。
ただ睨みを利かせただけでこの殺気、もし本気だったら簡単に気絶していただろう。

「これからも優也の傍に居続けるつもりなら、今以上に戦いに巻き込まれるだろう。それが嫌なら今の内に優也とは縁を……」
「切るわけないだろ！！」

大声で怒鳴る進はこの時、以前龍に言われた覚悟の事がわかった様な気がした。

「友達が戦ってるのに、見捨てるなんて出来るわけないだろ！」
「進君の言う通りです。貴方達が優也君を大切に思ってるのと同じ様に、優也君は私達の大切な友達です」
「何を言われようと縁は切りませんよ。それに君は僕の目標ですし」

「まぁそう言うこった」

それを訊いて、流香は安堵の溜め息を吐き、正はニッと笑っていた。
仁はいつも通りの無表情だったが、何処か良かったと言う表情をしていた。

「そこまで言うならお前達の好きにしろ。ほら、そろそろ準備を始めるぞ」

全員の答えを訊き終わると、仁は準備に取り掛かる。
それを見て進達も、準備に取り掛かった。

「優也って本当に、誰かに好かれるよな。人間だろうが、妖怪だろうが何だろうが」
「優也はそう言う体質よ。変な奴に好かれる」
「変な奴っておい……」
「間違ってはないわよ」
「って！何休憩してるんですか！？」

総司の怒声が聴こえ、正と流香がその方向に振り向くと、仁がサボっていた。

「準備するって言ったのあんただろ！！」
「俺は俺の信念を貫き通す」
「サボる事が信念かよ」
「真面目にしてくださいよ……」

それを見て、正はまたかと溜め息を吐いた。

「はぁ、ったく……」

「フフ、とにかく私達も手伝いましょう」
「……そうだな」

そうして、二人も楽しそうに準備に取り掛かった。

その頃、墓参りに出掛けた優也達は、山道を歩いていた。
かなりの距離を歩いてきた為、美優と優花は勿論、調子の悪い優也も疲労していた。

「結構歩いたけど……まだ着かないの？」
「うん、もう少しだから頑張ろ。帰ったらクリスマスパーティーだしね」
「うん、そうだね。頑張ろ！」

優花の励ましの言葉を訊き、美優は元気に山道を登っていく。

「元気だな……」
「そこが美優の良いところだよ」
「……そうだな」

そう答える優也だが、頂上に近付くにつれ、顔は青ざめ、汗を欠き、息も荒くなっていた。

「優也、無理しちゃ駄目だよ」
「大丈夫……無理なんかしてない……」

誰が見ても無理をしている様にしか見えない。
それでも優也は一歩ずつ足を進める。
優花はそれを止める事が出来なかった。

「あっ、ねぇ！もうすぐで頂上じゃない？」
「本当だ」

美優が指差す先には、大きな大木が一本だけ見えていた。
その大木は、周りの木と違い、存在感が全く違っていた。

「……っ！」

大木を見た瞬間、優也の歩みが止まった。
一気に呼吸が荒くなり、苦しさから片手で胸を押さえていた。

「優也？」
「はぁ……はぁ、はぁ！」

優也の異変に気付いた美優が、優也に声を掛ける。
優也の呼吸はどんどん荒くなり、焦点もあっていなくなっていた。

「優也！落ち着いて！」
「ハッハッ、……だ、大丈……夫……はぁ、だ……」

そう受け答えする中、優也は立っているのも辛そうになっていた。
焦点があわない中、優也の目線の先に、あの大木があった。
その時、最も思い出したくないトラウマが、フラッシュバックした。
それは、“母親が殺される瞬間の記憶。”

「……っ！！」
「優也！？」

その記憶がフラッシュバックした瞬間、優也は森の中に、逃げる様に走り出した。

「待って！！」

走り出した優也を見て、美優も走り出す。
若干遅れて、優花も二人を追い掛けた。

「はぁっはぁっはぁっはぁっはぁっはぁっ！！！！！」
「優也！！待ってよ！！」

美優は必死に追い掛けるが、元々の運動神経の違いもあり、少しづつ二人の距離が離れていく。

「はぁっはぁっはぁっ……！」

足下を気に掛けていなかった優也は、木の根に足を取られ、転けてしまった。

「はぁはぁ、やっと……追い付いた……」

優也が転けている間に、美優は距離を詰め、優也に追い付いた。
優也は両手と両膝を地面に付いたまま、起き上がろうとしなかった。

「優也、辛いのはわかるよ。けど、優也のお母さんが死んだのは優也のせいじゃないんだよ。だからいつまでも目を背けちゃ……」
「違う！！」

優花が二人に追い付いた瞬間、山に優也の声が響いた。

「違うんだ……。母さんを殺さたのは……俺なんだ」

「え……？」

美優は耳を疑った。

優也が自分の母親を殺した？

そんな事が有り得る筈がないと、自分の心に言い聞かした。

「どういう……事？だって、優也の目の前で誰かに殺されたって！」

「ああ、そうだ……けど……俺は母さんを見捨てたんだ！助けられた筈なのに！！力があったのに！！皆から化け物だって言われる程の力が……あったのに……俺は……」

「優也……」

「……」

優也は苦しそうに述べ、地面に爪を立てる。

そんな優也を見て、美優は静かに、ゆっくりと優也に近付いていく。

「自分の罪を受け入れられなくて……まだ母さんから逃げてる。だから……俺は……」

「もう、良いよ」

自分を責め続ける優也を、美優が後ろから優しく包み込んだ。

「美優……？」

「辛かったよね。泣きたかったよね。けど泣けなかったよね。ごめんね、優也は辛いのに、ずっと辛い戦いをさせて……本当にごめんね」

「っ！」

美優の言葉に、優也のルビーの様な瞳が揺らぐ。

「別に……泣きたくなんか！」

「大丈夫。ここには私と優花しか居ない。誰も優也が泣いて笑ったりしないよ。だから……」

美優は優也を振り向かせ、顔が見えないように、抱き締めた。

「泣きたい時は泣いて良いんだよ」

「……この……馬鹿が……！」

優也は美優の胸に顔を埋め、静かに泣いた。

「うっ……ぐすっ……ひっく……はぁっ……うぅっ……」

（ああ、そうか。やっとわかった）

優也の泣き声を訊きながら、美優は思った。

（いつも守ってくれて、誰よりも優しくて、誰よりも強いけど、誰よりも弱い優也の事が……好きなんだ）

半年以上一緒に居たことで芽生えた優也への想いを、今この場でやっと気付く事が出来た。

（もっと強くなろう。優也が独りで戦わなくても良いくらい、優也が悲しまないくらい、優也を支えられるくらい……強くなろう）

腕の中で静かに泣く優也を、美優は強く抱き締め、強く、新たな決

意と覚悟をした。

（良かったね。少しだけど、やっと自分の心を見せられる相手が出来て）

優花は嬉しそうに、だがほんの少し複雑そうに、二人を見ていた。

その日、優也は母親を失ってから、始めて人前で泣いた。

第３１話　心の傷（後書き）

漆黒
「つっ疲れたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
彪牙
「うっせぇな」
漆黒
「仕方無いだろ！こう言う話は実は苦手なんだよ！表現とか！」
彪牙
「そんな事言われれても知るかよ」
漆黒
「まぁ書けたから良いけど、このクリスマス編はまだ後一話続くから」
彪牙
「マジでか、まだやるのかよ」
漆黒
「いや〜、優花の誕生日と、クリスマスパーティーの話はギャグにしたかったから、美優の誕生日と合わせて三話構成にしようかと」
彪牙
「確かに、今回の話と繋げてギャグにしたら、何か雰囲気が崩れちまいそうだな」
漆黒
「そうそう、言わば中編だね」
彪牙
「とにかく、今回もここまで読んでくれてありがとよ！」
漆黒
「後予定では三話程書いたら、また長編に入りたいと思いますので、応援よろしくお願いします！」
彪牙

「じゃあまたな！」

次回
第３２話　クリスマス
彪牙
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第３２話　クリスマス

「美優、私だけでもお墓参りに行くから、優也と先に帰ってて」
「うん、任せて！」
「ごめん……。それと、俺は元気でやってるって伝えてくれ」

泣き終え、気持ちも落ち着いた優也だが、再び墓に向かえば、先程の二の舞になる為、優也を美優に任せ、優花一人だけで墓参りに行くことにした。

「うん、わかった。（そう言う事は、本当に元気な時に伝えたいけど……）」

優也の伝言を訊き、優花は一人あの巨大な大木へ向かっていった。

「優也、とにかく今日は帰ろう？」
「……ああ」

美優に手を取られ、優也はゆっくり立ち上がる。

「いつも……優花には世話を掛けるな」
「優也が？」
「ああ……」

優也はあの巨大な大木を見ながら、優花との事を話す。

「俺の中に……人斬りの人格が存在してる事は知ってるだろ」
「うん……」

龍と初めて出会った時に訊かされた衝撃の事実。
そして、その時に現れた、龍の言う黒夜叉と言う優也のもう一つの人格。
美優はその時の優也を思い出し、少し身震いをするが、優也から顔を逸らさずにいた。

「正直、あれは龍と戦った時みたいな事になったら、俺一人じゃ抑えきれない。それを、優花が抑えてくれてるんだ」
「えっ、優花にも何か能力があるの？」
優也の言い方からだと、優花にも何か能力がある様な言い方だったが、今まで優花が能力を使える様な雰囲気は、全く無かった。
「いや、あいつは能力を持ってない筈だ。俺のもう一つの人格を抑えるのは、ただ居るだけで成り立ってるからな」
「それが能力じゃないの？」
「能力なら、少しだけでも霊気か妖気を感じるけど、優花からは全く感じない」
「う～ん、雰囲気かな？」
「（雰囲気って……）とにかく、他にも優花には色々と世話になってる。今日もな」
優花が向かっていった方向を、優也はずっと見詰めていた。

「優花って、ホント優也と似てるよね」
「そうか？」
「そうだよ」
二人の幾つかの共通点に美優は気付いたが、敢えて言わない事にした。

「優花にも言われたし、早く帰ろ。帰って優花の誕生日の準備しなきゃいけないし」
「そうだな……。よし、気分も良くなったし、今日は派手な誕生日とクリスマスにするように頑張るか！」
「うん！」

優也はいつも世話を掛けている優花を、少しでも喜ばす為の準備をする為に、山を降り始めた。
美優も優也に続いて歩いていった。

優也達が登っていた山の頂上、街が一望でき、そこには巨大な大木あり、そしてその大木の隣には、一つの墓があった。
その墓に近付く一つの影。
影の人物は、優花ではなかった。

「あれからもう九年か」

影の正体は龍だった。
龍は墓に花を供え、しゃがみこんで手を合わせる。

「あなたにぴったりの花だな」
「花言葉は慈愛、汚れなき心だよね」
「ああ」

突然背後から優花が話し掛けてきたが、驚く様子もなく、返事を返す。

「この世界を愛し、この世界に生きる全ての生命を愛した、強く綺麗な心を持った人だった」
「龍もこう言う事するんだね」
「お前等なんか花も持ってきてないだろ」
「うっ、それは……」
「忘れたんだろ」

龍は溜め息を吐くと、来た道を戻って行く。

「もう行くの？」
「ああ、お前も早く帰った方が良いんじゃないか？今日はクリスマスだぞ。じゃあな」

軽く手を振り、龍はそのまま歩いて行く。

「龍！」

それを、優花が引き止めた。
龍は立ち止まり、優花に振り返る。

「今日、美優の家でクリスマスパーティーするんだけど、龍も来ない？」
「フッ、変な事訊くな。俺が行っても場違いだろ。喜ぶ奴なんか居やしない」
「私は嬉しいよ。優也だって」
「……」

龍は少し沈黙すると、ポケットを探り、優花にある物を投げ渡す。
優花は両手で受け止め、投げ渡された物を覗く。

「ネックレス？」
「俺からの細やかな誕生日プレゼントだ。肌身離さず持ってろ」
龍が投げ渡したネックレスは、鳥の翼の様なデザインだった。
「そう言えば、今日って私の誕生日だった」
「相変わらずだな」
龍は呆れたが、相変わらずな優花に少し笑っていた。
「ありがとう。大事にするね」
「……優也に伝えとけ。守りたいものがあるのなら、今より強くなれ。俺よりも、誰よりもだ。それくらいになったらお前の事を認めてやるってな。じゃあな」
「うん」
優花はネックレスを首に掛け、それを見た龍は、今度こそ来た道を歩いていった。
「絶対に持ってろ。必ず役に立つ」
龍は小さく呟く。
その声は聞こえなかった様で、優花は墓の前で手を合わせていた。
「今日は優也から伝言が有ります。俺は元気でやってるって……でも、貴女は全部見ている様な気がするから、ちゃんと本当の事を話します。優也はまだここに来る事も出来ない程の精神状態です。でも、優也も何とかしようと頑張ってるから、だから……もう少し待っててて下さい」

優花は墓に刻まれている名前に指を添える。
そこにはこう刻まれていた。

「穂乃花さん」

『火渡穂乃花』と。

「今日はここで失礼します。次に来る時は、優也と来ます。それと、新しい家族と」

優花は墓に笑顔を向けると、龍と同じ様に、来た道を歩いていった。

第３２話　クリスマス

「遅くなっちゃったな。寒い……」

巨大な大木がある山から漸く降りた優花は、夜道を一人で歩いていた。
もう１２月の夜なだけあり、外はかなり冷え込んでいた。

（もうすぐで7時か。優也は美優が一緒だし、大丈夫よね。正は薫と仲良くなってるかな。仁と総司は喧嘩してないと良いんだけど…流香が居るから大丈夫かな？……今考えたら、ちゃんとクリスマスの準備してるのって、薫と進と彪牙しか居ないんじゃ……。早く帰って手伝お）

そんな心配事ばかりを考えながら歩いていると、気付けば家の前に居た。

（とりあえず中に入ろ）

優花は口から白い息を吐きながら、冷えた右手で玄関の扉を開けた。

『誕生日！！』

「おめでとうございま～～～～す！！」

玄関の扉を開いた瞬間、クラッカーの音が鳴り響き、黒猫の少女が元気良く飛び付いてきた。

優花は、黒猫の少女を何とか受け止め、一言発した。

「デジャヴ？」

「いやっ、確かに美優の時と展開同じだけど」

美優の時とは若干違うが、展開がほぼ一緒なのは、作者が何も思い付かなかったからじゃありません・・・・・。

「ところで、何でサクラ達がここに？」

優花は今一番の疑問を挙げる。

優花が言うように、咲魔、黒烏、九妖、サクラの妖怪組が、何故か美優の家に平然と居た。
すると、優花に抱き付いている黒猫の少女、サクラはガバッと顔を上げる。

「酷いです！！今日誕生日って何で教えてくれなかったんですか！！」
「あ～～」

優花はそう言えばと言う表情を浮かべ、サクラと目を合わせた。

「ごめん、今日が誕生日って事忘れてたの」
「忘れるなよ！」
「ホント自分の事はすぐ忘れるわね」
「とりあえず中へ入れ。サクラも早く離れろ」

今夜の主役を、玄関先で立たせておくわけにはいかないので、サクラを一旦優花から離して、中へ入ろうとする。

「嫌です！離れません！！」

サクラは思っていた以上に優花になついており、離れようとはしなかった。

「サクラ、我が儘は……」
「九妖、任せろ」

こうなったら無理矢理にでもと、九妖がサクラに近付こうとした時、優也が九妖を止めた。

「火渡優也…………」
「…………サクラ、これを見ろ」

優也は何処からかある物を取り出す。
サクラは優花に抱き付いたまま、顔だけを優也に向ける。

「何です…………！そ、それは！？猫じゃらし！！」

サクラは優也が手に持つ物猫じゃらしを見て、驚きのあまり、優花から離れてしまう。

「取って来ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉい！！！！」
「ニャアァアァアァアァアァアァアァアァア！！！」
「使い方違ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁう！！！！」

優也は猫じゃらしを、リビングに向かって勢い良く放り投げた。
サクラもそれに反応し、物凄い速さでリビングへ駆けていった。

「サ、サクラ！？」

とてつもない速さでリビングに突っ込んでいったサクラを心配して、九妖はリビングに駆け込む。

「行くぞ」

優也は何事も無かったかの様に、中へと入っていった。

「やっと酒が飲める」
「オイオイ、今日は優花が主役なんだぜ」
「そうそう！ほらっ優花も早く！」

「彪牙さんの言う通り、今日は優花ちゃんが主役だよ」
「う、うん」

他の皆もぞろぞろとリビングに入っていく。
優花は美優に後ろから押され、薫に手を引っ張られながら廊下を歩いていく。

「そう言えば優花ちゃん。ネックレスなんて付けてたっけ？」

ここで薫は、優花が見慣れないネックレスを身に付けている事に気が付いた。

「ホントだ。どうしたの？」
「これは……」

優花は空いている手でネックレスに触れ、一言だけ言った。

「天の邪鬼な恩人からのプレゼントだよ」

優花の誕生日、そのついでにクリスマスパーティーと言う形で、パーティーが始まり、皆楽しそうに話していた。
だが、美優、仁、正、総司、黒烏が円になり、神妙な面持ちで睨み合っていた。

「優也、もう大丈夫なの？」

「ああ、もう大丈夫だ。ありがとう。それより、何してるんだあいつ等？」
「サンタ役を取り合ってるのよ。ほらあれ」
流香は美優達の円の中を指差す。
そこには一着の、赤いサンタ服が置かれていた。

「美優と仁はともかく、何であの三人まで……」
「総司は仁に対抗して」
「黒烏も正にな」
「正は？」
「サンタ役で薫にプレゼントでもしたらどう？って言ったらこうなったわ」
「お前か」

優也はギャアギャア騒いでいる美優達に近付く。

「お前等、別にサンタは全員でも良いんじゃないのか？」
「駄目だ」
「サンタは一人じゃないと駄目！！」
「全員サンタでは、僕が彼に勝った事になりません！」
「右に同じく！」
「俺は……まぁあれだ！ノリだ！」
（メッチャ薫の事見てる！）

美優と仁は純粋にサンタをしたく、総司と黒烏は互いに、どんな事でも負けたくない相手が居る為、正は薫をチラチラ見ながら、各々理由を言葉にしていく。

「なら何で三着も買った？」

サンタが一人だけなら、昨日買い物に出掛けた時、サンタ服を三着も買う必要は無かったんじゃないのかと、優也は思っていた。

「なら飲み比べで勝負だ」
「望む所！！」
「フッ、妖怪である俺に飲み比べで対決するとはな」
「簡単に酔い潰れないで下さいよ。興醒めなので」

何処からともなく、仁は酒瓶を取り出し、美優達はそれに同意する。
だが正はある事を思い出す。

「ちょっと待て！この勝負、お前に有利じゃ……」
「何だ、負けるのが怖いのか」
「拍子抜けだな」
「あぁ？」

二人の言葉に、正は青筋を立て激怒した。

「上等だ！酒でも何でも持ってこい！！」
「そう来なくてはな！」
「よ～し！飲むぞ！！」
「程々にね、美優ちゃん」
「て言うかあんた達未成年でしょ」

流香の言葉を無視して、美優達は飲み比べを始めてしまった。

「全く、今日は何の日かわかってるのかしら？」
「さぁな。優花、これ」

呆れた表情で美優達を見ていた優也は、優花にある物を手渡す。

「マフラー？」

「誕生日プレゼントだ」

優也から手渡されたマフラーを、優花は何も言わず首に巻く。

「ありがとう。暖かいよ」

「選んだのは美優だけどな。にしても、プレゼントが首に集中したな」

優也の目線の先には、龍から貰ったネックレスがあった。

「……龍から伝言があるよ。守りたいものがあるのなら、今より強くなれ。俺よりも、誰よりもだ。それくらいになったらお前の事を認めてやる、って」

「そうか……」

「美優ちゃん！流石に飲み過ぎだよ！？」

「止めないで薫！！お酒が私を呼んでるの！！！！」

二人が話していると、薫がこちらに救援を求めている。

既に酔っ払った美優を止めようとしていた。

「……ちょっとあいつ止めてくる。進も行くぞ」

「俺もかよ……」

酔って暴れている美優を止める為、優也と進が向かったが、進はすぐに返り討ちに合った。

「ったく、好き勝手してんなあいつ等」

「でも、私は楽しくて良いと思うよ」

彪牙は酒瓶とコップを持って、優花の隣に座る。
優花は気にした様子は無く、ただ暴れている美優と、それを止めようとしている優也を見ていた。

「単刀直入に訊くけどよ。お前優也の事好きだろ」
「……え？」

優花は顔を赤くし、視線を彪牙に移す。

「な、何で／／／／／／／／！！？」
「やっぱな」

彪牙はこんなに慌ててる優花を見るのも珍しく思っていた。

「いや、前から気になっててな。何か優也と美優が一緒に居る時のお前、羨ましいそうだったからよ」

優花は驚いた。
自分でもそんな表情をしていた事は知っていたが、他の人にわからない様にしていたつもりだ。
事実、付き合いの長い仁、正、流香でも優花の微妙な表情の変化に気付くのに時間が掛かった。
美優や薫達もその事には気付いていない。

「彪牙って、良く見てるね……。意外と」
「意外は余計だぜ。で、良いのかよ。お前、遠慮してる様に見えるぜ」

彪牙は優花を見て、思っていた。
誰とでも平等に接している様に見えるが、何処か相手と一線引いている気がする。
優也とは特にそれが強い気がした。

「好き勝手言う事じゃねぇけどよ、友達の為に、好きな奴の事諦める事ねぇんじゃねぇのか？」
「……そんなんじゃないよ。私じゃ……駄目なの……」

悲しそうな表情を浮かべ、優花は再び優也に視線を移す。

「……はぁ～」

彪牙は溜め息を吐きながら頭をかき、コップに酒を注いでいく。

「ほらっ！」
「！！」

酒が入ったコップを優花に差し出す。
優花はとりあえずコップを受け取った。

「あの……」
「良いから飲めよ。酒飲めば少しは素直になれるぜ。まずは一口」
「……うん」

彪牙に促され、優花はコップに口を付けた。
その様子を、流香は少し離れた所で、見ていた。

（ガサツに見えて、良いとこあるじゃない）

彪牙は見た目が不良に見えて、ガサツに思えたが、思っていたよりも皆を良く見て、良く考えていた事を流香は知った。
(そう言えば、優也が感情を圧し殺してる事を見抜いたのも彪牙だったわね)

そんな事を考えていると、優花が酒を一口だけ飲んだ。

「………………ヒック」

一口飲んで、一度コップから口を離すと、酒をイッキ飲みし始めた。
「おっ！良い飲みっぷりじゃねぇか！もっと飲む…………」
「足らねぇ…………」
「は？」
「酒が足らねぇって言ってんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
優花は突然豹変し、彪牙の酒瓶を奪い取り、コップを彪牙の顔面に叩き付けた。
突然の事に反応出来ず、彪牙はまともに喰らい、地面に突っ伏した。
((((・・・・・・・・・・え、えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！？))))

優也達の心が今シンクロした。

「ちょっ、え？えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」
「ゆ、優花ちゃん！！？あれ本当に優花ちゃん！！？」
「お、俺もあんな優花見たこと無いぞ！！」

「い、一気に酔いが醒めちゃった………」
「ま、まさかお酒を飲んだらあんなにイキイキした性格になるなんて………」
そのイキイキした優花は、全力で彪牙に往復ビンタをしていた。
「いやいやっ！！イキイキし過ぎだろ！？アルコールで未知の力抽出しちゃってるよ！？」
「彪牙ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！彪牙が殺されるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！」
優花は往復ビンタを止めると、酒瓶を彪牙の口に突っ込んだ。
「な〜に寝てんのよぉ。夜はまだまだこれからじゃないのぉ」
「げほっげほっ！！ちょっ、ちょっと待った！！起きる！起きるから！！」
咳き込みながらも、彪牙は何とか立ち上がる。
「あの〜、優花ですよね？優花が優花ですよね？」
普段は使わない敬語を使う程、彪牙はパニクっていた。
心優しい少女があんな豹変をしたら、誰でもパニクるだろう。
「ああ！？ったりめぇだろうが！！私以外に誰が居るってんだ！！？」
普段は有り得ない言葉遣いをしながら、優花は酒瓶をイッキ飲みする。

「彪牙ぁ～、あれやるぞ。あっち向いてほい。負けたら脱いでくやつ」
「い、良いって……無理しなくて…………」
「ちゃんとフェアにするからぁ～、大丈夫。私が負けたら一枚脱ぐから、お前も負けたら一枚脱げ…………皮を」
「優花！？フェアって言葉辞書で調べて！！赤線引いて！！」
「はい、ジャ～ンケ～ン」
「おぉい！？」

優花は聞く耳持たず、手を振り上げる。
彪牙も仕方無くジャンケンの体勢に入った。

「ジャンケンポン！」
「げっ！！」

優花が出したのはチョキ、彪牙が出したのはパーで、彪牙の負けだった。

「あっち向いて～～～～、ほいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！」
「優花！これもう既に罰になってる！！」

優花はあろう事か、向きを示すだけの人差し指で、彪牙のほっぺを殴り付けた。

「くそがっ！！」

彪牙はふらつくが、何とか踏み止まる。

「あ～いこ～でしょ！」

優花が出したのはチョキ、彪牙が出したのはグー。

「しゃあおらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

彪牙はここぞと言う力で、人差し指を上に向ける。

優花も顔を上に向けていたが、優花は彪牙の指を持ち、無理矢理左に折り曲げた。

「優花ぁ！！これ勝っても負けても俺負けてる！！」

何やかんや、ジャンケンは進み、彪牙はほぼ無抵抗でボコボコにされていった。

「あいつって酔うと性格変わるのか〜〜〜〜〜っ」

「一方的にボコボコにしてるだけだろ！？」

「フフフ、優花楽しそうね」

優也達が、優花を止めるべきかどうするか考えていると、黒烏が近付いてきた。泣きながら。

「お前もな」

「妖怪でもやっぱり酔うんですね…………」

「うっうっうっ、早くお家に帰りたい」

「うわぁ、嫌な酔い方………」

その時、進の頭に誰かの足が乗せられていた。

「お〜ほっほっほっ！！靴を舐めさせてあげても良くってよ！！」

「ニャハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハ！！！！」
「もう出来上がってるし！！！女王様だし、笑い上戸だし！！」

咲魔以外の妖怪組は、完全に酔っ払っていた。
九妖はいつの間にか靴を履いている。

「いや～、俺以外酒に弱いんだよ」
「そう言う事は早く言って！！」
「もう飲めません～～～～」
「俺の勝ちだ」

総司の呻き声を訊き、そちらに顔を向ける。
そこには完全に酔い潰れ、眠っている正と総司と、全く酔っていない仁が勝ち誇っていた。

「サンタは俺で決まりだ」
「ちょっ！まだ私が居るよ！！」

いつの間にかサンタ服を着ている仁に、美優が詰め寄る。

「お前は一度酔っ払って勝負を放棄した。それは事実だ」
「そ、それは……」

美優はさっき、確かに酔っ払っていた。
酔いが醒めたとは言え、美優は勝負に負けたのだ。

「つまり、俺がサン、たぁぁぁ！？」

拳を握り締め、力説していた仁の顔面に、コップが直撃し、仁は崩れ落ちた。

「お前等ぁ～、私の居ない所でな～に盛り上がってんのよぉ～～～」

コップを投げ付けた張本人、それは酔っ払った優花だった。
彪牙は完全にノックアウトされていた。

「ちょっ！ヤバいヤバい！！目標変わったよ！！目も殺人鬼みたいに変わってるよ！！」

優花はフラフラしながら、殺人鬼の様な目付きで、優也達に近付いていく。

「……仕方無いわね。優也、こっち向きなさい」
「何……ムグッ！？」

流香は優也を呼ぶと、優也の口に酒瓶を突っ込んだ。

「流香さん！？何してるんですか！！」
「落ち着きなさい。これが今の優花に対抗する為の最終手段よ」

流香は酒瓶を、優也の口から離す。
酒は優也が全て飲みほしたようだ。

「……ヒック」
「あの、優也君……？」

薫が心配そうに優也に声を掛けた瞬間、優也が薫に抱き付いた。

「「「……え？」」」

一瞬状況が理解できず、美優と進、そして抱き付かれている薫は呆然とする。

「かおるはヒック、あっらかいら～～～～／／／／／／」

顔を真っ赤にし、呂律も回らない状態で優也は口を開いた。

「ゆ、優也ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！あれ優也！？」
「何あれ！？優花とはまた違う驚き！！？」

普段では見ない優也の行動と表情に、美優達は驚く。

「優也は酒を一口でも飲むと、甘えたがりになるのよ」
「どいつもこいつも酒飲むとこんな性格変わんの！？」
「あの！それより早く優也君を離して欲しいんですけど！！」

悠長に説明している流香の隣で、薫はどうしようかと戸惑っていた。
美優はまだ驚きから脱け出せていなく、流香は面白そうに見てるし、咲魔は気絶組を見てるし、進はまだ九妖に踏みつけられている（そんな状態でもツッコミは止めなかった）。
自分でどうにかするしかない！
薫はそう言う結論し、実行に移った。

「ゆ、優也君………。ちょっと離れて欲しいんですけど………」
「い～や～だ～／／／／／／」

駄々をこねる優也。
そんな優也が小さな子供に見えてしまって、力ずくで引き離そうと

出来ない。
だが負けじと食い下がる。

「で、でもね……」
「かおるは……おれにだきつかれるのはいやか……／／／／／／／？」
「ぐはっ！！」

薫の心は折れた。
上目遣い＋涙目のコンボに、完全に屈してしまった。

「全然良いよ！！」

薫は全力で優也を抱き締め返した。

「「！！！！」」

それを見て、美優と優花に嫉妬の炎が燃え盛った。

「可愛い！！これで女装してたらもっと良いのに！！もうずっと酔ってて欲しい！！」
「か～お～る～？」
「な～にしてんだごらぁ～」

暴走し始めた薫の後ろから、嫉妬に燃えた二人が声を掛けた。

「とりあえず、優也離そうか？」
「今ならな～んもしないわよ～」

二人は笑顔だが、目が全く笑っていなかった。

背後には黒いオーラが見える。
だが、今の暴走した薫には効かなかった。

「嫌！いくら二人の頼みでもこの可愛らしさは渡さない！！」
「フフフ、上等だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
「優也を抱いて良いのは私だけだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
三人は優也争奪戦を始めた。
優也はもう完全に眠っていたが。

「片付けでもしましょうか」
流香は食器等を片付けに、台所に向かった。
未だに踏みつけられている進をほっといて。

「誰か助けてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」
進の叫びは誰にも届かなかった。

「いってぇ………………」
皆が完全に寝静まった深夜、優花に気絶させられていた彪牙は目を覚ました。

「おお、目ぇ覚ましたか」

「こっち来い。飲み直すぞ」

声を掛けられ、声がした方に顔を向けると、仁と咲魔がテーブルで酒を飲んでいた。

「っんだよ、起こしてくれれば良かったのによぉ」
「ぐっすり寝てたからな」
「ほらっ」
「悪ぃな」

彪牙が席に着くと、咲魔に酒が入ったコップを手渡される。

「じゃあ改めて、乾杯」
「乾杯」

コンッと小さく音が鳴り、彪牙達は酒を飲み始めた。

「美味いな」
「ああ、始めて飲むぜ。こんな美味ぇ酒」

普段飲んでいるお酒とは比べ物にならない位、今飲んでいるお酒は美味しかった。
その様子を見て、咲魔は面白そうに見ていた。

「ハハハ、何でそんなに美味いか教えてやろうか？その酒はな、鬼が作った酒だ」
「咲魔が？」
「訊いた事あるな。人間が作った酒では満足出来ず、鬼が作った酒。その名を、鬼殺し（おにごろし）」
「どっかで訊いた事あるな」

「濁点付いてるから大丈夫だろ」

コップの酒を飲みほした咲魔は、何処からか瓢箪を取り出し、瓢箪の酒を飲み始めた。

「つーかよぉ。鬼が鬼殺しって……」

「鬼が酔う程だから鬼殺しだ」

「へぇ～、ところで仁、一つ訊きたい事があってな。訊いて良いか？」

「ああ」

酒を飲む手を一旦止め、彪牙は気になっていた事を訊いた。

「何でよぉ、お前等、あんなに優也を大事にしてんだ？」

「……」

その言葉を訊き、仁も酒を飲むのを止める。

「悪ぃ、訊いちゃマズかったか？」

「いや、構わない」

仁はもう一度酒を飲むと、話し始めた。

「あの戦争の中、俺達は絶望に堕ちそうになった事があった。そんな俺達を救い出してくれたのが優也だ」

彪牙も咲魔も静かに、仁の話を訊いた。

仁までも絶望に陥る状況が思い付かなかったが、昔なら仕方がないと解釈した。

「優也はただ思った事を言っただけ、他人が訊いても何とも思わないだろう。それでも、あの時の優也の言葉に、俺達はどれだけ救われたか」

「……」

その時の事を思い出しているのだろうか、何処か嬉しそうに表情をしていた。

「悪いな。こんな話をして」

「良いよ。それにあんた等の気持ち、俺にもわかるからな……」

彪牙も絶望して、喧嘩に明け暮れていた所を、優也に救われた。

恐らくそれが、優也の強さかもしれない。

「さぁ、今日は朝まで飲むか」

「おう！」

「先に酔い潰れるなよ」

騒がしい夜から、静かな夜へ、こうして、クリスマスは終わりを遂げた。

第３２話　クリスマス（後書き）

「悪魔に取り付かれた人間が増えてきたな」

それは、誰も知らない所から始まった。

「こいつ等！悪魔の！！」

静かに、だが確実に、彼等に忍び寄る。

「あんたが火渡優也ね！！」

ただの勘違いから、悪魔の力を持つ少女が、能力も持たない少年に襲いかかる。

「俺のダチに、手ぇ出してんじゃねぇ！！」

友の為、悪魔に立ち向かう鋼の鎧。

「それでも、お前をその苦しみから救ってやりたいと思ってる！！嘘じゃねぇ！！！」

少年は悪魔の少女の為、何度も立ち上がる。

「この娘は貰っていく」

巨大な力の前に、不死鳥は地に堕ちる。

「火渡優也、雷道仁、風魔正、黒城流香。君達四人に魔王バロール

の討伐、神道美優の奪還を命じる」

その言葉に、不死鳥は再び羽ばたく。

「覚悟は……出来た！」

友達を守る為、少女達を救う為、少年は覚悟を決める。

「二人なら戦える。二人なら勝てる！」

雪辱を晴らすため、鋼の鎧と幻影は再び立ち上がる。

「言っただろ。絶対に諦めないってな！！」

守る為の力を手にし、少年は悪魔の少女に立ち向かう。

「美優は返してもらうぞ！」

ボロボロになりながらも、悪魔の元へと辿り着く。

「貴方は……誰？」

だが、少女はもう彼の知っている少女では無かった。

「俺は、あいつに仇なす存在全てを塵に消す雷帝。……雷鳴と共に塵となれ」

雷鳴は、守るべき者と信念を胸に、悪魔に立ち向かう。

「終わりだ。朱雀」

悪魔の力の前に、翼をもがれた不死鳥。

「優也！！！」

不死鳥は、何度地に堕ちようと、何度も蘇る。

「何だ……貴様！！」

真紅の翼が漆黒に変わり、純白の翼が現れし時

「闇に堕ちろ」

物語は始まる。

次回

第３３話　悪魔の進行

龍

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

龍

「つーか、後二三話してから長編に入るって言ってなかったか？」

漆黒

「予定変更！！」

龍

「威張って言う事じゃないだろ。……死ね」

漆黒

「酷い！！！」

優花
「次回もお楽しみに」

登場人物設定４

黒烏
（くろう）

性別　男

ＣＶ：下野紘
（ぬらりひょんの孫：黒羽丸）

年齢　約８００歳

誕生日　９月１０日

身長　１７８ｃｍ

体重　７２ｋｇ

好き・得意な物（事）　咲魔　九妖　仲間　見回り

嫌い・苦手な物（事）　風魔正　翼を触られる事

能力　風

武器　錫杖

容姿
人間時は、黒髪の二十歳位でイケメンに入る顔。
妖怪時は、鴉の翼が生え、姿形が鴉の様になる。

解説
妖怪の山に住んでいる鴉天狗。
妖怪の山の中でも最高レベルの力を持ち、冷静な性格の為、妖怪達の統率係。
咲魔や九妖とは長い付き合いの為、かなり深い絆がある。
妖怪の山の見回りをよくしている。
正に負けてからは、正によく絡むようになった。

九妖
（くよう）
性別　女
ＣＶ：藤村歩（とある魔術の禁書目録：吹寄制理）
年齢　約６００歳
誕生日　１１月２日
身長　１６９ｃｍ
体重　５１ｋｇ
好き・得意な物（事）　咲魔　黒烏　サクラ　油揚げ
嫌い・苦手な物（事）　女扱いされる事　耳や尻尾を触られる事（

サクラは例外）

能力　炎

武器　無し

容姿

人間時は、金髪が肩まである十代後半位で、妖怪時は九本の尻尾と狐の耳が生える。

解説

妖怪の山に住んでいる九尾の妖狐。

妖怪の山の中でも、黒烏と共に最高レベルで、咲魔や黒烏のサポートをしている。

女扱いされるのが苦手で、女扱いされるとすぐに顔を赤くして慌てる。

美人な為、妖怪達の中でもかなり人気が高い。

サクラからは一番なつかれており、九妖もサクラを妹の様に可愛がっている。

仁の行動を見ていて、何故仁に負けたのか悩んでいる。

サクラ

（さくら）

性別　女

ＣＶ：日高里菜

（とある魔術の禁書目録：打ち止め）

年齢　９８歳

誕生日　９月１６日

身長　１２６ｃｍ

体重　２２ｋｇ

好き・得意な物（事）　九妖　咲魔　優花　マタタビ　遊び

嫌い・苦手な物（事）　水　黒烏（遊んでくれないから）　耳や尻尾を触られる事

能力　無し

武器　無し

容姿

黒髪で瞳は金色。

黒い猫耳と、黒い尻尾が生えている。

見た目は、人間で言えば小2。

解説

妖怪の山に住んでいる猫娘。

身体能力は人間を越えているが戦闘能力は皆無。

かなりの人見知りだが、一度なついた相手ならばとことん甘えたおす。

九妖と優花には特になついている。

咲魔もよく遊んでくれるので、結構なついている。
逆に黒烏はあまり遊んでくれないのであまりなついていない。
最近は優也や美優になつきかけている。

登場人物設定４（後書き）

漆黒
「ここで皆様に訊きたい事があります。登場人物の能力データ等を書いた方が良いですかね？」
黒烏
「登場人物設定を書いてるから良いんじゃないのか？」
九妖
「一応能力の事も書いてるしな」
漆黒
「細かい所も書いた方が良いかなって。技名とか、身体能力とか」
九妖
「書こうとは思ったが書くのが面倒だったんだろ」
黒烏
「それで読者の感想を訊こうと、そう言う事か」
漆黒
「いやだって、長編も二つ目だし、ここら辺で一旦能力とか、色々と説明した方が良いかなって」
黒烏
「好きにしろ」
九妖
「私達は構わないさ」
漆黒
「それじゃあ、もう一度訊きます。もし能力や技の説明、個人の身能力体を書いて欲しいと思ったら感想にお願いします。それじゃあ」
サクラ
「感想待ってま～す！！」

能力データ（前書き）

登場人物の能力データです。
基本は一番上がＳＳＳで、一番下がＧの十段階です。
ＥＸはそれ以上です。
それではどうぞ。

能力データ

【火渡優也】

【種族】
人間

【妖力色】
赤

【基本能力】
妖力：A
攻撃力：A
防御力：D
コントロール：E
パワー：F（脚力：A）
スピード：A
探知能力：F
女顔度：EX

【黒夜叉・半】
妖力：A
攻撃力：S
防御力：B
コントロール：D
パワー：F
スピード：A
探知能力：E

【解放状態】
妖力：S
攻撃力：S
防御力：E
コントロール：E
パワー：F（脚力：A）
スピード：S
探知能力：F

【能力：炎】
炎を操る

【技】
【鳳凰激（ほうおうげき）：A】
刀に炎を集中させ、刀を振り抜くと同時に巨大な炎を放つ近距離技。

【鳳凰爪牙（ほうおうそうが）：A】
足に妖力を集中させ、炎の翼を生やし、強化された蹴りを、炎の推進力で放つ。

【炎鳥（えんちょう）：C】
刀から放たれた炎が鳥の姿になり敵を攻撃する中遠距離技。

【鳳凰炎舞（ほうおうえんぶ）：B】
刀から放たれた炎が渦を巻き、敵を攻撃する中距離技。
大人数を攻撃できる。

【斬炎弾（ざんえんだん）：A】
刀に集中させた炎を、刃状にして放つ。

【炎舞鳥(えんぶちょう)：E】
“炎鳥”の拡散バージョン。
数十体の火の鳥で攻撃する遠距離技。
拡散する代わりに威力が弱まる。

【炎帝・鳳凰激(えんてい・ほうおうげき)：S】
鳳凰激の強化技。
威力と範囲が高くなるが、溜めが長く、妖力の消費が高い。

【鳳凰閃火(ほうおうせんか)：A】
体に炎を纏い、朱雀の姿になり敵に突進する

【炎帝・鳳凰衝(えんてい・ほうおうしょう)：SSS】
『舞い上がれ、真紅の翼、闇を切り裂く炎となれ』の詠唱を唱えて放つ最強の技。
刀から放出された炎が火柱を上げ、火柱は朱雀の姿に変わり、最後に空へと消えていく。
朱雀の炎を最大限に発揮している為、憎しみや怒りと言った負の感情を消し去り、闇の力等を使う敵に有効。

【神道美優】

【種族】
人間

【基本能力】
霊力：F
攻撃力：B

防御力：F
コントロール：G
パワー：A
スピード：F
探知能力：E
食欲：EX

【能力：不明】

【椿薫】

【種族】
人間

【霊力色】
水色

【基本能力】
霊力：C
攻撃力：D
防御力：B
コントロール：A
パワー：E
スピード：B
探知能力：C
お母さん度：EX

【能力：氷】

氷を操る

【技】

【氷華・椿（ひょうか・つばき）：B】

敵一体を完全に凍らせ、最後は花が散るように氷が砕ける中距離技。

【氷華・桜（ひょうか・さくら）：C】

吹雪が吹き荒れ、敵を凍らせ動きを封じる。

敵味方が入り乱れている時は使えない。

【氷華・乱れ桜（ひょうか・みだれざくら）：C】

無数の氷の刃が敵を切り裂く中距離技。

【水野進】

【種族】

人間

【基本能力】

霊力：G

攻撃力：E

防御力：F

コントロール：G

パワー：D

スピード：B（逃げ足：S）

探知能力：G

ツッコミ：EX

【能力：無し】

【霧藤総司】

【種族】
人間

【霊力色】
藍色

【基本能力】
霊力：C
攻撃力：E（精神攻撃：S）
防御力：C
コントロール：A
パワー：C
スピード：D
探知能力：B
変態度：EX

【能力：幻術・空間移動】
幻術・相手に幻覚を見せる
空間移動・空間を移動する

【鋼鎧寺彪牙】

【種族】
人間

【霊力色】
黄色

【基本能力】
霊力：D
攻撃力：B
防御力：S
コントロール：D
パワー：S
スピード：C
探知能力：F
やせ我慢：EX

【能力：気】
気を操る

【黒城流香】

【種族】
吸血鬼

【妖力色】
赤

【基本能力】

妖力：B
攻撃力：A
防御力：B
コントロール：S
パワー：C
スピード：B
探知能力：C
お姉さん度：EX

【能力：血液操作】
自分の血液を操る
使った後は喉が渇く

【技】
【血の短剣（ブラッディ・ダガー）：C】
血液で出来た短剣で敵を攻撃する。
【血の槍（ブラッディ・ランス）：B】
血液で出来た槍で攻撃する。

【月臣龍】

【種族】
人間

【霊力色】
銀

【基本能力】
霊力：C
攻撃力：SS
防御力：A
コントロール：A
パワー：SSS
スピード：C
探知能力：B
ドS度：EX

【能力：無】
能力を無効化する

【技】
【月牙（げつが：）A】
霊気を纏った大剣で敵を斬る。

【風魔正】

【種族】
人間

【妖力色】
白

【基本能力】
妖力：C
攻撃力：A

防御力：Ｂ
コントロール：Ｂ
パワー：Ｂ
スピード：Ｂ
探知能力：Ｄ（気配を感じ取る：ＳＳ）
ヘタレ度：ＥＸ

【能力：風】
風を操る

【技】
【風殺（ふうさつ）：Ａ】
風を相手の体内に撃ち込み、体内を切り刻む。
撃ち込むためには、相手の体に触らなければならない。

【雷道仁】

【種族】
人間

【妖力色】
金

【基本能力】
妖力：Ｂ
攻撃力：Ｂ
防御力：Ｂ
コントロール：ＳＳ

パワー：D
スピード：C
探知能力：A
天才度：EX

【完全体】
妖力：A
攻撃力：A
防御力：A
コントロール：SS
パワー：C
スピード：A
探知能力：A

【能力：雷】
電気を操る

【技】
【雷鳴弾（らいめいだん）：A】
妖力を込めた弾丸を相手に撃ち、動きを封じる。
そして銃口の前に電気の輪が現れ、その輪を通った雷撃は威力を増し、敵を攻撃する。

【天道優花】

【種族】
人間

【基本能力】
霊力：Ｅ
攻撃力：Ｇ
防御力：Ｇ
コントロール：Ｇ
パワー：Ｆ
スピード：Ｅ
探知能力：Ｃ
貧乳度：ＥＸ

【酔っ払い時】
霊力：Ｅ
攻撃力：ＥＸ
防御力：Ｇ
コントロール：Ｇ
パワー：ＳＳＳ
スピード：Ｓ
探知能力：Ｇ
ギャップ：ＥＸ

【能力：不明】

【椿修二】

【種族】
人間

【霊力色】

水色

【基本能力】
霊力：Ｂ
攻撃力：Ｃ
防御力：Ａ
コントロール：Ａ
パワー：Ｂ
スピード：Ｂ
探知能力：Ｃ
シスコン：ＥＸ

【能力：氷】
氷を操る

【技】
【氷結刃（ひょうけつじん）：Ａ】
巨大化させ、妖力を込めたチャクラムで攻撃する。

【大江咲魔】

【種族】
鬼

【妖力色】
赤

【基本能力】
妖力：Ａ

攻撃力：Ａ
防御力：Ａ
コントロール：Ｓ
パワー：Ｓ
スピード：Ｃ
探知能力：Ｅ
酒好き度：ＥＸ

【鬼神覚醒時】
妖力：Ａ
攻撃力：Ｓ
防御力：Ｓ
コントロール：Ｓ
パワー：ＳＳ
探知能力：Ｅ
スピード：Ｃ

【能力：無し】

【技】
【音鬼砲（おんきほう）：Ａ】
声に妖気を込め放つ。

【鬼拳（きけん）：Ｂ】
妖気を拳に集めで攻撃する。

【烈鬼拳（れつきけん）：Ｂ】
両手に妖気を集め連続で攻撃する。

【双鬼拳（そうきけん）：Ｂ】

両手に妖気を集め同時に攻撃する。

【守式・羅生門（しゅしき・らしょうもん）：S】

鬼の紋様が彫られた巨大な門が出現し、攻撃を防御する最強の盾。

【黒烏】

【種族】

鴉天狗

【妖力色】

緑

【基本能力】

妖力：C

攻撃力：C

防御力：D

コントロール：B

パワー：D

スピード：A

探知能力：D

真面目度：EX

【能力：風】

【九妖】

【種族】
九尾の妖狐

【妖力色】
黄色

【基本能力】
妖力：Ｂ
攻撃力：Ｃ
防御力：Ｂ
コントロール：Ａ
パワー：Ｄ
スピード：Ｄ
探知能力：Ａ
人気度：ＥＸ

【能力：炎】

【サクラ】

【種族】
化け猫

【妖力色】
緑

【基本能力】

妖力：E
攻撃力：F
防御力：F
コントロール：D
パワー：G
スピード：A
探知能力：C
可愛らしさ：EX

【能力：無し】

能力データ（後書き）

優也
「とりあえず、女顔ＥＸってどういう意味だ」
優花
「貧乳・・・・・・・・・・・・・」
進
「ツッコミＥＸって、ツッコミしか取り柄がないみたいだろ！」
正
「誰がヘタレだ！！」
漆黒
「あってるだろ」
優也・進・正
「あってない！！」
優花
「・・・・・はぁ」
漆黒
「今回の能力データはどうでしたでしょうか？」
進
「無視かよ！！」
漆黒
「精一杯考えてみました」
正
「これが精一杯かよ」
漆黒
「それじゃあまた次回！」
優也
「終わりかよ」
優花

「はぁ～・・・・・・」

第３３話　悪魔の進行

「ギャア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛！！！！」

月が輝く夜に、男の野太い叫び声が木霊する。
その叫び声を、龍は目の前で訊いていた。
男の背中からは、悪魔の翼が生えていたが、優也達が見た時とは違い、男の体にも骨の様な物がまとわりついていた。

「うるさい」
「ガッ」

龍は男の口を手で塞ぎ、叫べない様にして、悪魔の翼を掴む。

「随分長い間寄生されていた様だな。ここまで寄生されたら、俺の力じゃどうする事もできない」

悪魔の翼を掴んでいる手の握力を強める。
翼はビキビキと音をたて、ヒビが入っていく。

「消えろ」
「ギッ！！！」

バギッと音が鳴ると、翼も、まとわりついていた骨も完全に消え去っていった。
男は糸が切れたかの様に、力無く地面に倒れていった。

「…………命はあるが、これじゃあ一生廃人だな」

龍は倒れた男を肩に担ぎ上げ、歩き出す。

「悪魔に取り付かれた人間が増えてきたな」

優也と美優が悪魔の翼に取り付かれた男に襲われてから今まで、龍は夜な夜な悪魔の翼に取り付かれた人間達と戦っていた。
初めの内は頻繁には出会わなかったが、ここ最近はほぼ毎晩の様に出くわす様になっていた。

「ルシファー、じゃないな。あいつは大人しくなったし、こんな馬鹿な真似をする奴じゃない。となると、バロールか。ったく、あの馬鹿が……」

龍は空を見上げながら呟いた。

「目覚めるのならさっさと目覚めろ……優也」

第３３話　悪魔の進行

「一人で居るのも久し振りだな」

昼過ぎ、進は一人近くの商店街をブラブラしていた。
一人でブラブラとは、寂しい男だ。

（何か訊こえた様な、まぁ良いか。本屋でも行くか）

特にする事もなく、進は近くの本屋で立ち読みをする事にした。

傍迷惑な男だ。

（今日はツッコまない！ツッコまないからな！！）

ちっ、そして買う物も無いのに、進は本屋の自動扉を開いた。

（舌打ちしやがった………。適当に何か読も）

目についた漫画を適当に手に取り、読み始めた。

少し読んで、進は自分の両隣に居た人をチラッと見た。

そこには、いかにもヤが付く稼業の人達が立ち読みをしていた。

（やっべぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！超怖ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！）

これがツッコミをしなかった者への罰だ。

（うっせぇよ！！わかったよ！ツッコめば良いんだろ！！でもその前にこの場所から移動しないと！）

漫画を読み終わったフリをして、漫画を元の場所に戻すと言う考えを、進は実行しようとした。

「おいワレェ、よぉ見ればお隣さんの組の者やないけぇ。こんな所で何しとんねん？」

出来なかった。

自分に声を掛けられた訳ではないが、ついつい漫画を戻さず、読む事を続けてしまった。

（何でまだ読んでんの俺！？さっさと行けば良かったのに！！）

「そりゃこっちのセリフや、お隣さん。ここはワシ等のシマじゃ、さっさ出てけ」

後悔してももう遅く、二人はドンドンヒートアップしていく。

「可笑しな事言いまんな。組が隣どうしなら、ここはワシ等のシマでもあるんやで」

進は思った。

（何で隣どうしぃぃぃぃ！！！）

と、思いっきりツッコミたかった。

「やったら、どっちのシマかはっきりさせようやないか」

「上等や。お隣さん」

一触即発の雰囲気が漂い、店に居た人達はそそくさと外に出ていくなか、進は我満の限界だった。

「だから……何でお隣だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

遂に、全力でツッコんでしまった。

男達も、定員も、店を出ようとしていた人達も、驚いて進を見た。

（つ、ツッコんじまったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！）

時既に遅し、気付けば男達は進を睨み付けていた。

「何やガキ！！文句でもあるんか！！」
「お前から先にいてこましたろか！！」
「えぇぇぇぇ！！？ちょっと待っ……」
「ちょっと待ったぁ！！」

男達が標的を進に変え、今にも襲い掛かろうとした時、何処からか高い声が訊こえた。
店の中に居た全員が、声がした方を見る。
そこには、腰まである桃色の髪を一つに纏めた、進と同じ歳位の少女が、木刀が入っている様な袋を手に持ち、仁王立ちしていた。

「何やワレ！！」
「名乗らんかい！！」
「この東条雅（とうじょうみやび）！敵に名乗る名前なんて持ち合わせていない！」
「名乗ってる！現在進行形で名乗ってる！！」
「うっ！！」

痛い所を突かれ、雅と名乗った少女はたじろぐ。

「う、うっさいわね！！折角助けてやろうと思ったのに、助けてやらないわよ！！」
「逆ギレ！？」
「ギャアギャアうっさいねん！！」
「女やからって調子乗んなや！！」

さっきまで言い争っていた二人が、今は何故か仲間の様に、一緒に少女へと襲い掛かった。
襲い掛かったと言うよりは、掴み掛かったと言う方が正しいが、傍から見ればどう見ても襲い掛かっている様にしか見えなかった。
少女も迎え撃とうと身構え、今にもぶつかりそうになった瞬間、男達の目の前から少女が消えた。

「失礼しました！！！！」
「ちょ、ちょっと！！」

少女と男達がぶつかる瞬間、進が少女の手を取り、全速力で逃げていたのだ。

「「待たんかい！！！」」

男達も追い掛け様と店を出たが、二人はもう米粒くらいの大きさになっていた。

所変わって、優也は一人、とある事件現場に居合わせていた。
手には愛刀である黒い刀、をそのままにして持っている訳にはいかないので、竹刀や木刀を入れる様な袋に入れて持っていた。
以前の様に、丸腰のまま襲われた時の事を考えての事だ。

「明らかに人間業じゃないな」

優也の視線の先には、壊れた建物の壁、ひしゃげたドラム缶等、ただの人間がしたとは思えない光景があった。

「ここ最近暴力事件とかが多いから、気になって見に来てみれば……とにかく、仁達に報告しとくか」

優也は携帯を取り出し、仁に連絡する為携帯の操作を始めた。

「ん？」

携帯を操作する手を止め、周りを見渡すと、十数人の人間達がフラフラと歩いて来ていた。

優也は携帯をポケットに入れ、近付いてくる人間達を警戒する。

「ガア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝！！！！！」

「！！」

突然雄叫びを上げると、全員に悪魔の翼が現れた。

「こいつ等！悪魔の！！」

悪魔の翼を生やした者達は、優也が刀を構える前に、一斉に襲い掛かった。

「あんな奴等、私の木刀で一発だったのに……」

桃色の髪を靡かせ、不機嫌そうに進の隣を歩く少女雅。

どうやら男達から逃げた事がよっぽど嫌だったらしい。

「少し強いからって、ああ言う事はしない方が良いって」

『少し』と言う言葉に、雅はバッと顔を進に向けて、凄い見幕で詰め寄った。

「少し!?少しじゃないわよ!これでも私は剣術師範代よ!!」

「マジでか!?弟子とかじゃなかったのかよ!」

「当然よ!」

てっきり門下生だと思っていた進は、かなり驚き、その反応を見た雅は、自慢気に胸を張って言った。

「何たって、私を入れても二人しか居ないんだから当たり前よ!!」

「……」

その瞬間、進は驚きから呆れに変わった。

「それ……自慢して言う事じゃないだろ」

「あっ!!」

(頭悪いのか……)

進の中での雅の第一印象は、頭の悪い娘になった。

「えっと、何で二人しか居ないのに続けてるんだよ?二人しか居ないんじゃ開いてる意味ないんだろ」

「あそこは私の家だからよ。それに……あの子には身寄りがないもの……」

「あの子?」

「ウチの住み込みの門下生よ」

雅が言っているのは、先程自信満々に言っていたもう一人の門下生の事だろう。
だが進は、それよりも気になる事があった。

「身寄りがないって、そいつの両親は……」
「六年前の戦争で死んだらしいわ……。私の両親もね」
「！！」

雅は顔を俯かせる。
それを見て、進は表情を曇らせる。

「あの、ご、ごめ……」
「本当に……思い出したら腹が立ってきた！！」
「は？」

マズイ事を訊いてしまったと思い、進は謝ろうとするが、雅が突然キレた為、遮られた。

「あいつ今日も私が着替えてる時にノックもしないで入って来たのよ！信じられる！？いつもいつも言ってるのに！そのくせ私には剣術は習わないとか言ってサボってばっかだし！私が作った料理をマズイって言うし！誰のお陰で食べれてると思ってるのよ！！ねぇ訊いてる！！」
「き、訊いてるって！！」

どうやら、かなり鬱憤が溜まっているらしく、息継ぎ無しのマシンガントークの後、少し息継ぎし、また愚痴を言う。
ここで訊かなければ、今度は自分にとばっちりが飛んで来ると思い、仕方無く訊いていると、ある事に気付いた。

（六年前の戦争って、確か……優也達が参加してた。何でこいつの親が……）

六年前に起きたかなり大きな戦争、今では何故か語られる事はない、色んな種族が戦い、人間が能力を手に入れた戦争でもある。つまり雅の両親は、巻き込まれたか、何かしらの能力を手に戦争に参加していたと言う事になる。

「そう言えば、あんた何て名前？」

「え……あぁ、そう言えば自己紹介してなかったな」

考え事をしていると、雅が名前を訊ねてきた。

「あ、私は東条雅って言うの。雅で良いわ」

雅は律儀に自己紹介をするが、先程、本屋でのやり取りの時に、大声で名乗っていた為、進は名前を知っていた。

とは言え、自己紹介されたのだから、自己紹介しなければ礼儀が悪いと思い、進も名乗る事にした。

「俺は……」

「あっ！こんな所で何してるの？」

今に名乗ろうとした瞬間、後ろから訊き覚えのある声を訊き、進は後ろを振り返る。

「美優！」

「美優……？」

進に声を掛けた人物は、美優だった。

いつもは優也や薫か優花が一緒に居るが、今日は珍しく一人だった。
美優は進の隣の雅を見付けると、ニヤニヤしながら進をからかい始めた。

「こんな所で何してるかと思えば、可愛い娘とデート？」
「なっ！？ち、違うって／／／！！」

顔を赤くさせながら、進は否定する。
美優はその様子を見て、更にニヤニヤする。

「恥ずかしがらなくても良いじゃん。そんなに可愛い彼女が居るんだから」
「だから！雅は彼女じゃないって／／／！！」
「へぇ～、もう名前呼びなんだ♪」
「だから違う！！」

始終、美優のペースで、進は押されっぱなしだった。
そんな進を無視し、美優は雅に話し掛ける。

「初めまして、神道美優です」
「……東条雅です」

美優が挨拶すると、雅も挨拶をする。
だが、進と話をしている時と比べれば、全然元気が無かった。

「見付けた……」
「え？」

雅は小さく呟き、進に指差し高らかに言った。

「あんたが火渡優也ね！！」
「「……は？」」
盛大な勘違いだった。
勘違いしているとは微塵も思わず、雅は袋から木刀を取り出した。
「ちょっ！ちょっと待って！！勘違いしてるよ！！」
木刀を取り出した雅を見て、美優は慌てて雅を止める。
「勘違いなんかじゃないわよ！あの人が言ってたわ。火渡優也はいつも神道美優と居るって！！」
中身が無くなった袋を投げ捨て、右手に持った木刀を進に向ける。
「いやっ！だから……」
「問答無用！！」
すると、雅が持っていた木刀に黒い影の様な物がまとわりつく。
「！！（この感じ、前に感じた時と同じ！何で……さっきまで感じなかったのに！？）進！逃げて！！」
美優の叫びと共に、雅は進に斬り掛かった。
美優が感じた物、それは、悪魔の力だった。
「ふぅ、今日はこんな所ですかね」

今日も、誰も見ていない場所で、総司は一人、特訓をしていた。

「最近は物騒ですし、早めに帰るとしますか」

総司は立ち上がり、帰ろうと歩き出した。

その瞬間、背中に強い衝撃を感じた。

「!?」

その衝撃に耐えきれず、総司は倒れてしまう。

「霊気を感じて来てみれば、ハズレかよ」

総司を蹴り飛ばしたのは、一人の男だった。

たがその男は、耳が尖っており、人間には見えなかった。

「良く考えれば火渡優也は霊気じゃなくて妖気だったな。無駄足だぜ」

男は、倒れている総司を無視し、何処かへ歩き出す。

「いきなり襲い掛かってきて、挨拶も無しですか」

だがそれを、立ち上がった総司が呼び止めた。

（この男の狙いは優也君。いや、この男が悪魔だとすれば、以前の悪魔に取り付かれた男が狙っていたのは美優さん。どちらにせよ、このまま行かせる訳にはいかない）

総司は双刃剣を手に持ち、男を見据える。

「止めとけ。おめぇじゃ俺には勝てねぇよ」

「ふっ、どうでしょうか？」

双刃剣を持つ手に力を入れ、能力を使おうとした瞬間、男の手が総司の顔面を掴んでいた。

「！！」

「だから勝てねぇって、言ってんだろが！！」

そしてそのまま、総司の頭を地面に叩き付けた。

「かっ……！」

頭を打った衝撃で、武器を手放し、意識も朦朧とする。

「この程度の動きに対応出来ねぇ人間が、悪魔に勝てると思ってんのか！！ぶち殺すぞ！！」

悪魔と名乗った男は、総司に馬乗りになり、胸ぐらを掴む。

「はっ、ガラが悪いですね……。（やはり悪魔。ここまで身体能力の差が出るとは……もう少し体を鍛えておくべきでしたね……）」

朦朧とする意識の中、能力ばかり特訓して、体を鍛えなかった事を後悔した。

「死ねオラ！」

男は止めに、右腕を振り上げ、一気に振り下ろした。
総司は抵抗する事も出来ず、目を閉じた。
だが、いつまで経っても衝撃が来ず、恐る恐る目を開いた。

「何だ、てめぇ」
「！！」

目を開いた先には、男の振り上げた右腕を掴んだ、自分の友が居た。

「彪牙！！」
「俺のダチに、手ぇ出してんじゃねぇ！！！」
「！！」

彪牙の怒りの拳が、悪魔の顔面を殴り飛ばした。

第３３話　悪魔の進行（後書き）

漆黒
「ここで一つ、優也の解放状態はそのまま解放状態。仁の解放状態は完全体と言います」
進
「何か今更だな」
漆黒
「前の能力データのやつで完全体って書くの忘れてた」
美優
「そうなんだ」
漆黒
「まぁとにかく、これでテストに集中出来るよ」
美優
「そう言えば今テストじゃん！執筆してる暇あるの？」
漆黒
「息抜きだよ息抜き。あ、次回は進が殆どメインだよ」
進
「マジでか！！よっしゃあ！！」
美優
「メチャクチャ嬉しそう」
漆黒
「じゃあタイトルコールをどうぞ」
進
「おう！」

次回

第３４話　現れし魔王

進

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第３４話　現れし魔王（前書き）

遅くなって申し訳ありません！！

第３４話　現れし魔王

悪魔の男は、殴られた衝撃で少し吹き飛ばされたが、あまり効いた様子もなく、静かに彪牙を睨み付けていた。

「ひゅ、彪牙……何故ここに……」

「あ？　偶然だよ。偶然通り掛かったらお前がボコボコにされてたからな」

「うっ！」

ボコボコと言う言葉が、総司の胸に突き刺さった。

「そ、それより彪牙！　早く逃げて下さい！！　君じゃあ奴には勝てない！」

ショックを受けつつも、彪牙に逃げる様に促す。

「うるせぇよ……」

だが彪牙は、それを良しとしない。

バキバキと指を鳴らし、悪魔に向かっていった。

「ダチがやられて、黙ってんのは男じゃねぇ。　行くぜ！！」

「彪牙！！」

「ちょっと強い位の人間が、悪魔に勝てると思うなよ！！」

悪魔は身構え、彪牙を迎え撃つ。

友の為、鋼の鎧は悪魔と戦う。
だが、力の差は歴然だった。

第３４話　現れし魔王

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！？」
進は美優の手を引っ張りながら、人通りの少ない道を、全速力で走っていた。
「待ちなさいよ！！」
後ろから、黒い影の様な物がまとわりついた木刀を手に持った少女が追い掛けてきているからだ。
「待てって言われて待てるか！！」
「なら追い付くまで！」
黒い影を纏った木刀を振り回し、雅は二人を追い掛ける。
「進！　あの娘に何したの！？」
進
「何もしてねぇ！！　つーかあいつの狙いは優也だろ！」

何度か転けそうになるが、何とか着いていき、美優は進に問いただす。
追い掛けられている理由を、進が知る筈もなく、美優の手を引っ張り必死に足を動かす。

「あ～、もう！！　こうなったらヤケクソよ！！」
「！　危ない！！」
「いっ！？」

なかなか距離を詰める事が出来ず、苛立った雅は木刀を放り投げた。
飛んでくる木刀に気付いた美優は、進の手を引っ張り、横に避けた。
回転しながら飛んでいく木刀は、美優達に当たる事なく、店の窓ガラスを粉砕した。

「ふぅ～、危なかったね、進」
「か、肩……肩が……外れる……」

粉砕された窓ガラスから、進に目線を移すと、そこには、右肩を抑えながらうずくまっている進が居た。
全力で走っていた所を、突然馬鹿力で引っ張られた事により、右肩に重大なダメージを負っていた。

「何してるの！　早く立って！」

何故進がうずくまっているのかわからない美優は、無理矢理立たせようとする。

「やっと追い付いた！」

そこに、木刀を放り投げた張本人が追い付いた。

美優はやばっ、と口に出し、進は痛みで、追い付かれた事すら気付いて居なかった。

「もう逃がさないわよ」

雅はゆっくりと二人に近付いていく。
抵抗する術がなく、万事休すか！と美優が思った瞬間。

「こらぁぁぁ！！　窓ガラス割ったの誰！？」

救世主が現れた。
雅が投げた木刀を手に持ち、怒りの形相で黒いドレスにエプロンを付けた様な服を着た紫髪の女性が、割れた窓ガラスの店から出てきた。

「あの娘です！」
「えぇ！？」

すかさず雅に指を差し、雅を女性に売った。

「ちょっ！　ここまで来たら同罪でしょ！？　裏切るの！」
「裏切るも何も、勝手に木刀投げたの君でしょ！！」

美優と進はただ避けただけ、雅は木刀を投げガラスを割った。
どっちが悪いか一目瞭然だった。

「で、でも……」
「貴女がやったのね……」
「ひぃ！！」

女性はいつの間にか雅の背後に立ち、雅の肩に手を置いていた。
恐ろしい殺気を放つ女性に、雅は小さく悲鳴を上げる。

「来なさい」

女性はとっても良い笑顔で笑っていた。

「嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

雅は首根っこを掴まれ、店の奥に連れていかれた。

「…………行こっか」
「お、おう…………」

痛みが引き、進はやっと立ち上がる事が出来た。
二人は早くここから離れようと、走り出した。

「ひゅう……が」
「フン、くたばったか」

彪牙はボロボロで倒れており、悪魔は初めに殴られた痕以外は、全くの無傷だった。

「時間を無駄にしたぜ」

悪魔の男は倒れている二人に見向きもせず、何処かへ歩き出そうとする。

「待てよ……」

だがそれは、彪牙の声によって止められた。

「勝手に、終わってんじゃ……ねぇ……」

足に力を入れ、彪牙は立ち上がる。

「逃げんじゃねぇよ……」

顔は血まみれ、視界も定まらず、立っているだけでも精一杯でも、彪牙は立ち上がった。

「ガキが、まだ勝てるとでも思ってんのか？」

悪魔はゆっくり振り返ると同時に、体から黒い影の様な物が溢れ出す。

「調子に乗ってんじゃねぇ！！！」

黒い影を纏った状態の悪魔が、彪牙に向かっていく。

彪牙は動く事もせず、悪魔の拳は彪牙の腹に突き刺さった。

「彪牙っ！！」

終わった。

総司の脳裏にはそう過った。

満身創痍、そんな状態で先程よりも強い一撃。

そんな一撃をまともに喰らって立っていられる筈がない。

次に総司の視界に入ったのは、力なく倒れた彪牙。

「！　なっ……！」

ではなく、彪牙に殴り飛ばされている悪魔だった。

総司は勿論、殴られた悪魔も驚きを隠せない。

先程まで、手も足も出なかった男が、初めの不意打ち以外で殴る事すら出来なかった男が、ここに来て初めてまともに拳を叩き込んだのだ。

「ハァ……ハァ……」

（もう、意識もとんでんじゃねぇか……）

誰がどう見ても、彪牙は立っているのが可笑しい状態だった。

「オ……オ……」

それでも拳を固く、強く、力の限り握り締める。

意識が無くとも、圧倒的な力の差でも、彪牙は戦う事を止める事はない。

「オオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！」

雄叫びを上げ、固く握り締められた拳で、目の前の悪魔に殴り掛かる。

「ちっ！　（こいつ……）」

「（闘争本能のみで！！）　彪牙！！」

意識も無い状態の攻撃、避ける事は容易かったが、拳が届く前に、

悪魔はカウンターで彪牙の顔面を殴り付ける。
だが・・・・・。

「ッオォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！！！」

渾身の一撃が、吸い込まれるかの様に、悪魔の腹に突き刺さる。

「ッ！！」

胃の中の物を吐きそうな感覚を、悪魔は感じたが、吐き出したのは真っ赤な血だった。
いくら悪魔と言えど、強烈な一撃を何度も喰らえば限界も訪れる。
だが、悪魔の限界よりも、彪牙の限界が近付いていた。

「このガキ、いい加減死ね！！」

彪牙の限界が近い事に気付いている悪魔は、黒い影を拳に集め彪牙に殴り掛かった。

「彪牙！！」

彪牙を助けたい。
だが体が動かなく、自分の無力を噛み締めている間にも、悪魔の拳は彪牙の眼前に迫る。
拳が彪牙の顔面を、捉える事はなかった。

「！！」
「次から次へと……何だてめぇ……」

悪魔の腕をガッシリと掴み、彪牙への攻撃を止めた男が居た。

その男は、亜麻色の髪に、身長は彪牙よりも高く、右手には大剣を模したブレスレットを付けていた。

「月臣……龍！」

「人に名前を訊く時は、名乗ってからって教わらなかったか？」

全てを無に帰す能力者、月臣龍がそこには居た。

「そんなもん、教わっちゃいねぇよ！！」

何度も止めを止められ、苛立った悪魔は、掴まれていない方の手で、龍に殴り掛かるが、難無く躱わされる。

「それは可哀想にな」

躱わした状態から拳を握り、悪魔を殴り飛ばした。

「っ！！」

拳が届く前に防御した為、ダメージは受けなかったが、たった一度防御しだけで、腕は痺れていた。

「なら俺が教えてやるよ。青二才」

いつの間にか手に持っていた大剣を肩に担ぎ、不敵に笑っていた。

「……美優」

「……」

その頃、美優と進は雅から逃げていたが、何故か目の前は行き止まりだった。

「迷っちゃった♪」

ペロッと舌を出し、可愛い娘ぶって現状を話す。

「迷っちゃった♪　じゃねぇよ！！」

それを真似しながら、進がツッコムが、正直キモい。

美優は女の子で元が良いから大丈夫だが、進がやると、とにかくキモかった。

「（何か馬鹿にされた様な……）とにかく引き返すぞ！」

「見付けたわよ！！」

「「！！」」

急いで引き返そうと振り向いた瞬間、遂に雅に追い付かれてしまった。

「もう逃がさないわよ」

木刀をしっかりと握り締め、ゆっくりと近付いていく。

その目には涙が溜まっていた。

（（そんなに怖かったか））

あの紫髪の女性から命からがら、涙目になりながらも、逃げ出して

来た様で、そんな雅に二人は同情した。

「覚悟しなさい！！」
「ちょ、ちょっと待って！！」

黒い影が再び木刀にまとわりつき、雅は進に襲い掛かろうとするが、美優に止められる。

「何？」
「何で……優也を狙うの？」

雅が優也の名前を出した時、嫌な考えが頭を過っていた。
この少女も、以前の薫や修二の様に、優也に復讐しようとしているのではないのかと言う、最悪な考えだった。

「火渡優也を倒せって言われたからよ」
「誰に……そんな事……」
「そんな事言えるわけないでしょ」

流石にそれ以上は話す訳もなく、雅はキッと目付きを強める。

「そろそろ覚悟を決め……」
「何でだよ……」
「えっ……？」
「何でお前がこんな事してんだよ！！」

突然の怒号。
雅は少なからず驚きを覚えた。
先程までただ逃げるだけで、何故こんな奴を倒せと言われたのか、少し疑いが芽生えてきていた。

だがその疑いも、今の進の迫力に欠き消された。

「お前、俺を助けようとしてくれたよな。見ず知らずの他人でも助けようとする奴が、他人に言われただけで、何で見ず知らずの奴を倒そうなんて事できんだよ！！」

「っ……」

進の言葉に、雅は目を逸らしながら、苦々し気な表情をする。

「お前のその剣は誰かを傷付ける為の剣じゃない、誰かを守る為の剣だろ！」

目の前の少女が狙っている少年も、誰かを守る為に、剣を振るっている。

少し話しただけだが、この少女も誰かを守りたくて剣術を習ったんだとわかった。

「お前が何か悩んでる事があるなら言ってくれ。力になってやるから！」

「っうるさい！！」

怒りが交わった雅の声に呼応するかの様に、黒い影が雅の体から勢い良く吹き出て、雅の体を取り巻く。

「「！！」」

「何が力になってやるよ。　そんなの、聞き飽きたわよ！！」

先程までとは、比べ物にならない速さで進に接近する。

「危ない！！」

「きゃっ！」

ギリギリで反応した進は、隣に居た美優を突き飛ばす。

「やあぁぁぁぁ！！！！」

「くっ！」

美優を突き飛ばした事で、回避が少し遅れたが、横に転がる様に飛ぶ事で何とか避ける事に成功した。

黒い影を纏った木刀は、進に当たる事はなく、壁を『切り裂いた』。

「なっ！」

「木刀で壁を！！」

壁には、刃で斬られた様な跡が残っていた。

そう、壁に木刀を『叩き付けた』ではなく、『切り裂いた』のだ。

あんな物で攻撃されれば、あの壁の二の舞になってしまうと思い、進はこの状況をどうにかしなければと思考を張り巡らせるが、

「あんたに……何がわかるのよ！！」

「っ！」

考えが纏まるよりも早く、雅の木刀が襲い掛かった。

上段から頭への斬撃、進は横に走る事で斬撃を躱わす。

だが雅は、躱わした進を追い掛ける様に木刀を振るう。

「ぐあっ！！」

「進ッ！！」

後ろからの斬撃を躱わす事が出来ず、背中を斬り付けられてしまう。

「私がこの力のせいで、どれだけ苦しんだか！どんな思いでこんな事をしてるか！あんたにわかるの！？力になってやるなんてのも、嘘なんでしょ！！」

「うっ！！」

壁に手を付き、立ち上がった進の腹目掛けて、木刀の突きを繰り出す。

進は壁に貼り付けられた様な状態で、雅の顔を見る。

その表情は、怒りに満ちている表情だ。

（くそっこいつ、これじゃあ……尚更引き下がれないだろ！そんな苦しそうな顔されたら！）

進が見た雅の表情、確かに怒りが混じった表情だったが、進にはそれよりも強い苦しい表情が見てとれた。

（引き下がれない……逃げるわけにはいかない！！）

腹に突き付けられた木刀を両手で掴み、雅を睨み付ける。

「何のつもりよ……」

進の行動に、雅は怪訝な表情を浮かべる。

進は木刀を強く握り、睨み付ける目を一層強める。

「こういうつもりだよ！！」

「っ！」

突然の進の攻撃。

木刀を握り締めたまま、右足で雅に蹴りを放つ。
まさか、攻撃してくるとは思っていなかったが、何とかその蹴りを左手で受け止める。

「おおおお！！！！」

防御をして、片手が木刀から離れた瞬間に、進は木刀を払いのけ、雅を殴り付ける。

「ナメンじゃ、ないわよ！！」
「うあっ！！」

身体能力は普通、戦闘は素人な進の攻撃が、曲がりなりにも師範代の雅に届く筈もなく、簡単に躱わされ、横腹に横薙ぎの一閃を喰らい、地面を転げ回る。

「進ッ！」
「来るな！！」

立ち上がろうとする進に駆け寄ろうとするが、進の見幕に圧され、立ち止まってしまった。

「あああああ！！！！」

立ち上がると同時に、雅へと走り出し、固く拳を握る。

「この、しつこいわよ！！」

迫る拳を容易く躱わし、腹に木刀を叩き付ける。

「っ！」
「あんたじゃ、勝てないわよ！」

進の口から血が流れ落ちる。
戦闘の素人が、剣の師範代、しかも能力者に勝てる筈がない事は、進にもわかっていた筈だった。それでも、進は諦めない。
歯を食いしばって痛みに耐え、腹の木刀をもう一度掴む。

「何してんのよ。　諦めなさいよ！」
「諦めるかよ！！」

左手で木刀を掴んだまま、右手で雅の額を殴り付けた。

「！」

雅に痛みは無い。
それでも、雅は投げ出された様に後ろへ倒れ込んだ。
木刀はからからと音を立て、二人の手から離れる。

「確かに、俺は弱いし、役立たずで、何の取り柄もない普通の人間だ……それでも……」

拳を固く握り締め、絞り出す様に声を出したかと思えば、突然大声を上げた。

「それでも、お前をその苦しみから救ってやりたいと思ってる！！
嘘じゃない！！」
「！」

地面に座り込んだまま、驚きの表情を浮かべる。

「雅がどんな力を持っていようと俺は逃げない！雅が苦しがってるなら、俺が救ってやる！！」

「っ！！」

雅が見たもの、それはボロボロになりながらも、自分の異質な力に怯える事なく向かって来る少年の姿だった。

「はぁ……はぁ……うっ」

「進！！」

自分の気持ちを全て雅にぶつけたが、限界だった。

薄れゆく意識の中、美優の声を訊き、雅の悲痛な表情、そして、倒れる自分を支える漆黒の影が見えた。

「良く頑張ったな。進」

「優也！」

進を支える漆黒の影の招待、それは雅が探していた火渡優也、本人だった。

「ゆう……や？　もしかして、あんたが火渡優也？」

「ああ、そうだ」

突然の来訪者が、まさか自分の探していた人物だという事にも驚いたが、それ以前に、今意識を失っている少年が、全くの別人だったという事の方の驚きの方が強かった。

「全く、悪魔に取り付かれた奴等をやっと倒したと思えば、お前等は何やっんだ？」

「こ、これには色々と訳が……」

気絶した進をゆっくり寝かせ、美優に愚痴っぽく理由を尋ねる。
美優はどう言えば良いかわからず、あたふたしている。

「まぁ良い。　とりあえず、俺の友達に手を出した事、後悔させてやらないとな」
「っ……！」

優也に睨まれた瞬間、雅は駄目だと思った。
ただ睨まれただけで、感じ取ってしまった。
剣の腕も、戦闘経験も、全てが自分を越えている事に。

（けど、勝たなくちゃ……。　勝たないといけない！）

体全体に黒い影を纏い、一気に走り出し、優也に木刀を振り下ろす。
その瞬間、視界が反転した。
気が付いた時には、地面に横たわっていた。

「なっ！！」
「止めろ。　今のお前じゃ俺には勝てない」

そんな事言われなくとも雅には理解出来た。
今の優也の動きが全く見えなかったからだ。
それだけで、かなりの力の差を思い知らされた。

「う、うるさい！　どれだけ力の差があっても、勝たなくちゃならないのよ！！」

激昂する雅だが、足で木刀を踏みつけられ、木刀を振るう事が出来

ない。
それでも何とかしようとするが、どうすれば良いか、どうすればこの少年を倒せるか、自分がしている事は正しいのか、色んな事を考えてしまい、思考が定まらない。

「お前、何でそこまで……！」

突然、悪寒が走った。
そう思った瞬間、とてつもない圧力が、この場を支配した。

「な、何……これ……」
「こいつじゃない！これは……！」
「何をしている。　雅よ」
「っ……！」

空から声が響くと、直ぐ様刀を抜き、空を見上げる。

「何だ……お前」

見上げた先には、耳は尖り、褐色の肌に黒いマントを纏い、額に目がある男が空に浮いていた。

「フンッ、折角だから名乗っておこう」

男はゆっくりと降りていき、地面に降り立った。

「我が名はバロール。　覚えておけ、人間共」

第３４話　現れし魔王（後書き）

漆黒
「申し訳ありませんでした！！（土下座）」
優也
「今回は随分と遅かったな。どうした？」
漆黒
「簡単に言えば、テスト終わって怠けてました。ゲームしたり、色々と」
優也
「程々にしろよ」
漆黒
「はい……」
進
「それはそうとさぁ、俺、あんま活躍してないよな。逃げてばっかだったし」
優也
「それくらいまだ良いだろ。俺なんて最後に一瞬出ただけだぞ」
進
「……ごめん」
漆黒
「まぁ確かに、活躍したかしてないかと言えば、活躍したとは言い難いけど、これから進が活躍する為に重要な話だったよ」
進
「マジでか。これから活躍すんのかよ！」
漆黒
「まぁ信じなさい。それじゃあ最後にもう一度、遅くなって申し訳ありません。次回からは頑張って一週間以内に更新出来る様に頑張ります」

進
「どうかこれからもよろしくお願いします」
優也
「また次回」

次回
第３５話　堕ちる不死鳥

優也
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第３５話　堕ちる不死鳥（前書き）

今年最後に、何とか更新出来ました。
でも、短いです。

第３５話　堕ちる不死鳥

「バロールだと！？」

目の前に現れた男の名前を訊き、優也は驚きを隠せない。

「優也、バロールって……」

今までの悪魔とは違う気配を感じ、顔を青ざめ、冷や汗を欠いていた。

「魔王だ……。しかも、かなり上級のな」

「魔王……」

刀を強く握り締め、いつも以上に警戒を強める。

ここまで相手を警戒している優也を見るのは、初めて見る。

目の前の男、魔王がとてつもない力を持っているのは、美優自身もわかっていた。

「……雅」

「は、はい！」

警戒をしている優也が見えていないのか、呆けている雅へ視線を伸ばす。

突如話し掛けられた雅は、声を上擦らせる。

「お前の任務は火渡優也の戦闘能力がどの様な物か調べる事、何を遊んでいる？」

「あ、あの……その……私の任務って……火渡優也を倒す事じゃ……」

雅の言葉を訊いた瞬間、バロールは沈黙する。

「え、違って……ました？」

どうやら、火渡優也の戦闘能力を調べろと言う命令を、火渡優也を倒せと履き違えた様だ。

「まぁ良い。直に見ればわかる事だ」

両の瞳と額の瞳を、雅から刀を構えている優也へと向ける。

突然、視線を向けられ、警戒を強める。

「ほう、人間の子としては中々だ。だが……所詮、人間か」

「「！！」」

その場の圧力が一気に強まり、美優は座り込んでしまう。

その圧力のせいで、味方の筈の雅も、立ち竦んでしまっていた。

その圧力の中、優也は動いた。

第３５話　堕ちる不死鳥

この場に居る者達が身動きを封じられている中、優也はバロールに向かって駆け出した。
出方を伺う事や、敵の能力がどんな物か確かめる事を無視した、全力の一閃を放つ。
バロールは軽く後ろに退き、その一閃を容易く躱わす。

「っ、“斬炎弾”」

それを追撃する様に炎の斬撃を放つ。
至近距離で放つ事によって、斬撃の威力が強まり、バロールに襲い掛かるが、片手でなぎ払われた。

「なっ……」
「か、片手……で……」

二人の顔が驚愕の色に染まる。
バロールの味方である雅でさえ、驚きを隠せていなかった。

「所詮は人間」
「！！」

バロールは掌から、黒い電撃の様な物を、優也に向かって放つ。
優也は刀で電撃を受け止める。

「ぐっ！」
「何処を見ている？」

まだまだ続く電撃での攻撃を、精一杯刀で受け止めている瞬間、後ろから声が訊こえた。
声が訊こえたかと思えば、背中に強い衝撃が走る。

「っ！！」

突然の衝撃に吹き飛ばされ、優也は地面に倒れ込むが、すぐに立ち上がり、自分を襲った衝撃の正体を確かめようと、攻撃が来た方向を見る。
そこには手に黒い影を纏った、バロールが佇んでいた。

「いつの間に…！」

防御していたからと言って、バロールから意識を逸らした訳ではない。
それなのに、何故かこうも容易く後ろを取られてしまった。

「呆けている暇があるとは、余裕だな」
「！？」

優也が体勢を整えるよりも速く、先端に大きな宝石が付いた杖を持ったバロールが、目の前に居た。
黒い影が、杖に集中し、そのまま優也に振り下ろした。

「くっ！」

何とか反応し、刀で杖を受け止める。

（こいつ……また！）
「フン、受け止めるだけで精一杯か」

また、簡単に接近を許してしまった。
さっきは、防御をしている間に後ろに回り込まれた。

だが今回は、目の前に居た男が一瞬の内に距離を詰めて来たのだ。
優也は後ろに飛び、一度間合いを空ける。

（速くはない。それでも間合いに入られる。それがこいつの能力だとすれば、こいつの能力は瞬間移動……）

気が付けば後ろや目の前に現れる。
その事から、バロールの能力が瞬間移動だと、優也は考える。

「我の能力が瞬間移動だとでも思っているな？違う」
「えっ……」

バロールは優也の考えを読んでいたらしく、その考えを否定する。

「お前は我が魔力に気圧されたのだ。そこに僅かな隙が生まれた」
「まさか…意識の裏を……」
「長年魔王をしているのだぞ。これぐらい出来なくてどうする」

やられた！　優也はそう思った。
バロールの接近に、もっと早く気付いていれば、もう少し何とか出来ていた筈だと。
刀に巨大な炎が灯る。

「（長期戦は不利。一撃で決める！）“炎帝”！」

言葉と共に、優也の体に炎がまとわり、朱雀の姿になる。
その時、バロールの額の眼が一瞬光った。

「“鳳凰激”！！」

刀から放たれた巨大な炎が、バロールへと襲い掛かる。
バロールは杖を前に突き出し、結界を作り出す。
その結界事、炎はバロールを呑み込む。

「やった！」

その光景を見て、美優はバロールを倒したと思い、優也に駆け寄る。

（何だ？この感じ、体が……重い？）
（いや……まだだ！これくらいであの人がやられるわけない！）

美優が優也に駆け寄る中、優也は体の異変を感じ、雅はまだバロールが負けていないと思っていた。

「！！」

優也へと駆け寄る最中、美優は悪寒を感じた。
その悪寒の発信源は、優也の炎が残る場所、いや、バロールが居る場所からだった。

「優也！逃げて！！」

美優が声を上げた瞬間、炎の中から黒い影が飛び出し、優也の右肩を貫いた。

「グッ……！」
「優也！？」

肩を貫かれ、右腕がぶらりと垂れ下がる。
そんな優也を見て、美優は違和感を感じる。

今の攻撃、優也なら完全に躱わす事は出来なくとも、かすらせる程度で済ませる事が出来た筈だ。
それをしなかった。
いや、出来なかった。

「もう終わりか？」
「！」

肩を抑えている優也の隣から、バロールの声が訊こえた。
バロールは杖を振り下ろす。
それを、優也はぎこちない動きで受け止める。

「どうした？動きが鈍くなっているぞ！」
「ガッ……！」

杖で攻撃をしている状態から、優也の腹を蹴り上げる。
そして、浮き上がった優也に向かって、杖から衝撃波を放つ。
その衝撃波をまともに喰らい、優也は壁に叩き付けられる。

「げほっ！（何だ！？体が思った様に動かない……）」

何とか立ち上がろうとするが、ダメージのせいで上手く立ち上がる事が出来ない。

「優也！」

美優は走り出す。
力になれずとも、ジッとしていられなかったのだ。

「ば、来るな！！」

「ほう、お前が天使の娘か」
「キャッ！」
突然、目の前にバロールが現れたかと思えば、手首を掴まれてしまった。
「は、放して！！」
手を振りほどこうとするが、ビクともしない。
「成る程、これ程の力を秘めているのなら、役にはたちそうだ」
まるで品定めしている様な視線で、美優を見る。
「そいつを、放せ！！」
炎の翼を羽ばたかせ、高速でバロールへと向かって行く。
高速なのは高速なのだが、普段に比べれば、全くスピードが出ていなかった。
「くっ、おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」
自由に動かない体を、力の限り動かし、バロールに斬り掛かる。
「無駄だ」
額の眼を優也に向けると、額の眼が薄く光った。
その瞬間、優也の動きが更に鈍った。
（まさか…あの額の眼の力で、俺の動きを……！）

気付いた時にはもう遅かった。
バロールの杖が優也の腹に突き刺さった。

「ガハッ……！」
美優
「っ……」

杖が優也の腹から引き抜かれると、優也の体に纏った炎は消えていき、優也はゆっくり崩れ落ちていく。

「優也ァ！！！」

その場に、美優の悲痛な叫び声が響いた。

第３５話　堕ちる不死鳥（後書き）

漆黒
「何とか出来たね～」
優也
「…あれだけ時間を掛けて、これは短くないか？」
漆黒
「……だらけだね」
優也
「何か言い返せよ」
漆黒
「え～……話が進まないからタイトルコールお願い」
優也
「はぁ、全く……」

次回
第３６話　神の任務
優也
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

漆黒
「皆様良いお年を！」
優也
「また来年な」

第３６話　神の任務

「優也！優也ァ！！」

美優は何度も何度も、優也の名前を叫ぶ。
だが、優也はその叫びに答える事は無く、ただただ血が流れているだけ。

「……呼んでも無駄だ。もう死んでいる」

その言葉に、美優の顔が絶望の色に染まる。
信じたくない、信じたくないのに、優也から止めどなく流れる血が、真実だと物語っている。
美優はもう言葉も出せず、呆然と優也を見る事しか出来なかった。

「行くぞ」
「は、はい……」

そんな美優も、自分が倒した優也にも目もくれず、美優を連れていこうとする。
雅は、何処かぎこちない返事を返し、バロールの元へと走る。
その際、横目で倒れている進を一度見たが、すぐに目を逸らした。
バロールは歩き出そうと、足を一歩踏み出した。
だが、次の一歩を踏み出す事は出来なかった。
ズボンの裾を誰かに掴まれ、足を動かせないでいたのだ。

「なっ……」
「ゆ、優也……」
「はぁ……はぁ……」

バロールの動きを止めている人物、バロールの力の前に敗れた優也だった。

「ま…て……！」

息も絶え絶えで、見るからに瀕死の状態だった。

「放せ」

「……死んでも…放すか…」

その時、バロールの目付きが更に鋭い物へと変わる。

「ならば……」

「！！」

すっと、バロールは杖を上げると、その杖に、黒い影がまとわりつく。

それを見た美優は、力の限り叫んだ。

「やめてェ！！！」

その叫びは、魔王に届く筈もなかった。

「死ね」

無情にも、黒い影を纏った杖を、何の迷いもなく、優也へと振り下ろされた。

美優は目を瞑り、これから起こるであろう惨劇から、目を逸らした。

バチッと、電気が走る様な音がした。

肉が切り裂かれる音ではなく、電気が走る音。
今までなら、その音の正体が全くわからなかったが、何故だろうか、今は何となくわかる。
雅やバロールが操っていた黒い影。
バロールは魔力と言っていただろうか。
魔力と、霊力や妖力が、直接ぶつかり合った様な音だと、何となく感覚でわかった。
何が起こったのか確かめる為、美優は恐る恐る目を開いた。

「え…？」

目を疑った。
優也は生きている。
トドメを刺されてはいなく、バロールの攻撃を止めてもない。
目を閉じる前と同じ体勢で、優也はそこに生きていた。
だが、目を疑ったのはそこでは無い。
優也を守る様に前に立ち、バロールの攻撃を片手で受け止めている人物にだ。
その人物は、仁や九妖と同じ金髪だが、二人とは違い、神々しいまでの美しい髪を持ち、あどけない表情の、バロールの腰程しかない身長の、『五歳児程の子供』だった。

「！貴様……」

ここで初めて、バロールの表情が驚きに変わる。
優也も同じ様に、驚きに満ちた表情をしていた。

「カイさん……」

小さく呟いたその名前に、美優は聞き覚えがあった。

過去に、身寄りもない優也達の世話をしてくれた人の名を。

「久し振りだね～。優也君♪そして、バロール」

少年と言うには、まだ幼い子供は笑った。
子供の様で、子供とは思えない笑みを。

第３６話　神の任務

美優を捕らえたまま、バロールは後ろへと飛ぶ。

「きゃあっ！！」

「あ～あ、逃げなかったらすぐに終わってたのにな～」

残念そうに呟くカイの手は、純白に、神秘的に輝いていた。
純白に輝くその手で、バロールに攻撃をしようとしていたのだろう。
それにバロールは気付き、攻撃される前に距離を取ったのだ。

「随分とみすぼらし姿になった物だな。天界の武神の名が泣くぞ」
「やだな～、僕は一度も武神何て名乗った覚えはないよ～。僕は元々、武の神じゃないしね」
「ほう……！？」

小さな子供の姿が、まるで初めからそこに居なかったかの様に消える。
バロールは目を見開き、杖を突き出し、自分を守る様に結界を張る。
そして、突然目の前の現れた子供の拳による突きを、受け止めた。

「今は、ただのカイだよ。適当に考えた名前だけどね」
「フン、腐っても神か……」

少しの言葉を交わすと、バロールは再び距離を取った。
薄れゆく意識の中、優也はその攻防を見て驚いた。

（カイさんの動きが…全く見えなかった！）

優也自身、戦争の中で生きてきた事で、戦闘に関しては自信はあった。
だが、今のカイの動きを見て、次元の違いを思い知らさせた。

「……雅」
「は、はい！」

バロールは雅を呼ぶと、額の眼で美優を睨み付けた。
その瞬間、美優は糸が切れた人形の様に、体をバロールに預け、眠ってしまった。

「この娘を見ていろ」
「……はい」

眠った美優を雅に預け、バロールはカイへと向き合う。

「美優？美優！！」

眠ってしまった美優を、何度も呼ぶが、美優は全く反応しない。

「この娘は貰っていく」

まるで勝ち誇った様な表情を浮かべ、カイを睨み付ける。

「やっぱりその娘が狙いだったんだね。でも、逃げられると思ってるの？」

「舐めるな。確かに我の力は衰えた。だが、それは貴様も同じだろ？元の姿を保てぬほどにな」

「……」

バロールは杖をカイに向ける。

「今の貴様など、我が本気を出せば、勝つ事など容易い」

「……君が、僕に勝つ？」

バロールの言葉に、カイの口元がつり上がった。

「寝言は寝て言えよ。小僧」

「！！」

先程までとは、まるで別人の様な声を訊き、バロールは悟った。

勝てない、次元が違い過ぎると。

その後の、バロールの行動は早かった。

杖を振るい、カイの視界を覆う程の、巨大な黒い影を放った。

「目眩ましのつもり？」

カイは軽く手を振るい、黒い影を跡形もなく掻き消した。

「悪い子にはお仕置きしない…と……え？」

黒い影を晴らした先に居るバロールを、一瞬で倒し、美優を奪還しようとしたが、そのどちらも出来なかった。
その場にバロール達が居なかったからだ。
残っていたのは、薄黒く光る魔法陣だけ。

「転移魔法……。初めから準備してたのか。前はこんな物使えなかったのに……。小賢しい」

薄く光っていた魔法陣が、完全に消えると、カイは優也へと目線を移す。
気力の限界だったのだろうか、優也は完全に意識を失っていた。

「バロールを追うより、優也君の治療が先か」

優也の元へと歩み寄り、カイはしゃがみこみ、言った。

「……六年前よりも弱くなったとは言え、バロールは今の、黒夜叉じゃない君よりも強い。だから、早く気付いてね。君の…朱雀とは違う、本当の力に」

『目的は達成した。帰還しろ』

「！」

龍と対峙していた悪魔に、バロールの声が届く。
悪魔はその声を訊いた瞬間、近くの民家の屋根に飛び上がった。
そして、龍達を見下ろす形で、虎牙に言い放った。

「そこのツンツン頭の人間、良く訊いとけ。俺の名はグランツ。次に会う時は殺すぜ」

悪魔、グランツはそう言い残し、何処かへと消えていった。

「お、追わなくても良いんですか……」
「深追いする必要は無い。こっちは怪我人が二人も居るからな」

龍のその言葉に、総司は少し驚く。
あのグランツと名乗った悪魔が逃げた時、自分達の事など気にもせず、追い掛けると思っていたからだ。
意外と良いところもあるんですねと、思っていたが。

「にしても、あの野郎。最後の最後に俺を高い所から見下しやがって……。次は絶対殺す」

前言撤回、やっぱり龍は龍だった。

―全く…何をしてるの？―

誰だ？

―私が誰だなんて今は関係ないよ。君は一体何をしてるの？―

何の事だ？

―君はあの娘を守るって言ったよね。それなのに、魔王に負けて、今はベッドの上―

……

―まぁ良いや。時間が無いから単刀直入に言うよ。強くなりたかったら、もう一度ここに来て。これから先、もっと辛い事があっても良いのならね―

どういう意味だ？

―もう時間だよ。またね―

おい！待て！！

「あら、目が覚めた？」

「……」

そこで、優也は目が覚めた。

それと同時に、女性の声が訊こえたので、首だけその方向に向けると、白衣を着た、背中まであるオレンジ色の髪を、一つに纏めている女性が居た。

「彩夏さん？……ここは？」

「貴方達が勝手に使ってる病院よ。ナミ、優也が目を覚ました事を伝えて来てくれないかしら？」
「はい」

彩夏の言葉を訊き、ナミと呼ばれた肩まである白い髪の少女は部屋から出ていった。
その際、頭に白い耳、そして尻尾が見えた。

「……妖怪？」
「私の助手よ。可愛いでしょ」

彩夏は自慢気に、ナミの事を話す。

「それより、何で俺はここに？」
「カイさんが運んでくれたのよ。覚えてない？」
「カイさんが……そうだ！！」

彩夏の言葉に、優也は全て思い出した。
魔王バロールに負けた事、カイが助けに来た事、そして、美優を連れ去られた事。
美優を連れ去られ、居てもたっても居られなくなった優也は、起き上がろうとするが、傷の痛みで起き上がる事が出来なかった。

「っ……」
「無理は止めなさい！傷は塞がったけど、まだ完治はしてないのよ」
「でも…美優が……」
「その事を、今から話すんだよ」

ナミが出ていった扉から、カイが入ってきた。
その後ろには、さっき出ていったナミ、そして薫、進、仁、正、流

香、優花、龍も居た。

「カイさん。皆……」

カイは、優也の寝ているベッドの隣の椅子に座る。

「カイさん、バロールの目的は何なんですか？何で美優を……」

「まずはバロールの事から話そうか。皆も良く訊いてね」

カイはニコニコしながら、全員を見渡す。

その表情に、美優を連れ去られ、焦りを隠せなかった、優也、進、薫、優花の、心の焦りは消えてしまった。

それもカイの力なのか、カイ自身の醸し出す雰囲気による物かはわからない。

「バロール、彼は過去に悪魔の軍勢を率いて、人間界に攻め行ったんだ。四聖獣が護る結界が弱まった一瞬を狙ってね」

「過去の……八年前のか……」

八年前と言えば、優也達が人間の戦争に参加する前に起こった、様々な種族が争った戦争の事を示しているのだろう。

「ご名答、流石仁君。別にその時人間界に攻め行ったのは悪魔だけじゃないよ。ただ、一番最初に攻めて来たのが悪魔だったんだよ。勿論、急に来た悪魔に、何の準備もしていない人間達が敵う筈もない。だから僕が仲間を連れて悪魔達と対抗したんだ。元々、悪魔と戦うのは神の役目だからね」

今までのカイの会話を訊いていれば、気付いた人もいるだろうが、見た目は五歳児でも、カイは何千年も生きている神なのだ。

だが今は、その事を話している時間が無いので、またの機会に話す事になるだろう。

「その時、バロールを倒して魔界の端へと追いやり、人間達に力を与えたんだよ」

「つまり、バロールの目的は……」

「あんたや、人間達への復讐ってとこッスか」

流香と正が、バロールの目的を言い、カイは黙って頷く。

「なら、何で美優ちゃんを連れ去ったんですか……」

すると、今まで黙っていた薫が、今にも泣きそうな表情で、カイに問いただした。

「……彼女、神道美優ちゃんには、ある力がある。皆も気付いてるでしょ」

「美優が垂れ流している霊気の様な物ですか？」

「本当に霊気なのか怪しいがな……」

探知能力が低い優也ですら気付く程の、霊気を美優は内に秘めているのだが、その霊気は、霊気の様で霊気ではない様な感覚をしていた。

「彼女のあれは霊気だよ。ただし……」

「神気が混ざったな」

「神気？」

聞き慣れない単語に、疑問符を上げる。

「文字通り神の気だ。人間なら霊気、妖怪や俺達みたいな聖獣を身に宿した人間は妖気、今回の悪魔が使ったのは魔力、そして神や天使が使うのは神気だ。分かったか」
「な、何とか……。って、それじゃあ！！」
さっきの龍の言葉と、仁の説明で進は気が付いた。
「彼女の力。それは天使の力だよ」
「天使……」
美優の名前を訊く度に泣きそうになるが、グッと我慢しながら、カイの話を訊く。
「これで奴が何を狙いで神道を狙ったのか分かったな」
「ええ……」
「うん……」
仁と流香と優花は、バロールが何故美優を連れ去ったのか分かったらしく、仁はカイにバロールの目的を言った。
「バロールの狙いは人間界への進行。そして、神道美優の堕天使化」
「堕天使……化？」
「……」
仁の言葉に、薫は驚き、優也は黙ったまま俯いていた。
「堕天使化って…何だよ……」
「神の使いである天使を、悪魔と同一の存在に変える事よ」
「なっ！！」

悪魔と同一の存在と言う言葉に、進は驚く。

「これは僕のミスだよ。彼女の力の事は知ってたのに、様子を見てしまった……。もっと早く、対策を講じていれば、こんな事にはならなかったのに……」

「優也！！」

優也はベッドから降り立った。

その際、傷の痛みでふらつき、優花に支えてもらった。

「何処に行くつもり！？さっきも言ったけど、貴方の傷は塞がっただけで、まだ完治はしてないのよ！」

立ち上がり、刀を持って病室を出て行こうとする優也を、彩夏は引き留め様とする。

「カイさん、バロールの居場所は分かりますか？」

「訊いてどうするの？」

「美優を助けに」

その言葉に、カイは椅子に座ったまま、優也を見上げる。

「君が彼女を助ける理由はないよ。それでも行くの？」

「俺はあいつを守るって約束した……。だから助けに行きます」

「……」

カイは少し沈黙した後、椅子から降り、言い放った。

「火渡優也、雷道仁、風魔正、黒城流香。君達四人に魔王バロールの討伐、神道美優の奪還を命じる」

カイの、神の命令を四人に命じた。

「最優先事項は？」

「神道美優の奪還を最優先。神道美優を奪還し、バロールに勝てないと僅かでも感じれば帰還を許す」

「了解」

「あ、あの！」

薫は声を上げ、カイに言った。

「私も行かせて下さい！」

薫は自分自身を責めていた。

優也と進、彪牙や総司が悪魔と戦い、美優を拐われた時、自分はその場に居なかった事を。

「君はここに居てもらう」

「どうして！？」

「バロールの居る場所が問題だからだよ」

カイを代弁するかの様に、優花が話す。

「バロールの居る場所は魔界の端。その土地には、魔界特有の瘴気が特に強く充満してるの。その土地に人間が踏み入れば、すぐに動く事が出来なくなるわ。そこに人間が行くには、聖獣を従え、瘴気を掻き消すか、瘴気を打ち消す程の霊気を纏うか……」

「瘴気に耐えられる程の肉体を手に入れるかだ。お前はその条件に達していない。行っても無駄だ」

「で、でも……」

その時、正が薫の肩に手を置いた。

「大丈夫だ。俺達が必ず神道を連れて帰ってくる。だから、お前はここで待っててくれ」

「正さん……」

カイは薫の元へと歩き、言った。

「隣の部屋で寝てる、鋼鎧寺彪牙君の肉体なら瘴気にもある程度耐えられるし、霧藤総司君も能力を使えば、瘴気に耐える事も出来る。でも、彼等を優也君達に同行させる事はさせなかったよ。それは君達が一般人だから、君達にはまだ、優也君達と同じ様な戦いをして欲しくないんだ。だから、君はここで皆の帰りを待ってほしいんだ」

「……」

それを訊いても、薫はまだ浮かない顔をしている。

「薫。俺達を信用して、待っててくれ。絶対生きて帰ってくるから」

正は真剣な表情で、薫の目を見詰める。

その真剣な目を見て、薫は正や、優也達を見て、意を決した様に言う。

「分かりました。ここで皆の帰りを待ちます。だから、絶対に返って来て下さい。美優ちゃんと一緒に……」

薫は目に涙を溜め、この場の全員に頼んだ。

「ああ、任せろ」

正も優しい、穏やかな表情で、薫の願いを聞き入れた。

「場所は龍君に案内させる。三十分後に、外に集合。良いね」
「「はい」」
「ああ」
「わかった」
「じゃ、かいさ～ん」

カイの気の抜けた声と共に、優也達は各々の準備を始めた。

「優也、来なさい。ギリギリまで治療するわよ」
「はい」
「私も行くよ」

優也は傷の治療の為、彩夏に連れていかれ、優花と助手であるナミは後ろから着いていった。

「私は一度帰るわ。あんた達はどうする？」
「煙草吸う」
「ちょっくら走って来るわ」
「はぁ、勝手にしなさい……」

流香は家に戻り、仁と正は自分のしたい事をやり始める。

「私は、彪牙さん達を見て来ます。進君は？」
「……外の空気吸ってくる」

薫は彪牙達の御見舞いに、進は暗い顔で外に向かった。
全員が出ていき、部屋には龍とカイだけとなった。

「……まだ…ねぇ。いつかは本格的に、優也達と一緒に戦わせるつもりですよね」
「……本当はしたくないんだけど、もう遅いからね」
カイは再び、椅子に座り直す。
「優也君がこの世に生まれた時から、この物語は動き出しているからね。あの子達の物語も……」
「……優也があいつの声を聞こえる様になったんじゃないですか？優也からあの力の一部を感じた」
「むぅ、分かってたんだ。話を変えるのは感心しないけど」
「別に良いだろ」
「敬語で話すか、タメ口で話すか、はっきりしてよ～」
カイは頬を膨らまし、龍を睨み付けるが全く怖くない。
「で？俺にも何かあるんじゃないですか？神の任務が」
「やな性格になったね～、まぁ良いや」
カイは両手を顔の前で合わせ、年相応な表情で言った。
「お願い事があるんだ～」

第３６話　神の任務（後書き）

漆黒
「明けましておめでとうございます」
優也
「……遅いだろ」
カイ
「まぁまぁ優也君。新年初めの更新なんだからさぁ～」
漆黒
「流石カイさん！自称神ってだけはある～」
カイ
「えへへ～、で？自称ってどういう意味？」
漆黒
「そのまんまの意味」
カイ
「僕は自称じゃなく本当に神だよ～。説明省くしさぁ～、怒るよ～」
漆黒
「え、笑顔が怖いです！優也、助けて！」
優也
「自業自得だ」
カイ
「冗談は置いといて、読者の皆さん、いつも優也君達がお世話になってます。今年もどうか、『黒と白の物語』を宜しくお願いします」
優也
「出来るだけ更新は早くするようにする」
漆黒
「ご感想お願いします！！」

次回
第３７話　魔界の戦い
カイ
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第37話　魔界の戦い

「ここが、魔界の入口？」
「こんな所にあるんだな……」

とある廃ビルの一室。
優也、進、薫、仁、正、流香、龍、優花、カイが集まっていた。
その一室の床を剥がすと、赤、青、緑と言った、様々な色が混ざりあった様な異様な空間が、そこにはあった。

「結界に空いた穴がこの程度だから良いけど、もっと広がれば魔物が人間界になだれ込んでしまう。彼女を助け出し、君達が戻って来たらすぐに結界を修復するよ」
「だが、この結界はあんたが張った結界じゃない。他人の結界に手を加えられるのか？」

人間界と、魔界と言った外界を遮るこの結界は、優也の朱雀、正の白虎と言った四聖獣が管理している結界であって、カイが管理している結界ではない。
いくら神であるカイであっても、四聖獣の、しかも人間界を覆うほど巨大な結界を、そっくりそのまま、一人で張る事は難しいのではないかと、仁は思っていた。

「この結界を新しく創り変える訳じゃないよ。ただ穴を塞ぐだけだよ」
「ただ塞ぐって言っても、そんな事短時間で出来るのはあんた位なもんだけどな」

龍は何処かうんざりした様な表情を浮かべていた。

「さっさと行くぜ。時間がねぇんだしな」
「ちょっ、正!?」
流香の制止も訊かず、正は魔界の入口へと飛び込んだ。
「全く……」
ため息を吐きつつ、正を追い掛ける様に、仁が魔界へと飛び込む。
「何で先々行くのかしら……」
「俺達も行くぞ」
「優也君……」
魔界へと入ろうとする優也達を、薫が引き止めた。
「美優ちゃんを……お願いします」
薫は真っ直ぐ、優也を見つめて言った。
「……俺達が美優を助けて帰って来た時、敬語を止めろよ」
「!は、はい!!」
薫の返事を訊くと、優也と流香は魔界へと飛び込んだ。
「さてと、穴を塞ぐ準備をしておかないとね」
「カイ…さん?訊きたい事があるんですけど……」
「敬語じゃなくて良いよ。で?訊きたい事って何?」
その場に居る皆の視線が、進に集まる。

「バロールと一緒に居たあの娘、東条雅の事……何か知りませんか？」

進が知りたかった事、それは雅の事だ。
雅が使っていたあの力、あれは間違いなく悪魔の力だった。
だからと言って、あの時、あんな事を進に言う必要は無いし、何より、雅があんな嘘をつくとは思えなかった。

「彼女、東条雅ちゃんは悪魔の力を持って生まれた人間だよ」
「美優と同じ……」
「……二人の共通点は、人間でありながら天使や悪魔の力を身に宿している事。でもちょっと違うのが、美優ちゃんと違って、雅ちゃんは悪魔の力を、幼い頃から使えた事」
「！」

進は、雅と対決した時の事を思い出す。
あの時雅は言った。
この力のせいでどれだけ苦しんだか、はっきりそう言っていた。

「僕が知ってるのはこれくらいかな。もしバロールが雅ちゃんに接触している事を知ってたら、こんな事にはならなかったしね……」

カイは少し表情を曇らせるが、すぐにニコニコした表情に戻る。

「さ、ここに居たらいつ魔物が出て来るか分からないから、皆は帰ろっか」

パンパンと手を叩き、帰る様に促すが、優花は動こうとしなかった。

「優花ちゃん？」
「私はここで待ってます」
優花は穴を静かに見つめる。
「今、私に出来るのは優也達を信じて待つ事。だから、私はここで待ち続けます」
「私も……ここで待ちます！」
優花の言葉を訊き、薫も優花と一緒に待つ事を決める。
「そう。じゃあ一緒に待とうか♪」
カイは横目で龍に目線を送りながら、床に座り込む。
龍はその目線に気付くと、部屋から出ていった。
「ったく、面倒くさい」
悪態をつきながら、廃ビルから出る。
「おい」
廃ビルから出たと同時に、追い掛けてきた進に呼び止められた。
「何の用だ」
ゆっくり進へと振り返り、質問を投げ掛ける。
「覚悟は……出来た！」

そう言った進の目は、以前とは違い、強い覚悟が見てとれた。

「……ついてこい」

それだけ言うと、龍は早足で何処かへ歩き出す。

「お、おう！」

ついてこいと言われ、進は走って龍を追い掛けていった。

「総司、起きてっか？」

「君より軽傷で、起きてない筈がないでしょう」

優也達が魔界へ向かっている頃、彪牙達は病室で目を覚ました。

「負けたんだな……」

「……ええ」

ベッドに寝転び、天井を真っ直ぐ見たまま、彪牙は呟く。

「優也に負けた時とは違うな。悔しさが……」

「……」

総司は何も訊かず、静かに彪牙の話を訊く。

何が悔しいなど、訊く必要はないからだ。

優也と戦った時、彪牙には守るモノが無かった。

だが、今回は違う。

今回、彪牙は自分を守る為に戦ってくれた。
自惚れだと分かっているが、今の彪牙は自分の過去から逃げる為ではなく、誰かを守る為に戦っていると分かっている。
それでも、グランツと名乗る悪魔に勝つ事は出来なかった。
守るモノが無い時と、有る時とでは、背負っているモノが違う為、悔しい気持ちも強くなる。

「なぁ、総司」
「何ですか？」

彪牙はゆっくりベッドから立ち上がり、総司はベッドに寝転んだまま、返事をする。

「敗けっぱなしで終わる訳ねぇよな」
「当たり前じゃないですか」

二人は顔を見合わせ、静かに笑った。
優也達が魔界に向かっている頃、人間界に残った彼等も、それぞれの想いを胸に、動き出した。

第３７話　魔界の戦い

進は龍に連れられ、森の中を歩いていた。
結構な距離を歩いたのに、まだ歩く龍に、何処まで行くのかと訊い

ても、沈黙しか帰って来ない為、何も訊かずに歩く事にした。
黙って歩き続けると、洞窟へと辿り着いた。

「入るぞ」

龍は洞窟の中へ入っていき、進も洞窟へと入る。
少し進むと、広く開けた場所に辿り着く。
そこには泉があり、泉の真ん中には、小さな祠があった。

「起きろ。青龍！」

少し張り上げた龍の声が、洞窟内に響き渡る。
すると、泉の水が祠を中心に逆巻き、水の中から巨大な青い龍が現れた。

「で、デカっ！！」

あまりの大きさに、進は驚いて大声で叫んでしまう。

「ほぉ、懐かしい顔だ。月臣よ、何の用だ？そこの人間を喰わせてもらえるのか？」
「こいつは俺の暇潰しの為の玩具だ」
「いやいやいや！？食料じゃねぇし！玩具でもねぇし！！」

一人と一体のとんでも発言に、進は首を横に振り、否定する。

「冗談は置いといて」
「お前が言うと冗談に聞こえないんだよ！！」

早くもここに来た事を後悔する進であった。

「水野進。今からお前には、青龍と契約してもらう」
「契約？」
「簡単に言えば、優也達と同じ力を使える様になるって事だ」
「ほ、本当か！！」
こんなにも簡単に、戦う力を手に入れられるとは思わなかった為、進は驚いた。
「簡単に力が手に入ると思うな。普通に契約すれば、三日は掛かる。早くても一日だ」
「はぁ！？そんな時間なんて無い……うおっ！！」
進が龍に突っ掛かろうとしたが、龍に泉の中へ突き飛ばされた。
「ぶはぁっ！な、何すんだ！！」
泉は大して深くなく、何とか立つ事が出来た。
泉から這い上がろうとした瞬間、青き龍、青龍が進の周りを取り巻き、行く手を塞ぐ。
「な、何だよ！！」
「時間が無い。だから荒療治だ」
その瞬間、祠が青く光る。
「普通にやれば三日掛かる契約を、一時間に短縮する。だがその代わり、お前には地獄を見せる」
進の周りを取り巻いていた青龍が、龍の言葉と共に、進の体へと入

っていった。

「なっ！？」

突然の事に驚くが、すぐに驚く暇は無くなった。

「！？……がっは……あァ！」

体に異変が現れる。

体中の肉や筋肉が引き裂かれる様な痛みに襲われる。

「アアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

喉が潰れそうな程の声で叫び、その声が洞窟の外まで響く。

苦痛のあまり進が叫んだ瞬間、進の体から青龍が抜け出る。

「はぁはぁはぁ！」

「一時間、その痛みに耐えてもらう」

苦しそうに息をする進に、何事も無かった様に話す龍。

龍が言っていた荒療治とはこう言う事だろう。

普通に契約すれば三日は掛かる。

だが、今の様に激痛を伴う契約なら、短時間で、力を手にする事が出来ると。

「お前の覚悟が本当なら、この地獄を切り抜けてみろ」

「はぁはぁ……上等だ！！」

龍の言葉に、進は顔を上げて言い放った。

「じゃあな」

龍は洞窟から出て行き、洞窟には進と青龍だけとなる。

「もう一度…もう一度頼む！」

「……その前に一つ訊かせてもらう」

青龍は進の眼前へと迫り、疑問を投げ掛ける。

「死にかけてまで、何故力を求める？お前を突き動かす覚悟とは何だ？」

ただの人間である進が、ここまでして力を手にしたい理由が知りたかった。

「……俺は、友達にいつも守られてた。あいつはそう言う奴だし、あいつが誰かを守りたいなら、それで良いと思ってた。でも、あいつの目の前で女の子が攫われたんだ。あいつはそれを自分のせいだって、守れなかったって、自分を責めてる……。その時気付いたんだ。俺はあいつに頼り過ぎてるって……。あいつばっかり苦しい思いして、俺はただ見てるだけ……そんなの、もう嫌なんだよ！俺もあいつと一緒に戦いたいんだ！！」

心に秘めた覚悟を、精一杯青龍に伝える。

「……力を手に入れたとしても、死ぬかも知れぬぞ？」

「死なねぇよ！どんな戦いだろうと、絶対に生きて皆の所に戻る！」

「……クックック、ハハハハハハハハ！！！」

進の覚悟を訊き、青龍は大声で笑いながら、天井近くまで飛び上がる。

「面白いぞ小僧！貴様の様な人間は何百年振りだろうな！良いだろう。貴様の覚悟に免じて、最期まで付き合ってやろう！！だが、後悔するなよ、小僧！」

「後悔する位なら最初っからこんな事しねぇよ！」

「そうか。ならば一時間後にまた会おう！」

「ああ！掛かってこい！！」

青龍は天井から一気に降下し、再び進の中へ入っていった。

「何でいきなり迷子になるのかしら……」

「仁も居ないしな……」

空は雲に覆われ、雷が鳴り続いている。

そんな魔界へと降り立った優也達だが、今は優也と流香しか居ない。

一番最初に魔界へと足を踏み入れた正は、どうせ迷子なんだろうと二人は知っていた。

何故なら、正はそう言う男だからだ。

仁はフラフラとしていると言う事も、二人は分かっていた。

付き合いが長いから分かる事だ。

余談だが、迷子になった正を、年下の優也が連れてきたり、何処か天然な仁を、流香が世話したりと、二人は苦労が絶えなかった。

「敵の本拠地で、フラフラするなよな……」

小さく、誰にも聞こえない様な声で呟いたが、吸血鬼の流香にはハッキリと聞こえていた。

「心配？」

「っ……心配な訳あるか」

優也は流香から目を逸らし、その様子を流香はニヤニヤして見ていた。

「仲が良いほど素直じゃないわね」

「うるさっ……ん？」

反論しようとした時、優也は建物を見付けた。

少し遠いが、ハッキリと見える程大きな屋敷だった。

「魔王なら城だろ」

「魔王にも色々あるんでしょ。主に金銭面に。それよりあれを見て」

流香が指を差した先には。

「いや、見えないんだけど」

「あら、ごめんなさい」

優也には見えなかった。

人間と吸血鬼の視力では、差がありすぎた。

これまた余談だが、仁の視力は流香並み、またはそれ以上に良いらしい。

「行ってみましょう」

「ああ」

二人は館の方角へと向かった。
館が大きい為、近く感じたが、実際は遠く、到着するまでに時間が掛かった。
館の前に到着し、二人が見たモノは、大量の魔物の死体だった。

「これ……」
「ええ、仁ね」

魔物の死体には焦げ後があり、中には体全体が焼け焦げ、焼死体にまでなっている魔物もいた。

「これを仁がやったって事は……」
「ここにバロールが居るかも……優也！」

次の瞬間、二人が居た場所に黒い雷が落ちる。
二人はいち早く反応し、雷を避けると同時に、辺りを警戒する。

「行きなさい下僕供！奴等を駆逐し、バロール様への手土産としなさい！！」

女の声がしたと思えば、辺りから魔物の群れが現れ、二人に襲い掛かる。

「来るわよ！」
「分かってる！行くぞ！」

二人は魔物の群れへ向かっていった。

「何処だここ？」

優也と流香が館の外で戦っている中、正はいつの間にか館の中に居た。

どうやら、魔界をさ迷っている内に、館の中に迷い込んでいたようだ。

まるで、何処かの海賊団の三刀流の剣士の様だ。

「早く神道を見付けねぇといけねぇのにな……。そんな所に居ないで、出てきたらどうだ？」

すると、長い廊下の曲がり角から、黒い短髪の、耳が尖った男が一人現れる。

「良く気付いたな。魔力は消していた筈だが……」

「音を訊くのが得意でな。で？誰だお前？」

「……ガドルだ」

ガドルと名乗った悪魔は、体に魔力を纏わせ、戦闘体制に入る。

「ガドルか。俺は……」

「言わなくても良い」

名乗ろうとする正を、手で制し止める。

「今から死ぬ人間の名前を覚えても意味は無い」

「ハッ、成る程」

正は二本の刀を鞘から抜き、ガドルへと斬り掛かる。
ガドルは魔力を高め、それを迎え撃った。
今、魔界での戦いが幕を上げた。

第37話　魔界の戦い（後書き）

漆黒
「いきなりですが、人気投票をしようと思います」
優也
「いきなりだな」
正
「絶対無理だろ」
仁
「票が集まらないのがオチだ」
漆黒
「そ、それでもやりたい！」
仁
「勝手にしろ」
漆黒
「そ、それじゃあ！投票方法ですが、感想、メッセージに好きなキャラの名前を書いて投票をお願いします」
優也
「一度の投票に十票投票してくれ」
仁
「十票を色んなキャラに投票してくれても良いし、二票でも三票でも、同じキャラに投票してくれても良いぞ」
正
「一回でも二回でも、何度でも投票してくれよ」
漆黒
「投票締め切りは、この長編が終わるまでにしようと思います。票が集まらなければ締め切りを延ばすかもしれません」
仁
「詳しい事が知りたいなら答える」

漆黒
「投票待ってます！」

次回
第３８話　狂気の風
正
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

優也
「にしても、十票は多すぎないか？」
漆黒
「いやぁさ、票が集まらないかも知れないし」
正
「自信ねぇのかよ」
仁
「馬鹿だな」

第３８話　狂気の風（前書き）

残酷な描写があります。
大丈夫だと言う方は、このままお進み下さい。

第３８話　狂気の風

優也は凄い。
千人以上殺しをすれば、殺人衝動と言う名の狂気を抑えるのは難しい。
だが優也は、優花のおかげとは言えあの狂気を抑え込んでる。
それに比べて俺はどうだ？
優也が殺しをやめる事を決意して、俺も殺しをしないって約束したのに、戦闘ではいつも殺しの事ばかり考えている。
やめる事が出来ない。
それこそ麻薬の様に。
今もそうだ。
また殺しの事ばかり。
それでも俺は、この白い髪を赤く染めるだろう。
メノマエノテキヲコロシテ。

第３８話　狂気の風

館の外、優也と流香は押し寄せる魔物の群れを相手にしていた。
優也は持ち前のスピードで、魔物の攻撃を躱わしながら魔物を斬り、流香は襲い掛かる魔物に蹴りを放ち、自分の血液で造り出した短剣を、右手で逆手に持ち、魔物を斬り裂いていく。
二人の足下には、多くの魔物が横たわっている。

だが、それでも魔物は溢れ出してくる。

「斬っても斬ってもキリがない！」

「魔界の端って言っても、やっぱり魔界って事ね……」

魔物の群れのせいで、二人は館に近付けないでいた。

（くそっ！こんな所で時間を使っている暇はないのに！）

中々館に近付けない事が、優也を焦らせる。

今こうしている間にも、美優に危険が迫っているかも知れないからだ。

「“鳳凰……」

「待ちなさい」

刀に炎を灯し、魔物を一度に倒そうとする優也を、流香が止めた。

「今ここで力を使い過ぎたら、バロールの相手が出来なくなるわ」

「っ、だからって、こんな所で時間を使ってる場合じゃないだろ！」

二人の言い分は、どちらも正しい。

今、力を使えば魔物を退ける事が出来るが、それだとバロールとの戦いの時に不利になる。

だが、力を温存して戦えば、魔物を倒すのに時間が掛かってしまう。

まだ館の中にさえ、足を踏み入れる事が出来ないのだから、力を使い、一気に敵を倒す事は良い考えではある。

「……良い考えがあるわ」

「良い考え……！？」

流香へと振り返った優也が見たモノは、瞳は赤く、八重歯は鋭く尖り、背中から赤い翼が生えた、流香の姿だった。

「こうするのよ」

赤い妖気が流香の体から溢れ出すと同時に、流香は持っていた血液の短剣を、空高く投げ上げた。

「“血の雨（ブラッディレイン）”」

短剣は勢い良く弾け、雨の如く魔物へ降り注いでいく。
降り注いだ血の雨は、魔物の体に突き刺さっていき、動きを鈍らせる。

「今よ！行きなさい！」
「る、流香……」

流香は優也に先に進む様に促すが、優也は戸惑い、動こうとしない。
今行けば、魔物達を流香一人に任せる事になるからだ。

「大丈夫よ。たまにはお姉様に任せなさい」
「ハッ……」

何処かで訊いた流香の言葉に、優也は笑みが零れる。

「誰がお姉様だ！」

優也は館へ向かって走り出した。
流香のいつもの言葉が、とても安心する言葉に訊こえたからだ。

「行かせないわよ！！」

館に走り出した優也の目の前に、赤い髪のセミロングで、頭と背中から黒い翼を生やし、尻尾を生やした女が立ち塞がる。
その瞬間、その女に赤い槍が襲い掛かる。

「クッ！」

女は体を捻り、槍を躱わすが、その隙に優也が脇を走り抜けた。

「しまった！！」

女は赤い槍が飛んできた方へ目線を向ける。

「“血の槍（ブラッディランス）”」

そこには、銀髪の吸血鬼が、こちらを見ていた。

「貴女の相手は私よ。オ・バ・サ・ン」
「こ……のッ、小娘ェ！！」

優也が館に侵入に成功した時、正はガドルと戦っていた。
正は型など無い荒々しい剣術で、ガドルに斬り掛かり、ガドルはそれを受け流し、魔力を纏った拳を正に放つ。
その拳を既の所で躱わし、一旦距離を取る。
先程からこれの繰り返しが続いていた。

正が攻めてはガドルが受け流す。
正の攻撃は全くガドルには届いていなかった。
正の戦い方が、工夫も何も無い剛剣だとわかり、力比べではなく待ち構えて受け流すと言う戦略をとった。
柔よく剛を制すとはこの事だろう。

「さっきからテメェ、動いてねぇじゃねぇかよ！」
「フン、動く必要はないからな」
「だったら、意地でも動かしてやる！！」

正は再びガドルに斬り掛かる。
ガドル自身は短期戦を狙って正を倒すつもりはない。
理由は二つ、無理に倒そうとすれば焦りが生まれる事と、バロールが美優を堕天使化させるまでの時間を稼ぐ事。
その為、その間は誰もバロールに近付けさせない為に、長期戦に持ち込もうとガドルは考えていた。
とは言っても、正を倒さないと言うわけではない。

「おおッ！！」

正が刀を振り下ろす。
ガドルはその太刀筋を読み、躱わして回し蹴りを放つ。

「くっ！」

掠りつつも、正は持てる反射神経をフルに使い、蹴りを躱わす。
確実に正を確実に倒す方法、それは単純に体力切れを狙った戦闘だ。
ガドルは悪魔、人間を遥かに超えた身体能力を誇っている。
そんな悪魔の攻撃をまともに喰らえば、たとえ聖獣を従えていても、ただではすまないだろう。

だからこそ正はガドルの攻撃を躱わす。
それも全力で。
それが正の体力を大幅に削っていく。
だが、身体能力云々の話の前に、おかしいのは正だ。
ガドルも正の異変に気付いていた。
明らかに動きが単調過ぎるのだ。
バロールから優也や仁や正、流香と言った戦争の中を生き残り、カイに引き取られた子供達の情報はある程度訊かされた。
だからこそ、正のこの動きがおかしい事に気付けた。

（この程度の動きで、七歳前後の子供が戦争で生き残れる筈がない……）

魔界の瘴気にやられたのかと考えたが、聖獣の力で瘴気を打ち消している事から、それは無いと考え、この後の戦いの為に力を温存しているのかと言う考えに至った。

（このまま終わらせても良いが、ナメられたままでは気がすまんな）

自分をナメているから全力で戦わない。
そう思い、一つ出し抜いてやろうと、魔力を右手に集中させる。
そして槍の如く伸ばし、正へと攻撃した。

「！！」

横に飛び攻撃を躱わすが、完全に避けきれず、横腹を斬られてしまった。
斬られた横腹から、血が流れ落ちる。
思った程傷は深くはなく、大した出血ではない。
横腹に出来た傷を、片手で拭う。

ヌルリとした感触がし、手に伝わる。
手に付着した自分の血を視界に入れた瞬間、心臓がドクンと高鳴った。
生温い風が、正とガドルの間に、静かに吹く。

（何だ……？この、感じは）

ガドルはこの場の雰囲気が変わった事に気付く。
だが、気付いた時にはもう遅かった。
肉を切り裂かれる感触を、ガドルは肩に感じた。

「！なっ！？」

目を疑った。
正は自分の目の前から動いてはいないのに、自分は攻撃を受けていたからだ。

（馬鹿な！？一体何が……！！）

次の瞬間、目の前の正の姿が消えた。

「いつまでぼうっとしてるんだ？」
「！？」

正が目の前から消えたかと思えば、突然後ろから正の声がした。

「い、いつの間に！？」

慌てて振り返り、戸惑いつつも構える。
振り返って気付く。

正が手にしている刀に、血が滴り落ちている事に。

（ま、まさか……さっきのはこいつが！）

先程の正体不明の肩への一撃、それは正からの一撃だった。
刀の滴り落ちている血が何よりの証拠でもあった。
正は刀を自分の口元にあてがい、刀に付着した血を舌で舐めとった。

「くっくっくっ、あはははははは、ハハハハハハハハハハハハ！！！！！！！」

「！！」

突然気が狂ったかの様に笑い出す正に、ガドルは思わずたじろぐ。
その瞬間、数メートル先に居た正が、目の前に居た。
その事に驚く暇もなく、両足に激痛が走った。
両足に正の刀が刺さっていたのだ。

「ッツ！？」

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！！！」

狂った笑い声を上げながら、正は拳をガドルの腹に叩き込んだ。

「ガハッ！！」

思考が追い付かず、魔力を腹に集中させる事が出来ないまま、まともに攻撃を受けてしまう。
普通ならこの攻撃で吹き飛ばされてしまうだろうが、今は吹き飛ばされる事は無い。
何故なら、刀で足を地面に縫い付けられているからだ。

「ほーら…モウイッチョ！！」

笑い声だけでなく、喋り方も、表情も狂っていた。
その状態で、拳を開き、勢い良くガドルの心臓目掛けて殴り掛かる。

（グッ、落ち着け、落ち着け！！ただの掌底だ！防御すれば事足りる事！）

魔力を集めた腕を胸の前で交差し、正の攻撃を受け止める体制に入る。
だがガドルは気付いていない。
その攻撃が、何かを撃ち込もうとするのが目的だと。

「“フウサツ”」

腕の肉、骨、神経と言った、腕を構成する物質が引き裂かれる感触がした瞬間、腕から血が吹き出た。

「グアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

痛みに耐え兼ね、悲鳴を上げるガドルを、正は殴り付けた。

「グッア……」

ガドルの両腕が、役割を失ったかの様に、ブランと垂れ下がる。

「モウ、終わラセテもイイな？」

右手の関節をゴキリと鳴らし、不気味な笑みで問い掛ける。

「……ふ、ふざけるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

腕を伸ばせば届く距離に正は居る。
だが腕は動かせない。
足も動かせない。
何も出来ないガドルに出来る事は、ただ叫ぶ事だけだった。

「アッそ」

その一言を訊いた瞬間、世界が反転した。
ガドルが最期に見た世界は、逆さまの、首から上が無い“自分の体”だった。
正の白い髪は、いつの間にか赤く染まり、右手には、“ガドルの頭があった”。

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！！」

狂った笑い声と共に、一人の悪魔の命が消えた。

「また随分と派手に散らかしたな」

何処かから声がする。
それは正にとっても聞き慣れた声であった。

「昔から狂気に呑まれやすいな、お前は」

人間界に残った筈の傍観者が、赤く、狂気に染まった白虎の前に立ち塞がった。

第３８話　狂気の風（後書き）

漆黒
「取り敢えず、初めてちゃんとした死ネタを書いてみました」
龍
「初めの方にも書いてはいたがな。今回の方が死ネタっぽいな」
漆黒
「正直、正に殺しをさせるべきか、させないべきか悩んだんだけど、今回は正の殺人衝動がテーマだったって事で、こう言う展開にしてみました」
龍
「因みに、今回の正の戦闘能力はこれだ」

【風魔正（暗殺モード）】

【基本能力】
妖力：Ｂ
攻撃力：ＳＳ
防御力：Ｄ
コントロール：Ｄ
パワー：Ａ
スピード：Ａ
探知能力：ＳＳ
非情度：ＥＸ

龍
「大した変わりはないな」

漆黒
「全く手加減しないって所が、普通の時との強さが違うね」
龍
「リミッターが有るか無いかの違いか」
漆黒
「そう言う事。と言う事で、こんな話はどうでしたでしょうか？気分を悪くしたのでしたら謝罪します」
龍
「またこんな話を書くかもしれないが、また見てくれ」
漆黒
「投票もまだまだお待ちしております。では失礼します」

次回
第３９話　無の傍観者
龍
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第３９話　無の傍観者

館の長い廊下を走る黒く小さな影が一つ。
優也だ。
流香が囮になってくれたお陰で、館の中に入る事が出来た。
体を張って自分を先に進ませてくれた流香の為にも、必ず美優を助け出さなければと、優也は急いでいた。
何処まで続くかわからない廊下の先から、黒い影が見えた。

「！！」

それが何かわかる前に、優也は回避行動に入る。
黒い影は長く、槍の様な形状だった。
優也はその黒い槍を躱わすと、刀を抜き、臨戦態勢に入る。
廊下の先から、三つの人影が歩いて来る。
一つは、黒い帽子を被り、左目が前髪で隠れた、無精髭を生やした男。
二つは金髪で、少し幼い、優也程の歳に見える少年。
どちらも耳が尖っており、どうやら悪魔の様だ。
そして最後の人影。
桃色の長髪、黒い木刀を手に持った少女。
耳は尖っていない事から、人間の様だ。
その少女には見覚えがあった。
進と戦い、バロールの手下で、必死に何かの為に木刀を振るっていた少女。

「ここから先は行かせないわよ！！」

東条雅だった。

第３９話　無の傍観者

「……何のヨウだ？」

突如現れた龍に殺気を放ち、睨み付ける。

「お子様な神からのお願いでお前を止めに来ただけだ。　面倒くさいけどな」

その殺気をモノともせず、面倒くさそうに体の力を抜く。

「なラ、ホットイてくれよ。　今は…キブンがイイんだ」

正は不気味な笑みを作り、龍に向ける。

それを見て、龍は溜め息を吐く。

「気分が良い…か。　それは本当のお前の本心か？」

「何？」

龍の言葉を訊いた瞬間、不気味な笑みを消し、目を細め、龍を見た。

「狂気に呑まれた奴を多く見てきたが、どいつもこいつも気分が良いのは最初だけ、結局は狂気に怯え、苦悩し、そして死んでいった。優也もそうだ。あいつも自分の狂気に怯え、苦悩している。お前も本心ではそうなんだろ」

龍がそこまで言い終わると、視界から正が消えた。

次の瞬間、金属音が鳴り響いた。

正はガドルだったモノの両足に突き刺さっていた、二本の刀を一瞬で抜き取り、龍に斬り掛かっていた。

龍はその動きに反応し、右手首に身に付けていたブレスレットを大剣へと変形させ、大剣で正の刀を受け止めた。

僅かの攻防であった。

「ウるセェよ。ソれ以上しャべったラ、コロスゾ」

正を中心に鋭い風が吹き荒れ、壁や天井を切り裂いていく。

だが、龍には傷一つ付ける事はなかった。

恐らく威嚇のつもりなのだろう。

「俺を殺す？　アハハハハハハハハハハハハハ！！！！」

龍は堪える事が出来ずに、大声で笑い出す。

龍にとって、正の殺気も、風による威嚇も、小さな子供が大人に向かって睨み付けているのと、大して変わらないからだ。

「たった十年そこら生きただけのガキが、面白い事をほざくな」

「ッ！！」

龍から微量ながらも殺気を感じ取り、大剣で止められている刀とは逆の刀で、龍を串刺しにしようとする。
ドスッ！！　と鈍い音が鳴る。
刀が何かに突き刺さる音に間違いないが、刀は龍の体ではなく、天井に突き刺さっていた。
刀が龍の体を貫通するよりも速く、龍が足で蹴り上げていた。

「チッ！！」

武器を失い、体勢を崩された事に、一度距離を離そうと後ろに飛ぶ。
そこまでの判断は正しかった。
背中に、誰かとぶつかる感触を感じるまでは。

「なッ……」

壁にぶつかった訳ではない。
壁にぶつかった位なら驚く事はなかった。
驚いている理由は一つ、ぶつかったの壁ではなく龍だったからだ。
慌てて龍から離れようとするが、それより速く腹を殴り付けられた。

「ガッ！！」

吹き飛ばされたが、床に手を付き、速度を殺す事で床に降り立つ。

「ゲホッゲホッ！！」

吐血しながら、今起こったおかしな事を考えていた。
自分より速く動いて背中を取られた事をではない。
龍の音を聞き取る事が出来なかった事をだ。
今も龍の呼吸も、血液の流れも、心音も、生きている音が聞こえな

い。
そんな事が有り得る筈がない。
正には数百メートル先の音も、正確に聞き分ける事が出来るのだから。

「てメェ、ドんな手品使イヤがッた！」

何よりも自信があり、頼りにしていた能力で月臣龍と言う存在を捕らえられない事に、少なからず戸惑いを覚える。

「（やっぱりな、まだ完全に狂気には呑まれてはいない）知りたいか？　種も仕掛けもある手品の正体を！」

正が完全に狂気に呑まれていない事に気付いた龍は、一気に決着を付けるため、左手を地面に圧し当てた。
次の瞬間、辺りが静寂に包まれる。
いや、静寂と言うよりも無音であった。
まるで世界から音が無くなった様な無音。
この状況に正は、目を見開き呆然とする。

「俺の能力が、能力を無効果する能力だといつ言った？」

ゆっくりと正へと歩きながら、自分にしか聞こえない自分の声で話す。
正には、龍がただ口を動かしているだけにしか見えない。

「所詮能力を無効果するのは、俺の力の一端でしかない。　俺の能力は文字通り、あらゆるモノを無にする能力だ」

ゆっくりと歩いてくる龍に警戒し、片方しかない刀を構える正だが、

今まで体験した事が無い状況に、どう対象すれば良いかわからなかった。

「まぁ、あらゆるモノって言っても、無に出来ないモノもあるし、俺には才能が無いから、ここまで制御するまでに長い年月が掛かったがな……」

龍は自嘲気味に笑うと、大剣の切っ先を正に向けたまま腕を引き、ゆっくり腰を低くする。

「！！」

何かをしてくると感じた正は、慣れない感覚の中、龍に向かっていく。

龍の構えからして突きだと判断し、突きを繰り出して来た所に、カウンターで斬ってやろうと正は考えていたが、その考えさえも跡形も無く無にされた。

“月光”

一瞬大剣が光ったかと思えば、気付いた瞬間には大剣による突きが腹を捉えていた。

「っ……！」

声を挙げる暇もなく、壁まで吹き飛ばされる正。

声を挙げた所で、聞こえはしないのだが。

正がぶつかった衝撃で壁は砕け、ガラガラと瓦礫が崩れる。

瓦礫が崩れる音さえ聞こえない中、正は腕に力を込め、立ち上がろうとする。

だが立てない。
手も、足も、頭もおかしくなったのではないのかと錯覚するほど動かない。
おかしいと言えば、たった今突きを喰らった腹だ。
あんな大剣に、あんなに勢い良く突かれたのに、打撲だけですんでいた。

「安心しろ。　この大剣の切れ味は無にしているから刺さりはしない。　と言っても、聞こえてないか」

薄く銀色に光っていた大剣を、元のブレスレットに戻し、起き上がろうとする正に歩み寄る。

「っ～～～、ガアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

聞こえはしないが、意識の中では確かに叫び、今ある力を振り絞って、龍に斬り掛かる。
だが、刀が龍に届く前に、龍に上から押さえ付けられた。

「ガッ……！」
「いくつか、お前の敗因を教えてやる」

正を押さえ付けている手が、薄く、銀色に光る。

「一つ、中途半端に狂気に呑まれたせいで、冷静な判断が出来なくなり、突然の状況に対処出来なかった。　呑まれてなかったら冷静に対処出来たかもしれないし、完全に狂気に呑まれていたなら、この空間も無視出来た。　つまりどっち付かずって事だ」

二つ、と聞こえもしないのに正の敗因を挙げていく。

「お前の手の内はわかっている。それに、お前等の事はお前等より知ってるからな」

そして最後、そう言った瞬間、手の光が強く光った。

「俺が相手だったって事だ」

そして光が消えた。

光が消えると同時に、正はゆっくりと眠りについた。

「狂気を無にしてやった。　無にしたと言っても、今現れた狂気を無にしただけでまた現れる。　その時までに狂気を制御出来る様になっておけ。　にしても……」

龍は眠っている正を担ぎながら、呆れていた。

「優也も、仁も、お前等三人は三百年前と変わらないな。　なぁ刀次」

小さな子供の様に眠る正へと、懐かしげに話した。

館の外では、押し寄せる魔物の群れの中、流香はたった一人で戦っていた。

それに加えて、強力な力を持った女性型の悪魔がいる為、流香は窮

地に立たされていた。

（ホントに、倒しても倒しても出てくるわね……。　血のストックは後二つしかないし……こんな事ならもっと持ってくるべきだったわ）

「ルミア！」

どうやってこの状況を打開するか考えていると、低い声が聞こえてきた。

すると、声が聞こえてきた方向から、一人の悪魔が向かってきた。

「グランツ！」

魔物達を統率していた女の悪魔が、声の人物の名前を叫ぶ。

そう、今現れた人物は、彪牙と総司を圧倒した悪魔、グランツだった。

「何だよ。てっきり大人数の敵だと思ってたのに、　たった一人にてこずってんのか。　手伝ってやろうか？　ルミア」

「冗談言わないでよ。　こんな小娘、私一人で十分よ」

ルミアと呼ばれた悪魔は、魔力を集め、鞭を造り出す。

「なら勝手にやらせてもらうぜ」

「……勝手にしなさい」

二人の悪魔は目の前の敵を見据え、魔力を纏う。

（全く、厄介ね）

いくら吸血鬼の力を解放した流香とは言え、この状況で幹部クラスの悪魔が加わる事は、敗北に等しい状況だった。
それでも引く訳にはいかないのだ。
今引けば、館に向かった優也や、中にいるであろう仁や正の負担を大きくしてしまうのだから。
流香は小瓶を取り出し、中身を全て飲みほした。

（これで血のストックは後一つ。　それが切れるまでにケリを付ける！）

小瓶の中身は、彩夏から拝借してきた人間の血液だった。
流香の能力は、血液を消費する事で発動する。
その為、血液を溜めて置いて、いざと言う時に補給していたのだ。

「来なさい。　遊んであげるわ」

余裕そうな演技をしながら、小瓶を放り投げる。
カラン、と小瓶が音をたてながら地面に落ちたと同時に、魔物達は流香へと襲い掛かった。
グランツとルミアも魔物達と一緒に、流香へと向かっていこうとしたが、グランツは何かの気配に気付き、叫んだ。

「待て！　止まれ！！」
「え？」

グランツが叫ぶ声が響くが、魔物達の勢いは止まらない。
次の瞬間、流香を守る様に火柱がいくつも上がった。

「な、何！？」
「あの吸血鬼じゃない！　誰だ！？」

グランツやルミア、火柱に呑まれなかった魔物達が狼狽える中、流香も驚きを隠せなかった。

（火柱!?　まさか優也が！　いや、この炎は優也の炎じゃない！　この感じ、まさか！）

「退きやがれ！　邪魔だ!!」

荒々しい声がした瞬間、魔物が数体吹き飛ばされた。

流香は勿論、グランツやルミアが驚き、魔物が飛んできた方へ目線を向ける。

そこにはツンツン頭で、赤い鉢巻きをした長身の男と、藍色の長髪で双刃剣を手にした男が立っていた。

「テメェ等は!!」

その二人は、グランツには見覚えがあった。

先日、人間界で倒してきた人間に。

「彪牙！　総司！」

「どうも、物騒な悪魔さん」

「借り、返しに来たぜ」

「ぬぅん!!」

帽子を被った男は、全長二メートルはある槍を、優也に向かって振

り下ろす。
優也はギリギリで躱わし、男に斬り掛かろうとするが、素早い動きで隣に移動した金髪の少年の蹴りを受け止める事で、その攻撃は失敗に終わった。
だが悪魔達の攻撃はまだ失敗には終わっていない。

「やあぁぁぁぁぁ！！！」
「チッ！」

桃色の髪を靡かせ、黒い木刀で斬り掛かる少女、東条雅。
その斬撃を躱わし、三人から距離を取る。
優也が一人の攻撃を躱わして斬り掛かろうとしようと、残りの二人が攻撃してくる為、中々反撃に移る事が出来ない。

「ねぇ、そんな力でバロール様に挑もうとしてるの？　止めときなって、死んじゃうよ」

金髪の少年が両手を頭の後ろで組み、緊張感も無く優也に言い放つ。

「……戦いに集中しろ」

そんな少年に、黒い帽子の男が諭す様に言う。

「心配しなくでいいぞ。　お前等も、バロールも倒すからな」
「へぇ、じゃあ、やってみなよ！」

金髪の少年は、優也とほぼ同じ速さで、優也へと向かっていく。
それを優也は迎え撃つ。

「ちょっと待ったァ！！」

優也と金髪の少年がぶつかり合う瞬間、誰かの声が響き渡る。
一同は驚き、動きを止めて声の人物を探す。
この中で一番驚いていたのは、優也と雅だ。
この魔界で訊ける筈のない声を訊いたのだから。

「お前等の相手は、この俺だ！！」

体中に包帯を巻いた優也の友、水野進がこの魔界にいたのだ。
今、人間達の反撃が始まる。

第３９話　無の傍観者（後書き）

漆黒
「いや～、やっと龍の能力を書けましたよ。　具体的に書くのは難しいですね」
総司
「恐らく、おかしな所も有るでしょうけどね」
漆黒
「あ、今で出番が殆ど無かった霧藤総司だ」
総司
「出番が少ないのは誰のせいですか（怒）」
漆黒
「まぁまぁ、次回は活躍するんだから」
総司
「本当でしょうね？」
漆黒
「本当です」
総司
「なら許します」
漆黒
「では、タイトルコールを」
総司
「そう言えば久し振りですね。　張り切っていきますよ」

次回
第４０話　幻想の弓矢
総司

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第４０話　幻想の弓矢

優也や正、流香が戦っている時、仁は、

「何処だここ」

迷っていた。

魔界に到着し、一番最初に目にしたのは正ではなく、大きな館だった。

右も左もわからない魔界なのだから、取り敢えず情報を集めるべきだと考え、館へと向かった。

館の前で、魔物が雑談しているのを息を殺しながら訊いていると、会話の中にバロールと言う単語が聞こえた瞬間、魔物達に向かって雷撃を放った。

突然の攻撃に狼狽える魔物達を秒殺し、館に入ったまでは良いが、外観通り中も広く、今に至る。

「まさか迷うとは思わなかったな。　正みたいに音を訊ければ良いんだが……訊けてもあいつは迷うか」

止まっていても仕方がないと思い、足を進めようとするが、足が動かなかった。

まるで何かに掴まれている様な感覚だった。

何が起こっているのかと思い、自分の足を見てみた。

そこには、黒い蛇の様なモノが床から生え、足に絡み付いていた。

少し驚いたが、黒い蛇の体が伸び、上へと這い上がって来たのを確認した仁は、素早く銃を取り出し、床に向かって雷の銃弾を放った。

床は砕け散り、黒い蛇も一緒に吹き飛ばされる。

その際、砕けた破片が顔面に直撃したのは見なかった事にしよう。

「奇襲は失敗と言った所か……。　良い反応だ」

何処からともなく、緑色の髪をした男が現れる。
腕には先程の黒い蛇の様なモノがまとわりついていた。

「……蛇の魔物か？」

もう一丁の銃を取り出し、男を警戒する仁。
鼻血を流しながら。

「……敵にこう言うのもおかしいが……大丈夫か？」

ダラダラと鼻血を垂れ流す仁が流石に心配になり、ついつい気遣ってしまう。

「……気のせいだ」
「いや、気のせいじゃないだろ。　まだ流れてるし……」

証拠隠滅の為、鼻血を拭き取るが、また流れてくる。
どうやら思ったより強く打った様だ。

「気のせいだ。　鼻血を流してる本人が気のせいだって言ってるから気のせいだ」
「今自分で鼻血流してるって言ったな……。　じゃなくて、悪いがここから先は行かせはしない」

男を中心に、足下に魔力が円を描く。
するとその中から、黒い蛇が数十体現れた。

「自己紹介が遅れたな。　私の名はクロウ・クルワッハ。　名くらいは訊いた事はあるだろう」
「……一応はな」

仁は自分の運の無さに溜め息を吐く。
クロウ・クルワッハと言えば、バロールが召喚し、神々を惨殺した龍神だとか蛇だとか謎が多いとか、色んな文献を記憶している為、色々ごちゃ混ぜだが、とにかく強い神だったと記憶している。
そんな相手と戦わなければならないのだ、溜め息の一つや二つ吐きたくもなるだろう。

「勘違いしている様だから一つ教えておく。　確かに私はバロール様に召喚されたクロウ・クルワッハだが、神々を惨殺したのは私の先代だ」

仁の様子を察し、自分の素性を伝えるクロウ・クルワッハ。

「……神にも先代がいるんだな」
「神も死ぬ時は死ぬモノだ。　さて、話はここまでだ。　お前にはここで暫し眠っていてもらおう」

足下の魔力の円から完全に抜け出た黒い蛇が数匹、仁目掛けて飛び掛かる。
確かに速いが、ただ真っ直ぐ飛んでくるだけ。
弾の無駄使いと思い、蛇を銃で正確に叩き落とす。

「ほぅ」
「俺も自己紹介がまだだったな」

床に叩き落とされた蛇が拡散して消えていく中、仁は銃を器用に一

回転させ、銃口を目の前の相手に突き付ける。

「雷道仁。　それがお前の目の前にいる敵の名前だ」

「そうか。　ならば覚えておこう！」

再び蛇を打ち出すクロウ・クルワッハ。

それを躱わしずつ、躱わし切れない蛇は叩き落とす仁。

今はただの小手調べだが、これから戦いは熾烈さを増していく。

第４０話　幻想の弓矢

「貴方達、何でここに……！」

戦闘中にも関わらず、魔界に現れた二人の少年に驚く。

悪魔に敗北し、人間界のベッドで眠っている筈の彪牙と総司が、魔界にいたからだ。

「……それより、お前流香……だよな？」

彪牙は今一番気になっていた事を口にした。

「え……あぁそう言えばこの姿を見せるのは初めてね」

今の流香の姿、それは瞳は赤く、背中には赤い翼、八重歯は鋭く尖り吸血鬼の様だった。

「それが君の吸血鬼の姿ですか」

「えぇ、そうよ」

「へぇ、かっけぇな」

「ちょっとあんた達！　何私達を無視して話してるのよ！」

そんな他愛も無い話をしていると、ルミアが青筋を立てながら怒鳴ってきた。

それを見て、流香達は気を引き締める。

「で？　何で来たのよ」

「言っただろ、借りは返すってな」

「それに、女性一人で戦わせるなんて事出来ませんよ」

彪牙と総司は流香の隣に並び、グランツを見据える。

「あの男の悪魔、俺達にくれねぇか？」

「……あの男、かなり強いわよ。　貴方も知ってるでしょ」

流香の言う通り、グランツはかなりの実力者だ。

それは戦った彪牙と総司が良く知っているが、この二人は引く気は無かった。

「大丈夫ですよ。　今度は負けません」

彪牙ではなく、総司が強気な態度で言い放った。
総司がそんな事を言うとは思わなかった流香は少し驚いたが、すぐに頬を緩ませた。

「そこまで言うのならあいつは任せるわ。　ただし、負けたら許さないわよ」
「ハッ！　お前に見せてやるよ！」
「完全勝利と言うモノを！」

総司は切っ先を地面に突き刺すと、グランツとルミアの間に先程の火柱が上がる。

「これはさっきの！」
「あいつの仕業か！！」

二人は左右に飛び、火柱を躱わすが、ルミアには流香の血の短剣が、グランツには彪牙の拳が襲い掛かった。

「チッ！」
「グッ！！」

グランツは胸の前で腕を交差させ、彪牙の拳を防御し、ルミアは鞭を振り回し、血の短剣を薙ぎ払う。
ダメージを喰らわせる事は出来なかったが、二人の悪魔を引き離し、グランツは彪牙と総司、ルミアは流香が相手をする事に成功した。

「今度こそ、一対一よ」
「人間に媚びを売った吸血鬼風情が……頭に乗るなよ！！」

怒りに身を任せ、鞭を振るう赤い悪魔と、血を操る銀の吸血鬼が今

戦う。

総司が切っ先を地面に突き刺すと、地割れが起き、周りに居た魔物達が割れ目へと落ちていく。
グランツは割れ目を飛び越えながら、総司へと向かっていく。

「おぉぉぉぉぉぉ！！！」

それを邪魔する様に、横から彪牙が殴り掛かる。

「この、邪魔だオラァ！！」
「っ！！」

眼前に迫る彪牙の拳を、魔力を纏った裏拳で弾き返す。
力の違いに、彪牙は大きく後ろに飛ばされた。

「いって～、流石悪魔……。　馬鹿正直に突っ込んでも返り討ちってとこだぜ」
「はぁ、何を今更。　そんな事、わかりきってますよ」

いくら彪牙とは言え、純粋な力比べではグランツには勝てない。
それをわかっていて敢えて彪牙は、総司の力を借りたとは言え、真っ向勝負を仕掛けた。

「まずは一発、顔面にぶちこんでやりてぇんだよ」
「君は散々殴ったじゃありませんか……」

呆れた表情で総司が呟く。
人間界で戦った時は、彪牙は意識が無い状態で数発、グランツに拳を叩き込んでいるのだ。

「覚えてねぇもんをカウント出来っか」

額に巻いた鉢巻きを固く結び直しながら答える。

「何で鉢巻きをしているんですか？」

いつもは巻いていない鉢巻きを見て、総司は疑問を浮かべる。

「何か気合いが入んだろ。　気合いの鉢巻きだぜ」
「ポ〇モンですか？」

軽くツッコミをしながら、地面に突き刺していた切っ先を抜く。
すると、地割れが消え、魔物達が気絶し、地面に倒れ込んでいた。

「……幻術か」

割れた地面が突然消える筈が無い。
消えると言う事は、何らかの能力でそう見せているだけ、つまりこれは幻術。

「ハッ！　正体がわかれば怖くも何ともねぇなぁ」

彪牙の能力は身体能力の強化だが、身体能力を強化してもグランツには届かない。
総司の幻術は正体がバレていては効き目は無いに等しい。

それに踏まえて、以前にグランツはこの二人に勝っている。
その事から、少なからず油断が生まれていた。

「フフフ、わかってないですね。　幻術の本当の恐ろしさを」
「あぁ？」

その瞬間、総司の体から抜け出た藍色の総司がグランツに向かっていく。

「マジで馬鹿だな。こんな幻覚、躱わす必要もねぇ」

向かってくる幻覚を佇むだけで、グランツは躱わそうとしない。
幻覚だと自覚していれば、幻覚による攻撃など効く筈がないからだ。
そして、総司が放った幻覚はグランツをすり抜けた。

「っ！？」

幻覚がすり抜けたと同時に、頬に強い衝撃が走り、グランツは後ろに倒れ込む。
突然の事に、グランツは驚きを隠せない。
幻覚は完全に見破った筈、現に幻覚は自分の体をすり抜けた。
なのに攻撃を受けたと言う事は、そこまで考えると、グランツはさっきまで自分が立っていた場所へ、何かを確認するかの様に目線を向ける。
視界に写ったのは、拳を握り締め、勝ち誇った表情を浮かべている彪牙だった。

（こいつ！　幻覚に紛れて！！）

そう、彪牙は総司が放った幻覚に紛れて、グランツを殴り飛ばした

のだ。

「どうだ！　一発入れてやったぜ」
「このガキ！」
「敵は一人じゃありませんよ」

グランツは立ち上がって彪牙に襲い掛かろうとしたが、総司がグランツの後ろに回り込み、斬り掛かろうとしていた。

「だから……てめぇじゃ勝てねぇって言ってんだろぉが！！」

双刃剣が届くよりも速く、グランツの拳が総司の体を貫いた。
貫いた瞬間、総司の体は霧の様に消えていった。

「なっ！　（また幻覚！？）」
「おぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」
「！？」

総司が幻覚だった事に驚いていると、後ろから彪牙が迫って来ている気配を感じ、振り返って防御をしようとするが、反応するのが少し遅く、鳩尾をアッパー気味に殴られてしまった。

「ガッ！！」
「おぉぉぉぉっらぁ！！」

グランツの体が少し浮き上がった瞬間、右足を更に踏み込み、一気に拳を振り抜いた。

「っ……！」

殴り飛ばされ、宙を舞ったグランツは腰から地面に落ち、小さく声を漏らす。

「確かに、僕では君には勝てません。　そして彪牙も勝てない……。でも……」

ゆっくりと、一歩ずつしっかり歩き、彪牙の隣に立つ。

「二人なら戦える。　二人なら勝てる！」

必ず勝つ。

その決意を胸に、強い眼差しでグランツに言い放った。

「……悪かったな。　お前等の事をナメていた」

口に含んだ血を吐き捨てながら、ゆっくりと立ち上がる。

立ち上がると同時に、体から魔力が滲み出ていた。

「本気で行くぞ！！」

そして、一気に魔力が弾けると、グランツの体を膨大な魔力が包み込んだ。

「やっと本気かよ。　上等だぜ」

手のひらに拳を当て、グランツを迎え撃とうとする。

「彪牙……」

「あぁ？」

突如小声で総司に話し掛けられ、迎え撃つ準備をしていた彪牙は若干不機嫌そうに返事をする。

「少し、時間を稼いでくれませんか？　僕がとどめを刺します」

「……それは良いけどよ、流石に俺一人じゃあいつを止めてらんねぇぜ」

大丈夫です、総司がそう言うと同時に二人の周りに、何十人もの彪牙と総司が現れる。

「三十四体。　それが他の事に集中しながら具現化し、操れる最大の幻覚の分身です」

その言葉を訊いて、彪牙が辺りの幻術の分身を見渡す。

その幻術のクオリティはかなり高く、どれが本物かわからない程だった。

「一撃でも喰らえば消えます。　上手く使って下さいね。出来るだけサポートしますから」

それだけ言うと、総司は双刃剣に霊力を込めていく。

彪牙はそれを見て溜め息を吐く。

「ったく、仕方ねぇな。　良いとこ全部お前にやるよ。　その代わり、ちゃんと決めろよ」

「フッ、当然ですよ」

この言葉が合図かの様に、彪牙と幻術の分身達はバラバラに駆け出した。

「来やがれ。　跡形もなく消してやるよ！」

纏っていた魔力を拳に集めると、拳を開いた。
すると、魔力は形を変え、巨大な手を造り出した。

「オラァァァァァァァ！！！！」

そしてそのまま、彪牙達に向かって振り回した。
分身達は回避行動を取るが、攻撃範囲が広い為、回避しきれず、数体の分身が消し去られてしまった。

（今ので八体消された……。　後二十六体、このペースではすぐに全滅されてしまう！　頼みますよ、彪牙！）

消されてしまった幻覚の数を確かめながら、攻撃の為の準備を進めた。

「何だそりゃぁ……、それがおめぇの能力か？」
「能力なんて大層なモンじゃねぇさ。　ただ魔力を俺のイメージ通りに変化させた。　それだけだァ！」

再び魔力で出来た巨大な手を振り回すと同時に、本物の彪牙は幻覚の分身の中へと身を潜める。
そして、魔力の手を躱わしきれなかった幻覚達は、無惨に消されてしまい、残りは十八体。

（総司がとどめを刺すって事は、必ず当てられる様に隙を作ってやらなきゃならねぇ！）

総司が攻撃を当てられる様に隙を作る為には、今総司が出していら

れる、限りある幻覚と自分自身だけでどうにかしなければならないが、彪牙は幻覚を操る事は出来ない。
彪牙がそう考えている間にも、幻覚は消されていく。
残り十四体。

（幻覚では一撃で消されてしまう。　とは言え、あれをまともに喰らえば彪牙と言えどただではすまない）

幻覚に紛れて移動しながら、霊力を練り上げる。
総司が霊力を練り上げている事に気付く事なく、グランツは幻覚を消していく。
残りは六体。

（（だったら！））

一人ずつの力ではこの状況を打開出来ない。
その考えに至った時点で、二人の思考は重なった。
まずは一体、総司の分身がグランツに突撃する。
その無謀な突撃をしてくる幻覚を、グランツは巨大な手で横一線に薙ぎ払う。
その幻覚も、他の幻覚と同様、霧の様に消えていった。
ただ一つ違うのは、

「っ！！」

幻覚に石が紛れていた事だ。
総司の分身が突撃すると同時に、彪牙が石を投げ付けていたのだ。
幻覚に隠れていた為、石に気付く事なく、グランツは目に石をまともに喰らった。

「このやろォ！　こんな幻覚、全部掻き消してやらぁ！！」

魔力の手が消え、グランツの体に魔力が戻ったかと思えば、魔力が弾け、グランツを中心に弾丸の様な魔力が彪牙達に襲い掛かった。
魔力の弾丸は幻覚達に命中し、全ての幻覚は消え、遂に分身の残りは零になってしまった。

「ハァハァ、どうだこの野郎が……」

一気に魔力を解放した為、疲労感を覚えたが、幻覚を全て消し去れた手応えは感じていた。

「にしても……ハァ……やり過ぎちまったか……」

幻覚を消し去ったのは確実だ。
だが、その幻覚を一気に消そうとした時に放った魔力が、幻覚を消すと同時に砂埃を舞い上げてしまった為、彪牙達の生死を確認出来ないでいた。

「……キレて魔力を一気に解放した俺も俺か……。　とにかく、生きてるかどうか確かめとくか……」

二人の生死を確認する為、二人を探そうと足を踏み出した瞬間、グランツの後ろの砂埃が晴れた。
その晴れた砂埃から現れたのは、至る所から血を流している、気を纏った彪牙だった。

「なっ！？」

まさか彪牙が飛び出してくるとは夢にも思っていなかったグランツ

は、少し遅れて後ろを振り向く。
だが、このタイミングなら防御が出来た。
それでも、グランツはすぐに防御体勢に入らなかった。
この彪牙は本物なのか、また幻覚なのではないのか、そんな考えが脳裏を駆け巡ってしまった。

「遅ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

彪牙は本物だった。
幻覚ではない、気を纏った拳が、グランツの顎を打ち抜いた。

「ガッ……！」

防御もしていない状態で顎を打ち抜かれ、脳が揺れ、足がふらつく。

「まだだァ！！」
「ッ！！」

体勢が整っていないグランツを見逃す程、彪牙は甘くない。
『下手な鉄砲数打ちゃ当たる』そんな諺が合う位、怒涛のラッシュを仕掛ける彪牙。
グランツは揺れる視界で、何とか防御体勢に入るが、留まる事を知らない彪牙のラッシュに、中々攻撃に転じる事が出来ない。

「総司ぃぃぃぃぃぃ！！！！！」

ラッシュを続けながら、総司の名前を叫ぶ。

「霧幻……解放！」

その声と共に、砂埃が完全に晴れる。
晴れた砂埃から、藍色の霊気を纏った総司が現れる。
そして、双刃剣が霧の様に散り、徐々に姿を変えていく。

「奇遇ですね。　僕のこの武器、霧幻も僕のイメージ通りの武器に姿を変えてくれるんですよ。　そしてこれが、君を倒す武器です」

霧となった双刃剣、霧幻は姿を現す。
それは身の丈程もある、総司が持つにはゴツイ弓だった。

（！　あれはヤバい！！）

その弓が危険だと気付いた所で、グランツは逃げる事が出来ない。
彪牙の攻撃から逃げる事が出来ないからだ。

「総司……射てぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

彪牙の声と共に、総司の霊気で精製された、藍色の矢が現れる。
そして、

「“霧幻・弓走”」

彪牙がグランツの傍に居る事も関係無く、矢を放った。
放たれた矢は高速で飛来し、二人に向かっていく。
矢が迫って来る気配を感じながらも、彪牙は攻撃の手を緩めようとしない。
このままでは、自分事グランツを貫いてしまうかもしれないのに、彪牙は躱わそうとしない。
躱わさない理由は彪牙は信じているからだ。
迫り来る矢は、自分を貫く事はないと。

「クソッタレ……」

グランツが呟くと同時に、矢は彪牙の腋を掠め、グランツを貫いた。

第４０話　幻想の弓矢（後書き）

漆黒
「いや～疲れた」
流香
「いきなり何よ」
漆黒
「学校行って、部活して、小説で総司の技名をどうしようか悩んで、そんなこんなで疲れたね！　まぁ出来たから良いけどね！」
流香
「なら一々言わなくて良いわよ」
漆黒
「すんません……。　でも、とにかく今回はやっと総司を活躍させられた」
流香
「今まで総司が活躍した所は少なかったから良かったわね。　それで、次回はいよいよ進ね」
漆黒
「あぁ～それは、あと一話投稿してからになります」
流香
「え、そうなの？」
漆黒
「はい、でもちゃんと活躍させますんでご安心を」
流香
「じゃあ次回も見てね」
漆黒
「投票まだまだ待ってます！」

次回

第４１話　女の戦い

流香

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第４１話　女の戦い

「ハァ……生きて、ますか……？」
「ったりめぇだろうが……」

力を使い果たし膝を付く総司は、ボロボロで横たわる彪牙に声をかける。
怪我だけなら総司より重傷だが、総司よりも疲労はしていなく、すぐに起き上がる。
全くもって頑丈である。

「あいつ、死んでねぇよな……」

総司の全身全霊をかけて放った矢に貫かれて、血を流して気絶しているグランツへ目線を向ける。

「彼は悪魔で、僕達人間より生命力が高いです。　勿論君よりもです。　あれくらいなら、恐らく数時間もすれば目が覚めるでしょう」
「流石悪魔だぜ。　苦労して倒したのにすぐに目が覚めんのかよ……」

二人がかりで、これだけ苦労して倒したというのに、悪魔だからすぐに目が覚めると訊かされ溜め息が出そうになる。
良く見れば、グランツから流れる血が止まっていた。
もう治癒し始めているのだろう。
今更ながら人間と悪魔の違いを思い知らされた。

「それでも、僕達が掴み取った勝利です。　幻ではありません」
「……当たり前だろうが」

少し笑いながら、彪牙が立ち上がる。
それと入れ替わるかの様に、総司が倒れた。

「おい！　総司!?」

突然倒れた総司に駆け寄る彪牙。
最後にグランツが放った攻撃が当たっていたのではないのだろうかと、嫌な考えが脳裏を過る。

「疲れ、ました……」
「は?」

総司の呟きに彪牙が聞き返すと、寝息が聞こえてきた。

「はぁ～、ちっとは体力つけろよな」

そう言いながら、総司の隣に座り込む。

「とりあえず、お疲れ様。　見といてやるから今は眠ってろ」

敗北を味わい、勝つために這い上がった二人の戦いは幕を閉じた。

第４１話　女の戦い

多くの魔物が倒れている館の前、銀の吸血鬼と赤い悪魔が死闘を繰り広げていた。
赤い悪魔、ルミアは鞭を振るい、銀の吸血鬼へと攻撃する。
銀の吸血鬼、黒城流香は軽快な動きで、ルミアの鞭を躱していく。
ルミアは攻撃が当たらず苛立っていたが、流香も苛立ってはないモノの、鞭による遠距離からの攻撃で近付けずにいた。

「チョコマカと！　この貧乳吸血鬼！！」
「！！」

苛立ちが最高潮に達し、流香に向かって言ってはいけない暴言を吐く。
確かに流香は貧乳と言うわけではないが、人並みよりは小さい。
それを流香は気にしていたのだ。

「誰が貧乳よ！　これでも人並みにはあるわよ！！　それにあんたなんか無駄に胸が大きいだけじゃない！　無駄に！」

売り言葉に買い言葉。
自分が気にしていた事を言われ、流香は先程までの冷静さを失って言い返す。
『無駄』を二回も言って。

「無駄って何よ！？　貧乳だからって他人の胸に八つ当たりしないでくれる？　見苦しいわよ」

勝ち誇った笑みを浮かべ、豊満な胸を見せ付けるルミア。
流香が言ったように、ルミアは胸が大きいのだ。
流香とルミア、二人を胸だけで比べれば月とスッポンだ。

「……フフフ、私から言わせてもらえれば、そんな露出の高い服を着てる貴女の方が見苦しいわ」
「なッ!?」

怒り狂いそうになる自分を落ち着かせ、反撃する流香。
ルミアが今着ている服は、足が太股まで見え、背中は大きく開いているなど、とにかく露出が高い。

「これは私の戦闘装束よ!!」
「戦闘装束？　ただ自分の体を見せ付けている痴女にしか見えないわよ」
「ち、痴女……／／／！」

流香の痴女発言に、ルミアは顔を赤らめ体をプルプルと震わせる。

「この貧乳吸血鬼!!」
「だから誰が貧乳よ!!」

怒り任せに鞭を振るい、鞭は一直線に流香へと向かっていく。

「甘い！」
「！」

一直線に向かってくる攻撃を、躱す事は容易い。
少し横へ動き鞭を躱すと、一歩でルミアへと接近した。

「はっ！」
「キャアッ！」

勢いそのまま、ルミアを殴り付ける。
片腕でギリギリ防御するが、流香の力に押し負けて、後ろに飛ばされる。

「挑発に乗るからそんな目に合うのよ」

そう言う流香だが、初めに挑発に乗ったのは流香の方である。

「……もう、良いわ」

服に付いた土を払いながら、ゆっくりと立ち上がる。

「命だけは見逃してやろうと思っていたけど、もうそんな事関係ない！！　全力で殺す！」
「！！」

突如、ルミアの体から魔力が溢れ出す。
魔力はルミアの足下に沼のように広がっていく。
するとその沼から、黒い狼が這い出てきた。

「行きなさい！　目の前の餌を喰らい付くしなさい！」

ルミアが鞭を地面に叩き付けると、黒い狼は流香へと襲い掛かった。

「っ！　血の短剣（ブラッディ・ダガー）！」

自分の血で精製した複数の短剣を放ち、黒い狼に反撃するが、身軽な動きで全て躱されてしまう。
全ての短剣を躱した黒い狼は、鋭い爪を流香へと突き立てる。

「くっ！」

流香は翼を羽ばたかせ、空へと逃げる。

「っ！！」

だが、空中に逃げたと同時に、背中に衝撃が走る。
その衝撃の正体、それはルミアが造り出した黒い鳥だった。
黒い鳥が流香に命中したのを確認すると、ルミアは鞭を地面に叩き付けた。
鞭を叩き付けた瞬間、黒い鳥が膨張し始め、そして、爆発した。

「どう？　私の動物爆弾（アニマルボム）のお味は？」

空に立ち込める煙から、流香が地上へと落ちていく。
その様子を眺めながら、ルミアは楽しそうに話す。

「この子達はね、私の魔力で生み出した、私の可愛いペット」

ルミアがそう言うと、次々と犬、狼、鳥、羊、と言った様々な動物が生み出されていく。

「私の思った通りに行動し、敵を襲い掛かり、そして私の合図と同時に、ボンッてわけ。　良い能力でしょ？」

煙が晴れ、地上に落下した流香の姿があらわになる。

「悪趣味な能力ね……」

額から血を流し、服もボロボロになっていた。
それよりも一番負傷していたのは、赤い翼だった。爆発の瞬間、翼を盾にした事でダメージを軽減出来たが、爆発をモロに喰らった翼は、そうはいかなかった。
爆発の衝撃に耐えきれず、片翼がもがれてしまった。
激痛に表情を歪みそうになるが、歯を食いしばって耐え、ルミアを睨み付ける。

「まだそんな表情をするのね。　でも、これを喰らってまだそんな表情が出来るかしら？」

ルミアの生み出した数十体の動物達が流香を取り囲む様に配置に付く。
これが一斉に爆発する様な事があれば、ただではすまないだろう。

「言い残したことはあるかしら？」

鞭を振るう様子はなく、本当に遺言を訊いてくれる様だが、流香にはそんなルミアの気遣いは不必要だった。

「無いわよ。　だって私は死なないもの」

流香はそう言って、綺麗な笑みを浮かべてみせる。
誰がどう見ても絶体絶命の状況で、何故こんなに綺麗な笑みを浮かべる事が出来るのだろうか？　まだ何か策があるのだろうか？
ルミアはそんな考えをすぐに取り払った。
この状況を打開出来る策がある筈がない。

あってたまるか。
この状況を作り出す事は、ルミアにとって難しい事だった。
魔力はあまり高くなく、身体能力は悪魔としては低い。
そんなルミアが強力な力を持っている吸血鬼の流香を相手に出来るか、内心心配だった。
だが、バロールの為、ルミアは戦った。
そして勝利を手に出来る状況を作り出したのだ。
それを壊されてたまるかと、ルミアは鞭を強く握り締める。

「減らず口を……なら、耐えてみなさいよ！！」

鞭を力の限り振るい、地面に叩き付ける。
それを皮切りに、動物達は一斉に流香に飛び掛かり、一体、また一体と、肉体が膨張していき、大爆発を起こした。
先程とは比べ物にならない爆発で、辺り一面煙が立ち込める。
立ち込める煙のせいで、視界が覆われる。
それは先が見えなくなる程、濃い煙だった。

「少し……やり過ぎたかしら？」

煙で視界が見えず、流香の生死を確認する事が出来ない。

「でも、これだけやれば、流石に無事じゃすまないわね……」

ルミアが今起こした爆発は、ルミアが限界まで出せる動物爆弾（アニマルボム）全てを爆発させて起こしたもの、いくら吸血鬼と言えど、無傷の筈がない。
いや、それどころか生きているかも怪しい。

「……ホントに、誰かを殺すのは……良い気分じゃないわ……」

ルミアは悲しそうな表情をしながらも、バロールへ報告の為、館に戻ろうと、煙の中から出ようとした。

「だから、死なないって言ったでしょ」

「!?」

自分が倒した筈の吸血鬼の声を訊くまでは。

流香の声が背後からした為、振り返ろうとするが、流香に羽交い締めにされ、身動きが取れなくなった。

何とか抜け出そうと抵抗するが、力の差があり、抜け出せない。

「な、何故生きてるの……」

少なからず抵抗はしつつも、流香が生きている理由を問いただす。

「簡単な話よ。　あの爆発を止めただけよ」

「止めた!?　ふざけるのも大概にしなさいよ!　そんな事出来る筈がない!!」

話だけを訊けば簡単に聞こえるが、実行する事は簡単ではなかった。

たった一体が爆発しただけで、片翼がもげる程ボロボロになったのに、数十体の一斉爆発を止められる筈がなかった。

「私の能力をフルに使って防御しただけよ」

爆発が起こるあの瞬間、流香は素早く最後の血が入った小瓶を飲み干し、再生した翼で自分を包み込んだ。

そして、血で作った分厚く頑丈な球体で、更に自分を包み込み、爆発を止めたのだ。

「そのせいで妖気は使いきっちゃうし、喉は渇くし、ボロボロだしで最悪よ」

妖気を使い果たしたと言うのは本当の事らしく、翼は無くなり、瞳も赤から金に戻っていた。
鋭い歯だけはそのままだった。
流香の説明を訊いたルミアは表情は驚愕に染まる。

「そんな事が……」
「まだ信じられない？　でもね……」

ルミアのその様子に、流香は諭すように言い放った。

「これは本当の事よ。貴女の奥の手は私を倒せなかった」

流香は鋭く尖った歯を、ルミアの首に宛がう。

「さて、喉が渇いたから、血を少し頂こうかしら」
「！！」

首に歯を宛がわれる感覚と、流香の言葉に、ルミアの体が強ばる。

「大丈夫よ。　痛くはしないから」
「い、嫌、嫌！　離して！！」

ルミアは声を荒らげて抵抗するが、全く逃げられない。

「悪魔の血はどんな味がするのかしらね」
「嫌ァァァァ！！！！」

ルミアの叫び声が木霊するが、助けは来ない。
ただ来るのは、恐怖だけ。

「いただきます」

そして、ルミアの首に流香の歯が突き刺さった。

第４１話　女の戦い（後書き）

漆黒
「早速ですが、流香の能力データです」

【黒城流香】

【吸血鬼体】

妖力：Ａ
攻撃力：Ａ
防御力：Ａ
コントロール：Ｓ
パワー：Ｂ
スピード：Ａ
探知能力：Ｂ

【血の雨（ブラッディ・レイン）：Ｃ】

血を雨の様に空から広範囲に降らせる。
血は鋭い刃の如く、敵に突き刺さる。

優花
「次回は遂に進が活躍します」
漆黒
「あ、優花。　久し振り」
優花

「久し振りです。　最近出番が無くて」
漆黒
「……すみません」
優花
「私は気にしてないけど、薫が……」
薫
「……出番がない……」
漆黒
「……この長編が終わったらちゃんと出番作りますんで……」
優花
「ここまで読んでいただいてありがとうございます。　投票はまだ受け付けておりますので、どうかご協力をお願いします」
漆黒
「では、また次回！」

次回
第４２話　炎の鳥と水の龍
優花
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第４２話　炎の鳥と水の龍

「ご馳走様。　まぁまぁ美味しかったわよ。　優也の血の方が美味しいけど」

戦闘も終わり、静けさが残る場に、流香の声が響く。
ルミアの血を吸い終えた流香は、ルミアを寝かせる。

「なん……で……殺さ、ないのよ……」

ルミアは声を捻り出し、自分を生かせた理由を問う。
ルミアは死んではいなかった。
ただ、血を吸われ過ぎて、身動きをとる事が出来なかった。

「何？　死にたかったの？　でも、お断りよ」

血を吸い取る事で傷は再生した様だが、体力と妖気は完全に回復しておらず、少しだるそうに歩きながら、ルミアの問いに答える。

「誰かが死ねば、あの子が悲しむわ」

その答えを訊くと、ルミアの意識は遠くなっていく。

「何よ……それ……」

体力の限界を越え、ルミアは静かに眠りに付く。
ルミアから聞こえる寝息を確認した流香は、もう一人の悪魔に勝ったであろう二人の少年の元へと足を進めて行った。

第４２話　炎の鳥と水の龍

三対一の、不利な状況下での戦闘中に響いた声。
その人物が、三人を一人で相手にしていた、火渡優也の隣に並ぶ。
その人物は、ここに居ること事態あり得る筈がなかった。
何の力も持たず、戦闘などした事もない、最近まで妖怪や悪魔の存在自体知らなかったただの一般人。
その人物は。

「何で、こんな所に居るんだ……。進！」

水野進であった。

「何でって、助けに来たんだよ！　これ以上役立たずでいられるか！」

優也の紅い瞳をしっかりと見据えながら、進は答えた。

「優也を、美優を、皆を……雅を助ける為にここに来たんだ！」

雅の名前を口にした時、雅を眼前に捕らえながら、自分の覚悟を高らかに叫んだ。
体中に痛々しく包帯を巻き、それで誰かを助ける為に戦えるのかと思うが、漂わせる雰囲気や顔付きは今までとは違い、何処か頼りになる風に感じた。
何より、今の進からは覚悟を感じた。
何の覚悟かはわからない、だが、今の進になら戦いを任せても大丈夫だと感じた。

「自分で言ったことはしっかりやれよ。あいつを助けてやれよ」
「ああ！！」

優也は刀を、進は握り締めた拳を、互いに構える。

「ねぇアラン？　あの地味な包帯の子供、僕にくれない？」

金髪の少年は、黒い帽子の男に進を自分に譲る様に交渉する。
その際に口走った“地味”と言う言葉を、進は聞き逃さなかった。

「誰が地味だこらぁ！！　それにお前こそ子供だろうが！」

気にしている事と、子供に子供と言われた事にツッコミを入れる進。
久し振りに進のツッコミを訊いたなぁ、と優也は呑気なことを思っていた。

「僕は悪魔だから君よりもかなり歳上だから、僕からしたら君は子供だよ？　それに君、地味でしょ？」
「何か納得」
「納得するなよ！？」

このままでは話が進まないと思った黒い帽子の男、アランは話に割って入る。

「ならばあの少年はお前に任せよう。　東条はここを抜かせぬ様に見張っていろ。　今の精神状態ではどのみち戦えん」

「は、はい」

進が現れたことに戸惑いを隠しきれない雅では、マトモな戦闘は不可能だと考えたアランは、雅を残し、一対一での戦いを考えた。

「俺は火渡優也を引き受ける。　キラ、人間の子供とは言え油断は禁物だ」

「わかってるよ。　アランこそ、油断したゃ駄目だよ」

アランは静かに頷くと、魔力を放出し、槍に集中させる。
それを確認し、キラと呼ばれた悪魔も魔力を放出して体に纏った。

「進。　あいつを助けたいのなら……負けるなよ」

「ああ、絶対に勝つ！」

まずはキラが仕掛けた。
速さで言えば、優也とほぼ互角と言ってもいい程の速さで地を駆け、進へと殴り掛かる。

「進！！」

「ぐえっ！？」

迎え撃とうとした進を、優也は襟を掴み、後ろへと放り投げた。
突然後ろに引っ張られたせいで、変な声が出たがキラの攻撃を躱す事が出来た。

「っ！　このっ！」

邪魔をされた事に怒りを覚え、優也に攻撃を仕掛けようとするが、それより早く、アランが優也に槍振り下ろしていた。
優也は刀を両手で支え、槍を受け止める。

「余所見をしていないで、自分の敵に集中しろ」
「あ～もう！　わかったよ！！」

キラは後ろに投げ飛ばされた進へと追撃をした。
優也は見向きもせず、キラを通した。

「止めないのか？」

槍を受け止めている状態ではキラを止める事が出来ないとは言え、少しは動きを見せるのではないのかとアランは思っていたが、優也は全くアランから目を離さなかった。
まるで最初からキラを止める気も無く、進と戦わせるつもりだった様に感じた。

「自分の意志でこんな所まで来て、自分の意志で皆を助けたいって言ったんだ。　なら、あいつは負けないさ」

俺もな、と付け加え、アランを見る優也の瞳には一寸の迷いもなかった。
それを見て、アランは数歩下がり、槍を低い位置で構え直す。

「そこまで言うのなら、勝ってみせろ！」

そして、その構えから、凄まじい速度の突きを放った。

（速い！　だが、低い！）

速度はかなりのモノだが、対策は単純で簡単なモノだった。
上から斬り伏せる。
それだけで槍は軌道が逸れ、床へと突き刺さる。
優也は考え通り、刀で迫り来る槍を上から斬り伏せた。
槍は簡単に軌道を逸れ、床に突き刺さった。

「甘い！」

優也が槍を斬り伏せると、更に一歩踏み出し、優也の顔面目掛け拳を繰り出す。
優也はそれを持ち前の反射神経で回避する。
だが、アランの攻撃はまだ終わらない。
攻撃を躱されると、槍を片手で振り上げた。

「っ！」

当たるか否かの、ギリギリのタイミングで反応し、上体を逸らしながら飛ぶ事で躱す事ができた。
だが、上体を逸らしながら飛んだ為、視界からアランが消えてしまった。
アランを視界に捕らえようと、空中で後転した。
そうする事でアランを確認できた。
だが、視界に捕らえたアランはあまりにも近く、今にも自分を真っ二つにしそうな勢いで槍を振りかぶっていた。

（マズイ！）

「ぬぅぅぅん！！」

力一杯、全力で槍を横一線に振り抜いた。
優也はこれまた反応し、刀で槍を受け止めるがここは空中。
どれだけ強靭な脚力を持っていようと、踏ん張る足場が無ければ宝の持ち腐れ。
加えて悪魔の強靭な腕力と言う最悪な組み合わせに、為す術がなかった。

「うあっ！！」

優也は吹き飛ばされ、壁へと激突した。
廊下と部屋を隔てていた壁は粉々に砕け、瓦礫と化した。
優也はその瓦礫の下敷きとなった。
地に降り立ったアランは槍を構え、ゆっくりと瓦礫の山に近付いていく。
この程度で倒せたとは思ってはいない。
だからこそ警戒は解かずに、一歩一歩近付いていく。
槍が届く距離まで接近したが、優也が出てくる気配は無い。

（まさかこの程度で終わる筈がないだろう？　火渡優也！）

そして、もう一歩踏み出し、瓦礫に手が届く距離まで接近した。
その瞬間、瓦礫が弾け飛び、アランへと襲い掛かる。
槍を高速で回転させる事で、瓦礫を全て弾いた瞬間、背後から気配を感じた。
アランは振り向き様に、その気配に向けて槍を振るう。
そして金属音が鳴り響く。
優也は瓦礫を吹き飛ばすと同時に、アランの背後に回り込んでいた。
この金属音は、優也が刀でアランの槍を受け止めて響いた音だった。

「フッ、中々速いな」
「あんまり誉められた気が、しないな！」

槍を受け止めた状態から、アランの鳩尾目掛けて蹴りを放つ。
咄嗟に片手で防御するが、蹴りの衝撃で地面を滑る様に後退させられ、先程壁に空いた穴から、少し広めの部屋に押し入られた。
漸く勢いが止まり、攻撃に移ろうと、次の手を考えようとしたが、そんな暇は無かった。
刀に炎を灯している優也が、視界に入ったからだ。

「“鳳凰激”！」
「ッ！　オォォォォォォォォ！！！」

迫り来る巨大な炎に、魔力を纏った槍で高速の突きを繰り出した。
炎の一点を集中して攻撃した為、炎は拡散し、服が少し焦げる程度で済んだ。

「ちっ、無傷か」

自分の得意技が通用しなかった事に、舌打ちをしつつ、アランを見据える。

「戦い方は変わったが、相も変わらず強いな」
「？　何の事だ？」

疑問符を浮かべる優也に、アランは帽子を取り、髪で隠れていた左目を優也に見せた。
隠れていた左目は、痛々しい刀傷があり、完全に閉じられていた。

「！　その傷、まさかお前！」
「そのまさかだ。　六年前の戦争の際、バロール殿の命令で人間界の偵察に訪れた時に、一度お前と戦っている」
優也の脳裏に過去の記憶が蘇る。
帽子も被っていなければ、無精髭を生やしてもいない槍を手にした男との戦い、左目を斬り裂いた記憶が。
「あの時撤退命令が出ていなければ俺は殺されていたかもしれん。　その時の事は今でも怒りとして俺の中に残っている。　幼かったお前に傷を負わされた事ではない。　決着も付けず、逃げ帰った自分自身への怒りがな」
アランは深く帽子を被り直す。
「この傷を治さないのもあの戦いを忘れない為。　そして今、決着を付ける機会が巡ってきた！　さぁ、火渡優也！　六年前の決着を付けよう！」
魔力を完全に解放し、アランは臨戦体勢に入る。
「……わかった、お前の望み通り…決着を付けてやる。　全力でな！」
魔力を解放したアランに対抗するかの様に、優也も朱雀の力を解放する。
この後にバロールが待ち構えているのに全力を出すと言うことは、優也からアランへの礼儀なのだろう。
「行くぞ！！」

「オォォォォ！！！」

赤い炎を纏った刀と、黒い魔力を纏った槍が激突する。
人間と悪魔、純粋な力比べならアランに分があるが、そんな単純なモノではなかった。

「はぁぁぁぁ！！！」
「なっ！？」

刀に灯った炎が、更に激しく燃え上がる。
炎が増した事で推進力が増し、その勢いのまま刀を振り抜いた。
押し負けたアランは、先程の優也と同じ様に壁へと激突した。

「まだまだこれからだ！」

高速で移動し、壁に激突したアランに追撃した。

優也とアランが激闘を繰り広げている中、進は。

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

全速力で逃げていた。

「あんなにカッコイイこと言っといて何逃げてるの！？　って言うか逃げ足速ッ！！」

進を追い掛けながら、キラは叫ぶ。
キラも全力で走っているのだが、中々追い付く事が出来なかった。

「ちょっと待って！！　三分位待って！　カップラーメン作って待ってぇ！！」
「三分も待ってたらウ○トラマンが帰っちゃうだろ！」
「ウルトラ○ン知ってんの！？」

進が逃げている理由はただ一つ、それは力の使い方がわからないのだ。
喧嘩の一度や二度は当然した事はある。
意外と勝率は良い。
だが、相手は悪魔。
能力を使わなければ勝てる相手ではない。

（何をしている小僧！　さっさとワシの力を使え！）
「使えって、やり方もわかんねぇのにどうやって使えば良いんだよ！！」
（む……）

中々能力を使わない進に痺れを切らした青龍は怒鳴るが、進の言い分に押し黙る。

（仕方がない。　良いか小僧、今からワシの言う通りにしろ）
「お、おぉ！」

走りながら、力の使い方について青龍に説明を受ける。

「待ててって……言ってるだろ！」

業を煮やしたキラは、黒い塊を進に目掛けて放った。
力の説明に集中していたことと、後ろからの攻撃と言う悪条件で、黒い塊に気付く事が出来ず、背中に黒い塊を受けてしまい、前のめりに倒れてしまった。

「！　いった……くない？」

確かに黒い塊は進の背中に命中した筈。
それなのに進にはダメージが全く無かった。

「これで君はゲームの参加資格を得た」
「ゲーム？」

妙な違和感を感じつつ、進はキラへと向き直す。

「今回のゲームのルール説明をしようか。　まず一つ目」

その瞬間、黒いドーム状の物体が、二人を包み込む様に展開された。

「な、何だこれ！？」
「ゲーム参加者は半径十メートルのステージから出る事は出来ない」

そして二つ目、と慌てる進を尻目に、キラは二つ目のルールを説明する。
二つ目のルールを説明し始め様とした瞬間、進とキラの頭上に、ゲージが現れる。

「このゲージが完全に無くなったプレイヤーは一時間行動不能になる」

「さっきから何言って……」

進が最後まで言い終わる前に、キラはある一言を言い放った。

「ゲームスタート」

進の目の前からキラの姿が消える。

進がキラを探そうとするが。

「ぐあっ！！」

背中に衝撃が走り、倒された事で中断された。

「あ、ごめんね。　ちゃんと最後まで説明しないとフェアじゃないね」

慌てて声がする方向へ顔を向けると、そこには蹴りを放った状態のキラがいた。

「この空間では、相手にダメージを与える度に頭上のゲージが減っていくんだ。　そして、このゲージが無くなった者は、ペナルティーとして動きを封じられる。　例え、どんな力があってもね」

キラの説明が終わると同時に、進の頭上のゲージ少し減った。

「僕が定めた規則を守りながら戦う。　これが僕の能力、完全な規則（パーフェクトルール）」

つまり、あの時ぶつけられた黒い塊は、この能力を使う為の条件の様なモノだったと言うことだ。

だがそこで、進は一つ疑問に思った。

「お前のその能力って、戦いのルールを決める能力なんだよな。
それじゃあ何でもっと自分に有利なルールにしなかったんだ？」

進の疑問は、キラにとって有利なルールではなく、フェアなルールにした。
今も進に自分自身の能力のことを話した。
キラはキョトンとした表情で答えた。

「だって、フェアなルールじゃなきゃゲームの意味がないでしょ？」
「……何だよそれ」

呆れ半分、感心半分で進が呟くと、キラは構え直す。

「さぁ、ゲーム再スタートだ」
「来い！」

その言葉と同時に、キラは駆け出し、進は横へ走り出す。

（慌てるなよ。　まずは……）

先程、青龍に訊いた力の使い方を思い返す。

『まずはワシと心を通わせる事だ』
『通わせるって、どうやって？』
『簡単だ。　ただお前の覚悟を心で強く念じれば良い。　その覚悟でお前はワシに耐えきったのだからな』

進はまず、自分の覚悟を強く心に念じた。

（どれだけ辛くても、俺は優也の隣で戦う！　そして、友達を守る！！）

「隙あり！」

高速で移動したキラは、進へと蹴り掛かる。

先程と同じ様に、全く反応出来ず、目の前の人間は蹴り飛ばされると思っていた。

だがそれは、進が自分の蹴りを躱した事で、その考えは打ち砕かれた。

「えっ！？」

今までとは全く違う反応に、キラは驚きを隠せなかった。

（一体何が……）

困惑し、立ち止まるキラを横目に、進はキラから距離を取る。

（これで良いんだよな！　青龍！）

（ああ、これでお前もワシの妖力を使える）

進の動きが急に良くなった理由、それは青龍と心を通わせる事で、進自身が青龍の妖力を使える様になったからだ。

（だが、それだけではあの悪魔には勝てん。　次にやる事は覚えているな？）

（おう、次は……）

走りながら、進の体をゆっくりと青い妖気が流れる。

『ワシと心を通わせる事に成功したら、次は妖気を解放しろ』
『妖気の、解放？』
『ワシがお前に妖気を送る。　お前はその妖気を体の内側から外に出す事をイメージすれば良い』

「おぉぉぉぉ！！！」
「！！」

進が叫ぶと、体をゆっくりと流れていた妖気は、勢い良く弾け、進の体を包み込む。

「くっ、何をするかは知らないけど、させないよ！」

負けじと、魔力を解放したキラは、全速力で進へと襲い掛かる。

「うっ！」

先程よりも速いキラの動きに反応しきれずに、顔面を殴り付けられる。
ダメージを喰らった事で、進のゲージが再び減る。
チャンスと言わんばかりに、キラは殴る、蹴るを繰り返す。
何とか防御出来る攻撃は防御出来るが、防御出来なかった攻撃が、何発も進の体に打ち込まれていく。

（くっ！　集中しろ！　これが最後だ！）

どんどん減っていくゲージをしっかりと確かめながら、戦う為の最後の行程に移る。

『最後は戦う姿をイメージしろ』
『このままの姿じゃ駄目なのかよ?』
『妖気を纏ったとしても、戦闘経験ゼロのお前が、悪魔に勝てると思っているのか?　付け上がるなよ。地味男』
『お願いだから地味って言うのはやめて!?』
『話を戻すぞ。敵は速さに自信があるようだ。ならば、それよりも更に速く動いてやれ』
『ど、どうやって……』
『ただ速い姿をイメージしろ。あとはワシが手を貸してやる』

(ただ速く。誰よりも速く。すぐに……友達の元に駆け付けられる位速く!!)
「これで、終わりだァ!!」

足に全ての魔力を集め、とてつもない速さで蹴りを放つ。
進のゲージは残り少なく、これを喰らえばゲージが無くなり、ゲームオーバーになってしまう。
だが、その蹴りは当たる事はなかった。
蹴りが当たる瞬間、進の姿がキラの目の前から消えた。

「なっ!?　ど、何処に!」
「こっちだ」

背後から進の声が聞こえ、慌てて振り返ると、そこには今までとは違う進の姿があった。
まずは黒かった髪や瞳は、深い青に染まり、手には青いグローブ、足には青いブーツを身に付け、腕と足には青い妖気が漂っていた。

(何だ?　あの姿は……)

突然変わった進の姿に警戒はするが、自分と進のゲージの差はかなり開いている。
あと数発、確実に攻撃を当てれば、進は身動きが取れなくなり、キラの勝利になる。
その考えが、キラに油断を生み出した。
進は片足を後ろに下げ、突進する体勢に入る。
それを見て、キラはため息を吐く。

「突進でもするつもり？　良く狙って当ててみなよ」

キラは自身の速さに自信があった。
一撃の威力は弱いが、手数で戦う事が、キラの戦闘スタイルだった。
その為、ただ真っ直ぐ突っ込んでくる突進を躱す事など、容易い筈だった。
一瞬で進の姿が再び消える。
次の瞬間、腹に衝撃が走ったかと思えば、キラは吹き飛ばされ、宙を舞っていた。

「ッ！　ガハッ！！」

背中から床に落ちたキラは咳き込みながら、腹を抑える。

（一体、何が……）

痛みを堪えながら、さっきまで自分が立っていた場所へ目線を向けると、そこには拳を前に突き出している進がいた。

（まさか、僕が反応出来ない速さで動いたのか！？）

進は自分よりも速く、移動していた。

それならさっき、自分の攻撃を回避した事にも説明が付く。

「そんな筈がない……。　人間ごときが、悪魔である僕を超える筈がない！！」

激昂しながら、キラは高速で進へと襲い掛かるが、視界から進が消える。

「ッ！！」

消えたと思った瞬間、脇腹に蹴りを入れられた様な衝撃が走る。
その衝撃の正体は、勿論進だ。
高速で移動するキラを上回る速度で移動し、キラを蹴り飛ばしていた。
横からの力の流れに逆らえず、キラは地に伏せる。

（戦える。　俺もやっと、皆を守れる！）

何とか立ち上がったキラに向かって、進は駆け出した。
その速さは、最早優也を超えていた。
一瞬でキラの目の前に移動し、アッパー気味に左拳をキラの腹部に叩き込んだ。

「ゴ…ハァ！！」
「まだだ！」

少し浮き上がったキラの腹部目掛け、蹴りを入れ、高々と蹴り上げた。
この時、キラの残りゲージは、初めの四分の一程度しか残っていなかった。

水が龍の様に逆巻き、進の右足にまとわりついていく。
そして、進は飛び上がった。

「おぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

覚悟を込めた右足を大きく振り上げ、キラへと狙いを定めた。

「ぬおぉぉぉぉぉ！！！！！」

アランは槍を高い位置から振り下ろす。
優也は体を捻り、難なく躱す。
そして刀を引き、構えたのは、突きの構え。
アランは突きを躱そうと身構える。
アランが突きに意識を集中した瞬間、優也は上体を低くし、炎の推進力で速度の増した拳を、アランの腹部に叩き付ける。

「ウッ……！」

大したダメージは無かったが、炎の推進力で速度が増していたことで、少したじろいでしまった。
その一瞬できた隙を、優也は見逃さなかった。

「“鳳凰激”！」

刀から爆発的に放たれる炎を、アランではなく、槍に向かって放つ。

その衝撃に、思わず槍を手離してしまう。

「しまっ……！？」

アランの意識が槍に向いた瞬間、アランの顎を、左フックで打ち抜いた。

いくら腕力が無い優也に殴られたと言っても、高速で顎を打ち抜かれたとあっては、脳が揺れてしまうだろう。

アランがまともに動けない隙に、優也は右足に炎の翼を羽ばたかせる。

「“鳳凰……」

左足を一歩踏み出し、回し蹴りの体勢に入る。

その頃、進も。

「“水龍！」

振り上げ、溜めに溜めた右足を振り下ろす体勢に入っていた。

そして。

『“爪牙”！！』

朱雀と青龍の爪牙が、二人の悪魔に炸裂した。

第４２話　炎の鳥と水の龍（後書き）

漆黒
「天よぉぉぉぉぉ！！！　俺に英語の力をぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」
進
「いきなりどうしたぁ！！？」
優花
「自分の英語の出来なささに嫌気が差したんだって」
進
「あぁ……そうなんだ」
漆黒
「キラの能力名……考えた結果があの様だよ。　もっと良い名前があった筈なのに……」
優花
「……それ以前に、国語力も無いよね？」
漆黒
「……ガクッ」
進
「とどめ指したぁぁぁぁ！！　つーか効果音、自分で言ってんじゃねぇよ！！」
優花
「え～と、作者がこんな状態なので、代わりに私が報告します。
今日からテスト一週間前なので、小説執筆が出来ないと思います」
進
「あぁ、進級が掛かったテストだもんな」
優花
「うん。　流石に今回ばかりは、出来るだけ勉強するらしいです。
息抜きに時々執筆するかもしれませんが、まず一週間では更新出

来ません」

進

「でも感想を送ったりは出来ると思います」

優花

「これからも、どうか『黒と白の物語』を宜しくお願いします」

進

「感想、投票待ってます！」

次回

第４３話　龍の咆哮

進

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第４３話　龍の咆哮

進とキラを閉じ込めていた黒いドームが消える。
それと同時に、黒い輪がキラを縛り、動きを封じた。
キラが定めたルール通り、進はキラのゲージをゼロにし、ゲームに勝利した。

「……雅の所に行かないと……」

始めての戦闘で、勝利したことに喜びを感じつつも、自分の目的の為に走り出そうとする。

「殺せ」

走り出そうとする進に、キラはそう言い放った。

「な、何言ってんだよ！」
「僕は負けた……。　バロール様のお役に立つ事が出来なかったんだ……。　そんな僕に、生きてる価値なんて……な……」
「無いわけないだろ！！」
「！」

突如の怒号に、ビクッと体を震わせ進を見る。

「生きる価値って他人に決められるモンなのか？　違うだろ！　自分の生きる価値は自分で決めるモンだ！！」

目を見開き、キラは進を仰視する。
たった今自分を殺そうとした相手に向ける様な言葉ではない。

それを、この人間は何処までも真っ直ぐな目をしながら、力強く言い放った。

「ハハハ……、君みたいな人間は、始めて…見た……よ……」

段々と声が小さくなっていったかと思えば、キラはぐっすりと眠ってしまった。

「……死んで……ないよな？」

『悪魔の生命力はお前達人間とは比べ物にならん。　この程度で死にはせん』

頭の中に直接青龍が話し掛けてくる。

その言葉に、進は安堵の溜め息を吐く。

「そっか、良かった。　にしても、寝てたらただの子供だな」

進の言う通り、眠っているキラは年相応の子供にしか見えなかった。

『小僧、あの娘の元へは行かんのか？』

「わかってるよ」

青龍の言葉に、今度こそ雅の元へ走り出す。

『小僧』

「何だよ。　つーか名前で呼んでくれよ」

『戦闘でワシを認めさせる事が出来たら呼んでやろう』

そんな事より、と青龍はある事を伝える。

『走りながらよく訊け。お前のもう一つの戦い方を』
「もう一つの……戦い方？」

第４３話　龍の咆哮

雅の背後の壁が、勢い良く弾け飛ぶ。
桃色の髪を振り回し慌てて振り返ると、初めに目に入ったのは、全身ボロボロで気絶しているアランと、刀を鞘に納めている優也だった。

「火渡優也……」

今にも襲い掛かりそうな雰囲気で、木刀を構える。

「……お前と戦うのは俺じゃない。　進だ」
「あいつが……私の相手？」

自分が戦う相手、それはボロボロになりながらも、何度も自分に立ち向かって来た男。

「あいつはお前を助けたいって言ってた。　だから、お前はあいつと戦うべきだ」

助けたい、その言葉に困惑を隠せない。

「あいつに……何が出来るのよ！」

確かに自分を助けたいと言っていた。
だがそんな言葉、信用できる筈がない。
どうせ自分のこの悪魔の力に、恐怖したに決まっている。
ここに来たのも、自分を倒して仲間を助ける為だけ。
裏切られるくらいなら、信用しない方がマシなのだ。

「あいつはやると言ったら必ずやる男だ。　だから、お前も進を信じろ」

「！！」

その時、雅の後ろの方から誰かが走ってくる音が聞こえ、そちらに目線を向けると、青い髪の少年が向かってきていた。
その少年は、雅から数メートル先で立ち止まった。

「進……か？」

見た目は違うが進の雰囲気を感じ、少し自信無さげに問い掛ける。

「そ、そうだけど……」

その返答を訊き、優也は一つの答えに辿り着いた。

「地味だからってイメチェンか？　見た目が変わっても地味な雰囲

気は変わってないぞ」
「だから誰が地味!?」

どうやらこの程度では、脱地味は不可能のようだ。

「冗談は置いといて」
「絶対冗談じゃないだろ!!」

二人に挟まれて話を訊いていた雅は、進が地味だと言うことについつい納得していた。

「進、ここは任せるぞ」

進とは逆の方向に、優也は走り出す。

「ま、待て!」

走り出した優也を追い掛けようと、雅は振り返る。

「待つのはお前だ!」

振り返ったその先に居たのは、さっきまで自分の目の前に居た進だった。

「（速い!）何よ……私はあんたに用なんて無いわよ……」

両手で木刀を構え、威嚇する。
雅の役目はバロールの元へと誰も近付けない事。
その役目を果たす為には、先へと進んだ優也を止めなくてはならない。

その為には進が邪魔なのだ。

「お前に無くても、俺にはあるんだ」

だが、進は一向に退こうとはしない。

「何よ……どうせ……私を倒して仲間を助ける事なんでしょ……」

自分は進にとってただの敵で、進は自分にとって敵であることを、自分の中で再確認する。

そうしなければ、進と戦う事など出来ないからだ。

「俺の用は……お前を助ける事だ！」

「！！」

そんな雅の考えは、脆くも打ち砕かれた。

進にとって雅は敵ではなく、助ける相手だったのだ。

「っ……何で……何で諦めないのよ……」

心の奥深くへと押しやった助けてほしいと言う感情が、少しづつ溢れだす。

「言っただろ。　絶対に諦めないってな！！」

そして、その感情は完全に溢れだした。

「……殺されるの……。　あの人に…協力しなかったら……あの子が殺されるの……」

堪えることが出来なかった涙が頬を伝いながら、雅はぽつりぽつりと自分とバロールとの間に起こったことを話していく。

「突然……私の前に現れて…協力しなかったら……あの子を殺すって言われて……私……どうする事も出来なくて……！　したくないのに……人を傷付けて！　でも、逆らえなくて……私に…あの人を倒す力が……無いから……」

「雅、もういい……もういいよ」

苦しそうに話す雅を見ていられなくなると同時に、怒りが込み上げてくる。

雅をここまで追い詰めた魔王を、力一杯殴りたくなる程に。

「進……タス……ケ…テ……」

途切れ途切れだが、間違いなく雅は『助けて』と、そう言った。

やっと心の内を話してくれた雅に、進は安堵の表情を浮かべるが、事態は急変する。

雅が突然、苦しそうに頭を押さえ膝を付いたのだ。

「あぁ……あぁぁァ！！」

「み、雅！？」

慌てて雅に近付こうとした瞬間、雅の体からとてつもない魔力が溢れだした。

溢れだした魔力は鞭の様にしなり、進へと襲い掛かった。

「うわっ！！」

咄嗟に腕を交差させ防御するが、完全に力負けし、壁に叩き付けら

れる。

『小僧！　大丈夫か！』

「な、何とか……。　それより、何だよ、あれ……」

壁に手を付きながら立ち上がる進の視線の先には、溢れだした魔力が触手の様に何本もうねっていた。

しかも触手の一本一本が、電柱の様に太い。

だが、それよりも目に入ったのが、雅の額に開かれていた『目』だった。

『……邪眼か』

「じゃ、邪眼！？」

悪魔の力を持っていようと、人間であることに変わりはない雅に何故邪眼があるのか。

それは、青龍に訊くまでもなかった。

「バロールが……」

『間違いないだろう』

自分が、優也が、皆が魔界で戦う理由を生み出した張本人。

雅が邪眼を使っていると言うことは、邪眼が使えるバロールが最も怪しい。

『何らかの条件で邪眼が発動する仕組みになっていたのだろう。

恐らく、あの娘が戦う意思を失った時に自動で発動する様にな』

「！！」

『助けて』そう言った雅の姿が進の脳裏に写る。

ギリギリと、進は歯軋りを鳴らす。

「許せねぇ……。　雅は本当の気持ちを言っただけだろ。　それなのに、何で苦しませてまで戦わせようとするんだよ……」

血が流れるのではないかと思うくらい、拳を強く握り締める。

「色んな人を操って、美優を連れ去って、雅をここまで苦しめて！　人間はお前の玩具じゃないんだぞ！！」

この場に居ない諸悪の根源に対し、怒りの矛先をぶつける。
初めはただ友達を守りたい為に力を求めた。
さっきまでは、苦しんでいる女の子を助ける為に戦った。
そして今は、

「決めたぞ……。俺は苦しんでいる人なら誰だろうと必ず助けてやる！！」

苦しんでいる誰かを助ける為に戦う。

「見てろよ魔王！　人間の底力を！！」

そして、青き龍は地を駆けた。

「アァァァァァァァ！！！！」

迫り来る進に向けて、天井を突き抜けた魔力の触手を振り下ろす。
青龍の力を解放し、速さと脚力に特化した今の進に、そんな大振りな攻撃など当たる筈もない。
触手が天井を突き抜けた事を確認すると、急ブレーキを掛け、一旦

静止し、振り下ろした瞬間に横へ飛び、難なく躱す。

「！！」

だが、躱した先には別の触手が進目掛けて、横薙ぎに振るわれていた。

「くっそぉおおおおおお！！！！」

突然の事態に対応する判断力も、危機察知能力もまだまだ未熟な進には、この攻撃を躱すと言う行動を実行する事ができず、左拳で殴り付けてしまった。

「ぐっ！！」

当然、力で勝てる筈もなく、簡単に弾き返されてしまった。

「いってぇ……！」

『小僧！　今のお前にあれを掻い潜るのは難しい。　さっき話した姿で戦え！』

このままでは勝ち目が無いと判断した青龍は、この場に辿り着くまでに話した、『もう一つの戦い方』で戦う事を進める。

「わかってるよ！」

進は目を閉じ、青龍に言われた姿をイメージする。

そして次の瞬間、身に付けていた青いグローブとブーツは水に変えた。

そしてその水は量を増やし、進の体を守る鎧へと姿を変える。

肩から肘、腰から足、上半身を半透明な水の鎧で覆い、手には青い手甲を、頭には龍をかたどった兜を装着し、そして左手には進の背丈を越す、柄に龍がとぐろを巻いている薙刀を手にしていた。

「って、薙刀ぁ!?　俺使った事ないんだけど！　しかも、思ったより重装備だし！！」

先程とは違い、明らかに防御に特化した姿。
進は重装備とは言っているが、進自身には対した重みはない。
だが、それよりも驚いた事は、今も握り締められている薙刀である。
まさか自分が武器を、それも薙刀を使うとは夢にも思っていなかったのだ。

『薙刀はただ振り回すだけで良い』
「もうちょっと詳しく教えて……！！」

詳しい使い方を聞き出そうとするが、触手が迫って来ている事に気付き、横に転がり、触手を躱す。
だが、その先にはさっきと同じように触手が待ち構えていた。

「あぁもう！　おぉらぁ！！」

ヤケクソになった進は、薙刀の柄の先端を握り、無我夢中で振り回した。
振り回された薙刀の刃からは、大量の水が溢れ、軽々触手を弾き返した。

「おぉ！？」

ここまでの威力があるとは思っていなかった進は、驚きの声をあげ

る。

『さっきまでの姿は防御を犠牲に速さと脚力を上げる姿。　そして今は速さを犠牲に防御と腕力を上げる姿だ』

「成る程！　よし、このまま押しきるぞ！！」

迫り来る触手を、水を纏った薙刀を振るい、次々と弾き返していく。

少しづつだが、確実に雅へと近付いていく。

そして、薙刀が届く距離まで接近する。

「アァァァァァァ！！！！」

雄叫びをあげながら、魔力を纏った木刀で斬り掛かる。

「おぉぉぉぉぉ！！！！」

斬り掛かってタイミングに合わせ、進は薙刀を振るう。

力が増した今の進相手に力で勝てる筈もなく、木刀を弾き返され、

木刀が手から離れる。

そのスキに、進は雅の両手を掴み、動きを封じた。

「雅！！　しっかり……雅？」

雅の顔を見て驚いた。

泣いてるのだ。

操られていても、理性を失っていても、雅の心は失ってはいなかった。

「ハナセェ！！！」

「っ！」

頭上から触手が振り掛かってきた事に気付くと、雅から離れ、後ろへ飛び退いた。

「……青龍、教えてほしい事があるんだけど……」

『わかっている。　どうやってあの娘を元に戻すか、だろう？』

しっかりと雅を見据えたまま、進はゆっくりと頷く。

『邪眼を打ち消す事が出来ればあの娘も元に戻るだろう。　その為にはかなりの妖気を消費して攻撃しなければならん。　邪眼を打ち消す程の妖力を使えば、お前はこの後戦う事が出来なくなる。　それでも良いな？』

つまり、雅を救う事が出来ても、美優を救う為に戦う事が出来なくなると言うことだ。

だが、進の答えは初めから決まっている。

「目の前で苦しんでる女の子一人助けられない様じゃ男じゃねぇ！」

例え力尽きようとも、助けると決めたからには何が何でも助け出す。

そう自分自身で心に決めたのだ。

「だから、力を貸せ！　青龍！！」

進の体から青い妖気が溢れ出す。

雅を助ける為に、全ての力を一撃に込める。

だが、その為には青龍の助けが必要だった。

青龍自身には雅を助ける理由もない。

敵の本拠地のど真ん中で、力を使い果たすような無謀な事を、果し

てしてくれるだろうか。
そんな進の心配は杞憂に終わる。

『愚問だな。　言った筈だぞ！　最期まで付き合ってやると！！』
「上等！！」

進が纏っていた鎧が、内側から弾け飛ぶ。
そして、青い妖気を纏ったグローブとブーツを身に付けた、速さ重視の初めの姿へ戻る。

「グオォォォォォォォォ！！！！」

その姿へと変わった瞬間、青龍が雄叫びを上げ、進の背後に現れる。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

青龍の出現に合わせ、妖気を解放する。
この場を覆いつくしそうな妖気に、雅は一瞬たじろぐ。
その一瞬を見逃さなかった進と青龍は、全力の一撃を放つ為に動いた。
青龍が進の周りを一周すると、進は触手が突き破った天井を越え、空高々飛び上がる。
それに合わせ、青龍も空に上がる。
上空に上がると、進の周りを水が取り巻く。
そして、青龍は勢い良く、進ごと雅へと襲い掛かった。
進が青龍に喰われそうな絵面だったが、喰われるどころか、進は青龍と一体化した。

「！！」

眼前に迫り来る青い龍に圧倒されながらも、目の前に触手を集め、防御体勢に入るが

「うおぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

何トンもの水が降ってきたような水圧で、その努力も水になる。
まるでガラスの様に、魔力の触手は粉々に粉砕された。
自分を守るモノが無くなり、為す術がなくなった雅に、激流が襲い掛かった。
轟音と共に砂ぼこりが舞い、床は大きくひび割れ、天井や壁は崩れ去り、辺り一帯廃墟の様な瓦礫の山と化した。

「っ……」

砂ぼこりの中、動く影が一つ。
進だ。
ゆっくりと立ち上がる進の足下には、額の邪眼が綺麗サッパリ無くなり、眠っている雅がいた。
服の所々が破れ、ボロボロだが、目立った外傷はなかった。

『よくあの一瞬で狙いを外したな』
「無我夢中……だったけど……な……」

触手を打ち破った瞬間、進は雅に当たらないように、体を捻り、直撃を避けていた。

『邪眼が消えてなかったらどうするつもりだ』
「消えたから良いだろ！」

ちょっとした言い争いをしていると、進の姿が力を使う前の姿に戻

った。

「あ……」

『力切れだな。　当分力は使えんぞ』

進の力が切れたと同時に、雅が声をもらしながら目を覚ます。

「雅！」

「すす……む？」

どうやらバロールによる洗脳も解けているらしく、安心した進は片膝を付き、雅の容態を問う。

「大丈夫か！？」

「う、うん……」

その言葉に、進は安堵の溜め息を吐く。

「よし、あとはバロールを倒すだけだな！」

「！」

バロールの名前を訊き、雅の表情は曇る。

「でも、あの人に……勝てるの？」

バロールの強さは良くわかっている。

本当に力が弱まっているのかと疑いたくなる程の魔力と戦闘能力の高さ。

あの優也でさえ歯がたたなかった程だ。

それでも

「大丈夫。　優也は勝つ」

優也が勝つと言うことを、進は信じて疑わなかった。

「優也は勝つ。　俺はそれを信じてる。　だから、雅も優也を信じろ」

優也に進を信じろと言われ、進には優也を信じろと言われた。
この二人は互いに信じ合っている。
その事に思わず笑みが零れた。

「とりあえず、ここから離れた方が良いな」

先程も言ったが、ここは敵の本拠地のど真ん中。
こんな所で暴れたのだ、いつ敵が来てもおかしくない。
進は立ち上がろうとしたが、その瞬間、突然体の力が抜け、前のめりに倒れてしまった。
雅の胸へと。

「……え？」

「え……？」

突然起こったこの状況に、何が起こったか理解できなかった。
だが、すぐに理解する。
胸を触られている事に。

「¢＃＝＊☆＆¥？£＄／／／／／／／／／／／／／／！！！！！？」

耳まで赤くし、解読不可能な日本語で慌てふためく。

「お、落ち着けぇぇぇぇ／／／／！！　そして俺も落ち着けぇぇぇぇ／／／／！！　まずは離れ……あれっ！？　体が動かねぇぇぇぇ！！？」

最後に放った技の後遺症なのか、体が全く動かなかった。
ついでに体中に激痛が走っているのだが、今はそれどころではなかった。
雅が右手を開き、今にもビンタしそうな勢いだったからだ。

「お、落ち着こう雅……。　一旦落ち着こう！　暴力よりも平和な解決方法があるから！」

何とか落ち着かせようとするが、今の雅には進の声は届かない。
そして

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ／／／／／／！！！！」

振り上げられた右手は、進の右頬へと炸裂した。

「ぶばらっ！！」

雅のビンタを喰らった進は、大きく吹き飛ばされる。
薄れゆく意識の中、呑気なことを考えていた。

（意外と胸でかいな……）

そして、進の意識はブラックアウトした。

「全く、人間と言う生き物は脆くて仕方がないな」

館のとある部屋、と言うには大きすぎる部屋で、バロールは一人呟いた。

「貴様もそう思わんか」

そう言い、入口であり出口である開かれた扉に目線を向ける。

「ハァハァ……」

その扉を開いたのは優也だった。

息も絶え絶えだったが、ハッキリと目の前の魔王に向かって言い放った。

「美優は返してもらうぞ！」

刀をバロールへと向け、睨み付けた。

「ククク、その娘ならほら、そこにいるじゃないか」

バロールが指差す先、そこには一人の少女が佇んでいた。

その姿を確認すると、優也はその少女へと駆け寄る。

間違える筈がない。

空の様に青い瞳も、黒い髪も、頭の白いリボンも、間違える筈がない。

「美優！」

自分達が魔界まで来たたった一つの理由、神道美優だからだ。
美優の目の前まで来て、違和感に気付く。
いつもの元気が無いことと、目が虚ろなこと。
そして良く見ると、空の様に青かった瞳は、薄く濁っていた。
まるで別人の様な変わり様に、優也は戸惑ってしまう。

「み、美優……？」
「……」

次の瞬間、衝撃的な言葉を言い放つ。

「貴方は……誰？」

第４３話　龍の咆哮（後書き）

漆黒
「何やかんやで更新しちゃいました」
仁
「留年してもいいのか？」
漆黒
「……頑張ります。　あ、進のデータです」

水野進

【解放状態：速】
妖力：Ｂ
攻撃力：Ｂ
防御力：Ｅ
コントロール：Ｄ
パワー：Ｅ
スピード：Ｓ
探知能力：Ｅ

【解放状態：剛】
妖力：Ｂ
攻撃力：Ｃ
防御力：Ａ
コントロール：Ｄ
パワー：Ｂ
スピード：Ｅ

探知能力：Ｅ

【水龍爪牙（すいりゅうそうが）：Ａ】

龍の様に逆巻いた水を足に纏い、蹴りを放つ。

速度重視の姿でしか使えない。

【我龍点睛（がりゅうてんせい）：ＳＳＳ】

進の最強技。

妖力を解放し、青龍と一体化して攻撃する。

進自体は蹴りの体勢で、敵は青龍の直撃と同時に進の蹴りも喰う。

威力は作品中最強レベルだが、妖気の殆どを使っているため、使用後は動けなくなり、技の反動で体を痛めてしまう。

技名は未登場。

漆黒

「技のイメージは仮面〇イダー〇騎のドラゴン〇イダーキックです」

仁

「長編もいよいよ佳境だ。　あとは俺と優也だな」

漆黒

「まだテストが終わってないので次回も遅くなると思います」

仁

「終わり次第執筆を開始する。　次回も見てくれ」

次回

第４４話　雷帝

仁

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第４４話　雷帝（前書き）

テストがやっと終わりました。
これからも宜しくお願いします！

第４４話　雷帝

美優が放ったその一言は、自分達がしてきた事が全て無駄だと言われている様に優也は感じた。

「お前……何言って……」

「娘。　その男は……」

困惑している優也を尻目に、バロールは美優に言い放つ。

「敵だ。　殺せ」

「はい」

「！？」

返事と共に、美優の体を眩い光が包み込む。

あまりの眩さに、優也は目を手で覆い、バロールは面白そうにその光景を眺めていた。

突然、光の中から何かが優也に向かって飛んでくる。

優也は咄嗟に飛び上がり、それを躱す。

光が収まり、段々と美優の姿が見えてくる。

「なっ……！」

美優の姿を見た瞬間、優也は驚愕する。

黒かった髪は純白の白に染まり、何より、ある筈のない白い翼が美優の背中に生えていたのだ。

その美優の姿はまるで

「……天使……！」

そう天使。
美優の中に眠っていた天使の力が、今目覚めた。

「洗脳し、天使の力を引き出すのは、中々骨が折れたぞ」

まるで高度な技術で造られた『玩具』を扱っていたかのような感想を述べるバロール。
見下している、それが優也の感想だった。
バロールにとって人間、悪魔以外の生き物は玩具にしか見えてはいないのだろう。

「あとはその娘に貴様を殺させるだけだ」

いや、それは自分以外の生き物なのかもしれない。

「っ！　バロールゥゥ！！」

激昂と共に走り出す。
バロールが人間に復讐しようとしている事なんてもうどうでも良い。
ただ友達に、仲間に、家族に殺しをさせようとしているバロールが許せない。
だから優也は走る。
目の前の、復讐等と言うくだらない幻想を夢見ている魔王を倒すため。
バロールは待ち構え、美優は優也を止めようとする。
まさに一触即発のその時、壁が弾け飛んだ。
突然の出来事に、優也は勿論、美優やバロールでさえ動きを止め、砂ぼこり立ち込める壁に目線を向ける。
次の瞬間、砂ぼこりから誰かが飛び出す。

黄色の翼に竜の様な姿。
そして、金色の髪に二丁の拳銃。
それは紛れもなく雷道仁であった。

「仁！？」
「優也か……」

優也の姿を確認した仁は、優也の隣へと降り立つ。

「申し訳ありませんバロール様。　ここまでの侵入を許してしまい……」
「別に構わん。　それよりも、気付いているな」

いつの間にか隣に現れていた自分の使い魔に驚くこともなく、美優を手招きで呼びながら仁を見る。

「あの金髪の小僧……純粋な人間ではない」
「えぇ、まだ確証はありませんが、十中八九そうでしょう」

その答えにバロールは面白げな表情を浮かべる。
まるで、新しい玩具を見付けたような。

「もしそうなら捕まえろ。　利用価値がある」
「ハッ！」

返事と共に仁へと向かって駆け出す。
美優もそれに合わせ、白い翼を羽ばたかせ、優也へと向かっていった。

「クックックッ、全く、人間と言うのは脆いが、面白い玩具だ」

洗脳した天使の少女、そして金髪の少年に不気味な笑みを向けながら呟いた。

「優也。　神道を気絶させろ」

向かってくる魔王の使い魔と、天使の少女を見据えながら優也に指示する。

「気絶させた後はバロールを倒して洗脳を解く。　そうだな？」

優也は指示をしっかりと訊きながら、その次の行動を確認する。

「ああ、そうだ」

互いに確認を取った後、仁は二人に向かって雷の銃弾を放つ。
レーザーの様に伸びた電撃は、命中する事はなかったが、二人を分散させる事に成功した。
横に飛んでレーザーを躱したクロウ・クルワッハを、大きな影が覆う。

「俺の正体が知りたいみたいだな。　聞こえたぞ」

バチバチと、腕から銃へと電気が走る。

「知りたいなら勝手に調べろ。　ただし、高く付くがな」

そして、雷撃を放った。

第４４話　雷帝

仁がクロウ・クルワッハを相手にしている頃、優也は美優と対峙していた。
勿論、いきなり手を出すつもりはない。
説得で元に戻ってくれる方が一番良い。
気絶させるのは最終手段と考えてはいるが、果たして今の美優相手に上手くいくか。
何はともあれ、自分がする事はただ一つ、美優を助ける事だ。

「美優！　いつまでそんな似合わない事してる。　さっさと帰るぞ」

刀は鞘に納め、戦闘の構えもとっていない。
つまり敵意は示していない。
説得を試みるのだ、これが当たり前だ。
だが、バロールの洗脳下にある美優がいきなり襲ってくる可能性がある。
それでも、戦闘体勢に入らなければ、警戒もしない。
家族に刃を向けたくはないからだ。

「帰る？　私の帰る場所はここ……」

いきなり襲ってくる事は無かったが、厳しい現実を突き付けられる。
それでも、諦めずに次の言葉を発する。

「薫も……心配してるぞ」
「……」

美優の親友の名前。
お互いを信頼し合って無くてはならない存在。
この名前を訊いて駄目なら、本当に最終手段に出なければならない。
そして、美優が口を開く。

「そんな人……私は知らない……」
「！！」

美優の左手が光輝く。
光が姿を変え、弓へと姿を変える。
説得に失敗したと言うことは、最終手段に移らなければならない。
暗い面持ちで、鞘から刀を引き抜く。
刀を抜き、美優を見据えた優也の表情は、決意に満ちていた。
例え説得に失敗しても、美優を助ける方法が無くなった訳ではない。
だから、暗い顔をするのは説得に失敗した時だけ。
例え不本意だったとしても、自分がどれだけ傷付こうとも美優を助ける。
その決意と覚悟を胸に、不死鳥の少年は地を駆けた。

「どうした？　威勢が良いのは初めだけか！」
「チッ……！」
正直言って仁は苦戦していた。
遠距離だと仁に有利な事は、仁の武器からわかること。
クロウ・クルワッハは、バロールの部屋に来る前から接近戦の戦法をとっていた。
バロールの部屋に仁が飛び込んで来たのも、クロウ・クルワッハが仁を吹き飛ばしたからである。
「ぐっ……！」
仁は腹部に蹴りを喰う。
だが何とか踏ん張り、銃口をクロウ・クルワッハへと向ける。
蹴りを放った一瞬のスキに、雷撃を撃ち込もうとしたが
「“黒嵐（ブラックストーム）”！」
クロウ・クルワッハの足元から嵐の様に、無数の黒い蛇が勢い良く渦を巻き、仁を弾き飛ばす。
「っ……！」
床に手を付き、スピードを緩めながら膝を付く。
「パワーもスピードも、完全に私が上のようだな」
膝を付いた仁を見下ろしながら、クロウ・クルワッハは仁の正体へと迫った。

「単刀直入に言おう。　お前は……人造人間だな」
「……」
表情を変えず、仁は何も言おうとしない。
何も言わないのを良いことに、クロウ・クルワッハは淡々と自分の推測を述べる。
「我が子を失った人間が、我が子を生き返らせようとしてお前を産み出した、と言ったところだろう。　間違っていたか？」
返答を待つ。
九割の確証はある。
今までクローン人間は多く見て来た。
だから普通の人間かクローンかは、大まかな見分けは付く。
ただ殆どは失敗作ばかりで、言語機能がおかしかったり、体の何処かに異常があるなど、成功例は全くなく、もし仁がクローンならば、ここまで完璧なクローンは見たことがなかったのだ。
その為、残りの一割を満たすためには、仁自身が認めるしかなかった。
「……良く気付いたな。　それとも俺が下手なだけか？」
「！！」
その返答には驚きを隠すことが出来なかった。
てっきり否定するとばかり思っていたからだ。
「否定しないんだな」
「どうせバレてるんだ。　隠す必要がない」

仁はゆっくりと立ち上がる。

「俺は失敗作だ。『あいつ』の様に笑うことも出来ない。『あいつ』の様な身体能力も無い。俺は『あいつ』の様な天才にはなれなかった失敗作。感情も無かった俺は人間じゃなかった」

だがな、と片方の銃を脇に挟みながら、ガチャガチャと弄くり回す。

「優也が俺を人間だと言ってくれた。それだけで俺は人間になれた」

ガチャン、と銃からまるで鍔の無い刀の柄の様に、形状が変化する。
もう一つの銃も、同じ様に形状を変える。

「!?」

すると、柄となった銃の銃口から、バチバチと電気が伸び、剣の様な姿を造り出す。
それを逆手で構え、雷鳴の銃士は雷鳴の剣士へと変わる。

「俺はあいつに仇なす存在全てを塵に消す雷帝。……雷鳴と共に塵となれ」

バチン、と音をたて、残像が残るほどの速さで、仁は一気に距離を詰める。
先程とはまるで別人のような速さに、クロウ・クルワッハは反応が遅れてしまう。

「クッ!」

咄嗟に、黒い蛇を纏った左腕で防御体勢に入るが、ズバッと斬れてしまった。
纏った蛇も、左腕も、紙の様に簡単に斬れ、ボトリと床に落ちる。

「グワアアアアアアアア！！！！」

あまりの痛みに絶叫しつつも、無くなった左腕を抑え、血を止めようとする。
溢れ出す血は止まる事なく床に流れ落ちる。

「どうした？　威勢が良いのは初めだけか」
「ッ！！」

お返しと言わんばかりに、先程言われた言葉を言いながら、雷鳴の剣を振るう。

「“黒嵐（ブラックストーム）”！！」

無数の黒い蛇が嵐の様に渦を巻き、クロウ・クルワッハを守るように包み込む。
だが、そんなモノ関係なく、雷鳴の剣は蛇を斬り裂いていく。

「何っ！？」

驚愕の声を上げるが、雷鳴の剣は止まる事はない。

「クッ！」

幸い太刀筋は高く、体勢を低くする事で回避した。
だが、回避したその先には、もう一つの剣が眼前に迫っていた。

「ぐあっ！！」

咄嗟に後ろに飛ぶが、躱しきれず、左肩を斬り裂かれる。

「ハァハァ……クッ！！」

蛇で左腕を縛り、止血をしながら、冷静に頭を働かせる。
仁が手にしている剣の切れ味は確かに厄介だが、それよりも厄介で、一番謎な事が一つあった。

（何故……突然速くなった……！）

突然な仁の加速だ。
さっき自分が言っていたように、パワーもスピードも自分が勝っていた。
それがここに来て、自分を超える速さを出したのだ。

（やはり、あの剣が原因か……？）

仁が加速したのは、あの剣を使ってからだ。
ならば、そう考えるのが妥当だろう。

「……」

バチバチと体に電気を走らせ、仁は再び高速で、真っ直ぐ突っ込む。

（馬鹿が）

真っ直ぐ突っ込むと言うことは、カウンターを受けやすい。

それが例え、高速であろうと。

（これだけのスピードだ。　こちらも高速で攻撃すれば、躱す事はできない！！）

魔力を拳へと集める。
そして、タイミングを測り、突きを繰り出した。
その突きはかなり速く、普通では躱わす事など不可能だろう。
そう、普通なら。
拳が仁の眼前に迫る。
当たった。
そう、クロウ・クルワッハは確信した。
その瞬間、腹部に鈍器で殴られたような衝撃が走る。
その衝撃の正体、それは、いつの間にか剣から銃に戻し、クロウ・クルワッハの腹部に銃口を突き付けていたのだ。

「ば、馬鹿な……」
「残念だが、終わりだ」

引き金を弾く。
ドッ、と衝撃が走る。
その瞬間、クロウ・クルワッハの体に、目に見えるほどの電流が走り、動きを封じられる。
それを確認した仁は、ゆっくりと歩き、距離を取る。

「カウンターで俺を倒そうとしたのは間違いじゃない。　だが、躱されれば何の意味もない」
「あのタイミングで……躱しただと……！」

あの時の攻撃のタイミングは完璧だった。

だが、仁にはそれを躱せるだけの目と能力があった。

「どれだけ速くなれても、それを生かす為の動体視力と反射神経が無ければ意味はない。　生憎、俺は視力には自信があるが、反射神経には自信がない。　だから、神経の伝達速度を速くした」

「！！」

つまり、仁の加速は、自分の能力である電撃を自分の神経に流すことで、脳からの伝達速度を上げ、自身のスピードと反射神経を上げたのだ。

その為、完璧なタイミングのカウンターも、その超人的な反射神経で躱すことができたのだ。

「無駄話はこれで終わりだ。　随分と魔王の部屋から遠ざかってしまったからな。　さっさと戻らせてもらう」

銃口をクロウ・クルワッハへと向けると、電気の輪が現れる。

そして、電撃が銃口へと集まっていく。

「“雷鳴弾”」

引き金を弾き、集められていた電撃が解き放たれる。

放たれた電撃は、真っ直ぐ身動きの取れないクロウ・クルワッハへと襲い掛かる。

「クソォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！」

全く身動きを取ることを許されなかったクロウ・クルワッハは、抗うことも出来ず、雷鳴に呑まれていった。

雷撃が消え、その場に居たのは、ボロボロで、虫の息だが確かに生

きているクロウ・クルワッハと、自分の信念を貫き、戦場に立ち続ける仁だけだった。

「確かに俺は『あいつ』のクローン。　それは真実だ。　だがな、それでも俺は雷道仁と言う一人の人間だ。　覚えておけ」

煙草を取り出しながら、聞こえているかもわからない相手にそう言い放った。
フラフラと歩き出しながら煙草を吸おうとするが、ライターを落としたのか、火を付けられなかった。
そして仁はその煙草を、今まで戦っていた自分の戦場へと放り投げた。
すると、仁は何かを思い出したかのように立ち止まり、振り返って言った。

「この事は……彪牙達には秘密だ」

ポトリと、煙草が床に落ちた。

第４４話　雷帝（後書き）

漆黒
「やっとテストが終わった～！」
優也
「それはどうでも良いけど、今回は遂に仁の正体を明かしたな」
漆黒
「（どうでも良いって……）そうだね。　この設定のイメージとしては、魔法少女リリカルなのはの、フェイト・テスタロッサをイメージしたんだけどね」
優也
「伏せ字は？」
漆黒
「後書きだから良いでしょ！」
優也
「良いのか……？　それと、仁が使ったあれは……」
漆黒
「ああ、あれか。　あれはＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲのキルア＝ゾルディックの神速（カンムル）をイメージしてみました。　まだ技の領域じゃないけど」
優也
「とことん伏せ字無しだな。　とにかく、ここまで読んでくれてありがとう。　この魔界編も段々終わりに近付いてきてる。　人気投票の締め切りももうすぐだ」
漆黒
「ご感想も待ってます！」
優也
「次回も見てくれ。　またな」

次回

第４５話　邪を打ち消す朱雀の炎

優也

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第４５話　邪を打ち消す朱雀の炎

目の前にいる黒衣の少年を、私は知らない。
薫と言う名の少女も、私は知らない……。
何で、薫と言う人が少女だって知っているんだろう？
何で、こんなにも懐かしく聞こえるんだろう？
何で、この少年と戦っていると、こんなにも胸が苦しいんだろう？

第４５話　邪を打ち消す朱雀の炎

上空からいくつもの光の矢が降り注ぐ。
降り注ぐ光の矢を、優也は刀で弾きながら躱していく。
躱す事は出来ても、近付く事が出来ない。
優也がいるのは地上。
それに比べ、美優は空中にいて、遠距離から攻撃を仕掛けているのだ。
そんな不利な状況で近付くことは難しい。
優也も朱雀の力を解放すれば、空を飛んで対抗することが出来るのだが

（まだだ、まだ使うわけにはいかない！）

優也には『使わない』訳があった。

（まずは、地上に落とす！）

漆黒の刀に炎が灯る。

「“斬炎弾”！」

炎を纏った刀を、美優に向かって振り抜く。

振ると同時に炎が刃となり、光の矢をかき消しながら美優に襲い掛かる。

これで美優を倒すつもりはない。

元々倒すつもりもないが。

とりあえずはこれで隙を突ければ、一瞬で距離を詰め、抱き付くなりなんなりで地上に落とせば、気絶させる事は容易い。

そう考えていた。

だが、そんな簡単に事が運びはしない。

美優が炎の刃に向かって手をかざす。

すると、かざした手から薄い膜の様なものが展開される。

「！　結界っ！？」

そう、優也が言う通り、美優が展開したのは結界だった。

炎の刃は結界を打ち破る事なく、四方八方に飛び散っていった。

勿論、美優には傷一つ無く、結界にもひび一つさえ無かった。

「この程度？」
「……」

生気を感じさせない冷たい目で、美優は優也を見下ろす。
美優の力がここまでのモノとは思っていなかった優也は、冷静なふりをしつつ、内心驚きを隠せなかった。
優也は接近戦が得意だ。
その為、自ずと技も接近戦に特化した技に偏っている。
その中でも、今放った“斬炎弾”は、優也の数少ない遠距離技の中でも、一番の威力を誇っている。
それが全く効かないとすると、やはり無理矢理でも接近戦に持ち込むしか勝ち目がない。

（空を飛んでる相手に無闇に突っ込めば、格好の的だ。　やっぱり、朱雀の力を使うしか……！）

いよいよ朱雀の力を使うしかないかと考えた時、美優がいる空中の位置に気付く。
天井スレスレ、そこで美優は漂っていた。
カチャリと、刀を構える。

（チャンスは一回。　これで決める！）

ゴウッと、勢い良く炎が刀に灯る。

「何をしても無駄」

左手の弓を優也に向け、弓を引く。
そして、矢を放つ。
放たれた矢は一本だけでなく、十本、二十本と、一度で複数の矢が

放たれた。
向かってくるいくつもの光の矢に向かって、優也は刀を振るう。
「“鳳凰炎舞”！」
刀から炎が放たれる。
その炎は刃ではなく渦となり、矢をかき消しながら美優へと向かう。
「何度やっても無駄……！？」
もう一度結界を張ろうとするが、美優はしなかった。
炎は美優に当たらずに、視界を覆うように渦を巻き、美優を通り過ぎていく。
（一体何を……？）
優也の意図が読めず、ただただ炎が消えるのを待つ。
そして、炎が消えて視界が晴れた時には、優也が目の前からいなくなっていた。
「何処に……」
消えた優也を探そうとするが、背後から聞こえる音に気付き、美優は振り返った。
振り返った美優の視界に入ったのは、壁を勢い良く駆け上がる優也だった。
「くっ……」
直ぐ様矢を放とうとするよりも、優也の方が速かった。

「“炎鳥”！」
「！」
美優に向かって火の鳥が飛翔する。
咄嗟に結界を張り、火の鳥を消す。
天井近くまで駆け上がった優也は、その一瞬に壁を蹴り、美優に向かって飛ぶ。
（空中じゃ躱せない。　倒せる）
突っ込んでくる優也に十を越える光の矢を放つ。
いくら優也でも、空を飛ぶことも出来ずに複数の矢を躱す事は不可能だ。
だが、今の優也にはそれが可能であった。
刀を天井に突き刺す。
「！？」
ガリガリと音をたてながら、スピードを緩める。
そして、右足に炎の翼が羽ばたかせ
「“鳳凰爪牙”！」
天井を蹴り抜いた。
蹴り抜いてできた天井の穴を通り、優也は上へ登る。
的を失った矢は、一本残らず天井に突き刺さる。
（しまった！　逃げられる！！）

天井を抜けて優也が逃げると思った美優は、急いで追い掛ける。
彼は逃げたのではなく、作戦を実行する為に上へ登った事を知らず。
突然天井が崩れる。
崩れた天井の奥から、火の鳥が降りかかる。
火の鳥と言っても、さっきの様な小さな鳥ではない。
この火の鳥は

「“鳳凰閃火”！」

優也自身なのだから。

「！？」

慌てて結界を張る。
さっきとは大きさも、威圧感も全く違うことを感じ取り、結界の強度を高める。
そして、火の鳥と光の結界が激突する。

「うっ！」

その炎の威力に、じわじわと押されていく。
それもその筈、優也は落下速度と炎の推進力を合わせて攻撃している。
その為、激突時の衝撃は何倍にもなる。

「！？」

結界にひびが入る。
まさか、結界にひびが入るとは思っていなかった美優は、戸惑いを隠せない。

「おおおおおおおおお！！！！」

結界にひびが入ったことその瞬間、優也は力を振り絞り、炎の勢いを強くする。

パリーンと言う音と共に、結界は砕け散った。

それと同時に炎が消え、優也が姿を現す。

そして、優也は美優の腕を掴む。

「は、離して！」

手を振りほどこうと、必死に抵抗する。

「誰が……離すか！」

だが、優也は美優を離さない。

優也は朱雀の力を解放し、翼を羽ばたかせ、美優の腕を掴んだまま地面へと急降下していく。

「くっうぅ！！」

美優も何とか抜け出そうとするが、あまりもの速度に、抜け出すことが出来ない。

抜け出すことが不可能だと感じた美優は、咄嗟に自分の背に結界を張り、落下時の衝撃を殺そうとする。

そして、二人は勢い良く床に激突した。

「っ……」

若干の痛みを背中に感じるが、結界を張っていたおかげで、大した

ダメージにはならなかった。
それに比べ、優也は衝撃をモロに受けていた。
優也の解放状態は、攻撃力と速さを高める代わりに、防御力を犠牲にしている。
だから落下の衝撃も、かなり体に伝わっていた。

「ハァハァ……やっと……捕まえたぞ……」

それでも、美優を離そうとはしなかった。
解放していた力を解き、刀を床に突き刺し、美優の両手を掴んで床に押さえ付ける。

「このっ！！」

美優はジタバタと暴れ、拘束を解こうとする。
元々の力が強いため、手を振りほどかれそうになるが、優也も強く力を込め、拘束を強める。

「いい加減目を覚ませ！！　お前はこのままだと、誰かを殺さないといけないんだぞ！」

美優を押さえ付けたまま声を張り上げる。
そう、優也が言う通り、このままバロールに洗脳されたままなら、美優は優也だけでなく、罪も無い人間を殺さなくてはいけなくなる。
自分の意志とは関係なく。

「殺しの罪がどれだけ重いか……お前にわかるか！？」

痛む体に鞭打ちながら、優也は必死に美優を押さえ付ける。

「一度殺しをすれば、一生その罪は消えない！　他人から人殺しと呼ばれ続け、復讐だってされる！　罪の意識に苛まれ続け、最後には心まで壊れる！！」

まるで、自分自身に言い聞かせているかのように言い放つ。

「殺しの罪を背負うのは……俺だけで良いんだ……。　お前まで……そんな罪を背負う必要はないんだよ！」

自分の罪を忘れない様に、誰かにこの罪を背負わせない様に、誰かを死なせない様に、そうして、本当は誰よりも優しい少年は戦い続けてきたのだ。

「うるさい……。　私はただ……命令に従うだけ……」

そんな少年の声も、洗脳された少女には届かない。

「っ……ふざけるな……」

怒りに、ギリギリと歯ぎしりが鳴る。

美優を守れなかった自分に対して、美優をこんな風にしたバロールに対して、様々に怒りを吐き出すかの様に、優也は叫ぶ。

「薫と優花がどんな気持ちでお前の帰りを待ってると思う！？　進がどんな気持ちでここまで来たと思ってる！？　皆お前のことを心から心配してるんだぞ！！」

「っ！！」

今まで暴れていた美優が、その叫びを訊いた瞬間大人しくなり、表情を歪ませた。

「お前も……あいつ等が悲しむ姿を見たくないだろ……」

消え入りそうな声でそう言った。

「……わからない。　わからないよ……」

「み……ゆ？」

突然、体を震わせながら、美優は呟いた。

「薫なんて人も知らない……。　優花なんて人も知らない。進なんて人も知らない！　なのに、なのに何で!?　何でこんなにも懐かしく聞こえるの!?　何でその人達のことを知らないことがこんなにも苦しいの!?　何もわからないよ!!」

コップから水が溢れ出すかの様に、美優の感情が溢れ出す。

「ねぇ教えてよ！　何で、何で！　貴方と戦うと、こんなにも胸が苦しいの……？」

ポロポロと、その曇った青い瞳から、涙が流れる。

「美優……」

例え脳を完全に洗脳されていようが、雅と同じく、心だけは洗脳されていなかった。

「う、うぅぅ……あああ……！」

すると、突然美優が苦しそうに呻きだす。

「おい！　どうした！」

慌てて容態を確認しようとするが

「あああああああああああ！！！！」

突如、美優の体から強い光が発せられた。

「うあっ！！」

まるで突風のような衝撃に吹き飛ばされ、優也は後方の壁に叩き付けられる。

「くっ……」

壁に手を付き、何とか立ち上がろうとした瞬間、右肩に光の矢が突き刺さった。

高温で熱せられた鉄を押し付けられているような痛みが優也を襲う。

それも体の外側だけではない。

体の内側も焼かれているような痛みだった。

「ぐっ……あああああ！！」

痛みに耐えながら、突き刺さった矢を引き抜くと、その焼けるような痛みは消えていった。

（何だ……今の痛みは！）

矢が熱を帯びていたわけではない。

体に火傷を負ったわけでもない。
それなのにとてつもない、異常な痛みが優也を襲ったのだ。
だが、そんな異常の正体を確かめる余裕などなかった。
何十本もの光の矢が雪崩のように、優也へと向かってきていたのだ。

「くっ！」

瞬時に横に飛び、光の矢から逃げる。
それでも、全てを躱し切れず、左の足首に一本だけ刺さってしまった。

「ぐっ……！」

同時に、あの異常な痛みが優也を襲う。
何とか足首から矢を引き抜き、未だ苦しそうに頭を抑えている美優を見る。
力が暴走しているようで、今まで以上に体から光が溢れ出ていた。
暴走の原因は、バロールの洗脳と美優の心が、美優の中で争っているからだ。
バロールの洗脳が勝つにしろ、美優の心が勝つにしろ、このままでは美優自身が壊れてしまう可能性もある。
早く助けなければ美優が危ない。
何より、苦しんでいる美優を見たくはなかった。
優也はゆっくりと立ち上がる。
気絶させるだけでは、美優を助けられる可能性は薄い。
ならば、バロールの洗脳を解くことが出来れば、美優を助けられる。
その為に、優也は無謀な行動を取った。
真っ直ぐ歩く行くだけ。
ただそれだけだった。
誰がどう見ても自殺行為にしか見えない行動。

だが、今の状況では最善の策でもあった。

「嫌ァァァァ！！！！」

優也に向かって、複数の光の矢を放つが、たったの一本も当たりはしなかった。
美優の力が暴走しているから、狙った通りに矢が飛ばないのだ。
これならヘタに躱すよりはマシだ。
それを優也が狙ったのかはわからないが、どちらにしろ、これで美優に近付く事が出来る。

「来ないで……来ないでよォ！！」

それでも猶、矢を放ち続ける。
その矢は優也に当たる事なく、後ろの壁や床に突き刺さり、その中を、優也はただただ歩いていく。

「美優、俺が初めてお前と会った日、お前に言ったよな」

歩いて美優に近付いていく優也の腹部に、遂に矢が突き刺さった。
刀は吹き飛ばされた際に、美優の近くの床に突き刺したままにしていたので、刀で矢を弾く事が出来なかった。

「っ……痛くも痒くもない……！」

またあの痛みが襲うが、優也は立ち止まらず、遂に美優の元へと辿り着いた。

「ハァハァ……お前は覚えてないかもしれないから……もう一度言ってやる」

そして、優也は美優を抱き締める。

「！！」

突然抱き締められ、美優は驚くが、先程とは違い、抵抗はしなかった。

「安心しろ。　何が来ようと、俺がお前を守ってやる」

二人が初めて会った日、優也が美優に対して言った約束。
その約束を、優也は忘れたことはなかった。
そして、優也は再び朱雀の力を解放する。

「美優、少し熱いけど……我慢できるな？」
「……うん」

そう言って、美優は優也の胸に顔を埋める。

「流石……」

朱雀の炎が、二人を優しく包み込んだ。

「ありがとう……優也」

炎が消えると、そこには髪が焼けて少し短くなっているが、外傷もなく、髪の色も元の黒に戻り、白い翼も無くなった美優が、優也の腕の中で静かに眠っていた。

「全く……世話がかかるな……」

美優をゆっくりと床に寝かせ、刀を手にする。

「ちゃんと……美優は返してもらったぞ。　バロール」

膝を付いたまま、優也は振り返る。

そこには、全ての元凶である魔王、バロールが佇んでいた。

「随分とボロボロだがな。　それで？　貴様はどうするつもりだ？」

「お前を倒す。　それで全部終わりだ」

立ち上がり、刀の切っ先をバロールに向ける。

「無理だな。　貴様はもう力を解放できないのだろう」

「……」

バロールのその言葉に、優也は押し黙る。

「その解放状態は長時間使用が不可能。　だから何度も解除したのだろう？」

バロールの言う通り、優也が初めから解放状態にならなかったのは、長時間の解放を維持することができないからだ。

「恐らく、解放していられる時間は、もって五分。　そんなところだろう」

「……」

優也は何も言わない。

人間界でバロールと、魔界でアランと美優と、その連戦で優也は力

を殆ど使い切ってしまったからだ。

「やはり人間は面白い。　大事な者と戦っただけで、こうも疲弊してくれるのだから」

「！」

バロールのその言葉に、優也は反応する。

その言葉はまるで、美優を利用して、自分を疲労させようとしているような言葉だったからだ。

「お前……まさか……」

今にも襲い掛かりそうな勢いで、優也は目の前の魔王を睨み付ける。

「我の玩具をどう使おうが、我の勝手だろう」

腕の力が一気に抜けたように、バロールに向けていた刀を降ろし、顔も下に向ける。

「美優を勝手に操って、美優を苦しませて！　それで玩具だと！？ふざけるな！！」

怒り、ただそれだけが、優也の心を支配する。

「わかったよ、バロール……。　お前は俺が……」

優也はゆっくりと顔を上げ、バロールを見据える。

瞳は血の様に赤く、右の眼球は

「殺す」

黒く染まっていた。

第４５話　邪を打ち消す朱雀の炎（後書き）

漆黒
「ふぅ～、戦闘描写は疲れる……」
優花
「お疲れ様です」
漆黒
「でも、何やかんやで美優を助けられたし、早目に投稿も出来たから良かったかな！」
優花
「そうですね」
漆黒
「あ、これが美優の能力データです」

【神道美優】

【解放状態】
霊力：Ｓ
攻撃力：Ｂ
防御力：Ｓ
コントロール：Ａ
パワー：Ａ
スピード：Ｃ
探知能力：Ｓ

優花
「もう少しで魔界編も終わりですね」
漆黒
「早い様で長かった。　あと三話程する予定だよ。　その後は後日

談を一話で日常編」

優花

「頑張って下さいね。　薫の出番が無いから……」

漆黒

「頑張ります……。　では、また次回！」

次回

第４６話　黒き夜叉の猛攻

優花

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第４６話　黒き夜叉の猛攻（前書き）

漆黒
「思ったより速く更新出来ました！」
薫
「何で今回は前書きに？」
優花
「後書きも本編と関係ある事を書いたから、後書きじゃなくて前書きで話すんだって」
漆黒
「そう言うわけです。　出来は良くないですが……」
薫・優花
「『黒と白の物語』、ご覧ください」

第４６話　黒き夜叉の猛攻

「っ！！」

魔界の入口付近で優也達の帰りを待っていた薫達。
すると突然、優花が表情を歪めた。

「優花ちゃん？　どうしたの？」

その様子に気付いた薫は、心配そうに優花の顔を覗き込む。

「ううん。　何でもないよ」

笑みを浮かべながら言う優花に、薫は大丈夫だと判断した。
その様子を、カイは観察する様に眺め、優也に起こっている事態に気が付いた。

（優花ちゃんのあの様子からすると、優也君の中の夜叉が目覚め始めたか。　さて、彼女はどうするのかな？）

遠い過去の記憶を思い出しながら、魔界へ続く入口を眺めていた。

第４６話　黒き夜叉の猛攻

「ホゥ、それが黒夜叉と言うモノか」

目の前の少年の雰囲気が突然変わった事に、驚きではなく感心を覚える。

先程まで殺気も持たず、誰も殺せなさそうな脆弱な少年が、当てられただけで気絶しそうな殺気を放てることにだ。

とは言え、バロールが気絶する筈もない。

逆に、余裕な態度を取っていた。

「今までよりは手強そうだが、その体で我に勝てるとでも思っているのか？」

余裕な態度の理由は、優也の怪我の具合だった。

ここまで来るまでに、優也は傷を負いすぎてた。

人間界ではバロールに、腹に風穴を開けられ、美優との戦いでは、右肩と腹、そして左足首に矢を受けた。

貫かれた腹の傷はある程度回復はしたが、完治はしてはいない。

力も殆ど使い切ったそんな状態で、魔王バロールと戦うなど自殺行為でしかない。

「何処からでも掛かってくるがいい」

そう言い、バロールは両手を広げる。

バロールは完全に油断し切っていた。

誰だろうと、自分に有利な状況ならば、油断の一つや二つはするだろう。
その油断が命取りになるとは知らずに。
バロールの視界から優也が消える。
消えたかと思えば、いつの間にか目の前で黒い刀を振り上げていた。

「！？」

慌ててバロールは杖を出現させ、黒い半透明な結界を張る。
火花を散らしながら、黒い刀と黒い結界が激突する。

「ムッ！！」
「……」

ビシッ！！　と音を立て、黒い結界にヒビが入る。
バロールを守る結界は、今にも崩れ去ろうとしていた。

「馬鹿なっ……！」

驚愕するバロールを尻目に、優也は刀を力一杯振り抜いた。
振り抜かれた黒い刀は、黒い結界ごとバロールを斬り裂いた。

「！」

真っ赤な鮮血が、バロールの体から飛び散る。

「……浅いか」

床を力強く踏みつけ、バロールはその場に踏み留まる。

「我の反応が後少し遅れていたのならば、我を倒せていたかもな」

斬り裂かれた胸の傷に触れながら、バロールは笑みを浮かべる。
どうやら刀はかすった程度で、大した傷にはならなかった。

「だが、マグレは二度もない」

手に付いた血を舐めとると、笑みが消え、真剣な表情へと変わる。
マグレだろうと傷が浅かろうと、傷を負わされた事は紛れもない事実。
バロールは優也を敵とみなし、力の差を見せ付けてやろうと決めた。
杖を空高々と掲げる。
掲げた杖の宝石が薄黒く光ると、バロールを中心に、足元から黒い魔法陣が広がっていく。

「“悪魔の聖域（デビル・サンクチュアリ）”」

魔法陣は優也の足元を通り過ぎ、バロールから半径十数メートル先で止まる。

（奴を中心に十三メートルと言ったところか。特別何かが変わると言うわけじゃないな）

全く表情を変えず、冷静に状況を分析する。
先程までの優也なら、少なからず動揺していただろう。
だが今は違う。
今の優也は、いつ死んでもおかしくない戦場を生き抜いてきた黒夜叉。
この程度の事では、動揺する筈がなかった。

「余裕ぶっていられるのも今のうちだ」

そんな優也の態度が気に入らなかったのか、バロールは怪訝な顔をする。

「雷よ」

その言葉と共に、杖の宝石から電気が発生する。

宝石から電気が発生したかと思えば、優也の足元からも電気が発生していた。

優也は即座にその場から離れる。

その瞬間、優也が居た場所に強烈な電撃が発生した。

「まだ終わりはしないぞ」

移動したその先に、再び電撃が発生する。

優也は立ち止まらず、駆け抜ける。

電撃は優也を追い掛けるように発生していく。

（この魔法陣の中でだけ発生する電撃か……。　なら魔法陣の外に出れば安全だな）

この技の分析をしていると、優也の目の前の床に、黒い炎の様なモノが円を作っていた。

優也がその円の中に入った瞬間、赤黒い火柱が上がり、優也を呑み込んだ。

「“悪魔の聖域（デビル・サンクチュアリ）”が、電撃を発生させる技だとは一言も言ってはいないぞ」

天まで昇る火柱を眺めながら、勝ち誇ったような表情で言い放つ。

「この魔法陣の中では、魔界の炎や雷等を瞬時に召喚することが出来る。　この魔法陣の中で、生き残る事は不可能だ」

火柱が消えると、そこには優也が着ていた黒のロングコートの切れ端しかなかった。

「フン、骨も残らず焼けたか」

これで邪魔者は消えた。
そう思い、魔法陣を消して立ち去ろうとした瞬間

「誰が焼けたって？」

焼けて消え去った筈の少年の声が、背後から聞こえた。

「何っ！？」

慌てて振り返るが、結界を張るよりも速く、腹を横一線に斬り裂かれた。

「グゥ！！」

今度は浅くなく、ボタボタと血が流れ落ちていく。

「真っ二つにしてやろうと思ったが、元から全身に魔力が通っていて斬れないな」

ブンッ、と刀で空を斬り、付着した血を落とす。

「貴様、何をした……」

斬られた腹を抑え、バロールは目の前の少年に問う。
火柱が上がったタイミングは完璧だった。
本来ならば、目の前の少年は焼け死んでいた筈。
それが焼けたのは、小さな体には不似合いなロングコートのみ。
焼き殺す筈だった少年自身には火傷一つ無かった。

「……ただ躱して背後に回り込んだだけだ」
「クックック……簡単に言ってくれる」

その返答に、自然と笑いが込み上げてくる。
優也は簡単に言うが、あの火柱を躱して、バロールに気付かれない様に背後に回り込むなど、至難の技である。
それもあの体で。
ここまで自分を苦戦させる相手が、子供であることに、バロールは笑いが止まらない。

「クククククク……良いだろう。　全力で相手をしてやろう。人間！」

杖を両手で握り締め、両目と、第三の目である邪眼を閉じ、祈る様に宝石を邪眼の前に持ってくる。

「“邪眼（イービル・アイ）・開眼”！」

カッ、と邪眼が開いたと同時に、バロールを黒い魔力が包み込む。

「……」

それを見て、優也はバロールへと斬り掛かる。
何かをしようとしている事は明らか。
ならば、その何かをしようとしている隙に殺そうと斬り掛かる。
そして、刀を横薙ぎに振るう。
刀は何も斬る事なく、魔力の中から現れた褐色の手で止められた。
バロールを包んでいた魔力が消え、バロールの姿が見えてくる。
杖は無くなり、肌の色は褐色になっており、邪眼の周りは黒い線が
何重にも重なり、ひし形になっており、黒い線は下まで続いていた。

「いくぞ」

刀を受け止めたまま、バロールは目にも止まらぬ速さで突きを繰り
出す。
優也は拳が自分に届く前に後ろに飛ぶが、躱せず、腹に拳がモロに
入った。

「っ……」

小さな体は、大きく後ろへと吹き飛ばされる。
優也は空中で後転し、何とか地に足を付ける。

「後ろに飛んで衝撃を弱めたとは言え、その体で我の一撃を喰らっ
て生きているとは、呆れた頑丈さだ」

突き出した拳を降ろし、魔力を練る。

「まだ終わりではないだろう？」

「……」

口から血を吐き捨て、優也は無言で刀を構える。

「そう来なくてはな！」

床が割れる程の力で地を蹴り、高速で優也との距離を詰める。
優也は横に飛び、バロールの直線上に入らない様にする。

「逃さん！」

直線の動きから無理矢理向きを変え、優也へと襲い掛かる。

（速い！）

今のバロールの身体能力は、先程までとは比べ物にならなかった。
恐らく、今の姿は咲魔と一緒で、抑え込んでいた力を解放した姿なのだろう。

「ハッ！」

突進した勢いそのままで、バロールは正拳突きを繰り出す。
突進してきた勢いで殴られれば、今度こそただではすまないだろう。
だからこそ、優也は超反応で回転し、突きを躱した。

「！」

そして、以前龍と戦った時と同じく、遠心力を生かし、バロールに斬り掛かる。

「フッ！」

バロールは腕を盾にし、刀を受け止める。

「！」

刀は腕を斬り落とせず、逆に掴まれてしまった。

「ちっ……」

軽く舌打ちをすると、攻撃を仕掛けられる前に刀から手を離す。
離すと同時にバロールの懐に入り、腹部に肘鉄を入れる。
そして、両手で掌低を喰らわせて弾き飛ばす。
少し後ろによろけるが、全くダメージになっておらず、刀も離してはいなかった。

「フンッ！　蚊に刺された程度の痛みも感じんな。　この程度で我を倒せるとでも……！」

そこで言葉を止める。
優也が回転しながら、回し蹴りを放ってきたからだ。
蹴りはバロールの頬を打ち抜く。

「グッ！」

バロールは思わず刀を離してしまう。
すかさず刀を取り戻し、バロールへ振り下ろす。

「ナメるな！」

素直に殺られるような魔王ではない。
右手で拳を作り、防御など無視して殴り掛かった。

「つッ……」
「っ……！」

刀はバロールの右肩へ、拳は優也の左頬へ吸い込まれる様に入った。
優也は地面を転がるが、床に手を付き、すぐに立ち上がる。
バロールは肩から血が、止めどなく溢れ出すが、優也から目を離そうとはしない。

「中々楽しい時間だ。　ここまでやれるとはな……」

内心、バロールは楽しかった。
自分と殺し合いが出来る人間と、戦える事に。

「別に楽しくなんてない。　俺はお前を殺せればそれで良い」

対して優也は、言う筈のない『殺す』と言う言葉を放つ。
もう優也は、敵を殺す事しか頭にない。
それが優也の狂気、黒夜叉なのだから。
刀を握り締め、バロールに向かって行こうと、足を踏み出す。

「！！」

その瞬間、ガクッと体から力が抜け、膝を床に付いた。

「！　……限界か……」

バロールの言う通り、優也にはもう戦う体力など残ってなどいない。
先程も言ったが、人間界で貫かれた腹は、まだ完全には完治していない。

そこに攻撃され、あれだけ激しく動いたのだ、古傷の一つや二つ、開いてもおかしくはない。
その証拠に、腹からはおびただしい量の血が流れ落ちている。
その上、連戦に次ぐ連戦、そんな状態で立っていること自体、奇跡に近かった。

「所詮、人間が我に勝てる筈もなかったと言うことだ。　それが例え、何度も蘇る朱雀であろうとな」

バロールの邪眼に、禍々しい魔力が集まっていく。

「終わりだ。　朱雀」
「！」

優也を中心に、魔法陣が展開される。
急いで魔法陣の外に出ようとするが、血を流し過ぎた為に、体に力が入らない。

「！　あれは……！」

そこに、クロウ・クルワッハを倒した仁が駆け付けるが、駆け付けた時にはもう遅かった。
魔法陣からの攻撃が、発動寸前だったからだ。

「優也！！」

優也を助けようと走り出すが、仁からバロールまでは距離が離れている為、いくらなんでも間に合わない。
そして、バロールの邪眼が大きく開く。

「“破壊の眼差し（イビル・デストラクション）”」

そして魔法陣は優也を巻き込み、爆発した。

砂ぼこりが舞い、視界を覆う。

砂ぼこりは時間が経つにつれ、だんだんと晴れてくる。

完全に砂ぼこりが晴れ、仁が初めに見たのは、もう床とは呼べなくなった瓦礫の中で、死んだように横たわる優也だった。

第４６話　黒き夜叉の猛攻（後書き）

―また守れなくてもいいの？―

―君の守りたかった者はいつも君の手から滑り落ちていった―

―それを繰り返してもいいの？―

―守ると誓ったばかりの彼女を守りたいんでしょ？―

―守りたいよね―

―なら早く目覚めなさい―

―闇はいつでも君と共にあるから―

次回
第４７話　闇の目覚め
？？？
「全ては闇から始まる」

第47話　闇の目覚め

真っ暗で、だが自分の姿ははっきりと見える、ただただ漆黒の世界。
そんな世界で、優也は目が覚めた。

「ここは……」

明らかにバロールと戦っていた場所ではない。
何より、自分の姿だけはっきりと見える空間など、そうあるものではない。

―ここは君の精神世界だよ―

「！　誰だ……」

漆黒の世界に、突然声が響き渡る。
声の質からして、女だろうか。

（この声……何処かで……）

その声に、優也は聞き覚えがあったのだが、何処で聞いたのか思い出せなかった。

―こっち。　君の後ろ―

優也は後ろに振り向く。
声の通り、そこには誰かが居た。
その人物の第一印象は黒、それだけだった。
背は優也と同じ位で、髪は地面に付きそうな程の長さの黒で、優也

と同じく、黒衣で身を包んでいた。
こんなにも真っ暗な空間なのに、何故黒一色の人物の姿が、ここまではっきりと見えるのか、不思議で仕方がなかった。
だが、姿は見えるのに顔だけは見えなかった。

「誰だお前。　ここが俺の精神世界ってどういう……」
「聞きたいことは沢山あるだろうけど、時間がないから単刀直入に言うよ」

空間に響いていた声ではなく、目の前の人物から発せられる声に、優也の言葉は遮られる。

「また負けたね」

その女性は、優也とバロールの戦いの結果を話す。

「このままじゃ、君はまた守れないよ。　大切な人を」
「！」

優也の脳裏に美優や進や薫、仲間達と、過去に守れなかった人が写る。

「でも、今の君じゃあ彼には勝てない。　私の言いたいことはわかる？」
「……何度戦っても……無駄って事か……」

力の差はわかっている。
朱雀の力も通用せず、忌み嫌っていた黒夜叉の力も、バロールには及ばなかったのだから。
それでも戦ったのは、守りたいモノがあったからだ。

「そう、“今の”君じゃあね」

女性は、“今の”を強調する。

「……完全に……黒夜叉に戻れって言いたいのか？」

今の優也は、戦争の頃に比べればかなり弱くなっている。

それは龍との戦いで証明済みだ。

そんな優也がバロールに勝つ方法など、数え切れない程の命を奪ってきた、『完全な黒夜叉』になるしか、考え付かなかった。

「ん～、それも一つの手段かもしれないけど違うよ。　君にはもう一つの力がある」

「！　もう一つの……力……？」

耳を疑った。

炎の力は朱雀から借りているようなモノで、自分自身の力は誰かを殺す事しか出来ない力だけだと思っていたからだ。

「見ず知らずの他人の言葉を信じると思うか？」

もう一つの力。

それを使えることが出来れば、バロールにも勝てるかもしれない。

だが、こんな訳もわからない空間で、たった今出会った女の言葉など、そう簡単に信じるわけにはいかない。

「信じるも信じないも君次第。　魔王に勝つも負けるも君次第」

「……」

信じればバロールに勝てるが、信じなければ負ける。
まるで一択しかない二択問題だ。

「さぁ、君はどちらを選択する？」

女は、優也へと手を差し出す。

「この手を取らなければ、全てを失い、待ち構えるは死。　この手を取れば、全てを守れ、待ち構えるは更なる地獄。好きな方を選びなさい」

女のこの手はまるで蜘蛛の糸。
掴めば今の苦しみから解放される。
だが、待ち構えるのは天国ではなく更なる地獄。
やはりフェアな二択ではない。

「どっちにしろ地獄……。　だったら、初めから一つだろ」

守っても地獄、守れなくても地獄。
なら、優也が選ぶ地獄は一つしかない。
力強く、更なる地獄への蜘蛛の糸を握り締めた。

「……良いんだね？」

表情は見えないが、女は何処か心配そうに訊ねる。

「守れない地獄なら……守り続けられる地獄を選ぶ。　そして乗り越える！」

その言葉を訊くと、女が笑ったように見えた。

次の瞬間、優也の足元から闇がまとわりつく。

「な、何だ!?」

慌てて振り払おうとするが、全く振り払える気配がしない。
それどころか、闇はどんどん上へと登ってくる。

「今は眠って。　次に目が覚めた時には力に目覚めてるから。　後ついでにサービスしておくから」

闇が優也を呑み込んでいくと、それに比例し、優也の意識が薄れていく。

「安心して。　闇は常に君と共にある」

その言葉を最後に、優也の意識は完全に消えた。

第４７話　闇の目覚め

爆煙立ち込める中、バロールはゆっくり視線を、死んだように眠る

優也から、銃口をこちらへ向けている仁へと移す。

「貴様が弾丸を放たなければ、あの子供を跡形もなく粉々に出来たものを……」

バロールが技を発動するその時、仁はバロールの脳天目掛けて銃弾を放っていた。

発動を止める事も、バロールを倒す事も出来なかったが、弾丸を躱す事で一瞬意識が技の集中から逸れ、優也が死ぬと言う最悪の事態は避ける事が出来た。

「それで？　貴様はたった一人でどうするつもりだ。　我の駒となって生き延びるか？」

雷のレーザーがバロールの顔のすぐ横を突き抜け、壁を粉砕する。

出所は仁の銃口以外にありはしない。

「優也が眠っていて好都合だ。　お前を殺すにはな」

いつもの無表情で、バロールを睨み付ける。

無表情なのだが、何処か怒っているように見える。

「人形ごときが……我と戦う事自体無謀だと知れ！」

二人は向かい合い、今に激突しようとしたその時、強大な力が辺りを覆い尽くす。

「！」

「っ！　これは……！」

気を抜けば圧し潰されてしまいそうな力に、バロールは動きを止める。
それに対し、仁には圧し潰されそうな力を感じなかった。
逆に護られているように感じていた。
そして、仁は目にした。
バロールの背後で立ち上がった少年を。

「優也？」
「何っ……」

仁の呟きに、バロールは振り向く。
振り向いた先には、倒した筈の少年、火渡優也が、強大な『霊力』を放って立っていた。

「何故……立っている……！」

いくら何でも、立っていられる筈がない。
確かに攻撃は命中した。
何よりあの体だ。
本来なら意識がある事自体有り得ない。
なのに、今まで以上の『霊力』を放ち、立っているのだ。

「何なんだ……貴様は！？」

思わず、声を荒らげる。
何度倒しても立ち上がり、更に強大な『霊力』を放っている優也に、恐怖を抱いたのだ。

（あれは妖気じゃない、霊気だ。何故優也が霊気を使えるんだ……）

優也が放っているのは、妖気ではなく霊気。
普通、聖獣と契約した人間は、霊気が妖気に変換される。
それは聖獣の力を扱う為に必要なことだ。
実際、仁も正も、ついさっきまでただの人間だった進も、霊気ではなく妖気を使っている。
それは優也も同じこと。
それが今、当たり前のように霊気を使っていたのだ。

（それにこの感じ……朱雀の力でもなければ、黒夜叉でもない……。　何があった……）

優也の身に何が起こったかを仁は考える。
それがいけなかった。
バロールが優也に襲い掛かった事に反応するのに、一瞬遅れてしまった。

「（しまった！）優也！！」

今から銃口をバロールに向け、引き金を引くには、あまりにも反応するのが遅すぎた。
バロールは既に眼前へと迫っているが、優也は微動だにしない。
接近にも、仁の声にも気付いていないのか、躱すだけの体力が残っていないのか、それとも意識が無いのか。
どちらにせよ、このままではバロールにとどめを刺されてしまう。

「死ねっ！」

魔力を右手に纏い、鋭い刃と化した手刀が、優也の首筋へと振り下ろされる。

手刀は首を斬り裂き、優也の頭と体は二つに別れた。
そんな結果が、バロールの脳内ではあった。
だが、それは現実にはならなかった。
斬り裂く対象である優也が、初めからそこにいなかったように消えてしまったのだ。

「な、何処に……！」

バロールは辺りを見渡して、優也を探すと、すぐに見付かった。
バロールの背後であり、仁の目の前でもある場所で、先程と変わらぬ体勢で立っていた。

「っ……チョコマかと……！」

苛立ちだしたバロールは、再び優也の足元に魔法陣を展開させる。
“破壊の眼差し（イビル・デストラクション）”、さっき放った技だ。
この技をもう一度喰らえば、もう二度と立ち上がることは不可能だと考え、対して魔力を込めず、すぐ様発動しようとした。

「ちっ！」

もう一度引き金を引こうとするが、思った以上に技の発動が早く、間に合わない。
何より仁には、拳銃で相手よりも速く風船を割る早撃ちゲームのような、早撃ちの技術（スキル）はない。
今から引き金を引き、弾丸がバロールに届く前に、再び爆発が起きているだろう。

「くそっ！」

また守れないのか。
あの時と同じで、ただ見ているだけか。

「っ……優也ァ！！」

魔法陣の中心にいる優也へと向かって、仁は走り出す。
自分がどうなろうと、優也は助ける。
仁が走る理由など、それだけで十分だ。

「消えろ。“破壊の（イビル）……”」

その瞬間、魔法陣は爆発せず、二つに裂けた。
その光景に、仁もバロールも呆然とする。
ひとりでに魔法陣が二つに裂けたわけではない。
魔法陣がターゲットにしていた少年の手によって、真っ二つに斬り裂かれたのだ。
真っ二つにされた魔法陣は、効力を失い、塵となって消えていった。

「馬鹿な……こんなことが……！」

目の前の現実が信じられなく、バロールは後退りする。

「バロール……もう終わりだ」

立ち上がって初めて優也が声を発する。
声を発すると同時に、優也の体から黒い気のようなモノが溢れ出す。
すると、優也の傷が、急激に治癒していった。

「傷が……！」

その現象にバロールは驚くが、傷が治っただけで黒い気の動きは止まらない。
その黒い気は、優也が着ていた黒のロングコートと、同じ姿を形成していく。
そして最後に、黒い気をその身に纏った。
黒かった右の眼球も元の白に戻り、その紅い瞳で

「闇に堕ちろ」

バロールを睨み付けた。

「黒い……霊気……」
「まさか……その力は……」

優也は確かめるように地面を三回蹴る。
そして四回目に地面を蹴ると同時に、バロールの顔面を、刀の峰で殴り付けていた。

「！？」
「ぶっはぁ！！」

目にも止まらぬ速さに、バロールは全く反応出来ず、鼻の骨を折られてしまう。

（速い！　いや違う。　今のは奴の隙をついたのか）

動体視力だけなら、優也や正、バロールにも勝っている自信があった仁には、今の動きが見えていた。
初めてバロールが優也と戦った時に使用した戦法と同じだ。

相手の隙をついて近付く戦法と。
何度か地面を蹴っていた時に、バロールには一瞬隙が生まれていたのであろう。
とは言え、速い事には変わりはない。

「貴様……その力……」

ゴキンッと、折れ曲がった鼻を元に戻しながら、驚愕の表情で優也に問う。

「何故、朱雀の力を持つ者が闇の力を使える!?」
「やはりそうか……」

今まで黒い霊気など、仁は見たことがない。
バロールの言う通りだとすれば、あの黒い霊気の事も説明が付く。
傷が治った事も、説明が付くと言えば付くのかもしれない。
闇の力は謎が多い力だ。
傷の一つや二つ、治ってもおかしくない。

（闇……。　それが、優也自身の能力（ちから）か……）

あまりにも不似合いな能力だと、仁は内心思っていた。
本当は誰よりも優しく、自分達を闇の中から引きずり出してくれた少年が、闇自体を身に宿している事に。

「……お前がそれを望んだと言うのなら……それで良いさ」

銃をしまい、寝かされている美優を守るように、傍に立つ。

「必ず勝て」

美優を守りながら、戦う意志を示している優也を見守る。
それが今、仁に出来る事だった。

「我が……人間ごときに遅れをとるだと……」

バロールの心は怒りに満ちていた。
人間が自分より強い事が許せない。
峰打ちで攻撃された事も許せない。
今のバロールには、人間やカイの復讐など頭には無い。
目の前の子供を殺す事しか頭に無かった。

「我は魔王だ！　貴様のような人間の子供に敗北するはずがない！！」

激昂と共に、バロールは怒り任せに襲い掛かる。
怒り任せの突撃など、自ら敗北しに行くことを知っている筈なのに。

「オオオオオオオオ！！！！！」

怒りで握り締められた拳で殴り掛かる。
大きく振り上げられた拳は、初動が大きすぎた。
突き出された拳は、優也を捉えず、空を切る。

「大振り過ぎる。　冷静さを失ったか」

難なくバロールの拳を躱し、右足に力を集中させる。
そして足首には炎の翼、ではなく、漆黒の翼が現れる。

（黒い！）

「“鳳凰爪牙”」

バロールの腹に、回し蹴りを放つ。

「ガハッ！！」

まともに蹴りを喰らい、バロールは大きく吹き飛ばされる。

「プライドのせいで冷静さを失うのなら、そんなモノは捨ててしまえ」

薄く開かれた目が、バロールを見据える。

「くっ、黙れ！　我は魔王だ……。　人間に負ける筈がない。負ける筈がないんだ！」

魔王としてのプライド。

それを傷付けられたバロールには、冷静さを保つことが出来ない。

何より、今の優也に、純粋に力で負けている事を、心の何処かで認めていたからだ。

「その怒りも憎しみも、全てを焼き尽くす」

真っ赤な炎が、荒々しく優也の刀に灯る。

「舞い上がれ、真紅の翼。　闇を切り裂く炎となれ」

刀に灯された炎は、詠唱と同時に大きく燃え上がる。

「！　待て！！」

これから放つ技は優也の最強の技。
確かにバロールに有効だが、今の優也が放つには一つの問題がある事に、仁は気付くが、優也は止まらない。

「“炎帝・鳳凰衝”」

刀から放たれた炎は、巨大な火柱になり、バロールを呑み込む。

「グッ……アアアアアアアアア！！！！」

あまりもの熱に、バロールは声をあげる。
同時に、邪眼の力が薄まっていく感覚を感じていた。

「（負ける？　何故だ。　何故我は人間に勝てん？　三百年前も、八年前も、今も、何故……）勝てんのだアアアアアア！！！！」

火柱が朱雀へと姿を変える中、優也の姿がある女性の姿と重なるのを、バロールは見た。

「ヒワタリィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィ！！！！」

絶叫しながら、その女性へと手を伸ばす。
手を伸ばしている相手が、優也だとは認識出来ずに。
そして朱雀は、バロールの叫びと共に、魔界の空へと消えていった。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

優也が纏っていた闇が、塵となって消える。

ロングコートは消える事なく、風に靡いている。

「はぁはぁ……勝った……やっと、勝ったぞ！」

優也の視線の先には、体中火傷だらけで気絶しているバロールがいた。

「……優也！」

少し怪訝な表情をしながら、仁は優也の元へと駆け寄る。

「随分とボロボロだな」

「はぁ……うる、さい……」

かなり疲労しているが、ちゃんと言い返せる元気があることを確認した仁は、表情を和らげる。

すると、バロールの隣の空間が裂け、そこから一人の白いローブを身に纏い、フードで顔を隠した女性が現れた。

「！」

「誰だ……」

突然現れた女性に、二人は警戒する。

「私はケフレンダと言う者よ。　安心して、戦う意志は無いわ」

ケフレンダと名乗った女性は、戦う意志を見せず、バロールの隣に腰を下ろす。

「この戦いはこの人の負け。だから、どうかこの人の命だけは見逃

してあげてほしいの」

ケフレンダは二人に頭を下げる。

「そいつがまた人間を襲う可能性がある。　このまま放っておくわけにはいかないな」

「無理を承知でお願い。　何なら私の命も差し上げるわ。　彼はまだ死んではいけないの」

仁の言うことが正しい。

生かせば、またこんな事を繰り返す可能性が大いにある。

ならば今殺す事が一番だ。

「駄目だ。　こいつはここで殺す」

「待って！　お願い！　この人は……」

が、と仁は付け足す。

「俺の考えだ。　どうする優也？」

そう言い、隣の優也へと質問する。

優也の答えは決まっている。

「バロールは……殺さない。　元々……殺すつもりも無いからな……」

刀を鞘に納めながら、静かに言う。

「良い、の……？」

ダメ元で頼み込んだのだが、まさか、本当に許されるとは思っていなかった。

「別に、そいつを許したわけじゃない。　そいつがまた何かしたら、また倒すだけだ」

行くぞ、と仁に言いながら、美優の元へと優也は歩いていく。

「……ありがとう」

涙を流しながら、ケフレンダは優也に対して感謝の気持ちを伝えた。

「やっと……終わったな……」

「ああ、早く人間界の空気を吸いたいな。　あと煙草も」

遂にバロールとの戦いに勝利し、美優を取り戻せた事が優也は嬉しかった。

「仁……ありがとう……」

美優を取り戻せたのは、自分一人の力ではない。

その事をよくわかっていたからこそ、仁に礼を言う。

「危ない橋を渡るのは三人一緒だろ。　正は迷子で、三人じゃないけどな。　ちゃんと正と流香にも礼を言えよ」

「うん……わかってる」

なら進にも礼を言わないとな。

そんなことを心の中で思いながら、美優の元へと歩み寄る。

「良く寝てるな」
「仕方がないだろう。　洗脳されて無理矢理戦わされたからな。今は眠らせてやれ」

優也の言う通り、美優はぐっすりと眠っていた。
眠らせたのは俺か、と心の中で思いながら、美優を抱き上げようと、腰を下ろそうしたその時、異変は起きた。

「かっ……は……！」
「優也？」

突然、焼けるような痛みが胸を襲う。
この感覚には覚えがあった。
美優の光の矢を受けた時の痛みと同じ。
それが今、胸に来ていた。

「かはっ！！」
「！」

次の瞬間、勢い良く口から血を吐き出す。
咳き込む度に血を吐き、胸を痛みが襲う。
耐えきれなくなった優也は、前のめりに倒れてしまう。

「優也！？」

それを、仁が抱き止める。

「しっかりしろ！　おい！　優也！！」

仁の腕の中、仁の声と共に、意識が消えた。

第47話　闇の目覚め（後書き）

漆黒
「遂に長編も後一話。　長かったです」
優花
「倒れてしまった優也がどうなるか。　次回を楽しみにしていて下さい。　次は優也とバロールの能力です」

【バロール】

【基本能力】
魔力：S
攻撃力：B
防御力：B
コントロール：A
パワー：B
スピード：C
探知能力：C

【邪眼開眼（イービルアイ）】
魔力：S
攻撃力：S
防御力：B
コントロール：A
パワー：A
スピード：B
探知能力：C

【悪魔の聖域（デビル・サンクチュアリ）：A】

バロールを中心に、半径十三メートルの魔法陣を展開する。
魔法陣からは、魔界の炎や雷などを召喚する事が出来、敵を攻撃をする。
だが、魔法陣の外には攻撃出来ない。

【破壊の眼差し（イビル・デストラクション）：ＳＳ】
魔法陣の中にいるモノを全て爆破させる。
魔力の込め具合で威力が変化する。

【火渡優也】

【霊力色：黒】

【闇の解放状態】
霊力：Ｓ
攻撃力：Ｓ
防御力：Ｅ
コントロール：Ｅ
パワー：Ｆ
スピード：Ｓ
探知能力：Ｅ

漆黒
「さて、地震ですが、まだ余震もあります。　どうか気を付けて下さい」
優花
「活動報告でも情報を掲載しているので、どうかご覧ください」
漆黒
「では、また次回も宜しくお願いします」

次回

第４８話　帰ってきた日常

優花

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第４８話　帰ってきた日常

「傷は大したことないけど、とりあえず一週間は安静よ。　返事」
「……はい」
素直に返事をする優也の顔の横には、メスが一本、壁に突き刺さっている。
「宜しい」
そう言い、彩夏は病室から出ていこうとする。
「あぁそうだ」
扉を開けた時に、何かを思い出し立ち止まる。
「美優ちゃんは隣の病室よ。　多分、もう目が覚めてると思うわ」
それだけ伝えると、今度こそ病室から出ていった。
それを確認し、優也はベッドに寝転び、窓の外を眺める。
空は青く染まり、白い雲が飛んでいる。
「帰って……来たんだな……」
優也達は、人間界に帰って来ていた。

第４８話　帰ってきた日常

「闇の力を解放してる時に、朱雀の力を使ったらそうなるに決まってるでしょ」

目覚めたばかりの優也を待っていたのは、説教だった。

「えっと……すいません。　あの……美優達は……」

「何で貴方が闇の力を使えるかは知らないけど、闇の力を解放してる時は、浄化の炎は使用禁止！　体に掛かる負担が大きいからね。それ以外の炎なら全く大丈夫よ」

「いや、だから……」

「返事は？」

「あ、はい……」

質問に全く答えず、彩夏は早口で診断結果を話していく。

「何にせよ、傷が殆ど治ってて良かったわ。　それも闇の力のおかげかしら」

「……」

その言葉に、『ボロボロだった』体を確認する。

戦っている時は、体が軽く、戦いやすかったと言う事しか覚えてい

なく、かすり傷程度しか残っていない程、治っているとは思っていなかった。

「一応入院はしてもらうから。　良いわね」
「大丈夫です。　そこまで酷くないし……」

カッ、と優也の顔の横をメスが通り過ぎ、壁に突き刺さる。

「医者の診断に口答えしないの。　お分かり？」

頬を冷や汗が伝う。
逆らっては駄目だと、優也の脳が危険信号を発していた。

「はい……」

素直に頷くしか、選択肢がなかった。
そして、初めの会話に続く。

「……サービスって、この事だったんだな」

真っ暗な自分の精神世界での会話を思い出す。
あの、黒が印象的な女性が言っていたサービスとは、恐らく傷を治す事だろう。

「闇の力に黒い女……わからないことだらけだな」

手の平を見つめながら、静かに呟く。
突然目覚めた闇の力、突然現れた全く見覚えのない謎の女。
何故闇の力を使えるのか、あの女は何故自分の精神世界にいたのか、何もわからない。

だが、一つだけわかっている事はある。
美優を取り戻せたこと。
それだけわかれば、魔界まで乗り込んで戦ったかいがあった。
そんなことを考えていると、扉を叩く音が聞こえる。

「入って良いぞ」

扉の外にいた人物は入室の許可を得ると、ゆっくりと扉を開いて中に入る。

「起きても大丈夫？」
「一応安静にだけどな」

入って来たのは、優也と双子だと間違われている少女、天道優花だった。
優花はベッドの隣に椅子を置き、腰掛けると、籠から林檎と果物ナイフを取り出す。

「林檎食べる？」
「そうだな。　腹も減ったし」

その返答を聞き、優花は手際よく林檎を剥いていく。

「……正が狂気に呑まれかけたらしいよ」
「そうか……」

林檎の皮を剥いていく音が響く中、静かに呟く。

「他人事みたいに聞いてるけど、優也も危なかったでしょ……」

皮を全てを剥き終え、林檎を一口サイズに切っていく。

「お願いだから……もう黒夜叉にならないで……」

今にも泣きそうな表情で言う優花を見て、内心慌てる優也。
怒ることもなければ泣くこともない優花だが、怒るのも泣くのも、
決まって誰かの為。
その誰かは、聞かずともわかる。

「優花……ごめん……」

「うん……」

切り揃えた林檎を皿に並べ、静かに頷く。

「はい。　切り終わったよ」

林檎に爪楊枝を刺し、一つ優也に差し出す。

「ありがとう。　にしても早いな」

差し出された林檎を受け取り、口へと運ぶ。

「上手いな」

「フフ、どういたしまして」

林檎をいくつか口へと運んでいくと、突然手を止める。

「どうかした？」

その様子に、優花は心配そうに尋ねる。

「なぁ優花……。　お前……俺と出会う前の記憶はあるか？」
「！」
逆に訪ね返された優花は、何と答えるか、答えていいのか戸惑う。
この質問は、優也にとって思い出したくない記憶の一つに、少なからず関わるからだ。
だが、この質問をされると言うことは、優也にとって知っておかなければならないと言うこと。
ならばと、優花は意を決して答える。
「あるよ……。　私以外は誰も居ない、何処までも真っ暗で、苦しくて寂しくて……何よりも悲しい世界だった……」
胸に手を当て、優花は静かに述べる。
「でも……時々声が聞こえたよ」
「声？」
時々聞こえる声とやらについて、詳しく聞こうとした時、慌ただしい音と共に、病室の扉が勢い良く開く。
「男女が二人っきりでナニをしているんですか！！？」
「「！？」」
顔は良いのに脳内が残念な、霧藤総司が飛び込んできた。
「うっせぇよ」
「ひでぶっ！？」

その後から入ってきた彪牙に蹴り飛ばされ、総司はケン●ロウにやられた敵キャラのような叫び声を上げながら壁に激突し、気絶した。

「入院者が増えたね……」
「良いんだよ。　自業自得だぜ」
「気が利かない男ね」

彪牙の後から更に流香が、溜め息を吐きながら入ってくる。

「お前等、怪我は大丈夫なのか？」
「おぅ。　彩夏って人に治療がいらないくらい大丈夫だって言われた位だぜ。　まだちっと痛ぇが」
「私は傷の治りが早いからもう平気よ」

二人の言う通り、怪我はもう平気のようだ。
彪牙は気を操る事が出来る事と、体が頑丈だと言うこともある。
流香は吸血鬼なので、大抵の傷など問題無しだ。
因みに優也も朱雀の力も相まって、傷の治りが常人より早いが、この二人には敵わないようだ。

「まぁ痛ぇって言っても、進に比べりゃあ百倍マシだぜ」
「そうだ！　他の皆は？」

進の名前を訊き、魔界に赴いたメンバーの安否を訊ねる。

「仁は殆ど怪我なんてしてないから大丈夫よ。　その辺りを彷徨いてると思うわ。　正は入院だって言うのに何処かに行っちゃったわ。　薫が着いてるから大丈夫だと思うけど……」
「んで、進なんだけどな……」

進の安否を言おうとするが、何故か言いづらそうにしている。
不思議そうに見ていると、優花が代わりに答えてくれた。

「進……筋肉痛だって」
「……筋肉痛？」

「いってぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」
「男なら黙って耐えなさい！！」

進は痛みに悶えていた。
どうやら最後に放った大技の反動が、筋肉痛として今来ているらしい。

「男でも痛いのは痛い！！　いててててて！！！！！」

指先を少し動かすだけで、全身に激痛が走るため、雅が付きっきりで看病している。
世間一般で言う、あ～ん等である。
雅は罪滅ぼしのつもりだが、進は恥ずかしくて死にそうだった。

（恥ずかしい……恥ずかしすぎる／／／／／／！！　何だよ筋肉痛って！　どんだけヤワなんだよ俺！）
（あれだけの技だ。　リスクの一つや二つはあって当然だろう）

進と青龍は脳内で話す。

と言っても、進が考えていることを青龍が勝手に聞いているだけだ。
プライバシーもクソもない。

（だが、滅多に無い経験だろう？）
（……確かに）

言っておくが進はモテない。

（ほっとけ！！）

それが今、美少女に看病してもらっている。
進も男の子なのだから、正直言って嬉しくてたまらない。
ただ慣れていないだけなのだ。

（ど、どうする！　雅に世話してもらわないと何も出来ないし……。
……。　でも恥ずかしいし！　けど止めてもらうのも勿体ない！
誰か！　打開策を教えてください！！）
（流れに身を委ねろ）
（お前に訊いてねぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！）

端から見れば、一人で唸っている様に見える。
勿論、雅にも一人で唸っている様に見える。

「やっぱり……私が看病しても嬉しくない？」

その事が、雅を不安にさせる。
脅されていたとは言え、進や、その仲間を傷付けた事は事実。
進にまで必要無いと言われてしまえば、味方がいなくなる。
全員が敵なんて状況に耐えられる程、雅は強くはない。

「い、いや！　そんな事ないって！　寧ろ嬉しい……」
「嘘……。　だって進……ずっと一人で唸ってるんだもん……」
「うっ！」
脳内会議のせいで、雅に誤解されてしまった。
（全く……何をしている小僧。　貴様のせいで、この娘が悲しんでいるぞ）
（お前のせいでもあるだろうが！！）
言い合いをしている間にも、雅はどんどん落ち込み、顔を俯かせる。
「……雅……顔上げろ」
見かねた進は、雅に顔を上げさせる。
「進……？」
「雅、ちゃんと俺の話を訊けよ」
真剣な表情で言う進に、雅は首を縦に振る。
「俺はな、お前がした事は正しいとは思えない。　理由は何にしろ、誰かを傷付ける手伝いをしたんだ。　その事は許せない」
「……うん」
雅は力なく頷く。
脅されていた、誰かを傷付けるつもりはなかった、そう言ったところで、バロールに手を貸した事は事実。
やはり許してもらえる訳がない。

そう思っていた。
進の言葉を訊くまでは。

「でも家族を守ろうとした事は正しいよ」
「！！」

その言葉に雅は驚く。
驚いている雅にお構い無く、進は話を続ける。

「雅がバロールに手を貸さなかったら、家族も、雅も死んでたかもしれないんだ」

確かにそうかも知れない。
そうかも知れないが、それで納得してくれるのだろうか？
進が納得してくれても、他の皆は納得してくれるのか？
話したことも、会ったこともない相手への不安が拭えない。

「皆もわかってくれる。　だから謝ろう。　俺が一緒にいるから」

不安は消えない。
だがその言葉に、少し救われた気がした。

「ありがとう……進」

ここにきて、雅はやっと笑顔を見せる。

「やっぱり笑ってる方が似合うよ」
「そ、そうかな／／／？」

うっすらと頬が赤く染まる。

「そうだよ。　笑ってる方が可愛い」

「／／／／／」

これでもかと言うくらい、顔が赤くなる。

幸い、進はベッドで寝転んでいるので、少し顔を逸らせば、見られる事はなかった。

「そうやっていつも笑ってたら彼氏もすぐに出来るんじゃないか？　胸もデカイしさ」

明るい話に持っていこうと、何気なく言った言葉。

それがいけなかった。

「…………………………………………／／／／／／／／／／！！」

長い沈黙の後、ある出来事を思い出し、一気に顔が真っ赤になる。

（…………馬鹿なのか？　この小僧）

その会話を訊いていた青龍は、呆れて何も言えなかった。

「あ…………！」

進も、自分が言った会話の中に、言ってはならない一言があったことに気付く。

「こ、この…………／／／」

手を開き、大きく振りかぶる。

「ま、待て……。　あ、あれは事故だったんだよ！　だから落ち着いて、頼むから！！」

進が言うあれとは、魔界での、『雅の胸にダイブ事件』である。
思い出したくない記憶を蒸し返されて、雅の怒りは一気に沸点を越えた。

「変態／／／／／／！！！！」

筋肉痛で動けない進へ、怒りの平手打ちが振り下ろされ、進の叫びが病院に響き渡った。

「良かったんですか？」
「ん～、何が～？」

何処かの建物の中を、亜麻色の髪で長身の男、月臣龍と、神々しい金髪の五歳児程の子供、カイが歩いていた。

「惚けるなよ。　バロール達の処罰だ。　バロールとその妻ケフレンダ、あと使い魔は異次元に幽閉。　バロールの部下の雑魚悪魔は力を奪われ、ルシファーの下で雑用。　そして幹部はあんたの監視下。　掟に背いたわりには、罰が甘過ぎませんか？」
「それはたった今、決定したばっかだよ」

二人は今、魔界にいた。
そして建物とは、全悪魔の総帥であり、地獄軍の大総統、地獄の大判官であるルシファーがいる城であった。
何故こんな所にいるかと言うと、今の会話の通り、バロール達の処罰についての話し合いで来ていた。

「人間を操って、美優ちゃんを拐いはしたけど、死人までは出してないからね～」

八年前の戦争で、バロールが人間に敗北した時、魔界である掟が定められた。
人間界に危害を加えないこと。
だがバロールは人間を操り、美優を拐い、掟に背いた。
死人を出していない事は幸いだ。

「ま、仏の顔は三度までってことかな？」
「悪魔と元神様だけどな」
「今も一応神様です！」

良く良く考えてみれば、自分がバロールを気にする必要はない。
三百年前と言い、八年前と言い、現在と言い、自業自得なのだから。

（あいつは本当に馬鹿な魔王だ）

また何か仕出かすようなら、今度は自分が殺してやろうかと、龍は考えていた。

「それにバロールよりも問題が山積みだしね」
「悪魔の力を持った東条雅、狂気が増大してきた正、天使の力に目覚めた神道美優、そして……闇に目覚めた優也……か」

そう言われてみれば山積みかもしれない。
ちゃんと力を制御出来なければ、死の可能性がある連中ばかりだ。

「雅ちゃんは進君がいるから大丈夫だとして、正君も……薫ちゃんがいるから大丈夫かな？」
「愛の力だとでも？」
「そんなとこかな」

それで何とかなるなら俺も欲しいねぇ、愛の力。
等と、少し馬鹿にしたように呟く龍を、カイは見逃さない。

「愛の力を馬鹿にしちゃいけないよ～。　愛してるからこそ支えることが出来て愛してるからこそ頑張ることが出来る。　そして、愛してるからこそ生命が誕生するんだよ。　覚えておきたまえ」
「はいはい。　わかりましたよ」

どうでもいいと言いたげな表情で、カイの言葉を聞き流す。

「むぅ、ホントだよ。　正君の狂気だって薫ちゃんとの愛の力で！」
「饒舌になるのは結構ですけど、優也と神道はどうするんですか？　闇の不死鳥と光の天使ですよ」

テンションが上がってきたカイの言葉を遮る。
仕方なく話を戻す。

「そうだね。　力の使い方を覚えてもらうために特別講師に来ていただこうか」
「特別講師？　一応訊くが、誰ですか？」

その問いに、カイは秘密とだけ告げ、先々歩いていく。

「答えろよこのクソガキ」

「残念だけど君より遥かに歳上で～す」

いつか殴ろう。

龍は心に決めた。

「何にせよ、早めに力をモノにしておいた方が良い」

「ああ。　悪魔が動いたんだ。　次は恐らく、死神」

いつ起こるかわからない次の戦いに、二人は危惧する。

「監視を付けておくか……。　と言うわけで、よろ……」

「却下。　他の暇な奴にやらせろ」

カイの頼みを、龍は一瞬で切り捨てる。

「え～、何で～？」

こんなに可愛い子供がお願いしてるのに～、等とほざく目の前の神に、龍は青筋を立てる。

「監視下にあるあの悪魔達を見張るのは誰だと思ってる？　それで死神の動向を監視しろ？　やってられるか」

悪魔の監視をするだけありがたく思え、と心の中で毒づく。

だが、目の前の我が儘な神様は聞く耳持たない。

「龍君、傍観するのが好きなんでしょ？　じゃあ打ってつけじゃん」

「監視と傍観は意味が違……って！　おい、待て！！」

龍が言い終わらぬうちに、カイはスタコラと駆け抜けていった。

「頼んだよ～！！」

大声でそう言いながら、カイは龍の視界から消えた。

ポツンと、龍はその場に置き去りにされる。

「よし、絶対殴る」

まずは練習と、壁を殴り壊しておいた。

修理代を請求されたら、クソ生意気な神様に払ってもらおうと考えながら。

戻ってここは、優也達が入院している病院。

その病院の屋上で美優は一人、手すりに両肘を付き、空を眺めていた。

背中まであった髪は、優也の炎で少し焼けてしまい、肩にかかる程の長さになっていた。

「薫には……悪いことしちゃったかな……」

本当ならば、薫が一緒にいる筈だったが、美優はそれを断った。

今は誰とも会いたくないのだ。

特に優也とは。

「優也のことだから、気にするなって言いそうだな……」

だが、今回ばかりはそうもいかない。

優也がどれだけ自分のことを許してくれても、自分で自分が許せない。

「何が支えられるくらい強くなろうだ……。　こんなの……全然違うよ……」

洗脳されていた時の記憶が、まだ美優には残っている。

それが美優を追い詰める。

「誰かを傷付ける力なんていらないのに……。　私……どうしたらいいの？　優也……」

ポロポロと、涙が止めどなく溢れ出す。

戦いは終わった。

だが同時に、少女の苦悩が始まる。

第４８話　帰ってきた日常（後書き）

漆黒
「ここで一応長編は終了です！　次回は後日談ってところです」
優花
「後日談の次は日常編だよね」
漆黒
「何話かしたらまた長編するけどね」
優花
「その時は薫の出番も増やしてあげてね」
漆黒
「頑張ります。　ここまで見てくださってありがとうございます！
これからも『黒と白の物語』を宜しくお願いします！」
優花
「投票は明日の１８時までとします」
漆黒
「感想も宜しくです！」
優花
「それじゃあ失礼します」

次回
第４９話　少女の苦悩
優花
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第一回人気投票結果発表

闇夜
「第一回人気投票……結果発表ォォォォォォォ！！」

とある会場。
マイク片手に舞台に上がる男の掛け声と共に、歓声が上がる。

進
「ちょっと待てぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

その叫び声に、歓声は静まる。

闇夜
「何だよ進」

進
「誰だよあんた!?　作者は!?　漆黒の不死鳥は!?」

そう言い、指差す先には、マイクを持った男。
本来ならば、作者である漆黒の不死鳥がマイクを持っている筈なのだが。

闇夜
「俺だよ。　俺が作者の元漆黒の不死鳥だよ」

進
「何いいいいいいいいいいい！！！？」

まさかの発言に、驚きを隠せない進。

闇夜
「長編も終了って事で、改名しました！」
進
「何の意味があんの！？」
優也
「進、もうほっとけ」
優也が進を宥める。
闇夜
「漆黒の不死鳥改めて、闇夜の黒鳥が進行させていただきます」
優也
「鳥は取らないんだな」
見た目はご想像にお任せします。
闇夜
「投票総数２６１票。　ご投票してくださった皆様、誠にありがとうございました。　では早速、結果に参りましょう！」
会場に設置された大きなモニターの電源がつく。
このモニターに結果が映し出されるのだろう。
闇夜
「１５位で１票……こちらです！」
第１５位
【九妖】
【サクラ】

【ルミア】
1票

闇夜
「同率15位で、保護者な九妖、マスコットのサクラ、お色気系のルミアがランクインしました。　一言コメントをどうぞ！」

入賞した三人を舞台に上がらせ、一人づつコメントを訊いていく。

九妖
「こんな私に投票してくれてありがとう。　これからも咲魔様達と一緒に仲間を守っていく」

サクラ
「九妖様と同じ順位で嬉しいです！」

ルミア
「1票なんて納得がいかないわ」

闇夜
「はい、ありがとうございます～。　もう結構ですよ」

そう言って、三人を舞台から下ろす。

ルミア
「ちょっ！　もう終わりなの！？」

だがルミアは、もう出番が終わりだと言うことに、食って掛かる。

ルミア
「私は1票なんて結果に納得してないのよ！！」

闇夜

「０票の奴等よりマシだろうがァ！！　はい、スタッフの方。　文句言ったからルミア退場」

すると、スタッフがルミア連れていく。

ルミア
「ま、待って！　ホントに退場！？　って言うか誰こいつ！？」

闇夜
「０票の黒烏君です」

良く見てみると、そのスタッフは黒烏だった。

サクラ
「く、黒烏様……」

九妖
「０票だったのか……」

抵抗虚しく、ルミアは退場となった。

闇夜
「では、第１４位いきましょう！」

全員
（逆らったら終わる！！）

その光景を見て、逆らわないでおこうと、会場の人達は心に決めた。
（作者はルミアが嫌いな訳ではありません）

闇夜
「第１４位は、この人達！」

第１４位
【大江咲魔】
【椿修二】
【キラ】
２票

闇夜
「初長編で登場した、妖怪達のボスの大江咲魔と、復讐に取り付かれて優也と戦った薫の兄、椿修二。　そして、魔界編で進と激闘を繰り広げた悪魔、キラが同率の第１４位です！　さて、一言どうぞ！」

咲魔
「投票してくれてありがとな。　酒でも一緒にどうだ？」

修二
「薫に手を出したら殺す！！！！」

キラ
「登場回数が少ないわりには、まぁまぁ良かったかな？」

順位に文句がなかったらしく、文句は言われなかったが、修二が暴れそうになったので、アランに会場の外に連れていかれた。

薫
「に、兄さん……／／／」

キラ
「アランも０票か……」

闇夜
「ここで長編のラスボスが登場しましたが、他の方々、特にメイン

の人達はどうでしょうか？　第１３位です！」

第１３位
【バロール】
【カイ】
３票

闇夜
「魔界編のラスボス、バロールと、見た目五歳児の神様がランクインしました！　あまり仲が良くない二人ですけど、コメントどうぞ！」

バロール
「１位ではないことと、貴様と同じ順位は気に食わんな」

カイ
「投票ありがとうね～♪　君は勝手に言ってなよ」

この後、バロールがカイに襲い掛かりそうになったが、ケフレンダに止められた。
魔王も妻には弱いらしい。

闇夜
「危うく会場が吹き飛ぶ事態に発展しかけましたが、気を取り直して、第１２位の発表です！」

第１２位

【風魔正】
４票

正
「何いいいいいいいいいいい！！！！！」

闇夜
「おぉっとぉ！！　ここでメインキャラ、ヘタレの暗殺者、風魔正がランクインだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

これには流石に納得がいかない正は、闇夜に抗議する。

正
「何でたったの４票なんだよ！！　魔界編じゃぁ、まぁまぁ活躍しただろ！？」

闇夜
「好き勝手暴れて、龍に気絶させられただけだろうが！！　まぁ確かに、票を計算してお前の投票が少ないことに驚いたけど、まいっか（笑）　って思ったよ！」

正
「笑ってんじゃねぇかァァァ！！！！」

次の瞬間、０票の皆が正を取り押さえ、会場の外に引きずり出す。

正
「今度こそ１０位以内にランクインしてやるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ……」

正の叫びは、だんだん小さくなり、消えた。

仁
「馬鹿だな」
流香
「馬鹿ね」
闇夜
「メインキャラが１０位以内にランクイン出来ない、ちょっとした波乱が起きましたが、これも番付の性。　では、１１位です！」

第１１位
【グランツ】
５票

闇夜
「おおお！　主のバロールを差し置いて、グランツが１１位にランクインだ！！」
バロール
「グランツ……貴様……」

自分以上の順位だったグランツを、バロールは睨み付ける。

グランツ
「バ、バロール様！　これは何かの間違いです！！」
闇夜
「因みに、悪魔の中では一番上です」
バロール
「表出ろ」
グランツ
「てめぇぇぇぇぇ！！！！　要らん情報を！　ちょ、バロール様

！？　マジですか！」

グランツはバロールに襟首を掴まれ、連れていかれた。
数十秒後、グランツの悲鳴が聞こえてきた。

彪牙
「何かわかんねぇけど、同情するぜ……」

総司
「全くですね……」

敵だったが、思わず同情してしまった。

闇夜
「何はともあれ、遂にトップ１０です！　一体誰がランクインしているのでしょうか。貴方が投票したキャラは入っているのでしょうか？　第１０位の発表です！」

第１０位
【月臣龍】
【霧藤総司】
７票

闇夜
「あらゆるモノを無にするドＳな能力者、月臣龍と、カッコイイのは見た目だけ、変態幻術師の霧藤総司が同率の第１０位でランクインしました！」

龍
「フン、１０位か」

総司
「カッコイイのは見た目だけってどういう意味ですか！？」
仁
「そう言う意味だろ」
総司
「何ですとぉぉぉぉぉぉ！！！！」
優花
「落ち着いて！」

仁に殴り掛かろうとする総司を、優花が止める。

優花
「本当のこと言われたからって怒っちゃ駄目だよ」
総司
「それが一番ツラい！！」

優花にトドメを刺され、総司は隅っこでしょげてしまった。

優花
「あ、あれ？　総司？」
闇夜
「総司は放っておいて龍、何か一言は？」
龍
「別に無いんだがな。　強いて言うなら、俺の謎を知りたいなら、これからも小説を読むことだ」
進
「然り気無く番宣した！」

それだけ言うと、龍は何処かへと消えた。

闇夜
「退くの早っ！　では、９位の発表です！」

第９位
【東条雅】
１０票

闇夜
「悪魔の力を宿した木刀少女、東条雅が何と、第９位でランクインだぁ！！」
雅
「わ、私が！？」
まさか自分がランクインしているとは思っていなかった雅は、思わず声を上げて驚く。

闇夜
「一言どうぞ！」
雅
「は、はい！」
緊張しながら舞台に上がり、一言を言う。

雅
「えっと、投票してくれてありがとうございます！　魔界編では皆に迷惑を掛けたので、汚名挽回できるようにこれからも頑張っていきます！」

その一言に、会場は一瞬静まるが、次の瞬間には拍手喝采だった。

優也
（それを言うなら汚名返上だろ……）

せっかく上位にランクインしたので、言い間違いについては言わないことにした。

闇夜
「ありがとうございました～。　やっぱり魔界編ではメインだっただけはありますねぇ～。　では、第８位に参ります！」

第８位
【黒城流香】
１２票

闇夜
「第８位は、夜に煌めく銀髪の吸血鬼、黒城流香だぁ！！」

美優
「何か……テンションおかしくない？」

優也
「元からだろ」

闇夜
「さぁ、コメントをどうぞ！」

流香
「投票ありがとうね。　お礼に血を吸ってあげましょうか？」

優也
「やめとけ」

何よ……と、文句を言いながら、舞台から降りていった。

闇夜
「続きましては、第7位の発表です！！」

第7位
【雷道仁】
13票

闇夜
「クールでお馬鹿で天然キャラ。　狙った獲物は逃がさない。　クローン人間、雷道仁が第7位にランクイン！！」

進
「マジでテンションおかしい！」
0票の方々
（ちょっとウザいな……）

テンションがハイになってきた司会に、少し腹が立った0票の方々だった。

仁
「計画通り」

進
「何処の新世界の神だよ！」

今からでもノートに人の名前を書き始めそうな仁であった。

闇夜
「今のが一言で宜しいでしょうか？」
仁
「良いぞ」
進
「良いのかよ！！」
闇夜
「はい、ツッコミありがとうございました～。　ではさくさく進めましょう。　第６位の発表です！！」

第６位
【鋼鎧寺彪牙】
１４票

闇夜
「武器は自分の肉体ただ一つ！　気を使う能力者、鋼鎧寺彪牙が第６位でランクインしました！！　気を使うだけに気を遣う事が得意です」
進
「うまくねぇよ！！」

ここに来て、ツッコミとしての本領を発揮し始めたのか、さっきからツッコミっぱなしの進。

彪牙
「６位なんて思いもしなかったぜ。　今度人気投票があったら１位でも狙ってみるか！」
闇夜

「コメントありがとうございました！　因みに彪牙は、作者お気に入りのキャラの一人です！」

進

「知るかそんなの！！」

闇夜

「やはり上位はメインキャラが独占していますね。　そんな中でも更に上位に食い込むのは誰なんでしょう！！　第５位の発表です！！」

第５位

【天道優花】

１５票

闇夜

「遅れてきたもう一人のヒロイン、天道優花がランクイン！！　他の登場人物とは違い、戦闘はせず、魔界編では出番が少なかった彼女ですが、投票数１５票で第５位にランクインと言う大健闘です！！」

美優

「凄いよ優花！！」

友達が上位に入ったことに、喜ぶ美優。

闇夜

「やはり後書きや感想で出番が多かったからでしょうか？　それとも日頃の行いでしょうか？　何はともあれ優花さん、第５位おめでとうございます。　一言コメントをどうぞ！」

優花

「はい。　皆さん、ご投票ありがとうございます。　これからも皆と一緒に頑張ります」

笑顔でコメントをすると、優花は舞台から降りていった。

闇夜
「８位から５位まではかなりの接戦でしたが、第４位は２０票と、一気に５票差になります。　では第４位です！　どうぞ！」

第４位
【神道美優】
２０票

闇夜
「メインヒロインの一人の神道美優！　惜しくもトップ３に入ることが出来ませんでしたが、４位と大健闘です！」

美優
「惜しかったなぁ……」

もう少しでトップ３だったことに、少し残念そうにするが、気を取り直してコメントを言う。

美優
「皆ありがとう！　今、本編じゃ元気が無い私だけど、これからも応援宜しくお願いします！」

闇夜
「元気一杯なコメントありがとうございました！　では遂に、トップ３の発表です！！」

第3位
【椿薫】
23位

闇夜
「薫だぁぁぁぁ！！！！　美優の親友ポジションで、初の長編ではメインだった薫が第3位でランクインしました！！　強くて格好いい、女子からもてるのでは等のコメントもいただきました！　では一言どうぞ！」

薫
「兄さんと正さんがご迷惑をお掛けしました」

何故か二人の代わりに謝罪をした。

闇夜
「謝罪のコメントをいただいてしまいました。　まぁ、それが薫らしいですね。　では、第2位の発表です！！」

第2位
【水野進】
50票

進
「俺ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！？」
一部を除く会場の皆
「何だってぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

まさか2位だとは思わなかった進は、驚きのあまり飛び上がり、一部を除く会場の人達は、有り得ないと言った表情で声をあげる。

闇夜
「何と3位と約二倍の票数で進がランクインしました！！　これには作者も驚きを隠せません！！　さて進、舞台へどうぞ！」

進
「いや、ちょ、マジで？　嘘ぉぉぉん！！」

闇夜
「さっさと上がってこい！！」

未だに信じられない進を、無理矢理舞台に上がらせる。

闇夜
「がんばる所が好き、一番好きかも、親近感がわく等、様々なコメントをいただきました。　さて進、今の気持ちをどうぞ！」

進
「あ、えっと……と、投票ありがとうございます。　これからも宜しくお願いします」

そんな普通のコメントを言う進。

闇夜
「普通で面白味もない一言を言ってくれた、地味な水野進君でした～」

進
「誰が地味！？」

地味と言われ、怒る進を無視し、最後の発表に移行する。

闇夜
「長い様で短かった人気投票もこれが最後になります。　第1位の栄光に輝いたの一体誰なんでしょう！　第1位は！」

会場に緊張が走る。
そして、闇夜の口が開かれる。

闇夜
「CMの後！」
全員
「ふざけんなぁ！！！！」

全員の怒号が一斉に闇夜に注がれる。

闇夜
「じょ、冗談だよ～。　じゃあ改めまして、第1位です！！」

第1位
【火渡優也】
68票

闇夜
「我らが主人公、火渡優也だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
優也
「……1位か」

大してリアクションは無いが、内心嬉しい優也だった。

闇夜
「強い、カッコイイ、言葉が胸に響きました等のコメントがあり、他にも、優也と進の友情に胸が温かくなりましたと言うコメントもありました。　優也君、１位になった今の気持ちをお願いします」

そう言い、マイクを優也に渡す。

優也
「……こんな俺に投票してくれてありがとう。　これからも皆を守れるように頑張るよ」

それだけ言うと、そそくさと舞台から降りる。

闇夜
「どうやら１位になって舞台に上がるのが恥ずかしかった様ですね。では皆さん、１位の優也に、盛大な拍手を！」

会場が拍手の嵐で覆われる。

美優
「恥ずかしがることないのにさぁ～」

優花
「胸を張って良いんだよ」

優也
「うるさい。　別に恥ずかしがってない……／／／」

少し頬を赤く染めながら言っているため、説得力はなかった。

闇夜

「さて、1位になった火渡優也君には、漆黒の不死鳥の名をプレゼントしよう！」

優也

「いや、要らないんだけど……」

闇夜

「拒否権はありません。　何しろ、闇の力を持った不死鳥なら、漆黒の不死鳥程、良い名前はないだろ」

漆黒の不死鳥と書かれた名刺を、優也に手渡す。

優也

「何で名刺!?　だから要らないって言ってるだろ！」

ビリッと、名刺を勢い良く破る。

闇夜

「残念だが、名刺を破ったところで、作者権限には勝てはしない！」

優也

「はぁ!?」

闇夜

「では最後に、順位をまとめて発表したいと思います。　同率の人は、作者の独断で順位を決めさせていただきます」

第1位【火渡優也】
６８票
第2位【水野進】
５０票
第3位【椿薫】
２３票

第４位【神道美優】
２０票
第５位【天道優花】
１５票
第６位【鋼鎧寺彪牙】
１４位
第７位【雷道仁】
１３票
第８位【黒城流香】
１２票
第９位【東条雅】
１０票
第１０位【月臣龍】
７票
第１１位【霧藤総司】
７票
第１２位【グランツ】
５票
第１３位【風魔正】
４票
第１４位【カイ】
３票
第１５位【バロール】
３票
第１６位【椿修二】
２票
第１７位【大江咲魔】
２票
第１８位【キラ】
２票

第１９位【九妖】
１票
第２０位【サクラ】
１票
第２１位【ルミア】
１票

闇夜
「最後に、投票して下さった皆様、誠にありがとうございました。
これからも『黒と白の物語』を宜しくお願いします！　それでは、また次回！」
優也
「勝手に終わら……」

そして、会場の明かりが完全に消えた。

第一回人気投票結果発表（後書き）

闇夜
「どうも、漆黒の不死鳥改めて、闇夜の黒鳥です。　人気投票は進が思ったより順位が上だったね」
優也
「思ったよりと言うより、普通に高い順位だぞ」
闇夜
「薫より二倍の票数だったからね。　でもそれより上の優也も、出番が少なかったのに5位の優花も凄いよね」
優也
「いや、でも登場したキャラが少ないしな」
闇夜
「確かに少ないけどね。　まぁ何はともあれ、ご投票ありがとうございました！　これを励みに、これからも頑張っていきます！」
優也
「これからも宜しく頼む」

登場人物設定5（前書き）

闇夜
「補足ですが、優也が闇の力を解放すると、若干口調が変わります」
優也
「本当に若干だけどな」
闇夜
「では、登場人物設定へどうぞ！」

登場人物設定5

東条雅
（とうじょうみやび）

性別　女

ＣＶ：釘宮理恵
（銀魂：神楽）

年齢　１３歳

誕生日　７月７日

身長　１６０ｃｍ

体重　４６ｋｇ

好き・得意な物（事）　裁縫　剣術修行　弱いものイジメ

嫌い・苦手な物（事）　料理

能力　悪魔の力

武器　木刀　竹刀

容姿
腰まである桃色の髪を一つに纏めている。
いつも胸にサラシを巻いているが、触った進曰く、胸が大きい。

解説
人間ながら、悪魔の力を使うことができる少女。
実家が剣術道場で、そこの師範代をしている。
父親も母親も六年前の戦争に巻き込まれ死亡。
それ以来、一つ年下の居候と二人で生活している。
正義感が強く、困っている人がいれば放っておけない性格のおかげで、進と出会えた。
名乗らないと言いながら、名を名乗ったり、バロールからの命令を間違えたり、少しおバカ。
幼い頃、悪魔の力のせいで、周りから化け物扱いされた過去がある。

グランツ

性別　男

ＣＶ：檜山修之
（ＢＬＥＡＣＨ：斑目一角）

年齢　６００歳前後

誕生日　９月１２日

身長　１８３ｃｍ

体重　７１ｋｇ

好き・得意な物（事）　戦闘　甘味

嫌い・苦手な物（事）　多人数で敵と戦うこと

能力　不明

武器　無し

容姿

黒髪のオールバック。

下ろすとまぁまぁ長い。

見た目は２０代前半

解説

悪魔の幹部達の中では1、2位を争うほどの実力者。

事実、彪牙と総司は一対一で彼に勝てなかった。

一人の敵を大人数で倒す事は好きではないが、致し方ない状況ならば、協力して戦うことも。

少し熱くなりやすいが、実力はバロールに買われている。

意外と一般常識は一番あり、悪魔達の世話係でもある。

バロール

性別　男

ＣＶ：子安武人

（銀魂：高杉晋助）

年齢　不明

誕生日　不明

身長　１８９ｃｍ

体重　８１ｋｇ

好き・得意な物（事）　人間を操ること　妻　娘

嫌い・苦手な物（事）　人間　カイ

能力　邪眼

武器　杖

容姿

褐色の肌に黒いマントを羽織っている。
額に第三の目の、邪眼がある。
髪型は黒のドレッドヘアー
見た目は２０代後半

解説

八年前、人間界に攻め行った魔王。
その際、カイとカイに力を与えられた人間に敗北する。
八年たった今、再び人間界に攻め行った。
悪魔はともかく、人間は仲間であっても信用しない。
三百年前にも何か事件を起こし、その際誰かに敗北したらしいが、
詳細は不明。

妻子持ちで、妻のケフレンダには頭が上がらないらしい。
少し親バカ。

カイ

性別　男

ＣＶ：鈴村健一
（銀魂：沖田総悟）

年齢　不明

誕生日　不明

身長　９２ｃｍ

体重　１７ｋｇ

好き・得意な物（事）　暇潰し

嫌い・苦手な物（事）　退屈

能力　不明

武器　不明

容姿

神々しいまでの美しい金髪。
いつも袖の長い服を着ている。

解説
見た目は五歳児だが、実態は神様。
過去の戦いで力が衰えた為に、五歳児の姿になっている。
力が衰えたと言っても、バロールを圧倒できる程の力を有している。
神様と言っても、何の神様かは不明。
わかっていることは、龍にお願いと言う名の命令をできること。

桜木彩夏
（さくらぎあやか）

性別　女

ＣＶ：折笠愛
（幽☆遊☆白書：桑原静流）

年齢　１７歳

誕生日　８月１４日

身長　１６５ｃｍ

体重　４８ｋｇ

好き・得意な物（事）　治療　笑顔

嫌い・苦手な物（事）　怪我人

能力　治療

武器　無し

容姿

背中まであるオレンジ色の髪を、一つに纏めている。
いつも白衣を着ている。
瞳の色はエメラルドグリーン。

解説

普段は普通の人間相手の医者、裏では普通の病院に行けない能力者や妖怪の治療をしている。
八年前の戦争の孤児で、六年前の戦争では能力を使って怪我人の治療を行っていた。
その際、優也達と出会っている。
誰かの笑顔を見るのが好きな為、治療をし続けている。
オシャレにはあまり興味無く、白衣ばかり着ている。
だが、元が良いので、オシャレしなくても美人。
高校には通ってないので、あまり頭は良くない。

ナミ

性別　女

ＣＶ：白鳥由里
（るろうに剣心：三条燕）

年齢　９８歳

誕生日　５月５日

身長　１４６ｃｍ

体重　３４ｋｇ

好き・得意な物（事）　彩夏

嫌い・苦手な物（事）　雨　血

能力　無し

武器　無し

容姿
肩まである白い髪で、目の色は赤茶。
白い耳と白い尻尾が生えている。

解説
彩夏の助手をしている犬の妖怪。
耳や尻尾は消すことができる。
四年前に怪我をして倒れていたところを、彩夏に救われる。
初めは警戒していたものの、彩夏と一緒にいて、その警戒心も消えた。
今では彩夏の様な医者を目指している。

青龍
（せいりゅう）

性別　男（オス）

ＣＶ：秋元洋介
（機動武闘伝Ｇガンダム：東方不敗マスター・アジア）

年齢　不明

誕生日　不明

全長　６ｍ

体重　２トン

好き・得意な物（事）　威勢の良い奴

嫌い・苦手な物（事）　ウジウジしている奴

能力　水

武器　無し

容姿
体全体が青い。

額に赤い宝石がある。

解説

四聖獣の一体。
東方を守護している。
今まで、色んな人間と契約してきたが、誰一人認めるまでに至る人間はいなかった。
だが、進の覚悟を訊いて、進の最期まで付き合ってやると約束した。
人間の時の姿があるようだが、詳細は不明。

ルミア

性別　女

ＣＶ：高乃麗
（サクラ大戦：マリア・タチバナ）

年齢　６００歳前後

誕生日　１０月２０日

身長　１７０ｃｍ

体重　５０ｋｇ

好き・得意な物（事）　動物

嫌い・苦手な物（事）　虫

能力　動物爆弾（アニマルボム）

魔力を動物の姿にして、合図で爆発する。

武器　鞭

容姿
赤い髪のセミロング。
頭と背中から黒い翼を生やし、尻尾を生やしている。
巨乳である。
見た目は１８歳位

解説
バロールの幹部達の中で、唯一の女性悪魔。
悪魔だが、戦いはあまり好きではない。
他の幹部に比べ、戦闘力はあまり高くはない。
それでも普通の悪魔よりは強いので、幹部の座についている。
女性と言うこともあり、オシャレには気を遣っている。
戦闘時はかなり露出の高い服を着ている。

ガドル

性別　男

ＣＶ：伊藤健太郎
（ＢＬＥＡＣＨ：阿散井恋次）

年齢　６００歳前後

誕生日　４月１６日

身長　１７８ｃｍ

体重　６７ｋｇ

好き・得意な物（事）　武器コレクション

嫌い・苦手な物（事）　名前を覚えること

能力　不明

武器　不明

容姿

黒い短髪。

少しつり目。

見た目は２０代前半。

解説

バロールの幹部悪魔。

魔力を操ることならば、幹部達の中でもトップクラス。

グランツとは親友で、他の幹部達との仲も良い。

他人の名前を覚えることが苦手で、あまり人の名前を訊かない。

魔界での戦いで正と対決するが、首をもぎ取られ絶命。

アラン

性別　男

ＣＶ：小山力也
（名探偵コナン：毛利小五郎）

年齢　６００歳前後

誕生日　２月６日

身長　１８６ｃｍ

体重　８３ｋｇ

好き・得意な物（事）　武術

嫌い・苦手な物（事）　逃亡　女性

能力　不明

武器　槍

容姿
黒い帽子を被り、左目が前髪で隠れている。
無精髭を生やしている。
左目には刀傷があり、失明している。
見た目は３０代前半。

解説
バロールの幹部の一人。

冷静な判断ができ、バロールの部下の中でもトップクラスの実力者で、幹部達のリーダー的存在。
だが、少し一般常識に欠けているところがある。
女性に免疫が無い。
過去に、人間界の偵察に来たとき優也と戦い、左目を斬られている。

キラ

性別　男

ＣＶ：水橋かおり
（魔法少女リリカルなのは：ユーノ・スクライア）

年齢　７００歳前後

誕生日　1月1日

身長　１６０ｃｍ

体重　４９ｋｇ

好き・得意な物（事）　遊び

嫌い・苦手な物（事）　フェアじゃない遊び

能力　完全な規則（パーフェクトルール）
自分が決めたルールで戦う。

自分に有利過ぎるルールだと、効果が薄い。

武器　無し

容姿
金色の髪を右に流している。
見た目は優也達と同い年位。

解説
バロールの幹部悪魔。
幹部の中では一番幼く見えるが、実は一番歳上。
精神年齢が幼いのか、一番子供っぽい。

クロウ・クルワッハ

性別　男

ＣＶ：下野紘
（テイルズ　オブ　シンフォニア　－ラタトスクの騎士－：エミル・キャスタニエ）

年齢　１０００歳前後

誕生日　不明

身長　１７５ｃｍ

体重　６７ｋｇ

好き・得意な物（事）　蛇

嫌い・苦手な物（事）　子供

能力　不明

武器　無し

容姿
長髪の緑色の髪。
見た目は２０代

解説
バロールの使い魔。
先代のクロウ・クルワッハから名と力を継ぎ、バロールの使い魔になった。
力を継いで、まだ百年程度しか経っておらず、実力では先代に遠く及ばない。

ケフレンダ

性別　女

ＣＶ：大原さやか
（テイルズ　オブ　リバース：ヒルダ・ランブリング）

年齢　不明

誕生日　不明

身長　１６３ｃｍ

体重　５０ｋｇ

好き・得意な物（事）　バロール　娘　予言

嫌い・苦手な物（事）　予言

能力　不明

武器　無し

容姿

白いローブを身に纏い、フードで顔を隠している。
フードは基本脱がないが、髪は茶髪のセミロング。

解説

バロールの妻で、バロールの唯一のストッパーだが、八年前と言い今回と言い、バロールがしようとしていることに関しては反対しない。
ある程度未来を予言するのが得意だが、未来を知るのが嫌いで、あまり予言はしない。
つまり予言は嫌いである。

※悪魔は全員耳が尖っている。

【基本能力】

【東条雅】

魔力：D
攻撃力：C
防御力：B
コントロール：C
パワー：E
スピード：D
探知能力：E

【魔力光：黒】

【グランツ】

魔力：B
攻撃力：B
防御力：C
コントロール：A
パワー：S
スピード：B

探知能力：Ｆ

【魔力光：黒】

【カイ】

神力：？
攻撃力：Ｃ
防御力：Ａ
コントロール：ＥＸ
パワー：Ｅ
スピード：Ｓ
探知能力：ＥＸ

【神力光：純白】

【桜木彩夏】

霊力：Ｄ
攻撃力：Ｇ
防御力：Ｂ
コントロール：ＳＳ
パワー：Ｅ
スピード：Ｄ

探知能力：S

【霊力光：緑】

【ナミ】

妖力：C
攻撃力：C
防御力：B
コントロール：C
パワー：E
スピード：B
探知能力：D

【妖力光：白】

【ルミア】

魔力：D
攻撃力：C
防御力：E
コントロール：B
パワー：D
スピード：D

探知能力：A

【魔力光：黒】

【ガドル】

魔力：B
攻撃力：B
防御力：B
コントロール：C
パワー：A
スピード：C
探知能力：E

【魔力光：黒】

【アラン】

魔力：C
攻撃力：A
防御力：C
コントロール：E
パワー：A
スピード：D

探知能力：F

【魔力光：黒】

【キラ】

魔力：C
攻撃力：C
防御力：C
コントロール：B
パワー：D
スピード：A
探知能力：C

【魔力光：黒】

【クロウ・クルワッハ】

魔力：A
攻撃力：C
防御力：B
コントロール：C
パワー：A
スピード：B

探知能力：Ｄ

【魔力光：黒】

【ケフレンダ】

魔力：Ｂ
攻撃力：Ｅ
防御力：Ｂ
コントロール：Ｓ
パワー：Ｄ
スピード：Ｆ
探知能力：ＳＳＳ

【魔力光：紫】

登場人物設定5（後書き）

闇夜
「ここで突然だが、烈火竜さんから巨乳になれる『妖精の聖乳』をいただいたぞ」
薫・優花・流香・彩夏・ナミ
「！！」
闇夜
「烈火竜さん、ありがとうございま……ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
キラ
「凍り付けにされた後に、血の槍で貫かれた……」
グランツ
「おいおい……死んだんじゃねぇだろうな……」
流香
「ちょっと、一番最初に作者から奪ったのは私よ。だから私が使うべきよ」
薫
「何を言ってるんですか？　私の方が速かったですよ」
彩夏
「貴女達、ここは一番歳上の私に渡すべきよ。ナミ、貴女は手を引いてくれるわよね？」
ナミ
「申し訳ありませんが、これは引けません。それに、一番歳上は私です」
優花
「皆人並みにはあるんだから、私にくれても良いでしょ？」
アラン
「女性は怖い……」

ルミア
「胸が大きくて良いこと無いでしょ。　邪魔なだけよ」
流香
「ふざけたこと言ってると、また噛むわよ！」
薫
「凍り付けにされたいんですか（黒笑）？」
彩夏
「メスで切り裂くわよ」
ナミ
「殴りますよ」
優花
「貴女に胸の小さい人の気持ちはわからないわ……」
ルミア
「何よ！？　やろうっていうの！」
ガドル
「集中放火だな」
グランツ
「って、ガドル！？　おまっ、何でいるんだよ！」
ガドル
「収集がつかなくなってきたから、今回はここで失礼する」
アラン
「これからも宜しく頼む」
キラ
「またね」
グランツ
「せめて、あいつ等をどうにかしてから終われぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

第４９話　少女の苦悩

美優が目を覚ましてから今日で二日、彼女は朝起きてはすぐに屋上に来ていた。
病室に居れば、誰かが来るのは間違いない。
今は誰とも会いたくもなければ、話したくもない。
別に皆のことが嫌いになった訳ではない。
どんな顔をして会えば良いのかわからない。
助けてもらったことには感謝している。
だが、自分を助けたせいで皆怪我をした。
何よりも、優也を自分自身の手で傷付けた。
その事でずっと悩んでいた。
自分は皆と一緒に居ても良いのか。
以前にも似たような事はあったが、今回は自分で家族を、大切な人を傷付けた。
だから以前より悩みが大きくなってしまった。

「どうしようもないな……私」

いつも一人で勝手に悩む自分を、自嘲するように薄笑う。

「こんなとこで何してんだ？」

そうしていると、声を掛けられた。
声の人物はわかっている、彪牙だ。
知っている人物であっても、突然後ろから声を掛けられたら、誰だって驚く。

「ひゅ、彪牙！？　何でここに！」

「何でって、お前が病室にいねぇから探しに来たんだろうが」

そう言いながら両肘を柵に置き、柵に体を預ける。

「どうせお前、優也がボロボロになった事、自分のせいだと思ってんだろ」

「……」

本当のことを言い当てられ、美優は黙ってしまう。

「あいつは体張ってお前を助けたんだ。　だったらお前はいつまでもウジウジしてる訳にはいかねぇだろ」

「……」

そんな事はわかっている。

わかっているが、自分の手で傷付けた相手を前にして平然としていられる程、美優の心は図太くはない。

「彪牙には……わからないよ……」

「……ったく」

ガシガシと頭を掻く。

「美優、お前ちょっと他の奴等と話してこい！」

「えっ！」

突然の提案に、驚いた表情で彪牙を見る。

「一人で悩んでるから駄目なんだよ。　色んな奴と話して、悩みを解決してこい！」

「で、でも……勝手に抜け出して良いのかな？」

外傷は無いのだが、無理に力を解放させられ、体に何か影響があるかもしれないと、彩夏に入院させられていた。

「あの人には俺から言っといてやるから、さっさと行ってこい。今なら流香が生徒会室にいるんじゃねぇか？」

「う、うん。　わかった、行ってみる……」

彪牙の言うことも一理あるかもしれない。

一人でいつまでも悩んで、どうしたら良いのかわからないなら、誰かの力を借りた方が良い。

そう思い、着替えを取りに、美優は病室に戻っていった。

「……出てこいよ。　総司」

「気付いていましたか」

美優が屋上から出ていくと同時に、何処からともなく、総司が屋上に現れた。

「君は本当にお節介が好きですね」

「悩んでる後輩を助けてやるのが先輩の役目だぜ」

総司は彪牙の隣に並び、景色を眺めながら話を訊く。

「優也も美優も、あいつ等色々似てんだよ。　だから、優也を良く知ってる奴等と話したら、どうにかなりそうだろ」

「他人任せですね」

うるせぇよ、と呟き、柵から体を離して出口に向かう。

「何処へ？」

総司は訪ねる。

「優也の見舞いにでも行ってくらぁ」

軽く手を振り、彪牙は屋上から出ていった。

第４９話　少女の苦悩

「成る程。悩み相談ね」

「うん……。　そんなとこ」

彪牙に言われた通りに、美優は流香の所へと来ていた。

「どうぞ。　優也よりは美味しくはないけどね」

「ありがとう……」

差し出された紅茶を、一口飲んでみる。

（美味しい）

優也より美味しくないと言っていたが、そんなことはない。
優也が淹れる紅茶と同じ、いや、それより美味しかった。

「悩みって、優也の事ね」
「……うん」

やはり流香にも、魔界での自分と優也の戦いの事は、知らされていたらしい。

「取りあえず、髪梳いてあげる」
「え……？」

ポカンとしている美優に、鏡を見せる。
そこに写っていたのは、ボサボサな黒い髪。

「あっ！」

今になって気が付いた。
髪が短くなってから、一度も髪の手入れをしていなかった。

「ずっと一人で悩んでたから、忘れてたでしょ」

机の引き出しから、櫛とハサミを取り出し、ソファーに座っている美優の後ろに立つ。

「髪は女の命なんだから、ちゃんと手入れしなさいよ」
「ごめんなさい……」

櫛を美優の髪に入れ、手際よく梳いていく。

「少し、昔話でもしましょうか」

「昔話？」

髪を梳かれながら、不思議そうに聞き返す。

「つまらないから、聞き流しても良いわ」

美優はゆっくり首を横に振る。

その様子に、流香は一言ありがとうと呟き、髪を梳きながら昔の話を語る。

「昔あるところにね、人間と吸血鬼との間に生まれた銀髪の女の子がいたわ」

「……」

誰の事を話しているのか、すぐにわかった。

わかったが、敢えて言わないことにした。

「吸血鬼と人間のハーフだけど、毎日楽しく暮らしていたわ。でも、それも長く続かなかった……」

「何が、あったの？」

訊くべきか訊かないべきか、悩んだが、やはり訊くことにした。

「殺されたわ。父親も母親も……人間達にね」

「！！」

やはり訊くべきではなかっただろうか。
髪を梳き終えた流香は、櫛の代わりにハサミを手に取り、美優の後ろ髪を切り揃えていく。

「生き残った女の子は悲しんだわ。　それと同時に狂ってしまった。
二人を殺した人間達を一人残らず殺してしまったの」
「っ！」

ハサミの乾いた音が部屋に響く。

「正気に戻った後、すぐ後悔したわ。　何て事をしてしまったんだろうって。　私は生きていて良いんだろうかって悩んだわ」
「……」

同じ様でかなり違う。
美優は大切な人を傷付け、彼女は大切な人を奪った人達の命を奪った。
決定的な違いだが、その事に対する後悔、そして苦悩、多少の違いはあれど、同じだった。

「でもその子は生きたわ。　守りたくて、愛してて、支えたい人達が出来たから」
「守りたくて、愛してて、支えたい、人達……」

確認するように呟く。
髪を切り終え、もう一度櫛で軽く梳いていく。

「どんな些細な事で良い。　生きる理由を見付けなさい」
「生きる……理由……」
「そうね。　例えば好きな人を見付けるとか」

恋人と言う単語に、美優の顔が赤くなる。
赤くなった美優の顔を見て、流香はあぁ～成る程と思う。

「フフ、美優は好きな人を探す必要はないわね。何たって優也が好きなんだものね」
「ふにゃっ／／／！？」

ボンッと、更に顔が赤くなる。

「わわわわ私は、べべべべ別に、そそそそそんなんじゃ／／／／！」
（可愛い）

あたふたと慌てる美優が、何だか可愛く感じた流香であった。

「そう言う事よ。　大切な人がいれば守ってあげたい、支えてあげたい。　だから生きたいと思えるのよ」
「う、うん……／／／」

まだ顔が赤い。
大分からかわれたが、流香が言ったことは納得できた。
それに、少しスッキリした。
彪牙の言う通り、一人で悩まず、初めから誰かに相談するべきだった。

「はい、おしまい。　綺麗になったわ」
「あ、ありがとう！」

髪を梳き終え、櫛とハサミを元の場所に直している流香に、美優は笑顔を向ける。

「やっと笑ったわね」
「え？」
キョトンとしている美優の目の前に座り、優雅に紅茶を飲む。
「貴女は笑顔の方が良く似合うわ。　だからいつも笑ってなさい」
「う、うん／／／」
男女構わず落としそうな流香の悩殺スマイルに、思わずまた顔が赤くなる。
（もぅ……／／／。　あれ？）
ふと、さっき流香が言っていたことを思い出す。
守りたくて、愛してて、支えたい、確かに愛してる人と言っていた。
そこで、ある結論に辿り着く。
（もしかして、流香さんにも好きな人がいるのかな？）
その事について流香に訪ねようとする。
「あの、る……」
「流香、居るか？」
訪ねようとしたが、ノックも無しに部屋に入ってきた仁によって遮られた。
「居るわよ。　居なきゃ開いてないでしょ」
「それもそうだ」

流香は仁の分の紅茶を淹れる。
仁は何も言わず、美優の目の前に座る。
目の前に座られ、美優は少し緊張する。

「で？　何しに来たの？」

紅茶を淹れながら、仁の目的を訪ねる。

「神道がここに居るって訊いたから、礼を言いに来た」
「礼？」

仁に対して、礼を言われる様な事はしていない。
した事と言えば、魔界で優也を傷付けた事。
そこで美優は気付いた。
仁は優也の事を大切に想っている。
仁だけではなく、流香も正もそうだ。
そんな仁が、このタイミングでお礼に来ると言うことは。

「お礼参り！？」
「違う。　そして使い方も違う」

冷静にツッコまれた。

「こら、美優を怖がらせないの」
「怖がらせてない」

軽く注意しながら、流香は紅茶を差し出す。

「そ、それじゃあ、お礼って何のお礼？」

取りあえず、お礼参りではないことに安心した美優は、お礼の理由を訊いてみる。

「それより髪切った？」

「タ●さん！？」

会話が成り立たない。

マイペースな仁に困っている美優を見かねた流香が、助け船を出す。

「さっき切ったわよ。　だからさっさと本題に入りなさい」

「それもそうだな」

差し出された紅茶を一口飲むと、仁は美優に頭を下げた。

「ちょ、仁！？」

突然頭を下げられ、慌てる美優。

すると仁はこう言った。

「感謝してる」

「え……？」

とことん意味がわからない。

ここまで露骨に感謝される様な事をした覚えは無いのに、何故目の前の金髪少年は、頭を下げてまで感謝しているのだろう。

「自惚れだが、優也は俺達以外に大切な者なんていなかった。そこで出会ったのが、お前だ」

「……」

頭を下げたまま語る仁に、何も言うべきではないと思い、耳を傾ける。

「お前がバロールに捕まった時、優也は真っ先にお前を助ける事を優先した。　そんな優也を見るのは久し振りだ。　それだけお前が、お前達がいる日常が楽しいんだろう」

確かに優也は、自分や進達と一緒にいる時、とても楽しそうにしている。
それもそうだ。
優也にとって、今の日常は知らないことばかりなのだから。

「お前は、魔界での事を気にしているみたいだが、俺はそれでも良いと思ってる」
「え……」

仁は顔を上げ、驚いている美優と目を合わせる。

「いつまでも悩めと言ってる訳じゃない。　今回した事を、お前自身が罪だと思っているなら、忘れるなって意味だ」
「罪……」

罪、その言葉が強く頭に残る。
確かに今回の事は、自分にとっては大きな罪。

「罪を忘れるな。　罪を忘れない事が自分に対する罰。　そして、傷付けた相手への償いだと、そう思ってる。　俺達はそうして今を生きている」

罪の償い方にも、色々あると思う。
殺してしまった人達を忘れないことが、仁達にとっての償いなのだろう。

（じゃあ私は……）

自分が優也にしてやれる償い。
それは一体何なのか、まだわからない。
だが、二人のおかげ、いや、“三人”のおかげで、悩みはかなり消えた。
あと少しの悩みを断つため、美優は立ち上がる。

「二人ともありがとう。　まだ、どうしたら良いかわからないけど、私……優也と話してくる！」

二人に笑顔を向け、美優は優也が居る病院へと向かって行った。

「やっぱり笑ってる方が似合うわ」

美優が去った後、流香はそう呟く。
あれだけ笑えれば、もう大丈夫だろうと思いながら、カップを片付ける。

「罪を忘れない。　あんたらしいわね」
「まぁな」

カップに入っていた紅茶を飲み干し、そして呟く。

「俺は忘れない。　絶対に」
「……そうね」

見た、聞いたものを完全に記憶する完全記憶能力。
仁にはそれが備わっている。
だから仁は、忘れたくても忘れる事ができない。

（と言っても、どうせ何も忘れる気もないだろうけど）

完全記憶能力が無くとも、仁なら日記に書くなりして、毎日を忘れない様にするだろう。
そんなことを考えながら、空になったカップを手に取る。

「おかわりは？」
「貰う」

私も忘れない様に、好きな人と毎日を楽しみましょうか。
そう考えながら、カップに紅茶を注いだ。

妖怪達の本拠地であり家である妖怪の山。
木々が生い茂る山でも、拓けた場所もある。
そこに、座禅を組んでいる白髪の少年と、少年から少し離れた場所で、少年を見守っている水色の髪の少女が居た。
座禅を組んでいる白髪の少年は風魔正。
魔界での戦い以来、ずっとこうして座禅を組んでいる。

（狂気に呑まれるのは心が弱いからだ。　狂気に呑まれるようじゃ

俺はまだまだ弱い……！！）

悪魔と戦い、狂気に呑まれ、そして命を奪った。
正もまた、悩んでいた。
だが正は止まらない、止まるわけにはいない。

「神道の傍に居なくて良いのかよ？」

自分を見守っている水色の髪の少女に声を掛ける。
少女の名は椿薫。
美優の親友だが、今は正と一緒にいる。

「大丈夫ですよ。　私より頼りになる人達もいますし、美優ちゃん弱くありません。　それに……」

それに？　と正は聞き返す。

「貴方の事も心配ですから」

「……」

嘘を見抜くのは得意だ。
目を開かなくとも、薫が自分を心配してくれている事はわかる。

（やっぱ修行不足だな）

好きな少女に心配される程、自分はまだまだ未熟だと、改めて痛感した。

「隣良いですか？」

「ああ、良いよ」

薫は正の隣に座る。
正も座禅を解き、楽な体勢で座る。

「悪いな。　俺が弱いせいで心配させて……」

少し俯きながら、正は謝る。

「そんな事言わないで下さい。　正さんは強いですよ」
「／／／／／／／／／／」

笑顔を正に向ける。
その笑顔を間近で見てしまった正は、完熟トマトの如く、顔を真っ赤にする。
今思えば、魔界に向かう前、薫の名前を呼んだり、薫の肩に手を置いたり、正にとってはかなり恥ずかしい事をしていた事を思い出す。

「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」
「せ、正さん！？」

すると、恥ずかしさのあまりに、オーバーヒートしてしまい、頭から煙を出して、正は気絶してしまった。

（精神力から鍛えよう）

自分を呼ぶ薫の声を子守唄代わりに、正は気絶した。

久し振りに正が恥ずかしさで気絶している頃、美優は病院に戻っていた。

「やっと……着いたぁ～！」

学校から走って、病院まで戻ってきた為、美優は肩で息する程疲れていた。

二三度深呼吸をすると、気合いを入れて歩き出す。

「あれ？　優花？」

「お帰り」

病院の入口付近まで行くと、優花がこちらに微笑んで待っていた。

「優也の所に行くんでしょ」

「うん」

どうやら、美優が何処に行こうとしているのかは、優花にはお見通しだったらしい。

「歩きながらで良いから、少し話しましょ」

「う、うん！」

二人は共に並び、優也の病室へと歩いていった。

「悩みは無くなった？」

「後もう少し……かな？」

本当に何処までお見通しなんだろう。
そう思いながら、美優は答える。

「流香と仁と話して、大分スッキリしたけど、私が優也にしてあげられる事はまだわからないんだ」

少し笑いながら言う美優を見て、優花は口を開く。

「悩む事は、悪いことじゃないよ」
「え……」

その言葉に、美優は少し驚く。
驚く美優にお構い無く、優花は話す。

「人間でも、妖怪でも、悪魔でも、皆悩むもの。　悩んで、悩んで悩んで、そうして皆強くなっていくんだよ」
「悩んで……強く……」

そうだよ、優花はそう言うと、話を続ける。

「私には戦う力が無い。　その事で私も悩んだよ。　でもね、戦う力が無くても、待つ事で優也と一緒戦えるって気付いたの」
「待つ事で？」
「優也達の帰って来る場所を守れるでしょ」

その言葉にハッとする。
優花は、待つ事で皆の帰って来る場所になっている。
それが優花の戦いなんだと気付いた。

「それが私にとっての、優也にしてあげられる事。美優には、美優にしかできない優也にしてあげられる事があるでしょ？」
「私にしか出来ない事……」
すると、優花は歩みを止める。
丁度優也の病室に着いた様だ。
「答えは出た？」
「うん。　私にしか出来ない事、見付けたよ！」
その様子に安心した優花は、ポケットから白いリボンを取り出す。
「あ、そのリボンは……」
「結んであげる」
優花はリボンを、美優の髪に結ぶ。
「何処にあったの？」
無くしたと思っていたリボンを、何処で見付けたのか気になり、優花に訊いてみた。
「優也が持ってたよ。美優に渡してほしいって渡されたの」
成る程と思った。
だから優花は自分を捜していてくれたのだろう。
「はい、出来たよ」
「ありがとう！」

リボンを結んでくれた優花に、満面の笑みを向ける。
薫と約束したように、流香に言われたように、美優は笑った。

「うん、どういたしまして。　じゃあ優也の所に行こうか」
「うん！」

美優は元気良く返事をすると、扉を勢いよく開けた。

「あれ？　彪牙？」

扉を開けた先には、ベッドに座る優也と、何故か彪牙が居た。

「お姫様も来たみてぇだし、そろそろおいとまさせてもらうわ」
「何だよお姫様って……」

彪牙は椅子から立ち上がり、病室から出ていこうとする。

「ありがとね」

美優の隣を横切った時、小さくだが、彪牙は確かに感謝の言葉を訊いた。

「気にすんな」

軽く笑うと、彪牙は病室から出ていった。

「優花、おめぇは入らなくて良いのかよ」

壁にもたれ掛かり、病室に入らなかった優花に声を掛ける。

「今は、二人っきりにしてあげよ」

それより、と付け加え、彪牙の後ろに視線を向ける。

「彩夏さんに何かした？」

「は？」

「私の患者を勝手に連れ出したのは貴方かしら？」

彪牙の顔が青ざめる。

ゆっくりと後ろを向くと、目が笑っていない笑顔の彩夏がいた。

「外出届は貰ってないんだけど？」

（忘れてた！！）

任せとけとか言ったが、忘れていては意味がない。

「ちょっと来てくれる？」

「あ～、はい……」

悪いのは俺だし、説教くらいは訊いてやるか。

そんな事を考えながら、襟首を掴まれて、引っ張られていく彪牙を、優花は見送った。

彪牙が出ていき、病室には優也と美優の二人っきりになった。

「何話してたの？」
「ちょっとした世間話だよ。　とにかく座ったらどうだ？」
そう言われ、美優は椅子に腰掛ける。
「あのね、優也。　私、優也に言いたい事があるの」
「言いたい事？」
美優は頷く。
そして、見付けた答えを伝える。
「私のこの力のせいで、優也は傷付いた。　でも私は忘れないよ。
それが私の罪だから」
「……」
背負わせるつもりは無かったのだが、美優はそれを自分の罪だとして受け入れている。
恐らく、仁の入れ知恵だろうと考えながら、美優の話に耳を傾ける。
「私に出来る罪の償い方、考えてみて、やっと見付けたよ。　それはね、優也を守ること」
「！」
優也は目を見開く。
美優の目を見れば、真剣だという事はわかる。
ここまで自分の事を大切に想ってくれているとは、思いもしなかった。
「だから私も、強くなる。　優也を守れるくらいに」

その言葉に、優也は少し頬が緩んだ。

「だったら、置いていかれない様に気を付けろ」

そして、拳を突き出した。

「うん」

美優も拳を突き出し、優也の拳と合わせた。

「守りたいものがあるなら、強くなるぞ。一緒に」

「うん！」

強くなる、その約束と共に、黒の少年と白の少女の物語が、今始まる。

第４９話　少女の苦悩（後書き）

流香
「今更って感じよね。　物語が始まるって」
闇夜
「今から本格的にって事なんだけどね」
流香
「とにかく、美優が元気になって良かったわ」
闇夜
「こう言う話は、何やかんやで苦手だよ」
流香
「何が得意なのよ」
闇夜
「うぅ～ん……。　シリアス？」
流香
「貴方に得意なモノは無いでしょ」
闇夜
「くっ！　否定出来ない！」
流香
「否定しなさいよ……」
闇夜
「え～、ここまで読んで下さってありがとうございます。　これからは日常編をしてからまた長編なのですが、日常編の間に、優也、仁、正、流香の、一人一話完結の過去編を書こうと思っています」
流香
「へぇ～、プライバシーの侵害？」
闇夜
「違う！？　それに、次回はいきなり過去編を一つ投稿するつもりだよ」

流香
「もう！？」
闇夜
「そう！　だからタイトルコールをお願いします！」
流香
「仕方がないわね。　こんなのだけど、これからも宜しくね」

次回
第５０話　過去編１【吸血鬼の誕生】
流香
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

闇夜
「龍は書くかどうかはわかりません」

第５０話　過去編１【吸血鬼の誕生】

森の奥深くに大きな館が建っていた。
周りには全く人影が無い。
館が建っている場所もそうだが、一番は、館に住んでいる吸血鬼に恐れて、誰も近付こうとしないのだ。
館の主であり、吸血鬼である男の名は、『クロード・ブランシャール』。
その館には彼以外に、病弱な妻、二人の娘、数人の使用人が居た。
そして、二人の娘の内、一人の娘の名は
『ルカ・ブランシャール』
と言う名だった。

第５０話　過去編１【吸血鬼の誕生】

私、『ルカ・ブランシャール』には姉が一人いる。
名前は『ルナ・ブランシャール』。
私の銀髪とは対極的に、綺麗な金髪をしている。
一度訊いた事があるのだが、私とお姉様は母親が違う。

お姉様を生んだお母様は、お父様と喧嘩をして離婚してしまったらしく、離婚した後は、人間の女性と再婚し、私が生まれた。
だから、私は人間と吸血鬼のハーフで、お母様も吸血鬼だったお姉様とは違う。
でも、お姉様は優しいから大好き。
まだ十歳くらいにしか見えないのに、大人の魅力、だったかな？
とにかく、そんな感じの雰囲気を醸し出していて優しいお姉様が大好きで、尊敬している女性。
勿論、お母様も尊敬している女性だ。
お母様は日本の人で、病弱で、ただの人間で一般人。
そんな人が、吸血鬼のお父様を落として結婚したのだと思うと、本当に凄いと思う。
お母様の為に、日本に移住してきたお父様も凄いけど。
そんな愛妻家なお父様は、吸血鬼だけど、争いは好きじゃない。
日本に移住した理由の中には、吸血鬼狩りから逃れるという理由もあったみたい。
その吸血鬼狩りからお父様達を逃がす為、昔居た使用人の人達が囮になって死んでしまったって、お父様と一緒に居た使用人の一人が言ってた。
その時、私は生まれてなかったから、何も知らないけど、その時の事が原因で、お姉様はお父様の事が嫌いになってしまった。
死んでしまった使用人達の事が、お姉様は好きだったのに、何故お父様は助けずに逃げたんだって、もう百年以上喧嘩をしたままでいる。
その話を訊いた時までは、お姉様が百歳を越えているとは、夢にも思わなかった。
私はお父様もお姉様も大好きだから、二人には仲直りしてほしい。
今、館に居るのは、私達だけじゃなくて、他に三人居る。
一人はメイドさん。
全然表情を変えずに、淡々と仕事をこなしている。

言葉の最後にいつも『あります』を付けてる。
メイドなんだけど、お父様には結構厳しい。
もう一人は料理人。
妖怪だって訊いたけど、いつもニコニコしてて、体型は一番お姉さんなのに、一番子供っぽくて、仲良くしてくれて、全然妖怪には見えない。
だけど、料理は凄く美味しい。
お父様と日本に来る前は、お父様の敵をいっぱい倒したって言ってたけど、ホントかな？
最後は用心棒のお姉さん。
いつも無愛想で、メイドさんとあまり変わらないけど、私やお姉様と話してる時は、少し表情が柔らかくなってる気がする。
本当は優しいんだよね。
皆大好きで、皆と一緒に居るのが楽しくて仕方ない生活が、ずっと続くのだと思ってた。
あの日が来るまでは。

今日は雨だった。
吸血鬼にとって雨は、と言うより、流水は天敵。
私はハーフだから、多少は大丈夫だけど、お父様もお姉様も純粋な吸血鬼だから、外に出ることが出来ない。
無理をすれば出られるらしいけど。
外に出ることが出来ないから、お母様とお話をしていた。
今日は一人でちゃんと起きられたか、食べ物は好き嫌いせずに食べたか、お父様やお姉様とは仲良くしてるか、本当に他愛もないお話。

そんな他愛もないお話が、とても楽しくて、幸せな時間だった。
でも、そんな幸せな時間は、終わりを告げる。
突然、お父様とお姉様が、今まで見たこともないくらい険しい表情で、部屋に入ってきた。
お母様は何事かと、お父様に問う。
そして、お父様は重々しく口を開いた。
数百人もの人間が、この館に襲撃してきたと。
その言葉に、私はショックを受けた。
お父様が何か言っているが、頭に入ってこない。
ただ静かに暮らしていただけなのに、何故襲撃などされなければいけないのか。
気付けば、知らぬ内にお母様の服を握り締めていた。
そんな私に、お母様は笑いかけながら、優しく頭を撫でてくれた。
そのおかげで、少し冷静になれた私は、やっとお父様の話が頭に入ってきた。
メイドさん達が、何とか食い止めているらしい。
その内に、私とお姉様だけでも先に逃げろと言うことだった。
勿論私は拒否した。
皆を置いて逃げるなんて、私には出来ない。
そんな私の手を、お姉様は強く握り締めた。
お姉様が何をしようとしているのか、それだけですぐにわかった。
逃げるのだと。
お姉様は私の手を握ったまま、走り出す。
私も抵抗はしたけど、生粋の吸血鬼であるお姉様に力で勝てる筈もなかった。
お姉様に引っ張られながら、お父様達を見る。
私達二人を、微笑みながら見てくれている二人は、どんどん遠ざかっていく。
生きている二人を見たのは、これが最期だった。

館の中には、炎が燃え盛っていた。
降っている雨じゃ消せないくらいに燃えていた。
お父様が言っていた人間達が、館に火を放ったのだろう。
吸血鬼は炎も弱点だから。
すると、私の手を引っ張って走っていたお姉様が、足を止める。
どうやら裏口に着いた様だ。

「ルカ、良く訊きなさい」

私より背の高いお姉様は、しゃがんで、私の目線に合わせる。

「私はこれからお父様達の所に戻るわ。　ここから先はルカ一人で行くの。　わかった？」

私は迷わず首を横に振った。

「ルカ、貴女の気持ちはわかるけど、貴女には戦う力が無いの。わかって頂戴」

駄々っ子の様に、私は拒否する。
これ以上、皆と離れたくないからだ。

「私はね、お父様が嫌いよ。　でもね、私の、私達のお父様もお母様も、あの人達しかいないの。　だから、私を行かせて」

そう言い、お姉様は私を優しく抱き締める。

「ルカ、私達は生き残る。　だから、ルカも生きて」

私は理解した。
皆が生き残るには、力が無い私がいても邪魔なだけだと。
悔しいけど、私に今出来る事は、それだけなんだ。
頷くと同時に、頬を涙が伝う。

「ありがとうルカ。　愛してる」

私はもう一度頷くと、お姉様は燃え盛る館の中へと、走り出した。

雨に濡れない様に、木陰に隠れながら、館から離れていく。
皆は大丈夫だろうか、ちゃんと逃げれたのだろうか。
頭の中で、心配するしか、私にしか出来なかった。
次の瞬間、右足に激痛が走った。
あまりの痛みに、私はぬかるんだ地面に倒れ込む。
後ろの方から、いくつもの足音が聞こえる。
私はすぐに悟った。
追い付かれたのだと。
さっきの右足の激痛は、銃弾で撃ち抜かれたのだろう。
もし私がちゃんとした吸血鬼なら、こんな傷もすぐに治るのに。
そうしてる間にも、足音は近付いてくる。
立とうとしても、激痛のせいで立つ事が出来ない。

そして、遂に追い付かれてしまった。
私を取り囲む様に並ぶ数十人の人間達。
何も出来ない私は、ただ見上げるしか出来ない。
私を見下す様に立っていた人達が、何かを話していた。
少し聞こえた会話の内容に、『もう一人のガキはどうした』と言う会話があった。
それを訊いた私は、お姉様の事だと思いながら、お姉様は生きているのだと確信した。
すると、人間達の一人が、手に持っていた何かを、私に向かって放り投げた。
私の目の前に落ちたそれを見て、私は目を疑った。
だってそれは、生首、お父様とお母様の生首だったのだから。
人間達は何かを言っているが、私には何も聞こえない。
さっきまで私と話していたのに、さっきまで私に微笑みかけてくれたのに、何故今は話してもくれなければ、微笑みかけてくれないの？
理由はわかってる。
人間が悪い。
私達は静かに暮らしていただけなのに、楽しく話していただけなのに、生きていただけなのに。

「全部……全部、ぜんぶゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブ！！！！　お前達が悪いんだ！！」

ドクンと、私は体に異変を感じた。
そんな事にお構い無く、お父様とお母様を放り投げた男に飛び掛かった。
今までとは比べ物にならない速さで、男の頭を掴み、首に噛み付いた。
バキッと、首の骨が折れる音がしたが、そんな事関係無く、男の血を吸う。

今まで血なんて吸った事無いから、どんな味かは知らなかったけど、やっぱり不味い。
所詮、こんな人間の生き血なんてこんなものか。
初めは抵抗していた男も、段々力が抜けていき、完全に力尽きた。
それでも私は血を吸う事をやめない。
全ての憎しみをぶつける様に、血を吸い続け、男は干からびてしまった。
干からびた男を捨てると、私は他の人間達に襲い掛かる。
人間達は銀でできた武器や、十字架等、吸血鬼の弱点である物で応戦してきたが、私には効果が薄い。
お母様の人間の力が、私を守ってくれているのだから。
さっきの男とは違い、血を吸わずに素手で殺していく。
そんな私に、恐れを為したのか、人間達は逃げ惑う。
お父様とお母様をこんな目に合わせた奴等を逃がす程、私は甘くはない。
私は一気に駆け出す。
雨の中、男達の断末魔が響き渡った。

私の足下には、人間だった物が転がっている。
私はそれには目もくれず、お父様とお母様の元へ駆け寄る。
雨が体に当たる度に、焼ける様な音が鳴り、焼ける様な痛みが襲う。
今気付いたが、私の背中には赤い翼が生えていた。
私の中にある吸血鬼の、お父様の力が目覚めたのだろう。
だが、今そんな事はどうでも良い。
私は二人を抱き抱える。

「お父様……お母様……」

何度呼び掛けても、反応が無い。

私が生まれる前に、使用人の人達が死んでしまったと訊いたが、死ぬという事がどういう意味かわからなかった私には、その話を訊いても、ただ悲しいという事しかわからなかった。

けど、今死ぬという意味を知った。

悲しいだけじゃない、話すことも出来なければ、笑いあう事も出来ない。

一緒に、暮らす事も出来ない。

これが、死か。

「お父様、私に力を与えてくれてありがとうございます。お母様、私を守ってくれてありがとうございます」

私は二人を抱き締めながら、感謝の気持ちを述べていく。

「でも、私はもう貴方達の娘を名乗れません」

私は争いが嫌いな二人の目の前で、人間を殺してしまったのだから。

「それでも、私を見守っていて下さい」

涙を流しながら、私は二人に笑い掛けた。

私は、お姉様との約束を守る為に歩き出す。

二人を守る様に抱き抱えながら。

「お墓……作らないと……」

二人を安全な所まで運んだら、まずはお墓を作ろう。
それと、私はもう『ブランシャール』の名を名乗る訳にはいかない。
名を変えないと、そうだ、ここは日本だから、お母様の旧姓を名乗らせてもらおう。
今日から私は、『黒城流香』だ。

次に目を開いて私が見た景色は、いつも私が居る生徒会室だった。

「良く寝てたな」

相変わらず無表情な仁が、目の前に座っていた。

「久し振りに昔の夢を見たわ」
「そうか」

ついつい口が滑って夢の事を話しちゃったけど、仁は何も訊かない。
本当に、こういうところは気が利くわ。
単に興味無いだけかもしれないけど。

「ほら」

無愛想な言い方で、紅茶を差し出してくれた。
本当に気が利くわね。

「いただきます」

差し出された紅茶を、一口飲む。
味は……お世辞にも美味しいとは言えない。

「どうだ？」

仁が感想を訪ねてくる。
確かに味は美味しいとは言えないけど

「良い紅茶ね」

心が暖まったわ。
お父様、お母様、私は元気です。
守りたくて、愛してて、支えたい人達と共に、今を生きています。

第５０話　過去編１【吸血鬼の誕生】（後書き）

闇夜
「過去編も中々疲れた」
美優
「流香さんにも色々あったんだね」
闇夜
「後は優也と仁と正。　どんな話にしようかな～？」
美優
「ちゃんと私達の話も書いてよ」
闇夜
「ちゃんと書くよ」
美優
「本当に？」
闇夜
「自分を信じろ！」
美優
「う、うん。　わかった……」
闇夜
「じゃあ次回予告を」

次回
第５１話　問題児
美優
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第５１話　問題児

「ごめんなさい！！」

退院した優也達は、いきなり雅に謝られた。
進曰く、今回自分がした事で優也達に迷惑を掛けた事を謝りたかったらしい。

「雅、だったよな。　俺達は気にしてないぞ」
「そうそう！　私もピンピンしてるから、気にしないで！」

二人とも、雅に対して謝罪を求めた訳ではない。

「でも、迷惑を掛けた事には変わらないでしょ」

それでも、雅はキチンと謝罪したかった。

「ちゃんと謝罪したいから、皆を私の家に招待したいんだけど……良い？」
『家？』

第５１話　問題児

そんな訳で、雅を先頭に、別に良いって言ったんだけどなぁ、と思っている優也と、どんな家か気になっている美優、優也と美優の付き添いの優花、進は言わずとも居る理由はわかるだろう。
この五人と、何処からか情報を手に入れた彪牙と総司を合わせたメンバーで、雅の家に向かっていた。

「何でお前等も居るんだ？」

何故か居る二人に、優也は疑問符を浮かべる。

「タダ飯が食えるって訊いた」
「女性のお宅に訪問できる機会など、そうそうありませんから」
「よし、お前等帰れ」

随分と自分勝手な理由に、優也は呆れる。

「良いのよ。　その人達にも迷惑掛けたみたいだし」

後ろを見ながら、雅は申し訳なさそうに言う。

「ほら！　あの娘もああ言ってんだし、良いじゃねぇか」
「ご厚意はちゃんと受け取るべきです」

この二人には遠慮と言う言葉は無いらしい。
総司（へんたい）は少し違うが。

「あんた等をちょっと見損なったよ……」
「着いたよ」
そう言いながら、雅は自分の家に指を差す。
指を差した方向を見た優也達は、度肝を抜かれた。
『デカッ！？』
思っていた以上にデカかったのだ。
正確に言えば、デカイと言うより広いだが。
雅の家は、家と言うより屋敷だ。
「そう言えば、実家が剣術道場なんだっけ……？」
「それでもデカイな……」
「広々してて良いじゃねぇか」
全員が雅の家を眺めていると、玄関の戸が開き、黒髪でツンツン頭の少年が出てきた。
「真司！」
「げっ！」
真司と呼ばれた少年は、雅を見ると、急いで走り出した。
「待ちなさいよ！」
慌てて呼び止めるが、真司は聞く耳持たず、何処かに走り去っていった。
「あぁ……」

走り去った真司の後ろ姿を見つめながら、雅は悲しそうな表情をする。

「あれって、前に言ってた……？」

雅は少し頷く。

以前、雅と進が話していた時に、チラッと話題に出てきた居候の事だ。

「ただ事ではなさそうですね。何かあったんですか？」

確かに、雅のあの表情も真司の行動も、何かあったとしか思えない。

「最近あの子の帰りが遅くて、帰ってきたと思ったら怪我してるし……。訊いても何も答えてくれないし……」

段々雅の表情が暗くなっていく。

思っていた以上に厄介な事の様だ。

「と、とにかく！　皆入って！　あの子ならその内帰ってくるから！」

無理矢理笑顔を作り、家の中に入っていく雅。

あの少年の事が心配なのは見え見えだが、あまりその事については話さない方が良いと思い、進達は雅の家に入る。

「優花？　どうかしたか？」

皆が入っていく中、優花は真司が走っていった方向を見続けていた。

「ううん、何でもないよ。　さ、雅も待ってるし、行こ？」
「あ、あぁ……」
そして、二人も雅の家に入っていった。

優也達は居間で、寛いでいた。
雅は、お詫びに手料理をご馳走すると言い、台所へと向かった。
「それで、何で美優まで料理するんだ？」
優也が言う通り、何故か美優まで一緒に料理をしていた。
「私も皆に迷惑掛けたからお詫びがしたいって、美優がそう言ってただろ」
「律儀で良いじゃねぇか」
雅も一緒に作ろうと言っていたから、特別止める理由も無い。
だが、美優が料理しているところを見たことがない優也は、心配で仕方なかった。
（あいつ、料理出来るのか？）
「お待たせ！」
「出来たよ！」

心配していると、人数分の料理を持って、二人が戻ってきた。

「おっ！　待ってたぜ！」
「ほぅ、カレーですか」
「美味しそう」

机の上に置かれたカレーライスは、普通に美味しそうで、優也は安心した。

「雅と一緒に作ったから、何もかもが倍増だよ！」
「どうぞ、召し上がれ！」

そう言われるとやはり期待してしまう。
どれ程美味しいか、期待しながらスプーンでカレーを掬い、一口食べる。
そして、全員の目がカッと開かれる。

（（（（（（まっずゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！！））））））

とてつもなく不味かった。

（米、米が固い！　何で噛む度にボリボリ言うんだよ！？）
（野菜も皮が全然剥けてない！）
（野菜に火が通ってねぇじゃねぇか……）
（倍増って何！？　不味さが？！）
（やば……吐きそう……です……）

食が進まない。
たった一口でこれなら、全てを完食した時は、一体どうなってしま

うのだろうか、想像出来ない、と言うかしたくない。

「おかわりも沢山あるからね！」

（（マジでか！？））

何処からか、カレーの入った鍋を取り出す。

（ちょ、これ全部食えるか……？）

（無理です……）

はっきりと不味いとは言えない。

とは言え、食べようと言う気が起きない。

「無理して、食べなくても良いよ……」

「美味しくないでしょ……？」

中々食べない皆を見て、二人の表情は暗くなる。

「「……」」

一口食べた後から、全く食べなかった優也と彪牙が、勢いよく食べ始めた。

「ごちそうさま」

「おかわり貰うぜ」

優也は手を合わせ、彪牙はおかわりを貰おうとする。

「あ、あの……」

「不味く、なかったの？」

遠慮気味に二人に問う。

「料理はな、味だけが問題じゃない」

「優也の言う通り。　料理に必要なのは、心だぜ」

腹が満たされたのか、優也は楽な体勢になり、彪牙は二杯目を食べ始める。

（（漢（おとこ）だ！　本当の漢（おとこ）だ（ですよ）！））

すると、優也が進と総司を見つめ、そして

「後は、任せた……」

気を失ってしまった。

「優也ぁ！？」

「やっぱり無理してたんじゃないですか！」

その時、優花はこの状況を打破する為、ある行動を起こした。

「優也、食べ過ぎて腹痛みたいだから、私が看病しておくね！」

（（エ、脱出（えすけーぷ）だとぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！？））

優也を看病する。

確かにこれなら、あのカレーを食べなくて済む。

（美優も雅もおバカだ。　この理由に何の疑問も浮かばない！）

（純粋無垢なフリをしてこの迅速な対応……彼女、侮れませんね！）
（何か馬鹿にされた気が……）
そうこう考えている内に、優也を連れて、優花は出て行ってしまった。
「おい、てめぇ等」
どうやら、二杯目も食べ終わったらしい彪牙が、二人に話し掛ける。
「何だよ……って、うおっ！？」
「汗だくじゃないですか！？」
おかわりしたせいか、滴り落ちる程の冷や汗をかいていた。
「おかわりはやり過ぎたぜ……」
後悔した時にはもう遅い。
脱水症状が起こりそうなくらい冷や汗をかいていた。
「とにかく、てめぇ等も食え」
そんな瀕死状態で、二人に死の宣告を言い放った。
「無理無理無理！！　これは無理……って総司ぃ！？　何優雅に食ってんのぉ！？」
抗議をしている進をよそに、総司は優雅にカレーを食べていた。
「進君。女性が心を込めて作ってくれた料理を、必ず完食する事が、

紳士と言うものです……ゴホッ！　ゴホッ！」
「むせてんじゃねぇか！　それにお前はただの変態！」
総司がカレーを食べた事で、この場で食べていないのは、進ただ一人となった。
（ど、どうする……。　皆が食べて俺だけ食べないないのは二人に悪いし……）
チラッと、横目で美優と雅を見る。
二人とも、自分が食べるのを待っている様な眼差しを向けていた。
（女の子の期待に応えるのも、男の役目……。　行くぞ！　水野進！！）
意を決し、進はカレーを口の中に掻き込んだ。
日も沈み始めた頃、真司は自宅の前で立ち尽くしていた。
「入りづらいな……」
今までは、雅にバレる事なく家を出ていたが、今日は見られてしまい、しかもあそこまで心配そうな声で呼ばれ、少し気まずい。
それに、雅が連れてきた友達の様なのも居るかもしれない。
だから、入ろうにも入れなかった。

「まだ居るのか？」

ゆっくりと玄関の戸を開いていく。

「私達の事？」

「うおぉぉぉ！！？」

開けた先には、紅い瞳の少女が立っていて、真司は驚いて声をあげる。

「だ、誰だよお前！」

「私？　私は天道優花だけど、君は？」

怒鳴る真司とは正反対に、優花は冷静に聞き返す。

「何でお前に名前を教えなきゃ駄目なんだよ！」

家に入らず、踵を返して、真司はまた何処かに歩いていく。

「待って！」

優花も家を飛び出し、真司を呼び止めるが、真司は止まろうとしない。

「一つだけ、言いたい事があるの」

真司は聞く耳持たず、どんどん歩いていく。

「雅を心配させちゃ駄目だよ」

「！」

思わず足を止める。
たった今会ったばかりの少女に、自分が気にしている事を言われたからだ。

「それだけ、じゃあね」
「待てよ！」

今度は真司が優花を呼び止める。

「俺は月臣真司って立派な名前があるんだ！　もう子供扱いすんじゃねぇぞ！！」
「え……？」

聞き間違いかと思ったが、確かに真司は自分のことを月臣と名乗った。
すると、真司は突然走り出す。

「ま、待って！」

少し遅れて、優花は真司を追い掛けた。
その光景を、少し離れた所から龍が見ていた。

「月臣真司……この時代に、まだ月臣の生き残りが居たとはな」

そう呟くと、龍は何処かへ消えた。

「くそっ！　何だよあいつ！」

街の中をぶらつきながら、真司は一人苛立っていた。
理由はたった一つ、優花の事だ。
自分の事を全部見透かしている様な態度が、真司は気に食わなかった。

「何が雅を心配させるなだよ。　そんな事……」

優花に言われた事を思い出すと、脳裏に、自分を心配している雅が写る。

「……そんな事、わかってるよ……」

すると、真司を取り囲む様に、七人の中学生くらいの男達が取り囲む。

「お前等……」

その七人には見覚えがあった。
全員、喧嘩をしてぶちのめした奴等だったからだ。

「ちょっと面貸せよ」

「何処行ったんだろ？」

完全に日も落ち、辺りも暗くなった中、優花は真司を捜していた。
真司が言っていた事が本当なら、真司は龍と関係があるかもしれない。
それを確かめる為に、真司を捜していたが、全く見付からない。

「もう帰ったのかも」

一度雅の家に戻ろうとした時、路地裏に居る人達が目に入った。

「！　真司！？」

そこには、自分と同じくらいの歳の不良達にリンチされている、真司が居た。

「やめて！　何してるの！」

優花は路地裏に入る。

「お前っ！？」
「あぁ？」

突然現れた優花に、真司は驚き、不良達は優花を睨み付ける。

「たった一人相手に、そんな大人数で恥ずかしくないの？」

睨まれても全く怯えず、逆に睨み返す。

「おめぇ、ナメた口訊いてんじゃねぇぞ」

不良の一人が優花に掴み掛かろうとする。

「余所見してんじゃねぇよ！」

いつの間にか立ち上がった真司は、優花に掴み掛かろうとした不良の股間を蹴りあげた。

「のあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？」

あまりの痛みに、不良は転げ回る。

「このガキ！」

「何しやがんだ！」

転げ回っている不良の仲間が、真司に怒鳴り散らす。

「女に手を出すような奴等に、とやかく言われる筋合いはねぇ！！」

すると、転げ回っていた不良が、涙目になりながらも立ち上がった。

「ふ、ふざけんな！　ぶっ殺し……んぎゃ！？」

立ち上がった不良にトドメを刺すように、優也が不良の上に落ちてきた。

「ぶっ殺すは、物騒だぞ」

「優也、もう大丈夫なの？」

優也は優花へと振り向く。

「あ、まだ駄目だった」

「無理は禁物だな……」

優也の顔はまだ少し青ざめていた。

「何ぎゃあぎゃあ言ってんだてめぇ等！！」

不良の一人が優也に殴りかかる。

その不良と優也では、身長差があり、優也に敗けるとは、思ってもいなかった。

仲間も同じだろう。

「グベッ！！」

この時までは。

不良のアゴに、優也のアッパーが入り、体が宙を舞う。

「ぎゃっ！！」

宙を舞った不良の体は、仲間の不良の上に落ちる。

「今回は喧嘩両成敗って事にしてくれないか？　まだやる気なら、相手になってやるが？」

不良達の顔が青ざめる。

たった一撃で、自分より大きな相手を吹き飛ばす相手に、勝てるとは思わない。

その為、次に不良達がとった行動は、逃げる事だった。

「逃げ足は速いな」

呆れた様に呟くと、優花と一緒に真司に近付く。

「大丈夫？」

「うるせぇよ……」

心配して声をかける優花に、真司は悪態を吐く。

「優花はお前を助けようとしたんだ。　礼の一つは言ったらどうだ？」

「うるさいって言ってるだろ！！　お前こそ余計な事しやがって！　俺が何しようと俺の勝手だろ！」

パシンッと、乾いた音が響く。

優花が真司の頬をひっぱたいたのだ。

「何しやが……」

「その君の勝手でね……悲しんでる人が居るんだよ」

真司の言葉を遮り、優花は説教を始める。

その様子を、優也は少し驚きながら見ていた。

優花が怒るところなど、今まで見た事がなかったからだ。

「君がこうやって喧嘩している間、雅は君の事を心配して待ってるんだよ。それなのに、君は何がしたいの？　雅を心配させたいの？」

「ち、違う……」

「なら、雅に謝りなさい」

キツイ口調で言い放つ。

「……わかった」

少し黙っていたが、優花に根負けした。

「なら、早く帰ろうか？　傷の手当てもしなくちゃいけないし」

「そうだな」

優也は真司の襟首を掴み、引きずっていく。

「てっめ！　離せこのやろ！」

手を払おうと暴れるが、払える気がしない。

「そう言えば、何で喧嘩してたんだ？」

「え……いや……」

まさか訊かれるとは思っていなく、返答に困る真司。

「雅には言わないから、教えて？」

「……絶対、言うなよ」

そう言われてしまい、喋らなくてはいけなくなってしまった。

何故か恥ずかしがりながら、重々しく口を開く。

「あいつ等……雅の事……馬鹿にしやがった、から……」

「「……」」

二人は何も言わない。

と言うより、何処か呆れている。

（（もっと深刻な話だと思ってたんだけどなぁ……））

何か喋れよ！　と言う真司を無視しながら、三人は帰っていった。

雅の家の居間は、死屍累々だった。

結局、あの後進と総司、彪牙までも気絶してしまった。

美優も試しに一口食べると、その瞬間にトイレに駆け込んでしまい、今起きているのは雅だけだった。

「……真司、どうしてるかな……？」

何処かへ行ってしまった真司を心配していると、玄関の戸が開く音がした。

真司が帰ってきたのかと思い、急いで玄関に向かった。

「し、真司！？」

そこには、思った通り真司が居た。

ボロボロの真司が。

「どうしたのその怪我！？」

「……喧嘩した」

「喧嘩って……！」

サラッと答える真司に、雅は言葉を失う。

「あの……雅……」

「な、何よ……？」

真剣な表情をする真司に、雅は怖じける。

「心配させて……ごめん……」

「！」

その言葉に、雅は目を見開いて驚くが、すぐに笑みに変わる。

「良いわよ。　真司が無事なら」

「……ありがとう」

小さく呟くと、二人家の中へと歩いていった。

「本当に姉弟みたいだな」

「そうだね」

優也と優花が見たのは、心配性な姉と、不器用だけど姉思いの弟だった。

傷の手当てをしたその後、真司はあのカレーを食べさせられ、屍が

一つ増えたとか。

第５１話　問題児（後書き）

闇夜
「あ～！　駄目だ！！」
薫
「な、何がですか？」
闇夜
「文章が上手く書けなかったぁ！！」
薫
「そこまでですか……？」
闇夜
「学校も始まって小説書く時間が減るのに、こんなんじゃ駄目だ……」
薫
「凄く卑下しますね……」
闇夜
「はっ！　授業中に執筆すれば……」
薫
「真面目に勉強しなさい」
闇夜
「あ痛っ！」
薫
「ここまで読んで下さってありがとうございます。　次回も宜しくお願いします」

次回
第５２話　シスコン兄貴の大作戦

薫
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

薫
「って、何ですかこのタイトル」
闇夜
「さぁ、何だろうね（良いタイトル思い付かなくてさぁ。　別にソウルイーターをパクった訳じゃないから。　それっぽいけど）」
薫
「心の中が駄々漏れです……」

第５２話　シスコン兄貴の大作戦

君にはある事を、椿薫に伝えてほしい。
『お兄ちゃんは薫の事を一生愛し続けてるぞ！』
頼んだ。
ｂｙ椿修二

『……』

朝起きると、ふざけた手紙がポストに入ってあった。
しかも、手紙の最後には、あの男の名前も。

「不幸の手紙？」
「何か気持ち悪い……」
「ねぇ、二人とも……あそこ……」

手紙の内容に気味悪がっている二人を呼び、優花は玄関先を指差す。
指差された先を見ると、少し扉を開き、水色の長髪の青年が、期待の眼差しを向けていた。

『何で居るんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！』
「ぶげっ！！」

二人は手紙を送ったであろう男、椿修二を、玄関の扉ごと蹴り飛ばした。

第５２話　シスコン兄貴の大作戦

「それで？　あんなふざけた手紙を送って何のつもりだ？」
「返答次第じゃ殴るよ」

縄で修二の身動きを取れなくし、床に正座させて目的を問いただしていた。
身動きが取れないからと言って、警戒を怠ってはいない。
優也は勿論、美優と優花も、いつ襲われても良い様に警戒していた。

「安心しろ。　復讐はもうしないさ」

縛られているのに、余裕綽々で話す。

「前に殺されかけたんだけど」

以前、優也は修二に殺されかけた苦い思い出がある。
その事は、加害者である修二もわかっている。

「ならこうしよう。　すみませんでした」
「え、あ～……良いよ……」
「良いんだ！？」

素直に謝られ、ついつい許してしまう。

「こんな性格だったっけ……？」

「私、話したことないから……」

初めて会った時は、性格が悪そうに感じたが、今は気の良いお兄さんと言った感じで、優也達は戸惑った。

「昔の事は一旦水に流そう。　それで？　俺達の所に来たのには何か理由があるんだろ？　まずはそれを話してくれ」

「話が早くて助かる」

途端に、真剣な表情になる修二。

その真剣さに、優也達も息を呑む。

話を訊いてくれる事を確認した修二は、重々しく口を開いた。

「俺と薫の仲を取り持って下さい！」

全員揃ってずっこけた。

「やっぱりふざけてるだろ！」

「もう殴る！」

「美優落ち着いて！」

縄で縛られたまま土下座をすると言う、シュールな光景が展開されていた。

「あ、あの、修二さん？　何でそんな事を私達に頼むんですか？　薫のお兄さんなら、普通に会いに行けば……」

優也達に代わり、優花が理由を問う。
あの薫と、喧嘩をしているとは思えない。

「薫に嫌われてるかもしれないだろ！！」
「……」

これには言葉が出ない。
あのふざけた手紙も、この男にとっては本気だったのかもしれない。

「……何とか、してあげようよ……」
「見てられなくなってきた……」
「ああ、そうだな……」

その言葉に、修二はバッと顔を上げる。

「本当か！？」
「あ、あぁ……」

復讐に取り付かれていたのが、まるで嘘の様な性格の変わり様に、
優也は戸惑う。
元よりこんな性格だったのだろうか。
嬉しさで舞い上がる修二を尻目に、優也達は朝食を取る事にした。

「取りあえず、薫と話すきっかけがあれば良いんですね？」
「あわよくば薫とイチャイチャしたい」

「兄の言葉とは思えないな」
「先にこの人の頭をどうにかした方が良いんじゃないの？」

まずは薫を見付けなければ意味がない。
優也達は、暴走気味の修二を連れ、雅の家の前に居た。

「今日は雅の家に居るのか？」
「進達に差し入れを持って行くんだって」
「真司も真面目に稽古する様になったからね」

あれ以来、真司は真面目に剣術の稽古をする様になった。
進も真司の稽古の手伝いをしており、最近は良く雅の家に行っている。

「進も居るんだな」
「進にも春だね～」
「そう言えば修二さんは？」

やけに静かだと思えば、修二の姿が見えない。
何処に行ったのだろうと、周りを見渡すと、美優は視界の端で動く影を見付け、目線を向ける。

「居たぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

動く影は、修二だった。
あろうことか、庭に忍び込もうしていた。
取りあえず、美優が一発殴って大人しくさせた。

「この人を一人にしたら危なくない？」
「いざという時には優也が居ないと駄目だから」

「なら、二人で薫の所に行って俺がこいつを見張っておくって言うのはどうだ？」

修二をどうにかする案を出した所で、優也はふと思った。

（何で元々は敵だった男の為に、ここまでしないといけないんだ？こんな何でも屋みたいな事、万●屋かス●ット団にでも頼めよ。こっちは今ツッコミ役が不足してんだよ、この場には基本ボケと天然しか居ないんだよ、空気読めシスコン。　大体頼む相手が殺そうとした相手って時点で間違いに気付け、あ、ヤバッ、考えすぎてイライラしてきた）

帰って寝ようかなと思い始めてきた時、玄関の戸が開いた。

『！！』

大慌てで電信柱の影に隠れ、玄関から出てきた人物を確認する。

「あっ！　薫だ！」

玄関から出てきたのは、自分達が捜していた薫だった。

「何ぃ！？」

自分の妹が出てきて、修二は体を乗り出して薫の姿を確認する。

「我が妹ながら、相変わらず可愛い」

薫の姿を見て、修二はうっとりした。

（ウザッ……）

そんな修二を、優也はウザがっていた。
すると薫は、手提げ鞄を持ち、何処かへ歩いていく。

「薫が何処か行くよ！」
「気付かれない様に追い掛けよう」

二人は出来る限り気配を殺し、薫の後を着け、修二もそれに続く。

（こいつ等、意外にノリノリだ……）

意外にノリノリな美優と優花と、重度なシスコンな修二の後ろを、やる気のなくなった優也はだるそうに着いていった。

薫の後を着けて数十分後、優也達は妖怪の山に足を踏み入れていた。

「こんな所に何の用だろ？」
「この山の妖怪の人達と面識はあんまり無いと思うんだけど」

半年近く前、この山で死闘を繰り広げ、その後は交友関係を築いたが、優也達が知るところ、薫自身には妖怪達とは深い関わりはなかった筈。
なのに妖怪の山に来る理由が、全くわからない。

「まさか、俺と会えない鬱憤を妖怪達で晴らすつもりか！　俺のせいで……そんな事はやめるんだ！　薫！！」
「１２０％違うと思う」
被害妄想で、修二は有りもしない事を口走るが、優也にバッサリと否定された。
「ふぅ、それにしても、ここに来るのも久し振りだな」
修二は辺りを見渡す。
「火渡」
「ん？」
見渡し終えると、修二は優也を呼んだ。
「あの時はすまなかったな」
「はぁ……？」
本当にこいつどうした？　と、内心驚きつつも、表面上では冷静に装う。
「お前に復讐する事だけで、他の事は全く考えていなかった。それがどれだけ愚かな事なのか考えずにな」
「……」
修二の復讐の心は、優也の朱雀の炎で全て消されてしまった。
それでも、修二の心の中の怒りは消えない。
「許せとは言わない。　けど、お前を許しはしない」

「ああ、それで良い」

正直、これで良かったと思う。
薫に許されて、修二にまで許されれば、自分への罰が無くなってしまうと思ったからだ。

「まぁ本当に悪いとは……」
「修二さんこっち来て！　薫が！」
「薫がどうしたぁ！？」

真剣モードから１８０度反転し、シスコンモードにチェンジした修二は、茂みから隠れて薫を観察した。

「……初めて会った時の面影もないな……」

初代ラスボスの威厳はどうした威厳は、と思いながら、一緒に茂みに隠れる。

「だ、誰だ……あの男……」
「正だな」

ショックを受ける修二に、サラッと答える。
修二の視線の先には、楽しそうに話す薫と正が居た。
重度のシスコンの修二にとって、この光景は耐え難いものだ。

「か、かかかかかかかか薫に、かかかかかかかか彼氏が……
……！！」
「いや、違うけど」

余程ショックだったのか、優也の声は届いていない。

「あんな白髪が彼氏なんてお兄ちゃんは認めないぞぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」
「おぉぉい！？　何してんだ！」
暴走した修二は、あろう事か頭を木に打ち付け始めた。
「もう！　静かにしてよ！　気付かれちゃうでしょ！」
正には異常なまでの聴覚がある。
このまま騒ぎ続ければ、バレるのは時間の問題だろう。
「それは大丈夫みたいだよ」
「え？」
優花が指差す、その先には正が居た。
その正の表情が、とんでもなく赤く、余裕が全くなかった。
「薫に夢中だね……」
「流石に、あそこまで余裕がなかったら、余程の事が無いとバレないよ」
一先ず、バレる可能性が低くて安心した。
「あの白髪がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
（余程の事あった！）
と思ったが、修二が居ては、余程の事が起こりそうで、安心する事が出来ない。

「あ、正がサンドイッチ食べてる」

「なぁにぃいぃいいいいぃいいいぃいいぃ！！！　薫の手作りサンドイッチを食べさせて貰っているだとぉおおおおおぉおぉぉぉ！！！？」

正しくは食べさせていると言うより、手渡して貰っているだけなのだが、修二にはそう聞こえたようだ。

「美味しそうに食べてる。幸せそう」

「あれ？　今、何か渡さなかったか？」

サンドイッチを食べ終えると、正は何かの紙切れの様な物を、薫に渡していた。

「！　貴様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

怒りの限界を超えた修二は、茂みを飛び越え、正と薫に突っ込んでいった。

「薫と何をしているぅううううううううううううう！！！！」

「ぶべぇ！！」

「せ、正さん！？」

勢いよく飛び出した修二は、ライ●ーキックの如く、飛び蹴りを正に放ち、正を吹き飛ばした。

「何してんのあの人ぉおおおおおおお！！！？」

「シスコンにも程があるだろ！？」

「正、大丈夫……かな？」

慌てて三人も茂みから飛び出す。

「俺の薫と何イチャイチャしている！！　俺の薫とぉ！！」

「俺の薫って二回言った！？」

尚も暴言を吐き続けるが、正には聞こえていない。

倒れた時の頭の打ち所が悪かったらしく、白眼を剥いて気絶してしまっていた。

「まぁまぁ、修二さん落ち着いて！」

「これが落ち着いていられるかぁ！」

トドメを刺すかの如く、正に襲い掛かろうとするが、優也達に取り押さえられた。

「兄……さん？」

ここで初めて、薫は正を蹴り飛ばした相手を見た。

そこに居たのは紛れもない、たった一人の兄、椿修二だった。

「兄さん！！」

薫は勢いよく走り出す。

次に何をするか察した優也達は、修二から離れる。

そして薫は、修二に抱き付いた。

「か、かお……る……？」

突然の出来事に、修二は戸惑う。

「良かった……。　兄さんに……もう、会えないんじゃないかと思って……また会えて……本当に良かった……！」

涙を流しながら、修二の背中に回した手に力を入れる。
何処かへ行かない様に。

「っ……ごめん……本当にごめん。　寂しい思いさせて……」

「うん……」

嫌われていると思っていた自分が恥ずかしい。
薫はこんなにも自分の事を大切に思ってくれていたのに。

「私達が手伝う必要なかったね」
「良いなぁ、兄妹……グスッ」

優花は微笑ましそうに、美優は目を潤ませながら、二人を見ていた。

「にしてもこいつ、薫に何渡したんだ？」

勿論、気絶している相手が答える筈もなく、優也の疑問はわからずじまいになった。

翌日。
優也達はいつも通りの朝を迎えていた。

あの後、修二は薫と一緒に暮らす事になり、とても嬉しそうにしていた。

「あの二人、ずっと仲良くしていけたら良いね」
「していけるよ。　あの二人なら………」

すると、リビングの扉が、勢いよく開かれ、その先には、見るからに落ち込んでいる修二が居た。

「不法侵入………」
「何か、あったんですか………？」

嫌な予感がしつつも、優花が尋ねる。

「薫に……薫に嫌われたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
『はぁ！？』

嫌な予感は的中した。

「一緒に風呂に入ろうって言ったら拒絶されたんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
「当たり前でしょ！？　頭大丈夫？！」
「朝っぱらからふざけた事言いに来るな！！」
「昔はよく一緒に入ってたのに！！」
『いつの話してんだぁぁぁぁ！！！』
「あぁぁぁぁ！！！」

優也と美優は同時に修二を蹴り飛ばす。

「これからはもっと騒がしくなりそう」

楽しそうだから良いか。

そんな事を考えながら、朝食を食べるのだった。

第５２話　シスコン兄貴の大作戦（後書き）

優也
「呆れる程のシスコンぶりだったな」
闇夜
「それが椿修二だ」
優也
「昔の面影を感じないぞ……」
闇夜
「それは君が朱雀の炎で……」
優也
「人のせいにするなよ」
闇夜
「ここまで見てくれてありがとうございます！　次回も宜しくお願いします！」
優也
「……お得意の逃げか……」

次回
第５３話　新任教師
優也
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

優也
「何か、次回は嫌な予感がする……」

第５３話　新任教師

「そう言う訳でさぁ～、学校の先生してくれない？」

カイは誰かに電話をしていた。

すると、受話器の向こうから気だるそうな声が聞こえてくる。

「めんどくせぇからパスで」

「借金チャラで、お金あげるよ」

「是非ともやらせていただきます。　カン様」

「カイね」

手の平を返したかの様に、電話の相手はカイからの頼みを引き受けた。

「後、亮君と紗理奈ちゃんも連れていってあげてね～」

「かしこ参りました。　カツマタ様」

「カイね。　一文字しか合ってないし、原形無いじゃん」

相手のペースになりつつも、頼み事を引き受けさせる事には成功した。

「じゃあまたね～。　彼等は頼んだよ～」

「任せて下さい。　カムサハムニダ様」

「だからカイだって！　もう人の名前ですらないし！！」

電話を切り、カイは一息吐く。

「頼む相手……間違えたかな……？」

今更になって後悔する、カイであった。

第５３話　新任教師

「新任の教師？」
「また微妙な時期にだな」

現在２月。
もう少しで新年度だと言うのに、学校は新任教師が赴任して来ると言う噂で持ちきりだった。

「また仁さんが何かしたんじゃないですか？」
「俺達は何も訊いてないけど……」
「否定……できないね……」

自分達も仁に頼んで編入してきたので、仁は関係ないとは言い切れなかった。
すると、ホームルームが始まるチャイムが鳴ると、教室の戸が開き、担任の先生が入ってくる。

それを合図に、談笑していた生徒達は、それぞれの席に座る。

「皆も知ってると思うが、今日から新任の先生が赴任してくる事になった」

教室内が、ざわざわと話し声で覆われる。

やはり噂は本当だった様だ。

「その先生が、今日から僕の代わりに担任になるんだが……遅刻してまだ来ていない……」

担任の先生がそう言うと、ざわめきが大きくなる。

いきなり担任が代わるなどと言われれば、当然な反応だろう。

しかも初日に遅刻。

「と言う訳で、先生が来るまでの間は僕……」

「ち～す、遅れました～」

担任の言葉を、気の抜けた声が遮った。

その気の抜けた声がする方へ、全員が視線を向けると、そこには灰色の天然パーマで眼鏡をかけた、だらしなく白衣を着た男が立っていた。

「!?」

その男を見た瞬間、優也と優花は驚いて立ち上がりそうになったが、何とか平静を保った。

「いや～、来る途中に不良に絡まれちゃいましてね～。　命からが

ら逃げて来ましたぁ」
「どんなベタな言い訳ですか？　とにかく、後は頼みましたよ」
担任の、担任だった先生は、だらしのない男に任せて出ていった。
男は黒板の前に立つと、自己紹介を始める。
「今日からてめぇ等の担任になる二神竜也（ふたがみたつや）だ。　事件起こして俺に迷惑かける奴は眼球にデコピンだから、そこんとこ宜しく」
「眼球にデコピンしたら失明しますよ！？」
恐ろしい事を口走る担任に、進はついついツッコンでしまう。
「人間は一度何も見えなくなれば、大切なモノが見えてくるもんなんだよ」
「一度どころか一生見えなくなるわ！！」
今度は敬語も無しにツッコミを入れる。
「良いツッコミだ。　地味なのに鋭いツッコミのギャップ。　天下取れるぜ」
「何だよ天下って！　何で初対面の人にまで地味って言われないといけねぇんだよ！？」
「先生には敬語ぉぉぉぉぉぉ！！！」
「今更！？」
竜也はチョークを進の額に向かって投げる。
スコーン、と良い音が鳴り響き、進はツッコミながら気絶した。
（チョーク投げで気絶したぁぁぁぁ！？）

生徒達は進の二の舞にはなりたくないらしく、静まり返った。

「出席とんのも面倒くせぇから無しで。　んじゃぁ、ホームルームはしめぇだ」

出席簿に人目通すと、竜也はさっさと出ていこうとする。

「あ、そういや忘れてた」

何かを思い出した竜也は、扉に手をかけつつ、生徒全員に聞こえる声で言った。

「火渡優也、天道優花、神道美優、椿薫、後、さっきの……何て名前だっけ？　地味だから地味野でいっか。　地味野、放課後に生徒会室に来るように。　遅刻すんじゃねぇぞぉ」

誰が地味野だよ……、そんな呟きが聞こえたが、誰も気にしなかった。

そして今度こそ、竜也は教室から出ていった。

放課後になり、竜也に呼び出された五人は、生徒会室に続く廊下を歩いていた。

「それじゃあ、二神先生は二人の知り合いなの？」

「うん」

「まぁな」

歩きながら、あの担任との関係を話していた。
竜也とは戦争時代に世話になったらしい。

「……何で俺達まで生徒会室に呼ばれたんだろ？」
「そう言えば何でだろ？」

進の疑問も最もだ。
優也達の知り合いなら、優也達だけ呼べば良い筈。
久し振りの再会と言う訳ではなさそうだ。

「とにかく、本人に訊けばわかるだろ」
「それもそうだね」

そんな話をしていると、生徒会室に着いた。
優也がドアノブに手をかけ、扉を開けようとするが、中々開けようとしない。

「どうしたの？」

様子がおかしい事に気付いた美優は、優也に尋ねる。

「……いや、何でもない」

そう言うと、優也は扉を開いた。
その瞬間、一人の見慣れない黒髪の男が飛び出してきた。

「良く来た！　マイブラザー！　マイシス、ぶごっ！！」
「いきなりうるさい！」

優也は飛び出してきた男の顔面に、蹴りを入れて吹き飛ばす。

「何やってんのお前ぇぇぇぇぇぇぇ！！！？」

優也の突然の行動に、進は声をあげて驚く。
美優と薫も、声は出さなかったが、その表情は驚きに染まっていた。

「どうせやると思ったわ」
「ホント、良くやりますね」

優也達が部屋の中に入ると、流香、仁、正、彪牙、総司以外にも、蹴り飛ばされた男をどうでも良さそうな表情で見下ろしている、これまた見慣れない、黒いドレスにエプロンを付けた様な服を着た紫色の髪の女性がソファーに座っていた。

「あ、あれ？　あの時の……」

その紫色の髪の女性に、美優は見覚えがあった。
雅と初めて会った日、雅に追い掛けられている途中の何処かの店で。

「……」
「あ、みや……び？」

進は部屋の片隅で膝を抱えて座り込んでいる雅に気付いた。
だが、雅は小声で何かを呟いていて、優也達には気付かない。

「紫怖い紫怖い紫怖い紫怖い紫怖い紫怖い紫怖い紫怖い紫怖い」
「何があったんだよ！？」

延々と同じ事を呟き続ける雅に、進は若干恐怖を覚える。

「あぁその娘、無理矢理連れてきたらそんな事になっちゃった」
「どんな無理矢理をしたらトラウマになるんですか！？」

トラウマなる理由は、以前あったが、美優も進もどんな事があったのか知らないので、どんな事があったのか気にはなっていたが、怖くて訊けない。

「彪牙と総司も呼ばれたんだね」
「突然来ましてね」
「何で呼ばれたかは知らねぇけどな」

これまた竜也とは接点の無い二人。
何の用でこんな大人数を呼び出したか、皆目検討もつかない。

「それにしても、呼び出した本人が遅刻ってのもおかしな話ね」

その言葉に、優也達は部屋を見渡すと、竜也は居なかった。

「あの人の遅刻はいつもの事だ」
「それでいつも言い訳するんだよな」
「それもそうね」

どうやら、竜也の遅刻はいつもの事らしく、優也と優花も頷いていた。

「竜也さんが来るまでに、自己紹介でもすませておこうか」
「生きてた！？」
「くたばれば良かったのに……」

先程優也に蹴り飛ばされた男が、平然と鼻血を流しながら立っていた。

「わかってるよ優也。　これがお前からお兄ちゃんへの愛情表現なんだと！！」
「お願いだから死ね」

普段なら言わない台詞を、この男にははっきりと言う。

「……お兄ちゃん？」

ふと美優は、男が言った言葉中に、気になる単語がある事に気が付いた。

「確かに、お兄ちゃんって言ってたよな」
「言ってたね。　と言うことはまさか……」

もしやと思い、美優達はその男に視線を向ける。

「そのまさか。　その人は天道亮（てんどうりょう）、優也と優花の兄貴だよ」
「弟と妹がお世話になってます」

そう言うと、亮は礼儀正しくお辞儀をする。
美優達は正が言った衝撃発言に、数秒動かなかったが、正の言葉をやっと理解し、

「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！？　お兄さん！？」

大声で叫んだ。

「やっぱり優也と優花って双子だったんじゃん！！」
「何で嘘吐いてたんだよ！？」
「何だか、私の兄さんみたい……」

優也と優花は質問攻め受ける。
薫は自分の兄と、何となく似ているなと、思っていた。

「話を訊け！　嘘なんて吐いてない！」
「私達は血は繋がってないよ！　義理の兄妹なんだって！」
「でも、優花の苗字があの人と同じだよ！」

二人は必死に反論する。
そんな二人に、紫髪の女性が助け船を出す。

「亮と優也は血が繋がってなくても仲の良い兄弟なのよ。そして、身よりの無かった優花を亮の親が引き取ったから、苗字が天道になったのよ」

女性の話を訊き、美優と進と薫は確認する様に二人に視線を向ける。
二人はそうだよと、頷いていた。

「ご、ごめん、騒がしくしちゃって」
「もしかして、彪牙達は知ってた？」
「君達が来る前に訊きましたよ」
「初めは確かに驚いたけどな」

兄だとは訊いていたが、優也と優花が入ってくる瞬間にあんな行動をするとは思っていなく、今でもまだ驚いている。

「教えてくれてありがとうございます。　えぇと……」
「橘紗理奈（たちばなさりな）、紗理奈で良いわ。　宜しくね」
紗理奈は綺麗な笑みを浮かべる。
美優も進も薫も、綺麗な人だと思ったものの、雅のあの有り様を見て、紗理奈に恐怖を覚えたのは言うまでもない。

「それにしても、まだ来ないな」
「まだ結構離れた場所に居るな」
いつまで待たせれば気が済むのだろうかあの男は。
正が竜也の居る場所を音で確認するが、まだこの部屋から離れた場所に居る様だ。

「あの、紗理奈さん。　竜也さんが来るのを待っている間に、私達を呼んだ理由を教えてくれません？」
「そうね。　あの人を待ってる時間も勿体ないしね。　亮」
「ん？　あ～、わかったよ……」
紗理奈、そして優也と優花から残念そうに離れた亮は、全員を見渡せる位置に移動する。

「今日、貴方達に集まってもらったのは、この先の戦いに備えてもらう為よ」
「死神、とのな」
「死……神？」
悪魔の次は死神、しかもまた戦わなければいけないのかと思うと、美優は嫌な気持ちになる。

「おいおい、ちょっと待てよ。　何でまた戦いがあるなんてあんた

等にわかんだよ。　しかも今度は死神？　冗談なら笑えねぇぜ」

死神と戦う事を知っているこの言い方だと、直ぐ様死神と戦わなければならないから準備しろと言っている様にしか聞こえる。

「君達、この間悪魔と戦っただろ」

「あ、あぁ」

「それが原因なんだよ」

悪魔と戦った事が、更なる戦いを起こす原因。

そう言われ、優也達は騒然とする。

「八年前の戦争である掟が定められた。　人間界に危害を加えない事。　それは悪魔だけに限った事じゃない。　魔界は勿論、天界、死神界も人間界に危害を加えられない。　けどね、その掟も悪魔の手によって破られた。　もうこの掟は効果が薄い。　これをチャンスだと思って攻めてくる馬鹿が少なからずいる。　それが八年前に敗北した死神だ。　神と名乗っているだけあって、大抵の死神は悪魔より強い。　だから、君達を鍛えてやろうって訳。　おわかり？」

「……」

亮が言っている事は確かにわかる。

だが、納得いかない事が一つある。

「何で、美優達まで巻き込む？」

美優、進、薫、彪牙、総司、雅、この六人を呼んだと言う事は、戦いに参加させるつもりで呼んだと言う事になる。

「こいつ等をこれ以上戦わせるつもりなのか！」

「……優也、俺はお前にも戦ってほしくない。　だけどな、そんな事はもう言ってられないんだよ。　戦って、生き残るしかないんだ。　お前も良くわかってるだろう？」

亮は優也を諭す様に言うが、美優達を巻き込むなんて事、優也に出来る筈がない。

「わかってる……！　でもこいつ等は……」
「優也」

食い下がろうとする優也に、美優が後ろから話しかける。

「言ったでしょ、一緒に強くなるって。　だから、私は戦うよ」
「お前……！」
「美優だけじゃない」

次は進が強い眼差しで、真っ直ぐに優也を見ながら話す。

「お前等が戦ってるのに、俺達だけ逃げる訳無いだろ」
「進……」
「答えは決まったな」

亮は薫、彪牙、総司の目を見る。
三人とも、戦う覚悟をしている目をしていた。

「優也」
「……わかったよ」

これ以上何を言っても仕方がない。
優也はしぶしぶ承諾した。

「ここまで話してまだ来ないのね、あのマダオ」
紗理奈が言っているマダオとは、勿論竜也の事である。
これだけ時間が経っても、まだ来る気配がない。
「先に帰っちゃおうかしら？」
「いや、来たみたいっスよ」
ほら、と正が扉を指差すと、扉が開く。
「悪ぃ、未来ある青少年と将来の話をしてたら遅れちまったわ」
「話なんかしてないくせに」
「何だコノヤロー、お前は俺のストーカーか？」
まるで反省の色が無い竜也は、軽い口を叩く。
「大人のくせに言い訳ばかりしないで下さい。　どうせホームルームの遅刻もカツアゲでもしてたからでしょ？」
「いや、ちげぇよ。　金がねぇからちょっと路地裏に連れていっただけだって」
「それカツアゲまでの一連の動作だろ！？」
やべっ、と呟きながら手で口を抑えるが、この場に居る全員はちゃんと訊いてしまっていた。
「おめぇ等、この事は秘密だからな。　特に校長には言うなよ。絶対だからな」
「この際、警察に自首したらどうですか？」

携帯を取り出しながら、紗理奈は言う。

「ところでよぉ、もう話終わったのか？」

「えぇ一応。　と言うか、スルーしないでくださいよ」

スルーされてしまったので、仕方なく携帯をしまう。

「んじゃぁ、話も終わったし今日は解散！」

「えぇっ！？」

このまま修行を始めると思っていた美優達は、驚愕の声を挙げる。

「なぁに妙な声出してんだ。　こっちにも準備ってもんがあんだよ」

「今日は貴方達の答えを訊けただけ良いでしょ。　ね？」

紗理奈は亮を見ながらそう言う。

「そうだな。　取りあえずその間まではゆっくりしとけ。　と言う訳で、優也！　優花！　今日はお兄ちゃんと……」

「修二とキャラが被ってるから無理」

「まだ何も言ってない！　と言うか修二って誰？」

修二の事を知らない亮にはわからないだろうが、修二を知っている他の皆は、確かにキャラが被っていると思っていた。

「なぁ優花」

「何？」

進は優花に小さい声で耳打ちする。

「優也さぁ、あの人に態度キツくないか？」

そこまで長い付き合いではないが、優也の事は多少なりとも知っているつもりだ。
優也が相手にキツく当たるのは、殆ど見たことがない。

「優也と亮さんはあれで良いんだよ」
「？」

進は二人を見る。
相変わらず、優也は抱き付いてこようとする亮を蹴り飛ばしていた。

ここは何処だ？
俺はあの時、あの白髪に殺された筈だ。
ここは、一体……。

「天国にも地獄にも行かず、ここまで辿り着く魂。　良いじゃねぇか」

誰だ、お前は？

「俺に着いてきたら教えてやるよ」

……面白い。

「もっかい死なねぇ様にな」

第５３話　新任教師（後書き）

闇夜
「グダクダだ。　しかも三人も新キャラ登場」
正
「竜也さんって、あのキャラに似てないか？」
闇夜
「そりゃ、あの銀髪天パキャラをイメージにしてるからさ」
正
「やっぱか」
闇夜
「やっぱです。　こんなのばかりですが、これからも宜しくお願いします」

次回
第５４話　遊園地
正
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第５４話　遊園地（前書き）

今回、あの人が大変な事に！

第５４話　遊園地

「それで、どうだった？　優也君達は」
「相変わらず女顔でした」

竜也が赴任した数日後、カイは再び竜也と連絡を取り合っていた。

「あはは、それを優也君に訊かれたら怒られるよ」
「今は居ないから大丈夫っしょ」

それもそうだね。
受話器の向こうからカイの笑い声が聞こえてくる。
正ではないのだから、この会話を訊かれる筈がない。
それでも竜也は内心ビクビクしていた。
優也が怒ると、本当に怖いのだ。

「それじゃあこのまま続けてもらうよ」
「わかってますって。　仕事はちゃんとこなす」
「期待してるよ」

またね。
最後にその言葉を訊き、カイからの電話は切れた。

「念を押されなくてもな、やる事はちゃんとやるさ」

話す相手がいなくなった携帯の向こうに、竜也は静かに呟いた。

第５４話　遊園地

生きていれば必ず、たったの一度だけでも大きな出来事が起こる。
俺も、その時が明日に迫っている。
ここまで緊張を感じるのは初めてだ。
どうする。
俺はどうしたら良いんだ……。
誰か、教えてくれ！！

「普通に話せば良いだろ」

そう言う優也の目の前には、四つん這いで項垂れている正が居た。

「……出来ないから相談に来てるんだろ」
「そうだよな」

正が何故こんな事をしているかと言うと

「つまり、薫をデートに誘ったのは良いけど、何をどうすれば良いかわからないんだね？」

以前薫に渡したのは、遊園地のチケットだった。
薫をデートに誘った正を、優也達は見直したが

「デートって言うな！　恥ずかしい！」
「「……」」

ヘタレには変わりなかった。

「それで良く、薫を誘う気になったな」

正のヘタレっぷりに呆れつつ、今ある疑問を口にする。
ここまでヘタレの正が、遊園地に薫を誘うなど考えつく筈もない。

「いや、それは流香がそうしろって」

それには納得の二人。
流香が正の背中を押してくれたのだろう。

「とにかくだ！　どんな事でも良いからアドバイスをくれ！」

せがむように二人に頼み込む正。
他人の恋愛には、実は鋭い二人なのだが、恋愛経験が無い為アドバイスなどしたくても出来ない。

「そんな事で、薫を楽しませる事が出来るの？」

どうしようかと考えていると、何処からか声が聞こえる。
声がする方へ顔を向けると、目を瞑り、腕を組みながら壁にもたれ掛かってる美優が居た。

「初めから誰かに力を貸して貰うつもりでデートに誘ったのなら、今からでもデートはやめた方が良いよ」
「何っ！」
美優に食って掛かろうとするが、薄く開かれた美優の眼光に射ぬかれ、思わずたじろぐ。
「だってそうでしょ。自分が失敗しない様にしてるだけの人とデートしたって、薫は楽しくないと思うよ」
「っ、それは……」
「人間なら失敗の一つや二つはあるよ。薫だって失敗はするから、だから、自分だけ失敗を恐れてちゃ駄目だよ？」
「……！」
美優の言う通りだ。
自分は失敗する事を怖れていた。
だが、人間は失敗する生き物なのだ。
「失敗しても良いから、思いっきり薫と楽しんできてね」
その時の美優の笑みは、まるで天使の様に優しい笑みだった。
「ああ……ありがとう！　絶対に楽しんでくるぜ！！」
完全に吹っ切れたのかどうかはわからないが、先程に比べ、幾分かマシになった表情で、正は家を飛び出していった。
「美優、さっきのあの話だけど……」
「何？」

一部始終を眺めていた優也は、未だに同じ体勢の美優に歩み寄り、一番気になっていた事を訊いた。

「昨日ドラマで訊いた気がするんだけど」
「うん」
「もうお昼だし、取りあえず着替えようか」
「うん」

パジャマから普段着に着替える為、親友思いの少女は自室へ戻った。

失敗を怖れるな。
楽しむ事だけを考えろ。
行くぞ、俺！

「ファイトぉぉぉぉぉ！　百発ぅ！！」

とある遊園地の入場口の前で、一人の白髪男が気合いの掛け声をあげた。
周りの人達はそいつを避けて遊園地に入る。

「すみません！　遅くなっちゃって」

そんな男に、水色の長い髪をポニーテールにした少女が駆け寄ってくる。
その少女を視界に入れると、男は顔を真っ赤にしたが、一度深呼吸

をして冷静さを保つ。

「待たせましたか……？」

「ま、まま待ってないぜ！　つい五時間前に着いたばっかだからな！」

「五時間も前に！？」

「え？　……あ！」

嘘は言っていない。

嘘は言っていないが、こう言う状況で言うべきではない。

「あぁのやろぉ～、そう言っておいて薫に「これだけ待たせたのなら、一つ言う事を訊け」って言うつもりかぁ！　許せねぇ、許せねぇぞ風魔正ぃぃぃ！！」

その光景を、草むらから忌々しく見ている男が居た。

「おい、誰かライフル調達してこい。　奴の腐れ切った脳みそを撃ち抜いてやる」

「腐ってるのはお前の頭だろ」

物騒な事を言っているのは、椿修二、ツッコミをいれているのは火渡優也。

と言う事は、待ち合わせをしていた二人は、風魔正と椿薫である。

二人がデートする事を何処からか知った修二は（正確には薫がデートをするだが）、今にも正に襲い掛かりそうになる気持ちを抑え、正を見張っていた。

「あんな白髪男が薫の彼氏、いや、薫とデート、いや、薫と口を訊く事すら認めん！！」

「もう遅いと思うけど……」

優也に続き、優花がツッコミを入れていると、修二の隣に総司が並ぶ。

「貴方の言う通り、彼が薫さんの彼氏なんて認めません。　薫さんには僕の様な知的な紳士の方が似合います」

「お前はもっと嫌だ」

「知的でも紳士でもないだろ」

修二からは拒否され、優也からは否定されたが、全く耳に入っていない。

「何より、僕より先に彼女を作るなんて認めません！」

「そっちが本音か」

顔は良いのに、この性格が災いして彼女ができない総司は、知り合いで、特に同年代に恋人ができる事が嫌だった。

つまり、ただの嫉妬である。

「！　二人が中に入りました！　行きましょう、修二さん！！」

「言わずもがな！！」

正と薫が中に入ったのを確認すると、二人は急いで追い掛けていった。

「あの馬鹿共……」

「今日に限って、何で彪牙は居ないんだろう？」

「さぁな」

二人は呆れながら、馬鹿二人を止めようと動き出そうとする。

「へぇ～、面白い事になってるな」
「「！？」」

すると、いつの間にか龍が隣に立っていた。

「龍！？　どうしてここに？」
「それにしても久し振りだな」
「面白そうな事がありそうな気がしてな。それと、俺もこのタイミングで登場させられるとは思っていなかった」

それは作者の実力不足です。

「それで？　何しに来たんだよ？」

龍が居る事に別に文句は無いが、やはり気になる。
この謎だらけの男が理由も無く現れる筈がないと思っていたからだ。

「言っただろ。　面白い事が起こりそうだってなぁ」
「まさか……」
「そのまさかじゃないよね……？」

ニヤリと、不気味な笑みを浮かべると、龍は草むらから飛び出した。

「面白そうだから行ってくる」
「待てぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

優也は静止の声をあげるが、龍はそのまま人混みの中を駆け抜けていった。

「マズイ！　一番関わったら駄目な男が関わった！」
「どうにかして止めないと！」

慌てて入口まで走り出そうとするが、背後から巨大な殺気を感じ、後ろに振り返る。
「み、美優？」
「どう、したの？」

あまりもの殺気に、いくつもの死闘を切り抜けてきた優也と、その優也の狂気を抑えている優花でさえ気圧されていた。
その殺気の出所は、今まで黙り続けていた、美優だった。

「皆、薫の事をわかってない。　薫は今日を楽しみにしてるのに……。　それを邪魔しようなんて……」

ブツブツ、文句を言う様に修二達への怒りを呟いていく。
同時に、殺気も増大していく。

「二人共」
「「は、はい」」

名前を呼ばれ、ついつい敬語で返事をする。

「全力で、あいつ等止めるよ」
「「りょ、了解です……」」

全く目が笑っていない美優を見て、あの三人死んだかもなぁ～、と思った優也と優花であった。

「！！」

美優に続いて、入口へと向かおうとした優也は、突然、勢いよく振り返る。

「！　優也？　どうかした？」

その様子に、優花は心配そうに声をかける。

「いや……何でもない……」

誰かに見られていた気配がしたのだが、振り返った先に居たのは、遊園地に遊びに来ていた人達だけしか居なかった。

（気のせいか）

騒いでいたのを見られただかもしれないと思い、優也は優花と一緒に遊園地へと入っていった。

監視する様な眼差しで見ている人影に気付かず。

その後、正と薫はアトラクションを楽しみ、修二達はデートを邪魔する為に二人を付け狙い、優也達は修二達を邪魔する為に一緒に行動していた。

メリーゴーランドに乗っている時は、総司が幻術を使って正を酔わせ様としたところを美優が殴って止め、コーヒーカップを凍らせて

回らない様にしようとした修二を、優也が命がけで邪魔し、何とか二人の邪魔をせずにこれている。
だが、まだあの龍が何もしていない。
人を貶める事が大好きな龍が、このまま何もせずに終わる筈がない。
優也達三人は、龍の動向に注意しながら、次のアトラクションへと辿り着いた。

「おばけ屋敷？」

そう、客の恐怖心を煽るおばけ屋敷である。

「ま、まさか彼は暗闇に紛れてあんな事やこんな事を！？」
「何いいいいいいいいいいいいいいいい！！！！　あんな事やこんな事やそんな事だとぉぉぉぉぉ！！？」
「そんな事は言ってない」

暗闇＝イケナイ事と言う方程式しかないこの二人は、大慌てで正達を追い掛けていった。

「あ、しまった！　行くよ、二人とも！」
「うん！」

優也達も修二達を追い掛ける中、優也はある事に気付いた。

（龍が、居ない……？）

そう、龍が居ないのだ。

「くそぉ！　薫を見失った！！」
「流石暗殺者……。　侮っていました」
二人を追っておばけ屋敷に入った総司と修二だが、順番の関係もあり、完全に見失ってしまった。
「こうなれば、空間を歪めて見付け出すしか……」
「そう言えばそんな能力もあったなお前……」
作者でさえ忘れかけていた総司の能力を、何故修二が知っているかは謎である。
「空間歪め様とするな！」
「あ痛ぁ！！」
能力を使おうとした瞬間、追い掛けてきた優也に蹴り飛ばされる。
その後ろから、美優と優花が走ってくる。
「前から言おうと思ってたけど、覗きだとかくだらない事に能力を使うなよ！」
……がい……ま～い……。
「くだらないって何ですか！！　覗きは男にとって至高の楽しみですよ！」
「うわぁ～、最低……」

……らがに……い……。

「お前等！　無駄話してないで薫を追うぞ！！」

お……らがさん……い……以下省略。

「あ、あの！」

「どうした、優花？」

「何か、聞こえない？」

「そう言えば、何か聞こえますね」

「何だろう？」

その場に居た全員が、キョロキョロと辺りを見渡すと、暗闇の一部に明かりが灯る。

『あれ？　一枚足らない……』

明かりの中から、ボンヤリと人影が見えてくる。

それを見て、優也達の表情が青ざめる。

『うらめしや～！！』

数枚のお皿を手に持った血まみれの男が、勢いよく襲い掛かってきた。

「「「「「で、出たぁ～～～～～～！！！！」」」」」

五人は一目散に走り去っていき、この場に残ったのは血まみれの男だけになった。

「ああいう反応を見るのは、やっぱり楽しいなぁ」
血まみれの男、龍はハンカチで血を拭き取り、楽しそうに笑っていた。

「ひ、酷い目にあった……」
「よく考えれば、あれって龍だよね……」
「絶対そうだろうな……」
順番待ちをしている優也達は、前方で平然としている龍に忌々しい視線を送っていた。
因みに何の順番待ちかと言うと、遊園地の定番、ジェットコースターである。

「流石にジェットコースターじゃ、邪魔は出来ないよね？」
「一応、俺が修二の隣に座っておくか」
「なら私が龍の隣に」
「……え？　私が総司の隣……？」

そうこう話していると、優也達の番になり、二人ずつ離れて座っていく。
順番は前から、正と薫、その後ろに龍と優花、四つ離れた所に優也と修二、そして美優と総司と言った順番になった。

「何もしちゃ駄目だよ？」

「……わかったよ」

優花は龍に何もしない様に注意すると、龍は渋々了承する。
その少し後ろでは、修二がブツブツ文句を言っていたのは言うまでもない。

「お、動き出した」

ゆっくりとコースターが動き出し、上へ上へと昇っていく。

「正さん、怖かったら叫んでも良いですよ？」
「っ、それはこっちの台詞だ。　薫こそ叫んでも良いぜ」
（正も薫と話すのに慣れてきたみたい。　もう少し積極的になれば良いんだけど）

まだ若干緊張しているが、初めに比べれば、会話に余裕が見られる。
正の成長に、優花は嬉しく思っていたが、会話を訊くのに集中していた為、龍が身を屈めて、会話に聞き入っている事に気付かなかった。
そして、昇りから下りになり、急激にスピードが上がる。

「うっ！　思ったより！」
「キツイ！」

もの凄い風圧に、優也と修二は吹き飛ばされそうな感覚を感じるが、ベルトをしていれば、飛ばされる心配は無い。
そう、“ベルトをしていれば”。

「「！？」」

二人の目の前に、亜麻色の髪の男が現れる。

「「ぶっ！！」」

そしてそのまま、二人の顔面に激突した。

「りゅ、龍！？　何してんだお前！！」

「ベルトするの忘れた！！　ベルトするの忘れたぁ！！」

飛んできた男とは、おばけ屋敷でオバケに扮し、優也達が怖がる様を楽しんでいた月臣龍であった。

「あわわわわ！！！！」

いつもの謎めいた雰囲気は何処へやら、背もたれにしがみつき、慌てふてめいていた。

「おい、何だこいつ！　さっきまでとは別人だぞ！？　テンパりまくってんじゃねぇか！！」

「俺もそう思うけど！！　お前が言うなよ！」

「Sだからこそ打たれ弱いの！！　ガラスの心（ハート）なの！！」

「どうでも良いけど、足危ない！！」

龍の足が当たりそうな美優は、大声で叫ぶが、テンパりまくっている龍には聞こえていない。

「だだだ誰でも良いから助けて！！　手を握って離さないで！！」

「「「子供か！！」」」

そして龍をぶら下げたコースターは、大きく一回転した。

「あああああああああああああ！！！！」

普段では訊く事の出来ない、龍の叫び声が響き渡った。

一周し終えたコースターは、スタート地点に戻り、客も次々降りていく。

楽しそうにしている者も居れば、顔を青ざめている者も居る。

薫は楽しんだ者である。

「ふぅ、楽しかったですね、正さん……正さん？」

返事がない。

不思議に思った薫は、正の顔を覗き込んでみると、

「……」

白眼を剥いて気絶していた。

「ちょ、正さん！？　しっかりしてください！」

揺すってみるが、反応が無い。

仕方なく、薫がコースターから正を降ろし、引きずって行った。

「「「酷い目にあった……」」」

「大丈夫、じゃないね」

龍が振り落とされない様に頑張っていたら、無駄に疲れてしまっていた。

その原因である龍は、辛うじて意識はあるが、修二に肩を貸して貰っている状態であった。

「取りあえず、一旦休憩しよう……」

「「賛成……」」

近くのベンチで休憩しようと、重い足取りで歩いていく。

だが、総司はまだコースターから降りていなかった。

「総司！　もう行くよ。　総司？」

何度も呼び掛けるが、先程の正と同じく、返事が無い。

それもそうだ。

白眼を剥いて気絶しているのだから。

「正と言い龍と言い総司と言い、どいつもこいつも良く気絶するな」

「ちょっと待て。　俺は気絶していない」

「似たようなもんだろ」

あの後、やっと目を覚ました総司と元に戻った龍を連れ、近くのベンチに座っていた。

勿論、正と薫からは目を離していない。

「どうでも良いけど、何で俺達がこんなに疲れるんだろうな……？」

「俺が訊きたいよ……」

修二達が何かをしようとすれば、優也達が止めに入り乱闘になる。

それの繰り返しに、優也達は疲れ果てていた。

「喉渇いたね」

「ちょうどそこに売り子が居るし、貰おっか」

狙いすました様に、優也達の前にジュースを持った売り子が通り、優花が呼び止める。

「あの、ジュース貰えませんか？」

「はいよ～！　って、優花じゃないか！」

「え？」

突然名前を呼ばれ、その売り子の顔を覗いてみる。

「亮さん！」

「げっ！」

「誰だ？」

その売り子とは、優也と優花の義理の兄である亮だった。

亮の事を知らない修二は、小首を傾げ、優也はあからさまに嫌そうな顔をする。

「お前等何でこんな所に？　まさか、俺に会いにき……」

「「それはない（違うよ）」」
「言い終わってもないのに！！」

一蹴された事に、亮は落ち込む。

「亮こそ、何してるんだよ？」
「へ？　バイトだよバイト」

はいジュース、と一人一人に手渡していく。

「それで、誰だ？」

その言葉に、亮はキョトンとすると、そう言えば初対面か、と呟く。

「どうも初めまして、優也と優花の兄の天道亮です」
「薫の兄の椿修二だ」

二人は数秒見つめあったまま動こうとしない。
すると突然、力強く握手をする。

「「同志よ！！」」
（（変な友情が芽生えた！？））

互いにブラコン&シスコンと言う性質を見抜いたらしく、すぐに意気投合した。

「薫ちゃんと言えば、さっき観覧車の辺りで正と一緒に居るところ見たけど、まさか、デ……」
「観覧車ですとぉ！？」
「被せるのやめて……」

先程から、言い終わらない内に遮られた亮は、若干涙目になる。

「マズイですよ修二さん！　観覧車と言えばキスする為に作られた建造物ですよ！」

「何ィ！！　そうなのか！？」

「密室ですよ！！　それ以外の用途は有り得ません！」

「くそっ、急ぐぞ！」

変な勘違いをした二人は、観覧車へと走っていった。

「何だあの二人。　デートの邪魔しに来たのか？」「あぁ、そうなんだよ」

「何してるの優也！　早く追い掛けないと！？」

完全に出遅れてしまった美優は、慌てて優也を呼ぶ。

「亮、今日手料理作ってやるから、止めてこい」

「了解！！」

手料理、その言葉を訊き、亮は目にも止まらぬ速さで二人を追い掛けていった。

「早っ！　大丈夫なの？」

「まぁ大丈夫だろ。　ところで龍、お前は行かないのか？」

ここにきて、龍が二人に着いていかなくなった。

「もう充分楽しめたから良い。　じゃあな」

「あ、おい！」

静止の声も訊かず、龍は人混みに消えていった。

「……私達はどうする？」

「え、薫達は？」

「亮に任せたから大丈夫だろ。　もう少しこの辺見てから帰るか」

亮から貰ったジュースを飲みながら、優也達は漸くゆっくり休憩する。

草影から見ている影に気付かず。

空も夕焼けに染まり、人も少なくなった道を、修二と総司は観覧車に向かって走っていく。

あまりに恐ろしい形相の為、周りの人達は二人を避けていく。

「後もう少し！　待ってろ薫！！」

「僕より先に彼女を作る者には、もがっ！？」

突如、体が宙に浮いたかと思えば、総司の体は草むらへ投げ込まれた。

「ッ！　だ、誰ですか！！」

「たった数日会ってないだけで、もう顔忘れたか？」

総司を草むらへ投げ込んだのは、ツンツン頭の背の高い男。

太陽を背にし、顔に影がかかっているが、総司には誰なのかがすぐにわかった。

「ひゅ、彪牙……！」
「なぁ、こんな言葉知ってるか？」

「霧藤？　何処行った！」

その頃、走りながら総司が居なくなった事に気付いた修二は総司を呼ぶが、全く返事がない。
すると突然、両肩に重みが増す。

「お、お前、亮！？」
「お客様、こんな言葉をご存知で？」

音もなく、修二の肩に乗った亮は、まるでウエイトレスの様な口調で話す。
そして、総司を連れていった彪牙と同時に、同じ台詞を言い放った。

「「人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死んじまえって（な）（ね）」」
「「あああああああああああああああああ！！！！」」

違う場所で同時に、悲鳴が木霊した。

「ん？」

その頃、観覧車に乗っていた正は何かに反応し、外を眺める。

「どうかしました？」

「いや、今訊いた事がある声が……気のせいだな」

本当は気のせいではないのだが、デート中なのでそんな事に気を取られていられない。

「な、なぁ、きょ、今日は楽しかった、か？」

「はい！　とても楽しかったですよ」

然り気無く薫の心音を確認し、本心から楽しんでくれていた事がわかり、安心する。

少しずるいが、こうでもしないと安心できない。

「あの、さぁ。　訊きたい事があったら、何でも訊いて良いぞ。ずっと何か訊きたそうにしてる」

「え……」

薫は目を見開いて驚く。

何か訊きたい事があるのは本当らしく、訊くべきか訊かないべきか考えている。

「……そ、それじゃあ、訊きますよ？」
「ああ」
訊く事に決めた薫は、真っ直ぐ正を見る。
「何で、そこまで強さを求めるんですか？」
「！」
薫からすれば、正は充分強い。
実際に戦ったところを見た事は無いが、普段の身のこなしから強い事がわかる。
薫にも多少は武術の心得はあるからわかる。
何がそこまで、正を駆り立てているのか知りたかった。
「今は強くなる為の理由が増えたが、元々はただ親父に言われて強さを求めていただけだよ」
「正さんの、お父さん、から？」
「ああ、殺しちまったけどな」
正の瞳に光が消える。
「……今、何て……？」
「……殺しちまったんだよ。俺が親父も、何もかも」
聞き間違いであってほしかった。
自分から訊いたとは言え、正の口からそんな事を訊きたくはなかった。
だが、訊いたのは自分、その先を訊けば後戻り出来ないが、自分自身から巻き込まれる事を決めたのだから、目を背けていてはいけない。

薫は意を決する。

「その話の続きを、訊かせて下さい……」

正の呪われた過去を訊く事を。

「……後悔」

「しません！　絶対に」

虚ろな目で、正は薫を見ると、静かに語り始めた。

第５４話　遊園地（後書き）

闇夜
「久し振りに長くなったぁ。　しかもグダクダだし」
正
「俺と薫の出番殆どねぇし。　どういうつもりだ！　俺だって頑張ったのに、龍の方が途中目立ってただろ！！」
闇夜
「まぁまぁ、落ち着きなさいな。　次回は君の話だし」
正
「くっ！　納得いかねぇ……。　それはそうと、何でいきなり名前書かなくなったんだよ」
闇夜
「何となく！」
正
「何となくって……」
闇夜
「さて、これからゴールデンウィーク。　部活も引退したし、頑張って書こう！」
正
「はぁ？　引退してたのかよ！？」
闇夜
「報告するの忘れてました！　すみません」
正
「謝られてもな……」
闇夜
「今回グダクダでしたが、これからもどうか宜しくお願いします！」
正
「また次回な」

次回

第５５話　過去編２【血濡れの暗殺者】

正

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第５５話　過去編２【血濡れの暗殺者】

風魔一族の末裔。
それが、俺が生まれた時の肩書きだった。
それから二年経った時には、もう一つの肩書きが生まれた。
【暗殺者】と。

第５５話　過去編２【血濡れの暗殺者】

生まれて二ヶ月後には、言葉が話せた。
五ヶ月後には立って歩いた。
二年後には、暗殺者として育てられていた。
暗殺者として育てられるのは、早くても五歳からしいが、成長が早かった俺は、二歳で色んな事を体に叩き込まれた。
まずは、どんな拷問をされても耐えられる体になる事。
どれだけ痛め付けられても、骨を折られ様と毒を盛られ様と、叫びもしなければ泣きもせず、一年で拷問に耐えられる様になり、三つになってあらゆる武器の使い方を教えられた。
刀、手裏剣、クナイ、ナイフ、銃、他には暗器。

暗器は好んで使わないが、これには半年も掛からなかった。
そして戦闘訓練と、それと平行して暗殺の方法を習う。
初めは簡単に武術を習い、それから一対一の戦い方、多人数の戦い方、人体の急所を習った。
たった三つと半年しか生きていない俺でも、一族の下っ端の大人になら勝てた。
流石に少し強い大人には勝てなかったが、それを何度も繰り返し、繰り返して繰り返して繰り返し続け、一対一なら一族で強い部類に入る大人に勝ち、下っ端なら十数人を相手にしても勝てた。
暗殺に関しては、気配を殺したり、気配を感じ取る訓練をし、相手を一瞬で殺す方法も教えて貰った。
この辺りからか、耳が異常に良くなったのは。
殺しの相手は人形だったが、比較的早く、暗殺もある程度出来るようになった。
こんなにも早く、暗殺の技術を身に付けた者が居なくなった様で、気付けば俺は天才などと呼ばれていた。
その頃には、俺も五歳になっていた。
時間の流れとはとても早いものだ。
たった四つ教えて貰っただけで三年も経っているのだから。

風魔の里は森の奥深く、誰も知らない場所にある。
今の時代、忍者だの暗殺者だの居たところで意味が無いと、初めは思っていたが、誰かを殺してほしいと言う依頼はやはりある。
依頼方法はどういう風かは知らないが、今日も親父に殺しの依頼が入る。

この日、俺は初めて暗殺をする。
実践だと言われ、俺は親父に連れられ、暗殺をさせられた。
目標は三十代後半の男。
目で人を確認する事も困難な暗闇で、俺は音も無く目標に近付く。
一瞬だ。
死んだと気付く暇もなく一瞬で、男は肉塊へと変わり果てる。
早々にここから立ち去ろうとした時、暗闇に慣れてきた俺の目に写ったのは、家族の写真だった。
母親が一人、俺と同じくらいの金髪の子供が一人、父親が一人。
父親には見覚えがある。俺が今殺した男だ。
ガキの俺でもわかる。
俺はこの家族の幸せを奪った。

初めて暗殺をしてから数日が経ち、里の人間の俺への態度が一変した。
天才から悪魔と言われる様になった。
暗殺者と言えど、初めて人を殺せば心の乱れが表情に出る。
だが俺は里に帰った時、出発する時と全く同じ表情で、里の人間はそれに恐怖し、俺を悪魔と言い始めた。
つい最近まで天才だと言っていたのに、自分達がしている事を俺がしたら手の平を返した様に悪魔呼ばわり。
人間なんてこんなものか。
だけれど、天才と呼ばれるより悪魔と呼ばれた方が気が楽な気がする。
それからは、俺は【風の悪魔】と呼ばれる様になる。

その頃からだ。
あの声が聞こえたのは。
……セ、と。
何を言っているかわからないので、空耳だと判断して、無視しておいた。

今日も代わり映えもない戦闘訓練。
同じ事ばかりの続きでつまらないな。
俺を悪魔扱いする奴等は、俺の訓練の相手をしたくないって事で、最近は親父が相手をしている。
毎日毎日同じ相手で、何も変わらない日々が本当につまらない。

まただレか殺スカ？

馬鹿か俺は？
いや、馬鹿だった。
難しい事を考えるのだけは大の苦手だった。
そんな話より、退屈しのぎに人を殺してはならない。
人を殺した時のあの気持ちが、俺は大嫌いだからだ。
そうなると、一つ矛盾が生まれる。
人を殺した時のあの気持ちが嫌いなら、何故俺はまだこんな事を続けているのだろう？
自分の事なのにわからない。
頭が悪いのは不便だ。
多分、親父に強くなれって言われたから続けてるんだろうな。

そして今日も、俺は同じ日々を繰り返す。

六歳になったある日、また代わり映えもない一日が始まると、内心を溜め息を吐いていた俺に、親父は訓練を行わなかった。
代わりに、ある場所に連れていかれた。
そこは、大きな岩が置かれ、しめ縄がされている、其処ら中傷だらけの大きな部屋だった。
親父がその岩と、これから始める事を説明しているが、俺はもう知っている。
あの岩には、西方を守護している聖獣、白虎が封印されている。
そしてこの部屋は、人間と白虎を契約させる為の頑丈な部屋。
つまり親父は俺に白虎と契約しろと言いたいらしい。
無謀だ。
白虎は凶暴で、契約しようにも暴れられて契約する事が出来ない。
今まで何人も挑んだが、契約出来ずに喰い殺されてしまった。
部屋の傷がそれを彷彿とさせる。
親父は俺の意見など訊かず、しめ縄を解いてしまう。
親父がそうしたいなら俺は何も言わない。
元々言うつもりもない。
気付けば親父は居なくて、代わりに俺の目の前には、体長三メートルはありそうな真っ白で大きな虎が、今にも喰いかかって来そうな勢いで佇んでいた。
無謀だが、こうなればやるしかない。
契約の仕方は知らないけど、取りあえず白虎を大人しくさせれば良いだろう。

喰われた時は、まぁそれはそれで良いだろう。
ただ、矛盾してるが喰われて死ぬのも嫌なので、命がけで白虎とじゃれあってやった。

流石に死ぬかと思った。
あの後、何とか白虎と契約した俺だけど、大怪我を負って全治半年だそうだ。
とは言うものの、元々俺は怪我の治りが早いし、それに白虎と契約した事で治癒力が高まっている。
半年どころか、二三ヶ月で治りそうだ。
と言うか、もう三ヶ月経って治ったりしている。
まだ本調子ではないが、もう訓練を再開させられている。
少しいつもと違う一日だと思っていたのも三ヶ月前で、また同じ日々が繰り返される。
こうも同じだと、何の為に生きているのかわからなくなってくる。
そしてまた、あの声が聞こえる。
……ロ……セ。
相変わらず何を言っているかはわからないが、俺は無視できなくなっていて、その声を訊く事に集中していた。

俺は今、何処にでもある公園の草影から、金髪の子供を眺めていた。
その子供こそ、以前俺が殺した男の息子だ。
偶然見付けて、後を着けてしまった。
後を着けた所で、何かが変わる訳でもないのに。
金髪の子供は、俺と同じくらい、それか俺よりも下の子供と居た。
何故かはわからないが、金髪の奴と一緒に居る子から、眼を放せなかった。
二人を眺めていると、金髪が突然、俺が隠れている草むらに視線を向けてきた。
たまたまだと思った。
だが違った。
あの眼は、間違いなく気付いている眼だった。
もう一人の子が気になったが、俺はこの場から立ち去った。

今日は少し違う一日。
違うと言っても、親父が居ない以外は全く同じ。
何をするのかと言うと、俺一人で暗殺任務だ。
今日は四人を暗殺した。
そう、もう殺してしまった。
呆気ないな。
強くなる為に今まで訓練してきたのに、こうも簡単だと拍子抜けだ。
帰る途中、こびりついた殺した相手の血を洗い流そうと、たまたま流れていた近くの川に、俺は向かった。
川に着いた俺は、川に浸かると、川の水に自身の姿が写り込む。
そう言えば、白虎と契約した時から、髪の色が白くなっていたんだ

った。
だから、血が白い髪を赤く、紅く、朱く染めていた。
だがそれ以上に、俺自身の表情が目に入る。
笑っていた。
狂気を孕んだ無自覚な不気味な笑み。
そしてまた声が聞こえる。
今度ははっきり。

コロセ……スベテヲコロセ

俺は狂っていた。

雨が降り、俺の体にこびりついた夥しい血を流していく。
血が流れ落ちる感覚を感じながら、俺を殺しにかかる“風魔の人間”を殺していく。
狂った俺は反逆者となり、身内を殺して殺戮を繰り返す。
俺の足下には首が無くなった肉塊や、心臓を一突きされた肉塊が転がっている。
今日初めて知った。
過去に名を馳せた風魔一族も、今はもう平和ボケしていた。
だが今はそんな事どうでも良い。
こんなにも楽しいのだから。
男も、女も、老人も子供も、赤ん坊も、全て殺したが、息も絶え絶えで何とか生きている男が一人居た。
親父だ。

威厳たっぷりだった親父も、今は生きるので精一杯。
トドメを刺す為、首を掴み、壁に叩き付ける。
親父の吐いた血が顔にかかるが、今更気にする必要もないので、俺は気にしない。
親父はと言うと、もう覚悟を決めたのか、抵抗しない。
このまま殺すのは簡単だが、俺はまだ殺そうとしなかった。

「ナァオヤジ」

最期に訊きたい事があった俺は、うっすら残っている理性を振り絞り、狂った声で訊いた。

「オレハナンノタめに……生きてるんだろうな」

狂った声じゃなくて、俺の声が出せた事に、俺自身が驚いたが、俺以上に親父の方が驚いていた。
何でも良いから、何か教えてくれないかな。
じゃないと、自分自身がわからなくなる。

「……お前は……正だ」

突然俺の名前を言う。
俺は何も言わずに訊いている。
この手は止められないから、最期の言葉はしっかり訊かなければならない。

「自分が……正しいと思った、事を……信じて……生きられる、男になれ……。　そう願って……名付けた名が、正だ。　自分を信じて……生き続けろ……正」
「……アリガトウ」

それが、最初で最後の親父が、父親らしく見えた姿だった。
雨が、血と一緒に涙を流していった。

「これが、風魔一族の末路だよ」

全てを話し終え、俺は薫へと向き直る。
完全に引かれたな。
こんな狂った人殺しと一緒に居る事も嫌だろうし。
そして、薫の顔を見た俺は慌てふてめく。
そりゃあそうなるよ。
だって目の前で泣かれてるんだからな。

「どどどどうしたんだよ！　ななな、何で泣いてんだ!?」

端から見ればおかしな反応だろうな。
だが、どうしてもこの娘の前だとこうなってしまう。

「貴方が……泣かないから、代わりに泣いてるんです……」

どうしてこの娘はこうも優しいんだろ。
普通ならこんな事言ってくれないよな。
それでいて

「正さん……。　貴方は……一人じゃないです。　私も、貴方

と一緒に貴方の狂気と戦います。　だから……もう、泣いて良いんですよ？」

強い。
汚れる事がない、強くて優しくて綺麗な心の持ち主だ。
だから、惚れたんだろうな。

「……無理だよ、泣けねぇよ俺は……。　けど、ありがとう」

この感謝には狂気なんて存在しない。
心からの感謝だ。
一番上に昇ったゴンドラから、俺は空を眺める。
戦いが無ければ、同じ事の繰り返しって言うのは変わらないが、今の繰り返されている日々は楽しい。
こんな繰り返しの日々なら、死ぬまで繰り返されてほしいな。

第５５話　過去編２【血濡れの暗殺者】（後書き）

闇夜
「何だろう。　こんな話の方が執筆が進む」
竜也
「心が病んでんじゃねぇの」
闇夜
「いやいや、まだ健全な高校生ですよ」
竜也
「つーか俺の出番は？」
闇夜
「次回あります」
竜也
「嘘だったら……どうなるかわかってんなぁ？」
闇夜
「はい！　わかってます！！」
竜也
「けっ、じゃあまたな」

次回
第５６話　街中の再会
竜也
「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第５６話　街中の再会

遊園地での出来事の数日前。

「あぁ！？　あの悪魔共の世話しろだぁ！？　ふざけてんのか！！」

茶色の髪を無造作に肩まで伸ばした眼鏡の男が、自身の自宅の前で自分より背の高い、年下の少年に怒鳴っていた。
怒鳴られている少年の後ろには、四人の男女が立っていた。

「俺には他にやる事があるんだ。　それに、あんた最近暇だろ？」
「暇じゃねぇよ！　俺にだって仕事があるんだよ」
「フリーターと言う名の暇人だろ」
「フリーターナメんな！！」

イライラし始めてきた眼鏡の男は、背の高い少年に掴みかかろうとするが、スルリと躱される。

「このっ、『紅遠（くおん）』！　あのガキを捕まえろ！！」

眼鏡の男が叫ぶと、家から赤茶色の毛をした大型犬が少年へと突進していく。

「おっと、危ない」

少年はその大型犬の突進を難なく躱す。

「その短気な性格、直した方が良いんじゃないか？」
「怒らせてんのは誰だよ！？」

「さぁ？　じゃ、頼んだ。　浩輝さん」

少年はさっさとこの場から立ち去る。

「あぁ！　待ちやがれ！」

「あの～」

浩輝と呼ばれた男は、少年を追い掛けようとしたのだが、少年の後ろに居た四人の男女の内、赤いセミロングの髪の女性に声を掛けられ、動きを止めてしまう。

浩輝は四人を見る。

女性は少し困惑した表情でこちらを見ており、オールバックの男は少し申し訳ない表情をし、帽子を被った眼帯の男は腕を組んで立ったまま眠り、金髪の子供は、自分の家で飼っている大型犬に抱き付いた。

後の二人は無視するとして、初めの二人の困った顔を見ていると、あのガキの頼みなんて誰が訊くか！　と思っていた自分は消えていた。

第５６話　街中の再会

「ヤバイな」
「ヤバイね」
「優花が思ってるよりもっとヤバイ」
「いや、優也が思ってるよりもっとヤバイ」

冷蔵庫の前で二人は頭を抱えていた。

「そろそろ節約しないと、お金も無くなるよ」
「節約、か……」

二人は同時に後ろへ振り向く。

「ふぇ？」

そこには、お菓子を頬張りキョトンとしている美優。

「「はぁ……」」

そして同時に溜め息を吐く双子の様で双子じゃない二人。
それもそうだ。
二人が困っている理由は、冷蔵庫の中身が無くなった事と、原因である当の本人は相変わらず能天気である事だ。

「取りあえず、買い物行くか。　安い物だけ」
「そうだね」

家計を支える二人の苦労であった。

「あの、何で俺まで？」
「荷物持ち」
「雑用！？」

現在スーパーの前で、優也、優花、美優、そして、荷物持ちとして進が集まっていた。

「出来るだけ安い物を買うぞ。　わかったな」
「「了解！」」
「何で俺まで……」

約一名納得いかないまま、一行はスーパーへ入っていった。

現在のスーパーの状況を一言で言うと、戦場だ。
我先にと主婦が売り物を奪い合っていた。

「「な、何これ……」」

美優と進の声が重なる。
こんな状況を見た事の無い美優と、買い物自体殆どした事の無い進は、目の前の光景に呆気に取られていた。

「この時間帯は売り物が安くなる。　だからこんな奪い合いになる」
「早い者勝ちだよ」

見慣れている二人は、平然と言ってのける。

「これは買い物と言う名の戦争。　そして、ここは主婦達の戦場だ」

優也は真剣な表情で言い放つ。

「戦場って……買い物くらいで大袈裟だろ……」
「大袈裟だと思うなら、何か取ってこい」

呆れ顔の進に、優也は主婦が入り乱れている中へ指を差す。

「っ、ナメんなよ」

ちょっとした挑発に進は簡単に乗り、主婦達の群れに足を向け

「うおおおおおおおおおおお！！！！」

気合いの入った声と共に、戦場へと駆け込んだ。
そして痛感した。
この戦場で自分がどれだけ無力かを。

（っ！　前に……進めない！？）

勢いがよく突っ込んだは良いが、前に進むことが出来ない。
前に進むどころか、横にも後ろにも自分の意思で動く事が出来ず、
どんどん外に追いやられていく。

「くっ、くそっ！」

それでも何とか前に進もうと抵抗するが、結果は変わらない。

（こんな事がっ……！）

さっき、自分が言った言葉を思い出す。

『買い物くらいで大袈裟だろ』

ナメていたのは自分の方だった。

（こ、これが……！）

弾き出され、尻餅を付きながら思い知らされる。

（主婦達の戦場！！）

これは戦争なのだと。

「す、進ぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！」

圧倒的な力の前に、うちひしがれている進へ、美優が心配そうに駆け寄る。

「どうだ。　大袈裟じゃないだろ？」

「優也……」

こうなる事がわかっていた様な表情を、優也は勿論、優花までして

いた。

「……良くわかったよ。ナメてたのは俺だった……」
「それがわかれば充分だ」

進の答えに納得したのか、今度は優也が戦場へ足を向ける。

「行くぞ」
「うん」
「私も頑張るよ！」
「今度こそ！」

優也の掛け声と共に、全員が戦場へ向かう。
優也と優花は場慣れしているのか、順調に前に進む。
美優も、持ち前の力強さと根気強さで少しずつ前に進む。
進は例の如く弾き出される。

（よし、ここからなら手が届く！）

人と人の合間から肉の入った白いトレイが見える。
その合間から伸びた優也の手は、目標を見事に掴んだ。

「「ん？」」

トレイを自分の方へ引き寄せようとしたが、引き寄せる事が出来ず、疑問の声をあげると、その声が誰かと重なる。
どうやら、自分と同時にこのトレイに手を掛けた者がいるらしい。
このまま手を離せばその者に持っていかれてしまうだろう。
だがそう言う訳にはいかない。
こちらも、これ一つを手に取るだけで苦労したのだから。

「っ、このっ……」

奪い取ろうとした時、初めて相手の顔を見た。
優也とその相手の動きが止まる。
相手の表情は驚愕に染まっていた。

「お、お前は！」

相手の反応から、自分と何処かで会っている様だ。
自分にも見覚えがある。
黒髪のオールバックで尖った耳の男に。

「……お前！　バロールの所の！！」

そう、バロールの部下であるグランツであった。

「「何でこんな所に！！」」

まさかの対面に、お互い身構えると、トレイを落としてしまった。
そしてそれは、とある主婦が持っていく。

「完売しました！」

店員の言葉と共に、戦争は終結した。
今この場に残っているのは、手に入れられそうだった物を取られて呆然としている優也とグランツ、いくつかの商品を手にしている優花、奮闘の甲斐あって一つだけ商品を手にした美優、そして、ボロ雑巾の様に地に這いつくばる進だけだった。

「終わっちゃったし、もう行こうよ」
「……そうだな。　お前も来い」

ここに居続けても、何か手に入る訳ではないので、さっさと買い物を済ませて外に出る事にした。
グランツも静かに頷くと、優也達と一緒に外へ出た。
ボロ雑巾と化していた進も何とか立ち上がり、優也を追い掛けた。

「こんな所で争う訳にはいかない。　お前も面倒事は嫌だろ？」
「まぁな」

優也と進はグランツを連れ、スーパーの外で話をしていた。
美優と優花は手に入れた数少ない戦利品の支払いに行っていた。

「何で人間界に居る？　何が目的だ？」

話の内容は、これ以外にある筈もない。
目の前に居るのは悪魔に他ならないのだから、警戒するに越した事はない。
沈黙が場を支配する。
沈黙の中、グランツが口を開こうとしたその時

「お～い！　グランツ～！」

金髪の少年が大きな犬を連れ、グランツの名前を呼び走ってきた。

その後ろには、眼鏡を掛けた茶髪の男が歩いていた。
これまた見覚えのある人物が二人。
そしてその二人にも、優也と進には見覚えがあった。

「ああ～！　あの時の地味な人間！！」
「地味って言うなぁ！！」

地味と言われた進は、金髪の少年へと突っ掛かる。
金髪の少年、それは魔界で進が戦った悪魔、キラだった。

「火渡じゃねぇか。　久し振りだな」
「浩輝さん！」

そして、キラの後ろに居た浩輝と呼ばれた男性は、どうやら優也の知り合いらしい。

「こんな所で何を……って言うか、もしかしてこいつ等と知り合いなんですか？」

優也はグランツに指差しながら、浩輝に問う。

「知り合いっつうかよぉ……居候」
「居候！？」

まさかの発言に、キラにボコボコにされている進を助ける事もせず、呆然とする。

「いやぁな、こいつ等幹部悪魔はカイの監視下に置かれる事になって、月臣が世話する事になったんだが……」

「押し付けられたんですね」
「……おう」

遠い目をしながら答える浩輝に、優也は同情してしまった。
そこで優也は気付く。
今浩輝は幹部悪魔と言った。
自分が魔界で出会った力の強い悪魔は、もう二人居た筈だ。

「あ、ルミアとアランだ！　お～い！」

進との壮絶な喧嘩に勝利したキラは、元気良く手を振る。
キラの視線の先へ優也も振り向くと、支払いを終えた美優と優花、後ろには帽子を被った眼帯の男、アランと、赤い髪の女、ルミアが、こちらへ向かって歩いてきていた。
因みに、ルミアの羽や尻尾は消えている。
やっぱり居たと思っていると、美優が目を輝かせながら、キラが連れていた赤茶色の犬へと駆け寄った。

「わぁー、凄い綺麗な犬！　触って良い？」
「良いよー！」

キラからの了承を得た美優は、嬉しそうにその犬へ抱き付く。

「ふかふかで気持ち良い～。　何て名前なの？」
「紅遠だよ～」
「へぇ～、良い名前だね！」

紅遠を通じ、美優とキラは意気投合する。

「キラったら、あの娘になついたわね」

「久し振りだな、火渡」

そうこうしていると、アランとルミアが近くに来ていた。

「こんなスーパーの前に悪魔が勢揃いって言う光景も珍しいな」

「でも、もう悪さはしないって言ってるよ」

優花のその言葉に、優也は優花へと顔を向ける。

「さっきこの人達が言ってたよ」

「……本当か？」

信じられないと言いたげに、優也はグランツを見る。

「あの方が居ない今、俺達だけじゃあ何をしても意味無いだろ。信じられないだろうがな」

グランツ達にとって戦う理由はバロールだ。

そのバロールが居ないなら、確かに戦う理由は無い。だが、それだけで普通なら信じはしない。

それだけの事をこの悪魔達はしたのだから。

普通ならだが。

「……わかった信じる。　お前達じゃなくて優花をだけどな」

「それで良い」

優也は思っていたよりも甘い性格らしい。

「ところで、俺達と同じ幹部悪魔を殺した奴を知っているか？」

「！」

そんな話は訊いていないが、優也には検討がついていた。

「それを訊いてどうする？」

「殺すかもしれねぇし、殺さねぇかもしれねぇな」

それだけ言うと、グランツは優也から離れていった。

「すまないな。　あいつはあれでも仲間思いな奴だ」

「謝る必要なんて無い」

仲間が殺されれば、誰でも許せないものだ。

親しい相手なら尚更。

「優也……もしかして……」

「ああ、わかってる……」

その悪魔を殺した自分達の仲間。

それが誰なのかは、もうわかっている。

（正……）

優花から訊いた事だが、正は魔界で自分の狂気に呑まれた。

それが原因で相手を殺したのなら、説明がつく。

（俺が悩んでも、仕方がないか……）

これは正とグランツの問題。

無闇に首を突っ込むべきではない。

（何一人で暗くなってるんだか）

軽く頭を振って、暗くなった気持ちをを振り払う。

「紅遠は君の犬？」

「ううん。　浩輝のだよ」

美優とキラの会話が聞こえ、二人の方を見ると優也は顔をしかめた。

二人の横で浩輝が真剣に深呼吸をしていたからだ。

はっきり言うと、警察に通報されそうなくらい怪しい。

「えっと、浩輝さんって貴方ですか？」

「ああ、戌井浩輝だ」

「私は神道美優です！　初めまして！」

尋ねられた浩輝は深呼吸をやめ、表面上は普通に答えているが、心の中は普通ではなかった。

（神道美優か～、無邪気な笑顔が可愛いなぁ。　背は優花より高いけど火渡より少し高いな。　おっ、この娘意外に胸がデカイな。背は低いのに胸がデカイ。　しかも歳は中学生くらい……と言う事は俺より十歳以上年下……。ドストライク！！）

声に出ていれば絶対に通報されている言葉を心で呟きながら、内心ガッツポーズをした。

「ひっ！」

美優は小さな悲鳴をあげる。

浩輝から何処か恐ろしいオーラが出ていたからだ。

「ぐふっ！！」

すると、紅遠が浩輝の腹に体当たりし、美優から遠ざける。

『やめなさいよ。　怖がってるじゃない』

美優は耳を疑った。

今明らかに紅遠が“喋っていた”のだ。

「しゃ、しゃべ、喋ってる……？」

「あぁ、言うの忘れてたけど、紅遠は犬神なんだ」

いつのまにか隣に居た優也が、美優の疑問に答える。

「犬神家の一族？」

「すけ●よじゃないぞ」

まぁ当然だが、美優が知る筈もない。

『簡単に言えば妖怪みたいなものよ』

「へぇ～、そうなんだ～」

妖怪なら見慣れている美優は、納得した。

「こぉら、紅遠！　いきなり体当たりはねぇだろ！！」

腹を押さえながら、浩輝が紅遠に詰め寄る。

『自業自得よロリコン』

「ろ、ロリコン？」

犬神の次は、その単語に疑問符を上げる。

「浩輝さんってロリコンだよ」

「おい優花！　お前何言ってんだ！」

今出会ったばかりの美優に、自分がロリコンと勘違いされない様に反論する。

「俺は十歳以上年下の女の子が好きなだけだ！！」

「それをロリコンと言うんじゃないんですか？」

その時、ぐぅ～と気の抜ける音が響く。

その音は美優から発せられていた。

「お腹……すいちゃった／／／」

若干頬を赤く染めながら、お腹を擦る。

「そう言えば、まだ昼飯食べてなかったな」

「でも、あんまり買えなかったよ？」

美優の腹の音を訊いていると、優也達も腹が減った事を思い出す。

これから帰って飯を作るのも良いが、生憎、食材が無い。

今買った食材だけでは少し足りない。

何処かの店で食べるのも考えたが、今はそんなにお金は使いたくない。

「何だお前等。　まだ飯食ってねぇのか？」

どうしようかと考えている優也達に、浩輝が声をかける。

「仕方ねぇ。　今日はお前等全員昼飯奢ってやる」

「「本当ですか！」」

とてもありがたい話に、優也達は食い付く。

「その代わりと言っちゃぁ何だが、時々俺の仕事に付き合って貰うぜ」

「それくらいなら構いませんよ」

交渉成立だな、と言うと近くの飲食店を探し始めた。

「良い人だね」

「困ってる人は放っておけないんだよ、あの人は。　だからお前達の世話を引き受けたんだろうな」

優也はそう言うと、グランツやアランを見る。

「まだ数週間しか一緒に居ないけど、彼には感謝してるわ」

「見ず知らずの悪魔を住まわせてくれるのだからな」

やはり浩輝はこの悪魔達に好かれている。

言葉にはしないが、グランツもそうだろう。

「まぁでも……」

そして、グランツを除いた三人が声を揃えて言う。

「「「ロリコンって事にはビックリしたけど」」」

この場に居る全員が同時に頷いた。

「お前等！　さっさと来ねぇと置いてくぞ！」

「あ～、待ってよ浩輝～！」

浩輝が急かすと、キラが紅遠と一緒に追い掛け、優也達もゆっくりと追い掛けていった。

そしてこの日の昼食で、浩輝は思わぬ出費をする事になった。

主に、美優の食費に。

その日の夜。

街の路地裏に潜む影が一つあった。

その影とは、以前優也達を監視していた人物である。

「こんな所で何してんだぁ？　ストーカーさんよぉ」

「！！」

その人物の後ろから、もう一つの影が忍び寄り、声をかける。

「お前人間だな？　あのガキ共に何か用か？」

「あの方のご命令だ」

「やっぱあいつか」

その影は面倒くさそうに、頭を掻く。

「力を持った人間でもねぇのに、なぁんであいつの手下なんかしてんだぁ？」

「あの方はこの世界を壊したいと思う者なら、誰だろうと仲間にしてくれる素晴らしい方だ」

「びみょ～に話が噛み合ってねぇ……」

影は一歩一歩、ゆっくりゆっくり、気だるそうに足を踏み出す。

「ところでよぉ、おめぇ体は何ともねぇか？」

「何……っ！！」

男は突然、胸を抑えてうずくまる。

「お前が何の力も無い人間で良かったぜ。　簡単に術に嵌まってくれる」

漸く顔以外の姿が見えた人物は、やはり男の様だ。

男はうずくまっている男を見下ろす。

「き……きさ……ま……な……にを……」

声を出す事すら辛い状況で、男は目の前に立っている男を見上げる。

月明かりに照らされ、男の顔も見る事が出来た。

灰色の髪をパーマにし、煙草を吸っていた。

「冥土の土産に教えてやるよ」

眼鏡も白衣も無いが、その男は紛れもなく

「呪殺は俺の得意分野だ」

二神竜也だった。

「さてと、そろそろあいつ等を鍛え始めた方が良いな」

ある程度の情報は聞き出し、竜也はその場から立ち去る。

その場に残ったのは、力尽きた男の死体だけ。

第５６話　街中の再会（後書き）

闇夜
「何とか一週間以内に投稿出来ました！」
亮
「ギリギリだよね」
闇夜
「ゴールデンウィークの内二日は殆ど書いてない」
亮
「全く。　そんなのでよく番外編書くなんて言ったね」
闇夜
「スター●ォーズ3を見てて思い付いたから書きたくなって。　始めに言っておく。　パクリじゃない」
亮
「訊いてないよ」
闇夜
「え～、番外編ですが、やっぱり早く書きたいので長編が始まる一話前に書きたいと思います。　ネタバレ注意です」
亮
「けど、もう少しで始めるよね？　長編」闇夜
「頑張ります」
亮
「けど、今日からテスト一週間前」
闇夜
「お前は俺を困らせたいのか！？」
亮
「本当の事だし」
闇夜
「くっ、今亮も言いましたが、今日からテスト一週間前です。　で

すので、一週間以内に投稿出来るかわかりません。　ですが、出来るだけ早く投稿出来る様に頑張ります！」

亮

「これからも頑張っていきます。　これからも宜しくお願いします」

次回

第５７話　修行開始

亮

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

第57話　修行開始

とある広い部屋に、カイ、竜也、亮、紗理奈、浩輝、そして龍が集まっていた。

「成る程、つまり彼は死神だけではなく、人間までも仲間にしてしまってるんだね」
「少なくとも、この世界に恨みを持ってる奴はな」

竜也はこれまでに集めた情報を伝えていた。
竜也がカイから受けた依頼は、ただ教師になって優也達を鍛えるだけではなく、これから起こる戦いの為の情報収集、優也達や人間界を監視する者の排除もあった。

「確かに君の言う通り、彼等の修行を始めた方が良いね」
「けどよ、俺達はあんたを合わせて六人しか居ないぜ。　あいつ等は十人とちょっとだろ？　人手が足りねぇ」
「確かに……一対一で教えた方が効率が良いですからね」

いつ戦いが始まるかは誰にもわからない。
一年後かもしれなければ、明日かもしれない。
だったら、短い時間でのパワーアップが望ましい。

「仁と流香ちゃんはどうですか？　他に比べれば強いですし、精神もしっかりしてますよ」

何があっても冷静でいれる仁と、吸血鬼である流香なら、誰かを鍛えさせても充分だと亮は判断した。

「いいや、まだまだだ。　特に、仁はまだ俺が認めた強さに達してねぇ」

が、竜也はそれを良しとしなかった。

「手厳しいですね。　流石は雷道仁の師匠」
「うるせぇ」
「あの二人ももっと強くなりそうだし、今鍛えておくのは正解だと思うわ」
「まぁ元々そのつもりだしね」

亮の提案はどうやら元から却下だったらしい。

「仕方ない。　彼を呼ぼう」
「！　史哉か」
「「「「！」」」」

全員がその名前に反応を示す。
その様子から、その人物は相当の実力者の様だ。

「来ると思うか？　あの女たらしが」
「さぁね。　でも、来て貰わないと困るからね。　大金積んででも来て貰うよ」
「随分と金の無駄使いだな」
「何人生き残れるかな？」

散々な言われようだが、誰一人否定する者は居ない。

「他の皆にも頼んでみるけどね。　それじゃあ、今日はもう解散っ

て事で。　皆、頼んだよ～」

カイの言葉と共に、一人一人部屋から出ていく。
その中、竜也がカイに一言言い放った。

「最近新キャラ出しすぎじゃね？」
「メタ発言禁止」

軽く説教をされた竜也も、部屋から出ていった。

第５７話　修行開始

家のチャイムが鳴るが、家主は出てこず、もう一度鳴らしてみる。
やはり出てくる気配がない。

「何で居ないんだよ……」

進はガッカリしながら、トボトボと歩いていく。
休日を家でゴロゴロして過ごすのは勿体無い。
せっかくだから友達と遊ぼうと、優也達の家に訪れてみたは良いが、

この家には誰も居なかった。
電話をしてみても、これまた繋がる気配がない。
やや乱暴に携帯を切り、溜め息を吐く。

「はぁ～、彪牙達も居ないし……。　一人でゲーセン行ってもなぁ。　暇だ……」
「暇潰しには持ってこいの話があるぞ」
「！」

聞き覚えがありすぎる声に、慌てて後ろを向く。

「りゅ、龍！！」
「いつから呼び捨てになったんだか」

いつもいつも神出鬼没の男が、呆れ気味に進の前に現れた。

「訊きたい事があるだろうが、今は黙って着いてこい」
「なっ！　ちょっと待てよ！　いきなり着いてこいって言われてもだなぁ！！」

進は龍の腕を掴み、引き止める。
いきなり現れ、着いてこいとだけいわれても、素直に着いていける筈がない。
龍も、軽く説明くらいはしておいた方が良いと判断し、進に向き直った。

「今日から修行を始める。　お前の相手は、俺だ」
「……はぁ！？」

妖怪の山。
その名の通り、妖怪が住処にしている山。
そこに、人間が二人。
優也と優花だ。
今朝、二人の元へ手紙が届いた。
また修二からのふざけた手紙かと思ったが、差出人の名前を見て違うとわかったと同時に、気を引き締めた。
その名前は、過去に優也の師匠をしていた男の名前だった。
人違いかもしれないが、もし本人だった時が怖いので、素直に従う事にした。
因みに美優は、カイからの呼び出しを受けている。

「本当にあの人なのかな？」
「さぁな。　でも、もし本人だったら……」

途端に優也顔が青ざめる。
優也にとって、その師匠との修行は思い出したくない記憶の一つなのだろう。

「来てくれなくてもいいかも……」
「あはは……」

優也のその言葉に、苦笑いしかできない優花だった。

「随分と嫌われたな」
「「！！」」

突然背後から声が聞こえ、二人は慌てて振り返る。
振り返った先には、真っ赤な長髪で真っ黒なマントを羽織った鋭い目付きの男が、悠然と立っていた。

「ふ、史哉さん……」
「久し振りだな馬鹿弟子。　それと、片割れ」
「っ……」

赤髪の男、史哉に片割れと呼ばれた優花は顔を強張らせる。

「っ、史哉さん！！」

優花を守る様に優也が前に立ち、そのルビーの様に紅い瞳を史哉に向ける。

「そう怒るな。　ちょっとした挨拶だ」
「言って良い事と悪い事がある……！」

全く悪びれもせず、余計に優也の反感を買う。

「優也、私は大丈夫だから」

そんな中、優花が優也の服の袖を引っ張り、優也を宥める。

「っ、だけど……」
「大丈夫。　私は大丈夫だから」

そう言うと、優花は微笑んでみせる。
それを見て、優也は何も言えなくなる。

「あまり時間も無い。　さっさと始めるぞ」
史哉はマントの中から鍔の無い刀を取り出す。
「その前にお前、闇の力を使ってみろ」
「え……？」
「いきなり……？」
突然の発言に、優也だけでなく優花までも呆然とする。
バロールとの戦いで闇の力が発現して以来、闇の力を使った事がない。
それでいきなり使えと言われても、出来る筈がない。
「要領は朱雀の解放と一緒だ。　早くやれ！」
「くっ、自己中……」
出来るかわからないが、やらなければ痛い目に合うのは自分だから、死ぬ気でやるしかない。
優也は目を瞑り、深呼吸をする。
いつもは自分の中にいる朱雀の力を借り、力を解放する。
今回は朱雀から力を借りるのではなく、自分自身の中にある力を解放する。
（あの時の感覚はうっすらとだけど覚えてる）
初めて闇の力を使った時、まるで自分自身が闇になる様な感覚だった。
「！　黒い霊気……いや、これが闇の力」

優也の体から、闇が微かに流れ出る。
まるで優也を守る様に。
次の瞬間、闇が一気に膨れ上がる。
闇は戦闘準備を整える為、姿を変え、黒いロングコートを形成する。
最後に闇を自身に纏う事で、戦闘の準備が終了する。
そして、優也はゆっくりと瞳を開く。
薄く開かれた瞳の間からは、ルビーの様に鮮やかな紅が光っていた。

「構えろ」
「何……」

史哉へと向き直った瞬間、優也の眼前に鋭く光る銀色の物体が迫っていた。

「！！」

それが何かを確認する暇もなく、優也は上体を後ろに大きく反り、回避行動をとるが、完全には躱せず、額に小さく斬り傷が付いていた。

「構えろ。　三度は言わん」
「っ……」

気付けば史哉は刀を抜き後ろに立っていた。
刀の先には、うっすらと血が付着している。
たった今、自分に襲い掛かった鋭い物体とは、史哉のこの長刀に間違いない。
修行と言え、この男の前で気を抜けば殺される。
優也も黒い刀を鞘から抜き、史哉の言う通り構える。

「まずは、確かめさせて貰う」

上段からの頭への攻撃。
圧倒的に体格の違う史哉からのその攻撃を、受け止めるのは無謀な行為だ。
優也は体を捻り、紙一重で躱す。

「甘いな」
「！」

空振りに終わった筈の刀が、急に方向を変え、優也へと襲い掛かる。

「くっ！」

優也も何とか刀で受け止めるが、軽く吹き飛ばされてしまう。

「どうした？　この程度か！」

史哉は刀を鞘に納め、居合い斬りの構えを取りながら一歩で迫る。

（速いっ！　だが、躱せばスキが生まれる）

史哉の射程距離に優也が入り、一気に抜刀しようとする。
優也は攻撃が来るであろう場所に刀を構え、受け止める体勢に入った。
そして、史哉が居合いを放つ瞬間、優也の腹部に強い衝撃が走る。

「がっ……！」
「納刀したからと言って抜刀術が来るとは限らんだろう？」

史哉は抜刀していない。
優也が守りに入った瞬間、蹴りを放っていた。
そして、刀を鞘に納めたまま、優也の頭に振り下ろします。
勢いよく叩き付けられ、地面から砂ぼこりが舞う。

「ここまで弱くなっていたとは。　確かめておいて良かったな」

マントに付いた砂ぼこりを手で払いながら、優也を見下ろす。

「闇の力で身体能力が上がったとは言え、昔程の力がある筈がないだろう。　それで俺に少しでも対抗できるとでも思ったか！」

優也は闇の力を発動する事ができるだけ。
それでは戦争時代を生き抜いてきた頃には程遠い。

「そんな事、俺が一番良くわかってる……！」

頭から血を流しながら、優也は立ち上がる。

「それでも……俺は今のまま強くなる！　あいつ等を守る為に！」
「優也……」

誰も殺さなければ誰も死なせない。
強き覚悟を秘めたその紅い瞳で、史哉を睨み付ける。

（戦い方が変わったと思えば、顔も変わったな。　あの頃は何もかもに絶望している様な顔をしていたくせに）

脳裏に写るのは、弱々しく、何も信じない、何もかもを諦めた表情

をしている子供。
目の前に居る、少しマシになった少年を見て、史哉は少しだけここに来て良かったと思った。

「優也、闇の力がただ身体能力を上げるだけの力だと思っているか？」
「どういう意味だ？」

どうやら闇の力を使っている時は、敬語が出来ない様だが、この際細かい事は気にしない。

「闇の力は使い手によって用途が変わる。　今の状態はただの解放状態であってお前だけの闇の力じゃない。　さて、ここまで言えば今から何をするべきかわかるな？」
「……戦闘の感を取り戻しながら、闇の力を自分の物にする、か？」
「ご名答」

ニヤリと笑うと、史哉は再び刀を抜く。

「十日で強くしてやる。　弱音を吐いたらその場で置いていくからな」
「ああ……いくぞ！」

師弟の修行が、八年ぶりに始まった。

同じ妖怪の山の、優也達が居る場所とは違う場所。
そこで、彪牙が気を纏い、佇んでいる。
その様子を、山のボスである咲魔と九妖が見ていた。

「咲魔様、これは一体どういった？」
「あいつは俺と同じで特別な能力を持たない。　気を使って体一つで戦うんだ。　だったら、気を纏っていられる時間を延ばさないとならない。　すぐに気が切れたら話にならねぇからな」
「くっ！」

小さく短い声が聞こえたかと思えば、気を解いた彪牙が膝に両手を付き、汗だくで肩で息をしていた。

「三十分か……。　こんなんじゃいつまで経っても次の修行に入れないぞ」
「うっ……せぇなぁ……わかってらぁ」

汗を拭きながら、再び気を纏おうとする。

「おいおい、あんまり無理するな。　少し休め」

時間はあるから、と付け加える咲魔だったが、彪牙は首を縦に振らない。

「一分一秒でも無駄には出来ねぇよ……。　こうしてる間にも、あいつ等は強くなってんだろ？　これ以上離されてたまるかよ」

そう言って、彪牙は再び気を纏う。

「根性あるな……」

彪牙を見て、まるで昔の自分を見ている様に感じた咲魔だった。

「と言う訳で、貴方には今からナミと戦って貰うわ」

「宜しくお願いします」

「……はい？」

総司の間抜けな声が広い部屋に響く。

「今からナミと……」

「いやいや、そう言う事を訊いてるんじゃなくてですね……」

総司達が居るのは病院の地下。

病院の地下にこんな修行に最適な部屋があるとは思ってなかった総司は、連れてこられた時、驚いたのは言うまでもない。

「妖怪と言えど、こんな小さな女の子と戦うなんて嫌ですよ」

総司は変態なところもあるが、女性に対して紳士なところもある。

しかも相手が、見た目小学生とあっては、戦いたくないだろう。

「あんまりナミをナメない方が良いわよ。　ナミ、やっちゃいなさい」

「はい」

「？　何を……」

次の瞬間、いつの間にか自分の懐に潜り込んでいたナミに腹を殴られる。

「……っ」

腹を貫かれそうなその突きに、総司の体が浮き、そして壁に叩き付けられた。

「見た目で判断しちゃ駄目でしょ。　可愛いけど妖怪なんだから」

「あ、彩夏さん／／／！」

彩夏の可愛いと言う単語に、ナミは恥ずかしそうな反応を見せる。

「本当に……失礼な事を、しましたよ……」

腹を手で抑えながら、総司は苦しそうに立ち上がる。

総司が叩き付けられた壁に傷一つ付いていないところから、この部屋は頑丈に作られている様だ。

「相手と言い場所と言い、修行には最適ですね」

これでまたあの男に近付ける。

そう思うと、自然と笑みが零れた。

「帰ってくるのも……久し振りですね」
「……そうだな」

薫、そして修二、二人は過去に一緒に暮らしていた家に居た。
椿一族が滅びる前に暮らしていたその家に。

「父さんは……やっぱり居ないですね……」

もしかすれば、生き別れになった父親に会えるのではないかと、薫は思っていたが、居ないとわかると表情を暗くする。

「あの人はそう簡単にくたばりはしないさ……」

すると、修二は薫に向き直る。

「薫、正直俺はお前には戦って欲しくない。けど、お前がどうしても戦わなければならないなら、俺は全力でお前を鍛えて、全力でお前を守る」
「兄さん……」

カイに、自分が薫を鍛える様に言われた時、初めは断った。
だが、薫が友達の為に強くなりたいと、戦いたいと知った時、修二自身も覚悟を決めた。
死神が相手だろうと、薫の為なら何でもしようと。

「ありがとう。私も、強くなって兄さんを守ります」

修二の覚悟に、薫は満面の笑みで答えてみせた。
この兄妹の絆を裂くものなど、もうありはしない。

「と言う訳で、天使も悪魔も、力の使い方は優也君達と同じなんだよ。　ＯＫ？」
「「ＯＫ！」」

元気に答えるのは美優と雅。
力の説明をしているのはカイ。
居間で繰り広げられるその光景を、浩輝、ルミア、キラが見ていた。

「元気だね～」
「そうね」
「雅って娘も可愛いな」

上からキラ、ルミア、浩輝の順番。
浩輝が言った事は、二人は無視する事にしている。

「そう言えばグランツとアランは？　真司って子も居ないし」
「二人なら道場よ。　グランツは知らないけど」

ルミアの言葉の後に、道場の方からまだまだぁ！　と言う真司の声が聞こえてくる。

「皆元気だね～」
「ところで浩輝？　貴方は何もしなくて良いの？」
「あ？」

舐める様な視線を美優と雅に送っていた浩輝だったが、ルミアに呼ばれて、二人から視線を外す。

「カイが全部やってくれてるから別に良いだろ。　他の奴等も竜也達がしごいてるしよ」

「しごくって、どんな風に？」

すると浩輝は修行をしている人数を数えているのか、指を折っていく。

「確か、流香と雷道と風魔は一対一で戦って無理矢理強くするって言ってたな」

「む、無理矢理？」

「無理矢理」

他の奴は知らないけどな、と付け加え、浩輝は再び美優達へと視線を向けた。

「はぁはぁはぁ……」

「もう終わりなんて言うんじゃないわよね？」

薄暗く、若干広いと言う事以外は何処にでもある様な部屋。

そこに、二人の少女が居た。

一人は長い銀髪で、赤い瞳で背中に赤い翼が生えている黒城流香。

もう一人は黒いドレスにエプロンを付けた様な服を着た紫色の髪、そして黒いとんがり帽子を被り、箒に乗って天井近くまで浮いている橘紗理奈。

まるで魔女の様な格好をした紗理奈が、流香の相手をしていた。

「沈黙魔法（サイレントマジック）……。　詠唱破棄で発動する事の出来る魔法……。　詠唱中に攻撃、何て言う手が使えないから、厄介ですね」

「二割程パワーが落ちちゃうけど、スキが減れば充分でしょ？」

「そうですね」

本来、魔法は呪文を唱えるか、専用の道具を使用する事で発動する。呪文を唱えず、専用の道具も使わずに魔法を使えば、威力は大幅に下がる。

高位の魔法や複雑な魔法なら尚更だ。

それを紗理奈は、詠唱もせず、道具も使わずに、涼しげな表情で殆ど威力が落ちていない魔法を使用していた。

「さぁ、続きといきましょうか」

紗理奈の周りに、紫色の小さな光の玉が現れる。

いつでも流香に向かって飛んでいける様に漂う。

「ええ」

血で二本の短剣を出現させ、両手で持つ。

同時に、光の玉が流香へと襲い掛かった。

とある森の中、一際大きな金属音が鳴り響いたかと思えば、地面に白髪の少年が叩き付けられた。

「っ～～～～～」

「お～い、大丈夫かい？」

痛そうな表情をする少年に対し、木の上から声をかける少年がもう一人。

対して目立つ格好をしていないからか、その少年が手に持つ武器がかなり目立つ。

その手には、真っ黒で身の丈程の、死神の様な大鎌が握られていた。

「訊いてるか、正？」

「訊いてるよ、亮さん」

地面に刀を突き刺し、正は立ち上がる。

亮は面白そうに微笑むと、大鎌を転がす様に、体の周りで振り回す。

「俺も伊達に『瞬神の死神』と呼ばれてないからね。　まだ『風の悪魔』には負けられないよ」

「はっ、絶対に負かしてやる！」

二本の刀を強く握り締め、亮を睨み付ける。

「じゃあ……掛かってこい」

そこに居たのは、優しく接してくれる優也と優花の兄ではない。

そこに居るのは、死神だ。

正と亮が修行をしている場所から少し離れた場所に、仁と竜也は居た。

「まぁ、こんなもんかぁ」
「これは？」

仁は周りを見渡す。
別段変わった所は無いが、力がある者にはわかる。
この場を何かが覆っていると。

「結界だよ。　一般人と関係無ぇ霊が入らねぇ様になぁ」
「何でそんな陰陽師みたいな事を！」
「陰陽師だからだよ……！」

相変わらず無駄に天然な弟子に、竜也は呆れて何も言えない。

「とにかく、修行を始めんぞぉ。まずは……」

竜也は服の内ポケットに手を入れる。

「街まで戻ってジュース買ってこい。　勿論コーラな」

百円玉を指で弾き、仁に渡す。

「知ってるか？　それは修行じゃなくてパシリって言うんだぞ。俺は絶対パシリは嫌だ」

竜也に指摘しながら、然り気無く百円玉をポケットに入れる。

「おぉぉい！？　パシリが嫌なら百円返せぇ！！」

「この百円は俺の手に渡った時点で俺の百円だ」

「師匠である俺が返せと言ってんだぁ！　さっさと返せぇ！！」

「嫌だ」

「我儘かぁ！！」

返せ、返さないのやり取りが続き、この二人は修行が進まなかった。

「ぜぇ……ぜぇ……げほっ！」

「まぁこんなもんか」

岩山に囲まれた場所に、ボロボロで倒れ込んでいる進と、無傷の龍が居た。

「明日もここで修行だ。　逃げるなよ」

「ぉ……おぉ……」

返事をする元気も無いのか、消え入りそうな声を出す。

「……」

龍は進を見ながら、進に青龍と会わせる前の事を思い出す。

『俺は反対だ。　進に青龍の力を与えるのは』

『けどね、優也君と進君が出逢ってしまった以上、仕方がない事だよ』

優也が初めて進と出逢った日の翌日、龍はカイに対して抗議していた。

『出逢ったのなら尚更だ！　あの時と同じ事を繰り返すつもりか！！』

『もしあの時と違って、三百年前と同じ事が起きたらどうする？　もし起きたら、進君に力が無いのはマズイ』

『っ！　だが今は、神道や優花が居る！』

『それでも、進君が死なないとは限らない』

『くっ……』

それ以上、龍は何も言い返せなかった。

『あいつ等を……見捨てるつもりか……？』

自分でも驚く程、弱々しい声が出たのは、今でも覚えている。

『見捨てる訳じゃない。　だってこれは、運命なんだから』

「ちっ……」

その時の会話を思い出し、龍は思わず舌打ちをする。

「だから嫌いなんだよ……。　運命なんて……」

少し夕焼けに染まった空へ、龍は呟いた。

第57話　修行開始（後書き）

新たな敵を倒す為、少年達は強くなる。

「そろそろ、動き出すかな？」

そんな中、少しずつ敵の魔の手が迫る。

「嘘だろ……」

信じられない光景を目にした彼等の

「怖い……戦うのが……怖いよ……！」

覚悟が鈍る。

「お前を殺す！」

白き虎は、友を殺され、憎しみに囚われた悪魔に戦いを挑まれる。

「三日後、この世界を壊しに来るぜ」

死を司る神、死神。
その死神を纏める死神の王。

そして、戦いが始まる。
圧倒的な戦力差にも、彼等は逃げない。

「こいつ等を守る為に、俺はここに居る！」

「俺はもう逃げない！」

「私を助けてくれた皆の為なら、私は戦い続けられる」

「狂気に呑まれ様が、俺はもう絶対誰も殺さねぇ！！」

「やっぱり私も、一緒に戦いたいから」

守りたいものがあるから、彼等は戦う。

「撃て……美優！！」

この先にある、希望の為に。

次回

第５８話　忍び寄る死の神

咲魔

「黒と白が出会う時、物語が始まる」

闇夜

「長編予告をしましたが、先に番外編をしますので、その辺は宜しくお願いします！」

咲魔

「これからも宜しくな」

番外編【もしも生まれ変われるなら】（前書き）

ネタバレ、死ネタ注意です。
上等と言う方はどうぞ。

番外編【もしも生まれ変われるなら】

炎の鳥の力と闇の力を身に宿した黒き少年は過去に大きな罪を犯し、
雷鳴の少年、風の少年、銀色の吸血鬼の少女、あらゆる物を無にする少年、そして自分と瓜二つの少女に出逢い、その数年後に白き少女と出逢った。
白き少女を狙う妖怪や、復讐に取り付かれた男、白き少女を連れ去る悪魔。
様々な敵と戦いながらも黒き少年は、氷を操るの少女、気を操る少年、幻術を操る少年、そして、水の龍の力を身に宿す事になる少年に出逢う。
彼等と絆を深めながら、黒き少年は新たな戦いへと望む。
その先にある平和と希望で溢れている日常の為に。
だが、希望への物語があるのなら、絶望への物語もある。
そう、物語は一つとは限らない。

番外編【運命に縛られた二人】

この世で一番嫌いな言葉は、運命だ。

俺の知り合いの神様は、良く運命だと口にする。
その度に嫌気が刺す。
運命だと言って、何もかもを諦めた奴を数え切れない程見てきた。
あいつ等は運命に弄ばれて、死んでいった。
そしてまた、あいつ等を運命が弄ぼうとしている。

「おらぁ！！」
「はっ！！」

夜の街中で、異形と戦う二人の少年が居た。
一人は黒い髪にルビーの様に紅い瞳で、刀身が真っ黒な刀を武器にした女の子の様な顔立ちをした少年。
もう一人は、髪と瞳が深い青で、水の様なものを纏った青いグローブとブーツを身に付けた、こちらは武器を手にせず、素手で戦っている少年。
高校生程度の年齢の少年が、人間とは違う二体の異形と戦い、完全に優位に立っていた。

「これで決めるぞ。　進！」
「ああ！　優也！」

優也と呼ばれた少年は刀に真っ赤な炎を灯し、進と呼ばれた少年は、左手に水を纏う。

「“鳳凰激”！」

刀から爆発的に放たれた炎は、異形の一体を呑み込み、真っ黒な灰にした。

「“水龍掌破”！」

進は水を纏った左手で、もう一体の異形の胸に掌低を叩き込む。
異形は大きく吹き飛ばされ、壁に叩き付けられる。
痛みに悶えていた異形も、少しすると力尽き、動かなくなった。

「妖怪退治の依頼も完了だな。　帰ろうか……進？」

力を解き、グローブとブーツも消え、青かった髪と瞳が黒くなった進が、異形を吹き飛ばした掌を眺めていた。

「おい、進。　進！！」
「！！」

耳元で名前を呼ばれ、思わず体を震わせてしまう。

「あ、あぁ優也。　どうした？」
「どうしたは俺の台詞だよ。　何してんだぼうっとして」
「い、いや、ごめんごめん！　何でもない！　早く帰ろうぜ！」

手を振りながら笑顔で答えると、そそくさとこの場を後にする。
不思議に思ったものの、優也も進の後を追い掛けていった。

この世界には人間以外の色んな種族がいる。
妖怪、神様、悪魔、死神、他にも色々。
そんな奴等、特に妖怪は人間を襲う。
力の無い人間はただ喰われるだけで、抗う術がない。
たまに、力がある人間が人間を襲う事もある。
そんな奴等から人間を守る為、俺や優也や、能力のある人間や人間に味方してくれている妖怪達等が、人を襲う奴を倒している。
まるで正義の味方みたいで少しカッコイイ。
因みに、今俺の隣を一緒に歩いている女の子みたいな男の子が火渡優也。
高一になっても小さいし女の子にしか見えないけど、実は俺より強い。
人は見掛けによらない。

「今何か失礼な事考えたろ？」
「！　き、気のせいだろ！！」

女の子みたいって言うと物凄く怒るから、気を付けないといけない。
だって怖いし……。

「よぉ、お前等帰ってたか」

俺達の方へ、背の高いツンツン頭の男と、藍色の髪をした長髪の男が歩いてくる。
背の高いツンツン頭の男は、俺達の一つ歳上の鋼鎧寺彪牙。
喧嘩っぱやいけど、意外に頭も良くて面倒見も良い先輩だ。
長髪の男は彪牙と同い年の霧藤総司。
誰にでも敬語で、イケメンなのだが、性格が変態だから残念だ。

この二人はコンビで行動している。
と言うか、俺達もコンビだし、つーか皆誰かとコンビを組んでいるから、一人でいる奴なんていない。
あ、一人だけいた。
月臣龍、彪牙より背の高い俺と優也の同級生だ。
あいつはやけに強いけど、性格が悪い。
わかりやすく言えば他人を苛めるのが好きなSだ。
いつも何を考えているかわからないし、俺は苦手だ。
その他にも俺と近い歳で戦っている人達がいる。
一つは風魔正と椿薫のコンビ。
実はこの二人、コンビであると同時に恋人でもある。
あのヘタレの正が一世一代の勇気を振り絞り告白した。
結果はさっきも言った通りで、晴れて二人は恋人同士。
あの時の総司の悔しがり具合は今でも覚えてるな～。
そして最後に、雷道仁と黒城流香のコンビ。
実は、仁は人造人間だ。
でも、人造人間とは思えない位、天然だ。
ツッコミを入れる俺の身にもなって欲しい。
そして、流香は吸血鬼と人間のハーフ。
容姿端麗、才色兼備。
女性としてはこれ以上無いだろう。
この二人はとにかく優秀で、俺の目標でもある。
いつ死ぬかもわからないが、誰かを守れて、皆と馬鹿をやれる日常が、とても楽しかった。
この時の俺は、こんな日々がずっと続くとばかり……思っていた。

どんな些細な事で命が尽きるかは、誰にもわからない。
俺と、俺の隣に居る長く神々しい金髪をした、俺と同じ位の身長の男の目の前に、二人の男女の死体が台の上に寝かされている。

「椿薫は出血多量。　風魔正は心臓を一突き、か」
「……」

顔も青ざめ、随分と変わり果てた姿だが、この男女は間違いなく、風魔正と椿薫だ。
死ぬ前に、この二人には依頼が入っていた。
何処ぞの村に、魔物が大量に出現にしたから退治して欲しいと。
魔物の一体一体の力は大した事はない。
雑魚相手なら、正も居ればこの二人だけで充分だろうと、俺の隣に居る男が二人に依頼した。
実際、二人だけで充分過ぎる程だった。
だが、逃げ遅れた村の子供を庇い、椿が魔物の攻撃を受けた。
何とか、全ての魔物を倒した正が椿に駆け寄ったが、もう遅かった。
能力を使って血を止める事も出来ない程のダメージを負った椿は、そのまま絶命した。
当然、狂気に半分異常染まっているあの男が、最愛の恋人が死んで、おかしくならない訳がない。
狂ったあいつは、守るべき村人を、一人残らず殺してしまった。
ここからが俺の仕事だ。
正の様に暴走した者や、裏切り者を抹殺する。
それが、俺が一人で行動している理由。
流石に苦戦したが、最期に心臓を大剣で貫いた事で、正の命を奪った。
あいつの最期の言葉は今でも覚えている。

『薫の傍に居させてくれ』

俺はその願いを叶えてやった。
椿の傍に居る時のあいつの幸せそうな顔も覚えている。
自分も死ぬと言うのに。

「気を病む事はない。　彼をあのまま放っておく訳にはいかなかった。　君の判断は間違いではない。　これは彼等の運命だ」
「別に、何も気にしていない……」

また運命、か。
嫌気が刺しつつも強がってはみたが、正を殺す時、思わず躊躇してしまった。
人間だろうが何だろうが、命を奪う事は慣れている。
それなのに、何故だろうな……。

まぁ、俺の事は良い。
すぐに元に戻るだろうからな。
だけど、こいつ等が死んだと知ったら……あの二人はどうするだろうな。

今日は一段と、相手に対して容赦が無かった。
それもそうだ。
正と薫が死んだと知ってから、まだ一週間も経ってないんだ。

俺は抑えきれない怒りや憎しみを、相手にぶつけた。
それがどれだけ酷い事か、俺にだってわかってる。
けど、そうしなければ戦う事なんて出来ない。

「進……。　進！！」
「……何だよ」
「何だよじゃない。　もう行くぞ」

優也はいつも通りにしているが、俺は知っている。
二人が死んでから、優也は毎晩泣いている。
人前では強がって見せて、誰にも気付かれない様に泣くのがこいつなんだ。

「ああ……」

俺も、せめて人前では強がらないといけない。
誰にも死んで欲しくないから。
そうやって、どれだけ強く願おうと、俺の願いは叶う事なく、幻想に終わってしまう。

また死人が出た。
今度は仁と流香だ。
今まで抑えてきた流香の吸血衝動が暴走してしまった。
流香を止める為、仁は戦ったが、完全に吸血鬼として目覚めてしまった流香に、手も足も出なかった。

何度仁が呼び掛けようが、流香は近くに居る人間を襲い続ける。
喉が潰れる程の叫び続けようと、流香は止まらない。
あいつは完全に吸血鬼と化していた。
これ以上はマズイと思った俺は、流香を殺す事を決めたが、仁は良しとしなかった。
突然現れた俺に驚きもせず、ただ一言

『優也達を頼んだ』

次の瞬間には、仁は流香の目の前に立っていた。
流香は咄嗟に腕を突き出し、仁の胸を貫こうとする。
いつもの仁なら躱せただろう。
そう、いつもなら。
真っ赤な鮮血が飛び散り、辺りを更に赤く染める。
真っ赤な鮮血の正体、それは仁のものだ。
一瞬で絶命出来そうな攻撃を、奴は躱さなかった。
残された力を振り絞り、優しく流香を抱き締めてあいつが放った言葉を訊き、気付いた。

『一人は寂しくて辛くて苦しい。　だから、俺が傍に居てやる』

あいつは、覚悟を決めていたのだと。
二人を激しく鋭い雷撃が包み込む。
目も眩む程の閃光の中、俺は確かに見た。
いつもの様に、人間の笑顔をした流香の表情を。

「男は愛する者の為に狂い、女は自分自身を憎んで狂い、そして死んでいく。　狂気が生んだ愛憎劇だな……」

この世界は狂気に包まれている。

一つの狂気が生まれれば、違う狂気が生まれる。
この世界はそう言う風に出来ている。

「あの二人……いや、問題は進の奴か……」

優也はあれはあれで心の強い奴だから大丈夫だろうが、進は優也以上に友達思いな奴だから、何をするかわからない。

「何かしそうなのはわかっているのに、何もしないんだな、俺は」

自分自身に悪態を吐きながら、一本の煙草とライターを取り出す。
煙草は以前、仁がくれた物で、ライターは良く無くすと言う理由から、俺に預からせた物。
今となっては、このライターを返す事も出来なくなった。
俺は煙草を口に加え、ライターで火を点ける。

「ゲホッゲホッ……」

案の定むせた。
良くこんな物を吸ってたなあいつ。
だけど、こんな物でも吸っていると、あいつ等の事を忘れなくて済みそうだ。
またむせるだろうが、もう一度煙草を吸う。

「あぁ～、苦ぇ……」

空に昇っていく煙草の煙を眺めながら、俺はそう呟いた。

「っ！！」

予想以上に速い攻撃を受け、俺は弾き飛ばされる。
いつもならここまで苦戦する事なんか無い。
なのに、何で？

「進！」

心配そうに俺を呼ぶ優也の声が聞こえる。
けどその声も、俺の神経を逆撫でする要因にしかならない。

「うおあああああああああ！！！！！」

水の鎧を纏い、薙刀を手に敵へと走る。
いつもの速さ重視の姿じゃない分、かなり遅く感じる。

「待て！　おい！」

優也の声なんてを完全に無視して、俺は走る。
敵の無数の刃が、俺を襲う。
鎧を纏っていても、この痛みは止められない。

「ぐっおおあああああああああ！！！！！」

体が傷付く事を省みず、避ける事もせずに、俺は力一杯、薙刀を振るった。
敵の体は真っ二つになって、動かなくなる。

「はぁはぁはぁ……ざまぁみやがれ……」

鎧のお陰で大きな怪我は無いけど、やっぱ痛い。

「進！　お前、何でそんな無茶な戦い方を！！」

もう一体の敵を倒した優也が、俺に怒鳴りながら近付いてくる。

何でだろう？　今は、凄いイライラする。

「倒せたんだから別に良いだろ……」

「良くない！　そんな戦い方してたらお前は……」

「仁達みたいに死ぬ、か？」

「！」

口が、勝手に動く。

「そんなに死なせたくなかったら、お前が皆の分も戦えよ！！　一人で全部背負ってなぁ！！」

「す、進……？」

何を言ってるんだ俺は。

頭では抑えようとしているのに、言葉が止まらない。

「お前と違って俺は皆が死んだのにいつも通りになんて出来ないんだよ！！　だからこんな戦いしか出来ない！　お前は良いよな！何たって……皆が死んでも何も思ってないもんな！！」

「お前！！」

背中に鈍い痛みが走る。

優也に胸ぐらを捕まれ、壁に叩き付けられていた。

「お前だけが辛いと思うなよ！　彪牙だって総司だって、俺だって！　皆辛いんだよ！！」

「……さいんだよ……うるさいんだよ！！」

優也の手を振り払い、俺は何処かへ走り出す。

俺を呼ぶ優也の声が聞こえたけど、俺はまた無視して走っていった。

「はぁはぁはぁ……」

かなりの距離を走ってきたから、だいぶ疲れた。

息を整えながら、さっき自分が言った事を後悔する。

優也が何も感じていない筈がない。

いつもいつも誰にも気付かれない様に泣いている事を、俺は知っていたのに。

「きゃあああああああああ！！！！」

「！」

休もうとする事も後悔する事もさせないかの様に、俺の耳に誰かの悲鳴が届く。

悲鳴が聞こえたのはすぐ近く。

次の瞬間には走り出していた。

まだ俺には、誰かを守ろうとする気持ちが残っていたんだ。

「あそこか！！」

路地裏の中に、若い女の人と、その女の人を襲おうとしている妖怪を見付けた。

「やめろぉ！！」

俺は力を解放して、妖怪を蹴り飛ばした。

「一撃で決めてやる！」

左手に水を集中させて、形を細長い刃の様に変形させる。

「おおおお！！！！」

さっき敵を斬り殺した時の様に、水の刃を力一杯振るう。

ウォーターカッターの様に鋭い刃に当たった妖怪の体は、真っ二つになった。

勢いよく吹き出した妖怪の血が、雨の様に俺の体に降り掛かった。

「大丈夫ですか！」

「ひっ！！」

怪我が無いか確かめ様と女の人に駆け寄ったが、小さく悲鳴を上げて、後退りする。

初めは襲われたショックでこんな反応なのかと思った。

だけど違った。

この人は完全に俺を怖れていた。

何で？　助けたのに、何で俺から逃げようとするんだよ！

「こ、来ないで！　化け物！」

ガコンと、何かの歯車が動く様な音が聞こえた様な気がした。

「見付けましたよ！　進君！」

「おい進！」

彪牙と総司か。

ちょうど良かった。

「一人でどっか言ったって訊いて捜してたんだぜ」

「こんな場所で何を……」

「なぁ、お前等は何の為に戦ってる？」

訊きたい事があったから。

「どういう意味……」

「俺はさ、友達や誰かを守れるなら、妖怪や魔物の命を奪っても耐えられた。　それが俺にとっての戦う理由だから。だけど、守りたかった友達を殺されて、守った人に化け物扱いされて、それなのに俺は戦わないといけないのか？　皆を奪っていく世界の為に、俺達のお陰で生きていられる事を知らない人間の為に、何で俺達が戦わないといけないんだ！！」

「ど、どうしたんですか！？」

「落ち着け！！」

そうだ、あんな奴等の為に、こんな世界の為に戦う必要なんて無いんだ！

「！　彪牙……あそこ…………」

「あれは！！」

こんな世界に皆を奪われるくらいなら…………。

「まさか……君は…………」

「人を……殺し…………！」

俺が全部壊してやる。

「彪牙！！」

「すす……む…………お前っ！！」

彪牙は力無く倒れる。

それもそうだ。

彪牙の心臓は俺が貫いたのだから。

「貴様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

怒り任せに総司が斬り掛かって来るけど、遅すぎる。

まるでスローだ。

「が……はっ…………！」

総司も、彪牙と同じ様に心臓を貫いた。

これでこの場には、彪牙と総司、そして、俺を化け物呼ばわりした

女の死体が横たわった。

「壊してやる。　何もかも！」

でも、今ならあの女が俺を化け物呼ばわりした気持ちがわからないでもない。

ガラスに写った俺の顔は、まるで鬼の様に恐ろしい形相をしていたんだから。

街には煙が立ち込める。

何処かの民家が火事に合っている訳ではない。

家も、ビルも、街の至るところが燃え、崩壊しているのだ。

地面には数多くの死体が倒れている。

その中心に、青い髪をした血塗れの少年が佇んでいた。

その場に、優也が駆け付ける。

今起こっている事態が信じられない様な表情をしていた。

何故なら

「進！！」

街を破壊し、人を殺した人物は、自分の相棒であり親友の、水野進だったからだ。

「……優也、か」

「進……何で、こんな事を……！」

進の眼を見て、優也は思わず後ずさる。
今までの様な真っ直ぐした眼はしておらず、まるで全てに絶望した様な眼をしていたからだ。

「優也、俺、気付いたよ。戦わなくても良くなる方法を。　この世界の何もかもを壊せば、戦わなくて済むんだ」
「何言ってるんだよ……進！」

支離滅裂な事を言っている進に、優也は声を荒らげる。
とにかく進を止めようとした瞬間、目の前に刃が迫っていた。

「っ！」

上体を大きく反らし、ギリギリで刃を躱す。

「流石に、避けるか」

進の手には、青龍刀が握られていた。
それで斬り掛かって来たと言う事は、完全に自分を殺そうとしている。

「お前、本気なのかっ……！」
「じゃなきゃやらねぇよ」

そう言って再び斬り掛かる。
優也は瞬時に刀を抜き、進の刃を受け止める。

「っ、おぉぉぉ！！」

受け止めた青龍刀を、力一杯押し返す。

「うおっ！」

押し返された事で、青龍刀を持っている方の腕が大きく広がり、進の胴体が隙だらけになる。

ここだと言わんばかりに、優也は刃を返し、青龍刀を持っている方とは反対側に打ち込んだ。

（入る！）

進を殺そうなど考える筈もない優也ならではの攻撃。

だが、その攻撃は逆の腕に装着していた龍の紋様が入った青い盾によって防がれた。

「なっ！」

「峰打ちかよ。　一々盾なんか出す必要もなかった、な！」

さっきのお返しと言わんばかりに、刀を押し返し、優也を蹴り飛ばす。

「うっ！」

蹴り飛ばされ、優也は地面を転げる。

「“水龍断”！」

優也に向かって青龍刀を大きく振るう。

青龍刀から大きな水柱が放たれ、コンクリートの地面を切り裂きながら、優也へと向かっていく。

「くそっ……！」

迫って来る水柱に気付き、炎の翼を羽ばたかせ、空へと逃げる。

「！」

この時、優也は躱して正解だと思った。
水柱は優也の後ろに合った建物を、軽々と切り裂いてしまったのだから。

「逃がさねぇよ」

青龍刀を振るうと、青龍刀は水柱に姿を変え、優也へ向かって昇っていく。
水柱は優也に当たる事なく、空高くへと昇っていった。

「何をして……！」

体に強い衝撃が走る。

「余所見禁物だ！」
「お前っ！」

優也が水柱に気を取られている隙に、進は水柱の水流に乗って駆け上がり、殴り掛かっていたのだ。

「落ちろ！！」
「うあっ！」

そして、体勢を立て直される前に、優也を蹴り落とす。
蹴り落とされ、優也は地面に叩き付けられる。

「ぐっあ……！」

翼で落下速度を落とし、翼をクッションにして衝撃を殺したが、ダメージはしっかり体に伝わっていた。

「お前、やる気あんのか？　まぁ良いけど」
「っ……」

溜め息混じりに、進が着地する。

「痛いだろ？　だからもう……」

青龍刀を手にしながら、優也に向かってゆっくりと歩いていき、目の前に立つ。

「楽になれ」

青龍刀を振りかぶり、そして、振り下ろした。

（進……）

優也の脳裏に、随分前に、龍が警告の様に言っていた事が、走馬灯の様に駆け巡った。

『何があっても進とは戦うな。　お前と進が戦えば、周りを破壊し尽くしながら、どちらかが死ぬまで殺し合う事になる。　そうなればもう、後戻り出来なくなるぞ』

（あの時の言葉は、今でも良くわからない。　でも、もしそれが本当で、殺し合いを続けないといけなくなったとしても……俺は！）

迫り来る凶刃。
優也には、時が遅くなった様に遅く見えた。

「俺は！！」
「！？」

進の表情が驚愕に染まる。
首を狙った一撃が、炎を纏った腕で止められたのだ。
次の瞬間、優也の体から黒い霊気が溢れ出し、刀に炎が灯った。

「“鳳凰激”！！」
（マズイ！！）

まるで爆撃の様に放たれた炎が、進に襲い掛かる。
進は咄嗟に盾を構え、防御するが、盾は粉々に砕け、進は地面を滑る様に吹き飛ばされる。

そして、優也は立ち上がり、紅い瞳を進に向ける。

「お前を止める！」

「やってみろ！」

両者は同時に駆け出し、衝突する。

金属音を響かせながら、漆黒の刀と青龍刀が、何度も何度もぶつかり合う。

優也は身軽さを武器に、変幻自在な攻撃を繰り出し、進は再び出現させた盾で防御しながら、青龍刀で攻撃を仕掛ける。

「「ちっ！」」

二人は同時に飛び退き、同時に技を放つ。

「“斬炎弾”！」

「“水龍断”！」

漆黒の斬撃と水柱がぶつかり合い、爆煙を撒き散らす。

優也は空高く飛び上がり、進は追う様にビルを駆け上がる。

「“炎舞鳥”！」

刀から放たれた複数の火の鳥が、進の上空から降り注ぐ。

「甘いんだよ！」

青龍刀と盾を駆使し、火の鳥を弾いていく。

「！」

弾きながら、火の鳥の奥に、黒い影が見えた。
全てを弾き終えると、青龍刀を盾の前に添え、防御を固める。
すると、防御を固めたそこに何かが当たる。

（やっぱり、これは！）

優也はあまり闇の力を使わず、この技を見る事は少ないが、進は確かに覚えていた。
大きな黒い鳥が相手の動きを封じ、そこに優也が攻撃を叩き込む。

（捕縛型の！）

闇の鳳凰閃火。

「“鳳凰閃火”！」

優也の攻撃と同時に、黒い鳥に吸い込まれる様に進へと打ち込まれる。
さっきの優也の様に、進は地面へと叩き付けられ、煙を舞い上げる。
優也はそのまま落ちていき、追撃する。
すると、突然煙が晴れると、進が反撃しようとしていた。
優也も瞬時に攻撃体勢に入る。

「“龍神激”！」
「“鳳凰激”！」

青龍刀からは水が爆発的に、漆黒の刀からは爆発的に炎が放たれる。
似通った二つの技がぶつかり合った拍子に、優也は刀を手放してしまい、進は青龍刀と盾を消してしまう。

「っ！」
「うあっ！」

優也は地面に、進は壁に叩き付けられるが、二人は同時に立ち上がり、同時に走り出す。

「おおおおおおおおおおおお！！！！」
「ああああああああああああ！！！！」

どちらも武器を持たず、肉体だけでの戦いを始める。
片方が殴れば片方が殴り返す。
片方が蹴りを入れれば片方が蹴り返す。
何度も何度も殴る蹴るを、いつまでも続けるのではないのかと思う程続けた。
その行為を何十回目かを超えた時、二人は同時に飛び退く。
優也の右足には黒い翼が現れ、進の右足には龍がまとわりついた。

「“鳳凰”！」
「“水龍”！」

二人はまた同時に駆け出し

「「“爪牙”！！」」

同時に蹴りを放った。
威力は互角で、二人は再び吹き飛ばされる。

「くっ………！」

先に進が立ち上がった。
そして、優也を睨み付ける。
優也も立ち上がろうとした時、さっき自分が手放してしまった刀が、目の前に落ちていた。
その刀を広い上げ、優也も立ち上がる。

「はぁ……はぁ……」
「ぜぇ……ぜぇ……」

どちらも力はほぼ使い果たした。
次で勝負が決まる事を理解して、二人は力を練り上げる。

「舞い上がれ、漆黒の翼」
「はあああああああ」

優也の刀には黒い炎が灯り、背後に大きな黒い朱雀が現れ、進の体からは青い霊気が溢れ出し、青龍が進の周りを旋回する。

「全てを焼き尽くす炎となれ！」
「おおおおおおおおおおおお！！！！」

黒い炎は大きく燃え上がり、朱雀は翼を大きく広げ、進は空高く飛び上がり、青龍もそれに合わせて空へと昇っていく。

「“黒帝”！」
「“我龍”！」

朱雀は口を広げ、黒い炎を溜め、青龍は進の背後に回り、大きく口を開ける。

「“鳳凰衝”！」
「“点睛”！」

優也の刀と朱雀の口から、同時に黒い炎が砲撃の様に放たれ、進は青龍と一体化し、隕石の如く、優也へと向かっていく。
優也と進、両者の最大の技が激突した瞬間、今までに無い爆発が起こり、この場一帯を、爆煙が包み込んだ。
どちらが倒れてもおかしくないこの激闘は、次の瞬間、終止符を告げる。
爆煙の中から進が落ち、力無く地面を転げ回る。

「う、あぁ……」

進から呻き声が聞こえてくる。
もう力を使い果たした様で、その証拠に、何度立ち上がろうとしても、何度も倒れてしまっていた。

「はぁはぁはぁ！　ゲホッゲホッ……！」

煙が晴れると、そこには力を使い果たし、息も絶え絶えだが、確かに立っている優也が居た。

「はぁはぁはぁ……」

一歩踏み出すのも辛そうな足取りで、進へと近付いていく。

「ぐう、あああああああああ！！！！」

まだ戦うつもりなのか、声を上げてでも、立ち上がろうとする。

「もう、やめろ。　進」
「っ……」

さっきとは逆に、優也が進の目の前に立つ。
進は優也を見上げると、ニヤリと笑ってみせた。

「だったら……早く……殺せよ」
「……」

自ら自分を殺す様に言う進に対し、優也は辛そうな表情をする。

「お前も……わかってるだろ？俺達は……一度戦い始めると……ガハッ！　……どっちかが死ぬまで殺し合おうとする。　今の戦いで……わかった……。　だから、早くやれ。　お前になら、殺されても良い……」

力を振り絞り、進は膝を付いて座り込む。

「似たような事なら……龍に訊いた。　あの時は良く意味が……わからなかったけど……今はわかる……。　それが、俺達の運命なんだろうな……」

とても辛そうな表情をしながら、優也は刀を握り締める。

「それで良い……」

握り締められた刀を見て、進はいよいよ覚悟を決める。
内心、これで良かったと思っていた。
これだけの罪を重ねてしまっては、生きていく訳にはいかない。
そして、自分を殺してくれるのが、優也で良かったと、微かに残っ

た理性で、そう思った。

「さよな……」

「でもな」

別れの言葉を言おうとした瞬間、優也に遮られる。

「俺はお前を……殺せないよ」

優也は笑顔でそう言う。

年相応の、何処にでも居る少年様な笑顔で。

「え……」

「俺達の内、片方しか生きていられないなら……こうすれば良い」

ドスッと、何かが突き刺さる音がした。

進は自分の目と耳を疑った。

何かが突き刺さった音なら、自分の体に刀が突き刺さっている筈。

だが、何処にも刺さっていない。

なら何処に。

そう、だから目を疑ったのだ。

優也の心臓に、刀が突き刺さっている事に。

ゆっくり、時が止まった様にゆっくりと、優也の体が崩れ落ちる。

崩れ落ちながら、優也は言った。

「お前は……生きろ」

そして、ゆっくりと横たわった。

「ゆ、ゆう、や？　お、おい……」

優也の体を揺すってみる。

反応が無い。

それどころか、段々体が冷たくなっている事に気付かされる。

「お、おい……目を覚ませよ……。　なぁ、優也……。

優也ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

固く閉ざされた瞳は開く気配はない。

優也は、死んでいた。

認めたくはない進は、優也の胸に刺さった刀を抜き取る。

「！　がっあぁぁぁ！！」

刀を抜いた瞬間、頭に激痛が走る。

「あああああああああああああ！！！！」

頭の中に、誰かの記憶が入ってくる。

地面に付きそうな程長い黒髪の、ルビーの様な紅い瞳をした女性と、

青い髪に青い瞳の男性が、脳裏に写る。

二人は愛し合い、共に戦ってきた。

それがいつしか、二人は殺し合いを始めていた。

女性が狂い、男性がそれを止めようと戦う。

そして、女性を追い詰めた男性だったが、自分で自分を殺してしまった。

まるで今の優也の様に。

そこで映像が途切れる。

途切れると同時に、痛みが引く。

痛みが引くと、進は腕の力を抜き、ダランと地面に落とす。

「三百年前は恋人として……今は親友として……何故、お前達は殺し合うんだ……」

大剣を引きずりながら、龍が歩いてくる。

その表情はいつもの面影は無く、悲しみに染まっていた。

「そんなの……」

突然現れた龍に驚く事もなく、涙を流し、無理矢理作った笑みを、龍に向ける。

「愛してるからだろ」

「……！」

進は優也へと手を伸ばす。

「なぁ優也……。　もしも生まれ変われるなら……」

最後まで言い終わる前に、大剣で胸を貫かれ、優也に覆い被さる様に倒れた。

「気に病む事はない。　それが彼等の運命だ」

「黙れ！！」

突如、背後に現れた金髪の男の言葉に、龍は怒りの形相で大剣を向ける。

「そんなものの為に、人が死んで良いと思ってるのか！　それが神

か！？」

今にも斬り掛かりそうな勢いで、龍は声を荒らげる。

「……彼等の運命を変えたいのか？」

「……ああ」

少し落ち着いたのか、龍は大剣を下ろす。

「それなら、一つだけ方法があります」

「！　お前……」

男の後ろから、茶髪で白いワンピースの少女が現れた。

「私の力でこの世界を再構築します。　ですが、今の私の神力の量では足りません」

「わかっている。　そこで私の神力を借りたいのだろう」

「はい」

「良かろう」

純白の気を放ちながら、男は少女へと近付く。

少女も力を使おうとしているのか、目を閉じ、集中する。

「ま、待て！　世界の再構築には膨大な神力が必要だ。　いくらあんたとは言え……」

「ああ、いくら私が神だとは言え、肉体を維持する事も難しいだろう」

だが、と付け加え、男は龍に向き直る。

「新たな世界で神の座を失って、違う人生を歩むのも良いかもしれない。　その時は……そうだな、“カイ”とでも名乗ろうか」

そこで、龍の意識はブラックアウトした。

この世で一番嫌いな言葉は、運命だ。
俺の知り合いの神様は、良く運命だと口にする。
その度に嫌気が刺す。
運命だと言って、何もかもを諦めた奴を数え切れない程見てきた。
あいつ等は運命に弄ばれて、死んでいった。
そして、俺は俺の目的と、運命に抗う為に戦う。
目の前には紅い瞳の女の様な黒い少年と、黒い髪に黒い瞳の、何処にでもいる様な普通の少年。
そして、あの時も二人の仲間だった氷の少女と、あの時は居なかった少女が居る。
仲間を傷付けた俺を許せないらしい。
二人は会わせない様にしようとしていたが、運命はそうさせてくれないらしい。
それならそうでも良い。
こいつ等の運命は必ず変えてみせる。
いや、必ず変わる。
あの時出逢わなかった少女が二人、黒い少年と出逢っているのだから。
絶対に変わる。
だから、誰も死ぬんじゃないぞ。

目的を達成しても、お前達が居ない世界なんて、つまらない。
そして俺は運命に抗い続ける。

番外編【もしも生まれ変われるなら】（後書き）

闇夜
「ここまで見て下さってありがとうございます。　今回の話は進と龍視点でした」
カイ
「龍君が戦う理由のひとつがわかり、優也君と進君の事が一つわかって、色んな事がわかった番外編だったね。　ネタバレと死ネタが一杯だったけどね」
闇夜
「初めて１００００文字越えたしね」
カイ
「さて、この話を読んでくれた皆の反応はどうだろう？」
闇夜
「ご感想待ってます！」

登場人物設定６

月臣真司
（つくおみしんじ）

性別　男

ＣＶ：冨永みーな
（るろうに剣心　－明治剣客浪漫譚－：明神弥彦）

年齢　１２歳

誕生日　６月８日

身長　１６３ｃｍ

体重　５２ｋｇ

好き・得意な物（事）　料理　喧嘩　漫画

嫌い・苦手な物（事）　雅の料理

能力　無し

武器　木刀　竹刀

容姿
黒髪でツンツン頭。
目付きはキツイが、まだ子供らしい顔付きをしている。

解説

雅の家で居候している少年。
口は悪いが、根は優しく、表に出さないが雅を姉としてしたっている。
何をするにしても呑み込みが早く、最近真面目に始めた剣術も、かなりの速度で上達している。
龍と同じ月臣と言う苗字だが、龍も本人も面識が無く、兄弟と言うわけでもない。
雅は料理が出来ない為、料理が上手くなった。

二神竜也
（ふたがみたつや）

性別　男

ＣＶ：杉田智和
（銀魂：坂田銀時）

年齢　２８歳

誕生日　３月７日

身長　１７８ｃｍ

体重　７３ｋｇ

好き・得意な物（事）　金　呪殺

嫌い・苦手な物（事）　雨　面倒くさい事

能力　陰陽術

武器　大型二丁拳銃　お札

容姿
灰色の天然パーマ。
教師の時は白衣を羽織り、眼鏡を掛けている。
瞳の色は赤茶。

解説
カイからの仕事として、優也達の担任になった陰陽師。
仕事の内容は、優也達の護衛と死神の事に付いての情報収集。
金を貰えば真剣に仕事をするが、実際は面倒くさがり屋で、金にがめつい。
カイからの依頼だけではなく、陰陽師として除霊や呪殺の依頼も来る。
特に呪殺が得意で、その際には多額の金を請求している。
その為、金には困ってはいない。

天道亮
（てんどうりょう）

性別　男

ＣＶ：森田成一
（ＢＬＥＡＣＨ：黒崎一護）

年齢　１７歳

誕生日　４月４日

身長　１７５ｃｍ

体重　５７ｋｇ

好き・得意な物（事）　優也　優花　競技と球技全て

嫌い・苦手な物（事）　優也と優花に害をなす者

能力　不明

武器　大鎌

容姿
黒髪のセミロング。
髪型は右が長く左が短いアシンメトリー。

解説
優也と優花の義理の兄。

六年前の戦争に参加していた時に優也と出逢い、戦争終結後に、優花を引き取った。
修二程ではないが、結構なブラコン、シスコンである。
優也と優花にだけはM属性。
普段は優しく、口調も穏やかだが、戦闘になると口調がキツくなる。
戦闘能力はかなり高く、『瞬神の死神』と呼ばれる程。
実は人間と死神のハーフである。
紗理奈と同居している。

橘紗理奈
（たちばなさりな）

性別　女

ＣＶ：遠藤綾
（らき☆すた：高良みゆき）

年齢　１７歳

誕生日　１１月２８日

身長　１６４ｃｍ

体重　４２ｋｇ

好き・得意な物（事）　実験　詠唱無しの魔法

嫌い・苦手な物（事）　掃除

能力　魔法

武器　無し

容姿

腰まである紫色の髪。

基本的には黒いドレスにエプロンを付けた様な服を来ている。

解説

とある店の店主をしている魔法使い。

亮と同じ時期に戦争に参加した。

様々な魔法を使いこなす事ができ、しかも詠唱破棄で、威力を殆ど落とさずに使う事が出来る。

性格はおしとやかだが、基本的にキレた時の薫の様な黒い笑みを出せる。

戌井浩輝

（いぬいこうき）

性別　男

ＣＶ：中田譲治
（ケロロ軍曹：ギロロ伍長）

年齢　２８歳

誕生日　１月１８日

身長　１８４ｃｍ

体重　７１ｋｇ

好き・得意な物（事）　動物　可愛いもの　十歳以上年下の女の子

嫌い・苦手な物（事）　熟女　動物虐待

能力　犬神を操る

武器　刀　銃

容姿
茶髪で無造作に肩まで伸ばし、眼鏡を掛けている。

解説
龍に悪魔達の世話を任された（押し付けられた）犬神使い。
竜也には及ばないが陰陽術も多少は使える。
裏の仕事で、悪霊退治等をしている為、金には困らない。
時々竜也と一緒に除霊をしたりする。
面倒見が良く、助けを求められれると、ついつい助けてしまう。
十歳以上年下の女の子が好きで、本人は認めていないがロリコンである。

紅遠
（くおん）

性別　雌

ＣＶ：井上喜久子
（とある魔術の禁書目録：上条詩菜）

年齢　５００歳

誕生日　不明

身長　１１０ｃｍ

体重　２４ｋｇ

好き・得意な物（事）　動物　浩輝

嫌い・苦手な物（事）　水　動物虐待

能力　不明

武器　無し

容姿
赤茶色の毛をした大型の犬。

解説
五百年犬神をしている。
十五年前に浩輝と出逢い、彼を主と認め、一緒に行動している。
主とは認めているが、年下の女の子を見た時に挙動不審になるのはやめて欲しいと思っている。
キラとは仲が良い。

龍堂史哉
（りゅうどうふみや）

性別　男

ＣＶ：池田秀一
（ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ：赤髪のシャンクス）

年齢　不明

誕生日　不明

身長　１８０ｃｍ

体重　７８ｋｇ

好き・得意な物（事）　女　酒　歴史を語る事

嫌い・苦手な物（事）　人付き合い

能力　不明

武器　鍔の無い日本刀

容姿
長くて真っ赤な赤髪。
目付きはかなり鋭い。
見た目は二十代後半。

解説
過去に優也の師匠をしていた人物。
何故か年齢や生年月日が不明で、誰にも知られていない。
六年前の戦争には参加していないが、一部から『赤き英雄』と呼ばれている。
超が付く程の女たらしで、愛人も多数存在する。
人付き合いが苦手で、竜也と浩輝しか友達が居ない。
なので、この二人は友達として結構好きな部類に入っている。

【基本能力】

【月臣真司】

霊力：D
攻撃力：C
防御力：D
コントロール：D
パワー：C
スピード：B
探知能力：F

【霊力光：緑】

【二神竜也】

霊力：A
攻撃力：S
防御力：B
コントロール：SSS
パワー：B
スピード：C
探知能力：A

【霊力光：赤】

【天道亮】

神力：A
攻撃力：B
防御力：B
コントロール：A
パワー：B
スピード：SSS
探知能力：C

【神力光：黒】

【橘紗理奈】

魔力：S
攻撃力：A
防御力：A
コントロール：SS
パワー：D
スピード：D
探知能力：S

【魔力光：紫】

【戌井浩輝】

霊力：B
攻撃力：A

防御力：C
コントロール：SS
パワー：A
スピード：B
探知能力：D

【霊力光：赤】

【紅遠】

霊力：SS
攻撃力：B
防御力：A
コントロール：SSS
パワー：C
スピード：A
探知能力：S

【霊力光：赤】

【龍堂史哉】

霊力：A
攻撃力：SSS
防御力：SS
コントロール：S

パワー：SS
スピード：A
探知能力：A

【霊力光：赤】

登場人物設定６（後書き）

闇夜
「設定を書いてみましたが、変更か追加する可能性があります」
真司
「一言目がそれかよ」
闇夜
「だって仕方ないじゃん！」
竜也
「もっと真面目にやれよぉ」
浩輝
「お前が言うなよ」
史哉
「真面目な奴は俺くらいだな」
紗理奈
「寝言は寝て言ってくれません？」
亮
「紗理奈、言い方キツイよ」
紅遠
『次回も宜しくね』

第５８話　忍び寄る死の神

優也達が修行を始めて、今日で三日目。
三日前に史哉と久し振りに再会した優也は、この三日間を史哉との戦闘に費やしていた。

「“斬炎弾”！」

通常なら、紅い炎が刃を型どり、相手を攻撃する技だが、闇の力を使っていると、紅い炎ではなく、黒い炎が刃となる技に変わる。
勿論、威力も速度も上がっているが、相手はあの史哉、優也の師匠。
史哉は黒い刃を、片手で粉々に砕いてしまう。
砕いたと同時に、鍔の無い刀を上に構える。
刀を構えた位置に、黒い巨大な鳥が当たる。
当たったと言っても、史哉に衝撃は無い。
ただ、動きを封じられた様な違和感がするだけ。

「“鳳凰閃火”」

まるで、吸い込まれるかの様に、優也が黒い鳥の上から斬り掛かる。
黒い鳥と一体化した優也と、史哉の刀がぶつかり合う。

「むぅん！！」
「！！」

互角に見えたが、史哉が刀を振り抜くと、先程の様に、黒い鳥は粉々に砕けてしまった。

「闇の力を使った状態で使えば捕縛型に変わるようだな。　まぁ、

俺には効かないがな」
「っ……」
闇の力を使用している時の、技の変化は理解できた。
威力も速度も、かなり上がっているが、史哉に傷一つ付ける事も叶わなかった。
「間違えても手加減しようと思うなよ。　そんなんじゃ、俺に傷を付けるどころか、一歩も動かせないぞ」
「……総てを焼き尽くす漆黒の炎……」
静かに詠唱を始めると、優也の手に、真っ黒な炎が灯る。
「“闇の炎（ダークネスレア）”」
その炎を見ると、史哉は面白そうに笑った。
「闇の炎……これくらいは出来る様になったか。　来い」
優也が炎を打ち出そうとした瞬間、場の雰囲気を壊す着メロが流れた。
「何だこのメロディー」
「笑●のメロディーだね」
勿論、優也と優花の携帯のメロディーは笑●の音楽ではない。
と言う事は。
「もしもし。　俺だ」
「お前か」

史哉しか居ない。

「何だお前か。　何の用だ？」

『何の用って……もう二週間も会ってないのよ？』

どうやら、電話相手は女性の様だ。

会話からして恋人か何かだと、二人は思っていたが、その考えは違った。

「仕事中に電話するなと言っただろ。　切るぞ」

『ちょ、ちょっとま……』

相手の声も無視し、史哉は無理矢理電話を切ってしまった。

「この女も潮時だな」

恋人だと思っていたのは女性の方だけだったらしい。

「最低」

（優花にまで言われてる……）

普段では有り得ない程の冷めた表情で、優花は呟いた。

この修行は本当に上手くいくのか、この人が師匠で良いのか、心配になってきた優也だった。

第５８話　忍び寄る死の神

「はい。　もう良いよ」
「ふぁ～、疲れた～」

カイの合図と同時に、白かった髪が黒になる。
優也が史哉と戦っている間、美優はひたすら力をコントロールする事だけを練習をしていた。
いざと言う時に、力をコントロール出来ないから勝てませんでした、ではすまない。

「あんまり根詰めすぎても駄目だから、今日はゆっくりして構わないよ」
「え、でも……」
「力をコントロールする修行はもう充分だよ。　それだけなら、君は仁君や流香ちゃんよりも才能があるみたいだからね」

力のコントロール、その点では、美優は誰よりも才能があった。
仁や流香の様に、昔から戦っていた訳でも、進の様に、誰かにサポートされている訳でもない。
全部美優自身の、生まれ持った才能なのだ。

「優也君の様子でも見に行くと良いよ。　彼は今、妖怪の山に居る筈だから」

「う、うん！　ありがとう！」

カイからの提案を聞き入れると、美優は妖怪の山に向かった。

「最近の子供は逸材ばっかだな」

「新しい時代が始まる事は良い事だよ」

美優と入れ換わる様に、浩輝が現れる。

「二人はどうだい？」

「雅は元々力の使い方を知ってたから全然問題は無いな。　今、ルミアとキラが見てる。　月臣……ややこしいから真司で良いか。　手加減しているとは言え、アランとやりあえるくらいにはなったぜ」

悪魔の力の使い方の基礎は出来ている雅は、更なる力の向上。

真司は剣術の向上。

こちらは成り行きだが、見る見るうちに上達している。

「流石、月臣の名を名乗るだけはあるね」

「その事なんだが、月臣って一体何なんだ？」

真司の事で感心するカイに対し、浩輝は月臣と言う存在に疑問を抱く。

「月臣龍……奴は才能があるとかそんなもんじゃねぇ。　まるで史哉みたいな感じだ。　そして月臣真司。　あいつの上達速度も早すぎる。　月臣ってのはそう言う家系なのか？」

「真司君はただ純粋に才能があるだけだよ。　龍君は……確かに似てるね。　でも少し違う。　ただ一つ言えるのは、彼が一番運命に縛られている事だけ」

「どういう意味……」

意味深な発言に、浩輝は追及しようとすると、カイが手の平を向け、制する。

「それ以上深く知るべきではない。　わかったな？　戌井浩輝」

「っ……あ、ああ」

突如、別人の様な威圧感を放つカイに、浩輝は思わずたじろぐ。

「ま、どうしても知りたかったら、龍君本人から訊くと良いよ」

と、さっきまでの威圧感は何処へやら、カイはふにゃりと笑う。

「良いのかよ。　誰にも知られる訳じゃないのか？」

「僕は単に、本人が話さない事を勝手に教える訳にはいかないと思っただけだよ」

浩輝の腋を横切り、カイは外に出る。

「そろそろ、動き出すかな？」

空を見上げながら、カイは呟いた。

場所は変わって、ここは進と龍が修行をしている場所。

進は相変わらずボロボロで、龍は相変わらず無傷だった。

「これだけやっても、俺に傷一つ付けられないんだな」

「はぁはぁ……お、お前が……はぁ……強すぎるんだよ……」

力比べでは手も足も出ず、どれだけ速く動いて攻撃しても、容易く躱され、反撃される。

接近すれば反撃を喰うと考え、少し離れ、最近使える様になってきた水を飛ばしての攻撃をしてみるも、攻撃を無効化されてしまう。

こうして、無駄に力を使い、ムキになって突っ込んで返り討ちに遭う事で、ボロボロの進が出来上がった。

「む、無効化って……ズルい……」

その気になれば、解放状態も無効化出来るんじゃないのか？　と思いつつ、進は出来る限り体力の回復に挑む。

「……まずは体力作りからか。　進、軽く十キロ走ってこい」

「はぁ！？　十キロぉ！？」

龍の突然な提案に、疲れも忘れて声を上げる。

「俺にフルマラソンでもさせる気か！！」

「フルマラソンをするなら二、三十キロは走れ。　お前の体力は一般人程度しかないからな、長期戦になった時に不利になる」

「そんな事言ったって……！」

龍の言う事も尤もだが、いくらなんでも今じゃなくても良いんじゃないかと思う。

只でさえ、龍にボコボコにされて動くのも一苦労だと言うのに、更

に十キロ走れなど、横暴過ぎる。

「せ、せめてもう少し休ませて……」

「つべこべ言わずに行って来い！　それとも、ずっと俺と戦ってる方が良いか？」

「今すぐ行ってくる！！」

直ぐ様進は走り出す。

凶器を持った異常に強い長身の男にこうして脅されれば、十人が十人従うだろう。

因みに、十人の内一人は進である。

（絶対にいつか一泡吹かせてやる！！）

心の中では固く決意するものの、それを実行に移すのはいつになる事やら。

「文句があるなら、俺に傷一つでも付けられる様になれ。　地味男」

進が何を考えているか、大体わかった龍は、進の背中に向かってそう言い捨てた。

近くにある岩に腰を降ろす。

「嫌な予感がするな……」

怪訝な表情をしながらも、龍は進が帰って来るのを待った。

咲魔は今の光景に呆然としていた。

「どれだけ時間経った？」

「……一時間とちょっと」

たった三日で、三十分しかもたなかった気の維持が、一時間に伸びたのだ。

息一つ乱さずに。

（何て言うんだっけこう言う奴の事……ああそうだ、天才だ）

気とは人間の生命エネルギーの様なもの。

それを解放し続けられる時間を伸ばすのは、容易い事ではない。

それを、彪牙は短時間でしてしまった。

咲魔には、天才と言う言葉以外に、今の彪牙の様な人間を表す言葉を知らなかった。

「呑まねぇとやってられないぜ」

何処からか取り出した瓢箪の中の酒を呑みながら咲魔は、八百年も生きてるのに数十年しか生きていない人間に抜かれそうだなぁと、悔しがりながらも、弟子の成長に嬉しく思っていた。

「おいこら。　弟子が頑張って修行してんのに……酒呑んでんじゃねぇ……」

気を纏い始めて一時間以上は経っている。

流石に少し息が切れてきた様だ。

「悪い悪い。　これが終わったらお前にも分けてやるから」
「絶対だからな」

まだまだ余裕そうな彪牙。
この調子なら死神と戦いが始まるまでには、彪牙の修行が間に合いそうだと思った。
だが、戦いと言うのは、突然始まるものだ。

「！　おい彪牙……修行は中止だ。　構えろ」
「あ？」

何かの気配に気付いた咲魔は身構え、彪牙も気を解く。

「……来るぞ！」

すると、草むらから、男達が各々武器を持ち、襲い掛かってきた。
素人丸出しの攻撃は、躱す事は容易く、二人は難なく躱していく。
そんな中、ある事に気付く。

「！　こいつ等っ！」
「ただの人間！？」

そう、二人を襲っているのは、力も持たない、ただの人間だった。
妖怪や死神が襲って来るなら、まだ理由はわかるが、何の力も持たない人間に襲われる覚えなど、二人には無い。

「また、悪魔にでも操られてんじゃねぇだろうな！！」

以前、悪魔と戦った時、バロールは人間を操り、自分達を殺しに掛

かった。
その時と同じ現象かと、彪牙は考えた。

「いや、この人間共には自分の意志を感じる！　操られていない！」

長年生きている咲魔には感じ取れた。
この人間達が操られている訳ではなく、自分自身の意志で自分達を襲っているのだと。

「じゃあ何でだよ！　生憎、こいつ等の顔は見た事もねぇぞ！！」
「ああ、俺もだ！！」

二人は最低限の力で、無駄な怪我をさせず、人間達を気絶させていく。
力の差は歴然だが、数が多すぎる。
加えて、彪牙は修行の後なので、体力は万全ではない。

（このままじゃあジリ貧だ。　こいつ等の中のリーダーを捜して倒すしかない）

咲魔は戦いながら、妖気を広範囲に張り巡らしていく。
そして、この集団から少し離れた場所に、人間とは違う気配を感じ取った。

「見付けたぁ！！」

ダンッ！　と一気に駆け出し、男達の合間を駆け抜ける。
ただの人間に反応できる筈もなく、ただただ見送るだけであった。

「おぉぉぉらぁ！！」

気配の出所は、木の影から出ていた。
咲魔は妖気を込めた拳を、木に叩き込む。
大きく音をたて、木が倒れると、そこには栗色の髪をした、無表情の青年が立っていた。

「流石、良く気付きましたね」
「お前、死神だな」

礼儀正しく話す青年に対し、咲魔は鋭い目付きで睨み付ける。

「ええ、貴方の言う通り僕は死神です。終(しゅう)と言います」

そう言うと、終は礼儀正しくお辞儀をする。
不気味な程、無表情のままで。

「自己紹介して貰ったところ悪いが、さっさと退場しろ！」

見た目は人間でも、目の前の青年は間違いなく死神。

（先手を取られる前に、先に先手を取る！）

大きく拳を振り上げる咲魔を見て、終と名乗った青年は不気味な笑みを浮かべた。

「！」
「咲魔！？」

拳を振り上げ、今にも殴り掛かろうとしていた咲魔は、気付けば体中血塗れで、地面に倒れていた。

その光景に彪牙は声を上げ、咲魔を助けに行こうとするが、人間達に囲まれて助けに行く事が出来ない。

「っ、何が……」

攻撃の正体がわからず、咲魔は困惑する。

「他人を殺す事を忘れた貴方ごときに、本気を出す必要もありませんでしたね」

「くっ……」

終の見下す様な視線を見て、咲魔は悔しそうに表情を歪める。

「鬼神とまで呼ばれた貴方がこの様とは、あの方も嘆かわしいでしょうね」

「……あの方……まさか……“キョウ”の事かっ……！」

あの方、その人物の招待がわかった瞬間、終に首を掴まれ、持ち上げられる。

「！」

終が片手で軽々と咲魔の体を持ち上げた事に、彪牙は驚愕する。

終の体格は、彪牙と比べて一回りも小さい。

そんな細腕で、二メートルもある咲魔の体を難なく持ち上げたのだ。

「あの方も貴方と会いたがっています。　なのでそろそろ連れていかせて頂きますよ。　貴方の魂を」

もう片方の終の手が薄く光った。

不気味な程に。

第５８話　忍び寄る死の神（後書き）

闇夜
「うわぁ……史哉さんが嫌なキャラに……」
優花
「貴方が書いたんでしょう？」
闇夜
「あ、活動報告でヤンデレになった天道優花さん！」
優花
「それも貴方のせいでしょう！」
亮
「優花、大丈夫！　そんな優花もお兄ちゃんは愛してるよ！」
優花
「亮さんは黙ってて下さい！」
亮
「ガーン！」
闇夜
「口で言ったよ。　えっと今回の長編、展開が早くなると思いますが、宜しくお願いします！　後、史哉さんもこれからカッコイイキャラにしていきますので、そちらも宜しくお願いします。　では優花さん、次回予告を」
優花
「むぅ、わかりました……」

次回
第５９話　揺らぐ覚悟
優花
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第59話　揺らぐ覚悟

「何だったんだろさっきの音？」

優也の修行を見学する為、美優は鼻歌を歌いながら、軽快に妖怪の山を登っていると突然、轟音が鳴り響き、驚きで鼻歌を止めてしまった。

そして今に至る。

どうやら音の発生源は近くらしく、美優はその場所へ足を向ける。

「優也かな？」

轟音の正体は、優也が修行している為に起きた音かと思い、歩みが速くなる。

「咲魔あああああああああああ！！！！！」

「！！」

山全体に響き渡りそうな声が聞こえてくる。

その声が彪牙のものだとわかると、美優は走り出していた。

言い知れぬ不安を、何かを失ってしまうかも知れない恐怖を感じていたからだ。

「彪牙！！」

そして、彪牙達の元へ辿り着いた美優の目に写ったものは、無表情の青年に、胸を貫かれている咲魔だった。

「“ソウルアウト”」

貫いていた腕を引き抜き、持ち上げて咲魔の体を手放す。
咲魔の胸を貫いていた筈の終の手は、赤く染まってはおらず、代わりに薄白く光る何かが握られていた。

「これで漸く旧友との再会が果たせそうですね。　皆さん、行きますよ」
「待ちやがれてめぇ！！」

彪牙が眼中に無いのか、全く反応を示さない。
その態度に怒りを感じた彪牙は、周りに居る人間達など関係無く、終に突っ込んでいこうとする。
だが、その前に終と人間達を黒い光が包み込む。
光が包み込んでいる時間は一瞬だったが、光が消えた瞬間にはもう、終どころか、あれだけ居た人間達も一人残らず消えていた。

「っ、何処に……！　そうだ、咲魔！！」

消えた相手の事を探すのは諦め、地に伏している咲魔へと駆け寄る。
慌てて咲魔に駆け寄る彪牙を、美優は呆然と見ていた。

「咲魔！　しっかりしろおい！　咲魔！！」

何度も何度も呼び掛けてみるが、返事どころか反応すら無い。
目は虚ろで息もしていなく、まるで死んでいる様だった。
まさかと思い、彪牙は咲魔の脈を確かめてみる。

「嘘だろ……」

そのまかさだった。

脈は波打ってはいない。
つまり、咲魔は

「死んだの……？」
「！　み、美優……！」

ここに来て、彪牙は初めて美優の存在に気付く。
おぼつかない足取りで、美優はゆっくりと二人へ歩み寄る。

「死ぬって……何なの……？　もう、会えないの……？」

咲魔との面識は殆ど無いに等しかったが、美優は覚えている。
鬼なのに人間らしく笑い、人間らしく優しくしてくれた人間らしい鬼。
そんな彼と、二度と会う事も、話す事も出来ない。
その事を理解した美優はフッと力が抜けたかの様に、膝から崩れ落ちる。

「美優！？」
「いや……いや……」

震え出した自分の体を両手で抱き締める。

「いやあああああああああああ！！！！」

初めて知る死と言う恐怖が、少女の心を支配した。
そして、この恐怖が心を支配したのは、彼女だけではなかった。

第５９話　揺らぐ覚悟

「結果から言って、咲魔の肉体は死んでいません」
「どういう意味だよ？」

彩夏の言葉に、浩輝は疑問符を浮かべる。

「そのままの意味ですよ。　心臓が止まって血流も止まっていますが、細胞や組織が死んでいないんです」
「……仮死状態みたいなものか」
「らしいですね」

彩夏の説明に、史哉はすぐに理解し、それに亮が頷いた。

「“ソウルアウト”って言う技は、上級の死神だけが使える技で、魂を無理矢理肉体から引き剥がす技です」
「えげつねぇな」

あの後、何とか美優を落ち着かせた彪牙は、咲魔と美優を連れ、彩夏の元へ向かった。
そして、咲魔の容体を確認した彩夏が、史哉達を呼んだのだ。

「実際にこの技を使うには、相手の精神が抵抗出来ない程痛め付けるか、その抵抗を振り払って魂を引きずり出すか、このどちらかの条件を満たさなければ使えません。　彼がそこまで精神を傷つけられたとは思えない」

終と咲魔の戦いは彪牙から訊いていた。
確かに咲魔は終に手も足も出なかったが、話を訊く限りでは、正体不明の攻撃を受けたくらいで、精神が傷付けられとは思えない。

「何か理由があったって言う事か」
「その可能性は高いな。　咲魔とキョウならな」

理由、史哉はそれを知っているらしいが、何も話すつもりは無さそうだ。

「歳は取りたくないもんだな」
「いきなり何ですか？」
「つーかお前、“歳取らない”だろ」

突然、変な事を口走る史哉に対し、浩輝が興味深い事を口走るが、その事は皆も知っている事なのか、誰も触れようとしなかった。

「それにお前だってじじいになってたかも知れないんだぞ」
「ふっ、それは無いな。　何たって俺は」

史哉は何処かカッコつけながら言った。

「四十までに腹上死するのが夢だったからな」
「遠慮はいらん。　今すぐ死ね」

数少ない友達にまで呆れられている史哉だった。

「まぁまぁ、落ち着いて。　今はそんな事言っている場合じゃありませんよ」

そう言って、彩夏が浩輝を宥める。

「っ、そ、そんな事言ったってな……／／／」

何故か顔が赤くなり、鼓動も速くなっていたが、浩輝はそんな事にも気付けない程緊張していた。

（良く見てみればこ、こいつ……メチャクチャ俺の好みのタイプじゃねぇか！！）

「「「……惚れたな」」」

浩輝の態度から、完全に彩夏に惚れた事に、亮達は気付いた。

「緊張感の欠片も無いな」

「貴方が言いますか」

一番緊張感が無い史哉に対し、亮は苦笑いする。

「ところで史哉さん。　今度優也達と話をさせてくれませんか？」

「何のつもりだ？」

怪訝そうな表情で、亮を睨む。

「兄が弟と妹の心配しちゃ駄目ですか？」

「……好きにしろ」

「ありがとうございます」

軽く礼を言うと、亮は部屋から出ていく。

「あれは……」

廊下を歩いていると、ベンチに座っている彪牙と美優を見付けた。

立ち止まり、少し様子を見ていると、美優が発した一言が耳に届いた。

「怖い……戦うのが……怖いよ……！」

戸惑いつつも、彪牙は美優を落ち着かせ様とするが、涙も体の震えも止まる事はなかった。

戦う事も無く、誰かが死ぬなんて事を経験した事も無い少女には、酷な現実だった。

「……」

亮は二人に声をかける事もなく、無言でこの場を後にした。

思ったように体が動かない。

そんな経験は、進にとっては初めての経験だった。

「くそっ！」

「……」

がむしゃらに蹴りを繰り出すが、龍には容易く躱されてしまう。
躱すと同時に、龍は進の足を引っ掛けてこかすと、大剣を大きく振り上げる。

「！！」

振り上げられた大剣を目にした瞬間、進は躱す事も忘れ、目を瞑ってしまった。

「もうやめだ」
「え……？」

恐る恐る目を開けると、龍は大剣を自分に向けて振り下ろす事なく、ブレスレットに戻していた。

「咲魔の事を教えたのは失敗だったな。　お前は戦う事に恐怖している」
「そ、そんな事！」
「無いって言い切れるか？」
「っ……！」

言葉がつまる。
今の戦い方は明らかにおかしかった。
端から見れば、傷付く事を恐れている戦い方だった。

「足手まといになるくらいなら、戦わない方が良い。　邪魔なだけだ」
「っ……！」

冷たく言い放つと、龍はその場から立ち去っていく。
進は追い掛けるどころか、言い返す事も出来ずに、ただ立ち尽くすしか出来なかった。

「優しいね。ああ言って進君を戦いから遠ざけるなんて」
「……」

数分歩いた場所で、何処かキツイ口調で話し掛けて来る人物に出逢う。

「けどどうする？　只でさえ戦力が乏しいって言うのに」
「その分、俺が戦えば良い」
「へぇ、君も戦うんだ」
「文句があるならいつでも訊いてやる」

そう言い残し、龍は去っていった。

「君も知ってる癖に。　進君が弱い人間じゃない事くらい」

そして、カイもその場から立ち去った。

翌日。
優也と優花はいつも修行している場所で史哉を待っていた。
その二人の表情は何処か暗い。

それもその筈。
咲魔の事を、史哉から訊かされていたからだ。
近くに居たのに気付かないで、咲魔を助ける事が出来なかったと、自分を攻めていた。

「何お通夜みたいな顔してる？」
「史哉さん、と亮も……」

そんな二人の元に、史哉と、何故か亮がやって来た。

「何で亮さんまで？」

優也の修行なら史哉一人で事足りる筈。
まさか今から二対一の地獄の特訓を始めるつもりではないのかと、二人はそう考えた。

「こいつがお前等に話があるらしい」
「そう言う事」

どうやら地獄の特訓ではないらしく、二人はホッと溜め息を吐く。

「それで、話って何だ？」
「あぁ、それだけど……」

ちょうどその時、誰かから電話が掛かってきた様で、少し待っててと言うと、亮は電話に出た。

「もしもし。　どうしたんですか、浩輝さん？」

どうやら電話の相手は浩輝らしい。

「！　そうですか」

話の内容はわからないが、亮の表情が少し強張った事から、また何か起こった様だ。

「その事はこちらに任せて下さい。　はい、失礼します」
「どうかしたんですか？」

何かあったとわかる表情をしている亮に、優花が訊ねる。

「グランツって悪魔が居ただろ。　多分そいつ、正を殺しに向かった」
「「！！」」

衝撃的な情報を訊き、優也と優花の表情は驚愕に染まる。

「理由は知らないけど、とにかく止めに行ってくる」「ま、待て！　俺も行く！」

正が居る場所を知っている亮は、今すぐに向かおうとすると、優也も一緒に着いていくと言う。
少しの間、亮は優也の目をまっすぐ見つめる。

「ちゃんと着いてこい」
「ああ！」

優花、そして史哉をその場に残し、二人は正の元へと向かった。

「四百八十六、四百八十七、四百八十八！」

その頃正はと言うと、話題の中心にいると言う事も知らず、ただただスクワットをしていた。

「四百九十九、五百！！　しゃあ！　亮！　どっからでも掛かってこい！」

大声で亮を呼ぶが、誰も現れない。

「……ああもう！　何処行ったんだよあの野郎！」

いつもの時間にいつも場所へ向かったが、そこに亮は居なかった。仕方なく、筋トレでもして時間を潰そうと思い、筋トレを始めてかれこれ一時間、亮は来なかった。

「まさか、俺の成長スピードにビビって逃げたのか？」

今まで散々ボコボコにされてた癖に、そんな事がある筈無い。馬鹿なのだろうかこのヘタレ。

「おいこら。　誰が馬鹿でヘタレだ。　表出ろや」

ここは既に表である。

正真正銘の馬鹿だ。

「人の揚げ足取ってんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」
「楽しそうだな」
いつから居たのだろうか、叫んでいる正に、グランツが話し掛けた。
「……誰だ？」
グランツとの面識が無い正には、一体誰なのかわからなかった。
「まぁそりゃあ知らねぇに決まってるか。　だがなぁ……あいつの事まで知らねぇとは言わせねぇぞ」
「は？」
何の事だかわからない表情をしている正に、グランツの怒りが高まる。
いや、高まると言うよりも、限界を超えた。
「そうか、知らねぇか。　てめぇにとっちゃその程度の事ってかぁ！？　イカレ野郎！！」
「！！」
グランツの怒りと呼応するかの様に、禍々しい魔力が放出される。
形相と言い雰囲気と言い、今のグランツは、悪魔意外の何者でもなかった。
「お前を殺す！！」
そう宣言したその悪魔は、魔力を体に纏いながら走り出す。
纏った魔力は、段々姿を変えていき、黒い軍服の様な服になっていく。

「“血塗れの兵士（ブラッドソルジャー）”！！」

最後にマントを羽織り、悪魔の戦闘装束が完成した。

「あああああああああああああああ！！！！！」

「なっ！？」

軍服を纏うと、グランツのスピードが一気に上がり、一瞬で正の目の前へ移動する。

そして、拳を全力で正に叩き込んだ。

（マズイ！！）

咄嗟に後ろに飛び、少し遅れて両腕でガードする。

グランツの拳がそのガードしている部分に当たった瞬間、正は簡単に吹き飛ばされてしまった。

「かはっ！！」

一瞬息が出来なくなる程強く、木に背中を叩き付けられ、正は地面を転がる。

「立てよ。　こんなもんで終わりじゃねぇぞ！！」

「っ……」

一つだけ、正には心当たりがある。

目の前の男が自分を襲う理由に。

もしそれが理由だとすれば、自分はこの罰を甘んじて受け入れるべきではないのか。

そう思った。
その思いとは裏腹に、立ち上がり、刀を抜いていた。

第59話　揺らぐ覚悟（後書き）

教えて！　雷道先生！！

仁
「と言う訳で、活動報告にも書いた通り、質問コーナー始めるぞ」
竜也
「ちょっと待てぇ！！　そこは二神先生だろ！？」
闇夜
「あんたじゃ在り来たり」
仁
「と言う訳だ。　悪いな」
竜也
「マジでか……」
仁
「初めの質問だ。　竜王の白翼さんからだ。『優也の好きなタイプは？という質問を美優と優花の前でお願いします』だそうだ」
美優
「ど、どんな子がタイプなの！？」
優花
「はっきり答えてね？」
優也
「えっと、強いて言うなら……元気の良い子かな……／／／」
美優
（やった！　元気なら誰にも負けない！！）
優花
（それじゃあ、私は駄目かな……）
優也
「でも、好きなタイプなだけで、実際に好きになるのはどんな奴か

はわからないぞ」
優花
（！　良かった……まだチャンスはある！）
仁
「あぁ、もう一つある。　『貧乳のみなさんは美優の胸をどう思っていますか？』」
貧乳の皆さん
「羨ましい（悔しい）（妬ましい）」
美優
「最後の何！？」
仁
「竜王の白翼さん質問ありがとう。　次は浅葱さんから、『女性キャラのスリーサ（ゴスッ！）…（沈黙）』何があったんだろうな。
と言う訳で答えて……」
女性キャラ
「答えられるかぁ！！」
仁
「あ、すみません。　後もう一つ、『優也は最終的にどちらと（ドッカーン！！）…消滅』さっきから何があったんだ？」
闇夜
「予測してみると、優也は誰とくっつくかだろうね。　今のところはまだ決めてません！」
仁
「らしい。　浅葱さん、質問ありがとう。　次は紅葉ｏｒ紅蓮さんの小説、【神の道化と橙色】のアレンから『優也君の「一度でいいから叶えたい！」って願望・野望ってありますか？』　神道にも来てるぞ」
美優
「え、じゃ、じゃあ私は、お腹一杯料理を食べる！」
優也

「いつも食ってるだろ。　俺は……皆が死ななかったら、それで充分だ……」
美優
「優也……」
優也
「ああもう！　今の無し／／／！！」
仁
「もう遅い。　紅葉ｏｒ紅蓮さん質問ありがとう」
闇夜
「皆さん質問ありがとうございました。　質問はご感想にて受け付けております」
仁
「今回は初回だったから質問が二つ以上あったが、これからは一人一回につき質問は一つにしてくれ」
闇夜
「これからも【黒と白の物語】を宜しくお願いします！」

次回
第６０話　宣戦布告
優也
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第６０話　宣戦布告

洋風な広い部屋に、白に少し黒いメッシュが入った髪に、真っ黒な和服を着た男が椅子に座っており、男の前には、金髪のロングヘアーの、黒いドレスを着た女性と、終が居た。

「そうか。　ご苦労だったな。　下がって良いぜ」
「失礼します」

終が部屋から出ていくと、男は椅子から立ち上がる。

「さて、そろそろ挨拶に行くとするか。“ルナ”、あんたはどうする？」
「私も行くわ。　けど、会いたい子が居るから別行動よ」

そりゃ残念。
そう言って男は煙管を取り出すと、終と入れ換わる様に入ってきた短髪の男へ視線を向ける。

「あんたはどうする？」

会いたい奴等が、居るんじゃないのか？
煙を吐き出し、ニヤリと笑って言った。

第６０話　宣戦布告

轟音を響かせ、砂ぼこりが勢いよく舞い上がる。
その砂ぼこりの中で、正は目を瞑り、グランツの位置を捉える事だけに集中する。

（そこだ！！）

向かって右側。
そこへ右の刀を振るう。
刀が砂ぼこりを切り裂くが、グランツは体勢を低くし、斬撃を躱す。

「くっ……！」
「遅ぇ！！」

正が回避するよりも速く、グランツが正の腹部へ肘鉄を入れる。

「まだだ！」

体勢が崩れた瞬間を狙い、もう一度腹部へ、強烈な突きを打ち込む。

「がはっ！」

その一撃に、正の体は大きく後ろへ吹き飛ぶ。

「逃がさねぇ！！」

吹き飛ぶと同時に、正の顔面を掴み、後頭部を地面に叩き付けた。
地面が砕ける程の衝撃に、頭からは止めどなく血が溢れ出す。
顔面を掴んだまま、正を足が地面に届かない程の高さまで持ち上げる。

「どうした？　もっと殺す気で来いよ！　ガドルを殺した時みたいによぉ！！」
「……」

やはりあの時の事だったのかと、理解する。
魔界へ向かい、初めに戦った悪魔は確か、自身を“ガドル”と名乗っていた。
自分はガドルと戦い、狂気に呑まれ、ガドルを殺してしまった。
情け容赦も無く。

（こいつに殺される事が、俺への罰なら……それで良いかもな）

この男にとってガドルは、大切な仲間か、親友だったのだろう。

（……親友？）

殺されたら復讐したくなる程、親しい相手が、自分にも居ただろうか？
血が流れ、ぼうっとする頭で考える。
そう言えば居た。
必死に考える必要も無い程簡単に、その人物は見付かった。
機械みたいに恐ろしく表情を変えない天然で天才な金髪少年と、女の子みたいな顔した綺麗な紅い眼の優しい男の子。

（約束したのにな……誰も殺さないって……）

その約束は、守る事が出来なかった。

その為に、自分は殺されかけている。

（死んだら、あいつ泣くかな……？　泣くよな……絶対……

…それは、嫌だな……）

自分が死ねば彼は涙を流し、そして“あの約束”を守る事が出来なくなる。

（そうだよ……。　どんなに醜くても、生きて守らなくちゃならない約束があるんだ。　守らねぇと、俺達は俺達じゃ居られなくなる）

まるで死んでいる様だった瞳に、炎が灯る。

（仁と約束したんだ、“優也を守る”って！）

何を迷う必要がある。

汚れ役は自分だと、何年も前に覚悟した筈だ。

（！　何だ？　雰囲気が、変わった？）

さっきまでとは、まるで別人の雰囲気を放つ正に、グランツは思わず身構えた。

その瞬間、正を中心に強風が吹き荒れる。

「っ！」

咄嗟に後ろへ飛ぶが、手を放すのが一瞬遅く、手を傷付けられてしまう。
吹き荒れる風の中、力強い眼をした正がグランツを睨み付ける。

「あんたには悪いが、俺は死ぬ訳にはいかねぇんだよ」

地面にひびが入りそうな程力強く地を蹴り、嵐の様な風を起こしながらグランツへと走り出す。

「調子に乗ってんじゃねぇ！！」

対抗する様に、嵐の様な荒々しい黒い魔力を起こし、グランツも走り出す。

「「おおおおおおおおおおお！！！！」」

触れるだけ何もかもを切り裂く嵐と、何もかもを呑み込んでしまいそうな嵐がぶつかり合うその瞬間、二人の間に無数の刃が突き刺さった。

「「！？」」

二人は動きを止め、辺りを見渡す。
今の攻撃はどちらのものでもない。
だとしたら、この場に第三者が居る筈だ。

「……そこか！！」

正の背後にあった草むらから、三本のナイフが正目掛けて飛んでく

る。
いち早く第三者の居場所に気付いた正は、ナイフを全て叩き落とす。
叩き落とし、敵を迎撃する暇も無く、鎖分銅が両方の刀に巻き付き、正の動きを封じる。

「ちっ……」

思い通りに動かせない刀を地面に突き刺すと、鎖を引っ張る。
鎖の先には、この攻撃を仕掛けた敵が居る筈。
だが、鎖はビクともせず、これ以上引っ張る事が出来なかった。
すると、鎖が伸びている場所とは違う場所から、フードで顔を隠し、優也よりも長い黒いロングコートを着た男が、槍を持って現れた。

「成る程。　こっちは囮か！」

男は槍の尖端で正の額を狙う。

「甘い！！」

透かさず鎖を放し、槍を躱して男に接近する。

（後一歩！！）

後一歩踏み込めば、男に直接風を打ち込む事が出来る。
そして、最後の一歩を踏み出し、手を振り上げた瞬間、男は槍を手放して飛び上がった。

「え……」

まるで、自分が何をしようとしているか、わかっている様な今の動

きに、正は呆然とする。

「おいおいおい！！　何だそりゃ！？」

宙に居る男が両手に持っている物を見た瞬間、正は驚愕する。
何処から取り出したのかわからないが、男は機関銃を手にしていた。
しかも二丁も。
男は躊躇する事なく、引き金を引いた。
無数に放たれた銃弾の雨は、正へと降り注ぎ、大きく砂ぼこりを上げた。
大きく上がった砂ぼこりで、正の安否が確認出来ない。
グランツには、正の安否よりも気になる事があった。
突然現れた、様々な武器を扱う男だ。

（ナイフ、鎖分銅、槍、機関銃、あいつと同じ……まさか……！）

何処から出すかわからない武器の数々、戦い方、何度も見てきた親友の能力と戦い方と同じだった。

「おいお前、フードを取れ……」
「……」
「取れよ！！」

中々取ろうとしない男に、グランツは声を荒らげる。
観念したのか、男はフードを外した。

「やっぱり、お前だったのか……！」

例え死んでいようと、何百年も一緒に居た相手の顔を忘れる筈がな

い。

「ガドル！！」

憎き相手との戦いで命を落とした、親友の顔を。

その頃流香は、机を挟んで紗理奈と優雅にティータイムをしていた。

「貴女が淹れる紅茶も中々ね」

「それはどうも。　ところで、いつ修行を再開するつもりですか？」

「休憩するのもちゃんとした修行よ」

「はぁ……」

とは言うものの、休憩を始めてかなり経っている。

いつまで休憩するつもりなのだろうと思いつつ、紅茶を口にする。

「今はゆっくりお話でもしましょう」

紗理奈に従う以外、短時間で強くなる方法など思い付かない流香は、取りあえず従う事にした。

「そのお話、私も参加させて頂けないかしら？」

「「！！」」

この場にある筈のない第三者の声がしたかと思えば、二人の間に、

見知らぬ金髪の黒いドレスを着た女性が座っていた。

「！　いつの間に……！」

全く気配を感じなかった事に、紗理奈は驚いていたが、流香は別の事で驚いていた。

「元気にしてるみたいで安心したわ。　ルカ」

「お姉……様？」

八年も前に生き別れになっていた流香の姉、ルナ・ブランシャール。八年もの時を経て、遂に流香とルナは再会を果たした。

「お姉様って……流香、貴女……」

驚きの表情をしたまま、紗理奈は流香に言った。

「お嬢様育ちだったの？」

「そこが気になるところなのかしら？」

若干ずれてる紗理奈に、思わずルナがツッコム。

「そうそうルカ、貴女に話があって来たのよ」

「……何です？」

八年ぶりの再会に、思わず泣きそうになるが、グッと我慢する。

「死神と手を組まない？　私と一緒に」

親友と再会出来た事は嬉しい限りだが、同時に疑問も生まれる。
何故生きているかだ。

「お前、何で生きてるんだ……？」

ガドルは死んだ、死体もこの目で確認した。
だからこそグランツは困惑した。
目の前で当たり前の様に立っているガドルに。

「今の俺は生きているとは程遠い。　今の俺は魂だけの存在だからな」
「魂だと……？」
「そう、魂だけの存在。　幽霊の様なものだ」

悪魔に自身の魂を実体化させる方法等無い。
それを行える種族と言えば、腕の立つ術師か、一つの種族しか有り得ない。

「死神か！」
「そうだ」

そう、死神ならば、魂を実体化させる術も身に付けている。
だが、グランツはそれが気に食わなかった。
死神と手を組んだ事が。

「ガドル、お前何で死神何かと！！」

「なら訊くが、何でお前は人間と共に居る？」
「そ、それは……」
「バロール様の悲願は人間どもを駆逐する事だ。その悲願を叶える為なら、俺は死神とでも手を組む！」

グランツは何も言い返せない。
ガドルの言っている事は、正しかったからだ。

「グランツ、お前も来ないか？　俺と一緒に」
「……」

使命とプライド。
二つの間で揺れるグランツに、ガドルは手を差し伸べる。

「その必要は無い」
「「！！」」

声がした瞬間、ガドルはその場から飛び退く。
すると二人の間に、正の襟首を掴んだ亮が現れた。

「正！」
「優也！？」

遅れて優也が現れ、正は驚きの声を上げる。

「遅いよ優也」
「お前が速すぎるんだろ！」

優也が文句を言うのも仕方ない。
亮は『瞬神の死神』と恐れられる程の速さを有している。

いくら優也でも追い付けない程だ。

「お前等、何で……？」

「少し静かに。　今は彼に用があるから」

正から手を放すと、亮はガドル へと二三歩近付く。

「優也、正を頼むよ」

「ああ……」

「……」

正は優也を見る。

音など聞かずとも、優也の表情で良くわかる。

自分を心配してくれていたのだと。

（あ～あ、やっちまったな……）

次からは心配させない様にしよう。

そう心に誓った。

「言っておくが、貴様に話す事は無いぞ」

「そう言うと思ってたよ。　けど見当違い」

亮の纏う雰囲気が変わる。

「俺の後輩を可愛がってくれたみたいだから」

人間のものから、死神のものへ。

「お礼しないとな」

ガドルは冷や汗をかく。
亮の威圧感に気圧されているのだ。

「そこまでだ」

また一人、黒いメッシュが入った白髪の、真っ黒な和服を着た男が現れる。

「キョウ！！」
「！　奴が……」

ガドルが言ったその男の名前を訊き、亮は表情を険しくする。

「今日は只の挨拶だって言っただろ？　相手が相手だからって勝手に暴れるな」
「わ、悪い……」

ガドルは素直に非を認める。
それに納得したのか、キョウは優也達に向き直る。

「ん？」

優也を見た瞬間、キョウは不思議そうな顔をする。

「おい、紅眼の娘！」
「あ！？　誰が娘だ誰が！　俺は男だ！！」
「お、おお……悪かった……」

鬼の様な悪魔の様な、とにかく恐ろしい表情をしている優也に、キ

ョウは律儀に謝った。

「じゃあ改めて訊くが、あんた名前は？」

「……火渡優也だ」

「！　そうか、お前が、アハハハハハハハハ！！！！」

発狂したかの様に笑い出すキョウに、優也は寒気を感じた。

「そうかそうか！　火渡って事はあいつ等の息子で“闇奈（あんな）”の子孫、いや！　子孫と言うにはそっくりそのままだな！　外形も魂も！　成る程生まれ変わりか！！　それなら納得がいく！　三百年経っても面白いなあんたは！！」

「っ……！」

いよいよ寒気が戦慄に変わる。

一瞬でも気を抜けば崩れ落ちてしまいそうな程に。

正も同じなのか、冷や汗をかいていた。

「つう事は、そこの白髪が“刀次（とうじ）”か！　なら“凛（りん）”も居るよな！！　だったら三百年ぶりに三人一緒に俺に会いに来てくれよ！！　なぁ、あ……」

言い終わらぬうちに、眼にも止まらぬ速さで亮が斬りかかった。

誰も、亮が斬りかかった事も、動いたと言う事も、鎌を出した事さえ気付かなかったが、キョウは難なく躱してみせた。

「随分と無粋だな、瞬神。　話をしてる時は大人しくしておくって習わなかったか？」

「自分が言いたい事を好き勝手言うのは話をするとは言わないんだよ。　王様」

亮とキョウは、互いに睨み合う。
誰一人、緊張を解けない程に。

「ま、良いか。　今日は只の挨拶だしな」

まるで降参した様に、キョウは両手を上げる。

「……さっきから挨拶挨拶って、何の事だ？」

自分達が普段交わす挨拶だったら良いが、この相手がそんな事の為にここまで来る筈がない。
何かある筈と、亮は警戒を解かない。

「そんなに警戒するなよ。　あんた等のとこの神様、今はカイって名乗ってるんだったな。そいつと話をしようとしただけだぜ？　嘘じゃねぇよ。　だが、面白い事を教えてくれたから良いわ。　あんたのお陰でな」

「っ……」

そう言うと、キョウは優也に視線を向ける。
殺気を感じなかったものの、寒気しか感じなかった優也は、思わず身構えていた。

「礼と言っちゃぁなんだが、一つ良い事を教えてやる」

「良い事？」

そう、良い事。
そう言って少し溜めると、キョウは口を開いた。

「三日後、この世界を壊しに来るぜ」
「「「！！」」」

後三日。
まだ殆ど修行が完成していない優也達にとって、短すぎる時間だった。

「き、キョウ！　何故こいつ等に教えた！？」

キョウが言ったのは本当だった様で、ガドルは慌てる。

「良いだろ別に。　それとも、俺が負けるとでも？」
「い、いや……そう言う訳じゃない……」

あまりもの威圧に、ガドルは引き下がる。

「まぁそう言う訳だ。　三日しか無くて準備が出来ませんでした何て言い訳にもならねぇ事、言わないでくれよ」

まるで死の宣告の様な事を、キョウは言った。

第６０話　宣戦布告（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「第二回質問コーナー、始めるぞ。　初めの質問は、竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の美莉からだ。

『美優ちゃん。優也君とキスするなら場所はどこがいい？』」

美優

「え、えっと／／／　やっぱり、美莉さんと同じで観覧車とか夜景が見える所かな／／／？　でも優也が相手なら何処でも良いかも／／／！」

仁

「とても恥ずかしい答えをありがとう。　次の質問だ。　沢藤蜜柑さんの【大空あっと非現実的学園生活。】から綱吉が質問だ。『優也くんに質問です。美優ちゃんって一日どれくらい食べるの？』」

優也

「あいつは普段、人の五倍は食うぞ。　大体、一日十五食位。　それだけ食ってもまだ食べようとするけどな……」

仁

「主夫は大変だな。　次は、星空の侍さんの【幻想郷の星空】から将が質問だ。『進の家族って登場してないけど、一人暮らしなのか？』」

闇夜

「両親は居ますが、今の所は登場の予定はありません」

進

「おい！　そこは俺が答える所だろ！？」

仁

「次の質問だ」

進
「おぉぉぃ!?　無視ぃ!?」
仁
「デビルマンさんの【ハヤテのごとく!~超不幸な青年の物語~】から桂馬が質問だ。『進君が好きな料理はなんですか?』」
進
「え~、カレーとかかな?」
闇夜
「はい、普通の答えですいません」
進
「何か悪いの!?」
雅
（今度カレーの練習しよう!）
進
（!?　嫌な予感が……!）
闇夜
「皆さんご質問ありがとうございました!　次回も宜しくお願いします!」

次回
第６１話　決戦前日
亮
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第６１話　決戦前日

「よぉ、一人かい？」
「えぇ……」

先に人間界から帰っていたキョウは、後から帰って来たルナに話し掛ける。

「機嫌は良くなさそうだ」
「わかってるなら話し掛けないで」

少し睨み付けると、ルナは立ち去っていった。
一人残されたキョウは、煙管を取り出し、火をつけて吸い始める。

「お前は、楽しそうだな」

大男がキョウへ声を掛ける。
キョウは一層面白そうに笑う。

「そりゃそうさ。　咲魔」

第６１話　決戦前日

ルナは自分用に用意された部屋のベッドに俯せになり、溜め息を吐いていた。
ルカなら絶対に着いてくると思っていた。
だが、ルカが着いてくる事はなかった。

「八年会わなかったうちに、何かあったのかしら……？」

ルカが自分の後ろを付いて回っていた頃を、懐かしげに思い出した。

「お嬢様！！　ルナお嬢様ぁ！！」

すると、緑髪のロングヘアーの女性が、慌ただしく入ってきた。

「何かしら？　エルー」
「何かしら？　じゃありませんよ！！　何で私も連れて行ってくれなかったんですか！？」

子供の様に泣きじゃくる“エルザ・ランディ”、通称エルーに、ルナは困った表情になる。

「こらエルー、お嬢様を困らせるなであります」
「でもクリスさん……」

ルナに泣き付くエルーを、メイド服を着た女性、“クリスティーナ・シルバ”、通称クリスが叱りつける。

「そう叱ってやるな。　エルーの気持ちもわかる」
「ですよね!!　わかりますよね、ユキさん!!」
白い髪の一部を編んでいる女性、“葛城雪奈（かつらぎゆきな）”、通称ユキが、クリスを宥める。
「一人でルカに会いに行ったんだ。　エルーが羨ましがるのは当然だろう」
「私も会いたかったです!!」
そう言われると申し訳ない心持ちになる。
自分だけではなく、エルーもクリスもユキも、ルカと会いたかった筈なのだから。
「ごめんなさい。　今度は絶対に、皆で会いに行きましょう?」
ルナは優しい笑みで、全員に微笑むと、エルーは元気良く答え、クリスは小さくお辞儀し、ユキも小さく返事した。
（ルカ、私は私達の人生を狂わせた世界を壊すわ。　そして必ず貴女を連れ戻す）
八年前の様に、皆で暮らせる様に。
キョウが宣戦布告してから今日で二日。

優也は眼を瞑り、頭の中でイメージしたキョウと戦っていた。
キョウと対峙しただけでわかってしまった。
実力の差に。
恐らく、過去の自分に戻ったとしても、手も足も出ないだろう。
それでも、やれる事はやるしかなかった。

「精が出るね」
「亮……」

その優也の下へ、亮が現れる。

「何の用だ？」

優也は亮へ向き合う。

「いや、ちょっと話をな」

妖怪の山の上層にある、少し広めの山小屋。
黒烏や九妖、そして一部の妖怪がそこに集まっていた。

「咲魔様が殺されたのだ！　だったら弔い合戦をする他あるまい！」
「咲魔の旦那がやられちまう相手に、俺達が敵うと思っているのか！？」

咲魔が殺された事は、瞬く間に山へ広がった。
妖怪の中では、弔い合戦などとのたうち回る者も居るが、全員が賛成する事は無く、こうして論議の場を設けた。

「黒烏、今は貴方が纏めてくれなければ……黒烏？」

言い争っている妖怪達を纏めようとするが、黒烏は何かを考えていて、纏めようとはしなかった。

「お、おい黒烏……」
「九妖……咲魔ならどうすると思う？」

口を開いたかと思えば、弱気にも取れる言葉を発する。

「……咲魔様なら、皆を守ろうとするだろう」
「そうだな。　あいつはそう言う奴だ。　なら俺達のする事は一つだけだ」
「黒烏……」

たった一つ、自分達にも出来る事があった。
黒烏と九妖は、それを話す為、妖怪達へ向き合った。

「それじゃあ、情報の整理はこんなとこで良いかな？」
「ああ」

カイ、竜也、史哉の三人は、キョウに関する情報の整理をしていた。
キョウが世界を壊そうとするのは、腐った物は全て消すと言う理由から。
咲魔の魂を連れていったのは、過去にキョウと関係があったから。
キョウの部下はその考えに共感した者、何かしらの恨みがある者、そして、暴れたい者なら、力が有ろうが無かろうが、人間だろうと妖怪だろうと悪魔だろうと、死神だろうと、何でも引き入れると言った構成になっている。
これだけの事がわかったが、

「後、わかってないのは数だけだね」

勢力だけはわからなかった。
こちらは、戦える者を全員かき集めても二十人と少し。
それに比べ、敵は少なくとも百人近くは居る筈。
数だけで考えれば圧倒的に不利な数字だ。

「関係無いな。　敵が多くても少なくても、大半は雑魚だろう？」
「まぁそうだろうなぁ」

何処からそんか余裕が生まれるのだろうか？　二人は呑気に話した。

「俺はいざと言う時にしか戦わないがな」
「ああ……お前はそう言う奴だよ……」

一番強いくせに、無駄な体力を使いたがらないのだ、史哉は。

「史哉君が戦うか戦わないかは良いとして、今の問題は彼等か……
……」

今回は心に迷いがある者が多くいる。
その者達の心の心配をしながら、カイは自分の出来る事をしようと考えた。

キョウが宣戦布告したあの森。
木々に包まれたその森の中、痣だらけの正が仰向けに寝転がり、殆ど怪我も無い仁が、煙草を吸って木にもたれ掛かっていた。

「あ～くそっ！！　敗けた！！」
「これで五十勝四十九敗、俺が一歩リードだ」

二人は時折、武器無し能力有りの組み手をしている。
仁が言っているのは、今までの成績だ。

「ヘタレ」
「誰がヘタレだ！！」
「何があったかは訊かないが、一人で抱え込もうとするな」

組み手をしていて気付いたが、正は本調子ではなかった。
でなければ、殆ど怪我も無く正に勝つ事など、不可能に近い。

「何かあったなら俺達に話せ。　正直にな」
「ああ」

少し嬉しく思いながら、正は頷いた。

「仁、あの時の約束覚えてるよな？」
「当然だ」
そりゃそうか、と正は苦笑いしながら呟いた。
「絶対守ろう。　誰が相手だろうが」
「ああ、絶対に」
仁と正。
二人が誓った約束は、決して違える事は無い。

紗理奈の家に泊まらせて貰っていた流香は、一人椅子に座り、考え込んでいた。
姉と再会した時、あれ程嬉しく思い、あれ程一緒に居たいと思ったのに、何故か自分は姉からの誘いを断った。
その理由が自分にもわからず、何度も考えていた。
何度も考えて、何度も辿り着く答えはいつも同じ。
だからこそ迷う。
ルナを選ぶかその答えを選ぶかで。
「優也、仁、正……私は……どうしたら良いの……？」
小さい頃から一緒に居た三人に、答えを求めた。

月臣真司は困っていた。
自分と同じ月臣と名乗る見知らぬ男が、道場に訪問してきたからだ。

「えっと、龍さん、でした、よね？　何の用ッスか？」

流石に初対面と言う事と、大人びて感じる事もあり、馴れない敬語で話す。

「用って程の用じゃない。　ただ、お前に見せるものがあって来た」
「見せる、もの？」

明日にはもう戦いが始まると言うのに、何を見せるつもりなのだろうと、真司は首を傾げる。

「これからお前に、俺の技を見せる」

「温泉が沸いてたなんて思いませんでしたね、兄さん」
「そうだね……」

修行後の疲れをとる為、薫は温泉に入り、修二は落ち込みながら見

張りをしていた。
何故落ち込んでいるかと言うと、理由は単純、薫に混浴を断られたからである。

「覗いてないですね？」
「覗いてない……。　覗きたいけど……」
「何か言いましたか？」
「いいいいいいいいいい言ってない！！　何も言ってないぞ！！」
「なら良いですけど」

焦って速くなった鼓動を抑える様に、胸に手を置き、心の中で呟いた。
危なかったと。

「……兄さん。　明日の戦い……勝てますよね？」
「……」

途端に、弱々しい声色で薫が修二に尋ねた。

「例え勝てなくても……誰も死ななければそれで……」
「薫」

消え入りそうな声を、修二は遮る。

「俺達は勝つ。　そして誰も死なない。　お前はそれだけを信じろ」
「兄さん……」

薫は嬉しくなったが、その前に言いたい事があった。

「何でこっちを見てるんですか？」

「……あっ」

事故か故意かわからないが、修二は振り返って薫の入浴を目にしていた。

「兄さん……」

「ま、待て薫！！　わざとじゃない！　わざとじゃないぞ！！」

必死に弁明するが、時既に遅し。

「頭冷やしなさい」

「ちょ、かお……！！」

氷で出来た素敵なシスコンのオブジェが完成した。

「はい、お願いします」

そう言って、総司は電話を切る。

「誰？」

電話相手が誰か気になったのか、彩夏が尋ねる。

「彪牙ですよ」

「ああ、ツンツン頭の」

「そう、ツンツン頭の」

今頃何をしているのだろうか、あの少年は。
彩夏は彪牙の心配したが、今は彪牙よりも目の前の少年だ。

「立てる？　何なら手を貸そうか？」

そう言って、彩夏は手を差し出す。

「良いです。　一人で立てます」

強がる総司の体は血まみれで、立つ事など出来る様には見えない状態だった。

パタンと、彪牙は携帯を折り畳む。
電話相手は総司で、ギリギリまで修行をしたいと言ってきた。

「俺もそうなんだけどな」

自分も、ギリギリまで修行をして、強くなろうとしていた。

「ふぅ～。　……もう少し」

何も失わない為に。
彪牙の周りは、粉々に砕けた石が、多く落ちていた。

「隣良いか？」
「……好きにしろ」

一人、屋根の上に居たグランツの隣に、浩輝が腰掛ける。
初めは会話が無かったが、少しすると浩輝が口を開いた。

「お前は誰の為に戦ってる？」
「っ……」

数秒の沈黙の後、グランツは答えた。

「俺は……バロール様の為に……」
「じゃあそのバロール様とやらに、何をしてやろうとして戦ってる？」
「俺がバロール様に、してやろうとした事……？」

何か、大事な事を忘れている様な気がする。
彼の命令で人間共への復讐を手助けする事じゃなく、もっと違う事を手助けしようとしていた事を。

「それさえわかれば、もう悩む必要も無くなるんじゃねぇか？」
「……そうかもな」

グランツは立ち上がると屋根から飛び降り、夜の街へと消えていっ

た。

月明かりで照らされた土手を、進は走っていた。

「くそっくそっ、ちくしょおおおお！！！！」

悔しかった。

咲魔が殺されている時に何もしなかった自分が、龍に見限られた自分が、死に恐怖している自分が。

「うおっ！！」

足がもつれ、土手を転げ回る。

「はぁはぁはぁ……ああああああああああああああ！！！！」

漸く止まると、進は喉が裂けんばかりに叫んだ。

どれだけ叫ぼうと、死への恐怖が消える訳でもないのに。

このまま逃げてしまえば楽になれるだろうが、進はそれだけはしようとしない。

そして進は、再び走り始めた。

美優、優也、優花の三人が暮らしている家。
そこにも、悩んでいる人物が一人。
美優だ。
咲魔が殺された瞬間を眼にしてから、戦う事が怖くなってしまった。

「美優」
「……優花」

いつ帰って来ていたのか、優花が美優の目の前に座る。

「……ねぇ優花、私って……卑怯かな……？」
「どうして？」

顔を上げて、優花のルビーの様に紅く輝く眼を見つめる。
それに答えるかの様に、優花はまっすぐ見つめ返す。

「っ……」

その穢れも無く、強く、美しい眼差しに、美優は眼を逸らしそうになるが、グッと我慢し、しっかり見つめて話した。

「咲魔さんが死ぬところを見て……それで私、戦うのが怖くなったの……」

耐えきれなくなったのか、美優は涙を流す。
咲魔を殺されてしまった事への怒りや憎しみや悲しみ、目の当たりにした死への恐怖、様々な感情から来る涙だった。

「誰かが傷付くのは見たくない……でも、戦って傷付くのが怖い、逃げ出したいって思ってる私は……やっぱり卑怯なのかな……？」

優也を守りたい。
その気持ちは嘘じゃない。
だが今では、逃げ出したい気持ちに変わっている。
それがどうしようもなく卑怯で、惨めに感じていた。

「私は卑怯だとは思わないよ」
「え……」

気なんか遣って欲しくないと思い、怒りそうになったが、優花は真剣な眼差しをしており、とても気を遣っているとは思えなかった。

「誰だって戦いは怖いし、逃げ出したい時もある。　誰が卑怯と言おうと、美優はその気持ちを忘れちゃ駄目」
「何で……そんな……」

戦うのを怖れれば誰も守れないのに、何故優花はそんな事を言っているのだろう？　美優は不思議で仕方なかった。

「怖いって感情を圧し殺して、戦ってる人を知ってるから……」
「あ……」

優花の口振りから、誰の事を言っているかすぐわかった。

「感情を圧し殺して、何もかも自分一人で背負って、そして人一倍怪我をして帰って来るの。だから美優は、その人と一緒になっちゃ

駄目。　絶対に」
「……優花は、強いね」
「そんな事ないよ」

自分は逃げていない、自分はちゃんと全てに向き合っている。
そんな物言いに聞こえる事を言っている自分に、優花は嫌気が刺した。

（本当に逃げてるのは……優也から逃げてるのは私なのに……）

「くしゅんっ」

その頃、亮と話をしていた優也は、突然クシャミをした。

「どうした？　風邪か？」

今晩は冷えるからなと、亮は肌を擦る。

「風邪じゃないけど……」
「今からでも風邪になるかも知れないから、一応着ときな」

来ていた上着を脱ぐと、優也に被せる。
小さくありがとうと言うと、上着を羽織る。

「そろそろ、本題に入ったらどうだ？　世間話をする為に来たんじゃないだろ？」

話し始めてから、ずっと今の生活はどうだとか、友達とは上手くやってるか等、他愛もない話しかしていなかった。

「そうだな。　でも、知りたい事は知れたよ」
「知りたい事？」
「お前が一人じゃないかどうかって事」

その言葉に優也は眼を見開く。
さっきまでの会話は、それを知る為の会話だったのか。

「なぁ優也。　勝手に一人だと思い込むな。　お前には支えてくれる仲間が居るだろ？」
「……」

この半年で、色んな出逢いをした。
その出逢いで、大切な仲間達が出来た。
だから優也は

「……うん」

素直に頷いた。

「ところで優也、一つ言って良いか？」
「？　良いけど……」

今まで以上に真剣な表情をする亮に、少し身構える。

「さっきのクシャミ可愛かっ、たぁぁぁぁ！？」

言い終わると同時に、優也に蹴り飛ばされた。

「台無しだろ」

蹴り飛ばした亮を置き去りにし、優也は去っていった。

「あんたと会うのも久し振りだな。……いつ以来だ？」

「八年だ」

「結構最近だな」

「俺達にとってはな。人間なら結構前だ」

煙管を吸うキョウと、魂が実体化した咲魔は、昔ながらの友の様に会話をしていた。

「八年前か、懐かしいな。覚えてるか？」

「ああ、俺の勢力とお前の勢力がぶつかって、仲間を失った事をな」

辛そうにしている咲魔を見て、キョウは煙を吐く。

「なぁ、俺と一緒に暴れねぇか？　あんたなら大歓迎だ」

「冗談にもなりはしないな。俺がここまで来た理由はわかってるだろ？」

「やっぱな。いくら何でも簡単にやられ過ぎだと思ったぜ」

溜め息を吐き、落胆しているキョウだが、咲魔には関係無い。

「今すぐこんな馬鹿げた事はやめろ。　でなければ、力づくでも止める」

赤く鋭い眼光が、キョウを射ぬく。

「クックックッ」

「何がおかしい？」

突然笑い出すキョウに、咲魔は怪訝な表情になる。

「冗談はそっちだぜ。　最初から敵意丸出しじゃあ交渉にもなりもしねぇよ」

「っ……」

「俺は止まらないぜ」

咲魔の腋を抜け、キョウは立ち去ろうとする。

「言った筈だ、力づくでも止めるって！！」

拳を固く握り締め、キョウへ殴り掛かろうとする。

「無駄だ」

「！！」

固く握られた拳は、実体が無くなったかの様に消えて無くなってしまった。

「ここは死神界。　ここで魂だけの存在は死神に攻撃出来ねぇ。言ってなかったっけ？」

「キョウっ！　お前、本当に世界を破壊するつもりか！！」

消えた腕を押さえながら、咲魔は叫ぶ。

「今更何言ってやがる」

そしてキョウは今度こそ立ち去っていった。

様々な想いが交錯する中、決戦の日を迎える。

第６１話　決戦前日（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁
「初めの質問、竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の聖麻から水野にだ。　ありがとう。　『雅の練習した美味しい美味しいカレーを食べるか？「はい」か「ＹＥＳ」か「ＬＥＴ' Ｓ　ＥＡＴ！」か「雅の作った料理なら何でも食べるぜ！」のどれかで答えろ』」

進
「選択肢全部食うしかねぇ！？」

雅
「食べてくれる？」

進
「え、あの、その……」

雅
（期待の眼差し）

進
「っ、ＬＥＴ' Ｓ　ＥＡＴぉぉぉ！！　かはっ！」

仁
「ＬＥＴ' Ｓ　ＥＡＴ！　でした。　次は、烈火竜さんからだ。　ありがとう。　『修行した後の優也は、ケンシロウみたいに、悪党には容赦しないドＳになりますか？』」

闇夜
「それは無いです。　優也は誰だろうと死を嫌います。　番外編の優也ならそうなった可能性もありますけど」

仁
「次はｒａｉｔｏさんからだ。　ありがとう。　『死神に戦うメン

バーの中で、現時点で一番強いのは誰ですか？』」
闇夜
「史哉です。　ですが、本編でも言った様に、史哉はいざと言う時にしか戦う気がありません。　他なら、龍、亮、竜也辺りです」
仁
「次は星空の侍さんの【幻想郷の星空】の和樹からだ。　ありがとう。　『女装っていつも、優也しかやってないけど他の男キャラがやったら誰が一番似合ってるんだ？』　嫌な予感」
流香
「それについては私が答えるわ。　優也以外なら仁かしら。　整った顔立ちしてるし、体も細いからね。　と言う訳で仁、女装してみましょうか？」
仁
「ちょ、ちょっとま……」
闇夜
「仁が連れて行かれたので代わりに答えます。　次は沢藤蜜柑さんの【大空あっと非現実的学園生活。】の神楽から進に質問です。ありがとうございます。　『雅ちゃんのどこが好きか具体的に教えてほしいアル』」
進
「うぷっ、吐きそう。　まぁ、優しいし正義感強いし、何より弟想いなとこかな」
雅
「／／／」
闇夜
「（まだ恋愛対象じゃないな）　あ、流香お帰り……まさかその後ろの子は」
流香
「そのまさかよ」

流香の後ろには、金色の髪に、フリルがついたワンピースを着た美少女、仁が居た。

流香
「私もビックリな似合い具合よ」

仁
「足がスースーするな」

闇夜
「恥ずかしがらないし」

仁
「俺の反応に期待してたなら謝る。　皆、質問ありがとう。　次回も宜しく頼む」

次回
第６２話　決戦
カイ
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第６２話　決戦

八年、死神にとっては短すぎて仕方ない歳月だ。
だが、俺には長すぎた。
八年も暴れられず、八年も腐った世界を見続けて、頭がおかしくなるかと思ったぜ。
だが、それも今日でしまいだ。
遂に暴れられる。
遂に世界をぶち壊す事が出来る。
これ以上の喜びはない。
そういやぁ、闇奈達の子孫や月臣龍も居たな。
ホントに面白ぇよあんた等は。
この時代でも、俺を楽しませてくれよ。

第６２話　決戦

早朝、高層ビルが建ち並ぶ都会のど真ん中、優也、進、仁、正、流香、雅、真司、ナミ、亮、紗理奈、竜也、浩輝が集まって居た。

「集まったのはこれだけか」

龍と史哉、そして悪魔達は除いたとして、本来なら居る筈の美優、薫、彪牙、総司、修二がまだ集まっていなかった。

「神道はわかってるとして、霧藤はナミから訊いたが、彪牙と椿達からは連絡無しか」

知っての通り、美優は戦える精神状態ではない。

総司はギリギリまで修行をし過ぎて、今彩夏に治療を受けている最中。

彪牙と椿兄妹は、連絡を取る事が出来なかった。

「居ない奴の事を考えても仕方ねぇ。　ところで竜也、本当に奴等はこの辺に出てくんのか？」

「だぁからぁ、そう言ってんだろ。　俺が間違えるかよ」

以前から街におかしな気が流れていて、竜也がその気を辿ると、今居る場所の付近に、いくつか次元の歪んでいる箇所を発見した。

その事から、キョウはこの付近に現れると予測したのだ。

「進、お前は……大丈夫か？」

「えっ！」

心配そうに言う優也に、進は素っ頓狂な声を上げる。

「だ、大丈夫だよ！　ほら、この通り！！」

進は腕を振り回す。

それを見て、優也は満足、とまではいかないが、ある程度は納得し

たらしい。

「あんまり無茶はするなよ」

「……ああ」

やり取りが終わると、優也は離れていった。

「大丈夫……大丈夫だ……」

拳を握り締め、自分に言い聞かせる様に進は呟く。

その様子を、雅は心配そうに見ていた。

（やっぱり精神が不安定な子が居るみたい。でも、一番気になるのは流香ね……）

八年も音信不通だった実の姉が突然目の前に現れたと思えば、敵だと言う事実を知らされた。

再会の喜びを感じていたところに、裏切られた様な言葉を浴びせられ、流香の心は揺らいでいた。

吸血鬼としての大きな力を持っていても、どれだけ大人びた振る舞いをしていようと、所詮十四歳の少女。

（最悪の状況は覚悟しておかなければね）

最悪の状況、それは、流香が寝返ってしまう事。

その時は、一時でも流香を指導した自分が流香を止める。

そうならない事を願いつつ、固く決意した。

一方雅も、理由は違えど、ある決意をしていた。

進と真司を守る為、自分が敵を倒す決意だ。

真司は一人の時、不器用ながらも一緒に居てくれた。

進には命だけでなく、心まで救って貰った。

（守ってみせる。　絶対に！）

そして真司も、雅と同じ事を考えていた。

迷惑ばかり掛けた自分を放っておかず、一緒に居てくれた雅を守ると。

だが真司にはもう一つ、考えている事がある。

昨晩、龍に教えられた月臣と言う存在の事だ。

（“あの話”が本当でも俺には関係無い！　ただあいつを守るだけだ！）

ナミは数日前の彩夏とのやり取りを思い出していた。

『本当に……貴女も戦うの？』

『はい』

彩夏の心配する表情は、鮮明に覚えている。

戦う事も血を見る事も嫌う自分が戦う事に、反対していた。

だがそれでも、戦わない訳にはいかない。

『私は今まで大切な人なんて居ませんでした。　でも今は、彩夏さんが居ます』

怪我をして動けなかった自分を助けてくれて、生きる目標になってくれて、見捨てる事無く傍に置いてくれていた彩夏が、何よりも大切になっていた。

『私に貴女を守らせて下さい』

こうして、ナミはここに居る。

（守ってみせます。　この命に代えても）

雅、真司、ナミ、守るものは違えど、三人とも誰かを守りたいと言う理由の下、戦いの場に赴いた。

「おめぇら、いくつか確認する事があるから良く訊け！」

竜也が言うと、全員が竜也に視線を向ける。

「今俺達の居る場所を中心に、半径五キロ程度の結界を張ってある。そんでここから東西南北の四ヶ所、後上空に一ヶ所、計五ヶ所に次元の歪みがあった」

「つまり、そこから攻めて来るって事か？」

「十中八九な」

百パーセントで無いにしろ、何処から現れるかわからない敵の出現場所がわかったのはかなり有利だ。

「それと、結界の中から出る事も出来なけりゃぁ、外から入る事も出来ない。　後、結界の中には俺達以外誰も居ない。　昨日の内に眠らせて、どっかに移動させたからな。　建物壊そうが何しようが勝手だぜ」

「いや駄目だろ！？　それに壊した後はどうするんすか！！」

「全部カイに任せよう」

「人任せ！？」

出来る限り壊さない様に戦おう。

何人かはそう決めた。

「……そうだ、言い忘れてたけど、この戦いで俺と浩輝と亮と紗理奈は雑魚としか戦わねぇ。　雑魚以外はお前等でやれ」

少しの沈黙の後、揃って驚きの声を上げた。

「何言ってんだよ！　あんた等の方が強ぇだろ！？」
「我が儘言ってんじゃねぇよジジイ！！」
「誰がジジイじゃぁ！！」
「いったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

ジジイ発言した真司に、竜也が拳骨を落とす。

「せめて納得のいく説明をしてくれませんか？」

よりによってこの場で最も強い四人が、キョウや幹部達との戦いに参加しないと言っているのだ。
当然、皆が納得のいく説明をして貰いたかった。

「不十分とは言え、俺達が鍛えたんだ。　なら俺達に修行の成果を見せてみろ。　それとも何だぁ？　お前等、俺達に助けて貰わねぇと何も出来ねぇお子様か？」

その言葉に、誰も反論しなかった。

（試してるのか、この状況で……）
（我が師匠ながら恐ろしい）
（上等！）

なら修行の成果を思う存分見せてやろう。
そう優也達は思った。

「……そろそろ、来るか」

竜也は空を見上げながら呟いた。

キョウは一人、煙管を手に物思いに耽っていた。
そこへ、紫色の髪をした眼鏡の男が駆け寄る。

「キョウ様。　人間界へ進行する準備が整いました。　ご指示があればいつでも次元を開きます」
「ウィリアム、準備といやぁ、あいつの事はどうなってる？」
「滞りなく」

そうかい、と呟くと、キョウは煙管を一度吸い、煙を吐き出した。

「そろそろ始めるとするか。　祭りを」
「了解」

ウィリアムは頷くと、その場から立ち去っていった。

「火渡闇奈、雷道凛、風魔刀次。　この時代じゃあ、火渡優也、雷道仁、風魔正か。　そういやぁ龍の野郎も居たな。　どう言う因果なんだか」

堪えきれないのか、クックックッと笑い出す。

「穂乃花、あんたの“運命に選んだ息子”、どれだけ俺を楽しませてくれるだろうな？」

街の上空に、大きな穴が出現し、そこから多くの妖怪や魔物が溢れ出してきた。

「来たな」

「妖怪も混じってますね」

てっきり、死神や人間、後は少数の悪魔が居るだけだと思っていたナミは、妖怪が居る事に驚いた。

「……竜也さんが言った通り、四ヶ所からも来たぜ。　結構多いな」

遠くの音を聞き取れる正は、他の四ヶ所から多くの気配を感じていた。

「思ってたよか多いな。　こっちは十二人しか居ねぇつうのに」

そう言っている間にも、敵はどんどん雪崩れ込んでくる。

一体一体の力は大した事は無さそうだが、その数は百を超えていた。

「無い物ねだりをしても仕方ない。　やるしかないだろ」
「ああ！」

仁が銃を取り出し、正が鞘から刀を抜く。
それに合わせるかの様に、各々が戦闘体勢に入る。

「「「「オオオオオオオオオオオオオオ！！！！」」」」

妖怪や魔物達が各々雄叫びを上げ、優也達に襲い掛かろうと急降下を始めた瞬間、何処からか飛んできた火の玉に、数体が焼かれてしまった。

「何だ！？」
「今の火の玉……まさか……」

勿論、優也達の誰かが放った訳ではない。
只仁は、その火の玉に見覚えがあった。

「行け、お前達！！」

女性の声が聞こえたかと思えば、数え切れない程の妖怪が、次元の穴から出てきた妖怪と魔物に向かっていった。

「あれは、九妖！？」

進が言う通り、妖怪達に指示していたのは、九尾の九妖だった。
さっきの火の玉も、九妖が放った物だろう。

「お前達も来るとは思わなかったな」

「ハッ、驚いたか？」

優也達の後ろにはいつの間にか、黒い翼を生やした男、黒烏が居た。

「雑魚は俺達に任せて、お前達は幹部達を仕留めろ」

「……良いのか？」

咲魔を殺したのは確かに死神だが、だからと言って自分達を手助けする義理も無い。

こんな戦いに、これ以上巻き込まれる必要も無いのに。

「咲魔ならこうする」

それだけ言うと、黒烏は空へと羽ばたいていった。

「さっきも言ったが、俺達はお前等の手助けはしねぇからな」

「皆の戦いを無駄にしない様にね」

竜也、亮の言葉に、優也達は頷き、それぞれが戦いへ向かっていった。

「正」

「何だよ？」

走りながら、仁が正に話し掛ける。

「奴等は所詮、烏合の衆だ。　つまり……」

「親玉を潰せば良いんだな」

「ああ」

敵は死神だけが集まって出来た組織ではない。
人間、妖怪、悪魔が集まった、種族も目的もメチャクチャで集まっただけの集団。
ならば、それらを集めた強大な力を持つ者を倒せば良い。

「キョウを倒す」
「ああ！」

二人は別々の道を走っていく。
こんなくだらない事を起こした張本人、死神の王、キョウを倒す為に。
全員が散らばっていく様子を、ビルの屋上から龍が見ていた。

「始まったか。　俺も、行くとするか」

龍は振り返ると、そこには灰色の髪の男が立っていた。

「はぁはぁはぁ……」

息を整えながら、進は壁にもたれ掛かる。
そして、掌を見つめる。

「大丈夫……大丈夫だ……」

震える手を逆の手で押さえ、言い聞かせる様に呟くと進を、影が覆

った。
顔を上げると、肌が赤く、頭に一本の角が生えた、二メートルはある背丈の鬼の様な男が、目の前で拳を振り上げていた。

「うわっ！！」

慌てて横に転がって避けると、的を失った男の拳は、壁を粉々に砕いてしまった。

「く、そっ……」

力を解放し、進は相手の顔を初めて見る。
そして、言葉を失った。

「咲……魔……？」

ここまで鬼の様な姿は見た事が無かったが、顔には面影が残っていた。

「咲魔……なのか……？　咲魔なんだろ！！」

咲魔だと確信した進は名前を叫ぶが、咲魔は獣の様に拳を振るう。

「っ！　やめろ！　咲魔ぁ！！」

襲い掛かる拳を躱しながら、必死に呼び掛けるが、咲魔は全く聞く耳持たない。

「ぐあっ！」

躱し切れなかった拳が、顔に入り、進は吹き飛ばされる。

『あの鬼、操られているな』

「っ、雅の時みたいに、元に戻せるのか？」

『恐らく、術者を倒さぬ限り解けないだろうな』

だったら術者を捜すしかない、と思った矢先、咲魔の拳が進を襲う。

咄嗟に防御重視の鎧姿になり、手にした水の薙刀で防ぐ。

「やめろ！　咲魔！　咲魔ぁ！！」

まともに受ければマズイ事はわかっている進は、躱しながら躱し切れない攻撃を薙刀で受ける。

だが、力では歯がたたず、受けた矢先に体が大きく仰け反る。

押されながらも、何とか攻撃を躱し続ける。

『何をしている小僧！！　反撃しろ！！』

「そんな事……言ったって！！」

青龍に激昂されるが、進は攻撃をしようとしない。

「こいつは咲魔なんだぞ！！」

『小僧っ……』

覚悟を失ってしまった進は、咲魔を倒してでも止めようとする気持ちが、一欠片も有りはしなかった。

進と咲魔が対峙している場所を、肉眼で確認出来る距離のビルの屋上、そこには、ウィリアムが居た。

「無駄だ。　どれだけ呼び掛けようと、その鬼の魂は私の手の内だ」

何度も咲魔に呼び掛けている進を見て、嘲笑うかの様に言い捨てる。

「でしたら、貴方を倒せば良いと言う事ですね」

「！！」

背後から声が聞こえ、ウィリアムは後ろに振り向く。

そこには誰も居なかったが、空間が歪んでいた。

「うあっ！！」

進の体は大きく吹き飛ばされ、地面を転がる。

「はぁはぁはぁ……咲魔っ……！」

立ち上がろうとするが、体に力が入らず立つ事が出来ない。

いくら防御重視の姿とは言え、咲魔に何度も殴られれば、立てない程のダメージを負うのも当然だ。

「進！！」

聞き覚えのある声が、進の耳に届く。
まさかと思い、声がした方へ視線を向ける。

「み、美優！？　何でここに！！」
『小僧！！』

何故ここに美優が居るか考える暇もなく、咲魔が美優へ向かって走り出していた。

「や、やめろぉ！！」

痛む体に鞭打ち、進は咲魔の体にしがみついた。

「美優！　逃げろ！！」
「でも！！」

逃げる様に促すが、美優は逃げようとしなかった。

「ぐあっ！！」

咲魔は進を振り払うと、進を殴り飛ばす。

「進！！　あっ……」

駆け寄ろうとしたが、咲魔が自分へ向かって来ているのを見て、美優は後ずさる。

「み、美優……」

美優を助けようとするが、今の一撃が効いていて、体が動かなかった。

「きゃっ！」

足が縺れ、美優は尻餅を付いてしまう。

そして、咲魔は美優の目の前に立ち、拳を振り上げた。

「やめろ……咲魔っ！　やめろ！！」

進の声に聞き耳持たず、咲魔の拳は振り下ろされた。

「やめろおおおおおおおおおおおお！！！！！」

悲痛な叫びが響き渡った。

「貴様、何の用だ？」

突如発生した空間の歪みから現れた、藍色の長髪をした少年少年に、ウィリアム問う。

その少年が、火渡優也達の仲間の一人だと、部下達の報告で知っていた。

だからこそわかっている。

少年の力は死神に及ばない事くらい。

「貴様ごときに構っている暇等無い。　他の奴等の相手をしなければならないからな」

ウィリアムの言葉に、少年はフッと笑う。

「何を言ってるんですか？」

いつまで経っても衝撃が来ない。

美優は恐る恐る眼を開けると、目の前には、額には赤い鉢巻きを、右手には痛々しい包帯を巻いた、見覚えのあるツンツン頭の少年が、咲魔の拳を受け止めていた。

「女に殴り掛かるもんじゃねぇだろ」

受け止めた拳を払い除けると、少年は言った。

「お前の相手は……」

その頃、同じ時、藍色の長髪の少年も、言っていた。

「貴方の相手は……」

打ち合わせをしたかの様に、違う場所で、同時に言った。

「俺だ」

「僕です」

鋼鎧寺彪牙、霧藤総司、新たに力を手にし、戦いの中へ飛び込んだ。

第６２話　決戦（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁
「はい、竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】から、士が流香に質問だ。　ありがとう。　『優也を女装させてきて一番似合ったのは何ですか？』」

流香
「ミニスカートのメイド服ね。　恥じらった優也の表情が最高よ」

仁
「優也にとっては災難だな。　次は浅葱さんの【東方渡来人】から暗黒淵更紗が質問だ。　ありがとう。　『この作品のキャラクターの好きな食べ物はなんだ？』因みに作ってくれるらしい。　俺はハンバーグ」

優也
「オムライス」

優花
「あ、私も」

美優
「食べ物なら何でも！」

進
「前も言ったけどカレー」

薫
「お蕎麦です」

彪牙
「肉とか好きだぜ」

総司
「お寿司が食べたいです」

流香
「贅沢ね。　私はフランス料理なら何でも好きよ」
正
「お前も贅沢だろ。　俺も彪牙と同じで肉料理好きだぜ」
龍
「特に無い」
仁
「参考になるかはわからないが宜しく頼む。　次は星空の侍さんの【幻想郷の星空】の銭ゲバマダオって奴から質問だ。　誰か知らんがありがとう。『カイさんってお金たくさん持っているみたいだけど一体、どうやって稼いでいるんだ？』」
カイ
「フフフ、企業秘密♪」
仁
「と言う訳で悪いな、銭ゲバマダオ。　これで今回の質問コーナーは終りだ」
闇夜
「早いかも知れないですけど、次回から本格的な戦闘が始まります」
仁
「また次回な」

次回
第６３話　守る為の破壊の拳
彪牙
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第６３話　守る為の破壊の拳

良いか彪牙。
この技は鋼鎧寺一族の基礎中の基礎で、コツさえ掴めば誰でも出来るが、それと同時に最強の奥義でもある。
拳から繰り出される一撃は鉄をも砕き、放たれた拳圧は海をも切り裂く。
極めれば体のどっからでも打てる様になる。
使える様になったとしても、不完全な状態で使えば、体に負担が掛かりすぎちまうけどな。
そこでだ。
おめぇがこいつを使える様になったとしても、使う時は一つ条件がある。
そいつは……

第６３話　守る為の破壊の拳

赤く大きな拳が、彪牙と美優に振り下ろされる。
拳が自分に届く前に、彪牙は美優を抱えて、咲魔の腋を駆け抜ける。

誰も居なくなったコンクリートの地面に、咲魔の拳が突き刺さる。

「危ねぇな。　美優、怪我ねぇか？」

「え……う、うん、大丈夫……」

地面に足を付け、立とうとするが、体がふらつき倒れそうになる。

「おっと危ねぇ」

彪牙は美優の体を支え、倒れない様にする。

「おい進！　動けるか？」

「っ、何とか……」

体は痛むが、さっきよりはマシになった進は、彪牙達へ近寄る。

「美優を頼むぜ」

美優を進に預けると、彪牙は咲魔を鋭い目付きで見る。

獲物を狙う獰猛な獣の様に、咲魔は彪牙を睨み付ける。

「咲魔。　あんたの魂は、俺が救ってやる！！」

全力で走れば七、八歩で届く距離を、全速力で走り抜ける。

「おおおおおおおおおおおおおお！！！！」

声を上げて走って来る彪牙を待ち構え、間合いに入った彪牙へ、フック気味に右拳を繰り出す。

早いが大振りな攻撃を、彪牙は頭を屈めて躱し、左拳で咲魔の腹を

殴り付けた。

「入った！」

モロに攻撃が入り、進は倒したかと思った。
だが、理性を失った鬼は、この程度では倒れはしない。

「……マジかよ」

確かに手応えはあった。
あったが、咲魔の体はよろめくどころか、ビクともしなかった。
驚きを隠せない彪牙を気にも止めず、虫を払うかの様に右の拳を振り回す。

「ちっ！」

咄嗟に飛び退き、攻撃を躱す。

「彪牙のパンチでビクともしないなんて……」
「彪牙……」

彪牙の一発の威力は、進は目の前で見ている。
利き腕ではなかったとは言え、鬼相手にはここまで効かないものなのか、と進は青ざめる。

（……利き腕じゃない？）

進は、彪牙が利き腕である右を使わず、利き腕とは逆の左で殴った事に、疑問が湧いた。
右手には包帯が巻き付けてはいるが、戦いに使えない程の怪我をし

たとは思えない。
修行だとしても、彪牙の修行を見てくれていたのは、今戦っている咲魔。
一人で修行して、そこまでの怪我を負うものなのだろうか？

「って、彪牙！　相手は咲魔なんだぞ！？わかってんのか！！」

ふと、相手が咲魔だと思い出し、考え事は止め、彪牙へ怒鳴り散らす。

「わかってるよ」
「なら……」
「だからこそ俺達が止めなきゃなんねぇだろうが」

頭ですぐに理解は出来なかったが、進はそれ以上何も言えなくなった。

「進、瞬きしないでしっかり見とけよ」
「え……」

進を横目で見て言うと、目の前の咲魔を見据える。

（さてと、格好つけたものの、どうすっかな？）

全力で拳を叩き付け、それが全く効いていない。
それに比べ、咲魔の攻撃は一発は重く、いくら打たれ強い彪牙と言えど、喰らえばかなりのダメージを受けてしまう。

（“あの技”はそう何発も打てるもんじゃねぇ。確実に当てなきゃなんねぇ）

包帯を巻き付けた右手をチラッと見ると、ギュッと握り締める。

「いくぜ！！」

再び、咲魔に向かって走り出す。
同時に、咲魔も彪牙に向かっていく。

「おらぁ！！」

彪牙は左の拳、咲魔は右の拳を交互に打ち出す。
クロスカウンターの様に拳が交差した瞬間、彪牙はギリギリで拳を躱し、咲魔の顔に拳を叩き付ける。
マトモに入ったが、やはり効いてはいなかった。
効いていないとわかってはいても、彪牙は攻撃の手を緩めない。
咲魔からの攻撃を躱しながら、“右手以外”で殴る蹴るを続けていく。

「やっぱり、全然効いてない……」

どれだけ攻撃しても効いていない様子を見て、美優は心配そうな声で呟く。
進は、心配もしているが、やはり右手を使っていない事が気になっていた。

「何をするつもりだよ……」

彪牙の狙いがわからないまま、進は眼を逸らさず、戦いを見続けた。

（マジで効かねぇ。　だが、これを喰らえばどうだ！）

普通の攻撃が効かない事を痛感した彪牙は、今まで使わなかった右の拳に気を纏わせる。
纏った気は、吸い込まれる様に右手に凝縮され、右手が黄色に発光した。

「な、何あれ！？」
「右手が光ってる！？」

驚いている二人を尻目に、彪牙は右手を固く握り締め、腰の辺りまで引く。
流石に何か仕掛けてくると気付いた咲魔は、直ぐ様攻撃に移る。

「遅ぇ！！」

その攻撃も軽々躱し、咲魔の懐に潜り込む。

「終わりだ！　“総極拳”！！」

一歩踏み出し、腰まで引いた拳を、一気に咲魔の腹に叩き込んだ。
美優も進も、今度こそ決まったかと思ったが、どちらも動かない事に疑問に思った。
そんな中、彪牙が衝撃的な言葉を口にする。

「ミスったあああああああああああ！！！！」
「「えええええええええええええええええええ！！！？」」

今の今まで使わずに置いておいた技が、まさかの不発に終わり、彪牙本人も、美優と進の二人も、驚きの声を上げる。

「何してんだよ!?　格好良く登場して、しかも終わりだとか言ってたくせに!!」
「あれは終わったと思うだろ!?　てか、出来なかった俺自身がビックリだよ!!」
進の鋭いツッコミに、戦闘中だと言う事も忘れ、彪牙は進へ反論する。
「彪牙!　後ろ後ろ!!」
後ろを指差しながら叫ぶ美優の言葉に、彪牙は後ろを振り向く。
そこには、咲魔が大きく拳を振り上げてた。
（ヤベッ!!）
咄嗟に腕を交差し、咲魔の拳を受け止める体勢に入る。
鋭く振り抜かれた拳は、交差している彪牙の腕に叩き込まれた。
「ぐっあ!」
防御した筈の彪牙の体が、人形の様に軽々吹き飛ばされる。
「「彪牙!!」」
二人の声に反応し、咲魔が二人へと振り向く。
そして、大きく息を吸い込む。
「ヤバい!　美優、逃げろ!!」
「でも!」
「良いから早く!!」

何をするかはわからないが、何かしてくる事はわかった進は、美優を逃がそうとするが、一足遅かった。

「グオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

以前の面影を完全に失ってしまった鬼は、声の大砲を、二人へ放った。

「くそっ！　美優！！」

地面を抉りながら迫り来る、見えない攻撃から守る様に、進は美優に覆い被さる。

声の大砲は、無慈悲に二人を呑み込んだ。爆弾でも爆発したのではないかと思う程、咲魔の前には大きな爆煙が立ち込めていた。

後はさっきまで戦っていた男を倒せ、とでも命令されている様に、咲魔は彪牙を吹き飛ばした方向へ視線を向ける。

だが、居る筈の彪牙が、そこには居なかった。

「お前の相手は俺だって言ってんだろうが」

美優と進しか居ない筈の煙の中から、彪牙の声が響く。

煙が晴れると、そこには彪牙達が居た。

彪牙は美優と進を守る様に立ち、地面は彪牙を避ける様に抉れていた。

声の大砲が放たれる瞬間、彪牙は二人の前に立ち、二人の盾になった。

攻撃を一手に引き受けた彪牙の体は、

「ひゅ、彪牙！！　血が！！」

「こんなもん掠り傷だ」

まるで肉を引き裂かれた様な傷口から、ボタボタと血が滴り落ちるが、気にせず、咲魔を睨む。
その眼光は、怒りに満ち溢れていた。

「咲魔、あんたは強ぇよ。　だがな、今のあんたの強さは本当の強さじゃねぇ」

心も魂も怒っているが、頭は冷静に回っている。
だからこそ彪牙は言う。

「あんたは誰かを守ろうとするからこそ強かった。　だから、今の暴れるだけのあんたじゃ俺には勝てねぇ！　何たってな！」

色んな人に教えられた本当の強さを。

「こいつ等を守る為に俺はここに居るからだ！」

強さとは戦いに勝つ事だけではない。
自分の信念を貫き通せる事こそが本当の強さだと、優也、咲魔、そして、父に教えて貰った。
「こいつ等の心が折れそうになったら俺が支える！　こいつ等が傷付きそうになったら俺が体張ってでも守る！　俺は俺の魂にそう誓ったんだ！」

その言葉に、進は自分と彪牙を比べる。
彪牙は自分や皆を、体を張ってでも守ろうとしている。
そこには、何の戸惑いも迷いも存在しない。
それに比べ、自分は覚悟したのに逃げ出した。

そんな筈ではなかった筈だ。
思い出せ、戦う事が怖くても、圧倒的な敵が現れようと、戦い続けると覚悟した理由を。

（……そうだ。　俺は……）

脳裏には、友達の後ろ姿が映った。

「今のあんたの魂にその覚悟があるか！？　ねぇだろ……それじゃああんたは俺には勝てねぇ！！」
「アアアアアアアアアアアアアア！！！！」

その言葉が癇に障ったのかどうかはわからないが、咲魔は雄叫びを上げながら彪牙に向かって走り出す。

「彪牙！」
「安心して見てな。　俺は、負ける訳にはいかねぇからよ」

先程、技を放とうとして失敗してしまった右手を見る。

（いくぜ。　親父）

『おめぇがこいつを使える様になったとしても、使う時は一つ条件がある』
『条件？』

彪牙が幼き頃、母親が健在で、父親が家に居る時、彪牙は父親とある話をしていた。
それは、一族が使えるある奥義に付いての話だった。

『そいつは、何かを守りたいと思った時だ』
『何かを……守る？』
『体張ってでも守りたいと思える程大切なもん。　例えば何だと思う？』

父はまだ幼い彪牙に問う。

『えっと……家族と友達？』
『ははは！　それも立派な答えだ！　けどなぁ、まだもう一個答えがあんだよ』
『もう一個？』

小首を傾げながら、彪牙は疑問符を浮かべる。

『魂だよ。　譲れないもんはな、魂に宿るもんだからな』
『……良くわかない』
『ま、おめぇもでかくなりゃあわかるさ。　そん時はわかってんな？』

父は、彪牙に向け拳を突き出す。

『おう！』

彪牙も拳を作り、その大きな拳に突き合わせた。

右手で拳を作り、気を集める。
集めた気は拳に取り込まれ、再び発光する。
その拳を固く握り締め、彪牙は駆け出した。

「おおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」
「アアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

彪牙と咲魔、二人の拳がぶつかり合った。
結果は咲魔の勝ちだと、誰もがそう答えるだろう。
だが、少なくとも進は彪牙が勝つ事を信じて疑わなかった。

「「！！」」
「ガァッ！！」

咲魔の拳から、トマトの様に血が噴き出た。
血が止まらない手を押さえ、咲魔は後退る。

「“総極拳”。　その名の通り、総てを極めた拳。基礎中の基礎の技らしいけど、結構効くだろ？　何せ、体の中を直接殴ってる様なもんだからな」

そう言う彪牙の右手に巻いた包帯は、真っ赤に染まっていた。

「拳がぶつかる瞬間に凝縮した気を相手に打ち込む。　タイミングと集中力が必要なんだが、集中力はあんたに鍛えて貰ったおかげで

何とかなったぜ」

咲魔との修行を思い出しながら、彪牙は拳に気を集中させる。

「咲魔、そろそろ目ぇ覚ます時間だぜ」

気を集めた拳を引く動作見て、危険を感じ取った咲魔は、自分と彪牙の間に自分が誇る最強の防御技、“羅生門”を出現させる。

「無駄だ！！」

出現した巨大な門に、彪牙は渾身の力で拳を叩き付けた。
門は拳を叩き付けられた部分からひび割れ、粉々に砕け散った。

「咲魔ぁ！！　あんたの強い魂取り戻して！！」

粉々に散った破片の中を駆け抜けながら、今までで一番大きな気を集めていき、

「さっさと帰って来やがれぇ！！」

咲魔の顎を突き上げた。

第６３話　守る為の破壊の拳（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁
「一つ目の質問。　竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】のライカからだ。　ありがとう。　『天使のお姉ちゃんとお酒のお姉ちゃんに質問！朱雀のお兄ちゃんが他の女の子とイチャイチャしてたらどうする？』　優花と神道の事だな。　どうする？」

美優
「悔しいけど……優也が選んだなら仕方ないよ……」

優花
「ぶっ潰す！！」

美優
「怖っ！　って酒飲んでる！！」

仁
「誰だ飲ませたの」

少々お待ちください。

仁
「気を取り直して次の質問。　星空の侍さんの【幻想郷の星空】のアスカからだ。　『彪牙に質問だ。君が総司の変態行動で今までで最も呆れた行動はなんだ？』と言う訳で今回大活躍だった彪牙、答えろ」

彪牙
「そうだな……あんま思い出したくねぇけど、幻術使って女の裸体を出そうとした事だな……。　全力で止めたけど……」

仁
「お前も苦労するな。　今回の質問はこれまでだ。　少し時間もあるし、彪牙の技の解説でもするか」

【総極拳（そうきょくけん）：S】
拳に集めた気を更に凝縮し、一気に物体に打ち込む技。
力や拳の速度もそうだが、気を打ち込むタイミング、気を維持する事と、気をどれだけ鋭く打ち込めるかの集中力、どれか一つが欠けては、技として成立しない。
成立すれば、一撃必殺の破壊力を生み出す技になる。
鋼鎧寺一族にとっては、奥義でありながら、基礎中の基礎の技らしく、派生技が存在するらしい。

仁
「その名の通り、総てを極めた拳だ。　だが彪牙の“総極拳”はまだまだ未熟で、拳に負担がかかるらしい。　因みに拳以外でも打てる様だが、拳以外で打ったら、名前の“総極拳”の拳の部分は必要にならなくなるな」
彪牙
「身も蓋もない事言うなよ……」
仁
「おかしな所があるかも知れないから、その時は遠慮なく言ってくれ」
彪牙
「これからも宜しくな！」

次回
第６４話　終わりなき悪夢

総司

「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第６４話　終わりなき悪夢

「あ、あの～……大丈夫ですか？」

心配そうに、ナミはボロ雑巾の様に転がっている総司に尋ねる。

「だ、大丈夫ですよ……」

心配させない様に笑みを作るが、その笑みが妙に痛々しい。

「一度、休憩しましょうか？」

「……そうですね」

ゴロンと転がり、仰向けになる総司の隣に、ナミが腰掛ける。

「ん～～～～～～」

「どうしたんですか？」

「いえ、自分より身体能力の高い相手と戦うにはどうしたら良いかと思いましてね」

以前グランツと戦った時と言い、ナミとの修行と言い、一対一では身体能力の高い相手に歯が立たない。

幻術をかけようにも使う暇もなく、同じく、空間移動も使う暇もない。

「幻術を自分にかけて無理矢理身体能力を上げてみますかね？」

「それじゃあ自分の体が持たないんじゃ……」

幻術で自分の身体能力を上げる事は確かに可能だが、リミッターを

外した、常時火事場の馬鹿力状態では、先に体が壊れてしまう可能性もあった。

「となればやはり幻術ですが……どうすれば……」

純粋な力では誰にも勝てない。

だからと言って、幻術を相手にかけるのは容易ではない。

「相手の戦い方に合わせるんじゃ駄目……幻術はどうすればかけられるか……」

「そうですね。　どうすれ、ば……？」

ナミのどうすればと言う言葉に、総司は口元に手を添え、考え込む。

幻術とはどうやって相手にかけるものだった？

幻術は根性論でどうにかなるものではないなら。

考え込んだまま動かない総司を、ナミは覗き込もうとする。

「そうか！！」

「ひゃ！？」

突然総司が起き上がり、顔がぶつかりそうになるが、ナミは持ち前の反射神経で躱す。

「ナミさん、今から少し手伝って貰って構わないでしょうか！？」

「い、良いですけど、何か良い方法を思い付いたんですか？」

興奮冷めやらぬ総司に、ナミは問い掛ける。

「幻術の上手な使い方ですよ！」

第６４話　終わりなき悪夢

「貴様が……私の相手だと？　冗談にしては笑えないな」

実力で遥かに劣る総司が、自分の相手をすると言った事に、ウィリアムは鼻で笑う。

「さっさと失せろ。　貴様ごときの人間がこの戦場に居ること事態気に喰わん」

総司を軽くあしらうと、ウィリアムはその場から立ち去ろうとする。
ウィリアムは総司を敵とは全く見ていなかった。
死を司る神である自分が、大した力も持たない人間と戦う事など、プライドに反する事だった。

「成る程、逃げるんですか」

立ち去ろうとするウィリアムの背中に向かって、総司は言い放った。

「……何だと？」

挑発的なその言葉に、ウィリアムは足を止める。
かかった！　そう思いながらニヤリと笑うと、総司は次の言葉を紡ぎ出す。

「逃げるなら逃げるでそれも良いですよ。　その時は言い触らすだけですから。『死神、人間から逃亡！？』　それとも『人間に恐れをなした死神！！』　新聞の記事みたいですけど、どちらが良いですか？」

ダンッ、とウィリアムはコンクリートの地面を蹴り砕く。

「おやおや、図星を突かれて頭に来ましたか？」

見苦しいですね、と言いながら、憎たらしい笑みを浮かべる。

「良いだろう。　圧倒的な力の差を思い知らせてやろう！！」

人一人殺せそうな殺気を放ち、ウィリアムは総司を睨み付ける。

「ええ、どうぞ宜しくお願いします」

総司の手から藍色で、周りが全く見えなくなる程の濃い霧が溢れ出し、屋上をスッポリ包み込む。

（毒ではないな。　目隠しのつもりか？　小賢しい）

霧が肌に触れた時の感触を鬱陶しく思いながら、冷静に総司の気配を辿る。

（フンッ、姿を隠す事は出来ても、気配を隠す事は猿以下だな）

集中せずとも、総司の居場所も、何をしようとしているか、手に取る様にわかる。

霧に隠れ、虎視眈々と自分を狙う愚かな気配が背後に一つ。

あれだけ挑発しておきながら、気配を消す程度の事も出来ず、逆に自分が出した目隠しを利用されそうになっている総司に、ウィリアムは声を出して笑いそうになるが、そこをグッと堪え、敢えて総司の策に乗ってやろうと考えた。

そして、成功したと思わせた処で絶望に叩き落とし、その時に嘲笑ってやろうと。

（さぁ、いつでも来い！）

背後の気配が少しずつ近付いて来るのがわかる。

その際、カチャリと金属音がした事から、既に武器を手にしているのだろう。

一歩一歩にじり寄る気配は、自分から三歩程度手前で止まった。

ブワッと、霧の一部が晴れたかと思うと、双刃剣を手にした総司がウィリアムに斬り掛かった。

思惑通りの展開に、ウィリアムはほくそ笑むと、攻撃を躱そうとせず、素直に斬られた。

「！！」

これには、斬った本人である総司も驚いた。

「こんなにあっさり……？」

すると次の瞬間、ウィリアムの体は砂の様に崩れ落ちた。

「なっ！？」

突然の事に驚くと、次は霧が勝手に消えていった。

「！　これは！」

霧が晴れ、辺りを見渡すと、そこは光の無い、真っ暗なドームの様になっていた。

『残念だったな。　今の一撃で私を倒せず』

何処からともなく、ウィリアムの声が鳴り響く。

「これは……幻術ですね」

平静を装うが、内心では焦りを隠せず、冷や汗をかく。

『ご名答。　当然術師ならわかるな。　術中に居ると言う事は……』

「！！」

腹の辺りに、鋭い痛みが走り、恐る恐る後ろを見ると、

『知覚のコントロールを剥奪されたと言う事だ』

優也が自分の腹を刀で突き刺していた。

「がはっ！！」

口から血を吐き、総司は前のめりに倒れる。

「くっ……！」

何とか起き上がろうとする総司を、優也が蹴り飛ばす。

「うぐっ！！　げほっ！！」

苦しそうに地面を倒れていると、今度は誰かに胸ぐらを掴まれ、無理矢理立たされる。

「っ、ひゅ、彪牙……」

左手で総司の胸ぐらを掴んで立たせた彪牙は、右手で拳を作ると、総司の顔面を殴り、地面に叩き付けた。

「～～～！　あああああ！！」

地面に頭を叩き付けたせいで頭が割れ、止めどなく血が流れる後頭部を押さえ、もがき苦しむ。
そんな総司を、誰かが踏みつける。

「っ！　あああああ！！」

丁度刺された処を踏みつけられ、激痛が体を駆け巡る。

「くくく、あはははははははははは！！！！！　無様だな！！　どうだ！？　仲間に殺される気分は！？」

自分を踏みつけている人物、それは、自分が殺す為に追い求めた男、

雷道仁だった。
あの仁が大笑いしているのだ。
誰でも偽者だと気付くだろう。

「黙っていないで何とか言え」
「ぐっ！！」

仁は更に強く総司を踏みつけると、ウィリアムの声で言った。

「……最悪、ですね。　よりによって……雷道を……仲間呼ばわり、される……とは」

息も絶え絶えで、途切れ途切れだが、総司は態度を変えようとはしない。

「……一つ……頼みが……あります……」
「醜く命乞いをするなら、助けてやらんでもないぞ」

まるで遺言の様に、総司は言った。

「せめ、て……雷道以外の……誰か、に……僕を殺させ……て、くれませんか？　雷……道に、殺される……何て……願い、下げです……」
「……」

その言葉を訊き、仁は総司から足を離すと、銃を総司の頭に向けた。

「却下だ」

先程、総司がした様な憎たらしい笑みを浮かべ、その頼みを切り捨

てた。

「……良い性格してますよ」

これから死ぬと言うのに、総司は笑みを浮かべて嫌みを言う。

「良く言われる」

そして仁、ウィリアムは、引き金を引いた。
真っ暗な空間が消えていくと、元のビルの屋上に戻っていった。
その場には、無傷のウィリアムと、生きているのか死んでいるのかわからない総司が、血まみれで横たわっていた。

「所詮この程度か。　無駄な力を使わせるなよ。　クズが」

そう言い捨てると、ウィリアムはその場から立ち去ろうとする。
後ろでフラりと立ち上がる総司に気付かず。
総司はウィリアムに飛び掛かり、離さない様にしがみつく。

「なっ！？　貴様！！」

死んだとばかり思っていた総司が、まるでゾンビの様に襲い掛かってきた事に、ウィリアムは驚きを隠せない。

「くっ！　この、離せ！！」

何とか振り払おうとするが、人間とは思えない異常な力でしがみついていて、振り払えない。
そんな中、総司はそれこそゾンビの如く、ウィリアムの肩に噛み付いた。

「うっあああああ！！」

メリメリと、骨が軋む音が鳴り、ウィリアムは声を上げる。

「きっさまあああああああああああああああああああ！！！！」

今まで出した事の無い声を出し、総司を無理矢理引き剥がすと、力一杯殴り飛ばす。

殴り飛ばされた総司は、力無く地面を転げ回り、動かなくなった。

「ぜぇぜぇぜぇ……何なんだこいつ……！」

噛み付かれた肩は、肉が噛み契られており、血が流れていたが、今はそんな事どうでも良かった。

問題は総司だ。

総司は自分の幻術の中で、殺した筈だった。

幻術とは言え、一度思い込んでしまえば、怪我もするし死ぬ事も有り得る。

そして、総司は確かに死んでいた。

それなのに何故、今こんな事態が起こっているのか、ウィリアムには理解出来なかった。

混乱しているウィリアムを尻目に、総司は再び起き上がる。

「っ！　こいつ！」

ウィリアムは身構える。

すると、総司が霧の様に消えていった。

「！　消えた……？」

初めから居なかった様に総司が消えてしまい、ウィリアムは呆然としていると、突如、景色が歪み、ビルが歪み、総てが歪み始めた。

「な、なんだ!?」

次々起こる奇怪な現象に、ウィリアムは戸惑う事しか出来なかった。

「どうです？　幻術を幻術で返される気分は？」

ウィリアムの目の前に霧が集まっていくと、総司が現れた。
殺したと思っていた人間が、平然と現れた事に、ウィリアムは言葉を失った。

「何が起こっているかわからないと言った表情をしていますね。
せっかくだから教えてあげましょう」

また憎たらしい笑みを浮かべ、総司は言った。

「貴方は最初から幻術にかかっていたのですよ」

「!!」

驚愕の表情をするウィリアムを満足気に見ながら、総司は得意気に話す。

「貴方を挑発した時、僕は貴方の聴覚へ幻術をかけていました。
そして貴方は挑発に乗った。　その時点で聴覚は僕の術中」

総司は話し終えると、再び挑発した処から説明を始めた。
話し終えると初めから、話し終えるとまた初めから、まるで機械の

様に延々と。

「貴方が霧に触れた時から触覚も僕の術中」

「！！」

目の前で話していた総司とは、また別の総司が右側に現れ、初めに話していた総司と同じ様に話し続ける。

「味覚も嗅覚もその時に幻術をかけさせてもらいました。　無味無臭でもかけられるものなんですね」

すると今度は左側に現れ、また延々と話し続ける。

この時点で、ウィリアムは頭がおかしくなりそうだったが、この悪夢は終わらない。

「そして貴方は幻術を使った。　効いてもいない幻術を効いていると思い込み、僕の術中だとも気付かずに」

そして、背後に四人目の総司が現れ、ウィリアムを囲うように、延々と同じ事を言い続ける。

「くっ！」

気持ち悪いくらい同じ事を言い続ける総司達の声を訊きたくなく、ウィリアムは耳を塞ぐ。

只でさえ景色が気持ち悪いのに、これ以上気持ち悪いものを訊かされたら、頭がおかしくなりそうだったからだ。

だが、耳を塞ごうと、音は手を突き抜け、鼓膜に響く。

それがどうしようもなく、ウィリアムを苦しめる。

「もう……もうやめろ！！」

ここに来て、ウィリアムは許しを請う様に叫ぶ。

「やめろ？　ははははははははは！！！！　それこそ冗談ですね。
せっかく知覚を強奪したのですから、この程度でやめる筈がないでしょう」

四方向とは違い、上空から総司の声がし、上を向くと、何も無い空中に、総司が立っていた。

「良いですか。　貴方には三つの罪があります」

総司は指を三本立てると、ウィリアムに見せる。

「一つ、咲魔さんの魂を弄んだ事。　どうせ他の方の魂も弄んでるんでしょうね」

言い換えれば、ウィリアムを倒せば咲魔の魂を救い出す事が出来る。
だからこそ総司は、ウィリアムに戦いを挑んだ。

「二つ、僕の友の姿を使った事」

先程の幻術で、ウィリアムは優也達に総司を殺させようとした。
幻術とは言え、優也達に誰かを殺させようとした事が許せなかった。
そして何より、

「三つ、雷道仁を侮辱した事です」

仁の姿を使った事が許せなかった。

総司の中で仁は、殺すべき目標であり、生きるべき目標であり、目指すべき目標である。
ウィリアムはそれを汚した。
あの幻術で作られた仁は何一つ完璧ではない。
仁は完璧で無ければ、総司の目標になり得ないのだから。

「よって、僕はお前を許しません」

普段から相手の事は、君は貴方と呼ぶ総司が、ウィリアムをお前と呼んでいた。
敬語が崩れる事はないが、総司が怒っている事がわかった。

「！！」

突如、ウィリアム浮遊感を覚える。
確かに地面に立っていた筈なのに、気付けば落下していた。
声を上げる暇もなく、体に異変が起こる。
体中が引き裂かれる様な、圧迫される様な、よくわからない激痛に教われ、様々な苦しみの声が耳に入ってくる。
それだけでならまだ良かっただろう。だが、ウィリアムを有りとあらゆる方法で苦しめる幻術を体感し続ける。

「ア゛！！！！！！！！！！！」

ウィリアムの断末魔が、幻覚世界の響き渡る。

「殺しはしません。　それだけは安心して構いませんよ。　ただし…………」

その様子を、総司はまるでゴミを見る様な冷たい眼で眺めながら言い捨てた。

「終わることのない永遠の悪夢を見続けて狂え」

哀れな一人の死神は、終わりなき悪夢の中へ堕ちていった。

第６４話　終わりなき悪夢（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁
「見たくもない霧藤の活躍だった。　と言う訳で質問いくぞ」

総司
「見たくもないってどう言う事ですか！？」

仁
「竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の美莉からだ。　ありがとう」

総司
「え、無視？」

仁
「『薫ちゃんに質問。お兄さんの行動で一番困ったことは？』」

薫
「色々あるけど、やっぱり私と話してる男の人を半殺しにするって言って暴れようとした時です。　止めるのに苦労しました……」

総司
「苦労しますね……」

仁
「次は星空の侍さんの【幻想郷の星空】の和樹からだ。　ありがとう。　『作者の闇夜さんに質問ッス。よく胸が小さい小さい言われている女の子たちの中で誰が一番、無…違った、貧乳なんスか？』」

闇夜
「優花です」

仁
「即答か」

総司

「ここに優花さんが居なくて良かったです……」
仁
「次は★揚ポテトからだ。　ありがとう。『拳で、岩を破壊できる人は、何人ぐらいいる？』　そうだな。　正と龍と彪牙と咲魔は勿論出来るな。　バロールとグランツとアランも出来るだろう。龍堂も出来そうだし、カイもキョウも出来るだろ。　流香と神道とナミもやろうとすれば出来そうだ。　まだどれだけ強いかわからない奴もいるが、知ってる奴なら１３人だ」
総司
「１３って、不吉な数字ですね」
仁
「次は沢藤蜜柑侍さんの【大空あっと非現実的学園生活。】のエリンからだ。　ありがとう。『美優さんや優也さんは何の動物が一番好きですか？』」
優也
「動物は基本好きだけど、鳥だな。　自由に飛べるし」
美優
「私は猫かな。　可愛いし」
仁
「次で最後だ。　ｒａｉｔｏさんからだ。　ありがとう。『進って俺の中では強そうなイメージだけど、実際はどうなんですか？』」
闇夜
「弱くはありません。　ただ経験不足ですね。　最近力を手に入れたばかりで力の使い方も青龍に教えて貰っている状態ですし。　でも、経験を積めば番外編の様な強さを誇ると思います」
仁
「これで質問は終わりだ」
闇夜
「今回は中々早い内に更新出来ましたが、次はどうなるかわかりません」

総司
「次も頑張りましょうよ」
仁
「まだ居たのか」
総司
「何か言いましたか！？」
仁
「感想、質問待ってるぞ」
総司
「また無視！？」
闇夜
「これからも宜しくお願いします！」

次回
第６５話　月の破王
龍
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第６５話　月の破王

「大丈夫？」
「おう、心配すんな。　こんなもん掠り傷だぜ」

美優はボロボロで血まみれの彪牙を右手に、包帯を巻いていた。
初めは自分でしようとしていたが、美優が頑なに、私にやらせて！
と言うものだから、せっかくなのでして貰った。

「出来た！」
「出来てねぇだろ！？」

進がツッコミたくなる気持ちもわかる。
彪牙の手は今、某ネコ型ロボットの様な真ん丸な手をしていたからだ。

「あんがとな。　でも、自分でやるよ」
「あ、うん」

ぐるぐる巻きの包帯を外すと、彪牙は自分で巻き始めた。

「彪牙！　進君！　美優さん！」
「「総司！」」

そんな三人の下へ、総司が駆け寄る。

「よう、遅かったじゃねぇか」
「今の今まで死神と戦ってたものですから。　にしても、随分とこっぴどくやられたもんですね」

「うっせぇ」

彪牙と軽く話をすると、倒れている咲魔を見付ける。

「……死んでるんですか？」

「安心しな。　ちゃんと生きてる」

魂だけの存在が、生きていると言うのが正しいのか知らないが、彪牙はそう答えた。

「やる様になったじゃねぇか。　彪牙」

「「「！！」」」

「……咲魔？」

彪牙の声に答える様に、咲魔は上体を起こす。

その際、鬼の姿から元の人間の姿に戻る。

「魂の底まで響いたぜ」

「はっ、当然だろ！」

嬉しそうに答える彪牙から、総司に視線を移す。

「総司だったな。　お前もありがとうな」

「お礼なんて良いですよ。　只、気に喰わない相手を倒しただけですから」

そして、最後に美優と進を見る。

「ごめんな。　怖い思いさせて」

意識は無かったが、自分がしようとしていた事は覚えている。
進を、そして抵抗出来ない美優を殺そうとした事を。

「ううん。　私より咲魔さんの方が辛かったでしょ？」

したくない事を、自分の意思とは関係無くしてしまう。
それがどれだけ辛い事か、美優は知っているからだ。

「……優しいな」

本当は怖くて仕方ない癖に、何ともない様に装い、自分の心配をしてくれている。
そんな少女に恐怖を植え付けてしまった自分が、どうしようもなく情けなく思った。

「進、お前、もう大丈夫なのか？」
「……」

彪牙に問われ、進は眼を閉じて何かを考える様な素振りを見せる。
そして、眼を開く。

「俺はもう……逃げない！」

さっきまでの弱々しいく、迷いのある眼差しではなく、強く、迷いの消えた眼差しをしていた。

「大丈夫そうだな」
「その様ですね」

進の答えに、彪牙と総司、咲魔は安心そうに笑った。

「美優さん。　君はどうします？」

突然話を振られ、美優は返答に困る。

進は答えを出し、自分は優花に助言して貰ったが、まだ答えが出せていなかった。

「私は……」

第６５話　月の破王

「俺はキリク。　お前は？」

キリクと名乗った灰色の髪の男は、龍に尋ねる。

「……月臣龍だ」

龍にしては意外に素直に答える。

「月臣？　何処かで訊いた事がある様な？」

自分の頭に指を差し、思い出そうとする素振りを見せる。

「そんな事はどうでも良い。　お前は俺を殺しに来たんだろ？」

その様子に溜め息を吐き、龍はキリクの目的を問う。

「ああ、そうだった。　忘れる処だった。　ありがとう」

「礼を言われる筋合いは無い」

この戦場で出会えば、それ以外のやる事何てある筈が無い。

馬鹿なのかこいつはと思いつつ、ブレスレットを大剣に変え、戦闘体勢に入る。

「そうだそうだった。　敵は……殺さないと」

常人を遥かに超えた速度で、キリクは龍に襲い掛かった。

「捕まえた！」

手の平が触れる瞬間、龍が目の前から消えた。

「！」

「無駄な動きが多いんだよ」

キリクの頭上へ飛び上がっていた龍は、キリクに向かって大剣を振り下ろした。

キリクは躱す事が出来ず、頭から真っ二つに斬り裂かれた。

（……何だこの感触は？）

アッサリ倒してしまった事より、キリクを斬った時の感触に、龍は怪訝な表情をする。
まるで、固まりきっていないセメントを斬った様な。

「月臣……その大剣……そうかそうかそうか。　お前が、あの呪われた一族の月臣龍か」
「……」

真っ二つに斬り裂かれた筈のキリクは、何事も無かった様に言うと、泥の様に溶けていった。

「そんなお前を殺せば、良い死体が完成する」
「！」

ドロドロと、龍の周りにキリクが一体、二体と、どんどん増えていき、何十人ものキリクが龍を取り囲んだ。

「分裂する能力か？」
「少し違う」

数人のキリクが一斉に襲い掛かる。

「ちっ」

大剣を振るい、キリクを斬り裂く。
先程と同じ様に、キリクは泥の様に崩れ去る。
間を開けず、キリク達は次々龍に襲い掛かる。
大剣で迎撃するが、数は減る処か、どんどん増えていく。

（くそっ、何だこいつの能力は！？　キリがない！）

一体一体は大した事は無いが、倒しても倒しても溢れ出して来る敵に、龍は苛立ちを感じていた。
龍の苛立ちも知らずに、数体のキリク達が飛び掛かる。

「っ、調子に乗るな！」

大剣を大きく振り回し、飛び掛かってきたキリクを吹き飛ばす。
振り回した遠心力を利用し、大剣を床に叩き付け、床をバラバラに砕いた。

「うおっ！！」

突然足場を失い、キリク達は下の階に固まる様に落下した。
落ちたキリク達を追うように、龍は落ちながら薄く光る大剣を振り上げた。

「消えろ。“月牙”！」

大剣を、力の限りキリク達へ振り下ろした。
その一撃に、数え切れない程居たキリク達は、泥と化した。

「一撃とは凄いな」

ビルの中へ下り立った龍へ、また違うキリクが話し掛ける。

「……また泥人形か」

泥と化した中に、本物は居なかった。

どうせ目の前に居るキリクも、本物では無い考えた。

「さぁ？　本物かも知れないし偽者かも知れない」

惚ける様に答えるキリクに、龍はうんざりする。

「お前の事はもう良い。　一つ教えろ」

「何だ？」

この男の能力はもうどうでも良い。

だが、この男が知っている事に用があった。

「お前、月臣の事についてどれだけ知ってる？」

自分の一族の事を知っている者なら、自分の目的についても知っているかもと、少なからず期待をしたからだ。

「確か……何かをしたら何かの呪いをかけられるだっけ？」

「……」

半分想像通りの答えに、半分の期待は崩れ去った。

「やっぱり知っているのはその程度か。　ならもうお前に用はない」

大剣を構え直し、キリクに斬り掛かる。

「悪いけど、お前に合わせて戦うつもりはない」

「！」

地面に広がっていた泥が龍の脇をすり抜け、キリクの目の前に集ま

っていく。
集まった泥は、キリクを守る様に、壁となった。

「形が変わろうが、強度は同じだろ！」

大剣を壁に叩き付けるが、壁は壊れず、ひびが入るだけだった。

「何っ！？」
「無駄だ。　そんな攻撃じゃ壊せない」

壁の向こうから、キリクの声がしたかと思うと、周りの瓦礫や鉄骨が鋭利な刃物に変わり、龍へと襲い掛かった。
大剣で叩き落とし、叩き落とせなかった刃物は躱していく。

（……こいつの能力……まさか……）

泥がキリクの姿や鉄の様に固い壁になり、瓦礫や鉄骨が鋭利な刃物になる。
だとすると、キリクの能力は。
そこまで考えると龍は、ひびが再生し始めている壁へ視線を向けると、刃物が乱舞する中を掻い潜り、壁へ向かって駆け出した。

「“月光”！」

ひびが残っている部分に向かい、光り輝く大剣を突き刺した。
大剣を突き刺した部分からひびが広がり、壁は粉々に砕け散った。
壁の向こうには、さっきと変わらず、キリクが立っていた。

「終わりだ！」

迫り来る龍に、キリクは笑ってみせた。

「終わりはお前だ」

龍が粉々に砕いた壁、その破片の一つ一つが、まるで意思を持っているかの様に、龍の周りへと集まっていく。

「……」

周りを取り囲んでいく破片にも、龍は全く行動を起こさない。
破片は固まりあい、棺桶の様に龍を封じ込めた。
そして、その周りを取り囲む様に、鉄で出来た鋭利な刃物がいくつも宙に浮いていた。

「素敵な死体の完成だ！」

宙を浮いていた刃物は、一斉に棺桶に突き刺さった。

「終わりはお前だったみたいだな」

どうやら、そこまで死体が好きらしく、キリクは嬉しそうな笑みを浮かべ、力を解除しようとした瞬間、

「何を言ってる？」

「！！」

声が響いた。

「俺が終わりと言った時点で……」

龍を閉じ込めていた棺桶に、ひびが入り、大きく広がっていき、

「お前は終わりだ」

粉々に砕け散った。

そして中から、龍が空へ飛び上がった。

「馬鹿な！？」

驚愕の表情を浮かべ、キリクは空を見上げる。

「いくぞ、蒼月（そうげつ）。　完全解放！」

蒼月と呼ばれた大剣が、龍の言葉と共に、強い光を放つ。

まるで月の光の様に。

そして光が消えると、大剣の形が変わっていた。

片刃だったものから、両刃に変わり、色も銀から蒼白に変わっていた。

「破王蒼月（はおうそうげつ）」

龍は蒼月を、空高々と振り上げる。

「少し本気でやってやる。　気を抜くなよ」

（っ！！　あれは、マズイ！！）

少しでも気を抜けば圧して潰されてしまいそうな圧力に、キリクは初めて大きな恐怖を感じた。

「くそっ！！」

ビルの壁や破片、鉄骨等が龍とキリクとの間へ飛び、さっきの様な壁へ姿を変える。

「お前の能力はわかってる。物体と同化してその物体の形状と強度を変化させる能力だろ。　だったら、本体をあぶり出せば良い！！」

蒼月が今まで以上に強く輝く。

「“月牙・破斬（はざん）”！！」

蒼月を振り下ろす。
それだけでキリクが強化した壁もビルも、今までとは比べ物にならない強大な斬撃の前に、跡形もなく崩壊した。

「かはっ！！」

瓦礫の中から、キリクが這い出る。

「は、早く同化しなければ……」

今の一撃で、能力を完全に解除されてしまった。
このままでは今の攻撃を止める手立て等無い。
慌てて能力を発動しようとした瞬間、キリクを影が覆う。

「！！」

影の正体、それは、ビルをたった一振りで消してしまった龍だった。
龍は蒼月を振り上げ、キリクに迫っていた。

「や、やめろ！！」

制止の声にも聞く耳持たず、龍は蒼月を振り下ろし、キリク真っ二つに斬り裂いた。

「やめろ？」

蒼月を元のブレスレットに戻し、龍は呟く。

「お前に言われてやめるくらいなら……千年も前にやめてるさ」

真っ二つになったキリクは、同時に左右へ倒れた。

龍のその戦いの衝撃は、遠くに居た雪奈にも伝わっていた。

「今の一撃……一体誰が？」

あれ程の一撃、雪奈が知っている中では、そこまでの一撃を放てる者は限られていた。

「……そこに居るのはわかっている。　出てきたらどうだ？」

雪奈の言葉に答える様に、水色の髪をした男女が物陰から現れた。

「兄さん。　この人は私に任せてください」

「ああ、気を付けろよ。　薫」

はい、と兄である椿修二に笑みを向ける。

椿薫、氷の舞姫が戦場に舞い降りた。

第６５話　月の破王（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁
「竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の士から質問だ。　ありがとう。　『今回活躍した総司に！美優、優花、流香をコスプレさせるならそれぞれ何が似合う？』」

総司
「そうですね。　美優さんは白いスクール水着、優花さんは露出の多いメイド服、流香さんはチャイナドレスです！！　考えただけで鼻血が……って、美優さん流香さん！？　いつの間に……ああああああああああ！！！！！！！！」

仁
「女は怖いな。　次の質問、星空の侍さんからだ。　ありがとう。
『総司に質問…。もし、突然、優也がミニスカメイドの格好で”私、本当は女の子だったの…。総司！！好き！！付き合って！！”と言って上目遣いで告白してきたらどうする？』」

総司（生還）
「ゆ、ゆゆゆ優也君が……」

ここからは総司の妄想です。

総司
『良いんですか？　僕は束縛するタイプですよ？』

優也？
『総司なら……好きにして良いよ』

総司
『それでは早速……』

優也？
『ちょっ！　こんな処で……』
総司
『好きにして良いんでしょう？』
優也？
『うん……』
総司
『僕も大好きですよ』
優也？
『私も……』

総司の妄想です。
大事な事なので二回言いました。

仁
「死ねカス」
総司
「ぎゃあああああああああああ！！！！！！！！！」
仁
「変態は土に還った。　次はデビルマンさんの【ハヤテのごとく！～超不幸な青年の物語～】の桂馬からだ。　ありがとう。　『進君はスポーツだと何が得意ですか？』」
進
「えっと……サッカーとかかな？」
仁
「相変わらず普通なコメントだな。　次はネロアンジェロさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】の烈火からだ。　ありがとう。
『一つ、玄武や麒麟と契約したキャラは後に出てくるのでしょうか？　二つ、流香さんは自分でコスプレしても似合うと思うのですが。三つ、進君の地味じゃないのに地味と言われる運命は変えられな

いのでしょうか？』」
闇夜
「玄武の契約者の登場予定はありませんが、麒麟は黄竜と同一視されているらしいので、仁がそれに当たります。　流香は自分でコスプレしても似合います。　進の運命は変えられません」
進
「変える気ゼロだな！？」
仁
「次回からは質問は一つずつで宜しく頼む」
闇夜
「今回は龍に伏線を張ってみました。　次回は薫の出番です！」
仁
「次回も宜しく頼む」

次回
第６６話　氷の舞姫
薫
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第６６話　氷の舞姫

あちこちで戦いが繰り広げられている光景を、遠く離れた場所から見ている男が居た。
男は、戦いを見ながら、遠い昔を思い出す様な表情をしていた。

「何をしてるんだ？　グランツ」
「アラン」

男、グランツに、アランが後ろから話し掛けた。

「キラとルミアは？」
「家に居る。　あいつ等はあまり戦闘向きではないからな」
「そうか」

ルミアは自分でも、戦闘向きでは無いと自覚している。
キラは戦闘向きでは無い、と言う訳では無いが、やはりグランツやアラン程ではない。

「ガドルに会った」
「……」

グランツの口から、死んだ筈の戦友（とも）の名前を訊いたが、アランは何も言わずに話を訊く。

「あいつは、バロール様の為にこの世界を壊すと言っていた。　俺も初めはバロール様の為ならそれが正しいと思った……だが、今はそれがバロール様の為になるとは思えない。　お前は覚えているか？　バロール様がたった一度だけ、俺達だけに話してくれた事

を」

誰よりも邪悪な心を持っていた魔王が、何百年も生きてきた中で、たった一度、心の片隅に一欠片だけ残っていた良心を、グランツ、アラン、ガドル、ルミア、キラに話してくれた。

「あの方が人間を憎んでいたとしても、俺はあの時に話してくれた良心が、本心であると信じたい。　お前は、こんな俺を笑うか？」

自嘲気味にグランツは言う。

「笑う筈がない。　俺も同じだからな」

「……そうか」

自分と同じ答えに、グランツは少し笑う。

「俺達が俺達の知っているバロール様を信じるのなら、ガドルがしようとしている事はバロール様へ対する反逆と取れる。　グランツ、お前はどうする？」

「そんなもの決まってる」

アランの問いに、グランツは迷う事無く答えた。

第６６話　氷の舞姫

誰にも言った事は無いが、雪奈は子供が好きだ。
だからこそ、雪奈は戸惑っていた。
敵に子供が多いと訊いていたから、子供は避けて大人や妖怪を相手にしようとしていたのに、目の前には、まだ中学生程の少女が、自分と戦う気でいる。
戦いたくはないが、ルナの用心棒として、嫌だとは言ってられない。

「私は葛城雪奈だ。　君は何と言う名だ？」
「椿薫です」

二人は簡単に自己紹介をする。

「君はまだ子供だろう。　何故戦うんだ？」

普通なら戦いなどせず、女の子らしく、平凡な日常を過ごしている筈。
それが何故、戦場に居るのか理解出来なかった。

「私は友達に迷惑をかけて、一度死のうとしたんです」
「……」

後ろで訊いていた修二は、複雑な気持ちになる。
復讐する為に薫を唆し、自分のせいで薫は死のうとした。
薫を戦いに巻き込んだのは自分のせいなのだと、修二は自分を責めた。

「でも、こんな私を皆は助けてくれて、今でも一緒に居てくれるんです」

だが、薫と一緒に居てくれる友達のお陰で、少し気持ちが楽になった。

「大切な友達の為に私は戦うんです」

そして薫も、命と心を救われ、皆の為に戦う覚悟を決めた。

今度は自分が皆を救う為に。

「すまない、子供だと思って見くびっていた。　そこまでの覚悟があるなら、手加減はしない」

薫の覚悟を訊き、雪奈も覚悟を決めた。

「ありがとうございます」

感謝の言葉を述べ、薫は鉄扇を取り出す。

「お前は良いんだな？」

少し離れた場所で傍観に徹している修二へ問う。

「俺の妹を、余り舐めない方が良いぞ」

薫が負ける筈がない。

修二はそう信じて、雪奈に答えた。

「肝に銘じておこう」

雪奈は腰に備え付けておいた三つの棒を手に取る。
それらを組み立てていくと、自分の背丈を優に超す長さの棒が完成した。
それを確かめる様に大きく振り回し、両手で構える。

「いくぞ！」
「！　冷気？」

雪奈が手にしている棒の先に、冷気が集まっていくと、十字架の様な刃が形成され、二メートル近くの槍へと姿を変えた。

（この人、私と同じ氷使い！）

薫が身構えると、雪奈は一気に距離を詰めた。

（速い！！）

槍から繰り出される鋭い突きを、鉄扇を閉じた状態で防ぐ。
いくら鉄の扇子と言え、開いた状態で防げば、貫かれる可能性があったからだ。

「良く防いだ。　だが、これならどうだ！」
「っ！」

槍を突き出す動作を、何度も高速で繰り返し、薫に攻撃を繰り出す。
何とか体に届く前に鉄扇で受け止めるが、段々押され始めた。

（……強いな、あの女。　中々隙を見せない）

二人の攻防を鋭い視線で見ながら、雪奈の実力を見定める。

（同じ氷使いとしては、悪くても互角だが、純粋な実力ならあの女の方が上だ）

力の扱いなら薫は負けはしないだろうが、戦闘となれば、雪奈の方が断然上だと、修二は考えた。

（しかも薫は鉄扇を閉じている。　あれじゃあマトモに能力を使えない）

薫は、鉄扇を開いた状態で振る事で、空気中の水分を凝固させ、氷を操る事が出来る。
だが今は、一度も鉄扇を振る事が出来ていない。
鉄扇を振れないと言う事は、氷を作り出す条件がクリア出来ないと言う事になる。
能力をマトモに使えなければ、薫が雪奈に勝つ事は難しい。
そこまでわかっていながら、やはり修二は手助けをしようとはしなかった。

（思い出せ薫。　俺との修行を）

たった数日行った修行を思い出せば、薫が必ず勝つと、信じていたからだ。

「っ！？」

雪奈の斬撃を防いでいた薫の体勢が、足下から崩れ落ちる。

（しまった！　足を！！）

槍から放たれる鋭い斬撃に注意し過ぎた為、足下の注意を怠ってしまっていた。
そこを雪奈は見逃さず、槍の柄の部分で、薫の足を素早く払い取った。
そして、振り上げた槍を、薫目掛けて大きく振り下ろした。

「くっ！」

体勢が崩れながらも、振り下ろされた槍を、鉄扇で防いだ。

「っ……！」
「薫！！」

致命傷は避けたものの、完全に防ぎきる事が出来ず、肩から血が溢れ出す。
それを見て、修二は心配そうに声をあげる。

「えっ！」

突然、体が空中に浮き、薫は驚きの声を出すと、自分の体に何かが巻き付いている事に気付く。

「く、鎖！？」

そう、雪奈の槍が幾重にも分裂し、多節棍の如く薫の体に巻き付いたのだ。

「捕まえたぞ！！」

「きゃあ！！」

薫を捕らえたまま、鎖を振り回し、薫を壁へ叩き付けた。

「！」

ジャラ、と音を立て、鎖が薫から離れ、地面に散らばる。

（あの一瞬で抜け出したか……。　思ったよりやるな）

壁に叩き付けられる瞬間、縄抜けの要領で鎖から抜け出したのだ。

とは言え、抜け出すのが一瞬遅かった為、壁に叩き付けられてしまったが。

「っ、兄さん……」

痛みが引かない体を何とか起こしながら、今にも雪奈に襲い掛かりそうな修二を制す。

「手は出さないで下さい……。　お願いします」

「っ……」

薫の頼みに、苦虫を噛み潰した様な表情をしながら引き下がる。

初めにああは言ったが、本心は薫が心配で堪らなかった。

今からでも代わってやりたいが、薫の眼を見ると、どうしても手を出せなかった。

「雪奈さん……でしたね……」

「ああ」

地面に散らばった鎖を元の槍に戻し、薫に返事を返す。

「優しい人なんですね」

「なっ！！」

想像もしなかった薫の言葉に、思わず槍を落としそうになるが、何とか落とさない様に握り締める。

「斬る時も、壁に叩き付ける時も、眼を閉じていましたよね」

「っ……！」

攻撃の際に眼を閉じる行為は、普通では考えられない。
戦い慣れている雪奈ならわかっている筈だが、雪奈は眼を閉じた。
薫が傷付く瞬間を見ない様に。

「雪奈さん、退いてくれませんか？　貴女も、戦う事が嫌な筈です」

「っ……！！」

十字架の様な槍を、薫に向かって突き立てる。
一瞬驚いた薫だが、直ぐ様横に飛んで躱し、槍は壁に突き刺さった。
雪奈は何かに耐える様な表情で槍を引き抜き、薫に向き合う。

「それでも私は！　私達は戦わなくちゃならない！！　私達の主が、ルナがルカを取り戻そうとしているのだから！！」

「！　……流香、さん？」

若干ニュアンスが違うが、尊敬する相手である少女の名前を出され、薫はどういう事か問う。

「……ルカは……私達の主、ルナの妹だ」

「いもう……と？」

雪奈の主と言う事は、自分達の敵でもある。
流香が敵の妹だと言う事に、少なからず衝撃を受けた。

「この八年間、彼女は諦めずにルカを捜し続けた！　そしてやっと見付け出したんだ！　だったら、戦う事になってでも取り戻すしかないだろ！！」

雪奈は見てきた。
何度も諦めそうになりながら、何度も夢でうなされながら、たった一人の家族を捜し続けたルナを。
そして、遂に見付け出したのだ。
これでやっと、ルナが苦しむ事が無くなる。
だから、子供と戦う事が辛い等と、弱音を吐いてルナの邪魔をする訳にはいかなかった。

「構えろ！　お前の目の前に居るのは敵だ！　戦え、椿薫！！」
「……」

槍を薫へ向け、戦うように促す。
互いに退けない理由がある。
それに気付いた薫は、無言で鉄扇を広げる。

「それで良い！」

十字架の様な槍を握り締め、薫へ突進する。
その勢いのまま、槍を突く。
また同じ様に、一方的に雪奈が攻める状況になったが、さっきとは少し違う。

薫は鉄扇を開き、防ぐのではなく、紙一重で躱している事だ。

（鉄扇を開いたからと言って動きが速くなった訳じゃない。だったら！）

一段と速い突きを繰り出すが、薫はまた紙一重で躱す。

（貰った！）

雪奈は槍を少し回転させて、引き戻す。

引き戻し、槍が元の位置に戻る前に、十字架の様に横に飛び出した刃が、薫を後ろから襲い掛かった。

鮮血が飛び散る。

首を狙った刃は、首を外し、薫の腕を掠めた。

（今のタイミングで躱しただと！？）

薫の視界からは、槍は見えていなかった。

だが薫は、攻撃を読み、躱し切れなかったとは言え、死に至る一撃を、軽傷で済ませた。

（躱すのは上手い様だが、このまま攻め続ければ勝てる！！）

雪奈の槍へ、冷気が集まっていく。

冷気が集まった槍を、弧を描くように大きく振り上げる。

「“槍氷（そうひ）”！」

「くっ！」

大きく振り回された槍を、薫は飛ぶ事で躱す。

薫は飛び上がりながら、今まで自分が立っていた場所を見る。
そこは、大きな氷が出来上がっており、もし紙一重で躱していれば、自分も一緒に凍り付けになっていたかと思うと、ゾッとした。
だが、まだ危険は終わっていない。

「良く躱したと言いたい処だが、空中に逃げたのは失敗だったな！」

そう、雪奈の言う通り、空中に逃げたのは失敗だった。
空中では身動きが出来ない。
優也の様に空を飛べるのなら、話は別だが。

「許せ……。“槍氷翔（そうひしょう）”！！」

誰にも聞こえない様な小さな呟きだが、心の奥底からの謝罪の言葉を述べ、薫に向かって、槍から冷気の斬撃を飛ばした。
空中で身動きの取れない薫では、躱す事など、出来る筈がない。
次に瞳を開けた時に写るのは、変わり果てた薫の姿。
せめて、その瞬間だけは目に入れない様に、雪奈は瞳を閉じた。

「瞳を閉じる必要なんてありませんよ。　雪奈さん」

瞳を閉じた真っ暗な世界に、薫の声が響いた。
雪奈は思わず瞳を開ける。
そこに写ったものは、薫の変わり果てた姿などではない。
空中で体を捻り、自分が放った斬撃を躱している、薫の姿だった。
この時雪奈は、攻撃を躱された事に対するショックを受けず、薫の動きに見とれていた。
自分が放った冷気から、結晶が空に散らばり、その中心で薫が舞っている光景に、思わず綺麗だと思ってしまった。
雪奈の意識は、薫が降り立った事で引き戻された。

「雪奈さん、もう一度訊きます。　退く気は無いんですね？」

まるで勝利を確信した様な物言いをする薫に、雪奈は一瞬苛立ちを覚えた。

「私の攻撃を躱せたからと言って調子に乗るな。　その程度で、私に勝てると思うな！」

事実、防戦一方で、薫は一度も攻めに転じていない。

どれだけ躱せても、すぐに限界は訪れる。

「調子には乗っていません。私は、私の出来る事をするだけです」

ヒヤリと、雪奈は肌寒さを感じ、辺りを見渡すと、眼に見える程の冷気が漂っていた。

「これは！」

自分が放った冷気ではない事は、自分が一番わかっている。

だとすれば、この冷気を放っているのは、目の前に居る少女。

「くっ！　“槍氷翔”！！」

何かされる前に、雪奈は冷気の斬撃を飛ばす。

迫り来る斬撃を見据え、薫は鉄扇を振るった。

「え……」

気の抜けた声が、雪奈の口から出る。

それもそうだろう。
鉄扇を軽く振るわれただけで、冷気の斬撃が凍り、粉々に砕け散ったのだから。

「く、くそっ！！」

信じられないものを見た様な表情をしながら、雪奈は槍に冷気を集める。
それを見て、薫はもう一度鉄扇を振るう。
今度は、冷気を纏った刃ごと凍った。

「ば、馬鹿な……！」

軽く鉄扇を振っただけ、それだけで技も武器も凍らされてしまう事が、理解出来なかった。

（気付いていない様だな。　薫が初めからこれを狙っていた事を）

修行の成果が出た事に、修二は内心で喜ぶ。
修二が修行で薫にさせた事は、鉄扇を広げた状態で、ただ攻撃を躱し続ける事だけ。
攻撃を躱しながら鉄扇を振れば、致命傷を受けず能力を使う事が出来る。
だが、鉄扇を振っても、すぐには能力を使用させず、時が来るまで躱し続ける様に伝えた。
空気中の水分を完全に支配するまで躱す様に。
そうすれば、薫は敵に勝つ事が出来る。

「勝負ありです。　退いて下さ……」
「まだだ！　まだ私は負けていない！！」

刃が凍り付いた槍を、多節棍に変え、薫へ向けて放つ。

「っ……」

その攻撃も、薫が鉄扇を振る事で凍り付き、粉々に砕けてしまった。

「今度こそ勝負ありです！　諦めて下さい！」

「うるさい！！」

唯一の武器を失い、雪奈は戦う術を失った。

それでも雪奈は、戦おうとする。

そんな雪奈に、薫は近付いていく。

「ルナは私達の命を救ってくれた！　今度は、私達がどんな事をしてでもルナを助けるんだ！！」

パシン、と乾いた音が鳴り響く。

「ルナさんを助ける為ならどんな事でもする？　ふざけないで！！」

雪奈は痛む頬を抑える。

攻撃、と言えるものではないが、薫に頬を叩かれた事による痛みだった。

「こんな戦いで流香さんを連れ戻しても、流香さんが喜ぶと思ってるの！？」

「！！」

ルナの目的は、流香を連れ戻す事。

つまり、流香を連れ戻す事がルナを助けると言う事になる。
それが薫には、正しいとはどうしても思えなかった。

「私にはわかる……流香さんがこんな戦いを望んでいない事を……」

「っ……！！」

「ルナさんが苦しむ姿を見たくないのなら、流香さんが苦しむ姿も見なくて済む様にしなさい！！」

今までで一番声を張り上げた瞬間、雪奈に胸ぐらを掴まれる。
一瞬殴られると思ったが、雪奈は俯いていて、殴ってくる気配は無かった。

「だったら……私達はどうすれば良いんだ……。　ルナはもう……目的を達成するまでは止まらない……」

八年前のあの日以来、ルナは人間を恨み、この世界を恨んだ。
そして、この世界を壊すと心に決め、誰が何を言っても聞く耳を持たなかった。
無理矢理止めようとしても、止める事が出来なかった。
ルカを想っている時のルナの表情を見れば。
雪奈は堪えきれず、涙を流しながら、膝から崩れ落ちた。

「私には無理かも知れないです……でも、私の友達が必ず皆が笑っていられる結末にしてくれます。　例えそれが幻想だとしても、どうか信じてください」

雪奈の目線までしゃがみ、いつもの口調で信じて欲しいと頼む。
雪奈の涙が、地面に落ちた。

「きゃあ！！」
「うわぁ！！」
「うっ！！」

雅、真司、そしてナミの三人が同時に吹き飛ばされ、地面を転がる。

「もっと真面目にやってくれないと、私達には勝てませんよ？」
「こらエルー、貴女が一番真面目にやるでありますか」

スリットの入ったドレスを着た女性、エルザに、メイド服を着た女性、クリスティーナが叱る。
この二人と戦っていた三人だったが、手も足も出なかった。

第６６話　氷の舞姫（後書き）

教えて！　雷道先生！

闇夜
「説教が難しいと知った今日この頃」

仁
「一年も小説書いておきながら遅いな。　初めの質問は竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の聖麻からだ。　ありがとう。『カイさん。その体になって得したことは？』」

カイ
「色んな処で子供料金になります！」

仁
「当たり前だろ。　次は聖なる焔さんの、まだ投稿していないがリメイク小説の和服生徒会長からルナと使用人三人娘に質問だ。　ありがとう。『突然ですが、ルナ様達の好きなものと嫌いなものは？』」

ルナ
「ルカと血ね。　嫌いな物は世界よ」

クリス
「お嬢様達と掃除であります。　嫌いな物はお嬢様達に害を為すものであります」

エルー
「私はお嬢様達と料理です！　嫌いなのは食べ物を粗末にする人です」

雪奈
「ルナ達と……子供だ……。　嫌いな物はルナ達を傷付ける者だ」

仁

「基本は似たような答えだな。　次は星空の侍さんからだ。　ありがとう。『よく進と青龍は会話していますけど、優也たちが契約した聖獣たちは優也たちに語りかけたりするんでしょうか？』　俺は出来るぞ」

正

「一応出来るけど、仲は良くないからあんま話さないな」

優也

「え、俺は話した事無いんだけど……」

闇夜

「その事については本編で明かすかも」

仁

「次回も宜しく」

次回

第６７話　受け継がれる月

真司

「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第67話　受け継がれる月

「“月光”」

大剣を構え、龍は大岩目掛けて突きを放つ。
龍よりも一回りも二回りも大きな岩は、粉々に砕け散った。

「すっげぇ……」

その光景を無理矢理見せられていた真司は、最初は渋々だったが、今は完全に見入っていた。

「今のが“月光”。　これで俺の技は見せたな」

“月牙”、“月光”と、龍は己の二つの技を真司に見せた。
それには、一つ理由があった。

「じゃあやってみろ」
「……はぁ！？」

真司は素っ頓狂な声を出す。
たった一度見せられただけで、いきなりやってみろと言われても出来る筈がないからだ。

「こんなもん出来るわけねぇだろ！！　つーか、何で俺が！？」

苗字が同じだけで、全く接点の無い相手に、ここまでして貰う理由は無い。

「全く同じ技をしろと言っている訳じゃない。　只、形だけ覚えろって言ってるんだ」
「形……だけ？」
「ああ。　俺のこの技も、元々は違う技だったからな」
どう改造すればこうなるんだと思いながら、話はしっかりと訊く。
「月臣はな、師匠が弟子に自分の技を伝授し、弟子は、その技を自分だけの唯一無二の技に昇華する様にしてる。　ここまで言えばわかるな？」
「今のを……明日までに俺だけの技にしろって言うのかよ！　そんなの無理だろ！！」
日付が変わるまでもう、数時間しかない。
いくら何でも出来る筈がない。
「良いか真司。出来るか出来ないかじゃない。　やるかやらないかだ」
「！」
一言言い残すと、立ち竦む真司をその場に残し、龍は立ち去っていった。
残された真司は、持ってきていた竹刀を、強く握り締める。
「上等だ、やってやる！　お前よりすげぇ技にしてみせるから見てろ！！」
こうして、真司は素振りを始めた。

第６７話　受け継がれる月

雅達がエルザ達に吹き飛ばされる少し前から始まる。
雅、真司、ナミは三人で行動を共にしてきた処に、エルザとクリスが現れ、エルザはナミがクリスは雅と真司が戦う事になった。

「おらぁぁぁ！！！！」

クリスへ向かって、真司は竹刀を力一杯振り回すが、モーションが大きすぎ、簡単に躱される。

「やあぁぁぁ！！！！」

クリスが地面に足を着くその一瞬に、雅が横から木刀で斬り掛かる。

「“空間移動（テレポート）”」

クリスの左目が青く染まった瞬間、雅の目の前からクリスの姿が消え、木刀が空を斬る。

「ま、また！？」

突然目の前から消えたクリスを見付ける為、雅は周りを見渡すと、いつの間にか、クリスは自分と真司の間に居た。

「っ、この！！」

舐められている様な行動に、爆発しそうな怒りを抑えながら、大きく木刀を振り上げ、勢いよくクリスの後頭部に振り下ろす。

「いってぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」
「えっ！？」

聞き覚えが有りすぎる声がしたかと思えば、木刀は、真司の額にクリーンヒットしていた。

「こんの馬鹿女！！　味方に攻撃してどうすんだ！？」
「何よ！！　いきなり出てきたあんたが悪いんでしょ！？」

今の瞬間、真司は自分の意思で雅の前に出た訳ではない。
自分の意思とは関係無く、まるで瞬間移動させられた様だったのだが、二人ともそこは気にしていなかった。

「あの……」
「「何　（よ）（だよ）！！」」

言い争っている二人に、クリスが声をかけると、言い争っていた二人は、息ピッタリでクリスへ視線を向ける。

「言い争っている暇は無いと思うのであります」
「「え……！！」」

二人を大きな影が覆う。
二人は空を見上げると、大きな壁が落ちてきていた。
「「わあああああああああああああああ！！！！！！！！！！」」
壁に押し潰される前に、悲鳴を上げながら二人は走り出す。
「“強制転送（フォースドフォワード）”」
その時、クリスの右目は赤く染まっていた。

壁が落ち、轟音が鳴り響く。
その音は、エルザと戦っていたナミの耳にも届いていた。
「！　雅さん！　真司さん！」
「余所見している暇があるんですか！？」
ナミが生んだ隙を見逃さず、エルザはナミの腹を殴り付ける。
「うっ！！」
壁を突き破り、ナミはビルの中へ弾き飛ばされる。

「っ！　あぐっ……！」

人間にしか見えない女性の一撃を喰らっただけで、あばらを数本折られてしまった。

戦いは嫌いだとは言え、妖怪としての頑丈さがあり、腕にも多少の覚えがあり、ある程度の相手にも勝てると言う自信があった。

だがその自信も、目の前に居る女性に、跡形もなく砕かれてしまった。

「今ので倒した気でいたんですけどね～。　流石妖怪、頑丈ですね」

「っ……！」

やはり人間にしか見えない女性が、ビルの中へ入り、ナミに歩み寄る。

見た目は人間だが、ナミは気付いていた。

「貴女も……妖怪ですね……」

この女性、エルザが自分と同じ妖怪だと言う事を。

「良く気付きましたね。　人間らしくしていたつもり何ですが」

妖怪を殴り飛ばし、壁を突き破っている時点で、人間らしくは無いと、ナミは呆れるしかなかった。

「鼻が利くんです。　犬の妖怪ですから」

百年近く生きていれば、妖怪特有の匂いがわかってくる。

とは言え、あの異常な力だけでも、人間ではないと判断出来るだけ

の材料にはなるのだが。

「匂い……やっぱし匂いますか？」

そう言うと、エルザは自分の体の匂いを確かめる。

「いや、そう言う訳では無くてですね……」

「そうなんですか！？　良かった～、私の体から臭い匂いなんか出てたら、お嬢様とクリスさんに怒られてる処でしたよ」

ナミの言葉に、エルザはホッと胸を撫で下ろす。

子供みたいな人だなと、ナミは思った。

「って！　こんな話をしてたらクリスさんに怒られる！！　申し訳ありませんけど、戦闘再開といきますよ！　え～と……」

「……あ、ナミです」

そう言えば名前を教えていなかったと思い出し、ナミは律儀に名前を教える。

「ナミさんですか。　良い名前ですね」

名前を誉められ、ナミは頬を赤く染める。

では、と今度はエルザが自己紹介を始める。

「私は、ルナ・ブランシャールお嬢様の元でコックをさせて頂いております、エルザ・ランディと申します」

「コ、コック？」

ナミは、戦いには不釣り合いな職業だと言わんばかりの表情をする

が、ナミも医者を目指しているので、お互い様である。
ナミの表情を読み取ったエルザは、少しむっとする。

「ナミさん、構えて下さい」

エルザが構え、ナミも慌てて構える。

「コックだからと言って舐めてはいけませんよ。　覚悟は良いですね？」
「っ！」

とてつもない殺気がナミを襲う。
コック等と言っても、妖怪に違いはない。
しかも、自分よりも何百、もしくは何千も生きている大妖怪だ。
後退りしそうになるが、何とか踏み止まる。

「……力の差を思い知らされ、尚も立ち向かおうとする勇気、見事。このエルザ・ランディ、武人として、全力を持ってお相手しましょう」

さっきまでの子供の様な雰囲気から一変し、歴戦の戦士の様な雰囲気を醸し出し、流れるような動作で構えを取った。
その動きは、一切の無駄が無く、美しさを持ち合わせていた。

「っ！」

先に動いたのはナミだった。
エルザよりも格下だと理解しているナミは、エルザのペースを奪われない為に、攻撃を仕掛けるしかなかった。

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

やはり妖怪と言うべきか。
人間には到底出すことの出来ない速度で、エルザへ拳を突き出す。

「！？」

だが、エルザからすればナミは赤子も当然。
気付けばナミは、手首を掴まれ、仰向けで宙を浮いていた。

「はっ！！」

スラリと伸びた長い足で、エルザはナミの背中を蹴り上げる。

「かはっ！！」

一瞬意識が飛びそうになったが、痛みのお陰で、何とか意識を保つ事が出来た。
ナミは空中で一回転し、天井を蹴り、エルザへと向かっていく。

「勢いは認めますが……」
「っ！」

ナミが繰り出した拳は簡単に躱され、逆に掴まれてしまった。

「単調過ぎます！！」
「きゃあ！！」

柔道の如く、一本背負いでナミはビルの外へ投げ飛ばされる。

「きゃあ！！」
「うわぁ！！」
「うっ！！」

ビルの外へ投げ出され、地面を転げるナミと同じ様に、雅と真司も吹き飛ばされ、三人は同じ場所に固まった。

「もっと真面目にやってくれないと、私達には勝てませんよ？」
「こらエルー、貴女が一番真面目にやるであります」

そして、今に至る。
ビルの中から出てきたエルザの隣にクリスが突然現れ、エルザを叱る。
その会話を訊いて、ナミは少し変に思った。
自分と戦っていたさっきまでは、実力に違わぬ、妖怪の雰囲気を醸し出していたが、今は初めの、子供の様な雰囲気を醸し出していた。
まるでナミ以外に、妖怪としての自分を見せないかの様に。

「っう！！」

立ち上がろうとした瞬間、激痛が電流の様にナミの体を駆け抜ける。
数発しか攻撃を受けていないが、それでも一撃一撃が余りにも重すぎた。
それだけでも充分に体へのダメージが大きいのに、背中を蹴られた後、空中での無理矢理体勢を整え、間髪入れずに攻撃を仕掛けた事が、更に体への負担を大きくしてしまった。

（折れてはいないと思うけど……背骨がやられてる……これじゃあ満足に動けない！）

背骨が損傷している事に気付き、このままでは戦う処か、立つ事もままならないと、ナミは焦りを隠せない。
そして、立てないのはナミだけではなかった。
クリスの能力に翻弄された真司を庇い、雅は立つ事が難しい程、足を負傷してしまった。

（くっ、マズイ！！）

ナミが見たところ、今マトモに動けるのは真司只一人。
三人掛かりで手も足も出ないのに、真司一人で勝てるとは思えない。
何より、雅の怪我に責任を感じているのか、俯いたまま動こうとしなかった。

「し、真司さん！　雅さんを連れて逃げてください！！　ここは私がどうにかしますから！！」
「……」

真司は立ち上がるが、それはナミの声に応える様な動きではなかった。

「し、真司……？」

ゆったりとした歩みで、雅とナミを守る様に立つと、剣道の様に竹刀を構える。

「何をしているんですか！？貴方じゃ勝てません！！」
「勝てない相手じゃ、逃げられる訳ねぇだろ！！　それに……もう守られるのは嫌なんだよ！！」
「「っ！！」」

ナミ、そしてエルザは、真司が纏う雰囲気が変わった事を肌で感じた。

「これは……！」

今の真司と似たような雰囲気を、エルザは知っていた。
遠い昔、大剣を手にし、自分と死闘を繰り広げた男と同じ雰囲気を。
真司は構えた竹刀の切っ先をエルザ達に向けたまま、柄を顔の横まで持ってくる。

「“弦月（げんげつ）”」
「っ！！」

真司が竹刀を振った瞬間、エルザの体が浮き、壁まで弾き飛ばされる。

「エルー！？」
「余所見してんじゃねぇ！！」
「くっ！」

向かって来る真司を、クリスは赤く染まった右目で捉える。
すると、真司はクリスの右目に写らない様に左側へ回る。

「なっ！？」
「わかってんだよ！！　お前は赤くなった右目に写る物を瞬間移動させられるって！！」

真司が移動させられ、雅の攻撃を受けた時、クリスの右目が赤くなっており、真司はクリスの視界に入っていた。
まだ推測の域だが、少ない情報の中では、充分だった。

（数回しか見せていないのに見破られた!?　何という洞察力!!）

そして、その推測は当たっていた。

クリスはここまで早く、能力を見破られた事に、驚きを隠せない。

（恐らく左目の能力も見破られている……。　ですが、見破れても対処は出来るでありますか!?）

右目の次は、左目が青く染まる。

その瞬間、真司の手から小石がクリスへ放たれる。

「!?」

体がビクリと震えるが、冷静に小石を素手で弾く。

「左目が青くなった時は瞬間移動!!」

「!?」

小石に気を取られている隙に、真司はクリスとの距離を詰めていた。

「そんでもって!　瞬間移動する瞬間が一番の隙になる!!」

真司は両手で竹刀を持ったまま、竹刀を後ろへ引く。

（マズイ!!）

瞬間移動するにも、普通に躱そうにも、それよりも早く、真司の竹刀がクリスに届く方が早かった。

「“瞬月（しゅんげつ）”！！」

眼にも止まらぬ程の速さで、真司はクリス目掛けて突きを繰り出す。
決まった。
真司の強さに驚きながらも、雅もナミもクリスを倒したと思った。

「えっ！？」

だが、竹刀はクリスを捉えず、それどころか竹刀の刀身がへし折られていた。

「うあっ！！」
「真司！！」

すると、真司は誰かに殴り飛ばされる。

「良い技ですね。　真空の刃とは。　それにしても……似たような雰囲気だと思えば……貴方、月臣一族の末裔だったんですね」
「エ、エルー……」

いつの間にか、クリスを守る様に、無傷のエルーが立っていて、手にはへし折られた竹刀の刀身が握られていた。

「む、無傷だと……」

技は直撃していた。
だが、エルザは全くの無傷で立っていた。

「しかも今の技……龍さんの技と型が一緒。　と言う事は、貴方を鍛えたのは月臣龍さんですね」

疑問符を付けず、確信を持ってエルザは言う。

「何で……その事を……」

たった数分だが、この技を体得出来たのは龍のお陰。
その龍を知っている事に、真司は体を起こしながら不思議に思った。

「言えませんよ。　彼との約束ですから」
「約束……？」

そう言うと、エルザはゆっくりと真司へ近付いていく。

「！　ま、待って！　これ以上真司には手を出さないで！！」

雅が声を張り上げるが、エルザは聞く耳持たず、真司へ近付いていく。
足を引きずりながら、真司の元へ歩み寄るが、どうしてもエルザより早く真司の元へ辿り着けるとは思えない。
ナミも何とか立とうとしているが、やはり立つ事が出来なかった。
そんな時、雅の脳裏には、自分を救ってくれた少年の姿が写る。

「助けて……真司を助けてよ……」

今度は自分が守る。
そう決意し、戦う覚悟をしたが、雅はその少年の名前を叫ぶしか出来なかった。

「進ううううううううううううう！！！！！！！！！」

青い影が、その場を駆け抜けた。

「おらあああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！」「っ……」

青い影は、勢いそのまま、エルザを蹴り飛ばす。

エルザは片手で防御するが、蹴りの威力で地面を滑る様に吹き飛ばされる。

「エルー！！」

「あ……」

クリスがエルザを心配する様に声を上げる中、雅はその青い影の正体に驚く。

初めて会った時は只の人で、次に会った時は力を持って、自分の前に現れ、自分を救ってくれた少年、

「進！！」

「ごめん！　遅くなった！！」

水野進がそこに居た。

「……貴方は……っ！」

進を見据えていたエルザは、背後から殺気を感じ、体勢を低くする。

すると、頭の上を刃が通過した。

「少年。　先々行くのはやめろ」

「えっとその、す、すみません……」

エルザへ攻撃を仕掛けたのは、帽子を被り、左目に眼帯をした悪魔、アランだった。

「少年、メイドは任せた！」

アランの言葉に進は頷くと、クリスへ向き合う。

「と言う事は、貴方が私のお相手ですか」

「そうなるな。　だがその前に……」

アランは手にしている槍を地面に突き刺すと、帽子を取る。

「先程の不意打ちはすまなかった。　武人としてあるまじき行為だ」

真司を救う為とは言え、背後からの不意打ちはアランの礼儀に反していた。

「いえ、気にしてはいません。　逆に貴方の様な武人と出逢えた事を感謝します」

だが逆に、エルザに礼を言われてしまった。

「流石はエルザ・ランディ。　龍殺し（ドラゴンスレイヤー）の異名を持つだけあって、礼儀も出来ているな」

「……やはり知っていましたか」

「武の心得がある者なら当然だ」

たははと、エルザは困った様に笑う。

「余り知られたく無いから秘密にして下さいよ」
「……ああ」
「ありがとうございます。　では、始めましょうか」

アランは帽子を被り直し、槍を手にし、構えると、エルザも構える。
少しの沈黙の後、二人は同時に動いた。
悪魔と妖怪の二人の武人の、決闘が始まった。

「大丈夫か？　真司！」

真司の前に立ち、クリスを見据えたまま、真司へ声をかける。

「大丈夫に決まってんだろ！！」

正直体中が痛いが、真司は強がって見せる。
そんな真司に、進は苦笑する。

「進……」

そんな中、雅が進の名前を呟く。
守られる筈ではなかった。
本当は自分が守り、進には辛い思いをさせないつもりだった。
だが、進は今戦おうとしている、
自分が不甲斐ないせいで。

「雅」

自分の無力に悔いている最中、進が雅を呼んだ。

「もう大丈夫だから、そんな泣きそうな顔するなよ」

「えっ！？」

そんな顔をしていたのかと、雅は顔を赤くする。

「皆、俺が守ってやるから、安心して見てろよ！！」

「！！」

何気無い進の言葉に、雅はまた救われた様な気がした。

「女だからって、手加減しねぇぞ！！」

「する必要も無いであります」

戦場に、青い龍の化身が舞い戻った。

第67話　受け継がれる月（後書き）

教えて！　雷道先生！

闇夜
「どうも～、明日からテストなのに全く勉強していない闇夜の黒鳥で～す！」

仁
「勉強しろアホ」

闇夜
「すみません……」

仁
「全く……初めの質問は、真龍帝・鬼神斬破刀さんからだ。ありがとう。『胸の小さい子達は胸が９６もある凍華をどう思う？』」

胸の小さい子達
「私に下さい！！」

一部
「羨ま……妬ましい……」

仁
「最後の奴等、言い換えた方が悪化してるな。次は竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の美莉からだ。ありがとう。『優也君！過去最も恥ずかしかった事は？』」

優也
「そんなの女装に決まってるだろ！！」

仁
「優也らしいな。次は星空の侍さんの【星空の幻想郷】のミズチからだ。ありがとう。『カイくんに質問、優也くん達の中でからかうと一番楽しいのは誰？』神様から神様への質問だ」

カイ
「質問ありがとうね～。　そうだね、優也君もそうだけど、正君や優花ちゃんや美優ちゃんや進君もからかいがいがあるね。　でもやっぱり龍君だね。　クール気取りの彼をからかうのは面白いよ♪」
仁
「あいつがからかわれている処が考え付かないな」
闇夜
「これで今回の質問は終了です。　皆さんありがとうございました！」
仁
「初めも言ったが、この馬鹿は明日からテストだ。　だから次は更新が遅くなる可能性があるが……」
闇夜
「これからも宜しくお願いします！」
仁
「と言う訳だ。　じゃあまた次回だ」

次回
第６８話　十秒限りの神速（ゴットスピード）
進
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第６８話　十秒限りの神速（ゴッドスピード）

進の中で、青龍は物思いに耽っていた。
今まで色んな人間と契約してきたが、どいつもこいつも力に溺れる人間ばかりで、青龍の力を私利私欲以外に使おうとせず、認められる人間に出逢えなかった。
一人を除いて。
その認めた人間も、三百年前に死んでしまい、彼以上の人間に出逢えず月日が流れ、そして、この時代で出逢った。　三百年前に死に別れた、自分が認めた契約者と似ている少年に。
何に対しても一生懸命で、悩んだり悲しんだり、感情豊かで、人間らしく、自分に話した戦う為の覚悟が、似ている少年、進に。

『小僧……お前は……』

物思いに耽っていた青龍は、今も必死な進に一言言った。

『逃げるのが好きだな』
「別に好きじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

空から降ってくる瓦礫の雨から逃げる事に必死な進に。

第６８話　十秒限りの神速（ゴッドスピード）

「あれだけカッコ良く出てきたのに何逃げてんだよ！？」
「ちゃんと戦いなさいよ！！」

本気で進に期待していた雅と真司だったが、あそこまで必死に逃げている姿に、少し幻滅した。
ナミも、口にはしないが呆れている。

「わかってるよ！！　つーか何だよこの能力！？」

来て早々に、訳もわからない能力に翻弄され、雅達にあそこまで言われ、進は少し泣きそうになった。

『あれは瞬間移動の一種だな』
「瞬間移動！？」
『あの娘の場合は右眼が赤い時は物体の移動だろう。　もう片方の眼はどんな能力か知らんがな』
「おい、その能力って……」

青龍から、クリスの能力についての推測を訊いた瞬間、進の顔色が変わった。

「あんたは何処の学生ばっかの街の能力者だよ！？　やめとけ！
それ以上は苦情が殺と……う！！」

言い終わる前に、進の顔面に瓦礫が直撃し、進は崩れ落ちる。

「「「違うだろ」」」

崩れ落ちる進を見ながら、雅、真司、ナミは鋭く冷たい言葉を言い放った。

三人がそんな事を言う元々の原因である人物はと言うと、

「その先は禁句であります」

妖艶に笑っていた。

「いってぇ～……！」

瓦礫が直撃した箇所を抑えながら起き上がると、自分の周りに影が差している事に気付き、進は空を見上げると、空から瓦礫や鉄骨等が降ってきていた。

「やばっ！！」

すぐさま逃げようとした進だったが、それより速く、瓦礫が進へ落ちた。

「「進！！」」

いくら進が青龍の力を持っていても、人間である事に変わりはない。

あれだけの瓦礫の山の下敷きになれば、只ではすまない。

雅と真司が進の名前を叫ぶが、全く反応が無かった。

「嘘……」

進からの反応が無い事に、雅が悲泣の声を洩らした瞬間、瓦礫の山が崩れた。

「あ、危なかったぁ……」

崩れた瓦礫の中から、水の鎧を纏った進が姿を現した。
瓦礫の下敷きになる瞬間、速さ重視の姿から、防御重視の姿になり、ダメージを防いだ。
無論、青龍の指示だ。

「良かった……」

進が無事だとわかり、雅は安堵の声を洩らす。

「そうだ！　進！」

ふと、真司は進に伝えておくべき事を思い出す。

「その女の能力は、右眼が赤くなった時は自分以外の物体を瞬間移動出来て、左眼が青くなった時は自分自身を瞬間移動出来るんだ！！」

本当は進が来た時に言っておくべきだったが、余りにも必死に逃げる進の姿に呆れ、伝える事を忘れてしまっていた。

『成る程』

「え～と、右眼が自分以外で……左眼が自分で……あぁくそっ！　頭がこんがらがる！！」

クリスの能力を理解する青龍に対し、進は理解出来ていなかった。

「そのまま余所見して欲しいであります！」
「！」
進の周りの瓦礫が姿を消したかと思うと、再び上空に現れる。
「ちっ！」
進の左手に水が集まり、二メートルもの薙刀を形成する。
「とにかく！　何を瞬間移動させようが、叩き潰せば良いんだろ！！」
降り注ぐ瓦礫を、振り回す度に水を放つ薙刀で叩き落としていく。
全てを叩き落とし、進はクリスへ向かって走る。
「くらえ！！」
薙刀を振り上げ、クリスへと振り下ろした瞬間、クリスが消え、薙刀は空を斬る。
「何処に……！？」
周りを見渡したら、青い空や白い雲が広がっていて、進は驚愕する。
「た、高っ！？」
そう、進は今、ビルの五階程の高さで、宙に浮いていた。
『あの娘の能力か！』

「落ちるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！」

余りの高さに進は絶叫する。

みっともなく取り乱している進の背後に、クリスが瞬間移動する。

「落ちるであります！」

「ぐあっ！！」

クリスは進の背中を蹴り、地面へと叩き落とす。

『小僧！』

「っ、わかってるよ！」

落下しながら、薙刀を振り上げる。　すると、刃に今までで最も大量の水が発生する。

「おりゃぁ！！」

高々と振り上げた薙刀を、地面に向かって振り下ろす。　振り下ろすと同時に、勢いよく発生した水圧のお陰で、地面に激突する事なく、着地する事が出来た。

「くそっ！　やっぱ厄介だな瞬間移動！！」

悪態を吐きながら、進が見据える先には、いつの間にか瞬間移動していたクリスが立っていた。

「けど、見えないくらい速かったらどうだ！？」

鎧が弾けて水へ変わると、進の周りを回転すると、青いグローブと

ブーツになり、進の手足に装着される。　最後に手足に青い妖気を纏い、準備が完了する。

「しゃあ！　いくぜ！！」
『なっ！？　待て小僧！！』

青龍が制止の声を出すが、時既に遅し。　進はクリスへ向かって駆け出していた。
鎧を脱ぎ捨てた事によって、速さが倍増し、一瞬でクリスの前まで移動する。

「今度こそっ！！」

このスピードなら反応出来ない。　そう考えてクリスに蹴り掛かる進だったが、又もやクリスが目の前から消えた。　否、又もや移動させられた。

「っ！　またかよ！？」
『だから待てと言っただろ！！』

まかさまた瞬間移動させられるとは思っていなかった進に、青龍が怒鳴り散らす。

「そんな事言ったって……ん？」

ふと、足下を見る。　そこには、ある筈の足場が存在していなかった。
足場が存在していないと言う事は当然、落下すると言う事だ。

「うおぉぉ！！　また落ちる！？」

咄嗟に壁にしがみつき、落下を免れる。
また空中に投げ出されたのかと進は思ったが、今しがみついている壁は、地面だった事から、それは無い。
しがみついたまま、周りを見てみる。　そこには、直径四メートル程の穴が空いていた。　因みに底は、見えない程深かった。
では、消えた足場は何処へ行ったのか。
進は今までの事を思い出す。　瞬間移動させられた瓦礫は、全て空から降ってきた。　そうすれば、間接的に傷を負わせる事が出来るからだ。
とすると、消えた足場は、

「やべぇ！！」

慌てて穴から這い上がろうとする。
そんな進の上空から、丁度穴にスッポリと嵌まりそうな、円柱が落ちてきた。

「うわあぉぉぉ！！！！」

何とか踏み潰される前に這い上がれたが、円柱が落ちた衝撃で、進は吹き飛ばされた。

『だから待てと言ったんだ』
「待ってもこれは仕方ないだろ！？」

青龍を無視したのは自業自得だが、進の言い分も最もだ。
何もしなくても、瞬間移動させられれば抵抗できないのだから。

『視界に写らなければ良いんだ。　もう少し頭を使え！』

「お前、俺が頭良さそうに見えるか？」
『見えん』
「即答！？　せめて考えようよ！！」

実際に頭が悪い事は自負しているが、少しは考えて発言して欲しかった進であった。

「とにかく話し戻すけど！　視界に写らないのって、認識出来ないのと同じだよな？」
『……あぁ』
「なら、今より速く動けば良いんだろ！」
『簡単に言うな。　今で限界なんだ。　限界以上の速度では、お前の体が壊れるぞ』

以前、優也が咲魔と戦った時、一瞬だけ限界を超えた速度を出したが、体が傷だらけになる程の圧力を受けてしまった。
それを肉体的に劣っている進が行えばどうなるか。　結果は言うまでもない。

「その言い方だと、出来るんだな？」
『……あぁ』
「このままじゃ勝てない……。　頼む……手伝ってくれ……」
『過剰な力は命に関わるぞ？』
「大丈夫だよ。　絶対に生きてやるから」

進のその言葉に、青龍は懐かしく思う。　かつての契約者も、進と同じ事を言っていたからだ。

「何を一人で喋っているのでありますか？」

青龍の声が聞こえていないクリスには、進が一人言を言っている様にしか見えていなかった。

「そろそろ、終わりにするであります」

クリスの両目が、能力発動時の色に染まる。

「このままでは埒が明きませんので、亜空間へ貴方を転移するであります！」

「！！」

進を中心に、地面に五角形の光が浮かび上がる。

『……十秒』

「えっ？」

立ち上がり、その場から離れようとした瞬間、青龍が呟く。

『十秒だ。　それ以上は協力しない』

渋々だが、確かにこのままでは勝てる見込みは薄い。　だからこその妥協だった。

「充分だよ！　“水龍爪牙ァ”！！」

小さな水の龍を纏った右足を、地面に向かって叩き付ける。

次の瞬間、この場だけ地震が起きたかの様に、大きく揺れる。

「っ！？」

立っている事もままならない揺れに、クリスはしゃがみこみ、技の発動を中断してしまう。

「ちょっ！　私達に気を遣って戦いなさいよ！？」
「喋んな！　舌噛むぞ！！」
「あわわわわわわ！！！！」

この場に居た雅達も、揺れに動けず、ナミに至っては慌てまくっていた。
揺れ事態はすぐに止まり、クリスは何とか立ち上がる。

「おい……」

進からの声に、クリスは進を見る。
そこにいた進は、手足の青い妖気が無くなっていた。

「十秒数えろ！」
『カウントダウンを始める』

クリスに言ったのか、それとも青龍に言ったのか。

「“神速（ゴッドスピード）”！」

わからないまま、青龍のカウントダウンが始まった。

『拾（じゅう）』
「！！」

突然、進の体から青い妖気が溢れ出す。　同時に、クリスは只なら

ぬ雰囲気を感じ、瓦礫、鉄骨、ガラス、あらゆる物を大量に、空へ瞬間移動させる。

『玖』

数え切れない程、瞬間移動させられた凶器が豪雨の如く、進へと降り注ぐ。

『捌』

「なっ！？」

クリスは眼を疑った。

あれほどの攻撃を、残像しか残らない程のスピードで、躱していたのだ。

『漆』

「進の動きが変わった！？」

「速い！」

「いや、速すぎます……」

各々が、進の突然の加速に驚く中、ナミは心配そうな表情をしていた。

『陸』

「それ、どういう……」

「そのままの意味です。　あんなスピード……あの人の体が持ちません！」

「「！！」」

妖怪ならいざ知らず。　進は人間なのだ。　限界を超えたスピード

など、体に負担が大きすぎる。

『伍』

「くっ！！」

クリスは焦りを隠せない。

それもその筈。　進の姿を認識出来ないのだから。

クリスの能力は、視界に入った認識出来る物を対象としている。

だが、今の進の様に認識出来ない速度で動くものは、対象外だった。

『肆』

「こうなれば……！」

クリスはその場を離れ、ビルの屋上へ瞬間移動する。

「はぁはぁ……」

額に汗が滲む。

仕方がない事だろう。　ここまで、能力を連発してきたのだから。

それに加え、さっきの亜空間への瞬間移動。　中断させられたとは言え、大幅に魔力を使った事には変わりなかった。

「ここならば……今度こそ……」

瞬間移動させた凶器が全て落ちきるまで、まだ数秒ある。　それだけあれば、亜空間へ転移させる為の準備を整える事が出来る。

「今度こそ亜空間へ……！」

亜空間への入口が完成する瞬間、青い影がクリスの腋を駆け抜けた。

『参』
「あっ……」

後ろへ振り向いたクリスは、無意識に気の抜けた声を出す。

『弐』
「いくぜ！」

瞬間移動をしたのではないのかと錯覚しそうな程の速さで、進はクリスの後ろへ回り込んでいた。

『壱』
「うっ！！」

突然、腹部に痛みが走ったかと思えば、クリスは空中へ投げ出されていた。
そして、クリスを追うように、青い影が屋上から飛び出す。
空中に居ながら、スピードは全く衰える事を知らず、クリスに瞬間移動をさせる暇も与えない。

『零』

青龍が最後のカウントを言い終えた瞬間、眼にも止まらなかった進の姿が現れる。
もっと早く見えていれば、進を瞬間移動させられたかも知れないが、もう遅かった。

「“水龍爪牙”！！」

防御を貫く龍の爪牙が、クリスの体に突き刺さり、クリスは吹き飛ばされる。

「ぐっうぅ……！」

咄嗟に防御したが、まるで車が衝突したかの様な威力に、クリスの意識が薄れていく。

薄れゆく意識の中、頭に浮かんだのはルナへの謝罪の言葉だった。

（お嬢様……申し訳ありません……。私はここまでの様であります……）

完全に消えそうになった意識は、誰かに抱き締められる感触で引き戻された。

「なっ！？　何を！！」

体の痛みなど忘れ、クリスは自分を抱き締めている進に向かって、声を張り上げる。

「喋んな！！　舌噛むぞ！！」

進はクリスを抱き締めたまま、体を反転させる。

そしてそのまま、別のビルの窓ガラスを突き破った。

「いっつ！！」

割れて鋭く尖ったガラスは、クリスに刺さらず、進の背にいくつか突き刺さった。

二人は地面を数メートル滑った処で止まった。

「いてて……えっと、大丈夫か？」
「な、何で……？」

遠慮気味に尋ねる進から離れたクリスは、困惑していた。
仲間を傷付け、進を殺そうとまでしたのに、身を挺してまで自分を助けた事がわからなかった。

「えっと……あのまま突っ込んだら危ないと思ったら……体が勝手に……」
「私は敵であります！　そんな理由で……敵を助けるでありますか？」
「ちゃんとした理由を言うなら、あんたを敵と思わなかったからかな」
「えっ……」

何を言っているのだろうか、この少年は。　ここまで戦っておきながら、敵だと思わなかったなど、大きく矛盾している。
その事が、クリスを更に困惑させる。

「だってあんた、戦ってた時、俺は瞬間移動させても、雅達は瞬間移動させなかったろ？　そうすれば勝てたのに」
「そ、それは……」

進と戦っている時、雅達を瞬間移動させて囮にすれば、クリスは勝つ事が出来た。　だがしなかった。

「それは、あんたは優しい人だからだろ。　そんな人を俺は敵だと思えない。　どっちかと言えば友達になりたいな」
「わ、私と？」

そんな事を男性に言われる事は、今までで一度も無かった。
と言っても、物心付いた時から周りには女ばかりで、男との面識すら殆ど無かった。
そう考えれば、一対一で男と戦う事も初めて、話す事も初めてと、初めてな事ばかりで、段々と恥ずかしくなってきていた。そう言えば、男に抱き締められる事も初めてだったと、クリスは思い出した瞬間、顔が完熟のトマトの様に真っ赤に染まった。

（だだだだ抱き締められたでありますか／／／！！？）

自覚すると、心臓の鼓動がどんどん速くなっていく。

（おおお落ち着くであります！？　あああ相手は年下であります／／／！！）

何度も自分に言い聞かせるが、鼓動は止まる事を知らない。

「お、お～い？　大丈夫か～？」

一人であたふたしているクリスを心配して、進は顔を覗き込む。

「だだだ大丈夫であります／／／！！」

真っ赤な顔を見られない為に、クリスは顔を反らす。
そんなクリスに、進は不思議に思った。

「お～い！！」
「進、大丈夫！？」

すると、進を心配して、雅達が駆け付ける。　因みに、ナミは少しはずかしそうに、真司の背に乗っていた。　雅は自分で歩くと言って何とか着いてきた。

「うわっ！　ボロボロ」
「すぐに治療しないと！」
「……」

真司とナミは、背中にガラスの破片が刺さってボロボロな進を心配する中、雅だけはクリスを見て黙ったままだった。

「……女たらし」
「は？」

薄暗い部屋。　若い男女が二人っきり。　そして、何故か顔が赤いクリス。
この事から、雅はとある結論に達する。

「私達が来るまでの間にその人に何したのよ！！」
「はぁぁぁぁ！？」

予想外の発言に、進は驚くしか出来なかった。

「馬鹿馬鹿！！　信じてたのに！！」
「痛い痛い！！　痛いって！！　つーか何勘違いしてんだよ！？」

若干涙目になりながら、雅は木刀でポカスカと進を叩く。

「ちょっ！　今背中にガラス刺さってんだけど！！」
「じゃあ抜いてあげるわよ！！」

「いってえええええええええええええええええ！！！！！！！！！　雑に抜くなぁぁぁ！！！！！」

無理矢理ガラスを引き抜かれた痛みに、進は絶叫する。

「なぁ……えっと……」

「ナ、ナミです」

「ナミ、一つ訊きたいんだけど」

進と雅が言い争っている光景を眺めながら、真司はナミに訊いてみた。

「この二人がしてるの……痴話喧嘩にしか見えないのは俺だけ？」

「大丈夫です。　私にも見えます」

別に付き合っている訳でも無い筈の二人のやり取りが、どうしても痴話喧嘩に見えてしまい、真司は眼が可笑しくなったのかと思ったが、ナミにもそう見えたらしく、真司は安心した。

木刀で叩かれている進の後ろで、何かが倒れる音がする。

何事だと、進が振り返ると、クリスが倒れていた。

「お、おい！？」

「真司さん！　彼女の傍へ！」

「お、おう！」

急に倒れたクリスを心配し、進達はクリスの傍へ駆け寄る。

ナミは真司に、クリスの傍で降ろして貰い、クリスを見る。

「な、なぁ、その人……」

「静かに！」

進の声を遮り、ナミはクリスの胸元と額に手をやる。

「……能力の使い過ぎで魔力が枯渇しているみたいです」

「それって大丈夫なの？」

「命に関わる程魔力を使った訳ではないので大丈夫です。　今は軽い昏睡状態なので、魔力さえ回復すれば眼を覚ましますよ」

慣れた様に言うナミに、進達は安心すると同時に感心する。

「ナミは凄いんだな」

「そ、そんな事無いですよ……／／／」

そう言う真司の言葉に、ナミは恥ずかしそうに頬を染める。

恥ずかしがり屋なナミは、褒められる事に慣れていなかった。

「何はともあれ、死ななくて良かったわ」

さっきまで戦っていた相手とは言え、この場に居る全員、誰にも死んで欲しくなかった。

「ああ。　本当に良かっ……たァ！？」

「「「？」」」

突然変な声を出し、微動だにしない進に、雅達は首を傾げる。

「どうしたんだよ進」

真司が話し掛けると、固い動きで首を動かす。

「き、筋肉痛……」
「「またぁ？」」
「またなのかよ……」

どうやらさっきの十秒間の加速は、今の進の肉体では耐えきれなかったらしい。

『修行をサボるからそうなるんだ。　これからも戦うつもりなら、真剣に月臣の小僧に鍛えて貰わないとな』
「わ、わかってるよ……。　いてててててて！！！」

青龍が渋っていた理由は、命に関わると言うよりもこっちにあった。龍との修行を途中で中断した進があんな超加速を使えば、こうなるのは眼に見えていたからだ。

「ちょ、あの、ナミさん？　どうにかなりませんか？」
「私には無理です」
「自業自得よ」

そう言って、雅は木刀で進の体をつつく。

「痛い！　痛いって雅！！」
「ほらほら！」

楽しくなってきたのか、雅はつつく力を強める。

「やめっ……あああああああああああああああ！！！！！！」

進達以外に誰も居ないビルに、進の叫びが響き渡った。

第６８話　十秒限りの神速（ゴッドスピード）（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁
「どうも、水野や悪魔に出番を盗られ、本編で全く出番の無い雷道先生です」

優花
「私も無いよ……」

仁
「烈火竜さんからの質問だ。　ありがとう。　『美優は勉学を暗記するより、食べた料理を暗記する方が得意ですか？』」

美優
「う～ん、どうかな？」

仁
「二週間前に食べ……」

美優
「ホワイトシチュー！」

優花
「速い……」

仁
「食べた物の記憶力は凄いらしい。　次は竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の聖麻からだ。　ありがとう。　『進に質問。雅の目の前で雅について３時間以上語れるか？「はい」か「もちろん」か「雅のことは知ってて当たり前だろ！」のどれかで答えろ』」

進
「結局ははいじゃねぇか！？　って言うか、前にも似たような質問が！？」

仁
「「雅のことは知ってて当たり前だろ！」だそうだ」
進
「何勝手に言ってんの！？」
闇夜
「それじゃあ雅の元へ強制送還♪」
進
「あぁぁぁ……」
仁
「次の質問。　星空の侍さんの【星空の幻想郷】の和樹からだ。ありがとう。『亮に質問。もし、優也と優花が入れ替わっていたら、見破る事は出来るか？』」
闇夜
「と言う訳で入れ替わって貰いました♪」
優也（優花の恰好をしています）
「りょ、亮さん　（何でこんな事に）」
優花（優也の恰好をしています）
「亮　（これはこれで恥ずかしい）」
亮
「どうしたマイブラザー、マイシス……」
闇夜・仁
（引っ掛かるか？）
亮
「優也が優花の恰好して優花が優也の恰好してる！？」
闇夜・仁
（見破った！）
亮
「え？　何これ？　サプライズ？　キャッホ～イ！！　優也が可愛くて優花がカッコいい！！　これ以上の眼の保養は……」
優也（優花の恰好をしています）

「うるさい！！」
亮
「ない〝っ！！」
闇夜
「スカートで蹴るなよ」
仁
「亮は色んな意味でご臨終。　次は沢藤　蜜柑さんの【大空あっと非現実的学園生活。】の沢田からだ。　ありがとう。　『・・・火渡は、誰と一番手合わせしてみたいんだ？』」
優也
「誰とも戦う気は無いけど、強いて言うなら進」
仁
「駄目だ」
優也
「え？」
仁
「とにかく駄目だ」
優也
「あ、ああ……」
仁
「質問はこれで終わりだ」
闇夜
「次回も宜しくお願いします！」

次回
第６９話　闇の左眼と龍殺し（ドラゴンスレイヤー）
アラン
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第６９話　闇の左眼と龍殺し（ドラゴンスレイヤー）

「ねぇねぇアラン？」
「どうした？」

金髪の少年悪魔、キラが無邪気にアランに話し掛ける。

「何で眼帯してるの？」

キラはアランの左眼に指を差して訊く。

「怪我をしてるからだろ」
「そう言う事じゃなくて！」

眼を怪我すれば、眼帯をするのは当然だが、キラが訊きたいのはそう言う事ではなかった。

「前は眼帯してなかったよね？　何で急に付ける様にしたの？」

以前まで、アランは左眼に眼帯をしていなかった。　眼帯をし始めたのは、人間界に来る事になってからだった。

「……疼くんだ」
「傷が？」
「少し違うな。　左眼の中にあるものが疼くんだ」

そう言われても、キラには意味がわからない。　結局は左眼が疼く事には変わり無い筈だからだ。

「まぁわからなくても良い。　俺も良くわからないからな」
「アランもわからないんだ……。　処で、いつから疼くの？」

キラはもう一つの疑問を口にする。
六年間も何とも無かったのに、今更左眼が疼くのは少し可笑しいと思ったからだ。

「いつから疼くかはっきり覚えていないが、何故疼くかは、心当たりがある」

左眼に手をやりながら、アランは思い出した様に言う。

「火渡優也の闇の力」

第６９話　闇の左眼と龍殺し（ドラゴンスレイヤー）

キリクとの戦いを終えた龍は、下っぱの相手をしていた。龍にとっては相手にすらならないが。

（……さっきから懐かしい妖気を感じるな。　誰の妖気だ？）

ここから少し離れた場所。　そこで、懐かしい妖気を放つ誰かが戦っている事に龍は気付いたが、それが誰なのか思い出せずにいた。

（こいつ等を伸したら見に行くか）

息一つ切らさず、考え事をしながら、龍は大剣を振るった。

アランはエルザへ突きを繰り出す。
鋭く速い、眼で捉えるのも難しい突きを、エルザは受け流し、軽々と躱す。
そして槍を掴み、アランの動きを封じる。

「“龍神体術（りゅうじんたいじゅつ）・天地の構え”」

槍を掴んだまま左足を一歩踏み出し、

「“昇龍（しょうりゅう）”！」

右足でアランの顎を蹴り上げた。

「がっ！！」

脳が揺れ、足下がおぼつかないアランへ、エルザの攻撃が容赦無く襲い掛かる。

「“降龍（こうりゅう）”！」

顎を蹴り上げて高々と上がった足を、アランの頭に振り下ろす。

「っ～～～～！！」

歯を喰い縛り、痛みに耐えるが、間髪容れない二度の攻撃は、流石に効いていた。

エルザは両手で槍を持ち、槍ごとアランを投げ飛ばす。

そのままなら、地面に叩き付けられるが、アランは負けじと槍を地面に突き刺し、槍を軸に地に降り立つ。

「良い身のこなしですね」

「お前に言われても実感が湧かん！」

槍を固く握り直し、エルザに向かって駆け出す。

「フンッ！！」

槍を横薙ぎに振るうが、エルザは臆す事なく一歩踏み出し、拳で槍を叩き落とす。

「っ！？」

「驚く暇などありませんよ！」

軽々と攻撃をいなされ驚くアランを尻目に、エルザはもう一歩アランへと足を踏み出す。

「“爪牙（そうが）”！」

エルザは一瞬にして、アランへ拳や蹴りを数十発打ち込む。

「かっ……」

エルザは更に一歩踏み出し、アランの懐に入ると、

「“双龍（そうりゅう）”！」

両手で掌低を打ち込んだ。

少し吹き飛ばされたが、アランは何とか踏ん張った。

「けほっけほっ！」

「流石悪魔、中々頑丈ですね。　感心します」

「だから……実感が湧かんと言っているだろう……」

もし自分が悪魔じゃなかったら、今頃地面を布団にして眠っていただろうと、アランは自分が悪魔で良かったと思う。

それ程までに、アランとエルザには力の差が有りすぎた。

「それにしても、天地の構えとは良く言ったものだ……」

天地の構え。　エルザが戦う時の構えの名前だが、名前のわりには特別な構えを取る訳ではない。

「どんな体勢でも攻撃でき、どんな体勢でも防御できる様に付けた名か？」

「凄い！　良くわかりましたね！」

何がそんなに嬉しいのか、エルザは満面の笑みをアランに向ける。

「いやぁ～、お嬢様にカッコつけすぎと言われてたんですよ。一応、天が攻撃で地が防御のつもりで考えたんですが……。わかってくれて良かったです！」

自分以外に理解してくれる相手に出逢った事が、とても嬉しかったらしく、エルザは子供の様にはしゃぐ。

「……お前にも主が居るのか」

アランはお嬢様と言う言葉に、エルザにも主が居ると気付く。

「はい、居ますが……貴方にも居るんですか？」

「ああ、一応な。　この戦いも主の為に参加した様なものだからな」

今頃、あいつも戦いを始めている頃かと、アランは思っていた。

「奇遇ですね。　私も、私の主の為に戦っています」

「ならば互いに主の為、退くわけにはいかぬな」

「ええ」

アランが槍を構えると、エルザも構えを取る。

お互いに隙を伺い、微動だにしない。

二人の気迫に気圧されたかの様に、ビルのひび割れた箇所から小石が地面に落ち、乾いた音を鳴らした。

その音を皮切りに、アランが動いた。

黒い魔力を槍に纏わせ、アランはエルザに迫っていく。

対してエルザは動かず、アランを待ち構える。

（面白い！）

槍に纏わせた魔力を、気付かれない様に刃に集中させていく。
そして、エルザへ突きを放つ。

「甘いですよ！」

魔力を纏っている事以外は代わり映えの無い突き。
これならば容易く躱せると、エルザは回避の体勢に入る。
その瞬間、刃が突然伸びた。

「！　（刃が伸びたんじゃない！　これは、魔力！）」

エルザの考え通り、刃が伸びたのではなく、アランの魔力が伸びたのだ。
達人との戦いは間合いが重要になり、エルザに槍の間合いを見切っている。　ならば、それを逆手に取ってやろうとアランは考えた。

（突然間合いが変われば、いくらお前でも対処出来ないだろ！！）
「くっ！」

アランの思惑通り、魔力の刃はエルザを貫いた。　かに見えた。

「なっ！？」

アランは驚きを隠せない。
槍はエルザの体を貫かず、服を少し斬り裂いただけだったからだ。

「“龍神体術（りゅうじんたいじゅっ）・咆哮の構え”」

透かさず、エルザはアランの腋に入り込み、アランの体を挟む様に

両手を構える。

「しまっ……！」

気付いた時にはもう遅かった。

「“牙”！」

龍が獲物を噛み砕くかの如く、アランの腹と背中を同時に拳を叩き付ける。

「がはっ！！」

ビキビキと、骨が嫌な音を立てる。
これには流石に堪えたのか、アランは片膝をつく。
そんなアランへトドメを刺す為、エルザは右足を引き、

「“旋尾（せんび）”！」

アランを蹴り飛ばした。
蹴り飛ばされたアランは壁に叩き付けられる。　すると壁が砕け、アランは瓦礫の下敷きになった。

「終わりですね。　中々楽しめましたよ。　あ……」

エルザはすぐ傍に、アランが被っていた帽子が落ちている事に気付く。

「……」

エルザは無言で帽子を手に取ると、アランが埋まっている瓦礫へ近付く。

「命までは取りません。　武を磨き、また私の前に現れるのを楽しみにしています」

そう言うと、エルザは瓦礫の上に帽子を置くと、その場から離れていく。

「何処へ行く？」

瓦礫が崩れ落ちる音と、気絶していると思っていた男の声に、エルザは足を止める。

「俺はまだ戦える」

体の至る処から血を流し、足下もおぼつかないアランだが、眼光は衰える処か鋭さを増していた。

「武人ならば、潔く敗けを認めるべきではありませんか？」

エルザは振り向かずに言う。
エルザとしては、アラン程の武人には、醜く足掻かず、潔く敗けを認めて欲しかった。

「言った筈だ。　今の俺は武人としてではなく、主の為に戦っていると」

確かにアランはそう口にした。　そして、エルザもアランと同じだった。

「信ずる主の為ならば勝てぬ相手だろうと何度でも立ち上がり何度でも立ち向かう。　それが家臣と言うもの。　違うか？」

三度も護る事が出来なかった。　だからこそ、アランは唯一残ったものを護ろうと、この戦場へ駆け付けたのだ。

「……貴方は……何を護りたいのですか？」

その問いに、アランは迷う事なく答えた。

「主の良心」

アランは自分自身でも呆れる様な答えと思った。
悪魔が良心の為に戦うなど。　だが、迷いもなければ後悔も、アランには無かった。

「笑いたければ笑え」

「……笑う筈がありません」

やっとアランへと振り向いたエルザの表情は、今までの子供らしさが無くなっていた。

「家臣が主の大切なものを護る事は当然の事。　ここで私が貴方を笑えば、私自身がそれを否定する事になります。　私もお嬢様の、主の志を護る為に戦っているのですから」

同じ考えを口にするエルザに、アランは少し笑う。

「似た者同士と言う事か」

「そうなりますね」

武人としても、家臣としても、二人は互いを認め合う。　それは、妖怪だとか悪魔だとか敵など関係無く。

「自己紹介がまだでしたね。　我が主は真祖の吸血鬼であるルナ・ブランシャールお嬢様。そして私はエルザ・ランディと申します」

丁寧にお辞儀をするエルザに、アランも槍を地面に突き刺して自己紹介をする。

「我が主は邪眼の魔王バロール。　そして俺は、主に仇なす者を排除する悪魔、アランだ」

そう言うとアランは左眼に手を伸ばし、眼帯を外す。
その行動に、エルザは始め、アランは左目が見えるのかと思ったが、眼帯の下には痛々しい刀傷が有り、左眼は完全に塞がれていた。

「まさか、その眼帯を外すと真の力を発揮！　みたいな事にはなりませんよね？」

こう言う場合は力を眼帯で抑えている場合が多いが、アランはどうなのだろうと、エルザは冗談混じりで訊いてみる。

「まぁ、そんな処だ」

次の瞬間、エルザは眼と耳を疑った。
グチュリと、何かを抉る音が耳に届き、眼には、アランが見えない左眼を抉っている場面が映った。

「な、何を……！？」

これには、流石のエルザも驚きを隠せない。

「少し、黙れ……」

当然の事だろうが、アランは苦痛に表情を歪めていた。

「六年前……ある子供と戦った時、左目を斬られ……っ、この眼は光を失った。　そして六年後の今、その子供が我が主と戦って以来……この左目にある力が宿った……」

止めどなく、真っ赤な血が流れ落ちる左眼から手を離す。

すると、左眼から黒い何かが吹き出した。

（魔力じゃない！？　これはっ……！）

アランは黒い何かを体に纏うと、左眼を“開いた”。

「ひ、開いた！？　て言うかその眼……」

左目が開いた事にも驚いたが、それ以上に、開いた左目に白い部分が全く存在せず、真っ黒に染まっていたからだ。

「見た目は気持ち悪いが、ちゃんと見えるから問題はない」

そう言うと、アランは地面に突き刺した槍を引き抜き構える。

「さぁ、いくぞ」

アランの声がエルザの耳に届いた瞬間、エルザの眼前に刃が迫っていた。

「わっ！！」

短い悲鳴を上げながら、体を捻って何とか躱す。

「（速くなった！？）　はっ！」

アランが突然速くなった事に驚きつつも、拳をアランの顔面に叩き込む。

アランは拳に眼をやらず、片手で受け止めると、黒い何かを纏った槍をエルザに向かって振るった。

「っ……！」

咄嗟に後ろに飛んだ事で、服を少し斬られる程度で事なきを得た。

（やっぱりこの力……“闇奈さんの闇の力”だ！）

何処かで感じた力だと思えば、エルザは三百年前に眼にしていた。

ある少女が身に宿していた闇の力を。

（何でこの人が……って、考える暇も無いか……）

考え事をさせる暇も与えず、アランはエルザへ槍を振るう。

エルザは再び後ろに飛ぶと、ビルの壁を駆け昇る。エルザを追い掛ける様に、アランもビルの壁を駆け昇る。

「流石に着いてきますか！」

「当然だ！」

壁を駆け昇りながら、アランとエルザは激しい攻防を繰り広げる。
アランが突きを繰り出せばエルザが受け流す。　エルザが拳を繰り出せばアランが受け止める。
黒い何か、闇の力を解放してから、アランは大幅に身体能力が上がっていた。　少なくとも、さっきまで歯が立たなかったエルザと互角に戦える程にだ。

（身体能力はさっきとは比べ物にならないくらい上がってる。　でも、この闇が闇奈さんと同じ闇だとしたら……）

アランが自分と互角に戦える程に強くなった事に、少しも焦りを感じていないと言えば嘘になるかも知れないが、それよりもエルザには心配な事があった。

「ふぅぅぅ……」
「！」

考え事をする暇も無い。
気付けば、アランは自分より高い位置に昇り、闇の力を刃に集中させていた。

「はあおおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

エルザに向かって槍を振り下ろすと、刃に集中していた闇が解き放たれ、ビルを一刀両断した。

「げほっげほっ！　危ない……！」

ギリギリで闇の一撃を躱し、煙の中から飛び出したエルザは地面に降り立つ。

「使い手が変わっても、一撃が半端無いですね……」

嫌な事を思い出したかの様に呟くエルザの前に、アランが降り立つ。そのまま間髪容れずに斬り掛かって来るかと予想し、構えるエルザだったが、顔を青ざめ、辛そうに肩で息をしているアランを見て構えを解く。

「力を解いてください。　このままじゃ、貴方の体が持ちません！」

アランが使用している闇の力に、アラン自身が付いていけていなかった。

「わかっている……。　以前、偶然発動した時も似たような事になったからな……」

「体験済みと言う事ですか……。　因みに、どう言った偶然で？」

闇の力が偶然で発動すると言う事は、中々壮絶な偶然があったに違いない。

そう思ったエルザは思い切って訊いてみた。

「階段から落ちた時の衝撃で指がグサッと」

「違う意味で壮絶だ！？」

そんな偶然で闇の力が発動して良いものか？　三百年見ない内に更に可笑しな力になってるじゃないですか闇の力。　と思いながら、階段から落ちて指がグサッと言う場面を想像して、エルザは鳥肌が

たった。

「もう良いか？　決着を付けなければそろそろ俺がキツイ」

さっきのエルザの忠告を訊いていなかったのか、アランは力を解こうとせず、決着を付けようとする。

「わかりませんか？　決着云々の以前に、貴方の体が持たないと言っているんですよ」

話を訊いていなかったのかと思い、少し怪訝そうな顔をしながらエルザは言う。

「わからんな」

そんなエルザを知ってか知らずか、アランは槍を構える。

「主の為にも、自分の為にも俺は何度でも戦う。　少し辛いくらいで諦める様なら、楽な生き方が出来たかも知れんな」

「……全くですよ」

呆れ混じりに呟きながら、右の拳を腰まで引き、左の拳を添える様に右の拳の上に置く。　そして、左足を大きく踏み出し、腰を落とす。

「“龍神体術（りゅうじんたいじゅつ）・咆哮の構え”」

さっき、一瞬アランの耳にも届いた構えの名を、エルザは口にする。

「わかっているかも知れませんが、この構えは攻撃に特化した構え

です」

エルザの言う通り、その構えから放った技の威力は、初めの内に放っていた技に比べて重くなっていた。
それは、受けた本人であるアランが良くわかっている。

「主への忠誠心と貴方の覚悟には敗けました。　ですから、この一撃で終わらせます」

アランの眼には龍が映っていた。　エルザの背後で圧倒的な威圧感を放つ龍が。

「“我龍”」
「……」

アランはその圧倒的な威圧感に臆す事なく、総ての闇を刃へ集める。

「感謝するぞ。　エルザ・ランディ」
「それは私の台詞ですよ。　では……」
「ああ……」

二人は足にグッと力を込める。
アランとエルザ、二人の視線が交錯した瞬間、二人は同時に駆け出した。
闇を纏った悪魔の槍。　龍の力を宿した妖怪の拳。
二つがぶつかった瞬間、閃光が爆ぜ、爆発を起こした。
辺り一面を爆煙が包み込む。
アランとエルザ、どちらが勝ったのかわからぬまま、ゆっくりと煙が晴れていく。
薄くなっていく煙の中に立っていた影は一人。　エルザ一人だった。

少し離れた場所には、闇の力が消え、闇と言う名の光を失って左眼を固く閉じたアランが横たわっていた。

「……体が動かん」

辛うじてだが意識は残っている。　だが、体が動かなかった。
自分が放った渾身の一撃も、エルザに傷を与える事さえ叶わなかった。

「俺は……敗け……」
「いいえ」

火を見るより明らかなアランの敗北を、ボロボロになったアランの帽子を手にしたエルザが否定した。

「この勝負……」

アランの横に立ち、アランの体の上に帽子を落とすと、

「貴方の勝利です」

エルザの肩から噴水の如く、血が吹き出た。

「っ……良い斬撃です」
「どういうつもりだ……。　情けのつもりか？」

勿論、こんな状態での勝利など、アランは認めなかった。

「言いませんでした？　主への忠誠心と貴方の覚悟には敗けましたって」

「なっ！　まさかそんな言葉だけで勝敗を決めたのか！？」
「はい。　駄目ですか？」

キョトンとしているエルザに、アランは呆れ果てた。
自分の言葉だけで敗けを認めるなら、戦う必要などなかったのではないのかと。

「貴方に敗けたお陰で、漸くお嬢様を止めにいけます」
「！　お前、そういう事だったのか……」

エルザのその言葉に、アランは漸く理解した。　エルザが何を考えているか。

「お嬢様のご命令は敵の排除。　ですが、私は貴方に敗北しました。　つまり、自由に動けます」
「……喰えん女だ」

主の命令は絶対。　だからエルザは、わざと敗けてみせた。　あからさまに敗けるのではなく、大怪我を負って。
これでエルザは戦闘不能となり、敵を排除しろと言う命令を達成出来なくなった。

「だが良いのか？　主を裏切る事になるぞ？」

やはり一番気がかりなのは、主の期待を裏切る事だ。
そんな事をすれば、どうなるかわかったもんじゃない。
だがエルザは、

「主の命令を訊くだけが家臣ではありません。　主の間違いを正すのも家臣の務めです」

失礼します。　そう言い残し、エルザはその場から立ち去る。
残されたアランは、エルザが敗けを認めた時の言葉を思い出し、一言呟いた。

「お前が言っても……実感が湧かないんだよ……」

少し休もうと、アランはゆっくりと瞳を、

「あああああああああ！！！！！！！！！　龍さん！！」
「げっ！！　エルザ！？」

閉じれなかった。
何事かと、アランは顔をエルザが立ち去った方向へ向ける。

「何でこんな処に居るんですか？」
「それはこっちの台詞だ！！　取りあえず離れろ！！」

その先には、自分を含め、グランツ達幹部悪魔を、現在居候させて貰っている浩輝の元へ連れて行った、と言うより押し付けた月臣龍が、さっきまで自分が戦っていた女性、エルザ・ランディに抱き付かれている光景が広がっていた。

「……どうでも良いか」

これは自分には関係無いと、アランは今度こそ瞳を閉じた。

第69話　闇の左眼と龍殺し（ドラゴンスレイヤー）　（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁
「最近雷道先生じゃなくて、仁八（じんぱち）先生に改名しようとしている雷道仁です」

闇夜
「そこは別に良いんじゃない？」

仁
「そうか。　それじゃあそろそろ質問に答えていくか。　竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の士から質問だ。　ありがとう。『みんなに質問。ディフェル、ディカエルを入れて戦ってみたいライダーは？』　ファイズだ」

優也
「ディフェルかディケイドだな」

美優
「美莉さんのディカエル！　でも手加減してね」

進
「龍騎かな」

薫
「電王、かな」

総司
「僕も電王です」

彪牙
「響鬼だぜ」

流香
「キバね」

正
「王蛇だな」

龍
「クウガ」
仁
「まぁこんな感じだ。　次は真龍帝さんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】の凍華からだ。　ありがとう。　『今回は私から質問です。亮お兄様、薫さんのお兄様は仲がいいのですか？』」
亮
「仲良いよ。　毎日メールで話てるくらいだからね♪」
仁
「主に優也と優花と椿の事だろうけどな」
闇夜
「これにて質問終了です」
仁
「この長編もそろそろ中盤。　俺の出番もそろそろだな」
闇夜
「次回は優也の出番のつもりだけど」
仁
「マジか」
終
「次回も宜しくお願いします」
闇夜・仁
（居たのか）

次回
第７０話　造られた死神
終
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第７０話　造られた死神

「それで？　何で居るんだ？」

不機嫌そうに、それでいて戸惑いがちに、龍はエルザに問う。

「何で居るだなんて酷い！　幼なじみじゃないですか！」

「尚更教えろよ！！」

よよよと泣き真似をするエルザに、龍はついつい声を荒らげてしまう。

「ああそうだ。　龍さんの知り合いに闇の力を使う人って居ます？」

泣き真似をやめ、今度はエルザが龍に問う。

「……さっきまで戦っていた悪魔が何か関係しているのか？」

「ええ」

幾分か落ち着きを取り戻した龍はすぐに理解した。

「確か、あの悪魔は闇の力を身に宿した奴に左眼を斬られたらしい。それで力が左眼に流れ込んだんだろう。　何の拍子に発動したのかはわからんがな」

「ええっと……何でしょうね……」

エルザは何の拍子に発動したかは言う気になれなかった。　何と言っても、階段から落ちた拍子に指が刺さって力が発動したなど、自分でも信じられないし、口にするのも少し恥ずかしい。　何より、

龍に言えばアランがからかわれるのは眼に見えていたのだから。

「え～と、その人って何て言う名前なんですか？」

悟られる前に違う話へと移行する。

闇の力を扱う人間は、千年以上生きてきた中でも、九人しか見たことがない。　一応アランも入れれば十人だが、アランの闇は純粋な自分の力ではないので省くとする。

その中で、一番最初に出逢った闇の力を持つ少女。

　その少女の闇とアランが使った闇が、限りなく同じだった。

今まで出逢った九人の人間達は、一人一人が性質の違う闇を持ち、誰一人全く同じ闇を使わなかった。

それなのに、アランが一人目に出逢った少女と同じ闇を持っている事が、何よりも疑問に思っていた。

「あいつの名前か。　あいつは……」

他が訊いても何とも思いはしない名前、もとい苗字だが、エルザが驚くには充分だった。

「火渡優也だ」

何と言っても、三百年前の少女の子孫だったのだから。

第７０話　造られた死神

「くしゅっ！」

敵を捜して走り回っていた優也は、自分の名前を出されているとも知らずに小さくくしゃみをした。　優也に恋している少女達や、優也と優花至上主義な兄ならいちころな、可愛らしいくしゃみだ。

「風邪か？　最近良く……！」

鼻を啜り、最近は多いと思って呟いた言葉は、目の前に現れた青年を見て呑み込んだ。

「お前……死神か？」

「ええ、終と言います。　申し訳ありませんが、貴方をこの先には通す訳にはいきません」

終のその言葉に、優也は一つわかった事があった。

「……この先に、キョウが居るんだな？」

通す訳にはいかないと言う事は、この先には何か大事なものがある筈。　死神の終がそう言って立ちはだかると言う事は、そこには死神の王、つまりこの戦いを仕掛けた張本人、キョウが居ると言う事になる。

「はい。　ですから、貴方にはここで死んで貰います」
「！」

何かを感じ取った優也は、刀を抜いて空を斬る。
本来ならそのまま振り抜かれる筈の黒刀は、金属音を響かせ弾かれる。
若干腕が痺れているのを感じながら、優也は一歩も動いていない終を見る。
優也と終の距離はそれなりに離れている。　少なくとも、飛び道具を使わなければ攻撃できない位には。
なら、動いていない終がどうやって攻撃したか。　答えは簡単。眼に見えない攻撃を放ったのだ。　と考えるのが妥当だが、優也は何処か腑に落ちなかった。

「へぇ……止められるとは思いませんでした」

無表情で、感情も何も籠っていない声で終は言うと、手を翳す。

「では、今度はもう少し速く」

一瞬、ほんの一瞬だけ、終の体がぶれた。

（来る！）

その瞬間、優也も動く。
眼にも止まらぬ速さで終の後ろに回り込み、刀を首筋に当てる。

「速いですね。　僕の後ろを取るとは驚きました」

口振りは驚いている様だが、表情も声質も初めと変わりなかった。

「それで、気付いたんですか？　僕の攻撃の正体を」

首筋に刀を当てられている事を気にもせず、終は優也に尋ねる。

「正体なんて言う程のものじゃないだろ。　何と言っても、ただ速いだけなんだからな」

「へぇ……」

表面上だけは感心している終の態度に、優也は少し可笑しく思うが、そのまま話を続ける。

「お前の能力は気配を消せる能力。　その能力を使って最高速度で相手を攻撃して一瞬で元の位置に戻る。　相手はまるで見えない何かで攻撃された様に感じる。　そんな処だろ？」

ヒット&アウェイ。　終が行っているのはそれだ。

眼にも止まらぬ程の超高速で相手を攻撃しては、ずっとそこに居たように元の位置に戻る。それに加え、気配まで消されれば、相手は本当に何が起こったかわからないだろう。

「流石は黒夜叉と呼ばれた男と言うだけはありますね。　その通り、僕の能力は気配を消す事が出来る能力です」

隠そうとする事もせず、終は自分の手の内を明かす。

そんな終に、優也はやはり可笑しく思ってしまう。

「随分と簡単に話すんだな。　嘘を吐いたりしないのか？」

「生憎、嘘を吐くのは苦手なんです」

ああ、そう言えば一つ間違いがあります。　と付け加えた終の体が、優也には少しぶれて見えた。

「僕はまだ最高速度ではないですよ？」

「！！」

優也の目の前に居る筈の終の声が、終の体がぶれた瞬間に優也の後ろから聞こえてきた。

（いつの間に！？）

慌てて終から距離を取った。　かに見えたが。

「遅いですよ」

終は優也にピッタリ張り付き、手刀を振り下ろした。

「っ！！」

優也は反射的に刀で手刀を受け止める。

優也の刀と終の手刀がぶつかった瞬間、肉を斬り裂く音が鳴る訳でもなく、鳴る筈のない金属音が鳴り響いた。

「止めなければ楽に死ねたものを」

「お前、その体……！」

刀でも傷一つ付かない終の腕を見て優也は驚く。

細い体をしていても終は死神だ。相手を殺しに掛かる程の勢いで振り下ろした手刀を刀で受け止めれば、間違いなく自分自身の手を傷付ける。　それ以前に、金属音など鳴る筈もない。

優也は一旦終から距離を取り、体勢を整える。

「わからないなら教えてあげましょうか？　僕の事を」

「何？」

相変わらず無表情で言う終に、優也は警戒する。

何が目的かは知らないが、わざわざ自分の事を教えようとしているのだから、警戒するのは当然だろう。

「安心して下さい。　何も企んではいません。　只、隠し事をするのが苦手なだけです」

「……」

優也の沈黙を了承と取ると、終は静かに語り始める。

「死神の鎌（デスサイズ）。　その名の通り、死神の武器です。知っていますか？」

「一応な……」

知らない筈がない。死神の鎌（デスサイズ）。　終が言った通り、死神の為の武器。

基本は大鎌だが、使う死神によっては刀や槍、もしくは銃など、形状は刃に留まらない。　そして、それで相手の魂を狩り取る。

それが死神の鎌（デスサイズ）。

何故優也がそこまで知っているかと言うと、必要以上にベタベタしてくる兄が死神だからだ。

「その死神の鎌（デスサイズ）。　それから僕が生まれたんです」

「！！」

死神の武器から死神を生み出す。

優也もそこまで頭が良い訳ではないが、それがどういう事かはわか

る。　人間で例えるなら、石や木から人間を生み出すのと大差は無いのだから。差があるとしたら、基盤（ベース）が死神の武器であると言う事だが、所詮は武器。　石や木と同じで無生物と変わりは無い。

「つまり僕自身が死神の鎌（デスサイズ）。　キョウ様の刃となり、キョウ様に仇為す者を狩る存在。　キョウ様の為だけの存在です」

とどのつまり、キョウに尽くす事が自分の存在価値であり、それ以外に自分には存在する価値が無いと言っている。
そんな終の口振りが、どうしようもなく優也を苛立たせた。
まるで、自分に生きる価値が無いと言っている様で。

「お前はそれで良いのか？　それじゃあ……死んでるのと変わらないだろ！」

自分の意志を殺し、誰かの命令を訊くだけの存在など、優也にとって生きているとは言えない。
昔は自分も同じだったからだ。

「心も無い道具に、生きる意味を求めても仕方がありません」
「っ！！」

歯を喰い縛り、今にも終に襲い掛かりそうになる気持ちを抑え、優也は気持ちを落ち着かせる。　と同時に、何がなんでも終の考えが間違いだと思い知らせてやろうと強く心に思った。
終の考えが正しいなんて認めてしまえば、幼馴染みの存在も否定してしまう事になるのだから。

「話も終わりにして、そろそろ戦いを再開しましょう」
「……」

そう言って終が片手を翳すと、刃を銀色に光らせた両刃の剣が現れる。　どうやら終は、自分の体を武器にするだけではなく、武器自体を召喚できるらしい。
優也も刀を構えると、闇の力を解放する。
闇の力を解放しても速さでは勝てないだろうが、対抗するにはこれ以外の方法は無い。

（大丈夫だ、頭は冷静に回っている。　あのスピードは厄介だが、冷静に対処すれば捕らえられない速さじゃない）

刀を握り締め、完全に戦闘体勢に入った優也を見て、終も剣を構え、

「いきます」

その場から終が消えた。

（右か、左か）

気配を消せる終を捕らえる為、限界まで気を張り巡らせた優也の耳に、ダンッと、何かを蹴る音が響いた。

（上！！）

上空からの攻撃を、優也は刀で受け止める。
攻撃を止められた終は、動きを止める事は無く、優也の腕を駆け抜ける。

（こいつ、空気を足場にして……！）

上空からの攻撃。　それは、自然落下してきた動きではなく、明らかに足場があるからこその動きだった。

（しかも、さっきより速い！）

何よりも、さっきまででも異常な速さだったのが、ここに来て更に速くなり、いよいよ捕らえる事も難しくなっていた。

「僕の最速は音速に匹敵する。　貴方は音速を捕らえる事ができますか？」

姿が写らない終の声が優也の耳に届いたかと思えば、優也を中心に、四方八方を縦横無尽に駆け抜けていた。

（速すぎる！）

眼にも止まらぬ処か、眼にも写らぬ終の速さに、優也は迂闊に動く事が出来なかった。

「貴方の仲間にも居る筈です。　心を持たない機械が」

「くっ！！」

優也に斬り掛かりながら、終は言う。

「誰かに造られた、心を持たない、命令を訊くだけの存在が」

何度も何度も終は斬り掛かり、その度に優也は受け止め、受け流す。

「だが彼は失敗作だった。　生まれる筈の無い心を求めているのだから」

「……」

だが、何とか受け止めても受け流しても、少しずつ傷が生まれていく。　この速さに、優也が反応しきれないのだ。

「だが僕はそんな弱い奴とは違う。　失敗作でもない」

そして終は思い出す。　自分が造り出された日を。

目覚めたら薄暗い部屋だった。
少し肌寒さを感じながら終は辺りを見渡す。

「よぉ、気分はどうだい？」

すると、終の視界に白い髪に黒いメッシュが入れた、真っ黒な和服を着た男が写る。

「……」

「まだ喋れねぇか、まぁ良い。　良く訊きな、俺の名はキョウだ。
そしてお前の名は終だ。　今日からお前は死神として、ありとあらゆるものを終わらせる存在として強くあり続けろ。　俺の為にだ」

まだ生まれたての終は、小さな子供の様に頷いた。
それ以来、終は百年以上キョウの命令だけを訊く為だけに存在してきた。

（僕に心なんて必要無い。僕はキョウ様の為の道具。　それで充分だ！）

「っ！！」

終は優也に強烈な一撃を放つ。

何とか反応した優也だが、反応するのが少し遅く、右の肩を斬り裂かれる。

「っ……」

少し表情を歪めて、左手で右肩を抑える。　すると、肩から手を離し、両腕をダランと下ろす。

「……死ぬ覚悟ができましたか。　それが正しいです」

優也が諦めたと思った終は地面に降り立つと、優也に向かって斬り掛かった。

終が接近している事に優也は気付かない。　と言うよりも、気付いていて動かないと言う方が正しかった。

そんな優也にお構い無しで、終は優也の脇腹を斬り裂いた。

（終わった）

優也の体から勢いよく血が吹き出て、終の体や周りを真っ赤に染め

る。
勝ったと確信した瞬間、体を後ろに引っ張られた。
「なっ……！」
顔を後ろに向けた終は眼を疑った。
倒したと思っていた優也が、自分の服を掴み、離そうとしなかったからだ。
「っ！！」
「うっ！！」
傷などお構い無しで、優也は体を捻り、終を地面に叩き付けた。
「はぁはぁ……お前が、あいつの事を語るな……」
表立ってきた痛みに耐えながら、終を睨み、
「あいつには心があるんだ！！」
怒声を上げた。
「俺は知ってる。　あいつは失敗作なんかじゃない！　自分がクローンだと知っても、その事実から逃げずに向き合える、誰よりも強い人間だ！！」
優也や正や流香が挫けそうになった時、気遣いなどはしようとしても出来なかったが、いつも支えてくれた。　辛い事があっても、自分には心が無いと言いながら。
そんな彼に心が無い？　そんな筈が無い。

誰かの心を支えてくれる彼に、心が無い筈がない。

「それが何です？　それでも僕が彼より強い事には変わり無い！」

立ち上がると同時に、終は優也に迫り、斬り掛かる。

「いや……」

至近距離からの攻撃を、優也は刀で難なく叩き落とす。

「っ！？」

さっきまで殆ど反応出来なかった動きに優也が反応出来た事に、終は驚きを隠しきれない。

「“鳳凰爪牙”」

黒い翼をはためかせた右足で、優也は終を蹴り飛ばす。

終は人形の様に吹き飛ばされ、壁に激突する。

「生きる意味も心も知らないお前は、仁より遥かに弱い。俺よりもだ」

「何……？」

壁に背中を預けたまま、終は優也を見上げる。

そして、今までに感じた事の無い感覚を感じていた。

その感覚が何かわからない終に向かって、優也は刀を向ける。

「教えてやる。　本当の強さを！」

第７０話　造られた死神（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁
「今回、俺の事を話していて泣きそうになった雷道仁です」

総司
「嘘ですよね……」

仁
「黙れ」

総司
「あああああああ！！！！！！！！！！」

仁
「一つ目の質問は、竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の美莉からだ。　ありがとう。　『美優ちゃんに質問。その…妄想しちゃう時とかある？／／／例えば結婚とか…／／／』」美優
「けけけ結婚って／／／！？　……（色々妄想中）　ブハァ！！」

闇夜
「鼻血吹いたぁ！？」

仁
「何を妄想したかは想像に任せる。　次は烈火竜さんからだ。　ありがとう」

闇夜
「え、美優そのまま？」

仁
「『美優は美食家と言うより大食いなんですか？』　神道は気絶しているから作者が答える」

闇夜
「え、えっと……美優は只の大食いです」
仁
「食べれたら何でも良いんだろうな。　次で最後だ。　星空の侍さんの【幻想郷の星空】のアスカからだ。　ありがとう。　『皆に質問。かき氷で一番好きな味はなんだ？　暑い時期だし、人数分送らせてもらうな』　だそうだ。　俺は梅酒だ」
闇夜
「それ大人向けだろ」
優也
「俺は甘ければ何でも良いけど、イチゴだな」
優花
「あ、私も」
薫
「私はメロンです」
正
「お、おお俺もメロン／／／！」
流香
「薫と同じの食べたいだけでもそんなにどもるのね。　私はマンゴー」
進
「あ、じゃあブルーハワイ」
総司
「レインボーで」
彪牙
「いつ生き返った……。　あぁ、俺は宇治金時」
龍
「……俺もだ」
闇夜
「美優は何でもいけるので、何でも喜びます」

仁
「今回はこれで終わりだ。　次回も優也の出番だ。　もうすぐで俺の出番もあるから楽しみにしててくれ」
闇夜
「正も居るからね。　次回も宜しくお願いします！」

次回
第７１話　漆黒の閃光ＶＳ音速の死神
優也
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第７１話　漆黒の閃光ＶＳ音速の死神（前書き）

今回、仮面ライダーを元にした技が登場します。
お気に召さなければ申し訳ありません。
だが後悔はしていない！　（調子乗ってすみません……）
大丈夫と言う方はどうぞ！

第７１話　漆黒の閃光ＶＳ音速の死神

仁は知っている。　生きる意味も、心を持つと言う事も。　全部、地獄の様な日々から教えられたから。
終は知らない。　生きる意味も、心を持つと言う事も。　生まれたての赤ん坊の様に何も知らない。　誰も教えなかったからだ。
だったら俺が教えてやる。
生きる意味と心を持つと言う事が、どれだけ大切か。

第７１話　漆黒の閃光ＶＳ音速の死神

（弱い？　僕が……？）

優也や仁よりも自分は弱い。　そう優也に言われた終は、今までで感じた事の無い感覚を覚える。
それが何かはわからないが、一つだけわかる事があった。

（僕は弱くない。誰よりも強い！）

優也の言っている事が間違いだと言う事だ。
ゆらりと立ち上がった終は優也を睨み付ける。
その表情は優也から見れば、怒っている様に見えた。

「本当の事を言われて怒ったか？」
「……うるさい」

優也の挑発染みた言葉を、終は否定するが、誰がどう見ても怒っている様にしか見えず、説得力は皆無だった。

「怒っていると言う事は、お前にも心があると言う事だ」
「黙れ……」

普段よりも薄く開かれた眼から、紅い紅い、ルビーの様に輝く瞳が、終を射ぬく。
その眼が、終は気に喰わなかった。

「お前はまだ何も知らない赤ん坊みたいなものだ。　だから、これから色んな事を知っていけば良い」
「黙れ！」

ここに来て、初めて終は激昂した。

「ムキになって否定するのは、自覚していても、認めたくない証拠か？」
「っ、殺す……！」

強くあり続けなければならないと言う存在意義を否定された挙げ句、更に侮辱されたと感じた終は、冷静にはなれなかった。
もう一本の剣が終の手に現れたかと思えば、終の体中から大鎌の様

な刃が、服を突き破って生えてきた。

「！」

その姿を見て、流石に優也も驚いた。
背中からは五本程の刃が生え、両肘からも一本ずつ刃が生えて、踵にも短めの刃が生えていた。

「全身が武器か」

その姿を見れば、終が武器から生まれたのだと、改めて思い知らされる。

「この姿を見ても……まだ同じ事が言えますか？」

幾分か冷静な口調に戻ったが、声色は戻っていなかった。
それに対し、優也は、

「何度でも言ってやる。　お前にだって心はある！」

考えを曲げる事はなかった。

「っ！！」

歯軋りをした後、終は優也に向かって突っ込んでいった。

「くっ！」

その速さは、さっきよりも更に速くなっており、優也は驚く暇も無く、横に飛んで回避する。

（また速くなった！　これが終の全力か！）

終は今度こそ本当の音速を出し、優也にとどめを刺しに来た。

流石にボロボロの体で、長時間戦って勝てるとは優也は思わなかった。

だが逆に、冷静さを失った終が相手なら、勝てる可能性も高くなった。

（まだ使った事は無いが考えてる暇はない。　やるしかないか）

余り思い出したくはないが、史哉との修行を思い出す。

「はぁはぁ……！」

優也は何かから逃げる様に野山を駆けていた。

「ほれほれ後一分だ。　逃げろ逃げろ」

そんな優也を、刀を振り回しながら史哉が追い掛けていた。

「何で……鬼ごっこなんて……」

「さっき説明しただろ。　闇の力を使う為の体力作りだって」

汗を滴らせながら、愚痴っぽく呟く優也に、呆れた様に史哉が言う。

史哉の言う通り、優也は闇の力を使う為の体力作りをしているのだが、何処からどう見ても、凶器を持った大人が少女を襲っている絵面にしか見えなかった。　もう一度言っておく、大人が少女を襲っている絵面にしか見えなかった。

（何か今可笑しかった様な……）

「考え事してる暇なんか無いぞ。　後二分」

「後二分……って！　増えてるじゃないですか！？」

思わずスルーしかけた優也だったが、制限時間が増えている事に気付き、抗議する。

「チッ、バレたか……。　気のせいだ。　ほら、後五分だ」

「ふざけるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

結局その後、優也の必死な懇願で一旦休憩になった。

休憩中、優也は地面に寝そべり、その横に優花が座り、史哉は木にもたれ掛かっていた。

「貧弱だなお前」

「一時間も、史哉さんに追い掛けられたら……誰でもこうなりますよ……」

「あはは……」

修行方法は優也が一時間逃げ続けると言う、至極単純なものだったのだが、追い掛ける方が問題だった。　何と言っても、優也の師匠のあの史哉だ。

優也が何処へ逃げようとすぐに追い付き、優也が何処へ隠れようとすぐに見付けてしまう。　しかも刀を振り回してくるのだ。

弱音の一つや二つは言いたくなっても仕方ない。　と言うか泣きた

くなっても仕方ない。

「休憩ついでに、闇の力の簡単な復習といくか」

「……」

史哉は小さな岩に腰掛けると、木の枝を手に持ち、優也も体を起こして話を訊く。

「良いか？　お前が闇の炎を使った時の図式がこうだ」

闇の力⇒想像⇒変化⇒闇の炎。　と言う図式を地面に書いていく。

「お前が闇の炎を使えるのは、お前の闇をお前が想像したものに性質と形状を変化させたからだ。　この場合は炎だな」

成る程と、優也と優花は頷きながら訊く。

「この法則でいけば、その闇の力は色んな応用が出来るって訳だ」

「炎以外も出せるって事ですか？」

「極端に言えばそんなとこだ」

優也が創り出そうとすれば、炎以外でも創り出す事が出来ると言う。

「だがそれには想像力と力の制御が必要になってくるし、強力な力を使おうとすればその分、反動も大きくなる。　しかも体力と霊力も大幅に使っちまうから燃費も悪い。　言いたい事はわかるな？」

「乱発は禁止って事ですね」

「そうだ」

確かに、話を訊く限り燃費が悪そうだが、強力な力には間違いない。

この力を使いこなす為には、まずは体力作りからだと、優也はさっきの修行もしっかりしようと思った。

「じゃあそろそろ始めるぞ」

「……史哉さん？　まだ五分しか休んでないんですけど……」

休憩に入る前、史哉は十分休憩と言っていた筈だったのだが、

「時間が無いのにそんなに休んでられるか。　言っとくが、五分休憩毎に実戦、体力作りの繰り返しだ」

「マジでか……」

「頑張って、優也……」

生きて帰れないかも知れないと、優也は項垂れ、そんな優也を優花が励ました。

「総てを縛り付ける漆黒の鎖……“闇の鎖（ダークネス・チェーン）”！」

優也を中心に、闇が円を描く様に地を這うと、その中から黒い鎖が何本も現れ、ビルに突き刺さる。

まるで黒い鎖で出来た蜘蛛の巣の様に。

これなら例え音速で動いていようと、終を捕らえられる。

「こんなもの！」

音速で動いている終は、邪魔な鎖を斬り裂こうと剣を振るった。
普通の鎖ならそれで粉々に砕け散るのだろうが、

「！！」

ビクともしなかった。
全くビクともしない鎖に、終が気を取られているスキに、優也は終を倒す為に闇の力をコントロールする。

（相手が音速なら、それよりも速く動けば良い）

優也は闇を思い通りに使える。
反動が大きければ大きい程、大きな力を発揮する。　それが優也の闇の力。

「刹那を駆け抜ける漆黒の閃光……」

闇の力が黒い電気の様に、優也の体を伝わっていく。

「“闇の加速（ダークネスアクセル）”」

黒いコートが弾けるように消え去ると、両手首と両足首に黒い翼が閉じられた状態で現れた。

（何だ、あの姿は？）

黒いコートが消え身軽になった様に見えるが、逆に防御が疎かになった様に見えた。
何を仕掛けてくるかわからないが、自分のスピードなら大丈夫だと

言う考えもあった終だったが、優也の今の姿を見て、言い知れぬ不安を感じ、鎖を斬る事を諦め一旦距離を取る。
それは、終が頭で考えた事か、それとも、

「無駄だ。　闇から逃げられると思うな」

音速で遠ざかっていく終を見て、優也は呟く。　同時に、閉じられていた黒い翼が、黒い羽根を撒き散らして羽ばたいた。
終が優也の黒い翼が開いた事を確認した瞬間、終の腋を漆黒の閃光が駆け抜けた。

「何!?」

終が後ろを振り向いた瞬間、今まで遥か前方に居た優也が、まるで瞬間移動したかの様に背後に居た。　それが瞬間移動では無いことは終もわかっている。
只、認めたくないだけだ。　優也が自分以上の速さで移動した事に。
だが、終には自分の速さを超えられたと悔しがる暇もない。
金属音を響かせ、終は優也の斬撃を受け止める。
あまりもの速さに、終でさえも受け止めるのがギリギリだった。

「くっ!」

刀を弾くと、終は音速の世界に入る。
優也も終を追い掛けると、二人の姿が消えた。
眼にも写らない戦いでも、音だけはしっかりと聞こえる。　何度も何度も金属音が鳴り響く中、優也と終の声が聞こえてくる。

「僕は弱くない。　僕は強い!　強くあり続けなくちゃいけないんだ!」

ずっとそれだけの為に戦ってきた。
強くあり続ける事が終の存在意義なのだから。

「強くあり続けるなら、心は必要無いか？」

刀で斬り掛かりながら、優也は問い掛ける。

「そうです……」

斬撃を受け止めながら、終は答える。

「心があれば迷う。　迷えば弱くなる。　だから僕には、心なんて必要ないんです！」

心があるから迷う。　戦いで迷えば死ぬ。
だからこそ、終は心を否定し続ける。

「違うな」

そして優也は、心を認め続ける。

「心があれば確かに迷うかも知れない。　だがな、迷いを乗り越えるからこそ人は強くなれる。　それは死神も同じだ」

一瞬、剣を握る終の手が緩んだ気がした。

「それに、やっぱりお前には心がある。　心が無いのなら、強くあり続けようとも思わない。　俺の話に耳を傾ける必要も無い。　怒りを表す必要も無い」

「怒り……？」

あの何かわからない感覚。　あれは怒りだったのか？　自分の存在を否定された事に対する怒りだったのか？　自分には感情も無い筈なのに。

今までに無い程、終は混乱し始めた。

「何より……」

今まで一番大きな金属音を響かせ、優也の刀と終の剣がせめぎ合う。

「お前はキョウの為に戦っているんだろ？　誰かの為に戦える奴に、心が無い筈がない」

「……！」

優也が刀を振り切った事で、二人の距離は大きく開いた。

優也はすぐさま終へと向かって行くが、終は呆然としたまま動かなかった。

（心？　心って一体……？　誰かの為に戦う事が……心があるって事なのか？　……わからない）

武器から生み出されてから、終はキョウの命令通りに動いてきた。

キョウを護る事は勿論。　殺せと言われれば殺してきた。

それ以外は何も教えられなかった。　終も、それが当然なのだと思っていた。

自分は道具だからと。だが今日、この場で初めて出逢った少年に、道具じゃないと言われた。

初めは気に喰わなかった。　自分の存在を否定されたからだと。

だから少年の考えを否定してやろうと思った。　なのに今は、何故

か否定する気になれなかった。

「僕は……」

地響きがしたかと思えば、終の懐にはいつの間にか、闇を纏った刀を手にした優也が居た。

呆然としたままの終は、何も考えず、ただただ条件反射で両方の剣を交差し、自分を護る盾にする。

「……“闇空一閃（あんくういっせん）”」

銀に光る刃が、黒を纏って粉々に砕け散る。

終の心を塞いでいた殻が砕け散るかの様に。

次の瞬間、終は空に打ち上げられる。遅れて背中に衝撃が伝わる。

背中の刃の間を縫って、優也が終を蹴り上げたのだろう。

抵抗も出来ないまま空へ上がった終の体は、ある地点でピタリと止まった。

終は空中に足場を作れるが、それは音速で動いている時だけの話。

何より今の体勢で、空中に留まる統べなど終には無かった。

ならば原因は、終の周りにある炎の様に揺めきながら浮いている黒い何かだろう。

大きさで言えば、人間の大人一人分位の大きさ。

それが終の両隣に二つ。終の背中に二つ。そして、終の真上に一つ。計五つ浮いていた。

「“鳳凰閃火”」

声が聞こえると、一つが黒い鳥に姿を変え、黒い閃光が横切った瞬間、終の体に打ち込まれる。

そしてもう一発と、二つ目の黒い鳥が、黒い閃光と共に終を攻撃す

る。
黒い閃光が横切る度に三つ、四つと、黒い鳥が終を攻撃し、残ったのは終の真上にある一つ。
それも黒い鳥へと姿を変える。
これを喰らえば死んでしまうだろうと、頭ではわかっていても、終は呟く事しか出来なかった。

「間違っていたのか……？」

黒い羽根を撒き散らしながら、黒い閃光が終の眼に写った瞬間、砂埃を巻き起こし、轟音が鳴り響いた。
耳をつんざく様な轟音は、終の耳にも伝わった。
轟音は伝わったが、死を伝える痛みがいつまで経っても伝わってこない。
死に対する恐怖からか、終はいつの間にか閉じていた瞳を開いた。
初めに写ったのは優也の顔だった。
纏っていた闇や、手足の翼が消え、代わりにボロボロになった黒いコートを着た優也が、終の顔を覗き込む様に見ていた。
次に写ったのは、自分の顔の横に突き刺さっている、見事なまでに漆黒な黒刀だった。
終は理解した。　何故自分があれ以上のダメージを受けなかったのか。
優也が攻撃を外したからだ。　正確には、わざと外したのだろう。
だからこそ、終は更に混乱する。
あのまま攻撃していれば、自分を殺す事が出来たのに、わざと外した事に。

「何が本当に正しくて、何が本当に間違えているか、俺にもわからない」

混乱していても、何故だか優也の言葉ははっきりと聞こえた。

「お前の答えはお前の力で見付け出せ。　それは誰かの為じゃない。
　お前自身の為にだ」

まるで自分自身に言い聞かせている様な優也の言葉を、終は頭で理解しようとは思わなかった。
頭で理解しなくても、何故だか理解出来たからだ。

「もし迷ったら……手くらいは引っ張ってやる」

そう言い残すと、傷だらけの体なのにしっかりとした足取りで歩いていった。
その後ろ姿を、終は上半身を起こしながら見ていると、いつの間にか刃が消えている自分の体を見た。
ついさっきまで自分は武器で道具だと主張していた姿ではなく、人間の様で一人の死神の姿をしている自分に、穏やかな気持ちになった。
何故かはわからなかったが、恐らくこれが嬉しいと言う気持ちで、心なのだろうと思った。
優也の仲間の一人が心を求めていて、それが無駄と言ったが、今は無駄とは言えない。
終も何処かで心を求め、自分は道具じゃないと思っていたからだ。
終は起こした体を、もう一度地面に寝かす。
何が本当の答えか、見付け出してみよう。
そう心に誓うと、一筋の涙を流して瞳を閉じた。
その涙はきっと、自分の本当の気持ちに気付けた事への嬉しさからだろう。

第７１話　漆黒の閃光ＶＳ音速の死神（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁
「初めの質問だ。　竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の聖麻からだ。　ありがとう。　『雅に質問。進にしたいこと、されたいことは何だ？』」

雅
「何よこの質問！？」

闇夜
「例えばで良いから答えて」

雅
「そ、そんな……／／／　言える訳無いでしょ／／／！！」

闇夜
「逃げた！！」

仁
「当たり前の反応だな。　次はＴＧＲＳＫＴＳＴＰＢさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】の翔からだ。　ありがとう。　『皆の好きな色は？』　そうだな。　俺は金だな。　イメージカラーだ」

優也
「俺は黒だ」

美優
「私は白だよ！」

優花
「私も白」

進
「俺は青だよ」

薫

「私は水色です」
総司
「藍色ですね」
彪牙
「あ～、赤かな。　情熱の赤って言うしよ」
流香
「私は銀かしら」
正
「……赤だ」
龍
「緑」
仁
「何人か被ってて様子も可笑しい奴が居たが、こんな感じだ。　次は伽藍さんからだ。　ありがとう。『優也、進、美優に質問。僕が書いている諸事情の小説で会ってみたい人はいますか？』」
優也
「駿だな。　シスコンだけど良い奴だしな」
美優
「何となくだけど、楓さんかな」
進
「ハヤテだよ。　ほっとけないんだよな」
仁
「実はその小説の駿から質問が来てる。『闇夜さんに質問。優也、美優、進、雅に面白い二つ名を付けるとしたらどんなになりますか？』」
闇夜
「優也は【ツンデレ男の娘】」
優也
「誰が男の娘でツンデレだ！！　って言うか、それ二つ名なのか！？」

闇夜
「美優は【大食いエンジェル】」
美優
「良く意味がわからないんですけど……」
闇夜
「進は【ジミードラゴン】」
進
「べ●ードラゴンぽく言うな！！」
闇夜
「あ、ちょっ！　火とか矢とか水とか危な……ああああああああ！！！！！！！！」
仁
「自業自得だ。　次で最後だ。　星空の侍さんの【星空の幻想郷】の紫乃からだ。　ありがとう。　『作者の闇夜さんに質問。この小説でSなのは龍くんだけど逆に一番Mなのは誰なのかしら？』」
闇夜
「痛たた。　え、ドM？　そうだな～、今の処、総司と亮かな。　けど、亮は好きな人限定だから。　やっぱり一番は総司だと思います。　奴はその気になれば誰からのどんな攻めも快楽に変わります」
仁
「化け物だな」
闇夜
「けど、似合うでしょ？」
仁
「気持ち悪い」
闇夜
「あはは……」
仁
「質問はこれで終わりだ」

闇夜
「これからも【黒と白の物語】を宜しくお願いします！」

次回
第７２話　吸血鬼の姉妹と雷の竜
流香
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第７２話　吸血鬼の姉妹と雷の竜

真っ赤な血の斑点を道に落としながら、優也は歩いていたが、一度壁に寄り掛かると、座り込んでしまった。

「流石に……無理し過ぎたな……」

コートを脱ぐと、破いて傷口を縛り付けていく。

（……皆は……大丈夫なのか……）

今現在戦っているであろう、仲間達の身を案じる。

亮や竜也、紗理奈や浩輝を心配するだけ無駄だ。　仁と正も、心配するだけ無駄とは言わないが、何とかすると思う。

心配なのは進と雅と真司とナミだ。

ナミは妖怪だから多少は平気かも知れないが、他の三人は力が有るだけで戦闘は素人だ。

今は無事である事を祈るしかない。

何よりも、一番心配なのは流香だ。

小さな頃からの付き合いだから、何か変化が有ればすぐわかる。

さっき見た流香はどうにも様子が可笑しかった。

凄く思い詰めているかの様な表情で、このまま放っておいて良いのかと思わされるくらい。

だが、今流香の心配をしなくても大丈夫だろう。

勘だが、今頃流香の傍には、意外にお節介な金髪のヘビースモーカーがいて、守ってくれている筈だ。

所詮勘だが、意外と優也の勘は良く当たる。

「よし、行くか」

止血を終えた優也は立ち上がり、この先に居るであろうキョウの元へ走る。
今、自分に出来る事を精一杯する為に。

第72話　吸血鬼の姉妹と雷の竜

けたたましい音を鳴らして、一匹の蝙蝠が銀髪の少女を追い掛けていた。
少女は浮かない表情をしたまま歩いていると、ふと止まって、追い掛けてきている蝙蝠へ振り返った。

「居るのはわかっています。　出てきたらどうです？　お姉様」

居るのは一匹の蝙蝠だけ。　少女は何処にも居ない姉に向かって言う。
すると、至る処から夥しい数の蝙蝠が現れ、一ヶ所に集まっていく。
集まっていく蝙蝠は、少しずつ人の姿を成していく。
そして現れたのは、黒い日傘を手にした、金髪のロングヘアーの黒いドレスを着た女性、ルナだった。

「良く気付いたわ。　流石私の妹と言った処かしら？」

優しく、何処か冷めた微笑みを銀髪の少女、流香へと向けた。
この笑みを作らせているのが自分だとしたら。　そう思うと、流香は胸が締め付けられる様な気持ちになった。

「それじゃあ、答えを訊かせて頂戴。　私達と一緒に来るか来ないか。　賢い貴女なら、どう答えるべきかはわかっているわね？」

「……私は」

あれからずっと悩んで悩んで悩み続け、何度も何度も考え続けた答え。
黙ったまま俯いていた流香は、意を決し、顔を上げてルナの眼を真っ直ぐに見つめた。

「一緒には行けません。　私はこの世界を守ります」

ルナ達を選べば優也達と、優也達を選べばルナ達と。　どちらを選ぶにしろ、流香にとって大切な人と戦わなければならない事に変わりはない。
だが敢えて、流香は優也達を選び、ルナ達と対立する道を選んだ。
有る意味、優也達と戦うよりも辛い選択。　たった一人の肉親を敵に回して戦わなければならないと言う、とても辛い選択。
それでも流香は後悔していなかった。

「……何故？」

「大切な人達がいます。　皆が笑顔でいられる為に、世界を壊す訳にはいきません」

世界が無ければ、皆と居る事も出来なければ笑い合う事も出来ない。
だから辛くても、流香はこの選択をした。

「世界は守る。　そして、貴女も救ってみせます」
ルナも被害者。　そしてまだ救われていない。
だったら、妹である自分が救い出してみせる。
流香はそう考えていた。
もしもの話だが、優也がルナの立場であったなら、流香はルナを選んで優也を救おうとしただろう。

「笑顔を奪ったのは誰……？」
「え……？」
「私達の両親の笑顔を奪ったのはこの世界でしょ！！」

笑みが消え、憤怒の表情でルナは激昂する。
この場に居れば、誰もが臆し、逃げ出してしまいそうな怒りと殺気だが、流香は臆さなかった。
流香はわかっているからだ。　この怒りと殺気は流香に放っているのではなく、世界に対して放っているものだと。　その中に悲しみが混ざっている事も。

「お父様も、貴女のお母様も、私のお母様も、仲の良かった子達も、皆この世界に殺されたのよ！！」
「ま、待って……待って下さい！」

ルナの気持ちはわかる。　だが、今のルナの言葉の中に、可笑しな処があった。

「お姉様のお母様が……殺された？」
「……えぇ」

「でも、お父様と喧嘩して離婚したって……」

昔、流香は間違いなくそう訊かされていた。　父と喧嘩して離婚したと。

子供の頃の記憶なんて宛にならないかも知れないが、流香ははっきりと覚えていた。

だから、ルナが言っている事には矛盾が生じる筈だ。

「あれは嘘よ。　本当は、吸血鬼狩りにあった時に殺されたわ」

「！！」

嘘ではない。　ルナの表情を見ればわかる。

だとすればルナは、

「二百年くらい前に、お母様も、仲の良かった使用人の友達も……皆死んだのよ……」

二度も母親を失ったのだ。

それに加え、友達まで失って。

「お父様とお母様、そしてあの子達の無念を晴らす為に世界を壊す！　そしてこれ以上失わない為に、貴女にも帰って来て貰うわ！　貴女の言う大切な人達を殺してでもね！！」

「なっ！？」

瞬間、ルナを雷撃が呑み込んだ。

「っ！　これは！」

巻き起こる砂埃から手で顔を護りながら、雷撃が飛んで来た方へ目

線を向ける。
そこには、電気が迸る銃を構えている仁が居た。
「様子が可笑しいと思ったら、こう言う事情か」
煙草に火をつけながら、仁は流香の元へ歩み寄る。
「ひょっとして……初めから居た？」
「いや、お前を見付けたのはさっきだ。　それより、後は俺に任せろ」
仁は流香を守る様に立つと、煙が立ち込める中に見える影を見据える。
「不意打ちとは……不粋な輩ね」
影が消えた瞬間、目の前に現れたルナに、仁はビルの中まで吹き飛ばされる。
「仁！！」
「貴女はじっとしてなさい」
流香の足下に魔方陣が現れると、流香を赤黒い結界が包んだ。
「お姉様！！」
「安心して。　それは貴女を傷付けはしない」
そう言うと、ルナは仁が吹き飛ばされたビルへと向かった。
「ま、待って！」

いくら仁でも、生粋の吸血鬼であるルナと戦えば只では済まない。
そしてそれはルナにも同じ事が言える。
必死に結界を破ろうとするが、どれだけ叩いても結界が壊れる気配はない。
流香はその場に座り込む。
「やめて……お姉ちゃん……」

「ゲホッ……その細腕でどんな馬鹿力だ……」
「人形風情に言われたくないわ」

額の血を手で拭き取って言う仁に対し、日傘を閉じて中へ入って来たルナはまるで、ゴミを見る様な眼で仁を見て言う。

「やっぱり知られてたか」
「有名よ貴方。　感情が欠落した失敗作のクローンってね」
「誉めても何も出ないぞ」
「誉めてないわよ！」

ルナが仁へ近付く為の予備動作をしたのを確認した瞬間、仁は黄竜の力を借りた完全体になる。
高速で接近してきたルナの、高速の手刀を銃で受け止める。

「フン……」

日傘を手離すと、空いた手を仁に向かって翳す。

「！」

「お返しよ」

次の瞬間、ルナの掌から赤黒い魔力が大砲の様に放たれ、仁を呑み込んだ。

「……逃げたか」

日傘を拾って呟く。

あまり広くないビルの中へ飛び込んだので、大きな攻撃は出来ない。

だからルナは少し弱めて攻撃したのだ。

弱めてとは言っても、当たれば痛いでは済まない程の威力だ。

マトモに喰らったのなら、仁は少し先で倒れている筈だが、何処にも見当たらなかった。

と言う事は、仁は直撃する寸前か、直撃した後に逃げたのだろう。

「かくれんぼが好きなら付き合ってあげるわ。　鬼は勿論、吸血鬼である私よ」

ルナの体から、一匹の蝙蝠が飛び去った。

仁は現在、ルナが居る階より一つ上の階で息を殺して隠れていた。

勿論、隠れる為に元の姿に戻っている。　完全体では羽が邪魔だからだ。

（パワースピードは完全体の俺よりも上。　砲撃は手加減してもあれか。　幸先悪いな……）

身体能力は常人よりも少し上。完全体になっても、通常状態の優也と正とどっこいどっこいと言った処。　精々勝てるのは、銃の腕と力の制御、後は頭が良く回るくらい。　自分より強い相手は、策を張り巡らして戦わないと勝てない。
それが仁だ。

（ビルの中には日光が入らない。　ここで戦うのは不利だな）

息を殺し、足音を消して廊下を進む。

（見付からない内に窓から出るか）

後少し進めば窓があり、そこから日光がある外へ出る事が出来る。
流香と違って、生粋の吸血鬼であるルナなら、日光の下ではマトモに戦える筈がない。
だが仁は気付いていなかった。
背後の蝙蝠に。

「何処に行くのかしら？」
「がっ！！」

曲がり角から声が聞こえた瞬間、仁の体が左方へ吹き飛ばされた。

「折角暗い場所にご招待したのに、断りも無く出ていくのは無礼で

すわよ」
「悪いな。　礼儀は習ってない」
上体を起こし、声のする方へ顔を向けると、薄暗い中でも一際目立つ赤い眼をしたルナが居た。
「良く場所がわかったな」
「賢い子が居るのよ」
一匹の蝙蝠が、ルナの元へ向かう。
その蝙蝠を見て仁は気付く。
「見張られてたか」
蝙蝠相手なら見付かっても仕方がない。
蝙蝠は音を反響させ、周囲の状況を知る、エコーロケーションを行なっている。　しかも、発しているのは3万から10万ヘルツの超音波で、人間の聴覚ならば聞き取る事も出来ない。
つまり、隠れても無駄と言う事だ。
（さてと、どうするか）
隠れてもすぐに見付かる。　真っ向勝負は不利。
総合しても仁が不利な状況には変わらなかった。
「そろそろ覚悟を決めなさい。　今なら楽に殺してあげるわ」
「殺される覚悟なんて願い下げだ」
不利な状況なのだが、仁は相変わらずペースを崩さない。
全くペースを崩さない仁が、ルナは気に入らなかった。

「それはそうとお前、流香の姉だったな」
「……それが何？」

やはり失敗作かと、ルナは改めて思う。
ここまで追い詰められておきながら、見事なまでに感情を顕にしない事に、普通の子供を求めて仁を造り出した人間に同情した。

「そんなので良く、流香の姉だと恥ずかしげも無く言えたな」
「っ！　貴様！！」

仁に遅い掛かろうとした瞬間、雷撃がルナの頭上の天井を突き抜けた。
当然、砕けた天井は瓦礫となり、ルナへ降り注ぐ。

「こんな物！」

落ちてくる瓦礫を素手で弾き、仁に向かおうとするが、仁は既に銃へ電撃を溜め、銃口を天井と壁へ向けていた。

「もう遅い。“雷影（らいえい）”」

銃口から放たれた雷撃が、影が別れる様に分裂していき、十数発の雷撃になる。
雷撃は天井も壁も突き破り、ビルは形を保てず崩れ、瓦礫の山へと変わった。

「滅茶苦茶するわね……」

魔力で作り出した結界で瓦礫から身を守りながら、仁の行動に呆れ

果てる。
すると、瓦礫の中から黄色い何かが飛び出す。

「っ！　囮か！！」

一瞬気を取られたルナだったが、すぐさま振り向き、手にしていた日傘で雷鳴の剣を受け止める。

「雷鳴刀（らいめいとう）を受け止めるとはな。　何でできてるんだかその日傘」
「ただの日傘よ。　只、魔法で少し頑丈にしてるけどね」

仁の雷鳴の剣。　仁が雷鳴刀（らいめいとう）と名付けている剣の斬れ味は、悪魔の体を斬り裂く程だ。
それを只の日傘で止められる筈がない。
日傘に何かしているのは明確だった。

「それじゃあ、お前が太陽の下に居られるのも魔法か？」
「何も準備しないで来る筈が無いでしょ」

今、仁とルナは太陽の下に居る。
仁の体に何も問題が無いのは当然だが、吸血鬼であるルナの体に何の問題が無いのは可笑しい。
恐らく、その準備とやらが魔法なのだろう。

「昔、知り合いの魔女に魔法を習ったのよ。　かじった程度だけど、短時間なら太陽の下でも活動できる。　それはそうと、さっきの話の続きを訊かせて頂けないかしら？」
「ん？」

惚けてる仁に業を煮やしたのか、ルナは仁を蹴り飛ばす。

仁も銃で受け止め、吹き飛ばされながらも、何とか踏ん張って地面に立つ。

「貴方が言ったんでしょ？　私がルカの姉を恥ずかしげもなく名乗るだとか何とか！」

声を張り上げると、赤黒い魔力を放出し、ルナは真っ赤な羽を出す。そして、魔力弾を仁に向かって放つ。

「その事か。　俺も言いたい事が言わせて貰う」

素早く雷鳴刀を銃に戻し、魔力弾を撃ち落としながら、ルナを睨み付けた。

「何故流香から逃げる？」

「なっ……！」

一瞬、ルナは動きを止めるが、歯を喰い縛り、すぐに魔力弾を撃つ。仁はルナの答えを訊く気は無いのか、銃を撃ち続け、少しずつルナへと近付く。

「何故流香と向き合わない。　何故流香の言葉を訊かない。　何故流香の気持ちに気付かない。　何故自分のしている事が死んだ奴等の努力を無駄にしていると気付かない」

まるで鋭いナイフを、胸に突き立てられている様な感覚を覚える。仁の言っている事など、全然検討外れの筈なのに。　何故、こんなにも胸が苦しくなるのだろう。

ルナはわからなくなって叫んだ。

「黙れ！！」

言い返す言葉が見付からないまま、叫んだその言葉は、仁の言った事が本当だと言っている様に見えた。

「何故自分の本当の気持ちに気付かない。　何故誰も頼ろうとしない」

「黙れって言ってるでしょ！！」

魔力弾を放つのを辞め、手に込めた魔力を仁に向かって放つ。

規模は同じだが、ビルの中で放った時とは違い、威力は段違いだった。　当たれば怪我では済まない程に。

だが、

「何故……」

仁には容易く躱される。

そして、仁は逆手に持った雷鳴刀でルナに斬り掛かる。

ルナは日傘を盾にしたが、

「……ッ！！」

破片が飛び散る事も無い程綺麗に、日傘は斬り裂かれた。

「一人で抱え込もうとする」

その言葉がとどめとなった。

ルナは今度こそ動きを止めた。

「お前は一人じゃない筈だ。　お前の仲間も、お前の妹も、お前が

抱えているものを理解してくれる筈だ」
「っ、貴方に何がわかるのよ！！」
剣の様な姿に変わった魔力で、ルナは仁に斬り掛かる。　少しかすったが、仁は後ろに飛んで躱す。
「確かに、俺にはお前の事なんてわからない。　だがな、一つだけわかる事がある」
バチッと、電気が迸る銃を空に向かって構える。
「流香はお前が思っているより弱くない」
「っ！！」
「姉は妹にとって頼られる存在なのは当然だ。　だがな、それは逆も言える。　姉が妹を頼っても良い筈だ。　姉妹なら当然だろ」
一緒に暮らしていた頃は、いつも自分の傍をくっついて離れなかったルカ。　何年経っても変わらないとばかり思っていた。
だが、流香が強くなければ生きてこれなかった筈。　こんな処まで来なかった筈。
もしルナがその事に気付いて、流香とちゃんと向き合っていれば、ルナの心はもっと早く救われていたかもしれない。
銃声が響いた瞬間、銃口から放たれた雷撃が空へと向かう。
すると、放たれた雷撃が姿を変え、黄色の竜が姿を現した。
「！　聖獣の……実体化……」
「これ以上、俺が何を言っても意味は無いだろう。　だから、少し大人しくなって貰う」
竜は仁の後ろに降り立つと、仁は煙草を取り出して火をつけて吸い

始める。

「あいつの声を訊いて貰う為にな」

第７２話　吸血鬼の姉妹と雷の竜（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁
「活動中の雷道仁です。　と言う訳で初めの質問だ。　ＯＯＯＴＧＬＳＴＳＴＰＢさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】の冷司からだ。　ありがとう。『闇夜へ。キャラの中で俺と互角に戦える奴はいるか？いるなら戦いたい』だそうだ」

闇夜
「冷司の強さがどれ程かはわからないから難しいけど、互角、それ以上に戦えそうなのは史哉かな」

仁
「と言う訳で、史哉を殺しに来ても良いらしい。　と言っても、史哉は死なないからな。　何と言っても……」

闇夜
「ストーップ！　ネタバレ禁止！」

仁
「はいはい。　次は竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の士からだ。　ありがとう。『優也に質問。自分はどれだけモテないと思ってる？』」

優也
「え、そりゃあ巨大隕石が地球に墜落して、落下地点に丁度進が居て、何やかんやで進以外に被害が出ないくらい有り得ないだろ。俺がモテるなんて」

進
「何でそこに居るんだよ俺！？」

仁
「それくらい有り得ないんだろう。　実際はモテるがな。　次は沢

藤　蜜柑さんの【大空あっと非現実的学園生活。】の一護からだ。
　ありがとう。『この小説で一番物を大事にするのって誰だ？あと部屋の掃除がうまいやつ』」
闇夜
「優花と薫辺りが一番物を大事にすると思います。　部屋の掃除が上手なのもこの二人です」
仁
「確かにそんな感じがするな。　次は星空の侍さんの【幻想郷の星空】の将からだ。　ありがとう。『皆に質問だ。無人島に一つだけ持っていくとしたら何を持っていく？』　フッ、愚問だな。　サバイバルナイフに決まってる」
優也
「ベタだな。　俺は甘い食べ物」
美優
「役に立つ物持っていこうよ。　私は食べ物！」
優花
「美優もね。　私はこのネックレスかな。　ちゃんと持っとけって言われたし」
薫
「それじゃあ私は連絡機器です」
進
「じゃあ水で」
総司
「地味ですね。　僕は双眼鏡です。　運が良ければ水浴びが見れるかも」
彪牙
「無人だって言ってんだろ。　俺は食料だな」
流香
「私は日傘」
龍

「苛められる奴」
正
「物じゃねぇし。　俺はロープとか縛れるもん。　イカダでも作って帰る」
闇夜
「自力かよ」
仁
「質問はこれで終わりだ」
闇夜
「次回も宜しくお願いします！」

次回
第７３話　小さな黄竜
仁
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第７３話　小さな黄竜

この時代で闇の力を身に宿している者の名前を訊いて驚いた後エルザは、龍と別れて一人ルナの元へ向かっていた。

「驚いたなぁ。　まさか闇奈さんの生まれ変わりの人がこの時代に居るなんて」

龍に怒鳴られながら頭を叩かれた程、本気で驚いていたが、同時に嬉しくも思った。
その人の記憶から自分が居なくても、もう一度彼女に会えるのだから。

「どんな人かなぁ、優也君は？」

まだ見ぬ過去の友に想いを馳せながら、今自分がしなくてはならない事に意識を切り替える。

「それにしてもお嬢様が戦っている相手と言い、突然現れた気配と言い……何処かで感じた様な……？」

エルザが感じた気配。　それは、エルザにとってとても懐かしいものであった。

第７３話　小さな黄竜

「久し振りの外だ」
「すまなかったな。　出してやれなくて」
「別に良い」

長い首を捻りながら、四メートルはある黄色い体色をした竜は辺りを見渡す。

「シュリとハクとアオは良い契約者と出逢えた様だ」
「朱雀達か。　中に居る時と外に居る時とじゃあ、感じ方が違うのか？」
「ああ」

敵を目の前にして悠長に話している一人と一匹を見れば、ルナなら怒りそうだが、ルナはそんな様子を見せず、冷や汗をかいていた。

（これが四聖獣の長、黄竜！　何て威圧感ッ！）

只そこに居て話しているだけなのに、身動きが取れない程の威圧感を、黄竜は放っていた。

（しかも聖獣を具現化するなんて……！）

黄竜の出現にもそうだが、黄竜を出現させた仁に対しても驚きを隠

せなかった。
聖獣と契約する事で、人間は力を手に入れる。　聖獣と対話し、聖獣を理解する事で完全体と言う、聖獣の姿を借りた姿になれる。
そして契約者には、完全体より上の形態が存在する。
その為には、聖獣を具現化しなければならない。　だがその形態は、契約者なら誰でもなれると言う訳ではない。
努力もそうだが、結局は才能が物を言うのだ。

（甘く見てたけど……雷帝なんて呼ばれてる程なのよね。　全力でかからないと……）

とは考えても、内心の焦りは治まらない。
仁の言葉が、未だに胸の中に残っていたからだ。

（それでも私は……止まる訳にはいかない！）

八年間、復讐の為に生きて強くなったのだ。　今更辞められる筈がなかった。　今辞めれば、ここまで着いてきてくれた彼女達に顔向け出来ない。

「して仁よ。　我を呼び出したと言う事はあれをやるのだろう？」
「ああ、だから少し力を貸せ」

黄竜を見上げる形で仁は言う。

「他ならぬ主（ぬし）の頼みだ。　惜しまず貸そう」
「ならいくぞ。　コウ」

翼を羽ばたかせ、黄竜は空高く昇っていく。
黄竜はある程度の高さまで上がると、雷の如く仁へと落ちていく。

仁は微動だにせず、黄竜をその身に受け止めた。
普通なら仁が黄竜に押し潰されると言う、ショッキングな光景が展開されるが、黄竜は寸前で体を本物の雷に変え、仁を呑み込んだ。

「……ッ！」

眩い光を放つ雷に、ルナは思わず手で眼を覆う。
あれ程の雷の中に居る仁は一体どうなっているのか。　そう考えた矢先、雷が薄くなっていき、最後は細い糸の様になって消えた。
消えていった雷の中には、黄色い翼で姿を隠している仁が居た。
只そこに居るだけで、黄竜が放っていた威圧感と同じ威圧感を放っていた。まるで大気が震えている様な。
そして、閉じていた翼を開き、仁が姿を現した。

「うっ……！」

翼を開いた瞬間、衝撃波が辺りを吹き飛ばす。
ルナは吹き飛ばされない様にしながら、仁の姿を確認する。
そこに居たのは、仁であって仁ではなかった。
竜の様な黄色の尻尾を生やし、腕には三本づつ棘の様な物が生えている事は、完全体の時と変わりない。　違うのは、体全体が黄竜の様になり、頭から眼の辺りまでは竜の兜で覆い、兜の隙間からは仁の金色の瞳が覗いていた。
その姿はまるで小さな黄竜。

「久し振りだが成功だな」
『あぁ、だが究極体は体力の消耗が激しい』
「わかってる。　さっさとやるか」

カチャリと、銃口を向けられ、ルナの肩が無意識に跳ねる。

「……最初に言っておくが、あまり手加減は出来ないぞ」

ルナを気遣ってか、仁は遠回しに降参しろと言う。

「っ……手加減？　そんなもの必要無いわよ」

自分が敗ける筈がない。　絶対に勝てる。

そう自分に言い聞かせ、ルナは身構える。

「そうか」

納得したかの様に呟くと、銃口に電撃を溜める行為も見せず、すぐに雷撃を放った。

（……ッ！　速い！！）

雷撃の速さ自体は変化していないが、溜めると言う行為を省いている事で、雷撃が速く感じていた。

「くっ……！」

何とかその雷撃を躱したルナだったが、躱した先にも雷撃が迫っていた。

「このっ……！」

その雷撃も躱すが、躱した先にもまた雷撃と、無限ループが続いていた。

「どうした？　躱してばかりじゃ勝てないぞ」

そう言ってもう一発雷撃を放つ。

「一々感に触る男ね！」

一つの雷撃がルナに直撃する瞬間、ルナの体が蝙蝠の様にバラバラに散らばった。

「これは……」

「調子に乗ってると……」

散らばった蝙蝠は素早く仁の近くへ集まっていき、蝙蝠はルナへと変わる。

「痛い眼見るわよ！」

元の姿に戻ったルナは透かさず右手を仁に向けて翳す。

「“悪魔の羽音（デビルズノイズ）”」

翳した手から肘までが無数の蝙蝠に姿を変えると、仁に襲い掛かった。

仁の体をどんどん押しやりながら、牙や鋭い羽で斬り裂いていく。

「……ッ！」

悔しそうに歯軋りを鳴らしながら、蝙蝠達を腕に戻していく。

何故攻撃しているルナが悔しそうにしているかは、理由は一つだけしかない。

「蝙蝠とは吸血鬼らしいな」

倒すつもりで放った攻撃が、竜の翼で塞がれ、仁が無傷だったからだ。

「あら嫌味？」

「いや、誉めてるつもりだ」

「そう、それはどういたしまして！」

ルナは再び無数の蝙蝠へと姿を変える。

「また……いや、これは……」

全く同じかと思った行動だったが、どんどん増えていく蝙蝠を見て間違いだと気付いた。

数えるのも億劫になる程の蝙蝠の数だったからだ。

「これも防げるかしら？」

ルナの声が響くと、蝙蝠達が光も届かなくなる程、仁の周りを取り囲み、渦の様に飛び回って景色を黒に染めていき、

「“悪魔の不協和音（デビルズディスコード）”」

一斉に超音波を放った。

「ぎッ……がぁ……！」

耳をつんざく音を訊く度に、仁の体は内側からどんどん引き裂かれ

ていった。

「超音波で内側から壊してあげるわ！」

超音波の嵐の中からルナの声が聞こえたかと思えば、超音波が激しくなる。

体がどんどん破壊されていく中、仁はニヤリと笑った。

「……ッ！？」

仁は元の無表情に戻っている。　一瞬の笑みだった。　だが、一瞬の笑みが、ルナの恐怖を駆り立てた。

「小賢しい……全て撃ち落とす！」

一瞬にして放った何発もの雷弾が、蝙蝠の渦に穴を空けていく。

「“雷影（らいえい）・演舞”」

雷弾は止めどなく銃口から放たれ、次々と蝙蝠を撃ち落としていく。

（嘘でしょ！？　一万匹の蝙蝠よ！？）

一万匹。　それがルナが力を最大限に使ってなれる蝙蝠の最大数。

銃で撃ち落とすにしろ、剣で斬り落とすにしろ、一万と言う数の暴力の前では、仁など無力だと考え、同時に確実に倒す為に、力を使い果たす覚悟で技を放った。

だが仁は、仁と言う名の小さな黄竜は、まるで嘲笑うかの如く、蝙蝠を撃ち落としていった。

このままではマズイ。

そう思ったルナは、蝙蝠を四方八方に散らばらせる。

（蝙蝠の姿じゃやられる！　元に戻らないと！）

逃げ惑う蝙蝠を全て撃ち落とすつもりか、仁は雷弾を放つ速度を速めていく。

それはもう、人一人通り抜けるのも精一杯程密度が濃く、弾幕を張っていた。

（可笑しいッ……！）

そんな中で、ルナは違和感を感じた。

そして気付く。

弾切れしてないことに。

（まさかッ！　こいつの究極体は！！）

究極体は完全体の更に上の力。当然、総ての能力が上がるが、契約者と聖獣によっては何かが変わる事もある。仁と黄竜の場合は、

（銃弾が必要にならない！！）

銃に弾を込めなくても、雷撃を放つ事が出来る。

それだけで、隙も生まれなければ、無限に近く連射出来る。

（厄介ね！　でも、もう少しで……）

雷弾を躱した蝙蝠が少しずつ、一ヶ所に集まっていく。

雷弾の一発一発の威力は大したものではない。　ルナが元の姿に戻れば余裕で防げる程度だ。

そして、総ての蝙蝠が一ヶ所に集まった時、ルナは気付いた。
蝙蝠が集まった場所が、宙に留まった雷弾に囲まれている事を。

「かかったな」
「しまっ……」

ルナが元の姿に戻る隙も与えず、仁は二丁の拳銃をルナに向け、引き金を引いた。

「“雷影（らいえい）・操（そう）”」

宙に留まっていた雷弾は一斉に動き出し、銃口から放たれた二つの雷撃と共に蝙蝠へと攻撃し、爆煙を起こした。
仁は雷撃が直撃したのを確認すると、銃をリロードした。

「くぅっ……本当に……無茶苦茶ね……」

雷撃の雨に晒されながらも、ルナは無事だった。
とは言え、服は所々が破け、肌は傷だらけで、疲労も濃く、満身創痍なのは間違いない。
痛む体に鞭打って、動かそうとした瞬間、銃声が鳴り響く。同時にルナの体はビクともしなかった。

「なっ！！」

何とか動かせた目線でルナは自分の体を確認すると、いつの間にか体に電気が伝わり、動きを封じ込められていた。

「このッ！！」

振り払おうとするが、ルナの体は動かない。
煙が晴れるとその先には、小さな黄竜と、後ろに大きな黄竜が翼を閉じて佇んでいた。

「いくぞ」

小さな黄竜、仁が銃口をゆっくりルナに向けると、黄竜は翼を開けて口を大きく開ける。

（マズイ！！）

拘束から抜け出す事は難しいと考えたルナは、左腕だけに魔力を集中させる。　すると、ビクともしなかった腕が徐々に動き出した。
仁の銃口と黄竜の口に電撃が溜まっていくと、仁と黄竜の前に大きな電気の輪が現れた。

「“雷鳴弾（らいめいだん）”」

仁が引き金を引くと、黄竜も雷撃を放つ。
二つの雷撃が輪を通過した瞬間、一つの巨大な雷撃となり、ルナへと向かっていった。

「あああああああああああああ！！！！！！！」

ルナは叫びながら、最後の力を振り絞る。
それに応えるかの様に、魔力を集中させていた左腕の拘束が外れる。

「はあああああああああああ！！！！！！！！！」

拘束が外れた左手を前に翳し、持てる力の総てを使って赤黒い結界

を張った。
黄色い雷撃と赤黒い結界がぶつかり合った瞬間、閃光と共に爆発した。

「……防がれたか」

いつの間にか黄竜は消え、仁を包んでいた黄竜の体も消え始めた。

「限界か……」

ボロボロと黄竜の体が剥がれ落ち、剥がれ落ちた箇所から仁の肌が覗き込む。
仁は銃を雷鳴刀へと変形させると、普段の逆手持ちではなく、通常の持ち方に切り替えた。

「っう……」

煙の中から出てきたルナは、左腕が使い物にならない程ボロボロで、今にも倒れそうな程ふらついているが、眼光は鋭く、今も仁を睨み付けていた。

「諦めろ、もう限界だろ。　これ以上お前が傷付けば流香も……」
「悲しまないわよ……」

何を根拠にしている訳でも無いが、ルナははっきりと言った。

「貴方の言う通りよ……私はルカから逃げてる。　拒絶されるのが怖くて、ルカの気持ちを無視して自分の意見ばかり押し付けて、ルカを私の操り人形にしようとしていた。　私はあの子の事を何も

わかっていなかった……」

何百年も生き、強大な力を持っているルナだが、彼女自身は繊細に出来ていた。
大切な人達を多く失い、妹とは生き別れ、総てを一人で背負った。
これら総て一人で背負うには、ルナには荷が重すぎた。

「ルカが私の為に悲しむ筈がない……」
「……まったく」

流香の事で弱気になっているルナを見て、仁は呆れ果てる。

「お前は本当に流香の事をわかっていないな」
「えっ……？」

疑問符を浮かべるルナに対し、仁はすぐにわかると答えると、一歩ずつルナへと歩いていく。

「さっき言った通り、少し大人しくなって貰おうか。　どうせ何を言っても止まらないだろうからな」

電気がはぜるかの様に、仁の体を駆け巡る。
仁はルナの心を揺さぶる事は出来ても、世界を壊すと言うルナの復讐を辞めさせる事は出来ない。
仁は立ち止まり、ルナに言った。

「来い」

その言葉を合図に、ルナは駆け出した。
左手は防御の際に使い物にならなくなり、魔力もほぼ使い果たし、

大きな技を使えなくなった。
今ある残り少ない魔力を全て右手に集める。　仁を一撃で倒す為に。

「はあぁぁぁ！！」

仁の目の前まで接近し、ルナが右手を大きく振り上げると、仁は両肘を勢いよく引いた。

「ッ！？」

瞬間、右の掌から肩に掛けて激痛が走ると、ルナは大きく後ろに弾き飛ばされる。

「……“雷光一閃（らいこういっせん）”」

ルナの視界の端には、仁が左側の剣を突き出していた。
ルナは背中から地面に落ちる。　それでも尚立ち上がろうとするが、また拘束されたかの様に、体が動かなかった。

（敗けたのね……）

全力を尽くして完敗した。　力でも、心でも。
それほど、雷道仁と言う男の存在が大きかった。

（これだけ皆を振り回しておいて……敗けちゃうなんてね……）

ルナは自嘲気味に笑う。

「私には……もう何も残ってない……」
「そんな事ない」

突然、仁とは違う声がしたかと思えば、ルナは頭に柔らかい感触を感じた。

「ちゃんと残ってるよ」

「ルカ……」

気付けば、今にも泣きそうな表情をしている流香に、ルナは膝枕をされていた。

「結界が解けたか」

ほんの一瞬、電撃による光が仁を包むと、仁は元の姿に戻っていた。流香がここまでこれたのは、ルナの魔力が尽き、流香を閉じ込めていた結界が解けたからだろう。

二人に近寄って会話に参加する事も出来たが、仁は敢えて離れて二人を見守った。

「私は貴女から……現実から逃げた……。　本当の気持ちを消して、全部世界のせいにして、貴女達に迷惑をかけて……こんな私に……何かが残ってる筈ないわ……」

「残ってる……残ってるよ。　私達が居る！」

このまま放っておけば消えてしまいそうなルナに、流香は敬語で喋る事もしないで声を張り上げる。

「クリスも、エルザも、雪奈も居るんでしょ？　だったら残ってるよ！　私達が見捨てる筈がない！」

「でも……私は……」

「お願いだから……」

ルナの頬に水滴が落ちる。

「そんな悲しい顔しないでよ……お姉ちゃん」

いつもの大人びた流香は居らず、そこに居たのは、年相応に泣きじゃくる流香が居た。

「お姉ちゃん、か。　フフ、懐かしいわね。　いつから私の口調を真似をする様になったのかしら？」

「ぅっ、おぼえて、ない……」

流れ出す涙を何度も拭き取るが、涙は止めどなく流れる。

そんな流香を見ていると、昔の事を思い出す。

幼い頃は、今の様にルナをお姉ちゃんと呼んでいたが、いつの間にかお姉様と呼び、口調も大人びた喋り方になっていた。

だから今、幼い頃の口調の流香を見ていると、楽しかった頃の記憶が呼び覚まされた。

「ルカ……」

動かない手を無理矢理動かし、震える手で流香の涙を拭う。

「ごめんね」

「うんっ」

仁が言っていた事は本当だった。

流香はルナが思っているよりも強かった。

「一応、一件落着か」

二人はもう大丈夫だと思った仁は、一息しようと煙草を取り出す。
取り出したが、ボロボロで原型を留めておらず、吸えそうにはなかった。

「なぁ、あんた煙草持ってるか？」

仁はいつの間にか隣に立っていた緑のロングヘアーの女性に、驚く事なく訊いた。

「持ってません。　って言うか、普通訊きます？　敵かも知れませんよ？」

緑のロングヘアーの女性、エルザの言う事は正しい。
敵かも知れない相手に物をねだるなど、馬鹿のする事だ。

「敵なら俺に気付かれないで攻撃するだろ。　後こんな話もしない」
「あぁ、成る程」

エルザは納得する。

「まぁ、実際は敵なんですが、戦うつもりは無いので安心して下さい」
「そうか」
「それにしても、私は必要無かったですね」

エルザは流香とルナを見ると、仁に向き合い、

「ありがとうございました」

頭を下げた。

「何がだ？」

仁は大して反応を見せず、エルザに問う。

「ルナお嬢様を救って頂いた事です」

「それなら流香に礼を言え。　俺は首を突っ込んで好き勝手しただけだ。　俺が首を突っ込まなくても流香が何とかしてただろう」

そう言う仁だが、エルザはいいえと、首を横に振る。

「貴方はルナお嬢様と正面から戦って、向き合って、理解してくれました。　あの方には貴方の様に、自分と向き合って理解してくれる相手が必要だったんです」

「そんなもんか？」

「そう言うものです」

そうかと呟くと、仁はフラリと歩き出す。

「どちらへ？」

「暴れ盛りな王様の処」

それだけ言ってフラフラと歩いていく。

「……懐かしい気配と思えば、貴女でしたか。　生まれ変わっても変わりませんね、凛さん」

遠ざかる仁の背中を眺めながら、エルザは呟いた。

「さてと、お嬢様方が落ち着いたら私の出番ですね」

エルザは振り返り、流香とルナを見る。

「まるで昔に戻ったみたいですね」

まだ何かしらの溝はあるかも知れない。それでも、流香とルナは少しずつ元の姉妹へと戻り始めた。

第73話　小さな黄竜（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁
「どうも、活躍しまくりの雷道先生です」

正
「フッ、次回からは俺が活躍するから良いんだよ」

闇夜
「あ、ごめん。　次回は活躍しないと思う」

正
「えええええええええええ！！！！！！！！！」

仁
「ドンマイ。　初めの質問は、烈火竜さんからだ。　ありがとう。
『『るろうに剣心』を意識して書いてますか？』」

闇夜
「話によっては意識しますが、他も意識して書いてる時もあります」

仁
「優柔不断か。　次は聖なる焔さんからだ。　ありがとう。『この小説で鬱……もといシリアスシーンを多く見かけます。　何故、闇夜さんは鬱シーンが書けるのですか？』」

闇夜
「えっと、何でしょう？　自分でも良くわからないですけど、心が病んでるからじゃないでしょうか？」

仁
「自分で言ってて悲しくないか？」

闇夜
「事実さ」

仁

「……次の質問だ。　竜王の白翼さんからだ。　ありがとう。
『闇夜さんに質問。もしも優也がひたすら女性を口説く超ホストな性格になった時の女性陣の反応はどうなりますか？』　想像出来ないね」
闇夜
「ホストの感じが良くわからないので、反応だけで。　どうぞ」
美優
「……（興奮し過ぎて鼻血を流している）」
優花
「……／／／」
薫
「カッコイイかも知れないけど……何だか違和感が……」
流香
「似合ってないわ」
雅
「何て言うんだっけ……カッコ可愛いだっけ？」
闇夜
「こんな感じです。　因みに、雅の言葉に優也はノックアウトされました」
仁
「可愛いは余計だったな。　次で最後だ。　次は星空の侍さんの【幻想郷の星空】の零からだ。　ありがとう。　『仁に質問！仁は静電気とか痛くないの？』　ああ、静電気か」
正
「そう言えばどうなんだ？」
仁
「意識してたら痛くないが、静電気が来るかなんてわからないから意識し様がないから痛いと感じるな」
闇夜
「成る程」

仁
「と言う訳で、質問は終了だ」
闇夜
「実は優也のイメージ画を描いて見たんだよね」
正
「活動報告に絵のＵＲＬも乗したしな」
仁
「下手だけどな」
闇夜
「まぁそれでさ、他の皆も頑張って書こうかと思ったんだけど……描かないかもしれない」
正
「……はぁ？」
闇夜
「優也を描いたのは気紛れだったし、何より才能が無いから……」
正
「挫折早いだろ！？」
仁
「そう言う訳だから宜しく」
正
「お前の良いのかよ！？」

次回
第７４話　正しい忠誠
グランツ
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

正

「終わらせるなぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

第７４話　正しい忠誠

「疲れた……」

仁は壁にもたれ掛かる。

（これ以上は究極体にはなれないな）

たった一度、それも数分究極体になっていただけで、仁の疲労はピークだった。

こんな調子でよく死神の王と戦おうとしてるなと、仁は自嘲気味に笑う。

せめてもう一度、究極体になれればと考えるが、すぐにその考えを消し去る。

「無い物ねだりしても仕方ないか」

どれだけ足掻いた処で強靭な肉体は手に入らない。　だから仁は、ある物だけを最大限に利用して戦う。

そうして仁は戦い続けてきた。

（右は１３発、左は１５発。　カートリッジは三つ。　残りの弾数は７３発か……。ちゃんと確認しながら戦わないとな）

残り弾数を確認すると、銃を腰のホルスターに納める。

「あのヘタレは道に迷わないで行けてるだろうな？」

再び走り出しながら、すぐ道に迷う、方向音痴な白髪の親友の心配

をしたが、その心配は的中した。

その頃。

「くそっ！」

案の定、敵が固まっている中に迷い込んでしまった正は、三十人弱の数に追われていた。

「しつこいぞお前等！　暇人か！」

走りながら、後ろの集団へ暴言を吐く。

「んだとこらぁ！！」
「白髪！！」
「老けて見えんだよ！！」
「ヘタレ！！」
「くそっ！　多すぎて言い返せねぇ！」

三十対一の口喧嘩。
大して口喧嘩が強い訳ではない正は、数の暴力に完敗した。

「優也ぁ！　仁！　流香ぁ！　ヘルペスミ～！！」
『ヘルプミーだろうが！！』

打ち合わせしたかの様に、三十人全員が一斉にツッコンだ。

第７４話　正しい忠誠

「よう」
「……グランツ」
グランツはビルの上階からガドルを見下ろし、声をかけた。
「狂った白髪の人間を捜していたんだが、まさかお前を見付けるとはな」
「そんなに意外か？」
そう言うと、グランツはガドルと同じ地面に降り立つ。
「いきなり“血塗れの兵士（ブラッドソルジャー）”とはな。　一緒に来る気は無いんだな」
グランツの今の姿は、黒い軍服にマントを羽織っていた。
つまり、戦闘体勢だ。
「だが殺気は感じない。　別人みたいだぞ」

ガドルの知っているグランツは、戦闘で殺気を隠すような男では無い。　誰が相手だろうとだ。

「人間どもに毒されたか。　情けない」

「馬鹿な事言うなよ。　そんな訳あるか」

心外だと言わんばかりに、グランツは肩を竦める。

「俺はお前を殺しに来たんじゃない。　お前を止めに来た」

「……あ？」

その言葉に、ガドルは怪訝そうに声を漏らす。

「悪い。　今何て言った？」

「耳でも悪くなったか？　止めに来たって言ったんだ」

「ククク、成る程なぁ」

何処か怒りを孕んでいる笑みを浮かべ、ガドルはグランツへと歩み寄っていく。

「グランツ……そう言うのがさぁ……」

グランツから一歩ほど手前で立ち止まったガドルから、笑みが消えた。

「毒されたって言ってるんだよ！」

表情を怒りに染め、いつ、何処から取り出したかわからない両刃の剣を握った右手を、ガドルは横一線に振り抜く。

「フンッ！！」

グランツは体勢を低くして躱すと、アッパー気味にガドルの腹部を殴り上げる。
空を切り裂く拳を、ガドルは何とか左手で受け止めた。
掌から痛い程衝撃が伝わってくるが、ガドルは拳を掴んだまま離さない。
グランツと密着状態のまま、一度は空を切り裂いた剣を、グランツへと振り下ろす。
剣はグランツの左肩を斬り裂き、吹き出した血が黒い軍服にかかる。

（っ！　抜けない！）

グランツの肩から剣を抜こうとするが、筋肉で止めているのか、剣を抜けなかった。
こうなれば剣を手離すしかないと考え、実行しようとした矢先、手首を力強く掴まれた。

「お前が何するかなんてバレバレなんだよ！」

グランツは頭を大きく振りかぶる。
右手はガドルに掴まれ、左手は逆にガドルの手を掴んで。　両者共に両手が塞がれている状態ならば、攻撃手段は蹴りか頭突きしかない。
大きく振りかぶられた頭は、ガドルの頭に吸い込まれる様に振り下ろされた。
頭突きが決まると、地面が砕け、ガドルの体が沈み、頭からは少量の血が吹き出て、グランツの軍服に少し付着する。

「くそがっ！！」

ガドルはグランツの手を振り払うと、後ろに高く飛び、何処からともなく機関銃を取り出す。

「やべぇ！」

流石に機関銃はマズイと思ったのか、グランツはビルに向かって走り出す。

ガドルが引き金を引くと、弾丸がグランツを追いかける様に地面を這う。

ガラスを突き破り、グランツはビルの中に飛び込むと、壁を盾にして弾丸を回避する。　弾丸は壁を貫通せず、壁に突き刺さる。

「ちっ！」

ガドルは機関銃を投げ捨てると、また新たな武器を取り出す。

「ったく、相変わらずの歩く武器庫め……」

そろっと割れた窓から顔を出して、外の様子を確認する。　そして驚愕する。　ロケットランチャー等と言う凶悪な兵器を、ガドルがこちらに向けていたからだ。

「おいおい！　なんつうもん持ってんだ！？」

グランツが慌ててビルの中を駆け抜けると、ガドルは引き金を引き、ロケット弾が放たれた。

「くそがっ！」

グランツはロケット弾からは離れた位置から窓ガラスを突き破り、外へと飛び出す。　と同時に、ロケット弾が炸裂し、大爆発を起こした。爆発には巻き込まれなかったものの、グランツは爆風に巻き込まれて吹き飛ばされる。
吹き飛ばされたグランツは地面を転げ回るが、足を地に付けて踏ん張って止まり、ガドルを見据える。

「そんな物騒な物まで収納してやがんのか……流石“無限の武器庫（インフィニティウェポンズ）”なんて能力名なだけあるな」
「うっせぇよ」

“無限の武器庫（インフィニティウェポンズ）”、それがガドルの能力。　見た事のある武器ならばなんでも無限に召喚する事が出来る。　その為、ついたあだ名が歩く武器庫。　因みに、ガドルには了承を得ずにグランツ達がつけたあだ名だ。

「ほら、次来いよ」
「ナメンじゃねぇよ！」

弾を失った引き金付きの筒を投げ捨てると、二丁の拳銃を取り出し、銃口をグランツに向けて撃つ。

「当たるか！」

当たれば流石に痛いが、当たりさえしなければ何て事はない。　狙いを定められない様に動き回り、放たれた弾丸は躱して、躱して、躱して、少しずつガドルとの距離を詰めていく。

「っ！」

突如、耳をつんざく音が乾いた音に変わる。

（弾切れか！　よしっ！）

この後のガドルの行動はわかっている。　弾切れや刃が壊れてしまったりした武器は、すぐに手離し次の武器に切り替える。　切り替えるまでのインターバルは０．５秒。　その僅かなインターバルが、ガドルの最大の隙であり弱点なのだ。

グランツとガドルの距離はおよそ八メートル。　チャンスは０．５秒。

いける。

特別速い訳ではないグランツだが、０．５秒で八メートルの距離をゼロメートルにする自信があった。

考えるや否や、グランツは駆け出した。

悪魔の身体能力をフルに使い、０．５秒と言うガドルの僅かな隙に入り込む。

（貰った！）

残りは０．２秒。　ガドルとの距離はおよそ一メートル。　グランツなら確実に一撃喰らわせられる。　そして二撃、三撃と。　反撃の隙も与えず、攻撃してガドルを止める。

筋肉が悲鳴を上げんばかりに、拳を固く握り締める。

そして後一歩踏み込めば、ガドルは拳の射程内に入る。

瞬間、グランツの視界が黒一色に染まる。突然の出来事に、グランツは思わず動きを止める。

「俺だってわかるんだよ、お前の考えくらいなぁ！」

そして理解する。　この視界に写る黒は、ガドルが着ていたコート。
　恐らく、自分の考えを読んで、予め投げ捨てる準備をしていたのだろう。
そして黒い視界、黒い布の先には、虎視眈々と自分を狙っているガドルが居る筈。

（くそっ！）

攻撃する事は諦め、顔と首を主に、腕を交差して防御に徹する。
そして、銃声が鳴り響く。　黒い布を突き抜け、何発もの弾丸がグランツの体に命中し、鮮血が飛び散る。

「……ッ！」
「まだだ！」

拳銃を放り投げると、今度は鎖鎌でグランツの体を縛り付け、頭から地面に叩き付ける。

「ぐっ……！」

頭を打ち付け、グランツの意識が朦朧としていても、ガドルは手を抜かない。
鎖鎌を手離し、手榴弾を取り出す。　そして口で線を引き抜き、グランツへと投げ付けた。
宙を舞った手榴弾は、グランツにはスローモーション見えたが、自分に接触し、爆発するまでは早かった。
爆煙がグランツを呑み込んだ。　ガドルは鋭い目付きで煙を見ていると、膝まついているグランツが、煙の中から姿を現した。　グランツ自身は血塗れで、軍服は所々破け、その軍服も真っ赤な血で染まっていた。

「グランツ……そこまでして人間を守る必要が何処にある？」

まだ怒りが治まっていないが、幾分か冷静になってガドルは言う。

人間は悪魔の王であるバロールの最大の敵。　その人間を守ろうとしているグランツに、ガドルは怒りを抑えきれなかった。

「人間は駆逐する対象。　お前がしている事は……！」

「ガドル……」

痛みを堪えながら立ち上がり、グランツはガドルの話を遮る。

「俺がいつ人間を守るなんか言った？　そんな訳ねぇだろ」

「何……？」

ガドルは怪訝そうな声を上げる。　今のグランツが言った処で、説得力が皆無だったからだ。

「俺は世界を守ってんだよ。　人間為なんかじゃねぇ。バロール様の為だ」

「何を言ってる……そんな事をあの方が……」

「言ってたんだよ。　俺達は確かに訊いた」

自分やグランツが訊いた事。

思い出そうとするガドルだが、全く身に覚えがなかった。

「俺達悪魔や人間、全ての種族がこの世から消えてなくなったとしても、この世界だけは残さなくちゃならない。　バロール様が家族以外で守ろうとしたものだ。　そしてお前は、人間を駆逐すると言いながら、世界を壊そうとしている奴等と手を組んだ。　それはバロール様の志に反するもんだ。　だから、止めに来たんだよ！」

「……ッ！」

グランツの体から魔力が溢れ出す。　その魔力は、いつもの黒く荒々しい魔力ではなく、赤黒く威圧的な魔力だった。

「“血塗れの兵士（ブラッドソルジャー）”の能力は知ってんだろ？　その名の通り、血を吸った分だけ力が増す！」

グランツは駆け出した。

「おおおおおおおおおお！！！！」

拳をガドルに向かって放つ。　今までとは比べ物にならない威力に、地面が抉れ、周りの建物のガラスが割れる。

「はぁはぁはぁ……くそっ！」

グランツは悪態を吐く。　今放った渾身の一撃に、手応えが無かったのだ。

「お前の考える事くらいわかるって言ったろ」

ビルの屋上から声が聞こえてくる。　ガドルの声だ。

「血を吸えば吸う程力が増すが、増した分を攻撃に回せるのは一度きり。　だったら、馬鹿正直に受け止める必要は無いだろ」

互いに手の内を知り尽くしている。　だが、グランツに比べ、ガドルは考えて戦う。　そこに差が生まれていた。

グランツが纏っていた赤黒い魔力が消えていく。　グランツも限界

なのか、動こうとしなかった。

「グランツ。　もう休め」

ガドルが新たに武器を取り出そうとした瞬間、風が吹いた。

「ちょっと待てよ」

そして、グランツでもガドルとも違う声が響く。

「お前、俺を殺したかったんじゃねぇのか？」

「お前っ！！」

ガドルの表情が、憎しみを孕んだ表情に変わる。

何と言っても、自分を殺した男、風魔正がこの場に現れたからだ。

余談だが、正を追っていた敵は、全員伸された。

「てめぇ！　何のつもりだ！」

グランツは突如現れた正に怒鳴り付ける。　それも当然だろう。

自分がガドルと戦う原因を作った張本人だからだ。

「そんな噛み付くなよ。　言い事教えてやるから」

「あ？」

グランツの近くまで歩み寄ると、正は言った。

「あいつ、少なからず洗脳されてるぞ」

「なっ！！」

グランツは驚きを隠せない。　何百年も親友をしてきた自分がそんな事に気付けない筈がないと思っていたからだ。

「何でそんな事がわかんだ！」

「音だ。　あいつが発している音が違う」

正はグランツの数歩手前で立ち止まる。

「正確にはあいつとは違う音が混じってるだな。　多分あいつは、自分でもわからないくらいに洗脳され、操作されてるんだろうな」

「操作……何を……？」

「例えば……一部の記憶とか」

「！」

先程のガドルとの会話を思い出す。　過去にバロールが言っていた事を話しても、疑問に思うだけだった。　ただ忘れているだけなら、何らかの反応は見せる筈だ。

「キョウの部下か何かの独断だろうな。　少しでも邪魔になる記憶は消しておこうと思ったんだろ」

一度しか会っていないが、キョウは姑息な手を使う様な男には見えなかった。

「まぁ後は俺に任せろ」

「あぁ！？　何でおま……」

「あいつがああなったのも、お前があいつと戦ってるのも、全部俺の責任だろ。　じゃあちゃんと責任取らせろ。　それにな……」

風が辺りに吹き荒れる。　その風は、静かに怒っていた。

「親友同士で戦わせるのも、洗脳なんてくだらない事をするのも、大ッ嫌いなんだよ」

正のその表情に、グランツは戦慄した。　今にも自分が殺されてしまうのではないかと思うくらい。

「安心しろ、今度は殺さねぇよ。　狂気に呑まれようがな」

そう言うと、正はガドルを見る。

「よくのこのこと現れたな。　また狂いにでも来たか！」

「残念だったな。　俺は生まれた時から狂ってるんだ」

正は不敵に笑い、ガドルは憎しみに表情を染める。

「もう一度触れさせてやるよ。　狂気の風を」

第７４話　正しい忠誠（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の美莉から質問だ。　ありがとう。　『流香ちゃんに質問！好きな人に気づいてもらうにはどうすればいい？』」

流香

「難しいわね。　とにかく、自分を好きになって貰う様にアピールする事かしら。　ごめんなさい、私も恋愛が得意な訳じゃないから……」

仁

「恋愛は難しいものだ。　次はＯＯＯＴＧＬＳＴＳＴＰＢさんからだ。　ありがとう。　『コラボって考えているのか知りたいです。』」

闇夜

「時々考えますが、自分では他の方のキャラを書けるか自信が無いので断念します」

仁

「小心者め。　次は聖なる焔さんからだ。　ありがとう。　『闇夜さんに質問です。　悪役には３つのタイプがあります。悪の立場だけど実は良い人で葛藤している、冷酷非道の徹底した外道、悪だけどギャグシーンが多すぎて憎めない人、どれが好きですか？』」

闇夜

「個人的には一つ目が好きですけど、単純に悪役として見るなら二番目の冷酷非道の徹底した外道です」

仁

「次で最後だ。　星空の侍さんの【幻想郷の星空】の雪那からだ。　ありがとう。　『作者の闇夜さんに質問です。よく正くんはヘタ

レヘタレと言われてますけど、総司くんもよく鼻血やら吐血やらをしているような気がします。実際はどちらの方がヘタレなのですか？』」

闇夜

「それは間違いなく正です。　総司はただ興奮している変態なので。　正は女性関係では役立たずのヘタレです」

仁

「あいつのヘタレは天下一だ」

流香

「最初は私と話すのも駄目だったわ」

闇夜

「次回はその正が活躍します。　こうご期待！」

次回

第７５話　必要ならば

正

「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第７５話　必要ならば

キョウが人間界に攻めいってくる前日。　仁との手合わせを終えた正は、自身が契約した聖獣、白虎と話していた。

「なぁ、別に良いだろ？」
『良い訳あるか』

これで五度目になる頼みを白虎は断る。

「何でだよ」
『てめぇが嫌いだから』
「うわ、ストレート」

このやり取りも、五度目に到達する。

「そんなに俺に力を貸すのが嫌かよ？」
『てめぇと契約してんのも嫌気がさしてんだよ』

白虎が子供だった正初めて出逢った時、喰い殺してやろうと考えていた。　だが、無理矢理契約されてしまった。　それからと言うもの、ほぼ口を訊かず、せまっ苦しい空間で十年近く暮らし、と言うよりほっとかれていたのだ。嫌いになっても仕方がない。

「今回ばかりは俺一人じゃキツいんだよ」
『そんなもん知るか』

冷たく突き放された正だが、口元を吊り上げる。

「そんな事言っても良いのかなぁ？　協力してくれる度に、外に出してやろうと思ってたのに」
『何ぃ！？』
正は切り札を持ち出してきた。　十年近く外に出れていない白虎にとっては、それはそれは魅力的な提案だった。
「あ～あ、折角外に出してやろうかと思ったのになぁ」
『てんめぇ……！　性格悪ぃぞ！』
「お互い様だろ」
『ぐぅぅぅ……』
曲がりなりにも契約者である正の許可が無ければ外には出れない。白虎が外に出たい事も、契約者の許可が無ければ外に出れない事も、正は全て知っているからこんな意地の悪い提案をしてきた。
「悪い提案じゃないと思うぜ？　何より、敗けんのは嫌だろ？」
『むぅ……』
確かに、協力するだけで外に出られるのだから、提案自体は悪くない。　それに、白虎の力を使っている正が敗けると言う事は、白虎も敗けると言う事になる。　それは白虎も願い下げだった。
だが、この提案をしているのが正だと言う処に、白虎は警戒してしまう。
普段の正しか見た事がない者にはわからないだろうが、正は性格がかなり悪い。　悪い時は龍並みに。
根が悪い訳ではないと、白虎も知っているが、どうしても警戒してしまう。
何よりも正は暗殺者で、嘘つきなのだから。

「これぱかりは嘘じゃない。　だから頼む、お前の力を貸してくれ」
『……』
こう言う時の正には白虎はついつい甘くなってしまう。　嘘でも演技でもない、心の底からの頼みには白虎は弱い。
こんなに必死に頼み込んでいる正を、昔に一度見た事があるからだ。
『……俺の力を貸したとしても、狂気を抑え込めるとは限らねぇぞ』
正が本気だと言う事はわかった。　だが、白虎の杞憂はもう一つあった。　正の狂気だ。
『はっきり言っとくが、てめぇの狂気は異常だ。俺も長い事生きてきたが、これ程の狂気は初めてだ』
「……そうか」
白虎の言葉に正は納得する。　異常な狂気のお陰で生き残れたが、一族は滅び、二つ名で悪魔と呼ばれる様になった。
「まぁ、何とかするさ」
狂うのが怖いから戦わない。　正はそんな言い訳をするつもりはない。
戦わなければ誰も守れないのだから。
『正……てめぇまさか……』
正が今回の戦いで何をしようとしているか。　狂気をどうするつもりか。

白虎は少しだけわかってしまった。

「さぁ、どうだろうな？」

惚けながら、いつも自分を心配してくれる少女の事を想っていた。

第７５話　必要ならば

「ナメるなよ。ガキが！」

激昂しながら、ガドルはビルから飛び降り、二丁の拳銃を連射する。
刀を抜き、銃弾を弾きながら、正は走り回って銃弾を躱していく。
地面に降り立ったガドルは、拳銃を放り投げ、二つの機関銃を取り出し、正に突き付ける。

「今度こそ殺してやる」

「上等。　だがその前に、俺も今度こそ名乗ろうか」

機関銃を向けられていると言うのに、正は刀を鞘に納める。

「俺の名前は風魔正。　今度こそ、記憶しとけ」
「記憶する必要があるか！」

正が名乗ると、ガドルは引き金を引いた。
無数の銃弾が正に向かっていく。　だが、銃弾は風の盾によって全て防がれた。

「ちっ……！」

弾が切れた拳銃を捨てると、ショットガンを取り出す。

「いくぜ。　ハク」
『馴れ馴れしく呼ぶな！』

正を中心に、台風の如く風が吹き荒れる。
風がやむと、正は白虎の姿を一部借りた、完全体になっていた。
服で見えないが、服の中は、白い体毛が指の先から肩辺りまでと、足の先から太股辺りまで覆っていた。　そして、胴体と顔も少し覆われていた。

「ッ！」

ガドルはショットガンを持っている方とは逆の手に、バズーカを握る。

「やべっ！」
『っておい！？』

やばいと言いつつ、正はまっすぐ突っ込んでいく。　主人（仮）の無謀な行動に、白虎は声を張り上げて怒鳴る。

「任せろ！」
『任せられるかぁ！！』

案の定、放たれた弾は正に向かっていく。
このままなら正に当たり、爆発して終わりだが、正は刀で弾を真っ二つに斬り裂いた。

「何ッ！？」
「うおっ！」
『おお！！』

二つに別れた弾は正の背後で爆発する。
その光景にガドルとグランツは驚き、白虎は感心の声を漏らす。
三者の声を訊きながら、正はショットガンを斬り裂く。　そのまま、ガドルに斬りかかる。

「くそっ！」

武器を失ったガドルは、残骸を捨て、二本の小太刀で受け止める。
擦れる様な金属音を鳴らしながら続いた鍔迫り合いは、正がガドルを力任せに吹き飛ばした事で終了する。
完全体になる事で、正の身体能力は通常時よりはね上がっている。
　悪魔であるガドルを、力ではね除けるくらいに。

「馬鹿力がっ！」

悪態を吐くと、小太刀を捨て、今度は身の丈程の大剣で正へと斬りかかる。
流石に重量級の武器を一本の刀で受け止めるのは無理なのか、正は

二本の刀で受け止める。

「ふぅん！！」

「ッ……！」

ガドルが力を入れると、正は徐々に押され始めた。

このまま押し勝てると、ガドルが思った瞬間、押し返されている感覚が無くなった。

「っ！！」

そして驚愕する。　正が刀を手離し、ガドルの懐に潜り込んでいたからだ。

ガドルが回避するより速く、正は拳をガドルの腹部へと叩き込んだ。

「ぐぶっ！」

大剣から手が離れ、ガドルは後退る。

正とガドルの武器が地面に落ちたと同時に、正は攻撃を仕掛ける。

（素手で！）

武器を拾って、そこからもう一度攻撃を仕掛ければ良いものを、正は敢えて丸腰で攻めてきた。　それは、ガドルにとって好都合なのだが、油断してはいけない。

魔界での戦いの時、正は格闘も使用し、一発でも決まれば敗北必至の技も持っている。

ガドルはトンファーを両手に持ち、正の拳打を防御する。

そして、防御する度に、ガドルの手に小さな切り傷ができた。

「なっ！！」
「驚いてる暇があるのか！？」

正は蹴りを放つ。　勿論、ガドルはトンファーで受け止めるが、腕に切り傷ができる。
だが、ガドルは冷静に、正の攻撃に集中する。

（攻撃は完璧に止めている。　傷を負うと言う事は、こいつは攻撃に何か細工をしている筈！）

顔面に向かってくる拳を、ガドルは紙一重で躱す。　その動きは、ただ躱しているのではない。　見ているのだ。　正の拳を。

（やはりそう言う事か！！）

正の攻撃の正体に気付いた瞬間、ガドルの頬が切れる。

「ちっ……！」

ガドルは怯まず、正の頬にトンファーを叩き付ける。

「……ッ！」

正がふらついた隙を突き、腹部へトンファーを叩き込む。
地面を滑りながら後退させられた正だが、足に力を入れて踏ん張ると、獣の如くガドルに襲い掛かる。

（ワンパターンな奴め。　お前の攻撃は読めてんだよ！）

攻撃が直撃している訳でもないのに、ガドルが傷を負う訳。　それ

は、正が拳や蹴りを放つ度に、鋭い風を纏っていたからである。

（接近されても、ある程度の距離を保てば効果は無い。　例え当たっても怖れるに足らん！）

風の刃を纏った攻撃は、射程が短ければ、威力も大した事はない。トンファーから長刀に持ち変えたガドルは、間合いを保ちつつ、積極的に反撃する。

「っ！　おらぁ！！」

肩を斬られたが、正は怯まず、大振りな蹴りを繰り出す。　勿論、そんな大振りな蹴りなど、ある程度の距離を保っていたガドルに当たる筈もなく、空を切る、

「ぐっ！！」

筈だった。

ガドルは腹部に痛みを感じる。　何だと思って見てみると、腹に白いナイフの様に短い短剣が刺さっていた。

（っ、いつの間に！！）

引き抜こうとしようとしたが、短剣はすぐに消えてしまった。

「悪い言い忘れてた。　今は……暗器使いだった！」

「くっ！」

正が腕を振ると、小さな矢がガドルへと向かっていく。

（風を武器に変えてるのか！）

風によって精製された矢を躱したガドルの前に、正が迫ってきていた。

「ほら！　油断してるとまた暗器にやられるぞ！」

「このっ！」

ガドルはまた、いつ何処から現れるかわからない暗器に警戒した瞬間、正に腹部を殴り付けられる。

「ごはっ！」

完全に暗器にばかり気を取られていたせいで、腹部へのダメージが大きく感じた。

「ほら、余所見すんな！　今は格闘家だ！」

「……ッ！」

そう言いながら、正は風を刃にしてガドルの体を斜めに斬り裂く。

「っくぅ……お前、デタラメばかり……！」

「悪い、俺は……」

風の刃を消し、正はガドルに襲い掛かる。

「嘘つきなんだ」

眼前に正が迫る。

ガドルはすぐさま飛び退き、手榴弾を正に投げ付けた。

手榴弾は爆発し、正は巻き込まれ、ガドルは爆風で吹き飛ばされる。

「ざまぁみろ……」

爆発の真ん中にいた正は、無事ではすまないと、ガドルは勝利を確信した。

瞬間、爆煙の中から大きな白い虎が弾き出された。

「！　白虎！？」

突然現れた白虎に警戒するが、様子が可笑しかった。

「くそっ！　やっぱりか！」

何かとんでも無い事が起きているかの様な慌てようだった。

「狂気に呑まれやがった！」

煙の中から小さな笑い声が聞こえてくる。　そして、煙の中から血みどろの正が現れた瞬間、笑い声は大きくなった。

「アハハハハハハハハハハハハ！！！！！！！！！」

元の姿で出てきた正は、それはそれは恐ろしかった。　以前、魔界で狂気に呑まれた時以上の狂い方をしていた。

それは、白虎を体から無理矢理追い出す程だ。

「あれが……！」

グランツも感じていた。　恐ろしく危険で、理解する気にもなれな

い、おぞましい力を。

（あの馬鹿がっ！）

白虎は先日の正の言葉を思い出す。

『必要なら……狂気にも呑まれてやるさ……』

一人言だろうが、確かに正はそう言った。

仲間を守れるなら、自分が犠牲になっても良いと言う意味なのだろう。

だが、白虎はそれを許さない。

（散々振り回してきやがったくせに、今更つまんねぇ真似させるかよ！）

何とか元に戻そうと考える白虎だが、そこで問題になるのが、どうやって元に戻すかだ。　正の場合、怒りと憎しみは勿論、痛みや苦痛でも狂気をさせる引き金（トリガー）になり得るのだ。

「ハハハハハハハハハハ！！！！！！！！！」

そうこう考えていると、笑い声を上げながら、正がガドルへと向かっていく。

「待て！！」

「ガドル！！」

白虎とグランツの声が響く中、正の手がガドルへと迫る。

このままでは、触れられた箇所から風を送り込まれ、体を中から切

り刻まれてしまうが、反応が遅れてしまったガドルは、躱す事が出来なかった。
そして、正の掌がガドルの顔に触れようとした瞬間、

「正さん！！」

少女が正の名前を叫んだ。
掌はガドルの顔に触れるか触れないかの位置で、ピタッと止まる。

「あいつは……」

白虎達は、声がした方へ視線を向ける。　そこには、氷の様に美しい、水色の髪を靡かせた、薫が正を見つめていた。
正はゆっくり首を動かし、薫を見る。　何を思っているのか、正は顔を俯かせる。
そして、後ろに飛び、ガドルから距離を取った。

「……おい、白虎！」
「うおっ！　な、何だよ！」

突然名前を呼ばれ、白虎は驚く。　そんな白虎を尻目に、正はいつもの声色で言った。

「手伝え」
「……はっ！　そうだな！　折角外に出てるんだ。　トドメくらい手伝ってやる！」

白虎は正の二本の刀を空へ上げる。　空へ上がった刀は、弧を描き、正の元へと落ちていき、正の手に納まった。
正が刀を鞘に納めると、白虎がその上を飛び越え、ガドルへと向か

っていく。

「っ！」

向かってくる白虎に、ガドルは身構える。

「いくぞ！」

「おう！」

右の腰の刀に風が集まっていくと、正は居合いの様に刀を振るう。
　刀から解き放たれた風が、白虎を包み込むと、白虎の体は風と一体化し、ガドルを透過した。

「うっ！！」

透過したのは白虎だけ。　風はガドルの周りで吹き荒れ、自由を奪っていた。
風と化した白虎は、元の姿に戻ると、ガドルの後ろに現れた。
正は左手に握った刀を鞘に納めると、左の腰の刀に右手をやり、鞘から引き抜いた。　それを合図に、正と白虎は駆け出す。
正からガドルへ、白虎からガドルへ向かって追い風が吹く。
前後から攻撃が迫ってくる事はわかっていても、ガドルは身動きが出来ず、ただただ待つ事しか出来ずにいた。
そして、正は刀を振り上げ、白虎は鋭い爪を振り上げ、

「“迅風（しんぷう）”！」

同時にガドルを斬り裂いた。
鮮血が飛び散り、ガドルの体が地に落ちる。

「はぁはぁ……」
「ったく、無茶しやがって」
白虎は呆れ果てる。　狂気に呑まれかければ、血を垂れ流しながら戦闘を続行したのだから。
「正さ……ん……」
薫が正へと駆け寄ろうとするが、突如足を止める。
「お、お前……」
「……」
地に伏していたガドルが、動いたからだ。　とは言っても、もう戦えはしないだろう。
「何で……」
「何で殺さなかったか？　まぁ、最悪、必要なら狂気に呑まれて殺そうかとは心の隅っこで考えてたよ」
考えてたのかよと、白虎は叫んでいるが、正は無視して話を続ける。
「だけど、そんな俺を見たくない子がいるって思い出したからな」
正は薫を見る。　自分の為に悲しみ、泣いてくれた少女を、これ以上悲しませたくなかった。
「どうしようもない嘘つきだけど……これ以上約束を破る訳にはいかないんだよ」

一緒に狂気と向き合おうと言ってくれた。　だから今、自分が狂気に呑まれる訳にはいかなかった。

「悪魔の……癖に……」

「本物の悪魔に言われたくねぇよ。　まぁでも……」

正はガドルに背を向け、

「あいつ等の為に戦えるなら、悪魔でも良いさ」

薫の元へと歩いていった。

第７５話　必要ならば（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「はい、竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の聖麻から質問だ。　ありがとう。　『修二に質問。クリスマスに優也（酔った）が薫に抱きつき、薫も抱きしめ返したがそこのとこどう思う？』」

修二

「なっにいいいいいいいいいい！！　羨ま……許さんぞぉ！　火渡ゆ……」

薫

「兄さん」

修二

「か、薫！！」

薫

「あの時の優也君は凄いんです。　可愛いんです。　抱き締めたいんです。　もし手を出すのなら……わかってますね？」

修二

「は、はははは！」

仁

「結局こうなるんだな。　次の質問は、ＯＯＯＴＧＬＳＴＳＴＰＢさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】の桜からだ。　ありがとう。　『鎖のような特殊な武器を使うお方がいれば教えて下さい』」

闇夜

「今の処、薫、修二、ガドルですね。　優也も闇の力で鎖を出したりしてましたから同じですね」

仁

「次は、ユニコーンさんの【ＣｒｏｓｓＷｏｒｄ】の真言からだ。

ありがとう。　『皆は猫派？それとも犬派か？』」
闇夜
「はい、答えて」
優也・美優・優花・総司・流香・龍
「猫派」
彪牙・仁・正・薫・進
「犬派」
闇夜
「正……猫科なのに」
正
「ほっとけ！」
仁
「次は、星空の侍さんの【幻想郷の星空】の和樹からの質問だ。
ありがとう。『男キャラの皆に質問！ゴキブリを素手掴める？』」
優也・進・総司・正
「無理　（です）！」
彪牙・仁・龍
「触れるだろ」
優也・進・総司・正
「マジで！？」
闇夜
「戦いもいよいよ佳境！　キョウや他の皆の戦いも楽しみにしててくださ
い！」
仁
「次回も宜しく頼む」

次回
第７６話　敗北の先の勝利
亮

「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第７６話　敗北の先の勝利

静けさが支配するリビング。　いつもの騒がしさも無ければ、少女の様な紅眼の少年も、笑顔を振り撒く少女も居ない。
そこで、優花は一人で皆の帰りを待っていた。
自分には戦う力が無い。　だったら待とう。　皆が、優也が帰ってくるのを待ち続けよう。　そうやって一緒に戦おう。
そう心に決めた。　美優にもそう言った。　だが、今回ばかりは不安を拭えない。
何と言っても、相手はあの死神の王なのだから。

『主の元へ駆け付けるつもりか？』
「……ぇぇ」

頭の中に響いた女性の声に、優花は小さく返事をする。

『やめておいた方が良い。　貴女が戦場に来ることは、私も主も望んでいない』
「うん、そうだろうね」

戦いが嫌いで、誰にも傷付いて欲しくないと思っている少年だ。
自分が行けば、彼は困るだろうし迷惑に思うだろう。
そう言い聞かし、今までは何もしなかった。　しようとしなかった。

「私はね、何かと理由を付けて、誰よりも彼を知っている風に見せて、彼から逃げてたの。　私が消えたくない一心で」
『それは誰でもそうだ』
「ううん。　私はそうあってはいけない。　私は長く、この世界に存在し過ぎた」

何処を見ても黒一色。　何処まで行っても黒一色。　何処までも黒の世界から、優花は抜け出したかった。
そして、遂に光が存在するこの世界に出られた。
また黒の世界に戻りたくない。　この世界に居続けたい。
その一心で、知らず知らず、彼を避けて生きてきた。　彼も、それで良いと言ってくれた。　だが、このままでは駄目だと思い始めた。
いつまでも彼の優しさに甘えていては駄目だと。

『だが……』
「大丈夫。　安心して」

心配げに呟く女性を安心させる様に、優花は言う。

「いつかは帰らなきゃならない。　帰るべき場所へ。　だよね、優也」

彼の名前を呟くと、優花はリビングから出ていった。

第７６話　敗北の先の勝利

「うっぐぅ……がぁ……ぐぁ……」

本当に、永遠に続くかと思われた幻術だったが、ウィリアムは時間を掛けて幻術を解いた。

解けても、視界が定まらず、脳もマトモに働かず、何度も嘔吐を繰り返した。

とても戦える状態ではないが、プライドの高いウィリアムが、このまま終わる筈がない。

「にん……げんごときが……。　よく、も……よくも！」

怒りと憎しみ。　それだけがウィリアムの心を支配していた。

「こ、この……程度で……私を……止められると思うなよ……。　人間があああああああ！！！！」

ウィリアムが激昂すると、町中から光の玉が、ウィリアムの体へと集まっていく。

「オアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

そして、ウィリアムは黒い光に包まれた。

「な、何ですかあれ！？」

薫の驚く声が響く。　薫の目線の先には、骨の体に、ボロボロの黒いマントの様な布を纏っている、まさに死神と言っても過言ではない存在が居た。
だが、薫が驚いているのは姿ではない。　大きさだ。
その大きさが、３０メートルは優に超えていたからだ。

「ぐぁぁぁぁぁぁ！！！！」
「ガドル！？」

突如、ガドルが苦しみ出し、グランツがガドルの元へ駆け寄ろうとした瞬間、ガドルは光の玉になり、死神の元へと飛び立ってしまった。

「ガ、ガドル！？」
「くそっ、どうなってる！」
「ウィリアムの仕業だ！」

この場に居る全員が突然の状況にパニックになっている中、突如響いた女性の声に、一同は静まる。

「兄さん！　雪奈さん！」
「ウィリアムの仕業？　どう言う意味だ？」

正達の元に現れた修二と、ガドルが消えてしまった原因を知っている風に言った雪奈に、正が問い掛ける。

「そのままの意味だ。　ウィリアムと言う死神が死者の魂を操る事の出来る術者なんだ」
「死者の……！」

雪奈の言葉に、グランツの顔に怒りが表立つ。
親友を弄ばれれば、当然の反応だ。

「今ウィリアムは、操っている魂を全て自分の体に取り込んで、自分の力に変えている。　その結果があれだ」

雪奈に代わって、修二が巨大な死神へと化したウィリアムへと指を差しながら言う。

「そりゃぁ厄介だな……」
「あぁ……」

白虎の呟きに、正が相づちを打つ。
正確な数はわからないが、この戦場に居る魂が実体化した存在は、かなりの数だ。　それを全て取り込んだとなると、厄介を通り超して、危険だ。

「あれは！！」

何かを見付けた薫は、ウィリアムが居る方へ指を差す。　その先には、味方をしてくれていた妖怪の大群が、ウィリアムへと向かっていっていた。

「馬鹿がっ！」

それがどれだけ無謀な行動か、理解している白虎は悪態を吐く。
案の定、妖怪の大群は、ウィリアムが手を振るっただけで消滅してしまった。

「っ、酷い……！」

跡形もなく消滅してしまった妖怪達を目の当たりにし、薫は顔を青ざめ、口元を抑える。

「あいつをこのまま放っておく訳にはいかないな。白虎」

「おぅ」

正が呼ぶと、白虎は正の中へと戻っていく。

「あれは俺がやる。薫は……」

「正さん」

ウィリアムへと歩き出そうとした正を、薫が引き止める。

「ここは私達に任せて、正さんは行って下さい」

「な、何言って……！」

「理解力が無いのか？　お前はキョウを倒してこいって言ってるんだ」

引き止められ、薫に先に行けと言われ、戸惑いを隠せない正に、修二が呆れながら言う。

「あれを放っておけないのは当然だ。だが、死神の王も放ってはおけない。なら分担するしかない。俺達があの化け物。お前が死神の王だ」

「確かにそうかも知れないが……」

『正』

修二の言葉に納得出来ない正に、白虎が声を掛ける。

『あの娘の眼を見ろよ。　何を言っても無駄だろうぜ』
「……」
正を見つめる薫の眼。　混じりけも無く綺麗で、強い眼だった。
「わかった。　だけど、無事でいてくれ」
「はい。　その代わり、正さんも無事に帰ってきて下さい。　約束ですよ？」
薫の言葉に正が頷くと、修二が正へと近付く。
「薫の心配はするな。　俺が守る」
「修二……」
「言っておくが薫はやらんぞ！！」
下から覗き込む形で、恐ろしい表情で正を睨み付けた。　冷や汗が流れるのを感じながら、正は力無く頷いた。
「葛城。あんたはそこの悪魔を見ててくれ」
「わかった」
『大丈夫かよ、そいつ』
雪奈にグランツを任せようとする修二に、白虎は少し不安げになる。
「修二と一緒に居たんだから大丈夫だろ。　それに……」
「私が保証しますよ。　雪奈さんは大丈夫です」
薫は微笑みながら正に言う。　その言葉に、正は薄く笑いながら頷いた。

「ちょっと待て！　俺はまだ戦える！」

戦力外の扱いをされ、修二に喰い掛かるグランツだが、

「傷はともかく、魔力を使い果たしてるだろ？　そんなお前にいられたら邪魔なだけだ」

「っ……」

ガドルとの戦いで最後に放った一撃。　その一撃で、魔力を殆ど使い果たしてしまった。今のグランツは、足手まとい以外の何者でもない。

「あの人は私達が必ず助けます。　だから、安心して待っていて下さい」

悔しさを堪えるグランツに、薫が安心させる様に言う。

自分ではガドルを救えない。　だが、目の前の少女達なら救えるかも知れない。　だったら、

「……ガドルを頼む！」

悪魔のプライドなんて関係ない。

グランツは迷う事なく、薫に頭を下げた。

「はい」

薫は頷き、ウィリアムが居る方へと体を向ける。

「正さん。　行ってきます」

「ああ」
「行くぞ」
薫と修二はウィリアムへ、正は今までずっと動いていない音の元へ、それぞれ走っていった。

「ったく、お前がちゃんと倒さねぇからこうなるんだ」
「だから謝ってるじゃありませんか！」
彪牙と総司は、巨大な死神と化したウィリアムのすぐ近くの物陰に隠れ、様子を見ていた。
ウィリアムが魂を取り込み始めた時、彪牙達はウィリアムのすぐ近くにいた。
咲魔が魂を取り込まれる前に、ウィリアムの事を話してくれたお陰で、巨大な死神の正体を知る事が出来た。

「静かにしろ！　バレんだろうが！！」
「君もうるさいでしょうがぁ！！」
大声で言い争えば当然見付かる訳で、ウィリアムは巨体を彪牙達へ向け、二人を見下ろした。
完全に見付かってしまった彪牙と総司は、言い争いをやめると、ゆっくりとウィリアムを見上げ、冷や汗をかいた。

「「……あ、どうも」」

「ムトウソウジィ！！」
「「うおぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」」

若干エコーがかかった声で叫びながら、ウィリアムは二人を追い掛け、二人は叫びながら駆け出した。

「うるさっ！！　しかもデカイし骨ですからちょっと怖いです！！」
「おい総司！　ご指名だぜ！　逝ってこい！！」
「字が違いますよ！？　君も道連れです！！」
「ナニヲゴチャゴチャイッテイル！！」

痺れを切らしたウィリアムは激昂しながら、右手を二人へ叩き付ける。

「「うわぁ！！」」

何とか躱した二人だが、地面が粉々に砕けて、総司はバランスを崩してしまう。

「お前は離れてろ！！」
「彪牙！？」

ウィリアムの手に乗ると、彪牙は腕を駆け上がる。

（これだけデカけりゃぁ、動きも鈍いだろ！！）

ウィリアムの肩口まで駆け上がると、顎の辺りに向かって飛び、

「“総極拳（そうきょくけん）”！！」

拳を突き出した。
一撃決まれば、巨体であろうとダメージを与えられる拳は、空を切った。　ウィリアムは巨体に似合わない俊敏さで躱したのだ。

「なっ！　何て俊敏さ！？」

ウィリアムの異常な俊敏さに総司が驚く中、ウィリアムは腕を振るって彪牙を空高く弾き飛ばす。

「うあっ！！」
「彪牙！！」

３０メートルの巨体の遥か上まで、彪牙は打ち上げられる。

（マズイ！　あんな高さから落ちればいくら彪牙でも！！）

彪牙の頑丈さは誰もが認めている。　だが、５０メートル以上の高さから地面に落ちれば、いくら頑丈でも無事では済まない。
そして、今にも落ちてこようとした瞬間、赤い翼を羽ばたかせた流香が、彪牙を受け止めた。

「っ、流香……！」
「大丈夫！？」

彪牙を抱え、流香はウィリアムから離れようとするが、ウィリアムはそれを許さない。

「キュウケツキフゼイガァ！！」
「！！」

流香を捕まえようと、広げた手を流香へと伸ばした瞬間、

「“弓走（ゆばしり）”！」

掌を藍色に光る矢が直撃した。

「流香さん早く！！」

「え、えぇ！」

ウィリアムの動きが一瞬止まっている間に、流香は彪牙を連れて地上に降りる。

「ヤハリキサマカラコロシテヤル！！」

「くっ！！」

直撃はしたが、全くダメージを受けておらず、逆に怒りを買う事になった。

「ムゥ！！」

突如、ウィリアムの動きが止まる。　ウィリアムの下半身が凍り付いていたのだ。

「大丈夫ですか総司さん！」

「薫さん！　……と修二さん」

「俺はオマケか？」

総司を救った正体は、薫と修二の椿兄妹だった。

二人が同時に能力を使った事で、力が増していた。　増したのだが、

「コンナコオリデ、ドウニカナルトデモオモッタカ？」

簡単に砕かれてしまった。

「そんなっ！！」

「ちっ、やっぱりか……！」

二人同時に、全力で凍らせたのに、簡単に砕かれてしまって驚く薫の隣で、修二はある程度予想していた様な表情をした。

二人で同時に能力を発動して、力が増したのは事実だ。　その増した力でも、下半身を少し凍らせる程度しか出来なかった。　これでは、動きを封じていられるのは一瞬だけだと、修二は予想していた。

「ジャマヲスルナラマズハキサマラカラダ！」

ウィリアムは標的を総司から薫に変え、襲い掛かってきた。

「薫！！」

「きゃっ！！」

修二は薫を突き飛ばし、薫に代わってウィリアムに殴り飛ばされ、壁を突き抜けると、そのまま気絶してしまった。

「兄さん！！」

修二の元へ駆け寄ろうとした薫に、ウィリアムの巨大な手が迫っていた。

「“血の槍（ブラッディランス）”！」

「“総極拳（そうきょくけん）”！」

「“弓走（ゆばしり）”！」

迫り来る手を、彪牙と総司と流香が横から、拳と矢と槍を叩き付け、薫から狙いを反らした。

「薫！　お前はあいつの処へ！」
「早く！」
「で、でも！！」
「ジャマヲスルナァ！！」
「危ない！」

激怒したウィリアムは、薫に指示している彪牙達へと、手を振り下ろした。

「うっ！」

衝撃で弾き飛ばされた薫は、壁に叩き付けられる。　意識が飛びそうになったが、何とか飛ばさずに、ウィリアムを見上げると、

「うぁっ……！」
「流香さん！！」

ウィリアムの手の中に、流香が捕まっていた。

（くっ、足が……！）

流香を助けたい総司だったが、今の一撃で足の骨が折れてしまった様で、動く事が出来なかった。　彪牙も、今までのダメージで動けなかった。
この場で動けるのは、薫しかいなかった。

「ジュンバンガカワッタガ、マズハコノキュウケツキカラダ！」
「あああああああああああああああ！！！！！！！！！」
流香を掴んでいた手に力を込める。　流香は耳を塞ぎたくなる様な悲鳴を上げる。
「流香さん！！」
「くそぉ！！」
「こんな時にっ！」
薫が流香を助ける為に走り出す。　彪牙と総司は、何も出来ない自分に、怒りと悔しさを感じていた。
すると、ウィリアムの顔面に大きな炎の塊が直撃した。
「ムゥ……！」
「ふん！」
その隙に、空から飛来してきた黒烏が風を纏った錫杖を、流香を掴んでいるウィリアムの手に突き立てた。
「黒烏！」
「それに、九妖さんも！」
黒烏は流香を救おうと、そして、九妖は黒烏を援護していた。
「急げ黒烏！」
「わかってる！」
黒烏が急いで流香を助けようとすると、

「ヨウカイゴトキガ！！」
「っ！」

黒烏は腕から振り払われ、そして、地面に叩き落とされる。

「黒烏！」
「“我龍点睛（がりゅうてんせい）”！」
「グオォォォッ！！」

ビルの屋上から現れた青い龍が、ウィリアムに襲い掛かる。

「グウゥゥゥ！！」
「おおおおおおおおおおおお！！！！！！！」

青い龍を、流香を掴んでいる手とは逆の手で受け止める。　青い龍は隕石の様な勢いで、少しずつウィリアムを後退させる。

「コノッ、ザコガァ！！」
「うわぁっ！！」

だが力不足か、青い龍はビルの壁に叩き付けれる。
青い龍は姿を消すと、代わりに進が現れ、力無く地面へ落下する。

「進君！！」

進の体が地面へと叩き付けられそうになった瞬間、真司が滑り込み、進を受け止めた。

「いっつぅ……！」

「無理しすぎなんだよ馬鹿！」
「大丈夫、進！」
進と真司の元へ、雅とナミが駆け寄る。
『あの超高速移動の後ではやはりマトモに動けんな。　小僧、お前はもう下がれ』
「流香を、助けないと……」
体の限界を超えても尚、進は流香を助けようとする。
「で、でも……どうやってこんな相手を……」
そんな進の横で、ナミは思わず弱気な発言をしてしまう。
それも仕方がない。　ナミより強い流香達が、手も足も出ないのだから。
「イイカゲンアキラメロ！　ダレモワタシニハカテンノダ！！」
進達を見下ろし、ウィリアムは高笑いする。
これだけの力の差を見せ付けられ、マトモに戦える者は残っていない。
こんな絶望的な状況に、誰もが諦めかけた瞬間、
「諦める訳……ないでしょ……」
流香は諦めようとはしなかった。
「私達が敗ければ、色んな人達の人生が苦しみに変わる。　それなのに……」

自分や、自分の姉であるルナ達が、八年前に人生をメチャクチャにされ、苦しまされた。　それ以上の苦しみを、流香は誰にも味わって欲しくなかった。

「私達が諦められる訳ないわよ！！」

流香の言葉を訊き、進達の瞳に光が戻る。

「流香の言う通りだよ。　俺達が諦める訳にはいかないんだ」
「咲魔の魂も返して貰ってねぇしな」
「私も、二人と約束したんです」

一人、また一人と、戦いの意思を示していく。　誰一人として、諦めようとはしなかった。

「俺も諦める訳がないな。　薫を守る為にな」
「兄さん！」

頭から血を流し、右腕を折られても、修二は諦めず、薫の元へと戻ってきた。
誰一人として諦めない状況に、ウィリアムは激昂する。

「コノゴミドモガ！　アキラメナカッタラ、ワタシニカテルトデモ……」
「いや、もう勝ってるぜ」

声が響いた瞬間、流香を掴んでいたウィリアムの手が、バラバラに斬り裂かれた。

「ナニッ!?」

突然起きた出来事に、各々が驚く中、流香は浮遊感を覚える。

「ったく、女の子を乱暴に扱うんじゃねぇよ。　大丈夫か?」

「こ、浩輝さん……」

浩輝は流香に向かって軽く笑みを向けると、流香を抱えたまま重力を感じさせずに、地面へ降り立った。

「この戦争。　お前達は力では確かに敗けた。　だが……」

そして、優也を鍛えていた時に羽織っていたマントは無く、黒いスーツに黒いネクタイと言った、所謂(いわゆる)喪服を着た男、

「諦めなかった時点で、こいつとの勝負はお前達の勝ちだ!」

龍堂史哉が、進達の勝利を宣言した。

「だ、誰だ……あの赤い奴……」

「敵じゃぁ、なさそうだけど……」

浩輝とは知り合いもいるが、史哉とは、誰一人知り合いがおらず、史哉の登場に戸惑う。

「あ～、安心して良いぜぇ」

「ひゃあ!　た、竜也さん!?」

いきなり竜也が背後に現れ、薫は変な声を出して驚く。

「あいつはなぁ、優也の師匠だからよぉ」

「優也君の…………」

その言葉に、薫は勿論、話を訊いていた進達も驚く。
そして、優也の師匠だと知り、確信する。　あの優也の師匠なら、敗ける筈がないと。

「キサマラハマサカアノ、フロウフシノ（・・・・・）ノリュウドウフミヤト、アクリョウ（・・・・・）のイヌイコウキカ」
「お、バレてる」
「ま、当然だな」

史哉も浩輝も別段驚きもせず、普段通りに振る舞っているが、進達は違った。

「不老不死に悪霊！？」
「え、ど、どう言う事？」
「つまりだなぁ。　赤髪は死ななくて、浩輝は…………」

竜也がそこまで説明をすると、流香を地面に立たせた浩輝が、進達へ振り返った。

「かなり昔に死んで悪霊になっちゃったんだよ」

よく幽霊がする様なポーズを取ると、浩輝の周りに人魂が浮かび上がった。

「きゃああああああ！！！！　お化けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」
「雅ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！」

お化けは苦手なのか、雅は気絶してしまった。　気絶まではしていないが、数人青ざめていた。

「えぇぇぇ！？　気絶した！？」
「悪ふざけなんかすっからだろ。　ほら流香。　おめぇは下がってな」
「は、はい……」

浩輝を叱りながら、浩輝達の隣まで来た竜也は、流香を進達の元まで下がらせる。

「後は……」
「私達に任せて」

流香が進達の元まで行くと、入れ替わる様に、亮と箒に腰をかけた紗理奈が、竜也達の元へと現れる。
その際、魔女だと言う声が聞こえたが、紗理奈は聞こえていないフリをした。

「フンッ！　フロウフシダロウトアクリョウダロウト、ワタシノマエデハムリョクダ！」

今の自分の力に溺れているのか、ウィリアムは竜也達を見下す。

「下らん演説は訊きたくもない」
「ちゃっちゃとやっちまおうぜ」
「ああ。　今回は大サービスで除霊してやる」
「程々にお願いしますよ」
「それじゃあ亮。　私達は周りの雑魚をやっちゃいましょうか」

各々が武器を取り出すと、生き残りの、魂ではなく、実体を持った敵の妖怪や悪魔や死神が集まってきた。

「イケ！　オマエタチ！！」

そして、ウィリアムの声を皮切りに、竜也達に襲い掛かった。

「そうだな。　周りの雑魚は任せてください」
「大きな雑魚は任せましたよ」
「おぉ、任された」
「そんじゃあ、大人気ねぇが、久し振りに三人でいくか」
「ああ、この雑魚じゃあ、役不足だがな」

そして五人も、各々の敵に向かっていった。

第７６話　敗北の先の勝利（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「初めの質問は、竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の士からだ。　ありがとう。　『彪牙に質問。見ていて楽しいのは誰？』」

彪牙

「仁だぜ。　気も合うしな。　後は進だな。　ツッコミしてんの見るのが楽しいな」

仁

「俺もだ。　次は、ＯＯＴＧＬＳＴＳＴＰＢさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】の銃人からだ。　ありがとう。　『総司はこっちの女子３人の誰に会いたいかな？』」

総司

「誰とは言わず全員に会いたいです！！」

彪牙

「冷司に斬られた良いのに」

仁

「斬られても死にはいないだろうがな。　次は、ｒａｉｔｏさんからだ。　ありがとう。　『総司の性格がまともだったら女の子にモテていましたか（笑）』」

闇夜

「残念ながらモテます」

総司

「何が残念何ですか！？」

仁

「そのままの意味だ。　次は伽藍さんの【ハヤテのごとく！～鷺ノ宮家の諸事情～】の駿からだ。　ありがとう。　『修二さんと亮さ

んに質問です！シスコンである事に誇りはありますか？　もしあるなら俺と一緒に妹同盟を組みまｓ』」

修二

「当然、薫は誇りだ！」

亮

「優花は勿論、優也も誇りだよ！」

亮・修二

「組もうか！　妹同盟！」

闇夜

「別に組まんでも良いわ！」

仁

「次で最後だ。　ユニコーンさんの【ＣｒｏｓｓＷｏｒｄ】の霞から質問だ。　ありがとう。『割と服に気を遣っている人はいる？』」

美優

「私は少しは気を遣ってるよ」

修二

「薫も遣っているな」

総司

「僕は勿論遣っていますよ」

仁

「流香も遣ってると思うぞ」

亮

「俺は遣ってるよ。　紗理奈もね。　優也と優花も遣ってくれたら良いのになぁ……」

闇夜

「因みに私は適当です」

全員

「訊いてねぇよ」

闇夜

「酷い……」

美優

「それにしても、浩輝さんって悪霊だったんだ。　優也の師匠が不老不死だって事にも驚いたけど」

彪牙

「何かお前等がやけに強い理由がわかった気がするぜ」

仁

「化け物だらけの中にいたら嫌でも強くなる。　次回はその化け物達が大暴れするぞ」

闇夜

「次回も宜しくお願いします！」

美優

「感想待ってま～す！」

次回

第７７話　戦争を勝ち抜いた者達

史哉

「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第77話　戦争を勝ち抜いた者達

流香が戦いに向かった後、ルナは安心しきった表情で、エルザに膝枕をして貰っていた。

「御加減はどうですか？　お嬢様」
「ん～、後もう少し。　エルーの太股は気持ち良いわ」
「性格変わりました……って言うか、元に戻りましたね」

これまで、何処か無理をしていた印象のルナだったが、仁との戦いに敗け、流香と話してから、緩みきった性格になっていた。
エルザ曰く、これが元のルナらしい。

「良かったんですか？」
「え？」
「ルカお嬢様ですよ、ルカお嬢様。　一人で行かせて、心配じゃありませんか？」

突然現れた巨大な死神の元へ、流香が向かおうとした時、エルザも同行しようとした。
流香が、ルナに着いていて欲しいと言うのは予想できたが、まさかルナが流香を一人で行かせるとは、全く予想していなかった。

「勿論心配よ。　でもね、仁と戦って気付かされたわ。　ルカは強い。　そして、ルカを守ってくれる仲間達が居るって。　だから、大丈夫よ」

弱かったのは自分一人。　流香の強さに気付けなかったと言う、ルナの弱さ。　だが今は、それを克服し、心から安心して、流香を送

り出す事が出来た。

「随分と仁さんを信用していますね」

「信用って言うか……仕方なく、仕方なくよ！」

そう言うルナの頬は、ほんのりと朱に染まっていた。

その様子を見て、エルザは面白そうに笑う。

「あ～成る程」

「な、何よ……」

「いいえ、何でも」

納得いかなかったが、諦めて、ルナは流香達が戦っている場所を見つめた。

第７７話　戦争を勝ち抜いた者達

敵の大半を竜也達が倒したのだが、今この場に居る敵の数は、百を超えていた。

恐らく、新たに現れた敵の勢力だろう。

百の人間ではない異形に対し、相対するのは亮と紗理奈のたった二人。
誰もが無謀だと思い、敵は完全に油断した。
先頭の十もの異形が地に倒れる。
突然の事に異形達は慌てていると、いつの間にか異形の中に、亮が黒い大鎌を持ち、佇んでいた。

「手加減はしてあげるから、精一杯着いて来てみろ」

優しげな口調から、冷たく、低い声へと変わる。

「いくぜ」

眼にも写らないスピードで、自分の周りの異形を斬り裂いた。
そして、眼にも写らないスピードで移動し、異形をどんどん斬り裂いていった。

「もう少し手加減してあげなさいよ。　殺す訳じゃないんだから」

呆れながら、紗理奈は箒に乗りながら、空を飛んでいる敵に目線を向ける。

「空を飛びたいならもう少し綺麗に飛びなさい」

空を飛んでいる異形の両翼の辺りの空間が歪む。　歪んだ空間から刃が飛び出し、異形の両翼を貫いた。
貫かれたのは一体だけではない。　空を飛んでいた異形は、殆ど両翼を貫かれ、地に落ちていった。

「す、すげぇ……」

「圧倒的過ぎますよ……」

進達は、亮と紗理奈の圧倒的な戦いに、言葉が出なかった。
これだけ圧倒していても、二人は全く本気ではないのだから。

「片付けに入るとするか」
「えぇ」

底に響く様な声を出した亮の姿が消える。　紗理奈は胸の前で両手を合わせると、前に突き出した。
異形達を中心に空間が歪む。　次の瞬間、異形達は体中を引き裂かれた。
まるで傷口の部分だけ消された様な正体不明の技に、技を喰らわなかった異形は戸惑いを隠せない。
辛うじて技から逃げ延びた異形も、一人残らず、体中に切り傷を作って地面にひれ伏していた。
紗理奈は箒から降りて地面に足を付け、百もの異形達が一人残らず倒れている中、返り血も浴びず、たった一人で亮が立っている光景を眼に焼き付ける。
瞬神と呼ばれた死神が、斬り倒した敵の中で立っている光景を。

竜也、浩輝、史哉の三人と対峙していたウィリアムは、百もの軍勢がたった二人に敗北した事に、舌打ちをする。

「ヤクニタタンヤツラメ！」

「そこまで言うなら、自分が役に立つ処を見せてみな」

史哉が挑発する。

「アァミセテヤロウ。　ゴミドモガ！！」

簡単に挑発に乗ったウィリアムは、史哉にバラバラにされた手を、瞬く間に修復させた。

「超速再生か」

「まずは俺から行く」

一歩前に出た竜也は、服の中から大型の二丁の銃を取り出す。

「いくぜ。　ドラグーン、ドラグナー」

左手に持った銃をウィリアムに向けると、左腕に薄透明の龍が巻き付いた。

「ソンナオモチャデドウニカナルトオモウナァ！！」

修復し終えた手で、竜也に襲い掛かる。

「出力は……五十で良いか」

竜也は怯む事なく、引き金を引いた。　銃口から赤く光る弾丸が放たれ、ウィリアムの手を、腕を貫いた。

「ナァッ！？」

「ちょっと強く撃ちすぎたか」

貫かれ、粉々に砕けた腕が地面に落ちると、竜也はもう片方の銃をウィリアムに向ける。　すると今度は右腕に薄透明の龍が巻き付く。

「浩輝。　準備しろ」
「わかってるよ」

浩輝が刀を取り出すと、竜也は引き金を引く。　マシンガン、それ以上の連射速度で、赤い弾丸がウィリアムの体に命中し、ウィリアムは動きを封じられる。

「いくぜ幽鬼丸」

浩輝の周りに青白い火の玉が浮かぶ。　すると、普通の大きさだった刀が、三メートルは超える大刀に変化した。

“一文字”！」

巨大な刀を、重さを感じさせずに、横一線に振るう。
刀はウィリアムの両膝を斬り裂いた。

「グゥオォォォ！！！！」

足を失い、ウィリアムは前屈みに倒れる。　丁度真下には、不気味に笑みを浮かべた史哉が立っていた。
鍔を持たない刀を握り、素早く振るう。次の瞬間、ウィリアムの骨の体は、バラバラに斬り刻まれた。

「す、凄い！！」
「俺達が攻撃してもビクともしなかったのに……」

ウィリアムに攻撃を当てたのは、進、彪牙、総司、流香の四人。
全員、自分が自信を持っている技をウィリアムに放った。　だが、
ウィリアムを倒す事は愚か、傷を付ける事すら出来なかった。
処が竜也達は、簡単にウィリアムの体を傷付けていき、終いには、
バラバラにしてしまった。
それ程までに、竜也達と進達の間には、力の差があった。

（俺はまだまだ弱い。　もっと強くならないと）
（上等だ。　こいつ等より絶対強くなってやる！）

その強さを目の当たりにして、この場に居た者達、特に進と彪牙は、
強くなると心に固く決意した。

「アマクミルナヨ」

地面へ落下していた骨が宙で止まると、竜也達から攻撃を受ける前
の姿に戻った。

「ナニヲシテモムダナンダヨ！　コノチカラガアルカギリ、ワタシ
ハナンドデモヨミガエル！！」

ウィリアムは高笑いする。　竜也、浩輝、史哉の三人は耳障りなの
か、耳を塞いでいた。

「他人の力で調子に乗っているな」
「それでどうする？　あの再生能力は正直面倒くさいぞ」
「あいつ自身の力の核を破壊すれば良い。　そうすればあいつに吸
収された魂も解放される」

竜也の言葉に、浩輝と史哉は納得する。

「成る程。　んじゃぁ久し振りにあれやるのか」

「あぁ、そうだ」

竜也は一枚のお札を、ウィリアムの足下に向けて投げる。　お札が地面に張り付くと、お札を中心に、地面に円が浮かび上がった。

「ナンダコレハッ!?」

円の中に居たウィリアムが動こうとする度、電撃が走り、動きを封じる。

「行けッ！　紅遠(くおん)!」

浩輝が左手を翳すと、赤茶色の体毛の犬神、紅遠がウィリアムの足下を駆け抜ける。

「闇を用いて邪を打ち消す」

一枚、二枚、三枚とお札を取り出しながら、詠唱を唱えていく。

「光はこの世から消え失せる」

紅遠が駆け抜けた後に、赤い光が浮かんでいく。

「陽(ひ)は西に、月は東に」

紅遠が浩輝の元へ帰ってくると、竜也は五枚のお札を投げる。　五枚のお札は、それぞれが空中に留まる。

「世界は漆黒に包まれる」

紅遠が通った箇所が、更に赤く光る。　光は、五芒星を型どり、お札はそれぞれの頂点で浮いていた。

「総ては深淵なる闇へ」

お札から薄黒い光が放たれ、ウィリアムは声も無く苦しんだ。

「ナ！　バ、バカナ！！」

ウィリアムは眼を疑った。　体が独りでに崩れ始め、取り込んだ筈の魂が体から離れ出したのだ。

「マ、マサカ！　ワタシのチカらヲ！！」

竜也と浩輝の合体技。　それを受けたウィリアムは、自分自身の力を破壊されてしまっていた。つまり、魂を操る事が出来なくなっていたのだ。

「コンな、コんなコとがぁ！！」

「それが当然の報いだ」

竜也、浩輝が後ろに下がると、史哉が前に出て、ウィリアムを見上げる。

「死者の魂を弄び、生者の魂を弄び、挙げ句の果てには死神としてやってはいけない事をした」

「ダ、だまレ！！」

史哉に向かって、崩れゆく手を振るう。
暴風の如く、風が竜也達や進達に襲い掛かる。

「！」

勢いよく振るった手に、史哉が当たった感触がしなかった。

「どれだけ暴れようと構わんが」
「！！」

頭の上辺りにある手の甲から声が聞こえる。

「自分の都合で魂を弄んだお前は」

恐る恐る顔を向けると、赤髪の奴が居た。
鋭い眼光でウィリアムを睨んでいる史哉が。

「死神失格だ」

史哉は足場となっている手の甲を蹴った。　ヒビが入るのではないかと思うくらい力強く。
ウィリアムの視界には、スローモーションの如く史哉が迫ってきていた。　それが最期の光景の様に。

『いっけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！』

少年少女達は腹の底から叫んだ。　勝利を確信し、戦いを終わらせる祈りを込めて。

「“神龍閃（しんりゅうせん）”！！」

巨大な体を史哉が横切った瞬間、見せ掛けの死神は、弄んだ魂と共に、粉々に砕け散った。

地面に降り立った史哉は、刀を鞘に宛がい、

「死んで人生をやり直せ」

刀を納めた。

遠くで戦っていた巨大な死神の姿が消えるのを、俺は確認する。

巨大な死神の正体は、俺の部下のウィリアムで、相手は強大な力を持った、全く力の性質が異なる三人。　二人は知らないが、一人はわかる。

不老不死の身で、有りとあらゆる世界を渡り歩き、様々な戦いに身を置き、神と同等の年月を生きていた赤き英雄。

ウィリアムにはあいつの相手は荷が重すぎたな。　あいつとは何度か戦った事が有るから良くわかる。

久し振りにあいつにも会いたいが、今はそれ処じゃあ無いな。　お客様だ。

「魂を弄んだ死神の末路は死有るのみ。俺も同罪か？　あんたはどう思う？」

魂を操るなんてややこしい事はしてねぇしやりたくもねぇけど、咲

魔の魂を無理矢理連れてこさせたり、終を生み出したり。　それはそれで魂を弄んでるんじゃないかと思ったりもした。　だから、血を流してボロボロな、昔の知り合いに瓜二つな子供に訊いてみた。

「死神じゃないけど、それなら俺も同罪だな。　お前もそう思うだろ？　キョウ」

少女の様な少年。　確か火渡優也だったな。
こいつは過去に数え切れない人を殺している。　命を奪った事と魂を弄んだ事を同罪だとすれば、こいつも俺達と一緒か。
それにしても、性別と口調以外は殆ど闇奈と同じだな。
そう思うと少し嬉しくなる。もう会えないと思っていた相手と、時を越えてであるのは。

「んじゃぁ、そろそろ始めるとしようか」

通常よりも大きな大鎌を召喚させる。　長い間、一緒に戦ってきた相棒だ。
優也も何も言わず、闇奈が使っていた刀と全く同じ漆黒の刀を鞘から抜く。
そう来なければ面白くない。

「最終決戦だ」

仮にも死神の王と呼ばれている男の力。　ここに示してやろう。

第７７話　戦争を勝ち抜いた者達（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「初めの質問は、ＯＯＯＴＧＬＳＴＳＴＰＢさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】の雷美からだ。　ありがとう。　『寝るのが一番好きなのは誰なの～？』」

闇夜

「一番はわかりませんが、美優は授業中は良く眠りますし、彪牙は休み時間とか、暇な時は良く寝てます。　意外に優也も睡眠をよく取ります」

仁

「次は、竜王の白翼さんからだ。　ありがとう。　『亮さんに質問。優也が突然『実は……女の子なの…』って言ったらどうする？』」

亮

「例えそうだとしても、変わらず愛し続けます。　優也である事には変わりないですから」

優也

「女じゃないけどな……／／／／／／」

仁

「照れてるな。　声も小さいし。　次は、星空の侍さんの【幻想郷の星空】の将からだ。　ありがとう。　『優也に質問、料理って誰かに教わったのか？』」

優也

「え、いや、母さんが料理してる処を見てたら出来る様になったぞ。　初めて母さんに簡単だけど手料理を作ってあげた時は、凄い嬉しそうだったなぁ……」

闇夜

「あぁ！　段々と声が小さく！！」

仁
「今日はここまでだ。　次回は遂にキョウとの戦いだ。　最後の戦い、見てくれ」

次回
第７８話　死神の王
キョウ
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第７８話　死神の王

「結局お前が最後決めちまったな」
「楽できたから良いけどなぁ」

辺り一面に、夥しい数の魂が浮遊しており、この魂を操っていた張本人のウィリアムは、気を失い、地面に倒れていた。

「死んだんですか……？」

最もダメージを受けていなかった薫が、史哉に尋ねる。　敵とは言え、死ぬのは薫の心が痛む。

「死んじゃいないさ。　だが、こいつは死神としてやってはならない事をした。　こいつの力の核は破壊したし、どちらにせよ、こいつは死神として死ぬ。　その後は楽には死ねないだろうぜ」
『鬼……』

史哉の言動に、進達子供メンバーは小さく呟く。　竜也と浩輝は呆れた表情をしていた。

「にしても疲れた」

竜也は自分の肩を叩くと、軽くストレッチをする。

「歳じゃないのか？」
「もうすぐで三十路だからな」
「嫌味にしか聞こえねぇよ」

不老不死の史哉は死ななければ老いない。　悪霊の浩輝は死んだその日から姿が変わっていない。　そんな二人に歳を取ったと言われると、嫌味にしか聞こえなかった。
竜也が何故この二人と友達をしているかは、謎である。

「あぁ、早く家に帰って沙希の飯が食いたい」
「沙希？　誰だ？」
「使用人でも雇ったか？」

聞き覚えの無い名前に、史哉と浩輝は興味津々で訊いてみる。
竜也から帰ってきた答えは、予想だにしない答えだった。

「家内だ」

敵の襲撃を受けてもいないのに、大爆発が起きた。

「かかか家内ぃ!?　結婚してたのか!?」
「訊いてないぞ!?」

いつも仏頂面の史哉が驚く程、竜也に嫁が居る事は有り得ない事らしい。
進達も進達で、驚愕していた。　竜也が結婚出来そうには見えないからだ。

「言ってなかったか？　五年前に結婚したんだ」
「訊いてない！　全く訊いてない!!」
「因みに一児のパパだ」

第二の爆弾を投下した。
友達の衝撃事実に、二人は言葉が出ない。

「佳奈って言うんだ。　可愛いぞ」
「「訊いてねぇよ！！」」

さっきまでの張り詰めた雰囲気は何処へやら、今は何処か和やかな雰囲気になっていた。
何にせよ、これで進達の戦いは終結した。
残すは、最強の死神のみ。

第７８話　死神の王

「キョウ、戦う前に教えて欲しい」

お互い臨戦態勢だったが、優也はどうしても訊きたい事があった。

「何だ？　何でも答えてやるから言ってみな」

その事を不思議に思わず、キョウは言う。

「本当に、ただ暴れたいだけでこの世界を壊したいのか？」

「……」

ただ暴れたいだけ。　それも理由の一つかも知れないが、いくらなんでも可笑しい。　暴れたいのなら、こんな処でじっとしておく意味が無い。

何か、どうしても世界を壊したい理由が有るとしか思えなかった。

「在る処にな、総てを愛し、総てに愛された女が居た」

黙っていたキョウが話だし、優也も黙って話を訊く。

「俺もそいつを愛してたけどな、そいつは他の奴と結ばれた。　少し残念だったけど、俺はちゃんと祝福したぜ。　カイも、そいつの親友も、世界の総てがあいつを祝福した」

総てに祝福された女性。　それはとても幸せな事だろう。

だが、

「それなのにこの世界はあいつの命を奪った！」

殺されてしまった。　総てに祝福された女性は。

「あいつが何をした！？　何であいつがあんな理不尽な理由で殺されなければならない！！」

「……ッ！」

優也にも伝わる。　怒り、憎しみ、苦しみ。　自分が過去に感じた感情とは比べ物にならない感情に、優也は気圧された。

「カイはこれが世界が決めた運命だと言ったが、あんな運命だった

ら願い下げだろ！！」
「っ！　その人の事は俺にはわからない。　だけど！　その人が本当にこんな事を……」
「知ってる筈だぜ」
「え……？」

キョウの言葉に、優也は話すのをやめる。　そして、キョウから告げられたのは、思いもよらぬ言葉だった。

「知らないとは言わせねぇよ。　お前は誰よりも知らなきゃならねぇ。　穂乃花の名前を」
「なっ！　何で……何で母さんの名前を！？」

答えを訊く前に、優也の眼前に、キョウの鎌が迫っていた。

「ぐっ！！」

刃が届く寸前で、刀で防ぐ。

「そっから先は宿題だ。　自分で考えな！」
「っ！」

鎌を振り払い、優也を吹き飛ばす。

「改めて始めようぜ。　火渡優也！」

鎌を振り回し、キョウは優也へと向かっていく。

（今はやるしかない！）

優也も闇の力を解放する。　闇の力で形成された黒のロングコートが風に靡き、戦闘準備が出来ると、優也もキョウに向かって走り出した。
優也の漆黒の刀と、キョウの黒い鎌がぶつかり合う。
金属音を響かせ、鍔迫り合いが始まる。

「『闇空(あんくう)』か。　相も変わらず見事な刀だなぁ！」
「闇空……？」

刀を見て言ったキョウの言葉に、優也は疑問符を浮かべる。

「知らねぇのか。　だったら教えてやる。　お前が使ってる刀の名だよ！」
「……ッ！」

力の拮抗が崩れ、優也は後ろに飛ばされる。

（っ、力比べじゃ勝てない！）

元々力の無い優也では、死神のキョウとの力比べなど、出来る筈もなかった。
ならばスピードならと考え、優也は終を倒した時に使用した、“闇(ダークネス)の加速(アクセル)”を使おうかと考えたが、速いだけでキョウを倒せるとは思えない。　その程度の敵なら、死神の王と呼ばれる事も無ければ、数え切れない年月を生きてこれる筈もない。

（だからと言って、格下が格上に合わせて戦っても勝てない！）

自分はキョウの格下だと考えている優也は、キョウのペースに合わせず、自分のペースに持っていこうとしていた。

「“鳳凰炎舞（ほうおうえんぶ）”！」

優也の刀から朱く煌めく炎が、螺旋状にキョウへ襲い掛かる。　炎は容赦なくキョウを呑み込むが、キョウは微動だにしない。

「良い火加減だな。　気持ち良いぜ」

炎に呑まれようと、キョウには火傷の一つも残らない。

「これならどうだ？」

キョウが炎に気を取られている隙に、優也は刀に炎を溜め、キョウの視界の外に回り込んでいた。

「“鳳凰激”！」

刀から爆発的に放たれた炎は、キョウを呑み込んだかに見えたが、片手で塞がれていた。
今まで数多くの敵を倒してきた優也の得意技も、キョウの服を少し焦がす事しか出来なかった。

「もうちょい気張って来いよ……ん？」

片手で炎を払い、その先に居るであろう優也に言い放ったが、そこに優也は居なかった。
優也は、キョウのすぐ後ろに居た。　キョウが片手で炎を防いだ瞬間、持ち前のスピードで背後に回り込んだのだ。

（貰った！）

黒い刀に、更に黒を纏わせる。

「“闇空一閃（あんくういっせん）”！」

足を一歩踏み出し、両手で握り締めた刀を、キョウの脇腹に向かって振り抜いた。

死神の鎌（デスサイズ）ですら斬り裂いた刃ならば、死神すら斬り裂ける。

それは過大評価ではなかった。

今までは。

「……ッ！」

「この程度か？」

服には勿論刃が通った。

だがそれ以上、刀が進まない。

キョウの肉体に、刃が入らないのだ。

（こいつッ！　垂れ流している神力だけでッ……体が鋼の様に硬い！！）

キョウが特別、神力を操作している様ではない。

つまり、普段から垂れ流している神力だけで、キョウは優也の斬撃を肉体一つで受け止めてしまった。

「今度はこっちからだ」

「っ！」

優也の右肩に衝撃が走る。

キョウのあの鎌が優也の右肩を斬り裂いた。

幸い腕は繋がっているが、予想以上に重い一撃に、優也はふらつく。

だが、キョウは優也を休ませず、下から鎌を振り上げる。

「うあっ！！」

咄嗟に防御しようとした優也だが間に合わず、胴体を斜め一閃に斬られ、体が宙に舞う。
宙に舞った小さな体が地面に叩き付けられる。
終との戦いで力を使い果たした優也には、これ以上戦う力は残っていなかった。
それでもキョウを倒そうと、刀を杖にして立ち上がる。

「辛そうだな。　今、楽にしてやる」

鎌を振り回し、優也の胸部目掛けて刃を突き立てる。
優也は今度こそ、刀で受け止めるが、受け止めた瞬間、刀にヒビが入った。

（っ……！！　止まらない！！）

ヒビは大きく広がっていき、漆黒の刀、闇空（あんくう）は、真っ二つに折れた。
死神（デス）の鎌（サイズ）の刃は狙いを外れ、優也の腹部を貫く。

「むっ、外れたか……」

優也の腹部に突き刺さった刃を引き抜く。　刃には、真っ赤な優也の血がベッタリと付着していた。
糸が切れた人形の様に優也が俯せに倒れると、地面に小さな血の水溜まりが広がる。

「かはっ……！　うぅ、くっ……！」

「まだ意識が有るのか。　可哀想にな……」

このまま気絶していれば、苦しい思いをせずに済んでいたのに、今回ばかりは、強い生命力が災いした。

バロールと戦った時以上の痛みが、優也を苦しめる。

「今楽にしてやる」

鎌を大きく振り上げる。

魂を刈り取る凶器が、優也へと振り下ろされた。

「……これは」

振り下ろされた刃は、優也の頭の上で止まっていた。　正確に言うと、キョウの体を電撃が駆け巡り、動きを封じていた。

「この電撃は……」

「仁……！」

優也とキョウから少し離れた場所に、竜の姿を借りた完全体の仁は居た。

「“雷鳴弾（らいめいだん）”！」

怒気の籠った声と共に、仁は雷撃を放つ。

地面を抉りながら、雷撃はキョウへと襲い掛かる。

「甘ぇ！！」

「！！」

誰にも破られる事もなかった電撃による拘束が、アッサリと破られ、雷撃は鎌によって防がれてしまった。

「俺を倒したいなら、もっと威力を高めねぇとな」

「っ！」

歯軋りをしてキョウを睨み付ける仁だが、力を使い果たしたのか、肩で息をし、片膝を付く。

「力切れか」

キョウは優也から離れ、仁へと歩いていく。

「はぁ……はぁ……！」

何とか立ち上がるも、立っているだけでも精一杯に見える。

満身創痍の仁の目の前に、キョウが立つ。

「終わりだ」

キョウは鎌を振り上げる。

「そうやって油断して近付いてくるのが命取りだ！」

「！！」

今まで満身創痍だった仁が、突如その雰囲気が消え去る。

「“雷光一閃（らいこういっせん）”！」

右の雷鳴刀による高速の突きで、キョウの胸を貫いた。　かに見え

たが、

「成る程。　右か左の二者択一の高速の突きか」

雷鳴刀が貫いたのはキョウの左の袖だけ。　キョウは半身で突きを躱し、振り上げていた鎌を下げ、仁の脇腹に突き刺していた。

「がっ！」

「雷撃を放って力切れに見せておき、俺が油断して近付いてきた処に零距離射程の突きとは、良い手だが……」

脇腹から鎌を引き抜き、

「まだ足りねぇな！」

「仁！！」

腹を横一線に斬り裂いた。

竜を模した姿が消えていき、仁は膝から崩れ落ちた。

その瞬間、キョウの背後に正が現れ、

「“風殺（ふうさつ）”！」

キョウの背中に掌低を叩き込み、風を打ち込んだ。

（殺った！）

完璧に技が決まり、後はキョウの体を中から風が切り刻むだけなのだが、いつまで経っても変化が訪れない。

「気配も無く背後を捕るとは、やるじゃねぇか」

「なっ……！」

キョウは平然と正へ振り返った。

「まさか……風に神力をぶつけて相殺したのか……！」

「ご名答！」

一瞬地震が起きたと思うくらい、キョウは地面を蹴り、正の懐に入って腹部を殴り付けた。

「かはっ！」

肋骨（ろっこつ）が何本か折れる痛みを感じながら、正はビルまで吹き飛ばされる。

正がぶつかった衝撃で、壁が崩れ、正は瓦礫の下敷きになった。

「正……」

「これで終い……かと思ったが、まだお客さんが居るな」

「！！」

優也から数メートル隣に、キョウは目線を向ける。　目線の先には、ここに居る筈のない、黒い髪に白いリボンを付け、空の様に青い瞳の少女、美優が居た。

「ば、馬鹿！　何で来たんだ！　逃げろ！！」

「で、でも……」

「そいつの言う通りだぜ」

ゆったりとした足取りで、キョウが美優に歩み寄る。

「お世辞にもあんたには戦う覚悟が出来ているとは思えねぇ。悪い事は言わねぇ、帰りな。だが、戦うつもりなら、わかるな？」

「ひっ！」

キョウと眼が合い、小さく悲鳴をあげる。

色んな人に後押しされ、進は自分の答えを出して、戦いに向かった。

美優も美優なりに答えを出し、優也の元へ駆け付けたが、待っていたのは、優也達が這いつくばり、その中心に血を滴らせた鎌を手にした、和服の男が立っている光景だった。

小さな勇気を振り絞って駆け付けたのに、美優は恐怖してしまった。

小さな勇気も覚悟も決意も、全てを蹂躙してしまう恐怖を美優は感じ、知らず知らずの内に後退りする。

優也の声も耳に入らないくらい、恐怖が美優の脳を支配していた。

わかっている事は、こんな相手に勝てる筈がないと言う事と、ただ怖いと言う事だけ。

キョウが一歩踏み出す度に、美優が一歩後退る。

それが二度、三度続いた時、美優の肩に、誰かが優しく手を置いた。

一瞬驚いた美優だったが、暖かく優しい手に、落ち着きを取り戻し始めた。

「大丈夫、怖がらないで。　私達が着いてる」

聞き覚えのある、いつも自分を励ましてくれる声に、美優の中の恐怖が薄らいでいく。

恐怖が薄れていく中、不思議に思った。　聞き間違えでなければ、今の声は、あの少女がここに居る事になる。　自分以上に、戦いとは縁の遠い少女が。

美優は慌てて振り返ると、やはり、そこには少女が居た。

「優花……！」

この場に居る事が不釣り合いな少女、優花が、美優に対して微笑んでいた。

第７８話　死神の王（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「最初の質問。　烈火竜さんからだ。　ありがとう。　『美優の好きなお菓子は？』」

美優

「好きなお菓子？　え～困るなぁ。　あれも美味しいしあれも美味しいし、あ～でもあれも捨てがたい！　うぅ～決められないよぉ！」

仁

「結論、全部大好き。　次は、竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の美莉からだ。　ありがとう。　『美優ちゃん、優花ちゃん、雅ちゃんに！みんなの望む恋愛は？』」

美優

「やっぱり、二人で色んな処に行ったり一緒に同じベッドで寝たり、キャ～／／／！」

闇夜

「少しキャラが崩壊してる……」

優花

「私は、お互いがお互いを愛せればそれで良い……かな……／／／」

雅

「れ、恋愛なんてよくわからないけど……言いたい事を言える中にはなりたいかな……／／／」

仁

「初々しいな。　次で最後だ。　ＯＯＯＴＧＬＳＴＳＴＰＢさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】の烈火からだ。　ありがとう。　『もしこっちに来た時の炎の色、武器、モチーフとなる生物はなにがいいですか？』そうだな。　炎は金。　武器は見ての通りこの

銃。　モチーフは竜だな」
優也
「俺は、まぁ黒になるな。　武器はこの刀で、モチーフは鳥」
美優
「私は白！　武器は弓で、モチーフは……猫かな？　猫好きだし」
進
「俺は青。　武器は、無い方が戦いやすいけど、敢えて選ぶなら薙刀かな。　モチーフはやっぱり龍だろ！」
薫
「色は水色です。　武器は鉄扇で、モチーフは犬で」
総司
「藍色ですね。　武器は双刃剣で、モチーフは狐です」
彪牙
「俺は黄色だな。　武器は選ぶなら……グローブとかで良いか？　武器はあんま使わねぇからな。　モチーフはライオン」
龍
「色は緑。　武器はこの大剣。　モチーフは狼」
正
「色は赤で、武器は刀が二本。　モチーフは勿論虎だな」
流香
「私は銀ね。　武器は選ぶなら槍で、モチーフは蝙蝠。　優花も答えなさい」
優花
「私も！？　そ、それじゃあ、色は白で、武器は、棒とかで、モチーフはハムスターかな。　私って弱いし」
闇夜
「謙遜するねぇ」
仁
「何はともあれ、これで質問は終わりだ。　今回の話、色々驚く事があったが……」

闇夜
「一番驚いたのは……」
史哉・浩輝
「竜也が結婚してた事だろ！」
仁・闇夜
「ビックリした！」
史哉
「有り得んだろ。　あいつが結婚してるなんて……」
浩輝
「普通友達に五年も黙ってるか？　しかも子供も居るなんて……」
仁
「ショックだったのか」
闇夜
「次回は遂にクライマックス！　優也達はキョウに勝てるのか？
そして優花は一体？」
仁
「次回も宜しく頼む」

次回
第７９話　一人じゃない
優花
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第79話　一人じゃない

「何で優花が……」
「説明は後。　今は優也の処へ」

何故優花が居るのかわからず、困惑している美優を落ち着かせ、優花は美優を連れて優也へと歩み寄る。

「……」

優花が現れてから、キョウは優花を見たままずっと黙っていた。

（闇奈と優也と……同じ魂？）

死神であるキョウの眼には、生物の魂が見える。　今も、優花の魂が見えている。　その優花の魂が可笑しかった。
優也や仁や正の様に、生まれ変われば同じ魂になるだろうが、同じ性質の魂は、同じ時代に同時に存在しない。　双子でも全く異なる魂になる。
それなのに優花は、優也と同じ魂をしていた。
優也と同じと言う事は勿論、キョウが何度も言っていた優也の先祖、闇奈とも同じと言う事になる。

「妙な人間だな。　あんた」

キョウの声は聞こえているが、優花は何も答えず、優也の隣でしゃがみこむ。

「優也……」

「お前……何、しに来た……んだ……」

途切れ途切れで、声も出すのも辛いが、優也は優花を睨みながら言う。　その反応が予想通りだったのか、優花は困った様に笑う。

「私が戦いの場に来るのは、優也もシュリも反対してるのは知ってたよ。　でもね……」

優花が優也の手を両手で優しく握ると、暖かい光が二人の手を包み込む。

「理屈を並べて逃げるのはもう嫌なの。　だから……」

「！！」

光が手から優也の体へと流れていく。

「私も一緒に戦うよ」

光が消えた瞬間、優也は勢いよく起き上がる。　起き上がる処か、這う事もままならなかった優也が、突然起き上がれた事に、美優もキョウも驚く。

優也は体の傷を確かめる。　終に斬られた痕も、キョウに斬られた痕も腹の風穴も、全て塞がっていた。

「傷が塞がった！？」

「これで……大丈夫……」

驚きを隠せない美優の隣で、優花は息を切らし、汗をかき、疲労しきっていた。

「っ！　優花、お前っ！！」
「優也！？」

突然、優也は優花の胸ぐらを掴む。
美優が慌てて止めようとするが、優花が手で制す。

「お前！　自分が何をしたのかわかってるのか！？」
「……わかってる」

驚きもせず、優花は首を縦に振る。
そんな優花に、優也は表情を歪めながら歯を喰い縛る。　その表情は、怒りではなく、後悔している様に見えた。

「だったら……何でお前は……」
「優也……お願いが有るの……」

優花はもう一度優也の手を握り、眼を見つめた。

「勝って」

優花のその言葉に、優也は押し黙ると、手を離し、ゆっくりと立ち上がる。

「美優、優花を守っててくれ」
「……うん！」

いつの間にか恐怖心が消えていた美優は頷くと、力を解放すると、ふらつく優花を支える。
天使の白い翼は展開しないが、黒かった髪は、純白に染まった。

「優花、お前の願いは確かに訊いた」

漆黒の闇が優也の体から溢れ出す。　その闇は、以前と若干違っていた。

純度が上がっていたのだ。

「キョウは俺達が倒す」

俺ではなく俺達。　複数を示す言葉に、キョウは若干の違和感を感じた瞬間、背後から瓦礫が崩れる音がする。

キョウは振り向かなかったが、背後では、瓦礫の中から這い出た正が、頭から血を流していたものの、しっかりとした足取りで、歩いていた。

立ち上がったのは優也と正だけではない。　両手で体を支えながら、仁も立ち上がっていた。しかも、優也程完全ではないが、キョウから受けた傷を、ある程度治して。

次々と倒した筈の相手が起き上がる中、折れてしまった刀の破片が、黒い霊気になって優也の刀に集まっていく。

「説教はその後だ」

全てが刀に集まると、優也は軽く刀を振るう。　次の瞬間には、黒い霊気は、元の漆黒の刀身の刀に姿を変えた。

「ククク、そう来なくちゃなぁ」

昔の知り合いに瓜二つの三人に囲まれながら、キョウは笑みを浮かべる。

「最終戦、第二局面……いや、最終局面の開始だ」

第７９話　一人じゃない

初めに動いたのは仁だった。
誰よりも早く、雷撃をキョウに向かって放つ。銃声を合図に、優也と正がキョウに向かっていき、その隙に、仁は美優と優花の元へ走る。
キョウは少し横に動いて雷撃を躱す。　そこへ、優也と完全体になった正が斬り掛かる。
右から優也。　左から正。　挟まれた状態だったが、キョウは躱そうとせず、鎌を右から左へ持ち変え、優也の刀を腕で、正の刀を鎌で受け止めた。

「闇空（あんくう）の力。　完全じゃ無いが、ある程度は引き出せる様だな！」
「何？」

闇空（あんくう）と呼ばれる優也の刀。　優也自身は、頑丈で軽い刀としか認識が無かった。　先程の自動で修復したのも、闇の力がそうさせたのかと思い、状況が状況なので、大して気にも止めていなかった。

「何だ無意識か。それじゃあまだまだだな」
「何べちゃくちゃ喋ってる！！」

反対側の正は、風を纏ったもう一本の刀で、キョウの無防備な部分に斬り掛かる。

「喰らうかよっ！！」

斬撃が届く前に、優也と正を吹き飛ばした。
その間に、仁は二人の元へ辿り着いた。

「神道」
「え、何？」
「手短に話す。　ちゃんと頭に入れろ」

仁はしゃがむと、小声で話す。

「お前は遠距離で援護しろ。　接近戦は俺達でやる。　俺が合図したら力の総てを振り絞ってキョウに攻撃しろ」
「で、でも……皆の攻撃が効かないのに私の攻撃なんて……」
「心配するな。　間違いなく効く」

仁には確証があった。
キョウは優也や正の攻撃は躱さなかったのに、仁の“雷光一閃（らいこういっせん）”は躱していた。
“雷光一閃（らいこういっせん）”は、仁の技の中でも最強クラスの貫通力を誇る。
つまり、キョウにも防げない攻撃も有るのだ。

「別に俺を信用する必要は無い。　優也と優花を信じて戦え」
「……うん！」

美優の元気の良い返事を訊くと、仁は雷鳴刀を手に、優也と正に加勢しに行った。
美優は、優也に言われた通りに、優花を守る様に前に出て、仁に言われた通りに、光の弓を出して、優也達の援護の準備をする。
美優の後ろ姿を見て、優花は心強く感じていた。

「ぐっ！」
「うおっ！！」

優也と正は、同時に弾き飛ばされる。

「くそっ！　何しても効かねぇじゃねぇか！！」
「来るぞ！」

優也の言葉通り、キョウが迫って来ていた。

「伏せろ」
「「えっ？」」

背後から声がしたと同時に、危なそうな気配を感じ、正は伏せ、優也は思わず後ろへ振り向く。

「ぬおぉぉぉ！！！！」

正が伏せた瞬間、正の頭の上を雷撃が通過する。　雷撃はそのまま、キョウに直撃し、小さな爆煙が起こる。

「お前なぁ！！　撃つ時は何か言えよ！！　ビックリするだろ！！」
「伏せろって言っただろ」

「緊張感って言葉を教えてやろうか！？」
（俺もビックリした……）
仁と正が言い荒らそっている横で、冷静に装っている優也だが、内心は驚いていた。
そうしていると、煙が晴れ、中から相変わらず無傷のキョウが現れる。
「効かねぇよ！」
空高々と振り上げた鎌を、勢いよく振り下ろす。
優也と仁は左へ、正は右へ飛んで躱す。
「神道に隙を突けって指示しておいた」
「やっぱりな」
突拍子もなく言われた言葉に、優也は驚く事もなく言う。
「こいつに勝つには、神道の力は必要だ」
「わかってる」
優花を守ると約束した時から、美優は戦う覚悟の出来た眼をしていた。　今まで守ってきた美優とは、もう違う。
美優も進も、自分なりの答えを見付け、どんどん強くなっていた。
「怒らないんだな」
「わかってるくせに」
優也は勿論、正や流香や仲間に対して、仁は本気で嫌がる事はしない。　それを優也は知っているから、怒る気にもならなかった。

「いくぞ。　仁」
「ああ」
優也が走り出すと、仁は銃を構える。
「上等。　来な」
走り出した優也を見て、キョウは鎌を高く構え、
「しゃあぁ！！」
勢いよく振り回す。
刃が届く前に、優也は地面を蹴り、キョウの頭上を越えていった。
「むっ！」
背後に回られ、キョウは後ろを向くと、たった今頭上を飛び越えた優也と、正が斬り掛かってきていた。
勿論、その程度の攻撃が効く筈もなく、鎌に防がれる。
「こうやって注意を引き付けておいて背後から狙い撃ち、だろ？」
鎌を持っている方とは逆の手を後ろに翳すと、翳した手に雷撃が当たる。
「バレバレなんだよ！」
雷撃による攻撃では、掠り傷一つ付ける事が出来なかった事で、キョウは完全に甘く見ていた。

その為、その雷撃が今まで以上に鋭い雷撃だったとは、気付けなかった。

「バレていても、止められなければ意味はない！」

「！！」

針で刺された様な、大した事は無い痛みだが、キョウは確かに痛みを感じた。

「貫け！　“雷槍（らいそう）”！」

遂には、キョウの手から肘の辺りまで、無数の傷を作った。

小さく舌打ちをして、腕に薄黒い神力を纏わせた瞬間、鎌に加わる力が弱まる。

キョウが雷撃に一瞬気を取られた瞬間、優也が懐に入り込んでいた。

「“闇空（あんくう）”！」

「馬鹿の一つ覚えか！　その技は……！」

視界に入った刀を見て、キョウは眼を見開く。　刀が纏っている闇の大きさに変わりはないが、鋭さが明らかに違っていた。

雷撃と斬撃を防いでいて身動きの取れないキョウには、躱す事が出来なかった。

「“一閃”！」

今度こそ、優也の刀はキョウの脇腹を斬り裂いた。

キョウの脇腹からは、薄い切口から、僅かに血が流れた。

（浅いか……！）

今の優也は、闇の力が強まっている。　その為、闇の力を使った技の威力が上がっていたが、キョウを倒すまでには至らなかった。

「しゃらくせぇ！！」

突如、キョウの体から薄黒い神力が溢れ出す。　神力を纏ったまま、音速と呼ぶに相応しい速さで、鎌を円を描く様に振るう。

「ッ！」
「ぐおっ！」

優也と正は弾き飛ばされると同時に、鎌から放たれた鎌鼬（かまいたち）で体中を斬られ、仁が放った雷撃も、跡形もなく消えてしまった。

「っ！！」

光の矢がキョウの頬を掠める。　矢が放たれた方へ目線を向けると、そこには、光の弓を構えて慌てている美優が居た。
どうやら外れるとは思わなかったらしい。

「戦う覚悟は……出来たって事で良いんだな！」

美優を敵と認めたキョウは、地面を蹴り、一気に美優との距離を縮める。

「しまった！」
「優花！　美優！」

反応が遅れてしまい、優也と正は間に合わない。　仁も雷撃を放つ

には、位置が悪かった。　雷撃をキョウが躱せば、美優と優花に当たってしまう。
皆がなすすべの無い中、美優の視界に優也が写る。

（心配しないで、大丈夫だから）

心の中で優也へ呟く。
優花に助言され、彪牙達に後押しされ、美優の辿り着いた答えは、美優にとっては当然で、何よりも大切な答えだった。

（もう心配させない。誰も傷付けさせない）

光の弓を消し、先程まで恐怖の対象だったキョウへ、両手を突き出す。

（私が皆を守る光になるから）

凶刃が美優に迫っていく。　それに対し、美優は前方に結界を張って受けて立つ。
誰もが無謀だと思った。
キョウがその気になれば、鉄でさえも容易に斬り裂く事が出来る。
各々が嫌なイメージをした瞬間、火花を散らしながら、光の結界と凶刃がぶつかり合う。
少しずつ凶刃が、結界を削っていく。

「終わりだ！！」

押し切れる。　キョウはその考えを体現するかの様に、鎌を持つ手に力を込める。

「美優！！　逃げ……」
「大丈夫！　大丈夫だから、その先は言わなくていい！！」
後ろにいる優花の言葉は訊くつもりは無い。　何を言おうとしているかは、初めからわかっているからだ。
「あああああああああああああ！！！！！！」
頭上に迫る凶刃に慌てる事もなく、ただただ想いを結界に込める。
「何っ！？」
想いは届いた。
結界がキョウの凶刃を押し返し始めたのだ。
「キョウの大鎌を……！」
「押し返してる！？」
予想だにしなかった結果に、優也も仁も正も、美優に守られている優花も驚いた。
そして、キョウが結界に手間取っている隙に、優也はキョウの隣まで行き、刀を構える。
キョウは刀に炎が灯るのが見えたが、今までの朱い炎とは違った。
（闇の炎！？）
優也の漆黒と刀の漆黒と同色の、漆黒の炎が灯っていた。
「“黒帝（こくてい）”！」
（マズイ！！）

今回ばかりは本格的な危険を感じたキョウは、回避行動を取るが、少し遅かった。

「“鳳凰激(ほうおうげき)”！」

炎帝の鳳凰激と、ほぼ同じ規模の漆黒の炎が、キョウを呑み込む。闇の炎を操る時の詠唱で、『総てを焼き尽くす』、と優也は唱えている。その詠唱通り、闇の炎は、総てを焼き尽くす炎なのだ。

「ぐはっ！！」

漆黒の炎の中から、キョウが飛び出す。焼き尽くされる事はなかったが、服は上半身は全て焼け、体中に火傷を負っていた。中でも眼を見張るのが左腕だ。左腕は使い物にならない程、黒ずんでいた。これがキョウとの戦いで、一番のダメージだろう。

「“風神”」
「“雷神”」
「っ！！」

キョウが飛び出した先には、出てくる場所を予知していたかの様に、雷鳴刀を逆手に持った仁と、風を纏った刀を手にした正が、待ち構えていた。

『“疾風迅雷(しっぷうじんらい)”！！』

雷の刃と風の刃が調度交錯する様に、キョウの体を斬り裂いた。防御が間に合わなかったキョウの体に、今まで一番大きな、交錯し

た切り傷が生まれた。

「……ッ！」

致命傷にはならなかったものの、キョウは思わずふらつく。
その一瞬を見逃さなかった仁は叫んだ。

「撃て！　美優！」
「！　うん！！」

名前を呼ばれた事に一瞬驚いた美優だったが、すぐに光の弓矢を出し、力と想いの全てを込めて、矢を放った。
矢と言うには些か太く、長い流星の様な矢が、キョウへと向かう。

「はっ！」

矢に感付いたキョウは、鎌の柄で防いだ。
流星の様な矢と、魂を刈り取る凶刃が、火花を散らして衝突する。
だが、それも長くは続かなかった。
鎌の柄にヒビが入ったかと思えば、流星の様な矢はキョウの体を貫いた。

「……ッ！！」

歯を喰い縛り、痛みに耐え、苦痛の声も出さずに倒れない所を見れば、流石は死神の王と言った所だろう。

「！！」

その死神の王を、三方向から衝撃が襲い、身動きを封じる。

一方向からは強烈な風が自由を奪い、もう一方向からは銃弾が直撃し、電撃が体を拘束する。　そしてもう一方向からは、黒い大きな鳥が大きな翼をはためかせ、キョウの体の前に制止し、これもキョウの動きを封じていた。
これが誰からの攻撃かは、見ずともわかったキョウは、敢えて抵抗せず、待ち構えた。

「来るなら来い！　三百年ぶりの決着だ！！」

優也は空高く飛び上がる。　正は刀を一本鞘から抜き、背中から追い風を受けながら走り出す。　仁は銃を雷鳴刀に変形させると、目の前に電気の輪が現れ、体に金色の妖気を纏い、超高速でキョウに向かっていく。

「“鳳凰閃火（ほうおうせんか）”！」
「“雷鳴斬（らいめいざん）”！」
「“迅風（しんぷう）”！」

戦いを終わらせる為の最後の一撃を、黒夜叉、雷帝、風の悪魔の三人は、死神の王へと放った。

第79話　一人じゃない（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「初めの質問は、竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の聖麻からだ。　ありがとう。　『進に。雅に「愛してる」って言うか「胸大きいな」って言うならどっちを言う？』」

雅

「変態！！」

進

「まだ一言も言ってねぇぇぇぇぇ！！！！」

仁

「言う前に撃沈だ。　次は、ＯＯＯＴＧＬＳＴＳＴＰＢさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】の槍からだ。　ありがとう。　『皆さんは炎や氷を操って戦っていますが、自分が使っている属性の他にどんな属性が使いたいのか知りたいです！』属性か。　なら俺は炎だな」

優也

「雷かな」

美優

「氷かな」

優花

「私は水」

進

「炎だよ」

薫

「私は風です」

総司

「敵に勝つならまずは敵を知れ。　と言う訳で雷です」

彪牙
「本編じゃ出てねぇけど土」
龍
「俺は無以外を使うつもりはない」
正
「つまんねぇ答えだな。　俺は……氷で……」
流香
「私は光ね。　吸血鬼だけど光を求めてしまうのね」
仁
「やっぱり合わないな。　次で最後だ。　次は星空の侍さんからだ。
ありがとう。『皆に質問！食べるならどっち？アスカ特製の『シャベ飯』ｏｒ和樹特製の『五百倍の辛さの麻婆豆腐』！』はいせ～の」
優也・優花・薫・総司・仁
「『シャベ飯』！」
進・彪牙・流香・正・龍
「『五百倍の辛さの麻婆豆腐』！」
美優
「両方！！」
全員
『えええええええええええええええええええ！！！！！！！！』
美優
「？　可笑しいかな？」
仁
「味覚が可笑しいらしい」
美優
「可笑しくないもん！」
闇夜
「何はともあれ、最後の場面を書きたかったんだよね」
仁

「微妙な所で終わらせたな」
闇夜
「次回で決着だよ。　頑張れ仁」
仁
「他人事だな」
闇夜
「ご感想待ってます！」

次回
第８０話　決着
カイ
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第８０話　決着

黒と金と白の閃光を放つそれぞれの技が、死神の王、キョウに炸裂する。
技を放ち終え、優也達はキョウを取り囲む様に地に立つ。
そして異変に気付く。　確実に倒した筈のキョウが、倒れずに、ふらつきもせず、直立不動のまま、全く眼光が衰えていなかった。

「こいつ……！」
「まだ戦えるの！？」

柄の折れてしまった鎌を握り締めたまま、未だに圧倒的な威圧感を放っているキョウに、優也達は畏怖の念を感じた。

「どうしたよおい？　俺はまだやれるぜ！　掛かってこいよ！　ほら！」

戦意も威圧感も衰えてはいないが、立っているのもやっとなのは明らかだった。
優也、仁、正の三人の攻撃もそうだが、一番効いているのは、美優の光の矢だろう。

「もうやめろ。　お前、もう戦えないだろ」

この場に居るメンバーの中で、一番冷静な仁が言う。
今のキョウになら間違いなく勝てるだろうが、自分達も無事では済まないと考えての事だ。

「そう言う言葉はちゃんと相手を見て言いな。　俺はまだ戦えるぞ

！」

勿論、キョウが仁の言う事を訊く筈がない。
危なげな足取りで、優也へと歩いていく。
仁や正、美優も武器を構える中、優也だけは何もせず、黙ってキョウを見つめていた。
すると、

「往生際が悪い！」

キョウ背後に突然現れたカイが、首の後ろに手刀を叩き付けた。

「ほぇ……」

まさかの人物による一撃に、糸の切れた人形の様に、キョウは倒れた。

「カイさん！？」
「何て横取りだ？」

優也達も、予想だにしなかったカイの登場に驚きを隠せない。

「……キョウ。　今回は紛れもなく君の敗けだ。　それは君が一番わかってるでしょ？」
「っ……」

何処と無く哀愁を漂わせながら言ってくるカイに、キョウは苦虫を潰した様な表情をする。

「君は彼等の想いに敗けたんだ」

誰かを守りたい。　優也達のその気持ちが、キョウとの圧倒的な力の差を覆した。
それに気付いていたキョウは、何も言い返さなかった。

「君達は皆の所へ。　怪我人も多いからね」

そう言うと、カイは一番重症の正を見て、横目で優花を見た。
憔悴しきっている少女を。

「あんたはどうする？」
「僕は彼に話がある。　だから割って入ってまで来たんだ」

小さくごめんねと言いながら、乾いた笑みを浮かべる。

「カイさん……」
「どうしたんだい？　優也君」

完全に戦闘態勢を解いた優也はカイに近付き、

「キョウと少しだけ話をさせて下さい」

そう言った。

第８０話　決着

「あれからルナやキョウはどうなった？」
「死神達を統率出来るのはキョウ以外に有り得ない。　死神界との干渉を完全に立つ事で手を打った。　吸血鬼達は死神界の治安維持を手伝わされるそうだ。　普段は流香の監視付きだがな」
「そうか」

激闘から二日後。
壊れ果てた街はどうやったかはわからないが、カイが何とか修復した。
黒烏や九妖と言った、味方をしてくれた妖怪達は、咲魔の魂をちゃんと元に戻してから帰すから、今は帰ってくれと言ったら、文句を言いながら妖怪の山へと帰って行った。　説得するのは一苦労だったが、咲魔が妖怪達に慕われていると、理解できた瞬間でもあった。
そして、戦いから帰ってきた怪我人の中で怪我の酷い者は、完全ではないが、彩夏に傷を治して貰った。　全員の傷を治した彩夏は、軽傷者の治療をすると、人知れず、死んだように床についた。　人数が多くて、霊力を使いきってしまったのだろう。因みに、ナミを治療する時彩夏は、痣だらけのナミの姿を見て、思わず泣いてしまったらしい。
そして今の会話は、病院の屋上での仁と龍の会話である。

「今回は運が良すぎた」

ふと、仁が口走る。

「今の俺達が束になっても、キョウに勝てる筈がない」
「ああ、そうだろうな」

幸運が重なりに重なって、キョウに勝てたと、仁は考えている。
それ程、キョウの力は仁からすれば異常なものだった。　それも、カイや史哉とすれば普通なのだろうが。
キョウとの戦いで、自分達は井の中の蛙だと思い知らされた。

「優也も彪牙も、水野も強くなってきた。　俺と正もこのままじゃ駄目だ」

今のままでは優也を守る所か、足手まといになるだけだと、仁は考えていた。

「それはそうと、二人きりだから訊きたい事があるんだけど」
「何だ？」

今頃、正は悔しくて自分を鍛えだしているいるだろうなと、頭の隅で考えつつ、疑問に思った事を龍に訊いてみた。

「煙草、旨かったか？」
「お前……」

その言葉に、龍の表情が強張る。
龍の“今の世界”で煙草など吸った事も無ければ、手に入れた事もない。　だが、“依然の世界”ならば、一度だけ吸った事がある。
　そして、その煙草を渡しのは仁。
つまり、

「やっぱり覚えてるのか」

“以前の世界”での出来事を覚えていると言う事になる。

「やっぱりと言う事は、お前は知っているんだな？　俺の記憶が消えない事を」

仁には改変以前の記憶が消えずに残っていた。

幼い頃は夢だろうと考えていたが、いつしか夢などではないと考え始めた。

優也達は覚えてなさそうだったが、龍なら覚えている可能性があったから一応訊いてみた。　そしたら予想通り覚えていた。

「せっかくだから教えて貰えないか？　気になって眠れもしない」

若干ふざけた言い方だが、仁は真剣に、何が何でも訊いてみせると言いたげな表情をしていた。

「悪いがもう少し眠れない夜を過ごしてくれ」

「話すつもりは無いか？」

仁に背を向けると、龍は出口に向かい、

「仁、良い事教えてやる」

何歩か歩いた所で立ち止まった。

「世の中、知らなくて良い事もあるんだぜ」

そう言い残し、去っていった。

取り残された仁は、倒れる様に柵にもたれ掛かる。

「……震えてる」

小刻みに震えている手を見ながら、仁は呟く。
去り際に放った龍の殺気に、仁は恐怖を感じていた。

「恐怖か……教えてくれてありがとう」

空を仰ぎながら、仁は呟いた。

一方その頃、妖怪の山はいつも以上に静まり返っていた。
咲魔がいないのは勿論、死神との戦いでの疲れがまだ取れていないからである。
そんな中でも、黒烏と九妖は休まず、妖怪の山の見回りを欠かさず行っていた。

「九妖、今日は休んでも良いぞ」
「それも言うなら黒烏もだろ」

黒烏は戦いでの傷がまだ癒えておらず、九妖も殆ど休まず、疲労が蓄積していた。
その為、互いに休む様に促すが、どちらも何故か退く気はない。

「……九妖」

すると、突然黒烏は立ち止まる。

「忘れ物したから後は頼む」

「は……？」

若干演技の様な喋り方で、何処かへ走り去っていった。

「何だいきなり……」

黒烏の可笑しな行動に疑問を感じていると、

「本当、慌ただしい奴だな」

背後から声が聞こえた。

それは、忘れる筈もない、待ちわびた声。

「咲魔、様……？」

「ただいま、九妖」

大江咲魔の声だった。

敬愛する人の声を訊ける。　敬愛する人が目の前に居る。

我慢出来なかった九妖は、涙を流しながら、咲魔に抱き付いた。

「はぁ、損な役割だ」

咲魔と九妖が居る場所から少し離れた場所で、黒烏は呟いた。

咲魔が自分達の近くに居る事に気付いて、わざと黒烏は九妖から離れた。

自分が一々こんな気を遣うのも面倒だとは考えもしたが、今はそれ

も良いと思っている。
涙は流しているが、九尾の彼女の笑顔を久し振りに見れたからだ。

挙動不審。　彼女を言い表すに相応しい言葉だ。そんな彼女を、後ろで三人の女性が見守っていたのだが、痺れを切らした一人が、挙動不審な彼女に話し掛ける。

「ルナ、いい加減インターホンくらい押したらどうだ？」

挙動不審な少女、ルナは話し掛けてきた雪奈に振り返る。

「ユキの言う通りであります。　ルカお嬢様と神の許可は取っているのでありますから」
「クリス、でも……」

クリスの言う様に、ルナ達四人は、カイと流香の許可を得て、流香の家に住まわせて貰える事になった。　死神界の治安維持の手伝いもしなければならないが。
その為に、四人は流香の家まで来たのだが、ルナが中々インターホンを鳴らそうとしないのだ。

「どんな顔をしてルカの前に出たら良いのか……」
『……』

クリス達は何も言えなくなる。

今まで皆の前では大人びた風に装ってきたが、実際ルナは内気な少女だった。
ルナが渋っていると、気持ちの良いくらい、良い音が鳴り響く。

「ちょっ！　エルー!?　何してるの!?」
「呼び鈴鳴らしました」

何を当たり前な事をと言わんばかりに、エルーことエルザはキョトンとした表情をする。

「は～い！」
「！！」

家の中から声が聞こえた瞬間、ルナの肩がビクッと跳ねる。

「ほらほら！　愛しの妹君ですよ！」

三人は暴れるルナを捕まえて、逃がさない様にする。
そうこうしていると、玄関の扉が開く。　同時に、ルナは固まる。

「いらっしゃい！　……どうしたの?」

嬉しそうに笑顔を振り撒く流香だが、目の前の光景を見て小首を傾げる。

「何でもないであります」
「ルナお嬢様は情緒不安定なんです」
「そうなんだ」
（納得するなよ）

エルザの言葉に納得する流香に、雪奈は呆れる。

「とにかく、お帰り皆！」

『！』

流香の言葉に、若干一名を除いて驚く。

エルザ達は顔を見合わせ、小さく笑う。

『ただいま』

そう言って、我が家へ入っていった。

固まっているルナもちゃんと連れて。

「グランツ～」

「何だよ？」

金髪の少年、キラはグランツに近寄る。

「ガドルは良かったの？」

「あぁ、その事か」

その言い様に、キラは少し顔をしかめる。

グランツとガドルは親友なのだから、もう少し反応を示すと思っていたからだ。

「あいつの事でいつまでもウジウジしてる訳にはいかねぇ。　それに、あいつなら大丈夫だろ」

「あ～、退屈だな……」

そう呟くのは、今回の戦いの首謀者。　死神の王、キョウである。
戦いに敗け、キョウに下された処罰は、何とも軽いものだった。
死神としての仕事以外で人間界に踏み入る事を禁止するとの事だ。
そんな軽くて良いのかと、キョウは言ったが、カイは、

『君に死神をやめて貰うと困るからね』

と言った。
事実、最近の死神界は治安が悪く、良くも悪くも好き勝手にする死神ばかりだ。　そう言った死神を鎮圧するのには、キョウの力は必要なのだ。

「だからって俺にこんな事を頼むか普通……」

昔から本当に気紛れな神様であるカイに、何度も振り回されてきたなぁと、今更ながら思い出す。
カイからの条件を思い出すのと同時に、優也の言葉を思い出す。

『お前が何で母さんの事を知ってるかはもう良いよ。　でもな、あの人は何も怨むような事もしないし何も憎まない。　争いが嫌いな

人だった。　それだけは忘れないでくれ』

そんな事は、彼女と会えば、誰でも知っている事だ。だが、優也に言われると、自分が忘れていた様に思わされる。

「流石、穂乃花の息子で、闇奈の子孫なだけあるぜ。　……終、ガドル」

名前を呼ばれた二人は、キョウの元へ現れる。

「お前等、これからは好きにして良いぞ」

何をするにしても、一から始めるのが一番だと、キョウは考えていた。
地位も部下も失ってから、一から始めようと。

「はい。　では、これからも宜しくお願いします」
「……は？」

キョウの考えは、終によって刈り取られる。

「いや、好きにして良いって言ってんだろ」
「はい。　好きにして良いと言われたので、これからもキョウ様に着いていきます」
「お前……」
「これは僕の心に従ったまでの結果です」

今まで、心なんて口にする事も無かった終が、心に従うと口にした。
間違いなく、優也との戦いで、終は変わった。

「俺も死んだ身だ。　どうせなら手伝ってやるよ」
「ガドル……」
終（しゅう）とガドル。　二人が言い終わると、三人、いや、キョウの元に多くの死神が駆け付ける。
中には、魂だけの存在の人間や妖怪も居る。
「キョウ様！　私達も着いていきます！」
「今更置いていくなんて言わないで下さいよ！」
「……」
てっきり戦いに敗けて、見限られたとばかり思っていたが、そんな事は全く無かった。ここに居る全員、キョウを慕って着いてきた者しかいないのだから。
「……それじゃあ、お前等！」
嬉しく感じたキョウは、集まった者達を見渡す。
「まずは治安維持と行こうか。　約束はちゃんと守らねぇとな」
『はい！』
種族に関係無く、人を惹き付ける。　その才能は、優也もキョウも、等しく同じだった。

「何か言う事は？」
「ごめんなさい」

場所は変わって、ここは優花の部屋。
優花はベッドに横になり、その隣で優也は椅子に座っていた。

「感情が籠ってない。　はいもう一回」
「すみませんでした」

二度目の謝罪は、一度目以上に感情が籠っておらず、間違いなくふざけていた。

「……」
「……あの、ね？　仁がこう言う雰囲気の時は少しはふざけた方が良いって言うから……その、あの……本当にごめんなさい」

優也の無言のプレッシャーに敗け、優花は真剣に謝る。
何故優花がベッドで横になっているかと言うと、キョウとの戦いの後、突然気を失ってしまったのだ。　体調は随分治ったものの、まだ動くのが辛いのだ。

「……あのさ、優花」

黙るのをやめた優也は、悲しそうな表情をして話す。

「俺は大丈夫だから、“あれ”をするのだけは本当にやめてくれ」
「優也……」
「お前は、自分をもっと大切にしろ」

優花は何も言わず、ただ頷いた。

「そろそろ飯作ってくる。　美優がうるさいからな」
「そうだね」
椅子から立ち上がると、優也はドアノブに手をかける。
「出来たら呼びに来るから、それまで大人しくしてろよ」
そう言い残すと、優也は部屋から出ていった。
「自分を大切にしろ、か……」
優也に言われた事を口にしながら、右手を天井に翳す。
「それは優也もだよ」
天井に翳した手の一部が、僅かにだが粒子になり、空気に消えていった。
「大丈夫。　まだ私は、大丈夫」
左手で右手を握ると、粒子は消え、右手は元の状態に戻った。

第８０話　決着（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁
「初めの質問。　ＯＯＯＴＧＬＳＴＳＴＰＢさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】の冷司からだ。　ありがとう。　『そっちの主要メンバーはこっちのメンバーの中で特に誰に会いたいかな？』俺は冷司。　一緒に霧藤を殺るか？」

優也
「物騒だな！？　俺は烈火」

美優
「私は雷美」

優花
「私は凍華」

薫
「私も凍華さん」

進
「俺は烈火と翔だな」

総司
「僕は銃人さんと雷美さんです」

彪牙
「内心は女全員だろ。　俺は槍」

龍
「敢えて言うなら冷司」

流香
「桜ね」

正
「翔」

仁

「次は烈火竜さんからだ。　ありがとう。　『美優の鼻は食べ物の匂いに反応しやすいですか？』」

優也・優花

「反応します」

仁

「二人で即答だな。　次は、竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の士からだ。　ありがとう。　『優也に。皆のことどう思ってるかそれぞれ言ってくれないか？』　それは事前に調べきた」

美優：食べ過ぎ。　馬鹿力。　守りたい人

優花：優しいけど、酒飲んだ時は……。　守りたい人

進：地味。　馬鹿だけど大切な友達

薫：お母さん的な。　時々黒い……。　たまに買い物に付き合ってくれて助かる

総司：変態。　女に優しい、でも変態

彪牙：頼りになる。　見た目より頭が良い

龍：ドS。　もしかして照れ屋？　信頼はしてる

流香：女装とかさせてくるのやめて欲しい……。　頼りになる姉

正：ヘタレ。　頼りになる兄

仁：残念な天才。　頼りになる兄

優也
「いつ調べたこんなの！？」
仁
「俺に調べられないものは無い。　国家機密すら調べられるぞ」
流香
「まだ私の事お姉ちゃんって、思ってくれてるんだ」
正
「兄の座はまだ亮さんには譲れないな」
優也
「うがぁぁぁぁぁぁぁぁ／／／！！！！」
仁・正・流香
「落ち着こう弟！」
優也
「うるっさい／／／！！」
闇夜
「長編はこれで終わりです。　次回からは当分日常編です。　これからも宜しくお願いします！」

次回
第８１話　魔女の薬
紗理奈
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第８１話　魔女の薬

何でこんな事になったんだ。
俺達はただ紗理奈さんの家の片付けをしてただけなのに……。
俺達が何をした？
何もしてないだろ。　それなのに何で……。

「何でこんな姿になってるんだぁぁぁ！？」

叫んだのは、地面に届きそうな程長く美しい黒髪で、紅い瞳の少女。
その様子を、背の高い、亜麻色のセミロングの見馴れない少女が、不機嫌そうに見ており、これまた見馴れない、何処にでもいる様な、明らかにサイズの合っていないブカブカな服を着た幼稚園児程度の少年が、雅の膝の上に座らされ、そして、流香は子供の様に仁に甘えていた。
何故こんな状況になったかは、二十分程前に遡る。

この日、優也、美優、優花、進、総司、仁、流香、雅の八人は、紗理奈に呼び出され、紗理奈の店、つまり紗理奈の家の掃除の手伝いをさせられていた。

「何で私達が掃除なんて……」

せっかくの休日を、ゆっくり過ごせると思っていたのに、突然呼び出され、掃除を手伝わされた事に、雅は文句を言う。

「じゃあ訊くけど、紗理奈さんに逆らえるのか？」

「……」

優也の言葉を訊いた後、少し黙る雅だったが、突然震えだした。

「魔女怖い魔女怖い魔女怖い魔女怖い魔女怖い魔女怖い魔女怖い」

「発作！？」

紗理奈に怒られたのが余程怖かったのか、紗理奈の店、つまり今居る場所の窓ガラスを割ってしまった時の事を思い出すと、この様な発作が起きる様になってしまった。

「ありゃりゃ？　どうしちゃったの雅ちゃん？」

すると奥から、いくつかのフラスコが乗っているトレイを両手に抱えた紗理奈と、何故か亮が出てくる。

「あれ？　何で亮さんが居るんですか？」

ここには自分達と紗理奈の九人しか居ないと思っていた進は、亮が居た事に疑問の声をあげる。　優也達も、同じ疑問を感じていた。

「あぁその事ね。　実は私達」
「同棲してるんだ」

静かさが空間を支配する。

（同棲？　同棲って何だっけ？）
（確か、恋人通しで暮らす事……だよな？）
（えっ？　同居じゃなくて……同棲？）

同棲について、優也達はニュータイプの如く、心の中で語り合う。

（え、同棲って……）
（恋人通しで一緒に暮らすから同棲……）
（この二人が……）
『同棲ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！？』

仁と雅を除く六人は、腹の底から絶叫した。
この大声に、雅は驚いて現実に引き戻される。

「おぉ！　期待通りの反応」
「もう、面白がらないの」

亮は優也達の反応に満足し、そんな亮を紗理奈が注意する。
そうしていると、優花を除く五人が二人に詰め寄る。

「同棲、って言うか二人が付き合ってるなんて訊いた事無いぞ！？」
「どっちから告白したの！？」
「キスはしましたか！？」
「ここの作者は恋愛が書けない筈なのに、何で二神先生と言い亮さ

んと言い……何て羨ましい！！」
「総司は黙れ！！」

若干メタ発言をした総司に怒鳴る進だが、進も二人の事が気になるので、すぐに二人に詰め寄る。

「ちょっ、ちょっと！　落ち着きなさい！」

両手が塞がっている紗理奈は、身動きが取りにくく、何とかフラスコが落ちない様にする事しか出来なかった。

「……何してるんだ？」
「あ、龍」

偶然立ち寄った龍は、初めに眼に入った光景に、呆れながら呟く。

「真実の追求」
「意味がわからん」
「龍は何をしに来たの？」
「たまたま立ち寄っただけだ」

すると、誰かを辱しめるつもりか、不気味な笑みを浮かべながら、優也達へ近寄っていく。

「あっ！」

勢い余って振った美優の手が、紗理奈の持っているトレイに当たり、液体が入ったフラスコが、四つ程、宙を舞う。
宙を舞ったフラスコの落下地点には調度、優也、進、流香、龍が居た。

完全に油断していた優也達は、誰一人躱せずフラスコに当たり、中の液体がかかってしまった。
そして次の瞬間には、四人を煙が包み込んだ。

「な、何これ!?」
「いきなり煙が!」
「大丈夫ですか!?」

想定外の出来事に、美優達が慌てる中、煙が段々晴れてくる。

「あ、あぁ!　大丈夫!　何とも無い」

優也が居る筈の煙の中から、優也より高い声が聞こえてくる。　優也も声は高い方だが、ここまで高くなかった筈だと、優花は疑問に感じた。

「全く……何なんだ」

そして、龍が居る筈の煙からも声が聞こえてくるが、これまた、龍と比べると随分高い声だった。
四つの煙が完全に晴れ、そこに居たのは、

『誰?』

この場で一番背の低い優花より若干背が低く、地面にまで着きそうな黒髪の紅い瞳の少女、明らかにサイズの合っていない服を着た、何処にでも居そうな黒髪の幼稚園児、総司と同じくらいの身長で、亜麻色の髪のセミロングで目付きの鋭い少女、そして、何処と無く雰囲気が子供っぽい、地面に座り込んでいる流香が居た。

「誰って……いつも一緒に居るだろ」
「一気に老化が早まったか？」
「いや、それは無いだろ！」

紅眼の少女は呆れ、背の高い少女は辛辣な言葉を言い放ち、幼稚園児がツッコミを入れる。

「あれ？　何か声が変な様な……？」
「そう言えば……」
「俺は視界が変なんだけど……」

まさか。　美優達は同じ事を考える。

「貴方達。　ちょっと鏡見てみなさい」

紗理奈が軽く指を振ると、少女達の前に大きな鏡が現れる。　便利だなぁと、仁が呑気な事を考えている間に、少女達は鏡を覗き込む。三人は自分達の姿を見た瞬間、眼を見開き、心底驚いた様な表情にして、鏡に写る自分を指差し、

『何じゃこりゃあああああああああ！！！！！！』

全力で絶叫した。

そして今に至る。

「とにかく状況を整理するぞ」
「貴女が優也なのね？」
「はい……」

まずは、紅眼の少女が優也だと確認する。
言われてみれば、何処と無く優也の雰囲気が残っている。ルビーの様に紅い瞳も、美しい地面まで伸びたストレートの黒髪も。
今は美少女以外の何者でもないが。

「そこの不機嫌そうなお前が……」
「龍……だよね……？」
「……あぁ」

目付きを鋭くした、亜麻色のセミロングの髪の、背の高い少女。
彼女が龍らしい。
今は不機嫌そうにしているが、美少女には間違いない。

「雅さんの膝の上に座っているう・ら・や・ま・し・い子供は……」
（羨ましいを強調した！）
「進だね」
「座ってるんじゃなくて座らされてるだけだから！　そこは間違えないで！！」

雅の膝の上に座っている、座らされている子供。　この子供は何となく進だと、皆がわかった。
何故雅の膝の上かと言うと、子供を進と認識した雅が、一瞬の内に進を捕まえ、膝の上に乗せたからだ。

「それで流香は……？」
「体に変化は無いけど……」

フラスコの液体がかかった四人の中で、流香だけは身体的な変化は無かった。　その代わりと言うのも変だが、普段は見せない笑顔で、仁に甘えきっていた。

「精神だけが幼少の頃に退行したんだろうな」
「って言うか君！　何でそんなに甘えられて平気なんですか！？」

流香は俗に言う、絶世の美少女と言った所だろう。　その流香に甘えられて、全く反応しない仁に、総司は激怒した。

「流香さんに甘えられて平然とするなんて男として恥ずかしく無いんですか！？　今すぐ僕と変わって下さい！！」
「然り気無く所望してんじゃねぇよ！！　つーか土下座！？　どんだけプライドねぇの！？」

説教をしていたかと思えば、突然土下座をして仁に懇願する総司に、キレの落ちていない進のツッコミが炸裂する。
土下座する総司を見て、流香が口を開く。

「私、仁が良い！」

そう言いながら、流香は仁の腰にしがみつく。

「ガ～ン！！」
「口で言う人初めて見た」

目の前で流香に拒絶され、宿敵に奪われた事にショックを受け、総

司は項垂れる。

「仁大好き！」

『！！』

普段は天地がひっくり返っても有り得ない事を、今の流香は恥ずかしげも無く、誰もが魅惑される笑顔で言う。

証拠に、進と総司、さらに亮、それどころか、女の美優と雅も、虜になっていた。　亮は紗理奈に横腹をつねられて元に戻ったが。

「そうか。　ありがとう」

皆が流香の笑顔に落ちていく中、一番近くで見た仁は、いつも通りの表情で、流香の頭を撫でた。

「えへへ～」

流香は気持ちそうにしながら、嬉しそうに笑顔を振り撒く。　その笑顔で、一人の変態が鼻血を出したのは言うまでもない。

「つまり、優也と龍がかかった薬が、性転換の薬で、水野がかかったのは、肉体が退行する薬、流香がかかったのは、精神が退行する薬か」

今までの話を纏め、仁は今の状況を話す。

だから何であれで反応しないんだよ、と進は言いたかったが、今はこの状態をどうにかしたいので、何も言わなかった。

「実験で色んな薬を作ってみたのよ。　危ないから私が持ってたんだけど」

「ごめんなさい……」

悪気は無かったと言える状況ではないので、美優は素直に謝る。
もし命に関わる薬なら、謝るだけで済まないからだ。

「良いのよ。　飛ばなかった薬もあるし、どうせ誰かを実験対象にするつもりだったし」

その言葉に、優也達は身震いする。
何をされるか、わかったもんじゃないからだ。

「他にもあるのか？」
「ええ、例えばこれとか」
「えっ！」

さっきの騒動で無事だったフラスコを手に持ち、優也にかける。
女の姿になった事にショックを受けていた優也は、避けられずに液体を頭から被り、再び煙に包まれた。

「いきなり何を！？」

煙が晴れ、中から、頭から黒い猫耳が生え、腰の辺りから黒くて長い尻尾が生えている優也が現れる。

「こんな感じよ」
「って悪化してるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！！？」
「ぐはっ！！」

新たに現れた変化に気付き、優也は絶叫する。
その姿を見た総司は、更に鼻血を噴出した。

その隣で美優も何故か、鼻を抑えていた。

「優也可愛いぃぃぃ！！」

端から見ればコスプレ姿の優也に、心（ハート）を撃ち抜かれた亮は、優也に抱き付こうとする。

「来るなぁ！！」

だが相手は優也。　顔面に蹴りを入れられ、壁に突撃した。

（（（（（やっぱり優也だ！！））））））

少女の姿でも、悪魔すら倒す蹴りの威力は健在だった。

「大丈夫よ。　それ以上猫になったりしないから」

「何で俺にするんですか！？　龍にやれば良いでしょ！！」

「おい」

涙目で詰め寄る優也に、少し気の毒に思った紗理奈だったが、可愛いから良いかと納得した。

「それで？　解毒剤は有るのか？」

ここでやっと龍が口を挟む。

薬が有るのだから、解毒剤くらいは有るだろうと考えた。

「残念、無いわ。　でも試作品だから、一日もすれば元に戻るわ」

「……そうか」

今すぐ戻れないのは不服だが、元に戻ると言う事だけ確認出来て、龍は内心ホッとする。

「お前等、元に戻るまでの間はどうする？」

『……あ』

元に戻る事がわかって一安心したのも束の間、また問題が発生する。進は子供の姿のままでは帰れない。　優也と龍も、女の姿では色々と勝手が違う。　流香は、説明すれば何とかなるかもしれないが、仁から離れようとしない。

「龍と進を、君等の内誰かが引き受けたらどうだ？」

いつの間にか復活した亮が、そう提案する。

「ちょっと待て。　何で俺まで……？」

その提案に口を出したのは、龍だった。

「龍はいつも野宿でしょ？　女の子の姿で野宿はどうかと思うよ俺は」

龍は野宿もするが、必要な時はホテルに泊まる為、宿を提供される必要は無かった。

「女の姿になったからって力が無くなった訳じゃない。　襲われても撃退できる」

そう、女の姿になって力が弱まっているが、龍がそう簡単に敗ける筈もないが、

「でも、その姿に困ってるのは事実でしょ？」
「うっ……」
女になるなど、一度も経験した事もない事態に、どうしたら良いか困っているのも、事実であった。
「わかったよ……」
たった一日我慢すれば良いことだと、自分に言い聞かし、龍は頷いた。
「誰が誰を引き受けるかは後にして、着替えたらどう？　サイズ合ってないでしょ？」
紗理奈に言われ、優也と進と龍は自分の服を見る。
進は勿論、優也と龍もサイズも何も合っていない。
「そう言われてみれば……」
「確かに胸がキツいな」
「「！！」」
龍の言葉を訊いた瞬間、優花と紗理奈が反応する。
ブカブカの服でわからなかったが、よく見れば龍の胸は中々大きい。
（（元が男に、胸の大きさで敗ける私って……））
一応言っておくが、龍の胸が大きいだけで、紗理奈の胸が小さい訳ではない。　優花はまぁ、ノーコメント。

「まずはサイズでも測りましょうか……」
「そうですね……」
（殺気が……）
二人の殺気を感じ、龍は身震いをした。
「僕に任せて下さい」
突然、興奮し過ぎて気絶していた総司が立ち上がり、優也と龍に歩み寄る。
「総司？」
「何を……」
一体何をするつもりなのかと、皆が思った瞬間、
「ひゃっ！？」
「っ！？」
猫耳と尻尾をピンと張り、優也は可愛らしい悲鳴を上げ、龍は眼を見開き、体を硬直させる。
理由は、総司が左手で優也の胸を、右手で龍の胸を掴み、揉み始めたからだ。
「ふむ、優也君がCで、龍君がEですね」
『何してんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ（のよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ）！！！！！！』
しれっと答える総司を、進、雅、紗理奈の三人が殴り飛ばす。

「ぐふっ！！」

殴り飛ばされた総司は、床に叩き付けられると、三つの強い殺気を感じた。

『……』

ゴゴゴゴゴゴ、と音が聞こえそうなくらい、美優、仁、亮の三人は各々の武器を、総司に向けて構えていた。

死の淵に立たされた事を理解しながらも、総司は笑っていた。

「一つだけ言っておきます……」

何故なら、総司は変態としての誇りを胸に行動したのだから。

「後悔はしていません！！」

その言葉を皮切りに、美優達は総司に襲い掛かった。

「家は壊さないでね！」

「取りあえず、着替えよっか？」

「うん……」

「あぁ……（いつか殺す！）」

涙目の優也と、怒りを露にした龍は、紗理奈に付き添われ、家の奥へ入っていった。

優也は変わらず、美優と優花と同じ家に、進は雅の家に、龍はルナ達が一緒に住んでいる流香の家に。
流香が離れなかった為、仁も流香が元に戻るまで一緒に居る事になった。
優也と龍は、女の服を着るのは妥協したが、下着まで着るつもりはなく、最後まで渋ったが、最終的に押し敗けた。
どんな服装かは、作者にファッションセンスが無いので、細かな所は読者の想像にお任せします。

「ねぇ優也……」

そしてここは、性転換&猫耳と尻尾が生えた優也の居る家。
現在優也は、

「耳と尻尾触らせて！」

美優に詰め寄られていた。

「嫌だよ！　何か眼が怖いし！」

美優の不気味な雰囲気に、優也は悪寒を感じた。　それはいつもの勘か、それとも猫の勘なのかはわからない。

「じゃあ、にゃ～って言ってみて！」

普段なら言う筈もない。

「に、にゃ～……？」

そう、普段なら。

「可愛いぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！」

「し、しまった！　つい！！」

思わず言ってしまう程、紗理奈の薬の影響力は凄かった。　恐るべし魔女の薬。

「今なら総司と同じ世界に入れそう…………！」

「待てぇ！？　そんな世界に入るな！！」

「…………」

一歩手前まで、変態の世界に接近している美優を引き戻そうと優也の尻尾を、優花が仰視していた。

ミニスカートの中から伸びた黒い猫の尻尾。　それに向かって、優花は飛び付いた。

「にゃん！？」

無意識に出た猫の鳴き声を訊いて、美優は卒倒しそうになるが、何とか耐えきった。

「凄い、触り心地が良い」

「あ、優花……ん、やめ…………！」

思った以上に触り心地が良く、優花は尻尾に頬擦りをする。

「優花ばっかりズルいよ！　私にも猫の優也、もとい、猫ユウちゃんを堪能させろぉぉぉ！！」

「誰がユウちゃん!?　ちょっ、待って……ニャアアアアアアアア!!!!!!!」

一匹の黒猫の叫びが、日が沈み始めた街に木霊した。

所変わって流香の家。

現在ここには、ルナ、クリス、エルザ、雪奈に加え、薬の影響で精神が幼稚園児程に退行してしまった流香と、同じく、薬の影響で体が少女へと変わってしまった龍と、流香がどうしても離れなかった為、薬の効果が消えるまで一緒に居る事になった仁が居た。

家に到着した時、流香達の事をルナ達に説明をしたら、初めは困惑していたものの、今は何とか順応している。

「私より背の低い龍さんも新鮮ですね～。　あ、すみません。　今はリュウ子ちゃんでしたね」

「殺すぞ」

「落ち着けリュウ子ちゃん」

「絶対殺す……！」

龍はエルザと仁に弄られていた。　仁とエルザ、この二人は中々気が合うらしい。

因みに、ずっと仁に引っ付いていた流香は、現在雪奈と遊んでいる。

「冗談はさておき、ゆったりリュウちゃんと話すのは久し振りですね」

「ちゃん付けやめろ！」
「良いじゃないかリュウちゃん。　幼馴染みなんだろリュウちゃん？　もっと話をしろよリュウちゃん」
「リュウちゃん連呼するな！！　お前等、俺を虐めてそんなに楽しいか！？」
「「楽しいです」」

即答。　弄られるネタが有る状況で、この二人に口で勝てるボキャブラリーは、龍には無かった。

（もう帰りたい……）

打たれ弱いリュウちゃんであった。

「あらら、虐めすぎましたかね？」
「たまには良いだろ。　それより、ルナの奴どうした？」

仁の指差す方向には、雪奈と遊ぶ流香をカメラで撮りまくるルナが居た。

「ルナお嬢様はあれが正常ですので、あまり気にしないで下さい」

仁にとっては異常だが、エルザが正常と言うなら正常なのだろうと、仁は納得した。

「元敵キャラの兄や姉は、味方になるとギャップが凄いんだな」

ルナ然り、修二然りである。

「楽しいか、ルカ？」

「うん！　楽しいよユキちゃん！」

雪奈と遊んでいる流香は、子供らしい笑顔で雪奈に笑いかける。
子供好きと言うだけあって、雪奈は子供に好かれる様だ。

「あぁ可愛い！　もう見れないと思っていたわルカのあんな笑顔。
八年も頑張って良かった！」
「良かったでありますね、ルナお嬢様」

流香をカメラで撮りながら、暴走するルナを、クリスが半歩下がって見守る。
八年間、最愛の妹と出逢えなかったのだ。　ルナの流香へ対する暴走に近い愛情表現を、見守り続けようと、クリスは決意した。

「お姉ちゃん！」
「！！」

流香の言葉に、シャッターを切るルナの指が止まる。

「一緒に遊ぼうよ！」

満面の笑みの流香を、カメラに納めると、ルナは周りを見渡し、

「皆訊いた！？　ルカが私の事お姉ちゃんって言ったわよ！？　しかも無邪気な笑顔で！！　本当に八年間、頑張ってきて良かった！
神様、ありがとう！！」

神に祈る様に、金の吸血鬼は胸の前で手を組む。
何故か、ルナの上から光が降り注いでいる様に見えた。

「カリスマブレイクだな」

いつか、うー☆とか言いそうだなと、仁は思った。

「ルカ、ああなったら駄目だぞ？」

「？　うん」

元気なルナも良いが、以前のクールなルナも良かったと、思い始めた雪奈であった。

「なぁ真司……」

「何だよ……」

「雅って、こんな感じだっけ？」

夕食を食べ終えた真司と、体だけ幼児化した進の目の前には、雅が居た。　それもただの雅じゃない。

顔が固まってしまったかの様に、笑顔のままなのだ。

「何でずっと笑顔なの！？　笑ってんの？　怒ってんの！？」

「俺が知るか！！　あんたが何かしたんじゃねぇのか！？」

普段の雅を見ていると、今の雅は恐怖しか感じなかった。

「多分、今の進を見て母性本能が働いてるんじゃ……」

「母性本能怖っ！」

思えば、進が幼児化してから、雅は可笑しかった。　幼児とは言え、進を膝に乗せたり、誰が誰を引き受けるかの話し合いの時、真っ先に進を引き受けた。
それは全て、進に対する母性本能からなりものだった。

「さぁて、そろそろ一緒にお風呂に入りましょうね？」
「……はい？」

せめて笑顔は止めて欲しいと、心の中で願っていた進は、雅の突然の言葉が理解出来ていなかった。
念の為に、真司を見てみると、真司も理解出来ていない様子だった。
気付けば雅に連れられ、風呂場に来ていた。
手際よく服を脱がされ、隣で雅が服を脱いでいくが、それすら反応出来ない程、思考が凍結していた。

（いや、待て落ち着け。　落ち着いて偶数を数えろ。　あれ？　数えるのって奇数だっけ？　何を数えるんだっけ？　とにかく数えよう！　１２３４５６７８……）

何はともあれ、進の脳は再起動を始める。

（風呂？　風呂って言ったよな……？）

シャワーの流れる音がするが、進は全く気付かない。

（風呂って……人間が唯一裸で居られる場所で……）

進の体にシャワーの水がかかるが、それすら気付かない。

（そんな場所に一緒に入ろうって……お風呂ォオオオオオオ！！！？）

進の思考は、やっと現状に追い付いた。

（って事は……今俺の後ろには……）

後ろを振り返りそうになるが、ギリギリで踏み留まる。

何故なら後ろには、

（生まれたての姿の雅がぁぁぁ！？）

正直な気持ちを言えば見たい。進だって中学生男子で、こんな状況なのだから、誰も責められない。

だが、そんな事をしても良いのかと言う思いが、進を踏み留まらせた。自分は断じて変態（そうじ）ではないと。

「って熱ぅぅぅ！？」

今更ながら、シャワーのお湯がかけられている事に気付き、進は飛び上がる。

「だ、大丈夫！？」

「あ、あぁ、何と……」

見てしまった。見ないと誓っていたのに、一糸纏わぬ雅の姿を。

頭に血が昇っていく感覚を感じながら、進は男としての感情に身を委ね、心のシャッターを切り、気を失った。

「電気消すぞ」
「うん」
「ええ」

部屋の電気が消える。
部屋に居るのは、ルナと眠たそうにしている流香と、結局寝るのも一緒になった仁だった。　流石に風呂は一緒ではなかったが。

「おやすみ、ルカ」
「おやすみ、お姉ちゃん……」

流香は寝床に入ると、すぐに寝てしまった。

「フフ、遊び疲れたのね」
「今の内に帰ろうか？」

流香がどうしてもと言うから了承したが、流香が先に寝たのならここに居る必要は無いと仁は判断し、帰ろうとする。

「もう遅いから止まっていきなさい。　それに、起きた時に貴方が居なかったらルカが泣くわ」
「……わかった」

紗理奈は一日もすれば戻ると言ったが、正確な時間がわからない。
朝起きて、もし流香が元に戻っていなかったら、泣き叫ぶのは眼に見えている。

ルナからも頼まれ、断れなかった仁は、流香とルナと同じベッドに入った。

「おやすみ」
「おやすみなさい」

仁とルナが流香を挟み、三人は眠りにつく。

（……何だか、親子みたいね……）

流香の精神が子供になっている為、今の自分達は、親子みたいなのではないかと、ルナは考えてしまい、意識してしまって眠れなかった。

一度眼を開き、仁の顔を見る。

（以外に綺麗な顔立ちしてるのね……）

眼を開いた先には、いつもと変わらない仁の顔が見えた。

見ていると、顔が熱くなったのを感じたが、すぐに異変に気付いた。

仁の眼が閉じられていなかったのだ。

（えっ、何これ？　寝てるの！？）

目蓋は少ししか閉じられていなかったが、寝息は確かに聞こえる。

（そ、そうよね。　寝てるのよね！　私も寝よう！）

ルナは慌てて眼を閉じる。　だが、どうしても仁の視線を感じ、眠気は一行に訪れない。

（全然眠れないじゃないの！！　何で眼を開けたまま寝てるのよ！？）

戦争時代、危機察知能力が乏しかった仁は、眠る時は眼を開けたまま眠る様に癖付けていた。　今では眼を開いたまま眠る事も少なくなっていたが、癖はそう簡単に抜けず、時折こうして眼を開いて眠るのだが、ルナなそんな事は知らない。

（お願いだから眼を閉じてぇぇぇ！！）

結局ルナは、全く眠る事が出来なかった。

「リュウちゃん機嫌直して下さいよ～」
「まずはその呼び方をやめろ」
「嫌です」
「即答かよ」

別の部屋では、龍とエルザが一緒のベッドで眠っていた。
龍はエルザに背を向けて寝ているが。
因みに、龍はエルザと風呂に入った。エルザが龍を気絶させ、その隙に連れていくと言う荒業で。　勿論仁も手伝った。
胸を揉まれたりして、龍はすこぶる機嫌が悪い。
思わず感じてしまったのは、人生最大の屈辱だ。

「謝るも何も、こっち見てくれないと謝れませんよ」

「……」

仕方なく、龍はエルザへ寝返りを打つ。

「隙有り！」

「ふがっ！？」

エルザが視界に写った瞬間、龍はエルザに抱き締められた。

「やっぱり私より小さい龍さんは良いですねぇ♪」

「むぅ～！」

顔をエルザの豊満な胸に押し付けられ、龍は喋る事が出来ない。

龍もまた、朝まで満足に眠れなかった。

「そろそろ寝よう……」

「そうだね」

その頃の優也達も、眠りに入ろうとしていた。

あの後、何とか二人を落ち着かせた優也だったが、風呂で再び耳と尻尾を弄られた挙句、胸まで弄られたのは言うまでもない。

「待って！　寝る前にこれ食べたい！」

就寝の準備に入ろうとした二人を、美優が止める。

「駄目だ。　寝る前に食べると太るぞ」
「え～、太らないから大丈夫だよ」
「それでも駄目だ」

さっさと寝て、この悪夢から覚めたい優也は、断固拒否する。

「むぅ、でも……そうだ、ユウちゃん食べる？」
「！」

目の前にケーキを差し出され、優也の意志が揺らぐ。

「い、いや、やめとく！　食べたら太るかもしれないし！　後ユウちゃん言うな」

そう言う優也だが、耳をピンと張り、嬉しさからか、尻尾を左右に振っていた。

「……そうなんだ」

美優は手に持ったケーキを、優也から離す。

「あ……」

ケーキが離れ、優也の耳と尻尾がシュンと項垂れる。

「……」

もう一度ケーキを近付ける。
耳がピンと張り尻尾が左右に振れる。

ケーキを離す。
耳と尻尾がシュン項垂れる。

（面白い）

それを何度か繰り返していく内に、美優、そして優花が壊れた。

「ひゃ！　ゆ、優花？」

突然優也の後ろから、優花が抱き付く。

「ユウは可愛いね。　髪も肌も綺麗だし」
「そう言う訳で、行こっか、ユウちゃん」

すると、いつの間にかケーキを片付けた美優が、優也の手を握る。

「ちょっ、二人とも……？」

これはマズイ。　何がマズイのかわからないけど本能が危険だと警告したが、時既に遅し。

「ニャアアアアアアアア！！！！！！」

夜の街に、黒猫の叫び声が響き渡った。
その後、何とか二人を落ち着かせた優也だったが、眠る事が出来なかった。

五日後、ファミレスの隅のテーブルに、元に戻った優也、龍、流香が居た。
だが、一人として覇気を感じず、三人の周りの空気は淀んでいた。

「あれ以来さ、優花と美優が猫耳買ってきて『ユウちゃんにゃ～って言って♪』何て言ってくるんだよ。　何回か言われてたら自然と言っちゃうし……。　前以上に女装させようとしてくるし……。　怒っても可愛いなんか言ってくるし……」
「それくらい良いだろ……。　俺なんか、エルザがしつこく絡んできて、リュウちゃんリュウちゃんって連呼しながら、この間の事を街中で言うんだぞ……。　通行人の生暖かい眼が辛い……。　仁も時々弄ってくるし……」
「私なんかもっと酷いわよ……。　何で私だけ精神だけが幼児退行なのよ……。　何年も掛けてクールな性格にしたのに、あんな子供みたいに甘えるし、仁には、あ、あんな事言っちゃうし……／／／。誰か、私の恥ずかしい記憶と言う名の幻想を、跡形もなく、塵一つ残さずぶち殺して下さい……」

薬の影響を受けたあの一日は、優也達に大きなダメージを残した。
逆に、美優、優花、ルナ、エルザはとても嬉しそうにしていた。
そして進は、あれ以来雅の顔をまともに見れず、雅も雅で、何故あんな事をしたのかと後悔し、進を見れば顔を赤くして逃げ出すしまつだった。
余談だが、

「ふふ、フフフフフフフ」

空間を操る能力を使い、総司が薬の影響を受けた優也、龍、流香の

三人を写真に撮っていたのだが、それは誰も知らない。
優也達四人があの日学んだのはただ一つ。
魔女の薬には気を付ける。

第８１話　魔女の薬（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「初めの質問は、竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の美莉からだ。　ありがとう。　『みんなに質問！　誰も共感しそうにない趣味とかある？』」

流香

「誰かをコスプレさせる事」

総司

「女性の観察です」

ガドル

「武器コレクション」

闇夜

「これくらいですかね」

仁

「マニアックだな。　次はＯＯＯＴＧＬＳＴＳＴＰＢさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】の凍華からだ。　ありがとう。　『男性陣に。胸は大、中、小選ぶならどのサイズがいいですか？』　選ばないいけないなら小」

優也

「別に大きさなんていいんだけどな。　じゃあ間をとって中で」

進

「……だ、大」

正

「お、俺は……中……」

彪牙

「じゃあ小かな」

龍

「大……」
総司
「馬鹿ですか皆さん！　例え質問でも、女性を胸で選ぶなんて失礼、んがぁ！！」
仁
「失礼なのはお前の存在だ」
全員
『零距離射撃！？』
仁
「次は星空の侍さんの【星空の幻想郷】の将からだ。　ありがとう。
『亮と紗里奈に質問。二人は学校には通ってないのか？』」
亮
「ちゃんと通ってるよ。　一応高校生だからね」
紗理奈
「一般教養は学ばないと」
仁
「（俺と正と龍は学校通ってないけどな）次で最後だ。　★揚ポテトさんからだ。　ありがとう。　『大江咲魔さんの大江は、もしかすると京都の大江山が由来なのでしょうか？』」
闇夜
「その通りです。　鬼で探していたら大江山を見付けたので、調度良いと思ってやりました」
仁
「それにしても、今回は大変だったなあの四人」
総司
「そんな大変だったユウちゃん、リュウちゃん、精神幼児の流香さんを写真に撮りました！　この写真を読者の方々へお贈りします！」
優也・龍・流香
『貴様ァァァ！！！！』
総司

「因みに言っておきます。　ユウちゃんとリュウちゃんの胸の揉み心地は最高でした！」

優也・龍

『尚更殺す！！』

仁

「完全にキレてるな。　近付かないでおこう」

闇夜

「次回も宜しくお願いします！」

次回

第８２話　英雄（ヒーロー）

彪牙

「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第８２話　英雄（ヒーロー）（前書き）

後書きに重要な報告があります。

第８２話　英雄（ヒーロー）

真っ暗な夜道を、彪牙は一人歩いていた。
実は彪牙は、バイトをして生活費を稼いでいる。
母は他界し、父は行方不明で、一人暮らしを余儀なくされている為、仕方ない。

「今日は随分遅くなっちまったな」

バイト先の人達の好意で仕事をさせて貰い、金を貰っているので、恩を返そうと頑張りすぎて、夜遅くまで仕事をしてしまった。

「さっさと帰って眠らねぇと、明日は辛ぇな」

体が頑丈とは言え、体調は整えなければならない。
流石に眠いまま授業を受けるのは、彪牙と言えど辛い。

「おっと」

曲がり角から突如飛び出してきた少女、彪牙はぶつかる。

「悪ぃ。　怪我ねぇか？」
「大丈夫。　こっちこそごめんね」

少女はそう言うと、立ち去ろうとする。

「おっと！」
「！」

少女の手を掴み、少女を引き止める。

「帰る前にそれは返してくれねぇか？　せっかく貰った給料なんだよ」

彪牙が掴んでいる少女の手の中には、封筒が握られていた。
それは、彪牙が今日貰った給料で、一ヶ月の生活費でもあった。

「っ！！」

スリである事がバレた少女は、彪牙の手を振りほどき、慌てて逃げ出した。
振りほどいた際に、封筒を落として。

「ちっ、まぁ、金は置いていってるし、良しとすっか」

地面に落ちた給料袋を手に取る。

「ん？」

手に取ってみて可笑しく感じる。　さっきより厚みが違うのだ。

「まさか……」

嫌な予感がして、封筒から金を抜き取ってみると、中から諭吉さんが一人だけ出てきた。
やはり可笑しい。
貰った時は、間違いなく諭吉さんは四人居た筈。

「やられたぁぁぁ！！」

さっきのスリの少女が、逃げる前に諭吉さんを三人程抜き取っていたのだ。

「あんの野郎ぉぉぉぉ！！！！」

この日、彪牙は諭吉さんを三人も拉致された。

第８２話　英雄（ヒーロー）

翌日、彪牙は優也、美優、優花、進、薫、総司、雅と、学校の屋上で昼食を食べていた。

「進級して早々、素敵なお昼ご飯ですね」

「あ？」

総司の言葉に、優也達は頷く。

彪牙が今食べている物は、食パンの耳なのだから。

「三年生にもなってそんな物食べてたら、大きくなれないよ？」

「いや、あれ以上大きくなってどうするんだよ」

お気付きの方もいるかも知れないが、優也、美優、優花、進、雅は二年生に、彪牙と総司は三年生に進級している。

因みに現在四月の中旬だ。

「仕方ねぇだろ。　金がねぇから飯はタダで貰った物で遣り繰りしねぇと生活出来ねぇんだよ」

愚痴りながら、彪牙は食パンの耳が大量に入った袋に手を突っ込み、一本だけ取り出して頬張る。

「何かあったんですか？」

彪牙が何処と無く機嫌が悪そうな事に気付き、薫が尋ねてみる。

「昨日貰ったバイト代四万の内、三万スラれてな。　一ヶ月一万円生活中なんだよ」

食パンの耳を頬張りながら言う彪牙に、優也達は目線を集める。

「な、何だよ……？」

明らかな同情の目線に、彪牙は引く。

「今夜家行くよ！」

「はぁ？」

「腹一杯食べられる様に色々持っていくよ」

「彪牙さんも災難ね……」

「今度は俺が助けるからな！」

「可哀想な彪牙さん……」
「私達は彪牙の味方だからね」
「一瞬ザマーミロと思いましたけど、同情します。　今夜は皆で押し掛けます」

同情の眼差しで見られ、思わず、同情するなら金をくれ！　と言いそうになる。

「ちょっと待て！　何で俺ん家に集まる事に……」
「大丈夫！　困った時はお互い様だよ！」

何故か、彪牙の家に集まる事が決定し、優也達は楽しそうに話す。
楽しそうなのは良いが、同情の眼差しだけはやめて欲しいと願う彪牙だった。

「いらっしゃ、お！　ヒュウちゃんじゃん！」
「こんにちは。　店長」

彪牙は放課後、一人で馴染みのパン屋に来ていた。

「景気はどうですか？」
「う～ん、不景気だからねぇ。　あ、はいこれ」

店長は食パンの耳や、小さな細切れのパン等が入った袋を彪牙に渡す。

彪牙は食費が無い時、こうやって売れ残りのパンを貰って遣り繰りしているのだ。

「いつもすみませんね」

「良いよ良いよ、気にしなくて。　どうせ捨てるくらいなら、誰かに食べて貰った方が良いしさ。それにしても、最近はタダで欲しいなんて言わなかったのに、どうかしたのかい？」

「あ～……」

本日二度目の質問。　俺に質問するな、と言いたい所だが、言える筈もない。

「まぁ、色々あったんです……」

「大変だねヒュウちゃんも……」

ここでも同情の眼差しを向けられる彪牙だった。

日が朱く染める道を、彪牙は手にパンが入った袋を提げ、一人で歩いていた。

「今日はやけに疲れるぜ。　ん？」

ふと公園に視線がいく。

そこには、自分と同じくらいの、セミロングの茶髪に花の髪飾りをした少女が、ブランコに座っていた。

（どっかで見た様な……）

その少女を彪牙は見たことがあった。　それも、最近あった不幸な出来事の時に。

「そうだ。　あいつ、昨日の！」

公園で一人で居る少女こそ、昨晩、彪牙の諭吉さん、三人を拉致した少女だった。
そうとわかった彪牙は、少女元へ歩み寄る。

「おいお前、昨日の奴だな？」

彪牙の声に反応して、少女は彪牙へ振り向く。
昨晩は暗くてわからなかったが、少女はスタイルも良く、顔も綺麗な部類に入り、中々の美少女だった。

「ああ、昨日の。　どうしたの？」

少女は悪びれもせず、彪牙の神経を逆撫でする様な事を言う。

「どうしたじゃねぇよ。　金返せ！」
「残念。　もう無いよ」

掌を見せて、何も無いアピールする少女に、彪牙は項垂れる。

「お前、名前は？」
「まずは自分から名乗ったら？」
「……鋼鎧寺彪牙」

「そう、あたしは白星渚（しらほしなぎさ）。　渚で良いよ。　宜しくね、彪牙」

渚のペースに毒気を抜かれた彪牙は、肩を落とす。

「なぁ、お前学校は？」

「行ってないよ。　あたし家出してるもん」

「お気楽だなおい……」

然り気無くカミングアウトする渚に、彪牙は呆れる。

「ったく、親の顔を見てみたいぜ」

「……」

何気ない彪牙の言葉に、渚の表情が暗くなる。

「……渚？」

「な、何でも無いよ！」

突如渚は立ち上がる。

「あたしそろそろ行くね！」

「はぁ？　おい！」

渚は彪牙の腕を抜け、公園の外に飛び出す。　彪牙も慌てて追い掛け、公園の外に出ると、渚が振り返った。

「これ！　貰っていくから！」

彪牙に見える様に、渚は手を掲げる。

その手には、彪牙がタダで貰ったパンの袋があった。

「なっ！　いつの間に！？」

パンの袋を提げていた手を見るも、そこには何も無かった。

「じゃあね！」

「あっ！　おい！？」

走り去る渚を追い掛け様とした彪牙だが、険しい顔をして足を止める。

渚が、ヤクザの様な男達と一緒にいたからだ。

『かんぱ～い！』

「……」

夜になり、約束通り彪牙の家に集まった優也達。

一人暮らしの彪牙の家に八人も入るのは無理だと思っていたが、何とか入る事が出来た。

一人一人食材を持ってきて、優也と薫が料理をした為、金欠な彪牙の家では有り得ない豪華な料理が並んでいた。

これならば、彪牙も喜ぶだろうと思っていた優也達だったが、当の彪牙は、険しい彪牙をしていた。

「彪牙？　どうしたの？」

様子の可笑しい彪牙に、優花が心配そうに彪牙の顔を覗き込む。
優也達も、心配そうに見ていた。

「あ、いや何でもねぇよ。　ほら、早く食べようぜ！」
「あっ！　ズルい彪牙！　私も食べる！」
「彪牙の為に作ったんだよな！？」

彪牙が料理に手を出し、美優も料理に手を出すと、他の皆も料理を口にし始めた。

「……」

だが一人、料理に手を出さず、険しい表情で彪牙を見ている少年が居た。
総司だ。
総司の視線に気付かず、彪牙は隠れて携帯を取り出し、メールを送信する。
送信画面には、雷道仁と表示されていた。

「よう、渚」
「また来たんだ、彪牙」

翌日の放課後。　彪牙と渚は、昨日と同じ公園で会っていた。

「パン、全部食べちゃったよ？」

「別に良いよ。　今日は話をしに来ただけだからな」
彪牙は渚の隣のブランコに座る。
「話って何？　スリをやめろって話なら訊かないよ」
「その話もしてぇけど、今日はお前の家族の事で来た」
「！」
彪牙の言葉に、渚の肩がビクッと跳ねる。
「訊かせてくれねぇか？　お前の家族の事」
「……」
顔を俯かせて黙っていた渚だったが、ブランコから立ち上がり、ゆったりと歩き出す。
「あたしのお父さんね、刑事だったんだ」
ブランコの周りを歩きながら、渚は話し、彪牙は黙って話を訊く。
「強くて、カッコ良くて、優しくて、正義感が強くて、あたしの英雄（ヒーロー）だった。　あたしも、そんなお父さんを尊敬してて、憧れてて、あたしもお父さんみたいになりたいって思ってた」
（あぁ、こいつは……）
何故、渚を放っておけなかったのか、この時彪牙は初めて気付いた。
（俺と似てるんだな）
彪牙も渚も、父親に、自分だけの英雄（ヒーロー）に憧れ、尊敬している。

だが今の渚は、どう言った訳か道を踏み外しかけている。　優也と出逢う前の自分の様に。
だからこそ、彪牙は渚を放っておけなかった。

「でも裏切られた」

ブランコを一周した渚は、彪牙の前に、背を向けて立ち止まる。

「裏切られた？」

それだけ人に尊敬されていた男が、娘を裏切るとは考えられず、彪牙は思わず聞き返す。

「麻薬を横領してたんだって」
「！」

法の番人として、横領などやってはいけない事。
それがもし本当なら、裏切られたと思っても仕方がないが、彪牙はそうは思えなかった。

「その事でお母さんと喧嘩して、嫌気が差したから家出したの」

お終い、と言うと、渚は彪牙に振り向く。

「これで満足？　言っとくけど、あたしは嘘は吐いてないからね」
「あぁわかってる。　ありがとう。　これではっきり言える」

立ち上がった彪牙は、渚に近付く。　その表情に迷いはなかった。

「やっぱりお前は、家に帰るべきだ」

「え……」

自分を裏切った人が居た家に帰れなんて、言われる意味が、渚には理解出来なかった。

「何でそんな……」

「俺が家族の話を訊いた時、話なんかする必要は無かっただろ。だけどお前は話した。　親父さんがお前を裏切ったなんて、お前は心の何処かで信じたくないんじゃないのか？　信じたくないから、誰かに親父さんを信じて貰いたいから、話したんじゃないのか？」

「そんな事……」

「それに、親父さんを英雄（ヒーロー）だって言ってる時の渚、良い顔してたぜ」

「／／／！？」

夕焼けのせいか、渚の顔が赤く染まる。

渚は彪牙を直視出来ず、顔を背ける。

「……彪牙、一つ訊いて良い？」

「あぁ、何だ？」

直視出来ないまま、渚は彪牙に訊いた。

「あたし……どうしたら……」

渚が言い終わる前に、鈍い音が公園内に響く。

渚は驚き、何事かと思い、顔を上げるとそこには、頭から血を流して倒れている彪牙と、片方が金属バットを持っている二人組が居た。

「彪牙！？」

「おい、あんま近寄んな」

顔を青ざめ、彪牙に駆け寄ろうとするが、金属バットを持ってない方の男に止められる。

「この間から渚に会ってると思えば、変な事吹き込みやがって！」

この二人は、先日彪牙が見た、渚と一緒に居た男達だった。

「こんな奴ほっといてさっさと帰るぞ！」

「離して！　彪牙が！」

流れ出る血の量は大した事はないが、後頭部を金属バットで殴られて、無事でいる筈がなかった。

「無理矢理で良いから連れてくぞ！」

「お、おぉ！」

「嫌！！」

嫌がる渚を無理矢理引っ張り、公園の外に停めておいた車に乗せる。

「さっさと出せ」

「うるせぇな」

血を流して倒れている彪牙を置き去りにして、渚を乗せた車は走り出した。

「彪牙……」

遠ざかる公園を見ながら、渚は彪牙の心配をするが、今更自分には何も出来ないと諦めかけた瞬間、

「渚ぁ！！」

彪牙の声が聞こえた。

「彪牙！？」

横を見てみれば、彪牙は何事も無かった様に、車と並行して走っていた。

「嘘だろ！？　こっちは３０キロだぞ！」

「もっとスピード出せ！」

「彪牙！！」

男達が慌てる中、渚は窓を開ける。

「渚！　お前、どうしたら良いか訊いたな！？」

怪我をしている事を感じさせず、彪牙は走り、そして、渚に言い放つ。

「信じろ！！　それだけで良いんだ！」

「！」

渚の眼が見開かれる。

「お前の知ってる親父はお前の英雄（ヒーロー）だったんだろ！？　世界でたった一人のお前だけの英雄（ヒーロー）だったんだろ！？　だったら信じろ！　誰が何て言おうと、誰も信じてやらなくても、娘のお前が信じてやれ！　世界でたった一人の父親を！　お前だけの英雄（ヒーロー）を！！」

彪牙の言葉が、渚の心に響く。
今思えば、渚の話を真剣に訊いてくれたのも、渚と真剣に向き合ってくれたのも、彪牙だけだった。

「このガキ！！」
「！」

助手席に座っていた男が、窓から身を乗り出す。　その手には、拳銃が握られていた。
銃声が鳴り響くと、彪牙の体が宙を舞い、後ろへ投げ出される。

「いやぁあああああああああ！！！！」

その光景を目の当たりにしてしまった渚は、喉が裂けんばかりの悲鳴をあげる。
渚を乗せた車は今度こそ、彪牙を置き去りにして、走り去ってしまった。
その場に残されたのは、力無く倒れている彪牙だけ。
今の光景を見た者なら、誰もが彪牙は死んだと思うだろう。

「っ、危ねぇ……」

腕に力を込め、彪牙は起き上がる。
彪牙は生きていた。
銃弾は間違いなく彪牙の頭を捉えていた。
銃弾が命中する瞬間、彪牙は大袈裟に後ろに飛ぶことで、紙一重で銃弾を躱していた。

「人に調べ物を頼んでおいて、自分は随分楽しそうな事をしてるな」

彪牙を見下ろす様に、誰かが彪牙の後ろに立つ。

「仁……」

振り返った先には、煙草を吸っている仁がいた。

「白星渚の家族の事、調べ終わったぞ」

「早っ！　昨日の今日だぞ!?」

「俺に調べられない事は無い。　多分」

「多分かよ」

先日、彪牙は仁に調べ物を頼んでいた。
それは仁の言った通り、渚の家族の事だ。

「白星渚。こいつの母親には普通の主婦で、父親は刑事だ。　後これ頭に巻いとけ」

「お、悪ぃ」

仁は彪牙に手拭いを渡す。
彪牙は手拭いを頭に巻き、応急措置をする。

「父親は一年前にビルから転落して死んでいる。　捜査の結果、自殺と断定された」

「自殺……？」

「ああ、遺書も見付かっている。　遺書には、麻薬の横領をしていたと書かれていた。　実際に、白星渚の父親の遺品から、麻薬が見付かった」

「……」

「その後、白星渚は母親と喧嘩をして家出。　街を彷徨いていた所

をヤクザの組長に拾われ、夜な夜なスリをして金を稼いでいたらしい」

渚が言った通り、父親は横領していた。
信じろと言ったものの、これだけ証拠が揃っていれば、自分の言った事は間違いではないのかと考えてしまう。

「だが、可笑しな点がいくつかある」
「……何？」

その頃、渚は中年の男が居る部屋に居た。

「渚、そのガキとは何も無かったか？」

男は心配する様に、渚に尋ねる。
この男こそ、一人で居る渚を拾った張本人で、ヤクザの組長。

「はい……」
「そうか。　良かった良かった」

渚の返事に、男は嬉しそうに笑う。

「渚、今日は疲れただろう。　もう休め」
「……」

軽くお辞儀をすると、渚は部屋から出ていこうとする。

『信じろ！！』

扉の前に立った瞬間、彪牙の言葉が頭に過る。
父親を信じると言う事は、スリはやめなければならない。　だがそれは、自分を拾ってくれた組長を裏切る事になる。
もしやめたいと言えば、どんな目のあうかわからない。
怖い。　だが、渚は精一杯の勇気を振り絞る。

「あの……」
「どうした？　渚」

渚は振り返り、組長と相対する。
目の前にしていない時とした時では、怖さが違う。
それでも渚は勇気を振り絞って言った。

「あたし、スリをやめたいです」

「はぁはぁはぁ！！」

頭に巻いた手拭いを血で赤く染めながら、彪牙は再び走っていた。
幸いにも、辺りは暗くなってきているので人が少なく、騒がれる事もなかった。

『何が可笑しいんだ？』
『白星渚の父親が転落してから、他の刑事が現場に到着するまでの時間がやけに速かった。　それは過去の防犯カメラの記録にも残っている』
走りながら、仁との会話を思い出す。
『次に遺書。　遺書はワープロで書かれていて、本人が書いたとは言えない。　そしてその遺書には、本人の指紋は一つも無かった』
『偽造……』
『あぁ。　そして最後に、白星渚の父親は、誰かと揉めた形跡があった。つまり』
『誰かに殺された……罪を被らされて……』
『その時間にアリバイが無く、それでいて麻薬を横領していた刑事が一人居る。　そして麻薬は、白星渚を拾ったヤクザの組長に流れている』
『なっ！？』
『これを持っていけ。　そこにヤクザ共の事務所が書いてある』
『ありがとう！』
渚の父親は同僚の刑事に嵌められただけ。　そして渚は、その刑事と繋がりのあるヤクザの所に居る。
その事に、彪牙は怒りを感じていた。
渚の父親を裏切り、渚を騙している男達に。
「ここを右か！」
仁から貰った渚までの道が書かれている紙を見ながら、彪牙は走る。
（もうすぐだ！　待ってろ！）

自分と似た少女の為に、彪牙は地を蹴った。

「スリをやめたい？」
「はい……」

何をされるかわかったもんじゃない。　それでも、渚に後悔は無かった。

「そうか。　お前ならいつかは言うと思ったよ」
「！」

予想とは違う答えに、渚は驚く。

「そろそろ用は無いと思っていた所だから調度言い」
「え……」

ガチャリと、渚の背後の扉が開く。
驚いて振り向くと、そこには渚の父の同僚である刑事が居た。

「何で……村田さんが……」

過去に何度か会った刑事が、何故ヤクザの事務所に居るのか、渚は困惑した。

「一年前の横領事件。　実はあれ、お前の父親じゃなくて俺が犯人なんだよ」
「う……そ……」
村田と呼ばれる刑事の口から言われた言葉に、渚は後退る。
「お前を拾ったのも、お前が白星の娘だったからさ。　白星が家族に何か言ってないかと思ってな」
「だが、一年も経って何もわからなかったんだ。　ならもう置いておく必要も無い」
村田は服の中から拳銃を取り出し、渚に向ける。
「皮肉なもんだな。　父親もその娘も、俺が殺す事になるなんてな」
「！」
混乱していた渚でも、今の村田の言葉は理解出来た。
この男が渚の父親を嵌め、殺した張本人だった。
（あたし……一年もお父さんの事を……）
お父さんは何も悪くなかった。
そう思うと、渚の眼から大粒の涙が溢れ出した。
（ごめん、お父さん。ごめん、お母さん。　ごめん……）
「じゃあな」
（彪牙……）
村田が引き金に指をかけた瞬間、

「ごあぁ！？」

村田は突如外れた扉に踏み潰される。
その扉の上には、ツンツン頭の男が立っていた。

「あ……」

その男を見て、渚は声をもらす。

「悪ぃな。　中々通してくれねぇから」

男は扉の上から降りると、組長を睨み付けた。

「組員全員寝て貰ったぜ」
「彪牙！！」

頭の傷以外、無傷の彪牙が、渚を助ける為に参上した。

「このガキ……」
「渚、下がってな」

扉の下から、村田が這い出る。
彪牙は渚を背に隠すと、村田と向き合う。

「ぶっ殺してやる！！」

村田が拳銃を構えた瞬間、拳銃ごと、村田の手が消えた。

『！！』
「へっ……？」

全員が驚愕する中、ボトリと、拳銃を持った村田の手が、床に転がった。

「ぎゃあああああああああああ！！！！」

まるで拳銃ごと手が瞬間移動したかの様な出来事に驚く暇も無く、村田は激痛に襲われる。

「痛いですか？　自業自得ですよ」

「「！？」」

「お前……」

この場に、新たな人物が現れる。　それも、彪牙がウンザリする程、見飽きた人物、

「総司、何でお前が……」

彪牙の親友で、幻術と空間を操る男、霧藤総司が現れた。

「な、何だお前！？　いつから居た！！」

組長は総司の突然の登場に、驚きを隠せない。　それは、渚も同じだった。

「昨日から君の様子が可笑しいと思いまして、悪いと思いつつ君の後を着けました。　君と雷道の話も訊きましたよ」

「お節介な奴だぜ」

「君に言われたくありません」

二人は顔を見合わせると、少し笑う。
少しの変化に気付ける。　それ程、二人の絆は強かった。

「このクズは僕に任せて下さい」

痛みで地面を転げている村田に、総司は近付いていく。

「助けて欲しいですか？」

総司は村田の髪を掴み、村田の頭を持ち上げる。

「た、助けてくれ！！」

醜く命乞いを村田に、総司は微笑みかけ、髪を離し、

「ぐえっ！！」

顔を踏みつけた。

「ふざけるのも顔だけにして下さい。　金の為に人を殺す様な人間は、見るだけで虫酸が走るんですよ。　少しくらい罪の意識を感じたらどうです？」

そう言いながら、足に体重を乗せる。

「こ、殺さないでくれ……！」
「殺しはしません。　その代わり、死ぬよりも苦しい思いをして貰います」

総司は村田の頭へ手を伸ばす。

その光景を見て、彪牙は心の中で村田に同情した。
村田は幻術を見せられ、苦しみ続けるのだから。

「じゃあ、こっちも終わらせるか」

彪牙はたった一人になった組長に向き合う。

「お、おい誰か！　誰か助けに来い！！」
「さっき言っただろ。　全員寝て貰ったって」

ゆっくり、ゆっくりと、彪牙は距離を詰める。

「か、金ならやる！！　だから許してくれ！！」
「くだらねぇ……」

右の拳を固く握り締め、組長を睨み付ける。

「組長さんよ。　この拳は俺の拳だと思うなよ」

組長の前に立った彪牙は、拳を振り上げ、

「この拳は、渚の拳だと思え！！」

組長の顔面に叩き込み、そのまま床に叩き付けた。

数日後。
いつものメンバーでいつもの場所で、昼食を食べていた。
彪牙は相変わらず貰い物のパンを食べている。

「そんな事があったんだ」
「一言言ってくれたら手伝ったぞ」
「良いじゃねぇか、終わった事は」

そう言いながら、彪牙はパンを頬張る。

「その後、渚さんはどうしたの？」
「えぇ、ちゃんと家に帰ってお母さんと仲直りしたみたいですよ」

あの後、渚を母親の元へ連れていくと、母親はいきなり渚の頬を叩き、涙を流しながら渚を抱き締めた。
あの様子からすると、渚と母親は間違いなく仲直りしたに違いない。

「あぁ、言い忘れてたけど……」
「彪牙！」

彪牙が何か言いかけた瞬間、髪飾りを付けた、茶髪の少女が駆け寄る。

「いつもパンだけじゃ体に悪いよ。　はい」

少女は彪牙に弁当を差し出す。

「いや、悪ぃよそんな」
「この間のお礼だよ」
「んじゃぁ、ありがたく貰うぜ」

彪牙は少女から弁当を貰う。

「紹介するよ。　こいつがさっき話した渚だ」
「今日から転入してきた白星渚です。　宜しくね」
『あ、宜しくお願いします』

挨拶され、挨拶し返した優也達は、心の中で、仁が関係している様な気がしていた。

「で？　何で落ち込んでんだよお前」

優也が隣に視線を向けると、そこには落ち込んでいる総司が居た。

「すぐにわかりますよ……」

哀愁を漂わせながら、ご飯を口に運んでいく総司だった。

「渚、一緒に食おうぜ」
「良いに決まってんだろ。　なぁ？」

話を振られ、優也達は頷くと、渚はお言葉に甘えてと言うと、彪牙の隣に座った。
その光景を見て、優也達は気付いた。　総司が落ち込んでいる理由を。

「彪牙、ありがとうね」
「礼なんて要らねぇよ。　俺は俺のしたいようにしただけだよ。お前こそ良かったじゃねぇか。　親父さんの冤罪が晴れて」

いつの間にか仁が警察に通報しており、一年前の横領事件は村田が真犯人だとわかり、渚の父親の冤罪が晴れた。

「うん、だからありがとう」

「ま、良かったな。　お前の親父さんが、お前にとっての英雄（ヒーロー）だってわかって」

「うん、でもね……」

渚は、彪牙には聞こえない様に言った。

「彪牙も、あたしにとっては英雄（ヒーロー）だよ」

第８２話　英雄（ヒーロー）（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の聖麻から質問だ。　ありがとう。　『優也、進、流香、龍に質問。人生で一番恥ずかしかったセリフは？』」

優也

「にゃ～だろ……」

進

「今思えば、雅に可愛いって良く普通に言えたな俺……／／／」

流香

「じ、仁大好き……／／／」

龍

「……愛してる」

優也・進

「何処で言ったんだよそれ」

龍

「秘密だ」

仁

「次は烈火竜さんからの質問だ。　ありがとう。　『美優が断食したら、暴走しますか？』」

闇夜

「大暴れです。　死人が出る可能性も……」

仁

「それは大変だな。　次は、デビルマンさんの【ハヤテのごとく！～超不幸な青年の物語～】の桂馬からだ。　ありがとう。　『皆さんに質問です、温泉に言ったら何をしますか？』湯に浸かりながら酒を飲むのも良いな」

彪牙
「仁に一票」
優也
「温泉でくらいはゆっくりしたいな」
進
「俺は優也に一票」
龍
「俺もだ」
正
「傷の療養だな」
美優
「温泉と言えば旅館。　旅館と言えばご馳走でしょ！」
薫
「効能じゃないんだ」
優花
「効能……」
流香
「胸に効果はあるのかしら……？」
総司
「覗きでしょ」
女性組
「するな！！」
総司
「ぐひゃ！！」
仁
「次はＯＯＯＴＧＬＳＴＳＴＰＢさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】の凍華からだ。　ありがとう。　『女性陣の皆さんはこちらの男性陣、女性陣で会いたい方それぞれ居ますか？』」
美優
「烈火と雷美に会ってみたい！」

優花
「烈火と冷司と凍華」
薫
「冷司さんと凍華さん」
流香
「桜ね」
仁
「次で最後だ。　星空の侍さんからだ。　ありがとう。『総司に質問。ウチの和樹の変態度は自分より上ですか？下ですか？』」
総司
「自分が一番だと思ってなければ、こんな事出来ませんよ」
仁
「カッコイイ事言ってるつもりだろうが、カッコ良くないぞ」
闇夜
「ここで皆様にお願いがあります」
仁
「次の長編で、三人から五人程オリキャラを、敵としてだが出したいんだが、それを読者の皆に考えて貰いたい」
闇夜
「もしお願い出来るのなら、感想にお願いします！」
仁
「投票は長編が始まる前には締め切ろうと思う」
闇夜
「感想、お待ちしております」

次回
第８３話　月臣の休日
龍
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

登場人物設定7

終
（しゅう）

性別　男

ＣＶ：日高のり子
（るろうに剣心　－明治剣客浪漫譚－：瀬田宗次郎）

年齢　１００歳以上

誕生日　月日

身長　１７３ｃｍ

体重　５５ｋｇ

好き・得意な物（事）　殺し

嫌い・苦手な物（事）　表情を変える事

能力　気配を消す

武器　剣　刃

容姿
セミロングの栗色の髪。
体型は細身。

解説

キョウの右腕の、年がら年中無表情の死神。
死神の中でもトップクラスのスピードを誇り、相手を殺す時も無表情と、感情の起伏に乏しい。
実体は、何本もの死神（デス）の鎌（サイズ）から生まれた存在。　キョウの教えを絶対としている。
優也に敗けてから、自分で考える様にしたり、表情を変えられる様にしたり、感情について勉強している。

キョウ

性別　男

ＣＶ：池田政典
（るろうに剣心　－明治剣客浪漫譚－：志々雄真実）

年齢　不明

誕生日　不明

身長　１８０ｃｍ

体重　７１ｋｇ

好き・得意な物（事）　楽しい事　暴れる事　祭り　火渡穂乃花

嫌い・苦手な物（事）　世界　つまらない事　火渡穂乃花の夫

能力　無し

武器　死神の鎌（デス・サイズ）

容姿

白い髪に、黒いメッシュが少し入った髪型。
瞳の色は赤。
細身に見えるが、実際は筋肉質。

解説

総ての死神を統べる死神。
上位の死神より更に上の、最上位の死神の為、死神の王と呼ばれている。
死神の王と呼ばれているだけの強さは有り、優也、仁、正の三人がかりでも歯が立たず、史哉と長時間の激闘を繰り広げた程。
優也の母、火渡穂乃花と知り合いらしく、彼女を心の底から愛していた。
優也、仁、正の先祖とも知り合いらしい。
世界への憎しみがとても強い。

ルナ・ブランシャール

性別　女

ＣＶ：中原麻衣
（魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ：ティアナ・ランスター）

年齢　３００歳以上

誕生日　１０月１７日

身長　１６５ｃｍ

体重　４７ｋｇ

好き・得意な物（事）　流香　日影　血液

嫌い・苦手な物（事）　太陽の光　流水

能力　血液操作

武器　無し

容姿
流香と殆ど同じ容姿だが、髪の色は金。

解説
八年前に生き別れた流香の姉。
百年前に使用人も含めた大切な人を多く失い、八年前にも、流香を逃がす事が出来たが、父と母を助けられず、その事から世界に対する強い憎しみを抱いた。
世界に復讐する為、エルザ、クリス、雪奈と共にキョウと手を組む。

体を蝙蝠に変化させられる。
初めて登場した時のルナは、大人びた雰囲気を醸し出し、強気な性格だったが、実際は子供の様で、少し内気である。　プライドが高いのは間違いではない。
流香を溺愛している。

エルザ・ランディ

性別　女

ＣＶ：桑谷夏子
（魔法少女リリカルなのは：アルフ）

年齢　不明

誕生日　不明

身長　１７４ｃｍ

体重　５３ｋｇ

好き・得意な物（事）　月臣龍　料理　武術

嫌い・苦手な物（事）　史哉　龍（ドラゴン）

能力　不明

武器　接近戦が出来る武器を殆ど

容姿
緑髪のロングヘアーで、身長は女性としては高く、作中の女性の中で随一。
そして、胸の大きさも作中随一。

解説
ルナの使用人で、スタイル抜群の自称料理人な妖怪。通称エルー。
性格は恐ろしい程楽観的で、笑顔を絶やさず、ルナに忠誠を誓いつつ、優しさと厳しさを併せ持っている。
自分が認めた相手以外には、常に笑顔の仮面を被って接する。
ルナが生まれる何百年も前から流香とルナの父に使えており、もしもの時は、娘を頼むと言われる程信頼されていた。
戦闘能力も高く、素手の戦闘は勿論、剣術や棒術もでき、武術と言う武術を極めている。
龍とは幼馴染みらしく、龍もその事を否定していない。
エルザは龍に好意を抱いている。
何百年も前に史哉と出逢ったが、その時に言い寄られて以来、苦手としている。
過去に何体もの龍を殺した事から、龍殺し（ドラゴンスレイヤー）と呼ばれている。
背中に大きな切り傷がある。

クリスティーナ・シルバ

性別　女

ＣＶ：能登麻美子
（とある魔術の禁書目録：姫神秋沙）

年齢　２０歳

誕生日　７月１１日

身長　１６６ｃｍ

体重　４４ｋｇ

好き・得意な物（事）　家事全般　犬

嫌い・苦手な物（事）　汚い場所　ルナと流香に害となる者

能力　瞬間移動

武器　無し

容姿
ライトパープルのツインテール。
瞳の色は普段はブラウンだが、能力を使うと、右目は赤に、左目は青になる。

解説
ルナの使用人で専属メイド。　通称クリス。
掃除、洗濯、買い物、エルザには及ばないものの料理等、何でも出来る、万能な戦うメイドさん。

語尾に『あります』を付ける癖がある。
子供の頃、両親に捨てられ、その後ルナの父に拾われる。　その恩を返そうとして、娘であるルナと流香の専属メイドになった。
男性に対する免疫が無く、進に抱き上げられた時はもの凄く動揺した。
進を意識している。

葛城雪奈
（かつらぎゆきな）

性別　女

ＣＶ：川澄綾子
（緋弾のアリア：ジャンヌ・ダルク）

年齢　２２歳

誕生日　１月１７日

身長　１５７ｃｍ

体重　４９ｋｇ

好き・得意な物（事）　子供　育児　花

嫌い・苦手な物（事）　誰かに泣かれる事　家事

能力　氷

武器　槍

容姿

白い髪の一部を編んでいる髪形。

肌が透き通る様に白い。

解説

ルナの使用人、と言うよりも用心棒。　通称ユキ。

両親を早いうちに失い、十歳の頃にルナと流香の父親に拾われた。

恩を返したいが、家事が全く出来ず、ドジも多いので、自分に出来る事は無いかと考え、その結果、用心棒と言う答えに至った。

強くなる為にエルザに鍛えて貰った。　二人は実質、師弟関係。

子供が好きで、家事が苦手でも育児が出来る。　ルナと流香の母親が赤ん坊の流香を育てるのを手伝っていた。

ウィリアム

性別　男

ＣＶ：飯田利信（家庭教師ＲＥＢＯＲＮ！：六道骸）

年齢　５００歳以上

誕生日　不明

身長　１７８ｃｍ

体重　６４ｋｇ

好き・得意な物（事）　相手を見下す事

嫌い・苦手な物（事）　プライドを傷つけられる事　人間

能力　幻術

武器　無し

容姿

紫色の髪で長髪。
眼鏡をかけている。
体形は細い。

解説

魂や幻術を操る術師の死神。
人を見下す癖があり、それでいてプライドが高い。
総司に敗北し、プライドを傷つけられ怒り狂い、操っていた魂を全て取り込んだ。
それでも勝てず、敗北した後は死神の力を取り上げられ、生身のまま地獄に送られた。

キリク

性別　男

ＣＶ：川原慶久
（家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！：ジャッジョーロ、グロ・キシニア）

年齢　７００歳以上

誕生日　不明

身長　１８２ｃｍ

体重　５２ｋｇ

好き・得意な物（事）　創作　芸術

嫌い・苦手な物（事）　大雑把な事

能力　物体との同化

武器　無し

容姿
灰色のボサボサの髪。
体は痩せ細っている。

解説
あらゆる物体と同化出来る死神。
頭はあまり良くないが、本人は否定している。
だが慣性が凄く、芸術的な物を作るのが得意。
龍との戦いで体を真っ二つにされたが、生死は不明。

白星渚
（しらほしなぎさ）

性別　女

ＣＶ：植田佳奈
（魔法少女リリカルなのはＡ's：八神はやて）

年齢　１４歳

誕生日　６月１２日

身長　１６１ｃｍ

体重　４７ｋｇ

好き・得意な物（事）　父　母　家事　スイーツ

嫌い・苦手な物（事）　嘘を吐く事

能力　無し

武器　無し

容姿

セミロングの茶髪に花の髪飾りを付けている。
スタイルは良く、綺麗な顔立ちをしている。

解説

ヤクザの組長に拾われ、度々スリをやらされていた少女。
父は正義感の強い刑事だったが、同僚に殺された挙句、罪を被され、汚職警官と呼ばれてしまった。その事で、父親に裏切られたと思い込み、家を飛び出し、路頭に迷っていた所をヤクザの組長に拾われる。
その一年後、彪牙と出逢い、殺されそうになった所を彪牙に助けられ、仁に父親の汚名を返上して貰った事で、母親と和解した。
現在、仁の手引きもあり、彪牙と総司と同じ学校、同じクラスで学校生活を送っている。
この作品中、一番の一般人で、妖怪等の事を何一つ知らない。
彪牙に好意を抱いている。

【基本能力】

【終】

神力：Ｂ
攻撃力：Ｃ
防御力：Ｂ
コントロール：Ａ
パワー：Ｄ
スピード：ＳＳ
探知能力：Ｂ

【神力光：銀】

【キョウ】

神力：ＥＸ
攻撃力：ＳＳＳ
防御力：ＳＳ
コントロール：ＥＸ
パワー：Ｓ
スピード：Ｂ
探知能力：ＥＸ

【神力光：黒】

【ルナ・ブランシャール】

妖力：Ｓ
攻撃力：Ｂ
防御力：Ａ
コントロール：ＳＳ

パワー：Ａ
スピード：Ａ
探知能力：Ｓ

【神力光：赤】

【エルザ・ランディ】

妖力：Ａ
攻撃力：Ｓ
防御力：ＳＳ
コントロール：ＥＸ
パワー：Ｓ
スピード：Ａ
探知能力：Ｂ

【妖力光：緑】

【クリスティーナ・シルバ】

霊力：Ｂ
攻撃力：Ｅ
防御力：Ｄ
コントロール：Ｓ
パワー：Ｅ
スピード：Ｂ
探知能力：Ｂ

【霊力光：銀】

【葛城雪奈】

霊力：D
攻撃力：C
防御力：B
コントロール：B
パワー：B
スピード：B
探知能力：E

【霊力光：白銀】

【ウィリアム】

神力：B
攻撃力：C
防御力：C
コントロール：SS
パワー：C
スピード：C
探知能力：S

【神力光：紫】

【ウィリアム・暴走体】

神力：A
攻撃力：S
防御力：SS
コントロール：A
パワー：SS
スピード：A
探知能力：C

【キリク】

神力：A
攻撃力：B
防御力：S
コントロール：SSS
パワー：C
スピード：D
探知能力：F

【神力光：灰色】

【雷道仁・究極体】

妖力：Ｓ
攻撃力：Ｓ
防御力：ＳＳ
コントロール：ＳＳＳ
パワー：Ｂ
スピード：Ａ
探知能力：Ａ

【風魔正・完全体】

妖力：Ａ
攻撃力：Ｓ
防御力：Ａ
コントロール：Ａ
パワー：Ｓ
スピード：Ｓ
探知能力：ＳＳ

【白星渚】

霊力：Ｇ
攻撃力：Ｆ
防御力：Ｆ
コントロール：Ｇ
パワー：Ｅ

スピード：B
探知能力：G

【新技】

【火渡優也】

【闇空一閃（あんくういっせん）：S】

闇の力を纏った刀で斬り裂く。

【闇の炎（ダークネスレア）：不明】

闇の炎を放つ。

【闇の鎖（ダークネスレア）：不明】

闇の鎖を具現化させる。

【闇の加速（ダークネスアクセル）：不明】

限界を超えた速度で行動できる。

安全に使用できるのは、一回につき十秒で一日二回。

※これらの闇の技は強力だが、強力であれば強力な程、使用者の体に多大な負担をかける。（闇の加速（ダークネスアクセル）がいい例）。ましてや、二つの技を同時使用、例えば闇の炎（ダークネスフレア）と闇の加速（ダークネスアクセル）を合わせて使用すれば、使用者の体が間違いなく崩壊してしまう。

【水野進】

【神速（ゴッドスピード）：ＳＳ】

十秒間だけ超加速ができる。

【雷道仁】

【雷影（らいえい）：Ａ】

雷撃を連続で放つ。

【雷影（らいえい）・演舞：Ａ】

雷影（らいえい）の強化版。　威力は若干落ちるが連射性能が上がる。

【雷影(らいえい)・操(そう)：S】

雷影(らいえい)で放った雷撃で相手を囲み、一斉に攻撃する。

【雷光一閃(らいこういっせん)：SS】

雷鳴刀で突きを放つ。

【雷鳴斬：S】

雷鳴弾と要領で敵を拘束し、雷鳴刀で高速で敵を斬る。

【風魔正】

【迅風(じんぷう)：S】

刀から放った風で相手の動きを封じ、追い風で加速しながら敵に接近して斬り裂く。

【月臣真司】

【弦月(げんげつ)：A】

真空刃を放つ。

【瞬月（しゅんげつ）：A】

高速の突きを放つ。

【ルナ・ブランシャール】

【悪魔の羽音（デビルズノイズ）：A】

体の一部を蝙蝠に変え、牙や羽で切り裂く。

【悪魔の不協和音（デビルズディスコード）：S】

体を全てを蝙蝠に変え、一斉に超音波を放ち、敵の体を中から破壊する。

【エルザ・ランディ】

【昇龍（しょうりゅう）：C】

足を振り上げ、敵を蹴り上げる。

【降龍(こうりゅう)：C】

振り上げた足を、敵に向けて振り下ろす。昇龍(しょうりゅう)と組み合わせて使う場合が多い。その逆の場合もある。

【爪牙(そうが)：B】

敵に拳や蹴りを連続で叩き込め。

【双龍(そうりゅう)：B】

両手で掌低を叩き込む。

【牙(きば)：A】

両手で敵の背と腹を同時に攻撃する。

【旋尾(せんび)：A】

龍の尻尾を振るう様に、足を振るい、敵を蹴る。

【我龍（がりゅう）：S】

拳に妖力を込めて攻撃する。
威圧感で龍が見える。

【葛城雪奈】

【槍氷（そうひ）：B】

槍を振るうと同時に氷が放たれ、敵を凍らせる。

【槍氷翔（そうひしょう）：B】

氷の斬撃を飛ばす。

【死神】

【ソウルアウト：不明】

相手の魂を抜き取る。

登場人物設定7（後書き）

一つ報告が。
もうすぐで就職試験が始まるので、前の様に更新できるかわかりません。
やっぱり勉強もしないといけないので。
一応、時間を見付けて執筆します。
これからも、『黒と白の物語』を宜しくお願いします。

第８３話　月臣の休日

久し振りに難しい事は考えず、一人でゆっくり休む事ができると思って散歩していたのに、こう言う時程、会いたくない相手に会ってしまうのは何故なんだろう。

「おはようございます！　龍さん！」

元気な笑顔を振り撒きながら、俺、月臣龍の前に居るのは、俺の幼馴染みの妖怪、エルザ・ランディ。
人間と妖怪が幼馴染みなのは可笑しいだろうが、そこは秘密だ。

「こんな所で何をしてるんですか？」
「……散歩だ。　お前こそ何してるんだ？」
「龍さんを探してました」
「さようなら」

俺はエルザに背を向け、歩き出す。

「ちょっとぉ！　何処行くんですか龍さん！？」
「ワタシエイゴワカリマセン」
「私日本語で話しましたよ！？　って言うか、そのキャラなら英語わからないと駄目でしょ！」

ちっ、バレたか。

「私と居るのが嫌なのはわかりますけど、一日くらい付き合って下さいよ～！」

そう言いながらエルザは俺の腰にしがみつき、涙目で見上げてくる。
こいつのこう言う顔は苦手なんだ。

「逃げたらリュウちゃんって連呼しますよ！」
「……」

今日はゆっくり出来そうにないな。

第８３話　月臣の休日

「と言う訳でここに来た」
「どういう訳？」

現在、龍とエルザは美優の家に来ていた。
突然来訪した二人に、優也は疑問符を浮かべながら訊いてみる。

「厄介事が起こるならお前等も道連れにしようと思って」
「よし、帰れ」

玄関に指を差し、優也は龍に退出する様に促す。

「まぁまぁ、そう尖らないで下さいよ。　ユウちゃん」
「何でその呼び方知ってるんだ！？」
初対面のエルザにまでこの呼び方が知れ渡っている事に、優也は落ち込む。
「因みに誰に訊いた……？」
「仁さんです」
いつか殴る。　そう心に決める優也であった。
「龍さんはあんな言い方してますけど、嫌いにならないで下さいね。恥ずかしがり屋な子なんですよ。　本当は友達になりたくてしょうがないんですよ」
「お前は俺のお袋か？」
「あっ！　お腹空いてません？　私、手料理持って来たんです！口に合うかわかりませんが、良ければどうぞ！」
何処に隠していたのか、エルザは重箱を取り出し、蓋を開けてテーブルに並べていく。
「おおおおおおお！！！！」
その重箱の中身を見て、美優は眼を輝かし、嬉しそうにする。
「どんだけ食い意地張ってるんだ……」
「本当に良いんですか？　これをタダで……」
龍が美優の食い意地に呆れる中、優花はエルザに訊く。

これだけの御馳走をタダで貰うなど、優花には気が引けて仕方なかった。

「前の戦いで私達は貴女達に迷惑をかけました。　これはそのお詫びです」

死神との戦いの時、エルザはルナ達と共に優也達と戦った。
優也達はエルザと面識が無かったが、エルザは少しでもお詫びをしたかった。

「でも……」
「それにこれは、仲直りの切っ掛けでもあります」

エルザは人懐っこい笑顔を優花に向ける。
その笑顔に、優花も自然に笑顔になる。

「ねぇねぇ！　もう食べても良い！？」
「はい、勿論！」
「いただきます！」

エルザからの了承を受けると、美優は料理を口に運んだ。

（こいつだけは餌付けされてるみたいだな）

その光景に、龍は心の中で呟いた。

「美味しい！！　美味しすぎる！？」

料理を食べた瞬間、美優は立ち上がる。
その表情は、今までで一番嬉しそうに表情だった。

「二人も食べた方が良いよ！！　絶対に！！」
「そ、そんなに……？」

力説する美優に引き気味の優也と優花は、取りあえず料理を口にしてみた。

「お、美味しい……！」
「だよね！　優也より美味しいよ！」

優花は思わず呟く。
美優の言う通り、エルザの手料理は、優也の手料理よりも美味しかった。

「……」
「あの～、優也さん？」

一人、無言で俯く優也に、エルザが恐る恐る話しかける。
もしかして、優也の口に合わなかったのか、或いは優也のプライドを傷付けてしまったのではないか、とエルザは思ったが、

「弟子にして下さい！」

その心配は杞憂に終わった。
エルザの両手を握り、優也は尊敬の眼差しでエルザを見ていた。

数時間後。　龍とエルザは、通行人が犇(ひし)めく街中を二人で歩いていた。

「いやぁ～、完璧になつかれちゃいましたよ～」

あの後優也に、料理の指導をして欲しいとお願いされたエルザは、無下にはできず、優也に料理の指導をする事にした。

「嫌じゃ無かったんだろ」
「えぇ」

エルザも教えている内に楽しくなり、熱が入った指導になっていた。

「やっぱり闇奈さんですね」

キョウが優也と、闇奈と言う人物を同一視していた様に、エルザも二人を同一視していた。
闇奈は、優也の先祖と言うが結局は、真実は、本人に出逢った人物しかわからない。

「いや、優也は優也だ。　闇奈じゃない……」

だが、龍は二人を同一視しなかった。

「何やかんやで、優也さん達の事を大事にしてるんですね。　少し妬けます」
「何言っ……」
「あぁぁぁ！　龍さん龍さん！　あそこ行きましょう！」

龍の言葉を遮ると、エルザは龍の手を握りながら、人混みを抜けていく。
人の話を訊けよ。　そう思いながらも、龍はエルザの手を握り返していた。

「おぉ！　ここがゲーセンですか！」

電子機器が並ぶ室内で、エルザは眼を輝かせる。

「初めてなのか？」
「はい。　前から一度来てみたかったんですよね！」

眼を輝かせながら、エルザは辺りを見渡す。
そんなエルザに溜め息を吐きながら、龍は何処か優しげな表情を浮かべていた。

「だあぁぁぁ！！　また敗けたぁ！？」
「しゃあっ！　十連勝！！」
「水野お前、ゲームの腕は天才的に凄いな」

聞き覚えのあり過ぎる声が、龍の耳に届く。　しかも一人は訊いた事のある名前。
油が切れたような動きで、龍は声のする方へ首を動かす。
そこには、ゲーム機の前で、椅子に座って頭を抱えた正と、その様子を、相変わらず無表情で見ている仁が居た。

恐らく、その向こう側には進が居るだろう。

（マズイ……。今あいつ等に……特に仁に見付かったら何を言われるか……）

エルザと二人きりの所を、もし仁に見られた、また何を言われるかわかったもんじゃない。

その事を怖れた龍は、エルザを連れて、急いで逃げようとしたが、

「あっ！　仁さんじゃないですか！」

「あぁ、エルーか」

思わぬ伏兵に邪魔された。

因みに、この間の紗理奈の薬の騒動で、仁とエルザは随分と仲が良くなった。

こうなったら自分一人だけでも逃げようとするが、

「何をしているんだ？」

「龍さんとデート中です」

これまた妨害が入った。

「ほぅデートか。　楽しそうな事をしてるな、リュ・ウ・ちゃ・ん」

もう逃げられない。　そう悟った龍は、観念して仁達の元へ向かう事にした。

「言っておくがデートじゃない」

「彼氏はこう言ってやがりますが？」

「酷い！　私とは遊びだったのね！」

来て早々カウンターパンチを喰らった。
仁は人としては好感が持て、信頼できるが、性格が苦手だ。
何か面白い事があれば、とことん楽しもうとする。　それは、龍も同じなので、良くわかる。
ただ龍と違うのは、仁は何を言われても顔色一つ変えず、すぐに言い返してくる。　タイプが似ていても、言い合いではまず勝てない。
龍が唯一敵にしたくない相手だ。　味方なら頼もしいが。
それに加え、エルザまで仁に加勢してしまい、龍の勝率は完全に消えてしまった。

「……何でここに居るんだ？」

駄目元で話を変えようとする。

「正と息抜きだ。　そしたら水野に会ってな。　それでこんな状況だ」

意外にすんなり話を変えられた。
仁はしつこい男では無いことに、龍は助かった。

「進！　もっかいだ！」
「上等だ！　また負かしてやる！」

すると、正が再びお金を投入し、進にリベンジしていた。

「エルー」
「何ですか？」

仁はエルザを呼ぶと、耳打ちをする。
耳打ちが終わると、二人は面白そうな表情をしていた。

（何か企んでいるな……）

調度、二人の表情を見ていた龍は、何か悪巧みを企てている事に気付いたが、とばっちりは嫌なので何も言わなかった。
次に起きる出来事までは。

「そんなに苦戦してるんですかぁ？」
「「！！」」

ゲームをプレイ中の正の首に腕を回し、後ろから抱き付いたのだ。
龍は何故か石化し、正は背中に当たる柔らかい感触と、エルザの耳元で呟く色っぽい声に赤面している。
その正の反応に、仁は面白がっていた。
仁は正のこの反応を見たいが為、エルザに協力して貰ったのだ。
勿論、エルザはノリノリだ。

（せせせ背中に、おおおんにゃのきょ特有の柔らきゃいきゃんしょくがぁぁぁぁぁ！！！！）

脳内でも噛まんでしまう程、正はショート寸前で、頭から煙が見えていた。

「勝てる様に手取り足取り、お姉さんが教えてあげ、きゃっ！！」

調子に乗ったエルザは、トドメを刺そうとしたが、龍に後ろに引っ張られ、正から離された。

「りゅ、龍さ……」
「このムッツリスケベがぁ！！」
「ぐほぉ！！」
「何だぁぁぁぁぁ！？」

エルザを後ろに隠し、龍は叫びながら、正を殴り飛ばす。
余談だが、殴り飛ばされた正が、ゲーム機を貫き、反対側にいた進は、完全に巻き込まれた。

「行くぞ」
「え、は、はい……」

この騒動で静まっている中、龍はエルザを連れて出ていった。

「これは……まさかの発見だな」

ただの悪戯が、思いもよらぬ事実を発見した事に、少なからず驚く仁だった。

人通りが一切無い道を、龍が早足で歩き、それをエルザが追い掛けていた。

「ちょっ、ちょっと待ってくださいよ！　龍さん！」

早足所か、競歩に出られるのではないのかと思う程の早歩きに、エ

ルザは小走りで追い掛ける。

「ふぐぅ！」

突然止まった龍を避ける事ができず、エルザは龍の大きな背中に顔をぶつけてしまう。

「あいたた……」

「……するな」

「え？」

鼻の痛みに耐えていて、龍の呟きに気付かなかったが、今度はエルザに振り返り、龍は言った。

「他の男にああ言う事をするな！！」

今日一番の大きく、強い声。

その声にエルザは驚くと同時に、頬を真っ赤に染め、龍に背を向ける。

「ちっ！　本当にお前が相手だと調子が狂う！」

悪態を吐きながら、龍もエルザに背を向ける。

二人の間に、長い沈黙が訪れる。

互いが互いに、何を話せば良いかわからないのだ。

「……エルザ」

「な、何ですか？」

背中を向け合いながら、龍から話しかける。

「背中……もう、大丈夫か？」
「……はい」
表情を暗くしながら龍は訊き、エルザも表情を暗くしながら答える。
「この傷は私にとって名誉の傷です。　貴方が気にする様な事じゃないです」
自分の肩の辺りに手を添え、エルザは言う。
「俺があいつを殺していれば、お前はそんな傷を負わずに、こんな事にもならなかった」
龍は横目で、エルザの背中を見る。
服に隠れているが、そこには大きな傷が残っている。　消える事のない傷が。
それが龍にとって、エルザに顔向けできない理由の一つだった。
「全てはあいつを止められなかった俺の責任だ」
エルザへの罪滅ぼし、そして、自分自身の目的の為、龍はある男を追い続けていた。
「ねぇ、龍さん。もうやめましょうよ。貴方が普通じゃ無くなっても……私は！」
「エルザ。　俺は……普通の人間として死にたいんだ」
エルザは何も言えなくなる。
それが、長年の龍の願いなのだから。

「だからまだ、俺はお前の気持ちに応える事は……」
「良いんです！　それは……私達二人の約束ですから！」
龍の言葉を遮り、振り替えってエルザは笑顔を向ける。
「……それじゃあ私……帰りますね！」
エルザは龍とは逆の方向へ走り出す。
龍は、振り返らない。
龍から見えなくなった場所でエルザはしゃがみこみ、涙を流していた。
「何を……期待してたんだろ、私……」
龍はある男を殺す為に戦っている。　だからエルザは、龍を止めようとしていた。
龍とその男には、戦って欲しくなかったからだ。
そしてこの世界で、優也達と居る時の龍は、何処か楽しそうにしていた。
だから、説得できると思っていた。　だができなかった。
それ程、龍の決意は硬く、どれだけ辛い出来事も覚悟していた。
もう、エルザに龍は止められない。

「今でも……愛してますよ……龍さん」

ただ龍を想うしか、エルザにはできなかった。

「ごめん、エルザ……」

エルザが立ち去った後も、龍はその場に残っていた。

エルザが自分を想ってくれているのは知っている。自分がエルザを想っているのもわかっている。

自分の気持ちを無視してでも、エルザを傷付けても、龍はある男を殺さなければならない。

運命を変え、自分自身を取り戻す為に。

「今度こそお前を殺してやる。　月臣影次（つきおみえいじ）！」

例えどれ程の犠牲を払ってでも。

第８３話　月臣の休日（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「竜王の白翼さんから質問だ。　ありがとう。『美優と優花に。魔女の薬にていくら女体化したとは言え、大好きな優也とお風呂に入った感想は？』」

美優・優花

「……プシュ～／／／／／／」

闇夜

「今更ショートした！？」

仁

「予想通りだな。　次は、烈火竜さんからだ。　ありがとう。『雪奈やエルザは家に帰ったら、家で何をやっているんですか？』」

雪奈

「私は読書や音楽を聴いたり、武器の手入れをしている」

エルザ

「皆さんの料理を作ったり、家で出来る程度で鍛錬してます」

仁

「質問は次で最後だ。　ＯＯＯＴＧＬＳＴＳＴＰＢさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】の冷司からだ。　ありがとう。『流香、最近女子三人がコスプレをしたいと言っている。一番似合うコスプレは何だと思う？』だそうだ」

流香

「そうねぇ。　私の考えだけど、凍華はバニーガール、雷美はゴスロリ、桜はメイドかナースね」

仁

「霧藤なら喜びそうだな」

闇夜

「次回は遂に謎だらけの龍の過去話です」

仁

「是非見てくれ」

次回

第８４話　過去編３【月の呪い】

龍

「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第８４話　過去編３【月の呪い】（前書き）

今回はグダグダです。

第８４話　過去編３【月の呪い】

嬉しさ、楽しさ、悲しさ、怒り、昔の俺は、そんな様々な感情が、今の俺より豊かだった。
少し異色な一族だったけど、家族が居て、友達が居て、エルザが居て、満足とまではいかなくても、楽しい人生だった。
あの日、兄さんが、月臣影次が欲望を暴走させるまでは。
これは俺、月臣龍の、千年前の物語。

第８４話　過去編３【月の呪い】

月臣一族。
多くの特殊な能力を宿した武器や道具を生み出せる一族。　だが、個人の戦闘能力は普通の人間と殆ど変わらない。　それでいて、一族の掟を破った者は、身内が殺さなければならない。　その身内は、掟を破った者を殺すまで解けない、ある呪いをかけられてしまう。
と言っても、この頃の俺は詳しい事は知らなかった。　知るつもりも無かった。
俺の家族が掟を破るなんて事を、する筈が無いと思っていたからだ。

そう、同族殺しなんて。

「龍、龍！　起きろ～！」
「ぅん、後五時間……」
「昼まで寝るつもりか？」

毎日訊いている声に、俺は反抗する。
それはそうだ。　眠いのだから。

「ほらさっさと起きろ！」
「うおぉぉ！？」

布団を剥ぎ取られた俺は、畳の上を転がり、勢い余って壁に頭をぶつけてしまった。
痛い。　物凄く痛い。

「痛いだろうが、馬鹿兄さん！」
「自業自得だろ」

俺の眠りを妨げたこの男は、月臣影次（つきおみえいじ）。　俺と同じ血の流れている実の兄だ。
兄弟なんだが、髪の色以外は全然似てない。
性格は落ち着きのない俺と違い、冷静沈着。　顔も似てない。
しかも、才能の無い俺とは違い、兄さんは才能に満ち溢れている。
月臣一族は特殊な武器や道具を造る事ができる。　でも俺にはその才能が無い。　だが兄さんは、俺と三つしか変わらないのに、それ

はもう、錬金術師の如く造るあげている。
しかも喧嘩も強い。
俺も喧嘩は強い方だが、兄弟喧嘩の勝率は、悲しいが二割だ。
兄さん方が俺よりモテるし……でも、身長は俺の方が高かったりする。
身長が敗けてて悔しがる兄さんを見るのは、凄い優越感だ。
これが俗に言う、どえすって言う奴なのか？
確かに、俺は誰かが悔しがってたりするのを見るのは好きだしな。
取りあえず、西洋の発音は難しい。

「何ブツブツ言ってる？　早く来ないとお前の飯も食うぞ」
「ちょっ！　行く行く！　だから待っててって兄さん！」

俺より才能があって、強い兄さん。　そりゃあ、羨ましい時もあるけど、そんな兄さんを尊敬してて、好きだった。

俺は風呂敷片手に、山の中を歩いていた。
この山には、俺の幼馴染みが居るからだ。

「あっ！　龍さん！」

木の上から、俺を呼ぶ声が聞こえ、上を見てみると、木の上に、緑の髪をした少女が立っていた。

「今日も持ってきてやったぞ、エルー」

木の上に居る少女こそ、俺の幼馴染み、エルザ・ランディ。　通称エルー。
幼馴染みと言っても、エルーは龍の妖怪らしい。　しかも、龍神。
詳しくは知らないけど、龍神をやるのが嫌になって逃げ出してきたらしい。
こんな女の子が龍神だなんて言っても、何か信じる気になれないけど。
そして、今より幼かった頃の俺と出逢って以来、俺達は良く会う様になった。

「今日はどんな料理ですか～！？」

木から飛び降り、エルーは眼を輝かせ、俺に詰め寄る。
どんだけ食い意地張ってんだよ。
俺の風呂敷の中には、お母さんが作ってくれた料理がある。
これを、俺はいつもエルーに持ってきてやっている。
俺の為にお母さんが作ってくれてる料理を、他の奴にあげるのは引け目を感じるけど、こいつ見た目ただの女の子だからな。

「それじゃあ早速、いただきま～す！」

いつの間に俺の手から取ったのか、エルーは岩の上に座り、料理にがっついていた。
そんなに腹減ってたのか。

「そう言えば龍さん、私の名前ちゃんと言える様になりましたね」
「まぁな」

そりゃあ、何年も一緒に居るからな。　幼馴染みナメんなよ。

「それはそうと、そろそろ龍さんのご家族にご挨拶しませんとね」
「挨拶？」
「はい。　龍さんのお嫁さんとして！」
エルーの言葉に思わず転けそうになる。
「お、お前冗談だろ！？」
「はい、冗談です」
今度こそずっ転けた。　それはもう盛大に。
内心本気で嬉しかった俺の気持ちを返せ。　あっ、ロリコン……だっけ？　それじゃあないからな！
「ナイスリアクションですよ龍さん！」
「新しい外来語を使うな……」
エルーは俺の知らない外来語を言う度、俺に教えようとしてくる。
その度に覚えなきゃならない俺の気持ちも考えてくれよな。
発音難しいのに。
「ごちそうさまです！」
「早っ」
まぁ、こいつの楽しそうな顔を見れたらそれで良いか。

月が真っ暗な空に写るほど、俺はエルーと話し込んでいた。
予想以上に遅くなってしまった俺は、自分の家なのに忍び込もうとしていた。

「何で自分の家なのに、忍び込まないといけないんだよ……」

でも、お父さんもお母さんも怖いんだよな。

「忍び込みたくないなら、もっと早く帰ってこい。　もう十二歳だろ」
「うおぉぉぉ!?」

お化けか!?　お化けなのか!?
冷や汗を流しながら慌てて振り向いた先には、

「夜なんだからあまり騒ぐな」

兄さんが居た。

「お、驚かすなよ!?」
「勝手に驚いたのはお前だろ」

忍び込もうとしてる時に、後ろから話し掛けられたら誰でも驚くだろ！

「つーか、兄さんこそ何してるんだよ……」

まさか、俺を見張っていたとか!?

「帰るのが遅くなってな。　俺も忍び込もうとしてた」
「う、嘘じゃないよな……？」
「そんな訳あるか。　ほら、一緒に父さんと母さんの火の粉から逃げよう」

そう言って、兄さんは俺の隣に立ち、肩を叩く。
わかっている。　どうせ帰るのが遅くなったなんて嘘だ。
いつも理由を付けて俺と一緒に損をする。
そして俺は、兄さんのその優しさに甘えてしまう。
たまには恩返ししないとな。

「なぁ龍……一つ良いか？」
「ん？　何？」

兄さんが俺に質問なんて珍しい。　普段はあんまり訊いてこないのに。
何か頼られてるみたいで良い気分だ。

「お前は、今の人生に満たされているか？」
「は？　何だよそれ」
「良いから答えてみろ」

訳がわからない質問だけど、一応真面目に答えるか。

「俺は満足だよ。　普通の人間として、普通に生きて普通に天寿を全(まっと)うして。　俺は普通に生きていけたら、それだけで俺は幸せだよ」
「……そうか」

俺の答えにどう感じたのだろうか、家に向かって歩いていく。
何か言うよこら。

心の中で悪態を吐いていて気付けなかった。

「やはり全員低俗か……」

兄さんの心の闇に。

翌日の昼、俺は再びエルーの元へ向かっていた。
結局昨日、兄さんと一緒にこってり怒られた。
その罰として今日は飯は作ってくれなかった。　まぁ、昼飯は家で食べてきたけどな。

「……昨日の兄さん、どうしたんだろう？」

昨晩の兄さんの質問は、やっぱり可笑しかった。
意味がわからない。　あのタイミングでする質問なのか。　兄さんがする様な質問じゃない。
考えてみれば可笑しな事が多くある。
俺も兄さんみたいに頭が良かったら良かったのにな。

「龍さん！！」
「エルー？」

人が悩み事をしてる時に騒々しい奴だな。　何かあったか？
ああそうか。　今日の分の飯だな。　残念だが今日は無い。
お前も道連れだ。

「楽しみにしてた所悪いが、今日は手ぶらだ。　ざん……」
「大丈夫ですか！？　怪我は有りませんか！？」
血相を変えて、迫るエルザに、異変を感じる。
これだけ慌てているエルザを見るのは、初めてだったから。
「落ち着けって！　俺は大丈夫だよ」
エルザを落ち着かせる為、出来るだけ冷静に、優しく、エルザに言う。
「あ、す、すみません……」
俺の言葉に落ち着きを取り戻せたのか、エルザは一歩下がる。
「それで、何かあったのか？」
さっきの取り乱し様は尋常じゃなかった。　だから俺は、言い様の無い胸騒ぎを感じていた。
「それが……龍さんの居た里の気が、凄い勢いで消えていったから……もしかしたらと思って……」
気が、消えた？
それって……まさか！
「龍さん！？」
気付いた時には俺は走り出していた。　エルザの声も無視して。

エルザの言う事が正しければ、俺の考えが正しければ、今頃里の人達は皆、誰かに殺されている。

肩で息をしながら、俺は道の真ん中で立ち止まる。

「何だよ……何とも無ぇじゃねぇか」

辺り一面、山に向かう前と変わらない。

俺の考えも、エルザの感覚も、的外れだったらしい。

だってそうだ。

多くの気が消えたって事は、多くの命が消えたって事だ。　なのに、死体どころか、血の痕すらどこも無いんだ。

「ったく！　エルザに騙された！」

これはこっぴどく叱ってやらないと思って、エルザの元に戻ろうとした俺だったけど、何かが可笑しい事に気付いた。

何かが足りない。

「……静かすぎる」

まだ昼だぞ。　いつもなら子供が走り回ったり、店を出して賑わっ

ているのに。
何で……。

「……そうか」

誰も居ないんだ。

外には勿論、家の中にも。　子供も、大人も、お年寄りも、誰一人。
まるで、俺一人が取り残された様な。

「ど、どうなってんだよ……」

異様な里の雰囲気に、知らず知らずの内に、声が震えていた。
思わず逃げそうになった俺の耳に、小さくだけど、誰かの声が聞こえた。

「だ、誰か居るのか！？」

俺はすがる思いで声が聞こえる場所へ走る。
誰でも良いから、この異様な雰囲気を断ち切って欲しかった。
でも、その願いは叶わず、俺は絶望のどん底に叩き落とされる事になる。

「何、してんだよ……」

何故なら、俺の、たった一人の俺の兄さんが、恐怖で表情を歪めた女の子の首を掴み、今にも殺そうとしていたからだ。

「兄さん！！」
「居ないと思ったら、お前、何処に行っていたんだ？」
可笑しい。　こんなの兄さんじゃない。　兄さんは人を殺す様な人じゃない。　こんな冷めた眼をする様な人じゃない。　兄さんは……
……影を手足の様に操れる人じゃない。
「っ！　俺の質問に答えろよ！　何をしてんだ！！」
「何？　何って、直に見ないとわからないか？」
「い、嫌アアアアアアアアア！！！！」
女の子が悲鳴をあげた瞬間、女の子の足下の影が鰐の口みたいに変化して、そして、
「ギャアアアアアアアアアアア！！！！」
女の子の腹から下を丸呑みにした。
あの鋭く尖った牙が、女の子の腹に刺さって、女の子は悲鳴をあげながら、俺に手を伸ばし、助けを求めていた。
「痛いよ！　助けて！　助けて！　助けて！！」
「っ！」
助けないと、だけど足が動かない。　怖い、怖い、怖い、怖い怖い怖い！！
「たすけっ……」
骨を砕き、肉を裂き喰う音が聞こえる。
俺に助けを求めていた女の子は、命ごと、影に呑み込まれてしまった。

「う、げほっ、うげぇ！」

影は兄さんの足下に帰り、俺への脅威は去った。
だけど、胸から込み上げる熱いものに我慢できず、俺は嘔吐してしまった。
何より、あの助けを求める手を掴めなかった事への罪悪感が、俺の心を支配をする。

「なん、で……こんな事を……」

何とか絞り出した言葉も、聞こえるか怪しい程の声だった。

「欲しかったんだ。　力が」

兄さんには俺の声が聞こえていた。
だけど、俺には兄さんの声を断片的にしか聞き取れない。

「誰よりも強くありたい。　だから力が欲しい。　だが、こんな錬金術師の様な一族では、俺の欲望は満たされない。うんざりしていたんだよ、こんな人生に」

ああ、だから昨日あんな事を訊いたんだな。

「だからこの力を手に入れた。　“精霊石”に封じられていた“影”の力を」

相性さえ良ければ誰でも力を手に入れられる“精霊石”か。　そんな物に手を出したから兄さんは、こんな、いや……。

「この“影”の力は俺の欲望と同じだ。　生命を取り込めば取り込む程、力が手に入る。　だがまだ足りない！」

兄さんがこうなったのは俺の責任だ。

「俺はもっと力を手にする。　先ずはこの里にある力を全て手に入れる。　だから」

昨日、俺が兄さんを止められたかも知れないんだ。　だから、これは俺の責任だ。

「お前も俺の欲望の礎となれ」

鞭の様に伸びた影が、俺に向かって振り下ろされる。
躱せない。　いや、躱さない。
兄さんの力になれるなら、それも良いかもな。

「駄目ぇ！！」

視界に緑と赤が写る。
緑は俺の好きな色だ。　あいつの髪と同じだから。　じゃあこの視界に写っている緑は一体……。

「良かった、無事みたいですね……」

良く見れば、緑はいつも会っている女の子。
なら赤は？　それは、わかっている。　血だ。　だけど俺の血じゃない。
ここに来て、やっと脳が働いてきた。
緑の女の子はエルーだ。そして、この赤い血は、俺を庇って傷付い

た、

エルーの血。

エルーの体が、俺の向かって倒れ込む。

「え、エルー!?」

「えへへ……龍さんを守れ、て……良かった、です……」

エルーを抱き止めて、腕を背中に回したら、手にヌルッとした感触がした。

恐る恐る手を見てみると、俺の手は真っ赤に染まっていた。

地面も真っ赤に染め、このままでは間違いなく致死量分は流れてしまう。

「その娘、お前の知り合いか？　中々の力を秘めてるな」

影を操りながら、兄さんが近付いてくる。

（マズイ！）

兄さんは俺だけじゃなく、エルーまで狙っている！

気付いた時には俺は、エルーを抱き抱えて走り出していた。

とにかく血を止めないと。　どれだけ走ったかはわからなかったけど、俺は自宅に駆け込んでいた。

家の中も誰の気配も無い。　お父さんもお母さんも、兄さんの影の犠牲になったのか。

「エルー！　しっかりしろ！　今血を止めるからな！」
「だ、大丈夫ですよ……。　ようか、いですから……これくらい、じゃ死にません……」
「良いから任せろ！」

畳にエルーを俯せに寝かせた俺は、エルーの服の背中の部分を破る。
初めて見るエルーの綺麗な背中に、大きな切り傷があった。
切り傷からは、未だに血が流れていた。
血を止める為、服の上半身の部分を破り、傷に当てる。

「つぅ……。　はぁはぁ、傷が無かったら……こう、言うの……ドキドキしますね」
「ふざける場合じゃないだろ！」

でも、ふざけられるだけの元気があるならまだ安心だ。　だけどちゃんと止血しないと。
何か無いかと捜していると、

「鬼ごっこは終わりか？」

兄さんがやって来た。
こっちは力の無い俺と、怪我を負ったエルー。　今度こそ逃げられない。
何か、何かこの状況を打開できる物は無いのか。　エルーを助けられる何かは！
兄さんと同じく、力を求めた俺の手に、何か固い物が当たる。
俺はその何かを眼にする。　俺の手に当たったのは無色透明で、中に“無”と彫られた石。石の横には、小さな鎖に小さな大剣を模した金属の飾りが付いている、腕輪の様な物が落ちていた。
手当たり次第に捜していたから、たまたま散乱したのだろう。

そして気付いた。　無色透明の石、これはお母さんが造った精霊石。
腕輪はお父さんが造った物だと。
家にあるならそうに違いない。　兄さんが造った物なら、今頃兄さんの物になっている筈だから。

これを使えばエルーを守れるのか？

いや、この精霊石の能力がわからないし、俺と相性が良いかすらわからない。　武器だって、どう使うかわからない。　見た目はただの装飾品だ。

「にげ、て……」

今にも気を失ってしまいそうな癖に、エルーは俺を逃がそうとしている。
馬鹿だな。　お前も、俺も。

「俺は逃げないぞ。　エルー……お前は俺が守ってやる！」

精霊石と鎖の装飾品を手にする。
今の俺に迷いなんて無い。

エルーを守るんだ。

精霊石が強い光を放ち、辺り一面銀色に染める。

「うっ！」
「これは……！」

恐怖が、悲しいが、怒りが、憎しみが、感情が俺の中から消えていく。
そうか、これがこの精霊石の力。

“無”の力か。

「くっ！！」

馴れ親しんだ俺達の家が、一気に半壊する。
“無”の力を手にした瞬間、頭にこの装飾品の使い方が頭に流れ込んで来た。恐らく、“無”の力を使う為に造られたんだろうな。
感謝するぞ、親父、お袋。
にしても思った以上の威力だな。“蒼月（そうげつ）”。
今の今まで脅威的な存在でしかなかった影次に傷を付けられるとはな。

「成る程、無の力か。　相手にするのは厄介だな」
「逃げるのか？」

逃がすつもりはない。　今ここでこいつは殺す。　でなければ、犠牲者が増えるだけだ。

「逃げる？　馬鹿言うな。　見逃してやるんだ」
「何を……ッ！」

体が動かない！　何だ、これは！？

「月臣の掟は知っているだろう？　掟を破った者は身内が処分する。そしてその身内は、裏切り者を処分するまで消えない呪いをかけられる」

意識が少しずつ薄れていく。　成る程、精霊石にそう言う細工がされていたんだな。

「無の力なんて持ったお前を喰らったら、何が起こるかわからない。だから喰う必要は無い」

影が影次の体にまとわりついていく。
逃げられる。
くそ、こんな時に呪いとは。

「龍、俺を殺したいなら好きにしろ。　その代わり、お前は何度も殺してやる」

その言葉を最後に、俺は意識を失った。

「龍さん、龍さん！」

次に見たのは、今にも泣きそうなエルザ（・・・）だった。

「俺は……」
「大丈夫なんですか龍さん！　その体！」「体？」
ああこれか。
刺青の様な痣が俺の体に刻まれている事を言っているんだろう。
だが、今のところは異常は無い。
何故なら、

「安心しろ。　これは俺が死んだら効果を発揮する呪いだ」
「の、呪い……？」
「ああ、月臣影次を殺すまで転生を繰り返す、な」
だから影次は俺を殺さなかった。　殺した所で生き返るからな。

「本当、俺にとっては最悪な呪いだ」
影次も、月臣と言う一族も、俺の願いを粉々に打ち砕きやがった。

「エルザ」
「は、はい！」
「傷の具合はどうだ？」
俺のせいで負った傷だ。　妖怪でも、完全に傷痕が消えるとは思えない。

「まだ痛みますが、もう血は止まりましたし、大丈夫ですよ！」
「エルザ、俺に気を遣うな。　その傷は俺のせいだ」
愛した人を守れずに、傷付けてしまったのだから。

「俺はこれから呪いを解く為に影次を殺しに行く。　お前はもう行け」

「な、何でそんな危険を犯す様な事を……。　呪いって言ってもただ何度も転生を繰り返すだけなんでしょ！？　それくらいなら！」

「わかってないな……」

生前と全く同じで、何度でも蘇る。　そんなもの、俺にとって最悪以外の何物でもない。

「俺は普通の人間として死にたいんだ。　この力も、何度も蘇る体も必要ない！」

力を求めるのが影次の欲望なら、普通の人間で有り続ける事が俺の欲望なんだ。

「俺の事はもう忘れろ。お前はお前の世界に……」

言い終わる前に、俺はエルザに抱き付かれた。　振りほどこうと思えば出来たのに、そんな気が起きなかった。

「私は、過去に仲間を殺しているんです……」

そうか、頑なに過去の話をしなかったのは、そう言う事だったのか。

「龍神になるのが嫌で、仲間を見捨てて逃げてきました。　でも、彼等は私を見逃そうとしなかった。　だから、殺してしまったんです。　追手の龍達を……」

こいつにもそんな過去があったのか。　それなのに俺は、何もわかってやれなかった。

「何度も死のうと思いました。　そんな時に……貴方と出会ったんです」

六年前か。　死にそうな顔をしてるエルザに出会ったのは。

「唯一、貴方だけが私に笑いかけてくれました。　それが嬉しくて仕方なかった。　誰も私と言う存在を見てくれなかったから」

龍の神としてしか見られなかった。　こいつに取っては何よりも辛いだろうな。　今の俺と同じだ。

「その時から、一時も貴方の事を忘れずに、貴方を想い続けていたのに、忘れられる筈がないじゃないですか！」

無の力。　それも名ばかりだな。　俺の感情を無にしたくても、無に出来ない。

こんなに真っ直ぐな気持ちを向けられて、突き放すなんて出来なかった。

「！」

気付けば俺はエルザに口付けをしていた。

俺も、エルザも、お互いを確かめる様に、長い長い口付け。

何時間も続いた様なその時間も、終わりを告げる。　名残惜しいが、唇を離す。

「いつか、いつか必ず、あいつから俺自身を取り戻す。　だから待っていてくれ。　月臣龍として、お前の元に帰るその日まで」

これはエルザとの約束と同時に、俺の覚悟だ。
必ず、本当の自分自身を取り戻し、エルザの元へ帰る為の。

「愛してる」
「私もっ……！」

背を向け、泣きじゃくるエルザをその場に残し、俺は立ち去った。
それから千年間、俺はエルザとは出会わなかった。

それからと言うもの、転生すれば影次を捜し、影次を見付ければその度、戦いを挑んだ。　その繰り返しだった。
その度に俺は殺される。
旅の途中で出会ったある神の助力で、一つの世界だけではなく、多くの世界を回った。
特殊な能力を持つ道具を持っている影次なら、次元をも越えられるからだ。
そうして俺は少しずつ力を付けていったが、影次はそれ以上に力を付けていた。　また多くの命を喰らったんだ。
このままでは、先に影次の寿命が来てしまうのではないのかと危惧したが、影次は命を喰らうことで、寿命を伸ばし、若さを保つ事が出来ていた。　二百年経っても、あいつの姿が変わらなかったから知れた事だ。　まぁその気になれば、不老不死になる薬でも作れる様な奴だから、奴が寿命で死ぬ心配は無い。　奴は俺が殺さなければ意味がない。
だが、何度挑んでも、何度転生しても、影次に殺され、六百年が経

った今では、居場所さえわからなくなってしまった。
影次を殺す為に旅を始めて七百年が経った頃、とある世界で彼女に出会った。闇の力を身に宿した、地面に届きそうな漆黒の髪に、ルビーの様な紅い瞳の少女。
闇を宿しているとは思えない程、心に光を宿していた彼女、火渡闇奈に。

「立派だよ君は。　復讐なんて考えず、自分自身を取り戻す為、愛する人との約束の為に戦える。　本当に立派」

つい口が滑ってしまった。　ちょっと知り合っただけでここまで話してしまうとは。

「心身ともに素晴らしい物を持っている。　覚悟も決意も揺るがない。　でもそんな強い君にも、足りない物が一つだけある」

何だ？
俺の問いに闇奈は言った。

「仲間だよ。　君と共に戦ってくれる人」

それこそ願い下げだ。　仲間なんて足手まといだ。
口ではそう言った俺だが、心の奥底では、大切な人を失う事を怖れている俺がいた。

「意外に、私の子孫が君の仲間になるかもね」

それまで俺は転生し続けろって言ってるのか？

「ごめんごめん。　だからそんなに睨まないで。　でもね、私の勘

は良く当たるんだよ。　その頃にはそのエルザって人とも再会できるかもね」

その勘が当たらない事を祈る。
そう言う俺に、闇奈は微笑みを向ける。

「君には私の闇の加護があるからね。　それを忘れない様に」

闇の加護は不安しか残らないぞ？

「闇は破壊の象徴であり、創造の象徴でもある。　だから大丈夫」
「闇奈ぁ！　そろそろ行くぞ！」

長身の白髪の男が、闇奈を呼ぶ。　その横には、煙草を吸った、背中辺りまで伸ばした金髪の女が立っていた。

「ごめん、凛！　刀次！　今行く！　それじゃあ龍！　私達の子孫に宜しくね！」

そう言い残し、闇奈は二人の元へ走っていった。
それまで俺が転生を繰り返すのは確定なのか？
それから三百年。　二十回以上の転生をした頃、闇奈の勘は見事的中した。
俺は闇奈達の子孫に出会い、そしてエルザと再会した。
ここまで来たら予知能力じゃないのか？
そう思いつつ、俺は今のこの日常を楽しんでいる。　今まで以上に。
俺はどうしたんだろうな？　俺自身にもわからない。
普通に戻るか、戦いを続けるあいつ等との日常を取るか。
俺にはまだわからない。

第８４話　過去編３【月の呪い】（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁
「初めは烈火竜さんからの質問だ。　ありがとう。　『彪牙がやっているアルバイトは何ですか？』」

彪牙
「工場で力仕事だぜ」

仁
「力なら敗けないからな。　次は、竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の美莉からだ。　ありがとう。　『仁に質問。最近のブームは？』最近はドＳって奴にハマってきたな」

龍
（悪寒が！）

仁
「次はＯＯＯＴＧＬＳＴＳＴＰＢさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】の冷司からだ。　ありがとう。　『再び俺から。熱い食べ物と冷たい食べ物、どっちが好きだ？皆に聞いておこう。』はい、せ～の」

優也・優花・薫・流香・正・仁
「冷たいの」

美優・進・彪牙・総司・龍
「熱いの」

仁
「半分に別れたな。　次で最後だ。　星空の侍さんの【星空の幻想郷】の紫乃からだ。　ありがとう。　『水野くんに質問。水野くんのご両親ってどんな人達？』」

進
「あ～、あの人達は、結構放任主義だな。　家出してもそうなんだで済ましそうな気もする……。　優しいけどな……あ、後、父さんは母さんの尻に敷かれてるなあれは……母さん怒ると怖いし……」
仁
「大変だな」
闇夜
「今回、龍の過去話でしたが、どうでしたでしょうか？」
仁
「まさか転生者だったとはな。　龍の色んな謎が明らかになったな」
闇夜
「グダグダな駄文になりましたが、これからも宜しくお願いします！」

次回
第８５話　妊娠パニック
紗理奈
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第85話　妊娠パニック

ある朝。
同棲している亮と紗理奈は、自分達の家で寛いでいた。
亮はコーヒーを飲みながらテレビを観ている。
今はブラックを飲んでいるが、優也と優花が甘い物好きだと知ってからは、甘いコーヒーも飲む様にもしている。　どんな些細な事からでも、弟と妹に好かれ様とする努力は、感服である。

「ねぇ亮？」
「ん？　どうした？」

後ろから話し掛けてきた紗理奈に、亮は振り返らずに返事をする。

「あのね、話があるんだけど」

少し言いずらそうにしている紗理奈に、亮は呆れる。

「今更（かしこ）畏まる様な間柄じゃないだろ？　言ってみろよ。　どんな事でも受け入れてやる覚悟はある」

何年も紗理奈の恋人として付き合っている亮は、紗理奈の全てを受け入れる覚悟はできていた。

「ありがとう。　それじゃあ言うね」

亮の返事に微笑みながら、紗理奈は口を開く。

「実は、できちゃったの……」

「できたって、何が？」

ブラックのコーヒーに口を付けながら、亮は聞き返す。

「赤ちゃん」

「ブウゥゥゥゥゥゥゥ！！！！」

亮はコーヒーを吹き出した。　それはもう、虹が架かるのではないかと思うくらい盛大に。

（お、落ち着け！　一旦落ち着いて冷静になれ！　聞き間違いかも知れない！　うん、そうだ！　そうに違いない！　そうだよ、何を慌てる必要がある！　昔は瞬神の死神とか言われて、ぶいぶい言わせてただろ！　良し、行くぞ！）

そう自分に言い聞かせるものの、カップを握る手は動揺で震えていた。

全然冷静じゃない。

「ワンモアプリーズ？」

「赤ちゃんできちゃった」

聞き間違えなんて生易しい結末ではなかった。

冷静さを保てなかった亮は、今度こそ叫んでしまった。

第８５話　妊娠パニック

「……いや無い、無いなあれは。　有り得ないだろ」

紗理奈に、少し考える時間をくれと言った亮は、ある家の前で立ち尽くしていた。
予想と百八十度違った紗理奈の言葉に、亮はどうしたら良いかわからずにいたのだ。
そんな混乱の中にいる亮の頭の中で、悪魔的な何かが、ー認めちまえよーと囁く。

「いやいやいやいや、無いって、あれはあれだったから、うん大丈夫、あれは無いよ」

ーいやでもなお前、紗理奈と何したか忘れたのか？ー

「いやいやいやいや！　紗理奈とは確かにそう言う事はしたけど、色々したから大丈夫だって！　妊娠なんて無い無い無い！」

ーもしかしたらって事もー

「無い無い無い無い！　それは無いって！！　だってあれだもん！　あれはなんやかんやで色々あって、総合すると無い！　あれは無いってば！！」

亮は体全体を使って、妄想の言葉を否定する。
―だから認めちまえって―

「だーかーらー！」
「うるさぁぁぁぁぁぁぁい！！！！！」

玄関の扉ごと、そして妄想ごと、亮は優也に蹴り飛ばされた。

『妊娠！？』
「はい……」

美優の家の前で騒がしくしていた理由を優也達に話すと、案の定、三人共驚いた。

「それでさ、お前等に相談があるん……」
「名前はもう決めてるんですか！？」
「だけど……え？」

亮が相談を持ち掛けるより早く、美優が食い付いた。瞬神の死神よりも早く喋るとは、神道美優、恐るべしである。

「亮と紗理奈さんの子供だから……リサとか？」
「優也！？」
「出産の時は私達も駆け付けます！」
「優花まで！？」

優也達三人は、亮を無視して、三人で話し始めた。

「やっぱり子供が生まれたら結婚するんだよね～」
「そうなったら、紗理奈さんは私と優也の義姉(おねえちゃん)？」
「その時は、俺達も赤ちゃんの世話させて貰おうか」

美少女達が（一人は男の娘だが）盛り上がる光景を、亮は頬をひきつらせて見ていた。

（何か、可笑しくね？）

ただ相談しに来ただけなのに、話が可笑しな方向へ肥大していた。

（何で、生まれる前提！？）

死神としての本能が告げていた。　何か厄介な事が起こると。
次の瞬間、亮はこの場から消えた。
十七年間の人生の中で、最速のスピードで。

「それはおめでただな」

現在、亮は薫と修二の家を訪れていた。
会ったのは数回だが、亮は修二と親友の様に仲が良くなっていた。
修二には、友達と言える相手はいなかった。　幼い頃から薫を守っ

てきたからだ。
それが今、亮と言う友達ができた。　その事が、薫は何よりも嬉しかった。

「まぁ、喜ばしい事には変わらないんだけど……」
「嬉しくないのか？」

亮の表情が暗いことに、薫と修二は不思議に思った。
愛した人と自分の子供が生まれると知ったら、亮なら真っ先に喜びそうだったからだ。

「ちょっと、ね……」

やはり様子が可笑しい事に、薫は小首を傾げる。
何と言うか亮は、何処か思い詰めている様だった。

「でも、赤ちゃんって良いですよね。　私も欲しいです」
「な……にぃ……？」

その言葉が、修二のシスコンモードへの引き金になった。

「か、薫が……薫がそんな……！」
「に、兄さん……？」

ふらつきながら、修二は薫へと近付いていく。
そんな修二に薫は寒気がして、後退る。

「相手は、相手は誰だ！？」
「ちょっ！　兄さん！？」

一気に薫との距離を詰めた修二は、薫の肩を掴み、必死に問いただす。

「風魔か！　風魔正なのか！？」

「せ、正さんとはそんな関係じゃありません／／／／！！」

何を勘違いしたのか、何故か正の名前を出す。

それに、薫は顔を真っ赤にして否定する。

「えぇぇい！　面倒くさい！　今すぐここに連れてこい！！」

「だから落ち着きなさい！！」

一気に蚊帳の外にされた亮は、噂以上のシスコンだと思った。

「もう行こう……」

これ以上居ても、意味は無いと判断した亮は、暴れている修二と、修二を止めようとしている薫を置いて、家から出ていった。

「へぇ、赤ちゃんがねぇ」

薫の家から立ち去った亮は、偶然出会った龍と、川の畔（ほとり）で話をしていた。

「それで、名前は決めてるのか？　亮パパ？」

「うわぁ～今殺意沸いた。　ごめん、殺して良い？」

亮の右手にうっすらと鎌が見える。
これ以上何か言えば、首を落とされかねないと考えた龍は謝る、筈も無かった。

「二人目の子供が生まれたら教えてくれよ？　亮パパ」

気付けば龍は、川の中に投げ飛ばされていた。

「何でだ？　何で俺の周りは話を訊かない奴ばかりなんだ？」

投げ飛ばした張本人と言えば、誰も話を訊かない事に、疑問と苛立ちを感じていた。　と言うか、一人目も生まれていないのに、二人目も何も無いだろう。　と言う気持ちが大きかった。

「あ、龍さんが川に浮かんでますよ！　お～い！　龍さ～ん！」

珍しく苛立っている亮の耳に、元気な女性の声が聞こえてきた。
その方向へ目線を向けると、流香と、見覚えの無い女性が四人居た。

「あ、亮さん」
「流香ちゃんか」

すると、亮に気付いた流香が近付いていく。　四人も流香の後ろに続き、亮の元に五人の美女、美少女が集まった。

「その人達は？」

黒いドレスを身に纏い、ライトパープルの髪をツインテールにした、

洋服を着た女性に日傘を差して貰っている金髪の少女。　白い髪の一部を編んだ、透き通る様に白い肌の女性。　恐らく龍の知り合いであろう、緑のロングヘアーの、背の高い女性。
亮にはやはり、誰も見覚えが無かった。

「初めまして。　私はルカの姉の、ルナ・ブランシャールよ」
「ルナお嬢様、ルカお嬢様のメイドを勤めております、クリスティーナ・シルバであります。　クリスとお呼びください」

黒いドレスの少女、ルナが名乗ると、日傘を差している女性、クリスティーナ、もといクリスが名乗る。

「私は葛城雪奈だ。　宜しく」
「私はエルザ・ランディです！　エルーって呼んでください！」

白い髪の女性、雪奈が名乗り、緑の髪の女性、エルザが名乗る。
自分も名乗ろうとした亮だったが、四人の名前を訊いて気が付いた。

「そうか。　貴女達が吸血鬼と愉快な仲間達か」
「何よ、そのネーミング？」

間違いではないが、やはり可笑しなネーミングに、ルナは異論を唱える。

「あ、初めまして、天道亮です」
「無視なの？」

その可笑しなネーミングについて指摘した事を無視され、ルナは若干苛立つ。

「ところで、何してるの？」
「え、あ～……」
話すべきか悩んだが、流香は他に比べれば（仁や正や龍の事）、話をまともに訊いてくれるので、亮も今の紗理奈の現状を話した。
「そう、赤ちゃんができたのね」
「あぁ……」
この話をすると、亮は決まって表情を暗くする。　その理由は、亮にしかわからない。
「めでたい話なのに、貴方は何故浮かない顔をしているの？」
今まで話した人の中で、一番まともに流香は受け答えをしてくれる。やはり、流香には話して良かったと、亮は安心する。
「ねぇ、クリス？　赤ちゃんってコウノトリが運んでくるんじゃなかったかしら？」
「……後で説明致します……であります」
等と言う、ルナとクリスの会話を無視して。
「まさか、赤ちゃんをおろす何て事を、考えてるんじゃ無いですよね……？」
「いや、そんな事する訳……」
無いじゃないですかと、亮は言い切る事ができなかった。　何故なら、この場の温度がマイナスに達しそうな程の極寒の怒気（オーラ）を、雪奈が放っていたからだ。

「一生懸命生まれてこようとする生命(いのち)を……貴様はっ！」

今なら薫どころか、優也やキョウにすら勝てるのではないかと思わされる程の雪奈の気迫に、亮は大量の冷や汗をかき、身の危険を感じる。

「あ、あの……葛城さん……？　俺の、僕のお話を訊いていただけないでしょうか？」

プライドを捨てて（元からプライドなんて無いが）、下手に出る亮だが、雪奈の怒りは治まるどころか、メーターを突き抜けて上がっていた。

「問答無用！！　今すぐその腐った頭を冷やしてこい！！」

先程、亮が龍にした様に、雪奈は亮を川に突き落とした。

「行くぞ！」

一仕事終えた雪奈は、早足で歩いていった。

「こ、怖かった……」

「あ～、まぁ、ね……」

雪奈があんなに怒りを露にする所を見たことの無かった流香は、恐怖を感じた。

「ユキさんの前であんな事を言うのは駄目でしたね。　すみませんでした、亮さん」

エルザは雪奈が怒る理由を知っている様だったが、その理由はまたの機会にしよう。

「……何で……何で俺の周りは話を訊かない奴ばかりなんだ……？」

川に浮かび、空を仰ぎながら、亮は呟く。
その隣に、先程投げ飛ばされた龍が流れてくる。

「それはな、お前も人の話を訊かないからだよ」

そう言い残し、龍は流れていった。

「ああ、そうか」

置き去りにされた亮は、龍の言い残した言葉に、納得してしまった。

「それで俺の所に来たのか」

「はい……」

日が暮れ始めた頃、身心共にボロボロの亮は、最後の手段にと、唯一知り合いの中で妻子持ちの、竜也に相談を持ち掛けていた。と言うか、初めから竜也に相談をしていれば良かったと、今更ながら後悔する。

「親父、とりあえず焼き鳥でもくれや」
「はいよ」

現在二人は屋台にいる。　竜也の行き付けらしい。

「酒飲むか？」
「遠慮しときます」
「親父ぃ！　焼酎二つ！」
「人の話訊いてました？」

亮の目の前に、コップに入った焼酎が置かれる。　親父も親父で、人の話を訊かない様だ。

「で？　紗理奈が生命を授かったっつうのに、何が不満なんだ？」

ここでやっと本題に入る。　やはり亮が悩んでいるのは、見え見えだった。

「旦那ぁ、俺にはわかりますぜ。　高校生で子育てなんてキツイですぜ。　かく言う俺も、そんな時期もありました……」
「親父の話は訊いてねぇ」

自分の世界に入り込んだ親父は放っておいて、竜也は亮に向き直る。

「それで？どうなんだ？」
「……」

亮の悩みは何となくわかっていた。　過去に自分も、同じ事で悩んだからだ。

わかっていても、竜也は亮の口から直接訊きたかった。

「紗理奈が子供を生んだら、俺は父親になるんです。　でも……俺にはその子を抱いてやる資格なんて無い……。　こんな……汚れた手で」

過去に亮は多くの生命を奪ってきた。　それも、優也達以上に。そんな血で汚れた自分が、父親等と名乗って良いのだろうか？　亮はそれで悩んでいた。

「わかりますぜ兄ちゃん。　手はちゃんと洗わないとねぇ」

「親父さん。　話し全く違います」

この人は、亮が今日出会った人の中でも、断トツで話を訊かない人かも知れない。

「子を抱く事に、資格なんて必要ねぇよ」

「え……？」

竜也の返答は、初めからそれしかなかった。

「どれだけ血で汚れようが、お前がその子の父親である事には代わりねぇ。　どんな父親でもな、子供には父親は必要だ」

「でも……」

「もし、何か条件が必要ならそれは……」

亮に必要なたった一つの条件。　それは、とても簡単な事だった。

「お前が彼女達を幸せにしてやる事だ」

「！」

以前、自分も悩んだ問題。　竜也はその時に出した答えを、亮に伝えた。

「紗理奈を愛したなら、その子を含めて、幸せにしてやれ。例えどんな罪を背負っていても、それが父親の義務だ」

どんなに血で汚れていても、父親として、精一杯愛した人達を幸せにするだけ。　それが、竜也の答えだった。

「生まれてくる子には罪は無い。　それも含めて、覚えとけ」
「……はい」

亮は静かに頷いた。

「だんなぁ……グスッ、俺にゃあ、わかります……わかりますぜぇ……うぅ……」
「何で泣いてんの？」

竜也の話を訊いて、親父は何故か泣いていた。　涙脆くもあるみたいだ。

「旦那方ぁ……今日は俺の奢りだぁ！　好きなだけ頼んでくれ！」
「マジでか！　おい亮。　悩んでる時はハメを外した方が良いぜ」
「貴方が飲みたいだけでしょ」

へいお待ち！　と言う声と共に、どんどん料理が出てくる。

「ほら、飲んで食え！」

「はいはい」

一先ず喉を潤そうと、亮はコップを手に取り、中身を喉に流し込む。
中身が酒である事を忘れて。

「帰ったぞ紗理奈ぁぁぁ！！」
「お帰りなさい」

勢いよく扉を開け、亮は帰宅した。
落ち着きがなく、慌ただしい帰宅に、珍しく思いつつも、紗理奈は返事をする。
すると、廊下をドタドタと歩いている足音を訊いて、これは何か可笑しいと気付いた。
亮は穏やかな性格だからあまり怒らないし、怒っても本気では怒らない。　一度本気で怒った所を見たが、その時の亮は、世界が終わるのではないのかと思う程怖かった。
そして今、亮は慌ただしい帰宅をしている。

（まさか、バレちゃった？）

そこまで考えて、紗理奈は亮が本気で怒っているのではないかと、予想した。　予想したと同時に、冷や汗が額を伝う。

（このままじゃ怒られる！　それだけは嫌！）

珍しく紗理奈が慌てている。　それ程、亮が本気で怒ったら怖いらしい。

「紗理奈ぁぁぁ！！」

大きな音をたて、扉が開く。

扉の先に亮が居た事を確認すると、紗理奈は慌てて弁解、いや、許して貰おうと必死になった。

「あ、あのね亮！　あの事だけど……」

次の瞬間、紗理奈の視界から亮が消えたかと思えば、亮は紗理奈を抱き締めていた。

「り、亮！？」

「紗理奈！　結婚しよう！」

「え……？」

驚いたのも束の間、紗理奈は呆然として声をもらす。

「お前も！　俺達の子も！　絶対に幸せにしてやるから！　結婚しよう！」

「ちょっ、亮／／／！？　どうしたのよ／／／！？」

何とか平静を保とうとする紗理奈だが、心臓の音は大きくなり、顔は完熟トマトの様に赤かった。

（う～、どうしちゃったのよもぅ～／／／　何だかお酒臭いし……

……ってまさか……）

一気に頭が冴え渡る。
亮が何故こんな風になっているのか、紗理奈は理解した。

「亮……酔ってる？」
「酔ってねぇよ」

あぁ完全に酔ってる。
さっきのプロポーズも、酔った勢いだとわかると、ガッカリしてしまう。　だが、今の酔った亮になら、本当の事を打ち明けても大丈夫だろうと、紗理奈は判断した。

「あのね、亮。　赤ちゃんの事だけど」
「大丈夫！　絶対に幸せにしてやるから！」

酔っているとは言え、ここまで真剣に考えていてくれているとわかると、紗理奈は嬉しく感じた。でも嬉しさを表現する前に、言う事は言っておこうと思い、紗理奈は告白した。

「赤ちゃんができたって、嘘なの」
「だいじょう……え？」

紗理奈の告白に、亮は体を離し、静かになる。
予想と違った反応に、紗理奈は再び冷や汗をかいて思う。
酔いが覚めてる？

「紗理奈……？」
「は、はい……」
「どう言う事？」

今の現状を簡単に説明すれば、蛇に睨まれた蛙状態だ。

紗理奈からすれば、笑顔の筈の亮が、人一人と言わず、十人くらい睨み殺せる様な顔に見えていた。　ついでに言えば、亮の背後に死神も見える。

「え、えっと……その……ちょっとした暇潰しと言うか……何と言うか……」

「へぇ～、俺は暇潰しで、あんなに悩まされたんだぁ」

気の毒な亮だが、本当に気の毒なのは紗理奈かも知れない。　亮からの怒りを受けるのは、紗理奈一人しかいないのだから。

「あの……亮……」

「なに？」

亮の背後に見える死神の鎌が、紗理奈に少しずつ近付いてくる気がした。

「だって……その……」

「はっきり言ってくれないとねぇ～。　ぜんっぜん聞こえないよ、さ・り・な・ちゃ・ん？」

「っ～～～～、あ～もう！」

こうなればやけくそだと言わんばかりに、紗理奈は吹っ切れた。

「私達付き合ってもう四年よ！？もう結婚だって出来る歳なのに、亮がいつまで経ってもプロポーズの一つもしてくれないから悪いのよ！！　意地悪の一つや二つしたくなるわよ！！　女心くらい察しなさい！！　この馬鹿！」

顔を真っ赤にし、少し涙目で、肩で息をしているものの、溜め込ん

でいた物を吐き出せたお陰で、少しすっきりした様に感じていた。

「……えっと、ごめん」

さっきまでの雰囲気は何処へやら。　亮は素直に謝る。

「許さない！」

気持ちが昂っている紗理奈は、そう簡単には許さない。

「どうしたら許してくれる？」

何だかさっきと立場が逆だなと思いつつも、紗理奈は良い機会だと思い提案する。

「ちゃんとプロポーズしてくれたら許してあげる」

「成る程……」

チャンスはちゃんと物にする所は、流石と言った所だろう。

亮は少し黙った後、意を決して言葉を発する。

「誰よりも幸せにするから、結婚してください」

「……はい。　喜んで／／／」

自分から提案しておきながら、面と言われると恥ずかしいものなんだと、頬を朱に染め、今更ながらに思いながら、紗理奈は嬉しそうに返事をした。

「あ、でもちゃんと高校卒業したらな」

「フフ、わかってる」

その時はまたプロポーズして貰おう。
何て事を考えながら、また一つ悪戯を思い付く。

「それじゃあその前に、子作りでもしましょうか？」

「あ～……」

顔をひきつらせて、亮は顔を逸らす。

「それも高校卒業してから」

今日は色々大変だったので、今はとにかく、そう言う話は訊きたくなかった亮であった。

翌日。

紗理奈が妊娠した噂を聞き付け、お祝いやら何やらで来た知り合い達の誤解を解くのに苦労したのは、言うまでもない。

第85話　妊娠パニック（後書き）

教えて！　雷道先生！
仁
「聖なる炎さんからの質問だ。　ありがとう。　『闇夜さんに質問です。主人公の戦闘スタイルとして、
1・敵にトドメはささずに情けをかける優しいスタイル
2・敵は容赦なくフルボッコしてトドメさす鬼畜スタイル
3・優しい敵にはトドメをささないが、外道な敵には容赦なくぶっ殺す正義漢スタイル
闇夜さんはどれがお好きで？』」
闇夜
「1です。　主人公もそう言うタイプですし」
仁
「次は竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の美莉からだ。　ありがとう。　『エルザさんに質問。楽しいことは？』」
エルザ
「ルナお嬢様、ルカお嬢様、クリスさん、ユキさんや、今までで出会った方々と、日常を暮らせるだけで、何よりも楽しいですよ。
勿論、龍さんも含めてです」
仁
「本当に好きなんだな。　次はＯＯＴＧＬＳＴＳＴＰＢさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】の翔からだ。　ありがとう。　『山と海どっちが好きだ？俺は山だぜ』全員に質問だとして答えるか。
はいせーの」
優也・優花・仁・正・流香・龍・総司・美優
「海」
進・薫・彪牙・

「山」
進
「って、何か片寄ってんな」
闇夜
「さぁ？　何でだろうねぇ～」
美優
「何だか意味深……」
闇夜
「さて、今回の話はどうでしたでしょうか？」
仁
「面白くなかったら面白くないってはっきり言って良いぞ」
闇夜
「いや、できればオブラートに……」
仁
「次回も宜しく」

次回
第８６話　Ｆｒｅｉｈｅｉｔ
優花
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第８６話　Ｆｒｅｉｈｅｉｔ

五月に入ってすぐ、優也、優花、正、流香は仁に呼ばれ、優也達が通っている学校の生徒会室に集まっていた。

「この五人で集まるのって久し振りだね」

「えぇ、六年ぶりかしら」

優花と流香が言う様に、幼馴染み五人で集まるのは、随分と久し振りな事だった。

「それで？　この五人で集まらないといけないって事は、何かあったのか？」

懐かしさと同時に、何か有るからこそ、この五人が集められたと、全員が思っていた。　何しろ、優花を除けば、全員戦争を生き抜いてきた者達なのだから。

「あぁ、お前達を呼んだのは、ある理由があってな」

「理由？」

「そんなに重要なのか？」

「あぁ」

いつになく真剣な仁に、優也達は息を呑む。

あの仁がここまで真剣になる事とは何なのか。　これは気合いを入れて挑まなければ。

だがよく考えてみれば、こう言う時の仁は、何か厄介な事を持ち掛けてきてくる様な気がすると、優也達は思った。

そして遂に、仁の口が開かれる。

「バンドやろう」

何処から出したのか、左利き用のベースを取り出して、そう言った。

第８６話　Ｆｒｅｉｈｅｉｔ

『却下』

「即答か。　超予想外」

驚いた様な表情をしている仁を尻目に、優也達は部屋から出ていこうとする。

「まぁ待て。　お前達に取っても悪い話じゃない」

その優也達を、仁は引き止める。

「悪い話じゃないって言ってもな……」

「いつも巻き込まれてるだけな気がするけど……」

「フッ、そんな事言っても良いのか？　優花」

「え……」

得意気な表情で、仁は優花の名前を出す。
自分の名前を呼ばれるとは思わず、優花は驚く。

「バンドにボーカルは不可欠だ。　そして優花、お前にはボーカルをして貰おうと思ってるんだがな」
「私バンドやります！」
『えぇぇぇぇぇぇ！？』

突如眼の色を変えた優花に、優也達は驚きの声をあげる。

「優花は歌好きだからな。　カラオケで二曲連続で予約するタイプだ」
「何だよそのタイプ……」

優花が歌が好きなのも歌が上手いのも皆知っているが、カラオケなんて行った事は無いので、優花がそんなタイプなのかはわからない。

「正（ヘタレ）」
「おいこら。　今、正って書いてヘタレって読んだな？　読んだよな？」

怒気を含んだ声で、正は仁に詰め寄る。

「ドラムでもすれば椿が惚れるかもな」
「よ～し、バンドしようぜぇ」
「お前もかい！？」

薫の事を話に出すと、正は簡単にこちら側に引き込めると踏んでい

た仁の考えは、見事的中した。

「代々何で、いきなりバンドしようなんて言い出したんだ？」

「け●おん観たらしたくなった」

「それだけなの……？」

初めから期待してはいなかったが、もう少しちゃんとした理由を言って欲しかった優也と流香であった。

「それだけじゃない。　一ヶ月後にバンド大会が開かれるらしくてな。　ちょうど良いと思ったんだ」

そう言って仁はポケットからビラを取り出す。

優也と流香はそのビラを見ると、確かに、丁度一ヶ月後にバンド大会が開かれると書いてある。　しかも参加資格は十二歳から十八歳まで、優也達は余裕でクリアしている。

「後、優勝賞品は十万の食券だ」

「仁、俺もやる」

優勝賞品に釣られ、優也も参加を決めた。

理由はただ一つ。　ここで優勝すれば、数日は食費に困らなくて済むからだ。

食費に困っている理由は、今更話す必要は無いだろう。

「もう……優也までやるんじゃ、私もやるしかないじゃない」

「決定だな」

流香も参加する事が決まり、今ここに、一つのバンドチームが結成された。

「ボーカルは優花、ギターは優也、ドラムは正、キーボードは流香、ベースは俺で良いな？」

全員が参加する事が決まり、今は何をするか等を決めている最中だった。

「それは良いけど……」

「何で左利きのベース？」

仁が今持っているベースは、右利き専用ではなく、左利き専用ベースだった。

まぁ、仁は両利きなので、左でもできるだろうが、何故敢えて左なのか気になった。

「俺はけい●んの秋●澪を目指す」

「どんだけアニメに影響されてんだよ」

同じ種類のベースを持っていても、性別が違う時点で、●山澪ポジションは無理だろう。

「所で、楽器はどうするの？　私はボーカルだから必要無いけど、皆は必要でしょ？」

優花の言う通り、楽器が無くてはバンド所ではない。

本格的にバンドをするなら、それなりに高い楽器は必要だが、そんなお金は優也達には無い。

「安心しろ。　バンド大会が終わるまで貸して貰える様に楽器屋に頼んだ」

（（（（あ、脅したな……））））

優也達四人の心が一つになる。

困った時は弱みを握って脅す。　これが仁の常套手段。

どんな手を使っているかはわからないが、どんな情報であろうと調べられる。

一体何処の某アメフト漫画の司令官なのだろうか。

「歌はもう決めてあるから、先にバンド名を決めておくか」

「そっか、バンド名を決めないとエントリー出来ないんだ」

バンド名を決めるのも一つの難関だろう。　カッコイイ名前を思い付くのも、意見を一致させるのも難しいからだ。

「俺は『放課●ティー●イム』を希望する」

「却下！　けい●ん観すぎ！」

この男は、本当に何処まで影響されているのか。

優也に却下された仁は、ふてくされながら引き下がった。

「『ブラッドヴァンパイア』はどうかしら？」

「当てはまるの流香しかいないだろ」

流香の提案も却下された。　全員が吸血鬼なら話は別なのだが。

「『タイガー&デビル』はどうだ？」

「それも正だけだろ」

それだけ薫に惚れられたいのか。　正は自分の代名詞をバンド名にしようとした。

「『ライト&ダーク』は？」

「何か俺と優花みたいだな」

ライトが優花で、ダークが優也。　これもまた、個人的過ぎて却下された。

「はぁ、もう少し真面目に考えろよ」

せっかくなら、バンド名もちゃんと決めたい優也だが、各々が好き勝手な名前を付けようとして、中々決められなかった。

「そう言うお前は何かあんのか？」

「えっ！？」

まさかここで訊かれると思っていなかった優也は、頭の中でテンパりまくる。

「あ、えっと……」

いきなり尋ねられると何も思い付かないものなんだな、と思いながら、優也は取りあえず思い付いた事を言ってみる。

「『火渡優也と愉快な仲間達』？」

「却下」

「他考えましょ」

当然の如く却下された。
しかも即答された事で、優也はショックを受ける。

「優也」
「優花……」

優花は優也の肩に手を置き、柔らかな表情を優也に向ける。

「センス無いけど、落ち込まないでね」
「お前等に言われたくないんだけど！？」

慰めてくれると思った優也だったが、逆にトドメを刺された。

「やっぱり『ヴァンパイアレディーズ』でしょ」
「いや、『タイガー&フラワー』だろ！」
「『ホワイトシンガー』が良いと思う」
「お前等、さっきと言ってる事違うぞ！？」

いよいよ収集が付かなくなってきた。　こんな事で本当にバンド大会に出られるのだろうかと、優也が危惧し始めていると、今まで黙っていた仁が言葉を発した。

「取りあえず練習して、それから決めたら良いだろ」

それじゃあ楽器を取りに行くぞ、と言いながら、四人を置いて部屋から出ていった。
残された四人は、

『お前が言うな（あんたが言うな）（仁が言わないでよ）！』

同じ事を言っていた。

「これがGコードで……Fコードがこれか……難しいな」

結局バンド名は今度決める事にして、この日は自宅に帰って、各々の担当の楽器の練習をする事になった。
正はドラムなので、持って帰る事ができなかったが、何とかして自宅でも練習をするらしい。
流香は、クリスにキーボードを瞬間移動させて貰ったお陰で、持って帰る事ができた。

「優也何してるの？」

その様子を見ていた美優は、優花に尋ねる。

「今度のバンド大会の為に、ギターの練習」
「バンド大会？」
「うん。　私と優也と仁と正と流香の五人で出るの」

実はこのバンド大会、優花は優也達と出られると知り、大変楽しみにしていた。
本当は龍も居れば良かったのだが、龍は参加する様な性格では無いので仕方がない。
何故なら、このメンバーでただ楽しく、何かをするのは有り得ない

とばかり思っていたからだ。

「私も誘ってくれたら良かったのに……」

「あ、ごめん……」

美優はこう言う事には積極的に参加しようとする少女だ。　身近な人物が、自分一人を残して参加するのは、耐えられないだろう。

その事に気付いた優花は、直ぐ様謝罪する。

「ううん、良いよ。　良い事思い付いたから！」

「良い事？」

美優の言う良い事とは一体何か気になった優花だったが、美優が秘密と言って自分の部屋へ行ってしまったので、訊けずじまいになった。

それからと言うもの。　優也達はバンドの練習に明け暮れた。

優也はもっとネックの小さいギターを選べば良かったと言ったり、優花は歌の練習をし過ぎて喉を枯らしたり、正はドラムの代わりとして箸とお茶碗を使い、どちらも再起不能にしたり、仁はベースだけでなくギターまで練習しそうになったり、結局マトモに練習したのは流香一人だけだった。

前途多難だったものの、二十日間練習して、やっと全員で合わせられるまでになった。

「一時はどうなるかと思ったけど、何とか形にはなったな」
「後はバンド名だね」

バンドとしては随分と上達したが、まだバンド名を決めていなかった。
そろそろバンド名を決めておかないと、エントリーすらできなくなる。　エントリーできなければ、今までの努力が水の泡になってしまう。

「何か良い名前考えた？」
「いや、何も……」

こう言う状況になると、やはり良いものが思い付かない。
本格的に焦り出す優也達だったが、当事者である仁だけは、焦りなど見せていなかった。

「安心しろ。　バンド名なら、実は誘う前から考えてる」
「なら先に言えよ！」
「何勿体振ってんのよ！」
「このヘビースモーカー！」
「正、ただの悪口になってるよ」

地の文が入り込む暇もなく、優也達は仁にツッコミを入れる。

「まぁ落ち着け。　これは絶対大丈夫だから」

余程の自信があるのか、仁は腕を組んで得意気に言う。

「変なのだったら煙草没収だからな」
「良い機会じゃない。　禁煙しなさい」

「それは由々しき事態だ。　頑張らないとな」

それ程煙草を吸いたいのか、いつなく真剣な表情をする。

（いつもこうだったら良いのに……）

と、流香は残念がったりもしていた。

「俺達五人の共通点を探せば、案外簡単に思い付いた」

「共通点？」

この五人の共通点とは一体何なのだろう。　優也達は考える。

「正確に言えば、俺達が求めた物。それから考えたバンド名が……」

仁は一息吐いて、そして言った。

「『Ｆｒｅｉｈｅｉｔ（フライハイト）』。　ドイツ語で自由って意味だ。　どうだ？　俺達らしいだろ？」

自由。　これ程優也達に合う言葉は無いだろう。

何と言っても、優也達が求めてやまなかった物なのだから。

「これは文句無いな」

「『Ｆｒｅｉｈｅｉｔ（フライハイト）』か。　ピッタリだね」

「お前にしちゃあ、良く考えたな」

「もっと早く考えなさいよね」

誰一人として、文句も無く、優也達のバンド名は『Ｆｒｅｉｈｅｉｔ（フライハイト）』

t』に決定した。

「それじゃあ後十日間。　頑張るぞ！」

『おぉぉぉ！！』

バンド名が決定して気合いが入ったのか。　十日間で、優也達は今まで以上の上達を見せた。

そして、大会当日。

「思ったより多いな」

「う、うん……」

野外ライブなので、日差しが熱いが、そんなのもお構い無しに、観客が押し寄せていた。

その数は、優に百は超えている。

「あんま緊張すんな。　いつも通りに歌えば良いんだ」

「参加チームは全部で二十四。　その中で俺達はトリだ」

「さ、最後……」

「変に緊張させないの！」

会場の熱気と、仁からの情報に、優花は緊張し始めた。

「おーい！　優也ぁ！」

「進？」

観客を押し退け、進が優也達の所へ向かってくる。　後ろには、彪牙と総司と真司も居る。

「何してるんだ？」

「君達が出ると訊きましたからね。　冷やかしに来ました」

「いや！　違うからな！」

「相変わらずなツッコミだな」

登場早々、ツッコミを入れる進に、優也達はここまでボケに反応するものなのかと、一種の感動を覚えた。

「こいつの言ってる事は無視してくれ。　俺等はあいつ等に呼ばれて来たんだよ」

「あいつ等？」

「ほら、そこにいるだろ？」

彪牙は舞台の方へ指を差す。　そこには、見覚えの有りすぎる五人の少女が居た。

「最初は、女の子五人組で結成されたガールズバンド！　『M・M・K・N・N』です！」

舞台には、マイクを手にした美優。　ギターを手にした雅。　ベースを手にした薫。　キーボードを前にしている渚。　そして、小さな体には不釣り合いなドラムを前にしているナミが居た。

「朝から居ないと思ったら、何してんだよ美優の奴……」

「良い事思い付いたって、この事だったんだ」

優也達がバンドをやり始めた日、美優は薫達を誘って自分達もバンドを始めていたのだ。

「『M．M．K．N．N』って何だ？」
「頭文字だろ。　Mが美優と雅、Kが薫、Nが渚とナミ、って具合に」
「安着だな！？」

別にプロを目指すつもりじゃないからって、バンド名はもう少し考えて作ろうぜ、と呆れながら思った進だった。

「彩夏さんと修二が居そうね」
「薫とナミが居るからな。　つーかナミ、中学生じゃないだろ……」
「見た目はギリギリだから大丈夫じゃねぇか？」

正の言う通り、ナミは中学生ではない。
正体は犬の妖怪で、実年齢は、後一年で百歳になる程だ。
それでも彪牙の言う通り、見た目はギリギリ中学生に見えない事もない為、美優に誘われたのだろう。

「そろそろ始まるな」

舞台ではＭＣが舞台の袖に入り、ドラム担当のナミのスティックに合わせ、演奏が始まった。
ギターとベースの雅と薫は、しっかりリズムを合わせ、キーボードの渚も、ミスも無く、リズムを合わせ、ナミはその体格には似合わない力で、力強くドラムを叩く。
そして、ボーカルの美優は、普段では想像歌声で歌う。

「美優さん、歌上手いですね」
「流石、田村●かり」
「そう言う事言うのやめようぜ……」

美優の歌声に、優也達は素直に感心した。　勿論、薫達の演奏にも感心した。
美優の歌声が薫達の演奏を引き立て、薫達の演奏が美優の歌声を引き立てる。
その演奏に、感銘を受けている観客も、少なくなかった。

「これってラブソングだよな？」
「あ～、そう言えばそうだよな」

ラブソングは美優達にとってピッタリの歌だが、好意を向けている相手の殆どが鈍感ばかりなので、こうして歌で気持ちを伝えても、

（（（美優（雅）（ナミ）って恋してるんだな））））

中々気付いて貰えない。

（薫……好きな奴が居るのか……）

こう言う勘違いする白髪なヘタレも居たりする。

「恋愛って難しいな」
「そうですね」

彪牙の呟きに、総司が相槌を打つ。
彪牙が渚の好意に気付いているのかいないのか、彪牙本人にしかわかっていない。

「優花、お前は水樹●々だ。　自信を持て」
「仁、一回黙ろう……」
仁は未だにそんな事を言っていた。

美優達の後も、他のバンドの演奏が続く。
美優達のバンドも凄かったが、他のバンドも敗けておらず、会場は大いに盛り上がった。
そして遂に、優也達の出番が回ってきた。
舞台裏では、優也達が楽器の調整等をして、準備をしていた。

「その辺で良いぜ」
「ありがとう、正」
「絶対音感は便利だな。　チューナー要らずだ」

バンドを初めてから発覚したのだが、正は絶対音感だった。　そのお陰で、優也と仁はチューナー無しでチューニングする事ができた。
流石、白虎の力を宿した暗殺者である。

「うぅ、緊張してきた……」
「大丈夫？　優花」

優也、仁、正、流香の四人がリラックスしている中、優花は緊張から抜け出せていなかった。

責任感が強い優花にとって、大会に出ると言う事は、優勝しなければならないと言う責任が付いてきていた。

「……なぁ優花。　俺達のバンド名覚えてるか？」

見かねた優也は、自分達のバンド名を尋ねる。

「『Ｆｒｅｉｈｅｉｔ（フライハイト）』、だよね？」

「そうだ、俺達は『Ｆｒｅｉｈｅｉｔ（フライハイト）』。　つまり自由だ。　もうわかるだろ？」

「……あ」

名前の意味を思い出し、優花はハッとなる。

「優勝なんて目指さなくても良い。　俺達は自由に、楽しく歌って演奏すれば良いんだ。　じゃないと、後悔する。　優花も後悔したくないだろ？」

「うん」

「では最後に、『Ｆｒｅｉｈｅｉｔ（フライハイト）』、宜しくお願いします！」

優花が安心するのを待っていてくれていた様に、ＭＣが優也達、『Ｆｒｅｉｈｅｉｔ（フライハイト）』を呼び出す。

「それじゃあ行くか！」

『うん（ああ）（おう）（ええ）！』

掛け声と共に、優也達は舞台に躍り出た。

「あ、龍？」
「何だ、おめぇも来てたのか」
「偶然だ」

優也達が舞台に上がった頃、進達は龍と鉢合わせていた。

「もしかして、他の方も来たりしてます？」
「多分な」

総司の言う他の方とは恐らく、亮や紗理奈、竜也や浩輝達の事だろう。

「お、そろそろ始まるみたいだぞ」
「やっとですか」

そうこうしていると、準備が終わった優也達のバンドが始まった。

「全員、自由になれたあいつ等を見に来たんだろうな」
「……」

龍のその呟きを、彪牙は訊き逃さなかった。

優也達の演奏が始まって、会場は静まり返った。　それは何も、つまらなかった、盛り上がらなかった等と言う理由ではない。
たった一ヶ月しか練習してなかった事もあり、完璧とは言えない。
だが、『Ｆｒｅｉｈｅｉｔ（フライハイト）』と言うバンド名だけあり、各々が自

由に、自分らしさを十二分に発揮していた。
そして、特筆すべきは優花の歌声である。
特別な選曲をしている訳ではない。　それでも、会場に居た者は全員魅了された。　その歌声に。だから会場は静かに、優也達の演奏に、優花の歌声に聞き入っていた。
中には、涙を流す者もちらほら居た。
そして、演奏が終わると、観客から優也達へ惜しみ無い拍手が送られた。

「終わった、わね」
「ああ」

バンド大会も終わり、現在、会場は自由参加の、のど自慢大会になっていた。
せっかく来たのだからと、進や彪牙達も参加している。
仁と流香は、観客が少なくなかった客席からそれを眺めていた。

「でも惜しかったわね。　もう少しで優勝だったのに」
「そうだな」

結局、大いに盛り上がっても、優也達は優勝できなかった。　勿論美優達も。

「思ったより残念そうじゃないのね」

仁が言い出した張本人だから、一番残念がると思っていたが、全く残念そうにはしていなかった。

「最近戦ってばかりだったからな。　息抜きに良いかと思ってな」

「……それだけ？」

「ああ」

これまた、仁らしいと言えば仁らしい。

黙ってそんな事を考えていたとは、何も考えていない訳ではなかったらしい。

事実、皆楽しめた。

「あ、もう一つあったな」

「もう一つ？」

そう言うと、仁はポケットに手を突っ込み、

「ほら」

銀色の指輪を流香に手渡した。

「えっと……な、何で指輪……／／／」

二人きりのこの状況で、指輪など渡されれば、頬を赤く染め、意識しても仕方がない。

「大会の副賞だ。さっき譲って貰った。　言っておくが、ちゃんと頼んだからな」

仁のこの言い方だと、普段は頼んだりした事が無いように聞こえる。

「この間お前、それを欲しがってただろ。　そしたら偶然、このバンド大会の副賞にあったからな。　だから出てみた」
「あ……」

良く見てみると、この指輪は、流香が以前、とある店で偶然見付けた指輪だった。　その時に欲しかったが、持ち合わせが無く、購入する事ができなかった指輪だ。

「言っておくが、特別な意味は無いぞ」

そんな事は勿論知っている流香だが、こうもはっきり言われると、いくら流香でもむっとなる。

「何よそれ。　ツンデレのつもり？」
「べ、別に流香の為に貰ってきたんじゃないからな」
「せっかくするなら、もう少し感情を込めましょうよ……」

まぁでも、これが仁だから別に良いか、と流香は呆れながら思った。
結局の所、仁の思い付きで始まったバンドだったが、皆が普通の学生らしく楽しめた一ヶ月だった。

第８６話　Ｆｒｅｉｈｅｉｔ（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の聖麻から質問だ。　ありがとう。　『女性陣に。結婚したいか？　誰とかも言ってくれれば……』」

闇夜

「男性陣には聞こえない様にしたから、どうぞ！」

美優

「結婚できるなら……やっぱり優也と……／／／」

雅

「私も……あいつとできれば（小声）／／／」

薫

「結婚はしたいです／／／　でも、相手はノーコメントで／／／！」

流香

「私も……仁とできたら……今のは聞かなかった事にして／／／！」

彩夏

「そうね。　私もしてみたいけど、相手が居ないわ」

ナミ

「わ、私も、憧れはしますけど……／／／」

優花

「私も女の子だからしたいよ。　でも、私はそれを望んじゃ駄目だから……」

闇夜

「……この質問はここまでとします」

仁

「次はＯＯＯＴＧＬＳＴＳＴＰＢさんの【聖なる真紅の炎と冷たき

蒼い炎】の桜からだ。　ありがとう。　『男性陣は髪の長さと髪型はどんな感じが好きですか?』。　そうだな。　ストレートのロングヘアー」

優也

「敢えて言うなら、俺も仁と同じ」

進

「髪を一つの纏めてる感じかな。　長さはどんなんでも」

正

「ポニーテールとかだな。　長さは進と同じ意見」

彪牙

「長さは肩くらいだな。　後は、進と同じで一つに纏めてる感じ」

龍

「何でも良い」

総司

「僕もです。　どんな髪の長さで、どんな髪型でも、女性を愛しますから!」

彪牙

「言い方を帰れば優柔不断だな」

仁

「今回はバンドの話か」

闇夜

「あんまり知識は無いから、上手くは書けなかったけど、少しは優也達の事を知って貰えたかな」

流香

「自由って所ね」

闇夜

「ちょっとした伏線にしてしまました。　ちゃんと回収できる様に頑張ります」

仁
「もし彪牙達もバンドしたらどうなっただろうな」
闇夜
「その場合は、優也が進達とバンドを組む可能性も」
仁
「マジでか」
闇夜
「仁達とやらない場合はね」
流香
「じゃあ、次回も宜しくね」

次回
第８７話　幻想の終わり
総司
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第87話　幻想の終わり

親は早い内に無くしたと言うくらいしか知らず、物心ついた時にはお金持ちの家で、他の奴隷と一緒に労働させられていた。　と言うのが、霧藤総司の幼い頃の記憶。
周りには歳の離れた大人ばかりで、一人の事が多かった幼い総司が、何故生きてこれたか。　総司の生きる活力は、復讐だけではなかったのだ。
自分と同じ奴隷で、自分と歳の近い少女が、自分と一緒に居てくれたからだ。
総司は少女を姉の様に慕い、少女も総司を弟の様に慕った。
いつの日か総司は、少女との平和な暮らしを夢見、自分達をこき使っている男を殺す計画を建てた。
そして、計画実行の日。　幸運か不運か。偶然、その頃ある組織に所属していた雷道仁が、総司や少女、男が住んでいる屋敷を襲撃した。
男は殺され、屋敷は炎に包まれた。
奴隷達は全員逃げ出し、総司と少女も逃げ出した。　だが、逃げ出す時、炎が二人を引き裂いた。
お互い駆け寄ろうにも、炎が行く手を遮る。　そのまま、総司と少女は、生死も不明なまま、六年の月日が経た。

「と言う、昔の夢を見たんですよ」
「へぇ」

その日、総司は学校の教室で、今朝見た夢の話を彪牙に語っていた。
最初は何となくで訊いていた彪牙だったが、途中からは、真剣に耳を傾けていた。

「そのお前の姉貴、生きてると良いな」
「ええ」

血の繋がりはなくとも、あの少女はたった一人の総司の姉に代わりない。

「にしても珍しいな」
「何がです？」

何が珍しいのだろうと、総司は疑問に思いながら、彪牙に尋ねる。

「お前、昔の話なんかしねぇだろ？　それがちょっと珍しいと思ってな」

彪牙の言葉に、総司は呆然とする。
チャイムが鳴って、彪牙やクラスの皆が自分の席に戻って行く中でも、総司は呆然と立ち尽くしたまま、動かなかった。

（そうだ。　何故今更あんな夢を……）

彪牙に話すまで何とも思わなかったが、今になって気付いた。
自分にとっては、楽しくも忌まわしき幻想（きおく）。　それを夢で見る事など、一度も無かった。

（何か……嫌な予感がします……）

予感の正体がわからず、考え込む総司の頭に、教師の鉄拳が振り下ろされた。

第87話　幻想の終わり

「まだ痛いんですけど……」
「自業自得だろ」

その日の放課後。　珍しく優也達とは帰らず、彪牙と総司の二人だけで帰路についていた。

「考えごとをしている生徒の頭に、拳を振り下ろす教師がいますか！？」
「先生が何回、お前の事呼んだか教えてやろうか？」

チャイムが鳴り、生徒が席に着き、教師が来たにも関わらず、総司は席から離れた場所に立ち、何かを考える様な仕草をしていた。教師は何度も総司を呼んだが、総司は全く反応を示さなかった。それで痺れを切らした教師は鉄拳制裁に踏み込んだと言う訳だ。

「この恨み……晴らさずにおくべきか！」
「落ち着け馬鹿」

ふざけながら、二人が路地裏の前を横切ろうとすると、路地裏から

グチャリと音が鳴った。

「おい……総司」

「ええ、何か居ます」

何かただならぬ気配を感じ取った二人は、警戒しつつ、路地裏へと歩を進めていく。

進んでいった先で二人が見たものは、白銀の人型の、不自然に布を纏った狼が、肉塊と化した人を喰い殺している所だった。

「なっ！」

「妖怪！？」

その光景に驚き、彪牙と総司は声をあげる。　その声で二人の存在に気付いたのか、人狼は二人に襲い掛かってきた。

「ちっ！」

「くっ！」

二人は左右に別れ、人狼を躱す。

「ガアアアア！！」

「っ！」

人狼は一瞬も踏ん張る動作を見せず、足が地面に触れると同時に、彪牙の背後から一気に襲い掛かる。

「（何て動きを！）　彪牙！」

「わかってる！」

だが、彪牙が簡単にはやられる筈もない。
すぐさま反応し、右拳に気を集めて人狼を迎え撃つ。

「“総極拳”！」

人狼の鋭く尖った爪と、総てを極めた拳が激突する。
どれだけ鋭い爪であろうと、彪牙の“総極拳”の前では粉砕されるのは眼に見えていた。

「グゥゥゥ！！」

予想通り、人狼の爪は粉々に砕け散った。

「よし！　このまま……！」

彪牙は人狼にトドメの一撃を入れようとしたその瞬間、右手の肉が引き裂かれ、血が飛び散った。

「ぐあああああ！！」

右手の痛みに耐え兼ね、逆の手で右手を抑え、彪牙は膝を付いてしまう。

（反動か……！　完治してない状態で“総極拳”を撃った……）

前の戦いで、彪牙は“総極拳”を何発もしようした。

「彪牙！」

彪牙の異変に気付いた総司は、駆け寄ろうとしたが、その総司に、人狼のもう片方の爪が襲い掛かった。
眼前に迫った爪を、総司は双刃剣で受け止める。

「グルルルル！！」
「くっ！」

単純な力比べで総司が人外の存在に勝てる筈もなく、壁まで追い詰められる。

「このっ……ぁ」
総司は初めて人狼の顔を見た。
妖怪にも勿論性別は存在する。　この人狼は、姿は殆ど狼だが、顔の半分程は、人間の少女の顔をしていた。
そこから、人狼の性別は女だと判断できた。　だが問題はそこではない。
その少女の顔に、学校で総司が彪牙に話した、少女の面影があったのだ。

「茜……姉さん……？」
「！！」

思わず、総司は少女の名前を呟く。
その瞬間、人狼は総司から飛び退いた。

「グゥゥゥ、ガァァァ……そ……う……じ……？」
「！！」

途切れ途切れだったが、総司は自分の名前を確かに訊いた。

「ガアアアアアアア！！！！」

人狼が苦しそうに雄叫びをあげると、姿が変わっていく。
次の瞬間には、そこに人狼は居らず、白銀の髪をした少女が居た。

「「！！」」
「あああああああ！！」

少女は頭を抱えて苦しむと、壁を駆け上がり、何処かへ去っていった。

「何だったんだ……？」

一気に静まり返った空間に、彪牙の呟きが響く。
総司は、少女が去っていった方向を眺めたまま、呆然としていた。

「白銀の狼か」
「……」

仁の言葉に、総司は無言で頷く。
人狼に襲われた際に、右手を負傷した彪牙は、治療の為、彩夏の元に訪れていた。
総司は人狼の事で一つ確認したい事があった為に、仁を呼んだ。
彪牙を待つ二人は、現在待合室で話をしている。

「犠牲者の情報はお前達以外からは訊いていない。　その人が最初の犠牲者だったんだろうな」
「……」
相も変わらず、総司は話さない。　呆れた仁は、総司の核心を突く言葉を発する。
「その狼に、何か心当たりがあるんだな」
その言葉に、疑問など一欠片も無い。
仁はもうわかっているのだ。　狼の正体も、総司との関係も。
「狼谷(かみや)茜と言う名前に覚えがありますか？」
「ああ」
やっぱりか、と心の中で呟く。
完全記憶能力である仁が、人の名前を忘れる事などありはしない。
過去の総司と関わっていれば、尚更だ。
「少し話が長くなるが、良いな？」
「はい」
「……六年前、俺があそこに居たのは、ある任務の為だった」
それは総司も知っている。　仁は用も無く、襲撃する様な男ではない。
「その屋敷では、能力を発現させる為の実験をしていた。　つまり人体実験だ。　お前も知ってるだろ。　お前の空間能力も、その実験で発現したんだからな」
「……わかってますよ」

総司の能力は、自力で手に入れた訳ではない。
力を封じ込めた石、精霊石の適合者の人間に、力を与えると言った実験の末に手に入れたものだ。
適合できなかった人間は、死に至った。
その中で総司は、生き残れた。
総司には忌々しい力だが、利用できるものは利用しようと、今に至る。

「実験室を破壊した俺は、被験者のデータが記録されたファイルを見付けた。そこにはお前の名前と、狼谷(かみや)茜の名前が書かれていた。
そしてそいつは……」

そこで一度話すのを止め、仁は総司を見る。
話しても良いか、訊いているのだろう。
総司は静かに頷いた。
自分の考えが外れている事を願って。

「狼谷(かみや)茜は、狼の妖怪と肉体を融合させられていた」

総司の考えは、当たってしまった。

ビルの屋上に、彪牙と総司を襲った白銀の少女が苦しんでいた。

「うぅぅぅ！　あぁぁぁぁぁぁぁ！！」

コンクリートの地面でのたうち回りながら、狼の本能の抑え込む。

「はぁはぁはぁ……」

幾分か落ち着いたが、少女はやはり苦しそうに胸を抑え、横たわったまま起き上がらない。

「はぁ……うぅ……」

少女は涙を流す。

自分が人間を喰い殺してしまった事への罪悪感と、自分にとって弟の様な少年を、襲ってしまった事に。

「総司……」

少女は、弟の名前を呟いた。

助けを求める様に。

「つまり、あの狼はお前が言ってた姉貴だって事か」

仁と総司の話を訊いていたのか、彪牙は診療室から出てきて総司に言う。

「大丈夫なのか？　それ」

「右手は絶対安静だとよ。　右手だけなら今までの誰よりも重症ら

しい」

そう言い、包帯で固く固定された右手を見せる。
“総極拳”でのダメージは、そう簡単に消えるものではなかったらしい。

「治るまで使っちゃ駄目よ」
「わかってますよ」

その後ろから、彩夏が注意を促す。
流石医者なだけあって、患者の事をちゃんと考えている。

「で？　お前はどうしたいんだよ？」
「何が、ですか……？」
「惚けるな。　狼谷（かみや）茜の事だ」

総司は今、彼女の事を考えたくなかった。　そうして、今の茜から逃げたかったのだ。
だが、苦しんでいる姉から眼を背けて、逃げる事なんて事は総司にできはしなかった。

「彼女は僕一人に任せて下さい」

六年前の様に一緒に居られる。　そんな幻想が叶うとは到底思っていない。
それでも総司は彼女の元へ向かう。　例えどんな結末になろうと。

「王手」
「げっ、そう来るか」

翌日、仁と彪牙と彪牙の家で呑気に将棋をしていた。
彪牙も見た目に反して知能派なので、将棋は強いのだが、相手が仁では、手も足も出ない。

「……なぁ」
「待ったは無しだぞ」
「違ぇよ。　いや、させて貰えたら嬉しいけど、昨日の事だよ。あれ、本当か？」

総司が一人で茜を止めると言った後、仁は茜について、知っている事を総司に伝えた。
茜が狼の力を制御出来ていない事と、狼の力に、人間としての茜の力が敗け、死の寸前にいる事を。

「ああ、本当だ」
「救う方法は無いのか？」
「ある事にはある」
「じゃあ、何であいつに教えてやらなかった？」

茜を救う方法はあった。　それを仁は、総司に伝えなかった。

「霧藤は恐らく気付いてるだろう。　それが賭けに近い事もな。だが、今のあいつには無理だ」

心の整理も出来ないまま、総司は理性を失った姉を救いに行った。

心に迷いがあるままで、茜は救えないと、仁は判断した。

「じゃあお前もわかってんだろ？」

「何がだ？」

仁はわかっていて、敢えて惚けて見せる。

「あいつ、死ぬぜ」

日も暮れ、夜の帳が下りた街の一角に、白銀の狼、狼谷（かみや）茜が居た。

だがその姿は、先日とは違い、完全に狼と化していた。

「見付けましたよ」

そこへ、藍色の髪を靡かせ、双刃剣を手にした少年、

「茜姉さん」

総司が現れる。

「グルルルル」

茜の意識は完全に消え、総司の目の前に居るのは、獲物を前にしている狼だった。

「安心して下さい、姉さん」

微笑みを浮かべながら、総司は茜に近付いていく。

「今、助けます」

地面を蹴り、狼(あかね)は総司に襲い掛かる。

総司は躱す事なく、爪を双刃剣で、真正面から受け止める。

「アアアアア！！」

「っ！」

狼(あかね)は力任せに総司を弾き飛ばす。

（やっぱり力では勝てませんか……）

力比べでは勝てないとわかっていても、総司は正面から向かっていく事をやめない。

狼(あかね)は総司に接近し、腕を大きく振るう。

やはり躱そうとはせず、総司は受け止める。

「ぅあっ！」

防御の上から弾き飛ばされ、総司は壁に叩き付けられる。

背中に痛みを感じるが、今は気にしている暇はなかった。

目の前には腕を振り上げ、迫ってくる狼(あかね)。

すぐさま双刃剣を盾にする総司だが、反応が遅れた事と、スピードは狼(あかね)の方が速く、定位置に構える前に、手から叩き落とされてしまう。

しまった、と思う暇も与えず、狼(あかね)が襲い掛かる。

躱そうとすれば躱せる筈が、総司は躱そうとせず、両腕で防御する。

徐々に総司の体が傷付いていくが、致命傷には至らない。
業を煮やした狼は、力一杯蹴りを放つ。

「ぐっあぁ！」

蹴りは総司の腹部に入り、骨が折れる音と共に、総司は後ろに吹き飛ばされた。

「っ……！」

何とか起き上がろうとする総司だが、痛みで立ち上がれない。

「やっぱり、幻想は幻想でしかないですよね……」

総司は覚悟を決めた表情で、狼を見る。
また二人で笑いあえれば良い。　総司はそう願った。　だが所詮、願いだけでは幻想を現実には出来ない。
だから総司は決意した。
二人で笑いあえる現実は無理でも、せめて、幻想から茜を救い出そうと。

「大丈夫。　貴女を一人にはしませんよ」

牙をたて、爪をたて、狼は地を蹴る。

「一緒に逝きましょう」

覚悟は決まった。　後は、この幻想を終わらせるだけ。
藍色の霊気を纏い、総司は狼を迎え撃つ。
総司と狼がぶつかり合うその瞬間、二人の間を電光が横切った。

「電撃！？」
「ガゥゥゥ！！」

突然の電撃に、総司は驚き、狼（あかね）は後ろに飛び退く。
狼（あかね）は地面に降り立ち、再び総司に襲い掛かろうとしたが、足が地面に張り付いているかの様に、動かなかった。

「かかったな」
「雷道！？」

声が聞こえてきた方向には、電撃を地面に流し、狼（あかね）の動きを封じている仁が居た。

「っ！！」
「さっさと立ちやがれ！　馬鹿野郎！！」

突然引っ張られ、総司は痛む体で無理矢理立たされる。

「彪牙……」

総司を立たせた人物は、言わずもがな、彪牙だった。
彪牙は総司の胸ぐらを掴む。

「何が幻想は幻想だ。　お前とあの人が一緒に生きられる世界が幻想だとでも言うのか？　違うだろ！　今は幻想でもな、幻想を現実に出来る力をお前は持ってるだろ！　あの人の幻想を終わらせて、現実を始めさせる事が出来るのはお前しか居ないんだ！」

総司が纏っていた霊気が消えていく。

「あの人は六年間ずっと諦めずに抗い続けた。　お前も諦めんじゃねぇ」

突き放すかの様に、彪牙は総司の胸ぐらを放す。

「行ってこい」

「……はい！」

総司は覚悟を決めたつもりで、心の何処かに諦めがあったのかも知れない。

だが、今の総司に諦めなど無い。

総司の心には、茜の幻想を終わらせると言う、決意しか無かった。

「姉さん。　今、貴女の幻想を終わらせます」

双刃剣を手に取り、総司は茜の見据えた。

「霧藤、やれるな？」

「誰に訊いているんですか？　当然です」

双刃剣の連結を解き、一本を地面に突き刺し、もう一本を構える。

総司が眼を閉じ、集中すると、目の前の空間が歪む。

総司は所有、心の眼で目標を捜す。

「見付けた！！」

歪んだ空間の中に、蠢く何かを総司は発見し、眼を見開き、横一線に斬り裂いた。

「あああああ！！」

突如、茜は悲鳴をあげる。

すると、みるみる姿が元に戻っていき、そこには、狼としての茜ではなく、人間としての茜本人が居た。

「ぁ……そう……じ……」

「ねえ……さん……」

虚ろな眼差しで、茜は総司を見て、六年前と変わらぬ笑顔で笑いかけた。

「ありがとう」

「姉さん！」

気を失い、倒れかかった茜を、総司は抱え込んだ。

総司に抱えて貰っている茜は、安らかな表情をしていた。

「殆ど賭けだったんだがな。　良くやった」

「どうも……」

病院のベッドで眠っている茜の隣で、総司が椅子に座り、総司の後ろには、仁と彪牙が居た。

「狼谷（かみや）と狼を引き離すには、力の核となっている部分を破壊しなけ

ればならなかった。　それが出来るのは、空間能力を持つお前だけ。
　一度もミスが許されない状況で、躊躇無く実行し、成功させるとは、大した男だな」
「ですが、君が居なかったら姉さんは死んでいました」
核を破壊したまでは良かったが、茜の心臓は停止していた。
そこで、仁が電気ショックをして、何とか蘇生させたのだ。
その後、つまり現在は、彩夏の元へ連れてきた。
「雷道、姉さんを助けてくれてありがとうございます」
心の底から、仁へ感謝する。
もし仁が居なければ、茜の命は無かったのだから。
「礼はいらん。　狼谷（かみや）を救ったのは他でもない、お前だ」
そう言い残すと、仁は部屋から出ていった。
「総司、茜さんの事だけど……」
「いつ眼を覚ますかわからない、ですか」
総司が茜に付いている間に、仁と彪牙は、彩夏から茜の状態を訊いた。
長い間、狼の力を身に宿していた事で、核を破壊しても少なからず力が残ったと言う事、そして、いつ眼を覚ますかわからないと言う事。
明日眼を覚ますかも知れなければ、総司が死ぬまで眼を覚まさない。
最悪、永遠に眼を覚まさない可能性もあった。
「気付いてたのか」

「そりゃあ、姉さんの事なら何でもわかりますよ」

総司はそう言って、力無く笑う。

その顔を見て、彪牙はかける言葉を失った。

「すみません。　今は姉さんと二人きりにして下さい」

「ああ、わかった」

気持ちの整理が付くまで、そっとしておこうと、彪牙は部屋を出ようと、扉を開ける。

「ありがとうございます」

「……」

背中越しに、総司の声が彪牙の耳に届いた。

「お前は強い。　だから、大切なもんは、何がなんでも守れよ」

彪牙は守れなかった。　大切な人を。

だから、総司には失って欲しくなかった。　大切な人を。

「わかってますよ」

二人だけになった病室に、総司の声が木霊する。

「命を懸けてでも、大切な人は、守ってみせます」

自分に、彪牙に、そして茜に、総司は誓った。

『この変態！！』
「あああああ！！」
「またやってんのかよ」

それから一週間後、総司は着替え中の女子達を覗き、制裁を受けていた。

「相変わらずだな、お前」

ボロ雑巾と化した総司に、彪牙が声をかける。

「変態は日本の文化ですよ」
「そんな文化はねぇ」

あれだけボコボコにされたのに、何故普通に歩けているのか、謎である。

「僕は僕らしくしてないと、姉さんに怒られますよ」
「そうだな」

一週間、総司は毎日茜のお見舞いをしていた。　ちゃんと、体を壊さない様に。
茜が眼を覚ました時、自分の元気な姿を見せたかったからだ。

「どうせなら変態な所無くしたら良いのに」
「何故ですか！？」

「わかれよ」

今日も総司は茜が眼を覚ますのを待つ。

幻想が現実に変わる日まで。

第87話　幻想の終わり（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「初めは、竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の雪華からだ。　ありがとう。　『雅、何かムカつく奴っている？』」

雅

「ムカつくって、そう言えば真司の奴、また私の料理不味いって！　そうよ！　進も私の気持ちに気付かないでまたフラグ立てて！　あ～もう！　思い出したらイライラしてきた！　ちょっと二人の所行ってくる！」

闇夜

「死ぬな。　進、真司」

仁

「次で最後だ。　ＤＥＡＤＰＯＯＬ　ＺＥＲＯさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】の烈火から質問だ。　ありがとう。　『ずばり聖魔を持っている冷司さんに勝てるって人は誰かいますか？』」

闇夜

「力が完全に戻ったカイと、史哉とキョウですかね。　龍と亮とエルザもいけるかも知れませんが、絶対に勝てると言うなら、この三人です」

仁

「化物って言うと、化物に悪いくらい強いからな」

闇夜

「実はさぁ、最初は茜は死ぬ予定だったんだ」

茜

「え、何よそれ？」
闇夜
「最愛の姉の死を乗り越えて総司は強くなる、的なね？」
茜
「そう言われると言い返しにくい……」
闇夜
「でもやっぱり死ぬのは嫌いだから、植物人間になって貰いました」
茜
「嫌な言い方ね……」
闇夜
「いつ茜が物語に入るかわかりませんが、その時は宜しくお願いします！」
茜
「皆、総司を宜しくお願いします」
仁
（マトモな姉は初めて見たな）

次回
第８８話　風の悪魔と氷の舞姫
薫
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第８８話　風の悪魔と氷の舞姫

「暇だなぁ」
「そうだな」

仁、そして正は生徒会室で暇を持て余していた。
流香は生徒会長なだけあり、書類を職員室まで運んだり等、生徒会長らしい仕事をしている。　と言っても、仕事らしい事を始めたのはつい最近だが。　因みに言うと、流香の姿を見て、絶世の美少女が現れたと、学校は騒ぎ立てる生徒で溢れ、ファンクラブまで出来る程だ。
正体不明の美少女を探せ等と言って。
張本人の流香は、授業には殆ど出ず、生徒会室に入り浸っているが、そんな事は知るよしもない。

「正」
「何だよ？」
「暇ついでお前に話しておく事がある」

暇だ暇だと、ソファーに座ってぐうたらしていた仁が、突然真剣な声色で話してきた事に、何かあると思った正は、聞き耳をたてる。
本当に真剣なのか、端から訊いたらふざけている様な事なのか、その些細な違いは、付き合いの長い正にはわかっていた。
今から話す事が、本当に真剣な話だと言う事も。

「お前は暗部の仕事をする事に迷いは無い、そうだな？」
「ああ、それがどうした？」

暗部の仕事とは、人殺しの仕事だけではない。

大雑把に言えば、表沙汰に出来ない仕事をする事だ。
例えば、研究所を破壊する等。
正は、人を殺すにしろ殺さないにしろ、暗部の仕事をやめるつもりはなかった。
それが何だと、正が言い返すと、仁は思いもがけない事を言う。

「人を殺すにしろ殺さないにしろ、暗部の仕事を続けるつもりなら、椿薫から縁を切れ」
「あぁ？」

正は鋭い目付きで仁を睨む。

「お前にとって椿はただの足枷だ」
「てめっ！」

その言葉が気に触ったのか、正は仁に掴みかかる。

「お前は誰よりも他人から恨まれている。　それも優也や俺よりもだ。　忘れた訳じゃないだろ」
「……」

優也や仁と違い、正は狂気に異常に染まりやすい。　だからか、二人よりも容赦無く人を殺した。　殺した数も、誰よりも多い。

「これは命令じゃない。　親切で言ってやってるんだ。　お前の為にも、椿の為にも」
「っ……」

正は何も言い返せず、仁を放し、苦虫を潰した様な表情でソファーに腰掛ける。

だからか、部屋の外で、二人の会話を訊いていた少女に気付けなかったのは。

第８８話　風の悪魔と氷の舞姫

優也、美優、優花、進、薫、雅、真司の七人での帰り道。
他愛の無い話をしながら、楽しそうにしている六人の端で、薫は一人、浮かない顔をしていた。

「どうしたの、薫？」

薫の様子に気付いた美優は、薫の顔を覗き込み、尋ねる。

「ううん、何でもないよ」

いつもの様に優しく、薫は笑顔を向ける。
その笑顔に、美優は違和感を覚える。
何故か、悲しそうに見えた。

「私、用事があるから先行くね」

「あ、薫……！」

薫は逃げる様にその場から立ち去っていった。
その場に残された美優も、騒がしくしていた優也達も、薫の後ろ姿を静かに見つめていた。

「はぁ……」

数十メートル走った後、薫は立ち止まった。
そして後悔する。
気分が落ちていると言って、皆の前から逃げてしまった事に。

「あんな話、訊いた後だしなぁ……」

実は薫は、仁と正の話を訊いていた。
自分と正は縁を切った方が良いと言う会話も。
その話を訊いてから、薫はどうしようもなく辛い気持ちになった。
何とかいつも通りに振る舞おうとしても、心の底から笑えず、美優には簡単に見破られてしまった。

「どうしたんだろう、私……」

会わない方が正の為になるのなら、自分は二度と正と会わない方が良い。　わかっていても、考えるだけで胸が締め付けられる様に苦しくなる。

その苦しさの正体を、薫は知っていた。　だが、認めてしまえば、正に会えない状況に、耐えられなくなってしまう。
そうなれば、正に迷惑がかかる。　だから薫は、その苦しさに耐える決断をした。

「これで、良いよね……」

その決断が、どれだけ辛くとも。

「すみません」
「ひゃい！！」

突然、後ろから声をかけられ、薫は変な声を出してしまう。

「な、何ですか？」

何とか落ち着いて、後ろに振り向くと、金色の髪をオールバックにした、愛想の良い、中年の男が杖を付いて立っていた。

「貴女が椿薫さんですか？」
「は、はい。　そうですけど……」

何故自分の名前を知っているか、不思議に思ったが、優しそうな人だったので、すぐに心を許した。

「そうですか。　それは良かった」

男は安心しきった表情を浮かべる。
何が良かったのか、薫は疑問に思った瞬間、

「じゃあ着いてきて貰おうか」
薫の視界はブラックアウトした。

それから二日後。　正は薫と会っていなかった。
それどころか、声すら訊いていない。
何度か正から連絡をしようとしたが、通話ボタンを押す寸前で、やめてしまうのだ。
そして今も、道の端で、携帯とにらめっこしていた。
画面には、椿薫と表示されている。

「よっしゃぁぁぁ！　いくぞおおおおおお！！」

気合いを入れ、正は携帯のボタンを押した。
電源ボタンを。
画面は最初の画面に戻り、正は携帯を仕舞う。

「あぁ……やっぱ俺ってヘタレかもな……」

仁達によく言われ、いつも否定しているが、今回ばかりは認めざるえない。

「いや、今回だけだから。　普段はヘタレなんかじゃないからな」

思わず、自分を完璧にヘタレだと認めそうになり、否定の言葉を呟

き続ける。

「おい！　風魔！！」

変質者と間違われるのではないのかと、勘違いしそうになるくらいブツブツと呟いている正の元へ、汗だくで、明らかに焦っている修二が全速力で走ってくる。

「修二？　どうし……」

「貴様ぁぁぁぁぁ！！　薫を何処にやったぁぁぁぁぁ！？」

「ぐえっ！？」

正が言い終わるよりも早く、修二は胸ぐらを掴み、前後に揺さぶる。

「な、何の事だよ！？」

「惚けるなぁ！！　貴様が薫を好きなのはまるっとお見通しなんだ！！　つまりお前が犯人だぁぁぁ！！」

「つーか揺さぶるのやめろぉぉぉ！！」

正の必死な叫びも実らず、修二は揺さぶりをやめない。

「お前が犯人じゃないのか！？」

「違うっつてんだろうが！！　って言うか、何の事なんだよ！？」

「知らばっくれるな！！　お前以外に有り得ない！！」

「めんどくせ！！　こいつすげぇめんどくせ！！」

いい加減、脳味噌が危なくなってきた正は、無理矢理引き離そうと考えた矢先、修二は突然、正から手を放す。

「いっ！」

前後に揺さぶられていた状態で、急に手を放され、受け身も取れずに正は壁に激突する。

「本当に、知らないのか……？」

「だから……ちゃんと説明してくれないとわかんねぇだろ……」

漸く落ち着いたのか、修二は正に問う。

何があったかもわからない正は、修二に説明を求める。

次に修二から訊いた言葉は、仁が言った事よりも衝撃だった。

「二日も前から薫が帰って来てないんだ！！　しかも連絡もしないで！！」

「！！」

二日間、連絡も無く、家に帰らないくらいなら、有り得ない話ではない。

だが、それが薫なら大問題になる。

あの薫が、連絡も無しに、家に帰らないなど有り得ない。

家出したにしても、やはり薫なら連絡の一つでもする筈だ。

「もし薫を見付けたら教えろ！！」

そう言い残して、修二は走り去っていくが、正はそんな事にも気付けなかった。

「いなくなった……薫が？」

正が何度も薫に連絡しようとしていたのは、これからは一切会わないと、伝えようとしての事。

自分と一緒に居れば、薫が狙われるからだ。
そう決意したのは、二日前の、仁に忠告されてから。　そして、薫がいなくなったのも二日前。
これは果たして偶然なのか、もしかして、あの時の会話を訊かれていて、薫の方から自分と会わない方が良いと判断した為に、姿を消したのではないか。
そんな考えが頭を過り、同時にどうしようもない罪悪感に苛まれる。
自分が薫と会わなければ、薫は優也達との日常を過ごせていたのではないのかと。
すると、正の携帯が鳴り響く。
携帯を手に取り、画面を見ると、そこには、椿薫と表示されていた。

「薫！！」

慌てて通話ボタンを押そうとして、その手は止まる。
電話を取って、もし自分が考えている事を言われたら、と考えると、話す事すら躊躇してしまう。
けれど、このまま何も話さない訳にはいかない。
ぎこちない動きで、正は通話ボタンを押した。

「……薫？」

恐る恐る、薫の名前を呼ぶ。

『久し振りだな。　風魔正』

薫とは全く違う声が、受話器の向こうから聞こえてきた。

「誰だお前？」
『誰だとは心外だな。　覚えていないか？　六年前にお前と出会っ

たマフィアのボスを』

「六年前？　マフィア……？　まさか……」

六年前に自分が出会ったマフィアのボスは、たったの一つしかなかった。

「お前、スネークか」

『ご名答』

スネークとは、電話相手のコードネームで、本名不明のアメリカマフィアのボスだ。

六年前は、偶然日本に密輸してきた所へ、正が襲撃し、命からがら生き延びたのだ。

「そのお前が、何で薫の携帯から電話してる？」

嫌な予感がしていた。

自分に恨みを持つ人間が、自分が好意を持つ少女の所有物を持っている事に。

『お前の彼女は俺が預かっている。　返して欲しければ風魔の森へ来い』

予感は的中した。　同時に安心してしまった。　薫は自分のせいで姿を消したのではなく、この男のせいだと思ってしまった。

本当は全部、自分のせいなのに。

「薫がお前なんかに捕まるかよ。それに、薫の携帯を持ってるからって薫が捕まってる証拠にはならねぇ」

薫も中々の手練れだ。　そう簡単に捕まるとは思えない。
携帯も、薫が落としたのを拾っただけかも知れない。
正は、そうである事を願っていた。

『どう思おうが自由だが、お前が来なければ、この娘(むすめ)は殺す』

途端に声が聞こえなくなり、無機質な音が響く。
次の瞬間、メールが届いた。
送り主は薫の携帯を持っている、今まで話していた男、スネークからだ。
メールに本文は無く、代わりに、画像が一つ添付されていた。
添付された画像を見た瞬間、正は怒気を含んだ表情をし、携帯を握り潰して走り出した。
何故これ程まで怒っていたか、理由は送られてきた画像にあった。
何故ならその画像には、体中痣だらけで気絶している、薫が写っていたからだ。

「来ますかね？」
「さぁな。　お前はどう思う？」

薫を襲った金色の髪をオールバックにした男、スネークは、部下の男と話し、後ろに振り向きながら言う。

「こんな事しても無駄ですよ。　あの人は来ません」

振り返った先には、木に縛れ、拘束されている薫が居た。
顔の所々には痣があり、服で隠れているが、体にも痣が残っていた。
不意打ちで気絶させられた薫は、この場に連れてこられた時に眼を覚まし、必死に抵抗した。
だが、武器の鉄扇は奪われ、相手も一般人ではないマフィアが何人も。
そんな不利な状況で抵抗した所で、結果は眼に見えている。
能力を使うどころか、動けなくなる程痛め付けられ、拘束されてしまった。

「ほう、来ないか。　それなら、お前を殺して他の方法を考えるさ」
「っ……」

薫はそう言ったが、正は必ず来る。　この男も、正が来る事はわかっている筈だ。
薫は悔しく思う。
油断していたからと言って、こんな男に捕らえられ、正を誘き出す材料にされ、正を危険に晒してしまう事に。

（正さん……！）

薫には、ただただ正の無事を願うしか出来なかった。

鬼気迫る表情で、正は森の中を駆け抜けていた。
この森は風魔の森と言われ、風魔一族の里をカモフラージュする為

の森であったが、それも今は意味は無い。
実はこの間の亮との修行の時も、ここに来ていたのだが、今は関係の無い事だ。

「……！」

全速力で駆け抜けていた正は、突然立ち止まる。

『正、あの娘を救いたかったら冷静さを失うなよ。　俺も今回は協力してやっから』
「ああ、わかってる」

白虎へ返事を返すと、足音もたてず、正は木の影に身を潜める。
正が身を潜めた木に向かって、足音が二つ程近付いてくる。
正はこの気配に気付き、奇襲の準備に掛かった。

『一応言っとくが……殺すなよ？』
「ああ」

正の視界に二人の足が見えた瞬間、二本の刀を二人の足の甲に突き刺した。

「「あっ……！」」

突如足に刃を突き刺され、激痛に悲鳴をあげそうになった男達に、正は飛び掛かり、口を手で塞いで声を出させない様にし、二人の腹部に強烈な膝蹴りを叩き込んだ。
男達は声をあげる暇も無く、地にひれ伏す。

「敵の数は百とちょっとか」

正は広範囲の風を聞き取り、大まかな敵の数と位置を確認する。

『相手はマフィアだ。　戦闘技術は高い。　油断すんじゃねぇぞ』

「次に行くぞ」

風魔の森には特有の磁場があり、敵の数と位置を大まかに把握できても、薫が何処に居るかまでは正確に把握する事が出来ない。

だから正には、片っ端から探し出すしか方法が無かった。

『……お前、本当に冷静か？』

今の動きは、誰から見ても完璧に見えた。

だが、不本意ながらにも長年行動を共にしている白虎には、若干精細さに欠けている様に感じていた。

「冷静だって言ってんだろ」

『お前……正！』

「！」

正は足で、地面の近くに張られたワイヤーを踏んでしまう。

（しまった！）

それが罠だと気付いた時にはもう遅い。

爆発が起こる。

爆発に巻き込まれはしなかったものの、爆散して鋭く尖った木の欠片が、体の至る所に突き刺さった。

「くそっ！」

罠に嵌まるなど、普段の正ならば有り得ない。
白虎は確信した。
今の正に、冷静さは皆無だと。

「おあああああ！！」
『おい！　待て！！』

白虎の制止も訊きもせず、正は走り出す。
走り出した先の草むらから、武装した男達が何人も出てきて、一斉に発砲した。
弾丸が飛び交う中、二本の刀を盾にして、どんどん迫っていく。
その際に、防げなかった弾丸が体を貫くが、正はそんな事もお構い無しで向かい、一瞬で男達を気絶させた。

『おい正！』
「っ！」

正の右足を弾丸が貫く。
周りから、今気絶させた男達と同じ武装をした男達が、何十人も取り囲んでいた。

「くそがっ！」

それでも尚、刀を手に斬りかかろうとする。
まさに、猪突猛進。

『待てって言ってんだろぉが！！』
「うぉわっ！？」

暴走する正の前に、許可無く、無理矢理実体化した白虎が現れ、強風で砂や落ち葉を舞い上げ、男達の視界を遮り、その隙に正を連れて木の影に隠れる。

「さっきから待てって言ってんだろ！　無駄に良い耳は何処行った!?　取り替えたのか！　取り替え自由か、このヤロー！！」

余程頭に来たのか、白虎は一気に正を罵る。

「うるせぇ、邪魔すんな！　早く薫を助けなくちゃならねぇんだよ！」

やはりと言うべきか、薫を人質にされた状況で、冷静でいられる筈もなかった。

「じゃあそれは今のてめぇには無理だ！　イカれてる時のてめぇの方がまだマシだ！」

「何だと!?」

「悔しかったこの状況をどうにかしてみやがれ！」

白虎の言い分が正しい。

正にこの状況を妥協出来る策など無く、戦っても無事に済まない。

「じゃあどうしろってんだ!?」

「そんなもんな！！」

暴風と言うに等しい風が吹き荒れ、白虎を取り巻く。

風が吹き止むと、小さな影が武装集団へと向かっていく。

「俺を囮にしてさっさとあの娘を助けてこい！」

荒々しい口調で、白い短髪で、優也と同じくらいの身長の、ボーイッシュな服の少女は風を操りながら、肉弾戦で武装した男達を伸していく。
一部を除いて、見た目こそただの少女だが、この少女こそ白虎の人間になった姿だ。
白虎の白い耳と尻尾が、それを物語っている。

「ハク！」
「せっかく俺が手伝ってやってんだ！　良いからさっさと行け！」

敵は自分が引き受け、正が薫を救出する。　それがベストな選択だった。

「行け！　正！」

ハクは正に振り向いて言った。

「……ありがとう！」

ハクを信じ、正は走り出す。
その後ろ姿を眺め、ハクは小さく溜め息を吐くと、取り囲んできた敵を、風で弾き飛ばした。

「あぁ、手筈通りにな」

スネークは無線を切ると、薫へと視線を向ける。

「お前の彼氏が来たようだ。　お前の読みは外れたな」

「っ……」

今すぐにでも、正に手を出すな、自分を殺せ、と言いたかったが薫だが、猿ぐつわをされて、何も話せなかった。

「さて、悪魔（デビル）も涙を流すのか、楽しみだな」

「！」

薫の眼が見開かれる。

その様子に気が付いたスネークは、薫の視線を辿る。

その先には、白い髪と体に真っ赤な血や泥を付着させ、静かに、だが威圧感を感じさせる風を吹かせ、悪魔の様な雰囲気を醸し出した『風の悪魔』、風魔正が歩いてきていた。

（正さん！）

薫は驚愕する。

何故そこまで傷付いてまで、こんな所まで来たのか。

自分と正の関係など、ただの知り合いか、良くて仲間程度なのに。

「来たな」

スネークはニヤリと笑い、杖を付いて、正と向き合う。

「六年ぶりだな。　この足の礼はさせて貰う」

スネークの右足は、六年前に正に衝撃された時に負傷し、今では杖を付かなければ歩けない程だ。

「それは無理な話だな。　何たって、お前はぶっ殺されるんだからな！」

傷だらけの体で、歩くのも一杯一杯の筈の体で、正は駆け出した。
心から愛した少女を救う為に。
銃声が鳴り響くと同時に、正は左足に激痛を感じる。
両足を撃ち抜かれた正は、膝から崩れ落ちる。
それを見て、復讐者（スネーク）は笑っていた。

「殺れ」

合図と共に、三百六十度、全方位から正に向かって銃弾が飛び交う。
銃弾の八割が、正の体に命中していく。

「ん～！　むぅ～！」

口を塞がれ、悲鳴をあげる事も出来ず、木に縛れ、正の元へ駆け付ける事も出来ず、薫はただ見ている事しか出来なかった。
銃声が止み、風の悪魔は地に伏した。
地面を赤く染め、立ち上がる気配を見せないが、微かに、指先が動いている。
まだ息がある。
その事に気付いた一人が、銃口を正に向ける。

「ん～！！」

必死に叫ぶ薫だが、誰にも声が届かない。

引き金に指がかかり、諦めかけた薫の眼に、朱い炎と漆黒の剣閃が写った。

「おぉらっ！！」

その頃、人間体になって敵を足止めしているハクだったが、倒しても倒しても、数が減らない。
それに加え、敵は全員武装していて、戦闘訓練も受けている。
武器が能力と自分の肉体だけのハクは、苦戦した。

「くそっ！　鬱陶しい！」

飛び上がって、一人の男の顎を踵で蹴り、気絶させる。

「貰ったぁ！！」
「っ！」

ハクの着地を狙い、敵の一人が背後から頭目掛けて、ナイフで斬りかかる。
躱そうにも地に足が着いておらず、風で防ぐにも、ギリギリ間に合わない。

（万事休すか！？）

ナイフがハクの額から五センチまで接近したその時、ハクの視界か

らナイフが消える。
その事に驚くハクと男だが、周りでも似たような現象が起きていた。
武装していた男達の、鉄で出来た武器が、男達の手から消えていた。
正確には、全てある場所へ引き寄せられていた。

「男が寄って集って女子(おなご)を襲うとは笑止千万だ」

武器が吸い寄せられた方から、声が響く。
そこには、黄色を強調した和服を着た、長い金色の髪を一つに纏めた男が立っており、足下には、銃やナイフと言った武器が散乱していた。
男の姿を見て、ハクは驚いた。

「コウ！　お前、黄竜か!?」
「人間の姿で会うのは久し振りだな」

白虎に人間の姿がある様に、黄竜にも人間の姿があった。
この姿が、黄竜の人間時の姿である。

「つーかてめぇ！　俺を女扱いしてんじゃねぇよ!!」
「何処からどう見ても女子(おなご)だろう」

女扱いされるのが嫌なのか、ハクは激怒する。

「何だ貴様!」

敵の一人が、何処かに隠していた小型の銃を、コウに向ける。

「まだあったか」

コウが電気を纏った手を翳すと、銃はコウの手に引き寄せられた。
次の瞬間、突然放たれた強烈な一撃で、敵の殆どが吹き飛ばされる。

「やっぱり黄竜を借りておいて正解だったな」
「月臣！　流香！」

今の一撃は、龍によるもので、その後ろには流香が居た。

「自分自身を磁石にするなんてね。　便利ね」
「当然だ」

コウは電気で作った磁石で、敵の武器を吸い寄せていた。

「せっかく駆け付けたのに、私の出番は無さそうね」
「はぁ？　何で？」

流香は無言で指を差す。
そちらへ目線を向けたハクは、驚愕どころか、恐怖する。

「貴様等かぁ！！　薫を拐ったのはぁ！　凍り付けにして殺すだけでは生温い！　生きている事を後悔させてやる！！」

泣こうが喚こうが関係無く、修二は男達をタコ殴りにしていた。

「薫の事なら伝えた方が良いと思ったんだけど……言わない方が良かったわね」
「怖ぇよあれは……」

狂気時の主人（仮）よりも怖いかも知れないと、ハクは思った。

倒れた正を取り囲んでいた男達は今、正と同じ様に地に伏していた。
その中心で、正の傍らには、

（優也君！　仁さん！）

朱い炎を漆黒の刀に纏わせた火渡優也と、雷道仁が居た。

「黒夜叉と雷帝だと！？　何故ここが！？」

優也がここに居る事に、スネークは驚愕の声をあげる。

「確かにお前達の情報操作は完璧だった。俺でも、お前が動き出した事に気付けなかったからな」
「なら何故だ……？」

“協力者”に手伝って貰って、情報が仁に流れないようにしていた。
それは完璧だった。　仁も認めているくらいに。
だが、優也達はここに居る。
スネークは困惑した。

「そんなの、ただの勘だ」

優也の答えは、至ってシンプルなものだった。

「はっ、常識外れな奴等め……」

勘でこの場所を突き止めるのもそうだが、それを信じる仁も常識外れだと、スネークは思う。
それと同時に、全てを諦める。
部下は恐らく全滅しているだろう。
自分は足が不自由で逃げる事も不可能。
この二人相手に、逃げる事は不可能だと悟ったのだ。

「勘違いするな。　お前を潰すのはこいつだ」

煙草を吸いながら、仁はそう言う。

「何を言ってる？　そいつはもう動けんだろ？」

息はまだあるが、あれ程の銃弾を受け、致死量確実の血を流している正に、何かを出来るとは到底思えなかった。

「お前も知っている筈だ。　こいつはなにがあっても立ち上がる事を」
「……っ！」

今まで動かなかった正が、手に力を込めて、立ち上がろうとしていた。
スネークは思い出す。
六年前に襲撃された時、正は無傷でスネーク達を全滅させたのではない。

「致死量確実の血を流しても」

何度撃たれようと、

「体中の骨を折られようと」

どれだけ斬っても、

「何度倒れようとすぐに立ち上がる」

それこそ不死身の如く。

「そして敵を倒すまで向かっていく」

それこそ悪魔の如く。

「それが風の悪魔と呼ばれる由来になった、風魔正だ」

いつしか、恐怖の象徴となった風の悪魔は、愛する者を守る為の風の悪魔として、再び立ち上がった。

「行け、正」

風の如く、風の悪魔、風魔正は駆け抜ける。

「おおおおおおおおお！！」

固く握られた拳は、復讐者（スネーク）の顔面に突き刺さった。

復讐者（スネーク）は目覚める。
辺りには倒れた部下以外には誰も居ない。
復讐者（スネーク）の復讐は失敗に終わった。

「やっぱ生きてたな」「蛇は執念深い事を知らないのか、あいつ等？」

復讐者（スネーク）のすぐ近くから、二人の会話が聞こえる。
そこに居るのは、戦争時代では知らない者は居ないと言っても過言ではない二人、二神竜也と、戎井浩輝が居た。

「まぁ、生きてたのなら訊きたい事があったから良いがな」
「教えて貰おうか。　お前に風魔の情報を教えた奴について」

復讐者（スネーク）には協力者が居た。
協力者のお陰で、正の居場所と現状を知り、自分の動きが伝わらない様になった。
その協力者について、この二人は調べに来たのだ。

「くくく、ナメんな。　これでも一応マフィアのボスだ。　話すくらいなら……」
「あ？」

復讐者（スネーク）の最後の悪あがきが実行される。
隠し持っていた太い針を、バレないように取り出し、

「死ぬまでだ」

自分の喉笛に突き立てた。

それから数日後の彩夏の病院には、新たな患者が増えていた。
患者とは、勿論正の事だ。
彩夏の治療のお陰で、一命を取り止めたが、暫くは入院する事になった。
現在は、ベッドで健やかに眠っている。
その隣では、薫が正を見守っていた。
薫も入院して、今頃ベッドで眠っている筈だが、薫の強い希望で、正の看病をしていた。
正の顔を見つめながら、薫は助けられた後の事を思い出す。
縄と猿ぐつわを外された薫は、言葉を発するよりも早く、正に抱き締められた。

『好きなんだ……』
『え……？』
『薫の事が好きなんだ。　だから俺に、お前を守らせてくれ』

そう言って正は、薫の返事を訊く前に意識を失った。
そして今、薫は正と共に居る。

「卑怯ですよ、言いたい事だけ言って、眠っちゃうなんて……」

正の告白を訊いて、薫の圧し殺していた正への想いが、滲み出してしまった。

「私も好きです」

安らかに眠っている正の口に、薫は自身の口を近付ける。
二つの影が、一つに重なった。

その頃、仁は優也と流香と一緒に、待合室に居た。

「正の奴、椿に自分の事を話したんだな？」
「そうでしょうね」
「いきなりどうしたんだ？」

仁は決心した様に、二人に言った。

「そろそろ、皆に俺の事を話すべきだと思ってな」

優也達以外には、ずっと隠し通すつもりでいた仁だったが、遂に、
全て話す決意を決めた。
自分の過去を。

第８８話　風の悪魔と氷の舞姫（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「最初は烈火竜さんからの質問だ。　ありがとう。『美優の脳味噌は、『３年Ｚ組』ように、ババロアみたいな脳味噌ですか？』ババロアです」

美優

「即答！？　って言うか、何で仁が答えるの！？」

仁

「次は竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の海華からだ。　ありがとう」

美優

「無視ですか！？」

仁

「『最近作者が気に入ってる黒城姉妹に質問。実は二人が好きな人は同じ人なんだけど～、そこんとこどう思う？』」

流香

「流石にこれだけは譲れないわよ……」

ルナ

「……」

闇夜

「只今、ルナは葛藤中です」

仁

「大変だな」

闇夜

「お前のせいだよ」

仁

「次は聖なる焔さんからだ。　ありがとう。『闇夜さんに質問で

す。　マイナーアニメで好きなものは？』」
闇夜
「どんなのがマイナーアニメかわかりませんが、『阿佐ヶ谷Ｚｉｐｐｙ』と言う漫画が好きです。　多分マイナーかと」
仁
「質問は以上だ」

仁
「さて、次回は遂に俺の過去編だが」
闇夜
「次回の投稿で、投稿話数が百になります！」
美優
「嘘っ！　もうそんなにしたの！？」
仁
「番外編や登場人物設定を合わせてな」
闇夜
「ここまで続けられたのも、皆様のお陰です！　ありがと、痛い！」
仁
「そう言う事は次回に言え。　俺の話の後書きでな」
美優
「あ！　記念すべき百話目が、主人公の優也でも、ヒロインの私や優花の話でもなく、仁の話じゃん！？」
仁
「今更気付いても、もう遅い！　記念すべき百話は俺が頂いた！」
美優
「悔しいぃぃぃ！」
闇夜
「じ、次回も宜しくお願いします！」

次回

第８９話　過去編４【本物と偽物】

仁

「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第８９話　過去編４【本物と偽物】（前書き）

ちょっとグダグダですが、ちょこちょこ重要な所があるので、どうか見てください。

第８９話　過去編４【本物と偽物】

「実は俺は人造人間だ」
『はぁ？』

仁に呼び出された美優、進、薫、彪牙、総司は、気の抜けた声をもらす。

「それは九年前に遡る」
「いや、遡んなよ！！」

ポカンとする美優達を差し置いて、話そうとする仁に、進が鋭いツッコミを入れる。
前回は出番が無かっただけあり、気合いが入っている。

「何でだ？」
「いきなり呼び出されて、いきなり人造人間だって言われて、いきなり昔の話をされても着いていけるか！！」

確かに、と仁の後ろで話を訊いていた流香は頷く。
いつも仁はマイペース過ぎる。
因みに優也と優花は、薫の代わりに正の看病、と言うか見張りをしているので、今はいない。

「そうか。　それはすまなかったな。　取りあえず、俺の話を訊いて欲しい」

やはり順を追って話すべきかと、仁は少し反省する。

「何故、突然話そうと思ったんですか？」

総司が全員を代弁して、疑問を口にする。

優也は人斬りとして、正は暗殺者として、流香は吸血鬼として、各々が自分の正体を話した。

三人が話しても、仁だけは何も話そうとはしなかった。

それが突然、いきなり自分の正体を明らかにしたのだ。

疑問に思わない筈がない。

「お前達を信用した。　それが理由じゃ不満か？」

当たり前の様に仁は言う。

信用してくれたと訊き、美優達は悪い気はしなかった。

「それじゃあ改めて話そうか。人造人間として生み出された俺の、雷道仁の過去の話を」

何故仁は生み出されたのか。　どう言った経緯があったのか、遂に紐解かれる。

第８９話　過去編３【本物と偽物】

父親も母親も科学者だった。
父親は科学者の仕事で、いつも家には居なかったが、マメに連絡はしていた。
母親は、科学者としての仕事で、一日の殆どは家に居ないが、普通と言えば普通の暮らしていた。
そして俺は、ちょっと特殊だが、普通に暮らしていた。
特殊って言うのは、この頃から何故か黄竜と契約していた事と、六歳前後とは思えない考えや態度を取っていた事だ。
流石にこれでは駄目だと思って周りに合わせようとしたが、全く駄目で、どんどん孤立していった。
いつしか、自分は本当に人間なのかと思うようになった。
何処にも人間らしさが無い俺は、人間だと名乗って良いのか？
そんなある日、偶然一人で立ち寄った公園で、一人の子供と出会った。
誰も居なくなった公園に、一人で寂しげな眼をしてブランコに座った、俺と同い年くらいの男の子。
いつもなら気にもしなかっただろうし、すぐに立ち去っただろう。
だが何故か、その子を放っておいてはいけないと思った。
俺が近付いて来た事に気付いたその子は、物珍しそうに俺を見上げてきた。
何か俺の顔に付いてるのか？　と言うかそれ以前に、俺は何をしてやれば良いんだ？
こんな事なら、人との付き合いをもっと勉強しておくべきだった。
そうこうしていると、目の前の子が、不安そうな表情を浮かべていた。
端から見れば、この子を虐めに来たようにしか見えない。
こうなればやけくそだ。
出来るだけ優しく、その子に手を差し伸べる。

不安そうにしていたその子も、おずおずと俺の手を握った。
そして思った。
この子には、俺から手を差し出して良かったと。
理由はわからないが、何となく、そう思った。

その日から、俺はその子と一緒に居る事が多くなり、この子の事でいくつか知った事がある。
虐めを受けて、友達と言える人物が居ない事。　それは子供だけではなく、大人からも。
直接訊いた訳でも、誰かから訊いた訳でもないが、一緒に居ると良くわかる。
大人達がこの子を見る眼は、まるで化け物でも見る様な眼だと言うことが。
そんな大人の態度を見て、子供が真似をするんだろう。
良く見れば、この子の体の所々に傷があった。
虐めが原因で出来た傷だろうな。
でも、俺が一緒に居るからか、虐めをする奴なんて現れない。
まぁ、俺は関わりたくも無いほど嫌われてるみたいだからな。
後一つ、わかった事があった。
手を差し伸べたのは俺だけど、俺の手を引っ張って行ってくれるのは、この子だと言うことだ。
俺が何処に居ても、光の下に連れ出してくれる様な気がする。
だから手を差し出したのだろうか。
まぁいつかわかるだろう。
と考えながら、いつも通り、その子と一緒に居ると、殺気を感じた。

あの子を見る大人と似た感覚がするから、まず間違いない。
殺気を感じた方へ、目線を向ける。
目線を向けると、殺気と視線が消えた。　その際に、白い髪が見えた。
髪が白い以外に正体はわからなかったが、一瞬視線が重なって、少しだけ感情が読み取れた。
明確な例えは考え付かなかったが、殺気以外にも何か、敵意以外の何かがあった。

俺はこの子を家まで送り届けていた。
さっきの奴の事もあり、一人で居させるのはマズイと思ったんだが、会話が無い。
俺もこの子も無口だからな。
今思えば、最低限の会話しかしなかったし、名前すら名乗っていない。
そうだ。　何か可笑しいと思えば、俺の名前を教えてない。
この子の名前は教えて貰ったのにな。
あ、だから無口なのか？
俺が名前を教えるのを忘れていたから、話し掛けずらかったのか。
理由がわかれば、後は実行するだけだ。
俺が名乗ろうとしたその時、前から真っ黒な長い髪を靡かせた女の人が歩いてきた。
一目見て言えるのは一つ。　綺麗だと言う事だ。
その女の人を見ると、隣に居た子は何処と無く嬉しそうな表情をして駆け寄る。

女の人も、その子と話していると嬉しそうにしている。
会話からすると、二人は親子らしい。
親子水入らずと言う言葉もあるし、このまま立ち去るか。
そう考えながら、立ち去ろうとした俺に、その子の母親が話し掛けてきた。

「貴方が仁君？」
「あ、はい」

いきなり話し掛けられて、普段は敬語を使ってしまった。
もう面倒だから敬語で良いか。

「一緒に遊んでくれてありがとう。　この子、いつも貴方の事を話してるのよ」
「……そうですか」

そんな事を話していたとは。
意外と嬉しい。

「これからも、この子の事を宜しくね」
「あ、はい」

そう言うと、二人は立ち去っていく。
その際、あの子は俺に小さく手を振っていた。
俺も手を振り替えしながら、ちょっとした違和感について考えた。
あの人は、俺にあの子の事を頼んだ。　そこに違和感を感じたんだ。
まるで、自分には無理だと言っている様に聞こえた。
どれだけ考えても答えが見付からない。
どうせ明日もあの子と一緒に居るし、考えても意味は無いか。
俺も家に向かって歩き始める。

明日もまた会える。
そう思っていた俺だったが翌日から、あの子に会う事は無かった。

ここ数日、俺は一人で過ごす事が多くなった。
母さんは何処かに出掛けたまま帰って来ない。　家に居ない事はしょっちゅうあるが、何日も帰って来ないのは可笑しい。
あの子もあれから顔も見てない。
勿論、食べ物は一週間分はあるから、空腹にはなりはしない。　じゃなかったら死んでる。
父さんからの連絡も、ここ数日途絶えている。
つまり、俺は一人の状況が続いている。
普通の子供なら、寂しくて泣き叫ぶだろうが、俺は泣きも叫びもしない。
寂しいと言う気持ちもわからない。
だけど、何も考えられない。　考える気にもならない。
これが寂しいと言う事なのか、俺にはわからない。
こんな事じゃあ、また人間じゃないと思ってしまう。
そうだ、最近は人間じゃないなんて考えなかった様な気がする。何でだっけ？

「……母さん？」

いつ帰って来たのかは知らないが、部屋の入口に、母さんが立っていた。
駆け寄ろうとしたが、様子が可笑しい事に気付くと、足が動かなく

なった。
何が可笑しかったなんて、誰が見てもわかる。
眼に生気の欠片も無かったからだ。
その日から、優しかった母さんは居なくなった。

体中が痛い。
俺は今、体中に痣を作っている。　酷い所は包帯を巻いているくらいだ。
母さんは帰ってきてから、外に出ないで、よく俺をぶつようになった。
所有、虐待と言う奴だ。
だけどその度に、泣きながら、何度も謝って俺の怪我の手当てをしてくれる。
その涙を見てから、俺は極力、母さんに近付かない様にした。
別に母さんが嫌いになった訳じゃない。
何故かは知らないが、俺を痛め付ける度に、母さんが涙を流すのなら、近くに居なければ良いと考えたからだ。
それで母さんが泣かないのなら、俺はどうなったても良かった。
泣かれる事に関してはこれで良いんだが、一つ疑問が残った。

『あの子は理仁(りひと)じゃない……あの子は理仁じゃ……』

母さんの様子を隠れて見ていた時に言った名前だ。
『りひと』、そんな名前は訊いた事ないんだけど、母さんは何でそいつの名前を……。

名前だけじゃ何もわからない。『りひと』って奴の事は後回しにして、今は目の前の事に集中するか。
俺はあの子の家に向かっている。
何日も会ってないんだ、気になって仕方ない。
そうこうしていると、あの子の家に着いた。
場所はちゃんと調べたから間違いない。
早速インターホンを鳴らしみた。
やっぱり俺って行動力あるな。
……出ないな。
居ないのか？
閉まってるとは思いつつ、ドアノブに手をかけてみる。

「開いた……」

鍵も閉めないなんて不用心だな。

「お邪魔します」

勝手に入る俺も俺か。
そう言えば、何でこの家には表札が無いんだ？

家の中をくまなく捜してみたが、何処にも居ない。
代わりに見付けたのは、床に薄く残ったいくつかの血痕だった。
少し冷静になって考えてみる。
この家には表札が無かった。　だが最初から無かった訳じゃない。

最近になって外された様だった。
この血痕も、一つならともかく、いくつもあるのは異常だ。　血痕の拭き方も、必死に隠そうとしている様な拭き方をしている。
一番可笑しいのは、ここで何かがあったのは明らかなのに、何故誰も騒がない？
この家で何があったんだ。

結局、謎は解けず、俺は帰路に着いていた。
わかった事は、あそこで起こった誰にも知られていなくて、存在すら消されていると言うことだ。
そこまでわかると、怒りが込み上げてくる。
これが怒りだと多分思うから、怒りと言っている。

「ただいま」

少し小さめの声で言ってみた。
流石に痛いのは嫌だからな。
取りあえずリビングに行こう。　まずは機嫌だけでも確認しないとな。
少しだけ扉を開こうとしたが、扉は全開になった。
勢い余った訳でも、母さんが中から開けた訳でもない。
部屋の中で起こっている光景を見て、呆然としてしまったからだ。

母さんが首を吊っていた。

母さんはそのままこの世を去った。
父さんが何処にいるかもわからず、あの子も居なくなって、たった一人になった俺だが、涙も出なかった。
母さんが死んだ時も、葬式の時も、涙も流さず、周りからは気味が悪いと言われた。
気味が悪いと言われても、涙の流し方もわからないのに、どうやって流せば良いんだ？　教えて欲しい。
俺は母さんの友達と名乗る人に引き取られた。
それは善意でも同情でもない。
その人は結婚して家庭を持っているが、俺と家族とでは、明らかに眼が違う。
引き取られてすぐに気付いた。
財産目当てなんだと。
父さんも母さんも、沢山、金を持っていた。
その事を知って、俺に近付いたんだ。
引き取られてから、何不自由無く暮らしたが、俺は前より表情が乏しくなった気がする。
あぁ、そうか。　母さんやあの子のお陰で、俺は人間で居られてたんだ。
失ってから、気付くなんてな。
だからこそ、立ち止まっている訳にはいかない。
知るべき事がある。

母さんが自殺した家は、まだ片付けられていない。
いつかは片付けられてしまうだろうから、片付けられる前に、母さんが長い間帰らなかった事について調べる。
優しかった母さんが、豹変した理由がそこにある筈だ。
母さんの部屋の、机の引き出しを引っ張ると、そこには一冊の日記帳があった。
心の中で謝りながら、日記を盗み見る。
初めて知った。
父さんが殺されてしまった事を、そして、俺は死んでしまった父さんと母さんの一人息子、雷道理仁（らいどうりひと）のクローンだと言う事を。
別の引き出しには、父さんと母さんと、俺、いや違う。　俺のオリジナル、理仁（りひと）が写った写真があった。
理仁（オリジナル）と俺（イミテーション）では、同じなのは顔だけ、理仁（オリジナル）は飛びっきりの笑顔で写っていた。
俺（イミテーション）が写っている写真も何枚かあったが、どれも無表情だ。
理仁（オリジナル）のクローンと言う事は、俺と理仁（イミテーションとオリジナル）の能力も同じなんだろうな。
だけど、理仁（オリジナル）は俺（イミテーション）と違って人間らしさがある。
父さんも母さんも、俺にそれを求めていたんだろうか？
だとしたら、母さんが豹変した理由もわかる。
父さんが死んだことと、俺が理仁（イミテーションとオリジナル）とは違うことが、母さんには耐えきれなかったんだろう。
俺は理仁（イミテーションとオリジナル）になれない。
俺は失敗作だったんだ。

「……手紙？」

日記の間に、手紙があった事に気付いて、手に取ってみると、裏には、仁へ、と母さんの字で書かれてあった。
何が書かれているかわからない手紙に、一瞬不安を感じたが、意を決して読んだ。

『貴方を残して逝ってしまうお母さんを許して下さい。　でも、あの人を失って、私の心は壊れてしまった。　そして貴方を理仁（りひと）と重ねてしまう。　その度に錯覚してしまうの。　この子は偽物だって。仁は仁でしかないのに、どうしても錯覚してしまう。　このままでは、いつか貴方を殺してしまう。　だから私は死を選んだ。　貴方だけには生きて欲しかったから。　言い訳にしか聞こえないでしょうし、私の言うこと何て信用出来ないかも知れないけど、最期のこの言葉を訊いて欲しい。　母親らしい事も出来ないで、貴方には寂しい思いをさせてしまったけど、貴方の事を、世界中の誰よりも愛しています』

頬を伝った水滴が落ち、手紙を濡らした。
水滴の正体が何なのか最初は気付けなかったが、これが涙なんだと知った。
この手紙が嘘だったとしても、俺には、何よりも嬉しかった。
そして悲しかった。
やっぱり、気付くのが遅すぎた。
俺も、母さんも。

雨が降る中、崖の下で炎上する車を、傘も持たず、俺は見下ろしていた。
炎上する車の中には、俺を引き取った家族が全員乗っていた。
あの車は、カーブを曲がりきれず、ガードレールを突き破って崖の下へ落ちていった。
俺が無事なのは、こうなる事がわかっていたからだ。
あの家族が俺を一人、家に置いて、ブレーキがイカれた車に乗る事を。
ブレーキの事は、夜中の間に俺が壊しておいたから知っていて当然だ。
何故こんな事をしたか？　母さんの死を利用して、醜く生きているあいつ等を見たくなかった。
いや、許せなかった。　これが一番理由になっている。
母さんが、父さんが、俺の家族を利用されるのが、どうしようもなく許せなかったんだ。
こんな事をしても、母さん達が生き返る訳がない。　それどころか、悲しませるだけなのはわかっている。
でも、許せなかった。
あの家族の家も燃やしておいた。
俺の存在を知っている人間はあまり居ないが、念の為に俺の存在は消しておいた方が良いと考えてだ。
本当に醜いのは俺だな。
罪の無い家族を殺し、逃げてまで生きようとする俺は本当に醜い。
だが、立ち止まれない。
父さんや母さんの事を知った。　本心も知った。　俺の事も、理仁（りひと）と言う俺の兄の事も。
あの子の事はまだ知っていない。
何処へ行ってしまったか、生きているのか、何があったのか。
捜し出さないといけない。
理由は知らない。

「派手にしたな」

背後から声が聞こえる。
後ろには、灰色の天然パーマの男が傘をさして立っていた。
見ただけでわかる。
ただの人間じゃない。
殺されそうだな。

「そんな怖い顔すんな。　別に取って食おうって訳じゃない」
「じゃあ、何の用だ？」

本気で死を覚悟したが、嘘を吐いている様には見えなかったから少し安心した。

「これから先、お前は何かの目的の為に生きるだろうが、今のお前じゃすぐに死んじまう」

それくらい言われなくてもわかってる。　と言いたかったが、嘘だ。
何も考えてなかったし、何もわかっていない。

「どうだ？　俺に着いてきたら、お前の目的を達成できるだけの力はくれてやるぜ？」

怪しい。　絵に描いた様な怪しい話だが、願ってもない話だ。
こいつの言う事が嘘だろうと本当だろうと、それでも良い。
藁にだろうとすがってやる。

「返事の代わりに、名前を教えて貰おうか。　忠告しておくが、名前を言ったら了承したって事になるからな」

一々言わなくてもわかってる。　お前こそ、俺がどんな答えを言うかわかっているくせに。

「雷道、雷道仁だ」

俺は理仁（りひと）みたいに完璧にはなれないが、俺は俺として生きていく。
太陽も顔を出さない程、雲が空を隠し、雨が地を濡らしたその日、
俺は一人の男の子を捜す為、偽物から本物になる為に、歩き出した。

「めでたしめでたし、と言う訳だ」

『……』

話し終えたが、誰も喋らないな。
仕方ないか。　ただの感情任せに、人を殺したなんて話を訊いたんだからな。

「こんな話をして悪かったな。　忘れて良いぞ」

「誰が忘れると思いますか？」

霧藤か。
ちょっと驚いたな。
もう少し何か違う事を言うと思ったのにな。

「今更君の昔話を訊いて、君から離れていく人なんてここには居ま

せんよ」

彪牙達の顔を見渡しても、誰一人、眼を逸らさず、強い眼で俺を見ていた。

あぁ、本当にお人好しなんだな、全員。

けど、そんな奴等だから俺も……。ヤバッ、顔がにやけそう。

「なぁ仁。　一つ訊きたいんだけど」

必死ににやけを抑えている俺に、誰かが訊いてきた。

確かこいつは……。

「誰だっけ？」

「進！　水野進！　えっ、何！？　あんた完全記憶能力者だよね！？」

そう言えばそうだった。

地味すぎて思い出すのにも時間がかかった。

完全記憶に対抗するとは、恐るべしだな。

「変な事言ってないで、俺の話を訊け！」

「え、声に出てた？」

それは気を付けないとな。

「で、何だ？」

「無駄にツッコまされた気がする……」

ツッコミが取り柄の癖に。

「あんたの言ってた子ってさ、結局見付かったのか？」

やっぱり訊いてきたか。
そこが一番気になる所だろうからな。
だが……。

「これ以上は秘密だ」
「はぁ！？」

水野以外にも、神道と霧藤も不満げな顔を向けてきた。
そんな顔しても無駄だぞ。
ここから先はまだ言えない。
俺だけの話じゃないからな。
どうしても訊きたいなら、最後まで着いてきてみろ。

第８９話　過去編４【本物と偽物】（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「最初は烈火竜さんからの質問だ。　ありがとう。　『美優はお小遣いをどのくらい食べ物に費やしてますか？あと、誰からお小遣いをもらってますか？』」

美優

「食べ物は優也と優花が買って来るから私は買わせて貰えないよ。　時々お菓子は買うけど。　お小遣いは、お金を管理してる優花に貰ってます」

仁

「ＤＥＡＤＰＯＯＬ　ＺＥＲＯさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】の翔からだ。　ありがとう。　『皆の好きな麺類は何だ？俺はそばだぜ！』」

優也、美優、優花、彪牙

「うどん」

進、総司、龍、正

「ラーメン」

仁、薫

「そば」

流香

「スパゲティ」

仁

「竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の士からだ。　ありがとう。　『修二に。今回のことについての一言は？』」

修二

「ウソだあああああああああああああああああああああ

ああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」
闇夜
「あはは…………」
仁
「予想通りだな。　聖なる焔さんから質問だ。　ありがとう。　『修二さんに質問＜＜修二さんがボコ殴りしているシーン。修二さん、どーして氷漬けにしなかったんですか？「生きてる事を後悔させてやる！！」というのなら、殴るより氷漬けの方がイヤでも後悔させられるのでは……』」
修二
「本気で言っているのか！？　凍り付けとは仮死状態なんだぞ！　ならば痛め付ける以外に方法があるか！？」
仁
「あの後、龍と一緒にタコ殴りなそうな（嘘です）。　次が最後だ。　星空の侍さんの新小説【ようこそ！！大和探偵事務所へ！】の宗次郎からだ。　皆、ちゃんと見ろよ」
闇夜
「何勝手に宣伝してんだよ」
仁
「『浩輝さんは…年下好き…だけど…見た目が少女…でも…実は…年が自分よりも…上の人だと…対象…？それとも…対象外？…zzz』」
浩輝
「う、うわあああああああああ！！　俺はどうしたら良いんだあああああああ！！」
仁
「結局決められずだ」
仁

「今回は中々グダグダだな」
闇夜
「うっ、確かに……。　だが、ちょっと大事な事もあったような気もする」
仁
「まぁ、いつかわかるだろうから、その時を楽しみにしていてくれ」
闇夜
「次回も宜しくお願いします！」

次回
第９０話　夏休み＝海
竜也
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第９０話　夏休み＝海

「そうだ、海に行こう」
「あん？」

そうだ、京都に行こう。　的なノリで、求人広告を眺めていた浩輝に、竜也が呟いた。

「せっかく夏休みに入ったんだ。　全員で行こう」

お忘れかも知れないが、竜也は一応、優也達が通っている学校の教師だ。
その学校が先日、夏休みに入っていた。
入ると同時に、竜也は浩輝の家まで来て、突然そんな事を言い出した。

「全員って、俺もか？」
「当たり前だろ」

さも当然の様な口振りの竜也に、浩輝は肩を落とす。

「もう全員に声をかけといた」
「用意周到か！」

全員と言ったが、一体誰を呼んだのか、どれだけの人数になるのか、浩輝は不安を隠せない。

「言っとくが、この機会に最近出番の無い奴等を出そうなんて考えじゃないからな。　作者の技量を考えろ」

「訊いてねぇよ」

出番無い人が多いんですよね。

「俺は無理だぜ。　あいつ等の世話しなくちゃなんねぇからな」

浩輝には、グランツ、ルミア、アラン、キラの四人の世話をしなくてはならない。

だから海には行けない。　言い換えれば、厄介ごとには巻き込まれないと安心しきっていた。

「浩輝！　こ～う～き～！」

「キラ？」

すると、キラが上機嫌な声色で、部屋に飛び込んで来た。

「どうし……っ！？」

キラの格好を見て驚愕する。

上半身裸でスクール水着を履き、シュノーケルを装備し、浮き輪を手にして、これでもかというくらい海に行く気満々の格好をしていた。

その後ろでは、グランツがビートバンを腋に抱え、アランはモリを手にし、ルミアはビーチボールを持っていた。

一人可笑しいのが居るが、間違いなく海に行く気満々だった。

油が切れた機械の様に、ぎこちない動きで竜也を見る。

「二泊三日だから」

憎たらしい程マイペース男は憎たらしい笑みを浮かべ、憎たらしい

ガッツポーズをしながら、憎たらしく言った。
こんな奴が師匠じゃ、雷道があんな性格になるのは仕方ないか。
と考えながら、仕方なく準備に勤しんだ。

第９０話　夏休み＝海

優也、進、彪牙、正、真司、修二の六人は、デパートの水着売り場の片隅で雑談をしていた。
それ以前に、何故こんな場所に居るかと言うと、

「ねぇねぇ！　こんなのはどうかな？」
「う～ん、こっちの方が似合わない？」
「美優ちゃんはこっちで、優花ちゃんはこっちの方が似合うよ」
「ルカ、これは貴女に似合うわ」
「布が少な過ぎます」
「可愛いのにサイズが合わない……」
「困りましたね」
「嫌味にしか聞こえないな」
「全くであります」
「こっちも良いけどこっちも捨てがたい……どうしよう……

…」

美優、優花、薫、流香、雅、ルナ、エルザ、雪奈、クリス、渚達の買い物に付き合っているからだ。

「長いな」

「女の買い物は長いもんだ。　我慢しろ」

「総司みたいな事言うな。　あんた」

総司と言えば、この場に居ても可笑しくないが、今日は居ない。

茜のお見舞いに行っているからだ。

実は総司は、最初茜を置いて海に遊びに行けないと言っていた。

梃子でも動かなさそうな、姉思いの総司だったが、竜也が茜も連れていくかと、冗談で言うと、喜んで了承した。

やはり海には行きたかったらしい。

因みに、患者である茜も半ば無理矢理だが、同行すると言う事で、彩夏とナミも海行きが決定した。

「咲魔達も誘ってたよな」

「あぁ。　四人程な」

咲魔、九妖、黒烏、サクラも、竜也により呼び出されていた。

最初は総司同様断っていた咲魔だが、他の妖怪達に、たまには息抜きして下さいと言われ、三人を連れて行く事になった。

「つーか、多すぎねぇか？」

優也達十四人。　妖怪組四人。　悪魔組四人。　吸血鬼組四人。

竜也、浩輝、亮、紗理奈、彩夏、ナミの六人。

優に三十は超えている。

しかもまだ増える可能性はある。
登場人物を一気に出そうとしたのは失敗だったのだろうか？

「今ナレーションで変なのが聞こえたんだけど……」
「気のせいだろ」

そうこうしていると、美優と優花と薫が会計を済ませて戻ってきた。

「お待たせ！」
「もう良いのか？」
「うん、私達はね。　流香達はもう少しかかりそう」

優也達から少し離れた場所で、騒がしくしている集団がいた。
それが流香達と言う事はすぐにわかった。

「多分、ルナさん辺りが騒いでるんだと思うよ」
「流香も大変だな」

正が相槌を打ってきて、薫は驚いてしまう。
正に言ったつもりでは無いので驚いたが、理由はそれだけではない。

「ど、どうした？」
「ふぇ！」

様子が可笑しい薫に気付き、戸惑いながらも、顔を覗き込む。
距離としては近くはないのだが、薫は真っ赤に顔を染める。
病院での出来事以来、今まで以上に正を意識していた。
正は薫と自分からの告白の時も、薫の行動の時も気絶していたので、
何も覚えていない。

「いやその……あ！　買い忘れた物があるから買ってきますね！」
「えっ、お、おい！」
顔を真っ赤にしたまま、薫は正から離れていった。
薫の後ろ姿を見ながら、正は呆然としていた。
「き～さ～ま～！」
「！」
吹雪の様に凍え死にそうな殺気が、正の背中にヒシヒシと伝わる。
誰が放っているなんて愚問である。
「薫に何をしたあああああああああ！！」
「うおおおおおおおおおお！！」
修二は正の胸ぐらを掴んで振り回す。
成す術もなく、正は絶叫した。
「そう言えば進」
「ん？　どうした？」
巻き込まれたくはないから正には犠牲になって貰おうと、優也と進は考えて会話を始めた。
「親を良く説得出来たな。　泊まり込みなのに」
「ああ、その事……」
乾いた笑みを浮かべ、進は先日の両親との会話を話し出した。
『友達と二泊三日で海に行きたい？』

『うん、そうなんだけど……駄目かな？』
『良いわよ』
『やっぱり駄目だよな……はい？』
『お土産買ってきてね』
『いやいやいや……良いの？』
『ああ！　せっかく友達と行くんだ！　良い思いでを作ってきなさい！』
『父さん……』
『その間に二人目に挑戦してみようか！　なぁ母さん！』
『……おい』
『進！　弟か妹、どっちが良い？』
『俺の感動を返せ！　ロリコン親父！！』
『ぐはぁ！！』
『あらあら』
『良い蹴りだ進！　お前なら頂点を狙えるぞ！』
『何の頂点だあああああああ！！』

「そこから何やかんやで二人も同伴する事に……」
「どう言う訳？　お前がお父さんに襲いかかる回想の何処に、両親が同伴する要素があった？」
「なぁ進」

回想を訊いていた真司は、ある一点が気になり、進に訊いた。

「お前のお父さんってロリコンなのか？」
「……」

やっぱり訊かれたかと、予想していた様な表情をしながら、相変わらず乾いた笑みのまま言った。

「見たらわかるよ……」
「「？」」

優也と真司は意味がわからず、小首を傾げた。

その頃、亮は必要な物を手当たり次第に鞄に放り込んでいたが、その殆どが、絆創膏や消毒液や、カメラのフィルムだった。

「ちょっと亮。　それどうするのよ？」

逆に無駄な物を入れていなかった紗理奈は、亮のパンパンに膨れ上がった鞄を見て、呆れながら訊く。

「優也と優花が怪我した時の為に決まってるだろ！　海だからと言っても、怪我する時はするからな！」
「それはわかったけど、大量のフィルムは？」
「勿論、夏の思い出を残す為さ」

カメラを紗理奈に向け、シャッターを切る。
突然だったので、顔を逸らす事も出来ずに撮られてしまう。

「ちょっと亮！」

許可無く撮られた紗理奈はカメラを奪おうとするが、

「優也や俺達の平和な日常は、少しでも多く残して置きたいからな」
亮のその言葉を訊いて止めた。
「この日常がいつまで続くかわからないけど、精一杯今を楽しもう」
「えぇ」
死神も魔女も、今はただの少年と少女。　年相応の子供らしく、仲間達と今を生きる事を決めた。
次の戦いが始まるその日まで。

「マジでか。　来れないのか」
『ああ、悪いな』

最後にまだ誘っていない史哉を誘おうと電話した竜也だったが、史哉は用事で来れないらしい。

「何か仕事か？」
『カイとちょっとな』
「あぁ、だからあの方は来れないんだな」

あの方とは、話しにも出たカイの事だ。
カイは一応、神なので、竜也は一応敬意は払っている。
そのカイも誘ってみたのだが、史哉と同じく、用事があると言われ、断られてしまった。

「残念だな。　久し振りに浩輝も一緒に酒でも飲もうと思ったのに」
『それも良いが、ちゃんと気を引き締めていけよ』
「何が？」
『どうせお前も仕事だろ？』

誰にも言っていないことを当てられたが、予想通りだったので、竜也は驚きはしなかった。

「まぁ確かに仕事だけど大した仕事じゃない。　それに今から行く場所、事情があってほぼ貸し切りみたいなもんだからな。　カイ様にもある程度金は貰ったし」
『抜け目ねぇな。　つーか、お前が様付けするのはやっぱり違和感がある』
「一応神様には敬意を払うぞ。　俺って陰陽師だし」

不良陰陽師の癖にと、史哉は心の中で悪態を吐いた。

二泊三日の旅行当日。
参加者の数に、優也と進は呟いた。

「「多っ！」」

朝だから周りの人は少ないが、優也達だけで三十人は居た。
端から見れば、間違いなくバスガイドツアーにでも見えるだろう。

数話を通して大人数を書くと言う、作者の一種の挑戦だ。

「そんな挑戦しなくていいだろ……」

「無謀だな……」

久し振りに作者と登場人物が話したと思ったら、こんな話かよ。

そんな事より、知らない人が二人ほどあっちに居るよ？

「ナレーションが教えるなよ」

「つーかあれ、父さんと母さんだし……」

すると進に気付いたのか、その二人が近付いてくる。

「凄いな進！　皆お前の友達か？」

「えっ、あぁ、うん、まぁ……」

黒い短髪で、中肉中背の眼鏡をかけた三十代後半のこの男が進の父親だと言う事は、優也はわかった。

だが、母親が誰なのかわからない。　わからないと言うより、信じがたいと言った方が正しい。

何故なら、父親の隣に居るのは、

「初めまして、進の母の水野沙耶（みずのさや）です」

どう見ても二十歳（はたち）にしか見えない、茶髪のロングヘアーの、スタイルの良いお姉さんだったからだ。

（見たらわかるって、こう言う事だったのか）

確かに見ただけなら、ロリコンと間違われても仕方がない。

「火渡優也君よね？」
「あ、はい」
若干戸惑いながらも、優也は返事をする。
「進ったらいつも貴方達の話をしてるのよ」
「ちょっ、母さん！　何話してんだよ！？」
ちょっとした隠し事をあっさりバラされ、進は恥ずかしくなる。
「何だ進？　何か優也君に知られたくない事でもあるのか？」
「あ～はいはいそうですね。　眼が若い子を追ってるお父さん」
父親のテンションが面倒くさいのか、若干イラつきながらデタラメを言う。
「人志（ひとし）さん？　どう言う事かしら？」
「かかか母さん……！」
ああ、人志さんって言うのか、と呑気に思いながら、優也はその光景を見ていた。
沙耶（さや）が恐ろしいオーラを放ち、人志に問いただしている光景を。
「お前の両親って楽しいな」
「ははは……サンキュー……」
お礼を言う進だが、やはり何処か笑みが乾いていた。
「そう言えば総司は？」

総司が居ない事に気付いたのか、進は辺りを見渡す。

「何か後から来るらしいぞ」

「つーかどうやって来るつもりなんだよ？」

眠ったままの茜をどうやって連れて来るのか、そこが一番の難関なのだが、総司にも何か考えがあるのだろう。

「よう、待たせたな」

少し高い位置から、竜也の声が聞こえる。

見上げてみると、バスの窓から竜也が顔を出していた。

二人で話していた優也と進は、バスがいつ到着したのかは気付かなかった。

「こんなもんどうやって借りたんだよ！」

浩輝は当然の疑問を口にする。

五十人は軽く乗れそうなバスを借りるのだから、それ相応の料金はある筈だ。

「頼んだら貸してくれたぞ。　なぁ仁？」

「なぁ師匠？」

竜也の隣から、仁が顔を出す。

何かしたなこの二人、と全員の心はシンクロした。

「ほら、早速乗れ。　出発するぞ」

竜也に促され、各々バスに乗り込んでいく。
バスには仁と竜也以外に誰か乗っていたが、それは次回に。
こうして、大人数での二泊三日の海旅行が始まった。
そして、作者の初大人数描写も始まる。

「お前のは知らねぇよ！」

進にツッコまれたので、また次回。

第９０話　夏休み＝海（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「初めは、竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の海華からだ。　ありがとう。　『女性陣に。海行くっぽいけど～、好きな人を落とせる自信はある？特に海だから体で♪』」

女性陣

『何て質問してるの！？』

闇夜

「あるそうです」

女性陣

『捏造しないでぇぇぇぇぇ／／／！！』

仁

「次はＤＥＡＤＰＯＯＬ　ＺＥＲＯさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】の銃人からだ。　ありがとう。　『そっちのハニー達にだ。もしこっちの男性陣の中から一人恋人を選ぶなら誰がいい？』」

闇夜

「作者権限で今だけは好きな人はいない設定で」

仁

「勝手だな」

美優

「う～ん、烈火かな」

優花

「ノーコメント」

薫

「冷司さんです」

流香

「翔ね」

雅
「……槍」
闇夜
「多くなりそうなのでここまでで」
仁
「最後は聖なる焔さんからだ。　ありがとう。『闇夜さんに質問です。　仮面ライダーで嫌いなキャラは？　桐谷京介を除いて』」
闇夜
「全ての作品を観たことが無いですが、今の所は居ません」

闇夜
「ふぅ、次回は凄い人数だ」
仁
「それ以前に、今回は好き勝手やったな、あのナレーション。　苦情が来るぞ」
闇夜
「マジでか！？」
仁
「さぁな？　それはそうと、次回大丈夫か？　そして何でこんな事をした？」
闇夜
「出番が無い人が多かったから、この機会に」
仁
「次回は崩壊するかもな。　既に崩壊してるが」
闇夜
「……すみませんでした」

次回

第９１話　海での一時

竜也

「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第９１話　海での一時

一面青が広がる海に、一行は辿り着いた。

「うわぁ～！　凄く綺麗！」

「本当。　凄い……」

各々、特に女性陣は感激の声をもらす。

海の水は一切汚れておらず透明で、底まで見えていた。

こんな海で泳げば、さぞかし気持ち良いだろう。

「ここに来んのも久し振りだな」

「咲魔様はここに訪れた事が？」

「まぁ、かなり昔にな」

咲魔が言う昔とはかなり昔なのだろう。　それこそ、九妖が生まれるより前。

「九妖様！　九妖様！　早く行きましょう！」

「落ち着けサクラ」

「お前、猫だろ」

今にも海に飛び込みそうな、水が苦手な筈のサクラを、黒烏と九妖が引き止める。

「楽しそうで良いなお前等……」

「本当にな……」

バスから見馴れない金髪と白髪の二人の少女と、いつぞや見かけた

黒髪の少女が降りてくる。
黒髪と白髪の少女は哀愁を漂わせ、金髪の少女は無表情だった。

「何を落ち込んでる？」
「「お前は黙ってろ」」

金髪の少女を、黒髪と白髪の少女が睨み付ける。

「まぁまぁ、そんなに落ち込まないの。　優也、正」
「「紗理奈さん（あんた）のせいですよ（だろ）！」」

お気付きの方もいるだろうが、黒髪の少女こそ、我等がユウちゃんである。　猫耳と尻尾は無い。
そして、背中まで伸びた金髪無表情の少女は、雷道仁。　短髪白髪の目付きのキツイ少女は、風魔正である。
何故また、仁と正を含めて女体化しているかと言うと、道中でのある事が原因である。
大した事でもないが、移動中、暇だと言う事で、数人でババ抜きをした。　ビリは紗理奈の薬を飲むと言う罰ゲーム付きで。
最初の犠牲者は、何故かこう言った勝負事では全く勝てない正だった。
正一人が犠牲になり、ババ抜きは終了する筈だったが、一人だけは嫌だと、何ともヘタレな懇願に、仕方なく第二ゲーム目が始まった。
二ゲーム目も、これまたアッサリと決着が付いた。
この中で比較的不運な部類の優也が第二の犠牲者となる。
いつもの勘は、不運な事に発揮される事はなかった。
この際だから三人目も決めてしまおうと、最終ゲームが幕を開ける。
この最終ゲーム、第一、第二とは比べ物にならない程大接戦だった。
誰もが犠牲になりたくない一心で、カードを引く。　最後は、仁と彪牙の一騎討ち。

仁の手札はダイヤの３一枚。　彪牙の手札は二枚。　つまり、二枚の内、一枚はジョーカーである。
そこで仁は彪牙の視線を追う。
彪牙は相手を見ているつもりが、無意識にジョーカーを見る癖があった。
誰よりも自信のあるこの眼があれば見切る事が出来る。　絶対の自信は、彪牙の対抗策により打ち砕かれた。
何と彪牙は眼を閉じたのだ。
自分の癖に気付き、見破られている事にも気付いた彪牙の対抗策だった。
どれだけ優秀な眼を持っていようと、見えなければ意味は無い。
これによって、勝率は五分五分。
自分の直感を信じ、仁は右のカードに指をかけ、勢いよく引いた。
ゆっくりとカードを見てみると、書かれていたのは勝利と言う名の３ではなく、敗北と言う名のジョーカーだった。
彪牙は難なく仁のダイヤの3を引き、呆気なく決着が付いた。
前の犠牲者二人、特に第一の犠牲者はこの結果に大変喜んだそうな。
余談だが、美優は全て勝負、圧倒的な強さで、一番最初に勝ち抜いていた。
最後の実権者が決まり、哀れな犠牲者三人は、魔女の薬の餌食となった。
こうして、ユウちゃんが再来し、ジンちゃんとセイちゃんが誕生した。

「二回目だぞ……。　二回目は流石に読者が引くだろ……」
「今日どうすんだよこれ……」

因みに今回の薬は、以前と違って数時間で効果が切れる。
恐らく、今日の夜には元に戻るだろう。
それでも、海に入る時までには間に合わないだろう。

後、渚や進の両親は適当に話したら、簡単に誤魔化せた。

「なぁにしてんだ？　置いてくぞぉ！」

遠くの方から、竜也が三人を呼ぶ声が聞こえる。
気付けば、三人の周りには誰も居なかった。
回想に浸っている内に旅館に向かったらしい。
魔女の薬の効果は時間が解決してくれると考え、憂鬱ながらもユウとセイは歩き出し、女の姿でも煙草を吸いながら、ジンも歩き出した。

第９１話　海での一時

「うわぁ～」
「旅館もすげぇな」

数日お世話になる旅館を前に、一行は呆気に取られていた。
ここの旅館は雑誌等に取り上げられたりはしないのだが、逆に何故、雑誌に取り上げられないのか、不思議で仕方ない程、大きく、高級と名が付くに相応しい旅館だった。

「お待ちしておりました」

旅館から、大和撫子と呼ぶに相応しい和服女性が現れ、お辞儀をする。

「よぉ女将。　二年振りか？」

「三年振りですね」

馴れ親しんだ態度で、竜也と女将は話をする。

やはり、竜也はここに来たことがあるらしい。

「皆様のお部屋はご用意させて頂いております。　ご案内致します」

丁寧な口調と態度で、竜也達を案内しようとする。

「いや構わねぇよ。　ここの事なら俺も知ってるから、案内は俺に任せろ」

これだけ広い旅館を何で良く知ってるのか疑問に思ったユウ達だが、ツッコまない事にした。

「宜しいので？」

「あぁ。　お前はゆっくりしろ」

行くぞお前等、と言って、竜也はユウ達を部屋に連れていった。

その中で一人の女性と、一人の小さな子供が、女将の前で立ち止まる。

「初めまして、二神静（ふたがみしずか）です」

「二神佳奈（ふたがみかな）です！　五歳です！」

こちらも大和撫子と呼ぶに相応しい茶髪の女性と、茶髪の小さな女の子が挨拶をする。

この二人こそ、竜也の奥さんと一人娘である。

ユウ達には、バスの中で既に自己紹介を済ませたが、何でこんなお淑やかな人と竜也と結婚できたか、疑問に思った。

「お話はお訊きしています。　三日間、宜しくお願いします」

「いえ、こちらこそ宜しくお願いします。　静様」

二人に光が差し込む（様に見える）。

「眩しい！　眩し過ぎるよ！」

「後光が差してるぞあの二人！」

「ノリ良いわねあんた達」

悪魔達は（アランとキラだけだが）二人の光に眼を背けた。

「心が綺麗な人が揃ったら光が生まれるんだな」

「何で竜也なんかと結婚したんだろうな？」

「おいこら、どう言う意味だ？」

何故竜也が結婚できたか。　それは作者にも謎である。

「お前等！　自由行動だ！　海でも何処でも行ってこい！」

結構な言われように、竜也は拗ねて全員に言い放つ。

『は～い！』

自由行動と訊いた瞬間、全員旅館の中へ走り去った。
竜也を置き去りにして。
連れてきてやったの俺だろ。
そう思いながら、少なからずショックを受ける竜也だった。

「なぁ、この後どうする？」

綺麗に清掃された廊下を、犠牲者三人が歩いていた。
竜也に自由行動と言われても、殆どのメンバーが海に行こうとしていた。　優也達もそのメンバーだった。　そう、だったのだ。
今はちょっとした罰ゲームで肉体が女の子になってしまっている哀れな犠牲者三人。
こんな姿で着替えなんて出来はしないし、そもそも水着が無い。
だから元に戻るまでの事を考えていた。

「せっかく海に来れたのにな……」

ユウは心底残念そうに、顔を俯かせる。
これ程海に来るのを楽しみにしていた事には、理由があるが、それはまたの機会に。

「そんなに落ち込むなよ。　俺達が……」
『きゃあああああああ！！』

セイが何か良い事を言おうとしたその時、少女達の悲鳴が木霊した。

「！　何だ！？」

「流香達が居る方からだな」

悲鳴は美優や優花達が居る部屋から聞こえてきていた。　そこには薫も居る。

「薫！」

女の姿でも、好きな女の子が何か危機に迫っていると考えると、自然と体が動くらしい。

駆け出したセイを追いかけ、ユウとジンも走り出した。

「「「……」」」

現場に駆け付けた三人は言葉を失う。

何故なら少女達が居る部屋の前には、進、亮、修二、浩輝、咲魔、黒烏、グランツ、真司、人志、そして何故か居る総司がボロ雑巾の様に、山積みにされていたからだ。

「あ、優也……」

どうやら着替えの途中だったらしく、胸を脱いだ服で隠した優花が部屋から顔を出した。

よく見れば、他の女性陣も着替えの途中だったらしい。

「どうしたんだ、これ……？」

状況だけ見れば、進達が覗きをしてお仕置きを受けた様にしか見えないが、念の為、ユウは尋ねた。

「実は……」

優花が言うには、今居る部屋のすぐ近くから、直接浜辺へ出られると知り、海に行くメンバーはこの部屋で着替えていた。　すると突然、押し入れから総司が現れた。　丁度着替えている時だったので、美優達は悲鳴をあげながら、総司をボコボコにした。
その悲鳴を聞き付けた先程のメンバーは、何事かと部屋の中に飛び込んできた。
心配してくれたのはわかっている少女達だが、前述の通り、着替えの途中で、何人かは胸をさらけ出している者も居た。
つまり、助けに来たメンバーも総司と同罪になってしまった。

「と言う訳だけど……どうしたの？」

説明し終わった優花は、ユウ達の顔が青い事に気付き、何事か問う。

「俺達は良いのか？」

ジンが二人を代弁して言う。
進達が駆け付けた時よりは露出はだいぶ低いが、着替えている事には変わり無い。
その状況に出くわしてしまった自分達にはお咎めは無いのか、ジンは問う。

因みに、ユウの視界はセイが遮り、セイ自身は眼を閉じている。

「貴女達、今は女の子だから、気にしてないんじゃない？」

今だけ女で良かった……。　彩夏の言葉に、ユウ達三人はそう思った。

もしいつもの姿なら、進達の二の舞だからだ。

三人の了承を貰った事だし、心置き無く名前を女の子として書ける。

（（作者は後で殺す！））

この時作者は、二人の殺気に気付けなかった。

「ってあれ？　彩夏さん？」

ユウは彩夏の声が聞こえた事に疑問を抱く。

出発の時、総司と同じで茜の傍に残った筈なのに。

「竜也さんのお札を目印にして、霧藤君の能力で病院とここととを一時的に繋げたのよ。　まさかこの部屋に繋がるとは思わなかったけどね」

ジンは総司が出てきたと言う押し入れを覗いてみると、見馴れた病室が見えた。

そして茜も、部屋に寝かされている。

「ねぇ、これってどうやったの？」

病室と繋がった押し入れを見ながら、渚は皆に問う。

沙耶（さや）も同じように、疑問を持った顔をしていた。

そう、この二人だけは、妖怪や能力と言った類いを知らない。
どんな言い訳をすれば良いのか、全員で考える。
だが何も思い付かない。
どうしようかと、慌て始めた瞬間、

「ハ、ハン●パワーです！」

美優がそう言った。

「無理があるだろ！」

そう、無理がある。
これで誤魔化せる筈が、

「ハン●パワーじゃ仕方ないわね」
「ハン●パワーだもんね」

誤魔化せた。

「いや、納得すんのかよ！？」

渚も沙耶（さや）も、何故こんなにも疑いを持たないのか、疑問しか残らない。

「つーか進、いつのまに……」

美優がハン●パワーと言った時からツッコミをしていたのは、他の誰でもない。　水野進だった。
気絶していようとツッコミを入れてしまう。　そんな体質に進はなっていた。

「それはそうと、貴女達は着替えないの？」
「「「えっ？」」」
さも当然の様な口振りの紗理奈に、ユウ達三人は寒気を感じた。
この場の自分達以外の女子が、敵の様な。
「い、いや！　俺達は良いですよ！」
「海は明日入るって！」
「着替えるも何も、水着が無いしな」
そう、水着が無ければ着替えも何も出来ない。
だから安心しきったが、
「水着くらい、すぐ出せるわよ」
魔女によって安心は危機感に変わった。
「ほら、三人とも着替えようよ！」
「手伝ってあげるから！」
少女達が楽しそうな表情をしながら、ユウ達ににじり寄って行く。
冷や汗をかきながら、ユウ達が逃げ出すよりも速く、
「かかれ！」
少女達はユウ達を捕まえた。
因みに進は、二回目のお仕置きを受ける前に、持ち前の逃げ足で逃げ去った。

現在海には、気絶させられた進以外の男性陣と、薫、彩夏、紗理奈、ナミ、九妖、ルミア、沙耶（さや）以外の女性陣が居た。
残った女性陣は、気絶した（させてしまった）男達を放っておく訳にはいかない為に、残ったらしい。
人数が多すぎて水着描写はあまりしないが、一言だけ言うと、天国（パラダイス）だ。

「楽しそうだな」

汗だくで辛そうにしている雪奈の隣で、ユウは呟いた。
必死の抵抗も虚しく、ユウ達は結局、水着（女性用）を着る事になった。
せめてもの慈悲で、ユウは上着を着させて貰ったが、セイは男の時と同様、鼻血までは出さなかったが、気絶してしまった為、薫と一緒にお留守番。
ジンは何故か何ともなかったかの様に、少女達と海で遊んでいる。
因みに流香とルナは、ジンが女の子になっても、恥ずかしそうにしていた。

「火渡、お前も行かなくても良いのか？」

ユウの呟きを訊いていたのか、雪奈が問う。

「元々暑いのには馴れてないからな、別に良いさ。　それに」
「それに？」

「皆で来れた。　それだけで良い」

過去に何があったのか、それは雪奈にはわからない。
だが、確かに何かがあったと思わせるには、わかりやすい表情だった。

「そう言うあんたこそ行かなくて良いのか？」
「ん？」
「だってほら」

ユウが指を差す方向に、雪奈は目線を向ける。

「だから駄目ですってば！」
「大丈夫よ！　ルカは大丈夫なんだし！」
「ルカお嬢様は半分人間だからであります！　ルナお嬢様は生粋の吸血鬼なのですから大丈夫ではないのであります！」

そこでは、片手に浮き輪を持ち、海に入ろうとするルナと、ルナを力ずくで引き止めているエルザ。　そして、太陽の日がルナに当たらない様に、日傘を差しているクリスが居た。
因みに、ルナは何故かスク水を着用していた。
ルナとは違い、流香は黒い水着と、セクシーな水着なのだが。
もし流香とルナの水着が逆なら、それはそれで似合っていたかも知れない。　何と言っても、ある一部分のサイズが違うのだから。

「……あの二人が居れば大丈夫だろう」
「何だその間は」

と言いつつ、何となく雪奈の気持ちがわかった。
吸血鬼の弱点である海に入ってでも、流香と遊びたいのかと、呆れ

ているのだろう。

「それに私は……」
「お姉ちゃん達、今暇～？」
「俺達と遊ぼうぜ～」

雪奈が何か言おうとするが、明らかにチャラい高校生くらいの二人組が遮った。
所有、ナンパだ。

「暇じゃないです」
「だからさっさと帰って勉強でもしていろ」

キッパリと断る。
雪奈に至ってはかなりキツイ事を言っている。

「いやいや、勉強なんかしたら頭悪くなっちゃうって」
「脳細胞死ぬ死ぬ！」
「「……」」

何が面白いのか、ナンパ男達は腹を抱えて笑っている。
彼等にとっては、渾身のボケだったらしい。

「おい……」
「んあ？」

ナンパ男達の後ろから、進が底に響く声をかける。

「何だおま……はぅっ！」
「地味な奴はき……ぐあっ！」

ほぼ同時に二人は奇声をあげる。

「ボケたよな？　あんた等」

エグイ音が鳴るほど、進は二人の息子を掴み、捻りあげていたからだ。

「ボケたらツッコメえええええええ！！」

「「あああああああああああ！！」」

そしてそのまま、二人を海に放り投げた。

「おぉぉぉ」

綺麗な海に見事な二つの水柱が上がった。

ツッコミの事となると、ス●ウターがぶっ壊れるくらいに戦闘力が上がる様だ。

「きゃあああああ！！」

「どうした！？」

突如、美優は悲鳴をあげる。

何事かと、ユウ達が駆け寄ると、海に俯せで男が浮いていた。

血を流しながら。

「さ、殺人事件！」

「これは水野がナンパ男を投げ飛ばした拍子に、ドスッ！　だな」

「何で人が刺さるんだよ！？　とにかく、引き上げないと！」

まだ死んだと決まった訳じゃない。
水を掻き分けながら、進は男の元へ近付いていくと、

「とったどおおおおお！！」

海に浮かんだ男、アランが水中から顔を上げた。
手には、魚が刺さった銛が握られている。

「キラ！　今晩は鯛だ！」
「本当！？　やったぁぁぁ！」

何処ぞの伝説を打ち立てる番組の様に、アランは銛を天高く掲げ、
キラは嬉しそうにアランに駆け寄る。
親と子の様な光景に、微笑ましく見えるが、

「紛らわしいわあああああ！！」

そんな事、進には関係ない。　ツッコムには充分な行動を、アランはしていたのだ。
悪魔二人が海面を数十メートル滑る程、進は強烈なドロップキックを浴びせた。
自分が海に落ちるのもお構い無しに。

「うわっ、すげぇ蹴り」
「本当に……って誰！？」

進のドロップキックに感心する彪牙の声が背後から聞こえ、彪牙だと思ったまま後ろを向いたユウ達は驚いた。
ツンツン頭が居ると思えば、ある程度長いストレートヘアーのイケメンが居たからだ。

「誰って……俺だよ俺」
「オレオレ詐欺なら間に合ってますけど」
見覚えの無いイケメンが彪牙の声で話しているので、渚は少し戸惑いながら話す。
「お前、ワザとやってねぇか？」
「……やっぱり、彪牙？」
「そうだよ」
長い沈黙の後、全員同じことを思った。
（別人じゃん！）
別人と言っても、骨格が変わった訳ではない。
変わったのは髪形と、つり目な大きめな眼が、下ろした髪が邪魔なのか、薄く開かれているくらいだ。
それだけなのに、彪牙を彪牙だと認識するのに時間がかかってしまう。
こいつ、総司と一緒にホストになったら良いんじゃないか、と思うくらいだ。
「……あぁ、この髪か。　似合わねぇよな」
皆の態度の理由に気付いた彪牙は、おどけた風に言う。
「そ、そんな事ないよ！　あ、あたしは似合ってると思う」
そこに食い付いたのは渚だった。

恥ずかしそうにしながらも必死な渚に、彪牙は笑みを溢す。

「そうか。　ありがとよ」
「う、うん」

顔を真っ赤にしながら、彪牙に頭を撫でられると、渚は猫の様に気持ち良さそうにする。
その甘い光景に、全員の心がまたシンクロした。

（春だな）

今はまだ夏なのに、この二人の周りだけは春の様だった。

「ぶはっ！」

その頃、進は漸く海面から顔を出した。

「あんたも良くやるわね」
「雅……ぶほっ！？」

イルカを模した浮き輪に体を預け、雅が進の元へ近付いてくる。
そして見てしまう。
雅の胸の谷間を。
以前に裸を見た事があったが、見えそうで見えない状況と言うのが、進の理性をどんどん壊していく。

（やっぱこいつ胸デカイ……じゃなくて！　ヤバイヤバイヤバイ！　どれくらいヤバイかって言うと超ヤバイ！　あ、ヤバイ、クラクラしてきた）

綺麗な桃色の髪が水で肌に貼り付き、胸の谷間が丁度見える位置に居る雅は、どうしようもなく色っぽく見え、進は少し頭がクラクラしてきていた。
まだ中学二年生だから、仕方ないと言えば仕方ないのかも知れない。

「ちょっ！　どうしたのよ!?」

雅の慌てる声を訊き、進は今の状況に気付く。
どんどん沈んでいる。　自分の体が。
ぼうっとし過ぎて、泳ぐのを忘れていたのだ。

「うおっ！　げほっげほっ！　塩辛っ!!」

気付いた時には少し海水を飲んでしまい、咳き込んでしまう。

「掴まって!」

差し出された雅の手を掴もうと、進も手を伸ばす。
ガッチリと、離さないように進は掴んだ。
手とは全く感触の違う、布の様な物を。

「あ、あれ?」

手には雅の手とはまた違う物が握られている。
雅を見ると、完熟トマトの様に顔を真っ赤にしていた。
それは当然だろう。
胸の水着を引き剥がされたのだから。
誰に?　そんなのは一人しか居ない。

「と、とったどぉぉぉ……?」

引き剥がしてしまった雅の水着を差し出しながら、進は伝説を打ち立てた。

「きゃあああああああ！！」

「申し訳ございませんでしたあああああああああ！！」

ポロリと言う伝説を。

幸いにも、その場面は他の誰にも見られてはいなかった。

一人を除いて。

「……」

クリスが恨めしそうに見ていた。

二人のやり取りを。

「ク、クリス！　痛い！　太陽が痛いわ！」

「クリスさん！　日傘日傘！」

主を太陽の日から守るのも忘れるくらい。

「クリス様！　お願いしますから日傘を貸して下さぁぁぁぁぁぁい！！」

だだっ広い海に、吸血鬼の叫びが木霊した。

その叫びを訊きながら、ユウは不思議に思っていた。

「人が少ない」

さっき自分をナンパしてきた男達以外に、自分達以外の人を見てい

ないのだ。
だが、何も異常は無いから、それ以上は何も思わなかった。
余談だが、ルナは無事助かり、美優、流香は明日こそ優也と仁にアピールしようと決意し、雅は進と顔すら合わせなかった。

第９１話　海での一時（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「最初は竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】の美莉からだ。　ありがとう。　『女性陣に。好きな人と何がしたい？』」

美優

「やっぱり……／／／」

優花

「私は一緒にいられたら、何も望まないよ」

薫

「やっぱりデートとかかな／／／」

流香

「血を吸わせて欲しいわね」

雅

「ノーコメントで良い？　今回の事がちょっと……」

渚

「キス、かな／／／」

仁

「人それぞれか。　次は聖なる焔さんからだ。　『黒鳥さんに質問です。仮面ライダーの映画で好きなものは？』　闇夜の代わりに俺が答える。　ファイズの【パラダイスロスト】、電王の【さらば仮面ライダー電王　ファイナル・カウントダウン】、Ｗの【ＦＯＲＥＶＥＲ　ＡｔｏＺ／運命のガイアメモリ】だ。　何で闇夜が居ないって？　それはな」

闇夜

「ぎゃあああああああ！！」

正

「アンサツ、ザンサツ、ジュウサツ、ヒッサツ、シサツ、イロンナコロシカタガアルケドドレガイイ？」

優也

「何でも良い」

正

「ジャアゼンブ」

闇夜

「女体化なんかしてすみませんでしたあああああああああ！！」

仁

「まぁそう言う事だ。　おい、俺の分も残しとけよ」

流香

「あんたも根に持ってるのね」

優花

「次回は僭越ながら、皆様の作品の登場人物を登場して頂きます。キャラを守れるかはわかりませんが、どうか次回も見てください」

次回

第９２話　異世界交流温泉

優也

「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第９２話　異世界交流温泉（前書き）

今回は他の作品から特別出演があります。
ちょっとした番外編として読んでください。
最後にご協力して下さった作者の皆様、キャラが守られていなかったら申し訳ありません。

第９２話　異世界交流温泉

海での一時も終えた彼等は、着替えを終え、ロビーで談笑をしていた。
その頃には、ユウ、ジン、セイの三人は、優也、仁、正に戻っていた。

「明日は薫も一緒に行こうね！　絶対だよ！」
「うん。　約束するよ」

美優は皆と海で遊ぶことも楽しかったが、薫が居ないのでは、その楽しさも半減する。　何と言っても、二人は親友なのだから。

「雅、どうしたの？」
「訊かないで……」

美優と薫が微笑ましい会話をしている中、雅は暗い表情をしていた。
好きな男の前で、胸をさらけ出してしまったのだから仕方ない。

「結局、海入れなかった……」
「アハハ……」
「心中お察しします」
「仕方がないだろ」

当たり前だが、ルナは海には入れなかった。
その事に落ち込むルナを、エルザ達が宥めていた。
と言うより、百年以上吸血鬼をしている癖に、海に入ろうとするな、と言いたい所だ。

「皆様、お疲れ様です」

そこに、女将が現れる。

「夕飯まで時間がありますので、その間に温泉はいかがでしょう？」

『温泉！？』

『！！』

女将の温泉と言う言葉に、女性陣は食い付き、数人の男性陣が反応した。

因みに、反応したのはこの作品の人物だけではない。

「ご案内します」

女将に連れられ、優也達は温泉に向かう。

「私また入れないじゃないのよおおおおお！！」

吸血鬼の悲痛な叫びを訊きながら。

第９２話　異世界交流温泉

「お姉様、大丈夫かな？」
「クリスさんとユキさんが居るからきっと大丈夫ですよ」

吸血鬼には吸血鬼なりの風呂の入り方があるのだが、普通の人間が入る様な温泉には入る事は出来ない。
ルナを一人残したら何をしでかすかわからないので、クリスと雪奈がルナの見張りを引き受けた。
今の時間、温泉に入っているのは、男性陣で優也、進、彪牙、仁、正、竜也、浩輝、そしていつの間にか眼を覚ました総司、亮、修二。
女性陣は美優、優花、薫、流香、雅、渚、紗理奈、エルザ、そして静と佳奈。
その他にも宿泊客が何人か一緒に入っていた。

「エルザさんってスタイル良いですね……」
「えっ？」

薫の言う様に、エルザのスタイルは群を抜いて凄かった。
豊満な胸。　引き締まったウエスト。　スラリと伸びた美脚。
加えて長身と綺麗な緑の長髪、そして美人と言っても過言ではない顔立ち。
流香やルナが、十人中十人が振り向く美少女なら、エルザは百人中百人が振り返る美女である。
千年も生きた妖怪と言うものは、強さだけではなく容姿までもが常軌を逸するものなのか、対抗できるのは九妖やルミアくらいではないかと、誰もが思った。
こうしてエルザのプロポーションの説明をした所だが、薫や優花達が一番気になっているのは、一部分である。

「そんなに見ないで下さいよ～！」

恥ずかしそうに、エルザは両手で自身の胸を隠した。

「あら？」

先に扉を開けた静が声を漏らす。

「どうかしたんですか？」

「お母さん？」

温泉の中心辺りを眺めたままの静に、美優達は集まってくる。

「大した事ではないのですが……」

言いづらそうに口に手を当てる。

母親の様子に、娘の佳奈は不安げな表情をする。

「遠慮なんかしなくても良いですよ」

紗理奈は佳奈の頭を優しく撫でながら、優しく言う。

「はい。　本当に大した事ではないですが……」

紗理奈の言葉に、言う決心がついたのか、静は湯の真ん中を見ながら言った。

「あそこに誰かが浮いているのです」

静の目線の先には、雅と同じ、綺麗な桃色のロングヘアーの少女が、

“俯せで湯に浮いていた”。
まるで死体の様に。

『って大した事あるううううううう！？』

美優達を含め、女湯に居た人全員で、その少女を助けに入った。

女湯で起こった自殺未遂（？）の騒ぎは、男湯まで聞こえていた。

「騒がしいなあっち」
「楽しそうで良いじゃねぇか。　それに比べてこっちは……」

水柱、と言うより湯柱が五つ上がる。

「くそっ！　強ぇ！」

一つ目の湯柱からは、特に特徴の無い少年、天醒士（てんせいつかさ）が。　普段なら髪型に特徴があるのだろうが、残念ながら湯で濡れているのでわからない。
それでも何故か、優也や進の様なフラグ建築士の雰囲気を醸し出していた。

「良いパンチだ！　だがその程度じゃドMな和樹さんは興奮しねぇ！　もっとこい！　もっと抉り込むように頼む！」

二つ目の湯柱からは、黒い髪の、何処となく総司と同じ雰囲気の少年、式守和樹が。
総司と同じと言っても、男女関係なく痛みを快楽に変えられるらしい。

「そこに女湯があるんだぞ……覗くのが男の定めだろ！」

三つ目の湯柱からは、黒髪が首の真ん中より少し下まで伸びている、瞳色が綺麗な琥珀色の少年、鷺ノ宮駿が。
何が定めなのかはわからないが、彼がそう言うならそれで良いのだろう。

「まだ諦めんな！　天醒！　式守！　鷺ノ宮！」
「僕達の戦いはこれからです！」

四つ目、五つ目の湯柱は言わずもがな、総司と浩輝。
この二人が、この少年達と何をしているかと言うと、

「ここから先には行かせないよ」
「「薫（凍華）の裸を見ていいのは俺だけだ！」」

女湯を覗こうとしていたのだ。
そこを、亮、修二、そして、髪と瞳が青い少年、蒼炎寺冷司が止めたのだ。

「冷司！　鷺ノ宮とか言う奴は任せたぞ！」
「俺に命令をするな！」

そう言いつつも冷司は、湯から出た駿の前に立ち塞がった。

「何でこんなに意気投合してるんだ？」

覗き組と覗き阻止組で、何故こんなにも意気投合しているのか、優也は疑問に思った。

「大方、変態組とシスコン組とで別れたんじゃねぇか？」

彪牙、正解だ。　流石総司の親友なだけはある。

偶然一緒の時間に入浴した瞬間、何故か意気投合したのである。

因みに、駿は普通に高校生男子として覗きたいだけだが、和樹と士は総司に負けず劣らずの変態である。

「なぁ」

「ん？　あぁ、あんたは確か、士だっけ？」

すると、今まで亮達突撃していた五人の内の一人、士が彪牙に話し掛けてきた。

「名前訊いても良いか？」

「あぁ、彪牙。　鋼鎧寺彪牙だ。　彪牙で良いぜ」

思っていたより気さくな彪牙に、士は安心した。

今は士と同じで髪が垂れ下がっているが（前回のイケメンモード）、さっきまではツンツン頭で、不良の様に印象があったから、話し掛けるのに少し戸惑いがあった。

「ちょっと頼みたい事があるんだけど、良いか？」

「頼みによってだな」

今はそんな戸惑いも存在しない。

頼み事を耳打ち出来るくらいの仲にはなっている。

「それくらいなら良いぜ」

「マジでか！　それじゃあ頼む！」

士の頼みを快く引き受けると、彪牙は湯から出る。

何を頼まれたのかと疑問に思う優也達の隣で、士は子供の様にウキウキしていた。

「いくぜ」

士に向き直った彪牙は、彪牙ではなかった。

「俺、参上！」

「モモタロスだあああああああああああああああ！！！！」

仮面ライダー電王に登場する味方イマジン、モモタロスだった。

何故、彪牙なのかわからない人は、【登場人物設定1】を見よう！

「ちょ、士さん！？　何処でテンション上げているんですか！」

そこに覗き組の上級（そうじ）変態が割り込んでくる。

「総司も！　さっき言った奴をやってみてくれ！」

何となく予想が付きながら、優也達は総司を見ると、

「仕方ないですね」

案外ノリノリだった。

「君、僕に釣られてみます？」

「敬語だけどウラタロスううううううううううううううう！！！！！」

理由がわからなければ、彪牙と同じ様に【登場人物設定１】を！

「士君は相変わらずだなぁ」

士の様子に乾いた笑みを浮かべるのは、耳に当たる程度の黒髪をした少年、上野進也。

進と同じ漢字が入っているが、進なんかよりも断然カッコいいぞ。

「進なんかって何だ！！」

訊かれていたらしい。

「上野だったな」

「えっ、そうだけど、仁君……だよね？　どうしかした？」

「あの天醒って奴と知り合いか？」

「うん、そうだけど」

士といつ知り合ったかは、ベルトさんの小説を見よう！

「そうか。　ところで良いのか？」

「えっ？」

「女湯に知り合いが居るんじゃないのか？」

仁の言葉に進也はハッとなる。

確かに女湯には進也と友人（と言うより、両想いだが）の、松下里美と言う少女がいる。
このままでは、以前士が覗きをした時の二の舞になってしまう（詳細はベルトさんの小説で！）。

「駄目だってば士君！　松下さんの裸を見ちゃ！」

次の瞬間、進也は士に飛び掛かった。

「なっ！　里美さんも居るんですか！？　これは何がなんでも覗かなくては！」
「だから駄目だってぇ！」

覗きに行こうとする士を、進也が必死に止める。
中々の攻防だ。

「そう言えば、椿と東条もあっちにいたな」
「「！！」」

眼にも止まらぬ速さで、進と正は覗きを防止しに行った。

「薫の裸は見させねぇ！」

正は言わずもがな薫の為。
進は、

「これ以上雅に恥ずかしい思いはさせねぇ！」

海でのポロリの件で、責任を感じての行動である。
残念ながら、好きだからだと言うからかいがいのある理由ではない。

進は全く持って進(だめ)である。

「それどぉ言う意味だあああああああ！！」

そう言う意味である。

「おい和樹！　いい加減にしとかねぇとアスカに殺されるぞ！」

そう言うのは、短髪の黒髪でかなり目付きの悪い少年、大和将(やまとしょう)。

彼の右手には、幻想殺し(イマジンブレイカー)と言う、神様の奇跡すら打ち消してしまう能力(ちから)が備わっている。

龍の能力と似ているが、能力ならほぼ無条件で打ち消してしまう幻想殺し(イマジンブレイカー)の方が便利とも言える。

因みにこの幻想殺し(イマジンブレイカー)、幸運すらも打ち消してしまうので、将自身はかなりの不幸。　だが何故かフラグを建設しまくっている。

今宵、彼はどんな不幸を起こすのか。

「何このナレーション。　大和さんは不幸なんか起こしてませんからね！　どっちかと言うと被害者だからね！」

「もうナレーションは無視した方が良いぞ」

ナレーションにツッコム将を、優也が宥める。

因みに将は優也と始めに話した時、優也を女の子だと勘違いして、恐ろしい真っ黒な笑みを向けられた。　勿論ちゃんと土下座で謝った。

温泉でまで女の子に間違われるとは、流石男の娘な優也である。

「誰が男の娘だ！」

君だろ。

「優也も苦労してんだな」
「まぁな……」
苦労人通し、友情が芽生えた瞬間であった。
「二神さんも教師をなさってるんですね」
「形だけな」
竜也と話をしているのは、とある学校で教師をしている、御剣桂馬（みつるぎ けいま）と言う青年。
竜也と違って誠実で、生徒から慕われている、教師の鏡である。
「ナレーションでもあったけど、あんたは俺と違って良い教師みてぇだな」
「（ナレーション？）そんな事ありませんよ。少なくとも、貴方は良い教師ですよ」
竜也の言動の一部に疑問を抱きながらも、桂馬はハッキリと断言する。
「根拠は？」
授業中でも煙草を吸うし、よく授業をやめたり、生徒に汚い言葉を言ったりする自分の何処が良い教師なのか、桂馬に問い掛ける。
「彼等は二神さんの生徒でしょう？　彼等は本当に良い顔をして笑います。教師が駄目な人なら、彼等はああして笑いませんよ」
桂馬は見ていた。

優也達が楽しそうに笑っている所を。
だからこそ、竜也の事をそこまで評価出来たのだ。

「……そんなもんか？」
「そんなもんですよ」

その言葉に、軽く笑う竜也だった。

時間は少し遡って、美優達は湯に浮いていた少女を引き上げていた。

「本当に申し訳ありません」

引き上げられた自殺志願者（？）の少女は、深々と頭を下げる。

「全く、何であんな事をしたんだ？」

中性的な喋り方をする桃色の髪の少女が、助け出した少女に問う。
彼女は名は御武アスカと言い、将と和樹の幼馴染みである。
性格は真面目であり冷静沈着、なのだが、怖いものが苦手、可愛いものが好きなど、女の子らしい一面もある。
白いご飯の上にかき氷のシロップをかけて食べる『シャベ飯』なる物が大好物な程の甘党である。　優也と気が合いそうだ。

「多分、寝てしまったんでしょう」

少女の名前は松乃片癒々子（まつのかたゆゆこ）。
この松乃片と言う家系、全員が美人な為、癒々子もかなり美人である。
その癒々子の言葉を訊いた美優達は、

『寝てたのあれ！？』

当然驚いた。
いくらなんでも、こんな所で寝るかと思っているのだろう。

「何処でも寝てしまう癖がありまして……ご迷惑をお掛けしました」
「あ、いやそんな！　謝る事なんて……」

再び深々と頭を下げる少女に、美優達はどうするか戸惑う。
すると、一人の少女が癒々子に話し掛ける。

「わかるよ。　私も……はっ！　良く寝ちゃうから……すぅ」
「話してる途中で寝ようとするのはやめましょうよ……」

既に眠たそう、と言うかほぼ寝ている金髪のセミロングのこの少女は、眠雷美（ねむりらいみ）。　名前の通り、普段から瞼が殆ど下りており、今も眠たいらしい。
話す時くらいはちゃんと起きなさい！　と言いたいくらいである。
そしてその雷美に呆れながら物を言うのは、蒼炎寺凍華（そうえんじとうか）。
名前の通り冷司の妹で、髪や瞳の色も同じである。
因みに、冷司はかなりのシスコンだが、凍華も同じくらいのブラコン、お兄ちゃん大好きっ子である。

「あの、お名前は？」
「眠雷美だよ。　雷美って呼んでね！」
名前を訊かれた雷美は、好感の持てる笑顔で答える。
「私は松乃片癒々子と言います。　宜しくお願いします、雷美さん」
「宜しくね！　癒々子ちゃん！」
どう言う訳か、二人の間に友情が芽生えた。
同じ癖を持つ者通しの奇妙な友情である。
「奇妙って言ってあげないで下さいよ」
やや！　ナレーションにツッコムとは流石。　女性陣のツッコミ役は君に任命しよう。
「嫌ですよ！」
「アスカさん」
アスカがナレーションにツッコンでいると、優花がアスカに話し掛ける。
「君は、優花だったな。　どうしたんだ？」
「皆温泉に入りましたから、アスカさんも入りましょう」
優花の言う通り、皆温泉に入っており、入っていないのは優花とアスカくらいだった。
「せっかくなんですから、楽しみましょう」

誰が見ても惚れ惚れする笑顔で、優花が言う。
その笑顔に、アスカは癒される。
幼馴染みの内一人は変態で、もう一人に恋をしてはいるが、フラグを建設しまくっている。しかも超鈍感。
その為、アスカは随分と苦労していたのだ。
そこに優花が小動物の様に上目遣いで話し掛けてくるのだ。
癒されるだろう。
癒されると言って欲しい。
闇夜は癒されます。

『モモタロスだあああああああああああああああああ！！！』
『！！』

柵の向こう側の男湯から、士の声が女湯まで響く。

「えっ？　モモタロスさんが居るの？」

その叫び声に、黒いロングヘアーの、竜王の白翼さん曰く美優に似ている少女が反応する。
士と幼馴染みの少女、それが彼女、日々野美莉（ひびのみり）である。
美莉は士に恋をしているのだが、彼女もまた、気持ちに気付いて貰えない一人である。

「今の人、友達なんですか？」

明らかに知っている口調だった為、友達なのかと美優は尋ねる。

「友達と言うより、幼馴染みだよ。よくからかわれたりしたけど、大切な人」

士の事を話す美莉の表情を見て、美優は最近良く見る様になったものと同じものを感じた。

「美莉さん、あの人の事が好きなんですね」

「ふぇっ／／／！？」

それは、恋する乙女の表情。

「だって、あの人の事を話してる時の顔、凄く良い顔してましたよ」

「そ、そんな事ないよ／／／！！」

必死に否定する美莉だが、顔を真っ赤にしていては説得力に欠ける。

「そ、そう言う美優ちゃんはどうなの！」

「えっ、逆襲！？」

まさかの反撃に、今度は美優が頬を真っ赤にする。

「美優、この際ハッキリ言った方が良いよ。　あたし達、皆知ってるけど」

「渚さんまで……。　って言うか皆知ってるの！？」

あれでも隠していたつもりなのか、渚からの衝撃事実（美優にとっては）に更に赤面する。

「な、渚さんは！　渚さんは彪牙の事どう思ってるの！？」

「好きだよ。　ちゃんと異性としてね」

反撃虚しく、渚は恥ずかしがる様子も無く、彪牙への想いを口にす

る。
それはもうハッキリと。
美莉の標的を渚に変えようとしたが失敗してしまい、他の誰かに助けを求めようとするが誰も居ない。
雅に助けを求めようとも考えたが（助けと言う名の身代わり）、死神の王ですら裸足で逃げ出してしまいそうな威圧感を放っていて、断念した。

「日々野さん。もうその辺にしてあげなさいよ。神道さんが困ってるわ」

水色の長髪で、肌は雪のように白い美人の少女、凍空雪華（いてぞらせつか）が美優に助け船を出す。
まさか助け船を出してくれるとは思わなかった美優は、それはそれはとても嬉しそうな顔をしていたそうな。

『もぉ～、良い所だったのにぃ～！　雪華！　ちょっと海華とチェーンジ！』
「ちょ！　海華！？」

雪華が一人で慌て始めたと思ったら、突然雰囲気が変わった。

「雪華に代わって海華ちゃんが美優ちゃんにしっつも～ん！　誰が好きなのかなぁ？」
「あれ、話が元に戻ってる？　って言うか性格変わってません！？」
「二重人格？」

渚の言う通り雪華は二重人格で、今は凍空海華（いてぞらかいか）と言う人格。
冷静でツンデレな雪華とは違い、海華は常時テンションが高く、好きな相手にはとことんアピールする性格である。

『ちょっと！　誰がツンデレよ！』

雪華がツンデレを否定するが、雪華の声が聞こえているのは海華だけ。

海華、話が進まないとあれなんで無視しちゃって下さい。

「オッケー！　放置プレイだね！」

『えっ、海華？　本当に無視するつもり？　ねぇ、海華？　ねぇってば！』

何度も海華に呼び掛ける雪華だが、放置プレイ中なので反応は無い。

『このっ！』

「うぇっ？　雪華！？」

また雰囲気がガラリと変わる。　それこそ百八十度真逆に。

「ふぅ、元に戻れたわ」

『うぅ～、元に戻っちゃうのは強制イベントなのかな……？』

雪華が気合いと根性で無理矢理、体の主導権を手に入れたらしい。

『でもっ、海華は諦めないよ！　美優ちゃんと薫ちゃんと流香ちゃんとムフフなイベントに突入する為に！』

「あっ！　こらっ！」

またまた主導権が入れ替わる。

『勝手に変わるなっ！』

「あぁ～！」

そしてまた入れ替わる。
端から見れば一人で遊んでいる様にしか見えないが、あれでも二人は必死なのだ。

「二人共楽しそうだね！」
「ですね！　姉妹みたい！」
（楽しそうなのか？）

美優と美莉の天然発言に、少し離れた所に居たアスカは心の中で呟いた。

『駄目だってば士君！　松下さんの裸を見ちゃ！』

男湯から、士とは違う声が聞こえてくる。

「う、上野君……／／／」

その声を訊き、一人の少女が顔を真っ赤にしていた。
その少女の名前は松下里美（まつした　さとみ）。
進也が里美に恋をしている様に、里美も進也に恋をしている。
だが何故かまだ付き合ってはいないと言う。
まるでウチの正と薫の様だ。

（はっ！　チャンスは今しかない！）

里美の様子が視界に入った美優は、ここぞとばかりに動いた。

「里美さん！　今の声の人、彼氏ですか！？」

「かかか彼氏／／／！？」

完熟トマト？　そんなものは比ではない程、里美の顔は真っ赤に染まっていた。
今にも爆発しそうなくらい。

「彼氏？　里美さん、進也さんと恋人になったんですか！？」
「そそそそんな！　ここ恋人だなんて／／／！！」
「認めちゃいなよ～。　認めちゃった方が楽になるよ～！」

そこに美莉と海華が食い付く。
結局主導権は海華に奪われてしまったらしい。
だが気を抜けば、いつでも交代できるだろう。
と言うか、無理矢理主導権を奪えるのかは作者にはわからない。

「凍華さんにも兄が居るんですね」
「はい。　薫さんにも居るんですよね？」

その頃、薫と凍華の二人は温泉に浸かりながら談笑していた。
お互い兄が居ると言う事で、話が合うらしく、すぐに打ち解けた。

「居ますけど、未だに一緒に寝ようとか、風呂に入ろうって言ってくるんですよ。　この歳になって流石にそれはちょっと……」
「可笑しな事ですか？」
「……えっ？」

耳が悪くなったのかと、薫は聞き返す。

「良いですか薫さん。　お兄様の優しさに触れていれば今までの嫌だと感じた行動もかっこよく思えます。　自分を否定してはいけま

せん！」
「は、はい！」
思わず薫は返事をする。
自分もまぁまぁブラコンかと思っていたが、凍華は桁が違うらしい。
だけど少し尊敬もしていたとか何とか。
「……」
各々が楽しげに話す中、長く綺麗な青みがかった黒髪をした一人の少女は浮かない顔をしていた。
彼女は皇綾姫（すめらぎ）。　とある特殊な能力を持っている。
どんな能力かは、伽藍さんの【ハヤテのごとく！～鷺ノ宮家の諸事情～】を見よう！
「（随分と霊魂が漂っていますわね。　妖魔もちらほら……）
少し減らしておいた方が宜しいかしら？」
「その心配には及びません」
「ひゃぁっ！？」
考え事の最中に気配もなく静に話し掛けられ、綾姫は素っ頓狂な声をあげる。
「し、静さんでしたね。　何が及ばないのか、お教え願えないでしょうか？」
内心驚きながら、平静を装って問う。
「これは私達の仕事ですから」
「仕事？」

「お母さ～ん！」

話を遮るかのように、佳奈が流香とエルザを引き連れて静の元へ向かってくる。

「そんなに慌てては危ないですよ」

「ごめんなさい」

「良い子ですね。　お二人も遊んで下さってありがとうございます」

静は佳奈の頭を撫でながら、流香とエルザに感謝の言葉を述べる。

はにかんだ笑みを浮かべる二人を余所に、綾姫は立ち上がる。

「もうお上がりですか？」

「ええ。　失礼致しますわ」

そう言いながら上がろうとする綾姫の足下には、何故か石鹸が落ちており、

「きゃあっ！」

踏んづけた綾姫は綺麗に滑り、お湯の中にダイブした。

「……あの～、大丈夫ですか？」

怪我は無さそうだが、見事なまでのダイブに、エルザは心配そうに尋ねる。

「な、何の事でしょうか！？　何も起こっていませんわよ！」

今の失態を無かった事にする口振りで、綾姫は湯から顔を出して言

う。

「えっ、今落ちましたよね？」
「あれはワザとですわ！　ああやって不測の事態に対処出来るように修行していますの！」
「でも、きゃあっ！　って言ってたわよ」

どれだけ修行だと言い張ろうと、あの悲鳴は間違いなく予想だにしていなかった悲鳴だろう。
流香は確信していた。

「あ、あれは……！」
「わかります。　恥ずかしかったんですよね」

エルザが優しい笑顔を綾姫に向ける。

「そうだったの。　ごめんなさい。　何も知らずにあんな事を言っちゃって……」

流香も申し訳なさそうな顔をしながら言う。
綾姫と言う少女はプライドの高い少女。
こんな同情のされ方をすればプライドが傷付く。　と言うより、ズタボロだ。

「優しさが……優しさが痛いですの……」

確かに優しさかも知れない。　流香は。

「お母さん？　前が見えないよ？」
「見てはいけません」

静は佳奈の視界を遮り、エルザが見えない様にしていた。
今のエルザの表情は、龍と同じ、ドSな表情をしていた。
流石幼馴染みなだけはある。
もしくは、龍がドSなのはエルザの影響かも知れない。

「……」

紗理奈は会話には交ざらず、美優達の様子を見ていた。

「皆楽しそうね」

皆と言うのは女湯に居る彼女達だけではない。
柵の向こうで馬鹿みたいに騒いでいる彼等も含まれている。
何を思ったのか、紗理奈は柵を見上げた。

男湯では、未だに激闘が繰り広げられていた。

（……何で俺、ここまでして覗きをしようとしてるんだ？）

ここに来て駿が漸く気付いた。
シスコン三人組とオマケ二人（進と正）を突破して女湯を覗くなんて至難の技。
そんな事をするより、温泉を思う存分堪能して、可愛い妹が待つ我が家に帰ろうと、駿は即座に考えた。

早速実行に移そうと、対峙している少年、冷司に交渉しようとする。

「なぁ……」

「貴様に妹の肌は一ミリたりとも見せん！」

「！」

実行に移そうとしたが、妹と言う単語を訊き、駿に電流が走る。

「あんたにも……妹が居るのか？」

「当然だ！」

「そうか」

その瞬間、駿は何をするべきかわかった。

「おい、鷺ノ宮？　どうしたっ！？」

動きが止まった駿に浩輝が近付くと、突然弾き飛ばされた。

「てめっ、鷺ノ宮！　何しやがる！！」

滑る足場だが、何とか踏ん張った浩輝は駿に激昂する。

曲がりなりにも、同じ目的の下に集った仲間に攻撃されたのだから仕方がない。

「悪いけど、今から俺はあんたを止める側に移らせて貰うぜ！」

「ああ！？」

駿の言葉には、冷司どころか浩輝も理解できない。

わかっているのは駿ただ一人。

「三百年しか悪霊しちゃいねぇが、てめぇみてぇなガキに敗けるかよ！」
「やってみなくちゃわからないだろ！」
世界を越えて今、悪霊と退魔師が激突する。　理由はくだらないが。
「何かよくわからないが、二人片付いた」
「そうだな」
そのやり取りを見ていた修二は相槌を打つ。
「結局のところ、俺の凍華が一番だとわかったから寝返ったんだろうな」
冷司の言っている事は、二割くらいは当たっていなくもない。
駿は冷司が妹を守っていると知り、共感したと言うだけで、凍華がどうだと言う訳ではない。
「お前の妹が一番だと？」
冷司の言葉に、修二は怒りを現す。
冷司に負けず劣らずのシスコンの修二は、冷司の妹が一番だと言う言葉に、納得がいかなかった。
「俺の薫の方が一番に決まってるだろ！」
「何をっ！！」
似た者同士だが、似た者同士だからこそ噛み合わない所もあるらしい。
次の瞬間には、二人は敵同士になっていた。

「どうしても、松下さんを覗きたいの？　士君」
「はい。　覗きたいです」

こちらでも、不毛な戦いが繰り広げられていた。
士が断トツで悪いが。

「どうしてもって言うなら、俺を倒してみなよ」
「後悔しないで下さいよ」
「さっきも思ったけど、何でバトル漫画的な展開になってんの！？
ただの覗きだよね！？」

今にも最終決戦が始まりそうな雰囲気に、正と一緒に総司を止めていた進がツッコム。

「通りすがりの仮面ライダーだ！　覚えておけ！」
「さあ、お前に罰を与えよう！」
「決め台詞まで言い始めたよ！？」

決め台詞と共に、二人は変身アイテムを取り出す。　何処から出したかは言わないように。
今更ながら、進の重要性が理解できた。
進のツッコミが無ければ、ただの真剣なバトルが始まる所だった。

「二神さん。　そろそろ止めた方が良いんじゃありませんか？」

そろそろ身の危険を感じた桂馬は、竜也に制止を求める。

「ガキの戯れだぁ。　ほっときゃぁ良いんだよ」

そこは流石竜也。　止める気などさらさら無い。

「仁、楽しんでねぇか？」

「楽しんでる」

即答する仁に、彪牙は溜め息が出る。

そう言えば、進と正と進也をけしかけたのもこいつだったなと思いながら。

「うおぉぉぉ！？」

優也と将の目の前に、和樹が投げ飛ばされ、またまた湯柱が上がる。

その際、驚いて振り回した将の右手が、優也の体に当たった。

「「！？」」

当たったのは一瞬だけだったが、その一瞬に起こった反応に、優也と将は驚愕する。

（幻想殺し（イマジンブレイカー）が、反応した？）

幻想殺し（イマジンブレイカー）が優也の体に当たった瞬間、間違いなく何か（・）の（・）能力を（・）打ち（・）消し（・）た（・）。

将は慌てて優也を見てみると、何が起こったかわからない表情をしていた。

それ以外に変わった所は無い。

将が見る限りでは。

「お、おい……ゆう……」

「へへへ、興奮してきたぜ！」

優也に話し掛けようとする将の言葉を、湯から飛び出した和樹が遮る。

「もう一度……はっ！」

和樹の目の前に優也が居て、優也を見た和樹は動きを止める。

「将」

「何だよ？」

「俺、男の娘でも良いかも」

沈黙が将を支配する。

「はあああああああああああ！？」

そして叫んだ。

「何言ってんだこの童貞野郎おおおおおおおおおお！！」

「童貞っ！？」

鬼の様な形相をした亮が、優也から遠ざける様に、和樹にドロップキックを決める。

「こ、この和樹さんが、どどど童貞な筈がないだろ！？　経験豊富ですよ！！」

「嘘吐け」

どの口がほざいているのかと思うくらい、和樹は慌てていた。

何より、幼馴染みの将が嘘だと言っているから嘘だろう。

「お前が童貞か童貞じゃないかなんてどうでも良い！　人の弟にまで手を出そうとしやがって……！　お前の粗末な×××を××××して×××にして魚の餌にしてやろうか！？」

異常なまでな亮の性格の変わりように、将は唖然とする。
和樹の相手をしている時は、覗きを止めようと必死だったが、もっと優しげな雰囲気があったからだ。

「×××で×××で×××にして魚の餌！？　流石の和樹さんもそれはちょっと！！」

流石に命の危険を感じた和樹は、顔を青ざめ、股間を抑える。

「問答無用！」
「何処から出したのその鎌！？」

亮と和樹。　修二と冷司。　駿と浩輝。　士と進也。
四ヶ所で死闘が始まるその瞬間、

「貴方達も楽しそうね」
『！！』

救世主が現れた。

「さ、紗理奈！？　何してるの！？」

柵の上から上半身を乗り出してこちら側に顔を出している紗理奈に、全員動きを止め、亮は驚愕する。
因みにタオルはちゃんと巻いている。

「おぉぉぉ！　超美人！」
「た、確かに……／／／」
「お前等は黙ってろ」
「「あ、はい……」」

紗理奈を見てテンションが上がった和樹と、頬を染めながら呟く士に、亮の鶴の一声ならぬ、死神の一声が二人を黙らせた。

「それで、何してんだよ？」
「覗かれる前に覗いてるだけよ」

即答されて亮は、羞恥心を持てよと思った。

「それはそうと貴方達」

紗理奈が何か思い出した様に、全員に言った。

「前隠しなさいよ」

覗き組の全員と、覗き阻止組の数人は、何とタオルを巻いておらず、紗理奈にバッチリと見られていた。
それを知った男達は、

『……きゃあああああああああああ！！』

乙女の様な悲鳴を上げた。

「紗理奈ぁ！　見ちゃ駄目だ！　早く戻りなさい！」

亮は弟と妹に過保護だが、恋人に対しても過保護らしい。

「大丈夫よ。　私は亮以外の男に興味はないし、そんな気も起きないわ」

「紗理奈……」

「ときめく前に、先に前を隠せ！」

紗理奈の言葉にときめいた亮は、前を隠す事すら忘れていた。

「将、もう和樹さんはお婿に行けません……」

「安心しろ。　一生行けねぇから」

モロに見られた事がかなり恥ずかしかったのか和樹に対し、将は冷たい言葉を投げ掛ける。

「いや待てよ。　和樹さんの息子を息子を見せたら逆にモテるかも！」

「それこそマジモンの変態だろうがあああああああ！！」

「ぐはっ！！」

和樹の発言に我慢出来なくなった進は、仮面ライダー顔負けの飛び蹴りを和樹に放つ。

間近で見ていた将は、ナイスキックと内心思っていた。

「何だ！　俺の息子が駄目だとでも言うのか！」

「常識的に駄目だろ！！」

「そうだ！　この×××野郎！」

「×××野郎！？」

進と和樹の言い合っていると、亮が進の援護をする。

先程みたいに怒り狂っている訳ではなく、少しふざけた感じで言っている。

「俺よりも将の方が絶対×××野郎だって！」

「ああ！？」

どうやら亮の言葉がかなり堪えたらしく、ついつい言ってしまった言葉に、将が反応した。

「……」

新たに一騒動が起きる事に気付かず、優也はさっきの体の異変を考えていた。

将の右手が体に当たった瞬間、体に異変を感じたが、すぐに治まった。

（何だったんださっきの？）

どれだけ考えてもわからない。

もし将の幻想殺し（イマジンブレイカー）の事を知っていれば、何かわかったかも知れない。

「和樹、お前が俺の事を×××野郎だと思ってんなら……」

「ん？」

考え事をしていた優也の耳に、将の声が届く。

見てみると、いつの間にか将は和樹に向き合い、右の拳を握り締めていた。

（あれ？　何かこの雰囲気、あの台詞を言いそうな……）

近くに居た進を見てみると、同じ様な事を考えている表情をしていた。

「まずはその幻想をぶち殺す！」

そして、将は和樹を殴り飛ばし、和樹は柵に叩き付けられる。

「やっぱり言った！！」

「本編じゃ言ったなかったよな！？　良いのかよ、勝手に言わせて！」

一度言わせてみたかった。

後悔はしていない。

「あら？」

柵の上の紗理奈が声を漏らす。

すると柵が、ゆっくりと倒れ始めた。

和樹がぶつかった衝撃が原因だろう。

誰がどうにかする事も出来ず、柵は倒れてしまった。

「危なかった」

柵が倒れると同時に出現させた箒に乗って空を飛んだお陰で、紗理奈は柵の下敷きになる事はなかった。

だが、男湯と女湯を隔てる柵が無くなればどうなるか、言わずとも皆様にはおわかりだろう。

一瞬で混浴の完成だ。

「……これはマズイな」

驚愕している少女達を見て、仁は今日で死ぬなと思い、無駄な抵抗はやめる。

「悪ぃ、用事思い出した」
「逃がしませんよ」

逃げようとする竜也を桂馬が止める。
本来なら桂馬も逃げたい所だが、逃げられる雰囲気ではないと悟り、諦めて竜也を道連れにしようと考える。

「ねぇ士君？　これはどう言う事かな？」
「是非訊かせて欲しいわね」

各々の変身アイテムを手にしながら（何処から出したかは訊かないで）、美莉と海華から主導権を奪った雪華が、士に恐ろしい笑みを向ける。
士は何も言わない。　と言うより、何も言えない。

「そんなに死にたいみたいだな。　将、和樹」
「ア、アスカ……」
「どんとこい！」

これまた恐ろしい睨みをするアスカに、将は青ざめ、和樹は敢えて待ち構える。

「駿様。　貴方がそんな方だとは思いませんでした……」
「ま、待て！　綾姫、これは誤解だ！　これは……」
「問答無用ですの！！」

駿は誰よりも早く、綾姫にお仕置きを受けた。

「「お前等よくも薫（凍華）の裸を見たな！　万死に値する！！」」
「お前等も同罪だろぉが！」
「「ぐあぁぁぁ！！」」
「お兄様！？」

自分達も覗いている事を自覚していない修二と冷司に、進が殴り飛ばす。
勿論その後、凍華と雅にボコボコにされた。
修二の心配をしてくれる人は居なかったそうな。

「上野君！　見ないで下さい……／／／！」
「ご、ごめん／／／！」

こちらは周りとは違い、初々しい。
純情頂きました。

「お母さん？」
「見てはいけませんよ？」

静は佳奈の眼を塞ぎ、何も見えない様にする。
静の傍が安全だと思ったのか、優花、渚、エルザ、癒々子は静の傍に避難していた。
薫は正の裸を見てしまい、オーバーヒート寸前である。

「待って下さい！」
「総司？」

一番何もしてはいけない人物が、アクションを起こす。

何と、何事も無かったかの様に、女湯に向かっていくのだ。

「馬鹿か馬鹿なのか馬鹿なんですか！？　何してんだよあいつ！？」
「あいつの行動に一々反応してたらきりがないぞ」

総司の行動に驚く将を、優也が宥める。
総司は雷美の前に立つ。
雷美は何もせず、ただじっと総司を見ている。
そして次の瞬間、全員が度肝を抜かれる。

「付き合って下さい！」
「「本当に馬鹿だあああああああああ！！」」

公衆の面前で、しかもこんな状況での告白には、進と将どころか、
男女関係無く驚愕した。
それに対し、雷美の答えは、

「喜んで」
『えええええええええええええええええ！？』

まさかのオッケー。
ここに一組のカップルが誕生した。
めでたい事なのだが、状況が状況なだけあり、めでたいまま終わる
程、世界は甘くない。

「「変身」」

【ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＤＥＫＡＥＲ】

美莉と雪華の変身を合図にする様に、少女達は暴れまわった。

暴れまわる少女達から必死に逃げる彼等は知らない。
未だに眠り続けている少女の固く閉ざされた眼が、ゆっくりと開かれた事に。

その頃のルナは、

「私、吸血鬼やめようかな……」

クリスと雪奈に慰められていた。

2022

第９２話　異世界交流温泉（後書き）

スーパー宣伝タイム！

優也
「【教えて！　雷道先生！】は？」

闇夜
「今回は無し。　代わりにゲストさん達に自分の作品を簡単に宣伝をして貰おうと」

進
「無事に済んで欲しい……」

優也
「お前、後半ツッコミっぱなしだったからな」

闇夜
「では宣伝タイムＧＯ！！」

将
「星空の侍が投稿中の【幻想郷の星空】」

アスカ
「幻想殺し（イマジンブレイカー）、大和将が幻想入りし、幻想郷の住人と異変を解決しながら、将の元の世界の敵と戦う小説です」

和樹
「俺、式守和樹と御武アスカも活躍するから、見てくれよ！」

駿
「俺達の作者、伽藍が投稿中の【ハヤテのごとく！～鷺ノ宮家の諸事情～】は、主役の鷺ノ宮駿、つまり俺が、妹の伊澄との日常を描いた小説だ。　もれなく伊澄の可愛さがわかるから、見てくれよ」

綾姫
「今の宣伝の九割は違いますわ。　実際は私（わたくし）と駿様が退魔師として

戦い。　時には助け合い、時にはあんな事やこんな事を……」

進
「してねぇだろ！　あんたも九割違う！」

駿
「ドタバタコメディーだったり、妖怪退治だったり、学園ものだったり、何でもありのなんちゃら喜劇のような多分そんな感じだからな！　ちゃんと原作キャラも俺と綾姫以外のオリキャラも出るから！」

士
「今度は俺達だな。　俺達は原典のライダーの世界を旅する仮面ライダーだ」

美莉
「主役ライダーさん達の真最強フォームも続々登場します！」

海華
「士と海華ちゃんのあんな事やこんな事も……」

進
「だからねぇよ！　健全な小説だからね！！」

雪華
「【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】見てね」

冷司
「やっと俺か。　俺達の小説は、俺と凍華があんな事やこんな事を……」

進
「三回目えええええええええ！！　何？　あんな事やこんな事流行ってんの！？」

凍華
「お兄様……／／／」

進
「照れちゃってるよ！！」
雷美
「ＤＥＡＤＰＯＯＬ　ＺＥＲＯの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】見てください……Ｚｚｚ」
桂馬
「僕達はデビルマンさんの小説、【ハヤテのごとく！～超不幸な青年の物語～】の登場人物です」
癒々子
「桂馬様や私が原作キャラであるハヤテ様達と絡む、ドタバタラブコメディーです」
進也
「最後は俺達だね。　ベルトさんの小説、【仮面ライダーエターナル～風都を守る永遠の戦士～】のタイトル通り、俺が仮面ライダーエターナルとして風都を物語です」
里美
「コラボも沢山しています。　是非見てください！」
和樹
「あんな事やこ……」
進
「言わせねぇよ！」
和樹
「げふっ！！」
優也
「大人しいと思ったら、最後の最後で……。　そう言えば、総司と雷美の事だけど」
闇夜
「ＤＥＡＤＰＯＯＬ　ＺＥＲＯさんと俺が許可したから公式だよ」

総司
「つまり僕も彼女持ちなんですよ！」
優也・進
「うざっ」
闇夜
「ご協力下さった皆様、本当にありがとうございます！」
進
「キャラの性格や口調が可笑しかったり、好き勝手してしまい、すみません！」
優也
「これからも、【黒と白の物語】を宜しく頼む」

次回
第９３話　銀狼失踪
総司
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第９３話　銀狼失踪

「温泉に入って何で疲れないといけないんだ」
「皆気絶してばっかだな」
「何か凄ぇボコボコにされたんだけど」

優也、進、彪牙、総司の四人は、気絶した仁、正、浩輝を連れて、自分達の部屋に居た。
温泉での一件で、仁と正と浩輝は気絶させられ、薫は卒倒してしまった。
気絶してしまった人の面倒を見なくてはいけない彩夏とナミが不憫である。
因みに一番ボコボコにされた進は、何故かケロッとしている。　今世紀、一番の謎だ。

「なぁもしかして俺って、雅に嫌われてたりする？」
「「はぁ？」」

呆れた声を洩らしながら、優也、彪牙、総司の三人は同じ事を思った。　こいつ何言ってんだ？

「今日もそうだけど、結構ボコボコにされてる気がすんだよな……。　そりゃあ俺が悪いんだけど」

雅が不憫でならない。
雅の行動は全部照れ隠しに過ぎないのに、進には嫌われているとしか思われていない。
進も進で、嫌われている（と思っている）事にショックを受けている様だが、進の鈍感さのせいで全く同情出来ない。　どちらかと言

うと怒りが沸いてくる。

「進」

「？　なに……ぬぉわっ！？」

優也に名前を呼ばれた瞬間、進は異常なまでの重みを体に感じに、畳に突っ伏す。

優也が進の上に乗っかった訳ではない。

そもそも優也は全く重くない。　進でも軽く持ち上げられるくらいだ。

では一体何が進を押し潰しているか。

それは最近死神の王様に名前を教えられた優也の刀、“闇空（あんくう）”だ。

「重っ！？　何これ！　ビクともしねぇ！！」

刀を持ち上げようとする進だが、刀は持ち上がるどころか重みを増す。

「その刀は大人十人がかりでも持ち上げられないからな。　進じゃ無理だぞ」

「じゃあ何で優也はあんな軽々振り回してんだよ！！」

十人で無理なら優也の細腕で持ち上げるなんて不可能。

だが優也は今まで刀に重みが無いように、軽々振り回している。

「重さなんか感じないんだけどな」

成る程、それなら一つの可能性があると、彪牙と総司は考える。

刀は妖刀の部類で、優也以外には重くて使えないと言う可能性が。

「伝説の剣!?　勇者様にしか使えない伝説の剣的な!?」
「そう言う訳ですから、勇者様の罰をしっかり受けなさい」
「どう言う訳!?」
「勇者様じゃないって……」

進、安らかに眠れ。　彪牙は合掌した。

「霧藤君!　大変よ!」
「彩夏さん?」

どれだけ急いだのか、衣服は乱れ、汗だくの彩夏が部屋に飛び込んでくる。

「どうしたんですか?」
「居ないのよ」
「居ない?」
「茜さんが居ないのよ!」
「!!」
「総司!」

考えるよりも早く体が動いた。　その後に脳が働く。
眠ったままの茜が一人で何処かへ行ける筈がない。
彩夏の様子から、仲間の誰かが自分に内緒で何処かへ連れていくとは考えにくい。
となると第三者が連れていった。　それとも……。
そこで一旦思考を止め、茜を見付ける事を最優先し、総司は広い広い旅館を駆けていった。

「俺達も手分けして捜すぞ!」
「おう!」

「ええ」

少し遅れて優也達も部屋を飛び出した。

「ちょっと待て勇者様ぁぁぁ！　この刀を退かして行けえええええええ！！」

刀の重みで動けない進を置いて。

第９３話　銀狼失踪

「姉さん！！」

茜の行きそうな場所が思い付かない総司は、まずは片っ端から旅館の中を捜そうと考えた。

そう考えて戸を開けた瞬間、顔に柔らかい衝撃が伝わる。

「……いきなり枕を投げますか？」

「総司だったからつい」

胸の感触だと思った人は残念。　女性陣の寝室に入った総司の顔に、流香が枕を投げ付けただけだ。
前科のある総司が突然女だらけの部屋に飛び込んできたら、問答無用でボコボコにされても可笑しくない。　枕を投げ付けられるだけで済んだのはもはや奇跡と言いようがない。

「それで、何かあったの？」
「姉さんって言いながら入ってきたけど」

総司の様子が可笑しい事に気付いたからボコボコにしなかっただけで、奇跡ではなかった。　その辺の常識はちゃんとあった。

「実は姉さんが……狼谷（かみや）茜が居なくなったんです」
「茜さんが！？」
「でもどうやって……」

総司の言葉に、一同は驚きを隠せない。
そしてやはり同じ疑問が沸く。
どうやって姿を消したか。
この旅館にはかなりの実力者が居る。　勿論、探知も得意な人物も居る。
そんな場所から、誰にも気付かれずに忍び込み、茜だけを連れ去るのは至難の技。

「考えるより捜した方が早いわ。　優花と渚は女将さんに怪しい人を見なかったか訊いてきて。　ずっと旅館に居たあの人なら何か知ってるかも」
「わかった！」

流香の指示を受け、優花と渚は女将の元へ急ぐ。

「美優は探知が出来るでしょ？それで茜さんの妖気を探してみて。慌てずに、少しずつ、辿るように」
「う、うん！」

美優は眼を閉じ、まだ不慣れな能力を使う。
美優の能力は攻撃より、防御や探知に優れている。訓練すれば一発で茜を見付けられるだろうが、今はまだそこまでの技術は美優には無い。茜が通った後に残っているかも知れない妖気を辿るしかない。

「雅は美優と一緒に捜して。私とエルザと九妖とサクラ、後ナミとルミアで外を捜しに行くわ。良いわね？」
「「「「はい！」」」」
「何で私が……」
「緊急事態だ。文句は言うな」

雅、エルザ、ナミ、サクラは素直に従い、渋っているルミアを九妖が諭す。
この分担には理由がある。
外は既に暗く、人間である雅では捜しづらい。その点、流香は吸血鬼で夜は昼以上に動ける。妖怪の九妖とエルザと悪魔のルミアなら多少暗いくらい問題ない。そしてサクラは猫の妖怪。ナミは犬の妖怪。この二人なら茜の匂いを辿れる可能性があるのだ。
だが所詮は可能性。絶対ではない。
せめて正が居れば大分楽なのだが、今は役に立つ状態ではない。

「ありがとうございます」

見事な手際に呆気に取られながらも、流香に礼を言う。

「困った時はお互い様よ。　行くわよ！」

エルザ、クリス、雪奈のクセのある三人を纏めあげ、キョウからも一目おかれていたカリスマ性を持つルナの妹と言うだけあり、流香もそのカリスマ性を引き継いでいた。

（何処に居るんですか姉さん。　皆心配してるんですよ！）

心の中で茜に語りかけながら、総司は再び駆け出した。

茜を捜していたメンバーは一度、ロビーに集まっていた。

「見付かったか？」

「いや、全然見っからねぇ」

「妖気も辿ってみたけど、途中で途切れちゃって」

「サクラとナミでも見付けられなかったわ」

旅館の中も外も、何処を捜しても茜は見付けられなかった。

その事実に、総司は焦りと不安を感じていた。

漸く再会した姉とまた離ればなれになるかも知れない不安に。

「怪しい奴も居なかったって言ってたし……」

旅館に残っていた人物に一通り訊いてみたが、誰一人怪しい人物を

見なかったと言う。
それだけ優秀な者が侵入してきたのだろうか。

「優花どうかしたの？」
「ちょっと考え事」
「どんな考え事ですか？」

一言も話さず、何かを考えている表情をしている優花に、サクラが尋ねた。

「推測なんだけどね」

口に手を当て、優花は言った。

「犯人なんて最初から居ないんじゃないかな」

まるで探偵の様な口振りで今、最も有力な可能性を否定した。

「犯人が居ない？」
「私の推測でしかないけど。　訊いてね」

この場の全員が優花の言葉に耳を傾ける。

「茜さんは昏睡状態で一人で動ける状態じゃない。だから誰かに拐われたと、私達は考えた。　ここまでは良い？」

優花の言葉に全員が頷く。

「でもそれが間違いだとしたら？　私達の勝手な思い込みで、存在もしない犯人を作りだしていたとしたら？」

勘の良い人物なら、優花が最初に言った言葉で気付いていたかも知れない。
自分達は架空の犯人を追っていたのだと。

「茜さんを拐ったとしたら犯人はなるべく速く、遠くへ逃げようとする。　流香達もそう思って遠くを捜したでしょ？」
「ええ。　妖気でも匂いでも捜せないから、遠くに行ったとばかり」

妖気も匂いも途中でわからなくなり、かなり遠くまで逃げられたと思っていた。　それが何よりの間違いだった。

「けど犯人は存在しない。　どれだけ遠くを捜しても意味は無い。
そう言う事だな」
「そう言う事」
「ちょ、ちょっと待って！　結局はどう言う事？」

意味がわからない美優は、優花に問いただす。

「もう一つの可能性と灯台もと暗しって意味だよ」
「え、えっと……えっ？」

遠回しな説明の仕方に、美優の頭に疑問符が浮かぶ。　それ以前に、灯台もと暗しの意味もわかっていなそうだった。

「とにかく、その可能性に賭けるなら総司。　お前が一番適任だろ」
「わかってます……」

優花の話でもう一つの可能性が浮かび上がった時から、総司は既に脳を働かせ、茜の居場所を考えていた。幼少の頃の茜との思い出を、

会話を一つ残らず思い出しながら。

『ねぇ総司。　ここから出たら何処に行きたい？』

『どうしたんですか突然？』

薄暗く冷たい牢屋。　その中こそ、総司や茜と言った奴隷達の地獄であり、生きていく為の居場所である。　総司と茜にとっては前者である。

だからこそ、ここから出て自由を手に入れたかった。

ここに居る子供達の殆どが、二人と同じ気持ちだ。

『良いから答えて』

『ん～、そうですねぇ。　茜姉さんとなら何処でも良いですよ』

『ぁ、あぁ、そう……？』

恥ずかしそうに頬を薄く染め、茜は顔を背ける。

『姉さんはどうなんですか？』

『どうって……何が？』

『姉さんの行きたい所ですよ』

その切り返しは予想していなかったのか、茜は考え込む。

『何話してるん？』

『ここから出たら何をするかの話ですよ』

『ここから出たらかぁ……ウチは総司お兄ちゃん達と一緒なら何処でもええよ』

やっぱり皆、離れ離れは嫌なんだ。　奴隷仲間で妹の様に可愛がっている少女と総司の会話を訊きながら、茜は思う。

総司と少女の話を訊き、気付けば子供達は自由になった時の話で持ちきりになっていた。

『結局、何処に行きたいんですか？』

『ウチも気になるなぁ。茜お姉ちゃんの行きたい所（とこ）』

協力者が一人増え、茜は逃げ場が無くなる。

本当に仲が良いなぁと思いながら、隠す事でもないので、茜は総司達に言った。

『私は――――』

あの事件で離れ離れになってしまったが、総司は忘れていない。

忘れる筈がなかった。

「……行ってきます」

「おう。　行ってこい」

何処かへ走り去る総司を、彪牙は見送る。

「良いのか？　一人で」

「あいつなら大丈夫。　いや、あいつだからこそ大丈夫だ」

何故こんなにも信じられるのか。　それは愚問でしかない事は優也はわかっている。

彪牙と総司は、優也にとって仁や正の関係と同じなのだから。

「えっと……どう言う事？」

未だにわかっていない美優だった。

「実はね」

砂浜は夜の帳で黒く染まり、海は月明かりに照らされ幻想的な光景を作り出していた。
幻想的な光景に白銀の髪をした少女が一人。　白銀の髪が月に照らされ、これまた幻想的な美しさを醸し出している。

「星を見に行きたい。　貴女は、そう言いましたね」

その少女の元へ、総司が辿り着く。

「あの子達も居ればもっと良かったけどね」

今は生きているか、何処に居るかもわからない友達達を思い浮かべながら、少女、茜は総司に向き合う。
優花が言っていたもう一つの可能性とはこう言う事だ。
茜はいつ眼を覚ますかわからない。
明日かも知れなければ一年後かも知れない。　はたまた十年後。
最悪、一生眼を覚まさないかも知れない。
その眼を覚ます時が、偶然今だったと言う訳だ。

「起きたらおはよう。　昔口煩く言っていたのは誰ですか？」
「そうだったね。　おはよう。　それと、ありがとう」
「わかれば良いんですよ」

総司はゆったりとした足取りで茜に歩み寄る。

「もう、せっかく会えたのに」

茜の手が目の前にいる総司の顔に伸び、

「何泣いてるのよ」

頬を伝う涙を優しく拭った。

「嬉し泣きですよ」

その言葉に偽りはなく、嬉しそうな笑顔を浮かべていた。

「ただいま。　総司」

「お帰りなさい。　姉さん」

今度こそ間違いなく幻想ではない。

この二人が再会できたのは、紛れもない現実だ。

因みに進は潰れる前に、クリスの瞬間移動（テレポート）によって助けられた。

第９３話　銀狼失踪（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「今回は前回答えられなかった分の質問にも答える。　最初の質問は、ＤＥＡＤＰＯＯＬ　ＺＥＲＯさんと【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】から槍だ。　ありがとう。　『皆の好きな仮面ライダーは？』『茜さんとの付き合い出す部分を書く予定はありますか？』」

優也

「ディケイドかＷだな」

美優

「電王だよ」

優花

「私はＷかな」

進

「龍騎とアクセルだよ」

薫

「ファムです」

彪牙

「響かスカルだぜ」

総司

「ブレイドです」

流香

「キバとキバーラよ」

龍

「クウガ」

正

「王蛇にカイザだ」

仁

「そして俺はファイズだ。　そして次の質問は」
闇夜
「正直言うとキツイです。　良ければそちらで書いて頂けませんか？」
仁
「次で最後だ。　竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】から聖麻だ。　ありがとう。『女性陣に質問。好きな奴の顔を２０秒間見つめていられるか？』」
美優
「十秒しか無理！」
優花
「わ、私も……／／／／」
薫
「ぶしゅ～／／／」
流香
「昔から一緒だし、二十秒くらいは大丈夫よ」
雅
「な、何で進の顔をそんなに長い間見ないといけないのよ！」
渚
「誰も進君の事言ってないけど。　あたしも流香と同じで大丈夫だよ」

闇夜
「今回は予定より早く茜に起きて貰いました」
総司
「この作品は基本ハッピーエンドですからね。　起きて貰わないと困ります」
闇夜
「終わりがちょっと微妙でしたけど、頑張りました！」
総司

「これからも宜しくお願いします」

次回

第９４話　世話好きな雪女

雪奈

「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第９４話　世話好きな雪女

雪が降る白銀の世界。　血塗れの夫婦と、夫婦に守られる様に抱き締められた少女が一人。
少女の雪の様に白い髪も、透き通る様な白い肌も、血で赤く染まっている。
夫婦と少女の血で白い雪が赤に染まっていく中、微かに残っていた少女の意識は、ブラックアウトした。

「……ぉい……おい。　葛城！」
「ん……椿？」
「やっと起きたか」

修二の声で雪奈は夢から覚めた。

「こんな所で眠ったら風邪引くぞ」
「そうだな。　すまない」

夏とは言っても、薄着で、しかも廊下のベンチで寝ていれば風邪を引く可能性もある。
修二は意外に面倒見の良い。

「そう言えばルナ達は？」

自分自身、いつ寝たかわからなかったので、ルナとクリスが何処へ行ってしまったかわからなかった。

「あんたを俺に任せたらメイドと一緒に何処かに行ったよ。　何か面白いもんでも見付けたんじゃないか」

それなら起こしてくれたら良かったのに。　置いていかれた事に少なからずショックを受けるが、同時にルナの世話をクリスに全部任せられてラッキーだと思う。

「あの二人の事はともかく早く来い。　飯が冷める」

「もうそんな時間か」

温泉は後で良いか。　何気ない事を思いながら立ち上がる。

「……魘されてたみたいだが、嫌な夢でも見たか？」

歩き出した足がピタリと止まる。

気付けば嫌な汗が体を伝っていた。　温泉は後で、と考えていたが、今すぐ入りたいくらいに。

だが、どんな夢を見ていたか知られたくないし、心配も同情もされたくない雪奈は、

「大した事じゃない」

明らかに嘘だとわかる嘘を吐いた。

第９４話　世話好きな雪女

修二と雪奈も合流し、旅館の大広間は優也達の貸切状態になっていた。

「美味しい！　美味しいよ！！」
「箸が止まらねぇ！！」

出された料理を口に運びながら、美優と進は感極まって涙する。
オーバーだ。　リアクションが。

「エルザと言い女将さんと言い、上には上がいるのか」

優也は優也で、世界の広さを再確認していた。

「はぁ～、美味しいです～！」
「もっと綺麗に食べなさい」
「母親みたいだな」

汚れたサクラの口の周りを九妖が拭き、その様子を黒烏が微笑ましい表情で見る。
親子の様に見える。　二人は否定するだろうが。

「……」
「……」

こちらは正と薫。
互いに向き合って黙々とご飯を口に運んでいる。

仲が悪くなった訳ではなく、ただ気まずいだけ。
両想いとは知らず、好きな人の裸を見てしまって顔を直視出来ないのだ。
殆ど恋人みたいなものなのに、いつなれば結ばれるのだろうか。

「何か、あそこだけ空気が重いな」
「風魔めっ、薫に何をしたんだ！」
「お前は落ち着け」

正に怒りを露にする修二に雪奈は呆れ果てる。

「よし！　取ったぁ！」
「キラっ、てめぇ！！」

こちらではキラがグランツのおかずを奪って、グランツが奪い返そうとしていた。

「この鯛も美味しいな」
「その鯛……海で取った奴じゃないわよね？」

ルミアの言う通り、アランが食べている鯛は海で取ってきた鯛であるが、アランが取ったものだからアランしか食べていない。

「こら、食事中に暴れるな」
「あぁ！　僕のおかず！」
「俺のだろうが！」

グランツとキラのおかずの奪い合いは、雪奈の乱入により終結した。
キラが奪ったおかずが乗った皿を雪奈が奪う。

「返してよぉ！」
「これはそっちの奴のだろう？　なら返すのはお前じゃない」
「そ、そうだけど……」
雪奈の正論にキラは何も言い返せなくなる。
すると雪奈はキラに皿を渡す。
「悪いと思うなら自分で返すんだ。　わかったな？」
「うん」
皿を受け渡されたキラはグランツに向き直り、
「ごめん、グランツ」
「お、おう」
素直に謝った。
普段はワガママで悪戯好きな子供に謝られ、グランツは起こる気が失せた。
子供と言っても、悪魔の中ではキラは最年長である。
「彪牙あああああああ！！」
『！！』
総司の絶叫が聞こえたかと思えば、彪牙が酔っ払った優花に伸されていた。酔っ払った優花の被害は、何故か真っ先に彪牙へと降りかかる。
それはそうとして、
「誰だ優花に酒飲ましたのは！？」
「悪い。　俺だ」

「浩輝さぁぁぁん！！」
「あんた何してるんですか！」
「仕方ねぇだろ！　優花があんなになるとは思わねぇだろ！！」
「子供に酒を飲ませるな！」

浩輝の言い分もわかるが、それ以上にわかる事は、このままでは全滅してしまうと言う事だ。

「皆ぁ～私を除け者にして、な・に・を・は・な・し・て・る・の・か・な？」
「「ひぃぃぃぃぃ！！」」

遂にロックオンされ、美優と進は悲鳴をあげる。

「お前が撒いた種ならお前がどうにかしろ」
「うおっ！」

背中を力一杯蹴られ、浩輝は優花の足下に倒れ込む。

「葛城てめぇ！　何しやがる！」

浩輝は勢いよく頭を上げる。　それがいけなかった。

「あれ？」

浩輝の視界が遮られる。

「浩輝さん！　は、早く逃げた方が……」

誰かが逃げる様に言うが、浩輝の耳には届かない。

それどころか、浩輝の鼻から赤い液体が流れた。

「黒か」

「何見てんだロリコン野郎おおおおおおお！！」

自分のスカートの中に頭を突っ込んでいる浩輝に、優花は拳を叩き込んだ。

「うぅ、見られた……見られちゃったよぉ……」

「よしよし。　変態ロリコン親父は私達がやっつけたからな。　もう泣かなくて良いぞ」

優花は浩輝をフルボッコにすると、今の様に雪奈に泣き付いていた。酔うと強気で狂暴になるがその反面、打たれ弱く泣き虫になるらしい。　それも今の様に。

因みに優花にフルボッコにされた浩輝は、あの後亮に更にボコボコされた。

「優也。　ゆうやぁ～……」

「俺？」

甘ったるい声で優也を呼ぶ。

その声で雪奈は成る程と思う。

「火渡。　この娘は頼む」

「あ、あぁ」

その言葉を待っていたのか、優花は優也に抱き付いた。

「ゆうや～」

「俺はここにいるよ」

何処からどう見ても兄妹で抱き合っている様にしか見えないが、その光景を美優は羨ましそうに見ていた。

「……あれは」

部屋の外で佳奈が一人でいる事に気付く。

「後は頼むぞ」

「あ、はい」

そう言うと雪奈は部屋から出て、佳奈の元へ行く。

「お絵描きか？」

「はい！　そうです！」

佳奈は一旦雪奈に顔を向けると、スケッチブックに絵を描く。

「絵を描くのが好きなのか」

「はい！」

どんな絵を描いているのか。　雪奈はスケッチブックを覗き込んでみるが、絵と言うより、魔方陣の様なものだった。

「佳奈」
「あ！　お母さん！」
そこに静が現れる。
「雪奈さんでしたね。　この度は佳奈の面倒を見て頂きありがとうございます」
「いや、そんな事……」
面倒を見たと言える程、面倒を見ていないのにこの改まった態度に、雪奈は言葉に詰まる。
それ以前に雪奈は静が苦手だった。
「……失礼、します」
何もかも見透かされている様で。
（そう言えば佳奈の描いていた絵。　何処かで見た様な……気のせいか？）
絵と言うより模様に近い佳奈の絵。
その正体はすぐにわかる事になる。
「おりゃあああああ！！」
「ぶほぉ！」

「てめっ、この野郎ぉ！」
「当てられるもんなら当てて、ぶっ！」
「油断大敵で、ぬおっ！」
「お前もな！」

只今、男性陣で盛大な枕投げ中。　発端は仁。
女性陣は既に就寝していると言うのに、騒がしい連中だ。

「霧藤総司ぃ。　どうやらお前とはここで決着を付けなければならないらしいな」
「結果は眼に見えていますがね。　勿論、僕の圧倒的勝利で！」
「ほざけ！」

仁は砲丸投げの様に、枕を遠心力たっぷりで放り投げる。

「こんなものが当たるとでも！？」

まっすぐ飛んでくる真っ白な枕を、総司は難なく躱す。

「あ」

ボフンと言う音の後に、仁の間抜けた声がする。
そして枕は畳に落ちる。
雪奈の顔から。

『ＺＺＺ～』
「……」

雪奈の視界が開けた時には、全員寝ていた。　勿論狸寝入りだ。
雪奈は無言で電気の下まで歩いていき、

「うるさい」
「むぎゃっ」

仁の背中を踏みつけ、電気を消した。

「まったく」

呆れながら部屋を出る。
男性陣がうるさすぎて誰も寝る事が出来ず、雪奈が静めに来たのだ。
入って早々カウンターを貰ったが。

「お疲れだな」
「椿……」

缶を二つ両手に持った修二が雪奈に声をかける。

「お前も早く寝ろ。　明日起きれないぞ」
「子供扱いするな。　少し眠らないくらい余裕だ。　それはそうと飲むかい？」

修二は両手の缶を見せ付ける。
雪奈は無言で缶を見つめると、片方の缶を奪うように取る。

「あ、それは……」

言い終わる前に雪奈は缶の中身を喉に通す。

「酒だぞ」
「ごほっ！　ごほっ！」

突出むせ出した雪奈に、修二は驚く。

「あんた酒飲めないのか？」

「飲めない訳じゃないが……苦手だ。　後ジュースだと思ってたから……」

涙目になりながらむせる雪奈を見て、修二は可笑しく思う。

「何が可笑しい？」

「いや。　しっかり者のお姉さんだと思えば、案外子供っぽいと思ってな。　身長も含め」

「なっ！　ち、違うぞ！？　ちょっとビックリしただけで飲めないとは言ってない！　後、背はまだ伸びる！」

ムキになって酒をイッキ飲みする。

元々自分で飲むつもりだった酒を飲まれてしまって残念に思いながら、修二は雪奈に渡すつもりだったジュースを飲む。

「にしてもあんた、大人には厳しいが子供に対しては世話好きだな。　子供好きか？」

「……まぁな」

突然雪奈は表情を暗くする。

（何かヤバイこと言ったか？）

自分が言った事で雪奈が落ち込んでいるのは明らかな為、修二は慌てる。　謝るべきかスルーするべきか。

「悪い……」

結局謝る事にした。

「謝る必要なんてない。　私が勝手に落ち込んだだけだからな。ヒック」

（ヒック？）

修二が違和感を覚えた瞬間には、

「私の母親はな……雪女って言う妖怪だったんだ」

雪奈は語り始めていた。

「いや、訊いてない……」

「父親は普通の人間だったから、私は半妖だけどな」

（人の話し訊いてねぇ！？　酔ってるよこいつ！）

普通に話しているから気付かなかったが、頬は朱に染まり、瞳は若干虚ろだったから、酔っている事に気付けた。

優花の酔い方に比べれば遥かにマシな為、静かに話を訊く事に決めた。

「だが二人を祝福してくれる人は居なかった。　当然だろうな。何と言ったって人間と妖怪だ」

決めたは良いが、話がシリアスな方向に進んでいる事に修二は首を傾げる。

「周りには認めて貰えず、蔑まれ続け、終いには一家心中だ。　知

っての通り私は生き残ったがな」
（こいつ、酔うと口が軽くなるんだな。　こんな重い話をすらすらと）
自嘲気味に話す雪奈に申し訳がなく思う。自分が持ってきた酒を飲んで、こんなにも簡単に話しているのだから。
「生き残ったが、その時の怪我が原因で……子供ができない体になってしまってな」
「……」
「だからかな。　必要以上に子供を大切に思ってしまう」
「嫌な思い出だろ。　何で言った？」
酒を飲んで口が軽くなっているとは言え、理性は失っていない。黙っていようと思えば黙っていられた筈だ。
「あの日の夢を見た時は、こうしてエルザに話を訊いて貰ってるんだ」
だからあの時魘されていたのか。
修二も時々、一族が滅んだ日の夢を見る事があるから気持ちがわかった。
「迷惑だとわかっていても、気持ちを吐き出さないと壊れてしまいそうなんだ」
雪奈は片手を眼に宛がう。
「私は強くないから」

雪奈の頬を一筋の涙が流れた。

「……迷惑じゃないさ」

「え……？」

「迷惑じゃないから、今晩は俺が話し相手になってやるって言ってるんだ」

「だけど……」

「早く言え。　じゃないとさっさと寝るぞ。　まだお子様だからな」

「わ、わかった。　ありがとう」

礼なんて必要ない。　そう言いながら、修二は雪奈の声に耳を傾けると、予想と違う事を言い始めた。

「ルナはワガママ過ぎるしクリスはよく頭を撫でてくるしエルザは私の事を子供扱いするし！」

「いや、そう言う話を訊いてやるなんて言ってないんだけど……」

「小さくて悪かったな！　こんなんでも２２なんだよ！　大人なんだよ！　背だってまだ伸びるわよぉぉぉ！！」

「落ち着けえええええ！！　口調まで変わってるぞ！？」

訊くつもりも無い話を始めたかと思えば、顔を伏せて泣き出してしまった。

「頼むからさっきのシリアスな感じに戻ってくれ！」

「何してるんですか？　兄さん？」

何とか宥めようとしている修二の背後から、薫の話しかける。

「騒がしいと思ったら、何で雪奈さんを泣かせてるんですか？」

「ま、待て！　俺は何もしてない！」
「私の中に入り込んできたくせに！　何もしていないとは言わせんぞ！」
「誤解を招く言い方はやめろぉぉぉ！！」

次の瞬間、ヒンヤリとした風が吹く。

「頭を冷やしなさい」
「あああああああああああ！！」

旅行の最初の夜の最後に、修二の悲鳴が響き渡った。

時間は修二が薫にお仕置きされる数十分前に遡る。

「まさか見付かるなんて……」
「あの程度の尾行じゃまだまだだな」

一人で何処かへ行こうとする竜也を見付けたルナは、偶然通りかかった修二に雪奈を任せ、クリスと一緒にこっそり尾行していた。
すぐにバレてしまった為、三人で外を歩く事になってしまったが。

「ところで、こんな時間に何処へ行かれようとしていたでありますか？」
「下見だ」
「下見？　何のよ？」

「さぁな」
「ちゃんと教えなさいよ！」
「お嬢様、落ち着いて」
今にも竜也に襲いかかりそうなルナを、クリスが宥める。
「何だここは！　全然片付かないぞ！」
すると、近くから男の怒号が聞こえてくる。
「だから着いて来なくて良いって言っただろ！　大体、悪魔のあんたに死神の仕事は無理だって言っただろ！」
「二人ともうるさい」
「ご近所迷惑ですよ」
「眠い……」
わかっている事は、五人組だと言う事と、聞き覚えがある声だと言う事と、段々こっちに近付いてきていると言う事だった。
「ねぇクリス」
「はい」
「嫌なくらい聞き覚えがあるのは私だけかしら？」
「大丈夫です。　私もであります」
いやでも、こんな所に居る筈がないわよね。　うん、大丈夫。　そんなちょっとした現実逃避をしてみたルナだったが、声の人物達が曲がり角から現れ、現実に引き戻された。
「「「あ」」」
「やっぱり……」

一人知らない白髪の少女が居たがルナの予想通り声の人物は、キョウ、ガドル、終(しゅう)、キリクと言った死神＋αだった。

第９４話　世話好きな雪女（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「最初の質問は、竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】から美莉だ。　ありがとう。　『優也君、顔を変えられるならどうなりたい？』」

優也

「ゴルゴ１３でお願いします」

美優・優花

「駄目えええええええええ！！」

仁

「本当にやりかねないな。　次はＤＥＡＤＰＯＯＬ　ＺＥＲＯさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】から雷美だ。　ありがとう。　『美優ちゃんに添い寝したいんだけど～良いかな？』」

闇夜

「メチャクチャにしてあげて下さい」

美優

「何てお願いしてるの！？」

仁

「次は烈火竜さんからだ。　ありがとう。　『《美優に質問》夏休みは宿題をせずに食べるつもりですか？』」

美優・進

「宿題忘れてたあああああああああ！！」

優也

「お前もか、進」

闇夜

「食べるつもりだったらしいです」

仁

「最後聖なる焔さんからだ。　ありがとう。　『アニメ（マンガ）や特撮などで嫌いな悪役は?』」

闇夜

「う～ん。　これと言ったのは思い付きませんね。　申し訳ありません」

仁

「今回の海の話。　ちょっとした中編になってるな」

闇夜

「一話完結なのは変わらないけどね」

仁

「いつまで続くのやら」

次回

第９５話　旅行の理由

竜也

「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第９５話　旅行の理由

旅行二日目。　明日には帰るので、実質最終日だ。
今回は全員で海に来ていた。　最終日くらいは沢山遊ぼうとして優也は海に繰り出したので、パラソルの下に居るのはルナ、雪奈、クリスの三人だけである。
普段なら海に突っ込んでいく筈が、今日のルナは静かにパラソルの下に居た。
昨晩の話の事を考えていたのだ。

『お前等、なぁんでこんなとこに居やがるんですかぁ？　嫌がらせですかぁ？』
『んな訳あるか。　仕事だよ仕事』
『仕事？』

死神の仕事について知らないルナは、疑問符を浮かべる。

『人間界でさ迷っている魂を導く事ですよ』
『嘘っ、貴方ってマトモな事してたのね』
『それどう言う意味だよ？』

まるでニートだと言わんばかりの言い方に、キョウは顔をしかめる。

『死神の仕事なのに、悪魔まで同行しているでありますがね。　しかも実体化までして』
『悪いか』
『正直邪魔だよ』

死神は魂を導く者。　それに対し、悪魔は魂を喰う者。

死神の仕事に同行している自体可笑しな事だ。

『何だと！　このエセアーティスト！』
『邪魔』
『痛っ！？』

図星を突かれ、キリクに突っ掛かろうとしたガドルの脛を、キョウ達と一緒に居た少女が爪先で蹴る。
弁慶の泣き所を蹴られたガドルは、蹴られた箇所を抑え、ピョンピョン跳び跳ねた。

『貴方は何故ここに居る？』
『……誰？』

軽くパーマのかかった白髪の少女が、竜也を見上げて質問してくる。
突然何で居るか訊かれて呆れるより、見知らぬ少女だと言う事の方が疑問に思った。

『まだ質問に答えて貰ってない』
『お堅いな。　もうちょい肩の力抜こうぜ』
『……』
『はぁ、わかったわかった。　お宅等と同じでこっちも仕事だよ。
お前等と似たな』

無言で見詰めてくる少女に根負けした竜也は自分がここに来た理由を話す。

『後ここには優也達も居るから、バレない様にはした方が良いぜ』
『忠告どうも。　気をつけとくよ』

特に優也、仁、正、美優、優花の五人とキョウは殺し合いをした間なので、顔を合わせれば警戒されるのはキョウにもわかっていた。

『んじゃ、改めて質問するけど、こいつ誰？』

そう言って竜也は少女に指を差す。

『そういやぁ初対面だったな。　こいつの名前は恭華（きょうか）だ。　そんでもって』

その後のキョウの言葉に竜也達は驚く。

『俺の妹』

『えええええええええええ！？』

まったく似てないじゃん。　揃ってそう思った。

第９５話　旅行の理由

「あいつに妹が居たなんてね」

「髪の色以外似てなかったでありますけどね」

昨晩の出来事を思い返し、ルナとクリスはひきつった笑みを浮かべる。　その隣で雪奈は暑さで完全にダウンしている。

「仕事かぁ。その場合は私達も手伝わないといけないのかしら？　ハッキリ言うけど、今の私は戦力外よ」

太陽、そして海。

吸血鬼は天敵が二つも存在して満足に戦える程、器用には出来ていない。

「あれは？　この間の戦いの時に使った魔術……」

「あら雪奈。　大丈夫？」

「大丈夫に見えるなら眼科に行った方が良いぞ……」

完全にダウンしていたと思っていた雪奈がルナに言う。

仁と戦った時は、知り合いの魔法使いから教えて貰った、太陽を克服する為の魔法のお陰で太陽の下でも活動できた。

それを使えば太陽の下でだけでも戦えるのではないかと、雪奈は言う。

「あれは時間がかかるし、それなりの準備と道具が必要だから無理よ。　何よりその為の道具を持ってきてないし」

「そうか。　後、頭撫でるな」

ルナの説明に納得しながら、クリスに頭を撫でられてうざそうにする。　振り払おうとしたが、暑さに体力を持っていかれて駄目だった。

「妖怪退治かぁ」

自分の妹と他数人が浜辺にある建物に向かって行くのを眺めながら、ルナは呟いた。

その頃、キョウ達は海の家に居た。

「かき氷とは素晴らしい。　人間も中々」

「いいや恭華。　暑い日に食べる焼そばも捨てがたい」

クールな少女、恭華と若干電波が入った青年、キリクがお互いの食べ物を進め合う。

「本当にここに居るのか？」

「居る。　魂が天国にも地獄にも行けなくしている原因を作っている妖怪が」

二人の隣ではキョウとガドルと終がこの仕事の元凶について話していた。

「妖怪は専門外ですけどね」

「殺せば何だろうが同じだろ」

「業務中の殺しは禁止です。　貴方も僕達と行動を共にするなら従って貰いますから」

「わ、わかってるよ。　言ってみただけだ」

終にじと眼で見られたガドルは眼を逸らす。

「まぁそれは竜也の仕事だ。　そっちは竜也に任せときゃ良いんだよ」

「そうですね。　あの人間が元凶を始末した後に、こちらはこちらで仕事を始めましょう」

死神の邪魔をしている妖怪が居たとしても、自分達がその妖怪を始末する訳にはいかない。　それは敗けたキョウ達に課せられた罰でもある。

「……兄様」

「どうした？」

かき氷を頬張る事を止め、恭華はキョウを呼ぶ。

「こっちに向かってくるあの人間達は知り合いでは？」

「人間？」

恭華の視線の先に、キョウも視線を向けると、確かに人間の少女が数人歩いてきていた。

その中の二人にキョウは見覚えがあった。

「やべっ……あの時の二人だ……」

キョウの言う二人とは、優也と似た容姿をした少女優花と、自分に決定打を決めた少女美優だった。

『バレない様にはした方が良いぞ』

昨晩の竜也の言葉が思い出される。　この二人にはガッツリ顔を見られている為、尚更バレる訳にはいかなかった。

「おい、どうする？」
「せめて顔は隠すべきだと」
「隠すったってなぁ……」

顔を隠すにも、それに適した物をキョウ達は持っていなかった。
そうしている間にも、美優達は近付いてくる。

「キョウ。あれはどう？」
「ん？」

壁に掛けてある物にキリクが気付き、キョウに伝えると、キョウ達は壁に視線を向ける。

「……いけるかもな」

キョウは壁に掛けられている物に手を伸ばした。

「すみませ～ん！　かき氷下さ～い！」
「一言目がそれ？」

入って早々食べ物を要求する美優に、流香は呆れる。

「まずは店員さんに訊いて……」

優花は何かを見て、言葉を止める。

「どうしたのゆう……」

どうしたのかと、沙耶（さや）が優花に尋ねようとしたが、優花の視線の先に居る人物達を見て止めた。

それは優花と沙耶だけではない。　全員が全員固まっていた。

「何あれ……？」

渚が全員の心を代弁する。

美優達の視線の先には、不気味な仮面をした四人と、かき氷を頬張る白髪の少女が居た。

（こ、怖い……）

（本当に何なのよ……）

（何かのイベントかしら？）

（何処かで見た様な……？）

（あの娘はあの四人と知り合いかな？）

「カッコイイ……」

『何処が！？』

すると美優達の視線の気が付いたのか。　仮面の四人組が近付いてくる。

「やぁ初めまして。　海パンレッドだよ」

「同じく海パンブルーです」

「海パンホワイト」
「そして海パンブラックだ」
「下半身よりもっと上の方に重点を置くべきじゃない？」

ダミ声で話し掛けてくる仮面男達に、流香が素早くツッコム。
確かに海パンよりも仮面の方に意識が集まる。

「あの、失礼ですけど、何処かでお会いしませんでしたか？」

優花の言葉に海パンレッドはギクリとする。
おわかりだろうが、この仮面軍団こそ、キョウ、終、ガドル、キリクである。　顔を隠す為、店に飾られてあった仮面を借りたのだ。
恭華は人間界に来るのは今回が初めてだったので、美優達に顔を見られても大丈夫な為、不参加である。

（完璧な変装な筈なんだが……流石優也の仲間だぜ）
（兄様。　それは変装と言うには安着だと思う。　言わないけど）

キョウが返答に困っているとぐ～、と誰かのお腹が鳴る。
まぁ言わずもがな美優だが。

「お腹が減ったのかい？　なら僕の顔をお食べ」
「えっ！　食べられ……」
「る訳ないでしょ！　こんな胡散臭い仮面が！」
「う、胡散臭いって……」

流香の言葉に海パンレッド、ではなく、店長らしき人物がショックを受けていた。　自分としては良いセンスだと思っていたらしい。

「そこの貴女」

「ふぇ？　私？」

一人かき氷を食べていた恭華は、新しいかき氷を手に持ち、

「空腹なら食べる？」

美優に差し出した。

「良いの！？」

「この美味は皆で味わうべき」

「あ、ありがとう！！」

そこから二人は意気投合した。

（（（餌付けされた？））））

食べ物に釣られた様になっている美優を眺めていると、海の方から雄叫びと轟音が鳴り響く。

「！　何っ！？」

「流香！　薫！　渚さんと沙耶さんをお願い！」

「うん！　って、こう言うのは優花ちゃんの方が……」

薫の引き留める声も訊かず、優花は雅と一緒に走り去ってしまった。

「何かあったのかしら？」

「あたし達も行ってみましょうか？」

「ま、待って下さい！　そんな事より何か食べませんか！？」

「私もかき氷食べたいから！」

何かが合ったとしたら、一般人の渚と沙耶を行かせる訳にはいかない。　だからこそ優花に頼むつもりだったが出遅れてしまった為、薫と流香が引き受けた。
因みに美優は未だに恭華とかき氷を頬張っていた。

美優達がキョウ達と出逢う数十分前。　ルナとクリス、へたばっている雪奈はナンパに絡まれていた。

「「……」」
「黙っちゃってどうしたの？　もしかして日本語わかんないとか？」
「いやいや、俺達がカッコ良すぎるかも知んないぜ」

そのナンパ男達は先日、優也と雪奈をナンパして進が海に投げ入れた二人だった。
だがルナとクリスが黙っている理由は二人の正体にあった。

「何たって俺ってジョ●ー・●ップ並みにカッコいいし」
「なんでやねん！」

先日と同じパターンでゲラゲラ笑うナンパ男、もといチャラ男。
一体何が面白いのかはわからないが、そんなふざけた漫才をすれば、奴がやってくる。

「ツッコメば何でも良いって訳じゃねぇぞおらぁ！！」
「「ぎゃふっ！？」」

「「！！」」

チャラ男二人は変な悲鳴をあげ、恐ろしい形相をした進に蹴り飛ばされる。

「ツッコミって言うのはなぁ！」

進の攻撃はまだ終わらない。　ここから怒濤の猛攻が始まる。
まずは蹴り飛ばした二人を追い掛け、ボディーブローを決める。

「どんなにつまらないボケでも！」
「お、お兄ちゃぁぁぁぁぁん！！」
「弟おおおおおおお！？」

そして弟と呼ばれた方のチャラ男の顔面を鷲掴みにし、

「面白くする事が出来るんだよおおおおおおおお！！」
「ぎゃあああああああああああ！！」
「おとうとおおおおおおおおおお！？」

太陽に熱せられた熱々の砂浜に、頭を深々と突き刺した。

「て、てめぇ！　よくも！」
「それをお前等は侮辱した！　だから！」

もう一人のチャラ男が進に向かって行くが、進は高々とジャンプし、空中で何回も回転し、

「N●Cからやり直して来やがれえええええええええ！！」

威力タップリの踵落としをチャラ男の脳天に叩き付けた。
強烈な一撃に、チャラ男の体は腰の辺りまで砂浜に埋まってしまった。

「って何やってんだお前はあああああ！！」
「ぐほっ！！」

カッコつけている進に、優也が飛び蹴りを放つ。

「昨日のはまだ良いけど、一般人相手にやり過ぎだろ！」
「一般人じゃねぇ」
「えっ……？」

いつの間にか背後に居た竜也が優也に言う。

「人間ごときが。　一度ならず二度も……」
「はっ？」

気絶した筈のチャラ男が、先程とはまったく違う雰囲気を醸し出し、進を睨み付けた。

「俺がここに来た本来の目的は妖怪退治だ」
「訊いてないんですけど」
「言ってねぇからな」

しれっと答える竜也に優也は呆れ果てる。
この人、あわよくば俺達に妖怪退治をさせるつもりだ。　と気付いたからだ。

「ここは霊が多く集まる場所なんだ。その辺りの説明はややこしい

から省くが。　勘の良いお前ならわかんだろ？」
「その妖怪は霊を餌にしている？」
「その通り。　しかも結界まで張って外から誰も人が入らない様なしたから困ったって女将がな」
「あの人が依頼したんですね」
「んまぁ、そう言う訳だ。　それで標的の妖怪は」
「「ぐおおおおおおおおおおおおおおお！！」」

突如耳をつんざく雄叫びがあがり、轟音が鳴り響く。

「こいつ等って訳だ」

竜也は海に現れた標的を見上げて言った。

「何だよあれ！？」
「タコに……イカ？」

海に現れたのは、タコとイカに酷似した、全長十メートルはある妖怪だった。

「こいつ等がさっきのチャラチャラした奴等に化けてたんだな」
「マジでか！？　全然気付かなかった」
（俺も）

優也も進も目の前で見ていたのに、正体にまったく気付けなかった。
ルナとクリスは勿論気付いていたが。

「そう言えば父さんは！？」

妖怪の存在が当たり前になり過ぎていて忘れていたが、進の父親で

ある人志は一般人である。
妖怪の存在がバレる訳にはいかなかった。

「大丈夫ですよ進君」

心配する進に総司が安心させる様に声をかける。

「君のお父さんなら僕の幻術をかけておきましたから」
「人の父親に何してんだぁ！？」

総司の幻術にかかっている人志は、パラソルの下で眼を回して気絶していた。　とても幸せそうな顔をして。

「どんな幻覚を見せたんだよ？」
「秘密です」
「貴様等ぁぁぁ！　俺達を無視してんじゃねぇぞ！」

存在を無視されていた巨大イカは怒鳴り散らす。

「強敵が目の前にいるんだぞ！　もうちょっと緊張感持て！」

巨大タコの言葉に、竜也は怪訝な顔をする。

「強敵って、図体がデカイだけだろ？」
「ああ！？」

ただデカイだけの魚類が図に乗っている事が、竜也は気に食わなかったらしい。

「こいつ等より強いのと戦った事あるしな」

「あいつよりはデカイけどな」
「戦ってはいないけど、百倍強そうだったな」
「あぁ。　あの時の死神か」
「あれは強かった」

上から彪牙、修二、仁、グランツ、黒烏の順に話す。
以前の戦いの時にウィリアムが暴走した時の事を言っているのだろう。

「と言う訳でお前等は三下だ。　そこんとこ覚えとけ」
「つーか図体だけで俺等に勝てる訳ねぇだろ」
「「何を～！？」」

竜也と浩輝の言葉に怒り心頭の二匹は、今にも襲い掛かって来そうな勢いである。

「お母さん。　おっきなタコさんとイカさんがいるよ？」
「今晩はタコさんとイカさんの刺身ですね」
「本当！？　やったぁ～！」

一触即発の雰囲気の中、静と佳奈は仲良く砂浜でお絵描きをしていた。

「もう良い。　お前等はここで死ね！」

耐えきれなくなった巨大タコは遂に攻撃を開始する。
触手を大きく振り上げ、優也達に振り下ろした。

「取ったどおおおおおおおお！！」
「いったあああああああああああ！！」

かに思えたが、アランが巨大タコに自身の武器である槍を銛に見立て、突き刺した事で中断された。

「お前達！　今晩はタコが食えるぞ！」

「やった～！」

どうやら昨日の続きらしく、アランとキラ楽しんでいた。

「いつまでやってんだよそのプチ黄●伝説！！」

今すぐに飛び蹴りをかましたい進だったが、巨大タコが触手をアランに伸ばしているのが見え、すぐに思考を切り替えた。

「アラン！　危な……」

い。　と言い終える事が出来なかった。

何故ならば、アランに伸びていた触手が何者かによって切られてしまったからだ。

「タコさんよぉ」

砂を巻き上げ、踏ん張らなければ立っていられない様な暴風が吹き荒れる。

自然に発生した物でも、黒烏が起こした物でもない。

なら一体？

答えは至極簡単。

「いきなり人の上に出てきてはしゃいでんじゃねぇよ」

風の悪魔。　風魔正の不機嫌さを現した風なのだ。
普通に海で遊んでいて、突然巨大なタコがのし掛かってきたのだ。
不機嫌になるくらいで済んだのが奇跡だ。

「わざわざ必死こいて這い出てきてやったんだ！　醜く逃げ回るタコくらいにランクアップして楽しませてみろや！」
「あぎゃあああああああ！！」

刃より鋭く、台風より荒々しい風を操り、巨大タコを切り刻んでいく。

「て、てめぇえええええええ！！」

目の前で一方的な殺戮が展開され怒った巨大イカは、正に襲い掛かる。

「確かに！　風魔に同意だな」
「！」

巨大イカは体を引っ張られ、それ以上前に進めなかった。
その理由は、これまた至極簡単。
咲魔に体を掴まれているだけだ。

「風魔の言う通り……人の上ではしゃいでんじゃねえええええ！！」
「うおおおおおおおおおお！？」

一本背負いの如く、咲魔は巨大イカを海に叩き付けた。

彼もまた、巨大な図体に潰されかけた一人である。

「イカ風情が。　咲魔様に何足る無礼を……」

「あああああああ！！　ス、スルメ！　スルメになる！？」

追い討ちをかける様に九妖が炎を浴びせる。

恋する乙女は何とも怖いものである。

「おい、退いてろ」

「あ？」

仁の声が聞こえたかと思えば次の瞬間、正は巨大イカと巨大タコと一緒に電撃を喰らった。

「「「あばばばばばばばばばばばばば！！」」」

それはもう骨が見えるくらいの電撃を、海の水を通して。

「おまっ、何して……」

「あああああああああああああ！！」

味方を巻き込んだ非情なる仁の攻撃に抗議しようとした進の言葉を、優也が絶叫して遮る。

そして海に向かって走り出す。

「おかずが！　おかずが浮いてきたあああああ！！」

感電して海に浮いた魚に向かって。

「大変だな。　神道さん家（ち）の台所事情」

同情しながら呆れ気味に竜也が呟いた。

「とある優也の台所事情」

と、仁が呟いた瞬間、

「らぁぁぁぁぁぁぁぁいどうくぅぅぅぅぅぅぅん！！　てめぇ何しやがんだぁ！？」

黒焦げだが、ピンピンした正が突っ掛かってきた。

「退いてろって言っただろ」

「言ったね！　でも緊張感を持とうや！？」

「それ以前に何で無事なんだよ」

「最近の人間って訳がわからないわ……」

あれ程の電撃を受けて何故、何事も無かったかの様に動き回れるのか。　いい加減、正が人間に思えなくなってきたグランツとルミアだった。

「このおおおおおおおお！！」

正の風と仁の電撃によってボロボロにされた巨大タコは逆上し、パラソルの下でジッとしているルナに向かって触手を伸ばした。

「ルナ！」

太陽の下では吸血鬼は本来の力を発揮できない。　この一撃も止められないだろう。

その事を一番わかっている筈のルナは、躱そうとするどころか、微動だにしなかった。

「クリス、エルー」

触手はルナから三メートル程までの所で弾き返された。

「ぎゃあああああああああああ！！」

巨大タコは突如悲鳴をあげる。
いつの間にか片眼を潰されていたのだ。

「お嬢様に触れようものなら」
「容赦はしないであります」

ルナを守る様に、エルザとクリスが並び立つ。
エルザが巨大な触手を弾き返し、クリスが何かを巨大タコの眼に転移させ、眼を潰したのだろう。　当然だが、雪奈は何もしていない。

「低級妖怪風情が私に触れようなど、百年早いわ」

長い金色の髪を優雅にかき上げ、ルナは威厳タップリに言った。

「カリスマ復活？」
「大丈夫だ。　ちょっとしたらすぐに元に戻る」
「待てよ。　元々どっちが元なんだ？　カリスマ溢れたルナか、シスコンで威厳も糞もないルナか」
「威厳も糞もない方に決まってんだろぉが」
「そこ！　聞こえてるわよ！」

久しぶりにカリスマ溢れた雰囲気を出したルナだが、優也達には普段のルナの方が定着してしまっていた。
優也の言葉にショックを受けたルナは、エルザとクリスが何とかして慰めた。

「優也！」
「ちょ！　何よあれ！？」

そこへ、優花と雅が海の家から戻ってくる。

「馬鹿！　来るな！」
「「きゃあああ！！」」

優也達の元に辿り着くより速く、巨大イカはその巨大な触手で二人を縛り上げた。

「しまった！」
「ふはははは！　動くなよ！　動けばこの娘達の命は無いぞ！」
「流石お兄ちゃん！」
（イカとタコなのに兄弟なのか？）

人質を取り、優位に立った事で巨大イカは高笑いする。
仁は内心、タコの発言に疑問を持ったが、今は関係ない。

「放しなさいよ！　気持ち悪い！」
「き、気持ち悪い！？　俺の何処が気持ち悪いんだ！　言ってみろ！」
「全部よ全部！」
「ぜ、全部……」

雅の言葉にショックを受け、大きな体が項垂れる。　タコのフォローで何とか立ち直った。

「雅さんの言う通りです！　触手プレイなんて羨ましい！　僕にやらせて下さい！」

「誰もそんな事言ってないわよ！」

「総司はもう黙ってて！」

脳内がピンク色な総司の発言に優花と雅は怒るが、普通な男の子な進とヘタレで純情な正、そしてロリコンな浩輝はその発言に意識してしまう。

「ちょ、進！　こっち見んじゃないわよ！！　見たら殺す！」

「物騒だな！？　わかってるよ！」

「緊張感ねぇ」

総司のせいで変に意識してしまう進と雅。　考え過ぎでオーバーヒート寸前の正。

緊張感の欠片も存在しない。

「うん、わかってる……わかってるよ。　私には全然魅力が無いって……」

「ゆ、優花？」

突然、優花は表情を暗くする。

「身長は低くて胸は小さい幼児体型だし、ブサイクだし、長編になったら戦闘ばかりで出番無いし……」

「あの～優花？　って言うか最後は何？」

「今みたいに雅と並んだりしたら……」
（（（（あぁ、成る程））））
元を正せば総司のせいだが、先程の総司の発言をした時に数人の視線が雅に集まった事に気が付き、わかっていても落ち込んでしまったのだろう。
だがブサイクではないと、ここに記しておく。
「わかる。　わかるわよその気持ち！」
「紗理奈さん……」
今まで黙っていた紗理奈がここぞとばかりに口を開く。
「私は彩夏とは親友だけど、こう言う所で並ぶとスタイルでいつも敗けるのよね」
「いや、私はそんなにスタイルは良くないわよ？」
「今の発言で世界中の女の人を敵に回しましたよ」
いつも白衣か適当な服で、まったくオシャレをしない彩夏だが、中々スタイルは良い。　エルザ程ではないが、この中なら上位に入るくらいだ。
「でもね、意外と貧乳キャラの方が需要があったりするのよ。　誰が言ったか忘れたけど、貧乳は希少価値だ！　ステータスだ！　って」
「紗理奈さん……！」
「感動する場面？」
「さぁ？」
「最終手段にヤンデレとか既成事実とかもあるから、諦めちゃ駄目！」

「は、はい！」
「それで良いのかよ」
何はともあれ、紗理奈のお陰で優花は元気を取り戻した。
めでたしめでた、
「無視すんじゃねぇ！？　今の状況わかってんのか！？」
し、とはいかなかった。
「あ、忘れてた」
「忘れるか！？　普通！？」
「と、とにかく！　こっちには人質が居る！　動くんじゃねぇぞ！」
「さっき訊いたけどな」
「だあぁぁぁ！　うっせぇぇぇ！！」
二匹は触手を振り回し、優也達を攻撃する。
人質が居るため、優也達は躱すしか出来なかった。
「てめぇ等は大人しく死ねば……」
何かが斬れる音が響く。
一瞬何かわからなかった巨大イカだが、地面に落ちていく優花と雅を見て理解した。
二人を捕まえていた自分の二本の足が斬られたのだと。
落下していく二人とは別に、一人の少女が視界に写る。
それは海の家で美優とかき氷を頬張っている筈の恭華だった。
恭華は二本の死神（デス）の鎌（サイズ）を手にし、巨大イカを見上げていた。
「さっきの！？」

「死神だったの！？」
「美優！」

落下しながら恭華の正体を知り、二人は驚いていると、恭華は美優の名前を呼ぶ。

「任せて！」

少し離れた所から、純白な天使の翼をはためかせ、純白の髪をした美優が飛来してくる。　手には真っ白な刀が握られている。
狙うは二人をもう一度捕まえようとする触手。

「“光翼刃（こうよくじん）”！」

触手目掛けて力一杯振り払った刀は、力を解放するかの様に大刀へと変わり、全ての触手を斬り咲いた。

「何いいいいいいいいい！？」
「やった！　出来た！」
「こ、この野郎おおおおおおおお！！」

初めて成功した必殺技に喜んだ美優だが、巨大タコが美優と、そして優花と雅を狙っている事に気付かなかった。

「美優！　危ない！」
「えっ？」

優花の声で振り返った時にはもう遅い。
優花と雅は再び捕まり、美優は翼をもがれ、

「世話が掛かるな」

るよりも速く、優也が巨大な炎の刀で美優と優花に迫り来る触手を焼き斬り、雅に迫り来る触手を力を解放した進が蹴り上げた。

「“大炎刀（だいえんとう）”」
「“龍の咆哮（ドラゴンストライク）”！」

優也は優花を、進は雅を抱き抱え、見事に着地する。

「ご、ごめん……」
「謝るなよ。お前が無事ならそれで良い」
「う、うん……／／／」

地面に降り立ち、真っ先に優也お礼を言いに行くつもりの美優だったが、優花を見て足を止めた。
優也と居る時の優花の表情が、自分に似ていたからだ。

（もしかして、優花は）
「お、降ろして／／／！！」
「暴れんなって！」

美優の思考はそこで遮られる。
すぐそこで、進に抱えられている雅が、顔を真っ赤にして暴れていた。
あれは雅の照れ隠しだが、進がそれに気付くのはいつになる事やら。

「進！　上！」
「へっ？」

雅の言葉に上を向いた進は驚愕した。
あの巨大な触手が、自分の真上に振り下ろされていたからだ。
逃げる間もなく、進と雅は踏み潰されてしまった。

『！！』

全員、予想だにしなかった光景を信じられなかった。
今の今までふざけあっていた二人が、こんな事で死んでしまうのかと。

「ぎゃはははははは！！　ざまぁみやがれ！」

巨大タコ、いや、妖怪の笑い声が響き渡る。
自分達をコケにした人間を殺せて、優越感に浸っているのだろう。

「何をそんなに笑っているでありますか？」

だがそれは、次に眼にしたものによって打ち砕かれる。

「彼等は生きているのですが？」
「ば、馬鹿な！？」

妖怪は驚愕する。　何と言っても、踏み殺した筈の二人が、傷一つ無く、クリスの隣に居たからだ。

「そうか！　“強制転送（フォースドフォワード）”」

真司は思い出した様に言う。
クリスは瞬間移動系統の能力者で、自分だけではなく、遠くに離れた人間や物体を自由に瞬間移動させられるのだ。

その能力に進も真司はかなり苦しまされたのは、まだ新しい記憶。

「し、死ぬかと思った……」
「あ、ありがとう……」

呆然とする進を他所に、雅はぎこちなくお礼を言う。
一度殺されかけた相手に助けられ、戸惑っているのだろう。

「敗けないであります」
「えっ……？」

クリスの言った言葉が理解出来ず、聞き返そうとしたが、突然轟音が鳴り響き、意識がそちらに向かう。

「な、何あれ！？」

雅が見たものは、二匹の妖怪とは比べ物にならない魔力と威圧感を放った、巨大な怪物だった。

「あれはリヴァイアサン！？　何でこんな所に！」

珍しく竜也は驚愕した表情をする。
それだけあの怪物が凄まじいものなのだろう。

「リヴァイアサンだと？　何でそんな奴が」
「あの～、リヴァイアサンって？」

名前を訊いてもピンと来ない進は、竜也に尋ねる。

「後で説明する。　今はこいつだ」

「何処かに召喚師でも居るんじゃ……」
「竜也さん」

突然のリヴァイアサンの出現に各々が慌てる中、静は落ち着いた様子で竜也に話しかける。

「その召喚師なら近くに居ます」
「何処だ？」
「そこです」

静が示す方を見た者全員が驚愕する。
当然だろう。　リヴァイアサンを召喚したのが、たった五歳の子供だったのだから。

「佳奈が！？」
「私も驚きました。　まさかあれが召喚陣だと思いませんでしたから」

ここに居る者全員、魔物の召喚は専門外だからわからないが、恐らく佳奈の目の前に描かれている魔方陣こそ、リヴァイアサンを召喚する為の魔法陣なのだろう。
何より、静が目の前で見ていたのだから間違いない。

「行けぇ～、リーちゃん！」
『リヴァイアサンをリーちゃん呼び！？』

佳奈の合図を待っていたと言わんばかりに、リーちゃんことリヴァイアサンはイカとタコに向かって行く。
とてつもない威圧感に、二匹は動くどころか声もあげる事も出来ず、

水平線の彼方まで吹き飛ばされた。
その光景を目の当たりにした優也達は呆然とする。

「凄い凄〜い！」

静寂の中、佳奈の無邪気な笑い声が響き渡る。
そして、竜也は呟いた。

「天才召喚師」

大きくなったら自分達と同じ道に足を踏み入れるのではないかと、
少し娘の将来が心配になった竜也だった。

第９５話　旅行の理由（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「最初の質問は烈火竜さんからだ。　ありがとう。　『美優の胃袋はどうなってますか？』」

闇夜

「底無しの宇宙です。　例えるなら、とある魔術の禁書目録のインデックスくらいです」

仁

「今回、優也が魚を取りに行くぐらい食べるらしいしな。　次は、ＤＥＡＤＰＯＯＬ　ＺＥＲＯさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】から烈火だ。　ありがとう。　『フォーゼのアストロスイッチで好きなスイッチは？』」

闇夜

「名称が合っているかわかりませんが、ロケット、エレキ、スパイク、ファイアーくらいですかね」

仁

「単に思い出せないだけかもな。　次で最後だ。　竜王の白翼さんの【仮面ライダーディフェル～世界の覚醒者～】から雪華だ。　ありがとう。　『流香に質問。クールキャラが崩れるのと同じくらい嫌なことある？』」

流香

「あるわよ。　優也の血が飲めない事とか、お姉様の過保護とか」

ルナ

「そ、そんなに嫌だったの……？」

流香

「嫌って訳じゃなくてですね！　私もそろそろ大人として扱って欲しいなって思っただけで！」

闇夜
「まだ中学生だけどね」
仁
「質問はこれで終了だ」

闇夜
「いやぁ、今回は思ったより長くなった」
仁
「色々あったが、佳奈が全部持っていったな。まさか召喚師の素質があったなんて」
闇夜
「後一話で旅行は終わりです！　次回も宜しくお願いします！」

次回
第９６話　世界で最も怒らせてはいけない男
優也
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第９６話　世界で最も怒らせてはいけない男（前書き）

またタイトルを変更してしまい申し訳ありません。

第９６話　世界で最も怒らせてはいけない男

夕食を食べる筈の大広間は、それはもうメチャクチャになっていた。
数人は気絶し、優也もフラフラしていたが、ルナは気持ち良さそうに眠っていた。
何があったかと言うと、数分前に遡るが、

『カリスマ性溢れる超エリート吸血鬼、黒城ルナただいま参上☆
貴方の血を飲みほしちゃうゾ☆』

片眼を閉じ、ピースにした指を開いている方の眼に当て、舌を出しながら、ふざけた事を言って、大広間に突入してきたのだ。
突然の事に唖然としていた一同に、ルナは血を吸う為に襲い掛かった。
その後に知ったのだが、女将の手伝いをしていた美優が一品、料理を作ったのだが、その料理をルナがつまみ食いしたらしい。
次の瞬間にはルナはアホの子になってしまい、優也達を遅い出した。
どうやら美優の料理を食べると、性格が変わってしまうらしい。
以前、優也達が食べた時は、雅のお陰で中和されていた様だ。
血を吸いまくり、満腹になったルナは幸せそうに眠りについた。
そして今に至る。

「肝試しするって言っておいたのに、何だよこのザマは」
「神道の料理は凄いな」

実は言うと夕食の後、肝試しをする予定になっていた。
仁と浩輝のこの二人が一番肝試しをする事を楽しみにしていた。

「せっかく面白い事考えてやったのによぉ。　まぁ何とかなっか」

絶対痛い目に合うな。　と仁は考えながら、美優に声をかける。

「あ、仁」

「お前の料理、凄い威力だな」

「こんな事になるとは思わなかったけどね……」

乾いた笑みを浮かべながら、美優は辺りを見回した。

「弁償とかになったら、今度こそ優也怒りそう……」

今回の事で怒られるとヒヤヒヤしていたが、優也が許してくれた事に安心した。

だがもし、この大広間を弁償しろと言われたら、今度こそ優也が怒りそうで、美優はまたヒヤヒヤしていた。

「神道、一応忠告しておくが」

何処と無く表情を青ざめながら仁は言う。

「優也は怒らせるなよ」

その時美優は、仁の言葉の意味がわからなかったが、すぐに思い知る事になる。

第９６話　肝試し

「第三十四回！　肝試し大会いぃぃぃ！！」

月明かりしかない薄暗い森の前に、優也、美優、優花、進、総司、彪牙、雅、渚、真司、キラ、そして大声で叫んだ浩輝が集まっていた。

「いや、三十四回もしてないですよ」

「ノリだから良いんだよ」

それはそうとして、かなり雰囲気のある森だと進は思う。

巨大なタコやイカも出てくらいだから、幽霊くらい出ても可笑しくないくらい。　いや、悪霊が目の前に居るから本当に出るかも知れない。

「くじ引きで相手は決まってんな？　んじゃあ、そろそろ始めっか」

「ちょっと待って下さい。　こんな暗いのに懐中電灯の一つも無いのは危ないですよ」

早速肝試しを始めようとする浩輝に優也が物を申す。

今は夜中で月明かりしかない。　しかも手元には灯りになる物は何一つ無い。　こんな状態で真っ暗な森に入ったら、迷子どころか危険な目に合うかもしれない。

「それもそうか。　んじゃあ火渡。　ちょっと旅館まで取りに行ってくれ」
「何で俺が？」
「言い出しっぺだろ。　ここからなら一分もかからないから行ってこい」
渋々ながらも、優也は旅館に向かって走り出した。

「さて、ターゲットも離れた事だし、今回の肝試しの本当の目的を話しておくか」
「そうですね」
「あ？　本当の目的？」

総司と浩輝が良からぬ事を企んでいる事に、彪牙は怪訝な表情をする。
タイミングから言って間違いなく優也関係だから尚更だ。

「そう、第三十四回肝試し大会はただの第三十四回肝試し大会では無いのだ！」
「この第三十四回肝試し大会は第三十四回肝試し大会と読んでいるだけでただの第三十四回肝試し大会では……」
「しつけぇよ、第三十四回肝試し大会。　さっさと言いたい事言えよ」

何度も同じ事ばかりを言う浩輝と総司に痺れを切らした彪牙は、早く言う様に催促する。

「じゃあ訊くけど、火渡が泣いてるとこを見た事がある奴居るか？」
皆揃って首を横に振る。

美優と優花は一度見た事があるが、あの時の事は個人的に秘密にしておきたかったので、同じく首を横に振った。

「ガキの頃の火渡を知ってる俺でも見たことがねぇくらいだ。　雷道か風魔なら見たことあるかも知れないけどな」

「つまりこの計画は、優也君の泣き顔か、最低でももの凄く怖がっている所を見ようと言う計画なのですよ」

「うわっ！　悪趣味！？」

悪趣味だが言いたい事はわかる。　優也は弱みを殆ど見せようとしない。　涙は特にだ。

そう考えると、悪趣味だとはわかっていても見たくなってしまう。

好奇心と言う名の欲望には勝てないものだ。

「ふふふ、悪趣味と言いつつ見たいんじゃありませんか進君？」

「他の奴等も見たいんだろ？」

どうやら進以外にも、優也の泣き顔を見たい奴等が集まっているらしい。　勿論美優と優花もその一員だ。

「何人かはもう準備してるが、天道がルナの暴走に巻き込まれて眠っちまって人手不足だ」

「だから皆さんの協力が必要なんです！」

そんな力説する事か？　と彪牙は呆れ果てる。

元々彪牙はあまり乗り気では無かった。　別に優也の泣き顔を見たい訳ではないし。　大体そんな事をすれば、仁と正に殺されてしまいそうだ。

「どうなっても知らねぇぞ」

結果、彪牙は龍と同じ傍観者になる事に決めた。　皆があれこれ工夫している間、自分は安全な場所に居ようと。

「では行きましょう。　優也君の泣き顔を見隊、出動！」

『そんな名前は嫌』

彼等はまだ知らない。　好奇心から始まったこの計画が、一生のトラウマになる事に。

「本当に真っ暗だな」

「うん」

ある意味今回の主役である優也は現在、くじ引きで相手になった美優と一緒に森の中を歩いていた。

懐中電灯が無ければ本当に何も見えない真っ暗な森に、わざわざ取りに戻って良かったと、優也はつくづく思う。

美優はと言うと、優也に内緒で進められているドッキリが成功するのかとソワソワしていた。

　旅館での仁の忠告を忘れて。

「何かいつもより静かだけど、どうかしたか？」

「えっ！？」

優也は美優の様子に違和感を覚えた。

数分歩いて、やけに口数が少ないのだ。
単に怖いだけかと思っていたが、何処と無く考え事をしている様に見えた。

「本当におばけが出るのかなって思っただけだよ！？」

慌てながらも何とか計画の第一段階を実行する。
肝試しを始める前に浩輝は言っていた。

『昔この森で自殺した女が悪霊になって、森に入った者を殺す』

と言う嘘を。
優也がそれでどんな反応を示すか美優が確認するまでが、第一段階なのだ。

「幽霊ねぇ……」

予想通り大した反応を示さない。　これは失敗かと思った矢先、

「で、出てきても、たた倒せば大丈夫だろ」

声が震えている事に気が付いた。　まさかこれは。

「怖いの？」

違和感が無いように、素朴な質問を投げ掛けてみる。

「！　そ、そんな訳ないだろ！？」

これでもかと言うくらい慌てふてめく。

怖いんだ、と確信すると同時に可愛らしく思う。　初めて出逢った時、人を寄せ付けない雰囲気を漂わせていたとは思えないくらい。

（やっぱり好きなんだな）

何はともあれ、これなら優也が涙ながらに自分に抱き付いてくるに違いない。

「きゃあああああああああああああ！！」

「「！？」」

当初の目的を忘れかけていた美優の耳に、雅の悲鳴が届く。

実はこれも計画の一つ。　先に出発した進&雅組が何かに襲われた、と優也に思わせる為のただの演出である。　勿論、進と雅は無事だ。

「美優、離れるなよ。　……美優？」

今の悲鳴は間違いなく雅のものだった。　そうなると、雅と一緒に居た進の二人が誰かに襲われたと言う事になる。

すぐさま頭を戦闘モードに切り替え、美優に呼び掛ける優也だったが、美優からの返事が無い。

恐る恐る振り返った先には、美優は居なかった。　まるで最初から居なかったかの様に。

「み、みゆ……美優さ～ん？」

何度呼び掛けても姿どころか返事も無い。

戦闘に切り替えた脳が、再び恐怖し始めた。

ふっ、と懐中電灯の灯りが消える。　突然暗くなって、優也は周りがまったく見えなくなってしまった。

「な、何でそんな有りがちな展開に……」

ちょっとした心霊現象に泣きそうになるが、ぐっと堪える。

幽霊が居るくらいで怖がる必要なんて無い。　幽霊どころか悪霊も嫌って程見てるし、妖怪と悪魔、死神とも戦ったんだ。　そうだ、怖くなんかない。

そう言い聞かせて恐怖を打ち払う優也だったが、

「！！」

夥(おびただ)しいカラスの群れが不気味に鳴きながら飛び立った事で、恐怖がぶり返す。

「……お、お～い」

妙な噂（真っ赤な嘘だが）が流れる真っ暗な森の中で、たったの十三歳の少年がたったの一人。　精神的にとても辛い状況の中、優也は歩き出した。　何処かでさ迷っている皆を捜すため。

その様子を近くの草むらから、消えた筈の美優が見ていた。　実際は消えたのではなく、優也の意識が雅の悲鳴に向いている内に隠れただけだ。

優也達と違って気配を消すなんて事が出来ない自分ではすぐに見付かると思っていたが、意外とバレない事に、美優は内心驚いた。

それ程までに優也は余裕が無いのだろうか。

「どうですか？　優也君は」

そこへ、先に出発したメンバーが集まる。　優也と美優は最後だったので全員だ。

「何だか……見てて可哀想になってきた」

今もまた、ちょっとした物音に肩を震わせていた。

「本当ね……」

「さっきのカラスも黒烏に頼んだくらいだしな」

「実は言うと、雷道も火渡と一緒にビビらすつもりだったから……けど今更中止なんて言えなかったから……やっぱやり過ぎ？」

優也の泣き顔を見てみたいと言うのも本心だが、仁の怖がっている顔も見てみたいのも本心だった。　だがミスター無表情の仁を驚かせるには、生半可な物では効果はない。　だからこそ、悪霊魂に火が点いた。

結果、仁は不参加で、優也一人をターゲットにする事になってしまった。

今更ながらに優也に同情する。　火渡一人だったらここまでするつもりは無かったのになぁ、と他人事の様に。

何か浩輝が仕掛けた罠に掛かったのか、優也は近くの草むらを警戒している。

恐る恐るその草むらを覗き込もうとした瞬間、優也のほっそりとした足を、がっしりとした手が掴んだ。

「～～～～～～～ッ！？」

「んがっ！！」

声にならない悲鳴をあげ、全力の“鳳凰爪牙”で草むらの中に居る誰かを蹴り飛ばし、全力で駆け出した。

「優也……ショック死したりしないよね？」

『……』

キラの呟きには誰も答えない。　だってこんな所まで女の子らしいとは思わなかったから。

何より、本当にショック死してしまった時の事を考えて背筋が凍った。この肝試しもどきが原因で優也が死んだと仁と正、そして亮に知れれば、全員を殺すまで、地の果てまで追い掛けてきそうだからだ。

「追い付いてから考えよう……」

心配になってきた浩輝は、優也に本当の事を話すと言う選択肢も考え、優也を追い掛けた。　美優達もその後を追い掛けた。

最後尾を着いていきながら、彪牙は疑問に思った。

何で仁は参加しなかったかだ。　あれ程楽しみにしていたのに。

浩輝の計画は、仁なら予測できただろう。　なら優也がターゲットだと言う事も予測できた筈。　仁なら浩輝の邪魔もすると思うが、何もしなかった。

何を考えているんだろうと思いながら、彪牙も美優達に着いていった。

「……任務、完了……」

顔面で“鳳凰爪牙”を受けたアランは、自分の任務を果たした事に満足した様な表情をして、その場で眠りについた。

「はぁはぁはぁ……」

結構な距離を走ってきた優也は、木にもたれ掛かって休んでいた。
長い距離を走ってきたとは言え、このくらいで息が切れる様な鍛え方はしていない。　精神的に辛いからこそ、ここまで疲労しているのだ。
本物の悪霊が本気で驚かそうとしているのだから、少し普通ではないたった十三歳の子供が耐えられる筈がない。　大人でも裸足で逃げ去る。

「呻き声は聞こえるし、人魂は浮いてるし、ずっと後ろから何か追い掛けてくるし……誰も居ないし……」

泣いてしまいそうだ。　だがそこは堪える。　だって男の子だもん。
とは言えこんな経験、以前行った遊園地でおばけ屋敷くらいしかない。
限界が近かった。

「う……ふふ……あはは……ははははははははははは！！」

もう限界だ。　誰も居ない、たった一人、そんな所なんか、

「全部燃やし尽くしてやる！！」

暗闇に色鮮やかに煌めく炎が、恐怖の森を燃やし、

「待て待て待て！？　俺が悪かったぁ！！」

浩輝が優也に飛び掛かった。

「おばけえええええええ！！」

「確かにそうだけども！？」

浩輝をおばけと勘違いした（実際はそうだが）優也は、浩輝を殴り飛ばした。

「ド、ッキ……リ……？」

「お、おぉ」

「ごめんね」

これ以上は危険だと判断した浩輝は、優也にネタバラシをする。

予想通り、優也は呆気に取られた。

ただのドッキリでこんなに振り回されたのかと。

「帰ったら甘いもんでも食わせてやるか、るぼぁ！？」

『！？』

誰も何が起こったかわからない。　唯一わかっているのは、浩輝が突然吹き飛ばされた事。

「ふ、ふふ、ふふふふふ」

「ゆ、ゆうや……？」

少女の様な少年は、俯いたまま不気味に笑い出す。　暴走したさっきとはまた違う笑いに、美優達は戦慄した。

「いや怒ってないよ？　ちょっとビックリしただけだよ。　本当だよ」

口元だけが笑っていた。　ルビーの瞳は暗闇の中、不気味に輝いている。

恐怖。　その二文字が全員の脳を支配する。

この森も、浩輝が仕掛けた罠も、この世の全てがちゃちに思える程の恐怖が。

「でもさ、少し悪趣味だと俺は思うからさぁ、ちょ～っとだけ、お・し・お・き、しても良いよな？」

美優は理解する。　『優也を怒らせるな』と言う言葉の意味が。

彪牙は理解する。　仁と正の不参加の理由が。

全員が理解する。　逃げる事など不可能だと。

夜叉でもない。　修羅でもない。　恐怖がそこに居た。

『あああああああああああああああああ！！』

森に居る全ての仕掛人は、この世の本当の恐怖を味わった。

翌日。　帰宅する為に各々はバスに乗り込み、竜也はお世話になった女将と話をしていた。

「この度はご迷惑をお掛けしてしまい、申し訳ございません」
「俺はあんたの依頼をこなしただけだ。　迷惑を掛けたって言うならこっちの台詞だぜ」
「いえ、久しぶりに私も楽しめました」
「そうかい」

他愛のない会話をしていると、静が竜也を呼ぶ。　全員がバスに乗り込んだらしい。

「また何か問題が合ったら言いな。　二神竜也がまた解決してやるよ。　割安でな」
「いつでもお待ちしております」

またな、と言って、竜也はバスへと乗り込んだ。

「出発する前に訊いときたいんだけど、何があった？」

乗り込んだ竜也の眼には、異様な光景が広がっていた。

「優也さん！　こちらの席が空いています！」
「ん、ありがとう」
「火渡さん！　お菓子をどうぞ！」
「じゃあ頂きます」
「肩をお揉みしましょうか！？」
「それはいい」

ある者は優也の舎弟の様に働き、ある者は優也を崇め、ある者は虚ろな表情でお経の様な言葉を呟き、ある者は酷く魘されていた。

「だから忠告してやったのに」

過去に一度、優也を本気で怒らせてしまった事のある金と白の髪の二人の少年は、その時の出来事を思い出し、顔を青ざめる。

何と言っても優也は、

「世界で最も怒らせてはいけない男だって」

第９６話　世界で最も怒らせてはいけない男（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「最初の質問はＤＥＡＤＰＯＯＬ　ＺＥＲＯさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】から凍華からだ。　ありがとう。　『大人の皆さんを除けば、誰が一番胸が大きくて、誰が一番小さいですか？』」

闇夜

「一番大きいのは雅で、一番小さいのはサクラです」

仁

「次は聖なる焔さんからだ。　ありがとう。　『闇夜さんに質問です。仮面ライダーで好きな悪役は？』」

闇夜

「リュウガ（ミラーワールドの城戸真司）とか大道克己とかですかね。　全部を見た訳ではないのでこんな感じです」

何でもランキングトップ１０！

仁

「何か新しいコーナーが始まったぞ」

闇夜

「質問が少なかったから。　これは色んなテーマでランキングをつけてみようと言うコーナーです。　何となくやってみました」

仁

「え～と、今回は優花を除いたメインキャラ十人で強い順か」

闇夜

「作者の独断と偏見です。　ではどうぞ！」

１位：月臣龍
２位：雷道仁
３位：風魔正
４位：黒城流香
５位：火渡優也
６位：霧藤総司
７位：神道美優
８位：鋼鎧寺彪牙
９位：椿薫
１０位：水野進

闇夜
「自分なりに考察してみますと、龍は千年間戦い続けた膨大な戦闘経験があり、能力無しでも他を圧倒すると思います。　仁と正は僅差ですが、流香を含めた三人は優也を守る為に今でも鍛えているので優也よりは強いかと。　優也は強力な力がありますが、朱雀の力も闇の力も使いこなせていないのでこの順位に甘んじていますが、使いこなせれば一気に強くなるかも。　総司は幻術の使い様ではもっと上に行くかもしれません。看破されればキツイですが。　美優は力が強力で、ある程度使いこなせてはいますが、経験不足。　優也となら相性でいい線はいくかも。　彪牙は能力が自身を強化するだけなので美優や総司と言った相手では、攻撃すら当たらないと思いこの順位に。　戦い方次第で変わるかも。　薫はこのメンバーの中では能力の差で敗けるかと。　進ですが、青龍の力を殆ど使いこなせていなく、戦闘経験がほぼゼロと言う事で最下位に」

仁
「ただの順位だからその時の状態によって変わるかもな」

闇夜
「今後に期待です。　このランキングは毎回はしないと思います」

仁

「また次回な」

次回

第９７話　新たな居候と抑えきれない感情

優花

「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第９７話　新たな居候と抑えきれない感情（前書き）

今回もグダグダな感じがあります。

第97話　新たな居候と抑えきれない感情

優也達が帰り、終達を先に帰したキョウは、森の中で一人佇んでいた。

「随分とご立腹だったらしいな」

キョウは木に触れる。

木は刃物で斬られたかの様な鋭い傷跡が刻まれていた。　それも一本だけではない。　有りとあらゆる木々に、その傷が刻まれていた。

次に足元を見る。

足元には、この森で平和に暮らしていたであろう動物の亡骸が伏せてあった。　亡骸にも無数の斬り傷が。

「死の神なんて呼ばれちゃあいるが、こんな風に命を粗末にされちゃあ、胸糞悪ぃな」

キョウは明確な怒りを露にする。

足元に横たわる、無惨に殺されてしまった動物にだけではない。この森の至るところで殺された夥しい数の動物にだ。

生が有る限り死は付き物。　その死を司る神の頂点に立つ者こそキョウだ。

死神として、キョウは死が訪れるその日まで、生を実感して欲しい。

　理不尽にも、死が訪れてしまった者の為にも。

しかし、こんな風に生を奪われ、無理矢理死を訪れさせる者が居る事に、キョウは怒りが込み上げる。

「カイの奴、何でまたあんな奴を野放しにしてやがんだ」

子供の様に振る舞いながら、心の中では何を考えているかわからない神に向かい、キョウは悪態を吐くのであった。

第９７話　新たな居候と抑えきれない感情

「帰ってきたぁぁぁ！！」

自宅前に立ち、美優は全身で喜びを表す。

「やっぱり我が家が一番！」

「そう言う台詞は入ってから言えよ。　ほら、開いたぞ」

優也が扉の鍵を開けると、美優は中に駆け込む。

もう少し落ち着けよ、と思いつつ、自然と笑みが溢れる。

「優也、私達も入ろ」

「あ、」

「あああああああああああ！！」

あ、と言い切る前に、中から美優の絶叫が響き渡る。

驚きで一瞬肩が跳ねるが、すぐさま家に入り、美優の悲鳴が聞こえた部屋へと走る。

「どうしたの！？」
「何か居たのか！？」

リビングを見たまま固まっていた美優に、二人は駆け寄り、リビングを見て同じく固まる。

「何かと言う表現は若干語弊があるが、貴方はエスパー？」
「エスパー並みに勘は良いけどね」

金髪の五歳くらいの子供と、白い髪の可愛らしい少女が、ソファーに座って寛いでいた。

「恭華！」
「昨日ぶり。　美優」

白髪の少女、恭華に美優は駆け寄る。
先日の海の家で出逢って以来、意気投合したのだ。　あの後すぐに何処かへ消えてしまったが。

「何してるんですか？　カイさん」
「お邪魔してるよ」

金髪の子供、カイは無邪気な笑顔を優也に向ける。

「立ち話も何だし、座りなよ」

ここはあんたの家じゃないし。　ついつい言ってしまいそうになっ

たが、ぐっと飲み込み、カイと少女の向かいに座る。　美優と優花も、優也の両隣に腰かける。

「恭華、ですよね？　確か死神の。その人を連れて来たって事は、何か関係してるんですか？」

「流石優花ちゃん！　察しが良い！」

これはまた何かを押し付けるつもりだな。　カイを見て素直にそう思う。

「死神とまたいざこざが合ったって訳じゃないよ。　ただね、キョウからこの娘を任せられたんだ」

命を張るのとはまた違う、面倒な事を。

「君達に面倒を見て貰うようにって」

カイさんの事だからどうせそう言うと……。　そこで一度思考を止め、再可動させる。　今この人は、まるで自分が決めたんじゃない。　そう言う風に言っていた。

「……カイさんが決めたことじゃないんですか？」

「キョウと恭華ちゃんの切なる願い」

予想外な本人からのご要望だった。

「何で面倒を見ることに……？」

一番の問題はそこだ。　何がどうなって、どう言う理由で面倒を見ることになったのか、一番気になった。

「恭華ちゃんはね、この世界の事を全然知らないから、社会見学って名目で人間界に滞在する事になったんだ。　その為には済む家が必要でしょ？　だったら優也君の所が良いってキョウが恭華ちゃんに教えて、恭華ちゃんも君に興味を持っちゃったから、こうして頼みに来たって訳」
「超説明口調」

つまり、当分恭華と生活を共にすると言う訳だ。　だが、居候である優也の一存で決める訳にはいかない。

「俺は良いですけど、美優の許可が無いと。一応、家主ですし」
「良いよ」
「もう少し考えようよ」

来る者拒まず精神なのか何も考えてないのか、美優はアッサリと承諾する。

「ああ、安心して。　恭華ちゃんの生活費なら出してくれるみたいだから。　好きに使っちゃって良いよ」
「それってカイさんが出してるんじゃないですよね？」
「キョウだよ」
「良いんですか？」

それ以前に何で金があるかツッコミたい。　進なら間違いなくツッコンでいる。

「キョウの金なんだから別に良いよ。　僕が出すんじゃないし」
「「腹黒っ」」

顔に似合わずメチャクチャ黒いお子様だ。　流石、神様なだけある。

「じゃあ早速、買い物しに行こ！」

「買い物？」

「そうだな。　荷物も何も無さそうだし」

長い間人間界に滞在する恭華だが、その為の荷物は何一つ持ってきていない。

「一緒に行こう？　恭華」

満面の笑みで美優は手を差し出し、恭華はおずおずと手を握る。

こんな風に手を差し出された事が無いから、戸惑ってしまったのだろう。

そんな恭華の戸惑いなど振り払うように、美優は恭華の手を引き、外に飛び出した。

「思い立ったが吉日ってとこかな？」

「何も考えて無さそうですもんね」

美優の場合考えるより本能に従っている気がする。　だがそれが羨ましいと優花は思った。

（私も美優みたいになれたら……）

それは尊敬と、違う意味を持つものだった。

「優花、俺達も行くぞ」

「あ、うん」

優也に呼ばれ、優花も玄関に向かおうとする。

「優花ちゃん。　ちょっと待って」

「？」

カイは優花を引き止める。　まるで優花だけに話しがあるかの様に。

「実は大事な話があるんだ」

「大事な話？　なら優也にも話した方が」

カイの大事な話なら、優也も訊いておいた方が良いと言うが、カイは首を横に振る。

「これはね、優也君には秘密にしておいて欲しいんだ」

恭華の日常用品を買う為、優也達はデパートに来ていた。

今は普通に買い物をしているが、辿り着くまでの恭華が大変だった。

他人の家に勝手に上がり込もうとするし、信号の意味を知らず、赤信号でも渡ろうとしてトラックに引かれかけるし、八百屋に置いてある野菜を勝手に食べようとするし、挙げ句の果てには自販機を壊してジュースを取り出そうとするし、それを止める為、主に優也が奮闘した。

今も恭華が何かしないか、優也が眼を光らせている。

「恭華って世界を知らないんじゃなくて、常識を知らなかったんだ

ね」

それくらい教えておいて欲しいと、美優はキョウに説に願った。

「一度も人間界に来た事が無かったみたいだから仕方ないよ」

優也も似たような感じだったでしょ？　そう説明されると美優も納得する。

つい最近まで、優也は学校にも行かなければ、普通の生活もした事が無かったのだ。

今も普通とは程遠いが、それでも日常を過ごせている。

この日常は、優也の幸せだけは、誰にも壊させる訳にはいかない。

『ちょっとやば～い娘が優也君を捜してるみたいなんだよ』

『ヤバい娘？』

優花を呼び止めたカイは、頬を掻きながら言う。　カイ自身も困っているかの様に。

『優也君が最後に会ったのは六年前になるのかな。　彼女と会ったのは』

『まさか……』

優花は記憶に残る、ある少女を思い出す。

『そう。　『　　』だよ』

決して思い出したくない、狂ってしまった少女を。

「優花！」

「！」
「どうしたの？」
どうやら考え事をし過ぎて、美優の声が聞こえていなかったらしい。
「大丈夫だよ」
表面上は安心させる言葉を言い、内心ではまったく違う事を考える。
『　　』が優也を捜していると言う情報をカイから訊いて、気が気でない。
優花にとって会いたくない相手で、優也には会わせたくない相手。
会ってしまえば、それだけでこの日常を壊してしまいそうな相手なのだ。
（優也には会わせない。　優也の日常は私が守る）
自分の想いは全て諦めた。　その代わり、自分の命を賭けてでも優也を守る。
優也と出逢った日にした覚悟を再認識し、優也の元へと向かった。
「待って、ゆう……きゃっ！」
「！」
優花を追い掛けようと駆け出した美優は、ロングヘアーでウェーブのかかった茶髪の少女とぶつかる。
「ご、ごめんなさい！　大丈夫ですか！？」
美優は慌てて頭を下げる。

「ううん。　こっちこそごめんね」

少女は大して気にした様子も無く、そのまま立ち去っていった。

「何だろう？　変な感じが……？」

その女性に何か違和感を感じた美優だったが、気のせいだと判断し、優也達の元へ向かった。

美優が立ち去った後、女性は立ち止まり、美優、いや、優也を見て、笑った。

結局、優也に近付こうとする者は、誰一人居なかった。　今も日常を過ごしている。

骨折り損のくたびれ儲けだ。

それ程優花は気を張っていた。

幸い、優也は恭華以外に意識を集中させている余裕も無いので、優花の様子に気付いていない。

それで良い。　優也に気付かれてはいけないのだから。　同時に、複雑な気持ちになる。

優也がこのまま美優や恭華と一緒に居ると、自分の居場所が無くなってしまいそうで。　この気持ちを優花は知っている。　醜いその感情を。

（ううん、そんな筈ない。　私は初めから諦めてる。　何も望んじゃ駄目）

心に渦巻く感情を振り払うように、優花は頭を左右に振る。
それでも、優也と美優の仲睦まじい様子を見る度に醜い感情が心に渦巻く。

（何で……何で急にこんな……）

突然溢れ出す感情に、優花は戸惑う。
美優のお陰で優也は日常を過ごせる様になった。　美優の前だけで優也は涙を流せた。　自分と違って美優は優也と一緒に戦える。
勿論感謝しているし、自分の気持ちに素直に行動できる美優を尊敬している。　それ以上に羨ましいのだ。
優花は美優に嫉妬していた。

（ははは、私って……どうしようもなく弱いなぁ……）

自嘲するような薄ら笑いを優花は浮かべる。
こんな簡単に友達に嫉妬してしまうような脆い覚悟だったのかと。

「どうかしたの？」
「ひゃあ！！」

自分以上に背の低い恭華が、知らぬ間に下から見上げていた事に、優花は驚く。

「き、恭華……。　優也と美優は？」

何処を見ても二人の姿が見当たらない。　優也と美優は恭華の私服を選んでいた筈なのに。

「今は私の服を買ってくれてる」

眼を離さない様にしていた筈なのに。　それ程までに考え込んでいたのだろう。

「大人しく待っておく様に言われたから待ってようと思った時に、貴女が暗い顔をしていたから」

「……」

昨日今日出逢った少女にまで気付かれてしまった。　自分でも隠すのは上手い方だと思っていたのに。

「大丈夫。　何でもないよ」

我ながら下手だと思う作り笑いを恭華に向ける。

恭華も納得したのか、深く追求せず、静かに頷く。

「なら質問を変えるけど」

「何？」

是非そうして欲しい。　これ以上この話題を続けられると、ボロを出してしまいそうだったから。

恭華は迷う事なく優花に言った。

「貴女の魂が消えかけている。　つまり死に近付いている。　これは大丈夫？」

気付けば優花は走り出していた。

後ろから聞こえる恭華の声も無視して。

あの場所に居たくなかったのだ。　あのままだと、優也に全て知ら

れてしまいそうになったから。

「はぁはぁはぁ！」

何処まで走ったかわからないが、優也達が居ない所まで来た所で、優花は立ち止まった。

体が酸素を求めているのがわかる。　だが上手く呼吸ができない。

（もう、限界なの！？　もう少し持って！！）

いつかは来る日だと覚悟していた。　だが恭華に改めて確認させられ、気付かぬ内に蓄積された恐怖が溢れた。　不安定な優花の心には耐え難い。

理由を知っている優花には。

（恭華は悪くない。　悪いのはわた、し……）

ふと腕を見て驚愕する。

以前の病院の時の様に、腕が粒子となり、消えようとしていたからだ。

「い、いや……嫌！　嫌！　消えたくない！　死にたくない！　まだこの世界に居たい！　まだ皆と……優也と居たい！！」

こんなにも自分は弱かったのだろうか？　こんなにも自分は醜かっただろうか？

今にも消えてしまいそうなその体を、必死に自分自身で抱き締める。

「あれあれ？　見たことのある後ろ姿だと思えばなぁにしてるのこんな所で？　悲劇のヒロインごっこ？」

ドクン、と優花の心臓が高鳴る。
そう言えば何故、あんなにも警戒していたのだろう？　誰かが優也を捜していたから？
今の自分の状態は後回しにして、頭を働かせる。

『『　』が優也君を捜してるみたいなんだ』

カイの言葉が思い出される。　警戒はしていたが、半信半疑だった。
だが今の声を訊いて確信に変わる。
昔に比べ、声は変わったが、声を訊くだけで冷や汗が溢れ出す気味の悪さは変わっていない。

（最初は私、ね）

カイは優也を捜していると言った。　だが、良く思い返してみれば、彼女は優也に近付く者全てを殺そうとする。　何故優也じゃなく自分の所へ来るか、優花は理解する。

（マズイッ！　彼女は人が居ようと関係なく……えっ？）

ここはデパート。　人が沢山居ても可笑しくない。　なのに、優花の周りどころか、何処にも人が居ない。

「……何か、したのね？」
「さぁ？　どうでしょう？」

その少女は優花の数歩手前で立ち止まり、無言のまま動こうとしない。　まるで、振り向けと言っている様で。
優花はゆっくり、後ろに顔を向け、少女を視界に写す。

そこにはウェーブがかかった茶髪のロングヘアーの少女が居た。

「宮地（みやち）……皐（さつき）」

「ハロー、殺しに来てあげたよ」

この少女こそカイの言っていた少女。　優也を愛するあまり、狂気に身を委ねてしまった少女だ。

第９７話　新たな居候と抑えきれない感情（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「久しぶりに出番が無かった雷道仁です。　じゃあ質問に。　最初は、ＤＥＡＤＰＯＯＬ　ＺＥＲＯさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】から雷美だ。　ありがとう。　『エルザさんに抱きつきたいんだけど～良いかな～？』」

エルザ

「いいとも～！」

闇夜

「タ●さん？」

仁

「次は竜王の白翼さんからだ。　ありがとう。　『美優は何か優也を好きな理由の割合が『かっこいい６割、可愛い３割、食べ物１割』な気がしてならない。という訳で質問は美優に本当にこの割合なのか？です。』」

闇夜

「ノンノンノン。　美優はですね、カッコイイ３割、可愛い３割、食べ物４割です！」

美優

「違あああああう！！　カッコイイ４割、可愛い４割、食べ物２割だよ！」

仁

「それでも食べ物２割か」

闇夜

「今回は優花メインで、伏線張って、恭華が居候になって、ヤンデ

レ登場回でした」

仁

「今回は三話構成らしいから、伏線回収は最後になるそうだ」

闇夜

「恭華もこれから活躍させる予定です」

仁

「にしてもヤンデレか」

闇夜

「初めてだから上手く書けるか不安だ。　今回もグダグダだし」

仁

「二話後に伏線回収とか言って言い訳したからな」

闇夜

「そう言う事言わないで！？」

仁

「こんなのだが、次回も見てくれたら嬉しい」

闇夜

「宜しくお願いします！」

次回

第９８話　狂愛

皐

「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第９８話　狂愛

息が苦しい。　肺が締め付けられるくらい。　体が重い。　立ち上がるのも困難なくらい。
危険信号が送られ、今にも逃げ出したくなる脳に反発し、優花は小さな体を無理矢理立たせる。
彼女が自分を狙っているのなら立ち向かおう。　彼女が自分を殺そうとしているのなら、精一杯抵抗してやろう。
彼女を、宮地皐を優也に会わせない為に。
先程までの嫉妬も恐怖も消え去り、滅茶苦茶に混乱していた頭が、冷静に働く。
どうすれば彼女を退けられるか。　どうすれば優也から引き離せるか。
さっきまであんなに辛かったのが嘘の様に頭が冴え渡る。
優也の為なら、こんなにも冷静になれるのか、と優花は自分を滑稽に思いながら、皐へと向き合った。

「そんな怖い顔してどうしたの？　せっかくの綺麗な顔が台無しよ？」

白々しい。　そんな事欠片程にも思っていない癖に、皐は綺麗な笑顔をして言う。
誰が見ても惚れ惚れする笑顔だ。　同時に誰が見ても気味の悪い笑顔だと思う。
見ただけでそう思わされてしまう。　例えるなら、正の狂気の様な。
そう思わされてしまうのが、宮地皐と言う少女なのだ。

「そんな事を言う為だけに、私の所に来たの？　別に無駄話くらいなら付き合っても良いけど」

皐はどうなのか知らないが、優花は皐と直接面識は無い。　記憶にあるのだ。
その記憶にある皐は、誰にも興味を持たない。　優也を除いて。
優也だけに自分の本心を見せる。　優也だけが皐の大切な人。　優也だけに、狂おしいまでの愛を注ぐ。
それに反比例し、優也に近付く者には容赦しない。　男だろうと女だろうと。　優也に近付く者は全て殺す。
それが宮地皐。　そう、記憶している。

「無駄話なんてしないよ。　そんな事してる間に、誰かが来たりしたら面倒だもん」

考えがバレて、優花は怪訝な顔をする。
恐らく皐がこのデパートに結界を張っているのだろう。　だからデパートに自分達以外に誰も居ないのだろう。なら外の誰か、出来れば仁がここの異変に気付き、駆け付けてくれるかも知れない。　そう思って時間を稼ごうとしたが、皐は勘づいていたようだ。

「言っとくけど優也は来ないよ。　足止めさせて貰ってるから」

大丈夫、怪我なんてさせないから安心して。　その言葉の通り、優花は安心した。　優也が怪我をしないからと言う意味でではない。

「好都合」
「？」

優花は薄く笑う。
そう、それで良い。　優也と皐を会わせてはいけないのなら、優也は足止めされている方が良い。　優也には美優も着いているから、

怪我を負う事もない。

（皐は、私が止める！）

瞬間、皐を背後から、影が襲い掛かった。

第９８話　狂愛

「あぁ、もう！　何これ！！」

「口を動かす前に体を動かせ！」

優花が皐と対峙している頃、優也と美優は大量の土人形と戦っていた。　土人形と言っても、壁や床を壊し、無理矢理引っ付けた様な人形だ。

「わかってる事だけでも教えてよ！」

美優は光の矢を土人形に放ち、活動を停止させる。

「能力者が何処かに居て、変な結界を張ってるって事くらいだ！」

目の前の土人形を一刀両断しながら、優也は言う。

「じゃあ何処に居るの！？」

「何処って……わかれば苦労……」

訊かれてはっとする。

この程度の力の土人形を相手にさせていると言う事は、間違いなく足止めだ。

なら何の為に足止めするのか。　簡単だ。　その間に目標を潰す為だ。

（この中で俺と関係しているのは美優と優花と恭華だけ。　だけど恭華は今日知り合った様なものだから、狙うとしたら！）

一体の土人形が優也目掛けて突進してくる。

優也は迎撃する為、構えを取ったが、土人形は優也に激突する事もなく、優也の脇をすり抜ける。　そしてそのまま、美優へと向かって行った。

（こいつ等、まさか！）

美優は土人形の接近に気付いていない。　優也は床を踏み潰す程、床を蹴り、一瞬で土人形に追い付き、土人形を斬り裂いた。

美優が何か言っている。　多分、感謝か謝罪だろう。　今はそれに答えている暇は無い。優也は美優と背中合わせに立つ。

（やっぱり、俺を狙ってない！）

優也は敢えて隙を見せた。　土人形がどう動くか確かめる為に。

どれだけ待っても自分には襲い掛かってこない。　狙うのは美優ばかり。

「（意味がわからないけど取りあえず）美優！」

「ひゃうっ！？」

名前を呼ばれ、振り返ろうとしたその瞬間、美優は優也に抱き上げられた。

「優花を捜すぞ！」

「きゃあああああああ！？」

朱い炎の翼を羽ばたかせ、美優を抱えた優也は、土人形の頭上を飛び越えて行く。

予想以上の飛行速度に、好きな人に抱き上げられたと言う事実に赤面する暇もなく、美優は絶叫した。前にもこんな事あったなぁ、と懐かしく思いながら。

皐は背後から襲い掛かる影に気付いていない。　優花に気味の悪い笑みを向けている。

優花にはその影の正体が見えていた。　髪は力を解放した時の美優の純白な髪とも、正の様な血を吸ってくすんだ白でもない。　何者にも染まっていない真っ白な髪。　身体的には自分は小さいし、不本意だが幼く見られるだろう。　それ以上にその影の人物は顔立ちも身体的にも幼かった。

（恭華！）

出逢ってまだ二日しか立っていない死神の少女。　彼女が魂を刈り取る死神（デス）の鎌（サイズ）を手に、正体も素性も知らぬ相手の魂を狩りに行ったのだ。

（マズイ！）

恭華が皐に斬り掛かる理由など何だっていい。　ただこのままでは、恭華が危ない。

根拠は無い。　あるとすれば、相手が皐だと言うくらいだ。

鎖で連結された二本の死神（デス）の鎌（サイズ）の内、右手の鎌が、皐の脳天目掛けて振り下ろされる。

鋭いその刃は、皐の脳天に突き刺さり、辺り一面に鮮血を撒き散らす、筈だった。

皐は振り向きもせず、流れる様な動きで死神（デス）の鎌（サイズ）を躱し、死神（デス）の鎌（サイズ）は床に突き刺さった。

「！」

「貴女は、誰かな？」

皐は恭華の手に自分の手を添えると、ニコリとあの笑みを向けた。

「邪魔するなら貴女も死んで？」

皐の視界が、真っ黒な布で覆い隠された。

「あれ？」

予想だにしない状況に、皐の動きが止まる。

「恭華！」

「！」

優花の声に反応し、恭華は皐の頭上を飛び越え、優花の元へ向かう。

「あぁそっか。　優花ちゃんが邪魔したのね」

鬱陶しそうに被された黒い服を剥ぎ取り、ゆっくりと振り向く。

「やっぱり貴女からころ、」

す、と言い切る前に、優花が消火器のホースを皐に向けて放射した。

（目隠し？　だけど無駄よ！）

皐は掌を翳す。

すると、床が地割れの如く割れ、まっすぐに直進していった。

「ごほごほっ！　先に煙を止めた方が良かったかなぁ？」

煙を手で払いながら、皐は煙の中を進む。

「う～ん。　逃げられちゃったか」

煙の中を抜けたその先には、行き止まりまで続いた地割れしか存在していなく、優花も恭華も居なかった。

「あはは、命がけの鬼ごっこ、スタ～トォ」

皐は焦る素振りも見せず、歩き出す。
文字通り、命がけの鬼ごっこが始まった。

「恭華、大丈夫？」

優花の問いに、恭華はコクリと頷くと、優花に同じ質問をする。
優花は笑顔を向けながら、平気、と言って見せる。
本当は恭華の攻撃を避ける際、足を挫いてしまい、今にも蹲ってしまいたいくらいの激痛が走っていた。
自分の運動神経の悪さを呪いたくなる。でも今は無い物ねだりしても仕方ない。　優花は強がって見せた。

「“あれは、何？”」

恭華は優花に問う。　やっぱりそう訊くか、と優花は思う。
あれとは皐、何とは皐。　恭華は皐を人間だとは思っていなかった。
正確には思えなかった。

「宮地皐って言う、優也の昔の知り合いで、彼女は優也を愛してるの。　それこそ、狂おしい程にね」
「あの感じは、狂気だったの？」
「うん」

気味が悪いと感じたのも、恭華が皐を人間だと思えなかったのも、

異常なまでの狂気が原因だった。　それこそ、正と張り合える程の狂おしい狂気が。

「皐は強い。　優也よりも。　だから、マトモに戦っちゃ」

「み～つけた」

狂気の声が響いた。

「「！」」

恭華は優花の手を掴み、皐から距離を取ろうとする。

小さくても死神。　優花一人くらいの重みが増そうと、難なく動ける。

「けど、遅い」

難なく動けると言うだけで、普段通り動ける訳じゃない。　いくら優花が軽いと言っても人一人分、動きが鈍くなる。

皐は床に手を置く。

「あっぐぅ……！」

恭華は突如、苦痛に表情を歪める。

床から突き出した石の槍が、恭華の脇腹に突き刺さっていた。

「恭華！！」

「うぅっ！」

痛みに耐えながら、恭華は死神（デス）の鎌（サイズ）を投げ付ける。

「あれ？　串刺しにするつもりだったのに……」

恭華の体を貫けなかった事に驚きながら、皐はブーメランのように飛来する鎌を、難なく躱す。　恭華を敵だと認識していないのか、それとも眼中に無いのか、鎌を躱す時の動作は、まるで人混みの中、前方から歩いてくる人を躱すような動作だった。

死神と言っても、肉体は人間と大差はない。　舌を斬られたら出血多量で死ぬ。　心臓を潰されればそれだけで死ぬ。　違うのは体の丈夫さくらい。

勿論、このまま脇腹から溢れ出す血を放っておけば意識も薄れていく。　だがそんな事には脇目も振らず、恭華は死神（デス）の鎌（サイズ）に繋がった鎖を引く。

死神（デス）の鎌（サイズ）はそれこそブーメランのように、背後から皐に襲い掛かる。

「それにその鎌……あぁそっか」

気付いている。　気付いている筈なのに、背後の鎌に見向きもしない。

舐めているのだろうか、はたまた馬鹿なだけか、どちらにせよ、恭華は迷わず鎖を引いた。

鎖は限界まで張り、死神（デス）の鎌（サイズ）が止まる。

皐の体に突き刺さったのではない。　皐の背後で不自然に迫り出した石の壁に、塞がれてしまったのだ。

「貴女、死神なんだ」

皐は石の壁から、石で出来た剣を左手で引き抜く。　初めて皐は、力一杯地を蹴り、優花達へと向かって行く。

相手の得物は石の剣ただ一つ。　自分の得物も死神（デス）の鎌（サイズ）ただ一つ。

恭華は迷う事なく、振り下ろさせる刃を、自身の分身とも言うべき

鎌で受け止める。
皐の力は大した事なければ、太刀筋は素人当然。　難なく受け止められた。
力なら勝てる。　このまま押し切ろうと、死神(デス)の鎌(サイズ)を握る手に力を込めたその時、

「左、空いてるよ」

皐の右手に、もう一本の剣が握られていた。
容赦無く振り下ろされる石の剣が、恭華にはスローモーションに見えた。　まるで死ぬ寸前のような。
止める術がない。　このまま斬られてしまう待つだけかと、諦めかけた恭華の視界に、白い肌の、細い腕が写った。

「っぅ！！」
「！！」

恭華の命の代わりに生け贄となった優花の左腕から、鮮血が飛び散る。

「きゃっ！」

恭華は皐を蹴り飛ばし、石の壁に叩き付けると、死神(デス)の鎌(サイズ)を消し、優花を抱えて走り出す。

「恭華……大丈夫？」

左腕から流れ落ちる血を気にもせず、心配してくる優花に、ただ頷く事しか出来ない。
何の力もない。　そんな少女が出逢ってまだ二日の自分を守った。

何の迷いも無く。　その事実が、恭華から言葉を奪った。

「恭華、良く訊いて。　皐の能力は『大地を操る能力』よ」

「大地を……？」

「そう。　その気になれば街の一つは、軽く壊せるくらいの、ね」

能力にはレベルが存在する。　優也の炎で例えるなら、レベル1でマッチに火を付けられる程度。　レベル5にもなれば、鋼鉄さえも飴のように溶かしてしまう炎。　そして皐は、街一つ容易に潰してしまう程の力を秘めた『大地を操る能力』を、レベル5まで高めていると言う事だ。

（しかも、殆ど人工の石も操れるなんて……）

皐の能力は六年前より間違いなく上がっている。　これでもし上限に達していなかったとしたら。　考えただけでもゾッとする。

前方に階段が見えてきた。

「掴まってて。　一気に下まで」

飛び降りるから、と言い終わる前に、下階へと続く道は、石の壁に全て閉ざされてしまった。

「今の蹴りは効いたよ」

腹の辺りを擦りながら、皐は変わらぬ笑みを作っていた。

遂に恭華はその笑みに、気味の悪さを感じた。

（逃げ道は全部塞がれた）

そんな中、優花は冷静に状況を分析する。　真っ赤な血が、止めどなく溢れ出す事を気にもせず。
恭華は強いが、それは人間と考えて。　死神としては大した力は無い。　恐らく、戦闘経験はほぼゼロに近いだろう。　対して皐は、油断はしているが、あの強大な力がある。　一撃で殺される可能性は大いにある。　だからこその逃げだが、逃げる為の退路が全て塞がれてしまっている。　壊そうと思えば壊せるが、皐に背を向けて、退路を確保する勇気など無い。　万事休すなのか。いや、退路はまだ存在する。　そこに逃げ込むには皐に勘づかれてはならない。
バレれば、塞がれてしまうのが関の山。
どうする？

「形振り構わず誰かを守ろうとする所、優也と同じ」

すると、ある程度距離を空け、皐は立ち止まった。　昔の事を思い出しているのだろうか、意識が若干、優花達から外れていた。
その隙に、優花は床に、恭華にだけ見えるように自身の血で字を書いていく。
『合図したら窓に向かって』。
恭華は横目で窓を見る。　大きなガラスの置くには、青い空が広がっていた。
最後の退路とは、窓ガラスを突き破って外へ逃げる事だ。
自分達が居る階は、地上からかなり高いが、自分なら優花を抱えて飛び降りても、着地する事が出来る筈。　最悪、下の階に逃げ込めば良い。
皐に止められれば失敗。　上手く着地出来なくても失敗。　危険な退路だが、優花が何の考えもなく言うとは思えなかった。
恭華はいつでも走れるように準備し、優花の合図を待つ。
優花に不安なんて無い。　逃げる為の策ならちゃんと用意している。

「思い出したら優也に会いたくなっちゃったなぁ。　だからそろそろ」
「走って！」
皐の意識がこちらへ向くその瞬間、優花は皐の声を遮る程の大きな合図を出す。
窓に向かって恭華は走り出す。　優花も同時に走り出す。
皐に向かって。
「……ッ！」
恭華は思わず立ち止まる。　てっきり、一緒に逃げるとばかり思っていたから。　優花がこんな無謀な行動を取る筈ないとばかり思っていたから。
「ふぅ～ん。　死神ちゃんを逃がす為に囮になるって訳？」
恭華はハッとなる。　優花は何の力も持たなくとも、何の迷いも無く、自身を犠牲にして他人を守ろうとする。　そして今も。
（二人じゃ逃げ切れない！　だけど、恭華一人なら間違いなく逃げ切れる！）
皐は自分を狙っていた。　恭華は巻き込まれただけ。　ならば自分が囮になれば、恭華は狙わない筈。　皐なら絶対にそうすると、優花はわかっていた。　言い換えれば、優花にはそれしか手はなかった。
「良いよ。　その代わり」

皐はゆらりと剣を振り上げ、

「貴女は死んでね」

優花の体を斬り裂いた。

「美優！　今優花は何処だ！？」

「ま、待って！　何でそんなに慌ててるの！？」

土人形の追撃から逃れた優也と美優は、優花を捜していた。

焦っている事が明らかな優也に、美優は問う。

あの土人形、見たことが無い筈なのに、何だか懐かしく思った。

だからか、ずっと落ち着かなかった。

「……嫌な予感がするんだ」

「ありゃ？」

確かに優花を斬った。　斬ったのだが、予想より随分浅い。

「そっかぁ。　また貴女」

優花の体には鎖が巻き付いていた。　言わずもがな、恭華の死神（デス）の鎌（サイズ）の鎖だ。

優花が囮となって斬られる寸前に、鎖を体に巻き付け、後ろに引っ張った。　だから傷が浅かった。

恭華は優花を自分の元へと引き寄せると、今度こそ一緒に、窓を突き破った。

恭華は優花を抱えたまま、重力に従って地面へと落下していく。

だがそのまま落ちるつもりは無い。

死神（デス）の鎌（サイズ）の片方を放り投げ、デパートの外壁に突き刺す。

左手で優花を抱き締め、右で鎖を握り締める。　限界まで張った鎖はそれ以上伸びる事はなく、恭華達を窓ガラスへと運んでいく。まるでアクション映画の撮影をしているかのように、恭華は下階の窓ガラスを蹴り破り、外から再び中へと飛び込んだ。

「ひゅ〜。　やるぅ」

その様子を覗き込みながら、皐は感心する。

敵だと認識していなかった恭華が、ここまで逃げ切れている事に。

元々は油断して、外への道を塞ぎ忘れた皐が原因なのだが。

「もっと派手に逃げても良いよ。　どうせバレないし」

これだけの騒動を起こして、何故誰も騒がないか。

そう言う結界を張っているからだ。

この建物には一般人は入れないようにしているし、中で行われている事は、外には絶対に伝わらないようになっている。流石に落ちてきたガラスには気付くだろうが、窓ガラスが割れた事には気付かな

い。
だから皐は心配する事なく暴れられる。

「まぁ、バレてもバレなくても、どっちでも良いんだけどね」

誰が邪魔をしに来ようと、皐は止まるつもりなんて更々無い。

邪魔をするのなら殺すだけだから。

皐は笑っていた。

下階に飛び込んだ恭華は、優花の傷の手当てをしていた。
汚れを知らない白い肌には、真っ赤な傷跡が刻まれている。　肩から胸にかけてバッサリと。　もし恭華の助けが一秒でも遅れていたら、間違いなく絶命していただろう。

「あのまま、逃げて……たら……助かったのに……」

「喋らないで」

やはり痛みに慣れてない。　優花は苦痛に表情を歪めていた。
恭華は悔しく思う。　曲がりなりにも死神である自分が、人間を守るどころか守られ、こんな傷を負わせてしまった事に。

「恭華、私は大丈夫……だから、早く逃げて……」

「駄目。　今度あの女に見付かったら、優花一人じゃ絶対に逃げ切

れない」
「……見付からないよ。　皐には、探知能力は無いから……。
ここから離れて隠れておけば……絶対に見付からない」
「でも……」

例えそうだとしても、こんな状態の優花を一人にして良いものか。
駄目に決まっている。　だが二人では逃げ切れないのも確か。
こんな状況に陥った事の無い恭華に決断を迫るのは、あまりにも酷すぎる。

「優也達を……連れてきて」
「優也達を……？」
「うん。　一人じゃ勝てないけど……三人なら勝てるかも……」
「本当……？」

果たして勝てるのだろうか？　そんな心配など関係なく、優花頷く。

「……すぐに戻ってくるから」

優花を信用した。　だから恭華は優也達を捜しに、走り出した。
その後ろ姿を眺めながら、優花は申し訳無さそうな表情をする。

「ごめんね。　恭華……」

皐が自分の居場所を見付けられないと言うのは嘘だ。　でなければさっき、自分達をすぐに見付けられた説明が付かない。
恭華は信頼した相手の言葉を、疑うと言う事を知らない。　恭華は自分に傷を負わせてしまった事に負い目を感じ、同時に信頼した。
そこに、優花は漬け込んだ。　恭華を騙して。
信頼してくれた相手を騙してでも、皐との決着は自分がつけなくて

はならない。
痛みを我慢して、優花は立ち上がった。

移動していた優花の気配が、ある地点で止まる。
死神を逃して、たった一人になって。　諦めたのだろうか？
それとも一対一（サシ）の勝負をするつもりなのか。　何の力も無いくせに。
それならそれで良い。　一番の狙いは優花なのだから。

「そろそろ鬼ごっこはお終いにしよっか」

この階の出口を全て塞ぐ。　今度は逃げられないように窓も。
完全な密室が完成し、絶体絶命の中、優花は立っていた。
傷口は雑だが、布を巻いて血を止め、皐の目の前に。

「もう諦めちゃった？」
「さぁ？　どうだろう」

怖いくせに強がる。　そんな姿が、皐の癪に障る。
それに加え、あの紅い瞳。　優也と同じ、ルビーのように輝くあの瞳が、更に皐を苛立たせた。

「その眼を、やめて」
「えっ……」

次の瞬間、優花の体は宙を舞う。

左方から突き出した、石の柱が優花の体を弾き飛ばしていた。

「がっ……！」

優花は受け身も取れず、固く冷たい床に落ちる。

「あぐっ、あぁぁぁ！！」

「彼のおこぼれから生まれた出来損ないの癖に！　何の力も無い癖に！」

「……ッ！」

我を忘れたように、皐は初めて叫ぶ。　憎しみをぶつける。

痛みに悶える優花を踏み潰そうと、皐は足を振り下ろす。　電流のように激痛が走る体を無理矢理転がし、何とか躱す。

「何で彼の隣に居られるの！」

「ぐっ！？」

躱した優花を追撃し、優花の腹を力一杯蹴り上げた。

優花は人形のように、地面を転がり、山積みにされた袋にぶつかって止まる。

「さっき彼を見たわ！　それだけでわかる！　彼の心には貴女が居た！」

ついさっき優花を弾き飛ばした石の柱が、無数の瓦礫に分裂して、優花へと襲い掛かる。

「彼の心に貴女が居る限り、彼はあの頃の彼には戻れない！　あの頃の彼に！　だから、死んで」

無数の瓦礫は優花を飲み込み、煙が辺り一面を覆い尽くした。

「……隠れても無駄だよ。　何処に隠れても見付けてあげるから」

手応えが無かった事から、致命傷を負わせる事は出来なかっただろうと判断し、優花を捜す。

この煙に紛れて隠れても、皐には何処に居るか手に取るようにわかる。　優也も、美優も、恭華だろうと、皐には何処に居るかわかる。

勿論、優花の居場所も。

「見付ける必要は無いよ」

「どうして？」

何処からか優花の声が聞こえる。

聞き返しながらも、優花に近付いていく。

「こんなに粉末が舞ってる密室で火なんか使ったら、どうなると思う？」

ピタリと、皐は足を止め、辺りを見渡す。

この煙は、自分の攻撃で舞い上がった砂ぼこりだとばかり思っていた。

だが可笑しい。

それにしては、煙の量が多すぎる。　あの程度の攻撃で、この階を覆い尽くす程の砂ぼこりは有り得ない。

（確かこの階は食品コーナー……まさかさっきの袋の中身って！）

優花を蹴り飛ばした時、優花の後ろには大量の袋が山積みにされて

いた。　あの袋の中身は小麦粉だった。
だとすれば合点がつく。
優花の狙いが。

「ごめんね。こんな手しか無くって」

煙の中から、皐に向かって何かが飛び込んできた。　それは、

火の点いたライター。

爆弾が爆発したかのように、辺り一面が炎に包まれる。

「……ぅっ！」

優花は予め用意していたバリケードに身を隠し、炎を逃れた。

「はぁはぁはぁ……」

最悪自滅狙いの粉塵爆発だったが、多少の火傷だけで済んだ。
それよりも酷いのが、皐から受けた傷。　切り傷は応急手当とは言え血は止めているから問題無いが、たった今受けた打撃で、肋は少なくとも三本は折れているだろう。　そっちは病院でも行かなければならないだろう。

「何とか、なったかな……？」

安心したら痛みがぶり返してきた。　一回痛みを実感するとかなり痛い。　いや、痛い何てもんじゃない。　骨をハンマーで殴られているような。　取りあえず痛い。

「優也達と、合流しよう」

皐は死んではいない筈。　だが止める事は出来た。
込み上げてくる安堵を我慢しながら、優花は歩き出そうとした。

「行かせないよ」

が、一歩も踏み出せなかった。
爆煙の中、狂気の少女は立っていた。

爆発音が響いてから、五分は経った。
恭華と合流した後、優也は二人に一緒に行動するように言うと、一人で先に爆発音が聞こえた階へ急ぐ。　背後で美優が叫ぶが、優也の耳には届かない。
傷を負った恭華を見てから、優也の予感が確信に近いものになっていた。
優花は恭華を逃がす為、自分が囮になっているに違いない。　普段ならそんな無茶はしない筈なのに。
一体何があったのか。

「あそこか！」

階段を降りていくと、瓦礫が散乱し、黒い煙が出ている階に着いた。
そこに優花が居るに違いない。　優也迷う事なくその階に飛び込んだ。

「優花！」

優也が叫ぶと、一人の少女、皐が顔を向ける。
皐は優也を見付けると、嬉しそうな顔をする。
一瞬知り合いかと思ったが、優也の記憶には無い。　それどころか、頭に激痛が走る。　皐が何か言っているが、それすら聞こえない程。
優也は頭を抑えながら、皐を見る。　すると、皐の足元に真っ赤な何かが見えた。

「ゆうか……？」

思わず刀を落としそうになった。
真っ赤な真っ赤な血の海の中で、優花は倒れていた。

まるで死体のように。

謎の頭痛などすっかり忘れて優也は考える。
何で優花はこんな目に遭っている？
自分が一緒に居なかったから？
優花が無茶をしたから？
恭華が守りきれなかったから？
目の前の少女が優花を傷付けたから？
どの答えが正しいのかわからない。　今何をすべきなのかすらも。
　優也は何もわからなくなった。
呼吸が辛くなり、息が荒くなる。
これ以上、優花を見ることが出来ず、視線を逸らした先には、あの少女が居た。
見覚えの無い筈のあの笑顔が、自分の何かを引きずり出す。
荒くなった息が落ち着いてくる。　大量の氷が入った冷水を頭から

被ったように、頭が冷え、恐ろしく思う程冴え渡る。
何が正しいなんて考える必要は無い。
何をすべきかなんて愚問だ。　答えはたった一つしかない。

殺してやる。

優花をこんな目に遭わせた少女を情け容赦無く殺そう。　泣いて謝ろうが殺そう。　痛みに耐えきれなくなり、自決される前に自分が殺そう。
世界の全てが少女を許しても自分だけは許さない。　地の果てだろうが、地獄の底だろうが、追い掛けて殺してやる。
優也の右の眼球が黒く染まっていく。
頭の中でスイッチが切り替わったような音が聞こえた。　それが目覚めの合図。

優也は闇に落ちた。

第９８話　狂愛（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁

「俺の居ない間に何盛り上がってんだよと思いつつ、質問コーナー始まり始まり。　最初は竜王の白翼さんからだ。　ありがとう。『質もーんは黒城姉妹に。互いをコスプレさせるなら何にする？』」

流香

「えぇっと、ルミアみたいな露出の高い服かな」

ルナ

「巫女スク水獣耳ナースバニー裸エプロンゴスロリチャイナお姫様メイド眼鏡男装シスターｅｔｃ．、流香は何でも似合うわよ！」

流香

「お姉ちゃん／／／／！？」

少々お待ち下さい。

仁

「シスコン吸血鬼の暴走も止めた事だし、次の質問に行くぞ。　次はＤＥＡＤＰＯＯＬ　ＺＥＲＯさんの【聖なる真紅の炎と冷たき蒼い炎】から桜だ。　ありがとう。『そちらには瞳等に力を持っている人物を教えて下さい』」

闇夜

「今のところ邪眼のバロールと闇の瞳のアランですね。　これから出てくるかはわかりません」

仁

「次で最後だ。　聖なる焔さんからだ。　ありがとう。『闇夜さんの好きなバトル漫画にｔｏｌｏｖｅるみたいなエロ要素があったとします。それも楽しんで読みますか？それを無視するか、気にせ

ずバトルだけ読みますか？』」
闇夜
「まぁ読んだり読まなかったりですかね」
仁
「うわぁ、エロッ」
闇夜
「何が！？　どう言う風に！？」
仁
「いつからお前はそうなっちまったんだ！！」
闇夜
（何で怒られてるの、俺？）

仁
「おい、優花があんな事やこんな事になってるぞ。　大丈夫なんだろうな？」
闇夜
「次かその次にわかる。　だから突き付けられた銃を下ろしてください」
仁
「ちっ」
闇夜
「（舌打ちしたよ……）えっと、今回は三話構成と言いましたが、四話構成になりそうです」
仁
「優也はどうするのか。　優花は一体どうなるのか、楽しみにしててくれ」

次回
第９９話　疾空（しっくう）

優也

「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

第９９話　疾空（しっくう）

『優也を怒らせるなよ』。
仁の言葉が思い出される。
美優はその忠告を破ってしまい、以前優也を怒らせてしまった。
トラウマになってしまいそうな程、怒った時の優也は恐ろしかった。
仁もあの時の優也の事を言っているとばかり思っていた。
実際は違う。
仁が言っていたのは、今の優也なのだ。
美優達の時は、友達等に見せる怒り。　今は、敵に見せる怒り。
仁は言っていたのは敵に見せる怒り。
その怒りこそが、あの頃の優也に戻る為の、トリガーだった。
黒き夜叉へ戻る為の。
美優の目の前にはその夜叉が居る。　去年出逢った時のあの夜叉が。

第９９話　疾空（しっくう）

「それだよ。それだよ優也！　今の貴方が本当の優也だよ！」

大きな声で笑い出す皐に、美優は気味の悪さを感じたが、優也から感じる恐怖がそれを掻き消す。

「怖い……」

隣に居る恭華も感じ取ったのか、美優の袖を握り締めた。
美優も恭華の手を握る。　恭華を安心させる意味もあるが、自分自身を安心させる意味もあった。
少しでも意識を優也から離さなければ、気を保っていられなかったからだ。

「ねぇ優也。　久し振りに会えたんだから何かしましょう。　ねっ？」

舞い上がっている皐に対し、優也は何も言わない。
優也は足を一歩踏み出した。

「え……」

自分でも間抜けな声が出たと美優は思う。
皐の足元に居た筈の優花が、優也に抱き上げられ、自分の目の前に居た。

（いつの間に！）

隣では恭華も驚いている。　自分だけが気付かなかった訳ではない。

「優花を頼む」

優花を預けられた美優は青ざめる。

腹部が貫かれていた。　奇跡的に息はあるが、少しでもずれていれば、即死だったかもしれない。
だが安心は出来ない。　このままでは死んでしまう。
早く彩夏の元に連れていかなければ。　そう思っていても、上手く体が動かない。
優也（くろやしゃ）と皐。　この二人を前に、美優は一歩も動く事が出来なかった。

「ねぇ優也。　そんなのほっといて私と話そうよ。じゃないと、後ろの娘達も殺しちゃうよ」

翳された皐の手を見て、美優の体はビクリと跳ね、恭華は警戒する。
皐は直接手を下さずとも、相手を殺すことができる。　恭華は実際に体験したから、あの能力（ちから）の恐ろしさは充分理解している。
今皐を三人で相手すると言うことは、優花を見殺しにする事に等しい。
必然的に優也が一人で相手しなければならないが、果たして勝てるのだろうか？　今の優也の状態は異常だが、皐に勝てるとは限らない。　優花も、皐は優也より強いと言っていた。
いざと言う時は、自分も一緒に戦うべきかと、恭華は死神（デス）の鎌（サイズ）を握り締めた。

「お前と話すことなんて無い」

刀を納め、端から見れば構えも何も無い格好を取る。
次の瞬間、皐の体が沈む。

「お前はここで喋ることの無い屍になるからな」

皐の足元の床が、まるで斬られたかのように崩れ落ちた。

「！」

一瞬驚いた皐だが、納得したような表情をし、冷静に下の階に着地する。

「そうだった。　貴方、一対一（サシ）専用の技があったね」

とてもとても懐かしく、楽しかったあの日々を皐は思い返す。

優也は、黒夜叉は戦闘によって戦い方が変化する。

多人数相手なら刀と鞘を使った、多人数専用の戦法。　一対一なら、残像すら残さない神速の居合い。　敵は何が起こったかもわからぬまま地に伏す。

そして付いた技の名は、

「疾空（しっくう）」

皐は高揚する。　疾空を見れると言うことは、あの頃の優也を出逢えると言うことになる。　何よりも優也は今、自分だけを見ている。

これに高揚せず、何に高揚すれば良い？

「さぁ、愛（ころ）しあいましょう」

自分を傷付けて良いのは優也だけ。　優也を傷付けて良いのは自分だけ。

例え命を落とそうとも、優也が自分だけを見てくれるその一瞬一瞬が、何よりも幸せな時間なのだ。

「キャハハハハハハハハ！！」

飛び降りてきた優也に向かって、皐は走り出す。

自分だけの幸せを噛み締める為。

「優也……」

自分に何が出来るか。　何をしてやれるか。　美優は必死に考えるが、出来る事など何も無い。
優花の怪我を治してやる事も出来なければ、優也に加勢も出来ず、元に戻してやる事も出来ない。　出来るのは恭華と一緒に優花の命を繋ぎ止めるだけ。
歯痒い。
何の為に力を手にしたのだろうか。　これでは何も変わっていない。
もし優花が無事ならば、どうにしてくれたのだろうか？
美優は優花の手を握る。
すると、弱々しく握り返してきた。

皐は両手で石の剣で優也に斬りかかる。　戦っていると言うよりも、踊っているようだ。
対して優也は、最小限の動きで躱していく。
まるで二人は、一緒に踊っているように見える。　片方は静かな怒りを、片方は狂気を振り撒きながら。

「もっと！　もっと楽しみましょう！！」

優也を取り囲むように、石の槍が優也に向かって行く。
眼前には二つの石の刃。　そして三百六十度石の槍。

逃げ場は上空だけ。
普通なら飛び上がって躱すのだろうが、優也は一歩足りとも動かない。
躱す必要が無いからだ。
優也を取り囲んでいた槍も、優也を斬ろうとしていた剣も、全て粉々に砕け散る。
眼にも写らぬ神速の居合いが、全てを一瞬で斬り裂いていた。

「もっと！　もっともっと！！」

粉々に砕け、宙に舞う石を鋭い刃に変える。
多少斬り裂いた程度では意味が無いと判断した優也は、塵になる程、石の刃を斬り裂いていく。

（あぁ楽しい。　こんな幸せは他に有り得ない）

この命を懸けた戦いに、皐は幸せを感じていた。
別に戦いに幸せを感じている訳ではない。　前にも言ったが、優也だからこその幸せだ。
他人からすれば異常かも知れないが、皐には普通で、何よりも重要である。

（優也が目の前に居る。　優也が私を見てくれてる。　優也が私を満たしてくれてる！　ここはもう、私と優也だけの世界！）

何故皐がここまで優也に依存するのか。　それは七年前の戦争にある。

『大地を操る能力』。　皐はそんな強大な能力をその身に宿していた事から、とある村の守護神のような存在として、村に襲い掛かる災厄を殺してきた。
どう言う訳かわからないが、とある組織の災厄は、その村を潰そうと躍起になっていた。
その度に皐が能力を使い、災厄が村に入る前に始末していた。　その頃から皐の能力は、人を容易く殺すことが出来る程の力を秘めていた。
能力を使う度に誰かが死んでいる。　その度に村の人が喜んでくれた。　だから嬉しかった。　だから頑張って能力を使い続けた。
皆が褒めてくれるから。
ところがいつの日からか、皐は能力を使う度に誰かが死んでいる事が辛く思い始めた。
九つとは言え聡明な彼女は、死と言うものがどれだけ辛く、悲しいものなのか理解できた。
その頃の皐は、誰かを殺すことに疑問を持たない少女ではなかったのだ。
それでも少女は能力を使い続ける。　皆が喜んでくれるならと、一生懸命。
そして遂に、少女は優也と出逢う。
ある日、村に三人の災厄が近付いてきていた。
この日もいつもの如く、皐は大地を操って災厄を殺そうとした。
また命が散る。　皐は姿も知らない三人に謝った。
だが、
村の人間は自分を除き、全て殺された。

能力をどう使おうと切り抜けられ、簡単に村に侵入された。
村に入られては能力を使えない。　大きすぎる力で、村人ごと村を壊してしまうからだ。
手も足も出ない皐の目の前で、人がどんどん殺されていく。
顔見知りから親しい人まで。
突然皐は服を引っ張られ、引き寄せられる。

『この娘！　この娘が狙いでしょ！？』
『この娘（むすめ）ならやる！　頼むから殺さないでくれ！！』

両親だ。　その後ろには村人も居る。
どうやら皐が狙われていると思っているらしい。　だから皐を盾にした。
あれだけ辛い思いをしながら、皆の為に能力を使ってきた皐は、簡単に裏切られてしまった。
それがどれだけ皐を傷付けただろうか。
突如後ろに居た両親や村人が倒れる。
振り返ると、全員死体へと変わっていて、代わりに一人の子供が立っていた。
歳は自分よりも少ししたくらい。少女に見える顔立ちだが、恐らく男。　服は黒一色。　刀も黒い。　唯一、瞳の色はルビーのように紅く美しい。
その子供から眼を離せなくなった。
辛いとか裏切られたと言った感情は消え、ただただ彼を見つめる。
一瞬で人を物言わぬ肉塊に変えてしまう力を持ちながら、触れればシャボン玉の様に壊れてしまいそうな儚さを漂わせた彼を。

『おい、こいつどうする？』

全身に返り血を浴びた白い髪の少年が言う。

『命令は殲滅。　それだけだが、優也はどうだ?』

煙草を吹かした金髪の少年が、漆黒の少年に問う。　少年の名は優也と言うらしい。

『……』

どう言う訳だか、優也は皐に眼もくれず、何処かへ歩き出す。
見逃された。

『命拾いしたな』
『せいぜい長生きしろよ』

金と白の少年は皐にそう言い残し、優也に着いていった。

『ぁ……』

思わず彼等に、優也に着いていきかけたが、皐の体は動かなかった。
優也は根本的な部分は自分と同じだ。　強大な力があり、誰かに言われるがままにその力を振るっている。　皐も同じだからわかった。
同じだが、優也は皐とは違うものを持っていた。
強さと儚さ、そして美しさを。
皐は優也と言う存在の虜になっていた。
だから着いていきたかった。　だが自分と優也では生きる世界が違う。
踏み込むことすら許されない闇の世界。　そこに優也は居る。
もう一度優也に会いたい。会って話したい。　もっと知りたい。
もっと知って欲しい。

ならどうするか。
答えは簡単だ。

自分が優也と同じ世界に入ればいい。

その日を境に、皐は誰かの言われるがままではなく、自分の意思で動き出した。
優也の元へ行く為に。
まずはこの世界を生き抜くため、皐は組織に取り入った。
そして、組織が壊滅しそうになったら他の組織に取り入る。　そうして生き抜き、力を蓄えていった。
そうまでしても、皐は優也の隣に居ることすら出来なかった。
代わりに優也の隣には、優也と似た少女が。
戦争が終わり、ある日偶然出逢い、少し会話もした。
話せば話す程、優花が優也に似ていると思えてならない。
それに比べ、優也は変わっていた。
変わっていたと言うよりは、壊れてしまったと言う方が正しい。

私が会いたかった優也はもう居ないの？

そう思った皐だが、絶望などしなかった。
やっと同じ世界まで踏み込んだ。　やっと優也と出会えた。
いつ死んでも可笑しくないこの世界で、生きて優也と出会えた。
それだけでかなり報われた。
だけどまだ完全に報われた訳ではない。　後は優也の傍に居られれば、優也と言う存在を感じられたら。
その為には力が居る。　その為には優也を自分だけの物しなくては。

（そっか。　何で今まで気付かなかったんだろう？）

自分だけの物にしたければ、優也に近付く人間を全て殺せば良いのだと。まずは優也に似たあの少女。
皐は狂気に呑まれていた。
愛するあまりに。
いつの日からか、『狂気の姫君』なんて言う通り名で、皐は呼ばれるようになった。

そして今、六年の歳月を経て、皐は優也と出逢えた。
殺しあいをしてはいるが、皐にとって至福の時。　理由がどうであれ、遂に優也が自分だけを見てくれているのだから。

「あぅっ！」

皐は蹴り飛ばされ、壁に叩き付けられる。

「女の子のお腹を蹴るなんて酷いなぁ。　ねぇゆう、や？」

皐は崩れ落ちる。　まるで足を失ってしまったように。
足首に激痛が走る。
気付けば、両の足首から血が溢れ出していた。

「腱を……本当に速いね」

初めて見た時は、一瞬過ぎて何もわからなかった。　六年たった今、初めて実感する。

これが火渡優也なんだと。
その事が嬉しく、そして安心する。
優也はやはり優也だと。　壊れてしまっても、必ず美しく強い優也に戻ってくれる。

「やっぱり好きなんだなぁ。　貴方の事が」

ある意味では、皐は優也に救われた。
生きる目的もくれた。
狂気に呑まれていなくても、狂おしい程、優也を愛していただろう。

「良いよね。　貴女達は」

力を振り絞り、壁に体を預けて立ち上がる。

「私よりはマシな出逢い方が出来たみたいで」

自分が傷付けた少女と、少女を介抱しているであろう少女達嫉妬する。

「私はこれ以外に愛し方を知らない」

皐の視線の先には、誰よりも愛しい漆黒の少年が、ゆっくりと歩いてきている。
その姿も美しく見える。
何者にも染まらない黒が、美しかった。
もう戦いが終わる。　自分の死で。
殺されてしまう事を知りながら、皐は笑っていた。
震えるその手を、優也へと伸ばす。

「“疾空一閃（しっくういっせん）”」

瞬間、皐の体が斜めに一閃された。
優也は何もしてないように見える。　それこそ優也の、疾空の真骨頂だ。
誰も気付かない程の神速の居合い。

（もし、もっと違う出逢い方をしてれば、どうなったんだろう？）

普通に学校に通って、先輩後輩として学校生活を楽しんで優也に恋をする。
襲われていたところを優也に助けて貰って恋をする。
考えただけで笑みが零れる。
こんな出逢い方なら、もっと違う幸せを掴めたのだろうか？

（今更無理よね。　私に、あの娘達みたいな日常なんて）

憧れなかった訳じゃない。　自分には無理だと諦めたのだ。
皐は壁に背中を預けたまま、崩れ落ちる。
すぐ目の前には、優也が刀を鞘から抜いていた。

（普通に考えれば散々な人生だったけど、好きな人が出来て、好きな人を追い掛けて、好きな人に殺される）

優也は皐の目の前に立つと、刀を振り上げる。

（私にとっては、幸せな人生だったかな）

漆黒の刀が、皐に振り下ろされた。

第９９話　疾空（しっくう）（後書き）

教えて！　雷道先生！

仁
「竜王の白翼さんから質問だ。『質問は皐に。優也と何したい？』
早速だな。　と言う訳で答えてみなさい」

皐
「にゃんにゃん」

仁
「にゃんにゃん？」

皐
「所謂あんな事やこんな事」

仁
「所謂セッ」

闇夜
「ストォォォォプ！！　それ以上は言うな！」

仁
「ちっ」

皐
「って言うのは二割くらい嘘で、本当は」

闇夜
「たったの二割？」

皐
「人並みのデートくらいはしてみたいかな？」

仁
「以上、前回と今回ではキャラが若干違う皐でした」

何でもランキングトップ１０！

闇夜
「今回は全キャラで本当の強さランキングを決めたいと思います」

１：龍堂史哉
２：キョウ
３：二神竜也
４：戌井浩輝
５：天道亮
６：カイ
７：月臣龍
８：エルザ・ランディー
９：火渡優也（真・黒夜叉）
１０：橘紗理奈

闇夜
「史哉とキョウの力は拮抗してます。　優也達がキョウに勝てたのは、仁の言う通り、ただの運です。　竜也、浩輝の力が拮抗していて、亮が若干敗けていると言うところです。　カイは力の殆どを失っていますが、それでもかなり強いです。　そして、優也達の中では最強の龍も、この中ではトップ３にも入れません。　そして完全な黒夜叉状態の優也なら、エルザ辺りと互角に戦えます。　紗理奈も強いです。　戦い方次第でもっと上にいけるかも」

仁
「中々グダグダだったな」
闇夜
「自覚はしてる」
仁
「次回、優也、優花、そして皐はどうなるか」

闇夜
「本当は皐の過去は書くつもりはなかったんだけどね。　ただのやられキャラだったのにちょっと出世した」
仁
「その辺りがグダグダに感じた」
闇夜
「しかもタイトル対して関係ない。　また変えるか？」
仁
「知らん」
闇夜
「次回も宜しくお願いします！」

次回
第１００話　優也と優花
優花
「黒と白が出逢う時、物語が始まる」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1553m/

黒と白の物語

2011年11月21日11時42分発行